

艦隊これくしょん一啓開の鎬矢一

オーバードライヴ/キュムラス

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

「——ひとりでなんて、いかせないのです」

海が閉ざされてから10年が経過、水上用自律駆動兵装——通称「艦娘」が生まれてからも7年が経過しようとしていた。それでも解決の見えない戦争に一つの転機が訪れる。

終わらない海戦の連続を前に、優しい少女と軍人に今日も戦を告げる鎗矢が鳴った。

歪んでいるのは世界か、化物か、人間か——

勢いで書き始めた艦これ二次小説、反攻の第4部、抜錨！

コラボレーション企画・設定共有を以下の作品と行っています。

はまっち先生『艦これ ある提督の話』

りようかみ型護衛艦先生『崩壊の海の記憶——艦隊これくしょん——』

エーデリカ先生『艦隊これくしょん〜鶴の慟哭〜』

kokonosP先生『艦隊これくしょん〜明かされぬ物語〜』

帝都造営先生『模倣の決号作戦』

レイキヤシール先生『名無しの英雄〜パラオ艦隊戦記〜』

目次

序章 | 発端・回帰 | 1

中部太平洋第二作戦群第551水雷戦隊編

第0話 | 少佐・出立 | 5

第1話 | 司令・着任 | 10

第2話 | 電・初陣 | 23

第3話 | ウエーク・夜 | 34

第4話 | 雷雨・追憶 | 41

第5話 | 雷雨・邂逅 | 51

第6話 | 雷雨・帰還 | 59

第7話 | 演習・盛夏 | 69

第8話 | 演習・狼煙 | 78

第9話 | 演習・接敵 | 88

第10話 | 演習・混戦 | 97

第11話 | 休息・水着 | 112

第12話 | 査察・通知 | 120

第13話 | 査察・月夜 | 128

第14話 | 試験・社長 | 138

第15話 | 台風・怪談 | 144

第16話 | MI・胎動 | 153

第17話 | MI・始動 | 162

第18話 | MI・前哨 | 173

第19話 | MI・開戦 | 187

第20話 | MI・矜持 | 201

Chapter 4 1	艦は集い	451
Chapter 4 0	男は集い	443
Chapter 3 2	戦の陰で	434
Chapter 3 1	熱を出し	425
Chapter 2 8	艦の思い	411
Chapter 2 7	真の戦へ	399
Chapter 2 6	男と女と	389
Chapter 2 5	人の戦に	377
Chapter 2 4	将の思い	366
Chapter 2 3	偽の戦へ	355
Chapter 2 2	宴の夜は	343
Chapter 2 1	南の国へ	334
Chapter 2 0	戦う由は	325
Chapter 1 2	顔を合せ	317
Chapter 1 1	戦の海へ	309
Chapter 1 0	彼の名は	300
Chapter 0 1	現の間で	293
中部太平洋第一作戦群第三分遣隊編		
エピソード 航跡・提督		285
第26話 MI・意思		272
第25話 MI・孤独		260
第24話 MI・焦燥		249
第23話 MI・日没		240
第22話 MI・信頼		225
第21話 MI・理由		213

Chapter 5. 5 6	紅茶と恋と静かな戦い	754
Chapter 5. 5 5	黄昏に探照灯は煌めき	742
Chapter 5. 5 4	昼下がりに剣を交えて	731
Chapter 5. 5 3	海上でワルツを踊れば	718
Chapter 5. 5 2	対空戦は危険なかほり	705
Chapter 5. 5 1	一番艦の誇りをかけて	694
Chapter 5 10	戦の果て	668
Chapter 5 9	暁の空に	653
Chapter 5 8	夜の海で	635
Chapter 5 7	愚か者は	619
Chapter 5 6	戦う訳は	606
Chapter 5 5	真と嘘と	595
Chapter 5 4	偽の命に	583
Chapter 5 3	白い闇を	573
Chapter 5 2	北の島へ	564
Chapter 5 1	心の中を	551
Chapter 5 0	霧の中に	541
Chapter 4 9	煙の下に	531
Chapter 4 8	鎖を絶ち	521
Chapter 4 7	友と敵と	512
Chapter 4 6	焰の釜を	502
Chapter 4 5	由の訳を	491
Chapter 4 4	真と偽を	480
Chapter 4 3	煙を越え	470
Chapter 4 2	夜の帳に	460

	Chapter 5	5 7	料理の腕と僅かな疑念	763
	Chapter 6	0	暁に響む	776
	Chapter 6	1	雷の叫び	788
	Chapter 6	2	電の思い	799
横須賀鎮守府付属海軍横須賀病院編				
			セントニコラス・イン・マニラ	817
			ヨコスカ・アップサイドダウン	824
E 1				824
			ヨコスカ・アップサイドダウン	835
2				835
			ヨコスカ・アップサイドダウン	846
E 3				846
			ヨコスカ・アップサイドダウン	862
E 4				862
			ヨコスカ・アップサイドダウン	873
E 5				873
	PREQUEL	0 1	月夜に夢を乗せた行方	885
				899
1				899
			ウエーク・ウィークポイント	911
2				911
			ウエーク・ウィークポイント	922
3				922
			ウエーク・ウィークポイント	934
4				934

PREQUEL 02 防壁迷路の間に落ちて | 1110

【ダイジェスト版】横須賀鎮守府付属海軍横須賀病院編

Yokosuka Cluster Upside-Down

Wake s Awake Weak-Point | 11126

Manila Clears Nightmare | 11661

Sivis Pacem, Para Bellum | 11941

Starting Point is Here | 12211

PREQUEL 03 南の島に陽は溶け落ち | 12291

INTERVAL 第50 即応打撃軍設置準備室編

INTERVAL 01 譲れないものがあります | 1240

INTERVAL 02 聞きたいことがあります | 12531

INTERVAL 03 繋げたいものがあります | 12651

INTERVAL 04 救いたいものがあります | 12781

第50 太平洋即応打撃群編

SEQUEL 01 きつとそうだったと信じているのです

1292

ANECDOTE 001 少し臆病になったよ | 1296

ANECDOTE 002 絶対させないっぽい | 13111

ANECDOTE 003 それがあなただの答えなのですか?

1322

ANECDOTE 004 月がきれい | 1332

PREQUEL 04 Die Walk-re 馬鹿と

銚は使い様

SEQUEL 02 だから馬鹿なんだよ | 1349

13661

1570

ANECDDOTE019 少しはましな休暇になりそうだ

INTERMISSION01 1567

ANECDDOTE018 俺たちもそれを探している

し 1545

ANECDDOTE017 そこまで言うならとことんやりまっ

ANECDDOTE016 あなたたちがいれば 1533

1520

ANECDDOTE015 全部抱え込まなくてもいいのです

郎 1505

1周年記念 PREQUEL06 夜は短し 走りやがれ野

1492

ANECDDOTE014 救われた気がするのでございます

SEQUEL003 それをきつと後悔つて言うのね 1488

義と罪と罰

PREQUEL05 I'm Not In Love 正 1474

ANECDDOTE013 我は我である 1462

ANECDDOTE012 コレデー一人ボツチダ 1451

ANECDDOTE011 待ツテテ、イナヅマ 1437

ANECDDOTE010 血道を拓くよ 1427

ANECDDOTE009 諦めないで 1415

ANECDDOTE008 当たつてくだち！ 1404

ANECDDOTE007 信じることびよん 1391

ANECDDOTE006 共にゆこう 1381

ANECDDOTE005 二人は似た者同士だから 1369

ANECDOTE 020	後は勝手に殴り合え	15921581
ANECDOTE 021	異次元サッカーじゃねえんだ	1602
ANECDOTE 022	よくも、よくも雷をおおおおおお！	162516141602
ANECDOTE 023	まだまだこれからですつ！	16671653
ANECDOTE 024	借しは返してもらおうよ	1678167816671653
ANECDOTE 025	信頼だけじゃ救えないこともある	171016981687167816671653
1638 ANECDOTE 026	ついてこい	1721
司令部赤裸々座談会―そのに		
INTERMISSION 02		
ANECDOTE 027	覆して見せようじゃないか	
ANECDOTE 028	守れるか、彼女達を	
ANECDOTE 029	私はいつかそれを裏切る	
20万UA記念 PREQUEL 07	女神たちのお茶会(皆殺し)	
編)		
クリスマス記念 PREQUEL 08	雨は夜更け過ぎに血雨へと変わるだろう	
ANECDOTE 030	忘れるわけがないよ	
ANECDOTE 031	逃げて、たまるか	
ANECDOTE 032	軍人たれ	
ANECDOTE 033	高を括ったな	
ANECDOTE 034	嫌になるわ	
ANECDOTE 035	聞きたくないよ	
ANECDOTE 036	まずい兆候だ	

序章―発端・回帰

「嫌だ！ 死にたくない！ 死にたくない！」

阿鼻叫喚の地獄絵図。街が燃え、海が燃え、逃げ場などないのだ。建物が燃え、倒壊する音。哭泣に怒声、散発的な小銃の音に何かが飛翔する音。

制空権も無く、制海権などあるはず無く、海岸線を埋めるのは人のようで人ではない。『なにか』

「兵隊さん、せめてこの子だけでも連れてって！……兵隊さん！」

もう息絶えた赤子を差し出す母親。自分の足を探して這いずり回る老人。安心して立ち尽くす兵士に、逃げ惑う群衆。

「8ブロック先に軍のトラックが来ている！ そこまで走れ！」

阿鼻叫喚の地獄絵図の中、声を張り上げる男が一人。

「民間人の保護を最優先に！ エリア2、ライン4―11を死守せよ！」

「隊長、こんなちっぽけなライフフル程度で倒せんのかよ!？」

「知るか！ 一秒でもいいから時間を稼げ！ 無反動砲前へ！ とりあえずここが最前列、狙いなんてどうでもいいからとりあえず前にぶっ放せ！ 400を切ったものから優先的に撃破！ 各員発砲を許可する。全責任は俺が取る！ 歩兵部隊の意地を見せてみる！ 攻撃開始！」

無反動砲の爆炎が伸びすぐに火柱が立つ。それに怒り狂うように飛んでくる『なにか』

「ダメだ！ こんな人用の銃じゃ刃がたたねえ！」

「―――化け物があああああああ！」

ある人は“それ”を“天罰”だと言った。傲り高ぶる人間への天罰だと。

海を我が物顔で行き来していた人間はある日を境に、やせ細った陸にしがみつかなければならなくなったのだ。その陸地すら長く続いた戦争のせいではほとんど死んでいるのだから、もう手の施しようが無い所まで人間は堕ちたのかもしれない。

《国連は国連軍の結成を初の全会一致で採択し、全ての軍が国連平和維持軍の管理下に統合されることが決定しました。異形の軍隊を相手取って全世界足並みを揃えた反攻への第一歩を踏み出すことになるでしょう。異形の軍隊に対する新兵器の開発も進んでおり、本日、茅葺内閣総理大臣はあす開催される臨時国会で日本海軍に600億円規模の臨時予算を策定する予算案を提出する見込みであることを明らかにしました。これに日本協産党を除く全党が賛成し即日可決される見通しです……》

それでも、それでも

生き残るためには諦める訳にはいかなかったのだ。たとえ――

『諸君らの働きが全人類の希望となり、この海を切り拓く鎗矢となる

事を確信するものである！ これより、第一次反攻作戦『オペレーション・フルムーン』の開始を宣言する！』

——たとえば、罪の無い少女達を戦場に追い立てたとしても、諦める訳にはいかなかったのだ。

これに関わる人間はすべてからく地獄におちるべきであろう。罪なき少女の家族も友人も戸籍も記憶も自由も、名前までも奪い、戦場に追い立てる。そんな人の皮を被った悪魔が地獄に落ちずにどこへいく。人が人を殺めてから、いや、禁じられた果実をかじってから、人間は呪われた種族だが、その呪いも極まれりと言える。でも、それでも生き残るためにそうせざるを得なかった。愚かな人間にはこうするしか方法が無かった。

ならば、せめて。

せめてその罪を背負い、後の世代のために屍を超え、血の海を渡ろう。少女達だけにこの海を渡らせてはならない。その重責を華奢な両肩に預けてはならない。少女達を死なせてはならない。その代償が計り知れないものだとしても、それを背負わねばならない。

それが軍人にできるせめてもの贖罪だ。

「……いくぞ」

「はい、なのです」

せめてもの救いがあると信じ、せめてもの救いとなると信じて。

『艦娘』と『提督』は海を進む。

「全艦に通達、これより私が指揮をとる。両舷原速赤20。出航する」

中部太平洋第二作戦群第551水雷戦隊編 第0話「少佐・出立」

パサリと書類が滑る。横柄な態度で投げ渡された書類を彼は受け取った。

「君に異動命令が出たよ。今月末付で月刀少佐つきがたは中佐に昇進、ウエーク島基地所属の第551水雷戦隊の司令官……といってもそのウエークはその部隊だけだから基地司令も実質兼任してもらうことになる」

「ウエーク、ですか……」

「大鳥島といった方がわかるか？ まあ、そんな渋い顔をせんでもいい」

昼間なので全ての電気が落された部屋で中路中將は苦笑いを浮かべた。

「前代未聞の殉職理由ができたところだからな、そりゃあ心配になるのもわかる。……もつとも、その場に留まれる状態の艦娘がもういないくて駆逐艦一隻しか残っていない」

そんな状況でなにができるだろうと思案するのは野暮だということとを彼は——月刀航暉少佐かすきは理解していた。一隻とはいえ遊ばせておく余裕もなく、ウエーク島の立地は戦略上抜かす事などでできない。

ウエーク島……日本名は大鳥島。太平洋のど真ん中、どんなに近い陸地でも三桁キロは離れた絶海の孤島だ。2082年現在、書類上は帝政アメリカが領有しているが、国連軍の軍用地として全島を租借している……そんな情報を電腦の奥底から引きずり出しながら、目の前の上官から言われたことを反芻する。

「中將、水雷「戦隊」ということは新しく艦の配備を行うのでしょうか」

「そのように今調整中だ。……あまり君向きの任務ではないのはわかっているが……」

「大丈夫です、中將。第551水雷戦隊司令官及びウエーク島基地司

令、拝命いたします」

そういつて航暉は敬礼をした。それを中路中將が重い動作で答礼を返す。

「航暉……わかってんだらう？ ウェーク島に配属になるというのがどういう事か」

「大丈夫ですよ章人さん」

「第一五次反攻作戦が辛勝……いや、戦術的敗北と言った方がいいか、それが終わってからウェークはなんとか基地の体裁を整えているに過ぎなかった。その中で“あの事件”だ。基地機能が壊滅しているんだぞ。そこにたかだか中佐を送り込むという無茶がどういふことかわからないわけではあるまい」

「だとしても、行かないという選択肢はないのでしょうか？」

航暉はそういつて笑った。それを何処か悲しそうな顔で中路中將は彼を見つめた。

「……そうだな。野暮な事を言った。忘れてくれ。退出してよろしい」

「月刀少佐、退出いたします」

敬礼を交わし月刀は踵を返す。

「航暉！」

部屋を出る直前、呼び止められた。振り返ると中路中將が立ち上がっていた

「死ぬなよ」

そういわれ自然に右手がこめかみまで上がった。もう一度踵を返し、重厚な木の扉を開ける。

「やっぱり何処かに行っちゃうですか……？」

部屋の外、扉の脇に控えるようにしていた少女が悲しげな声を出した。巫女服が原型であろう袖が別れた千早に、チャコールグレーのミニスカート、日本人らしくない鼻筋が通った顔立ちはどこことなく異国の風を感じるものだ。その彼女の僅かに碧が混じる瞳が寂しげに揺

れた。

「ああ、今月末付でウエーク島の基地司令兼基地所属艦の水雷戦隊の司令官だとさ」

「Wake island……ですカ……」

「なーに不安そうな顔してんだ」

柔らかい髪を優しくかきあげてから並んで歩く。空襲対策でテーピングされた窓からはこの戦時下でも緑に保たれた中庭が見える。蝶が数匹舞っているようだ。

「だってウエークアイランドいえば……」

どこか咎めるような顔を向けた彼女……航暉の担当艦、戦艦「金剛」は彼の腕を掴んだ。

「大丈夫だ金剛、俺は死なないし、死ぬつもりもない。それに一介の「中佐」がこんな大役を担うんだ。やつと自分の実力が認められたつてもものだろう？」

「無茶してそんなこと言わなくてもいいデス。カズキテートクは権力と出世とか……そういう事を嫌っていたでしょー？」

袖を掴んでいた手がきゅっと握り込まれる。金剛が頭を彼の肩に預けた。

たった、たった1年だ。航暉が金剛の所属する戦隊の司令官補佐として着任してから。まだ1年しか経っていないのだ。

他人でいるにはあまりに長く、それ以上の関係にはあまりに短い、一年という期間。

「……生きて帰ってきますよネ」

「……確約はできんがな」

「ダメー！ 絶ッ対、生きて帰ってくるんデス！ 約束してくださいー！」
付いて行けたらどれだけ良いだろう？ 金剛に対する移動命令は

出ていないし、出ているならもう通知が来ているはずだ。駆逐や軽巡ならともかく、高速戦艦を異動させるとなればもっと早い段階で連絡がくる。

乾く。なのに目から涙が浮かぶ。

駄々っ子のように首を横に降りながら金剛は航暉の腕を締め上げ

た。その反応に苦笑いして航暉は口を開く。

「生きて帰るさ。死んでたまるか」

「……わかりました。信じてますからね、テートク。貴方を護る艦として金剛は待っていますからね、忘れちゃイヤです」

小さく鼻をすする音がした。航暉は聞かなかつた事にした。

「……といつても、月末までかなりあるからしばらくは一緒だが。頼むよ、第二戦隊旗艦様？」

「ハイ……！ テートクの為ならたとえ火の中水の中ネー！」

無理矢理わらつて顔を上げると、金剛は彼が寂しそうにしながらも笑い返してくれるのを見る。

（ああ、だから彼は……）

金剛は目を閉じる。腕をまだ彼の腕に絡めているのをいいことに、さらにその腕を抱きしめた。

（どうか、武運長久を。ワタシの提督に幸あらんことを）

——そして、生きて私の所に帰って来てくれることを。ただ、願う。

「テートク。ウエークに行ったとしても、Love Letterは許さないからネー！」

事務的な通達だけがきた。

《DD—AKO4 “電” にウエーク島基地第551水雷戦隊所属を命

ず》

今や高価な代物になったというプリンタから吐き出された命令書を見て、何も言わずに彼女はそれを懐にしまった。

がらんとした建物の中で、彼女は窓から見える蒼く抜ける空を見上げた。スコールがやってきそうな入道雲が見える。あの日もそうだったなんて考えかけて、すぐに頭を振って追い払った。

(とにかく、新しい司令官さんが着任できるように、準備しないといけないのです)

何せこの1ヶ月ほど司令官室にはだれも出入りしていなかったのだ。掃除をしないと行けないだろうし、艦隊運用に使う中継機などの確認もしなければ行けない。日付は月末、あと2週間ほどあるから急ぐ必要はないが、何か仕事をしていたかった。久々に「ちゃんとした理由がある仕事」ができる。

「さて、頑張るのです！ 新生ウエーク基地の第一歩です！」

空元氣だとわかっていたが、何も言わずにやるよりマシだ。

駆逐艦「電」はそう考えて、制服のセーラーを揺らしバケツと雑巾を取りにいった。

「水雷戦隊ってことは他にも艦娘の人が来るはずなのです。……駆逐艦のフロアと軽巡のフロアも掃除した方が良さそうです。今日から少し忙しそうです。頑張りましょう、えいえいおー！」

青空を見上げて電は僅かに笑い、そして願った。

(新しい司令官さんがいい人でありますように……！)

第1話「司令・着任」

蒼い空を切り裂いて一機の航空機が駆けてゆく。ほぼ最大機速に近い速度。高い高度から緩降下しつつエンジンを全開、リアジェットが唸りを上げて機体を更に加速させる。

「間もなく敵制空権を超えます」

パイロットが緊張した声でそういった。後方の座席に座った搭乗者はそれを聞いて少々安心したような顔を浮かべる。

ウエーク島に向かう約1ヶ月ぶりの飛行機の搭乗者はパイロットを除くと三人。一昨日昇進したばかりの月刀航暉中佐。緊張した面持ちの六波羅夏海軍医大尉、制服に着られているといった雰囲気の間波ハルカ特務少尉の三名である。

「もうすぐ到着ですねえ……」

窓際で落ち着かずにもそれと大きすぎる制服からちよこんと覗く手を弄ぶのはハルカだ。光の反射によつては淡い赤にも見える不思議な色の長い髪を不安げに揺らし、ハルカは隣に座る夏海と通路を挟んで反対側に座る航暉を見上げた。

「お二人とも落ち着いていらっしやるんですねえ、わたしなんて飛行機なんて乗るの始めてですし、緊張しっぱなしで……」

「緊張してても仕方ないわよ伊波少尉。緊張してようがしてしまいが、落されるときは落されるから。緊張するだけ無駄ね」

夏海はそういつて優しく微笑んだ。シートに揃えた黒い髪が僅かに揺れる。セルロイドフレームのメガネの奥の糸目が更に細くなった。優しそうな顔をしているが、深いアルトは少々冷たい響きを持っている。

「そんなこといわれなくても……」

そのさらりとした言葉におろおろするハルカ。そんな会話を聞きながら、航暉は窓の外に広がる海をぼんやりと眺めていた。青い海は恐ろしいほどに澄み渡り、所々に雲の影を落す。飛行機の影もぼつんと小さく落ちていた。

「なにか見えますか？ 月刀中佐」

「いや、海ばっかりだ。深海棲艦も船もいやしないね」

窓に額を付けるようにして下を覗き込むハルカ。遠くに僅かな陸地が見えてくる。

「ウエークに向けて降下します。シートベルトを確認してください」

島をほぼいっぱいっぱいに使った滑走路に降りた飛行機は駐機場に滑り込むと早々にエンジンをカットした。帰りの硫黄島までのフェリーフライント分の燃料はまだまだ余裕があるが、ただの駐機に燃料を喰っていても馬鹿馬鹿しいのである。機に備え付けの幅の狭い急なタラップを降りると南の島独特の暑い潮風が出迎えた。おまけに直射日光が暑い。

「さて、ウエーク島到着……「彼女」はいるかな？」

この基地が目的の三人……航暉、夏海、ハルカの三人は背後にある大きな建物……ウエーク島基地の司令部を見やる。基本三階建て、L字型の鉄筋コンクリート製の建物でLの角の所からによつきり航空管制塔が突き出している。建物の奥には港が広がっているはずだがここからは見えない。

その建物の扉が勢いよく開いて、誰かが飛び出してくる。遠くから見ても小柄だとわかるその誰かは慌てたように猛ダッシュで三人の方に向かって来た。

「出迎えが遅れて申し訳ないのでしゅっ……!」

そういいながら彼女はこちらに飛び込んで来たのだが、何かに躓いたのか走って来た勢いそのままにコンクリート製の駐機場に倒れ込む。

「そんな転げるほど慌てて来なくてもいいのに……」

糸目を細めた夏海が彼女を抱き起こすが航暉が目を見開いて固

まっっているのを見ると怪訝な顔になった。

「君は——」

「中佐？」

「……いや。なんでもない……大丈夫？」

「え、あ、ああ……」

彼女は怯えた顔で航暉の方を見る。

「申し訳ないのです……!」

「あ、いや。遅れた事を咎めるつもりは無いし、君が謝らなければならぬ事は何も無いからとりあえず頭を上げてくれ。あと……:でできれば自己紹介を」

「は、はい! 本日付で第551水雷戦隊に配属となります、登録コード〃DD—AKO4〃 駆逐艦〃電〃です! ど、どうかよろしくお願ひいたします」

慌てた様子で敬礼をする姿はどこかぎこちない。それを見て目を細め、航暉も敬礼を返す。それを見て他の二人も敬礼の姿勢をとる。

「国連海軍極東方面隊中部太平洋第二作戦群、第551水雷戦隊司令の月刀航暉中佐だ。ウェーク島特根の指揮官も兼任することになる。これからよろしく頼むな」

「同じく艦装調整士の伊波ハルカ特務少尉です。よろしくお願ひしますね、電ちゃん!」

「医務長、六波羅夏海軍医大尉よ。擦りむいた所見せて、消毒だけしとくから」

夏海がウエストポーチから取り出した消毒液と滅菌ガーゼを手に改めて電の様子を見る。

「そんなことしなくても、大丈夫ですから、医務長さん……」

「だーめ、あなたはココの虎の子なんだからこんな小さなことで戦闘に響いたら泣くに泣けないわよ?」

夏海が問答無用で怪我の手当てをすると、夏海がパンと手を叩いた。

「とりあえず中に入りましょうか。こんな可愛い子をずっと外に立たせておくのもかわいそうですし」

「そうだな、とりあえず飛行機から荷物を下ろして、基地の旅行といこうか。総員かかれ」

「りょーかい」

袖から指先だけが覗く右腕を振ってハルカがそういった。

「じゃあ、基地の案内よろしく頼むね、電ちゃん！」

「が、頑張るのです！」

一通りの基地の確認が終わり、航暉、夏海、ハルカの三人は建物の最上階にある部屋……司令官室に集まっていた。

「ってことは、TCCは使えるんだな？」

「はい、電源を一度入れて確認していますし中継機の総取っ替えも問題なく終了しました。海底通信ケーブルも生きていますし問題なく稼働します」

報告を上げているのは大振りなファイルを持ったハルカだ。

「とりあえず、戦術指揮所が使えるとなると安心ですね。少なくとも艦隊の誘導はできそうです」

「あとは艀装の修理ドックのうちまともに動くのが第二修繕ドックだけってのが心配か……」

「とりあえず今のところは一つ動けば十分なのは？ 後続の応援部隊が来るまでには補修もおわるでしょうし」

ソファに腰掛けた夏海がそういった。どこから見つけて来たのか堅焼きのビスケットを摘んでいる。

「そうなんですが、もう一つ心配が……」

「心配？」

「この妖精さんたち、何かに怯えているような雰囲気で……。会話もできるし、仕事には問題ないんですけど、なんだか『人間の言う事

には絶対忠誠！”みたいな感じがして、なんだか変なんです」

「フェアリーまでも、か……」

航暉がそういうと、夏海も目をふせた。

「なにか、思い当たることがあるんですか？」

腑に落ちてないのはハルカただ一人のようだ。

「ここ前の司令官のせいよ。……ほぼ間違いなくね」

「前の司令官……？」

「風見恒樹ウエーク島基地司令。現場最終階級は大佐だが殉職に伴い二階級特進で少将。急進派の急先鋒で自分の部隊の船を踏み台にして進撃することを繰り返し、敵陣地への切り込みを行っていた人物だ」

「自分の部隊の船を……踏み台に……？」

ハルカの顔が青くなる。

「たとえ轟沈艦を出したとしても必ず戦果を上げよ。兵器としての勤めを全うし、海を啓開する刃たれ”……風見少将の言葉だ。彼女達を純粋な兵器として扱い、次から次へと轟沈艦をだしながらも数々の海域を切り開いた。……だが、内情は恐怖政治となんら変わらず、刃向かう艦の解体まで行っていたそうだ。最後はこのウエークで”艦娘の反乱”で殉職した。まさか少将が独立性の強いフェアリーまでもその手中に収めていたとは……。いやはや恐れ入る。もはや一種の力リスマだな」

艦娘……正式名称は”水上用自律駆動兵装”。

海を突然に支配した異形に対抗できる手段を探した最終型がそれだった。砲撃、雷撃、爆撃、電子戦、レーザー、メーザー、戦術核の投入まで行われ、お祓いや祈祷などオカルトチックなところまで足を突っ込んだ結果が、民間伝承かおとぎ話でしかないと思っていた”妖精”に頼るという結果に繋がったのである。

ブラウニー、グレムリン、スパンデュール、ピクシー、コロボツクル……呼び方はいろいろあるがまとめて”妖精”と呼ぶそのものたちに頼り、起死回生の切り札として”水上用自律駆動兵装”の開発が

行われ、実用化した。

これまで積極的に人間に関わろうとして来なかった「妖精」たちはごく稀な例外を除いて、限られた人物と最低限しか交流を持たない。

「そんなフェアリイすら脅して従えてたつてなると……上層部は狂喜乱舞するんじゃない？ 人間様のやりたいようにやれるつて事だから効率よく海を奪還できるとかなんとか言つて」

「んなことしても上手くいかないだろうに。一方的な支配関係で存続した国家がどれもすべからく崩壊してるのをまだ学ばないか」

吐き捨てた航暉を見て僅かに微笑んだ夏海がクリップボードに目を落す。

「フェアリイとの信頼関係の回復は必要そうだけど、そもそもコンタクトを取れないわたしや司令官ではどうしようもないし、伊波少尉の働きに期待するしかないわね。……医務室は設備も十分だし、いつでも対応できるわ。……電も司令官への恐怖心が強い——いや、人間への恐怖心が強いんでしょうね。話す機会があつたらゆつくり話した方がいいでしょう。できれば早いうちに。なんとか心を開いていつてくれるといいんだけど……」

「だな、とりあえず夜ご飯一緒に食べてみるか」

「それがよさそうね。今日は551水雷戦隊結成記念で少しはしやぎましょう」

そういうことを話していると遠慮がちに扉がノックされた。ここには妖精が幾人かと艦娘1人と人間三人しかいないのだからノックしてくる相手は自然に絞られる。

「どうぞー」

「失礼いたします……」

おずおずと入つて来た電を笑顔で出迎える3人。やはり電は緊張顔だ。それを隠そうとしているのか笑おうとして変な顔になっているところがいじらしく思える。

「えつと、あの……お呼びの用件はなんですかですか……」

「かしこまらなくていいよ。大丈夫」

「はい……」

とりあえずそういつて笑った航暉の顔をあまり見ずに俯く電。やはり、何かに怯えているような雰囲気だ。

「えっと、部屋の掃除とかしてくれてたのって電ちゃんだよな？」

そんな中切り出したのはハルカだった。声をかけられたことに驚くように肩を少し跳ね上げてから頷く。

「ありがとう。わたし部屋の掃除とか苦手だったから助かったよー。一ヶ月以上司令官がいなかったっていうしどうなってるかなーって少し不安だったんだけど奇麗にしてくれてほんつと助かったー」

そういいながら後ろから抱きつくようにして言葉をかけるハルカ。ハルカの身長はあまり電と変わらないため、姉妹がじやれているようにも見える。いきなり抱きつかれたことや御礼を言われたことにドギマギしているのか、「えっと、あの。その……」と、言葉に詰まっていた。

微笑ましく眺めながらも、航暉は軽くパンパンと手を叩いた。

「伊波少尉が掃除を苦手としているのは後々克服してもらおうとして、これからしばらくはこの面子と後から到着するであろう増援部隊と一緒に行動をしていくことになる。だからお互いにルールを決めようと思う」

「ルール……ですか？」

その声を聞きながら、航暉は電と目線を合わせるようにしやがみ込んだ。

「そうだ。自分が提案するルールはみつっ。ひとつめ、意見があるときはちやんと言う、周りはそれを頭ごなしに否定してはならない」

人差し指を立ててそういつた航暉をまじまじと見つめる電。その前で中指を立てる。

「ふたつめ、無理はせず、できないと思つたことはできないとちやんと言う。まわりは人命が関わるなどよほどの緊急事態では無い限り、これを無視してはならない」

どこか驚いたような顔をする電の前でもう一本指を立てる。

「みつつめ、意見や言い分を通すために暴力を使つてはならない。周

りはそれを看過してはならない。暴力にはもちろん不条理な上官命令も含まれる……どうだろうか？」

しばし思索するようにゆっくりと視線を泳がせて、電は恐る恐る口を開いた。

「最後のは……もし、もしですよ、その、疑ってる訳ではないのですが……」

「もし、司令官が暴走したときはどうするのか、だね？」

航暉が言葉を継ぐと間を置いてこくりと頷いた。

「当然看過することは許されない。ここの司令の上位機関にあたる連合司令部に陳情するか、武力による仲裁が必要だと判断されるときは撃つてもいいだろう。まあ、そんな事態を引き起こした時点で司令官として失格だと思うけどね」

そういつてから航暉は夏海とハルカに視線を移した。

「六波羅医務長と伊波少尉はどうです？」

「意義無しです。……できれば、三時のおやつを許可してほしいです」「業務に差し支えなければいいと思うけど、ここの酒保なんて皆無に等しいから嗜好品注文でなんとか済ませてね」

ハルカの意見に苦笑いしつつさういうと夏海も笑う。

「それにしても中佐は面白い事いますね。それ、艦娘に俺を撃ち殺すことを許可する」っていつてるもんよ？」

「もつとも、殺されなきゃいけないような理由を作るつもりはないので問題無しです」

「あら、けっこう自信家？」

「これでも轟沈艦ゼロできているし、これから沈める予定も解体する予定も無いので」

「言うね〜中佐殿」

ケラケラと笑っていると小さな声で「ありがとう……ごぎいます……」と聞こえた。俯いて顔はほとんど見えないが反応からして彼女が言ったのだろう。それに笑顔で答える。

その時、結構大きな音で電子音が鳴った。緊急通達を知らせるべ

ル。航暉が司令官卓に戻り、通達内容呼び出す。ハルカも個人用の端末を取り出すとそれを確認する。

「大規模通信障害……！ 深海棲艦か！」

詳細な内容をハルカが引き出す。

「海域ナンバ1エリアで通信障害が発生。ウエークレーダー、ボギーコンタクト、ボギーは中型以下と思われます。数不明！」

所属不明艦……通信障害が発生している中で反応が出ると言う事は……

「波形照合出ました。深海棲艦の駆逐艦クラスないし軽巡と断定。現在1-3エリアをまつすぐ1-1へ向けて移動中。艦種は……え、CTCからSC命令です！」

海軍極東方面隊の中央戦術コンピュータが緊急出撃せよと言って来ている。すでに作戦ナンバーが割り振られ、正式な出撃命令として処理されている。航暉はうなじに手をやり首の後ろから一本のコードを引き出した。それを司令デスクのジャックに差し込むと、わずかなタイムラグの後に電腦とコンピュータが接続される。音声入力装置をオン。

「CTCへ、こちらウエーク島基地第551水雷戦隊司令、月刀中佐。戦術コンピュータは本部隊の運用可能艦が駆逐艦一隻のみであることは把握しているか」

間髪置かずに戦術コンピュータの返答が画面に表示される。それを同時に処理しつつ、基地の現状を電腦経由でザッピングしていく。

「CTCより月刀中佐、把握している」
「月刀中佐よりCTC、その状況で部隊を出す意味がわかっているのか」

「CTCより月刀中佐、質問の意図が理解不能」
下唇を噛み締める。

新首都に設定された長野に置かれた中央戦術コンピュータは、非常に迅速な対応を取るべくセットされた巨大なスーパーコンピュータ。ただ、くだらない縄張り争いや出世争いなどに左右されず、迅速な展

開と救命のために的確な判断を最速で叩き出すため、融通なんて効くはずも無い。そうこうしている間にも敵の位置が特定されていく。進路はまっすぐウェーク島の近海を目指している。ウェークの領海まで、約30分。

目の前で不安そうな少女を見つめた。

「いきなりで済まない。出られるかい？」

「……です」

彼女は不安げに瞳を揺らしながらも気丈に頷いた。

「……月刀中佐よりCTC、質問を取り下げ、迎撃に入る」
通信を切る。

「必ず生きて帰還すること、いいね？」

「はいー」

「よろしい、第551水雷戦隊は準備でき次第出撃し近海に発生した深海棲艦を捕捉、これを撃退する。総員かかれ」

それが合図になったかのように司令官室にいた人々が一気に動き出した。航暉が部屋の間にある滑り棒を掴み、三階から一気に地下二階へ滑り降りる。それにハルカも続く。地下二階のドアはすでに開いていた。TCC——戦術指揮所は階段状のフロアに管制卓が7つ、航暉が部屋に入ると足下から重い駆動音が響き出し、ブラックアウトしていたスクリーンが息を吹き返す。

「基地司令よりウェーク島戦術コンピュータ、セルフモニタを即時実行し問題が無ければTCCを第一種警戒態勢に移行、TCC閉鎖、CTCとの通信ラインをオープンで維持せよ」

「DE WTC SELFCHECK—CMPL / TCC
ND—RED / CLOSE—TTC / CTC—ONLINE」

高速で画面に文字が表示されて、問題なくシステムが起動したことを告げる。TCCの電気が落され、スクリーンの青白い光が辺りを照らすに切りかわる。戦術指揮所に繋がるルートに隔壁が下ろされ外界とは電子的なつながりと放射線物質除去フィルターまで完備した通気用ダクト以外なくなっただことになる。

必要なデータがスクリーンに表示されていく。航暉はスクリーンの灯りを頼りにフロアの最上部にある総合司令官用の管制卓へ向かう。ヘッドレスト部にあるQRSプラグを引き出して自分のうなじに差し込んだ。カチンという音がして接続部がロックされる。

艦娘を指揮する人間……「自律駆動兵装運用士官」はこの「接続」を嫌うものが多い。なにせ、マイクロマシン経由とはいえ、脳に直接コンピュータから伸びたケーブルを接続するのである。少しでもノイズが混じれば痛みで代わる。しかしこれが無ければ、部下が戦う現場を指揮することは愚か、見ることもすら叶わないのである。

「少尉、管制システム接続シーケンスを開始、電の用意が整い次第接続する」

「了解っ！」

司令官席の後方にある通信卓に飛び込んだハルカがインカムを耳に掛けつつ返事をした。

地下二階の作戦指揮所でそんな指示が飛んでいるころ、電は急な滑り台のようなシューターに足を突っ込み、体を振り入れていた。こうなったら時間がない。シューターですぐに半地下の防空掩体となっている出撃ドックに到達する。光る非常灯、緊急出撃を知らせるサイレンが無機質極まりない出撃ドックに鳴り響く。目の端では妖精さんが大慌てで出撃用意を進めている。

《スクランブル、スクランブル、01ホット、01ホット。DD—AK 04スタンバイドック1》

合成音声でがなるアナウンスを聞きながら足元の赤い太い帯をたどるように走る。電はそのラインの先、出撃ドッグが並んだ場所の一番手前、第一出撃ドックに飛び込んだ。直後に今飛び込んで来たドック後方の隔壁がオートメーションで閉鎖される。天井からクレーンで吊られた電の艦装——ポセイドンインダストリー製の特Ⅲ型駆逐兵装ユニットだ——が収められたキャニスターが降りてくる。キャニスタークレーンが稼働中であることを示す黄色い回転灯が無機質

なドック内を黄色く映し出す。

妖精さんたちの誘導でキャニスターが開けられ、軍艦色に塗られた艤装を電の背中に接続する。接続と同時に電と艤装の同期が始まる。ドック前方のディスプレイには電の登録番号と換装可能兵装の詳細が表示された。10センチ高角砲一門、二門設置された61センチ三連装魚雷発射管には全て九三式酸素魚雷の3型が装填されている。外部電源装置が接続されていることを確認してから革靴を模した推進力場出力機の稼働テストを実施。反応がノーマルであることを確認して、警告灯の確認、エラー表示が一瞬瞬いて消える。武装管制装置オフ、航法管制装置、戦術リンクなど主要なシステムがオフになっているのを確かめると声を張り上げる。

「缶を始動するのです！」

外部電源をスターターに接続、コンプレッサーが缶を外側から稼働させる。万が一に備えて妖精さんが全員安全域に退避したことを確認して燃料となる水素を送り込む。ドンツ！という衝撃と共に缶が始動、電力供給を開始する。稼働率33%、アイドル域で落ち着いたことを確認してから外部電源を切り離す。キャニスターから伸びた電源ケーブルがずるとキャニスターに引きこまれたら、キャニスターがクレーンに吊られてドックから引き出されていく。

「動力システムチェック、マスターアーム、ロック、チェック」

キャニスタークレーンの回転灯に照らされながら、電は声に出しながら始動シークエンスを進めていく。主砲への給弾システムがロックされていることを確認して主砲を一度稼働させる。レスポンスノーマル、正常駆動する。対空電探、アクティブ・パッシブソナーの正常起動確認、慣性航法システムが緯度経度の入力を求めてきたのでウエーク島のデータを入力、自律待機を確認。

「第一出撃ドック、電よりウエークTCC、チェックインなのです」

出撃用意完了を告げるとすぐに返答が帰ってくる。

《司令部より電、中継機と同期させるぞ》

「は、はいなのです！」

慌てた返事に笑う気配がしながら、無線が繋がる。

《時間合わせ、1621、5、4、3、2、1、マーク》

直後一瞬軽い頭痛のような痛みが走る、それは刹那で消え去り、体がきもち軽くなったかのように思える。

(あれ、司令官さんとのリンクってこんなに気持ちいいものでしたっけ……)

《リンク確認。システムグリーンライト。電……いけるかい?》

「はい! いつでも大丈夫なのですっ!」

《作戦ナンバEMD0820501003Aを開始する、CTC出撃承認、戦術リンクの開始》

「戦術リンク確認です!」

電の頭の中に作戦用の航路や転進ポイントなどの情報が流れ込んでくる。それを感じながら電は静かに深呼吸をした。

《司令部了解、第一出撃ドック注水開始》

大量の海水が流れ込んで来て体が水に浮いていく。足下の力場もしっかりと効いている。

《前門開け! 第551水雷戦隊、抜錨!》

差し込んでくる日光に目を射られ目を細める。それでも前に力を入れ、滑るように海へと飛び出していく。目の前の海原へと小さな少女が飛び出した。

「駆逐艦『電』、出撃です!」

第2話「電・初陣

環礁と外海を隔てる水道を抜けると、海の色が翡翠を白に溶かしたような色から濃藍色へと姿を変える。手をついたら藍に染まってしまいそうな青だ。その海を割って走れば波が白に変わるといのは面白い。

《電、大丈夫か?》

「視界良好、問題無し、なのです!」

「素晴らしいながら彼女——電はわずかに苦笑いを浮かべた。

(いなづまはそんなに頼りないですか?)

中継機でリンクしているとはいえ、心の中まで読まれることは無い。今の司令官なら、聞けばきつと答えてくれるだろうが、そんな気は起きなかった。敵が確実にいる状況下でこんな事を考えているような余裕がないのはわかっていたが、それでも思考は自分の中に落ちていく。

たまゆら、思うのだ。

私は弱い子だった。いや、勝手に過去形で語るまい。私は弱い子だ。

ウェーク島が人類側に奪還され、基地が建設されてから早い時期に、私はここに配属された。それ以来、私はずっとまともな出撃をさせて貰えなかった。周りから「攻撃をためらう臆病者」と揶揄され、基地の周辺警備で稀に出されるだけだった。当然だ。相手を撃てない兵器など、存在意義が無いに等しいのだ。

前の指揮官だった風見恒樹大佐はそんな「役立たず」であるはずの私をなぜか保有しつづけた。高圧的で暴力的、使えないもの、刃向かうものを片っ端から排除していた風見大佐のことだから、真っ先にどこかにとばされるか、沈められるか、解体される立場のはずだった。なのにいつまでもその場に留め置かれたのだ。そのうちどこからか司令に媚を売って生き長らえているのだと噂が立ち、それらから庇つ

てくれた軽巡の天龍を始めとした艦娘のみんなは風見大佐からキツく折檻を受けた。それでも笑って側にいてくれた。なのに私はそのみんなが傷ついていくのを見ていることしかできなかった。――
―否、しなかったのだ。動いていれば誰かを護れたかもしれないに。

それでも、それでも――

(生きていたいと思っってしまったいなづまは、きつと弱くてダメな子です……)

月刀司令官は緊急出撃命令が発令された際に電を出撃させることをためらった。駆逐艦一隻で艦隊に挑む事を考えれば当然の反応と言える。それも、まだ演習も含めて一回も共に戦っていない状況での実戦である。司令官が電を信じきれないのも当然と言えた。

それに、司令官は電の経歴を把握しているはずだ。主な戦闘に一度も参加していない事も、演習で直撃弾はおろか至近弾も出せてない事も。そんな艦娘になにができるだろう。

皮肉なものである。電の記憶に刻まれた「純粋な艦だったころの電」は400近い敵兵すらも救って見せたというのに、今は味方すら護れない体たらくだ。

《電、方位2―3―0、距離4500。艦影みえるか?》

割り込んで来た声にハッと顔を上げる。南西に顔を向けると蒼の海の奥でなにかが反射した。

「艦影確認しました……」

《艦影確認了解、水上電探コンタクト、駆逐口級一隻と認む。反航戦で接敵、反転して同航戦に持ち込めるか?》

「りよ、了解です!」

《落ち着け電、大丈夫だ》

激励を受ける。心拍数が上がっていくのがわかる。遠くの影が確かな像を結ぶ。

「駆逐艦『電』、戦闘に入ります……!」

反航戦……正面から突っ込んで、すれ違うような進路に体に乗せる。海面を這うように走る敵の艦影を見る。双方ほぼ全速、あつという間に距離が詰まっていく。

「主砲用意……!」

マスターアーム・オン。武装の安全装置が外れて砲が息を吹き返す。相手に主砲を向ける。早鐘の鼓動というものを感じながら、距離測定儀越しに相手を見る。息があがる。

「左砲てえっ!」

重い衝撃、艀装ユニットの特性で顔のほぼ真横にある主砲から鉛の弾が吐き出される。口級も弾を吐き出してくるが、頭の上を飛び越え、かなり遠くに水柱を立てる。

「右砲……てえっ!」

かなりの速度のまま、すれ違う。双方無傷。電は速度を殺さないように大きく左回りに旋回を始める。

「極遠、遠……」

弾は当たらなかった。

——いや

“当てなかった”のだ、正確には。なにをしているのだろう。私は兵器で、相手は敵だ。ためらう要素などなにもないのに、それに否と
言う自分がある。

(戦争には勝ちたいし、生きていたい、でも——!)

《電!》

叫び声が響く、目の前に敵の砲の発射炎が見える。慌てて艀装の防弾板を振りかざすと重い衝撃と共に後方に弾き飛ばされた。榴弾だったのか爆裂が起こり、強烈な熱と破片をもろに受けた防弾板は明後日の方向に吹き飛んだ。

「……あっ!?!」

バランスを取り戻す前に敵がその爆炎を超えてくる。この体勢では発砲はままならない。いくら駆逐艦クラスの砲撃とはいえ、防弾板

ではなく生身の体で受け止めたら、無事で済む保証はない。生身を護るためのナノマテリアル皮膜は相手の砲弾が貫通する事を防いでくれるが、衝撃までは吸収しきれないのだ。

(……わたしらしい、でしようか……)

命が掛かっている状況なのに、どこか冷めた気持ちで目の前に広がる敵の主砲を見る。甘ったれた私にはぴったりな最期かもしれない。

次の瞬間、タンツという圧搾空気の解放音と共に、意図せず固定装備の爆雷投射機が作動した。同時に視界がブレて、全力で海面を蹴り後方に跳んだ事を知る。爆雷は斜め前方に投射され、海面に触れるか触れないかの所で起爆。大量の水しぶきが視界を遮ると同時に、後ろに跳んだ勢いを殺さずに右斜め後ろへともう一度ジャンプする。相手の砲弾が髪をかすめて飛び抜けた。

《……死にたいのか、電》

中継機の出力が最大になっているのを知って、初めて今の動きは司令官が操ったものだど理解した。より近くで、自分の中から響く司令官の声はどこか悲しそうな色に満ちていた。

私は兵器で、相手は敵だ。戦争には勝ちたい、それでも

「……敵の船でも、命は助けたいって思うのは、そんなにおかしい事ですか……？」

どうしても、納得できなかったのだ。

「私が討つことをためらうことは、そんなに不思議なことですか？」

確かに相手は敵で、人間の生活を侵している。だからって相手を根絶やしにする必要はあるのだろうか？ 砲撃だつて当たると痛い。水雷戦隊に同行した時はこちらの攻撃で哭泣を上げ、沈んでいくのを見た。相手だつて痛いし、沈むのを悲しんでいる。そんな相手を打ち倒すことなど、できなかつたのだ。

「平和のために誰かを殺さなければならぬ事に疑問を持つのは、そんなにいけないことですか!？」

いつか、どこかで分かり合える。戦いなんてしなくてもいい時代がくる。そう思っていたかった。そう願っていたかった。

《間違つてなんてないさ》

相手の砲弾を今度は右斜め前に飛ぶようにして躲す。やはり自分の意図しない動き、司令官が体を操っているのだろう。

《だが、誰かを護るにしても、なにかを救うにしても、生き残らなければ意味が無い。生きていなければ、だれも救えない。だから、そこで生きる事を諦めることは間違っている》

そこに来てもう一度爆雷投射機が作動、相手を牽制するように爆発を繰り返す。その間に主砲の砲弾が装填されて、いつでも撃てる状態になった。

《生き残ることを恐れちゃダメだ、電》

駆逐口級が突っ込んでくる。電はとっさに砲身を向けた。これは自分の意思だろうか？ そんなことを考える余裕もなかった。

「う、うわああああああああああああつ！」

マズルフラッシュが轟く。目を瞑って行き先は見えない。爆発音、断末魔、強い向かい風、浸水音。

うつすらと目を開けると目の前で燃えながら海に沈みゆく駆逐艦。慌てて駆逐口級に近寄った。手を伸ばす。

電が手を伸ばしている事に気がついた口級が砲身を覗かせた。

「違うのです！ 私はあなたを助け……」

それ以上続けることは叶わなかった。その砲身が火を噴いて、右肩に砲弾をぶつけてきたのだ。視界のブレと痛みと脳がパンクする。なんとか横転することは防げたものの、全身が悲鳴を上げていた。

《ダメー！ ジコントロール始動、主砲の延焼防止措置かかれ！ 機関の状況を確認！》

司令官の指示が飛ぶ。被害状況が網膜に投影される。

主砲右砲の発射不可、操艦システム系統異常なし、航行可能。

電は痛みでまだ目を閉じたままだったが、頷いた。そしてそつと目を開ける。

目の前にもう駆逐口級はおらず、どす黒い液体が海面を漂っているだけだった。あの様子で航行ができたとは思えなかった。ということとはもう自分の足下に沈んでいるのだろう。

「ごめん……なさい……」

助けられなかった、自分が殺したのだ。自分が引き金を引いたのだ。

「ごめんなさい、ごめんなさい……ごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさい……」

《……敵シンボル、ロストコンタクト。海域クリアを確認。CTCより帰還命令。……電、帰って来い》

司令官の声が響く。

「わかり、ました」

《電、間違っただけでなくていい。助けられる命を助けることは戦争中であつても当然だ。でも、神様だつてきつとすべてを救えない。水かきがあつているというお釈迦様の手で水をすくつても、きつと水は零れてしまうだろう。自分たちにできるのは、手の中に残る水を大切に守ることだと思う。でもそれは零れてしまった水はどうでもいいというわけではない》

司令官の声はどこか暖かかった。

《一人でできることなんてたかが知れている。でも電も自分も一人じゃない。一緒に強くなろう、電。いつかこの戦争は終わる。そこまです生き残るんだ。それまでできる限りの命を救えるように強くなろう》

「はい……」

電は主機を回す。ゆっくりと立ち上がった。

「ごめんなさい、次に会ったらもう一度謝ります」

背中を向けて青い海を割っていく。少し赤くなった瞳を前に向けて戻るべき島を目指す。

「くっ……！」

電が出撃ドックに入った事を確認してコンピュータから伸びるコードを首筋から引き抜いた。放射的に首筋を抑えるが血が付くはずも無く、すぐに痛みも収まった。

「お疲れさまです」

TCCの警戒態勢も解かれ、待機モードに変更される。通常の照明が戻って来た。その光量を少し気にしながらも、声を掛けて来たハルカの方を見る。

「なんとか撃破か。彼女を褒めてやらねば」

「にしても驚きましたよ。リンク率をいきなり完全同調に叩き込むなんて無茶が過ぎます。その反動で脳に負担がかかったらどうするつもりだったんですか？」

「う……。まあ上手く行ったんだから許してくれないか……？」

痛い所を突かれ苦笑いで誤摩化す航暉。

完全同期は同期した相手の武装や行動を全てコントロールするこ
とができる反面、艦娘の痛みや戸惑いも逆流して流れ込む。実際、至
近で爆裂した敵砲弾の熱や爆風に目を顰めたし、敵砲弾を右肩に喰
らったときは意識が一瞬飛ぶかと思った。艦娘はナノマテリアル皮
膜で守られていることに加え、“肉体自体を改造している”ため耐え
られるかも知れないが、指揮をする“自律駆動兵装運用士官”はそう
ではない。実際に艦娘が行動不能になる前に指揮官の脳が焼かれ、管
制卓の前で事切れていたなんて話は探すといくらでも出てくる。だ
から完全同調はメリットが十分にありながら奨励されてこなかった
のだ。

「まあ、駆逐一隻の砲撃で死ぬほど軟弱じゃないつもりだけどね」

そういうのは強がりだと分かってはいたが見た目まだ少女のハル
カの手前、そう弱みを見せる訳にもいかない。

「そういう事にしときます。とりあえずは電ちゃんを六波羅大尉の所
に連れて行ってゆっくり休ませてあげましょう」

「そうだな。少し辛そうだったし」

そういつつ、TCCを出る。入って来た滑り棒ではなく、ちゃん

とした階段を上がって半地下の出撃ドックに向かう。ドックの排水音が聞こえるということは電はまだドックの中だ。無機質なドックは温度のない白い光に照らされ床に引かれた色とりどりのラインを浮き立たせている。

第一出撃ドックの隔壁が開いた。そこから所々服が破れて痛々しい彼女が出て来た。少し恥ずかしいのか頬を染めている。

「電、只今帰還しました……」

「ん。お疲れさま。辛かったな」

電が敬礼して来たので航暉も軽く答礼を返す。弾が当たった右肩の服が吹き飛び痛々しい。ナノマテリアル皮膜のおかげで出血は無いが、痣が目立つ。目を伏せてから彼女の前にしゃがみ込んだ。

「1人で無理させてすまなかった」

「司令官さん、さつき言った事もうお忘れですか？」

「え?」

出撃前には見えなかった笑顔が見える。それに驚いて動きを止めた航暉の右手に電がの両手が重なった。高い体温が手を通じて伝わってくる。

「一緒に強くなろうって言ってくれたじゃないですか。それに私が被弾した時も、リンクを切らないで一緒に耐えてくれました。だから一人じゃないです。そうしてくれたことが、いなくまにはとってもとっても、嬉しかったのです」

そうしてにぱっという擬音が似合いそうな笑顔を浮かべて、その小さな手でぎゅっと航暉の手を握った。

「ありがとう、なのです。司令官さんのおかげで生きて帰りました」

そういつて手を離して頭を下げる電。ハルカが後ろでクスリと笑う気配がする。

「……俺も、ありがとうな」

自然な動きで電の頬に触れる。驚いたようにビクツと肩を振るさせた電に慌てて手を引く航暉。

「すまん。いやだったな」

「そ、そんな事無いのです!」

次に慌てたのは電で、航暉の手をとって、自分の頬の方に引き戻した。

壊れ物でも触れるように改めて航暉の手が頬に触れた。電は目を細め静かに笑った。

「大丈夫なのです。司令官さん。ちよつと恥ずかしいですけど、こんなにやさしくしてくれた司令官さんなら大丈夫なのです」

「……そっか」

電に残った涙の跡をそつと拭う。笑顔の方が似合うと考えた自分はきつと間違っていない。

「さて、医務長の所に行つて、肩を診てもらつておいで。その間に風呂でも湧かしておこう。上への報告は俺がやるし、艀装ユニットも伊波少尉とフェアリーがなんとかしてくれる。ご苦労様」

そう言つて航暉が立ち上がると、電は名残惜しそうな顔をして、頷いた。

船の上ではあるまいしとは思うが、ウエーク島基地のお風呂はまさかの海水風呂である。理由は当然、水不足。水没した死火山の縁にできた珊瑚礁が隆起してできたこの島に川なんてあるわけないので、シャワーならともかく、湯船いっぱいはいっぱいの真水なんて用意できないのだ。

しかしながら海水は周りにいくらでもある上、こんな絶海の島の娯楽なんて風呂ぐらいしかない。そのため立派な大浴場が整備されている。こんな大きな風呂を作るから海水風呂しかできないんだよ、とも思うが、ここが日本軍主体の国連海軍極東方面隊が管轄することになった時点で、巨大な風呂を整備したのはある意味必然と言えた。

「でも、擦り傷がある時はしみるのです……！」

その風呂の中でチリチリとした痛みを目を瞑って耐えるのは、長い髪を頭に巻いたタオルの中にした電である。シャワーを浴びた時に足に違和感があり、まさかと思って確認すると、ほんの数センチの擦り傷。———そういえば慌てて出迎えに走った時に転んだっけと思ひ出す。今日の昼前のことなのに、もう結構前のことのようだ。

擦り傷だし問題ないと思って湯船に浸かったが、想像以上のヒリヒリ感到に少々後悔した。

「……司令官さんが変わるだけで、こんなに気持ちが変わるのですね……」

痛みに少々慣れて、窓から覗く夕陽を眺める。大きな窓が開かれた大浴場だが、目の前に広がるのは環礁の内海と薄い陸地、その先に見える大きな太平洋だけだ。女子浴場のため建物がある方向には風流の欠片もない鉄の目隠しが立っていた。そのため夕陽が半分しか見えないのは少々残念だ。

その中で電は左の頬をそつと撫ぜる。司令官の右手が触れた位置だった。

「なんだか、ほっこりしますね……」

電にとつて初めて触れる暖かさだった。教導隊でもここに配属されてからも、あんな優しい触れ方をしてくれる男の人はいなかった。どこかまとわりつくような視線を向けてくるか、苛立った態度でぶつかってくるかしかなかったのだ。それに驚いておもわず肩をすくめるように逃げてしまうと、司令官も遠慮するように、手を引いた。司令官は優しい人なんだろう、きつと。電はそう思って笑った。きつと間違いではないだろうと思う。

「私も強くなれるでしょうか……」

司令官に聞けば笑うだろうか？

「なれますよね、司令官さん！」

空元気で笑ってみる。私を最後まで守ってくれた軽巡の言葉を思い出す。

———笑え、電。大丈夫だ。空元気で笑えばなんとかなるもん

だ。どうにもならないときは俺が守ってやる。世界水準軽く超えてる俺が言うんだ、大丈夫さ。

前の司令官が殉職する寸前に、解体され消えてしまった艦娘。その言葉が今になって思い出される。優しい司令官のことだ、きつと笑ってないと心配する。

「頑張るのです！ いなづまはきつと強くなります！」

せめて笑ってしよう。私を守ってくれたあの人に笑われないように。

そう決意して、電は浴槽から出る。口元には笑みを浮かべて。

第3話「ウエーク・夜」

「それでは、第551水雷戦隊結成を祝って、乾杯」

『乾杯!』

湯のみを掲げる手が4つ、夜の帳が降りたウエーク島でささやかな、本当にささやかな祝いの席が設けられていた。

「それにしても初日のお祝いの席なのに食事が質素ですよー。生野菜のサラダは特別な感じしますが、メインが豚肉のソテーってどうなんです?」

「なら六波羅医務長に『ウエーク島では栄養失調の危険性あり』とでも打電してもらえば十分な補給きますかね?」

保証はしかねるわ、としれつと言ってソテーと一緒に白米をぱくつく夏海。それを見てクスクスとわらうのは伊波ハルカ特務少尉だ。

「まあまあ、ほぼ2週間ペースで補給が来る事になってますし、電気も冷蔵庫も使えるんですから……」

そういつて片手に持った安い缶チューハイを煽るハルカ。それを見て心配そうな顔をしたのは電だ。

「少尉さんは、その、成人されてますよね……?」

「もつちろーん。電ちゃんと同じぐらいの背丈だけでも、ちやんとこれでも国立工業大学出身の24歳なのだー」

プハーと息を吐きながら上機嫌に答えるハルカ。ポケットからごそごそとパスケースを取り出して電に見せている。「国際連合海軍極東方面隊中部太平洋第二作戦群第551特別根拠地隊」と長々しい所属部隊名と共に名前と生年月日、性別、血液型などが記されたIDカードだ。出生年を見ると確かに24年前だ。

「軍のID持ってるって何がいいってお酒が一人で買えるのがいい!」

そう断言してケラケラと笑うハルカに電はたじたじだ。電ちゃんも飲むー?と言い出した時点で、間に割り込んだ夏海の判断は正しいと言えるだろう。

「お酒なんてあんまり飲むもんじゃありませんよ、電さん。特に未成年

の飲酒は体に毒です。興味本位でも飲まないようにしてくださいね」
「は、はいなのです」

そんなやり取りに苦笑いしつつ航暉は手元のお茶を少しすすった。
「そうだ中佐、伊波少尉から電さんとの初出撃でなんだかごいリンク率叩き出したって聞いたけど本当なのかしら？」

「すごいリンク率……？ ああ、とっさに限度まで上げてしまったやつか」

そういうと夏海は眉をひそめた。

「中佐、完全同調の危険は知っておいででしょう？」

「まあ、そりゃあ」

「中継機が身代わり防壁になるとはいえ、ちょっと不用意すぎませんか？」

急激な同調率の変化や艦娘側の痛覚などが指揮官の脳に影響を与えるというのは航暉も十二分に理解していた。

「まあ、あの状況で確実に電を生還させるにはあれが最善だったと思ってるしなあ。リンクの相性も良さそうだったし」

「まあ、中継機のデータ抽出した限りだと問題なさそうですし、六波羅大尉もそうかつかしくなくてもいいんじゃないですかあ？」

「呂律がもう回らなくなってきた伊波少尉に言われても説得力ないですけどね」

そうため息をつく夏海。あまり咎める気も無いのだろう。

「まあ、ご自身のためにももっと慎重に同期なさってください」

そう言つて夏海はこの話をおしまいにした。

「そんな事よりもっと飲みませんか？」

「あんたはもう飲むんじゃない！ 伊波少尉！」

大人二人が一斉に突っ込んだ。

周りに灯りがほとんどないせいか、夜闇が闇で無くなるほどの星明かりが降りて来ていた。ミルキーウェイとはよく言ったものだ。藍のキャンバスに白を垂らして引き延ばしたように、青白く光を発している。どれか一つすくねても誰も気がつかないのではないかと思えるほどの星空は、司令部の屋上からなら、手を伸ばせば触れられそうだった。

「意外にロマンチストなのかしら、月刀中佐」

そんな空を見上げていた航暉に声がかかった。屋上の手すりに体重を預けるようにしながら航暉は振り返る。

「現実逃避がロマンチックになるなら、そうかもしれないですね、六波羅軍医大尉」

屋上への入り口に立った夏海はその答えを鼻で笑った。

「ロマンチストが軍を率いるとは、いささか面白い状況ですかね？中佐はどう思われますか？」

「まあ、リアリストの塊でなければならぬ軍隊ですからね。自分が異端であることは十分知っていますよ、大尉」

「それでもやっていけている理由ぐらいわかってるんでしょうね？」

「俺が『月一族』の人間だっていうこと？」

相手の口調が崩れたのにあわせて航暉も素の話し方に戻す。航暉が笑顔でそういうと夏海は薄い笑みを浮かべた。

「否定しないのね？」

「したくてもできないからね。月刀（つきがた）と言えば『月』の中でも最大派閥。その男子だというだけで嫌でも担がれ、本人にそんな意思があるうとなかろうと周りは勝手に利用していくんで。結果的に自分も上に押し上げられる……」

本当は士官なんてやる器量は無いとおもうんだけどなあ、と無責任に嘯いて航暉は夏海を見据えた。

「で？ 玉の輿を狙って交際を申し込みに来た訳じゃないんだろう？」

六波羅夏海軍医大尉

「当然。……良くも悪くも軍人としてはかなり特殊な考え方をするみたいだけど、彼女達を“使う”覚悟はあるのか確かめたかっただけよ」

「覚悟、ねえ……」

軽薄にも取れる笑みを浮かべて、航暉は一度空を見上げ、視線を戻した。

「その覚悟っていうのは、艦娘を戦場に送り込む覚悟ってことかい？」

「そうね、そう解釈してくれて構わないと思うわ」

「なら、感情としては“ノー”、意思としては“イエス”だね」

「それはできれば送り出したくないが、上の命令があれば送り出すということかしら？」

「ノー。“彼女達”にとって上官の感情など意味を持たない。現状、彼女達を出撃させないという選択肢が無い以上、指揮官は“いかなる感情を抱いていようとも”彼女達を指揮し、生還させる義務を負う」
「それは貴方の経験に基づく貴方の言葉？」

「イエス、かな。半分はある中将の言葉の受け売りだけど。——
感情に流されて一瞬の契機を逃し彼女達を沈める事は許されない。部下を不安にさせず必ず生還させるという意味の下で彼女達を送り出す覚悟がある、とでも解釈してほしい」

互いに薄い笑みを浮かべたまま、屋上で向き合う。しやらしやらとした波音が言葉と言葉の間を埋めていく。

「なるほどね、なるほど。DD—AK04を生還させるために、彼女と完全同調し、攻撃を回避させた上で、彼女の疑問に答え、生き残る事を納得させた」

「……難しい言い方をすればそう言う事もできるかな。実際にはそこまで意識的に行動したつもりではないんだけど」

「確かに貴方の行動でDD—AK04は戦場で初戦果を上げ、駆逐艦娘としての行動を果たす第一歩を踏み出せた。でもそれは中佐への信頼に似た依存によるものに見える」

「それは軍医としての意見？　もしくは六波羅夏海大尉の主観による

判断？」

「どちらでも好きなように。もつとも、正式に“診断”をするには情報が必要ないわね。カウンセリングをお望みならいつでも対応するわ」

「フムン。考えておく事にしよう」

航暉が半分冗談めかしてそう答えると夏海は苛立ったように腕を組んだ。

「艦娘は人に非ず」……士官学校で全員が叩き込まれるはずよね？

“水上用自律駆動兵装”は船の記憶を持ち、異形に対抗するために開発された兵器に過ぎない。DD-AK04もそれは変わらないはず。兵器に感情移入することがどれだけ危険なことか分かってる？」

「電って呼んであげてくれ。登録番号だと味気なさ過ぎるからね」

そう言った航暉をまじまじと見る夏海。口調は柔らかいが声が一気に硬質になる。星明かりが浮かべる彼のシルエツトの中で鳶を思わせる焦げ茶の瞳が光って見えた。

「……まあいいわ。確かに感情を持ち、一概に兵器と言いきれない部分があることは認めるわ。けれども今の貴方の行為は彼女達をアンコントロールな状態に置く可能性が高い」

「その通り。だが彼女達は“人間が作った兵器ではない”ということをお忘れてないかい？ これまでの軍事システムでは対応しきれなかった“異形の軍”に対応するために“フェアリー”が人間にもたらした存在だ。それを人間の一存でどうこうできると考える方がどうかしていると思うがなあ」

「それは貴方の管理不徹底に対する開き直りに聞こえるのだけれども」

「彼女達は兵器という言葉でひとくくりにしていい存在じゃないというだけだよ」

航暉は即答してから軽く笑った。

「どちらかと言えば兵士に近い。人間が人間を完全に掌握することが不可能なように、人間が艦娘を完全に掌握することもまた不可能だ。ならば互いに独立した主体を持つ存在として信頼関係を築くことで、

双方向な関係を確立しなければ、最大限のパフォーマンスを発揮することはできない」

「アンコントローラブルな状況下で発生する不確定要素のリスクと天秤に掛けてもそれは勝るもの?」

「そうして縛り付けた結果がどうなった?」

一瞬空気が張りつめた。柵によりかかったまま両手を広げる航暉。別に銃を取り出した訳でも、剣を抜いたわけでもない。蛍光塗料でも塗ったかのように爛々と輝く一対の目玉が夏海をその場に貼付けたのだ。

「……どう? これで大いぶコンセンサスとれたと思うんだけどどうだろう?」

「そうね、なかなか有意義な話し合いになったと思うわ」

そう言っ腕を組んだまま笑う夏海。もう一度口を開く。

「あなたと話はいいそうも無いわね」

「奇遇だね。今自分もそう思っていた所だ」

「その上で言うけど、今のやり方じゃ必ずいつか破綻する。貴方が先に壊れるか、艦娘の方が先に壊れるかはわからないけれども、必ずいつか破綻するわ。それが誰の命も奪わない事を願うけど、事が起こらないとどうなるかわからないし、事が起こってからはもう遅い。いい方向に転がる事を願っておくわ」

「肝に銘じとく、六波羅大尉」

ひらひらと手を振って建物の中へと消える夏海。航暉はそれを目で見送ってから空を仰いだ。相変わらず澄まし顔な空はチカチカと瞬くだけだった。

「破綻なんてさせてたまるか」

ぼつりと呟いたが、だれにも聞かれる事無く夜空に吸い込まれた。

女子の部屋にしては殺風景な部屋だと部屋の主たる電もそう思う。「なにか絵でも飾るといいんですけど、飾るものがないのです……」

制服であるセーラー服が予備含めて数着を始めたとした衣服と地下に保管してある武装、戦法などがまとめられた本数冊、体一つ。それが電の所有するものの全てだった。ほとんどロッカーにしまっているの殺風景にみえるのも当然だった。二段ベッドの上段に腰掛けで浮いた足を軽く振る。

「天龍さん……やっとな私も一人前になれるかもしれません」

最近独り言が増えたかもしれない。部屋を殺風景だと思ってしまうようになったのもここ最近だ。兵器には必要ない事ばかり上手くなっている気がする。

それでもやっとな、自分の本来の役割……深海棲艦と戦うことができるようになる。これでやっとな一人前の艦娘になる事ができるかもしれない。

「明日も頑張らないといけませんし、もう寝ちゃいませうか」

電気を消すとうつつすらと星明かりがカーテンを四角く光らせる。それを頼りにベッドと毛布の隙間に体を滑り込ませた。

「おやすみなさい……」

誰にでも無く呟いて、瞼を閉じる。すぐに睡魔がやって来て、それに抵抗することなく眠りに落ちていった。

第4話「雷雨・追憶」

帰還直前にスコールに捕まった。

《態のいいシャワーになったかな?》

リンクの先で航暉が笑うと、電は苦笑いだ。

「私はスコールってちよつと苦手なのです」

《そうなんだ?》

「はい。服も重くなつてしまいますし、ちよつといろいろ思う所もあるので……」

《そっか》

それだけ言つて、会話が途切れる。電は口に出したことを少し後悔した。

そっか、と言つた後は何も言わずにいてくれる、その優しさに甘えているのが身にしみる。本当は話すべきなのかもしれないし、話すと楽になるかもしれないが、話すには心の準備が必要だった。

「そういうえば司令官さん、部隊の増員つてまだ着任しないんですか?」
あからさまな話題転換だが、それになにも言わずに付き合つてくれる司令官はやっぱりやさしい。

《あー、一応選考は終わつていらしいんだけど詳しい情報はまだ。こんな末端の基地だし、現状前線とはいえ激戦地つて訳でもないから後手にまわるのもしかたないんだけどね》

「アツツ島のあたりでしたっけ……」

《そうだね、なんでも深海棲艦の層が急に厚くなつてるんだそうだ。北部方面隊は今頃真っ青だろうな》

そんな会話をしているうちに、出撃ドックの入り口が見えてくる。ギアを後進に入れて減速。十分に減速した後、微速前進。誘導用のランプを見ながらドックに進入していく。

《帰還を確認。お疲れさま》

「司令官さんもお疲れさまなのです」

航暉の声が遠ざかり、中継機の出力がゼロになる。定位置についてからドックの排水が始まり、上から降りて来たクレーンが艀装を固定

し始める。今日は遠距離からの雷撃戦となったが、なんとか無傷で切り抜けた。敵が駆逐艦一隻だったのが幸いしたのだ。

艦装がキャニスターから伸びた電源コードに繋がれたことを確認して動力を落とす。出発と逆の手順で偽装を取り外していく。体がどつと重くなるような疲労感を感じるのもこの時だ。キャニスターのフタが閉じられ武装保管庫に吊られていく。ここ2週間で大分見慣れた光景だ。レーダーの誤報も含めて緊急出撃が三回、哨戒航海もあるためかなりの回数出撃していることになる。風見大佐の部隊が壊滅してからマーカス基地やエニウエツク基地がカバーしてこれた地域の一部を哨戒しているだけでこれである。この先元々ウエーク基地が管轄していたエリアの海防を任せられたらどうなるのだろうかと思わなくもない。

「ずつと天龍さんや疾風ちゃん、睦月ちゃん、如月ちゃんはこれをこなしていたのです……」

以前の部隊で哨戒部隊として海域を飛び回っていた面々の顔がよぎる。毎度燃料が弾薬を使い切るか誰かが戦闘不能になるまで出撃を続け、休む間もなく次の出撃を命ぜられていた、旧551水雷戦隊のメンバーだ。

疾風ちゃんや天龍さんはもう二度と会う事は叶わないだろうし、部隊解散まで生き残っていた睦月ちゃん達だってもうぼろぼろの状態です。別の部隊に保護されて去っていった。

胸が詰まる。

「どうすれば、良かったんでしようね……」

ドックから外に出ると艦装調整士のハルカが手を振ってきた

「電ちゃんおつかれー……ってどうしたの!？」

ハルカが血相変えて駆け寄ってくる。ハルカの手に触れて、緊張の糸が切れたのか膝から力が抜けてしまった、そのまま上半身をハルカに預けるようにしてへたり込む。

「だ、だいっ……だいじょうぶっ、です……」

声が震えて泣いていることに気がついた。背中をさすってくれる手の温かさに次から次へと涙が溢れてくる。

「大丈夫、大丈夫だよ。電ちゃん、私も司令官も味方だよ。大丈夫……」

ハルカの声を聞きながら嗚咽をこらえることしかできなかった。

「またお前か電ア!」

鬼の形相の提督が睨む。装備の補修も食事や休息も与えられないまま司令官室に連れて来られ、怒声を叩き付けられた。窓ガラスに叩き付けられる雨粒が耳障りな音を立てていた。

「実戦で一発も撃たずに帰って来てよく澄ました顔で立つてられるなええ!?! だからウエークの艦隊が腰抜けだって言われるんだ!」

「まともな装備も渡さずに実戦に押し出しておいてその言い草は無いんじゃないのか、提督」

横から声が割り込む。男にしては高く、女にしては低めの声。

「天龍、お前は黙ってる。俺はこのガキと話している」

「提督が話しているそのガキは俺の部隊の部下だ。口出しする権利ぐらいあると思うんだけどなあ」

「黙っていると言ったはずだCL—TRO1。兵器は黙って話を聞いている。二度言わないと分からん馬鹿者か?」

「兵器に頭脳はいらぬみたいなんで、どこかに置いて来てしまったようです、提督」

へらへらとそう言って天龍は電を庇う位置に立った。

「それに今回は戦艦、重巡、空母が複数出てくると分かっている攻略作戦に水雷戦隊のみっていう編成で酸素魚雷も高角砲も渡さずに倒して来いっていうのが無理ないか?」

「ほう……天龍、お前はいつから俺に意見できるほど偉くなった?」

「今回の作戦で戦果を挙げて来いというのはほぼ無理なんだよ。二航

戦……533航空戦隊の航空支援が間に合わなかったら全員沈んでたんだ！」

それを言った途端、司令官が手に持っていた万年筆をぶん投げた。それは天龍の顔にぶつかり、赤い液体を引きながら床に落ちる。

「身代わりで死ぬことぐらいしかできん車引きがどの口聞いてんだ!?!」

「その車引きすらまともに指揮できない指揮官はどこのだいつだ!」
その叫び声に横の秘書艦控え室から担当秘書の千歳が飛び出してくる。

「何事ですか!?!」

「お前がそんなんだから! そんなんだから疾風も沈んだんだろ!?!」

連日補給も食事も与えずに戦っていたら戦艦だつて沈んじまうだろうが!」

「やめてください天龍さんっ!」

「止めるな電! もう我慢できねえ! こいつのせいでみんな——
——!」

天龍がいきなり動きを止める。電や千歳は目を見開いた。天龍の後ろに男が一人立っている。天龍の首の後ろに金属の機械を叩きつけていた。直後天龍は今まで事がまるでなかったかのように棒立ちになる。

「助かったよ、鬼龍院特務大尉。動きも言葉も操られる気分はどうだ? 天龍?」

天龍のうなじにコードを叩き込んだ男がニヤリと笑う。

「嬢ちゃんたちは初めてみるかな? インターセプター 電脳錠」

素晴らしいながらコードの先にあるコントローラを倒すとそれ似合わせて天龍が首を傾げる。目を動かす自由はあるのか、左目だけで男を睨む。

「おうおう、怖いおめめだなあ。で、風見提督、どうします。こいつ」

「そうだなあ、お前にまかせろ」よ」

そう言った提督がにやあと気味悪く笑った。

「ああ、電は入渠でも休息でも好きなようにするといい、退出しろ」

「そんな……」

「いなづまあ、だいじょうぶだから……おれはしなない、から……」
機械的なぎこちない声が発せられる。

「ほう？ 電脳錠の影響下でもしゃべるか。すごい根性なこと。でも喋っていいとは言ってない、ほら、お仕置き」

「――」
声をあげることすら叶わない状況で天龍が悶絶する。

「いけえ、いなづまあ！ 上官命令だ！」

天龍の絶叫に反射的に足が動いて後ずさってしまふ。

「ああ、そうだ。やっぱり551水雷戦隊はやっぱりもう一度出撃してくれ。天龍がいないからそうだな、睦月を旗艦で近海警備だ。くれぐれも潜水艦には気をつけたまえよ？」

指揮官からの命令には従うべき。そう自分を騙して司令官室から退出したことを電は後悔し続けている。

次に帰って来た時にはもう天龍は「左の眼球を残してもういなかった」のだから。

「どうして、どうして……っ！」

睦月、如月、電の三人が警備任務を終えた報告にいくと妙に満足げな提督とテーブルの上に置かれた瓶がこちらを「見つめていた」。

「どうして天龍さんが殺されなきゃいけないかったですかあ!？」

睦月の涙まじりの絶叫が乱反射する。それを冷ややかに笑って提督が明るく言う。

「司令である俺に抗弁したあげく、殴り掛かって来たのでね」

提督を除いた全員が凍りつく。電はその場で立ち尽くすしかできなかった。

「う、う、うわあああああああああああああつ！」

睦月が手に持っていた12・7センチ短装砲を提督に向ける。主砲には先の警備のせいでもう弾は残っていない。それでも向けてしまった。向けてしまったのだ。そのことに電も如月もぎよつとする。

これで睦月は上官への敵対行為を成したとして「不良品」の烙印を押された上で解体されるのだろう。でもそれでここから逃げられるのなら、それでもいいと思った。そう思えるほどに、天龍は風見提督配下の第551水雷戦隊の柱だったのだ。

「あなたの、あなたのせいですっ！」

「心外だなあ。恨むなら君たちの旗艦か、そうだな、電でも恨んでいたまえ、半ば電を庇って死んだようなものだし」

きつと天龍にはこっぴどく怒られるのだろう。それでも、それも。

これ以上はもう耐えられないのだ。

なら、〃一度くらいはいい子でいなくてもいいだろう〃。

——いい子じゃなくても、もういいや。

睦月が引き金に静かに力をかけた時だった。

「睦月、やめなさい！」

無理矢理に割り込み睦月の砲塔を弾き飛ばす影が一つ。艦娘独特の艦載機が飛ぶ音が聞こえて睦月の主砲が部屋の隅に転がった。

「千歳、さん……っ？」

「武装を下ろしなさい。如月、あなたもです」

「でも、でも提督は！」

抗議の声を無視して千歳が睦月を庇うように立った。背負っていた艀装のカタパルトが稼働を始める。

「あなたたちが手を汚す必要はないわ。人間様に楯突く悪者は1人で結構」

千歳の持つ虎の子、爆装済みの試製晴嵐の発動機が回り、僅かな火薬の匂いととも打ち出される。

「どういうつもりだ、千歳？」

「最後に一杯お酒でも飲んでおきたかったです、致し方ありません

ん。風見提督、もうこれ以上私は目を閉じ、口をつぐむことはできそうにありません。あなたの行為はあまりに目に余るのです。確かにあなたの戦績は誇るものでしょう。敵泊地の発見に切り込みはそう易々とできるものではありません」

ですが、と言つて彼女は形ばかりの笑みを送った。

「こんなくだらないプライドで味方を見下し、海に帰ることすら許さない行為を見過ごす訳にはいかないのです。……一瞬で終わらせませぬ、覚悟してください」

そう言つた千歳の背に影が落ちた。彼女が振り返ると鬼龍院特務大尉が電脳錠を振りかざしていた。

「!?」

それが振り下ろされる直前、電と如月が猛ダツシユで鬼龍院に突っ込んだ。電脳錠の狙いは外れ、硬質な音を立てて床を滑る。

「千歳さん！ 早くっ——!?」

鬼龍院にぶん投げられた如月が壁に叩き付けられる。息を詰まらせた如月は一言も発する事無くずると壁伝いに崩れ落ちた。

「ま、まて——」

「さよならです、提督」

狭い部屋の窓ガラスが吹き飛ぶ。勲章などで飾り立てていた体はあつという間に爆炎に包まれ、叫び声すら残さなかった。

「そっか……」

ウエーク島基地の司令部棟2階には食堂兼集会室がある。そのこのテールルの一角で航暉はただそれだけを言つた。

「そのあとは、きつと司令官さんも知っている通りだと思います。海軍警邏隊と陸軍憲兵隊がウエーク島にやってきて、基地に所属していた第535戦隊、第539航空偵察隊、第551水雷戦隊、第557駆逐隊は一度解隊。みんないろいろ部隊に引き取られていきました。

千歳さんは本国へ送られて、睦月ちゃんと如月ちゃんはマーカス基地へいききました……」

もう冷めてしまつてぬるいとも言えないお茶をただ見つめる電。今となつては珍しいアナログ時計の音が響く。

「大変だつたね。よく耐えた」

正面に座つた航暉が優しい笑顔でそう言った。

「私……涙も出なかつたのです」

俯いて絞り出すような声でそう言った。

「弱虫だ、泣き虫だ、腰抜けだつて言われ続けたのに、みんないなくなつていったときは、涙なんて一つもでてこなかつたのです……。どうして、なんですかね……。いなづまは……。ほんとは薄情なんですかね……。つ」

ただでさえ小さい体がさらに小さくなる。なにかに怯えるように震え、行儀よく膝に乗っている手に暖かな滴が落ちた。

「んー、電ちゃん」

その手にそつと触れてハルカが電の顔を覗き込むようにしやがみ込んだ。

「みんな出て行つたのに、電ちゃんはここに残つたんだよね？」

「はい……」

「異動を希望すればここを離れられたのに残つたんだよね？」

「はい……」

「それは、残らなければいけないと思つたからかな？」

そう言われて黙り込む電。口を開こうとした航暉を夏海が目で制止した。今は伊波少尉に任せろ。

「どうして、でしょう？ 自分でもよく分からないのですが、ここからだれもいなくなつたら、何も無くなつてしまうような気がして。それで……天龍さんたちもいなくなつた事になつてしまひそうで……」

「そつか。なら私は電ちゃんに言わなきゃいけないことがある」

ハルカがそういつて彼女を抱きしめた。

「電ちゃんは薄情なんかじゃない。そんなこと絶対はない」

優しい声だつた。そう言つた言葉には血が通り、電に確かな質感を

持って伝わった。

「電ちゃんは私たちが来るまで、ずっと一人で1ヶ月、ウエーク島を守って来たんだよ。みんなを忘れてなくなっただんでしょ？ だから、一人でここを守ってきた。いつみんなが帰って来てもいいように。悲しいだけの場所にしないように」

「……はい」

「泣くのは我慢しちゃだめだよ、電ちゃん。一人でずっと抱えてちゃだめ。背伸びして強くななくてもいいんだよ？」

「はい……！？」

「空気読まないお出ましたな、おい」

緊急用のサイレンが鳴る。ハルカが厳しい顔でタブレットを取り出す。

「CTCからのSTBY命令です」

スタンバイ……艦装装着の上で合図があり次第出撃できる体勢で待機せよ。

「ウチリック環礁北東150キロに艦隊を捕捉。構成は現状不明ですが空母ないし戦艦クラスの存在を確認しています。現在西北西に航行中の模様。このままだと約75分後にウエーク島哨戒圏をかすめるようにしてグアム隊の哨戒圏に入ります」

渡されたタブレットを確認する

「クエゼリンの553水雷戦隊が西方へ急行中。グアムの防衛隊に警戒態勢でマークスからも応援の水雷戦隊が既に出航、ウエーク島とグアムの532戦隊にスタンバイってことはグアム哨戒圏で蹴りをつける気か」

532といえど重巡を主体にした高火力部隊だ。第53中部太平洋艦隊の中核を成す部隊と云っていい。そこまで引き出すとすれば相手はかなりの艦隊だ。

「夜戦で艦載機を使えないなら、駆逐艦を接近させて敵と接触し続け相手をリポートしろってどこかしら」

「どうやらそういうことらしい。今CTCからもそう言う感じの命令文が出た」

航暉がタブレットを掲げる。「STBY—551stTSq／Monitor EF on point FC230」と表示され、出撃時の想定航路、接敵予想位置と時間が埋め込まれた地図が表示される。「迎撃」でも「接敵」でもなく「監視」を指示してくるということとは駆逐艦一隻では相手にならない状況であることの現れだった。

「電、出れるかい？」

「……大丈夫、です」

「……条件はいつも通り。必ず生きて帰ってくること。いいね？」

電がうなづく。作戦を了承したことだけをCTCに叩き返し出撃準備にとりかかる。時刻は1945。

（雨、か……）

航暉は地下へと続く階段を下りつつ窓から外を見た。

（死ぬなよ）

それだけをただ願い、作戦指揮所に足を踏み入れた。

第5話「雷雨・邂逅」

短時間で終わると思われた雷雨は大分長引いていた。

《波浪による破損に気をつけて》

「はいなのです！」

外洋は波が高く電の身長を裕に超えるほどのうねりがあった。横波を受ける形にならないように慎重に海面を読みながら航海を続ける。接敵ポイントまではまだいくらかあるはずだが、どうなるかわからない。

「司令官さんは大丈夫ですか？」

《大丈夫って？》

「船酔いする方も多いと聞くので……」

《あー……これくらいなら大丈夫。視界と体の感覚が違うから少し違和感はあるけど。……進路補正、方位2—1—0へ回頭。CTCの情報信じるなら真つ正面距離35000に敵艦隊だ》

「方位2—1—0」

言われた方向に体を向ける。距離がある上に夜間でこの波浪だ、まだまだ敵は見えない。向こうもこちらをまともに捕捉できないだろう。

《索敵を厳に。交戦域に突入するぞ》

「了解です」

作戦参加艦への暗号スク립トが一斉送信される。電の網膜には「DE 551stTSq—DD—AK04／Contact」と直接投影された

右舷後方にちらりと何かが光った気がした。

「……………」

夜では見えるものも見えなくする。波のうねりもまた然り。気のせいかもしれないが、もしかしたら敵かもしれない。

「……………」

先頭に行く戦艦は涼しい顔で航行を続けていた。気がついたのは「彼女」一人なのかもしれない。彼女の中で疑念が膨らんでいく。

もしそれが見間違えではなかったら。

もしそれが潜水艦の潜望鏡だったら。

もしそれが甲標的だったら。

もしそれが敵戦艦の距離測定儀だったとしたら。

薄ら寒いものを感じる。それらにどれだけの仲間が沈められて来ただろう。見間違いだったとしたら、自分は隊列を乱したとして処分されるだろう。しかしながら、ここで見逃したとしたら艦隊の真横からいきなり雷撃でドカンという可能性もある。その雷撃の先が空母や戦艦だったとしたら……この作戦の根幹を破壊されることになる。

「……………」

電探持ちの巡洋艦がノイズを捉えた。あまりにも小型で海面の反射波の可能性もある。位置は方位0—3—0右舷後方4海里。

「……………」

艦隊旗艦の空母がこちらを見た。行けと言う事だろう。

「……………」

部下を率いて隊列を離れる。見間違いであることを願いつつ、雷巡チ級は進路を変えた。

《気付かれた！ 電、進路2—5—5に即時回頭！ 両舷原速黒15

！ 横波になる、転覆には気をつけろ！》

「はいっ！」

《敵艦隊の頭を押さえつつ敵艦隊の機動力を奪う。沈める必要はないが、できる限り敵艦隊の足を落す。最大船足で砲撃及び雷撃を行い一撃離脱で海域を抜ける。質問はあるかい?》

「大丈夫なのです！」

横殴りの雨を受けつつ転進、電は武装の展開を始める。向こうの方が早いとはいえ、丁字有利に持ち込めるはずだ。リスクではあるものの1対多数の戦いになるなら先頭艦のみを相手にできる丁字戦しかほぼ勝ち目は無い。

《高角砲の安全装置解除、初弾装填!》

「高角砲、初弾装填します！」

装備は10センチ高角砲を主砲に据え、酸素魚雷を発射管に詰め込んだスタンダードな駆逐艦装備。爆雷とソナーは固定装備で積んであるが、夜戦でこの戦況では使うまい。

「敵艦見ゆ!...軽巡ないし雷巡2! 駆逐艦4!」

左舷前方に白光灯火がいくつか波と合間に見える。微かに見える緑色舷灯。この位置なら敵の頭を押さえられる。

「左舷砲雷撃戦用意！」

《一撃加えたら離脱だ、いいな?》

「分かっているのです！」

司令官とのリンク率が少し上がる。視界に敵艦までの距離などが見える艦影と重なるように表示された。電の視覚情報をウエーク島の戦略コンピュータが解析、司令官を通して電にフィードバックされているのだ。

[551st TSq ENGAGE]

目指すは短期決戦。主機の出力を上げて波の頂点に乗る。

電の主砲が爆炎と共に砲弾を打ち出した。

《着弾！・遠・至近》

電の報告を聞きつつ航暉司令官席にあるキーボードを叩く。

「砲撃目標を敵先頭雷巡で維持、撃ち続ける！ 魚雷発射管1番から3番、発射用意！」

音声通信で指示を出すと同時に魚雷への誘導データを転送する。戦場を写したスクリーンのマップには電の位置と視覚情報から割り出した敵艦隊の位置が表示され、戦術コンピュータが割り出した最善の魚雷発射位置がオーバーレイされる。

「この条件で漸減しろとか、CTCも無茶を言ってくる……！」
戦術コンピュータの指示はこうだ。

「DD-AK04による単機接触により敵艦隊の状況を把握、もし敵に捕捉された場合は敵の斥候隊が動くと予測されるため、斥候隊を引きつけつつマークスからの応援部隊と合流、敵艦隊を漸減せよ」
海域マップの上を応援部隊であろう「550th Tsq」——
第550水雷戦隊の艦隊シンボルが滑っていく。戦闘海域まで後13分。末尾ゼロ番ということは臨時部隊のはずだが、戦力になるか……。

《敵弾頭着弾、近・遠狭又！捕捉されましたっ！》

「向こうも電探持ちがいるな……。機関最大、最速で飛び抜ける！」
《了解なのです！》

モニタリングデータとしてスクリーンに表示されている出力計の数字が跳ね上がる。速度誤差を修正。

「雷撃戦用意、3・2・1……撃てっ！」
《一斉射、なのです！》

直後に魚雷が水面を割って飛び込んだ。この波の中を進む酸素魚雷を見つけるのはほぼ不可能だろう。ルートさえ外さなければ確実に当たるはずだ。

「深追いはいいから適当に弾をばらまきつつ進路を3—0—5へ、一度戦域を離脱せよ」

魚雷の撃ちつ放しシュート&フォゲットでできる強みを活かして、距離を取る方向へ進路を変える様に指示を出す。同時に応援部隊とのランデブーポイントを探さなければならぬ。CTCの予測だとあと15分ほどで合流できるとは思いますが、電の電探にはまだ映らない。というよりノイズが多すぎてまともに映らないのだ。

「電探の意味があまりないな、これは……」

《仕方ないのです。この天気だと反射波が多すぎますから……》

撃ち出した魚雷が遠くで水柱を立てる。波のうねりが邪魔でちゃんと当たったのか鋭敏な信管が誤作動したのかはわからない。あたっている事を願うだけだ。

航暉が一瞬の違和を覚えたのはその時の事だった。胸騒ぎがする。機関のモニターやレーダーに目を落す。そして一瞬の雑音に目を見開いた。

「……！ 電、取舵いっぱい！ 衝撃にそなえろ！」

直後、バットでぶん殴られたかのような衝撃が体を襲う。中継機のセーフティが作動し、リンク率がミニマムまで瞬間的に引き下げられる。次々に表示される警告文に飽和する警報。

(やはり初期型ホーミング魚雷の最終探信音……！)

中継機のセーフティを解除、リンク率を引き上げる。電の鈍痛が脳に流れ込む。

「電、大丈夫か!？」

《右舷に被雷しました……!》

右舷タービン制御部に被雷。浸水発生。タービン損壊、ソナー沈黙。右舷主機機能停止による出力低下、艦機能の維持困難により武装の一部を切り離す。

いくつも出る警告文にまぎれて深海棲艦の艦隊を電探が捉える。直後電のすぐ脇に水柱が立つ。

《っ……!》

「左舷注水！ 電、動けるか!？」

《やって……みます!》

左舷側の主機がフル回転を始める。右舷側の出力を補うように動力を分散させ、なんとかバランスを保ちながら敵から離れる方向にのろのろと動き出す。今横波を受けるとまずい。なんとか転進し波に向かって垂直に進む。9・5ノット——正面から叩き付けられる波と暴風に加えて、大破、浸水している状況で左の主機のみしか使えなくてはこれが限界だった。

頭のすぐ脇を敵弾頭が接過する。衝撃と共に電探がブラックアウトした。敵艦隊の位置も友軍の位置も分からなくなった。波の合間に敵影が見える。駆逐八級が猛スピードで迫って来ていた。

「主砲旋回!」

《距離測定儀大破! 狙いが……!》

「めくら撃ちでいい! 右舷4時方向! テツ!」

電の視界を借りて敵影を捉える。距離も方向も大雑把で当たるとは思えないが、撃つしか無い。接近されれば、沈むのだ。撃つて、撃つて、撃ちまくる。砲身の赤熱エラーが出るが、無理矢理解除した。雨が蒸発する音が響く。目視でなんとか誤差修正をするが至近弾が精一杯だ。それでも、撃つ。

八級の砲身が閃いた。距離測定儀が使えれば必殺の間合い。避ける事などできるだろうか。

そして、弾丸が飛来する。

電には飛んでくる弾丸など見えなかった。この雨の夜に高速で飛翔する鉛の塊を見ることが出来る者などそういるものではないだろう。だから電が見る事ができたのは二つの水柱だけだった。それと同時に目の前に黒い影が立っていることを知る。

「……よく耐えた、電。もう大丈夫だ!」

僅かに光る舷灯に赤い刃が煌めく。直後に眩しいほどの閃光と共に轟音が轟き、八級が炎上する。

その光で浮かび上がったシルエットに、電は目を見開き、口を押さえた。闇に溶けるような紫がかったジャケットに、頭の脇に浮かぶ距離測定議ユニット、右脇に差した鞘から抜かれた抜き身の刀は妖しい朱に光り、驚く電の瞳を写した。

「天龍、さん……?」

「フフツ、怖くて声もでねえか? けどもう心配いらねえ。この後は「俺たち」が引き継ぐ」

電の右肩に手が置かれる。驚いて横を見ると、電よりも華奢な女の子が並んでいた。

「遅くなってごめんね。でも大丈夫なんだにやくん? ね、如月?」

「ふふつ。大丈夫よ。如月さんにまかせてね?」

揃いの緑色の角襟セーラーに明るい茶色の髪を揺らす、睦月と如月。その懐かしい笑顔を見て、電はつられて笑顔を浮かべながらも、目尻に涙を浮かべた。

「天龍ちゃん。感動の再会はいいんだけどそろそろ本気で戦わないとまずいんじゃないかなあ?」

天龍と同じ色のジャケットに天使の輪のような機械を浮かべた女性が電の左側に立った。右手には薙刀のような大振りな刃物を抱えて電の方を見た。

「わかってらあ、龍田。……電、お前の司令官に繋げるか?」

「は、はいっ!」

天龍に無線のチャンネルを教えるとすぐにそれに合わせたようだ。

「ウェーク551司令、こちら第550水雷戦隊旗艦、天龍。感度いかが?」

《天龍、こちら551司令月刀中佐。クリア&ラウド》

「遅れて申し訳ねえ、今から天龍以下龍田、睦月、如月、以上4隻が551水雷戦隊の指揮下に入る。指示をくれ」

そう言っただけで彼女は刃筋を立てて中段に構える。もう臨戦態勢を整えて敵艦隊を睨む。相手は急に現れた増援に仲間を沈められた事で

混乱しているのかまだ撃って来ない。

《……電以下所属艦の生還を最優先。如月は電を曳航しつつ進路3―0―5へ。睦月は如月のバックアップ。敵艦隊はホーミング魚雷を装備。機関出力を適宜変更しながら撤退開始。天龍、龍田両名は危険要素の排除、無理に深追いする必要はない。……必ず生きてウエークまで帰還せよ。以上》

それを聞いた直後、天龍が海面を蹴って前に飛び出した。

「天龍様の攻撃だ！ おっしやあああ！」

勢いが乗った刃が閃き、敵を一閃する。

「反撃が、始まった。」

第6話「雷雨・帰還」

僅かに風が弱まってきていた。如月に手を引かれるようにして波を乗り越えていく。

「電ちゃん……。ごめんね」

「へ？ 如月ちゃんいきなりなんなのですか？」

如月は前に目を向けたまま呟くように謝った。目を白黒させる電。

「次に会ったら謝らなきゃねって睦月と話してたの。あなたを置いて逃げちゃったから……」

「電ちゃんを1人にしちやったので、謝りたかったのです……」

睦月も横に並んでばつの悪そうな顔をした。海面を滑るように動きながら睦月は電に頭を下げる。

「1人にしちやってごめんね……!」

「睦月ちゃんも如月ちゃんも、いいのです。大丈夫なのですよ」

そう言つて電は睦月の頬に触れた。彼女の頬は雨で濡れてひんやりとしていた。

「それに、1人じゃないのです。今は司令官さんもいますし。天龍さんも睦月ちゃん達も帰ってきてくれたのです。だから大丈夫なのですよ」

そういうと如月がクスクスと笑った。

「電ちゃんはやっぱりやさしいのね……」

そう言つて如月は電を引き寄せた。

「天龍さん、電ちゃんが許してくれるかどうか気にしてたから許してあげてね」

「天龍さんを、ですか？」

「守れなかったって気にしていたのです。睦月たちのところにきてくれたのも3日前です。それまでどこにいたんでしょーか」

睦月がやれやれといった表情で大きさに肩をすくめた。そう言う割には笑みが浮かんでいる。

「きつと戻ってきたら謝ってくると思うので笑顔で許してあげましょ

う？」

如月の言葉に電は一も二も無く頷いた。

ウエークの空がほのかに白んでくる時間に、長時間のリンクでガンガンと痛む頭を抱えて航暉は作戦指揮所を出た。

「敵本隊の殲滅も完了……とりあえず危機は回避か」

一階まで階段を上がると夜の色が薄くなり出している。市民薄明にはわずかに早い色合いだ。朝4時半だとそんなもんだろう。

「……にしても天龍は無茶苦茶な戦い方をするんだな、艦隊機動できるのかあいつ」

先ほど帰ってきた艦隊で負傷していた電と天龍に入渠を指示して、他のメンバーにとりあえず食堂へいくように言っている。いまから食堂で顔合わせである。

「遅くなった、すまない」

そう言って部屋に入ると女性が1人に小学校にでも通っていないといけないような背格好の女の子が二人、軽巡CL-TRO2「龍田」と駆逐艦DD-MTO1「睦月」、DD-MTO2「如月」だ。そろって敬礼してくるので航暉も軽く答礼を返す。

「あなたが司令官でいいのかしらあ？」

「一応はね。第551水雷戦隊司令官の月刀航暉中佐だ。よろしく頼む」

「龍田だよー。来てそうそうにドッグを使わせることになってしまつてごめんなさいね。天龍ちゃんには私から言っておくわあ」

「睦月です。よろしくお願いします」

「如月と申します、お側に置いてくださいいね」

三者三様に自己紹介をしてくるのににごやかに答えてから、駆逐艦

の二人に視線を合わせる。

「……戻ってきてくれてありがとう。これでやっと電を一人にしないで済む」

そう言うのと睦月と如月は一瞬目を見開き、そして伏せた。

「……司令官は私たちがあの場にいた事はご存知なのでしよう?」

「旧551解隊前日のことかい?」

航暉の質問には答ええない、無言の肯定。解隊前日は……風見大佐の殉職日だ。

「……司令官は、怖くない?」

睦月の声が震えた。航暉はそれでも笑うしかできない。

「怖いようにはしないよ。睦月、如月。よく帰ってきたね」

「……武器を持たせずに出撃してこいとか言わない?」

「言わない」

「ぶつたりしない?」

「しない」

「外に放り出したり、しない?」

「しない」

「気に入らないからって誰かを殺すようなこと、しない?」

「する訳がない」

即答する。それぐらいしかできないのだ。

「すぐに信じるなんて言わない。風見大佐がした事はとてもひどい事だし、目の前の中佐も同じかも知れないと思うのは当然な事だ。そう疑うのはいけない事でもわるい事でもない、普通な事だ」

幼い瞳が航暉を見据える。今日を逸らしてはならない。

「だから、司令官として君達を全力で守る。この部隊を君達が絶対に安全だっと思える部隊にしてみせる。この基地なら大丈夫だっと思えるようにしてみせる」

「ほんとに……?」

「本当だ。だから、この司令官なら信じてもいいと思えるようになってからでいい。力を貸してほしい」

そう言っただけで笑ってみせる。

「改めてようこそ、私の部隊へ」

そう言った途端に睦月が決壊した、大きな声を出して泣きついてくる。

「大丈夫、大丈夫だよ。怖い事はしないし、させない。一人きりにはしないし、させない」

「それに嘘はないでしょうねー」

龍田の声が割り込んだ。

「ここはウエークよ。司令官、ここで天龍ちゃんはひどい目に合ったし、睦月ちゃん達もそうだったわー。もし“同じようなこと”があったら」

「その時は俺を撃ち殺して構わんよ」

それを言うと睦月と如月がぎよつと目を見開いた。

「銃限定ですかー？」

「龍田さん、突っ込む所そこじゃないと思うわ……」

如月が呆れた様子でそういう。それがおかしくて航暉が吹き出した。

「そんなこというなんて、司令官はそう言う趣味なのかしら？」

「趣味云々の話ではないな。撃たれないように頑張るさ」

にやりと笑うとそれにつられてか如月もくすくすと笑った。

「ではよろしくお願いしますね、司令官」

時刻は少しさかのぼる。

「結構派手にやったわね」

「ごめんなさいなのです……」

医務室の扉を開けると中からかけられた第一声がそれだった。

「無事に帰ってきたならいいわ……後ろの方はどちら様？」

「軽巡天龍だ。ナンバーで言うならCL—TROO」

「そう、ここの医務長の六波羅夏海軍医大尉よ」

大きな艦装は下ろしているが、距離測定ユニットだけは装備したままの天龍が彼女を睨んだ。

「そう怖い顔しなくても大丈夫よ。傷がひどいのは電ちゃんの方ね。とりあえず身体スキャンと脳活性チェックしちやいましょう」
そう言つて医務室の奥にある部屋に通される。それに天龍もついてきた。

「あなたは後」

「いいじゃねえか部屋にいるぐらい。それとも、見られちやまずいことでもあんのか？」

「……その調子で司令官の診察も覗くとかしないでね」

「司令官のそんなんを見てもメリツトねえからいいわ」

そんな会話をしつつ電気の灯った部屋に入ると、そこには検査用機材……手術台を縦に置いたような台にそこから伸びるコードが目を引き。夏海は電をその台に背中を預けさせるように立たせると、その首筋にコードから伸びるQRSプラグを差し込んだ。中継機越しのアクセスとは違うダイレクトなノイズに電は少し眉を潜めた。

「脳活性チェック開始、動かないでね」

そう言つて側を離れた夏海が壁に埋め込まれたタッチパネルを操作すると光の網が電を取り囲むように現れる。それは電を閉じ込めるように迫り、やがて電の体をすり抜けて反対側まで通過する。

「……ん、これなら汎用マイクロマシンの追加だけで十分ね」

そう言つてから無針注射器を手に寄つてくる夏海。電は正直この無針注射が苦手である。50年も前は針を皮膚に突き刺して注射をしていたと聞くが、今は皮膚から浸透させる無針注射が主流だ。鋭い痛みはないものの、薬剤を皮膚に押し付けるようにして吸収させるので、強く押さえつけられるような感覚がある。特に静脈に流し込むタイプのマイクロマシンは他の奴より粒がデカくて少し痛い。

「ごめんね、ちょっとごりつとするよ」

「擬音おかしくないか？」

「いいのいいの」

セルロイドメガネの下の目を細めて電の左腕に無針注射器をあてがった。あとはオートで注入をやってくれる。注入終了まであと5秒。

「……ふう」

「お疲れさま。ちゃんこのアフター飲んで待ってて。一応この後30分は医務室にいてもらうからそのつもりでねー」

マイクロマシン入りのドリンク……アフターと呼ばれるマイクロマシンの調整材だ……を渡されて部屋の隅へ。

「なら次行くよ」

天龍へ手招きを送る夏海、天龍はのっそりと近づいてQRSプラグを夏海からひったくった。

「自分でできる」

「あらそう、なら用意できたら言って」

そういつてタッチパネルの方に移動する夏海。それを横目で見つつ天龍は自分のうなじにプラグを突き刺した。

「やってくれ」

「はいっ」と

すぐにスキヤンが終わり、天龍にも注射とアフターが渡される。

「二人とも30分くらいはそこにいてね」

そう言われてベッドと椅子が並んだ部屋……4人用の大部屋だ……に通されると、夏海は手をひらひらと振って去っていく。怪我した部位の再生が始まっているのか体が少し熱くなる。二人で取り残された部屋の中に気まずい沈黙が降りてきた。

「……天龍さん。隣、座ってもいいですか？」

「……おう」

ベッドに腰掛けた天龍の左隣に電が腰掛ける。体重を天龍の方に預けるように寄りかかる。

「心配だったのです」

「……悪い」

天龍が目を伏せて謝ると首を横に振る電。

「天龍さんに恨まれてるんじゃないかって、心配だったのです」

「恨むって、なんで俺が電を恨まなきゃいけないんだよ」

「天龍さんがいなくなった日は、いなづまが怒られた日だったのです。

それを庇って鬼龍院特務大尉に連れて行かれて……」

「ばっか……あれは俺の不幸際だろうが、そんなこと」

「そんな事じゃないのですっ！」

電の叫ぶような声が耳朶を打ち、天龍は言葉に詰まる。

「ずっと、ずっと……怖かったのです。天龍さんを殺したのは私なんじゃないかって、私の身代わりに天龍さんが死んだんじゃないかって。ずっと怖かったのです。周りからそう言われるのが怖くて、一人でウエークに残って」

「電……」

わかっていたのだ。電はなぜウエークに残ったのか、わかっていた。ハルカはウエーク島を守ったと言ってくれたが実は違う。あの時、あのように答えなきゃみんなが心配すると思ってそう答えただけだ。

ずっと逃げていたのだ。

あの時、電が一人になる方法は二つ。ウエーク島に残るか、死ぬかだけだった。死ぬ覚悟なんて崇高なものを持ってなかったから、ウエーク島に残っただけだ。ウエーク島ならだれにも邪魔されずに朽ちていけるかもしれないと思っただけだった。

「艦娘なのに何もできなくて、それなら私なんていない方がましで。それなら私なんて解体された方がましなんだって。このままウエークで沈んだ方がいいんじゃないかって……」

「電っ！」

天龍は電を無理矢理に抱き込んだ。電の高い体温が服越しに伝わってくる。折れてしまいそうなほど華奢な体が小刻みに震えていた。

「ばかやろう……ばかやろうが」

隻眼から涙が落ちる。言いたい事がたくさんありすぎて言葉にならない。だからそれも全部まとめて強く抱き込んだ。

「なんでお前が沈まなきゃいけないんだよ、ばかやろう……!」

畜生、天龍は下唇を噛んでそう叫ぶのを押しとどめた。なんでこいつがこんなに苦しまなきゃならなかった？　なんでこうなるまで放っておいた？　誰が？　放っていたのは俺じゃないか！

治療を言い訳に逃げていた、その結果がこれならば、受け止めなければなるまい。

なにも言えないまま、ただ、抱きしめる。しばらくそれだけの時間が続いた。

「……俺も相当馬鹿だが、電もバカだよな」

「なっ、いきなり何を言うのですか?!」

「俺も怖かったんだよ」

電を抱きしめたまま天龍は天井を仰いだ。有機ELの照明が照らす天井は染み一つなく清潔に保たれていた。

「電脳錠からなんとか逃れて脱出してから、なんとかマーカスの部隊に見つけてもらって、気がついたら横須賀の海軍施設の中だったんだ。そこでウエークがどうなったか聞いて、みんなバラバラにしちやっとなって思ってた……。司令部こそクソだったが、みんな仲良かっただろ？　それを壊しておいてどんな顔で会えばいいんだつてずっと、怖かったんだ。俺が守ってやるとか大口叩いておいて、最悪じゃねえか」

「……そんなこと」

「そんなことじゃねえだろ?」

天龍はそう言っただけで電と視線を会わせる。

「守れなかったのは変わらない。こんな旧式の俺を信じてくれたらびっ子すら守れないんだぜ?」

「そんなことないのです!」

「そんなことない訳がないだろ?」

「そんなことないつたら無いのですっ」

「そんなこと……ああもう!」

言い合いが面倒になってもう一度きつく抱きしめた。

「……悪かった、電。もう一度だけ、守らせてくれ。一緒に戦わせてくれ」

「……天龍さんはずるいのです」

目を赤く腫らしたまま、電は弱々しく笑った。

「そんな言い方されたら、断れないじゃないですか……!」

元々断るなんて考えていなかったが、少しだけ強がっても許されるだろう。電も天龍の背中に手を回し、ぎゅつと抱きしめた。

「もう勝手にいなくなったりしないでくださいね」

「わかってる」

「……本当にわかってるのです?」

「わかってるよ! 信じてよ!」

くすくすと笑って「冗談なのです」と声をかけると天龍が疲れたような顔をした。その隙に天龍の手の内からぱつと離れて向かいのベッドに座り直した。

「お前……見ない間にしたたかになったよな」

「そうですか?」

「絶対そうだ。前は俺をからかうようなことしなかったのにな?」

そうかもしれないのです、と言って照れたように髪をいじる電だったが、もう少しだけと思い、にやりと口角を持ち上げた。

「天龍さんも人が悪いのです」

「あ?」

「生きているなら生きているで連絡がほしいのですよ」

「う、それは、だな……」

しどろもどろになりつつある天龍の側によっていき、天龍の頭に右手を乗せる。

「天龍さんは背伸びしなくても十分可愛いのですよ?」

言った途端に天龍の動きが止まる。よく見るとこめかみに血管が浮いている。

やりすぎた、のです？

「電ア！ 今から徹底的に教育してやるからそこになおれえ！ 鬼教官と言われた天龍様の怖さ叩き込んでくれる！」

「はわわわわっ！ そんなつもりじゃ……！」

「逃げるなっ！」

「逃げないってのが無理なのですっ！」

ベッドを飛び越え椅子を蹴散らし、狭い部屋での追いかっつこが始まる。

なお、戻ってきた夏海からの鉄拳制裁と正座説教が入るまで残り8分の事であった。

第7話―演習・盛夏

《両舷原速黒15！ 左三点回頭用意、始め！》

無線越しの天龍の声を聞きながらウエーク環礁内海の様子を眺める。内海で艦隊機動の練習をしているのは電以下第551水雷戦隊に配属になった駆逐艦。特に先日クエゼリンの第553水雷戦隊から移籍となった雷、北方艦隊第二作戦群の第563水雷戦隊から移籍になった暁と響の三人の艦娘の教育がメインだ。

「なかなかいい動きするのねえ……」

龍田がそういつて笑う。それを聞きつつ、航暉はコーヒーを煽つた。

「それぞれ特徴的だ。『あたらなければどうということもない』を実践する暁に、雷撃を中心にして手堅く攻める響、フロントアタッカータイプの雷に、周囲に目を配る司令塔スタンスをとる電……。対空さえ気をつければそつなくこなす如月に対潜警戒を得意とする睦月……ここまで多彩な水雷戦隊もなかなかないだろうな」

「そうねえ、ある程度の事態ならこれで対応できそうよねえ……」

龍田は頭上の天使の輪っか（本人曰く水上電探のアンテナ部らしい）をふよふよ上下させながら上機嫌に笑った。

「それで？ 私を呼んだ理由を聞かせてくれるかしらあ？」

龍田がそういうと航暉は応接ソファに腰掛けるように進めてその反対側に座り込んだ。

「……元551水雷戦隊の面々のことだ」

「それなら天龍ちゃんに聞いたほうがいいと思うのだけれど……部外者じゃなきゃだめなことかしらあ？」

「イエス、だ。残念ながら」

航暉はそういつて応接セットのテーブルをタップした。

「月刀中佐よりウエーク島戦術コンピュータ、第551水雷戦隊所属の全駆逐艦およびCL―TRO1のパーソナルデータを司令室デスクスクリーンに投影せよ」

「Projects Personal Data of DD-
AK01、DD-AK04, DD-MT01, DD-MT02,
and CL-TRO1 CML/Command Tsukig
ata」

ガラスの天板がスクリーンに代わり7つのウィンドウが立ち上がる。そこに浮かぶのは龍田以外の所属艦の経歴や能力を数値化したものなどが並んだデータファイルだった。そのうちから天龍、電、睦月、如月をピックアップして並べて龍田の方に向けた。

「……風見大佐が殉職している以上真偽の程はわからんが、なぜ彼女たちを起用し続けたんだと思う?」

「……どういふことかしら?」

「天龍はウエークに来る前から命令無視や上官への不適切な対応が報告されていた。睦月、如月は特型ユニット開発後、どうしても後続艦と比較すれば性能が劣る。電は特型最終ロットとはいえ戦果を出していない状態だった」

「つまりは効率重視の風見大佐が使い続ける理由がない、つてことかしら」

そういつた龍田に航暉は頷いて見せた。

「……天龍ちゃんが解体されかけたことを考えると、おそらく理由は駆逐艦のうちの三人の誰か、もしくは三人全員かなあ」

龍田は顎に人差し指をあてながらそういつた。

「暁ちゃんたちの比較でも何も出ないのかしらあ?」

「規則性は今のところなしだ」

それを聞いて考え込む龍田。天龍たちのデータを見つつ口を開く。

「天龍ちゃんは面倒見がいいから小っちゃい子たちをまとめるのがうまいわ。天龍ちゃんをずっと手放さなかったのはおそらく駆逐艦の子たちをまとめるためだと思うけど、駆逐艦の子たちはわからないわねえ……」

「龍田でも、そうか……」

「で、どうするつもり?」

龍田が笑うが、目の底は冷えていた。

「とりあえずは保留、だな。理由が出てきてそれが彼女たちにとって害となる可能性があるならその可能性を潰し、そうじゃないならそのままだ」

「それが諸刃の刃でも？」

「諸刃の刃ならデメリットが発生しないように状況を整えるさ」

そういつて立ち上がり、デスクの画像を消した。

「そうだ、昼の休憩の後にでも一度全員をここに集めてくれるかい？」

「わかったわあ、全員ね。作戦参加でも決まった？」

「そんなところだ」

そういつて苦笑いを浮かべた航暉に龍田は目を細めて笑い、司令室から出て行った。

「演習？」

「それも下村艦隊相手に、だ」

所属する艦娘の前で大仰に肩をすくめる航暉に天龍が呆れた顔を向けた。

「司令官、それってそんなに問題になることなのかい？ 演習はごく普通のことだろう？」

銀に近い色をした長髪を揺らして響がそういうと、龍田が笑った。その反応にむっとした顔をしたのは暁だ。

「なによ、響はそんなおかしいこと言ったのかしら？」

「北方艦隊から来たばかりだから知らないのも無理はないだろう……龍田、下村艦隊の概要言ってみてくれ」

航暉がそういうと喜んで、と頷いて、龍田が口を開く。

「下村艦隊は中部太平洋第一作戦群の別名で第五三中部太平洋艦隊の攻勢部隊の中核よねえ、指揮官は名前の通り下村和人准将でクエゼリン奪還作戦の総指揮官で名前を挙げたんじゃなかったかしらあ」

「補足するならグアム在留艦隊の指揮の全権を任せられてなかったか？ 戦艦2隻に重巡4隻、軽空母4隻、正規空母2隻他4つの水雷戦隊……こんなこと言いたくないが今の551が逆立ちしたって勝ち目のない艦隊だけ？」

天龍がそういうと慌てた顔になる暁。

「し、司令官！ いくら私たちがれでいだからってそんな無理難題押し付けられても困るわよっ！」

「そうなる前にちゃんと相談してよね、しれーかん！」

「それは下村准将に言ってくれ……」

げんなりした顔でそういうと電が口を開いた。

「もしかして、下村准将のほうから話があったのです？」

「正解。きれいにお膳立てして俺のサインだけすればいい状態にして送ってきやがった。……もうCTCのイベントナンバーまで取得した状態でわざわざ伝令をここまで飛ばしてサインかつさらってった」

「ああ……朝のリアジェットってそれだったのね……」

如月が納得顔をしている横で腕を組むのは睦月だ。

「それでもわかりませんねー。第一作戦群が第二作戦群の、それも新設された格下の部隊に演習を申し込むメリツトなんてあまりないんじゃないのかにやーん？」

「あー、それ、俺のせいだと思う」

気まずそうに航暉がそういうと全員の視線が突き刺さる。

「……司令官、何をしたんだい？」

「江田島海大はわかるか？」

UNNStaC—HoriShima

「国連海軍大学校広島校……だったかな？ たしか提督の訓練をするコースがある」

響の答えに頷くとそれがどうした、と天龍の視線が鋭くなる。

「そこで指揮幕僚課程と水上用自立駆動兵装運用士官課程の総仕上げに現役将校との模擬戦をやるんだが……」

「……いやな予感がプンプンするんだが」

「たぶん天龍の予感は正しいだろうな。……それで下村准将率いる打撃艦隊を軽空母と水雷戦隊で叩き潰した」

「うわあ……」

「なんというか……すごいことやるわねえー。海大所属の空母って鳳翔さんよねえ、軽空母で比べてもあまり艦載機積めないし、よく勝てたわねー。ちなみに下村艦隊の戦力は？」

「旗艦は伊勢で利根、筑摩、阿賀野、能代、龍驤だ」

「本気の攻略部隊じゃないか……それに水雷戦隊と軽空母で挑んだのかい？」

「相手が油断してたし、自分の試合時間が夕方だったからな。夕日を背にした艦攻隊に開幕雷撃で龍驤を落としてもらって、水雷戦隊で逃げ回りつつ適度に爆撃決めて夜戦で水雷戦隊の雷撃一発」

「もしかしてそれを根に持つてるってことなのですか？」

電の質問に「それぐらいしか理由が思いつかん」と正直に話すとまわりの空気が微妙なものになる。

「……大人げないわねえ」

如月がそういったのに頷く艦娘たち。

「そこまでお膳立てされると断れないわよね。で、しれーかん。どうするの？」

「演習は2週間後の8月18日1500時よりグアムの演習用レンジで行われることになっている」

「……おい、グアムに行っている間の海域防衛どうする気だ？」

「それに先立って558水雷戦隊が出張ってくれるってさ」

至れり尽くせりだと嘯いて、一つのデータを皆に見えるようにデスクに表示した。

「で、対戦相手なんだが」

資料をみて全員が動きを止める。長い沈黙が続いた。

「……これ、殺しに来てるだろ」

「天龍ちゃんもそう思った〜?」

「さすがにこれは……勝ち目あるのかい?」

「だ、大丈夫よね、しれーかん。わ、私もいるんだし、ねっ!」

「れでいーなんだし、へっちやらだし……」

「これは、びっくりしたのです……」

「射程が違いすぎますう……」

「終わった後の髪の手入れが大変そうねえ……」

相手は伊勢・日向・利根・筑摩・蒼龍・飛龍とある。この時点で艦爆・艦攻の嵐に射程外からの砲弾のラッシュが見て取れる。開始時間が15時からでは夜戦に入ることすら厳しい。ポイント弾でカラフルになる事態が容易に想像できた。

「で、誰が行く?」

「……こういうことこそ司令官の采配じゃないのか?」

「天龍の方が練度は詳しいだろう? あと本人たちの希望もある」

「……指揮官の戦略は?」

「正直に言つて勝つことは絶望的だ。あとオフレコで頼むが……ここで勝ってしまうと後が怖い」

「かといってさっさと負けて帰るような編成で挑むのもそれはそれで不満を買うのでしようねえ……」

龍田がそういうと航暉は頷いた。

「まあもともと選択肢はないんだが……演習参加枠6隻いっぱいに使って全力で挑む」

「それなら……俺と龍田、暁以下特Ⅲ型4隻が妥当だろう。睦月と如月の場合、練度は十分だがいかんせん対空が苦手だから、正規空母二隻相手に逃げ回りつつ距離を詰めるなんて負担がでかすぎる」

「ふええ……情けないのですう……」

「こればかりは仕方ないわよねえ……」

「あ、ちがっ……! 別にお前たちが力不足だと言っているわけじゃなくてだな……!」

天龍が慌ててフオローを入れる。それを見て目を細める龍田……

目が怖い。

「でも負け戦ってわかってるのに突っ込むのは嫌いだよ……」

「俺だって嫌いだよ。……だからタダで負けるつもりはないよ」

「ほう……聞かせてくれ」

悪がきのたくらみ顔のような笑みを浮かべて天龍が身を乗り出した。

……そしてその2週間後、周囲には青しか広がらない快晴の海の上を6人の少女が進んでゆく。

「……これ、使えるのかしらね」

そうぼやくのは特Ⅲ型駆逐艦のネームシップ、暁だ。特Ⅲ型武装ユニットの主砲マウント部には普段なら主砲が乗っている場所に直方体の金属の箱のようなものが乗っている。

「二週間の焼き付け刃とはいえなんとか様になってるじゃねえか。大丈夫だろ」

「それを言うなら付け焼き刃ねー」

「そ、そうともいう」

艦隊を率いっつ天龍がどもった。どうも龍田には頭が上がらないらしい。

「演習なんだ。死にはしねえし全力でぶつかればいいし、相手に負けたからって今回の場合は恥じゃねえよ」

「そうよねえ……、でもそれだけ下村准将は月刀中佐を警戒しているってことよねえ。いくら次世代の有望格とはいえそこまで警戒するかしらっ?」

「おい龍田、アイツってそんなにすごいやつなのか?」

しんがりを務める龍田の方を振り向いて天龍がそういうと龍田は笑う。

「天龍ちゃんは知らないかしらあ? 〃月一族〃って日本軍にすごく顔がきくのよおっ?」

「つきいちぞく……?」

聞き覚え自体ないのかちんぷんかんぷんな顔をしているのは暁以下駆逐艦たちだ。

「たくさんの優秀な軍人を出している家の人って感じねえ、月刀家を頂点にいろんな家系があるけど……そうねえ月刀、月詠、月岡が『月の御三家』って言われてるわ。司令官はその中でも本家『月刀』の血筋の次男って話よ」

「月の御三家……ねえ。見かけ倒しじゃないことを願うぜ」

「あらー？　『最初の戦いでもしっかり指揮できてた』ってほめてたのはどこの誰だったかなあ……？」

「し、知らねえよ……」

うふふふ、と笑う龍田。肩に担いだ薙刀の刃が赤くきらめいた。それに背筋を震わせたのはその前を進む雷だ。

「龍田さん、いきなり後ろで殺気放たないでよねっ」

「雷ちゃんも戦いなれてきたわねえ……でももつと気を付けないと駄目よ？　潜水艦に喰われないようにしなないと駄目よお……？」

「龍田さん、怖いのです……」

龍田の言葉に軽く震えているのは雷の隣で装備をどこか気にしている電だ。暁と同じように主砲ユニットを立方体の箱状をしたユニットに換装している。

「潜水艦はねえ……いつ来るかわからないのよお？　来た敵を三枚に下ろしてやるぐらいの気迫がないとねえ……」

「それって薙刀とか刀とか持つてる人じゃないとできないじゃない……」

「なんなら穴あきチーズでもいいわよ？」

「砲撃も潜水艦には入らねえって……」

暁の突っ込みにさらに暴走の度合いを深める龍田。天龍の溜息をものともせず笑い声を漏らす。

「航海も始まったばかりよ。演習開始の時に疲れてるわけにはいかないけど、気を引き締めていきましようね。……天龍ちゃん、転進ポイントアルファー・チャーリー317、到達まであと30秒よ？　号令かけなくていいのかなあ？」

「わかってら……。転進用意、左舷1ポイント、方位2―9―5、陣形は複縦陣を維持……」

グアムまではかなりの大遠征となる。ほぼ最短ルートを通っているがそれでもまる一日＋ α を航海につき込まなければならぬ。なかなかハードな航海だ。

「回頭かかれ！」

おそろくさらにハードな演習が待っているグアムに向けて艦隊は進路を変えたのだった。

第8話―演習・狼煙

グアム、アプラ軍港。

北マリアナ諸島の南端の島、グアム島の西にある昔ながらの軍港だ。今は国連海軍極東方面隊の主力部隊の一つ、第五三中部太平洋艦隊の本拠地となっている。ここを極東方面隊が管轄するか、米帝主体の南北アメリカ方面隊が管轄するかでひと悶着あったが、今は日本海軍主体の極東方面隊の拠点となっている。

「……とはいえ、英語ばかりねえ……」

そういうながら車窓を眺めるのは如月だ。サンゴ交じりの白いアスファルトで舗装された道を進む公用車の後席で窓ガラスに姉に於たる睦月と一緒に窓に張り付いているのだ。

「まあここは帝政アメリカの直轄地だからね。実質日本海軍所属の俺たちにとつては『外国』だ」

そんなことを言いながら白い詰襟に金の飾緒を下げた第二種軍装を纏った月刀航暉はほほえましげに二人を眺めた。制帽のつばには国連軍所属を示すメタリックブルーのラインが入り、普通の軍人ではないことを示していた。

「しれえかーん、睦月ちよつと退屈ですう……」

「あれだけ窓にかじりついいってどの口が退屈だっていうんだ？」

「英語読むのも大変だし周りも柵と海と山ばかりで代わり映えないんですもん」

苦笑いしていると運転手を務めてくれている基地の伍長が笑いながら口を開いた。

「このあたりは異形の襲撃もありましたから、民家もなにもかも立ち退いてしまいましたからね、睦月特務官が退屈といわれるのも当然でありますな」

「そうなんですか？」

「ええ、如月特務官。このあたりは大聖堂があつたりした結構大きな住宅地で、結構にぎやかだったんですよ」

「……伍長はこちらの出身でしたか」

「私は日系三世にあたります、中佐殿。軍に志願する前は空港近くでホテルのボーイをしておりました」

バックミラーに映る蒼い目が懐かしげに細められた。

「納得しました。道理で歩き方がさまになっていくわけです。ホテル勤務ですか」

「はい、中佐。自分でいうのもなんですが、リゾートホテルとしても優秀で人気があるホテルです。もし休暇でグアムにいらつしやることになりましたら、グアムミルキーウェイリゾート&スパにいらしてください。ボーイのディー・マツナガの紹介だと言えばいいサービスが受けられることを保証いたします」

おどけた様子でそういって、伍長は人懐っこい笑顔で笑った。

「では、次来るときは外泊許可を取り付けてから演習にくるとしましょう」

「ええ、ぜひ」

「如月も連れて行ってね？」

「そんな金があればね」

すり寄ってくる如月を軽くあしらっていると柵が低くなり、視界が開けた。

「見えました。ようこそ、アプラ軍港へ」

8月18日の正午の時点でアプラ・ネイバルハーバーの天気は快晴、雲量1、海上の風は南東から3ノット、波は湾の外で1メートル、港の中は0.5メートルもない。穏やかな演習日和となった。もつとも第551水雷戦隊に流れる空気は穏やかとはいいがたかったが。理由は単純。演習前のあいさつに出向いたときの相手将校のせいである。

「なんだあの横柄な態度!？」

不穏な空気の根源は主に憤りっぱなしの天龍である。演習前の最終打ち合わせに使う部屋に戻ってもずつとこの調子だった。

「この部隊を車引きの集団だとか格下扱いしたうえで、相手の腕も見ないで腰抜けだあ!?! あんなのと戦わなきゃいけないって思っただけで反吐が出る!」

「天龍……少し落ち着いてくれ」

航暉がそういうと、天龍はキツと彼を睨んだ。

「落ち着いてられるかよ。あいつは俺の部隊を馬鹿にしたんだぞ？」

それは俺を馬鹿にするのと同義だし、司令官を馬鹿にするのと同義だ。あそこまでコケに言われて何も思わないのかよ!？」

「格下の相手にしか強がれないんだよ、察してあげなよ、天龍。……もつとも」

そういつて航暉は肩をすくめ、折り畳みの長机に寄り掛かるように体重を預けた。

「前回の模擬戦では軽空母交じりとはいえこちらが勝つてんだ。そう簡単に格下扱いされる筋合いはないつもりだけどね」

「……目が怖いぜ、司令官」

「売り言葉に買い言葉で対応したんだ。本気で行かなきゃ失礼だろ?」

航暉がそういうと龍田も笑う。

「私の部下を根拠もなく馬鹿にするのも大概にして頂きたい。車引きの底力、実戦でお見せいたしましょう」……階級が二つも上の准将に対して言うセリフではないわねえ……」

「この勝負、勝つのは難しいが、相手を苦しめることは十分にできるだろうと踏んでいる。みんな頼むぞ?」

「はいっ」

そろった八つの声に満足げに頷いた航暉が書類を挟んだクリップボードに目を落とす。

「作戦は大きな変更なし、旗艦は電、以下天龍、龍田、暁、響、雷の6名で演習を行う。如月は緊急の交代要員として演習レンジ外で艀装

装着の上で待機。睦月は俺の横で控えておいてほしい。出発前に話した通り、攻撃は天龍、龍田の二人を核に、特型4人でバックアップする形を基本とする。できる限り最速で相手の懐に飛び込んで乱戦に持ち込むように動くが艦載機の爆撃がほぼ間違いないため、対空見張りを厳として接近する。接近した後は空母を優先して撃破してくれ。……状況に応じてこちらからも指示を出す、回避運動は個々人に任せる。……質問はあるかい?」

「シンプル極まりない作戦でいいじゃねえか。ちびつこどもは質問あるか?」

「大丈夫なのです」

「れでいーの本領発揮ね」

「これならやれるさ、不死鳥の名は伊達じゃない」

「しれーかんの作戦だもの、大丈夫よ」

「龍田は?」

「質問はないし、やりたいことをやるだけよー?」

「……だそうさ。司令官、あとはあるかい?」

天龍が不敵な笑みを浮かべると、似たような笑顔を向ける航暉。

「死なない程度に暴れてこい!」

「」「了解!」「」「」

敬礼を交わし、部屋をでる。そこには真っ青な空と海が広がっていた。

「それでは、よろしくお願いします」

演習の臨時の指揮官卓に座って航暉はそういった。首筋にはいつもの違う移動式の中継器。地下の司令卓を使ってもいいのだが、演

習レンジを見渡せる（さすがに端から端とは言わないが）塔があるのでその上で指揮を執ることにした。

《ふん。月刀君、改めて言うがこれは実戦そのものだと思って戦いたまえ》

「ええ、存じ上げております」

《警告はしたぞ……？》

どこかべつとりとまとわりつくような声が塔のスピーカーから流れる。秒単位で合わせた腕時計を見やり、部隊のチャンネルを開く。

「551TSq、各員状況報告」

《電、グリーンなのです》

《天龍、グリーン》

《龍田もグリーンよ》

《暁、いつでもいいわ》

《響、いけるよ》

《雷、グリーンよ》

《如月、用意できてるわ》

航暉が睦月の方を見やると彼女は笑顔で頷いた。

「状況開始まであと一分だ。演習だから、全員気楽にリラックスしていけ。大丈夫だ」

《なのです。司令官さん、もし勝ってきたらご褒美、お願いしてもいいですか？》

「ご褒美？」

《外泊許可を取ってグアムミルクキーウェイリゾート&スパに行きたいのです》

「……如月か？ 情報源は」

《みんなで行ったほうが楽しいかなって思ったの。提案は睦月の方よ？》

この無線の奥で絶対にウインクしているとわかる色で如月の声が弾む。盛大に溜息をつくとき、隣で慌てた空気がする。

「えつと……あの、その……」

「……泊まるだけの金はないから、日帰りの食事と温泉で勘弁してく

れ……」

《え？ いいの!?!》

《男に二言はないわよねえ〜?》

《……とてもいいね》

《い、いなづまの本気を見るのです……っ!》

《妹になんてまけてられないわね、いつきまつすよー!》

「……即物的だなあお前ら」

頭を抱えると横に立つ睦月も苦笑いだ。

「ごめんなさい……」

「いいよ。司令官としていいとこ見せたいし。少しばかり財布に痛いかなんとかなるだろ。……気分を切り替えろ、状況開始10秒前」

そういうと和んだ空気が一瞬で澄み渡る。中継器のリンク率を全員ミニマムからわずかに上昇させる。司令官の意識は全体を俯瞰するように、艦隊すべてを映し出した。

「3、2、1、……状況開始!」

《電より全艦へ、前進強速!先頭は天龍さんと龍田さんで複縦陣へ移行します!》

電からの指揮が飛ぶ、艦隊は滑るように前進していく、陣形が組みなおされたころ、響の対空電探に影が映った。

《対空電探、航空隊捕捉。……2時方向距離4500高度3200、数1と……11時方向距離12000、高度1200、こっちはいつぱいだ》

「さっそく来たか。その高度だとフロートつき偵察機と艦爆だな。対空戦闘用意」

《対空戦闘用意、私と暁お姉ちゃんが前に出ます!》

《暁の出番ね、見てなさい! 電、決めるわよ!》

全速で艦載機の来る方向に飛び出す暁、その後方でバックアップに入る電。二人の武装のロックが解除される。模擬弾装填艙装を示す目が覚めるような水色のテープが張られた武装を11時方向上方に向ける。

《レーダー情報、リンクリクエスト》

電の声が無線に乗る。その直後に個々の電探の情報統合されてそれぞれの視界に投影された。リンク16——目視圏内にいる僚艦との情報リンクシステムの応用だ。敵機が米粒大から豆粒大に変わるころ、レーダーでは射程を示した円の中に敵機のマークが飛び込んだ。

《暁お姉ちゃん!》

《ロサ弾、撃てっ!》

暁の主砲ユニットに据えられた対空兵器——12センチ30連装噴進砲に火が入った。炎の尾を曳いて前に飛び出す砲弾の山。1秒で燃え尽きた推進剤だが、十分に初速のついた弾頭は優に1500もの高度を稼ぎ、敵機の頭上を捉える。慌てて散開しようとしてももう遅い。遅延信管が起爆し上空で60もの子弾を吐き出した。黄燐が発火し、燃えながら敵の飛行隊に降りかかる。

《どんなもんよ!》

《敵航空隊転進。一度海域を離れていくね。……対空電探、機影捕捉、3時方向距離3000!?! 早いっ!》

響の焦り声が聞こえる。高度は100を下回り、対空レーダーに映りにくかったのだ。

「艦攻隊だ。回避!」

《言われなくてもっ!》

魚雷を放った後なのか、進路を変えて退避していく航空機。太陽に反射してきらりと光る。

《魚雷航跡数28!》

航空魚雷は空気を推進剤として使用するため、明確な白い筋が海面を走る。射角は広くある程度ばらけるとはいえ28本は多かった。対空防衛のためにわずかに艦隊から離れた電と暁は射線から外れており、のこりの4隻に魚雷が殺到する。

「響!取り舵いっばい!」

《だめだ司令官。天龍にあたる!》

《俺のことはいいから回避行動に入れバカ響っ!》

天龍の声を無視して響は進路を維持、天龍の横に並ぶようにして雷

撃に割り込んだ。

1本目は二人の鼻先をかすめて飛び抜け、2本目は大きく射線を外す。3本目は後方に抜けた。

《耐衝撃体制!》

響の声が無線に乗った直後、巨大な爆発音とともに水柱が立った。

その時航暉は数瞬だが意識を手放した。脳を直接揺らすような衝撃に意識を手放し、身を焼くような痛みに覚醒した。

「そんな……まさか!」

目を大きく見開いたまま睦月が硬直する。戦闘音が一瞬で止んでいた。付近を飛ぶ戦闘機の飛翔音と風切り音がやけに大きく響いている。

「響、無事か!」

《……最悪だ。でも、なんとか生きてるよ》

荒い息が聞こえる。とりあえず生きていることに安堵しつつ、響へのリンク率を高める。焼けるような痛みに脂汗が浮き出る。

「こちら551TSSq、緊急事態発生、演習中止を要請します」

相手の下村艦隊の司令部に通信をつなぎつつ響の艦装にアクセスする。右舷浸水部遮蔽、左舷側に注水、魚雷と爆雷に安全装置をかけて全弾投棄した。浸水と注水で失われた浮力でも沈まないように投棄できるものは投棄する。

《どうかしたかね?》

「下村准将……どういふつもりか説明して頂きたい。なぜ演習に実弾が使われているのです?」

響の感覚がフィードバックされ、焼けつくような感覚に眉をしかめつつ、言葉を絞り出した。浮力が足りない、防弾板も投棄する。

《言ったはずだよ月刀君……“これは実戦そのものだ”》

航暉の目がすつと冷えた。

「相手を沈めるのが演習ですか? これは訓練規定違反行為だ」

《訓練じゃないんだよ月刀君、何度も言わせないでくれ。……君、邪魔なんだよ》

「……野郎」

如月に暗号スク립トを送信する。艦隊と合流し、響をバックアップせよ。

《まあいい。君の置かれてる状況を認識してくれたようで何よりだ。では続けようか》

《待ってください提督!》

通信に割り込む女性の声、航暉には聞き覚えがあった。対戦相手の旗艦、伊勢型戦艦1番艦BB-ISO1 “伊勢”だ。

《月刀中佐の言う通りです。これは訓練規定違反です。これ以上の戦闘は……》

《伊勢……言っただけだぞ。 “これは実戦そのものだ”。お前は私の武器で目の前のやつらは敵だ》

《同じ軍隊の仲間だろう。敵じゃない》

《敵だ、日向。お前らの仕事は敵を沈めてくることだ。……これ以上抗命するようなら “不適格” とみなすが……そんなに解体されたいか?》

含み笑いが無線に乗る。だれも何も言わなかった。言えなかったのだ。

「……551Tsq、響以外に損害を受けたものはいるか?」

《……余波を軽くもらったがなんら問題ねえ。ちびどもも龍田もみんなうまく避けた。……司令官》

「わかってるさ、天龍……電」

《はい》

「旗艦として、電はどうしたい?」

無線が沈黙する。数刹那の沈黙ののちに改めて無線が開く。

《……私は……。私は、伊勢さんたちも助けたいです。こんな嫌な状況から、助けたいです。司令官さん、お願いします》

電はそういった。それを聞いて改めて無線に呼びかける。

「下村准将、あなたが行っていることは軍規則違反だ。演習を中止し武装解除してください」

《演習じゃないと何度言ったらわかる?》

「ならば作戦行動を中止し武装解除してください。これは進言でも助言でもありません。軍規則に基づいた明確な命令です」

《ほう？……断ったら？》

「できれば断らないでいただきたい」

《……車引きの腰抜けが我が艦隊を突破できると》

「——できないとでも？ ほざくなよ三下が」

スイッチを切り替えたように航暉の声が冷えた。相手に発言することも許さず、共通無線に向けて高らかに宣言する。

「黙って聞いてればグダグダと、俺の部下を馬鹿にするなどといったはずだ。何度も言わせるな」

《うっわ……》

《司令官、さん……？》

あきれ顔の天龍と戸惑いを隠せない電、その横では何も言わずに龍田が笑みを深めた。

「第五五一水雷戦隊司令、月刀中佐より全艦へ通達。下村准将の独断による戦闘行為に重大な軍規違反が含まれている可能性がある」と判断されるため、国連軍行動規約に基づき、下村准将の身柄を拘束する。全武装の安全装置を解除。最大限戦闘を避けてもらうが、戦闘回避が不可能な場合は各自の判断で戦闘に突入して構わない。ただし、作戦参加艦全艦必ず生きて帰還せよ。繰り返す、作戦参加艦は必ず生きて帰還せよ。……下村准将、てめえは俺が直接迎えに行く。首でも洗って待ってろ」

《無茶を言ってくる司令官だ》

半ばあきれたような声を出す天龍だが、その眼は爛々と輝いた。

「いくぞ、第五五一水雷戦隊、状況開始」

昼下がりのアプラ軍港、絶好の演習日和に命がけのチキンレースが始まった。

第9話「演習・接敵」

37ノット——艦隊が持てる最高速で海上を滑っていく。

「響の方は大丈夫なのか？」

「ええ、司令官に預けてきたわ」

最後尾に追いついた如月がそういうと隣の雷が溜息をついた。

「よかった……」

「それはいいとして、どうする旗艦様！ このまま神風特攻するか？」

「それなんだけど司令官から伝聞預かってるわ」

如月がそういつて艦隊の中央に移動して言われたことをそのまま伝えていく。

「……要は時間を稼げればこちらの勝ちってことか」

「そうなるわ。司令官の方は睦月がついてるし大丈夫よ」

如月の声を聴いて電が口を開いた。

「相手艦隊が攻撃してこなければそのまま海域を通過してグアム司令部に向かい、司令官さんと合流します。攻撃が来た場合は私と暁お姉ちゃんで航空隊を攪乱するのでその間に天龍さんと龍田さんが先行して突入、陣形を崩して乱戦に持ち込んでくださいー！」

先頭で主機をほぼ全力で回し続けながら電が声を張り上げる。無線はあえて使わない。相手の司令官に盗聴されている可能性が高いからだ。データリンクも周波数変更器スクランブラーを通して逆探されないようにしているが、こちらもすぐに「あてにならなくなる」。

「攻撃の意思を見せない相手への攻撃は禁止、相手のバイタルエリアへの攻撃はできる限り避けてください。……っ！ 12時方向、高速飛翔体数1ー！」

電の声に艦隊の全員が顔を上げると、薄い線が彼方を飛ぶのが見える。それを見た暁が声を張る。

「狙いはおそらく天龍さんよ！ 左翼側散開！」

天龍が左に跳ぶ。その数瞬あと、あのまま進んでいれば天龍がいたであろう位置に巨大な水柱が立つ。水しぶきを浴びながら天龍が笑う。

「さすが暁、目がいいな！」

「当然よっ！ 伊達にネームシップはやってないわ」

胸を張る暁の横で悔しそうに顔をしかめて空を睨んだのは雷だ。

「本当に撃ってきたわね……！」

「仕方ないのです……、あんな脅し方をされれば、そして艦隊に仲間がいるならそうするしかないのです……！」

電の声に最後尾でしんがりを務める如月がうつむいた。天龍がそれを聞いて歯を食いしばる。

「……いくぞ。こんなふざけた戦いなんてさっさと終わらせるぞ。そしてホテルで打ち上げパーティだ」

「はい……電より全艦へ、相手艦隊からの攻撃を確認、攻撃の意思ありと判断し、これより相手艦隊の武装解除を強行します！」

「了解！」

盛大な水しぶきとともに艦隊は前へ向かう。

「日向っ！ なんで撃ったの!?!」

第一主砲からまだ発射煙をくゆらせる日向に伊勢がつかみかかった。
た。

「あの子たちならこれくらいかわすさ」

「かわすかわさないの問題じゃないでしょう!?! なんで仲間相手に実弾撃ってるのよ！ 向ける相手が違うじゃない！」

伊勢に胸倉をつかまれて吊るされても、日向は表情を変えなかった。それを見た筑摩が慌てて伊勢を止めにかかった。

「そう。向ける相手が違う。でもね、伊勢。だからってここで攻撃しなくてほっこつちが死ぬんだ」。伊勢はわかっているのか？」

「あなたこそわかって言ってるの!?! それであなたは同族殺しをする

つもり!？」

「わかってるさ。自分でも嫌になるがな」

電探の情報だと真正面12時方向から足を止めることなく6隻が突っ込んでくる。どうやら初撃はあたららずに過ぎたらしい。足止めにもなっていない。

「伊勢、あの子たちが突っ込んでくる」

「だからなに!? 味方の水雷戦隊相手に実弾で弾幕でも張れって!? 冗談じゃないっ!」

「伊勢さん、落ち着いてください!」

「止めないで筑摩! 日向は私に味方を殺せって言ってるんだ!」

今にも殴り掛からんという気迫を込めて伊勢は妹艦を睨む。日向の瞳は表情が読めないところまで沈み込んでいた。

「ならここであの子たちを通して全員で解体処置を受けるか?」

「でも……!」

「でももなにもない。ここで撃たずにこの艦隊の誰かが解体されるくらいなら、私はあの子たちを撃つ」

話は終わりだとも言いたいのか日向は伊勢の手を振りほどいて艦隊と向き合う。

「こちら下村艦隊隷下第531戦隊2番艦、BB-ISO2日向。第551水雷戦隊、聞こえているか?」

《こちらは第551水雷戦隊旗艦、DD-AK04電です。日向さん、よく聞こえています》

無線の奥から固い声が返ってきた。どこか甘い、思春期前独特の少女の声。

「電、悪いことは言わない、転進して引き返せ。この戦いは無益だ。そして確認したところこちらの艦隊は全艦実弾を持たされている。……言っていることがわからないわけがあるまい。引き返せ」

伊勢の鋭い視線を背中に感じながら無線の反応を待つ。筑摩が不安そうにあたりを見回していた。

「大丈夫じゃ、筑摩。日向も伊勢も道理のわからぬ馬鹿ではないし、551の旗艦もきつと話のわかるやつじゃ。落とすどころにちやんと

落ち着くぞ?」

「ですが……」

「それでもうまくいかなかったときは吾輩たちでサポートすればよい。そう案じなくてもよいぞ」

利根がそういうと筑摩は不安を完全にはぬぐえなかったようだが領いた。無線が改めてつながったのはそのころだった。

《日向さん。忠告ありがとうございます。でも、私たちも引き返すわけにはいかないのです。……今、グアム在留の海軍警邏隊と私の司令官が動いています。……投降してくれませんか?》

「それができればいいのかもしれないが、そういうわけにはいかなくてな……仕方がない。痛い思いをしたくなければ精々逃げ回れ」

日向がそういつて主砲を動かした。

「蒼龍、飛龍。航空隊を動かせるか?」

「動かせるけど……」

「あの子たちの対空装備を潰すんだ。できるか?」

日向の言葉に、戸惑いながらも頷く蒼龍。飛龍はもう矢を右手に握んでいた。

「ちよつと飛龍もなにしてるのよ! 蒼龍も日向の言うこと聞かなくてもいい! 旗艦は私なの!」

「伊勢、みんな」

飛龍は声だけかけて、耳を軽くたたいて人差し指を下へ、無線封鎖を意味するハンドサインだ。

「伊勢、旗艦としてデータリンクしてたからわかっているとと思うけど……あの子たちは蒼龍の九九艦爆を蹴散らして、私の天山の雷撃もほぼすべてかわして見せたのよ。私たち二航戦の航空隊をかわして見せたの。その相手がそうやわな訳がない」

「……」

伊勢は黙り込む。飛龍は軽く笑った。

「さっきの日向の砲撃だって、最小限の動きで安全に回避して見せた。元々軽巡も駆逐艦もフトワークが軽くて攻撃はあてにくい、練度の高い駆逐艦娘は、こつちが本気で殺そうとしない限り沈められない

相手”だよ、伊勢。いつものあなたなら落ち着けばわかるはず。あなたは旗艦なんだから誰よりも冷静じゃなきゃ、ね?」

クスリと笑って利根が前に出る。

「それに日向も本気で相手を沈めようとは思ってらんじゃろう?」

そういつて日向の肩をたたくと口だけでにやりと笑った。

「さあね。……利根、お前カタパルトは大丈夫なのか?」

「それがのう……どうも不調じゃ。観測機を上げての着弾観測はちと厳しい」

「そうか、なら適当に弾幕でも張るとしよう」

お互いに武装を上げた時に相手の艦隊からなにかがうちあがった。

「高速飛翔体……軽巡の砲弾か?」

「それにしても距離が遠すぎる気が……」

筑摩の声がする頃には弾道は頂点を迎え、そこで弾がはじけた。

「ロサ弾か……。でもあそこに偵察機なんて飛ばしてたかのう……筑摩?」

「私も飛ばしてないですよ。飛龍さんたちは?」

「発艦済みのは直掩隊の方にまとめてるしあんなところ……!?!」

飛龍の声が途絶える共に電探に大量の影が映る。同時に無線にもノイズが入り、司令部との情報リンクも不安定になる。

「まさか……あれってウインドウ弾!?!」

「電探断絶エリア拡大中。これって精密射撃は難しくない!?!」

「お膳立てはそろったのう……」

満足げに笑った利根が振り向いた。

「向こうもやる気なようじゃ。どうする、伊勢?」

「……あーもう、どうなっても知らないからね! 伊勢より全艦、対艦戦闘用意! 目標、第551水雷戦隊!」

「了解、撃ち方、はじめ」

「第二射来るわ！」

遠くに敵艦隊を認めたころ、その艦隊がわずかに光った。太陽光の反射ではない、オレンジ色の閃光、発射炎だ。

「進路を維持、このまま突っ込んででも至近・直撃弾はゼロよ。結構あてずっぽうね……」

弾道を見極めた暁が声を張る。それから間隔があいて左右にばらけるように水柱が立つ。

「とはいっても、さすが第一作戦群主力撃部隊ねー、電探攪乱してもしっかり挟叉してくるわ」

龍田が感心したようにさういう。もう一度発砲炎。

「あれ艦隊ど真ん中に落ちるわよっ！」

「各艦回避してください！」

暁の焦ったような声に電が反射的に指示を出す。そこからは早かった。先頭をひく電と暁が主機を最大船速に叩き込んで海面を蹴った。瞬間的に加速した体が水切り石のように海面を跳ねて斜め前方へと進路を変える。それに追従するように天龍龍田が続く。最後尾の雷と如月は主機を反転し予備の鎖を投錨して急減速に踏み切った。瞬く間に艦隊が二人一組の作戦隊に分断され、着弾予測地点にぼつかりと隙間がのぞいた。そこに正確無比に叩き込まれた弾丸が海面を泡立てた。

それを見届けた電が声を張り上げる。

「こちら射程距離に入ります！ 攻撃意思のある艦から優先的に撃破してください！」

素晴らしいながら前方に向かって電が噴進砲を作動。ロサ弾と電探妨害用のウィンドウ弾を大量に吐き出す。ここなら相手艦隊の近くでロサ弾が起爆する。三式弾までとはいかないがこの弾なら相手をまんべんなく攻撃することができる。わずかでも発砲が遅れば、軽巡と駆逐艦の間合いに飛び込める！

「二番槍は私が行きます！ 右舷側空母機動艦隊に突撃します！」

「龍田、雷！ 電のバックアップに入れ！ 暁、如月は俺と一緒に左舷側の戦艦を叩く！」

天龍が叫んで速度を上げる。艦隊は二分され3隻ごとに分かれて進路をわずかに変える。自らが撒いたロサ弾の黄燐が放つ光を目標して電が飛び込んでいく。敵艦隊の直掩隊の矛先が向く。

できれば戦いたくない。でもここで戦うことがこんな嫌な状況をたち切ることになるのなら。

「電の本気を見るのです！」

特III型武装ユニットがうなりを上げる。派手に水しぶきを上げて最大船速で前へ。砲弾の雨のなか敵艦隊に突っ込んだ。

「お主、なかなかやるのう。肝も据わっておるし頭もまわる」

「ありがとうございます。でもできれば抵抗せずに武装を解除してほしいのです」

そういうと明後日の方向に砲弾を打ち上げる利根。それが返事だというように電の方向に副砲を向ける。

「……ごめんなさい、利根さん」

そう呟いてから噴進砲を改めて起動させる、発射は一発のみだが、その一発が利根めがけて発射され、利根の鼻先でそれがはじけた。

「熱っ……!!？」

利根がとつさに顔を庇う。同時に煙たいような感覚に眉をしかめた。ロサ弾だったとしたら今頃黄燐まみれで全身火だるまになっているはずだが、服が発火してないところをみるとどうやら違うようだ。

「……ウインドウ弾！」

大量のアルミ箔の塊が吹き付けられ、鋭い破片がチクチクと皮膚を指す。今下手に目を開けると危険だ。細かいアルミが目に入れば大

変なことになる。

「ごめんなさい!」

「のわっ!」

そのうちに足が払われて背中を海面に打ち付ける。

「利根姉さん!」

「あなたの相手は私よ!」

筑摩と利根の間に割り込むように暁が飛び込んだ。右腕の主砲が振るわれて、模擬主砲弾が高速で打ち出される。筑摩はバックステップを踏むように何とかわすと、逃がすまいと距離を詰めてくる暁によつて利根から引き離される。

「ふ……なかなかいいチームじゃのう、電よ」

「自慢のお姉ちゃんたちなのです。……先を少し急ぐので。ごめんなさい」

横から軽いエンジンの音とともに何か離れていく気配。その方向には……二航戦がいる。それを感じているとの割とほんとした声が利根にかけられた。

「ごめんなさいねー、こんなことにつき合わせちゃって」

「その声は龍田じゃな? 謝らないといけないのはこちらじゃし、気にしないでくりやれ?」

「そうねー。でもとりあえず……」

首筋に冷たいものを感じる。目開けることはかなわない。

「安全装置をかけてすべての砲弾と魚雷を投棄してもらえるかしら!」

「……はあ、念には念を入れるのお」

「信頼してないわけじゃないんだけど、万が一天龍ちゃんや駆逐艦の子たちを攻撃されると私もあなたを本気で潰しにかからなくちゃいけないから、それは避けたいのよ」

「なるほどのお……これでいいかの?」

「はい、結構です。お疲れ様でした」

首筋から圧力が消える。そうしたところにやっと目を開けても大丈夫かと思えるほどになる。

「まったく……大した部隊じゃな、月刀中佐よ。彼の部隊にこうも引き倒されるのは2度目じゃのう……」

海面に大の字に浮いたまま利根は笑う。

「提督は普段はあんなこと言うはずがないのじゃが……月刀中佐、どうか」

——提督を止めてくれ。

利根はそう願ひ、溜息をついた。

第10話「演習・混戦」

時間は少し遡る。

「響、生きてるな?」

「死んでるように見えるかい? 司令官」

「如月、睦月、手伝ってくれ」

三人がかりで埠頭の上にボロボロの響を引き上げる。

「司令官、すまない。すこしぬかった……」

「今はしゃべるな。後でしつかり聞いてやる」

荒い息の合間にそう答えた響は水から上がると同時に地面にへたり込んだ。頭を打たないように航暉が彼女を抱きとめるとそのまま中継器から延びるQRSプラグを彼女のうなじに差し込んだ。

「うう……」

「少し耐えてくれよ……指揮官権限でDD-AK02に緊急アクセス。システム制御を響から月刀中佐へ移行。コード“エコー37”。
艦装を切り離せ」

「あぐ……っ!」

声に出しながら彼女のシステムに潜り込み、艦装を強制的に停止させる。響のうめき声とともに壊れかけの艦装が外れ、コンクリートの上にならんと転がった。

水上用自立駆動兵装——艦娘は艦装を装備して初めてその力を発揮できる。艦装を文字通り体の一部として動かし、彼女たちは感覚的に敵に攻撃し、攻撃をいなすこともできる。だがその代償として、艦装の破損が身体感覚としてフィードバックされる。艦装の破損が体の痛みとして現れるのである。

「……少し痛いぞ」

QRSプラグをつないだままで航暉は制服の上着を脱いだ。QRプラグからは響の状態が航暉の脳に直接送り込まれる。圧が低くなってきているが、まだ致命的なほどじゃない。そんなことを考えながら制服の裏地の布を無理矢理剥がして細い布きれを作る。

黒いソックスに太ももまで包まれた足が血でどす黒い赤に染まっ

ていた。魚雷の破片で切ったのか右のふくらはぎに大きな傷がついているのだ。支給品の白いハンカチを傷口に当ててその上から布きれできつく縛り上げる。響は小さく呻く。無意識のうちに握ったのだろう、航暉のシャツの胸のところのシャツがしわになり、わずかに爪が食い込んだ。

「よし、よく耐えた。今から医務室に向かうからそれまでもう少しの辛抱だ」

QRSプラグを引き抜いてから如月の方を見やる。

「如月は電たちに合流してくれるか？」

そういいながらプラグを如月に渡す。それを受け取った如月はそのプラグを自分のうなじに差し、データを受け取るとすぐに返した。

「……できるか？」

「やらなきゃいけないでしょう？」

「……こりや終わったらホテルの予約とらなければならぬかな？」

「ふふっ。期待してますね？」

そういつて如月はスカートをつまんで一礼すると、くるりと背中を向けて海へと飛び出していった。航暉はそれを見送りつつ目を閉じて痛みに耐えている少女を抱き上げた。脂汗が浮かび、熱い。

「中佐！ 乗ってください！」

埠頭の付け根に白いバンが止まる。でかかたとUNと大書された国連軍公用車だ。聞いたことのある声に運転席を見ると、航空基地から軍港までの案内してくれたあの伍長だった。

睦月がスライドドアを開けて最後尾の座席に響を寝かせる。その隣に睦月も座らせて航暉は助手席に飛び乗った。

「状況は無線で聞いてます。司令部に直行ですか？」

「頼みます」

車が急発進する。舗装された道にタイヤマークを残すような勢いで突っ込むと速度計が三桁を示す。

「警邏隊用の自動拳銃でよければダッシュボードに入ってます」

ダッシュボードからベレッタ90-Twoを取り出すと、マガジンを引き抜き、弾を確認、再度マガジンを戻してスライドを引く。小気

味よい金属音とともに弾が薬室に送り込まれる。腰の後ろに手を回し、もう一丁拳銃を取り出した。

「M93R……ですネ？」

頷いてから初弾を送り込んでセーフティをかける。薄い板のようなフォアグリップが展開することを確認し、もう一度ホルスターに戻した。

「古い銃だが、なかなか使い勝手がいいので手放せなくてな……始まったか」

電からの暗号スク립トが中継器に叩き込まれた。「551st T S q / E N G A G E」——交戦開始のスク립トだ。それに合わせて車載無線機のチャンネルを開く。

「下村准将、投降する気になりましたか？ 高い火力でものを言わせれば撤退させるとでも思いましたか？」

《強がっていられるのも今のうちだぞ、月刀君》

「その言葉そっくりそのまま返します」

無線の向こうに下村准将とは違う声が混じっている。若い声、男の若い声だ。

《……准将！これ以上の戦闘は艦娘にも負担が……！》

「……返事をしてあげなくてもいいので？」

苦笑いしつつそういった。

《返事、ねえ……》

退屈そうに無線の奥が笑う。

《返事は、こんなもので十分だよ》

その直後、無線の奥でクラッカーが弾けるような音が3回、大きく鳴り響いた。

「えっ？ いやっ……」

睦月の声が遠くに聞こえる。それほどの絶叫が無線の向こうから彼女の声をかき消したのだ。

「……同僚を撃ちやがった！」

隣で運転している伍長が呻いた。煽られるようにアクセルがべた踏みまで踏み込まれ、速度が上がる。叫び声はまだ続いているということは急所には当ててないのだろう。聞くに耐えられれず無線のボリュウムを落とす。

「司令官……何があつた？」

額に脂汗を浮かべる響が上体を起こしていた。それを慌てて支える睦月。

「なに、オデッサの階段のコサック兵を討ち取りにいくところさ」

「……劇場に……砲弾でも撃ち込む気かい？」

弱々しく笑った響はルームミラー越しに航暉の目を見つめた。暗く沈み込んだ目が響に向いた。

「そりゃあいい、同志デカブリストよ、ともに銃を取ろう」

「……笑えないよ、司令官」

「笑って済む問題でもないよ、響。こつから先は大人の世界だ、お前は傷を悪化させないことに専念してくれ。睦月」

「は、はい！」

「響を医務室へ連れて行ってやれ。そのあとは響と一緒に待機だ。ヤバくなったら緊急スク립トで指示を出すから睦月はリンク切るなよ」

車が司令部棟の前に飛び込んだ。

「伍長は一緒に来てくれるか？」

「中佐の命令なら、喜んで」

司令部の正面玄関前でドリフトをするように車体を振り回し、玄関の前にピタリと止まる。門兵が驚いた顔でこちらを見ていた。

「国連海軍極東方面隊中部太平洋第二作戦群、第551水雷戦隊の月刀中佐だ。下村准将に緊急の用事がある。通るぞ。あとその君、手伝ってくれ」

門兵が慌てて敬礼をするのを遮って一人の門兵を呼んで響を担がせた。

「この子を医務室に連れて行ってあげてくれ。月刀中佐から命令されたといえは伝わるはずだ。詳しいことはこの睦月特務官が知っている」

る。頼んだよ」

特務官と役職つきで呼ばれた睦月を見て門兵は合点が行ったのだろう。まだ幼いという表現が似合う少女に特務官という厳めしい肩書が付くとしたら、それは水上用自立駆動兵装の少女に他ならないのだから。そして、なにか間違いが起こったら文字通り首が飛びかねない問題を押し付けられたことも門兵にはわかった。

「伍長、行くぞ」

「了解、中佐殿」

「あの子たち何発ロサ弾持ってるのよ！ 航空支援も何もできないじゃない！」

蒼龍の泣き言のような叫びが風に乗る。今25機目の九九艦爆がロサ弾で蹴散らされたところだ。墜落は何とか免れたが爆弾の照準が狂い、明後日の方向に落下する。海面に突っ込んだ衝撃で起爆した爆弾が盛大に水柱を立てた。その勢いすら利用するかのようには駆逐艦娘が一人、空母の方に突っ込んでくる。今度はウィンドウ弾が飛び出して、空中できらきらと太陽光を乱反射させた。

「飛龍！ 取り舵！」

蒼龍が声を張り上げる。正面から突っ込んでくる仮想敵役艦隊の旗艦が飛龍の方に向かって舵を切ったからだ。蒼龍もそこから距離をとるように面舵を切る。

「私を忘れてもらっちゃ困るわよっ！」

面舵を切った鼻先を駆逐艦娘が横ぎった。飛龍に向かっていった影とよく似た姿。

「いなづま……」

「雷よっ！ 電じゃないわ！ 似てるからって間違わないでよ」

素晴らしいながら雷はくるりと振り向くようにしてにやりと笑った。据え付けられた10センチ高角砲が閃いた。

「……っ！」

駆逐艦の小径砲の模擬弾でも至近距離から狙い撃ちされれば相当に痛い。とつさに飛行甲板を楯のように構えて、体への被弾を避ける。

「あぁっ！　なんでまた飛行甲板に被弾なのよ！」

「蒼龍さんが楯にしたからでしょ……」

あきれた表情で素晴らしいながらも対空機銃も駆使して攻撃を仕掛ける雷。蒼龍が慌てて呼び戻した艦爆隊を認めるとさらに距離を詰めてくる。

「風読んでる？　この距離で爆撃は自殺行為よねっ！」

「……っ！」

急降下に入っていた爆撃隊を慌てて散らし、それから気が付く。……雷は自分よりも風下側にいる。風で流されても私には当たらなかったのでは？

「あ！　だましたわね！」

「へっへーん。強いだけじゃだめだと思うの、ちゃんと頭をつかわなきゃ、ね！」

蒼龍は全速で前に出る。駆逐艦相手に逃げ切れとは思えないが、それでも距離を取らなければ攻撃ができないのだ。そもそも敵艦に肉薄された時点で空母にとっては致命的なのだ。すこしでも距離をとらなければ……

「……あぐっ!？」

いきなり足元をすくわれたようによろける。機関が動かない。前に進めない……??

「っーかまーえたー！」

雷が鎖を手に腰を落としていた。さながら綱引きをしているようにも見えるがその鎖は蒼龍の足元まで伸びている。

「えっ……!？」

「距離を取ろうとしてもスクリーンが回らないんじゃ話にならないわ

よね?」

「まさか、最初に横ぎった時にはもう」

「うん。投锚してたわ。見事に突っ込んでくれてありがとう。無理に動けば機関が内側からやられる。そしてこの距離は私たち駆逐艦の距離よ」

鎖を手繰り寄せるようにして距離を詰める雷。

「え、や、ちよ!」

「大丈夫。模擬弾だし!」

「そういう問題じゃ……!」

「いつきまつすよー!」

「話を聞いて! お願い!」

鎖が絡んで回避なんのでできないが、それでも何とか身をよじってかわそうとするが、あまり効果がないレベルまで接近されている。駆逐艦の主砲とはいえ、何発も同じ場所にくれば沈みかねないし、模擬弾を使っても至近距離では撃ちだした運動エネルギー自体が暴力的だ。

やばい、かなりやばい。

蒼龍が顔面蒼白になるのを楽しむように鎖を手繰り寄せて迫ってくる雷。そしてほぼゼロ距離で主砲を向け――

もにゅ。

「はあ……何食べたらこんなに大きくなるのかしら」

ゼロ距離で蒼龍の胸を揉みしだいた。

「へ? や、やめて! 九九艦爆がはみ出ちやうからっ!」

「ここか、ここがええんか」

「そんなオヤジくさい反応されてもっ!」

ほぼ自分の顔の高さにある二つの膨らみをまさぐる。次第に緑の上着がはだけていくが、そんなのお構いなしに柔らかさを堪能していく。

「ちよ! 蒼龍!」

それを見て顔を赤くしたのは飛龍である。彼女は電相手に追いかけてこの最中だ。飛龍にとつてはこの敵味方入り乱れての乱戦で雷撃を使うのは自殺行為だし、艦爆隊はロサ弾で近づくことすら許されなかったのである。結果として逃げる飛龍と追う電という構図ができていた。

いたって真剣に追いかけて行うつもりだったが、僚艦が予想外の攻撃を受けているのを見て、ウブな反応をしてしまったことがあだとなった。

「ごめんなさいなのです！」

「へ？」

飛龍が後ろを振り返ると、何かを大きく振りかぶってジャンプしている電。逆光で何を振りかざしているのかはわからないが、ヤバいのは肌で理解できた。

何を持っているかはわかった。魚雷だ。水色の模擬弾頭ダミーを搭載した魚雷だ。それに電の体重と艤装の重さを乗せてフルスイングしてくる。ご丁寧にジャンプで稼いだ落下エネルギーも追加して。

「――」

過たず飛行甲板を捉えて、それをへしやげさせながら殴り飛ばす。飛行甲板がエネルギーを幾分か吸収してくれたとはいえほとんどのエネルギーは甲板を通過してその下にある飛龍自身に伝達される。

ものの見事に吹っ飛ばされた飛龍は目を回して海面に倒れこんでいた。浮力発生用の力場が最大になっているようなので沈みはしないだろう。

「はうう……腕がしびれるのです」

青い模擬弾頭が見事にへしやげていた。これは発射管に戻すこともできないさそうなのでさっさと海中投棄する。

「飛龍さーん。大丈夫ですか？」

「うう……多聞丸に怒られるじゃないの」

「……寝ぼけてます？」

ゆさゆさと体をゆするとそんなことを言う飛龍。命には別条なさそうなので放っておくようにした。電があたりを見回すと鎖をさら

に絡めながら空母の豊満な胸を揉みしだく姉がいた。

「わかった！ わかったからっ！ 降参するから！ まさぐるのやめてえー！」

「そう。ならいいわ」

「……雷お姉ちゃん、さすがにほかの部隊の人の胸をこう……するのはどうかと思うのです」

「あら電、砲弾を撃たなくても無力化できるからアリだと思わない？」

「もう勘弁してよー。華の二航戦がこんなふざけた轟沈理由刻むわけにはいかないのよ……」

「とりあえず、艦載機も全部落ちたみたいなので、問題なしなのです？」

「そうね、なら如月たちの方を片づけてさっさとしれーかんにほめてもらいましょっ？」

雷はにつこり笑って鎖を捨てるとそのまま離れていく。電もそれについていく。……もしかして、全戦闘が終わるまで、ずっとこのまんま？

「え？ この鎖は……？」

「あとで外してあげるわよ？」

雷が手を振って離れていく。

「あ、あははは……」

乾いた笑みを浮かべる以外やることなくなり、蒼龍は盛大に溜息をついた。

二航戦が妙なことになっているのに気が付いたのは日向だ。

「飛龍、蒼龍……！」

「よう日向、目の前の敵から目を離せるなんて余裕じゃねえか」

その視線を遮るように日向よりも小柄な影が割り込んだ。

「天龍……！」

「抜けよ、日向。お前の腰に下げてるその刀は飾りか？」

ゆっくりと鞘から紅の刃を引き抜いた天龍はその切っ先をぴたりと日向に合わせて笑う。

「……この距離は得意じゃないのだが」

その直後、日向の姿が掻き消える。強烈な踏み込み、居合の要領で切り上げるように抜かれた刃が天龍の首筋を狙う。

「うおっ!？」

右手を峰に滑らせ何とかその斬撃を受け止める。刀を傾け、日向の刃をそらすと鎬が削られ火花が散る。天龍はその反動を殺さずに左側に回り込むように海面を蹴り、距離を稼いだ。あのまま競り合いに持ち込むのはまずい。まともな力比べをすると天龍に勝ち目はないのだ。

「……戦艦とは思えない足の速さだこと」

「そうなんでも使えないのだがな、これは」

直後に日向の主砲が閃いた。天龍の周りに水柱を立てるが、それかわすようにして天龍は改めて距離を詰めていく。

(遠距離なら砲撃の嵐、近づいても斬撃が来る……ちびどもをこっちに回さずに正解だったぜ)

天龍が刀を振りかぶる、その動きの合間に間合いを一步分盗み、刀が届く距離に日向を捉えた。ためらいを消して、振り下ろす。狙うは胴打——担ぎ胴だ。

「……ハッ！」

相手がかわすのは織り込み済み。さらにもう一步深く踏み込む。振り下ろす動きで締められた全身のバネを解放するように海面を蹴り、前へ。日向の目が見開かれるのを眺めつつ、その切っ先はのど元めがけて迷いなく突き出された。

「なかなか無茶な太刀筋だ、だが……!？」

後ろに飛び退くようにして何とか距離をとった日向がもう一度驚愕で目を見開いた。天龍とよく似た色の影がすぐ脇に立っている

……？

「ふふふ……死にたい艦はどこかしら〜♪」

一度ついた勢いを殺しにくい戦艦艀装の特徴、飛び退いた直後で踏ん張ることなどできないタイミング、右手で持った刀では有効打が打てない左側という立ち位置。そして手元の刀よりも間合いの広い薙刀という武装。

(まさか……最初からこのつもりで！)

赤い刃が煌めいて、日向の艀装目がけて振り落される。体と艀装の接続部に叩きつけられた刃があっさりと武装を切り落とした。痛み息が詰まる。切り落とされた武装が足元で水しぶきを立てた。

「ごめんなさいね〜。でも味方とはいえ天龍ちゃんに実弾を撃った相手を野放しにすることなんてできないのよー」

日向が痛みにも腰を折るようになって耐えていると、頭上から声がかかる。天使の輪のようなものを浮かべたシルエット。逆光で表情は読めないが、おそらく笑っているだろう。

「……あなたが左手につけている主砲を撃つ前に私はあなたの首をおとせるわ。投降してくれないかしら〜？」

「……まったく。水雷戦隊相手だと油断したな」

日向がそういうと龍田も笑う。

「天龍ちゃんたちは、あの“ウエークの生き残りですよー？ 忘れませんでしたか？」

「……そうやわじゃないか」

「わかってくれて何よりです。そろそろ暁ちゃんたちのサポートまわらないといけなかなあ。あなたは戦線を離脱してくださいねー」

「そうするよ。こんな戦場もうこりこりだ」

日向がそういって投降する旨のスク립トを送ると……司令部からの返信がなかった。眉をしかめる。

「まさか……」

銃声が三つ。配電盤のカバーが蝶番を吹き飛ばされたことで歪んで地面に落ちた。

「——ふっ」

息について火薬のにおいを放つベレッタを右手に保持したまま航暉は配電盤のカバーを蹴り飛ばして配電盤をのぞき込む。そこにあるジャックに首筋から伸びるQRSプラグを差し込んだ。

「中佐殿、ほんとにうまくいくんですか？」

「……司令部のドアの解除コード自体が書き換えられてるんだ。うまくいく保証はないが、これしかまともに突入する手段がない」

正規の手段で下村准将がいる戦術指揮所のドアを開けようとしたところ、そのコマンドが弾き返されたのは約10分前。戦術指揮所の電源や管理システムは外部とは別系統のスタンドアロン型、ドアの管理も戦術指揮所の内部システムに組み込まれている。

「だからって、CTCとのラインに割り込んでグアムの戦術コンピュータにアクセスして無理やりドアの解放なんて……」

「そのための中佐権限だろう？ ……CTCから作戦許可も取り付けたんだ。やるしかない」

中佐かつ、水上用自立駆動兵装運用士官である航暉ならばある程度の戦術情報にはアクセスできる。そこから戦術コンピュータにアクセスするのはあまり難易度も高くない。そもそも、今回は状況が状況だ。撃たれた士官の救出という大義名分も得て、CTCから強行突破を許可するという趣旨の許可文章も取り付けた。

「潜るぞ。あまり声をかけないでほしい」

意識がネットの中に吸い込まれていく。CTCの情報ラインに乗る。CTCの支援として送られた大量のスラムデータの濁流に乗りグアム戦術コンピュータのファイアウォールを中佐としての個人I

Dでかわすとあっさりと内部に侵入できた。

(……ノイズが多い?)

ドアの解除などの管理コードは比較的重要度の低いエリアに区分けされている。あっさりとそこに取り付くとパスコードの解除にかかる。

「伍長」

「はい」

「間もなくドアが開くが一瞬内外ともに電源が落ちる。驚くなよ」

パスコードの解除が進む中、航暉はベレッタの弾倉を抜いてスライドを解放した。まだ弾が残っている弾倉を腰にしまい、真新しい弾倉に置き換える。フラッシュライトを左手に持ち

「パスコードは『下村艦隊チョーサイコー』……まったくもってセンスがないな」

スライドロックが解除されベレッタが硬質な音を立てると同時、ドアが空気の漏れる音とともにスライドして開いた。QRSプラグを引き抜くと建物の電源が落ち周囲が闇に包まれる。フラッシュライトを点滅させながら司令部に踏み込んだ。

フラッシュライトに反射する頭皮。でっぷりと体格のいい男が驚いたように突入してきた航暉を見る。間違いなく下村准将だ。相手に一言も言わせないまま体当たりを決めた航暉はそのまま下村准将を目の前の管制卓に押さえつけた。

「ぐえっ」

文字通り蛙の潰れるような声がして管制卓に叩きつけられる下村准将。バーチヨークの変則版というべきか、左腕で後ろから首筋を抑え、身動きを封じた航暉は准将の首筋から伸びるコードを無造作に引き抜いた。これで下村艦隊は准将の指揮下から外れる。その衝撃に気を失ったのか白目をむいて崩れ落ちる下村准将。脈を測るとしっかり脈は刻んでいたので死んだわけではなさそうだ。

赤い非常用電源に切り替わり、周囲が照らされる。

「伍長！ 彼は？」

「息はしてませんが意識なし、出血性ショックの可能性大」

「すぐに医療隊に引き渡してください。ここは抑えます」

「了解しました、中佐」

管制卓の端にある音声入力用のマイクの電源を入れる。

「月刀中佐よりCTC、下村准将を拘束。状況を終了する」

「CTCより月刀中佐、了解した」

「月刀中佐よりグアム戦術コンピュータ、電腦汚染の可能性あり、全システムのスキャンを実施せよ」

「GTCより月刀中佐、全システムスキャンを開始する」

矢継ぎ早に指示を出した航暉はマイクのセレクタを操作し、演習艦隊用の通信につなぐ。

「グアム第一演習レンジで交戦中の全艦に次ぐ、ただちに全戦闘を停止せよ。これ以上の戦闘はいかなる事情があっても許可しない。繰り返す、ただちに全戦闘を停止せよ」

とりあえずそれだけに叩き込んで改めて無線を開く。

「こちら月刀中佐、各艦隊旗艦は応答せよ」

『こちら551TSq旗艦、電です。感度良好なのです』

『中部太平洋艦隊第一作戦群旗艦、伊勢！ 月刀中佐、感度良好です！』

「各艦隊状況報告」

『551TSq、響が大破、電、暁、如月が小破、以上です』

『こっちは日向が大破、残りは武装解除されちゃってます』

「……日向が大破？ 大破判定じゃなくてか？」

『ちよつとやりすぎたかしら？』

あくびれもせずにそういう龍田に頭を抱える航暉。

「やりすぎだ、龍田。……下村准将が電腦汚染されている可能性が出てきた。下村准将とリンクした艦はただちに帰投せよ。各艦に電腦汚染がないことが確認されるまで出撃を禁ずる。第551水雷戦隊は下村艦隊をそのまま護衛しながらアプラ港に帰港せよ……睦月、聞いてるな？ そっちはどうなった」

『はい！ こちら睦月、響ちゃんは今治療中ですけど、命に別状はないそうです！』

「そうか、ならよかった。……全艦、気を付けて帰ってこい」
『了解!』

そういつて無線を切る。非常用電源の下で伸びている下村准将を見下ろして溜息をついた。

「……仲間同士で殺し合う戦場なんかもうこりこりなんだよ、なんてもの見せやがる、准将」

そう吐き捨てた航暉は天井を仰いだ、演習開始からようやく1時間が経とうとしていたころだった。

第11話「休息・水着」

「いやっふおおおおおおおおおおおおお！」

「ちよ、雷！ 飛び込んだら駄目だって！」

目の前で水柱が一つ。それを咎める声があるがわずかに遅かった。

「……ぷはっ！ きもちーわよ！ 暁姉も早くおいで！」

「も〜！」

「すまない、司令官、妹を抑えきれなかった……」

「元気でいいんじゃないか？ ほかのお客さんがいなかったから大目に見よう」

「司令官さんは甘いのです……」

「なら電ちゃんご注意くださいばいんじやないかにや〜ん？」

みんながみんな好き勝手にしゃべるここはプールサイド、恰好はもちろんプールにおける正装、水着である。

「……本当にこれとは思ってなかったぜ」

「でも勝ったらって約束だったし、勝っちゃったから仕方ないわよねえ？」

「まあ、ね……」

決して少くない額が財布から消えた航暉は笑っているのかなんなのかわからないまま、あいまいな表情をせざるをえなかった。

なんで航暉たちがプールなんかに行くことができたのか。それにはもちろん理由がある。

演習のはずだった戦闘——後には下村艦隊電腦汚染事件とか下

村艦隊演習緊急戦闘とか呼び名が付いた、その戦闘のせいで司令部が大混乱に陥ったからである。グアム駐留隊のトップが電腦麻薬を使用していたことが発覚し、彼がアクセスしていた情報システムを一時凍結、システム正常化に半日。その際に当直士官が使い物にならずに航暉が指揮を執ってシステム汚染を最小限に食い止めたのだが、越権行為だとして警邏隊の尋問を受けること1日。下村准将の部屋から電腦麻薬が飛び出して来たり、当時の状況がわかってきて、致し方ない行為だったと認められ、何とか解放されたときにはもうへ口へ口になつていた。しかし休む間もなく、今度は軍医からの招集がかかった。作戦指揮所のドアを開ける際に汚染された戦術コンピュータにアクセスしているため、電腦活性のチェックをしなければ軍務に復帰できないのである。そのために数時間にわたって機械に囲まれて検査を強いられた。

そんなことを不憫に思ったのか、グアムの部隊が迷惑をかけたと申し訳なく思ったのかは知らないが、臨時で指揮官に押し上げられた副基地司令がウェークへの資源の追加輸送を申し出たのである。帰りは演習参加艦で長距離航海訓練がてら帰るだけだったのだが、そこに輸送船とタンカーを付ける海上護衛任務に切り替わったのだ。

その輸送船とタンカー待ちでなにもやることのない1日ができてしまい、それならと外出許可がおりた。もちろん、ガイドという名の監視はつくが。その結果が「グアムミルクィウエイリゾート&スパ」での宿泊だった。

「……泳がないのかい？」

「泳ぐ気になれないんだ、司令官」

航暉はビーチパラソルの日かげの下でどこか暗い顔をしていた響

に声をかけた。サイズのかなり大きい白いTシャツを着てデツキチエアに腰掛けていた彼女は司令官を軽く見てから、ついと視線を逸らした。視線を逸らした先ではド派手に水しぶきを上げながら水中追いかけてっことをしていた。淡いピンクのフリルのついた水着を着こんだ電と色違いのグリーンを着た雷が協力して天龍をうまく巻いている。暁はそうそうに捕まったのかプールサイドで「の」を書くようにしていいじけている。

「隣いいかい？」

「司令官は泳がないのかい？」

「泳ぎは苦手なんだ」

テーブルを挟んで隣のデツキチエアに腰掛けた航暉はトロピカルな色合いのジューズを響の前に置いた。

「……司令官は怒らないんだね」

「怒らないといけないことなんてあったかい？」

「命令無視をしたじゃないか」

暁とお揃いの帽子を目深にかぶりなおして、響はつぶやくようにそういった。

「響には響なりの理由があつたんだろ？」

「……もう、誰かが沈むのは見たくないんだ」

俯いた表情は航暉から見えなかったがTシャツの裾を握りこんだのが見える。

「司令官は私の船としての記憶を知っているかい？」

「響としてWWIIを生き抜き、ソ連艦ヴェールヌイとして戦後を走り続け、標的艦デカブリストとして海に沈んだ……」

頷く響。

「デカブリストとして沈んだとき、ああ、やっと終わるって思えたんだ。次の瞬間にはこんな体になっていて驚いたけどね」

「そりやそうだろうな。船から少女だもんな」

航暉がそういつて軽く笑うと、黙り込む響。

「いろんなことを見てきたよ。いろんな船を沈めたし、仲間を看取ることも多かった。電も私の身代わりで沈んだようなものだった」

心地よい風が吹いて、響の新雪のように軽い髪を持ち上げる。

「船はいつか沈むっていうことを知ってたし、戦いの中で沈むのは当たり前だったから、それに疑問を持ったことはなかった。だから……沈んだ船から助けた人がなぜ船を思っただけ泣くのかわからなかったんだ。もしかしたら、悲しむということを理解できなかったのかもしれない。でも、持ち場を交代した直後、電が沈むのをみて、ああ、こういうことかって思ったんだ。……思ってしまったんだ」

淡々と、ただ淡々と言葉を紡ぐ響。

「それからは毎日がつらくて堪らなかった。沈むのを見るのはもういやになってしまって、この姿になってから、何度も船を沈めてきたけれど、そのたびに胃がねじ切れそうになる。……司令官、どうして兵器に感情なんてものを付けたんだろう？ 魂なんてものがなければ、こんな気持ちになることなんてなかったのに」

「……響、君はもう艦娘だ。単に使われるだけの艦じゃない」

言葉が見つからなくとも、それでも声をかけなければならぬ。

「君は優しくして、強い」

「そんなことないよ、司令官」

「いいや、そうだ。そうじゃなきゃ魚雷の前に飛び出すなんてできっこないだろう。でもね、響。視野が少し狭くなってるかな？」

「視野が、せまい？」

航暉は頷いてその瞳を見つめた。

「君が感じた苦しみを、電たちに背負わせることを君はよしとするのかい？」

返事は返ってこない。きつと、それが答えだった。

「生きるってことはそれだけで十分に苦行だ。時には死がとても甘美に思える時もある。俺だって何回もあった。……それでも生きてよかったと思えることが沢山あった。電たちに出会えたことだってそうだ。もちろん君に会えたのもそうだよ、響」

デツキチエアから立ち上がって響の横にしゃがみ込む。そのまま

響の頭を抱き込んだ。驚いたように体が震えたが、それを無視して抱きしめた。

「死に急いてくれるな。俺や電たちには信頼できる仲間が必要なんだ」

そういうと腕の中でこくと頷く気配がした。

「あーズルイ！ しれーかんが響といちやいちゃしてる！」

プールの中から姦しい声が響く。そちらを見るとびよんぴよんと跳ねながら顔を赤くして指をさしてくる雷とその横で目を丸くして電。

「とりあえず、謝りに行ったほうがよさそうだね、司令官？」

「……これで一緒に遊ぼうとかくるとなかなかハードだなあ」

響は航暉の腕の中から抜け出すとおもむろにTシャツを脱いだ。水着になるとなぜか暁が叫び声を上げる。妹分二人も顔を赤くした。

「く、黒のマイクロビキニ……！」

「大人っぽいのです……！」

「響がそんなオトナな水着を買ってたなんて……！」

「司令官、似合うかい？」

「え？ ああ、少し驚いたけど、似合ってるよ」

しどろもどろになりながらそう返すと、響が初めて満面の笑みで笑った。……ような気がした。すぐにクールないつもの調子に戻ったが。

暁と雷、電が互いに目配せをした後どこかに視線を集めた。航暉はその視線の追おうとしたが視線を上げる前に襟首をつかまれ引きずられる。タイル張りの床にすれてなかなか痛い。

「おさわりは禁止されております♪」

「え？ ちよ、龍田さん!? 俺泳ぐの苦手なんだって、ちよつとおおお おおお!？」

特大の水柱が一つ。大の大人が一本投げの要領で投げられたらもちろんそうなるにきまっている。

「……ぐあつ！ ちよつ！ いきなり！ 投げるとか！ あんまり！」

「……あれ、ほんとに泳げないのです?」

「だから! そういった! だろ!」

電たちが互いに見つめあうこと数秒、それは状況を理解するのに必要な数秒だった。その間に、水を飲むようながばがばという音が空しく響いた。

「はわわわわっ!」

「しれーかーん!」

「お、おい大丈夫か!」

「あららく、うふふふ」

その一分後、プールサイドに力なく横たわる航暉の姿が見られた。

「お前あんなに水上戦闘の指揮がうまいのに泳げないのな……?」

「天龍、笑いたいなら笑えよ。笑いこらえて顔変なことになってるぞ」

そういうと遠慮なく馬鹿笑いをし始める天龍。黒のビキニのフリルが揺れる。

「もー笑ったらかわいいそうです」

そういうのは白のワンピース型の水着を着た睦月だ。水色のセパレートを着た如月が彼の横に寄り添った。

「如月が泳ぎ方教えましょうか」

「いや……今度にしよう。今は休みたい」

「見事に溺れてたものね」

「おい加害者」

航暉が弱々しく睨むが龍田は涼しい顔だ。白のビキニにブラウンのパレオを巻いた龍田はにこりと笑った。

「純粋な子どもを抱き込んで何するつもりだったんですかね」

「人間きが悪いぜ龍田……」

そろそろ息が元通りになってきた航暉が起き上がる。

「なあ、響。その水着どこで買ったんだ?」

「みんなと同じホテルの売店。天龍さんも知ってると思うけど、それ

がどうしたの?」

天龍の質問にさらっと無表情に答える響。布面積の極端に少ないマイクロビキニ……もう紐ビキニと言って差し支えないそれを着た彼女は皆の恰好を眺める。……すこしはしゃぎすぎただろうか。

「いや……暁のちんちくりんがなにか言いたげにお前を見るから代弁しただけだが……」

言われてみれば暁は響から距離を置いたまま顔を真っ赤にして口をパクパクしているだけだ。白を基調にしたセパレートの水着を纏った体がわなわな震えていた。

「な、なななな……なんで響のほうが先に大人な水着着てるのよー!」
暁の中では大胆な服装ができる〃オトナという凶式ができていくらしく、ネームシッパとしての威厳だとかなんだとかがごちゃまぜになつてオーバーヒートしたようだ。

「暁も着るんだから!」

「ちよ、姉さん?」

そういつて響に跳びかかる。どうやら響のものを奪つても着るつもりらしい。

「司令官さん! 見ちゃダメなのです!」

「ごふっ!」

「しれーかん!? ちよつと魚雷フルスイング電! なんでしれーかんをプールに叩き落としてるのよー!」

「ごめんなさいなのです! でもおっぱい魔神雷お姉ちゃん、そのあだ名は撤回してほしいのです!」

「なにおう!」

「あ、あの……早く司令官を助けないと……」

「まあ、いいんじゃないかしら」

「よくねえ! おい月コンビ、手伝え!」

「……主砲も魚雷もあるんだよ?」

「おい睦月! 司令官を殺す気か!」

「ここで看病すれば如月のそばにいてくれる……?」

「ああもう、なんでこの部隊は馬鹿ばっか……!」

結局航暉を助けたのは天龍ただ一人で、天龍の苦勞人スタンスが確立したのである。

第12話「査察・通知」

艦隊司令の仕事を想像したことがあるだろうか？

艦隊や隊員に指示や許可をだす。……とんでもなく大雑把に言えばそれでいいのかもしれないが、その内容は恐ろしく多岐に渡る。……特にウエーク島基地のように特根……特別根拠地隊の指揮官と艦隊司令が兼任される場合は恐ろしく激務になる。

艦隊の出撃指示、それにかかる兵站の管理、出入港の管理に財務処理、各種作戦や任務のための会議への出席に、果ては人間関係のもつれによるいざこざの仲介まで。それらを指示し、もしくは直接行い部隊が最高のコンディションを保てるようするのが職務である。そのため何百という報告を受け、書類にサインをし、戦術ネットを利用して中央への報告を上げ、会議を行うのである。日本本国とは3時間の時差があるため朝は少々余裕があるが、本国の終業時間1700JST（日本標準時17時）ぎりぎりに事案が飛び込んできると、受け取ったウエーク島ではとつとつに通常業務を終えて当直業務に切り替えた2000WAKT（ウエーク島時間20時）から書類づくりや忙殺されることになるのである。

「書類を主敵とし、余力をもって深海棲艦と戦う」といった人は誰だったか、まさにその通りである。

さて、その日もウエーク島特根指揮官兼第551水雷戦隊司令である月刀航暉中佐は大量の書類に目を通していく。書類の送付先は最低でも3桁キ口離れた場所であるため、ほとんどが電子化した書類である。それを司令官用のテーブルに埋め込まれたタッチ式スクリーンで確認し、電子マーカーでサインをして、しかるべきところに送り込む。重要なものは印刷してファイリング、そうでないものはデータタグを添付してデータとして保管。基地内の書類は紙の書類が多いので実際に紙を捲り、サインをして送付、上層部に上げなければなら

ないような書類をスキヤニングして送信。指揮官としての仕事はほぼこれで潰れるといつていい。

「よお、司令官。提出した訓練計画どうなった？ 許可出たか？」

司令官室でその日273回目のサインを終えたころ天龍が司令官室に入ってきた。そもそもドアは開けっ放しであり、あまり礼節にうるさくない方針のためか、敬礼も何もなく本題に入る。

「月型コンビのほうか？ それとも特Ⅲカルテットのほうか？」

「両方だ」

「特Ⅲの方は全部許可が下りた。睦月たちのは対空演習以外下りた」

「あいつらが一番やらなきゃいけない分野だろ。なんとか通せないか？」

「今エニウエトックに交渉中だ」

「エニウエトックっていうと……539航偵隊か！ 千代田が相手か？」

頷きながら書類にサインを続ける航暉。

「そうなればいいな。539が合意してくれば早い段階で演習を組む。おそらくエニウエトックまで遠征することになるからその時の旗艦は天龍、お願いできるか？」

「もちろんだ。必ず通してくれよ！」

「善処するよ」

「それにしても……ほんとに忙しそうだな」

「さっきどっかの技師がお菓子と缶チューハイを経費で申請してた書類に辟易してたところだ。そしてこれからマーカスの給水塔の電気代がこっちの予算に紛れ込んでいた件についての喧々諤々ネット会議さ」

「お疲れさんだ。代わってやる気はさらさらないけどな」

「つれないなあ」

軽口を交わしていたが、航暉の手が止まったことで中断される。重要度の高い書類が飛び込んできたのか、スクリーンに重要書類新着のタブが現れた。明らかに表情が冷えた航暉に怪訝な顔を向ける天龍。

「……どうした？」

「……、電を呼んでくれるか？」

「戦隊総旗艦が出なきやいけない話題か？」

「……………明日緊急査察が入る」

「はあ!？」

晴れ渡ったウエーク島の日差しだが、嵐の予感を漂わせ始めた。

「緊急査察、ですかあ……………」

お昼のスパゲティ・ミートソースを食べながら睦月がのんきにそういった。

「なんでそんなことになったのでしょね。まあ、理由一つだと思っけど」

「下村准将・電脳汚染事件、ね……………」

如月がそういうと天龍が頷いた。電たちも目を伏せる。

「……………嫌がらせ、だね」

「? 響、どういことよ」

ミートソースを口の端につけた暁が響に聞き返した。ミートソースに気が付いた雷がそれを拭こうとして押し合いになるが無視して響が口を開く。

「第一作戦群っていう攻勢の部隊に領土防衛を主任務にする第二作戦群が競り勝っただけでも大問題なんだ。それも戦艦2隻を中核とした機動艦隊が格下の水雷戦隊相手に昼間の1時間足らずですべての艦を武装解除されるっていうのはたぶん前代未聞。少なくとも私は聞いたことがない。それを艦隊司令に就任して間もない中佐がやってのけたってことは上の人にとっては面白くないだろう?……………抜かされる前になにか脅迫できるような情報をつかんでおいて言うこと聞かせたいって魂胆があると思うよ」

「……ひどい話だ」

天龍が吐き捨てるようにそういうと「そうかしら〜」と上機嫌な龍田。

「それは上層部が月刀司令を無視できなくなってきたってことでしょ〜？ それだけ有能な指揮官に仕えてるってことになるわよね〜？ あとこのタイミングで監査を入れる意味があるとすれば、はい電ちゃん」

「ふえつ？……えつと……司令官さんへの牽制、なのですか？」

電がスパゲティを慌てて飲み込んで恐る恐る口を開くと、龍田が満足げに頷いた。

「そういうことねー。さすが旗艦を任せられるだけあるわね〜。月刀司令は結構独特な艦隊運用をするけど、しっかり成果を上げている。かつ軍閥生まれでバックボーンもしっかりしてるから、あつという間に上層部に食い込んでいく可能性がある。上層部にとってこれほど煙たい人間はいないでしょうねー。だから彼を認めないって意思表示をするためにこんな抜き打ちに近い査察を組んだ。そんなところかなあ」

「……龍田さん、頭いいのね……」

雷が感心したように呟いた。それを聞いて笑みを深める龍田。

「あなたたちより長く海軍にいるからね〜。少しだけお姉さんなだけよ。あと天龍ちゃんのせいかなあ」

「俺が何をした、龍田」

「天龍ちゃんは誰かがフォローしないと消されるわよ〜、上から」

「え……？」

さらっとそんなことを言っただけで、笑った。

「それはともかくとして……」

「おい龍田。ともかくで置いておくなよ。俺が何をした。そして龍田は何をしてる!？」

「禁制品とか持ってる人いるかしら〜？ いるなら午後訓練の時にでも海中投棄しときましようねー。あと、私的な日記帳とかつけてる人はしっかり隠しといたほうがいいわね。艦娘は人じゃないから思

想統制を受けるし司令官以外の不平不満は処罰の対象になるわよ」
「司令官以外ってどういうこと？」

「上官の悪口に優劣はないわよねえ……」

睦月が首をかしげると、如月もはてなマークを浮かべる。それに答えたのは響だ。

「そこから司令官を脅す糸口を探すためさ。そのために見逃してくれ
る」

「それって結局見つかったらだめじゃない！　そもそもしれーかんの
悪口なんて書いたことないけどー！」

椅子を蹴り倒さんばかりの勢いで雷が立ち上がる。そのまま周りを
見回した。

「しつかりミスなく査察を終えるわよ！　とくにクマさんパンツのそ
このレデイ」

「ブフォツ！……ケホツ、ケホツ……！」

飲んでいた水を思いつき噴出した暁は顔を真っ赤にしてわなわ
など震えだした。

「えっ、なっ、あっ！　如月！」

「私のせいじゃないわよ？　交戦記録は公開されてるし」

さらっとそっぴいながらデザートのヨーグルトを涼しい顔で食べ
る如月。顔を真っ赤にして机をバンバン叩く暁に、にやりと笑って彼
女の肩を叩く天龍。

「でも鬼神のような戦い方だったよなあ、くまさんレデイ・暁？」

「綾波ちゃんにも負けない活躍ぶりよねえ、くまさんレデイ・暁ちゃん
〜？」

軽巡コンビがいじわるな笑顔を向ける。さらに赤くなる暁。今な
ら額で目玉焼きを作れる自信を持った。

「でもくまさんレデイ・暁お姉ちゃん、パンツの柄がばれたからって口
サ弾乱射はあんまりだと思っただけです」

「おしとやかさが足りないわよね。くまさんレデイ・暁姉え、ちゃんと
謝った？」

「う、ううう！　おっぱい魔神雷も魚雷フルスイング電もそんな生暖

かい目で見えるな！ あんたらの姉よ！ 一番艦なのよ！ ネームシップなのよ！」

「そうだね、レディレディ」

「響もそんな目でみるなあ！」

姦しい昼休み、午後の航海訓練まであと30分である。

小型のリアジェットが滑走路の上をタキシングしている。司令部棟のすぐ前にある航空機の駐機場で第二種軍装に制帽を抱えた航暉が立っていた。横には特Ⅲ型駆逐艦姉妹と龍田が控えていた。天龍と睦月たちは海上で近海警備に出ている。

「そんな緊張しなくても大丈夫だぞ。対応は基本的に俺だから」

航暉はそんなことを言いながら回頭するリアジェットをハンドリングするハルカを眺める。飛行機に乗ったことはなかったというのだが、なぜか簡易的にはあるがグラウンドハンドリングライセンスを取得していたので、航空機がやってくるときはハルカに頼ることになっていた。

飛行機が止まると、すぐにエンジンがカットされドアがすぐにあいた。備え付けのタラップが伸ばされるとすぐに影が飛び出してくる。あまりの速度に艦娘たちが反応するが、航暉が目で抑えた。

「恐縮ですっ！ 今話題の551水雷戦隊の指揮官、月刀司令ですねっ！ 特設調査部所属の重巡“青葉”ですう！ 一言お願いします！」

「……遠路はるばるご苦労様、青葉特務官。国連海軍極東方面隊中部太平洋第二作戦群、第551水雷戦隊司令の月刀航暉中佐だ。お疲れでしょうがよろしく願います」

「聞いてた話だと階級に拘らないフランクな指揮官だとお聞きしてた

んですが……もしかして緊張してます?」

「お前がいきなりそんな至近距離に飛び込んだら警戒もされるさ、パラッチ」

そういいながらタラップを降りてくる男性を第551水雷戦隊のメンバーはまじまじと見つめた。かなり細身で軍の制服とは少々ミスマッチな印象を受ける。黒の髪をオールバックに固め、横長のメタルフレームの奥には猛禽類を連想させるような金色がちな瞳を向けた。

「国連海軍極東方面隊特設調査部第六課、高峰春斗少佐だ。出迎えご苦労様」

「遠路はるばるご苦労様でした、高峰少佐」

司令官同士で敬礼を交わす。それぞれの指揮官に合わせて艦娘も敬礼を交わした。どこか不穏な空気を感じたのか特IIIが不安そうに航暉の方を見た。

「……ぶつ、くくく……」

いきなり高峰が笑い声を漏らす。さらに警戒の色を深める第551水雷戦隊の艦娘たちだが、航暉も笑いをこらえるのを見て盛大に?を浮かべる。

「……っはあ! 久しぶりにもほどがあるぜ、カズ!」

「誰が来るのかと思っただらよりによつてお前か、高峰。そういうお前はさらにガリガリになってないか?」

「司令官さん、お知り合いなのです?」

もう見て明らかだが一応確認をとる電、航暉は明るい笑顔で答える。

「ああ、UNNSstaC-Hiroshima国連海軍大学広島校の同輩で大学史上まれにみる問題児だ」

「お前にだけは言われたくないぜ、カズ。CQB訓練で教官の毛根を死滅させたのはどいつだ?」

「銀蠅のためにセキュリティハックして機動隊を呼び寄せた馬鹿に比べればましだろ」

ポンポン飛び出すいかにも危ない話に顔が青くなっていく駆逐艦ズ。それに気が付かないのか会話を続ける男二人。

「お前が来たってことは指示を出したのは横須賀か？」

「まあな。中部太平洋総司令部からの依頼に中路中將が少々色を加えた」

「あの狸……勝手に貸を増やしやがって……」

「それだけ心配されてんだよ。カズ」

互いに笑ってから改めて表情を引き締めた。

「高峰少佐。短い間だが、しっかり基地を見て回ってほしい」

「当然ですよ、月刀中佐。しっかり公平に、評価させていただきます」

「それではこちらへ、とりあえず荷物を置いて頂き、それから執務室へどうぞ」

予想外の展開に目を白黒させる駆逐艦たちの後ろで龍田が感情の読めない笑みを浮かべていた。

第13話「査察・月夜」

「なんだか拍子抜けだったな」

そういったのは天龍である。その横で大げさに溜息をついたのは睦月だ。

「どんな怖い人が来るのかと思ったら……はあ」

「睦月ちゃんが高峰少佐のこと嫌いかなあ？」

「そんなことないですけど、司令官が、その……」

龍田の言葉を否定しつつも、どこか煮え切らない態度に如月がくすくすと笑った。

「やきもちねえ」

「ち、違うもん！　そういう如月だって寂しそうにしてたよね!」

「確かに、気の置けない仲って感じよねえ……司令官と高峰少佐」

やけちやうけど、あれはあれで目の保養よねえ。と如月が言うと驚いた顔で距離をとる睦月。理解してないのか天龍はなんだそりや、とコメントするにとどめた。

「なんだか……司令官が遠い感じになっちゃったなあって、思っちゃって」

しゅんとした睦月に天龍が笑う。

「そりゃあ、大学校時代からの付き合いとなると仲もいいだろうし、何より男同士だから話し方も違うだろ。そんなに気にしなくてもいいと思うぜ？」

「それは……わかってますけど……。ほんとはあれが素なんだなあと思うと、いつもお話ししてくれる時とか、遠慮されてるのかなあとか、考えちゃって……」

「睦月……」

「あらあら」

慈愛に満ちた目で龍田が睦月の頭をなでた。

「Puppy love……ね」

「えっ？」

「ふふっ、なんでもないわ〜」

龍田がそういいながら一歩前が出る。そこに如月もついていく。

「早く食堂に行きましょ〜？ 私おなかすいちゃった」

「はーい」

「睦月、お前なんて言われた？」

「えっと、パピー……ラブ、だと思えます」

「子犬の恋、て意味か？なんじゃそら」

天龍ちゃんたち置いてくわよー？ と声をかけられ、慌てて追いかける睦月と天龍。小走りで食堂に入ると先に特Ⅲ型のメンバーが集まっていた。

「あ、天龍さんたちもお疲れ様なのです」

「早くしましょー？ 暁ちゃんたち私たちを待つてくれたのよー？」

「ああ、それは悪かった。睦月もちやっちゃと用意するぞ」

白米にわかめの味噌汁、メインはアジの塩焼きだ。それとお漬物……来週の補給物資が来るまでは生野菜はお預けだ。ささつと用意して天龍たちもテーブルに着く。

「それじゃ、いただきますー！」

『いただきますー！』

天龍の音頭に合わせて8人分の手を合わせる音が響き、声がそろった。

「部屋の巡検もあっさり終わりましたし、なんにもなさそうよかったですじゃない？」

「まあ、レディに死角はなかったわ！」

「クローゼットを開けられて真っ赤になってたのは誰だったかな、姉さん」

「ちよ、響、しっ！」

暁型がそう盛り上がる中、電だけは少し視線が落ちた。

「電、どうした？」

「ああ、天龍さん、そんなに気にしなくても大丈夫よ、しれーかんを高峰少佐にとられて嫉妬してるだけだから」

「だから違うと言っているのです！」

雷がウインクしながらさういうと、少し語気を強める電。そつぽを向くときに少し頬が赤くなっているのを天龍は見逃さなかった。

「……まあ、明日には査察が終わるんだし、今日ぐらいは譲ってあげな、電」

「だから嫉妬なんてしてないのですっ！」

ムキになって腕を振って抗議する電に、それをからかう天龍。一通り諧謔心を満足させると、天龍が口を開く。

「それにしても、司令官と高峰少佐って仲がいいんだな」

「なんでも海大で技術を競い合った仲なんだそうです」

少し涙目な電がさういうと、天龍が驚いた。

「へえ、ってことは高峰少佐も結構やり手なのか」

「結構どころじゃなくやり手ですよー？」

声が出た方——食堂の入り口を見ると青葉が立っていた。手にはカメラ、どうやら写真をとられてたようだ。

「なにせ国連海軍大学広島校UNNS-tac-Hiroshimaの第5期生といえば、異常豊作の5期”って言われるほど優秀な士官候補生が集まった年度ですし、その中でも常に上位5人は固定メンバーで、”5期の黒鳥”って言えば今でも通じますよ」

「……ほう、そんなに有名だったのかい？」

響がさういうとにんまりと笑って青葉が食堂に入ってきて席に——端に座っていた天龍の隣に腰掛けた。

「千里の杉田、明鏡の渡井、夜鷹の笹原、幻視の高峰、そして飛燕の月刀……大学史上まれにみる問題児集団だけど、実力は折り紙つきで、卒業直前に発生した第二次日本海軍変の際には予備士官として派兵されたバリバリのエリートです」

「……それ、マジ？」

「青葉は嘘つきませんよ？ わざわざそのために海軍は特例法をこさえましたからね」

さういうと啞然とした顔をする天龍。

「ちよつとまで、海軍は司令官たちを前線に立たせるために法を捻じ

曲げたっていうのか？」

「それでもしなけりや勝てなかつたんですよ。……第二次日本海事変の最後の戦いに投入された5期の黒鳥の5人は初確認された。フラグシップクラス。戦艦7隻を含む19隻を撃破して事態の収束に貢献したということ。二等賞詞を国連海軍総司令部より授与されています」

「……そんなすごい人だったのね」

なんとかそれだけ絞り出した暁に我が意を得たりと頷く青葉。

「高峰少佐に言わせたら下村准将電脳汚染事件の結末はある意味当然だそうですね？ もっとも、艦娘を過信しすぎるところが有りそうですが」

「……それはないわねえ」

青葉の言葉に柔らかい口調ながら冷たい声がすつと割り込んだ。腕を組んで微笑んだのは龍田だ。

「過信なんてしてないわよ、彼。確かにあの戦闘ではほとんどリンク率を変化させずに傍観しつつ、下村准将の拘束に向かつていたけれど、しつかりダメージコントロールは把握していたし、手綱は離してなかったと私は思うわねえ。そもそもあのチームの振り分け、司令官の指示よ？」

「……それはどういうことでしょうか？」

青葉がメモ帳を取り出す。口で万年筆のキャップを外していつでも書けるように用意していた。

「ロサ弾を持たせて対空防御艦を暁ちゃんと電ちゃんに分けたのはもともと隊を二つに分けることを想定していたからよお。特に今回は如月ちゃんが艦隊に加わって、如月ちゃんを空母の担当にしないように編成を分けさせた」

「え？ そんな指示……」

「暗号スク립トを使って私と天龍さんに指示が来てたのです」

「そしてかつ、火力が高くアタッカーとして優秀な天龍ちゃんと回避に特化した暁ちゃんを中心に高火力艦として怖かった戦艦の対処にあたらせた。私は本当は雷ちゃんたちのバックアップに入るはず

だったんだけど、二人ともあつさりなんとかしちやったからさつさと戦艦組に向かえたのは幸いだったわねえ」

龍田がそういうとにんまりと笑った。天龍が背筋をぞくりと震わせる。もしかしくなくても、龍田、怒ってんのか？

「もしかして……全部織り込み済みだった？」

「当然よお。少なくともうちの司令官は勝算なくして突撃させるような馬鹿じゃないはずだし、そんな司令官に仕えてるつもりもないわよね？」

「なるほどなるほど、では龍田さんから見て司令官はどんなお方で？」

万年筆の柄の方を龍田にマイクのように向けて青葉が聞く。

「そうねえ……。肝が据わっているし、組んでて嫌じゃない上司かしら。指揮能力も十分だし、なにより私たちをだれも見捨てようとしてない。信頼できる人ね」

「ほうほう。ではほかの人はどうです？はい、暁さん」

万年筆を今度は暁に向ける。

「……レディを子ども扱いしてくる以外は不満なんてないわ。私の“眼”を信じてくれたし」

「私もないね。魚雷で大破した時だって、リンク率を上げてまでサポートしてくれたんだ。信頼しない方がどうかしてる」

「しれーかんはちよつと一人で抱え込むところがあるからこつちがちゃんと見てないと少し怖いけどね」

「そうですね。書類のコピーとかの雑務を私たちに回していいって言ってるのにまったく頼ってくれないのです……」

特Ⅲ型の面々の言葉に内心驚く青葉。特設調査部所属艦という職業柄こういうのは慣れていいるのだが、彼女たちに「言わされている」雰囲気はなく、心からであることがわかる。ここに来るまでに頭に叩き込んだ資料によれば、司令官がここに着任してからまだ2ヶ月少々、電以外の三人はまだ1ヶ月もたっていないはずだ。その相手にここまで慕われる司令官もなかなかいない。

「睦月型のお二人はどうです？」

「んー。優しいお兄さんってところかにやーん」

「身持ちも堅そうだし狙うのもありかしら」

「何言ってんだマセガキ」

苦笑いで突っ込んだのは天龍だ。それにふてくされる如月に苦笑いの睦月、なぜか真っ赤になっている暁にちよっかいを出す天龍と雷、それを止めようとおろおろしてる電を優しく傍観する響と龍田。……これ以上ないほどしつくりくる光景に青葉が目を細めた。

(……高峰少佐の言う通りでしたね)

——月刀の部隊なら行かなくても報告書をかけるだろうさ。
万事順調、問題なし。

「それで、件のわれらが司令官はどこかしら〜？」

「あ、それならきつと高峰少佐と一緒にだと思えますよ。積もる話もあるでしょうし」

「……吸わないのか？」

「禁煙したんだ」

屋上で紙煙草をくゆらせる高峰は煙草を加えたまま静かに笑った。
「連絡がぶつつり途絶えてたと思っただらこんなところにいたとはびっくりだぜ、カズ」

「……悪い」

「ほんとだよ。まともに連絡くれるの笹原のお転婆ぐらいだぞ」

「あいつ……どうしてる？」

「佐世保の547水雷戦隊の司令補だ。気の合う軽巡を見つけたらしくて夜戦熱を悪化させたよ。綾波ちゃんや敷波ちゃんが付き合わさ

れて大変そうだ」

屋上の柵に肘をついて夜の海を眺める。月が出て間もないためか、月明かりの道が海面に揺れている。

「渡井は呉の潜水総隊に所属して戦隊ひとつ任せられた」

「あのスク水マニア、暴走してなきやいいけどな」

「もう遅い。潜水母艦にもスク水着せれば潜れるかもとか言い出した。制服の選考に首突っ込んだ時点で技術職に転向したほうがいいだろうさ」

「杉田は？」

「521戦隊で武蔵の専属オペレーターに就任したそうさ。北方第一作戦群に出向になってたから北の海で超望遠スナイプでもしてるだろう」

紫煙の香りが鼻をくすぐって南の海に溶けていく。航暉は感慨深げに目を細めた。

「……三年前か」

「ああ、三年経った。あの悪夢の舞鶴から三年だ」

それを最後にしばらく言葉が途絶える。珊瑚が砕けてできた砂浜がしゃらしゃらと音を立て、白いあぶくを寄せては返す。

「なあ、カズ」

「なんだ」

新しい煙草を取り出してフリントライターを弄る高峰がトーンを落として声をかける。

「お前の人事、早すぎることに気が付いてるだろ？」

「……ああ」

「いくらなんでも中佐で水雷戦隊八隻の総指揮と基地司令の兼任はやらせすぎだ。しかも」

「『あのウエーク』の基地司令を、か？」

「そうだ。いくら二等賞詞持だといっても中佐に持たせる仕事じゃない。基地司令は大佐以上の役職のはず。それぐらいわかってるはずだろ」

どこか非難のような、悲しいような響きが声に乗った。航暉はそれ

を聞いても表情一つ変えずに、ただ、目を閉じる。

「……中路中將がお前をよこしたんだ。なにか情報持ってきてるんだろ？」

溜息が一つ。

「風見准將の前所属、知ってるか？」

「水上用自立駆動兵装運用士官になる前ってことか？……いや、知らないな」

「D I Hだ」

「……防衛情報総司令部？」

頷いた高峰はうなじから一本のコードを引き出すとその航暉に渡す。受け取った航暉はそれを自分のQRSプラグに差し込む。ラインオープンと同時に航暉の視界に情報が流れ込んでくる。

「風見恒樹。2034年生まれ、第一帝大工学部を主席で卒業と同時に防衛省に入省。経理装備局ではかなりの発言力をもつ人物だった。装備施設本部（EPCO）や陸軍の義体制御研究所にも出向したこともある根っからの技術畑の人間だ。深海棲艦が現れた〃シースクランブル7・17〃の時には防衛情報総司令部のナンバー2。シースクランブル7・17の14か月後の2082年3月、水上用自立駆動兵装実用化とともに日本海軍に出向。そのまま国連海軍極東方面隊に異動となる」

「……クリーンといえばクリーンか」

「もつとも、EPCO以降はドロツドロだ。月岡コンツェルンとは思いつきり癒着してたし、三菱インダストリアルともかなり太いパイプを持ってた。日本武器生産を牛耳っていたメンバーの一人だな。……防衛情報総司令部時代はそのパイプを生かしてロジステイクス部門の情報を中心に扱ったらしい」

航暉が目で詳しい経歴を追いながら隣を見ると煙草の灰を落としつつつまらなそうに空を見上げていた。

「……ずっと横須賀の技術局にいたはずだが、ウエークが解放されると同時にウエーク島基地司令に就任、組織改編によって第二作戦群が成立し同時に第551水雷戦隊が新設。初期メンバーとして電、睦

月、如月、疾風、天龍を迎えてウェーク島防衛の任につく。ここからはお前も知ってるだろうから割愛するけど、気になることが一つだけ」

「なんだ？」

「新設当初からクエゼリンの553水雷戦隊所属DD-AK03 雷“ ”の所属変更要請が何度も出されている。軍上層部は承認しているが中央戦略コンピュータがこれを棄却。このやり取りが風見准将の殉職まで7回も繰り返されている」

「……申請理由は？」

「戦力の増強としか出てこないが、彼のバックボーンを考えると裏があると見るべきだろう。特Ⅲ型艦装ユニットは月岡コンツェルン傘下のポセイドインダストリー製、睦月型艦装ユニットは平菱インダストリアル製だ。どっちも彼には太くて強いパイプがある」

そこまで言ってからためらうように間をあけて、高峰が静かに口を開く。

「ここから先は俺の予測に過ぎない。可能性の一つとして聞いてくれ」

「ああ。でも幻視のお前のことだ。かなり信用度は高いんだろ？」

「風見准将がウェーク基地司令に就任した理由はほぼ間違いなく551水雷戦隊初期メンバーの駆逐艦、すなわち電、睦月たちと雷だろう。理由はおそらくEPCO時代以降、水上用自立駆動兵装開発時の何か」

「……癒着問題のしつぽ切りか？」

「さあな、そこまではわからんが、カズ、想像つくか？」

聞き返され数瞬戸惑ったあと、高峰にファイルを送信する。ファイル名は対下村艦隊戦闘記録。真上から配置を俯瞰したデータファイルだ。

「……如月はともかくとして電と雷の動きに妙な点がある」

「……妙な点？」

「戦闘開始から47分後、15時47分。二人の航跡が一瞬交差するんだが」

「あれ、電が取り舵？」

「そうだ、ここで取り舵を当てる必要はないんだ。しかもここで当てるとセオリー通りに動いてるはずの雷に接近するはずなんだが……」
「……。実際には接近してない。雷もセオリーから外れてたということか？」

それしかない。と言つて航暉は映像を動かす。

「でもこの動き、水平面から……蒼龍の視点からみるとはつきりするんだ」

「……なるほど。電が一瞬だけ蒼龍にプレッシャーをかけたのか」

「ああ、実際に一瞬だけだが蒼龍のバイタルエリアを噴進砲が捉えたんだ。撃たなかったけどな。問題はこの動きを天龍も俺も教えてないってことなんだ。教導隊の訓練でもこんな動きはしない。……じゃあ、彼女はどこで学んだんだ？」

無言の間が落ちる。フィルター直前まで燃えた煙草を携帯灰皿に押し付けて高峰が溜息をついた。

「……陸軍か」

「ああ、あれはおそらく陸軍のCQBのセオリーだ」

市街地戦を意識した陸上戦闘。そんなものを海軍所属の艦娘が知るはずがないのだ。

「わかった。相手はDIHに軍需産業、陸軍まで絡む可能性があるとなるとかなり深い。探りを入れてみるが、あまり期待はするなよ。」

「頼む」

二人そろつて屋上から去る。

「ところでカズ、金剛ちゃんから伝言預かってる」

「ん？」

「水雷戦隊の子たちとイチヤイチャしすぎデース。さつきと帰ってきてやがれです……だそうだ」

「……手紙でも書いておくか」

航暉は頭を掻きながら、高峰はヘラヘラと笑いながら、それぞれの艦娘たちのところに戻つていった。

第14話「試験・社長

「月刀中佐」

司令官執務室に顔をのぞかせたのはハルカだ。工廠から直行したのだろう。オイルで汚れた作業着の袖を揺らして敬礼を送る。

「どうした？ なにか壊れたとかか？」

「いえ、そういうわけではないんですけど……すこし時間よろしいですか？ フェアリティたちが荒ぶっちゃってよくわからないもの作ってしまいました……」

「？ どれ」

艦装の修理や改装を主に担ってくれている妖精たちだが、兵装の生産、開発も行える。艦娘を建造するには大規模なシステム構築が必要のためウェーク島のような小規模前線基地では行えないが、兵装開発に必要な装備は整えていた。その土地の妖精の性格や特徴の影響を受けるのか、場所によって出来る装備が異なるという特徴のために、「指揮官は一定数の開発を行わなければならない」と軍規則まで制定して開発に励ませている。

一応艦娘が装備できるもの……砲や電探やソナーの強化システム、魚雷、果ては安定性の強化を図るバルジキットなどができることが多い。……そう、多いだけで絶対ではない。「妖精が荒ぶる」と人間や艦娘が全く意図しないものを作ることがあるのだ。

そもそも成功する場合だけではなく何もできないこともある。鉄と油と火薬にボーキサイトを投入して、どうやったら綿のような物体ができるのか正直理解に苦しむのだが、よくある話である。艦娘が装備できないものを作ることもあるしどう見てもカービン銃にしか見えないような陸軍装備が飛び出すこともある。まれに使用用途不明なトンデモ兵装を作ることもある。

こういうことを防ぐためにハルカのような妖精とコミュニケーションを取れる人材を特務士官として徴用し妖精との橋渡し役を担ってもらうのだが、特務士官も抑えきれないこともままあって、今

回もそのパターンなようだ。

「……それで、これができた、と」

「にやはは……」

今日の工廠担当艦（艦娘にもシフトがあるのだ）の睦月がどこか引きつった笑みを浮かべていた。小柄な睦月の身長約2倍強はあるだろうか？全長3メートルオーバーの巨大なカノン砲ができていた。

「これ、使えるのか？」

「一応主砲マウントと規格統一されているので載せられないことはないですね」

「そもそも水雷戦隊でこれ保持できるのか？」

「暁型なら重量的には魚雷も主砲も全廃してこれだけ積みめばなんとか浮いてられるかなってところですよ。天龍型だと機銃が精一杯でしようにし速力も犠牲になるし実用的じゃないですね」

それを聞いて航暉は頭をかいた。

「妖精さんは『・ワ・へしやちようほうはおとこのロマンです！』とか言ってますけど……」

なんだかわけのわからないこと言っている妖精は放っておくとして、これどうしよう？

「……たぶん報告例がないから横須賀の艦装研に送付になるかな？」

明日補給艦が入港するし、持って帰ってもらうか」

射程によっては戦艦クラスの艦娘が使えるかもしれない、と言いながらそれを持ち上げてみる。大の大人でも持ち上げるのがやっとなで生身の人間では撃つこともできない代物だ。艦娘に使ってくれないとただの無駄になってしまう。

「おーい、いたいた。訓練計画なんだけど……なんだそれ？」

訓練計画の改善案を持ってきたらしい天龍が工廠をのぞき込んでいた。執務室にいなかったのを探しにきたらしい。

「……工廠担当艦の睦月が新兵器の開発に成功してね。その真価を確かめるためにこれから横須賀に送る手配を……」

口を開いてから航暉はしまったと後悔した。目の前の軽巡は最新鋭とか世界基準とか「スゴそう」なもに目がない。

新兵器という司令官の言葉

目の前には黒光りする大ぶりの砲

これから横須賀に送るような珍しい代物

「なあ……試験だったらここでやってもいいんだろ？ 送る前にデータを少し集めた方がいいんじゃないのか？ 開発者の睦月にこの砲の雄姿を見せてあげないとかわいそうじゃないか」

おもしろそうだから使わせる。目は口ほどにものをいうとはまさにこのことである。

その日の午後、正確には1455。ウエーク環礁の一部であるビル島にいくつか影が伸びる。

「……暁、さすがに装備が勝ちすぎてるだろ」

「ちようどいいに、決まってる、じゃない……！」

天龍のあきれた声に移動だけでもう息が切れている暁が答える。

あのあと、近海警備から帰ってきた暁が例の兵装……妖精たちは社長砲だのオイガミだの言っていた……を見つけ、テスターをやると言って引かなかったのである。レデイの自覚はどこへやらと航暉がつぶやいていっしょに警備に出ていた雷が「平常運転ってことよ」とコメントしたため、引くに引けないことになったということもある。

「レデイなんだから、これくらい、当然……！」

主砲マウントに巨大な砲を乗せているのだが、そのマウントの位置が問題だった。特Ⅲ型駆逐艦艦装ユニットは腰から背中にかけて集中して機器が配置されている。足元にあるのは浮力を得るための力場発生装置や推力制御ユニットにソナーなど……暁だけは足元に

横揺れ抑制用のフィンスタビライザー兼用防弾版があるが、残りはずべて上半身に集中している。その中でも主砲や高角砲、対空装備などに使用する主砲マウントは右肩の後方に「のみ」位置している、ここに全長3メートルを超す砲という鋼鉄の塊を乗せたらどうなるか。

当然、転覆の危機となる。ただでさえ重心が高いのだ。トツプへヴィに加えて左右非対称ではいくらフィンスタビライザーを使っても限度があるのだ。移動中は砲を畳んで回転させればある程度重心をコントロールできるだろう。だが煙突が邪魔で完全に重心を固定できないのが悩ましいところだ。ともかくにも駆逐艦にこれを積むのは問題だらけだった。

「友鶴っても知らないぜ?」

「縁起でもないこと、言うなあ……っ!」

それでもなんとか射撃訓練レンジまでたどり着いた。周りは上空も含め立ち入り禁止になっているため遠慮なく砲撃ができるのだが今回はわけが違う。妖精が作ったどういう威力があるかわからない謎兵器なのである。侵入禁止エリアを普段の20海里から45海里に拡張している。そもそも漁船などが海に出なくなつて久しいし、ウエーク島は絶海の孤島で船なんてまず来ないとはいえ念には念をいれる必要があつた。

「こちら暁、指定位置に到着よ!」

《ウエークオペラ了解、こちらでも確認した。観測班は状況をレポートせよ》

無線の奥から航暉の声が聞こえる。ウエーク島の北端——ビール島と狭い水路を造る小さな岬だ——に止められた小ぶりなトラックの荷台で、きらりと双眼鏡が光る。移動指揮車を駆り出して航暉も目視できる位置に出てきている。

《観測I班、龍田・如月両名ポイント到着よ》

《観測II班、響・雷。いつでもいいよ》

「保安班、天龍・睦月。準備万端だ。ミスっても受け止めてやるから頑張れよちんちくりん」

「だあれがちんちくりんよ!」

振り返ろうとしたところでバランスを崩しかけて慌てる暁を見て天龍たちは少々不安になる。

「さっさと始めましょう！」

《了解……ウエークオペラより各隊へ。これより兵装試験、イベントナンバーWT0814773を実施する。武装の展開を許可する》

「了解！ 暁、展開開始するわ」

折りたたまれていた鉄の塊が展張される。艦装にうまく重量を乗せているとはいえ、肩の上からバカでかい砲身を伸ばすとふらふらと揺れる。

「く、うわっ……ととと。こちら暁、展開完了！」

本当に完了かよ……。とあきれれる声が後ろから聞こえるのを暁は無視をした。

《了解、各員耐衝撃姿勢用意、暁……発砲を許可する》

直後にまぶしいほどの爆炎が閃いた。

入渠報告書より抜粋

第一補修ドック

対象艦；DD-AK01“AKATSUKI”

補修内容上部武装マウント交換

艦装接続部修復

修理時間：145分（艦装のみ）

「ぐすっ……いけると思ったのになあ……」

風呂場でまだ鼻をすするのは暁だ。発射の際の強烈な反動で見事に吹っ飛ばされたのが約1時間前である。珊瑚の砂浜に半分埋もれてひっくり返ったところを天龍たちが慌てて掘り起こして事なきを得た。

「まったく、死ぬかと思ったじゃない」

「でもやりたいといったのはお姉ちゃんなのです」

「電に言われなくても……わかってるけどさ」

隣で膝を抱えるように温もっている電にかるく体重を預けてみる。れでいにだって休息が必要だ。今ぐらい甘えてもいいのかもしれない。

「装備、明日には横須賀行きかあ、リベンジマッチは無理そうね」

「機会があってももう暁お姉ちゃんには撃たせないのです」

「即答する必要ある？」

「即答しないとする気になるにきまつてるのです」

そんな会話をしながらゆつくりと湯船につかる。それが許される束の間の平和。

明日には深海棲艦の大攻勢が押し寄せるかもしれない。明日には誰かがいないかもしれない。それを艦娘は肌で知っている。船の記憶でも、艦娘の記憶でも知っている。だから、いまこうやって休むのだ。

「次のリベンジじゃ使いこなして見せるんだから！」

「絶対にやらせないのです！」

勢いだけが乗った舌戦が始まる。きっと明日には忘れてるだろう舌戦だ。それがこんなに心地いい。

どこか明るい気持ちのまままで風呂場に姦しい声がこだました。

第15話「台風・怪談

目の前には大量の砂と麻袋。珊瑚由来の白い砂を麻袋に詰めて口を閉じられたそれを、艀装を付けた艦娘たちが建物の入り口に積み上げていく。小さな子どもが大きな土嚢を軽々と運んでいく囃はなかなかシユールだ。窓の外には黒い雲が延々と垂れこめていた。

「台風とかいやになるわ……」

土嚢を積んで額の汗をぬぐった如月が憂鬱そうに空を見上げた。横で笑うのは睦月だ。

「でもどこかドキドキする気がするかにやー?」

「あ、いたいた! そっち終わった?」

「あ、雷ちゃん、終わったのですよー!」

雷は艀装を揺らしてかけてくると睦月たちの積んだ土嚢をぺちぺちと叩いて次確認すると頷いた。

「いい感じね。防水防壁あげるわよ」

土嚢のすぐ後ろの床が動いて、腰の高さ程度までせりあがった。この裏口が最後の開口部だったらしく、これが終わると雷が大きく伸びをした。

「艀装のキャニスターはもう食堂に上げてあるわ。こんな狭いところで艀装付けて動き回るの気を遣うし、さっさとおろしましょう?」

「今回は大丈夫かによあ」

「前の時は1階がずぶ濡れになったわよね……」

「泥の掻き出しとかしたくないからそうならないように祈るわよ」

そういつていると窓ガラスにぽつりと一つ雨粒が落ちた。

ウエーク島は海没した死火山に珊瑚礁が積み上げられてできた島である。

高低差はほとんどなく横から見ても平坦な地形だ。標高は最大でも3メートルほどだ。重要な設備はコンクリートの基礎でかさ上げしてなんとか海没を防いでいる形である。そこに台風などの高波が来たら島中が水浸しになってしまうような平べったい島である。

ウエーク島基地の司令部棟をはじめとした建物は1階が地面から1メートルほどかさ上げされたレベルにあるが、大型の台風が来ると少し心もとない。入口には床下格納式の隔壁を設置したり、地下の作戦指揮所をはじめとした重要区画は水密扉で防護したりするなどさまざまな防衛策をとってなんとかしている。居住区が2階以上に設置されているのもその対策の一環だ。

「雨がひどくなってきましたねえ……」

「今回は两台風みたいねえ……」

食堂から外を見て睦月がつぶやいた。時間は夜中に入り、通常業務を終えた午後7時半である。

「高潮・波浪警報が出てるし、この状況で出撃せよとか来ないことを願うよ」

そういつて笑ったのは航暉だ。食堂に紙の書類を持ち込んでサインを続けている。執務室での作業をしていたのだがある暁型ネームシップから半分涙目でさそわれて食堂で全員集合と相成ったのである。

「でもこういうのもいいわよねー」

「……龍田は何やってんだ」

窓際の席で一人薙刀の刃を研ぐ龍田に冷や汗を流しながら声をかけるのは天龍だ。書類のサインの音にまぎれて砥石と刃がすれる音が聞こえる。

「いつ何が来るかわからないでしょう？ 常在戦場の心よ〜？」

「だからっていまわざわざ研ぐ必要があるとは思えないわよ……」

航暉の影に隠れるようにしてそういうのは暁だ。柔らかな笑みで

彼女の背中をささる雷。普段なら、レディにそんなことしないでしょう。とかいいそうな暁だがそんな余裕はないようだ。

「龍田さん、姉さんが怯えてるからすこしやめてくれるかい？」

「ひ、響っ！ 私は怯えてなんか……」

「そんなに震えて言っても説得力がないのです」

書類をとんとんと整えた電にとどめをさされた暁が撃沈する。それを見た龍田がくすくすと笑って薙刀を壁に立てかけた。

「まあ、そうねえ……少しお話でもしましょうか。司令官も仕事終わったんでしょう？」

「まあ、今日のノルマは完了だ」

それを聞いた龍田が航暉の目の前に座る。手招きをされた周りの艦娘も集まってくる。

「六波羅医務長長とかも呼ばなくていいのです……？」

「声はかけたが伊波少尉は寝てるし、六波羅医務長は忙しいんだと」

天龍がそういつて席に腰掛ける。龍田が柏手一つ打って注目を集める。

「それでは、第一回納涼怖い話大会はじめます」

「びゃっ!？」

背筋を震わせる暁がとっさに航暉の腕をつかんだ。

「……今する必要あんのか？」

「ああ、天龍ちゃんは怖いのかしらあ？」

「ば、馬鹿なこと言うなし！ いいだろう、始めようじゃないか」

暁がじつと航暉の方を見上げる。半分涙目でじつと見上げる。(怖がってなんてないけど、お願いだから止めて!)という心の声を聴く。

「司令官はもちろんやるわよねえ？」

龍田が航暉の方を見て笑う。そのあと視線がすつと横にずらされ、研ぎたての薙刀を見つめる龍田。視線を落とすと袖に縋り付くようにして潤んだ瞳を向ける暁。

「……まあ、少しぐらいなら付き合おうじゃないか」

「話が分かる司令官で助かるわあ♪」

心なしかきらきらと輝く龍田に世界の終わりを見たような暁。

……龍田や天龍が暁をいじる意味が少しわかった気がする航暉だった。

「睦月、怖い話とか苦手ですう……」

「あら、私は好きよ?」

如月がニコニコしながら周りを見回す。

「だれからいきます?」

「じゃあ、私から行こう」

意外にも真っ先に口を開いたのは響だ。一度目を閉じてからそつと目を開き、机の上で手を組んで軽く笑った。

「ソ連にいたころに聞いた話なんだ。シベリアではまともに農業もできない地域も多いし、物流も不便だった。そんなところに暮らしてたある家族はどこか外国に移った親戚から送られてくる物資で何とか暮らしていたらしい」

響が思わせぶりにそう話す。暁以下特Ⅲ型駆逐艦娘姉妹は次女の声に取り付かれたかのように聞き入る。

「いつも小麦粉や新しい薬品、新開発の食品などが説明や手紙といっしよに送られてくるんだ。でもある時、その物資が突然来なくなったんだそうだ。そして彼らも限界に近づいていた。ここでも支援物資がなくなったら生きていけないのはみんなもわかってるだろう?そういうことさ」

「シベリアは陸の孤島になるからなあ。飛行機で上から見ても針葉樹林しか見えないからねなかなかハードな場所だ」

航暉の言葉に頷いて、響が続ける。

「それでも彼らが死に絶える前にはちゃんと物資が届いたんだ。久しぶりに待ちに待った物資は箱にいくつかのブリキの缶が入っていて乾パンとか干し肉とかのラベルが貼ってあったんだ。でも1つだけラベルの剥げてしまった大きめの缶が入ってて、開けてみるその中には白い粉が入ってたんだという。中身が何かわからなかったんだけど、彼らはそれを新しいインスタント食品だと思って、お湯に入れて喜んで食べたそうさ。そのインスタント食品とか乾パンのおかげで飢えをしのがたんだ」

これで終わればめでたしめでたしなんだけどね。と言って響は溜息をついた。

「その数週間後、手紙が届いたんだ。その内容は物資が滞った事情とお詫びだった。でも向こうにも理由があったんだ。祖母が天に召されたことを涙でにじんだインクで書かれていたらしい。最後にはこう書かれていたんだ……『同封した祖母の遺骨を郷土の土に埋葬してくれてありがとう。これで祖母も安らかに眠れるでしょう』」

「……」

暁が小規模地震を起こそうとしているかのようにがたがたと震えている。泣いていないのが不思議なほどの怯えっぷりだ。それを見た響が一瞬だけ目を輝かせた。

「そうだ司令官、すこしおなががすいたんだけど、なにか食べるものもないかい？」

「すぐできるものはないが……缶飯でも開けるか？」

「ダメ！ 絶ッ対ダメ！」

暁がものすごい勢いで首を横に振った。

「なんならインスタントのコーンスープにでもするか？」

天龍が笑いをこらえるようにしてそういうともものすごい勢いで首を振る。もちろんん方向は横だ。

「なら響ちゃんも次誰の話を知りたいかなあ？」

「そうだね……司令官、お願いできるかい？」

「……そうだな。江田島にいたころの話をしようか。あそこは第二次世界大戦以前からの軍学校だ。昔から若くて無鉄砲な若者が集団で暮らしてた場所だし、空襲にもさらされた場所だ」

「……そういって話出した航暉におろおろとしだす暁。私は誰を頼ればいいのだ？」

UNNStaC—Hiroshima
「国連海軍大学広島校に入学してわりとすぐのところ……そうだな、6月だったかな。同じ部屋だった先輩が銀蠅に出たんだ。まあ、いつものことだから俺は見えて見ぬふりをしてたんだが割とすぐに真っ青になつて帰ってきたんだ」

暁は雷の影に居場所を見出したらしい。その背中をさすりながら

もどこか目を泳がせる雷。

「先輩はガクガクと震えながら『月刀、お前この基地の中で赤いスカートの子どもを見たことがあるか?』って言ってきた。その時は長良や酒匂がいたし、呉には空母艦娘たちが沢山いる。赤いスカートの艦娘なんて結構いる。だから俺は『見たことありますけど、どうしたんです?』と聞き返した」

その時電気がちかちかと瞬いた。航暉はそれを見て不機嫌そうに眉をしかめた。

「……こういう話をするに『寄って来る』とも言うし、どうする? ここまでにしようか?」

震えに震えていた暁が首を縦に振りかけてぴたりと動きを止めた。

「そこまで話してやめるのはないだろ。続行だ続行」

天龍が身を乗り出した。その横では睦月が如月の手をぎゅつと握りこんでいる。

「じゃあ、続けるぞ。先輩が言うには、赤いワンピース姿の女の子で歳はおそらく1桁だっていうんだ。そんな子どもが軍学校にはいれるはずがないし、駆逐艦娘でもそんな子はいないはずだ。その時は見間違いかなにかだろうと思って聞き流してたんだ。……でも、その日からぽつぽつと目撃情報が出てきた」

生唾を飲む音が響く。

「先輩だけじゃなくて同輩も目撃したっていうんだ。尾ひれがついて最終的には化け物に食い殺されそうになったとかいうところまで発展したんだが、まあ信憑性はないな。場所はたいてい剣道場の裏……食堂に銀蠅に行く定番コースだった。それもあつて教官たちには知られてなくて、だからこそ与太話で済んでたんだ。だが、教官にも目撃者が出てきて大騒動になってきた」

「それって何人ぐらい見てたのです……?」

「正確な数はわからないが見たことあるという証言だけでぎつと20人はいる」

まあ、自己申告制だからあいまいだけどな、というと龍田がにんまりと笑った。

「それで、月刀中佐はみやたのかしらー？」

「……スパイだとかいろいろ憶測が飛び交って宿舎に教官が見張りに立ってね、銀蠅はおろか、トイレに行くのも見咎められるようになった。それはそれは窮屈で……犯人捕まえて教官に突き出せば解決するんじゃないか？ ってことになつて有志数人で道場裏に行つた。そしたら……いたよ」

息をするのも恐れているのかといった感じで皆が黙り込んでしまふ。

「確かに赤いワンピースだった。真紅と言つていいな。まるで血染めのような赤だった。髪はおかっぱ、日本人形みたいに白い肌だった。こつちを見てね、表情一つ崩さずに見つめてくるんだ。生きた心地がしなかったよ。有志の一人がそれを見てね『あいつ、人間じゃねえな』つて言つてゆつくり前に歩き出したときには肝が冷えたよ」

「えっ?」

「そいつは女の子の元まで歩いていくとそつと女の子に触れたとたんに、女の子の姿が掻き消えた……それ以来、その女の子の姿は見えない」

「……」

「でもね、その女の子がなんだったのかわかつたんだ」

聞きたいかい？ 軽くわらつてみせると青い顔をしながらも頷く駆逐艦娘たち。

「女の子に触れたあいつが言うには夏本という男を探していたらしい。その妹らしいんだが、国連海軍大学広島校の所属員名簿を見ても合致しそうな人はいなかった」

「じゃあ……」

「一つだけ、ヒットしたんだ。太平洋戦争の最中に江田島で水兵が一人死んでいる。名前は夏本洋一、訓練中の事故つてことになつているが……上官から暴行を受けて死亡したらしい。彼に妹がいたかは定かじやないが、常に小さな紙で作った人形を身に着けていたそうだ。お守り代わりにね」

「あ、もしかして……」

「今でも持ち主を探してるんだらうよ、 “彼女” は。太平洋戦争が終わってからずっと、ずっとね」

話は終わりだと言って笑う。

「……案外、怖くなかったじゃないか、な、なあ龍田？」

「そうね、天龍ちゃんはずいぶん汗だくだけど気のせいね？」

「でもその女の子に触れた人、勇気があるのです」

電がそういうと航暉が笑う。

「じつはみんなも知ってる人だよ？」

「え？」

「前に査察で来た高峰少佐だ、そいつ」

航暉が面白そうに笑う。

「あいつはお寺の出身でね、そういうのが『見える』体質らしい。……」

高峰のあだ名知ってるっけ？」

「確か……幻視、だったかしら？」

雷が言うと頷く。

「あいつは索敵が得意でね、あれの部隊が先頭に立つと面白いように敵艦隊が見つかるんだ。見えない位置にいるはずの敵を見ているかのような指揮から“幻視”って呼ばれてるんだが……幽霊お化けに仏様、そういう幻を見るから幻視って呼び出したのが始まりだ」

そういつて笑うと龍田も笑う。

「なかなか面白い話だったわねー」

「そこまで怖くないだろ？」

「で、でも、ちよつとこわかったにやあ」

睦月がそんなことをいうが暁は反応する元気もないらしい。

「あ、そうそう。……この話を聞かせた後、何人か “真っ赤なワンピースの子ども” を見たって言うてくる人がいるんだ。みんなも気を付けなよ？ ひどい人だとそのあと体調崩したって人もいるし」

「え……？」

天龍はじめ全員の顔色が青くなる。

「……皆さん何してるんですかあ？」

タイミングよく食堂に甘ったるい声が響く。振り返ると真っ赤な

ワンピース姿の女の子……

「い、いやあああああああああああああああああああ
！」

ウエーク島に長い叫びがこたました。

「な、なんで顔だしただけで叫ばれなきゃいけないんですかあ！」

「伊波少尉が怪談のジャストタイミングで現れるもんだから、その、すまん」

「で、なんで俺がこんなことになってるわけ？」

「あ、あんなの聞かせた後なんだから責任とってよねっ！」

食堂に布団が並べられ駆逐艦娘達が団子のように引っ付いてくる。
航暉はあきれ顔だ。

「……まあ、いいけどさ。早めに寝ろよ」

「わ、わかっているのです！」

「し、しれーかん……もつとくつついてもいい？」

「睦月、そこは私の位置だけど」

「少しぐらい譲ってくれてもいいんじゃないかにや……響は怖くない
んでしょ？」

「それとこれとは話が別だ」

「司令官、ごめんなさいね、こんなことになっちゃって」

「いいんだけどさ、如月、君が一番べったりくつついてるんだが」

「私がお嫌い？」

「そうじゃないけどさ……」

雨の音と風の音が混じる部屋の中でそんな会話が交わされる。夜
が少しづつ更けていく。

ちなみに次の日の朝、龍田の布団に潜り込んでいた天龍が目撃され
たのは余談である。

第16話「MI・胎動」

Anchor age of Wake Island
Sept. 15 2082. 0518UTC. (1718WA
KT.)

今日の忙しさは何だったんだろうと思うような激務だった。

「活字で目がちかちかするので……」

今日の午前中は雷、龍田と哨戒任務などで体を動かした。ここまではいいのだが、午後になって、演習組の天龍と睦月、如月が帰ってきてから執務室に顔を出してからがひどかった。

大量に積み重なる書類を見て電はオフシフト返上で「手伝うのです！」と言ってしまったのだ。どうやらコンピュータのメンテナンスの最中で電子処理ができないらしい。それで手作業ですべての書類の確認をする必要があるらしい。電の仕事は航暉が目を通してサインした書類のファイリングをただけなのだがこれだけでもかなり大変だった。それを瞬時に終えてしまうコンピュータにも、それを把握して処理している航暉にも尊敬の念を覚えてしまう。

活字を見すぎたのか目がちかちかするため、すこし散歩に出てみることにしたのだが得策とは言えなかったかもしれない。さきほど少しだけ雨がぱらついた後の滑走路脇はアスファルトのにおいと雨が混じって何とも言えないにおいがしたからだ。夕焼けには少し早すぎた淡い黄色が空を包んでいた。

「るくんたった、るんたった、らんらーらんらん、ハイ」

適当に鼻歌を歌いつつ砂浜の方へ足を向ける。サクサクと砂を踏みしめて進んでいくと棕櫚の木の林を通って海岸線へ。これから夜に向けて海は黒に色を変えていくのだろうが、今はまだ青だ。日が落ちるにつれて色がモノクロになっていくだろう。

「司令官さんが着任してからもう4カ月近いんですね……なんだかもっと長くいたき気がします……」

海岸線にしゃがみ込んで海水に手を付ける。珊瑚の砂は水あつという間に吸い込んでしまい、軽く湿った砂が手に触れる。すぐに寄せた波で水がやってきては消える。小さなやどかりが波の中を懸命に進んでいる。

「やどかりさんはどこへいくのです?」

やどかりを手のひらに乗せると、驚いて殻の中に隠れてしまう。それを見て少し笑う。

「私みたいです……。誰かに傷つけられるんじゃないかって怯えて、怖くて……。今の司令官さんのところならそんなことはないってわかってるのに、ね」

手のひらの上でじっとしていたやどかりがゆっくりと顔を出す。

「キミは口が堅そうだから話してもよさそうなのです。私は、司令官さんが、大好きです。でも、どこか怖いのです。私が司令官さんを信じてないのに、夢では司令官さんの妹と一緒に遊んだりしてるんですよ。ほんとはそうしたいんですかね……。?」

少し笑ってやどかりをゆっくりと砂浜に下ろした。やどかりはまた海岸線に沿うように歩き出す。それを眺めて少し陰のある笑みを浮かべる電はぼつりと口を開く。

「……おかしいですね。私は何をしたいんでしょう……。?」

I D R I V E | A W S
水上用自立駆動兵装——艦娘は人に非ず。兵器の延長にして寵愛の対象ではない、いわば拳銃と同じだ。自分は弾で、その引き金を司令官が引く。そういう関係でいいはずだ。なのに、どこかそれに否という。

「……不良品、ですか」

航暉が着任する前言われつづけた記憶が頭をあげる。撃つことをためらう不良品、今度は誰かから兵器以上に扱うことを求めるといのか。なんて傲慢な。

相談しても一笑に付されるのだろう。天龍や航暉なら怒るかもしれない。そんなこと考えるなどか言いそうだ。

「……っ」

電は首を振って考えを追い払う。どうも一人でいるとだめだ。思

考回路がマイナスの方向にばかり振り切れる。こんなことをやどかり相手にも話すんじゃない。八つ当たりの少し後悔した。そういうばあいやどかりはどこにいったんだろう？

そんなことを考えつつ海岸線にそって視線を走らせる。珊瑚の砂に紛れたのかやどかりはいなくなっていた。

「……？」

何かが光った気がした。海岸線から少し海に入ったところだ。波の反射とは違う気がした。気になって足をむけてみる。少し距離があつたが、すぐ帰る理由もないので確かめることにした。ゆっくり進むがそれが「何か」わかつた途端、息をのんで走りだす。

「だ、大丈夫なのです!？」

人だった。電には見覚えがないがおそらく艦娘。身体についた艤装の一部もそうだがこの絶海の島に流れ着く人間なんて艦娘ぐらいしか見当たらない。血が黒く乾いて服に、顔に、髪に張り付いている。体は冷えているがよく見ると胸が上下している。生きているのだ。ゆすってみるが反応は返ってこない。

「大丈夫ですか！ 目を開けてください！」

551TSq Commander Room / Anchorage
of Wake Island
Sept. 15 2082. 0528UTC. (1728WA
KT.)

《司令官さんっ!》

半分泣き声のような叫びが無線に乗ったのを聞き、航暉は慌てて無線を開く。

「どうした?」

《人がつ、人が倒れてて、目を開けなくてっ!》

人? 航暉は一瞬戸惑う。電は外に散歩に出ていたはずだ。ここは見知らぬ人はいないほど小さな島で、名前ではなく「人」と言ってきた。

「電、落ち着け。今どこにいる?」

《島の北東の海岸沿い! B滑走路脇の棕櫚林を超えたところです。血まみれで、息はしてるのに目を開けないのですっ!》

「わかった、電。すぐにいく。お前はそこから動くなよ」

館内放送のスイッチを叩き込む。

「コンディション・イエロー、イエロー、イエロー。状況、カテゴリー6パターン2。急病人発生。六波羅医務長と天龍はすぐに正面玄関に集合せよ」

そういつて航暉も階段を駆け下りる。二階の廊下で天龍とかちあった。

「おい! 急病人ってどういうことだ!」

「電が外海側の海岸でだれか見つけたらしい。電がパニックになって詳しい状況はわからん」

一階の玄関ホールに駆け込むと玄関脇の警備室から簡易担架を引つ張り出す。階段から白衣を着た女性が下りてくる。

「急病人とは穏やかじゃないわね」

「少なくとも発見者の電がパニックで状況がまるで分らん程度には非常事態だ。Bランウェイ脇の棕櫚林を超えた海岸が現場らしい。急ぐぞ」

三人で海岸に続く道を駆け下りると遠くに白いセーラーを認める。

「電!」

真つ先についたのは天龍だ。涙で顔をくしゃくしゃにした電が顔を上げる。

「天龍さん……この人助かりますよね!」

いくつものアザや切り傷。傷がないところを探すほうが難しいほどのありさまだった。白いワンピースのような服だがボロボロで服

の形をkarouじてとどめているに過ぎない。頭に乗せられた水上電探を模したユニットもほとんどへしゃげて何が何だかわからないような状態だ。

「嬢ちゃん大丈夫か？」

「あまり揺らさないで！ 頭部挫傷の可能性がある！」

珍しく夏海が叫んだ。それにびくりと手をのける天龍と電。夏海は素早くバイタルを確認すると航暉の方を振り向いた。

「外傷の方は深くないとは思うけど、衰弱が激しいし、脳がどうなってるかわからないから何とも言えないわね。中佐、足を持ってもらえますか？」

航暉が担架を広げ傷ついた少女の足を持つ。

「いちにのさんっ！」

担架に乗せた少女をゆつくりと持ち上げ運んでいく。涙で不安定な声が響いた。

「六波羅さん、よくなりますよね……？」

「保証はできないけど、死なせなんてしないわよ」

Headquarters of the U.N. Navy
Western Pacific Force / Yokosuka Admiralty Port
Sept. 15 2082. 0542UTC. (1442JS
T.)

「提督、どうされました？」

「……いや、何でもありませんよ。すまないな古鷹。お前にまで気を使われるようじゃ、私も老けたかの」

「提督の様子がわからないほど短い付き合いではないですよ？」

無地のカップの中では秘書艦を務めてくれている艦娘——古鷹が入れてくれた珈琲が揺れている。オールドクロップの豆を挽いて淹れてくれた珈琲は豊かな苦みを持ち、彼の舌をくすぐって喉を落ちていく。

国連海軍極東方面隊総司令部、その傘下に収まる西部太平洋艦隊司令部が収まる横須賀鎮守府、重厚なレンガ造りの司令部棟の一室——
——西部太平洋艦隊第一作戦群司令部——の看板がかかった部屋で、中路章人海軍中将は苦笑いに似た表情で溜息をついた。マホガニー材のテーブルには几帳面に書類が置かれ、木製軸の万年筆が革のペントレーに乗せられていた。

「……やっぱり気になりますか？ 霧島さんたちのこと」

「岩城の腰抜けのことだから酷い現場に押し出されることはないとは思いますがそれでも気になるもんは気になる。あの手の指揮官は危うくなるよと平気で部下を切り捨てるからな。榛名も霧島もそう簡単に折れるようなタマではないと思うがの」

中路はそういつてカップを傾ける。横の窓からは埠頭が見渡せ、補給船を護衛してきた艦娘たちが帰港するのが見える。目じりの皺が目立つようになったと愚痴っていた彼がコーヒーカップに目を落としました。

「……古鷹」

「はい」

中路の目がすつと冷えた。この目の色を古鷹は知っていた。中路中将がまだ大佐だったころからの長い付き合いだ。何度かこの目を見たことがある。中路がこの目をした後はたいいてい戦禍の中に飛び込むことになるのを古鷹は知っていた。

「私の権限をもってしても知り得ない作戦内容、522戦隊第二小隊、榛名・霧島の急な出向要請、四日前に出港したつきり姿の見えない一航戦。完全なスタンドアロンで稼働中のグアム第一作戦群の戦術コンピュータ。……どう見る？」

「……急進派の大規模反攻作戦。ですか？」

中路は答えない。ソーサーに戻されたカップにはまだ半分ほどの珈琲が残っていた。腕を組んで外を見据えて、中路は黙り込んだ。

軍上層部はいまだに派閥争いが絶えない。日本海軍時代から続く血の繋がりを重視する軍閥の覇権争いはもちろん、この戦争に対するスタンスの違いによっても派閥が分かれていく。

早急な根本的解決のために早急に敵を排除すべしとする急進派、シーレーン防衛に専念することで経済回復を最優先とすべしと主張する復興派、領土防衛の原点に立ち返り、迫りくる脅威に対してのみ反抗すべしとする穏健派。——中路は穏健派の将校として今の地位に立っている。穏健派ながら攻勢の部隊である西部太平洋第一作戦群の総司令官として軍服を纏う男だ。

「……もしかしたら、もうパンドラの箱が開いたのかもしれない」

つぶやくようにそういつた中路を古鷹はまじまじと見つめた。その時、ドアがノックされる。

「あいてるよ」

「高峰春斗少佐、入室いたします」

真っ白な第二種軍服を着た高峰とその相棒、重巡青葉が並んだ。左手に封筒を抱えた高峰が踵を鳴らし敬礼をする。椅子に座ったまま答礼を返した中路が柔和に笑った。

「……君が電信を使わずここに直接来たということは、アタリ、かな？」

「はい、とても残念ながら、アタリです」

デスクの前まで歩いてきた高峰から書類封筒を受け取る。中身の書類を開けて表紙を一瞥して高峰を見上げた。

「これだけか？」

「まさか」

首の後ろからコードを引き出した高峰がそれを中路に渡す。中路がそれを自分のうなじに差し込むと、すぐに引き抜いた。

「……さすが黒鳥の一角ということか」

「お褒めにあずかり恐縮です、中将」

高峰にコードを返しつつ中路が溜息をついた。

「古鷹」

「はい」

「保険を打っておく。呉の597に直通ラインをつなげ。最悪の場合うちも出張る。522と524、528にスタンバイ。524には対空戦を想定して三式弾を積載するよう伝えろ」

「了解しました」

「高峰君、ご苦労だったと言いたいところだが、おそらく君の協力が必要になる。しばらく付き合ってくれるか？」

「喜んで」

珈琲を煽った中路が立ち上がる。コートかけから制帽をとると左脇に抱えた。

「珈琲、うまくなったな」

「ありがとうございます！ これで金剛さんには負けません！」

「分かり合えるといいがな。……高峰君、行くぞ。青葉君も来たまえ」

「はい、中将」

「青葉、ご一緒いたしますっ」

中路は机の上の書類を一瞥し席を去る。

「すまないが、古鷹。それしまっておいてくれ。カテゴリー2、815だ」

「はい、やっておきます」

赤じゆうたんの敷かれた廊下を進む中路は小さくつぶやいた。

「利口にはなったが、どうも最近鼻が利かなくなった。歳は取りたくないものだな」

「……そうでしょうか？」

「歳をとると口と自尊心ばかりが成長する。懐刀を抜く前に治めるのが最善なんだが、完全に出遅れたよ。金剛に叱られてしまうな……もう彼を巻き込まなければ解決できそうにない」

「しかし、間に合わせるのでしょうか？」

当然だと答えて、中路は制帽をかぶった。左腰に吊った短剣が揺れる。正面玄関を抜けると強烈な日差しが彼の目元に影を作る。わずかだが口角を持ち上げた。

「ネオ・MI作戦……史実の焼き直しにならないことを願うしかない
な」

第17話 MI・始動

The offing of Ogasawara Island
ds

Sept. 13 2082. 0152UTC. (1052JS

T.)

死神か疫病神か。そう呼ばれて久しい。

最後まで水面の上に残った。なぜか被弾しない、被雷しても炸裂しない。どんなに周りがひどい惨状でも必ず帰還する。

気にするなど言ってくれる人もいる。帰還を喜んでくれる人もいる。それでも何度も頬を張られたし、たくさん罵声を浴びてきた。なぜ、駆逐艦のお前だけが帰ってくる？

護衛任務なのになぜお前だけが生きて帰ってきた？

お前さえいなければ。

死神が。

お前のせいだ。

「わたし、は……！」

今度こそ守り切つて見せる。生きて帰して見せる。

たとえ自分が沈むことになつても、守らねばならない。

だからかもしれない、道半ばで被雷して先に進む艦隊を見て、笑顔でくれたのは。

作戦は単純明快。ここで暴れて敵艦隊を攪乱し本隊の血路を拓くこと。

「行きますっー！」

浸水が止まらない。でも、航行できる。主砲は撃てる。魚雷も撃てる。だから単騎反転し、敵艦隊中心へと突っ込んでいく。

「ゆきかぜは沈みませんっー！」

551 Torpedo Squadron Commander
Room / Anchorage of Wake Island
Sept. 15 2082. 0736 UTC. (1936 WA
KT.)

「とんでもないもの拾ったわね。あなた」

六波羅夏海医務長が電を見ながらそういった。部屋には電と航暉、天龍、龍田が詰めている。

「DD-KG08、パーソナルネーム『雪風』。所属は極東方面隊西部太平洋第一作戦群隷下の第526水雷戦隊、もつとも所属したのは結構最近ね。南方の540番台や580番台の水雷戦隊をたらい回しにされて今のところに落ち着いた感じかしら」

クリップボードを航暉に手渡すと夏海は薄く笑った。

「どこでどんな無茶したか知らないけど、ひどいもんよ。最新式の義体と脳殻だったから耐えられたただけだわ。全身ズタボロ、内臓ふくめてひっちゃかめっちゃか。伊波少尉から艤装の破損具合を聞かないとわからないけど、戦艦集めてタコ殴りにでもしないとあんなことにならないわよ。ナノマテリアル被膜もほぼ全部剥がれ落ちてるし、よく息してたって言うしかないわ」

航暉はクリップボードを見て内容を確認してから天龍たちに回す、それを横目で見ながら口を開いた。

「伊波少尉からも似たような報告が上がったよ。主砲・機銃・魚雷・機雷……武装という武装を全弾消費、燃料電池も反応しきって空っぽ。右舷に被雷痕1、直撃弾2、至近弾もしくは爆風によるサイドからの圧碎痕多数、電探・ソナー機能停止。浸水で転舵もまともになわな

い状態で駆動システム4系統中3系統機能停止。残りの1系統も排熱がうまくいかなくて缶が焼けついて半分溶けてるような状況だ。無線も死んでるし、非常用位置指示無線標識装置はどこかへ消えてるし……主な損害だけでこれだ。艦機能は全壊と伊波少尉が断言したよ」

「……生きてここについたのが奇跡だな」

天龍が暗い顔でそういった。ウエーク島哨戒圏でそのような戦闘は確認していない。最低でも三桁キロは離れたところからこの破損状態で単独で航行してきたことになる。燃料も弾薬も尽きて機関も死に体、その無防備な状態で深海棲艦に見つかることなく、この広い太平洋のど真ん中の有人島に生きているうちに漂着する。そんな奇跡はおいそれと転がってないのである。

「で、そのラッキーガールはどんな感じだ？」

天龍が夏海にクリップボードを返しつつ、そう聞いた。

「やっと電脳が生き返ったわよ。脳波もだいたい起伏が出てきたから脳機能自体は生きてるわ。体の方はナノマシンと活性酵素マシマシで全力修復中。生体維持機能の修復はほぼ完了したけど、手足の筋肉の断絶がひどくて修復が思ったより難航中。まあ妖精も全力で直してくれてるみたいだし、この回復速度からすると……起き上がるだけなら今日中にはできるようになるはずよ。もつとも」

意識が戻ればの話だけど。といった。

「それで、どうしてこうなったかの部分はわかったのかしら」

水上電探のアンテナユニットを頭の上で揺らしながら龍田が航暉に流し目を向けた。

「面白いものが出てきたよ。……月刀中佐よりWTC、DD-KG08のパーツナルデータを司令室スクリーンに投影せよ」

「Projects Personnel Data of DD-KG08 CML / Command Tsukigata」

応接セットのガラステーブルが白く光り、すぐに落ち着いた光量に落ち着いた。表示されるのは雪風の三面写真や所属、スペックなどが記されたデータリストだ。

「……雪風は今も呉鎮守府にいることになっているんだ」

「はあ!？」

「雪風保護の一報を入れたらCTCがエラーを返してきた。5日前の9月10日の油槽船『さくらめんで丸』の護衛任務完遂後出港していないことになっている」

投影されたデータを見ると現状欄には確かに
STBY/Kure Admiralty Port
呉軍港にて任務待機中とある。それを見て電は口を開く。

「なら、今いる雪風さんは……?」

「体細胞データが合致している以上別人とは考えづらい。考えられる可能性は二つ、雪風の独断専行、もしくは何らかの極秘任務に就いていた……エラーを返したまま、対策が取られてないところを見ると軍内部の人間に対してもある程度の機密性を有する作戦に従事している可能性が高いだろう」

「極秘任務……」

「おいおい、もしかして雪風は極秘任務の最中だから搜索すらされてなかったとか言うのか?」

天龍が航暉を睨む。彼は肩をすくめた。

「少なくとも搜索隊が編成された痕跡はない。そもそも『出港すらしてない艦の搜索』なんてできるはずないから秘密裏に処理された可能性もあるが」

「胸糞悪い」

「今回は天龍ちゃんと同意見かなあ……」

龍田が凄みのある笑みを浮かべた。隣に立つ電がびくりと震えた。航暉はそれを見て苦笑いだ。

「雪風が生きてたことに感謝しなきゃな。下手したら雪風は軍籍抹消されて存在しなかったことになってただろうさ。……この件に関してはおそらく横須賀から連絡があるだろう。それ次第になるが『雪風はここに来なかったし、けがなんてしていない』ってことになるはずだ。……天龍」

「おう」

「おそらく551には緘口令が敷かれる。暁たちにも黙っておくよう

に言い聞かせておいてくれ。おそらく俺が言うよりもスムーズだろう」

「わかった。……極秘作戦のことは話さないほうがいいな？」

「頼む……次、龍田」

「なにかしら〜」

上機嫌で返事が返ってくる。

「クエゼリンの第二作戦群司令部へ付近警戒を厳にするように一報を入れてくれるか？ 深海棲艦襲撃の兆候があるとでも言ってくれと助かる。雪風のことは伏せてくれ」

「了解よ〜」

「電は明日0900WAKTまでオフシフトだ。今はハイになって疲れを感じてないだろうが、横になっておけ。……もしかしたらうちにも出撃命令が出る可能性もある。休める時にしっかり休んでおけ」

「出撃命令、なのですか？」

「雪風がこんな状態ってことは随伴艦も危ない可能性が高い。極秘作戦とはいえ馬鹿な指揮官じゃなければ全滅する前に救難要請を出すはずだ。そうなると最寄りの基地はおそらくウエークになる。電は貴重な戦力で、ここの最先任艦だ。可能な限りベストな状態に戻しておけ」

雪風が生きてたどり着いた以上、たどり着ける距離に艦隊がいるはずだ。そこでもし救難信号が出たら、最寄りの部隊はおそらくウエークの551水雷戦隊になる。激戦地に飛び込み、敵を退け、味方を連れて帰る必要がでてくるのである。

「了解なのです」

「六波羅医務長は雪風の治療を続けてください。意識が戻った時点で必ず報告を」

「貴方も休んだ方がいいわね、月刀中佐」

「少し探りを入れたら休むよ……以上解散」

敬礼を交わして皆が部屋から出ていく。部屋に残された航暉は溜息をついた。首の後ろからケーブルを引き出すとデスクについているジャックに差し込んだ。

『……高峰』

『はいよ。そろそろ来ると思ってた。ユツキー拾ったって?』

ノイズがあつという間にクリアリングされ、面と向かって話してるような声が響く。遙か海の向こうの相手とこんな会話ができるんだからつくづく電腦通信は便利だ。

『……安心しろ。枝は張られてないし、こつちでも回線を地球3周ほど回してる。逆探されないし割り込みもわかる。それで、カズ。ユツキーの様子はどうか?』

『ひどいもんだ。死ななかつたのが奇跡だ。さすが幸運艦』

通信の奥で笑う気配がした。

『死ななくてよかった。その様子じゃまだユツキーは起きてないね?』

『そうだ。で、どこまで知ってる? 中路中将傘下の部隊がなぜ中部太平洋まで出てきてる?』

『先に言っておくと中路中将はこの件に関しては関わってない。それは俺も確認済みだ』

『なるほど、で、なんで526が出張ってる?』

『グアムの岩城少将はわかるな?』

『ああ、下村准将の後釜の』

『そうだ。彼が急進派の急先鋒だつて言えばわかるか?』

『……反攻作戦か』

鼻で笑った航暉におなじように笑う高峰。

『それも特大のヤツさ。一航戦に二航戦、伊勢型に利根型……アウトレンジに特化してやられる前にやるを体现した編成だ。……作戦名

「オペレーション・ネオMI」』

『……ミッドウエー?』

『イエア。あのミッドウエーの雪辱を晴らすだの時代錯誤なこと言つてCTICの警告を無視して意気揚々と動き出しやがった。作戦指揮将校は523の北川少将とグアムの岩城少将の連名だ。参加部隊は中部太平洋第一作戦群から531戦隊、532戦隊、533航空戦隊、534航空戦隊、西部太平洋第一作戦群から522戦隊第二小隊、5

23 航空戦隊、526 水雷戦隊、527 水雷戦隊……ここまで揃うと
壮观だよな』

各戦隊の司令官の顔を思い浮かべながら航暉はメモ帳にそれを書き取っていく。522と聞いてペンを止めた。

『さて、523……一航戦が参加してるのはまだ理解できる。なんで榛名と霧島まで参加してやがる?』

『お前が522からウェークに飛ばされた後着任した春日野ってヤツが根っからの急進派でな、523の北川少将の信者って感じだ。北川少将に感化されて今回の作戦に乗った』

航暉は黙り込んだ。第551水雷戦隊司令に着任する前の職、第522戦隊司令補佐官時代の部下が巻き込まれている。唇を噛みしめる。

『……おい、まさか』

『中路中将の懐刀だって言われてるお前を中将から切り離して僻地に置いておく。別の艦隊で作戦レベルも違うから顔を合わせる機会はめったになくなるし、何らかの接触を持つとした場合でも初動をつかみやすくなる。お前の異動もこの作戦のためとみるべきだろう。』

『用意周到なこと……』

この水面下の作戦のために、人事部に掛け合い中佐を水雷戦隊司令官に任命するなんて無茶ができるとなると想像以上に人事部と癒着が深そうだ。

『それだけじゃないぞ。521の大和と武蔵は今北方で長距離スナイプの真っ最中で525の軽空母部隊も北方のアリューション列島攻略の応援で択捉にて出撃待機中。中将が動かせるのは524の重巡部隊と金剛・比叡、駆逐隊一つだ』

『それも急襲に備えて西部太平洋から動かせない、か……。中路中将がMIに反対するのは目に見えてる。現状領土防衛で手一杯なのに攻略作戦は時期尚早だって言い続けてる人だからな……』

『完全に出遅れた。お前が異動になった時点で気づくべきだったって中路のタヌキが嘆いてたよ。あんな苦々しい顔の中将初めてみたぜ?……“人虎”の中路も艦が動かせないんじゃないや檻の中さ』

『……こつちもまともにも動けないしな。水雷戦隊指揮を任されてるとはいえ一介の中佐だ。戦艦交じりの艦隊指揮権なんてない』

『向こうもそのつもりだろうさ。攻略作戦失敗したらその救出には551が当てられるのは間違いない。その不手際を551指揮官の前に押し付けて退官させれば慰めにもなるだろうさ。穏健派の手駒の艦も減らせて一石二鳥。成功したら名を上げて、失敗しても相手も道連れにできるとか思ってるぜ、きつと』

航暉は考え込むように黙り込んだ。高峰はそれを辛抱強く待ち続けた。

『……551は現状維持で待機するほかない。雪風の治療は何とか安定圏に入ったらしいからこのまま受け持つ。一応全艦30分アラート待機を続けさせる。中路中将にそう伝えてくれ』

『了解。中将から伝言だ。雪風にすまなかつたと伝えてくれ』だそうだ』

『俺からも伝えるがためえが自分で言いに来て』と一言一句過たずに伝えとけ』

『こつちも了解』

進展があつたら伝えると高峰が言って回線がオフラインになった。首筋から回線を引き抜くと航暉は目を閉じる。右腕を額に乗せ背もたれに体重を預けた。暗くなった窓からは雲が多い空が見える。月が出ているのだろう。空が仄明るく光る。

「……頼む、死んでくれるなよ」

つぶやいて目を閉じた。今できることは祈ることぐらいだった。

Tactical Command Center of the
U. N. Navy Western Pacific
Force / Yokosuka Admiralty P
ort
Sept. 15 2082. 0747UTC. (1647JS
T.)

「航暉はなんと?」

「俺からも伝えるがためえが自分で言いに来て」だそうです」

「厳しいね。……まあ、謝りに行くことを感謝しよう」

《へーい、テートクウ!そろそろ状況を説明してほしいデース》

無線のハイテンションな声に中路は口角を緩めた。作戦指揮所には中路と高峰、青葉を除くと数人の士官がいるだけだ。部隊すべてを動かすような作戦時には40人近くが駆け回る広い部屋も今はがらんとしている。地下3階、4階を吹き抜けにして作られた作戦指揮所の壁一面につけられたスクリーンには中路が使役できる全艦がプロットされていた。

「さきに補給及び補修の状況を報告してくれ」

《第522戦隊第一小隊、金剛・比叡、補給完了、破損なしの絶好調ネー!
三式弾も積載完了してマース》

《第524戦隊、古鷹・加古、偵察機も含めて出港準備完了です。加古がすこし眠そうですね……》

《第528駆逐隊、時雨・白露・朝潮・満潮。以上4隻。出港できるよ》
《つまらない作戦だったら承知しないわよ》

無線の割り込んできた声に中路が小さく笑い声を上げる。

「満潮、残念ながら」とてもつまらない」と我ながら判断せざるを得ない作戦だ。この作戦への参加は各艦の判断に任せる。僚艦が作戦を降りるといってもそれを責めることは禁ずる。そのうえで聞いてくれ」

《……何やら命令違反でもさせようって感じの言い方ネー?》

「今作戦参加艦は対空演習という名目で演習海域ゴルフ51に向かっ

てもらおうことになる。うまくいけば弾を一発も撃たずに帰還でき、私が軍法会議にかかれればいいという練習航海だ」

《……提督、うまくいってそれってことは下手したらどうなるんだい？》

時雨の落ち着いた声が無線に乗る。

「下手すれば中部太平洋艦隊の哨戒域に無断で突っ込んで霧島たちが苦戦するような大規模艦隊とドンパチになる」

《What!?!》

金剛の叫び声に高峰は一瞬目を閉じた。叫ばれると耳にくる声だ。艦隊から疑問が噴出する前に中路が曇みかける。

「呉の軍港で待機しているはずの雪風が瀕死の状況でウエーク島基地に保護された。グアムの岩城少将とうちの北川少将が中心になってミッドウエー攻略を目的とした極秘作戦が遂行中であり、雪風がその護衛として参加していたことも裏がとれた。ミッドウエー到達前に行動不能艦が出ている以上、ミッドウエー周辺での戦闘も多大な被害が出るのが十分に想定される。これより西部太平洋第一作戦群はミットウエー攻略部隊が『全力打撃支援要請』^{ブロークンアロー}を宣言し、ミッドウエーからの撤退戦に移行すること想定し支援艦隊を前進待機させる」

「ここまで言い切ると無線の奥は黙りこんでいた。

「言っておくがこれは君たちにとってローリターンどころか、ハイリスク・ノーリターンな作戦となる。しかしながら攻略部隊の全滅という最悪のシナリオを回避する目的においてのみ、この作戦の意義を見出すことが可能だろう。全責任は私が負う。作戦志願者は志願してほしい」

無線の奥で噴き出すような笑いが起きた。

《水臭いデスネー、高速戦艦『金剛』、志願するネー》

《お姉さまだけでそんなところに行かせるわけにはいきませんっ！、高速戦艦『比叡』志願です！》

《重巡洋艦『古鷹』、志願します。重巡の真の力、お見せします！》

《古鷹が出るのに出ないのもあれだし……『加古』、でるよー》

《雪風が沈みかけるとなるとなかなかの敵だね、……不足はないかな、時雨》いくよ》

《いっちばん活躍して見せるんだから！ 白露型駆逐艦1番艦 白露 志願します！》

《仲間の危機に駆けつけない理由はありません、朝潮、志願します》

ここまでノンストップで無線が続き、少しの間が空いた。

《……揃いも揃って馬鹿ばっかじゃない！》

「なにを今更。賢かったらここで黙って傍観してるさ」

皺が増えた目じりを細めて中路が笑う。

「だが、馬鹿一人は賢者百人の働きができる。力の向きさえ間違えなければな。で、どうする？」

中路がいじわるな笑みを浮かべているのに気が付けたのはその場にいた高峰の特権だった。無線の奥で荒い息が聞こえて、ああもう！と叫ぶ声が乗る。

《私が出なきや話にならないじゃない！》

それを聞いて中路も高峰も笑った。ずっと傍観していた青葉が高峰の耳元でささやいた。

「案外可愛いところあるんですね、満潮ちゃん」

「知らなかったか？ からかうと可愛いぞ、あいつ」

その笑い声が無線に乗ってたのか、何笑ってるのよ!?!と抗議の声が聞こえる。

「よし、全艦の意思を確認した。交代指揮官は高峰少佐に頼んである。月刀の友人で腕も確かだ、安心して誘導されてくれ。西部太平洋第一作戦群、出港用意、かかれ！」

《了解！》

日の目を見ないであろう作戦が動き出す。もうすぐ日が落ちようとしていた。

第18話「MI・前哨」

あまりに痛い痛みをあまり感じなくなるらしい。

ふわふわとした浮遊感の中で名を呼ばれた気がした。仲間先立たれることは数あったが、先立つのは初めてだ。こんな気持ちだったのか。少し悔しいが、安堵もしていた。

もう、誰かが沈むのを見なくてもいい。そう安堵しているのだ。海水の味も感じなくなった。鉛のような体も嘘のように軽くなった。でも、今更になって、少し悔しい。

ああ、せめて犬死になっていないことを祈るべきだろうか。そんなことを考えながら浮遊感に身を委ね――

Medical Office / Anchorage of
Wake Island
Sept. 15 2082. 1632 UTC. (Sept. 1
6. 0432 WAKT.)

雪風は喉の強烈な違和感に目を覚ました。口の中に何か突っ込まれているのがかろうじて分かる。全身が火照っていてまともに動かないし、声を発することも口がふさがっててできないし、目の焦点が合わず周りが白いとしかわからない。

「あ、お目覚め？」

女性の声が聞こえて右手が握られるのがわかる。暖かい。

「聞こえてたら二回手を握ってくれる？」

言われた通りに二回握ると軽い笑い声が聞こえた。

「人工呼吸器気持ち悪いでしょ？ 今外すわね」

直後に喉から何かが引き抜かれる感覚がする。ものすごく気持ち悪いし、少し痛い。

「けほっ……うつ、ああ……」

自分の声じやないようなガラガラとした声が出た。

「とりあえず、お水飲める？」

背中を支えられるようにして体を起こすと目の前にコップが差し出された。程よく冷えてて喉に染み込んでいく。一気に飲み干すともう一杯差し出され、半分ほど飲んだ。

「……あの、ここは……」

「国連海軍ウエーク島基地。生還おめでとう。私はここで医師をしている六波羅夏海医務長よ」

やっと目の焦点があつてきた。ショートのにんにセルロイドフレームの眼鏡。白衣がよく似合う女医さんだ。

「起きてすぐで悪いけど、簡単な質問に答えてくれるかしら？」
そういわれて頷く。

「質問その1. あなたの名前は？」

「雪風、です。DD-KG08」

「その2、所属は？」

「国連海軍極東方面隊西部太平洋第一作戦群第526水雷戦隊、です」

「その3、貴方の母港は？」

「呉鎮守府ですが、今の部隊になつてからは横須賀に間借りしてます」
「いいわ。脳波も安定してるし、致命的な記憶の欠落もなさそうね」
一応この司令官にあなたが目を覚ましたって報告しようと思うのだけれどいいかしら？」

「……はい、お願いします」

頷くと六波羅医務長が部屋から出ていく。4人用の部屋らしいがここだけビニールのカーテンで隔離されているようだ。外は航海薄明……かろうじて水平線が判別できる明るさになっている。

「……また、生き残ってしまいました……」

「後悔してるかい？」

「!？」

つぶやきに返事が返ってきて慌てて振り返ると白い軍装の士官が立っていた。慌てて敬礼をしようとすると右手で抑えられる。持ち

上げたまま行き場を失った右手で、照れ隠しに首の後ろを搔いてみる。黒の短髪に鳶色の瞳、その瞳を細めて優しく微笑むとその士官はビニールの覆いを開けてベットの隣のスツールの腰掛けた。

「はじめまして、だね。国連海軍極東方面隊中部太平洋第二作戦群、第551水雷戦隊司令官の月刀航暉中佐だ。前は中路のおつちやんの部下だったこともある。よろしくな」

「DD-KG08雪風、です。どうぞ、よろしくお願いします」

「ん。……君の艦装は今うちの部隊が全力で修復中だ。今日の午後には一通り終わるらしい。まあどうなるかは今後次第だが、とりあえず安心してくれ」

「ありがとうございます……」

月刀と名乗った中佐は優しく笑って、少し視線を落とした。

「……中路中将は元気かい？」

「はい。金剛さんのティーパーティーからどうやったら逃げられるか相談されました」

「根っからのコーヒー派だからなあ、あの中将。毎日のように紅茶飲まされてはかなわなないだろうな。俺がいた時もそうだった」

「月刀中佐は……」

「4カ月前まで522戦隊第一小隊の司令補佐官だった。毎日毎日紅茶の飲み比べが仕事だったね」

おどけて彼が笑う。雪風も軽く笑った。

「雪風から見て中将はどんな人だった？」

「……すごく強い人だなんて思います」

「……そっか。その中将から「すまなかつた」って伝言を預かっている。きつとありがとうとも思ってるとは思うけど、本人に確認してあげてくれ」

中佐はそういつて微笑んで、表情をすつと引き締めた。

「よく生きて帰ってきた。ウエーク島に流れ着いた時はもう死んでるんじゃないかと思えるぐらいだったからね。俺からもお礼を言わせてくれ。よく生きて帰ってきた」

唇を噛みしめる。

「……そんなに大層なものじゃないです。私がない方が、艦隊だつて……」

「……ミッドウエー攻略部隊のことかい？」

「月刀中佐は私の経歴を見ましたか？」

「ああ、女性の経歴を覗くのはアレだと思つたが、見せてもらつた」

「……怖くないんですか？ 私がいた部隊では必ず轟沈艦が出てるんですよう？」

「それだけ君が優秀だつたつてことだ」

「私が死神だとしても、ですか？」

「死神、かつこいいじゃないか！」

演技くさく両手を広げる中佐。笑顔を浮かべて雪風を見る。

「そんなのはね、君の実力や運へのあてつけに過ぎない。君はこれまでたくさんの部隊で死線を越えてきた歴戦の駆逐艦だ。一つや二つ呼び名ぐらいつくさ。気にしない方がいいよ」

「歴戦のなんて、私はそんな強くないです……」

中佐が困つたような笑顔を浮かべた。

「それでも、君は生き残つた。世界はそう優しくできてない。それは君に実力があつたからだ。幸運も含めて、君に力があつたからだ」

「でも、もう誰かが沈むのを見たくなくなつたんですっ！」

シートを握りこんで叫んだ。芽を閉じるとぱたぱたとシートに滴が垂れる。閉じた瞼には迫りくる深海棲艦の姿が浮かんでいた。

P o i n t “ Q u ・ b e c ” / T h e o f f i n g o
f O g a w a w a r a I s l a n d s
S e p t . 1 2 2 0 8 2 . 2 1 3 4 U T C . (S e p t . 1
3 . 0 6 3 4 J S T .)

皮肉なほどのきれいな青空が広がっていた。

「そろそろ機嫌を直したらどうかしら？」

艦隊の中心でそういったのは青い袴に弓を背負った女性……第523航空戦隊に所属する正規空母「加賀」だ。声をかけられた女性がふいつとそっぽを向く。

「別に、榛名は大丈夫ですけど……」

千早をアレンジしたような服装の袖を揺らし、加賀の斜め後ろにつく榛名。その横では同じような恰好をした女性が眼鏡をくいと持ち上げた。

「中路提督の許可のない出撃ですからね。榛名姉さまがこうなるのは予測の範囲内です」

「そんな予測いつ使うんですか？」

霧島が自慢げにそういうと加賀のとなりを進む赤城がくすくすと笑った。加賀とは対照的な赤袴が揺れる。

「まだ遠いとはいえ慢心してはだめよ？ この辺りは硫黄島の艦隊が守ってくれてるとはいえ哨戒網をくぐってくることはあり得るんですから」

赤城が振り返って榛名の方を見た。

「まあ、中路提督ならこの作戦を許可したりしないでしょうけど、早い段階でミットウエーを手中に収める必要があるのも事実です。ここは北川少将を信頼してみませんか？」

「むう……」

それを言われると言い返せないのが榛名である。

《……風が変わった》

「……それは報告？ 報告なら明確になさい。天津風」

無線に乗った声に加賀がすぐに反応する。艦隊の前方で索敵艦^{ビケッター}を務める天津風からの通信だ。

《こちら天津風、1時方向から本隊に向かって航空機と思われる飛翔物を確認》

「……さっそく来たわね。提督、どうされます？」

赤城がデータリンクを開くと横須賀にいる少将の声が響く。

《……本隊転進、進路0-7-5、526TSqは進路そのまま、天津風と合流して本隊の安全圏まで避難できる時間を稼げ》

「こちら赤城、転進0-7-5了解。第一次攻撃隊の発艦を具申いたします」

《艦戦を優先的に上げろ。ミッドウエー攻略前に艦載機が尽きること
は避けたい》

「了解。赤城、加賀、発艦作業にかかります」

榛名の顔がゆがんだのを霧島は見逃さなかった。

「月刀さんや中路提督なら、こんな指揮はしない……!」

「無線に乗せなくても口は慎んだ方がいいですよ、榛名姉さま。全体の士気に関わります」

艦列を離れていく第526水雷戦隊の面々を見ながら、霧島は目を伏せた。

「神通さんたちは優秀よ。私の分析通りなら競り負けたりしないわ」

「ほんとにそう思ってる……?」

「……はい。榛名姉さま」

それ以降会話はなかった。撃ちだされた艦載機が艦よりも先行し水平線の向こうに溶けていく。戦闘前の緊張感の中で心が冷めていくのを榛名は感じていた。

Medical Office / Anchorage of
Wake Island
Sept. 15 2082. 1653UTC. (Sept. 16.
0453WAKT.)

「私は、神通さんたちと一緒にそのまま前進して天津風と合流、赤城さ

んたちの偵察機が敵艦隊を発見するまで前進を続けました。航空戦が行われて敵艦を一隻撃破して終わり、進路が本隊の方にむいていたのでそこに割り込むように艦隊を突っ込みました」

ぼろぼろと涙が止まらないまま、話し続ける。

「敵艦隊を見たのは午前10時頃で、空母一隻と重巡を中心とした打撃部隊でした。赤城さんの偵察機がマークしてくれていたので丁字戦有利に持ち込めました。黒潮と初風は重巡の相手をして、私は天津風と一緒に空母を砲撃して潰すように言われて砲撃をしました……。直撃弾も出ましたし、天津風も至近弾を出していました。神通さんは軽巡をさっさと沈めて重巡に単身突っ込んで撃破したりして、ほんとに強かったです」

「その作戦指揮は誰の提案だい？」

「神通さんです。北川少将は本隊の誘導に徹していました。霧島さんたちの支援砲撃が届いているうちはうまくいったんですが、敵艦隊が接近してくると戦艦の射線に私たちも入ることになってピタリと砲撃がやみました。赤城さんたちが第二次攻撃の用意を進めてることがわかったので空母さえ落としてしまえば勝ち目があるなっということになって、雪風と天津風で空母にさらに接近したんです」

中佐は続きが語られるまでじっと待っていた。外はだいぶ明るくなっていて市民薄明の時間もそろそろ終わりを告げるのだろうか。

「……その時右舷前方から被雷したんです」

Point “Atom” / The offing of

Ogawara Islands

Sept. 13 2082. 0132UTC. (1032JS

T.)

「雪風っ！」

隣で叫ぶ天津風の顔が見える。痛みで叫ぶこともままならないがそれでも被雷部位の隔壁遮断をすぐに行うだけの冷静さは保っていた。

「砲撃続けて！ 目標・空母ヲ級！」

天津風に向けて叫ぶ。何かをやらせておかないと取り乱してしまいそうな気がしたからだ。雪風自身も砲撃を加えつつ機関の回復を試みていた。

「ユツキー、大丈夫かいな!? うわっ!？」

「黒潮！ よそ見しないで！ こっちがやられるっ！」

重巡二隻から追い回される僚艦をちらりと見るがそれに構っていない余裕はなかった。機関再始動手順を試行、停止、再試行……

「……だめだ、右舷の機関が死んでる。雪風から神通さんへ、ごめんなさい被雷しました。船速維持困難です！」

《わかりました。本隊の離脱を確認。第二次攻撃隊到着まであと25分、……これより海域を離脱します。転進0―8―7！ 雪風は出せるだけ速度を出してください。雪風を中心とした輪形陣に移行して速度を雪風に合わせます》

左翼にいた天津風がいつの間にか右舷側に回っている。空母ヲ級の間立つ形だ。

「連装砲くん！ お願い、少しだけ耐えて！」

自走式連装機銃の試験機……天津風が連装砲君と呼んだ小さな砲が海面に下ろされる。自分の意思をもって動き回るその砲は空母ヲ級に砲撃を加えつつ大きく回り込んでいく。

「逃げるよ雪風！」

無理やり腕をつかんで引つ張られて、空母から引き離される。喫水以下の形が変形したことと出力が半減したので速度が上がらない。せいぜい18ノットが限界だった。生き残った重巡が追いかけてくる。追っ手は空母ヲ級1、重巡リ級2、軽巡ホ級2。おそらく相手は

25ノット以上出ている。まだこちらに魚雷が残っているためうかつに寄ってくることはないだろうが、このままではどうしようもないことはわかっていた。輪形陣が完成したタイミングで連装砲くんが帰ってきた。弾薬の7割を消費していた。

「神通さん……このままじゃジリ貧ですよ」

《雪風はダメージコントロールに専念してください、周りは皆が固めます》

殿艦を務めつつ神通はそういった。いつもと変わらない落ち着いた声。それを聞いて、雪風はわずかに笑った。それを見て天津風が怪訝な顔をする。

「雪風より、北川少将へ、これ以上の損害を避けるため雪風の単騎反転を意見具申いたしますっ！」

「なっ……!?!」

「雪風なにを!?!」

「右舷からの浸水が完全には止まりません、速度がさらに落ちることが予想されます。この状態では態のいい的ですし、ミッドウエーまでの艦隊護衛も困難ですっ!なら!」

せめて囮として貢献させてください! そう叫んだ。

「何を言ってるの! こんな敵、妙高ねえさんに比べればどうつてこと……!」

「これが最後の戦いならそうでしょうけど、まだ作戦海域にも達していないんですよ。ここで総力戦を行ってはいけません。最高の戦力を戦力を減らすことなくミッドウエーに届ける、それが526の任務なら、これが最善のはずです!」

先頭を牽く初風にそう返して、雪風は振り返った。殿艦の神通の顔は俯いていて、見えなかった。

「北川提督、ご英断を！」

《……雪風の単騎突撃を許可する》

天津風が何か言う前に手を振りほどき、左舷の主機の出力を最大に、重心を右に倒すようにしてくりとその場で旋回する。神通がなにか言ったようだが、すぐ横に着弾した重巡の砲弾が立てた轟音にかき消された。

神通が腕を伸ばしてくるそれを避けるようにして横をすり抜ける。

……神通が泣きそうな顔しているのを初めて見た気がした。

「神通さん、ごめんなさい。神通さんと戦えて光栄でした」

《雪風……っ！》

《雪風を除く526水雷戦隊は進路を維持し全力前進、重巡の射程から避難せよ。雪風の英断を無駄にするな》

《……雪風！ あと15分で第二次攻撃隊が来る！ それまで生き残って！ お願い！》

英断、無線から届いた単語にくすりと笑う。そんなに大層な決断をしたつもりはないのだが、傍から見たらそう見えるのだろうか？ 神通の慌て具合からみると英断というよりは蛮勇というべきか。

「あーあ、かつこつけちゃいました。ゆきかぜには似合わないでしょうか」

爆装した敵の艦載機が落ちてくる。まだ舵が利く。取り舵一杯、手に持った主砲を真上に向けて砲弾を撃ちだすと自分の真上で艦載機が弾けた。まともに狙ってないのにあたるとはどうしてなかなか運がいい。まだ幸運の女神に見捨てられてはないようだ。全力前進17ノット……相手との速度差は40ノットを超える。全力が出せなくとももう艦隊が見えてきた。

魚雷管作動。8条の雷跡が伸びる。自動再装填装置を作動させ、次の魚雷の装填を急ぐ。重巡の砲弾の至近弾の風圧に弾き飛ばされるが、転覆せずに済んだ。右舷浸水速度微増、右舷側の浮力がそろそろ厳しくなってきた。

「それでも、私は……！」

皮肉なものだと思う。こうして死に向かって全力疾走を続けてい

るのに弾は当たらない。今日の前で空母ヲ級の足元で水柱が立った。ゆつくりと倒れて沈んでいく。それを見つともう一度魚雷を斉射する。

「わたしは、ゆきかぜは沈みませんっ！」

せめて神通たちが脱出するまでは、ミッドウエー攻略部隊が逃げ切れるまでは。近づくにつれて弾幕が濃くなっていく。電探を掠めてり級の砲弾がすり抜けた。付近の海域の情報が全く入らなくなった。それでも十分だ。目視で狙える位置に敵艦はそろっている。

それにこの戦闘が終われば、自分もきつと生きて帰ることはできない。捜索に出ることを北川少将は渋るだろう。ここで時間をかけてはゴムからの艦隊との合流が遅くなる。勝機を逃すような選択はしないはずだ。付近に島もない。海流は中部太平洋に向けた流れだからきつと陸地を見ることもないだろう。

主砲を立て続けに連射する。撃ちながら距離測定儀を動かし、修正しつつ撃ちまくる。軽巡ホ級の喫水線に命中弾を叩きこんで、左へ転舵。重巡部隊の中心に向けて全力で機関を回す。14ノットが限界だった。

「不沈艦の名は、伊達じゃないのですっ！」

魚雷発射管を敵の砲弾が貫いた。全弾撃ちきっていたから誘爆はしないものの、その衝撃で意識が飛びかける。倒れこむ前になんとかたたらをふんで、バランスを取り戻し、その勢いを殺さずに前へ。

乱射し続けた主砲が沈黙する。慌ててエラーを確認すると弾が切れたことを告げていた。目の前に敵艦隊が迫っているのに主な攻撃手段がなくなった。

「――！」

右肩に砲弾を喰らう。どうやら今日は右舷側が鬼門だ。

それでも何とか一隻の重巡に取り付いた。対戦装備として載せてあった機雷投射機が作動する。起動深度がごく浅くセットされたそれがいくつも起爆し、敵の横っ腹を叩き、砕いていく。360度全方

位に撒き散らされる海水交じりの爆風は雪風自身にも平等に降り注ぎ、ソナーを打ち砕き、右舷の浸水を加速させた。どこか遠くで風切り音が聞こえた、気がした。

Medical Office / Anchorage of
Wake Island
Sept. 15 2082. 1741UTC. (Sept. 1
6. 0541WAKT.)

夜は明けきってしつかりと日が昇っていた。部屋の中は通夜でもあつたかのように静まり返っていた。

「……それでも、私は死ねないんですね」

ベッドの上でぼつりとそう言った。

「私が望んだことなのに、そうしたことなのに。なんだか、悲しいんです」

雪風は十分に泣いて赤くなった目をさらに濡らして俯いた。航暉はそれを黙って眺める。

「誰かがついてきてくれたら、止めてくれたらって思ってる自分がいて、それが嫌になってしまつて……。ゆきかぜは、ゆきかぜは……っ」
「間違つてないよ」

答えは意外に遠いところから帰ってきた。ドアの枠に寄り掛かるようにしていた小さな人影が静かに声をかけたのだ。

「……盗み聞きとは趣味が悪いな、響」

「そろそろ朝なのに休憩室にも執務室にもいない司令官を探しに来たんだ。私室にもいかなかったみたいだからもしかしたらって思つてね」
響はそういつて笑いかけ、体を振つてドアから離れると雪風の隣に

やってきた。

「雪風も私も長いこと生き残ったから、どこことなくシンパシーを感じる。だから、雪風の沈むのを見たくないって気持ちもよくわかる」

「……ほんとにわかるんですか？」

「わかるさ。ここの軽巡を庇って被雷してひどいことになったからね」

響は苦笑いを浮かべながら航暉の方をちらりとみた。航暉も似たような笑顔を浮かべる。

「誰かを守って誰も沈むところを見ることなく自分も沈めたら……私もそう思ってたよ。ごく1ヶ月前までね。ここには姉妹艦もいたしどうもたがが外れてた……でも、今は、『それは違うな』って思えるんだ」

ベッドに腰掛け、雪風の頭に手を乗せる。

「死に急ぐ必要はないんだ、雪風。そんな風に自分から傷つかなくても、君のことを必要としてくれる人がいる。……私も不死鳥だとか呼ばれたけれど、恨まれもしたし妬まれもした。それでも、『今』こうして生きてる。まわりには姉妹がいて、居場所がある。……中路中將も優しい指揮官なんだろう？」

雪風は少し間をおいて頷いた。

「なら、大丈夫だ。もし怖くなったらその中佐を頼るといい。きつと力になってくれるさ」

「おいおい、勝手に話を進めるなよ」

「司令官は断る気なんてないんだろう？」

「断る理由がないからな。そんな事態になる前に中路中將が黙ってないと思うが」

響は雪風の髪感触を楽しみつつ笑みを浮かべた。

「響さんは、大人ですね……」

「ほとんどが受け売りだからそうでもないよ。……それより司令官、そろそろ総員起こしの時間だけど、いいのかい？」

「今更寝たふりをしろっていうのも癪だしいいさ。それにうちの艦は優秀だし、ね！」

航暉はそういうと何かを放り投げた。ドアの向こうに吸い込まれ
“はうっ！”という悲鳴が届く。

「バレバレだ、電、雷、暁。反対側には睦月と如月もいるだろう？」

「はううう……なんでわかったのです？」

おでこをさすりながら出てきたのは電である。どうやら飴玉を投げたらしく、電の手のひらにはいちご味の飴玉が乗っていた。その後ろから出てきたのはバツが悪そうな雷と暁、なんでわかったのかわからないと頭をひねっているのは睦月だ。

「暁たちは電気がどこにあるか確認しとけ。影でまるわかりだ。睦月たちは動きすぎ、気配でばれる。……みんな、雪風を心配してたんだ。まだ死に急ぐ必要はないよ」

雪風の髪をくしゃくしゃと掻き上げて、航暉が立ち亜がる。

「今はしっかり休んでおくといい。暁たちも無理させるなよ」

「はーいー！」

雷が返事をするのを横目に航暉は部屋の外に出る。

「……司令官」

「わかってるよ、龍田」

廊下の角で待っていた龍田が薄く笑った。

「第551水雷戦隊は0600時を以て第三種警戒態勢コンディション・イエローに移行する。

3日前に小笠原諸島沖つてことはそろそろミッドウエーだ。無茶言うかもしれないが、頼むぞ」

「司令官の命令なら喜んで」

スカートをつまみ一礼する龍田。廊下の端の窓からは青を取り戻した海が見えていた。

第19話「MI・開戦」

Point "MI0375" / The offing of
Midway |
Sept. 15 2082. 1635UTC. (0535SS
T.) |

「いつまで尾を曳くつもりだ、神通」

横を進む少女に隻眼の少女が声をかけた。黒い外套に眼帯……CL—KM05球磨型軽巡洋艦5番艦の「木曾」だ。黒い外套を風に靡かせながらCL—SD02 川内型軽巡洋艦2番艦の「神通」を横目で気にする。

「あの時、無理やりにでも止めてればって、思うんです」

「それでも、きつと雪風は止まらなかっただろうよ。無線の声は覚悟を完全に決めていた。……その時の判断は間違ってたと思っ
ぜ」

「……味方を見捨てて、生き残ることがですか？」

神通の目がぎろりとまわった。敵意すらむき出しにして木曾を睨む。

「判断の正誤はそれが評価されるときはTPOに左右される。あの時の雪風の判断はあの時だけ見れば「最善」だった。……雪風なら沈まない、どこか希望的予測があったのは事実だ。それを差し引いてもあそこで乱戦になったら砲撃支援もできない状況でさらにたくさんの被害が出たのは明白だろう？」

「……そんなんじゃ、ないんですよ。木曾」

背後では明るい朝焼けの中、第2次偵察隊が飛び出していく。利根と筑摩の水上偵察機に、祥鳳と瑞鳳の艦戦が明るい朝日に消えていく。重く低い風切音の中で神通は目を爛々と光らせた。

「あの子は、雪風は、……沈みたかったです。誰にも見えない場所で、沈みたかったですよ。生きて帰る気なんてなかった。だから笑って「神通さんと戦えて光栄でした」なんて言えた。……帰る気がないってわかってたのに追いかけれなかった」

木曾は目をそらすことなく、それを受け止めた。

「木曾ならわかるでしょう？ 第527水雷戦隊を率いる木曾なら。旗艦は部隊を指揮し、作戦を成功に導く。それは一時的な勝利に囚われず、長期的に有利を維持できなければならぬ。ならば、私たちは是が非でもあの子を止めるべきだった！」

叫んだ神通に驚いたのか付近の対潜哨戒を行っていた、黒潮が振り向いた。

「……そうだな。俺たちは雪風を止めるべきだった。だが、雪風が残した成果を否定することはできないだろ。雪風が敵艦隊に突っ込んだことで神通たちの526水雷戦隊は戦域をほぼ無傷で離脱でき、今こうして部隊を進めることが可能になった」

木曾は神通を抱き寄せた。そのまま彼女の頭を胸に抱く。

「……次に雪風に会ったら、うんと叱って、うんとほめてやらなきゃな。けどな神通、今あんたがいくら地団駄を踏んだところで、今あんたが指揮する部下は路頭に迷うだけだろ。だから、自分を責めるのも、雪風を想うのも全部後だ。それに……雪風は幸運艦だ。持前の幸運でどこかの哨戒部隊に拾われてるかもしれねえ。まだ沈んだと決まったわけじゃねえ。あんたの部下だろ、信じてやれよ」

そういつて木曾は彼女の肩を支え、笑って見せた。

「華の二水戦の旗艦がこれじゃあ部下に示しがつかねえ。気張れ、神通」

「……言われなくとも」

ぐいと鼻の下を腕でぬぐい、神通はミッドウエーの方向を眺める。「敵を穿つは我等が誇り、世界最強と言わしめた二水戦の戦い、お見せいたしましたよう」

—— だれも、沈めずに。

第二水雷戦隊の時の記憶が頭を持ち上げる。時代は変わり、栄光はもう過去のもの。しかしながら神通にとって、それは大きな支えであった。そうだ。私は神通、第二水雷戦隊をもっとも長く率いた艦。たとえば体が二つに割れようとも最後まで戦って見せる。

「それでいい、神通。行くぞ、クソツタレな戦場のお出ましだ」

木曾も前を見据える。強烈な朝日が顔をのぞかせたところだった。

Tactical Command Center of the
U.S. Navy Western Pacific Fleet
Force / Yokosuka Admiralty Port
Sept. 15 2082. 1847 UTC. (Sept. 16
0347 JST.)

「少し早いですが、交代いたしましたでしょうか」

仮眠を終えて出てきた高峰が司令官卓に座る中路に声をかけた。

「ああ、……頼めるかな？」

「喜んで」

高峰は司令補佐官の卓に向かうとQRSプラグをうなじに突き立て、リクライニング式の椅子に深く腰掛けた。

「0348 JST、指揮権を中路中将より高峰少佐に移譲する」

「こちら高峰少佐、指揮権移譲確認。これより艦隊の指揮に入ります。

……それじゃ、みんなよろしく」

意識は海の上を進む艦隊へ飛び、強烈な朝日がもろに目を貫いた。

「……さすが海上、まぶしさがもろだ」

《それは当然ネー。ところでメイジャー・タカミネ、ミッドウエー攻略部隊の方はどうなりました？》

「今頃はおそらくミッドウエー沖180海里つてところだろう。……カズの話だと今日の朝にミッドウエー爆撃の実施を実施予定らしい」
《……もし今飛び出したとして、海域到達は最短でも日没直後が限度だね》

時雨の音が響く。乾パンをもそもそと食べているのか、声が少しこもっている。

「なにもなければそれでいい。戦力も〴〵これまでの規模が通用するのなら〴〵十分なんだ」

《なにか含みがあるような言い方ね?》

とげがある口調で満潮が突っ込んでくる。

「……北方海域がここ数日沈静化してるのは知ってるか?」

《いいえ、初耳です。金剛お姉さまは知ってました?》

《ノー、初耳デース。朝潮さんたちはどうですかー?》

《私も初耳です》

「沈静化と言っても敵が出てきてないわけじゃないんだ。数が減って、水雷戦隊以外見当たらなくなっただんだ」

高峰はそういつて黙った。

《もしかして、その消えた部隊がミッドウエーに?》

「可能性としてはありうるんだ。だから中路中将が動いた。北方の空母がもし、本当に応援に駆け付けていたとしたら……最悪の場合二桁単位の空母に重巡、戦艦が待ち構える可能性がある」

P o i n t “ M I O 3 7 3 ” / T h e o f f i n g o
f M i d w a y |
S e p t . 1 5 2 0 8 2 . 1 9 3 7 U T C . (0 8 3 7 S S
T .) |

「なんじゃ、なんなんじゃこれは!」

利根が焦ったように声を上げる。横を進んでいた筑摩が不安そう

に利根を見た。

「利根より報告！利根2番機敵艦隊発見！ 2時方向80海里に大規模敵艦隊！ 確認できただけで空母最低でも12隻、戦艦クラス4隻！ 重巡多数！ あっ……二番機ロスト！ 敵航空隊出撃しているようじゃ！ 第一種警戒体制への移行を意見具申する！」

「空母12隻!? 予測では最大で6隻じゃなかったの!？」

蒼龍の泣き言が聞こえるが、それより早く、加賀が反応する。

「出し惜しみしては押し負けるわ。提督、艦戦を全機発艦させます。許可を」

《……わかった。艦戦の発艦を許可する。第一種警戒体制。空母機動艦隊は輪形陣へ、527はその護衛に入れ。打撃群は複縦陣へ移行しろ。526もついていけ》

それを聞いた時には赤城と加賀はもう矢をつがえていた。弓を引き絞り、弦が鳴り、飛び出した矢が、すぐに光に変わり、烈風改に形を変える。追って二航戦が、瑞鳳が祥鳳が、艦戦を上げていく。艦隊の位置がゆつくりと入れ替わっていく。

「神通、無茶はするなよ？」

「わかってますよ。ここで死んでは、あの子に向ける顔がなくなりますら」

木曾に声をかけられて、神通は笑った。木曾はその息をのむほど美しい笑顔を見て、見惚れると同時に、背筋が寒くなるのを感じていた。「そうか」

木曾は唇を噛んだ。神通は嘘をついた。でも、ここかける言葉が見つかからない。

(その笑顔、きつと雪風がお前に向けた笑顔と一緒だぞ……)

神通に率いられて天津風たち第526水雷戦隊が先行する。木曾は左腰に吊った軍刀に触れる。

「舞風、夕雲、巻雲、秋雲」

自分の部下を呼ぶとすぐに返事が帰ってきた。

「さて、敵も考えることは一緒だろう。敵の艦載機が来るぞ。対空見張りを厳にしろ」

「りょうかいです!」

「巻雲く。ほんとにお前できるかなく?」

「秋雲は黙っててくださいいっ! 夕雲姉さん、見ててくださいいね!」

「うふふ、わかったわ」

通常運転の三人組を見てから、舞風が浮かない顔をしているのがみえる。

「舞風、大丈夫か?」

「はい……、大丈夫です」

そういうも目線が落ちる舞風を見て、木曾は彼女の肩に手を回した。

「大丈夫だ。舞風。いざとなったら俺が守ってやるから」

舞風がそういう心配をしているのではないとわかって、わざとそう声をかける。

「はい、あ、ありがとうございます……」

「ん。輪形陣に移行する。殿艦は夕雲、舞風は俺と前だ。左舷に秋雲、右舷に巻雲。いいな?」

「はいっ!」

雲がぱらつく空を眺める。木曾は配置に向かう仲間を見て笑いながら視線を戻した。

「さっさと終わらせて帰ろうぜ、神通」

つぶやいた言の葉は誰にも届かず海原に吸い込まれて消えた。

エニウエトク環礁を小さな艦隊が出ていく。

「まったく、司令官も人使いが荒いのよ！」

「でも、それだけ司令官が私たちを頼ってくれてるってことですし」

「吹雪も人好きねえ、いよいよに使われるのが落ちじゃない？」

「でも、叢雲もどこか嬉しそうにしてた……」

「初雪、アンタね……！白雪も笑うなっ！」

第553駆逐隊の面々は姦しくしながらも海の上を進む。いきなり命じられた哨戒任務だ。なんでもウエーク島方面で敵艦隊の出没が確認されたらしく。エニウエトク基地でも付近哨が追加実施されることになったとのことらしい。北の海域を念入りしておけということだ。

「そもそも哨戒だったら、千代田さんのほうが適任でしょう？」

「まあ、千代田さんは演習から帰ってきたばかりですし、今は甲標的も積んでそちの習熟も必要です」

「せめてもう一隻、水母がいてくれたらなあ……」

白雪の言葉に溜息をつく旗艦・吹雪。ないものねだりをしてはいけないのはわかってはいるが、この広い大海原で偵察を主任務とする水母が一隻というのは少々厳しいものがある。

「でもウエーク島は水母なしで運用してる……、できないわけじゃない……」

「あら初雪、アンタにしては積極的？」

「本気だしてないだけだし……。ウエークの妹たちには負けてられない……」

「あ、前回の演習まだ根に持つてるんだ……」

「電たちに瞬殺されて千代田さん守れなかったですからね……」

全員で遠い目をするのは3週間前ウエークの551水雷戦隊と模擬戦をしたことを思い出したからである。暁と雷のアタッカー二人に陣形をひっちゃかめっちゃかに崩されて、響の雷撃一発で千代田が轟沈判定。……交戦宣言後わずか5分のことである。初雪は開幕直

後に電のペイント弾を頭から被って大破判定、その後天龍から引導を引き渡されるというなかなか面白くない結果をいまだに引きずっているのである。

「ウエークかあ……第一作戦群撃破したり、最近なんだかすごいよね」「あれぐらい私が本気でしたらできるし……」

「戦艦二隻、重巡二隻、正規空母二隻に昼間に1時間で全艦武装解除？」

「なんの冗談よ」

「でも、ずっと格下だ、車引きだって言われ続けた第二作戦群の水雷戦隊が活躍できるって思えるとなんだかドキドキしませんか？」

目を輝かせるのは白雪だ。それに領きながらも吹雪は顎に手を当てて、何かを考えるようなしぐさをした。

「でも、なんだか最近この辺りも不穏な感じになってるよね？ 第一作戦群が活躍してたような出動も第二作戦群に回ることも出てきたし……」

「北の方はもつと大変だって司令官がおっしゃってましたし、ウエークの部隊も結構北の方に出撃してるみたいです」

「なんか……主力艦隊の温存に走ってる気がする……」

初雪は意外にこういう時にしっかりと状況を読んできてる。それを吹雪たちはなんだかんだ言ってる信頼している。だから初雪の方を見て先を促した。

「守りの応援に出てくれることも少なくなってきたし……もしかしたら全力の主力部隊で反攻作戦とか考えてるのかも」

「それでこき使われる立場になってほしいもんね」

叢雲はそういいながらもどこか笑っていた。

「でもまあ、どうしても必要だというなら、やってやろうじゃない！」

「叢雲が……デレた？」

「デレてない！ 初雪！ そこに直れ！ 酸素魚雷を喰らわせるわよっー！」

その時、白雪の表情が一瞬で引き締まった。

「吹雪姉さん、無線」

「え？ あ、はい、こちら553DSQ、——え？ はい！」

「吹雪？ どうしたのよ？」

叢雲が声をかけるが吹雪は聞いていない。代わりに白雪が振り返った。

「ッやってやろうじゃない」って言葉、嘘じゃないですよね？……どうやら今からやることになりそうです」

「……え？」

551TSq Commander Room / Anchorage of Wake Island
Sept. 16 2082. 0119UTC. (1319WAKT.)

無線がいきなりつながった。相当の緊急性を要することを意味するカテゴリーIVの通信が、視界に直接投影される。電腦への直接通信はそれだけの内容であることを意味していた。航暉は作業の手を止め、無線を開く。

《こちら、月刀中佐》

《航暉、出られるか？》

挨拶もすべてかつとばし、端的な問いだけが返ってくる。歳をとっているものの、張りのあるバリトン……中路中将だ。

《……全艦第二種警戒態勢で待機中。出ろと言われれば30分でフル装備の水雷戦隊を出港させられます……状況は？》

《ミッドウエーの南南西140海里でミッドウエー攻略部隊が敵の主力機動艦隊の大部隊と交戦中、制空権を喪失し敵艦載機にいいようにやられている状況だ》

《敵主力は？》

《現状確認できるだけで空母11隻、戦艦4隻、重巡6隻、軽巡4隻、

駆逐艦16隻だ。練度は高くないようだが数が多すぎてどうにもならん。だが、一番の問題は……」

中路が画像を送ってきた。中路自身の視覚情報をリアルタイムで流してきているらしい。

《敵の攻撃の衝撃で北川少将が戦死して、空戦音痴の岩城少将が指揮を執っているってことだ》

おそらく横須賀の戦闘指揮所の中の映像なのだろう。首の後ろから後頭部が焼けただれ、耳から血を流して司令官卓に突っ伏している男が映っている。白い制服が首を覆う詰襟を中心に赤く染まっていた。

《岩城少将には私から全力打撃支援要請を出させる。航暉には救出部隊の総指揮を任せたい。できるか?》

全力打撃支援要請宣言下の救出部隊の総指揮——救出に必要な全ての艦、すなわち戦艦・空母を含めた全ての部隊の指揮権を航暉に持たせると言ってきた。たしかに、全力打撃支援要請が出ているような非常事態に前線指揮官が総指揮を執ることは軍規で認められている。水雷戦隊の指揮官しか生き残っていない状況で戦艦も含めた艦隊を離脱させるような状況を想定してのことだ。ただし……実施された前例がない。しかも作戦参加していた指揮官ではなく、最寄りの基地の水雷戦隊司令官が総指揮を執ることは普通ならあり得ないのである。

だが、中将がそれを「やれ」と言ってきた。

《……それは命令ですよね?》

《金剛たちも今全力急行中だが間に合う保証はない。この状況でまともにも動けるのがお前たちぐらいしかいない。全責任は私が負う。お前が動くのに必要な書類も人員も艦もすべて揃える。上層部には文句なんぞ言わせん。やってくれ》

悩んでいる時間はなかった。

《……デカトンケールと『鷹の目』の使用許可を。あと高峰と杉田を最優先ラインでつないでください》

《すぐにつなぐ。ほかは?》

《時間との勝負になります。常に私との回線をオンラインで維持してください。内部からの横やりだけは勘弁してくださいね》

《わかった。月刀航暉中佐、これよりミッドウエー攻略部隊救出任務の指揮を中将権限を持って命ずる》

それに了解を返すと、すぐにデスクを離れ、地下へと続く滑り棒をつかむ。白い布の手袋がすれて熱を発するが、気になるころには地下二階に到着していた。戦闘指揮所^Cにはもう火が入っており通常の電灯が点り部屋の中を照らしていた。司令官卓のQRSコードを引き出し自分の首筋に突き立てる。

「月刀中佐よりウエーク島^W戦術コンピュータ^T、セルフモニタを即時実行し問題が無ければ全基地機能を第一種警戒態勢に移行せよ」

「DE WTC SELF CHECK—C MPL / SH IFT
ALL SYSTEMS CND—RED」

スクリーンにそう表示されるとともに基地内に大音響で警報が鳴り渡った。

「月刀中佐より総員に到達。第一種警戒体制発令。総員戦闘用意」

基地にいる隊員や艦娘たちの無線が一斉にオンラインになる。スクリーンには基地所属の艦娘の状況や周辺海域の状況などが並べて表示され、壁一面のスクリーンがあつという間に情報で埋まってくる。

《行先はミッドウエーかしら》

真つ先に無線に反応したのは龍田だった。

「そうだ。敵艦40隻を相手に攻略部隊が押されてる。助太刀に出るぞ」

《よ、40隻!?!》

無線に乗った叫びは暁のものだろう。天龍が大丈夫だと言っているのが聞こえる。

《なあ、司令官よ。この出撃、アンタが指揮すんのか?》

「全力打撃支援要請発令時には俺が総指揮を執るようにと中央の中將殿からの命令だ。作戦参加艦のすべての指揮を俺がする。戦闘海域の誘導なんかは高峰少佐とかにハンドアウトすることになるが、戦闘の指揮は俺がとる」

《なら問題ねえ。編成と装備は?》

大部隊相手に問題ないと言い切って、天龍はさっさと必要な情報を聞き出そうとする。

「今回は全艦参加の総力戦になる。旗艦は電だが、おそらくほかの部隊の艦が合流する。その時は第551水雷戦隊自体の指揮は天龍にシフトさせ、電には連合艦隊旗艦を務めてもらう」

《はわっ!?》

電の素っ頓狂な声が響く。特型駆逐艦の姉妹を中心に驚いた叫び声の音量に航暉は目をしかめた。

《し、司令官さん! ほ、本気で言ってるのです……? いなづまが他の艦隊の指揮もとるんですか……?》

「そうだ。西部太平洋艦隊からの応援が間に合えば、その応援も含めた艦隊の旗艦だ。……電、今回の任務の目的は機動部隊の救出、つまり撤退戦になる。味方を守り、無事に撤退させるためには広い視野と高い判断力、そして……仲間を守る強い意志が必須だ。俺はその全てにおいて電を信頼できると思っっている。そうでなければ下村准将との演習だって乗り切れなかったはずだ」

電の戸惑った声が無線に乗る。

「今回の任務ではおそらく電の力が必要になる。頼む」

《……わかり、ました。頑張るのですっ!》

「頼む。応援に駆けつけられるのは早くても日没直前になる。電と響は照明弾を持っていけ。天龍と暁は対空特化、睦月と如月は連装機銃を増設していく。暁!」

《な、にやに?》

無線の奥で慌てて舌を噛んだらしい声があった。

「お前の『眼』を信じてお願いがある」

《なによ?》

「探照灯、持って行ってくれるか？」

息をのむ音がする。航暉は「純粋な艦だつたころの暁」の最期を知っている。探照灯を照射した戦闘で、たった15分で沈んだことも知っている。だとしても、今このメンバーで探照灯を持ち逃げ切れるだけの腕を持った艦は暁しかないのだ。

《……しようがないわね、紳士をお願いなら、淑女レディーは断れないじゃない》

暁の声はどこか笑っていた。

《帰ったら間宮アイスが食べたくなるかもしれないけど、いいかしら？》

「なるほど、もし食べたくなつた時のために用意しておくことにしよう……装備換装が終わり次第出港することになる。……大規模艦隊相手の乱戦になる可能性が高い。危険だが全員で生きて帰るぞ」

《待つてくださいい！》

無線にあまり聞きなれない声が割り込んだ。

《雪風も、雪風も行かせてください！》

割り込んだ声に面喰っているうちに声の主、雪風は続ける。

《体の修復は完了してます！ 全力打撃支援要請プロテクションアローが出るような状況なら一隻でも多く必要なはずです！》

「六波羅医務長」

《医師としてはボーダーよりちよつと上つてところね。許可は出すわ》

「……伊波少尉」

《雪風ちゃんの艦装が平菱インダストリアル製で助かりました。睦月ちゃんと如月ちゃんの艦装のスペアパーツを流用して補修済みです。酸素魚雷も含めて全装備稼働試験も済ませました。……部隊の仲間が戦ってるんです。行かせてあげられませんか？》

医師と技師の援護射撃に「お願いです、しれえ！」とさらに追い打ちをかける雪風。さらにくすりと笑う声でした。

《いかせてやりやあいじやねえか。そういう無茶の仕方は嫌いじゃないぜ？　なあ、電？》

《私からもお願いです。雪風ちゃんを出撃させてあげてほしいのです》

「……ああもう！　雪風！」

《はいっ！》

頭を掻きながら無線に叫ぶと、すぐに張りのある返事が返ってきた。

「前回のような特攻じみた攻撃は許可できない。俺や電の命令を必ず遵守すること。独断での行動を余儀なくされるような事態に陥ったとしても、いたずらに自分の身を危険にさらすような無茶な攻撃をしないこと。守れるか？」

《はいっ！　必ず守ります！》

「伊波少尉、酸素魚雷のストックは？」

《十分にありますよー！》

「予備も含めて雪風に持たせるだけ持たせろ。……雪風を臨時で551水雷戦隊に組み込む。雪風は天龍の指揮下に入れ、天龍」

《わーってるよ。世界水準軽く超えてるんだ。初めて組む相手だつてしつかり押さえるさ》

「頼むぞ。装備換装が終わり次第抜錨、出撃する」

『了解！』

551水雷戦隊の戦いの火蓋が切つて落とされた。

第20話「MI・矜持」

Tactical Command Center of 551TSq / Anchorage of Wake-Island
Sept. 16 2082. 0151UTC. (1351WAKT.)

戦術指揮所ではいくつものデータが浮かんでは消えていく。キーボードと音声入力装置、脳に直結したQRSプラグを通じたコマンドといくつも駆使して、航暉は指揮を出していく。

「デカトンケールの使用許可、まだですか!？」

《今やつとる! ええい、中将を顎で使いやがって!》

「俺が動くのに必要な書類も人員も艦もすべて揃える”つったのはどこの誰ですか! 私指指揮権とるまでには用意お願いします! 高峰!」

呼びかけるとすぐに返答が返ってくる。

《今エニウエトクの539RCVSqにSCだ。甲標的6機に瑞雲15機、予備燃料満載で千代田が用意中、出港予定時間0205UTC! 同じくエニウエトクの553DSqに応援要請を出して承諾済み! 千代田と合流してミッドウエーに向かわせる》
「522本隊は!？」

《最短距離で向かわせてるがおそらくウエークからの方が早い。水雷戦隊突入時には砲支援はないと思っただ方がいいだろう》

「杉田は捕まったか?」

《安息日で上陸してた奴がそう簡単に捕まると思うか!? 緊急コールを出してもらってるがまだだ》

「敬虔な十字教徒ってわけじゃあるまいし。そもそも今日は日曜じゃねえだろうが。アイツの眼が必要になる、急いでくれ」

《それでも全速だ！ 相変わらず人使い荒いなお前！》

悪かったな！ と叫び返しつつ、電の通信をQRSプラグ経由で受ける。

《出港用意完了なのです！》

《チェックオンモニタ。第一ドック注水開始。天龍の出港確認、雪風、第4出撃ドックへの進入を許可、中継器のリンクの用意ができた時点でレポートせよ》

《ゆきかぜ、了解です！ 第4ドックに入りますっ！》

《こちら第3ドック暁、リンクの用意ができたわ！》

《暁、リンクスタンバイ。5、4、3、2、1、マーク》

《っ……リンク確認よ！》

6つある出撃用ドックを回して9人を最短で出撃させる、ひっきりなしに繋がる無線をさばき続ける。

《CTCとCSCが救出作戦を認可した！ カテゴリーIV a、最優先ラインだ。デカトンケールⅢの使用許可が出る。あと……90秒待て》

「感謝します中将！」

航暉は獰猛な笑みを浮かべる。デカトンケールは新首都に設置された巨大なスーパーコンピュータ群だ。大型ビル3フロアにスーパーコンピュータを詰め込んだようなものが3つで1セット、それを6セット用意したものの総体が“デカトンケール”と呼ばれている。

攻略作戦参加艦だけで21隻、応援部隊を含めれば40隻近い艦の指揮を執る必要がある。そんな量の戦闘情報をリアルタイムで処理するためには人間の脳一つではまるで足りない。戦闘のパターンを何千通りも予測させ、リスク評価を行い、最善となる結果になるための道筋を照らす。そのために必要な膨大なデータを捌くには強力なコンピュータが必要になる。

「高峰、デカトンケールにダイブ用意！」

《了解だ。情報に吞まれるなよ》

「もちろん、身代わり防壁を噛ませとけ」

《ん。ダイブ・レディ》

使用許可が下りた。デカトンケールへの回線が開く。電腦のIDが読み込まれ、巨大な情報ハブに意識が行き着く。情報の海に降り立つと、航暉は海の上にくつももの点を浮かび上がらせる。点にタグが浮かびあがり、一つひとつに名前が表示される。INAZUMAにTENRYU、YUKIKAZE……一つひとつの点がゆっくりと進んでいく。

「無事にログインって訳だ」

「意識が散り散りになってないところをみるとそういうことだな」

航暉の横に一つの影が降り立つ。第二種軍装に身を包んだ高峰だ。

「で、肝心の介入許可は？」

「今我らが中将殿が抑えてくれるさ。……艦隊の誘導は俺が持つ。カズは先にミッドウエーに意識飛ばしとけ」

「助かる……月刀中佐より551TSQ、これより艦隊の誘導を高峰少佐にハンドオフする」

《こちら電、了解なのです》

旗艦の許可を得てから高峰に頷く。

「さて、許可が下りた時には手遅れでしたとかやめてくれよ……」

航暉が海面を蹴った。

Headquarters of the U.S. Navy
Mid-Pacific Fleet / Guam
Apr Naval Harbor
Sept. 16 2082. 0223UTC. (1223Ch
ST.)

岩城少将は脂汗を浮かべて司令部の椅子に腰かけていた。肘掛で上体を支えなければまともに座することもままならないほど震えている。

「そんな、馬鹿な……!」

《岩城少将! このままでは押し切られます! 敵戦艦の射程に入る前に撤退の許可を!》

赤城の悲痛な声が無線越しに響く。それを聞いた少将が引きつった笑みを浮かべた。

「あのうるさい蠅どもを今すぐ撃ち落とせ! 艦隊に近づけるな!」

《すでにやっています! しかし物量で圧倒的に負けている以上制空権の完全確保は不可能です! 祥鳳と蒼龍が大破、加賀さんが中破、私も小破している状況ではこれ以上の航空戦での状況打破は困難なのはわかりでしょう! この状況では観測射撃も間に合わない!》

「何とかしろっ! なにが無敵の機動艦隊だ。我々の威信がかかっておるのだっ! 撤退は認めん!」

《岩城少将、それは無茶じゃ!》

「文句があんのか、利根!」

《文句しかないわっ! どうして中部太平洋の指揮官はここまで先見の明がないのじゃ!? 最寄りの基地までどれくらいあるのかわかっておるのか? 応援もはいそうですかと来るわけじゃないのじゃぞ!?! 勝算もなくこんな大艦隊に突っ込んだのか!?!》

「ええい、黙れ黙れ黙れっ! お前は真っ先に解体してやる!」

《ありがたいのお、この状況で“生きて帰せる”と司令官は本気で思っただらっしやる》

言葉の端にこもった強烈な皮肉に真っ赤になる。

「貴様っ……!」

《指示がほしいのお、少将。吾輩を解体するにはここを生きて乗り切らねばならんぞ? 司令官殿、指示を》

「……貴様らの不手際なんか知るか! 勝手にそこで沈みやがれっ!」

《それは聞き捨てなりませんな、少将》

艦娘とは違う硬質な男性の声が割り込んだ。司令部のスクリーンに強制的に映像が割り込んだ。白髪が混じり明るいグレーに見える髪を抑えるように制帽を目深にかぶったその男は柔和な顔には不釣り合いなほどの眼光をたぎらせて少将を睨んだ。

「中路……！」

《精鋭21隻をむぎむぎと沈める気か。半ば手の込んだ自殺ですな》

中路は少将を睨んだまま、横にすつと体を振り、後ろを見せるようにする。そこには死体袋が一つ横たわっている。

《この事態、部下の北川を押さえきれなかった私にもその責の一端があるかもしれない。その責はあとでしかと受け止めるとして、少将、この後どうされるおつもりか？ 艦隊指揮権はまだ少将にある》

「中路、お前いつからそんなに偉くなった？ それにお前には関係ない」

《おや、お忘れですか少将。今私は中将で、思い違いがなければあなたより階級は上だ。そして、私の部下の艦が参戦している時点で無関係ではあるまい。まさか、私の船を私の断わりなく沈める気ではあるまいな？》

ゆでだこもびつくりするほど顔を赤くして言葉を詰まらせる少将。皮肉な笑みを浮かべながら中路が語気を強めて問いかけた。

《質問に答えていただこう。あなたの策をお聞かせ願いたい。本気で玉砕覚悟で突っ込めばその努力が認められるなんて甘いこと考えてはおらぬよな？》

「先輩に対してその口の利き方はどういうつもりだ……！」

《その下らんプライドが艦を沈める。今こうして話しているときにも敵の艦載機が飛び交っており。敵艦が迫っており。有効な策があるなら聞かせてほしい。ないなら全力打撃支援要請を出して応援部隊に指揮を譲れ》

それを聞いた少将が反射的に立ち上がった。

「ふ、ふぎけるなっ！ 攻略部隊の指揮を渡せだ！ そんなことでき

るわけあるかっ！」

《なぜ？ このままでは精鋭21隻を無残に沈めた将校として汚点が付くだけですぞ。現場の撤退許可を退け、ただいたずらに船を沈め、何の成果も残さなかった作戦の指揮を執った少将として扱われる。そんな将校に次のポストなんてあると思うかね？》

「貴ツ様ア……！ 穩健派の腰抜けの分際で」

《その腰抜けですら立たなければ越えられない状況になっている。違えますか少将？》

さりとてそういつて中路は黙る。少将はその言葉を聞いてしばらく何かを言いたそうに睨んだ後、椅子の背もたれに体重を預けた。

「……この作戦は、この作戦はもう後には引けぬのだ、中路」

《……そんなことぐらい私も存じておりますとも、岩城先輩》

中路は目を伏せる。

《急進派の急先鋒と言われ、早急に深海棲艦の根絶を訴えたのも、攻勢の部隊を目指し尽力してきたのもわかっておる。……“三笠”の死を一番悼んでおったのもお前だ。あんな思いをしたくないと思つて行動していたのも知っておる。だからこそ脅威の早期排除に走つた》

少将はうなだれて黙り込んだ。無線の奥、遠くで銃撃の音が響く。

《この危機的状况を本当に解決するには脅威そのものを排除せねばならぬ。それは正論であり、誰だつて最後にはそこに行き着く。わしもそうだ、先輩よ。じゃが、あなたは時に熱くなりすぎ、焦りすぎる。……今回の作戦は北川の発案だろう？ あなたが空母を主体とした遠距離戦を重視するとは思えなかった》

「……お前に何がわかるんだ」

《同じ飯を喰らった仲間で、あなたはわしを育ててくれた。納得はできなくとも、理解はできた。防衛大の学生だったころからあなたは国を憂い、未来を憂っていた。……これ以上小娘たちに国防を任せられない。だが、彼女たちしか参加を許されないという歪んだチェスボードを前に、盤に乗ることすら許されぬ軍人ポーンがどうするべきか——

——早急に戦争を終わらせるしない》

「そこまでわかつてなぜ動かん！ “人虎”とまで言われたお前

が、なぜ！」

《……歳をとったからかも、しれんな。もう老害は退かなければならない時が来たのかもしれない》

その声のトーンに少将は顔を上げた。中路が見せたこととがない表情だった。とても、老けて見えたのだ。

《五期の黒鳥がいい例だ。もう次の世代が迫っておる。昔ながらの老兵にはもうついていけない戦場だ》

「……お前ですら、そうか」

《焦る気持ちもわからないでもない。わしらの時代に深海棲艦が現れて、わしらの世代で終わらせるにはもうここしかなかった。だから、北川もあなたもここで博打を打った》

それを最後に言葉が消える。

「……なあ、中路」

《はい、先輩》

「わしの卒業前、防衛大で飲み明かした時のこと覚えているか？」

《はい。私の青臭い夢を一晩なじられたので忘れられるわけがありません》

少将が皮肉なような疲れたような笑顔を中路に向けた。

「叶いそうかね」

《私には無理でしょう。しかし、月刀たちなら……若い世代なら叶えられると思えてなりません》

「……そのお前の懐刀、切れ味はどうだ？ 懐刀から太刀に化けそうか？」

《もう、太刀に化けましたよ、少将。わしらじゃ振るえないほどの大太刀に化けました。私の、私たちの期待を押し付けたとしてもそれを受け止め、跳ね返してくるほどの太刀に》

「……子は親に、ロボットは人に似ると言う。だのおまえはわしに似なかった。鳶が鷹を生んだようで、うれしくもあるが、悔しくもある」

少将がキーを叩く。

「中路、お前に頼みがる」

《はい》

「必ず全員帰還させてくれ。お前が求めた夢の導とならんことを」
《必ず》

無線が切れる。少将がエンターを押し込むと、直後にウィンドウが
一つ現れる。

「Accepted.” Broken Arrow” / Major
General」

少将は首の後ろのQPSプラグを引き抜いた。か疲れているよう
にも、安らかなようにも見える表情を浮かべ、静かに俯いた。

「……歳をとった、か。わしはお前より年上だぞ、中路」

少将は俯いたまま力を抜いた。昼過ぎの南国の日光が暖かく照ら
していた。

Point “MIO616” / The offing o
f Midway |
Sept. 16 2082. 0226UTC. (Sept. 1
5 1326SST.) |

いくつもの艦載機が飛び交う中で木曾は奥歯を碎けんばかりに嚙
みしめる。爆弾を抱いた敵の艦載機がひっきりなし急降下してきて
は自分たちの周りに水柱を立てる。

「舞風！ 足を止めるな！」

「わかって、ます！」

空母の防衛もへったくれもない。艦攻の攻撃なら間に割り込むこともできるが、艦爆の急降下は対空機銃で撃ち落とすぐらいしかできないのだ。

「秋雲つ、左舷10時方向敵艦爆隊レーダーコンタクト！ 迎撃用意！」

《了解イ！》

《左舷に艦攻隊、来ますっ！》

巻雲の声に反射的に左舷へ砲を振る。仰角はほとんどない水平方向への砲撃、鋭いショックと共に砲弾が吐き出され、敵航空隊に突き刺さる。祥鳳の艦戦も落としにかかるがその機銃に紛れて水面に大きな水柱が立つ。

「魚雷来るぞ！」

木曾はアクティブソナーを一発放つ。小さな反射波が6つ。20機近い艦攻が迫っていたことを考えれば上々か。

コン、コン、コン、コン……と魚雷の接近音をソナーが捉える。

「取り舵一杯っ」

木曾の叫びに空母も含めた艦隊が舵を切る魚雷の白い帯を見ると狙いが甘かったらしい。雷撃は空母艦隊を狙ったはずだが大きく後ろにそれる。

「夕雲！ 右側一本直撃コース！ かわせ！」

木曾は敵の航空隊に銃撃を加えつつ、無線に叫んだ。殿艦を務めた夕雲がぎりぎり魚雷の射程に入っていた。機関全速で取り舵を切る。魚雷が一本、夕雲のすぐ後ろを通過する。雷跡が夕雲を通過して、起爆した。

《きやあ！》

《夕雲姉さん!? ……うわあ!?》

磁気反応式魚雷——艦娘の機装は鋼鉄製だ。その近くを通過したせいで磁界に変化が生じて起爆したのだ。その水圧に叩かれて夕雲の顔が苦痛にゆがむ。

夕雲の方に気を取られた巻雲に敵の艦戦の機銃射撃が加えられる。

ナノマテリアル被膜で被害はほとんどないが、とつさに足を止めてしまふ。その鼻先を敵の飛行機が飛び抜けた。

《抜けられた!?!》

その機体が急激にホップアップ。真昼の太陽に入った機体に目を凝らし、木曾は対空砲火を撃ちまくる。黒く光るのは魚雷ではなく……爆弾。

《艦爆隊が紛れてやがった!》

焦る木曾たちを嘲笑うかのように優雅に反転した艦載機が機首を真下に急降下してくる。機首の方向は——現状唯一無傷の正規空母、飛龍に向いていた。

「飛龍! 撃ちまくれっ!」

艦隊の直掩機も間に合わない。対空砲火で落とせるか。

「あぐっ!」

その状況下で祥鳳が小さく呻いたことに気が付く人はいなかった。その直後に迫りくる敵機の前を高速で何かが通過する。それが空中に“置いていった”なにかに敵機が突っ込んで爆弾共々砕け散る。細かい破片から顔を守るようにしながら飛龍は通過していった何かを目で追った。ゼロ戦のミニチュアのような姿を日光に閃かせる。テイルコードを見て飛龍は目を見開いた

《祥鳳さん……!》

《い、いえ。艦載機が勝手に……!》

折れた弓を抱くようにした祥鳳がどこかぼかんとした顔を向けた。艦戦集中運用艦として参戦していた祥鳳だが、まだ戦えた20機が祥鳳の手を離れ動き出した。

《……ミッドウェー攻略作戦参加艦、全艦に通達。こちら中部太平洋第二作戦群第551水雷戦隊司令官月刀中佐、全力打撃支援要請に基づき支援する》

それに呼応するように祥鳳の艦載機が動き出す。それに次いでもう一つ無線が入った。

《こちら西部太平洋第一作戦群司令中路中将だ。全力打撃支援要請了解した。作戦司令部の機能停止を確認した。司令部機能喪失時にお

ける対応マニュアル第12項に基づき司令部機能を応援艦隊司令部に移譲する。ただちに攻略作戦を中止し全艦撤退を開始せよ。撤退戦の指揮は月刀中佐に一任する。頼むぞ」

《了解。榛名、霧島。聞こえるか?》

《こちら榛名、感度良好です!》

弾んだ声が無線に乗る。

《機動打撃群は前進強速・右舷回頭3点、進路を2―1―0へ。左舷砲雷撃戦用意。敵の艦隊がやってくるぞ。航空打撃群も転進、進路2―0―0!》

《了解!》

艦隊が動き出す。空を飛び交うゼロ戦が敵艦載機を蹴散らしていく。その隙に木曾は夕雲のところに回り込み。肩に担いだ。

「木曾さん。すいま、せん……」

「なんの問題もねえ、やっとまともな指揮官が戻ってきた。……生きて帰れるかもしれねえ。気張れ」

「……はい」

空母たちのところに追いつくと赤城が笑顔で迎えた。

「月刀司令補ってこんなに空戦お上手なんですね」

「知らなかったか? アイツの専門、本当なら空戦指揮だぞ」

彼が動かす戦闘機が敵機を蹴散らしていく。相手を圧倒することはないが、雷撃も爆撃もさせずに追い返している。

「……今、月刀戦隊との演習の時空母が含まれてなくてよかったとつくづく実感してる」

「ああ、蒼龍さんたち月刀司令補相手に演習したんだったな?」

「空母6人がかりで抑えてた空域を20機で対応されれば蒼龍じゃなくてもそう思うって……これは自信なくすなあ」

遠い目をする飛龍の横で、使い物にならなくなった飛行甲板を手に持って蒼龍が引きつった笑みを浮かべた。

「……月刀司令官が支援ってことはあの子たちが来るのね」

「月刀の艦隊ならひどいことにはならんとは思うが、そんなにすごいのか?」

「こつちがまともに撃てなかったとはいえ、機動艦隊相手に昼間つからドンパチやって競り勝つ部隊よ。……あれとは二度と戦いたくない」

「そんな艦隊なら味方にすると心強いな」

対空機銃で弾幕を張りながら木曾が笑う。直接月刀の指揮下に入ったことはなかったが、金剛たちが認め、赤城がその腕を褒め、二航戦にここまで言わせる指揮官だ。なにより、あの中路提督が「指揮を任せる」といった人間だ。少なくとも無能ではないだろう。

「飛龍、機動艦隊の方の直掩はなんとかなってるんだよな？」

「まあね、利根さんたちが三式弾持つてるし」

「なら攻撃隊を一度下ろして爆装なりなんなりさせた方がいいだろう。第3次攻撃の用意を進めた方がいいんじゃないのか？」

《その方がいいな》

「げ、聞いてたのかよ。月刀司令補」

《今はもう司令官だ。飛龍、蒼龍の艦戦がそろそろフューエルビンゴだ。優先的におろして弾薬と燃料を交換しろ。瑞鳳》

《はいっ！》

《加賀の艦爆隊を順次回収、爆装の用意を》

指揮が飛ぶごとに血が隅々までめぐるように士気が盛り返していく。

《全員で生きて帰るぞ。もう少し耐えてくれ》

一路南西へ向かって舵を切り、艦隊の逃避行が始まった。

第21話「MI・理由」

Point "WK 0876" / The Offaring
of Wake Island
Sept. 16 2082. 0351UTC. (1551WA
KT.)

全力疾走を続けていたらしい艦隊を目視でとらえる。

「千代田さん、見えてますか？」

《見えてるわ。あんまり久しぶりって感じはしないかな？》

「そうですね。結構演習でも会ってるので、あまりしないのです」

近づいてきた艦隊に手を振るとそれに応え、手を振り返す影……吹雪だろうか、と暁は思った……を先頭に近づいて来る。

「お待ちせしました！ 吹雪以下第553駆逐隊、および第539航空偵察隊、到着いたしました！」

「応援ありがとうございますのです。救出部隊総旗艦を任せられました、電です。改めてよろしくお願ひします！」

「電、何緊張してるの？」

どこか茶化すように雷がそういうと、電は赤くなった。

「そ、それは、緊張するにきまつているのですっ！」

「まあ、そうだろうな。……千代田も大丈夫か？」

「ええ……千歳おねえがいれば最高だったんだけどね」

「まあ、お前ならそうだろうな」

千代田の答えに半分笑いながら頷く天龍。龍田が微笑みながら口を開く。

「油売ってないで早く進んだほうがいいんじゃないかなあ」

「そうですね。燃料の補給も進みながらできますし、そうしましょう」

電が頷くと艦列を組みなおす。千代田を中心に据えた輪形陣へ、51水雷戦隊の面々は千代田から燃料のパックを受け取り艤装へと

詰め込んでいく。

「それにしても、この調子で間に合うのかい？」

響は暁に燃料を突っ込んでもらいながら(特Ⅲ型艦装の燃料補給口は背負ったままだと使いにくいのだ)、無線に向かって問いかけた。

「このまま全速で進んだとしても夜明けちかくなるんだろう？ それまで持つのかな？」

ミッドウエーにもっとも近いウエーク島ですら直線距離で1027海里もあるのだ。向こうもこちらに向けて転進してくれていると言ってもそう簡単にはたどり着けるものではない。

《……ふつうに進んだらまず間に合わないね》

無線の向こう、おそらく横須賀鎮守府の作戦指揮所にいるであろう高峰もそれをあつさりとしたと認めた。

《だから、普通には行かない。到着予定時間は日没直前、1730SS Tだ》

「……ワープでもしろってか？」

あきれたようにそういうのは天龍だ。暁もわけがわからないといった顔をする。

《まあ、ワープに近いかな。……そろそろ君たちのレーダーにも映るはずだけど？》

高峰に言われてみんな電探の感度を上げてみる。そうすると南に小さな反応が現れた。

「え？……まさかとは思うけど」

《君たちは艦娘だ、昔ながらの巨大な船じゃない。なら、こういうことも可能だろう？》

高峰の上機嫌な声に雷は眉をぴくぴくとひきつらせた。

「あれに、乗れってことね……」

「面白いじゃねえか。一度乗ってみたかったんだよなあ、テイルトローター！」

艦隊の正面に下りてきた影、飛行機の翼の先端に大きな風車を二つ

つけたようなそれがゆっくりと降りてくる。その後ろがぱっくりと開いて中から迷彩色の軍服を着た男たちが飛び出してくる。

「君たちが救援隊だね！ 乗りな！」

メガホンで拡大された声がそう告げる。どうやら近海まで飛行機で飛べということらしい。

「間違いないようだよ、雷、腹をくくった方がいい」

響にそういわれた雷が肩を落とした。テイルローター機は後ろのスロープが海面に触れそうになるほどまで下りてくる。強烈なダウンウオッシュに暁と響は帽子が飛ばないように慌てて押さえつけた。

「おら、ぼうつとしてないで乗り込むぞ！ 武装のロックを忘れるなよ！」

そういいながら真つ先に飛び乗ったのは天龍だ。そのあとに龍田が続ぎ、軽巡コンビに引き上げられるようにして駆逐艦たちがスロープへと上がっていく。千代田が艀装をぶつけないように慎重に上がると最後に電が飛び乗った。

「全員乗せた、上げてくれ」

男の人が無線に向けて叫ぶとすぐに機体は高度を上げながらスロープがせりあがって機体の壁と一体になった。窓が少なく薄暗い機内に艀装をフル装備した艦娘が14人も乗り込むと駆逐艦が主体といえども結構壮観である。

「こちら『ヴィーナスキヤリアー』。艦娘の皆さんをお乗せした」

《『ヴィーナスキヤリアー』、こちらオフサイド。進路0—1—8。要撃管制をレッドアイに移譲する。プッシュチャンネル5》

コックピットの方から声がかすかに聞こえる。小さな窓からは上を向いていたエンジンが徐々に水平に戻り、速度をと高度を上げていくのがわかる。

「君たちの責任者は誰かな？」

「あ、はい！ 中部太平洋第二作戦群第551水雷戦隊旗艦、DD—AKO4『電』です」

迷彩色の服装がどこか窮屈そうに見える男に人に電が敬礼する。肩に階級章が付いている……空軍の中尉だろうか、と電は記憶の奥底から知識を引っ張り出す。

「テニアンの5319航空輸送団『グレイハウンド』へようこそ。私が一応この機体のキャビンマスターだ。1時間半の短いフライトだがよろしく頼むよ」

彼はそういうと右手を差し出した。電が恐るおそるその手を握り返すと結構強い力で握手をしてくれた。

「中尉ズルイ！」

「こういうのは役得だ。うらやましかったら偉くなれ偉く」

部下に豪快に笑ってキャビンマスターの中尉が電にウィンクした。

「部下が粗相をしたら遠慮なくおっしやってください。すぐに叩き落としますんで」

「中尉ヒドイ！」

「太平洋でダイビングしたくなかったらおとなしくしてな、ボーイズ」

「男しかいない輸送隊にカワイ子ちゃんが来てるのに触れ合いもなしですか!？」

「よし、お前帰ったらランウェイ清掃な」

「中尉マジひどい！」

若い兵士がそう叫ぶのを見て天龍が噴出した。

「あまり気にされなくても大丈夫なのです。……龍田さん、ここで薙刀は振り回さないでくださいね」

「うふふふ。電ちゃんがそういうならしようがないかなあ」

手に持っていた赤い刃がキラリと光る。乗ったときは安全カバーをかけていたのだがいつの間を外したのやら。キャビンマスターの中尉がそれを苦笑いで受けると軽く電の頭をなでた。

「こんなカワイイ子たちをお前らで汚すわけにはいかんよなあ？」

「隊長だってこっち側の人間じゃないですかあ！」

「役得だ役得。お前らの節操ない触れ合いに任せるわけにはいかねえ」

「中尉ヒドイ！ 職権濫用だ！」

「そう簡単に『女神』^{ヴァイナス}に触れられると思うなよ、ボーイズ」
「ヴァイナス?」

暁が疑問符を浮かべるとキャビンマスターが笑う。

「お嬢さんたちはこの戦争で唯一戦える『女神』なんですよ」

「『女神』^{ヴァイナス}」
「『天使』^{エンジェル}」
「って感じですけどね」

睦月の頭をなでながら部下の兵士がそういうと何かが宙を舞ってその人の顔にめり込んだ。どうやらキャビンマスターが何かをぶん投げたらしい。顔にめり込んだメジャーを握りしめてその人は半分涙目で叫ぶ。

「隊長ばかりズルイですっ!」

「海さんの切り札に安々と触れる方が悪い。艦娘の皆さんはテメエらボーイの何倍も働いてるんだ。邪魔すんな」

「あの、だからそんなに気にしなくてもいいのですって」

そういうとキャビンマスターは軽く笑った。

「そういつてもらえると助かります。……国連空軍の戦闘機が護衛していますし、空中給油機^{タンカー}も待機しています。我らの命に代えてでも確実に海域までお連れ致します」

機体は一路北へ、戦場へ向けて速度を上げていった。

Headquarters of the U.N. Navy
Far East Fleet Group / Yokosuka
Admiralty Port
Sept. 16 2082. 0355UTC. (1255JS
T.)

緊急招集された将校に混じって中路は珍しく額に青筋を浮かべて

いた。

「この期に及んでまだ席にしがみつく気か？ 合田君」

「私としても北川や岩城が先走ったのを遺憾に思っている。この椅子がほしくてこんなことを言っているわけではない。自分のケツは自分で拭くと言っているだけだ。そういう青木中将もらしくないですなあ、今からクエゼリンの部隊を動かすとも？」

「そもそも中部太平洋第二作戦群の総司令官は私だよ。今動いておる月刀中佐も私の指揮下にあるべき人間だ。私が指揮を執るのが筋つてもものだろう」

金ぴかの飾緒やカラフルな略綬で身を飾った将校たちが集まるこの部屋には極東方面隊に籍を置く5つの艦隊すべての艦隊司令官と8つの作戦群指揮官、そこに海軍航空隊司令官と兵站を中心に掲う後方支援団の長が集っていた。円卓の中央には柱状のホログラムモニターが淡く光り、第551水雷戦隊たちが空輸状態に入ったことを告げていた。

「合田君、君の北方第二作戦群でなにができる？」

「お言葉ですが、それを言うなら山口大将の南方艦隊も似たようなものではありませんか？」

「だからこそ、前線に出た部隊の側面を固めるといつているのではないか」

「それは私たち中部太平洋第二作戦群で事足りています。補修に必要な資材だけ融通してくださいれば」

「Show the Flag」はもうこりこりなのでね。あとあと協力しなかつたって言われても困るのだよ」

滑稽な笑いをこらえながら中路は黙っていた。だんまりを決め込んでいたと思っただが、全力打撃支援要請が出された瞬間これである。事態は現場で起こっているのだが。会議室でも現在進行形で推移している。

要はこの事態を治める主導権を誰が押さえるかということだ。

CTCなどの警告を無視して作戦を押し進めた急進派の将校にとって、事態は最悪の形で推移している。全力打撃支援要請が宣言さ

れた時点で作戦の失敗は明らかになっている。これでさえかなりの汚点であるが、この上後始末さえほかの将校に主導権を握られてしまえば、それは「借り」となり、今後の弱みとなってしまふ。急進派の発言力を最低限でも保つためには自力での解決を進めなければならぬ。

逆にほかの派閥にとっては急進派に大きな借りをつくるチャンスであり、主力艦隊でもかなわない相手を退けたという実績を残すことができるチャンスとなる。実働部隊は前線にまかせるとしてその指示を一言飛ばすだけでお手軽に「箔」を付けることが可能だ。

そしてなにより、穏健派の中路中将がその手柄を独り占めするのは面白くない。

結論から言えば「中路中将一人が甘い蜜を吸うのを許せないから一枚かませろ」という会議である。それを中路にわからせるために地下の作戦指揮所からこんな会議室に呼び出したことに対して彼は強烈な感情を抱いていた。

「……各国の軍や特殊部隊が衰退し緩慢な死を迎える理由をご存知ですか？」

「中路君、そういうことを論じる時間ではないのだよ」

咎めるような目線を向ける将校を無視して言葉を続ける。

「組織のトップに立つ人間が自身の利権争いの道具として組織を利用し始めたときからゆるやかな死が始まります。ここで誰が得をしようとするかと泥をすするのはどこの誰か、ここにお集まりの皆様ならおわかりでしょう」

そういいながら中路は立ち上がった。

「それは現場で戦う艦娘と現場指揮官でありましょう。こんな安全地帯で高みの見物を決め込む将校の言葉なんぞ聞こうとも思わないでしょう。無論、私の言葉も届くまい」

「……何が言いたい？」

中路は目を一度閉じ、開いた。

「現場にとって必要なのは肩書でも権力でもないということです。だれが指揮を執ろうともやるべきことは変わらない。現状必要なのは、機動艦隊21隻を救出しろという命令であってそれを誰が命令したかという箔ではない。令状でも勲章でもなければ、激励の言葉でもない」

机についた両腕が軽く震えた。それを押さえることなく部屋全体をにらみつける。

「ここで悠長にだれが指揮を執るのかなどもめてる間にも前線は動き続けている。今前線で命を張っている指揮官を引き下げ、自ら前線に躍り出て部隊を生還させうる作戦プランをお持ちの方は今すぐ申し出て頂きたい！」

会議室が静まり返る。中路は数瞬しか待たず、声を張り上げた。

「士気も矜持も大変結構！ 理性などあるか判らん異性体にそれで解決できるのならば存分に張り合えばよろしい！ しかしながら、我々が行うべきは人類の繁栄を脅かす脅威の排除であって、次のポストの椅子取りゲームではない！ それは全員百も承知のはずである！ 我々の楯たる艦隊の主力が失われようとしている今、我々が行うべきは、現状をもつとも把握している現場指揮官を全力で支えることであるとは思わぬか！」

大将までも黙らせて中路は肩を上下させた。それでもなお、言葉を叩きつける。

「金剛型に伊勢型、一航戦に二航戦、水雷戦隊——これだけの戦力を今失えばこの場の全員はおろか、守るべき民すら危険にさらす！ 誰が貧乏くじを引くかという次元はとつくのとうに超えておる！ 今間違えばこの場にいるだれも明日を迎えることはできない！」

「……だから、艦隊の指揮権を高々中佐に渡せというのか、中路」

海軍極東方面隊の長が静かに口を開いた。元帥の徽章を肩に輝かせる彼の声は地面を這うように広がった。

「我々の背後には10億を超える民がいる。世界規模で見れば40億

もの人間がいる。その守る責務を中佐に背負わせるのか？ 中路」

「……無茶無理無謀は重々承知しております、元帥。だからこそ、私たちがここにいますのであります。戦線を遠く離れ、前線の責任を負う我々が。もし我々がここで集まる意味を一つだけ挙げるとするならば、前線が保身を気にすることなく最高のポテンシャルを発揮できる環境を整えることに尽きる。……この結果がどうなるとしても救出作戦に関する責はすべて私が負いましょう。現場が背負うのは栄光のみでよい。そうでなければ危険に飛び込む艦娘と前線指揮官は動けない」

「……失敗してはならない作戦で、お前ひとりの首で済むと思うか？」
「ならば、失敗しないように支えるのが我々ではありませんか。我々が自衛隊と呼ばれ、張子の虎と蔑まれていたところから、我々は日本国を守り続けてきた。失敗してはならない現場で現場はいつもベストを尽くし、それを上層部は常に支え続けてきた。……人間相手の政治的配慮などない今の方が情勢は単純であるはずです。全力で敵を退け、戦力を失わないこと。そのためならば今、ここで、前線を信じ支えることしか、できないのではないではありませんか？」

元帥は黙って聞いている。この空気の中で声を上げることが許されているのは中路と元帥のみだった。

「中路……お前家族はいるか？」

「妻に先立たれ、ひとり息子は靖国で眠っております」

「質問を変えよう。お前、今何のために戦っておる？」

中路はここまで来て初めて言葉に詰まった。腕が震える。

「……私は、私たちの後の世代の可能性のために戦っているのであります、元帥。こんなみじめな世界に怯えず、強く立ち向かえる種の可能性を潰さぬために戦っているのであります。我々は生き延びねばならない。それは後の世代に可能性を残すために他ならない。そのために私は泥の河を超え、血の海を渡る。何度でもこの手を汚し、次の世代が我々のような愚かな選択をしないように負の標として立ち続ける。たった一人の息子すら守れず、部下を何度も見殺しにしていた私に、これ以外の何ができましようか」

中路の声がわずかに震え、すぐに収まった。

「……博打だな。中路。今も、その可能性も」

「人は賽と同じです。結果なんてわからないまま自分を振るしかない。結果を知るのは神のみだとしても、神はサイコロを振らない”んです。ならば私は明るい未来を築く可能性にこの身を賭け、賽を振る。それだけであります、元帥」

そうか、とつぶやいて元帥は手を顔の前で組んだ。

「……作戦指揮は中路に一任する」

「ありがとうございます。それではまず秋元大将、杉田少佐に対する情報封鎖を解除して頂きたい」

北方艦隊をまとめる男が肩をびくりと震わせた。

「……なんのことだかわかりかねるな」

「現場の月刀中佐より応援要請が出ているのですが、いまだに連絡がつかないそうです」

中央のホログラムが切り替わる。出てくるのは北方艦隊の通信口グである。

「全力打撃支援要請宣言の通達後、彼に当てた通信が封鎖されている理由をできれば教えていただけますかな？」

苦虫を噛んだような顔をする北方艦隊指揮官。数瞬あとにわかつたとつぶやいた。

「ウェーク島へ医師の応援と工作艦の手配を後方支援団にお願いいたします」

素晴らしいながら中路は通信をつなぐ。

《高峰君、北方の無線封鎖が解けたはずだ》

それだけ叩き込んで正面を向く。

「中路、勝算は？」

「あります」

即答して背を向ける。ここにはもう用はなかった。

Tactical Command Center of Far
East Nothan Fleet / Iturup K
urilsk Naval Harbor
Sept. 16 2082. 0411UTC. (1611MA
GT.)

「やっぱりお前らか、高峰」

《お前「ら」？ 複数形なんだ》

無線から帰ってきた答えに彼はクスリと笑った。口に啜えた紙煙草がゆるゆると燃えて灰が静かに床に落ちた。椅子のリクライニングを軽く倒し、行儀悪く足を机に乗せたまま無線を受ける。

「俺に声がかかる前に月刀ならお前に声をかけるだろ？」

《なるほど、状況はどこまでつかんでる？》

机に思いつきり脚を投げ出したままで彼はモニターを見る。

「ミッドウェー攻略部隊がウエークに向けて撤退中、前線指揮官は月刀、ウエーク方面から救援部隊が空路で急行中、動きとしては西から急行中の打撃艦隊と連携して挟撃って形か？ で、俺はどこに飛べばいい？」

煙草の煙が暗い天井に溶けていくのを見ながら彼がそういうと無線の奥が笑う。

《お前は今？》

「択捉特区海軍司令部のTCC。『鷹の眼』対応ガンナーシート」
《そのままデカトンケールⅢへ潜れ。カズのところへは俺が誘導する》

「りよーかい」

そういうと足を下ろす。彼の後ろで誰かが笑う気配がする。

「私の出番はないのかい？」

「たまには俺の仕事をそばで見るともいいんじゃないのか？」

彼が振り向くとにやにや笑いを浮かべた女性の眼鏡が光った。褐色の肌がモニターの白いあかりを艶やかに照り返す。

「なあ、杉田よ」

「ん？」

「嬉しそうだな。そんなに戦うのが好きか？」

「殊勝にどうした、武蔵」

武蔵と呼ばれたその女性はずいとい目をそらす。それを見て意地悪な笑顔を浮かべた彼は煙草を始末してモニターに向き合う。

「そうだな……、戦いは好きじゃないが、この腕で誰かに必要とされるのならそれをやる。頼りにされるのは嫌いじゃない」

「ほう、そうか……」

「安心しやがれ、昔の友人の助太刀だ。〃別にお前に飽きてるわけじゃねえ」

「そんな心配などしてはないが……」

「ならそこで控えててくれや、お前がいないとやり辛い」

「遊んでほしいのかい？ 遠回しな告白にしか聞こえないのだが」

「さあね、好きに解釈しろ。俺は馬鹿だから言葉遊びは嫌いなんだ」

そういうしながらヘッドセットを付ける。次の瞬間に彼――杉

田勝也海軍少佐の意識は戦場へ向けて飛び出していった。

第22話 MI・信頼

Headquarters of the Saver Group
for Midway / Innerpeace
DECATONCALL III
Sept. 16 2082. 0415UTC. (1315JS
T.)

航暉の隣が一瞬光り、タカが舞い降りる。電子の世界では羽ばたいたところで風は起きない。そのタカはふわりと海面に降り立つと銀にも見える薄い金色の目を航暉の方に向けた。

「相変わらず現実世界と同じ姿を使ってるんだなお前らは。せつかくの電子のアバターだっていうのにさ」

「こっちの方が直観的に情報に触れられるんだよ。現実世界の感覚もフィードバックしやすい」

「夢がないねえ、月刀は」

「ロマンだけじゃ部下は動かせないんだよ。杉田」

名前を呼ばれたタカはくつくつと笑う。

「夢を語れなくなったら人は人としての死を迎える。せめて電子の世界で飛ばせてくれよ。ちゃんと給料分の仕事はするさ」

当然、と返して航暉は目の前に手をかざすその手の下にある海域が拡大され目の前に広がった。いくつもの点が二列に並んで走っている。榛名を旗艦に据えた打撃艦隊だ。榛名と神通が殿艦を務め、斜め後ろから距離を詰めてくる敵の艦隊から逃げる形だ。

「間もなく敵主力打撃群が交戦域に入る。お前は戦艦の有効射程に入った敵を片っ端から潰してくれればいい。できる限り無駄玉は撃たないでくれよ」

「無茶言ってくれる……観測機は？」

「蒼龍の艦戦を二機つける。こっちは俺が扱う。期待してるぜ」千里

「ふん、と鼻を鳴らしてタカが舞い上がる。」

「生きてる砲で一番強いのはどれだ？」

「榛名の二番主砲、41センチ連装砲の右砲、次点は伊勢の一番主砲、同じく41cm連装砲の左砲だ」

「……榛名を借りるぞ」

「了解。……こちら月刀中佐、522榛名、How do you read? 感度いかが？」

《Reading 感度良好です！》

「榛名、間もなく敵艦隊が射程に入る。戦艦の射程にを保っている間に時間を稼ぎたい。お前の砲を貸してほしい」

《はい！ 榛名は大丈夫です！》

即答した榛名を示すマーカーに向かってタカが翼を畳んで急降下する。そのマーカーをそのタカのかぎづめが触れると同時にタカの姿が掻き消えた。

「榛名、鷹の眼を使う。艦装の制御権がガンナー優先になるから気持ち悪いと思うが耐えてくれ」

航暉の周りの情報の質が変化した。全体を俯瞰する視点からその場に立つような感覚。ウェークにある肉体の感覚。リクライニングシートの固めの背もたれの感覚と戦場の潮風のおいが混在して流れ込む。

まだ戦艦という種別の艦が現役で戦場の華であったころ、その艦に求められるの力は圧倒的火力で敵を面で制圧していく能力であったと言える。莫大な質量の物体を大量に撃ちだし、相手にあたるまで撃ち続ける。水上機や電探をフル稼働させて狙いを修正するのはいえ、その精度には限界があった。

では、艦娘ならば？

なにもそれだけに頼る必要はない。もう古くなり放棄されかけているとはいえ、宇宙空間には世界規模の測位システムが存在しているし、照準に誤差を与える細かい数値だって、デカトンケールのような巨大演算装置があればリアルタイムで反映可能だ。情報をそろえれば、効果が一番あると思われる射線だって割り出すことが可能だ。

戦場を俯瞰し、獲物を捕らえ続ける力指揮官と艦娘にを与える。それが砲狙撃支援システム鷹の眼だ。

《敵駆逐艦トラックナンバー34が有効射撃線を超えるまであと55秒。……二番主砲右砲、撃て》

風、気温、湿度……様々な情報の渦の中で、杉田は引き金を引いた。爆音とともに放たれた砲弾を数瞬見送った。

《次トラックナンバー28、軽巡、撃て》

第一射が着弾するよりも先に次弾が放たれる。次、また次と砲弾を打ち上げる。

《ちよ、ちよつと。大丈夫なんですか？》

不安げなのは伊勢だ。誤差は一度着弾して結果を見てからでなければ補正ができない。『鷹の眼』だって直撃を保障するものではないのだ。伊勢の不安ももつともなのだが、それに半分笑みを浮かべながら航暉が答える。

「あいつは外部演算装置のサポートがなくても安定して30キロ先の目標±2メートルに砲弾を叩き込む化け物だ。第二次日本海軍の第三夜戦じゃ電探と視覚情報のみで32キロ先の水雷戦隊を一斉射で黙らしたこともある。この安定した天気で観測機に『鷹の眼』

……杉田の腕なら相手に直接銃口を突き付けてるに等しい状況だ」

その言葉を証明するかのように水平線の向こうで腹に響く低い轟と、それに遅れて黒い煙がゆるゆると上がる。数は4つ。撃った弾の数と一致した。

「……駆逐艦轟沈1、中破1、軽巡中破1、重巡小破1つてところか」
《んー。あんまり調子よくないなあ。軽巡は沈めることできたと思っただけだ》

観測機からの情報を確認しながら戦果を読み上げるとそういう声がある。それを傍受していたらしい木曾の『マジかよ……』というつぶやきが無線に乗った。

「発砲全弾が何らかのダメージ与えてるだけで十分……よし、敵の速力が落ちた」

《今の間に逃げ切りでしょうか？》

無線に乗ってきたのは赤城だった。

「逃げ切れればベストだが見逃してくれるとは思えないね。だがこれで奴さんもうかつに飛び込めなくなつた」

航暉がそういうと横に高峰の姿が現れる。さらにその隣にはタカの姿をした杉田が、最後に第二種軍装に制帽をかぶつた中路も現れた。

「飛び込んだところから撃ち落とされてりや、深海棲艦もかなわないだろうからなあ」

「それで、どうする気だ。そろそろ相手の航空隊の反復攻撃の波がくるだろう。どう捌く気だ」

中路の言葉に航暉は頷く。

「それでも、日没まであと105分……攻撃できて一回です。艦戦として使える機体はすべて出します。551の到着予測時間まであと80分、中路艦隊本隊の到着まであと120分……」

「……夜戦でカタをつける気か」

高峰はにやりと笑った。

「それならお転婆笹原も声かけた方がよかつたんじゃないか？」

「夜戦時のアレの手綱を誰が握るんだよ。誰も助太刀できなくなるだろ。いくらアイツでも物量で押されれば危ないはずだ。その時にだれもアイツの支援ができないんじゃないじゃ困る」

航暉の言葉にふむふむと頷いて高峰は笑う。

「まあ、あの夜戦バカなら嬉々として呐喊していきそうだよな」

「それで、カッチャンヘルプ」とか言われても夜戦の敵陣と真ん中にどうやって助けに行けつてつていうんだ。日本海事変第三夜戦の悪夢なんて懲り懲りだぞ」

頭を掻きながら航暉がそういうと、ケラケラと笑いながら杉田が口を開く。

「そういえばあの時の『貸し』まだ返してもらってないよな？ あとで笹原にたかりに行こうぜ。……まあ、いないやつの話をしててもしょうもないか。それで俺たちは何をすればいい？」

「杉田は攻略隊の戦艦、重巡による砲支援を、高峰は杉田の支援がメインだ。あとは損傷の激しい艦と空母の誘導、救援隊の交戦域への誘

導。水雷戦隊の指揮を俺と中路中将で行います」

「やれやれ、水雷戦隊の指揮なんぞ久々だ。お手柔らかに頼むぞ？」

「〃人虎〃の中路中将が何をおっしゃいますやら」

直後に全員が全員の持ち場に意識を飛ばす。大まかな作戦さえわかっていたらそれで十分だった。

指揮官たちはお互いの腕を知っている。どこまでできて、どこが苦手か。どういう切り札を持っていて、アキレス腱となりうる場所はどこか。どのような指示が飛び、その中でどうすれば〃動ける〃か。

このメンバーに〃チームワーク〃という甘い言い訳は存在しない。それは個々の責任を曖昧にし、思わぬ穴を生み出す可能性があることを知っているからだ。

あるとすれば個々のスタンプレートの果てに見えるチームプレー。それは信頼によく似た依存や思考の放棄を許さず、個々の能力を最大限に発揮することを強いる。個々が独立し、思考を止めることを許さない。いかなる状況下であっても自身を信じ進むことをやめてはならない。

それを中路は〃信頼〃と呼んだ。依存とは徹底的に異なる共闘の姿勢を保ち、個々のポテンシャルを最大限に引き出し、それに頼り切らずに艦隊を進める。もしそれができるとしたら。

それが可能になる司令部はここしかあるまい。

「月刀より攻略部隊全艦、対空戦闘用意！ 日没前に最後の航空戦が来るぞ！」

《こちら飛龍、全艦載機、発艦はじめっ！》

《瑞鳳、艦載機、あげます！》

まだ発艦ができる二人が弓を構える。航暉は二人とのリンクを高め、艦載機へと意識を向ける。同時に無線を開いた。

「利根、筑摩。三式弾は？」

《あと三斉射つてところかろう》

《私の方は20発ほどです》

「了解だ。もうすぐ赤城たちと合流できるはずだ。敵航空隊を10海里手前で迎え撃つ。抜けられたやつ対処を頼む。対空砲火の指揮は頼むぜワンマンイージス」

「変なあだ名をつけるな月刀」

「だれも杉田のことだとは言っていないがな。ともかく杉田、頼むぞ。……日が沈む前に敵艦隊が突撃してきたら、対空戦闘指揮を高峰に移譲して、杉田は砲撃支援に入ってくれ」

飛び出す艦載機。直掩機を16機残して残りは左へ旋回し、艦隊の後方へと差し向ける。航空隊指揮では一機一機を追うのではなく、状況を俯瞰し続けなければならぬ。そうでなければ意識はあつという間に散り散りになってしまう。航暉がコントロールするのは55機うちの25機。それだけの数を同時にコントロールするともなればコンピュータのサポートは必須だった。航空母艦の艦娘はこれだけの情報量を捌いているのかと改めて思う。

「敵は空母を主力とした機動部隊だ。夜戦に持ち込めば勝ち目がある。ここが踏ん張りどころだ。行くぞ！」

《了解！》

航暉の声に艦娘たちの声がそろう。淡い黄色に染まった空に艦載機が溶けていく。静かに戦局が動き出す。

P o i n t M I O 4 1 6 / T h e o f f i n g o
f M i d w a y |
S e p t . 1 6 2 0 8 2 . 0 5 1 2 U T C . (S e p t . 1
5 1 6 1 2 S S T .) |

数で押していたはずだった。

相手が撤退を始めて時間が立っているがまだ一隻も「落とせて」いない。数で不利だとわかって撤退を始めたのは敵ながらいい判断だと思うが、見逃すほど甘い我々ではない。追撃戦に移行したが、艦隊の動きが変わったのだ。

転進直前に指揮官が変わったのではないかと思えるほどに対空防衛が厚くなった。時にはふざけているとしか思えないことをしでかしてくる。「プレット」級空母に爆弾を落とそうとした艦爆機が相手の航空機が空中に置いていった何かについで爆散したときもそうだった。その機体は攻撃に最適なコースに完全に乗り、旗艦である私が直接指揮していたにも関わらずに、だ。

最初は何があったかわからなかった。だが、同じように防がれた「マッドフォックス」クラス戦艦への艦爆隊の攻撃を見て理解した。敵は空中で増槽を切り離し、その増槽に突っ込まされたのだ。当てるように作れている爆弾や魚雷はともかく、ただ「落とす」ことしか考えられていない増槽を相手が突っ込む位置を狙って切り離すなんて無茶苦茶にもほどがある。理解はしたが納得はできない。頭上から押さえつけられるように敵の戦闘機が迫り海面に突っ込まされた艦攻機に、敵艦爆隊の爆弾を頭上から喰らう艦爆機……ここまで非常識な戦闘も初めてだった。

純粋な数なら5倍以上で攻撃を加えているはずなのだが、一機も攻撃可能エリアに行き着かないまま落とされるか転進するかを迫られる。

それならとずっと後方で控えさせていた重巡や軽巡を前に出してみたが、戦艦の射程に入ったところでもその見事に「狙撃」された。まさか、航空戦主体に見えたのはブラフか。

そう勘ぐらずにはいられないほどに正確無比な砲撃だった。あれでは敵艦隊を捉える距離に入る前に全艦落とされる。それならなぜ、対空戦の距離に艦隊をとどめておいたのだ？ 多少の損傷を受けたとしても最速で詰め寄ってしまえば空母主体の我々は危険だということに。

戦闘中の艦載機からの報告によれば、「狙撃」してきたのは「ルー

ニー”クラスの戦艦一隻のみ。残りの船も、もう一隻の”ルーニー”クラスも撃つ素振りすら見せていなかったという。

もし、戦力を温存しているとしたら。

もし、彼女たちがもし全力で撃ってきたら。

もし、撤退ではなく、戦術的な転進だとしたら。

艦隊に不穏なさざ波が満ちている。数で押しているはずの我々が一隻も沈められないまま相手の撤退を許している。その状況がまるで毒にやられた貝を食べたかのように急速に戦意を犯していく。まるで水面に立てた波紋が広がるように毒が回り、勝ち戦を進めているはずの艦隊が急速に空気に吞まれていく。

それでも、我々は守らねばならない。

あの島を守らねばならない。

「……………」

「……………」

「……………」

もうすぐ日が落ちる。

航空攻撃を防ぎ、正確無比な狙撃ができることを見せておきながら相手が攻勢に転じてこないのはなぜか。

答えは二択。

防戦しかできないほどに弱っているか、時間稼ぎ。

もうすぐ日が落ちる。

そういえば、敵の水雷戦隊は対空戦ばかりで魚雷はまだ一発も使っていない。

そういえば、敵の戦艦も主砲の砲撃を”ルーニー”クラス一隻しか行っていない。

そして、敵の増援が来ないという保証は一つもない。

艦爆、艦攻、艦戦。出せる限りの艦載機を出す。同時に戦艦と重巡を前へ、空母の直掩を除いた水雷戦隊はその後方で待機。

勝ち戦をしていたはずなのに、なぜだ。なぜこんなにも必死になって指揮を執らねばならない？

夜戦に持ち込まれればこっちの空母はほぼ沈黙してしまう。夜闇

にまぎれて接近できてもまともにあてられるとは思えない。そしてこちらは夜戦をあまり想定せずに部隊を連れてきた。

日が沈み切る前に落とさなければ、勝負はいきなり劣性となりうる。

増援が来る前に、航空戦でまだ押し返せるうちに、一隻でも多く母なる海へと敵を引きずりこめ。

もうすぐ日が落ちる。

P o i n t " M I 0 4 3 2 " / T h e o f f i n g o
f M i d w a y |
S e p t . 1 6 2 0 8 2 . 0 5 2 6 U T C . (S e p t . 1
5 1 6 2 6 S S T .)

「きたきた、来たでえ！」

「こちら神通、敵艦載機を電探で補足。……方位0―6―0、5時方向、すごい数です。150機は超えています」

黒潮と神通がほぼ同時に敵の航空隊を捉えた。黒潮が焦ったように声を上げる。

「司令官！ほんとにこれ迎え撃てるんかいな……！」

《総力戦って感じだな。……こちらでも補足した。数172、高度2500、おそらく艦攻隊はもう低空に下りているだろうから200オーバーだ》

さらっと無線の奥が怖いことを言ってくる、天津風がごくりとつばをのんだ。

《全艦、対空砲火の指揮権を杉田に預けてくれるか？》

「……私たちを捨て駒にする気ですか？」

神通がそういうと航暉が何か言う前にもう一人無線に割り込んだ。《安心しろ、神通。月刀中佐がそういう指揮をしないのは君もわかっているはずだ》

このタイミングで総力戦を仕掛けてくるということは、相手がいちが夜戦に持ち込みたいことに気が付いたと見ていいだろう。それなら夜戦に入る前に魚雷を満載した水雷戦隊を潰そうとするのはある意味当然だ。

それを踏まえて水雷戦隊を丸腰で置いておけばそこに攻撃を集中させることも可能だ。時間的に相手の空母にもどつてもう一度攻撃ができない以上、本隊を守るなら十分有効な作戦になるだろう。

《そんな作戦はわしの眼が黒いうちはさせんよ》

中路の柔和な声に神通は押し黙る。彼女は僚艦をみやる。初風は神通を信頼しきった目で見返し、黒潮は対空砲を空に向けて不安そうだ。天津風は不安そうにしながらも頷き返した。

「……いい風が来てるよ」

「……了解しました。対空装備を杉田少佐に渡します」

《こちら伊勢、打撃艦隊の対空装備指揮権、移譲します》

《木曾だ、対空管制を移譲する》

《感謝する。杉田！》

《“鷹の眼”をマルチサイティングに切り替える。オンラインチェック。イルミネーターリンクス、オールウェポンスフリー》

杉田の声に合わせて艤装の対空装備の安全装置が解除される。ひとりで動き出した対空砲に初弾が装填される。“鷹の眼”の効果か、電探に映っていた敵の航空機の像がはつきりと映った。それにナビリングが施されそのそれぞれに高度などの情報がタグで表される。それぞれの艦の射角と有効射程がレーダーにオーバーレイ、味方の艦載機の位置がさらに重ねられる。

「……これ、二人で捌く気？」

初風があきれた顔でつぶやいた。200機を超えるであろう敵航空隊相手に、艦戦55機、水雷戦隊2つと戦艦4隻の対空砲、あとは

重巡の三式弾、これを指揮官二人で捌き切る。傍からみたら曲芸以外の何物でもない。

《ほかに捌ける人がいないようだ。……航空隊、エンゲージ》

敵の出鼻をくじくように航暉の操る飛龍の艦戦12番機が敵の先頭に飛び込んだ。遠くで爆炎が響く。敵艦載機トラックナンバーE-003ロストコンタクト。その時に目視で確認したのかその付近を飛んでいた敵機の情報が電探の情報タグに追加される。E-001、E-004は爆装、E-009は追加武装なしのクリーン、E-012とE-005は爆装。

反転して上昇するように飛龍12番機は飛行隊の中央に突っ込んでいく。敵は左右にブレイク、爆弾を抱いた機体を守るため、敵艦戦が急降下してくる。飛龍12番機が放たれた曳光弾の合間を縫うように上昇、艦爆機E-075を撃ち落とす。同時にエアブレーキ展開、エンジンをアイドルへ絞りプロペラのピッチをゼロにして推進力をゼロへ。後ろから追ってきていた艦戦機を^{オーバーシュート}超過飛行させるとその無防備な後方に鉛玉を叩きこむ。敵艦戦E-042撃破。推力を失ってほぼ垂直に立って空中に静止した機体はその姿勢のまま数メートル落ちると空気を捕らえて機首を下へ向け重力のままに落ちていく。エンジン全開、急加速。海面すれすれで水平飛行へ移行して、高度を失う代わりに得た加速度を使い敵艦載機の先頭を曳く艦爆機に追いつくと、蹴上げるように銃撃を叩き込む。

それをかわして艦爆機が緩降下しながら全速でキルゾーンを抜けようとする。だがそれを真上からの銃撃で瑞鳳の4番機が撃ち落とした。

「見くびらないで！ 数は少なくても、先鋭だから！」

E-102の撃破を見届ける間もなく瑞鳳4番機が次の敵へとラダーを蹴る。あつという間に乱戦にもつれ込んだ航空戦。いたるところで爆炎が上がり、黒煙が空を汚していく。

優先度別に色分けされた敵マーカ―の色が目まぐるしく変わっていく。

《55機でよくやるよ。さて、こっちも行くぞ》

杉田がつぶやくと同時に舞風の対空砲が起動する。発砲時間は半秒あるかないか。連射速度を考えれば20発前後の弾が吐き出される。それだけで射程ぎりぎりを飛んでいた艦爆機が黒い煙を吐いて落ちる。同時に全艦に向けた警告スク립トが送信される。味方の艦載機が一斉に反転する。

「それじゃ、行こうかのー!」

利根の主砲が斉射される飛び出した弾丸が空中で花開き無数に煙を吐き出す。ドッグファイトに気を取られていた敵の艦載機が中隊単位で消し飛んだ。

《杉田! 警告遅い!》

《全弾かわしておいて何言ってるんだ?》

「かわせてないですっ!」

杉田の飄々とした声に叫び返すのは瑞鳳だ。尾翼を一部損失し急激に高度を失っていく瑞鳳7番機。その上空を飛び抜けた敵艦戦機に撃たれて反応が消える。

《……マジですまん》

《マジで頼むぜ》

「こちら木曾! 敵艦攻隊三時方向数16!」

レーダーにマーカーが現れる。表示は赤、最優先攻撃対象。

もつとも近距離にいた飛龍9番機が反転、エンジン全開で急降下。パワーダイブ

敵機の列を舐めるように機銃が放たれる。バランスを崩した艦攻が海面で跳ねて水柱を立てる。そのしぶきを抜けた艦攻隊が散開する。白い筋は3つ。水雷戦隊への直撃コース。

「くっそー!」

直後に木曾と巻雲の対空機銃のリンクが解除され、主導権がそれぞれ艦に戻された。俯角をつけて打ち込むが依然として白い筋が近づいて来る。

《慌てるな》

中路の声があると同時に爆雷投射機が作動した。遠くへ投げられた爆雷が起動する。海面を白く染め、盛大に水柱を立てる。それを超えてくる線はなかった。

《こんなのは慌てて機銃を撃つても落ちんぞ?》

「……だからって爆雷の水圧で誤作動させるのもどうかと思うぜ、提督」

《防げればいいんだ、防げれば》

「さっすが司令官さま!」

巻雲が笑顔でそういうと無線の奥で笑い声が漏れた。

《褒められるのは嫌いじゃないが、後にしよう。方位0―3―5、艦攻隊。天津風、押さえろ》

「はいっ! 連装砲くん、頼むわね!」

天津風の砲撃を支援するように初風が前に出る。

《突出しすぎるな!》

航暉の叫びと共に直掩機の一機が初風の上空をカバーした。艦爆隊が初風の方に向かいだす。そこに杉田のコントロールする神通と黒潮の分の対空機銃が加わり艦爆隊をすべて叩き落とす。艦攻隊は天津風と瑞鳳の5番機が爆散させた。息つく間もなく警告スク립トが来て、数瞬あとに筑摩の主砲が閃いた。敵を数機巻き込んで三式弾が燃え尽きる。

「利根姉さんに負けるわけには参りません」

「そうは譲らんとぞ、吾輩は筑摩より少しだけじゃが、お姉さんじゃからの」

どんどん日が落ちていく。夕日をバックに動けるのは幸運だった。こちらは順光で相手を見やすいが相手にとっては逆光になる。太陽の光の中に入った機体を狙うことが難しいようにシルエットになった艦や機体との距離感をつかむのは難しくなる。少しずつだが状況は有利に、戦力は拮抗へ向かう。その時、敵の艦載機よりも大きな反応が飛び込んできた。敵と撃ちあってる左舷とは反対側の右舷側、方位2―8―5、数5。

「挟撃された!」

《いや。これは……!》

慌てた声を上げる榛名だが航暉はそれを否定する。レーダーマーカーがUnknownからVFA―102に変更される。

《Hey, Sea girls! How's Going? Now coming? White Knight!》
《よう艦娘たち、苦戦してるかい?白馬の騎士の到着だオラア!》

高速で英語が飛び込んでくる。クスリと笑う声がした。高峰が無線を受ける。

《We're waiting for ya "DIAMOND BACKS"!》
《待ってたぜダイヤモンドバックス!》

《Do you have "a jewel box"?》
宝石箱は持ってきてるだろうな?

国連空軍第102戦闘航空飛行隊——通称「ダイヤモンドバックス」。ジェット戦闘機を駆り、空をかける部隊がやってきた。《当然! これもおまけでプレゼントだ!》

無線が入った直後にダイヤモンドバックス各機のマーカから二つずつマーカが現れ、超音速で艦隊を飛び抜ける。航空隊の交戦域も飛び抜けると敵艦隊の頭上で炸裂した。大量の弾が吐き出され艦隊を面で痛めつけていく。——クラスタ弾頭を推進部に乗せた中距離ミサイル。

《Good job, DIAMOND BACKS. You're very cool now, don't you?》
《ありがとうな。かっこいいぞ?》

《Air Fighter is the coolest job in the world!》
戦闘機乗りは世界一イカした職業だ!》

衝撃波と共に低空をジェット戦闘機が飛び抜ける。そのまま翼を二度振って挨拶をするとインメルマン・ターンを決めて飛び去っていく。

《I handed you the jewel box. A crack is not in jewelry》
《宝石箱は渡したぜ。傷なしの上物だ》
《Thank you, Air Force. When return, let's drink together.》
《サンキュー空軍。今度飲もう》

高峰がそう返すと無線がつながる。

《こちら電! 電以下14隻到着しました!》

《早いお着きでなにより! カズ、救援隊の指揮をハンドアウトするぞ!》

《予定より20分以上早いな。どんだけ飛ばしたのやら》

夕日に紛れてテイルローター機が高度を上げる。その足元では電を先頭に艦隊が走る。空の色が茜に変わる中でセーラー服の藍が光る。

榛名の、霧島の、伊勢の、日向の……艦隊の主砲が一斉に回りだす。神通の指示で水雷戦隊が一斉に回頭した。制空権は劣性だがほぼ艦

爆隊は落とし切った。

《さて、ストライクバック逆襲だ！》

日没まであと30分。初めて艦隊が攻勢に出た瞬間だった。

第23話「MI・日没」

Point "MI0432" / The offing of
Midway |
Sept. 16 2082. 0548UTC. (Sept. 1
5 1648SST.) |

《吹雪・白雪は夕雲・巻雲のカバー！ 空母機動艦隊の撤退を支援！

初雪・叢雲はそのまま千代田の直掩！ 睦月・如月は大破した霧島と日向のバックアップだ。撤退指揮は高峰に従え。君たちが最後の盾になる。気張れよ！》

「了解しました！」

《天龍龍田、特Ⅲ型、雪風はそのまま前進！ 神通と合流しろ。空軍さんのクラスタで全体的にダメージが入ってるとはいえ、敵の打撃群はまだ健在だ。足を止めるなよ！》

「了解なのです！」

茜の空の下、全力で水雷戦隊が突っ込んでいく。

先頭を切る電の左右に天龍と龍田、まるで翼を畳んだ燕の羽のような急角度で艦隊が並ぶ。その羽に守られる形で進んでいた千代田のカタパルトが起動し、次々と水上機を上げていく。全機上げたところで初雪と叢雲にアイコンタクトを送る。電が振り返り左手を水平に掲げた——艦隊離脱の許可だ。それに合わせて、両翼から睦月と如月が離脱し、味方の戦艦の方へと駆けていく。千代田は減速し、くるぶしに固定されたキャニスターから甲標的を海面に下ろす。静かに潜航していくのを見届けて千代田は無線をつなぐ。

「千代田艦載機、発艦完了！」

《こちら月刀、レーダーコンタクト。アイハブコントロール》

爆装を施した瑞雲が数機ずつの小隊に分かれて飛んでいく。その数機が頭上を飛び越えていくのを見ながら電が声を張り上げる。

「右舷一点回頭用意！ 敵航空隊の足元を切り抜けます！」

「正気か電！ 制空権は取れてないんだぞ！」

天龍が負けじと声を張り上げる。

「ほとんど艦爆隊は落ちてます。この数なら天龍さんと暁お姉ちゃんの対空装備があれば切り抜けられます！」

「……そういう指揮とかほんとに司令官に似てきたな」

「そういつてもらえるとは光栄なのです！」

褒めてるわけじゃねえよ。と天龍がつぶやく。それでも顔にはどこか笑みが浮かんでいた。

「……硝煙の匂いが最高だなあ、オイ」

「そうね。いい感じに燻された空になってきてるし、たまにはこういうのもいいかもね」

「私は……あんまり好きじゃないのです」

天龍は電の消え入りそうな声を聴いてにやりとわらった。

「そうじゃなきや救援隊の指揮なんて電に渡さなかつただろうさ。気合い入れていくぞ……助けるんだろ？」

「……なのです……551TSq第一小队対空戦闘用意、敵艦隊への血路を拓きます！」

「マスターアーム・オン、ロサ弾・ウィンドウディスプレイ・スタンバイ、レディー！」

「対空機銃正常起動を確認！」

艦隊の対空特化艦である暁と天龍が両翼に展開する。殿に龍田が移り、残りの艦を先頭の電とで挟み込む形だ。こちらの動きに気が付いた敵機が飛び込んでくるが機体にはどれも爆弾は吊られていない。艦戦機だ。

「お姉ちゃん！」

「ロサ弾行くわよ！」

暁の主砲マウントに取り付けられた12センチ30連装噴進砲が火を噴く。敵艦戦隊を薙ぎ払い、作り出した空隙に向かい駆け込む。全力38ノット——時速70キロに迫る猛スピードで飛び込んだ。

「天龍さん！」

「おうー！」

両脇のマウントに取り付けられた二基六門の対空機銃が大量の鉛玉を吐き出していく。杉田から回されたレーダー情報と機銃がリンクし、近づいてくる機体から落としていく。レーダーウオッチに専念していた響が叫ぶ。

「二時上空艦爆ー！」

「お姉ちゃんー！」

「まっかせなさいー！」

対空機銃の数撃でその機体は落ちるが、その数瞬早く黒い物体が切り離された。真つ逆さまに落ちてくる方向は……暁自身。

「うそうそうそうそうそくくくくくくつー！」

焦った暁の頭上で“それ”が弾ける。真上から叩きつけるような爆風だったためあまり被害はないが、爆弾の熱でかなり熱い。

「……帽子燃えてないよね？」

「少なくとも燃えてるようには見えないね。……あとで司令官にお礼言つといたほうがいい」

響がそういって正面を向いた。並走するように飛んでいた烈風が一回翼を振ってゆつくりと戦場に戻る。よく見ると5機ほどの艦戦機が自分たちを直掩していた。……無線の奥は黙っていた。

「……今は進むのです！」

「了解！」

水雷戦隊が怒涛の勢いで敵の弾幕を超えていく。機銃の立てる水柱を縫うように進んでいく。執拗な攻撃に時にロサ弾で、時に機銃で、主砲やウインドウ弾も駆使しながら最短距離で突き抜ける。

雷が一瞬顔をしかめる。艦装に小さな弾丸がめり込んでいた。

「痛いじゃないのっ！」

きつちり撃ち返して弾丸を叩き込む。艦隊を直掩した機体が二反転し主戦域に取って返す。いつの間にか敵の防空網を抜けていた。

「全員無事なのですか？」

「私が艦装に機銃を一発喰らったぐらいかしら？」

「ゆきかぜも大丈夫です！」

雪風が手に持った主砲ユニットをぶん回し、後ろから追いつがる艦載機を撃ちぬいた。それを見届けた響は太陽のあまりの赤さに目を細めた。苦々しい表情を浮かべる。

「……どうやら敵の空母、艦載機の收容を全く考えてないみたいだね。司令官たちの航空機もこれじゃ下ろせない」

「そうね〜これじゃあトンボ釣りが大変そうねえ」

響の声に龍田が薙刀を揺らして笑った。

「まあ、相手は回収する船が残っていたららの話だけど〜」

龍田は妖艶に笑う。そのまますつと速度を上げて電に並んだ。

「それで、どうするのかしらあ?」

「主な攻撃部隊は私たちと神通さんたち526水雷戦隊です。……本隊が離脱するまでの間の時間を稼ぎます。……おそらく司令官さんは『グレイハウンド』が降りられる距離を稼いで、大破している加賀さん、蒼龍さん、祥鳳さん、霧島さん、中破している赤城さん、日向さんを先に回収することを考えていると思うのです。残りの打撃艦隊で砲撃支援を出しながら敵の勢力をできるだけ削り、本隊の安全を最速で確保しなければなりません。……そうじゃないとこっちが危なくなります」

「……それで、私たちは何をすればいいのかしらあ?」

電は目をつぶり深呼吸を一つ。司令官とのリンクを確かめる。

「……神通さんたちと協力して敵機動隊を半包囲します」

u p f o r M i d w a y / I n n e r s p e a s e o f
D E C A T O N C A L L Ⅲ
S e p t . 1 6 2 0 8 2 . 0 6 0 5 U T C . (1 5 0 5 J S
T .)

「航空隊も下ろせないまま夜戦に突入か」

航暉はわずかに唇を噛んだ。ウエークに置いてきた身体でも唇を噛んでいるのだろう。痛みがフィードバックされる。

「どうする気だ、カズ」

高峰が航暉の隣でどこか薄い笑みを浮かべて現れた。

「赤城達は？」

「相手の射程外に出ればいいってもんじゃない。グレイハウンド」
が回収できるエリアに行き着くだけでも最低で40分。それもこの位置で完璧に足止めできた場合だ。……現実的には80分だろう。回収も含めて90分」

メタルフレームの眼鏡が光る。

「打撃群の防衛は吹雪と白雪が加わって何とかなってるが、榛名がネックだ。武装は生きてるが機関がやられて、いかんせん速度が上がらん。軽巡以下の高速艦に捕まったらまず逃げられないだろう。弾薬も無限じゃない。戦えてあと……150分。いくら空運のテイルローターが使えるといってもその時間で撤退させきるのは不可能だ」

「……150分で落とすきれなければこっちが終わりか」

「だから、攻勢に切って出たんだろう？ あと40分で中路艦隊の本隊が合流する。攻勢に出なければあのまま押し切られた」

高峰の言葉に頷く。電とのリンク率をわずかに上げる。敵の戦艦の砲撃を縫うように走る彼女たちを意識の中で俯瞰する。

「……孤独に歩め。悪をなさず、求めるところは少なく。林の中の象のように。か……」

「悟りでも仕入れた？」

「脳空間じゃ悟りまでダウンロードできそうだが、それをする気は

ないさ……欲をかいてはすべてを失うとわかっていても、それでも譲つてはいけないところがある気がしてな」

「うん?」

「……杉田」

《おう》

「打撃群を反転させて水雷戦隊の援護を行う。照明弾と探照灯、千代田の瑞雲をつける。30キロでどこまで精度を出せる?」

《……使う砲によるが、おそらく±15メートルが限度だ。夜間射撃は誤差がでかい。あまり精密にやろうとするとデカトンケールは持つても回線が落ちる》

対空支援のために利根に意識を飛ばしたまま杉田は答える。会話を成立させながらも敵の艦戦をガンガン落とすしていく。……そろそろ夜闇に切り替わる。対空電探の情報中心に設定を切り替えさらに撃ちまくる。

「……主力艦隊転進、一斉回頭左舷3ポイント、進路0―4―5。単横陣で敵艦隊と向かい合うぞ」

《旗艦榛名・了解しました!》

「敵艦隊は38キロ先だ。重巡の有効射程まで接近して水雷戦隊の援護に回る。二時間で決める」

艦隊はゆっくりと転進を開始する。全艦がどこかしら傷を持っていくがそれを感じさせないほど一斉に旋回を開始し、正対していく。

太陽が水平線の下に沈むその刹那、一瞬の緑光を残した。それが烈風の濃緑の迷彩を一瞬浮かび上がらせ、すぐに消える。ゆっくりと闇夜に溶けていく。

「オールステーション。こちら国連海軍月刀海軍中佐。海域MIにて戦闘中。我、夜戦に突入す。繰り返し、我、夜戦に突入す」

それは作戦参加艦のみではなく、付近の船舶や島々に向けた通達。……死にたくなければ近づくなという警告であり、戦いの火蓋を切つて落とすという宣言だった。

Point "MI1532" / The offing of
Midway |
Sept. 16 2082. 0610UTC. (Sept. 1
5 1710SST.) |

「Shit! 間に合わなかったネー!」

沈み切った太陽が空を夜に明け渡していく中で金剛は唇を噛んだ。

「メイジャー・タカミネ! 艦隊まであとどれぐらいネー!」

《35分つてところか》

「30分で誘導しなサーイ!」

「それはさすがに無茶じゃないかい……?」

隣で苦笑いを浮かべるのは時雨だ。

「無茶もヘソチャもないデス! 一秒でも早く艦隊に加勢しなきゃ

……。カズキのところへ行かなくちゃ……。いけないんデスっ!」

「……君のお姉さん、こんなに月刀中佐LOVEだったっけ?」

「ははは……ウエークに月刀さんが異動されてから一気に悪化しまし

た。はあ……」

全力でエンジンをぶん回す金剛の後ろで肩を落とす比叡。まあ、い
いんじゃないですかとあたりさわりのないコメントをする古鷹に戦
場の目の前なのに眠そうな加古。加勢一番乗りを決めるにはどこで
ダッシュをかければいいのか計算中らしい白露に真面目さが裏目に出
て緊張しっぱなしの朝潮。

「……なんで周りは馬鹿ばっか……!」

《それなら君がストッパーになるしかないな。満潮ちゃん》

「……! ちよ、あん……」

「満潮？ どうしました？」

聞こえてないのか朝潮が首をかしげて満潮を見る。

《これは、満潮ちゃんにだけチャンネルを合わせてある。周りのコードブックとは変えてあるから安心してね》

(―――で、なによ)

《見ての通り金剛嬢は月刀中佐しか見えてなくて視野狭窄になっている。そのサポートは比叡がすべきところだが、おそらく彼女は金剛に押されて彼女を止めることはできない可能性が高い》

どこか演技臭いやれやれと言った声色の航暉の声に満潮は斜め前を進む金剛を見て目を細めた。後ろ姿で表情はほとんど見えない。

(まあ、そうでしょうね。で？　なんで私がストッパーにならなきゃなんないのよ)

《それができるのがおそらく君しかいないからだ》

無線の奥の声質が変わる。これまでのどこか緩いテンションが嘘のように張っている。

《君は適度に艦隊のメンバーから距離を取り、中立を保っているからだ。これからおそらく前線は攻守入り乱れた乱戦に突入する。その指揮を金剛がとれるとは思えない。それを指摘できるのは艦隊のメンバーでは君だけだ》

(駆逐隊の旗艦ですらないのに戦隊の旗艦様に異議申し立てをしろつて?)

《月刀中佐から応援部隊の連合旗艦は551TSQの駆逐艦“電”がとるようにと言っている。このことは伝えてあるが、もし電の指示を無視して金剛が動くようなことがあれば、まず君が止めてくれ》

(私の意見なんて聞いてくれるかしら?)

《それでも止まらなければ。指揮官権限で艀装をロックするまでだ》

(……！　正気?)

《それぐらい今の君たちは危険だということだよ。特に金剛嬢は特大のジョーカーだ。彼女が下手に動くと残りの艦隊が危険だ。無論、君も》

満潮は高峰の声に内心溜息をつく。彼の言うことも一理あるのだ。

今の金剛は冷静さを欠いている。その状態で戦闘域に飛び込めばどうなるか……正直、あまりいい未来が見えない。

(仕方ないわね……今度はこうなる前に手を打つときなさいよ)

《恩に着る》

無線が切れる。改めて全体無線が繋がった。

《北側から回り込む。転進左舷半ポイント、用意、かかれ!》

空は地球の影を落としこみ、暗い藍へと姿を変えていく。月はまだ見えない。

遠く雷鳴のような音が聞こえ始めた。戦の足音はもうすぐそこに迫っていた。

第24話「MI・焦燥」

Point "MI1467" / The offing of
Midway |
Sept. 16 2082. 0640UTC. (Sept. 1
5 1740SST.) |

空はもう完全に沈黙していた。黄昏時はもうとつとつに過ぎ去り、舷灯が互いの位置を示し、ほのかに表情を照らす。

「……速度は大丈夫ですか？」

「ええ、これならなんとか」

痛みで表情をゆがませる加賀が如月に笑いかけた。飛龍と瑞鳳を除く空母機動艦隊と霧島、日向……損傷が激しく、夜間の艦隊行動が難しいメンバーがゆっくりと戦線を離脱していく。護衛部隊として千代田と初雪・叢雲たちも合流して、傷ついた艦娘たちを10ノットほどの速度で西へと向かう。先頭を曳くのは初雪だ。

「もう少しで帰れるはずだから……みんな頑張る」

左舷側を警戒するのは睦月と如月だ。波の上下に合わせて揺れる舷灯に照らされた表情はいつもより厳しいものがある。

「……睦月、大丈夫？」

「うん。……もし敵だったらみすみす見逃すかにやあとと思って」

睦月の視線は斜め下、揺れる水面に向けられている。

「天龍さんたちも抑えてくれてるし、大丈夫だと思いたいけど……」

「……今、希望で予測を立てるのは少し危ないんじゃないかな？」

如月は睦月の表情をまじまじと見つめた。いつもはつらつと明るい睦月がこんな表情を浮かべるのをはじめて見た気がした。

航暉は艦隊護衛に睦月たちと吹雪たちを組み込んだ。それは最前線でドンパチをするのに向いていないとかそういうパッシブな理由によるのだろうか？

もしそうじゃないとしたら。

もつと違う理由があつて配置したとしたら。

「……いっ！ 面舵いっぱい！ 耐衝撃態勢！ 左舷から魚雷来ます！」
睦月が叫ぶ。ソナーにわずかに聞こえたポコポコと気泡が発生する音、まるで……水中で魚雷発射管の門扉を開くような音。直後に鶏が鳴くようなコツコツコツコ……という推進音、かなり近い、音からして8条。

艦隊が慌てて進行方向を変えようとするが損傷がひどい船の護送中である、はいそうですかと動けるわけではない。

「如月！ 爆雷！ 三式機雷を射角一杯、起爆深度最浅でばらまいて！」

睦月は進路を維持したままで、左舷の爆雷投射機を作動させる。圧搾空気で遠くに機雷をばら撒く三式投射機が次々に機雷を撃ちだし、海面に叩き込む。海面に触れわずかに沈み込んだ爆雷がすぐに起爆し、いくつも水柱を立てる。

泡立つ海面に新たに水柱が立った。水圧の壁に飛び込んだ魚雷が誤作動を起こしたのだ。それでもそこを超えてくる泡の列を認める。数は1条、その行く先は護衛していた艦隊のど真ん中。誰に当たつてもおかしくない。

「睦月っ！」

睦月が海面を蹴って飛び出した。それを見た如月が驚いた声を上げる。

「如月はそこにいて！」

主砲から機銃に持ち替えた。今は貫通力よりも速射力がほしい。無いよりはましだろうと追加で持たせてくれた機銃——妖精さんが荒ぶつてできた短機関銃サブマシンガンタイプの機銃だった——を両手で構える。人間の拳銃射撃とあまり変わらない、肘を伸ばして両手で機銃を保持、二等辺三角形が描けるように正面に構えるアイソセレス・スタンス。強装填弾オーバーロードが装填されているらしく、強烈に腕を揺さぶりながら大量の薬莖が飛び出していく。

睦月のすぐそばを通過する位置まで魚雷が食い込んでくる。機銃の激しい振動に歯を食いしばりながら、睦月は引き金を固定し続ける。観念するかのように魚雷が起爆したのは彼女のほんの5メートル手前だった。

「うわっふ!?!」

水柱をもろにかぶりながら後ろに飛び退く睦月。彼女の機装に魚雷の破片でも当たったのかカンカンと硬質な音がする。

「睦月!? 無茶しないで!」

「ごめんだけど話はあと! 551水雷戦隊第二小隊、左舷対潜戦闘用意!」

この攻撃は……間違いなく潜水艦の雷撃だ。

「ピン、撃ちます!」

睦月の三式水中探信儀——アクティブソナーが作動する。音の伝播は空気中よりも強い。確かな質量を持って水中を全方位に向けて音が走っていく。これで敵にも情報を与えることになるとしても、それ以上に使う意味が大きい。

「……いた! 10時方向方位2—0—0距離1000、深度20!

初雪さん、左舷の警戒お願いします!」

「わかった」

睦月のタービンがうなりを上げる。パッシブソナーの出力を上げる。排気音と徐々に音域を上げるタービン音。潜りつつ機関を使用、逃げる気だ。

「逃がさなきゃいしーっ!」

深度50にセット、K砲とも呼ばれた爆雷投射機にはもう三式機雷がセットされている。毎秒5メートルの沈降速度を誇る機雷だ。位置さえつかめれば当てるのはそう苦じやないはずだ。海中をすすむ潜水艦と水上をかける駆逐艦では比べるまでもなく駆逐艦の方が早い。

二級品一步手前だといわれ常に特型の艦娘たちと比べられ肩を落としてきた。缶の消費が少なく燃費がいいだけが取り柄と言われ、重要な戦線に出してもらえないことにも慣れた。でも悔しくなくなる

ことなんてなかった。

アクティブソナー発振。潜水艦は西へ向けて回頭して逃げる気だ。進路補正し爆雷の安全装置を外す。

そうしながら1カ月前のことがわずかに頭をよぎった。ウエークで初めて三式水中探信儀の開発に成功した時のことだ。月刀司令官はほぼ迷うことなく睦月への優先配備を決めた。うれしくもあつたが疑問に思つたのだ。なぜ特型のみんなを先にしないのだろうか？

直接聞くのはなぜか気が引けて龍田さんに聞いてみた。

『それはね、月刀中佐が睦月ちゃんのことを信頼してるからよ？』
頭をなでられながらそういわれ、最初は訳がわからなかった。

『月刀中佐はカタログスペックで判断するような人じゃないし、ちゃんと部下を見て判断してるわ。フロントアタッカーならトリッキーパーナ動きのできる雷ちゃんと回避が上手い暁ちゃん、雷撃なら響ちゃん、視野の広い電ちゃんとその隙間を埋めるのが上手い如月ちゃん。それをまとめつつ火力の鍵として天龍ちゃん……私は格闘戦要員って言われちゃったけど……』

龍田さんがしゃがみ込んで視線を合わせてくれたのを覚えている。

『下村艦隊との演習の時、なんで睦月ちゃんだけ控えになつたか知ってるかしら？』

首を横に振った。

『それはね、駆逐艦の中であなたが一番前線慣れしていて、今回の演習に参加しなかったとしても実戦投入に問題ないと司令官が判断したからよ。演習参加艦の枠が決まっているから、控えの枠を使つてもどうしても演習に出れない子が出てくる。その時に司令官は迷わずにあなたを選んだそうよ』

龍田さんは優しく微笑んだ。

『……ごときというときに前線で走れる足と高い対潜能力があつて、判断能力も高い……きつと対潜の軸にあなたを据えるつもりよ、あの司令官』

司令官が意図的にここに睦月を組み込んだとしたら。

それは潜水艦の脅威にさらされたときに、逃げられない傷ついた空母や戦艦の危険をいち早く排除するため。

「にやあああああああああつ！」

機雷投射機が次々起動する。広範囲にばらまかれた機雷が海中に没していく。起爆まで10秒。

「ソナーカットオフ！」

無線に叫ぶ。対潜戦闘用意の号令をかけた時に皆ソナーを通して耳をそばだてているはずだ。爆雷の炸裂音を聞いたら耳がつぶれる。

爆雷の炸裂範囲から飛び出して睦月は振り返った。

水柱が立て続けに立つ。一通り収まったのを確認してソナーを起動する。機関の音はせず何かがすれるようなきしむ音が響く。

「……こちら睦月。圧潰音を確認しました。対潜反応クリア、対潜戦闘を終了します！」

《バカ————ッ！》

無線越しに響く叫び声に睦月は思い切り目をつむった。

《また無茶して！ 対潜戦闘になると燃えるのはいいけど少しはこっちのことを考えてよ！》

「ぎ、きさくらぎ……ごめん」

《ほんとに思ってる!?!》

「お、思ってます！」

《……やっつと、やっつと一緒に戦えるようになったのに、こんなに早くさよならなんて嫌よ》

「うん。……うん」

ゆっくりと艦隊の方へ戻っていく。よく確かめると魚雷が至近距離で爆裂したときにできたのだろう、左舷側がわずかにへこんでいる。もしかしたら1ノットぐらい速度が落ちたかもしれない。浸水はないが、次喰らうと危ないかも。

「うん、ごめんね」

《……本当よ、睦月。あなたは私のお姉ちゃんでしょ？ 勝手に飛び出したんじゃないで、いなくなったりしないで》

「……うん、大丈夫」

海水で濡れた前髪を少し気にしながら睦月は舷灯の流れに合流する。

「月刀中佐がまだ隠し玉を持っていたとは……」

そういうのは蒼龍だ。苦笑いのようなあきれたような表情を浮かべている。

「それにしても、睦月さん。データ以上の活躍よ！」

「……いつになく上機嫌だな」

「そういう日向も撃破報告聞いてガッツポーズするぐらいには上機嫌じゃない？」

「……まあ、そうなるな」

歓迎ムードで皆がワイワイやるなか、先頭で複雑な表情を浮かべているのは初雪だ。

「……なんかおもしろいところ持っていかれた気がする」

「……なんであんたがふてくされてんのよ」

「ふてくされてないし。まだ私は本気だしてないだけだし」

「わかりやすくふてくされてんじやない」

叢雲に突っ込まれると少し頬を膨らませる初雪。その見上げた先にはわずかな光があった。

「とりあえず、回収部隊が来たからその警護、やるよ」

サーチライトが艦隊を照らす。テイルローター機がエンジンナセルを90度上方に回しヘリコプターのように降りてくる。

後部のスロープが開き中から男たちが手を伸ばす。

「皆さん急いで！」

睦月が声を張る。赤城と加賀が、祥鳳が、蒼龍が乗り込んでいく。睦月たち駆逐艦はテイルローターを囲むように周囲に目を走らせる。

最後に霧島が乗り込もうとした時だった。

《赤城達！ 急いで！ 敵航空隊が向かってる！》
「っ！」

木曾の声だった。すぐに高峰の声も割り込んでくる。

《方位0―7―3から3機、高度1200！ 艦戦だ！》

真つ先に反応したのは如月だった。

「対空戦闘用意です！」

艦娘だけならばなんとかなるかもしれない。でも今テイルトロ―ター機を狙われれば。

「……対空指揮は私がとる」

初雪が無線につぶやくようにそういった。その後ろでテイルトロ―ター機が急速に高度を稼いでいく。

「……みんなで囷になるしかなさそうだけど、いい？」

「いいもなにも、そうしないと赤城さんたちの飛行機落とされるんですよ？ やるわよ」

叢雲が頭を掻きながら溜息をついた。

「……睦月たちは？」

「大丈夫にやし」

「……なんとかなるわよ。たぶん」

初雪が目を細めた。

「……睦月と如月は舷灯を消灯して散開。私と叢雲で敵の位置を知らせるから狙い撃って」

「わかったわ」

「頑張るのです！」

「叢雲、ごめん。迷惑かけるけど探照灯も照射しながらいくよ」

「はいはい。あんたの指揮はいつつもそうだから慣れてるわよ」

「ん……553駆逐隊、551水雷戦隊第二小隊、全艦、対空戦闘用意」

《もうすぐ応援が行く、5分間ひきつけろ！》

初雪が睦月たちから距離をとるようにはしりだす。ライトというライトを煌々と光らせ、対空電探の示す方向に主砲を向ける。発射されるのは曳光弾そのわずかな光が黒光りする何かに反射する。

「叢雲」

それを見届けた叢雲の機銃が弾をまんべんなくばら撒いていく一瞬だが火花が散った。

「これ5分間も続けるの……？ めんどくさい」

素晴らしいながらも初雪の顔には小さく笑みが浮かんでいた。

P o i n t " M I l 4 0 7 " / T h e o f f i n g o
f M i d w a y
S e p t . 1 6 2 0 8 2 . 0 7 0 4 U T C . (S e p t . 1
5 1 6 0 4 S S T .)

《比叡、対空砲の砲火見えるか？》

「はい！ ばつちり見えてます！」

無線の声にこたえながら一番主砲を動かす比叡、その横では古鷹が控えている。

「金剛さんたち、大丈夫ですかね？」

「お姉さまなら大丈夫ですよ。最前線まで行けば月刀中佐の指揮下に入ります。そうしてしまえばお姉さまはちゃんと動いてくれるはずですよ」

電探の情報と目視で計算尺を合わせていく。一緒に進んでいるはずの金剛たち本隊は先に敵艦隊の砲戦支援のために先行している。……金剛が前線の水雷戦隊支援を最優先にすべきと具申したからだ。高峰少佐がそれを受け部隊を二つに分けた。本隊はそのままルート通り北から回り込むように移動し敵艦隊へ、古鷹と比叡は南側を回り、榛名たちと合流する作戦だ。

「……金剛さんがあそこまで引かないのも珍しいですね」

「そうですね。でも、お姉さまらしいと思いますよ」

にやにやと笑いながら主砲に弾薬が装填される。目算だが、これで

ぴったりのはずだ。

「こちら比叡、用意できました！」

《発砲を許可、目標、敵航空隊！》

「一発入魂！ 気合い！ 入れて！ 撃ちますっ！」

周囲を昼間にかえるほどの強烈なマズルフラッシュ。闇夜に溶けるように高空へ向かう弾は空中で弾け、赤く燃えながら海面に向けて降り注ぐ。

《うひゃあ！》

「あれ？」

《ちよつと比叡さん！ 炸裂高度考えてくださいよう！ 子弾燃え尽きる前に落ちてきてます！》

睦月の声に顔が青くなる比叡。

《……でも敵機も全部落ちてる。三式弾流れ星みたいとか言って回避が遅れた睦月が悪い》

《でもでももっ！》

《うちの姉が迷惑かけてごめんなさいね？》

《なにげに如月ヒドイ!?!》

コントみたいなやり取りに古鷹がくすくすと笑う。

「なにはともあれ撤退作戦の第一段階終了ですね。高峰少佐、この後はどうしますか？」

《睦月たちと合流して敵艦隊への砲戦支援に向かってもらおう……いけるかい？》

「重巡のいいところ、お見せします！」

空の色が落ち着いてきてもう完全に夜の時間になっている。海のと真ん中では星明りも馬鹿にならない。水平線の向こうがほんのりと赤くなっている。

「比叡さん、行きましよう」

「はいー」

古鷹がするすると海の上を進んでいく。モノトーンになった海は静かに黙り込んでいた。

Headquarters of the Saver Group
Up for Midway / Innerspace of
DECATONCALL III
Sept. 16 2082. 0709UTC. (1609JS
T.)

「……中路中将」

「わかっておる。金剛のことじやろ？」

帽子を目深にかぶった中路が艦隊の先頭を曳く金剛のマークに
触れる。

「金剛」

《中路テートク？ いったい何ですか？》

この忙しい時に、という声色だ。それを聞いて高峰は眉を顰め、中
路は苦笑いを浮かべた。

「何を焦ってる」

《今水雷戦隊二つでエネミーフリートと渡り合ってるなら急がないと
危ないデース！ 中路テートクもそれは》

「わかっておるとも、だからこそ今こうやって砲支援に入っている」

《伊勢や榛名の砲弾だってもう少ないネー！ 早く終わらせないと
こっちが……》

「それをわからずに私たちが指揮を執っていると思うかね？」

中路の声に金剛が押し黙る。

「金剛、確かに状況は危険だ。だがお前みたいに焦っていては救える
もんも救えん……時雨」

《なんだい、提督？》

「本隊の旗艦機能をお前に移譲する」

《……わかったよ》

《ちよつと待つネー!》

「周りの状況も鑑みずに突っ込みかねないやつを旗艦にできない……少しは頭を冷やせ、金剛」

それだけ言つて無線を切る。

「……よかったですか?」

「実によくない。ほんとにあれば周りが見えとらんぞ。月刀!」

返事をよこす余裕もないのか、テキストだけが現れる。

【どうしました?】

「金剛がすこし危ない感じだ。支援艦隊の方に私が回りたい。前線はもちそうか?」

【……わかりました。よろしくお願いします】

「……こりゃ、前線も修羅場だな」

「月刀中佐がここまで追い込まれるのも珍しいですけどね」

高峰はそういいながら榛名へのリンクを強める。

「榛名、あと15分でそっちに比叡と古鷹、睦月たちが合流する。火力最大でぶっ放せ!」

《了解しました!》

「……さて、一番の鬼門はこいつか」

レーダーの上で味方の前衛は砲弾の雨の回避に精一杯になっているように見える。だが半包囲の形までじわりじわりと陣形が整えられていく。相手は空母を取り囲んだ輪形陣。高峰は中央前方で砲を構える敵を見据える。

「戦艦夕級フラッグシップクラス……!」

第25話 | MI・孤独

Point "MI0467" / The offing of
Midway |
Sept. 16 2082. 0731UTC. (Sept. 1
5 1831SST.) |

砲弾の雨とはまさにこのことを言うのだろう。その中を縫うように駆逐艦がかけていく。

「天津風！ 左舷から雷跡、避けなさい！」

その駆逐艦たちを指揮するのは神通だ。どの艦よりも先に最前線に飛び込んだ神通は主砲を発砲しては動くを繰り返す。目の前に割り込んできた駆逐イ級を横なぎにするように主砲を発砲すると、駆逐イ級が爆ぜる。その光越しに敵艦隊を見つける……まだまだ敵艦隊の数は減らない。

《神通、突出しすぎだ。逆包围されるぞ！》

中路の警告も聞こえていた。それには答えずに神通は急加速、相手の前線をなぞるように動く。

それを追っていくつも砲弾が降る。その発射炎は確実に敵の居場所を示していた。それに砲身を向け、狙い、放つ。それだけの動作を淡々と繰り返す。

「……波の周期を読んでことりと落ちるように」

今は砲を黙らせるだけでいい、逃げるなら逃げろ。逃げないのなら部下の雷撃で沈め。

正面からの砲撃、直撃コース。わずかに首を振り、避ける。風圧が鉢巻を叩いてその切れ端を宙に散らす。撃つてこい。その発射炎が我らの灯となる。

ひたすらに回り込むように左へサイドステップ。今度は雷巡チ級と重巡リ級……リ級の方はフラッグシップクラスだろうか。

「……いいでしょう」

一瞬足を止めその反動を斜め右前方へ。そのまま動いていたら神通を貫いていたであろう位置に砲弾が突き刺さる。

機銃で千級を牽制しつつ、勢いは殺さずに前へ。一瞬だけフラッシュを焚くように探照灯を照射。照射時間は半秒あっただろうか。それでも相手の眼を一瞬でも潰してしまえば、カタはつく。主砲と副砲を総動員して喫水近くにまとめて叩き込む。相手が反撃する前に右足で海面を蹴りこみ、また左周りのパターンに戻る。

ここまで敵「艦隊」に飛び込んでしまえば最前線にいる敵艦以外は無視できる。中央付近にいる戦艦にとって、この距離で砲撃をすることは味方に砲撃を加えるような自殺行為になるからだ。戦艦の大火力、長射程を活かした攻撃はこの距離に近づかれる前に終えなければならぬものだ。

だから今は取り巻きの重巡以下の前線部隊を潰しにかかる。

「……手負いの空母機動部隊の護衛と、油断しましたね」

敵の機銃がスカートに穴をあける。それを見ながらも神通はその発射炎に向かって機銃を叩き込む。一斉射、一秒以上、二秒未満。数としては100数発の弾が放たれたはずだ。

《砲支援を開始するぞ。一度下がれ!》

「……了解」

行きがけの駄賃とばかりに酸素魚雷を放出してから一気に後退、これだけ密集してれば狙わなくなつてどこかに当たる。

水平線の向こうが瞬いた。数テンポ遅れて艦隊のど真ん中、戦艦タ級に着弾する。爆炎を上げる敵艦だが、うまいこと急所を避けられた形だ。主砲が一基潰れたぐらいだろう。

「神通さんー!」

天津風が駆逐艦を牽制しながら神通の方へと寄っていく。

「無茶しないでください! 神通さんだけ孤立しちゃいます!」

「大丈夫よ。天津風。コロンバンガラ沖に比べれば……これぐらい」

また飛び出していく神通。それを追いかけるように天津風が動く。雪風がいなくなつてから、神通の挙動がおかしい。

いつも以上に強いのだ。それは喜ぶべきことなのかもしれない。

でもそれを天津風は素直に受け止めることができない。

この動きを続けていけば必ず後に反動がくる。天津風からみてもわかることなのに、神通がわからないはずがない。それがわからないほどに動転しているのか、そうまでしないと勝てないほどに追い込まれているのか、はたまた、両方か。

神通が道を切り拓いていく。その道を天津風が進む。神通は振り返らない。

「……やっぱり、おかしいよ」

無茶な訓練で有名な神通だが、それでも部下の様子は把握していた。なのに今は把握しようとしていないように見える。

連装砲くんが神通の後方に回り込んだ駆逐口級を蹴散らした。神通のためにも退路は確保しなければならぬ。普段はこの役目は雪風と二人でやってた仕事だ。

こんなことになったのも、雪風のせいだ。雪風がいなくなっただけだ。あの子なら大丈夫とどこかで思っていた。生きて帰ってくると信じていたし、今でも信じている。

「……早く帰ってきなさいよ、バカ」

そう考えながらも神通の後ろを守り続け、後ろを振り返ってぎよつとした。

「……まさか本気で敵艦隊のど真ん中に飛び込むつもり!?」

《神通！ 砲支援の掃射域に入るぞ！ ブレイクだ！ 即時転進！》

無線が叫んだ。この声は中路中将か。

「……撃ち続けてください！」

《そんな捨て身の攻撃を誰が許可した!?!》

「敵を落とさなければ全員ここで終わるんです！」

砲を撃つ手をやめないまま、神通は無線に叫び返す。無線に敵の前進との交戦。神通の注意が水面下に向かつてなかったのはある意味彼女の不注意だった。

「神通さん避けて！ 右舷雷跡視認！」

天津風の声に神通が目を見開く。右舷前方、2時方向から魚雷2条。慌てて海面を蹴る。飛ぶ方向は真横、左側への急激なサイドス

テップ。次の瞬間にその避け方が間違いだったことを彼女は悟る。敵艦までの一本道のど真ん中に躍り出た。その終点には敵艦——黄色い獯猛な目を向けてくる戦艦夕級。その砲門がピタリと神通を捉えていた。

「神通さんー」

あぶりだされた。そう思うほかなかった。

《神通ー》

中路中將がリンク率を跳ねあげる。水面を蹴る、方向は右前方だが、神通の意思と中路の意思が衝突コンフリクトを起こしてわずかに反応が遅れる。コンマ以下何秒の世界だが、戦場でその空隙は生死を分ける。

避けられない

そう確信した直後にまばゆいほどの閃光が走り、左肩を抉るように衝撃波が走った。痛みを目をつぶる。電探破損、左腕はつながっているもののまともに動かせるとは思えない。

——戦艦の至近弾を受けてこれで済んだのは奇跡かもしれない。

膝をつきつつも右手で砲を向け、驚愕した。相手の砲塔のすぐ脇から火を上げている。暴発したのかと一瞬考え、すぐに否定した。暴発したならまともに弾は飛んでこない。可能性があるとしたら、……砲支援を行っていた艦隊の弾。

直後に戦艦夕級の横っ腹で大きな水柱が立った。雷撃——
——？

《……無茶な攻撃は訓練だけにしてください。神通さん》

無線が響く。その声に彼女は動きを止める。その無線の奥にはいくつもの戦闘音。機銃に主砲、ロケット弾のような音もする。右舷側でロサ弾が弾けた。結構近い。

《……神通さん、みんな、心配かけました！ でも、不沈艦の名を舐め

てもらったら困りますっ!》

「――雪風!」

天津風の歓喜に満ちた叫びに呼応するように、神通の前に飛び出してくる影一つ。射線を確認した彼女は主砲を連射、魚雷で傾いでいた敵戦艦にとどめをさした。

「陽炎型8番艦、雪風! 現時刻をもって526水雷戦隊の指揮下に戻りますっ!」

神通の真横に影が立つ。

「よお、鬼教官。教え子が戻ってきたんだぜ? 言うことがあるだろ?」

メカニカルな刀を肩に背負い、隻眼が笑っていた。

「天龍、さん?」

「おう。第551水雷戦隊、これより敵艦隊掃討作戦進行中の526水雷戦隊を支援する」

天龍がそういうと大量のロサ弾が飛び出していく。

「暁、雷。行け!」

《待ってました!》

《いつきまつすよー》

暁が探照灯をともしつつ飛び出してくる。射線に飛び込むと全速で敵艦隊中央に向けて走り出す。

「……まったく、神通。お前が前線をがつつりかき回してくれたおかげでこっちの作戦がパーだ。半包围して雷撃戦で一網打尽のはずだったが……まあ、仕方ない。動けるな?」

天龍がそういいながら、右手を差し出した。神通はその手を取り、立ち上がる。

「悪いがお前の撤退を支援できる戦力的余裕はない」

「武装が半分死んだだけです。撤退するほどつらいわけでもありませんよ」

「ならいい、総合旗艦殿! 聞いてたな?」

《なのです。天龍さんは暁お姉ちゃんのバックアップに入ってください。雷お姉ちゃんの方は龍田さんが入ってます。神通さん以下52

6 水雷戦隊は一時的に後退、雷撃戦に備えてください。——今
から私と響お姉ちゃん、で敵艦隊中央を突破します》

「そっちのバックアップは誰だ？」

《……司令官さんとのリンクで十分です》

「……くれぐれも死ぬなよ。電」

《なのです！》

天龍は笑って空を見上げた。不安そうな天津風が天龍を見る。

「……正気なのかしら？」

「少なくともお前の旗艦よりは頭は冷えてるはずだ。勝算なしで飛び込むバカじゃねえよ。さて、旗艦と司令官の無茶な攻撃に付き合うとしよう」

天龍が駆け出す。暁に追いつき、暁の後ろに回り込もうとした軽巡を切り捨てる。

「……一度下がりましたよ、神通さん」

「……雪風」

「後でしっかり謝りますから、今は」

天津風が目の端に涙を浮かべつつ笑った。

「そうね、後退しましょう。連装砲くん！ いっしょにいくよ！」

「殿は雪風が務めます。弾も魚雷もたんまり持つてるので」

「……わかりました。一度後退、雷撃の指示を待ちます」

神通は気が抜けたようににへらと笑うと頷いた。

Sept. 16 2082. 0749UTC. (1649JS
T.)

「くっそ。砲撃の難易度を最高レベルまで引き上げやがって！ 月刀！ あとで覚えてやがれ！」

「寿司でも焼肉でもおごってやるから次！ L235チャーリー！ 三秒後！」

脳内が情報で飽和していく。自軍の位置、敵艦の配置と攻撃可能艦の位置、その砲塔の向き、魚雷発射管の動き数、動き。攻撃できる艦はどれで、攻撃を受けそうな艦はどれか。秒刻みで変化する情報をつかみ、分析し、前線で体を張る艦娘にフィードバックする。

航暉が主に指示を出す艦は3隻、暁、雷、電。それをカバーする天龍と龍田、響には彼女らの脅威となる敵艦の情報を提供し続ける。中路中将に526水雷戦隊の指揮を任せているから何とかなっている形だ。これ以上のリアルタイムでの使役は無視できないタイムラグが生まれかねない。

榛名の主砲から飛び出した主砲弾が指定した座標L235チャーリーに着弾する。そこに飛び込んでいたてきの駆逐艦が爆散し、その横を雷と龍田がすり抜ける。

「次！ L285エコー、ファイア！」

「着弾8秒後！ くっそ、処理限界近いぞ！ 回線が持たねえ！」

「対空リンクをカットしろ！ 敵航空機は落とす切った！ 飛龍・瑞鳳、打撃艦隊上空でホイールワゴンを維持！ 千代田は着弾観測を続行！」

「マジか!? さっすが飛燕！ 対空リンクカット了解！ 高峰、比叡たちはまだか!? 榛名の砲がそろそろ限界だ！」

「比叡古鷹、あと30秒でインサイト！ “鷹の眼”のリンクの用意はできてる！」

「インサイトと同時に“鷹の眼”とスナップモードでリンク！ 榛名を下げる」

「スナップモードスタンバイ！」

デカトンケールという電脳空間の中で叫ぶ必要もないのだが、怒号の交わしあいには発展している。最前線の水雷戦隊の航跡が何度も敵艦と交差し、敵艦隊の陣形を崩していく。いつ何があってもおかしくない状況下では、こうでもしないと正気を保てないのだろう。

「暁、キックレフト！戦艦の射線に突っ込むぞ！」

《うっはあ！》

作戦域のマーカーが一つ、右へと急展開する。暁の視界をリンクしている航暉の目の前を敵戦艦の砲弾が通過した。

「R053インディゴ、二秒後！」

「おうっ！」

伊勢の弾丸が空を切る。指定したポイントに飛び込んだ弾は敵戦艦の第一主砲を潰して炎上させる。その炎に向けて天龍の魚雷が伸び、過たず敵を海中に没させた。

「これで残存敵勢力は戦艦1、重巡2、軽巡7、駆逐11、あと空母10！」

「一向に減りもしねえ！」

「それでももう半分近く潰してんだ。行ける行ける！」

「残りの戦艦1が鬼門だろーが！ どうする気だ！」

「砲を黙らせればこっちで何とかする！ 撃ちまくれ！」

航暉の指示に「無茶言ってくれる……！」と呻いたのは杉田だ。

「古鷹、比叡、インサイトまで残り5、4、3、2、1……！」

〔同期実行！〕

「比叡、古鷹、鷹の眼、オンライン」

「司令部杉田少佐より比叡、聞こえるか？」

《こちら比叡、感度良好です！》

「悪いがこの先お前に頼りっぱなしになるぞ。4基8門、砲撃用意！」

《了解！》

「マルチサイテイングスタンバイ」

8つの目標がロックされ、それに向けてそれぞれの砲が動き出す。

「……ファイア！」

《撃ちます！》

砲支援の弾幕が厚くなっていく。その陰で北寄りのルートを進んでいた艦隊が敵艦隊へと転進した。

《……こちら522本隊、時雨。敵艦隊のサイドをとった。これより砲撃を開始するよ》

「こちら司令部中路、了解。主目標、敵戦艦」

《時雨、了解》

これで敵の砲撃はさらに分散する。前線で軽巡以下を主にかけ回す第551水雷戦隊、後方との中間距離に下がった第527水雷戦隊、最後方で砲戦を続けるミッドウェー攻略打撃艦隊、そしてサイドから砲撃を加える522本隊。

「ここが正念場だ」

航暉がつぶやいた。電へのリンク率を高める。

「電、飛ぶぞ」

《なのです！》

敵戦艦を見据えた電が速力を上げる。その道を比叡の弾幕が切り拓く。吹き上がる炎を導とし電がさらに加速していく。

《電の本気を見るのです！》

P o i n t “ M I 0 8 2 4 ” / T h e o f f i n g o
f M i d w a y |
S e p t . 1 6 2 0 8 2 . 0 7 5 3 U T C . (S e p t . 1
5 1 8 5 3 S S T .) |

「……ちいつ！」

「焦らなくても十分あたってよ、金剛」

爆炎で汚く濁った空を弾頭が切っていく。金剛が撃った弾が敵の戦艦の脇に着弾する。

「もつと近づいたほうがいいネー！」

「重巡の間合いまで来てるんだ。大丈夫」

「駆逐口級、いっちょあがりー！」

加古が上機嫌にそう報告した。加古の砲でも有効射程に入っている。戦艦の金剛なら言わずもがな。

「それでも……！」

「……ばっかじゃないの？」

金剛の後ろでつぶやかれた言葉に彼女は動きを止める。振り向いた先にはスカートをサスペンダーで吊った駆逐艦。

「……今なんて言いました？ 満潮サン」

「馬鹿じゃないのって言ったのよ、この高速戦艦。司令官が思い人だかなんだか知らないけど、敵の雷撃があるかもしれないこの状況でこれ以上前に出て何する気？」

「満潮……っ！」

「悪いけど僕も同意見だ。十分に君の間合いにいるはずで、これ以上接近したところで部隊にとって旨みはない」

「時雨、あなたは黙って……」

「旗艦は僕だ。黙るわけにはいかないよ。これ以上近づいて何をする気なんだい？」

飄々とそういう時雨はそのまま金剛を見据えた。

「……三式弾。敵艦の近距離で撃ちだせば遠距離から潰すよりも確実に効果が出るネ」

「前線の味方駆逐艦を巻き込んで？」

満潮がそういうと黙り込んだ。

「あのね、金剛。あなたは確かに歴戦の戦艦でこれまでに何度も修羅場を潜り抜けてつきだでしょうよ。それこそあたし以上に経験は積んでいる。でもあなたが今やるべきことはなに？ 前線で敵の戦艦

と殴り合いをすること？ 単騎で暴れまわって敵を攪乱すること？
違うでしょ」

そういつて戦艦を睨む満潮。

「今やるべきは射程を活かして敵に遠距離からダメージを与えること
でしょうが。今あんたがやろうとしていることは『わがまま』よ。目
に見える戦果を挙げて司令官に認めてほしい。それだけで動いてる。
前線で水雷戦隊の指揮にあたって月刀中佐に認めてほしいだけ。
……それで突っ込んで？ 相手の雷撃圏内に入って？ あなたの直
掩をするあたしたちの負担は無視？ 冗談じゃないわ。それすら見
えないあなたを旗艦から外した中路中将の判断は正しいと思う」

金剛は唇を噛んだ。言い返すことができなかったのだ。

「わかったら素直にこの距離から砲撃してなさい。いつものあんたな
ら直撃弾出せる距離でしょうよ」

「金剛？ 急がないと比叡に全部獲物とられちゃうよ？ それにこっ
ちも向こうの重巡以上の射程に入ってるわけだし言い合ってる暇あ
るなら撃つてよ」

加古がのんきにそういいながら砲撃を続ける。

「……急ごう、金剛。僕らができることをしなきゃ。今必要なのは君
の独断での活躍じゃない。部隊としての活躍だ。きつとそれを月刀
司令補も求めてるはずだよ」

金剛は何かを言いたそうに唇をかみしめ、振り返った。砲身の向く
先は……敵艦隊中央、戦艦夕級。

「……ファイアー！」

足を止めての砲撃。爆炎が明るくあたりを照らす。

「……満潮、助かった」

小声で時雨がそういつてウインクをした。満潮はふんと顔をそら
す。

「……高峰少佐の命令だから」

「そうだね。でも、助かった」

「話はあと、私たちは対潜哨戒があるでしょうが」

「うん。僕らにできることをしなきゃ、ね」

戦艦夕級に金剛の弾が着弾する。計算尺は合っている。やっと金剛の照準が合いだした。

「提督。やっと戦えそうだ」

時雨はつぶやき、対潜ソナーに耳を傾けた。

第26話「MI・意思」

Point "MI0422" / The offing of
Midway |
Sept. 16 2082. 0802UTC. (Sept. 1
5 1902SST.) |

「帰ってきたか、ちんちくりん」

無線を傍受していた木曾が笑う。水平線ぎりぎりの位置が派手に燃えている。木曾たちが護衛している打撃艦隊の砲撃で燃えてゆく敵艦の灯だ。

「……雪風ちゃんいきってたんですね」

「ああ、さすが幸運艦」

「あれ、ウエークの艦隊が保護したって報告、入ってなかったんですね？」

舞風と木曾がしみじみとそういつていると横で主砲を右手に構えた吹雪が不思議そうにそういつた。

「まったく聞いてねえよ」

伝達ミスですかね？ と吹雪は苦笑いだ。

「サプライズにしては上出来だが、戦闘中はやめてほしいよなあ？」

「そうですね。……でも外連味があつていいとおもいますよ？」

「舞風がそういうならそうかなあ」

木曾はそういつて軽く笑ってから無線を開く。

「527木曾より司令部高峰少佐」

《うん？》

「艦隊防衛はうまくいつてる。吹雪と白雪の応援がなくてもこっちは大丈夫そうだ。前線の神通たちのほうの応援に出した方がいいんじゃないのか？」

《あー、それでもいいんだけど……そのあたりに潜水艦がいる可能性を考慮すると水雷戦隊を動かしたくないんだよね》

「対潜指揮は睦月のちびすけがすっかり指示出してる。問題はないと思っぜ？」

《それでも、だよ。この作戦は敵の殲滅が目的じゃない。艦隊の撤退支援だ。君たちの安全確保が目的なんだ。敵をなぎ倒したとしてもその間に潜水艦にやられましたとか目も当てられないだろう？》

「それはそうかもしれないが……」

《前線を信じるのも後衛の仕事さ。信じてやりなよ、神通たちを》

高峰はそういつて笑ったようだった。

P o i n t " M I 0 4 6 7 " / T h e o f f i n g o
f M i d w a y
S e p t . 1 6 2 0 8 2 . 0 8 1 1 U T C . (S e p t . 1
5 1 9 1 1 S S T .)

目の前の敵がどんどん爆炎を上げて沈んでいく。比叡と伊勢が放った主砲の弾が前をふさぐ敵艦を強引に薙ぎ払う。そうしてできた道を電は進む。その道に敵艦が突っ込んで戦艦の砲撃に沈められていく。

「……もう、やめてほしいのです」

つぶやいた声は敵艦には届かない。届いたとしてもどれだけの艦が理解してくれるだろう？ 相手を沈めながら「助けたい」と叫ぶ、そんな自己否定するような思いをどれだけの艦が理解してくれるだろう？

艦娘

—— I D R i v e | A W S

—— 水上用自立駆動兵装。自分は一隻の艦として戦うべ

きなのか、電はいまだに判断しかねていた。こんなことで悩んでいい時ではないことは十二分に理解している。それでも、今の戦いに否と言いつける感情を無視できなかつた。

この戦いは、不毛だ。

522本隊が交戦域に突入したことで戦況はひっくり返った。伊勢、比叡、金剛、古鷹、加古、利根、筑摩……遠距離砲撃ができる重巡以上だけでこれだけ戦力がそろっている。相手は重巡二隻に戦艦一隻。そのうち有効打が期待できるのは打撃艦隊の主力であろう戦艦夕級フラッグシップクラス、ただ一隻。砲撃できない空母を10隻も抱えた敵艦隊にとって、状況は一気に不利に持ち込まれた形になる。

こちらは水雷戦隊で足止めするだけで、敵艦隊をアウトレンジからなぶり殺しにできる戦力がそろった。それでも水雷戦隊を引かせないのは、救援隊の総合旗艦を任せられた電の半ば「わがまま」だった。

相手を殲滅できるとしても、それをするのは間違っている気がするのだ。仲間を失う寂しきは相手にだってあるはずだ。戦わねば何も守れないこの戦場で、戦わずに守れる道を探してしまう。なんと矛盾した兵器なのだろう、DD-AK04「電」は。

そんな兵器を信じて最前線に送り込む指揮官も指揮官だ。そのわがままに付き合って、リンク率まで跳ね上げて、周りの状況を脳殻に送り込んでくる。相手の動きを読んで、それに合わせて動きをサポートしてくれる。おかげで被弾せずにここまで来ることができた。

「電、進路そのまま」
「なのですー」

横を魚雷が通過する。追い抜くように放たれた魚雷が左から飛び出してきた軽巡を粉々に砕く。——響の雷撃だ。

炎を上げる軽巡の隣を飛び抜ける。速度は40ノット近い。缶が悲鳴を上げている。

こんな戦場、逃げ出してしまいたかった。

「この戦いは、不毛だ。」

この戦いで人間は何を得るといふのだ。深海棲艦は何を得るといふのだ。

敵はなぜ引かない。私はなぜ引かない。

「なんであなたたちは、戦うのですか？」

敵戦艦の真正面に出た。金剛たちの方向に向いていた砲がこちらに回る。海面を蹴る、電は左へ、うしろからついてきていた響は右へ。二人の間を割るように砲弾が走る。二人はほぼ同時に魚雷発射装置を始動。酸素魚雷が飛び出して海面を割った。酸素魚雷が夜の海面下を走る。酸素魚雷の特性で雷跡は見えない。だが確実に敵艦に向けて伸びる。

敵の副砲が海面を叩いた。直後に水柱が立つ。直撃コースを走っていた魚雷が爆裂した。

「……そう一筋縄じゃいかないか」

「なのです。……魚雷のストックは？」

「あと4本」

「私はあと7本なのです……再装填を許してくればですが」

「……なんとかするしかないね。……来るよ」

艦にとっては至近距離と言ってもいい距離にきた。ここまで来たら電探もなにもない。目視での乱戦だ。

「……お願いです！ 部隊を引いてほしいのです！」

右へ右へと回り込みながら電は叫ぶ。届いているかはわからなかった。届いていると信じて叫ぶ。

「勝負はほぼ決したのです！ 部隊を引いてください！」

右肩の後ろにつけられた主砲があまり間を置くことなく光を発する。一発でも当たればこちらが沈む。敵艦の全体像をつかみ相手の初動をつかみ続ける。戦艦の装甲は厚く、駆逐艦の主砲では大きなダ

する。三式弾ほどの威力はないが、至近距離で30発も浴びればただでは済まない。それもふつうの燃焼ではなく化学反応による発熱だ。黄燐が付着している限り1000度を超える高熱が食い込んでいく。砕け落ちて海水に触れた黄燐も突沸を引き起こし、その蒸気が夕級を蒸しあげていく。

「天龍さんも無茶すぎなのです！」

「お前の呐喊に比べればましだ」

「おかげで私の出番がなくなりそうじゃない！」

敵から距離をとり、刃を中段に構える天龍の横に雷がひよつこりと顔を出した。

「雷お姉ちゃん、大丈夫なのです？」

「かすり傷よ。大丈夫」

「煙突半分吹っ飛んでるのはかすり傷なのか？」

それには笑顔を答えの代わりにする雷。それに笑い返した天龍が横目で敵艦を睨んだ。

「とどめにはならんだろうが、これでおとなしくなってくれば儲けモンだな」

そんなうまいかないことはわかっていても口にだす。その間に電は魚雷の再装填を終えていた。敵の慟哭が響き、耳に残った。

「……きますー！」

黄燐の生み出す白い煙を纏ったまま敵の主砲が轟いた。白い煙を割いて飛び出した弾は天龍をかすって飛び抜けた。

「こんのおー！」

左目の眼帯を弾き飛ばして……焼けて潰れた眼窩が露わになる。顔の左半分が赤く染まりだす。それを見た電がわずかに目を見開いた。

「……天龍ちゃんに酷いことしたのは誰かしら」

夕級の後ろにひゅつと影が差す。その脇腹に赤い刃を突き立て、龍田は笑った。

「死してつぐないなさい。戦艦」

相手に押し付け放たれた主砲はその反動で内側から破壊される。

弾を押し出す圧力の逃げ場がなくなれば、当然弾の装填口に圧が戻り、暴発する。

「龍田さん！」

「龍田！・ふっぎけんじゃねえ！」

左の武装マウントから焼けた部品をばら撒きながら龍田が後退する。ぱたぱたと赤い血を左腕から垂らして、それでも笑って戦艦を見つめ続ける。

「すこし無理したかしら……？」

「少しじゃねえだろバカ野郎！ 自分の身も考えやがれ！」

「天龍ちゃんだけには言われたくないかなあ」

そんな会話を耳にしつつも、電は唇を噛み、自分につながる“彼”を思う。

「司令官さん」

《うん》

敵艦が悲鳴を上げるようにしながら砲を向けてくる。黄燐で焼かれ、龍田の刃を食い込ませたまま、砲を向ける。

「……敵も、助けたいのです」

《うん》

「でも、仲間を守りたいのです。どっちもできる道が、あると思いますか？」

《……どちらかしか選べないなんてことはないはずだ。でも、どちらかを選ばなければならぬならば、俺は迷わず仲間を守る》

電が海面を蹴った。魚雷を放ち、そのあとを追うように走る。

魚雷の迎撃をするか電を砲撃するか。戦艦夕級はその選択を迫られた。魚雷を撃ち落している間にも電が至近距離まで距離を詰めていく。両手で錨を持ち、主砲を撃ちながら前進していく。

「……ごめんなさい。戦艦さん。私はあなたを助けられそうもないのです」

錨を相手の艀装目がけて振りかぶり――

「守リタイモノガアルノハアナタタチダケジャナイ！」

その声に動きを封じられた。

——結果論ではあるが司令官月刀航暉はこの時、大きな間違いを犯していた。

一つ目は援護を受けるために司令部内の人員と密なリンクをしていたこと。

二つ目は電と感情を共有するほどに彼女とのリンク率を高めていたこと。言い換えるならば彼女の感じた戸惑いに引きずられるほどにリンク率を上げていたこと。

その結果として支援の指示も攻撃の指示もできないまま、電を敵の射線上に無防備に置き去りにした。

敵の主砲が轟き、過たず電の艦装を抉り取った。

主砲マウントから機関部へと抜けるような砲撃。その破片が彼女の衣服を切り裂いていく。電は痛いと感じる余裕もなかった。

その瞬間に起こったことを端的に言い表すなら、その衝撃で司令部機能が崩壊したということができる。

砲撃を受けた瞬間、彼女と深くリンクしていた航暉に痛みという膨大なサイズのノイズが叩き込まれる。瞬間的にだが物理的に危険なほどの電圧がデカトンケールという大規模なコンピュータ、ひいては彼自身の脳につながる回線に流れ込んだ。それを受け、セーフティが作動。高い電圧が通ったライン——すなわち、電と航暉ラインが瞬時にネットワークから切り離される。当然の結果として彼と彼女の情報はデカトンケール上から消え去る。

コンピュータからデバイスを取り外すことを考えてみてほしい。コンピュータとデバイスの情報共有をまだ終えてない状況でいきな

りデバイスを引き抜いたらどうなるか。——同じことが起こった。

相互に密なリンクをしていた司令部要員は頭を殴られたかのような衝撃を受けた。大量のエラーを引き起こし、警報であふれかえる。その警報は司令部にリンクしている艦娘、つまり作戦に参加している艦娘にも伝播した。

指揮系統に空白が生まれた。トップとして指揮を執っていた航暉の反応が消え去り、前線の艦娘にも司令部で何かが起こったことは伝わった。

「電?! 司令官?!」

その中でも航暉に直接リンクしていた第551水雷戦隊の面々はいきなり司令官がオフラインになった。目の前では艤装の破片をばら撒きながら、意識を手放した電がスローモーションで海面へと倒れていく。急展開に頭が追いつかない。

電が海へ叩きつけられる直前に天龍が彼女を掬うように海面近くを走り抜けた。ぐつたりと脱力した電を抱え、転げるように戦艦から距離をとる。

《551全員動くな!》

どすの利いた声が無線に乗った。直後、〃全員のリンク率が跳ね上がる〃。その衝撃に目をしかめつつ、天龍は電を抱いたまま頭を下げた。

敵の戦艦に戦艦の弾が突き刺さる。北からの砲撃——響が振り返ると第一主砲から煙を上げる金剛が点のように見えた。その衝撃で戦艦タ級は海面にどうと倒れこみ、急速に海面へと引きずり込まれていく。驚いたような表情をする暁のすぐ脇を魚雷が飛び抜け、敵の空母たちに吸い込まれ、水柱を立てていく。

《千代田、撃て……まったく、若造はまだ詰めが甘いか》

大量の雷撃が飛び、残りの敵艦を海中へと引きこんでいく。その射線は主に三方向、北の時雨、満潮。西の神通率いる第526水雷戦隊、千代田の甲標的が南から魚雷を放っていく。その数、合計78本。その半分ほどが敵艦に命中し、ほぼ全艦を大破炎上せしめた。

《敵戦闘可能艦の排除を確認した。状況を終了する》

リンク率が急速に下がっていく。中路中将のその宣言がこの戦闘の幕切れだった。

P o i n t " M I 2 4 6 7 " / T h e o f f i n g o
f M i d w a y |
S e p t . 1 6 2 0 8 2 . 0 9 3 1 U T C . (S e p t . 1
5 2 0 3 1 S S T .) |

「あぐっ……」

電が目を覚ましたのはそれからわりとすぐのことだった。

「お目覚めか、旗艦殿。今は動くなよ。艦装がほぼ死んでんだ」

天龍に背負われた電はぼうつとしたままそれを聞いていた。

「てんりゆう、さん……?」

「おう、なんだ?」

「たたかい、は……」

「誰も沈まず、敵艦は撃破、俺たちの勝ちだ」

やっと目の焦点があってくる。天龍の肩越しに縦に連なる艦隊を三列、認める。中央は戦艦や重巡、空母部隊。その両側を水雷戦隊が固めている。月あかりが航跡をきらきらと輝かせた。航暉とのリンクを確認しようとして、その波形がフラットなのに気が付く。

「し、司令官さんは……?」

《……なんとかここにいろよ》

《あー、生きてたんだ》

ノイズの酷い無線が流れ込む。そのあとにはどこか気楽な高峰の
声。

《勝手に殺すな……まあ、身代わり防壁が吹っ飛んだ衝撃で十分に臨
死体験はできたけどね》

《ノイズ大丈夫か?》

《……中継器が物理的に煙上げてたから予備の回線と簡易中継機につ
ないでる。調整なんてまともにしてなかった奴だからなかなか酷い
使用感だ。俺のQRS・プラグもいくつか交換になるかもなあ》

そんな声が聞こえる。

《航暉、お前は少し詰めが甘いな。感情で引かれるほど強くリンクし
てどうする?》

どこか笑った中路中将の声が無線に割り込んだ。

《あと、効率を優先しすぎたのも問題だな。私が別規格でリンクして
いなければあのまま司令部壊滅、作戦失敗で終わったぞ?》

《……それで20隻近く同時リンクして全艦落とし切った人が言いま
すか?》

《おや、もしかして航暉も見てた?》

《今、情報ログ見てます。そういう中将もリンク率俺とほとんど同じや
ないですか。しかも前線部隊ほぼ全員》

《そう簡単に追い抜けると思うなよ、若造。人虎の名は伊達じやない
ぞ。……これから一度全艦をウエークに届ける。その時にお前の協
力がもう少し必要だ。それまで寝ておけ、航暉》

航暉の通信が無理やりオフにされたようだ。クスリと天龍が笑う。

「月刀中佐も大概だと思ったけど、中路中将ってそれ以上にヤバいの
か?」

「……そうみたいなの、です」

安心しきったのか電の臉が重くなっていく。

「寝ててもいいぜ、旗艦殿。ちゃんとその間、俺が部隊を見といてや

る」

それが聞こえていたのか、いないのか。電は静かに寝息を立て始める。

「……なあ、龍田」

「なあに、天龍ちゃん？」

「俺たちは、なんで戦っているんだろうな」

静かに龍田は天龍の方を見つめた。

「私は天龍ちゃんと一緒にいたいから、かなあ。そういう天龍ちゃんは？」

「わからないから聞いてるんだろ？」

苦笑いしながら天龍は右目を細めた。

「わからなくなっちゃった。ずっと、戦わなきゃいけないから戦ってたんだ。……守りたいものがあるのはあなたたちだけじゃない……深海棲艦が守りたかったものって何なんだろうな。深海棲艦ですら守りたいものがあるのに、俺はなにをしたくて、戦ってたんだろうな」

「……私にはわからないわあ。でも、今確かなことがあるじゃない」

「ん？」

「今生きていて、私たちは守るべきものを守り切った。みんなを守り切ったじゃない。……自分たちのことで精一杯な私たちには、それで十分よ」

「……そうかもな」

わずかに顔を出し始めた半月より少し太った月、それが背中から優しい光を投げかける。

「でも、いつか。いつか電たちと一緒にその先に行けそうな気がするんだ。俺は……電の描く未来を見てみたい。戦場でも敵ですら救おうとする電がどういう世界を見出すのか見てみたい」

「それが……天龍ちゃんの戦う理由？」

「生き残るだけじゃ、つまらないだろ？」

焼け潰れた左目はもう像を結ぶことはない。それでも電たちを守った代償ならば、それも受け入れられる気がしていた。

「まあ、電もそれを指揮する月刀中佐も甘ちゃんだ。生き残れるよう

に俺たちが守らなきゃいけないだろうけどな」

「ふふふつ。天龍ちゃんがそういうなら、私もちよつと付き合おうかなあ」

「おう、できれば一緒に来てくれや」

月明かりの中をゆっくりゆっくり進んでいく。ウエークまでは遠いのが難点だ。きつと司令官はすぐに入渠を命じて、しっかり休むように言ってくるだろう。そしてきつとみんなを褒めるのだろう。こそばゆいが、嫌じゃない。

「さあ、帰ろうぜ。凱旋だ。俺たちの勝利だ、電」

戦闘が嘘のように海は静かになっていた。月明かりが静かに航路を照らしていた。

エピソード―航跡・提督

ウエーク島の環礁の内海、淡いヒスイのような色合いを眺めながら月刀航暉は溜息をついた。

国連海軍極東方面隊中部太平洋第二作戦群第551水雷戦隊司令官―――めちやくちやに長いプレートがかかったデスクに体重を預けて窓の外を眺めた。

「……どう考えても今ここは世界の特異点だよああ」

「正規空母4、軽空母2、水上機母艦1、戦艦6、重巡4、軽巡4、駆逐艦18……あと補給艦間宮に工作船明石……俺が敵の親玉だったら真っ先に逃げるね」

そういったのは高峰だ。第二種軍装は彼の細身にはやはりミスマツチだ。

「月刀、これだけの船の親玉になった気分はどうだ？」

「何寝ぼけたこと言ってんだ、杉田」

応接セットの人口革張りのソファが窮屈に見えるほどの男がケタケタと笑う。褐色がかった肌に色素の薄い髪を刈りこんだ彼は赤みの強い目を航暉に向ける。

「救援隊の指揮はお前だったんだ。艦隊の親玉に違いあるまい？」

「これだけの船を守り切った功績はでかいな？ 航暉」

「最後の最後で全部おいしいところ持って行った中将に言われても嫌味にしか聞こえないですよ」

「あれはお前の指揮ミスだろう？ 嫌味ぐらいがまんしろ」

応接セットに腰掛けた中路中将が笑って、コーヒーカップに口をつける。

「……やっぱり自分の豆とミルを持ってくるべきだったな」

「仕方ないでしょう、中将。インスタントじゃなくてペーパードリツプなだけましだと思ってください」

航暉はデスクに体重をかけたまま腕を組んだ。

「……雪風にはちゃんと謝ったんですか？」

「ああ、……もつと頑張るので安心してください！ ちゃんと沈まずに帰ってきますから」……だとさ」

そういいながら中路は肩をすくめた。

「彼女の幸運も彼女にとつては不運に変わりかねん。それは重々わかってるつもりだ。……彼女を救ってくれたこと、感謝する」

「それは電と六波羅医務長に言ってください。……まさか、まずいコーヒーを飲みに来ただけではないでしょう。本題に入りましょう」
航暉が応接セットの空いた席に腰掛ける。中路が指を組んだ。

「……今回の作戦ご苦労だった。月刀中佐以下、高峰君、杉田君には大きな負担を強いてしまった。だが今回の作戦は『存在しなかった』ことになる」

「……全力出撃して何の成果も得られなかったことを公にはできない、そういうことですか？」

「海軍のメンツにかかわる問題だ。そもそも中央[○]戦術[○]コンピューター[○]のスタンスは消極的反对。シミュレーション結果で危険だって出てるのに、作戦を決行した上層部は今震えてるだろうさ」

そういった中路に航暉は皮肉に口角を吊り上げた。

「その中で震えなくていいのは事態收拾の音頭をとった中路章人中将、あなた一人……。うまいこと使われましたかね？」

「そんな問題はどうでもいいんだがね、下手したら中部太平洋の主力がごっそり消え去るところだったんだ。それを防いだことによる戦略上のメリットは計り知れない。それは航暉、お前の業績だ。……勲章の一つや二つ送られてもいい功績なんだが、ネオM I作戦自体が存在しないんじゃないか、その救出なんてできない訳だ。……そこで、だ」

航暉や高峰、杉田の前にそれぞれ一枚の紙切れが置かれる。

「……『これ』は？」

「上層部からの『気持ち』だそうだ」

中路が皮肉下に笑った。極東方面隊の正式な小切手……それぞれに3千万と数字が振ってある。

それを見てにんまりと笑い航暉が胸元から青い万年筆をとり出した。それでサインをし、二重線で消しそこにも署名。

「……お返しします」

直後に高峰と杉田が大爆笑した。

「だから言ったでしょう、中将！ かけにならないって！」

「そもそもかけにする気はなかっただろ、杉田君」

「俺が受け取るか受け取らないか賭けてたのか？」

「満場一致で、受け取らない」だから成立してないけどね」

「こんな臭い金受け取るやつがどこにいる？」

簡単に言えば口止め料……あとは上層部からの首輪になる可能性の高い金だ。

「いいのか？ もしかしたら中央行きの切符かもしれないぞ？」

「私は前線で戦ってた方が性に合うので。しばらくは中央も安泰でしようしね？」

「まだまだ楽はさせてくれんか」

「若造呼ばわりしておいてもう引退の算段ですか？ “人虎”の中路章人中将？」

くつくつと笑って中路は顎髭をなでつつ上目で睨む。

「航暉……お前の戦い方は少数精鋭での切り込み専用だ。だが、そろそろその上を目指してもいいころだろう。……でかい部隊の動かし方を学べ、航暉。いつまで数隻規模の親玉で満足する気だ？ 席は私が空けさせる。さっさとここまで上がってこい、飛燕」

中路は懐からもう一枚の書類を取り出し机の上を滑らせた。

「ウェークに中部太平洋第一作戦群の分遣隊を設置する。設置日時は10月1日。風見大佐の第三分遣隊の再編ではなく、メンバーを一新した新部隊だ。その指揮はお前がとれ、月刀航暉 “大佐”」

「……ハッ」

獰猛な笑みを浮かべる航暉に中路が似たような笑みを浮かべた。

「……俺まで食い散らす気か、人虎」

「そう簡単に潰せると思うなよ、飛燕」

そういうと中路が立ち上がる。

「間違えるな。いつの世も最も浅ましく、最も脅威となるのは“人間”だ。深海棲艦というオーパーツが出てきたとしてもそれは変わら

ん。対深海棲艦戦で艦娘を殺し、軍を潰すのは“人間”だ。単純な目の前の脅威に踊らされるな」

「……それは忠告？」

「さあ、独り言じゃないかね？」

中路は部屋を出ていこうと歩き出す。

「そうそう、航暉、寿司、おいしくいただいたよ？」

それだけ言って笑って扉を閉め出ていく中路。それに呆然とする航暉。

「は……？」

新設部隊の概要の紙の下から小さな紙切れが滑り落ちた。床に落ちたそれを拾った航暉は思わずそれを読み上げる。

「月刀航暉様 食事代として8万7500円……ちよつと待て！ なんで俺が食ってない寿司の代金が回ってくるんだ!？」

『……………寿司でも焼肉でもおごってやるから次！ L235
チャーリー！ 三秒後!』

レコーダーから流れる航暉の声、レコーダーを持った高峰が腹を抱えて笑っている。

「おいしかったよなあ、杉田？」

「ああ、あんなにうまいものをたくさん食べたのは至福だったな？」

「高峰てめえ！ 杉田はともかくとしてなんでお前まで食ってやがる！ しかもよりにもよって寿司！ まともに魚が手に入らないこのご時世に寿司!」

「なんでとは酷い。だれが空軍のテイルローターをチャーターしたと思ってるんだい？ みんなでおいしくいただきました。ウエークから動けなさそうなカズの分も食べといたから」

「ふざけんじゃねえ!」

「あ、そうそう。渡井がご馳走様ってさ。……俺より食ってたぞあいつ」

「渡井!? なんで……あー、畜生！ やっぱアイツ潜ってやがった

か！ 南に回してた甲標的にしては最後の雷撃の数がどうも多いと思っただ、畜生！ 一隻か、二隻か？」

「二隻。伊168と伊401。ちなみに出動要請はお前より先にかかってたぞ？」

「……何が作戦指揮を任せるだ、あのタヌキ……！ 虎より狸がお似合いじゃねえかあのジジイ！ 俺を態のいいピエロにしやがって……！」

「詰めが甘いんだよ、カズ！」

ひとしきり笑って高峰が航暉の肩をバンバン叩いた。

「あれで『穏健派』らしいぜ？」

「あんな好戦的な穏健がいるかよ……」

笑えねえ、と航暉がつぶやいたタイミングでドアがノックされた。

「失礼しまーす」

顔をのぞかせたのは睦月だ。

「すいません、皆さん一度食堂に来ていただけますか？」

8隻しか籍を置いてないはずのウェーク基地の食堂は今やいつぱいに人が詰まっていた。

「これは……」

艀装を下した艦娘がそろっていた。部屋に入った航暉を見ると一斉に立ち上がり、右手を額にかざす。

「うちの赤城達がどうしても礼がいたいそうでね、有志を募ったらこうなったよ」

部屋の左奥で苦笑いを浮かべるのは中路中将だ。中路中将の専属秘書官で524戦隊旗艦の古鷹がそれに苦笑いし、その後ろでは眠た

そうに加古が立っている。

その隣は第522戦隊の金剛型四姉妹、航暉を見て小さく手を振ったのは旗艦金剛だ。523航空戦隊の赤城や加賀が、533航空戦隊の蒼龍と飛龍が、534航空戦隊の祥鳳と瑞鳳が続く。凜々しく立つ一航戦に萎縮しているのか残りの空母艦娘たちはびくともしない。その隣に立つ531戦隊の伊勢が航暉を見てウインクをした。僚艦の日向もどこか不敵な笑みを浮かべた。利根と筑摩の532戦隊も笑顔で迎える。神通が旗艦の526水雷戦隊では雪風が嬉しそうに航暉を見ていた。神通の隣で誇らしげな笑みを浮かべていたのは木曾、第527水雷戦隊だ。エニウエトクから駆けつけてくれた539航空偵察隊と553駆逐隊……千代田と吹雪たちはどこか緊張顔だ。

その列の前に横一列に航暉の見知った顔が、第551水雷戦隊の面々が並ぶ。案内してきた睦月がその列の一番端に小走りに並んで敬礼の姿勢をとる。

「いつまで入り口で突っ立ってるつもりだ？」

天龍に半笑いでそういわれ、航暉は部屋の中央に向かう。作戦会議などに使うお立ち台が引き出されていた。そこに立てということらしい。中央に立つと後ろについてきていた高峰に小突かれて、一歩前へ。そろった艦娘の視線は航暉に向いていた。

「月刀中佐、改めてお礼を言わせてください」

そう切り出したのは赤城……攻略作戦の旗艦だった彼女だ。

「私たちはミッドウエーで沈むことを覚悟しなければならぬほど、追い詰められていました。そこに命をかけて飛び込んでくれた、部隊を指揮し、全員を生きて帰し、朝日を見せてくれた。本当に、本当に感謝します」

「……そんな大仰なことをしたつもりはないんですけどね」

「それでもだ。あんたが助けに来てくれたことは変わりねえ」

目を閉じ噛みしめるようにそういったのは木曾だ。その隣の利根も頷く。

「うむ。おぬしの指示で艦隊の動きが見違えるように変わっていくのは爽快じゃったぞ?」

「対空戦で負けませんでしたからね」

苦笑いの蒼龍を飛龍が肘で小突いていた。

「もー、カズキは水臭いネー！ お礼くらいちゃんと言わせなサーイ！」

金剛がウインクしながらそういった。

「総員、傾注！」

固い言葉が似合わない甘い声で号令がかかる。声の出どころは最前列中央、第551水雷戦隊旗艦にして、救援隊の連合旗艦、電。

艦娘の靴が堅い床を鳴らす。全員の踵が打ち鳴らされ、直立不動の姿勢をとる。

「月刀提督に、敬礼！」

駆逐艦から戦艦まで、すべての艦娘の右手が額に触れる。その光景を見て航暉は言葉を失う。

「……提督？」

「不満ですカー？」

「俺はまだ中佐だぞ。提督なんて……」

「提督」というのは艦隊を牽きいて勝利へ導く方への敬称。これだけの数の船を率いて戦い、だれも死なせることなく帰ってきたあなたには、この呼び方が似合います」

目を閉じてさらっとそういったのは加賀だ。

「提督って階級があるわけじゃねえんだ。それにアンオフィシャルに使うだけだ。いいじゃねえか、金剛がそう呼ぶのも認めてたんだろ？」

天龍が不敵に笑う。

「答えてやれ、提督。その義務がお前にはあるだろう。この作戦の幕もお前が引け、航暉」

腕を組んだ中路がそういった。その顔は笑っていた。

このタヌキと心の中で思いつき苦虫を噛みしめつつ、航暉は笑う。

「……こんな若輩の指示を信じて戦ってくれた。礼を言うのはこちらだと思う。……全員、よく生きて帰ってきてくれた。ありがとう」

航暉が背筋を伸ばし、踵を鳴らした。

「前線に出ることなく、君たちに指示を飛ばしたただけでおこがましいかもしれないが、それでも言わせてほしい」

海軍式の肘を前に出した敬礼だ。

「陽の目を見ない作戦なれど、ここで戦えたことを誇りに思う！ ありがとう戦友諸君！ 現時刻をもってミッドウエー攻略部隊撤退支援作戦の終了を宣言し、同部隊司令部を解散する！」

まあいいさ、見てろよ人虎。今は手のひらで踊っておいてやる。

航暉は目の前にいる艦娘たちの前で敬礼を解いた。その顔には心からの笑みが浮かんでいた。

中部太平洋第一作戦群第三分遣隊編 Chapter 0—1 現の間で

悲しかったのだ。

深海棲艦——名前がつく前は単に異形の軍とか、甲種指定害獣などと呼ばれていた—————そいつらと戦うことでやつとこの戦争が終わるかもしれない。そう期待に胸を膨らませた。もう人殺しと後ろ指を指されなくてよい。それが何とも言えない感情となって胸に去来した。

だのに、なんだこの唾棄すべき現状は？

なぜ罪なき少女たちを前に押し出さねばならない状況になった。

そこまですて生き残らなければならぬほど崇高な生き物なのか、人間は。

メディアまでも沈黙した。少女を最前線に送らねばならない現状に誰も否と答ええない。答えることは人類に無理心中を強いることという構図ができた以上、声を上げることすら、もう、許されない。

自分の命と見知らぬ少女の命を天秤にかけ、少女の命を取れる人間が何人いるだろう？ 世界を守るといふ善意に楯突いてまで一人の少女を救える人は何人いるだろう？ その数はあまりに少なく世界のスタンダードになることなんて夢のまた夢になってしまった。

その中で生まれその世界しか知らない幼い子供は自らを世界にささげようとさえする……そんな狂った世界だ。こんな世界に誰がした。

———深海棲艦だ。

奴らが現れてから10年足らず、その短期間で世界は急速に改変され、これまでに以上に無慈悲になった。人類共通の敵が世界をひとつにまとめてしまった。その結果がこの恥ずべき状況だというのなら、混

沌とした憎しみの世界の方が幾分かましだった。兵士には死地があり、自分の意思で死んでいけたというのに。

世界でたかだか1000を上回る程度の数の少女が1千万単位の兵がかなわない化け物を押し返しているのを見て、それが当たり前に変化しつつある現状のこの空虚さはなんだ。平然と戦い続ける少女たちのこの不気味さはなんだ。

なぜだれもそれをおかしいと思わない。国防どころではない。人類のすべてを華奢な両肩に預け、その上でのうのうと暮らしているこの状態をなぜだれも思考しない。種をまかず実をむさぼる状況に拒否反応を起こさないのはなぜだ。

こんな世界、そうそうに終わらせるべきではないのか。

のうのうと領土防衛優先など言っている余裕はない、どうせ死ぬのは死地に少女を追いやって生贄の羊にしている人間たちだ。守る意義を感じない。これで人類が死に絶えるならそれでもいいだろう。世界の覇者が恐竜から猿にとってかわるよう人間から深海棲艦に変わるだけだ。

世界を変える英雄になろうとも思わない。世界を終わらせた悪役で十分だ。

——ノイズ。

「……はは、思考すらすでにアレの中か」

そう呟いて息を吐き出した。白く息が曇る。暗く濁った部屋の中ではその息も闇に消える。

「息子すら戦地に追いやる悪魔が言えた義理じゃあないよな」

そう自嘲したところで何が変わるだろう。もはやただの器に過ぎない自分の何が変わるだろう。もはや最後の反攻もままならない。

——ノイズ。

「……っ。お前が生きる世界を憂いたと言っても、信じてもらうことすらできんな」

彼は立ち上がると制帽をかぶった。視界にちらつく警告文を無視

するように目深に被る。白い第二種軍装の下で短剣が揺れた。

「那珂、そこにいるな?」

「ハイ、お仕事ですか?!」

「少し出てくる。昼前には戻るぞ」

「えー、ついていつちやだめですかあー?」

「561の旗艦がいなくちゃ誰がここの面倒を見るんだ?」

「いっつもいっつもお留守番じゃないですか。はっ!? もしかして那珂ちゃんをほかの誰かに取られるのが嫌で!?!」

「盛り上がつてるところ悪いがそうじゃない。土産にシユークリーム買ってきてやるから我慢しろ」

「みんなの分もですよ?」

「わかったわかった」

そう言つて、シニヨンにまとめた少女の頭をぽんと叩いてすれ違
う。

「……司令官?」

「なんだ?」

ドアにはめられた明り取りの窓にどこか不安そうな少女の表情が
写った。

「帰つて、きますよね……?」

振り返れなかった。鼻で笑う。

「いきなりなんだ?」

「……ううん。何でもない」

「そうか、外に出ている間、頼むぞ」

そういつて外にでる。那珂は追つてこなかった。

「……悪いな、那珂。さよならだ」

——ノイズ。

彼は建物を出るとどこかスモッグに覆われた街の中へ向かう。道

のわきの側溝からわずかな水音が聞こえる。グレーチングの下を流れる水は暖かく、饴えた臭いを巻き上げながらスモッグの中に溶けていく。

「世界が嫌なら自分を変え、それも嫌なら世を捨てよ……まったく無責任なもんだ」

思い出すのはなんだったか、ああサリンジャーの言葉だったか。

——ノイズ。

「好きにさせてたまるか、お前の、お前たちの自由にはさせん」
彼女たちが生きている世界だ、彼女たちが作るべき世界だ。

それを、お前なんかには崩されてたまるか。

電腦の奥から一つの情報を引きずりだす。

直後、意識が食い潰されていく。

「そうやって、純粹さを保とうとするならば、それがお前の破滅を招く」

消えていく意識に抗うように、空を仰ぎ、叫ぶ。

「己の偽善に沈むがいい！ 貴様に救えるものなど————
！」

彼の頭が消えうせる。数秒遅れて聞こえる軽い銃声。

彼が倒れたのに誰も気が付かない。当然だ。周りには誰もいないのだ。灰色にまみれた都市の真ん中で彼の体が膝をつき、そのまま倒れこんだ。排水溝に重い液体が流れ込んでゆく。

ただただ、悲しかったのだ。

「父さん、僕の配属先が決まったよ……ウエーク島の五五一水雷戦隊の指揮官だつてさ。……暑いかなあ、まだ」

そういつて笑う。暗い部屋には彼ひとり。荷物はほとんどなく、足元にはその数少ない荷物がパッキングされて転がっていた。

「おかしいね。僕がああウエークの水雷戦隊の指揮官だつて。皮肉の気持ちなのかな」

手には短剣。錨に輝く桜の紋が冷たく光った。そこに水滴が落ちて冷えていく。

「ねえ父さん。もしこの海にいる化け物全部倒したら……母さんは許してくれるかな」

鞆から少しだけ剣を引き抜いた。そしてすぐに戻す。ぱちんという音がして鞆に収まった。立ち上がると短剣を左腰の短剣吊りに固定する。

「一緒にいてくれるよね、父さん」

答えはない。すれてない軍服の裾を揺らして彼は荷物を肩に背負う。重さに少しよろけてから部屋の外へと向かう。

「もういいの?」

「はい、……父がお世話になりました。那珂さん」

「ううん。お世話になったのはこっちの方だもん。……大丈夫?」

「僕なら大丈夫です。泣いてる余裕なんてありませんから」

そういつた彼に那珂がどこか影のある笑みを浮かべた。

「ねえ。ひとつ、歌を歌ってあげる」

「歌?」

那珂は彼を後ろから抱くようにして目を閉じる。その暖かい体が彼をあやすように揺れる。波のリズムにも似た、ゆったりとした揺れに合わせるようにして、口から旋律が流れ出す。

明けない夜がないことを 僕らは知っているけれど
暮れない昼がないことも 僕らはすでに知っていて
だれかが歩いた道のりを ただ辿るのは嫌なのに
ひとりでは歩けもしない 自分がいやになっても
それでもきつと世界は周り それでもきつと夜は明けて
笑って迎える朝日があると 僕らは今も信じてる
夢を追って傷ついて それでも願う愚かな役者
明日をめざし涙流して 今日を笑顔で締めくくろうか
泣いてもいいよ心行くまで でも最後は笑ってね
笑顔で迎える明日があると 僕は信じているから

「……いい歌ですね」

「そう、思う……?」

「はい、こんどしつかり聞かせてください。こんどは涙声じゃなくて、ちゃんと」

「うん……! しつかり練習しとく」

彼はそれを聞いて荷物を担ぎなおした。

「ほんとに歩いていくの?」

「父の殉職した場所にもう一度寄っておきたいので……それでは失礼します。那珂特務官、お元気で」

「はい、合田少佐もご自愛なさってください。お元気で」

彼はスモッグの中を歩き、一か所で立ち止まった。

「……なんで僕だけ。なんで僕だけこんな思いをしなきゃいけないんだよっ!」

古くなって枯れた花束を蹴飛ばして彼は怒鳴った。

「父さんが死んだら僕は誰を信じて進めばいいんだ!」

泣くまいと決めていたのに。いくら唇を噛んでも涙はとまってくれなかった。

「……司令官。風邪ひいちゃいます」

「……阿武隈、見てたの?」

「見えちゃったの」

陸上のため艤装を下ろしている彼女を彼は見つめる。

「こんな弱い僕を笑うかい？」

「そんな司令官もあたし的にはOKです。っていうより司令官は無理しすぎるところがあるので心配です」

「……行こうか」

「いいんですか？」

「泣いてるような時間はないんだ」

制帽を目深に被り目元を隠して彼は俯いた。

「海を啓開し道を拓く刃たれ……そうだね、父さん」

口に出してから歩き出す。阿武隈と呼ばれた少女がその後を追った。

スモッグの闇に影が二つ溶けていく。

『提督』と『艦娘』は海へ向かう。

彼の左に下がった短剣がきらりと光った。

太平洋のど真ん中、ウエーク島。9月に入っても南国の気候が体を温めていく。それに辟易しながら、月刀航暉は溜息をついた。

「こんな気温なのに明日から第一種軍装とか気乗りしないな」

そういいながら航暉は伸びをした。横では担当秘書艦の電が笑う。

「明日から下期で再編ですし、気分一転で頑張るのです。でも司令官さんが今日で551の司令官の最終日だと思うとすこし寂しいのです」

「でもまあ、今回の再編で誰かが離れ離れってことにはならなかったんだ。部隊こそ変わるが全員同じ基地の中だ。よしとしようじゃないか」

今日は9月の最終日、9月30日。明日から航暉の役職名が変わる。

国連海軍極東方面隊中部太平洋第二作戦群第551水雷戦隊司令官から同中部太平洋第一作戦群第三分遣艦隊司令へ。これに伴い航暉は一階級昇進して大佐になり、水上用自立駆動兵装運用部隊3つを率いるウエーク島分遣艦隊の長に収まる。現職の第二作戦群第551水雷戦隊とは別の指揮系統に移るため今の部隊とは離れることになったているのだ。

「でも驚いたのです。私たちにも転属命令が来るなんて思ってたのです」

「どう考えても中路中將が幅を利かせた形だろうなこの人事」

暁型の四人と天龍型の二人に移動命令が出たのは正式に航暉への移動命令書が交付されたのと同様だった。再設置される538水雷戦隊への異動——母港はウエーク島が割り振られた部隊で、上位組織は航暉が指揮を執る第三分遣艦隊だ。

この指示を受けて泣きそうになっていたのは睦月……睦月型の二人には移動命令が出ず、そのまま第551水雷戦隊に留め置かれたためだ。

「とはいっても先任を残さないとまずいし、基地が変わって離れ離れって訳でもないし、人事命令だけは我慢してもらえない。……
といっても基地司令は俺が統投だから基地内に限っては命令権もあるんだけどね」

「でも司令官が違う人になるって言うのは少し怖いですし、司令官さんは優しかったので……」

「俺そんなに人望あるか？」

「何を言っているのですっ！ 551所属艦はみんな司令官さんのことを信頼しているのですっ！」

そういわれるとこそばゆい航暉だが、上の指揮官が変わると怖いというのも理解できた。

「……特に今回の人事は訳あり人事っぽいしなあ」

「そうなのですか？」

「……1800時にみんなを食堂に集めてくれるか？ そこで説明しておく」

「わかったのです」

航暉は笑ってデスクに目を落とす。デスクを叩いて呼び出したのは一枚の書類だ。どこか弱気な顔をした少年の写真に名前や経歴が書かれたもの。

「……うまくやってくれよ。新司令官」

「あー、食った食った。ごちそうさん。でもこれで六波羅医務長の食事もおさめかあ、寂しいもんだな」

「というよりまともな主計科隊員がいらない今までが異常だったのよ。これでやっとウェーク特根も動ける形になるわ。やれやれよ」

「艤装調整技師も医師も応援が来るし、明日から一気ににぎやかになるわけだ」

航暉が笑うと苦笑いするのは伊波ハルカ特務少尉だ。いつも似たようなメニューながら量が倍ドンされてたらふく食べた天龍が腹をさすりながら笑った。

「あの『魔宮殿』をどうする気なんだ？ 伊波少尉？」

「ほんとそうだよー。やってくる艤装調整士官って上官なんですよね……？」

「ああ、特務大尉と聞いている」

「厳しくないといいなあ……ここは仕事さえすれば生活は楽なパラダイスだったので」

伊波ハルカ少尉の仕事場……艤装開発整備区画、通称『工廠』は基地のメンバーから魔宮殿とか魔窟とか呼ばれている。整備に必要な道具や書類、お菓子の箱などが無秩序に散乱し、六波羅夏海医務長の巡検がなければあつという間に足の踏み場もなくなる『汚部屋』と化す。仕事の腕が優秀なため大目に見ているが、その部屋の様子を軍学校の教官が見たら反応は卒倒するか怒鳴り散らすかの二択だろう。それぐらい汚れている。

「まあ、しっかり片づければいいだけの話じゃない」

「あれでも場所しつかり把握してます。だから問題ないんです」

「MI攻略隊が一気にウエークに押し寄せた後によく問題ないとか言えるわね」

「明石さんが優秀で優秀で、忙しかったですけど困りはしなかったですもん」

「こっちは応援の軍医の取り纏めでてんてこ舞いだっただよ。場所が変わってるからみんな勝手が違うし、医療チームの充実は急務ね」

「だから軍医少尉1名に看護資格持ちの准尉と伍長がやってくるじゃないですか」

「そこを進言してくれた中佐には感謝してますけど。もう少し早く動いてもよかったですんじゃないですかねえ……」

「悪かったって医務長」

流し目で睨まれて、たじたじな航暉に助け船を出したのは響だ。

「それで、司令官。みんなを集めた理由はなんだい？」

「ああ、明日からの新体制に向けて動く前にちよつと心配なことがいくつかあつてな」

そういうと航暉は指で頭をとんと叩いた。全員が回線を開くと中継器が作動する。そこを経由して航暉の電腦から一つのファイルを受け取った。

「……明日からの551の司令官ね？」

如月が笑いながら航暉を見た。

「そうだ。合田正一郎少佐……本当なら司令官補って扱いになるはずなんだが上層部の承認を受けて特例での551司令官着任となる」

「まだガキじゃねえか。何歳だ？」

天龍がそういつて眉を顰めた。もらったファイルの顔写真はどこか気弱そうな少年の顔が写っている。

「13歳だ。〃非常事態時における民間人特別招集に関する法律〃

……特別徴兵法の適用者だ。司令官がポンポン死んでいくからいよいよ子供に手を出したつて訳だ」

「笑えねえな。こんな子供が使い物になるのか？」

「君たちが現れた時もみんなそう思ったものよ」

そう笑うのは夏海だ。セルロイドフレームの眼鏡が光る。

「そうかもしれないが、職務経験は？」

UNStaC—Hiroshima
「国連海軍大学広島校卒業後、初の実戦部隊への配属となる」

「……成績は？」

「中の上つてところであまり目立たないな」

「……きな臭いな」

天龍がそういうと龍田も笑う。

「広告塔つてところかしらー？」

「普通に考えればそうだろう。少しでもリクルートを楽にするために前線で活躍できるんだつていうのを示すつてのが大きいだろうな。水上用自立駆動兵装運用士官は慢性的な人員不足だ。早く人集めをしたいつてのはあるだろうし」

「普通にかんがえなければどうなるのかしら？……合田って苗字聞いたことがあるのだけれど、確か北方司令部にそういう人いなかったかしらー？」

「ああ、合田直樹北方第二作戦群司令だな。彼の父親にあたる人物で……急進派の実質的トップだった人物だ」

「そういうと響がわずかに目を細めた。

「“だった”ってことは過去形だね。何かあったのかい？」

「……ネオMI作戦終了から三日後、9月19日午前、勤務地の択捉経済特区区内クリリスク市の路上で射殺された」

「!?」

「狙撃だ。電腦に55口径徹甲弾を一発。首から上が綺麗さっぱり消し飛んだ。……北方難民による狙撃らしいが犯人はまだ調査中だ」

「話のぶつ飛び方に頭がついていけないのか、言葉が途絶える。一番先に考えが追いついたのは天龍だった。

「……おい、まさかとは思うが」

「詳しい事情は分らんが、軍内部の犯行の可能性が高い。殺害された時刻はスモッグがきつくて電腦持ちで射撃の制御ソフトがないと一発で電腦を落とすのは難しい。そんな高価なものをそろえてまで中将を殺さなきゃいけない理由は難民にはないはずだ。……おそらく警察に軍が圧力をかけて調べさせないようにしているだろう。名も無き北方難民が犯人に祀り上げられて事件は終了になるはずだ」

「……それでその息子がこのウェークにくるのか」

「ああ」

「髪をガシガシと掻き上げる天龍。

「……やばくねえか。急進派のトップがMI作戦直後に殺された。あまりにタイムリーすぎる。関係ないってのはないだろう。そしてMI作戦に俺たちも関わったんだ」

「不安要素てんこ盛りだ、まったく」

「まだ不安要素があるの？」

「暁ががげんなりした顔をした。

「ここにくる艦だ。実験艦上がりの艦が二隻入ってくるんだ」

「実験艦っていうと夕張ちゃんかしら〜？」

「いや、CV―TH01 “大鳳”とDD―SK01 “島風” ……横須賀の実験兵装試験団から異動になる」

「実験兵装試験団ってことは艦娘になってからの実戦経験ゼロか」

「そういうこと。新人艦とあんまり変わらないかもな」

そういうと唸るのは天龍だ。

「根本から教育しなきゃいけないかもってことか？」

「可能性はある。島風の方は天龍に任せることになると思う」

「ん、了解」

「ともかく明日にならないと話にならないし、それ次第だ。とりあえずこのメンバーで過ごし最後の夜だ。楽しんでいこう」

「そういう司令官は大丈夫なのです？」

「なにが？」

「どこか疲れてるように見えたのです」

「まあ……引継ぎ用の資料作成とかもあっていつも以上に仕事をしてるのは確かだ。しばらくは忙しいだろうさ」

「もう、無理しちゃだめよ？ みんながついてるんだから」

雷にそう言われ頷いた。

「まあ、ゆっくりやるさ」

翌日、時刻は0815WAKT。光の反射によっては黒に藍が混じる制服に袖を通し月刀航暉 “大佐” はデスクに向かう。部屋のプレートを付け替える。中部太平洋第一作戦群第三分遣隊司令室と記された真新しい札に変えて、デスクのプレートも国連海軍極東方面隊

中部太平洋第一作戦群第三分遣隊司令に付け替える。

久々のネクタイの感覚は少し慣れない。袖の金糸のモールは中線4本の大佐のものだ。前の冬服の時は少佐で中線2本細線1本のものであったから一気に昇進したなど感じる。制帽もつばの部分にスクランブルエッグ桜花紋章が付いたもの変わっている。

あと2時間ちよつとで530艦隊がウエークに入港する。末尾ゼ口番は基地間移動用の臨時編成部隊専用のトランスファーコードだ。間もなく武装キヤニスターや修理に必要な鋼材などの資源を満載した輸送船と基地の生命線である発電機や艦娘の艤装用燃料電池の蓄電プラントをぶん回すための燃料を満載した油槽船を護衛しながら入港するはずだ。

「司令官さん。おはようございますなのです」

「おはよう。改めてよろしくな、第三分遣隊旗艦殿？」

「また私が旗艦なのです？」

「不満か？」

「とんでもないです。私なんかでいいならいくらでもやるのです」

部屋に入ってきた電が笑う。

「似合うかい？」

「司令官さん、実は冬服の方が似合ってます？」

「周りからはよくそういうられるよ。これネクタイとかあつて暑いんだけどね」

そういいながらもきつちりネクタイを締めているのは彼のまじめさを表しているのだろう。細身ながら筋肉質で結構肩幅がある彼にはしっかりとサイズが合っていて黒い色が彼を引き締める。

「なんだかいつもよりかっこいいのです」

「面と向かって言われると恥ずかしいなこれは」

そういいながらデスクに向かう航暉にそういわれてわずかに頬を赤らめる電。

「さて、今日は忙しいぞ。人員が倍以上に増えるんだ。頑張らなくちやな」

「なのですー！」

直後に警報アラームが鳴った。

「!……深海棲艦の出現アラート!」

デスクにQRSプラグを叩き込んで無線を開く、基地の内部警報始動、STBYスタンバイ発令。

「俺がここに来た日もこうだったよな」

「そういうえば、そうだったのです」

CTCにコンタクトを取る。発現予測エリアがマッピングされる。色は危険度が高いことを示すオレンジ色の円が地図上に現れる。ウエーク島の西120キロ付近がオレンジに染まる。

「マジかつ! 見事にウエーク行きウエークの輸送船団が危険域のど真ん中に突っ込んでやがる」

「素晴らしいながら電の方を見た。」

「電もスタンバイに走ってくれ。530が今動けるかどうかかわからん。出張ってもらうぞ」

「了解なのです!」

電が部屋から走り出るので尻目に航暉は武装の搭載表を呼び出す。現状、睦月如月が対潜特化、暁と天龍に対空を重視した装備を積み、残りはベーシックな水雷戦隊装備だ。換装している時間はあるまい。

「……月刀より基地所属艦全艦へ通達。敵の反応は中型4隻程度と出ているが潜水艦が潜んでいる可能性が高い。対潜警戒を厳とせよ。」

「……睦月!」

《はい!》

「対潜警戒はお前が“軸”だ。頼むぞ」

《了解なのです! 張り切って参りますよ!》

「如月は睦月のバックアップ。対空戦はないと思うが何かあるかわからん。対空戦になったら天龍、暁に艦隊防衛を頼む」

《はいっ!》

《おうっ!》

《まっかせなさい!》

「龍田、響、雷は海域到達後、確認されている敵艦隊への攻撃を優先的に行ってもらおう」

《わかったわー》

《了解》

《いただきますよー!!》

続々と答えが返ってくるのを聞きながら目の前のデスクに現れたメッセージを確認する。

「戦隊の旗艦は電だ。……中央戦術コンピュータから出撃要請あり、中央戦略コンピュータ出撃承認。今回の出撃に限り睦月如月の両艦は第538水雷戦隊指揮下に入ってもらおう。……新生ウエークの初出撃だ。行くぞ」

《了解！ 第538水雷戦隊、抜錨します!!》

10月1日、明るい太陽が乱反射する海原に影が8つ飛びだした。

「阿武隈、起きて」

「ふあゝ、司令官、おはようございます」

合田正一郎が彼女をゆするとのんびりとした声が聞こえた。油槽船「サンポール号」の船員居住区の一室で横になっていた少女を起こす。

「ちよつと緊急なんだ」

「深海棲艦でも現れました？」

「うん」

「へ〜……つて、うん?!」

前髪をいじっていた阿武隈が飛び起きた。その時に急に上体を跳ねあげたため正一郎の顔面に頭突きをかます形になった。

「~~~~~!」

二人そろって頭を抱えて痛みに耐える。先に回復したのは阿武隈だった。

「今だれが海に出ています……?」

「利根と筑摩、望月と弥生の4隻だ」

「敵の編成は？」

「まだわからない。CTCの報告だと軽巡クラス以上の4隻らしい」

「……龍鳳さんと大鳳さんは？」

「いま用意してもらってるけど、この油槽船の上からじゃまともな通信設備もないしこの簡易中継器じゃ対空管制ができないんだ」

正一郎はそういいながら右手に持った半円状の機械を振った。

「あと若葉さんと初霜さんは……夜間哨戒終了直後で動いてもらうのは危険ですか……」

「うん」

「……もしかして、今ヤバいんじゃないですか？」

「うん」

それを聞いた阿武隈は一瞬黙ってから叫んだ。

「うんじやないでしょ！ うんじや！ 早く船橋ブリッジに行つて水上艦の指揮を始めてください！ 対空指揮ができる艦娘つて今は龍鳳さんだけでしょう？ 彼女に任せましょう！」

「わ、わかつてる……」

「私も今出ますから敵艦隊予測位置への警戒を厳にしてください！」
「わ、わかった」

正一郎は首の後ろに簡易中継器をあてがう。ちりりとする痛みと共に中継器がQRSプラグに接続され、視界に周囲の海域情報がオーバレイされる。

「利根、筑摩、弥生、望月、聞こえてる？」

無線回線を開きつつ鉄の急なラツタルを駆け上がる。ブリッジに駆け込むと船の船長が敬礼してくるのでそれに答礼を返す。

《聞こえとるぞ、合田少佐。どう動けばいいのじゃ？》

「真方位2—0—0方向に深海棲艦反応がでてる。利根たちの電探には映つてる？」

《いんや、映つとらん。きれいなもんじやの……サンポール号の電探には映つとるかのう？》

「こつちもクリア……とりあえず現状を維持。今から阿武隈と龍鳳たちを下ろすからそうしたら偵察機をだそう」

《それじゃ間に合わないよ！》

無線に声が割り込んだ。

《私なら走つて見てこれるよ！反応だけ見たら帰つてくるから！》

「島風、一対多数になるのが確定してる。貴重な戦力を分散させたくない」

《大丈夫！ 逃げ切れるから。だって早いもん！》

無線越しのハイテンションな声が動く。彼女を示すマーカーが油槽船から飛び出した。

「そもそもまだ実験艦の域をでてないんだらう？」

《信じてください！ 負けませんよ！》

「あつ！ こら勝手に飛び出さないで！」

島風が無線を切って走り出す。中継器の戦術リンクも応答がない。島風を示すレーダーマーカーは生きているから行方不明にはならないだろうが、正一郎の指示を全く聞かない気だ。

「龍鳳！ 急いで偵察機だせる？」

《あと……あと5分待つてください！ いま用意してます！》

「急いで！ 島風が勝手に飛び出した！」

《へ？ あ、わかりました！ 急ぎます！》

《このチャンネルか……！ こちら中部太平洋第一作戦群第三分遣隊司令、月刀大佐。合田少佐だね？》

無線に男の声が割り込んだ。……おそらく若い。

「こちら、えつと530艦隊指揮官、合田少佐です。月刀大佐どうぞ」

《やつとつながったか。状況は？ まだ艦隊は無事だな？》

「はい。まだレーダーでも敵影を確認できていません。こちらの部隊では……」

《未発見だ。CTCのトラッキングを信用するなら君たちの艦列から見て方位2-0-0の距離27000。こちらが予測位置目指して割り込みをかける。輸送船団は進路そのまま速度を限界まで上げてほしい》

中継器にいくつか情報が追加される。おそらく月刀艦隊の情報だ。《おそらくその近海には敵の潜水艦がもう潜んでいるはずだ。もうそこはキルゾーンだと思った方がいい。軽巡駆逐を艦隊から離すなよ。一発でやられるぞ》

それを言われて正一郎は艦隊の情報を確認する。艦隊から半径半キロの中に島風を除くすべての艦がそろっている。問題は潜水艦がいるかどうかだ。アクティブソナーを打てばわかるがそれは同時に相手に正確な自分たちの位置を教えることになる。うかつに取れる作戦ではない。

「わかりました。今島風が敵艦隊の予測される方向に一人で走っちゃってるんです。こちらでもトラッキングしてますが……」

《了解、島風を捕捉した。彼女はこちらでなんとかする。あと22分でそちらに538TSqの第二小隊が合流する。それまで耐えろ

よ》

そういつて無線が切れた。

「少佐殿、どう回します?」

声をかけてきたのはこの船の船長だ。濃いあごひげを蓄えた初老の男性だ。

「両舷強速で進路を維持してください。対潜見張りを厳にして最短で走り抜けます」

「了解だ。サンポール号よりアルバレス号、速度を上げる。進路そのまま両舷原速黒30」

《進路そのまま両舷原速黒30、よーそろー》

わずかだが船のエンジンの音が変わる。白い航跡はわずかに大きくなる。

《司令官、用意できました!》

阿武隈の無線が飛ぶ。

「空母の二人は?」

《あと2分待つてください!》

阿武隈の反応を示すマークカーが現れ、オンラインを示す。

「こちら530艦隊指揮官、合田少佐。現時点をもって旗艦機能を阿武隈に預けます。水雷戦隊は船団を囲むように位置取りをしてください。潜水艦の雷撃の可能性があります。利根と筑摩は進路2—0—0に向かつてください。538のサポートに入ります」

《こちら利根、悪いが意見具申させとくれ。いま少佐の中継器は首かけ型の簡易中継器じゃろう? それならウエークの月刀大佐に水雷戦隊以外の指揮を預けた方が確実じゃないかのう?》

そもそもサポートせんでも月刀の艦隊ならなんとかするじゃろうしと利根は続けた。

「——— わかった。空母艦隊の指揮権を移す。利根たちはまだ僕の指揮下においてくれ。利根・筑摩は転進2—0—0……530合田より、538の月刀大佐、応答願います」

《こちら538月刀、クリア&ラウド》

「龍鳳と大鳳の指揮権を渡していいですか?」

《了解、龍鳳と大鳳の指揮権を受け取る。龍鳳・大鳳、応答せよ》

《こちら龍鳳、あと30秒で海に出れます》

《こちら大鳳……あつ、ちよつと待ってください艤装が引つかかって……》

《大鳳焦らないでいい。龍鳳、先行して海上に出てくれ、艦載機は今何が飛ばせる?》

《九七艦攻7機、零戦二一型12機が即時発艦可能です》

《艦戦を優先して発艦、6機を船団上空で直掩、残りの艦戦は俺にコントロールを渡してほしい。艦攻は敵の状況がわかるまで直掩のそばに置いておけ》

矢継ぎ早に出される指揮を聞きながら正一郎は笑う。チャンネルを切り替える。

「阿武隈、対潜警戒を厳に。望月は右舷側、弥生は左舷側。大鳳が後方にいるから阿武隈は前で張ってくれ」

《わかったわ》

簡易中継の放つわずかな熱を感じながら正一郎はわずかに唇を噛んだ。

海面を飛ぶように走る。その後ろを小さな砲台を模して造られた“自律砲台”が三基追いかける。

「横須賀とはやっぱり空気が違うね連装砲ちゃん！」

そういいながら島風はタービンをぶん回し海上をかつ飛ばす。速度はほぼ40ノット、長い少々くすんだシルバーブロンドの髪を風がたなびかせて後ろに吹き抜ける。

「そろそろ電探に写ってもいいころなんだけどなあ」

目を凝らして前を見る。電探の感度を上げていく。

「お……あれかな？」

わずかな感のうねり。それはやがて焦点を結び、全体像を露わにしていく。

「軽巡1、駆逐1、重巡2……？ 巡洋艦隊の編成かな？」

そういつつ速度を緩める。こちらの電探に写ったということは相手にも捕捉されている可能性があるということだ。『最速』をそう簡単に晒すのも惜しい。適度に速度を殺しつつ相手との接敵を図る。……はずだったのだ。

「……え？」

自律砲台の一基が警告を放った。直後に大きな風切り音。頭上を確認して慌てて舵を切った。面舵いっぱい。飛来する黒い塊は——
爆弾だ。

「おうっ！」

艦載機の攻撃、それを認識したころには島風のすぐ真横に水柱が立った。すぐに立つ爆炎。それが島風の白い肌を焼こうと襲いくる。舵をメカニカルリミット限界まで叩き込んで急旋回。缶は最大に改めて叩き込む。爆風よりも速く走ることなんてできはしないが、それでも危険域を脱出する。

「……艦載機？ 電探の情報が違う!？」

空を見上げると敵機が10機ほど、島風を捉えていた。島風がいくらか早いと言っても艦載機を追い抜けるような超絶性能を持っているわけではない。だがその足は他の艦を凌駕し、それは対空戦においても有利に働いていた。

「……連装砲ちゃん！」

島風は自律砲台の制御プログラムを対空戦闘モードで固定。主砲用のユニットを搭載表しているが、対空戦にだって効果はある。そして自律砲台は艦娘自体に装備される艤装武装に比べて格段に自由度が高い。

艦爆機が急降下してくる。島風は取り舵を一瞬当てて進路をずらしつつ機関を原速赤30へ、自分の鼻先を掠めるようにしては黒い矢

が落ちてくるがその陰から連装砲の砲火が伸びる。敵機に過たず吸い込まれ機体を散らす。島風自身はその隙に回頭した。進路は2—0—5、敵艦隊を捕捉した方向だ。

「連装砲ちゃん、それくらいでいいよ！ ついてきて！」

最大船速、40ノットで海面を「飛ぶ」。その横を自律砲台が並走し、向かいくる敵艦載機に向けて弾をばら撒いていく。

「……こうなるなら対空砲もってくるんだったかな。でも遅くなるし……」

悠長なことを考えているようだが、その中でも島風はランダムに舵を切り敵の爆撃機の狙いを外していく。見たところ三機が艦戦、艦爆隊の直掩機。残りが艦爆隊。2機が爆撃済みということとは、この攻撃隊ができる爆撃は最大で5回ということになる。連装砲ちゃんもふくめると4つの目標に攻撃するには数が足りない。おそらく今味方の空母が艦載機の発艦作業を進めているはずだ。第二次攻撃隊が来る前には艦載機の直掩が来るだろう。

「……でもそれを待ってるのもつまらないもんね」

右のつま先でピボットターンを決めるようにくりと後ろを向く。その動きに三基の自律砲台も連動する。動きがわずかに鈍重な艦爆機を目がけて砲撃が4線、当たったのは一つだが十分だ。それを横目で見つともそのまままた進行方向を戻す。敵戦闘機の動きに合わせて右舷側に2機回していた自律砲台の一基を後方に回しつつそのまま左舷へ、航跡が滑らかに交差し、砲戦の主体が左舷に写る。

右舷側の低空に影が落ちたことを電探が示した。雷撃機にしては高く、爆撃機には低い位置、数1。

「……直掩おっそーいー！」

高速で迫ってくる機体が翼の先から雲を曳き、敵戦闘機のすぐ上を高速で横切った。直後に敵機が爆散する。翼端から伸びる白い線が絡み合いながら反転、それを見上げた島風は太陽の眩しさに目を細める。太陽に飛び込んだ飛行機雲はすぐに飛び出して、敵の航空隊に真上から文字通り飛びかかる。敵の艦戦が瞬く間に落ちていく。

蜘蛛の子散らすように敵の艦爆が四方に散っていくのを見届ける

とその機体……テイルコードからして龍鳳の艦戦隊だとわかる……が低空で島風の横に並んだ。失速直前の速度まで機速を落とし、それでもわずかに島風を追い抜くような速度で並んだ艦戦の制御部がわずかに光った。

「……発光信号?」

数字の羅列、周波数だろうと思いいその数値に合わせる。周波数帯域からして軍用通信。

「こちら5330艦隊所属、DD-SK01『島風』」

《中部太平洋第一作戦群第三分遣隊司令、月刀だ。やつとつながったか。戦術リンクはちゃんと入れてくれよ頼むから》

「対応がおそいんだもんー!」

《だからって命令無視していい理由にはならんぞ。……敵は軽空母1、重巡1、軽巡1、駆逐艦1、潜水艦については不明だ。制空権は優勢、あと15分で掌握できる。動けるか?》

島風はニヤリと笑い、マスターアームを一瞬切って、すぐにオン。戦術リンクをしている司令官ならこれでわかるはずだ。

《転進2-0-0、両舷強速。もうすぐ大鳳の艦戦が追いつく。直掩に3機つける。行け》

「りよーかい!」

島風は進路をわずかに変えた。

「……いくよー!」

島風の声に呼応するように飛び出す自律砲台。速度を上げる。

戦の海へ、航跡が一つ飛び込んだ。

《……なんだかあつという間に終わりすぎて何が何だかわからなかったんだけど》

「僕に言われても……」

ウエークに入港した二隻の大型船を護衛しつつ、正一郎が溜息をついた。

時刻は1032WAKT、現地時間午前10時32分。予定通りの入港だ。

「結局僕のやったことって阿武隈たちに海に出てって言ったただけだよね」

結論から言うと敵の水上艦隊は月刀航暉大佐が指揮を執った龍鳳、大鳳の攻撃隊により沈めきつた。敵の艦戦が貧弱であつという間に制空権を確保すると大鳳の艦爆隊と龍鳳の艦攻隊が堂々と接近。一回の攻撃で完膚なきまで叩き潰した。艦戦が交戦を始めてから15分と24秒のことである。島風すら追いつけず、水雷戦隊が突入する間もなかった。

それに焦つたのか空母に向けて敵の潜水艦が雷撃を撃ちだすが、龍鳳はこれを難なく回避。大鳳に迫っていたものは滑り込みで間に合った如月が機銃で処理し発射元の潜水艦を睦月が特定、爆雷で仕留めて戦闘終了。対潜戦闘に至っては相手の魚雷発射から4分少々である。……正直化け物かと正一郎は思った。

艦上戦闘機は月刀大佐がすべてコントロールしたと龍鳳から聞いている。その数18機、それをリアルタイムで管制し、すべての敵艦戦を撃墜し、攻撃隊の進入路を切り拓き、攻撃隊各機をそこへ誘導。艦載機全機を無事生還させるといふのは並大抵のことではない。しかも交戦域に入つてなかつたとはいえ水雷戦隊の誘導までこなし別ルートで島風も誘導。どういう電脳を使っているのかわりと本気で悩む。

相手の練度が高くなかったとはいえ、ここまで短時間で海路の安全を確保するとはそれを指揮した指揮官の裁量もさることながら、それをきっちりこなしてしまう艦娘の練度もそうである。特に睦月は視認した雷跡とパツシブソナーのみで敵潜水艦の位置を特定、相手が第二射に入る前に正確に撃破している。正一郎もそれを目で見て感じた分、それはある意味畏怖の念に近い形で印象に残った。

「……あれが、『飛燕』の月刀、か」

接岸する埠頭がすぐ左脇に見える。ここがしばらくの間の自分の職場、そして“これ”を指揮したのが上司となる。

「……うまくやっついていけるかなあ」

そう不安そうな声と裏腹に目は強く光っていた。

「本日付で国連海軍極東方面隊中部太平洋第二作戦群第551水雷戦隊司令官に着任します、合田正一郎少佐です。よろしくお願いします」

「ウエーク基地へようこそ。中部太平洋第一作戦群第三分遣隊司令、ならびにウエーク基地司令を務める月刀航暉大佐だ。こちらこそよろしく」

司令室で敬礼を交わす二人の佐官。航暉の左右には以前からウエークに所属していた艦娘が、正一郎の左右には今日からウエークに所属になる艦娘が並ぶ。司令室にこれだけの人員が詰めると結構ぎゅうぎゅうだ。皆大きな艤装は外しているからそこまで圧迫感はないものの、それでも狭いものは狭い。

薄雲が太陽にかかって、柔らかな光が淡く部屋を照らしている。

「一応艦娘側の最先任はこの子……電だ。艦娘全体の取り纏めも主に電がやることになると思う……ほら、自己紹介」

「DD-AK04 “電”です。所属は第538水雷戦隊で、第三分遣隊総合旗艦を務めることになっています。どうぞよろしくお願いします」

その横に立つ天龍が笑った。

「俺は538旗艦を務めるCL-TRO1 “天龍”、ふふつ、怖いか？」

「まったく！」

「……あんまりこわくない、です」

うさぎ耳を彷彿とさせるような髪飾りを付けた島風に即答され、青味の強い髪を揺らす小柄な少女にもそういわれ、天龍が引きつった笑みを浮かべる。

「……そ、そうか。怖くない、か」

「そんなに落ち込まないの、天龍ちゃん。私は龍田だよ。CL-TRO2ね。天龍ちゃんの妹で、サポート役を務めるわあ」

電と航暉を挟んで反対側で天使の輪を揺らして龍田が笑う。その隣で暁が咳払いをした。

「DD-AK01、暁よ。538水雷戦隊でも駆逐隊旗艦を務めるわ。レディとして頑張つてくからよろしくね」

「DD-AK02、響だよ。538水雷戦隊所属だ。不死鳥の通り名もあるよ」

響がそういうと茶髪の小柄な少女が目を細めた。

「なんだかめんどくさそうな感じだなあ、うちの姉にそつくりだ」

それを言われて響は一瞬硬直するがその横でクスリと笑った雷をじつとりと睨む。

「結構中二病的なところあるもんね響姉え。……DD-AK03 “雷”

“よ。かみなりって言われることもあるけどいかづちだからね、そこんどこもよろしく頼むわね！」

「DD-MTO1 “睦月”です！ 551水雷戦隊に所属になります。張り切って参りますのでよろしくなのです！」

「DD—MT02 “如月”と申します。姉共々よろしくお願ひします」

一通り挨拶を終えると正一郎が隣に立つ阿武隈に目配せした。

「CL—NG06 “阿武隈”です。551水雷戦隊の旗艦を務めます。よろしくお願ひします」

緊張しているのか、そういうと頭を下げ黙ってしまう。

「なら551繋がりで先にやってしまおうか」

「あい、DD—MT11 “望月”です。前線でバリバリとかメンディしまあぼちぼち頑張つていくつもり、睦月姉たちも改めてよろしくー」

「DD—MT03 “弥生”、着任。睦月も、久しぶり……」

「うん。またよろしくね！」

「懐かしいわねえ……」

睦月型の面々がそれぞれ思い出に浸っている間に、利根が前に出た。

「久しぶりというほど久々でもないかのう？ 月刀提督よ。CA—TN01 “利根”である。本日から第三分遣隊隷下第532戦隊の旗艦を務めさせてもらうぞ。吾輩も全力を尽くしていくつもりじゃ。吾輩が艦隊に加わる以上、もう索敵の心配はないぞ！」

「同じく532戦隊のCA—TN02 “筑摩”です。改めてよろしくお願ひします、月刀提督」

提督という言葉に眉がピクリと跳ねたのは航暉だ。

「……言っても無駄かもしれんが、まだ俺大佐だぞ？」

「ええ、存じております」

「……もういいや」

航暉がこめかみを揉む動作をしながらそんなことを投げやりにいった。

「次は私ですかね？ 535航空戦隊に着任いたします、軽空母CVL—ZH03 “龍鳳”です。不束者ですが、私、頑張ります！」

赤い和装とセーラー服を組み合わせたような独特な服装が大分幼さを残す顔をくつきりと浮かびあがらせていた。

「龍鳳さんの次は私ね。装甲空母CV-THO1「大鳳」です。貴方の機動部隊に勝利を！」

勝気な性格なのだろう、腕を振って意気込む彼女は澄んだ瞳を航暉に向けた。

「駆逐艦、若葉だ」

「口下手な姉ですいません、初春型4番艦DD-HH04「初霜」です。よろしくお願いします」

揃いのブレザータイプの服装だが、着崩している若葉に対して規則通りきっちり着こなしている初霜との対比が印象的だ。

「これで全員だね、とりあえずなにか質問はあるかい？」

航暉が周りを見回すとだれからも質問は出ない。

「——ならば僕が」

航暉の目の前、第一種軍装を着た少年左官が手を上げた。

「合田直樹海軍中將を殺したのはあなたたちですか？」

場の空気が凍った。その直後に激昂したのは天龍だ。

「てめえ！出会ってそうそうどういう……」

「天龍、今は黙ってくれ」

「黙ってられるか司令！こいつは俺たちを殺人者って」

「黙れと言っている」

航暉にぴしやりとそういわれ、天龍は渋々口を噤む。

「……まずその言葉の真意を教えてください。あなた“たち”とは具体的に誰のことを指している？」

「MI作戦に関わった作戦士官、それも“穏健派”と言われる派閥の皆さん、またその手駒として動ける艦娘たちです」

「……つまり中路中將以下、俺と高峰少佐、杉田少佐、およびその傘下にいる艦娘たちか？」

「はい」

それを聞いた航暉はデスクに体重を預けるように寄り掛かった。航暉は冷ややかに笑い頷いた。

「なるほど。クリリスクには今、中路中將の西部太平洋第一作戦群に所属する杉田少佐が駐留している。コンピュータのサポートを受け

ながらの精密砲撃を得意とする士官だ、十分に狙撃できる腕があるだろう」

目を閉じて考えを反芻するように航暉がそういうと、正一郎が言葉の後を継いだ。

「高峰少佐は特調六課の人間です。憲兵ほどではないにしろ、警察とのパイプがあるでしょう、もみ消しも可能なはずですよ」

「……筋は通ってるな。で、それをして穏健派は何を得る？」

航暉が目を開く。ちようど薄雲から太陽が顔を出し、窓から浅く、強い光線が差し込んだ。一瞬だが目がくらみ、航暉の表情が消える。目が慣れたころには航暉の眼は冷えていた。

「確かに中路中将と合田中将はそのスタンスの違いから互いに牽制しあう仲だっただろう。だが、M I作戦で失速した急進派の将校を殺害して何を得るんだ？」

周りの艦娘たちは息をひそめて成り行きを見守るしかない。

「……失態は岩城少将を切り捨てれば、まあそれで表面上は責任を取った形になる。だが、それで急進派の勢いが盛り返すかといえどもではない。M I作戦の実質的な敗北は国連の防衛計画を根幹から揺るがしかねない失態だった。それを一人の首を切ったからと言って取り返せるものではない。現急進派はある意味その生贄にされ、発言力は霧散させられるだろう。発言力は穏健派、復興派などのほかの派閥に奪われて実質的に現急進派は派閥として解散となる。合田中将の軍人としての発言力を殺してしまえばその時点で軍における合田中将の死と同義だ。後はたくさんの退役金を片手にどこかで暮らしてもらえれば十二分。……おそらく中路中将はこういうシナリオを描いていたはずだ」

航暉の冷えた眼は合田正一郎をその場に射止める。

「穏健派にとって合田中将の死はマイナス方向にしか働かないと考えている。急進派に大きな借りを作った中路中将にとってはその借りを使って強請る方が後の効果は見込めるからだ。……万が一穏健派のどれかが犯人だとしても、中将の自殺を装うだろう。部下の失態の責任を取って自害というシナリオは禍根を残すにしても理解がされ

ない訳ではない。……また、霧の中を狙撃という手段も奇妙だ。明らか軍の関与を匂わせる方法で攻撃するメリットはなんだ？」

「……みせしめ、では？」

「その可能性はあるが、検挙で十分だし、また殺すにしてももっとシヨッキングな方法を使うだろう」

航暉はそういつて腕を組んだ。

「つまり、だ。穏健派にとって合田中将は軍事的もしくは政治的に死に体になった時点、即ちブロークンアローが発令された時点でもうそれ以上の敵対をするメリットがなくなっている。加えて君が疑ってかかった通り、穏健派に疑いの目がかかる頭痛の種にしかない。穏健派には彼を殺す理由がない……どうだい？」

「……一つの考え方として受け止めておきます」

「そうしてくれ。あと一つ」

航暉は言葉を切った。

「これ以降私の艦娘達を犯罪者や殺しの道具呼ばわりすることは断じて許さん」

「……了解しました」

一瞬空気が真空になったかのような息苦しさが通り過ぎ、航暉が表情を緩めた。

「必要なら海軍警邏隊のサーバーへのアクセス申請もしよう。必要なことは言ってほしい……ほかに質問がある人はいるかい？ ……ん、いないならこれで解散。今日は着任後初の顔合わせってことで少し堅苦しくやったけど普段はもつとラフな感じでやっていく。響と龍田、みんなの“旅行”の案内を頼む」

「了解」

「わかったわあ」

龍田を先頭に今日着任したメンバーが出ていく。全員が出ていったところで暁が盛大に溜息をついた。

「……緊張したあ」

「ドストライクに聞いてくるわね」

雷も少々疲れたような顔をした。その横でイライラした顔をする

のは天龍だ。

「おい、あれでやっていけるのかよ？」

「あれでいいんだ」

「はあ？」

くつくつと笑う航暉に怪訝な顔を浮かべる艦娘たち。

「彼、わかって聞いたんだろうさ。中路中将たちが事件に関わってないって」

「……なんでそんなことを」

「宣戦布告、だろうな。『お前と慣れあうつもりはない』っていう意思表示。ついでに言えば子ども扱いするなっていう意思表示だろう」

「……可愛くねえな」

「軍人に可愛さはいらないぜ、天龍」

そういいながら航暉は笑みを深めた。

UNNS t a C | H i r o s h i m a
国連海軍大学広島校は参謀や将校を目指す人の登龍門だ。彼はそこを抜けてきている。年齢を考えれば天才と言ってもいい頭脳を持つているはずだ。

「合田少佐はそこらの将校より肝が据わってるぞ。訳アリ人事で飛ばされただけでもなさそうだ」

面白そうじゃないか、というとまわりは苦笑いを浮かべていた。

忙しくなりそうだが、思ったよりもうまくいきそうな予感に航暉は目を細めるのだった。

Chapter 2—0 戦う由は

彼ら秋の葉の如く群がり落ち、狂乱した混沌は吠えたけり。

『失樂園』

ジョン・ミルトン

「……なんでこんなのがくるかなあ」

航暉は司令室のデスクに肘をつき、ハードコピー印刷資料を眺める。

「なあ、提督、暇なら碁でも打たんか？」

そこにマグネット碁盤をもって現れたのは利根である。

「……忙しそうには見えないよな」

「少なくとも頭痛の種を抱えてるのはわかるがお。……どうしたんじゃない？」

利根はスツールをデスクの前に置き、航暉と向かい合うように腰掛けた。

「……極東方面隊総司令部からの出勤命令書が届いたんだが、ちよつと厄介な感じだ」

「ほほう。提督が頭を抱えるとなるとかなりじやのう。この基地じやと火力と索敵は吾輩たちがおるし、航空戦力も十分、対潜だって睦月たち551がおればなんとかなるじやろう。……物量作戦で押してくる相手に少人数で切り込めとか言われたかの？」

利根はそういいながら碁盤を広げていく。

「そういわれた方がまだ “マシン” だよ」

ぎしりと椅子を軋ませて、航暉は背もたれに体重をかけるとそのまま体をそらす。逆さまに空と少しの海が見えた。

「さて、どうしたものか……」

「観艦式、なのです？」

その日の夜、艦娘たちと一緒に晩御飯のハンバーグを食べながら電が首を傾げた。

「そうだ、3週間後にマニラで行われる観艦式に参加しろとの極東方面隊総司令部から直々に通達だ」

「……なんでそれが月刀司令や合田司令官の不機嫌な顔が拝めた理由になるんだ？ 深海棲艦と戦って来いと言われたわけじゃあるまいし」

そういったのは天龍だ。その天龍に島風が後ろから飛びつく。

「それって速いの？」

「島風てめえ重い！ てか飯ちゃんと食ったのか？」

「食べたよ！ みんなが食べるのおそいんだもん！」

言い合いが始まるのを見ながら電は苦笑いを浮かべた。観艦式は艦を観覧してもらう式典だ。速いはずがない。

「それで、司令官、どうして観艦式が問題なんだい？」

響が口についたデミグラスソースをペーパータオルで拭きながらそう問いかけた。

「今回の観艦式はスールースルタン国王マジャハル・キレムVII世の即位記念式典の一環で行われるもので、メインはスールースルタン国海軍の通常艦艇だ」

素晴らしいながら航暉は食堂の壁に設置されたタッチ式スクリーンに映像を飛ばす。映るのはフィリピンとその近海の地図だ。

「スールースルタン国？ そんな国あったかしら？」

隣のテーブルでそういつたのは筑摩だ。向かいに座る利根が口を開く。

「フィリピンといえば、長いこと内戦がひどいことになっておるんじゃないかったかの？」

「第7共和政権と国王制スルタンの再建を望む民族との紛争じゃなかったかしら？」

龍田がそういうと航暉が頷いた。

「その内乱の最中に深海棲艦が現れて三者入り乱れてのひっちゃかめっちゃかの大乱闘。双方に戦う余裕がなくなって一時的に休戦していたが、3年前に再び内乱状態になっていた。ずっと膠着状態だったんだが、4週間前に第7共和政権の海軍がスルタン側に寝返ってクーデター。あつという間にマニラを制圧して第7共和政権派の人員を追い出した」

「……深海棲艦との戦争中によくやるな」

そうぼそつとつぶやいたのは若葉だ。

「まったく。で、スールースルタン国政府を正当なフィリピンの政府として認めるように国連に要求したのが3週間前。それを受けて国連議会がスールースルタン国の国連加盟を決めたのが一昨日、これでスールースルタン国は国家として成立し、これを記念して内戦で先延ばしにしていた国王の即位式を執り行うっていう寸法だ」

航暉はやれやれといった表情で肩を軽く持ち上げた。机の反対角に座る正一郎も浮かない顔をしている。

「この式典に第551水雷戦隊にも参加要請が来てるんだ」

「551？ 538だけじゃなくなてか？」

天龍が怪訝な顔をする。正一郎の隣に座る阿武隈が驚いた顔をすする。

「つてことは私も参加ですか!？」

「いや、今回の主役はスールースルタン国海軍の艦艇だ。だから駆逐艦を送る。軽巡は南方第一作戦群から一隻のみ、現地の基地の艦娘以外は基本的に駆逐艦だ」

航暉はそういつて作戦要綱をスクリーンに映した。

「作戦参加要請は第551水雷戦隊宛と第538水雷戦隊宛の二通来ている。これとは別に俺宛に国連軍側の代表士官として参加するようにとの命令書も届いた」

「ということは提督が式典に参加して、合田司令官が基地を守るってことですか？」

そう問いかけたのは大鳳だ。

「そうなる。……問題はここから。フィリピンも例にもれず、現地軍と国連軍の関係はあまり良好といえない」

「なんで？」

首をかしげたのは雷だ。それに龍鳳が答える。

「世界を守るためって理由で優秀な軍人は国連軍に取られちゃいますから……現地軍にとってはおいしいところだけ食べていくように見えちゃいますよね」

じつはすべての軍隊が国連軍の傘下に収まったわけではない。各国の軍の上位組織として国連軍が存在するのは確かだが、各国がそれぞれの領土を守るために独自の軍を持っているのはある意味当然であると言える。もつとも、その軍隊は深海棲艦が発現する前の第三次大戦期の兵器を流用しているものがほとんどで、深海棲艦相手にはあまり効果はない。

水上用自律駆動兵器INDRIVEAWSSを運用する部隊は国連軍に統一されている。各国の縄張り争いなどで哨戒エリアに穴ができるのを防ぐためであり、この対深海棲艦の戦いが終わった後に艦娘たちが人間同士の戦いで切り札にならないようにするためでもある。

「でも、仲が悪いならなんで国連軍に参加要請が来るのよ」

「国連に加盟するっていうことは世界的に国家として認められるって意味だからよく。観艦式で国連軍の艦娘と並走することはそれを対外的にも示すためってことかしら？」

暁の問いに龍田が笑顔で答えた。それに頷く航暉。

「そういうこと。特にこれはフィリピン第7共和政権への牽制行為の意味合いが強い」

「牽制い？　なんで？」

聞き返したのは望月だ。

「国連海軍の艦艇がこの観艦式に参加するってことはスールースルタン国を正統なフィリピン政府として認めるってことになるんだ。フィリピン第7共和政権はマニラから追い出された後、すぐにシンガポールで亡命政府を作って、今でもフィリピンの正統政府は自分たちだって主張してる」

正一郎がそう答えるとムムムと唸るのは睦月だった。

「勝負がまだ決まってるっていつていつてるのに、なんで急いで決着をつけたのかにやあ……？」

「フィリピンの鉱山の確保が目的だ。フィリピンは鉄やニッケルの宝庫で、その鉱山のほとんどをスールースルタン国政府の勢力地域にある。鋼材を安定的に得るにはそこでの内乱が集結しなきゃいけないでしょ？」

正一郎の言葉に納得顔の如月。

船の修理をするにしろ、街の修復をするにしろ、鋼材や燃料は必須だ。できるだけ資源を安定して得ることがするのは大きな魅力だし、現状ではできる限りの資源をかき集めたい。ならスールースルタン国を正統政府と認める代わりに国際社会への貢献として鉄鉱石などをまわすことを求める、そういうところだろうと予想がつく。

「……ちよつと待て」

ここで待ったをかける声の一つ、天龍だ。

「第7共和政権への牽制だのなんだの言ってるってことはまだ内戦は終わってない。そうだな？」

航暉は疲れた顔で頷いた。

「天龍の言う通り、内戦はまだ終わってない。国連の介入でスールースルタン国が正統政府になることがほぼ決定したとはいえ、決着はまだついていないのが現状だ」

「つまり、お上は、人間同士の紛争地帯で行われる軍事的意味合いの強い観艦式に駆逐艦のみを派遣しろ、って言ってるんだな？」

「……そうだ」

「危険だつてわかつてんだろ？」

「ああ、だからこそ」ウエーク基地所属艦”に参加命令が出た」

航暉はそういいならスクリーンを切り替える。書類をスキヤンして取り込んだような文章が現れる。みながそれをのぞき込む。

「……すいません、これ何語でしようか？」

そういったのは初霜だ。

「タガログ語だ。フィリピンの言語だな。日本語訳をするとこうなる」

スクリーンに見慣れた言語が表示される。

「……冗談じゃねえぞ。こんなの俺らの仕事じゃねえ！」

天龍が拳を強く握りこんだ。

「俺もそう思うよ、天龍」

悲しげにつぶやいた航暉はスクリーンから目をそらした。

スクリーンの日本語訳を正一郎が読み上げる

『第7共和政権こそ正統なフィリピンの指導者であることを信じ、民主的なフィリピンを奪ったマジヤハル・キレムVII世を我々は認めない。王たる位につくことを我々は認めない。武力でしか国を治められない王国を我々は認めない。即位式典などという茶番劇を始める前に母なるフィリピンの島々を解放しなければ、我々は武器をとり、その不正に立ち向かわねばならない。我々は民主主義の正義に則り、この母国の未来をきりひらかねばならない。我々”コモンズ”はスールースルタン国を認めない。即位式典などという茶番を始める前にマニラから撤退せよ、さもなければ公衆の面前で独裁者の首を落とすことをここに宣言する』

航暉が苦々しく絞り出すように言葉を放つ。

「今回の作戦参加艦の任務はこういうことだ。観艦式に参加し、国王をはじめとした政府要人を『第7共和政権派の武装過激派組織』から守れ——今回の相手は深海棲艦でも艦娘でもない。武器を持った『人間』だ」

かきりと書類が落ちる。粗雑な木造のローテーブルにはおにぎりが乗っているが手は付けられていなかった。

「元氣出してよ、司令官。ボクなら大丈夫だからさー！」

「お前が大丈夫でも、俺が大丈夫じゃないんだよ、皐月……」

皐月と呼ばれた少女はそういわれてシユンと俯いた。長い金髪が力なく垂れる。彼女の髪は暗い電灯に照らされ、深い陰影を落とす。

彼は背中を後ろの壁に預けた。すぐ頭の上にある窓からはわずかに光が差し込んできている。それを見上げて彼は言葉を置いていく。

「こんな情勢で観艦式をやるんだぞ。犯行予告もでてるんだぞ。スールーも第7共和政権も国連海軍の味方じゃない。そんな中に……艦娘たちを出せっていうのか？」

書類は式典参加命令書であることが見て取れる。彼には現地の国連海軍士官としての参加、つまり国連海軍側の参加者を出迎えるホスト役だ。この基地に国連海軍の士官は一人しかいないため、彼の参加は『強制』だった。

「もしかしたら、お前は……お前は人を殺さなければならぬかもしれないんだぞ。俺はそんな命令、出したくない」

彼はそういつて力なく笑った。その横に彼女が腰掛ける。

「それでも、任せてよ。司令官。ボクは水上用自律駆動兵装さ。大丈夫

夫」

艦娘——INDRIVE | A WS 水上用自律駆動兵装。艦娘は人に非ず。なんどそう

言われても彼にはなじまなかった。

彼女はそれを知っていても、彼女が兵器であることが彼を救うかもしれないとそれを嘯き続ける。彼はそんな彼女を兵器扱いできずにいる。

小さなその手で人類の命運を支え、いつ沈んでもおかしくない中、戦場を駆けてゆく彼女。司令官を気遣うことができる彼女が兵器であつていいはずがない。

「……なあ、皐月」

「なに？」

「俺たちは誰のために戦つてるんだろうな」

答えは返つてこない。答えがないのか、あつても答えることができないのか。彼には判断がつかなかった。

「ねえ、司令官」

「うん？」

「司令官は軍人になつたこと後悔してる？」

皐月は彼に寄り掛かるようにして、こてんと頭を彼に預ける。少女の高い体温がワイシャツ越しにも伝わってくる。

「ボクはさ、最初から艦だつたから、戦わなくていいっていうことがどういうことなのかあまりわからない」

皐月はそのまま目を閉じて、軽く笑つた。

「司令官は元々軍人じゃなかったんだよね？」

「……ああ」

「どうして軍人になつたの？」

それを聞かれると言葉に詰まる。

「……言いたくない？」

「そういうわけじゃないんだ。ただ……よくわからないんだ」

そっか、といった皐月がわずかに動いた。

「いっしょだね。……ボクたちは何のために戦うんだろうね」

沈黙が落ちたが、それが答えのような気がした。

わずかに月あかりが落ちる。慣れてしまったどこか濁った潮騒の匂いと火薬の臭いを意識した。遠くで響く軽い銃声……おそらく、小銃。

「なんで戦うかわかんないけどさ」

優しい声で皐月がつぶやくようにそう言った。

「……ううん、やっぱりなんでもない」

「なんだよ、気になる」

「ヒミツ。……あててみてよ、浜地賢一司令官？」

「ヒントもなしか？」

なぜ戦うのか、わからない。似た者同士の少女と青年は狭い部屋で身体を寄せ合う。ぽつりぽつりと会話は減っていき、背中をどこか黒ずんだ木の壁に預けたまま、押し寄せる睡魔の波に身を委ねたのだ。た。

フィリピン、ルソン島にあるキャビテ軍港はマニラ湾内部の南東側によつきりと突き出した半島に位置する軍港だ。その中でも一番先つぽ、ダニエロ・アチエンザ地区と呼ばれるところに国連海軍のキャビテ基地は立地していた。

「……たしかにこれは立地して“いた”ね」

「なんだか基地じゃないみたいですよ……」

輸送機から降りて伸びをした雷が回りの仮設テントの山をみてあきれたようにそう言った。電も頷く。

目の前は全壊した司令部棟に建物に大きくヒビが入って立ち入り禁止になっている艦娘宿舎。どこか傾いた管制塔は機能を停止していたが、隣の移動指揮車の誘導で代替されており、なんとか輸送機での現地入りができた。

「みんなおっそーいー!」

駐機場エプロンに真っ先に飛び降りていた島風が腕を振って抗議する。今回は旗艦電を中心に雷、島風、睦月、如月、弥生、望月の7隻でやってきていた。皆緊張しているのかと思いきや、思ったよりも皆落ち着いているので航暉は内心胸をなでおろした。

艦娘たちの艀装がしまわれたキャニスターなどが台車パレットに乗ったまま中型輸送機から運び出される。中央の大型テントを連ねたところが艀装の整備区画兼保管庫になっているらしい。国連海軍の警邏隊が完全武装で歩哨に立っているからほぼ間違いあるまい。

「こんな状況で観艦式をやるのです?」

「観艦式はもつとマニラ市街地寄りでマニラノース港の方だ。……あっち、遠くに高層ビルがかすんでるのが見えるか? あの向こうだ」

航暉が素晴らしいながら海の向こうを指し示す。波のない鏡のような水面の向こう、蜃気楼で揺らめくように細い線が何本か見える。

「まあ本番は明後日だし今日はこの海になれることを目標にしよう」

「そういういなながら航暉は自ら大きなバックを担いだ。そこに早歩きより少し早いくらいで第一種軍装……開襟の黒い制服がやってくる。背は普通の男性と比べたら低めだが、体つきはしっかりしている。短い黒の髪を揺らして航暉の前まで来ると黒い革靴を軽く鳴らして敬礼した。」

「はるばるご苦労様です。国連海軍極東方面隊南方第二作戦群第四分遣隊司令の浜地賢一中佐です」

「中部太平洋第一作戦群第三分遣隊司令、月刀航暉大佐です」

「航暉は答礼を返し、微笑んだ。……おそらく同い年か、浜地中佐の方がいくつか年下、そんな感じだ。よく言えば柔和そうな、悪く言えば頼りなさそうな振る舞いだ。」

「荒れ放題ですが、仮設司令部にご案内します」

「あの、浜地司令官さん……」

「はい？」

電が先頭を歩く浜地中佐に声をかけた。

「どうしてこの基地は……」

それだけ言うと、浜地中佐は電が言いたいことを理解したらしい。

「1ヶ月前くらいに武装組織から攻撃を受けてこんなことになっています」

「こ、攻撃……？ 国連の基地が攻撃を受けたの!？」

驚いた表情をするのは睦月だ。

「おそらく第7共和政権派の犯行だと思えます。地对地短距離弾道ミサイルが4発ほど」

「……HIMARSですか？」

「そうじゃないかって言われています」

「ハイマース……？」

？を浮かべるのは弥生だ。

「High Mobility Artillery Rocket System
高機動ロケット砲システムだ。車両積載型の短距離ミサイル発射管だ。……被害は？」

「司令部棟が全壊、艦娘庁舎と機装開発整備棟が半壊により使用不可、

油槽プラント焼失。作戦指揮所は地上部のアンテナ部が破損していましたが、復旧済みです。人的被害は……死亡0名、重軽傷8名です」
「……死亡者0、よく無事で」

「直前にですがタレこみがあったんで、歩哨も含めてシエルターへ避難させたんです。でも間に合わずに3人、大やけどを負わせてしまった」

そう言った彼の表情は、後ろを歩く航暉からは見えなかった。

「あ、いただいた、司令官！」

木造コンテナ式の建物の集合体が見える。工事現場の事務所のような感じだ。その前で金髪の少女が跳ねながら手を振っていた。

「浦風たちが帰ってきたよ……つと、そちらの人は派遣団の人？」

「ああ、こちらは国連海軍極東方面隊中部太平洋第一作戦群第三分遣隊司令の月刀航暉大佐だ。今回の観艦式への国連海軍派遣団の団長を務めてくださる。この子は私の部隊、南方第二作戦群第584駆逐隊旗艦の……」

「臯月だよ！ よろしくな！」

そういいながら敬礼を決める臯月。それに航暉が答礼を返し、それに合わせて航暉の部隊の艦娘が敬礼をする。

「臯月ちゃん、お久しぶりなのです！」

睦月がそういいながら前に出た。

「睦月？ 久しぶりい！ 如月も弥生も、望月も！ このまま睦月型勢ぞろいになるんじゃない？」

「それはそれで面白そうねえ……」

手を取り合ってぴよんぴよん跳ねる睦月と臯月。それをみて浜地中佐がくすりと笑った。

「そういえば、南方第一作戦群からの士官はもう到着されているんですか？」

「ええ、先ほど到着したらいいんですが……」

そんな会話を始めたタイミングで軽い足音に航暉は気がついた

「や」

ホップ

「っ」

ステップ

「き」

ジャンプ

「ちやあああああああああんっ！」

小柄な影が一つ、皐月に後ろから飛びついた。抱き着いた勢いそのまま皐月を地面に押し倒した。

「うはあっ！　って、文月い!？」

「うん、文月だよお！　覚えててくれたんだあ……」

皐月の胸に頬を擦り付けるようにしながら文月と呼ばれた少女が茶色の髪をポニーテールにまとめ、それを乱れさせながらすり寄る。

「ちよ、くすぐったいよお！　文月、顔近いし、みんな見てるし……一度離れて……」

「わたしは気にしないよ？」

「ボクが気にするんだよっ！　時間と場所をわきまえてよ……」

「時間と場所をわきまえたらいいの？」

「えっとそれは……」

地面に倒れたまま互いに頬を赤く染めている幼い少女、茶色いポニーテールを揺らして文月が皐月の上にもたがったまま上体を起こした。荒い息が見かけに似合わない艶やかさを醸し出しているが、昼前のプレハブの司令部の前の衆人環視では雰囲気もなにもない。

皐月が浜地中佐に潤んだ瞳を向けて無言の救援要請を出していて、浜地中佐は溜息をつきながらその横にしゃがみ込んだ。

「文月さん、でいいのかな？　ちよっと皐月に用事があるんだけど、皐月を借りていいかい？」

「?……もしかしてお話中だった？」

「そうそう！　司令官に報告の最中だったんだ！　だから一回離れてえええええええ！」

皐月、この状況から逃れようと必死である。

「そうだったんだあ……」

文月が名残惜しそうに皐月の上から降りると、跳ね起きた皐月が浜地中佐の後ろに隠れた。

「……真昼間から恥ずかしいもの見せないでよ」

「島風、その台詞そっくりそのままお前に言いたい」

航暉の突っ込みにオーバーに「傷ついた！」という表情を見せる島風。

「提督もそんなこというの!？」

「ごめん、司令官に一票」

目をそらしながら小さく手を上げる雷と苦笑いでコメントを避けている電。睦月たちは自分たちの姉妹艦の思わぬ関係に絶句している。

「えっと、文月……でいいのかな？」

「え、うん。おじさん、誰？」

おじさんと言われ人知れず言葉に詰まる航暉。その後ろでは雷が笑いをこらえきれずに噴き出していた。後で覚えてやがれ。

「……中部太平洋第一作戦群第三分遣隊司令の月刀大佐だよ。君はこの所属じゃないみたいだけど」

「うん。南方第一作戦群第547水雷戦隊の所属だよ」

文月はそういつてにつこりと笑った。整ったかわいらしい顔だちだ。

「君の司令官はどこに……」

航暉が口を開くがその質問の答えはすぐに出た。

「か」

ホップ

「ず」

ステップ

「き」

ジャンプ

「くううううううううううううんっ!」

航暉は後ろから伸びてきた腕が首筋に巻き付く前にとっさに右腕を首のそばに引き寄せ完全に首をホルドされるのを回避する。右腕で相手の腕をつかみながら腰を沈めるようにして相手の重心を崩し相手を背負うように右足をするようにして大きく下げる。背中に乗せたその影をコンパクトに足元に落とすと、そのまま腕を極める。「いだだだだだっ！ 挨拶代りに飛びついただけで何この仕打ち!?!」

「不意打ちで後ろから首をとりにくるお前が悪い。俺の後ろにお前は立つな」

「デューク東郷かお前は！ レディに一声もかけずにまず投げるって……悪かったから謝るから極めなおさないで腕放せ————っ！」

溜息と共に腕を解放された彼女は荒く息をしながら立ち上がると、第一種軍装に着いた砂をパンパンと払う。ダークブラウンの長髪はサイドポニーにまとめられ、赤みの強い瞳に勝気な眉が凜とした顔を引き締めている。……言動で台無しだが。

服装からして国連海軍士官、袖口のモールからして中佐であることはわかる。女性用の腰が絞られたジャケットは小さ目なのか、起伏豊かな彼女のボディを少々タイトに見せていた。

いきなりの乱入で状況に頭がついていない人が多数出ている。

「えつと……そちらの方は？」

その筆頭、浜地中佐が女性に声をかけた。

「申し遅れました。国連海軍極東方面隊南方第一作戦群隷下、第547水雷戦隊司令官、笹原ゆう中佐であります！ 以後お見知りおきを」

「いつ副司令から昇進したんだ？」

航暉が頭を掻きながらそう言うのと笠原と呼ばれた女性がにっこり笑って振り返った。

「10月の再編時だよ。これでカズ君と並んだと思ったらカズ君も昇

進してるんだもん。びつくりしたよ、大佐殿?」

「えっと、月刀大佐と笹原中佐はお知り合いですか……?」

浜地中佐が聞くと笹原は自然な動きで航暉の右肩に手を置いて横に並ぶ。航暉はそれを払うことはせず、今度は横に素直に収まる。

「そうだよー。月刀大佐とは同期、UNNStaC—Hiroshima国連海軍大学広島校の5期生ね」

「時々非常識だが水雷戦隊重視の高速戦闘なら期待していい」

「なによその言い方、〃なら〃ってどうゆうーことよ」

「空母隊とかの指揮をまともにしてから反論してほしいな」

抗議するように腕を振るが、航暉は涼しい顔だ。

「……お前が来るとは思ってたなかったよ」

航暉がそう言うのと笹原はくすりと笑う。

「今回は事情が事情でしょ、なら〃現場の指揮官が動かしやすい気どころが知れた駒〃のほうがいいよね? そう言うことよ」

そう言って笑うと彼の横を離れ、浜地中佐の前に歩み寄る。淡い柑橘系の香りがふわりと彼の鼻をくすぐった。

「浜地中佐よね? ここの指揮官で、ここの爆撃で死者ゼロに抑えきったっていう」

「そうですが……」

「同じ中佐でしょ? タメでいこう?」

「そうだけど……」

「やるじゃない。この基地の破壊状況見た限り二桁単位で死者が出てもおかしくないって思ってたんだけど」

「なんで上からなんだよ」

「いーからカズ君は黙ってて」

意地悪げな横顔を航暉に向けてから、改めて浜地中佐に向き合う。右手を彼の左肩に乗せ、微笑んだ。だがその笑みには似合わないほどに赤い瞳は深い色をしていた。

「今回の観艦式、ほぼ間違いなく戦闘になるわ。きつとここの指揮官だからわかっているとと思うけど、スールースルタン国政府はおそらくあてにならないし、観艦式の最中に参加艦が離反することもありえる。その時、国連海軍の軍人としてあなたは戦える?」

笑みのまま放たれた問いに浜地提督は固まった。その質問の意味を測り兼ねていたからだ。考えがまとまる前に彼女がクスリと笑った。

「……沈黙もまた答え。よろしくね」

「え、あ、はい。よろしく……」

「ケンちゃん堅ーい！」

「お前がラフすぎるんだ、笹原」

航暉が頭を掻きながら笑った。

「えー、堅苦しくてもいいことないじゃん。大体、戦闘になったら礼儀とかガン無視だし」

「でも今は平時だろうが」

「でも夜戦になったら——」

「何!? 夜戦っ!?!」

「うわっ!」

何の前触れもなく笹原の横に出てきた少女に全員が驚いた。

「川内、あんたは瞬間移動で出てくるなっ! 心臓に悪い!」

「謝るからさあ、で、夜戦なの?」

「黙れ夜戦仮面、しばらくは夜戦の予定はない!」

「なんだあ」

橙色の服を着た少女があからさまに肩を落とす。

「川内ってことは、お前んとこの旗艦か?」

「そうだよー。547水雷戦隊の旗艦にして、夜戦における切り札その1、軽巡川内」

笹原はそう言っ川内の肩を抱いた。

「夜戦なら任せておいてよ、まあ観艦式で夜戦はないだろうけどね……」

「笹原の旗艦は大変だろう?」

「んー、そうでもないよ。夜戦させてくれるし」

「……気が合うはずだ。『夜鷹』」

「でしょでしょー? 組んでて楽しいしなかなか手放せなくてねー」

笹原が笑う。騒いでいるのを見つけたのか少女が何人かかけてく

る。

「もう、勝手にいなくならないでください、笹原中佐！」

「また誰かにちよっかい出してたんでしょ？」

「ごめんごめん、綾波。敷波もすねなくていいから」

オーソドックスなセーラー服を着た少女二人の頭をなでながら笹原は苦笑い。

「長月もごめんね」

「司令官はいなくなると探すのは大変なんだ。もつとどっしりと構えてほしい。文月、お前は迷惑かけてないだろうな？」

「えー、長月ちゃんひどーい」

より一層にぎやかになっていくが、浜地中佐が声をかけた。

「あの一、打ち合わせもしときたいですし、司令部に入りませんか？
ここだと暑いですし」

「あ、すみません。そうしましょう……艦娘たちも一緒にいいですか？」

「もちろん、その方がありがたいです」

「なら、こちらへ、会議室へ案内します」

司令部棟にみんなが入っていくなか、最後尾で電が海を振り返った。

「？ 電？」

「あ、いえ、何でもないのです！」

怪訝な顔をした雷に慌てて笑顔を向けて、電は皆を追いかけた。

マニラの高層ビル、その三七階のパーティホールは祝賀ムードに覆われていた。

「だから俺が悪かったって、機嫌直してくれよ」

「ボクよりも美人でポインなおねーさんの方がいいんでしょ？」

「あれが楽しんだように見えるか？」

「鼻の下伸びてた」

「うっ……」

その一角に明らか場違いな痴話げんかモードの青年と少女、浜地中佐と駆逐艦娘「皐月」である。

「おねーさん好きなら、早く空母とか戦艦の指揮官になればいいんだ」
「んな訳ねーだろ」

だめだ、完全にすねてる。浜地中佐は見事に頭を抱えた。髪を掻こうとして、慣れない整髪剤で髪を固めていたのを思い出す。第一種軍装にミニチュアメダルの勲章を下げた浜地中佐はそっぽを向いたまま顔を合せてくれない旗艦をなだめすかしにかかる。

「まあまあ、皐月も司令官をいじめるのはそれくらいにしときんさい。あれは男の本能じゃけえ……すっごくしどろもどろになつてたのは司令官らしいといえれば司令官らしいなあ」

そんな皐月の横にセーラー服の少女が優しく笑いながら寄り添った。ペンネット付きのセーラーハットを青みの強い独特な色をした髪に乗せた彼女は「浦風」。彼の部隊に所属する艦艇でもある。

「……浦風もおっぱいでつかいくせに」

「それは……けど、さっきの人よりは小さいけん」

「大きいことは否定しないんだ……」

普段は素直で屈託のない皐月だが、珍しく毒を吐いている。

「いいもんいいもん。睦月型でべったんこ同盟組んでやるもん！」

「じゃあ、同盟第一号はわたしだね」

後ろから響く舌足らずな極甘ボイスに背筋を震わせる皐月。振り返る前に後ろから抱き着かれ薄い胸板が押し付けられる。

「えへへ。おっぱいなんて戦闘にいらないもんね。わかってくれる人がいてよかったよ」

「ふ、文月、さん……？」

「さんづけなんていらないよ？ 皐月のほうがお姉ちゃんなんだし。胸って揉めば大きくなるってホントかなあ……」

皐月の鳥肌が二重三重に立っていく中、文月は左手で皐月の首筋を押さえたまま、右手を優しく皐月のセーラー服の中に滑り込ませて……。

「~~~~~っ！」

「♪」

無言での攻防戦が始まった。

「……止めなくていいの？」

「文月はあれでもちゃんと周りを見てる。ヤバくなる前にちゃんとやめるさ」

騒動を遠目に眺めながらシャンパングラスに注がれたジンジャーエールを傾けるのは笹原ゆう中佐だ。街を見下ろす窓ガラスに背を向け、手すりに体重を預けたまま、強めの炭酸を味わう。開襟のジャケットに国連軍所属を示す水色の飾緒を右脇から垂らし、左胸に第二次日本海軍の時にもらった国連軍第二級勲章のメダルを下げた通常礼装だった。その横にいつも通りの恰好の軽巡「川内」がやってくる。手には子羊のコーストの切れ端が乗った皿を持っている。

「夜なのにテンション低いじゃない、司令官」

「こーいう堅苦しいパーティは嫌いな」

「やっぱり？ あたしも……というより艦娘が軍主権のパーティ意外に参加するのも何気に初めてなんじゃない？」

川内は笹原と同じように手すりに体重を預けながら子羊のコース

トを口にする。

「月刀大佐も大変だ。国連海軍の代表としてずっとお偉いさんの接待してなきやいけないんだもん」

「カズ君ならそれぐらい慣れてるでしょ。ああ見えて一大軍閥、月の御三家”の筆頭、月刀家の人間だよ？ それよりもその横で控えてなきやいけない電ちゃんの方が心配かな？」

「あー、真面目ちゃんだから力を抜いてつてできないか……」

二人の視線の先にはスールースルタン国海軍大将の階級章を付けた大男と表面上は楽しげに会話をする航暉の姿があつた。笹原や浜地中佐と異なり、長く燕の尾が垂れた燕尾服に白い蝶ネクタイ、国連のマークに錨を重ねた国連海軍所属を示すバッジに笹原と同じ国連軍第二級勲章のメダルを下げている。セーラー服の電は周りを正装で着飾った男女の中では激しく浮いており、遠目にもかちんこちに緊張しているのがわかる。

「……浜地中佐も大変だ」

「あー、さつき女性に言い寄られてたね。うまくかわしたみたいだけど」

「度胸ないよねー？ みるからにセックススパイなんだから、適当にブラフを口にしておけば一晩ぐらいいい思いできただろうに」

「え……あの言い寄ってた女の人スパイなの？」

くすくすと笑いながら笹原はその噂の彼を視界の端に捉えた。疲れ切った顔をして文月に襲われている臯月を庇っている。痴話げんかは収束したようだ。なによりなにより。

「浜地中佐が見るからに警戒してたから意味なかったけどね。臯月ちゃんにとつてはしばらく赤いドレスはトラウマかな？ 浜地中佐はそれどころじゃないだろうけどさ。……まあ、低めの身長とちよつと童顔にみえるのも相まって現場慣れしてなさそうに見えるちゃうだろうし、浜地中佐は災難だったね」

「月刀大佐は？」

「あれに声かけるのはある意味自殺行為よ。あたしが保証する」

「……どうい保証なのそれ？」

笑いながらグラスを煽った笹原はグラスに残った口紅を少し気にしながら笑う。

「結構身持ちも堅いし、逆にスパイの方が身元割られる可能性も高い。……月の御三家の関係で『そういう事情』に詳しいんだよ。月刀家は配下に国内の兵器産業の一角を担う月岡コンツェルン、ポセイドンインダストリー社があるし、月詠家は空軍に顔が利いた。月刀家に至っては今でも陸軍と太いパイプを持つてる……そんな環境で育てばそういう事情にも詳しくなるさ」

川内は隣に立つ司令官のことがあまりよくわからなかった。夜戦好きという共通項もあるし、水雷戦隊の指揮能力に関しては絶対的な信頼を置くに値すると思っている。だが、時々なにを考えているのかわからないこともある。艦娘には見えないものが見えているんじゃないかって思えるのだ。部隊の要望を上層部に通す手腕は目を見張るものがあるし、川内にはわからない政治とやらのパワーバランスにも詳しい。そうかと思えば、朝は毎日のように寝坊してくるし、書類はミスだらけで綾波に怒られるのはほぼ日常の風景だ。

「司令官は、ここに来る前、何をやってたの？」

「んー？ 一緒にいたじゃない。マニラ湾の地形確認して、襲撃ポイントの予測を立てて、フォーメーション確認して……」

「そう言うことを聞いてないのはわかってるくせに」

「……話したことがなかったっけ？ 軍の狗になる前」

「……聞いてない」

「——That's so long ago, I don't remember.」

「なにそれ」

「『カサブランカ』って映画の科白よ。確か佐世保のライブラリにDVDがあつたはずよ。今度一緒に見て見ない？」

笹原はまた妖艶ともいえる笑みの向こうに答えを隠してしまう。

「……」なら今晚は会えるの？」

「あっちゃー、川内さん意外に博識？——I never make plans that far ahead. って答えてお

「こうかな」

笹原は額を手のひらで抑えてオーバーにしまったという表情をつくる。だがその裏から覗く目は好奇の色を混じらせていた。

「……司令官はさ、明日の観艦式はどうなると思う？」

「さあ……といっても始まらないもんね。観艦式参加艦娘の代表、川内ちゃんには話といたほうがいいと思うし」

「それは、電ちゃんとかには話さなくていいの？」

「必要ならカズ君から聞かされるわよ。ほかの駆逐艦のみんなには話さなくていいかな……河岸を変えましょう。ここでできる話じゃない」

そう言うのと腰を振って手すりから離れるとパーティ会場を後にする。ボーイにチップと一緒にグラスを返してドアガールに会釈しながら扉をくぐる。

《……どこに行く気だ、笹原》

《お花摘みよ。いくらカズ君でもガールズの秘密の花園に首を突っ込まないでね》

航暉が飛ばしてきた電腦通信を強制的に切って廊下に出ると、人気のない方へと歩く。暴漢に襲われることも考えられたが、脇には護衛用の小型拳銃も吊っているし、川内もいる。

廊下の窓から眺める外は暗く沈み込んでいた。ところどころ赤く光っているが、黒い煙も同時に立ち上がっているとところをみると街の明かりというわけではなさそうだ。

「……今回の作戦、艦娘を前線に押し出しているのは現実的じゃないというのが司令部の考えよ」

「司令部っていうのは司令官と、月刀大佐たち？」

「それプラス極東方面隊総合司令部の考え。理由は単純、外からの攻撃では国王の確実な暗殺というのがほぼ不可能だからよ」

その表情はパーティ会場で見せていた余裕のある表情とは変わっていた。

「指導者暗殺のメリットってわかる？」

「……トップがいなくなつて混乱させること？」

「まあ、そうだね。トップを消すだけの力があるぞってことと、お前らが信じてた英雄はもういないぞってことを示したいわけだ。……暗殺で消さなきゃいけないものって実は命じゃないってわかる？」

「どーゆーこと？」

「消さなきゃいけないのは、命そのものじゃない。そいつが着ている肩書や権力だ。だから命を消しても、その人を騙る人物が出てきたらそれはそれで暗殺失敗なわけ。つまり替え玉を使って、奇跡の生還！」とかやられてしまうと逆効果ってわけ。おけ？」

「……なんとなく」

笹原はその答えに満足げに頷いた。

「なら次に行こう。暗殺する側にとつて重要なことは殺した相手の死を隠されないようにすることだ。つまりは、死体を晒すこと。相手に言い逃れができない状況で殺すこと。たとえば演説の最中やパレードの最中の殺害は周りに無関係な民間人が沢山いて隠し通すことは難しい」

パーティ会場にサブしに行くのだろう、赤いジュレをガラスの器に盛った涼しげなデザートを片手にボーイが目の前を横切る。廊下の角に消えてから笹原は改めて口を開いた。

「そろそろ現状に話を落とし込もう。今回の観艦式では国王はスールスルタン国海軍のイージス巡洋艦リカルテ級1番艦、リカルテに座上する。この艦は軍用艦で民間人はほとんど乗っていない。だから一般群衆の中での暗殺は前提条件からして無理だ。だけど一つだけ例外がある」

しばらく沈黙が続いたが、川内はあることを思い出した。

「……報道陣？」

「そうだ。夜になって調子が出てきたね？ 船にはプレス関係者も乗船する。カメラが回っている間に国王の頭が吹き飛ばせば暗殺は成功だ。じゃあ質問。その算段になって艦娘ができることってなーんだ？」

意地悪な笑みを浮かべて笹原は川内を見る。

「……わかんない」

「それでいいのだ。その算段になってしまつては、艦娘の出る幕はない」。水上で航行中の艦娘にできることは外からやつてくる敵を追い払うことだもん。内部に敵が言う状況下での戦闘マニュアルなんてないし、君たちが艦の中の反乱因子を気にする必要はないからね」

「つまり……」

「うん。今回航海が始まつてから敵が船に乗り移ろうとわらわらやつてくるって可能性はかなり低い。あり得るとしたら陽動。もしくは生存者が確実にゼロにできる方法での攻撃法を持っている場合のみだ」

「具体的には？」

「そうね……気化弾頭を使った空間攻撃とかかしら。水深が十分にあるところで、かつ、船内から避難できない状況にしたうえで船ごと沈めれば目的は成功ね。もつともそんな空間攻撃をしてくる場合はおそらくミサイルか戦闘機を使ってくるから艦娘ができることはあまりないかな」

笹原は笑つた。

「つまり、今回私たちは、蚊帳の外でおろおろ騒いでろ」ってことよ。要は嘯ませ犬ってこと。それを極東方面隊総合司令部が指示をしてきた」

「……意味わかんない」

「今回の暗殺は人間同士の戦いに終始するでしょうね。文字通り艦娘の出る幕じゃないのよ。人間同士の時代錯誤な縄張り争いに付き合う理由はないし、君たちの敵は深海棲艦であつて、人間じゃない。だからこそ、国連海軍はこの作戦に乗つた」

雲の隙間から半月が覗くが明るい廊下ではあまり目立たない。それを見て目を細めながら笹原はどこか卑下するような笑みを浮かべた。

「艦娘は対人戦闘では役に立たない……そういう結果を報道陣の前で示すこと。これが月刀大佐に示された本当の任務よ。艦娘は対深海棲艦用に特化した兵器であることを人民に再認識させ、深海棲艦との戦争が終了した後、ほぼ確実に再発するであろう人間同士の戦い

にあんたらが巻き込まれるリスクを減少させる。ある意味、君たちの未来のために彼は泥をかぶる訳だ。それがわかっててああやって将校と談笑できる彼の気がしれないね。もしかしたら「起こるべくして起こった失態」のせいで物理的に首を切られるかもしれないってのにさ」

どうしてそこまで艦娘のために身を粉にできるやら、と笹原は笑った。

「……どうしてそんな重要なことをみんなに言わないの？」

「だからあんたにはことが始まる前に言ったじゃん、川内」

「だって、わざと護衛に失敗しろって言ってきたんだよ。昨日今日とみんなで航海してきたけど、月刀大佐の部隊のみんなは心から彼を信頼してる。月刀大佐は将来的にみんなを守るかもしれないけど、今の信頼も実績も全部パーにしろってことでしょ？ 国連海軍の恥を晒した将校ってことでずっとその汚名を着続けなくちゃいけないよ」

「そうね」

川内はだんだん腹が立ってきた。そんな作戦をさも当然のように隠してきた司令部に。そんなことをおくびにも出さずに指揮を執ってきた目の前の指揮官に。そしてなによりも目の前のこの女を論破できない自分自身に。

「納得できない！ なんてそれでも司令官はずっと笑ってられるの！」

卑下したような笑みの向こうに一瞬だけ感情が横ぎった気がした。だが、それすらもなかったことのように仮面に隠してしまう。

そこに来て、浜地中佐が妙に緊張していた理由もわかった。パーティ慣れしてない訳でも、臆病な訳でもない。一番の理由は――

醜態を晒せという任務によって臯月たちが傷つくの
を恐れているのだ。

川内はまだ浜地中佐にあってからの時間は少ない。だが、その言動から根が優しく、軍人としては失格であるほどの人格者であることぐらいわかつている。ことが起きれば司令部の失態だと主張するのだろう。それでも、世に公表されるのは人間に対して艦娘は弱いという結果であろう。そのきつかけとなった艦娘がどのような目で見られるか、わからないわけではあるまい。

司令部でどんな会話が交わされたのかはわからない。だが、この司令部の面々が素直にはいそうですかと鵜呑みにしたとは思えない。何重にも手を尽くして、それでもこうするのがベストなのだろう。

「それで、その結果月刀大佐はどうなるの？ 浜地中佐はどうなるの？ あんたは、司令官はどうなるのよ！ 公式の国の行事で恥かいて、何も知らないで参加した駆逐艦の子たちを傷つけて！ その責任を取らされて退役させられるのがオチじゃない！ 部下は何も知らないで誤解したままほかの司令官のところまで戦うの!? それで司令官たちは何をやるの!？」

「それでも、月刀大佐や浜地中佐はやるよ、きつとね。それが結果として、あなたたちを守ることになるのなら。」

「……司令官、あんたは……卑怯だ」

睨んだ目頭が熱い。それでも、笹原は笑ったままだった。

「よく言われるよ。……それで、あなたはどうするの。みんなに話す？ それとも参加しないでどこかに逃げる？」

「……やっぱり卑怯だ。司令官たちが覚悟決めてるのに、話せるわけないじゃん……！」

笹原が彼女の頭を抱き込んだ。勲章のメダルが少し痛かったが、川内はされるがままに腕に収まる。

「やっぱりあんたはあたしが知ってる部下で一番優秀だ、川内。……みんなのこと、頼むよ、国連海軍派遣団旗艦“川内”。司令部でかわしきれなくなった時は、あんたがみんなを守るんだ」

「……悲しいこと言わないで」

「ごめんごめん。でも、頼むね」

「……わかった」

「これでヒミツを共有した共犯者ってわけだ。ルイ、美しい友情の始りだな」

「高跳びでもする気？」

「それもいいかもね。これが終わったつら雲隠れでもしてみようか？」

胸に抱き込んだままあやすようにぼんぼんと頭を叩く。そうしながら電脳通信をオープンにする。

《カズ君、川内に話した》

《お花摘みに行ったんじゃないの？ ……状況は？》

《グリーン2-3、反応はまずまず。最悪の場合のリスクヘッジはできそうね》

《そうか……》

《電ちゃんには話すの？》

《いや、俺の場合は話したところで自己満足にしかない。黙っておくよ》

《そう、わかった。川内が泣いちゃってるから落ち着いてから戻るよ》
《了解》

無線を切った。川内の頭を抱いたまま、目線だけを動かし、まだらな赤に染まった街を見下ろした。明日は戦いになる。

司令官の命かけた戦いが。

スポーツドリンクを煽って浜地中佐は堅苦しいジャケットを脱ぎ捨てた。

「……臯月も今日は疲れたもんな。ごめんな、あんまりかまってやれなくて」

当の皐月は部屋にいない。駆逐艦たちが休んでるテントに睦月たちと一緒に寝かせてきたからだ。臨時の司令室のデスクに腰掛け、ネクタイを緩めていく。

「感慨深いなあ……明日ここに帰ってこられるかわからないもんな」

国連海軍派遣団が乗船するのは国王が乗る船と同じだ。暗殺の巻き添えになるリスクだってほかの人よりも高い。その中で、何ができるだろう。帰ってこれたとしても、皐月に愛想をつかさかれていない保証はどこにもないのだ。

そう言う意味では今日の晩餐会は皮肉なものだ。パンとワインを振舞って盛大に行われた最後の晩餐。裏切り者にもその食事は振る舞われるのだ。

「ごめんな、皐月」

ここでの日々は大変だったが、それでも何とかやってこれた。それは皐月たちがいたからだ。その信頼をほぼ間違いないで、明日裏切る。彼女の笑顔も、怒った顔も、背伸びしたがる言動も、もう見れないかもしれない。それがこんなにも苦しい。

「ごめんな……ごめんな」

司令官の苦悩など、彼女たちは知らなくていい。どういう理由があるろうとも、彼女たちを裏切る事実には違いない。お前たちの未来のためだ、など歯の浮くような言い訳を連ねるつもりはさらさらなかった。

「明日、か……」

制服を脱いでハンガーに吊るしながら、彼は静かに溜息をついた。視線の先には写真立てに飾られた写真、このメンバーそろってとった唯一の写真だった。写真の彼の横では皐月が屈託なく笑っていた。

「お前がお前たちが背負うのは栄光だけでいいんだ、皐月」

写真立てをデスクに伏せて、彼はそつと部屋を出た。

「それじゃ、行ってくる」

「はい、浜地司令官。お気を付けて」

司令部の前で浜地中佐は制帽をかぶる。振り向くと胸のメダルが揺れた。その視線の先に梅色の和装の女性の方を振り返る。

「鳳翔さん」

「はい、中佐」

この基地で唯一の空母である鳳翔がいつも通りの笑みを浮かべた。

「留守にする間、お願いします」

「……ちゃんと帰ってきますよね？」

「もちろんです」

そう言って、敬礼を交わす。そうして簡易中継器や航路などの書類などが入った小さな黒革のブリーフケースを左手に提げ、歩き出す。

「……！ 鳳翔さん……？」

「……ずるい人」

鳳翔が彼の背中に体重を預けると、彼はそれに驚いて動きを止める。女性としてもかなり小柄な鳳翔は、彼の背中に隠れるように立たたまま、彼のジャケットをそつと握る。

「帰ってくる気なんて、ないんでしょう……？」

「！」

「私、これでも訓練艦なんですよ……？ これまで何人の提督を見てきたと思ってるんですか？ まだ若い提督の嘘なんて、わかっちゃうんですよ……？」

鳳翔の声がわずかに震えた。彼が動こうとするとジャケットを握りこむ。

「貴方は、嘘をつくのが苦手で、変なところで意地っ張りで、誰よりも優しく、時に無謀に思えるようなことでも、それを乗り越えるだけの強さを持っている方です。艦でしかない私たちを家族のように接してくれて、怖い時もつらい時も私たちのそばにいてくれた。そうい

う方です」

鳳翔は彼の方に額を預けるようにした。

「私たちは、自律駆動兵装は、提督の指示があつて初めて出撃します。それは提督がいなければ戦うことすらできない。貴方たち提督が、いえ、浜地提督、貴方が私たちには必要なんです」

彼女のぬくもりを背中に感じて、彼女にどんな言葉をかければよいのだろうか。

「もし今、私に兵器以上の何かを求めることを許されるなら、私は貴方を求めます。どうかご自愛を、浜地提督。貴方の命令ならば私はこの基地を死守し、貴方の帰還を待ちましょう。貴方の命令ならば私は貴方を守るため、いかなる敵であろうとも艦載機を飛ばし血路を拓きましょう。貴方の命令ならば、地獄への道もお供いたしましょう。ですが、貴方がいなければ、そのどれも叶いません。どうか私を、私たち浜地艦隊の仲間を置いていかないでください」

わずかな水滴はどこから落ちたのか、それを知る必要はない。今空は雲一つなく、硝煙の匂いが残る。

「……これじゃあ、貴方を泣かせた悪者じゃないですか」

浜地中佐は肩に乗せられたほっそりとした手に触れた。

「せつかく格好良く出ていこうと思つたのに……」

「……格好つける必要などありません。いつも通り出発して、いつもの通り帰ってきてください」

「わかつた。……かなわないなあ。鳳翔さんには」

彼が振り返る。左腰に吊つた長剣サーベルがわずかに音をたてた。左手にブリーフケースを提げたまま右手で彼女を抱きすくめる。

「必ず帰ってきます。待っていてください」

「……わかりました。浜地提督、ご武運を」

彼はそれに頷くだけで静かに歩き出し、基地の前に来ているであろうバスへと向かう。それを鳳翔は静かにいつまでも見送った。

「……ほんと、ずるい人」

皮肉なほどの晴天だった。グレーの鋼鉄の塊が静かに動き出す。

「月刀より国連海軍派遣団各艦、状況開始。各艦の間隔に気を配れ」

イージス巡洋艦「リカルテ」のブリッジで航暉は無線を使って指示を飛ばしていく。双眼鏡をあてがい、左舷斜め前方と進む川内と、彼女と対になるように右舷側を引く電の姿を認める。腰に吊った長剣が軽く揺れる。

「何度見ても女子が海の上を進むのは慣れませんかあ」

「私もこんな風と一緒に航海しながら指揮を執るのは慣れてないの
で、少し新鮮ですね」

「おや、ツキガタ大佐は現場に立たれないのですか？」

「普段は司令部の暗い部屋で戦闘指揮です。ちょうどC I Cで指揮を
飛ばすことに近いかと」

横に立つ大男、大佐の階級章を肩に掲げた彼はマルセロ・ピラール
大佐——この艦「リカルテ」の艦長だ。国の宗教を反映してか、
ターバンを正式な制帽に指定しているため、最新鋭の船橋設備に黒の
ターバンは新鮮に映る。

金のカバーがかけられた艦隊司令席には国王であるパドウカ・マウ
ラナ・マサハリ・マジヤハル・シャリーフ・キレム3世が腰掛け、こ
との推移を見守っている。国王の隣には屈強な大男である近衛隊長
や艦隊司令のスールー海軍大将などが団子のように固まって控えて
いる。

右舷側を警戒している航暉と対になるように、同じように警戒をし
ているのは笹原ゆう中佐だ。中央では浜地賢一中佐が双眼鏡を片手

に前方警戒にあたっている。

《笹原、この無線にノイズが入ってるか？》

《いや、クリアそのもの。どうしたの？》

《——いや、了解、引き続きウオッチを頼む》
《あいあい》

艦長と会話を交わしながらも艦娘たちの無線とレーダーを取り纏めている笹原とのコンタクトをとる。——茶番とはいえ、真面目にやらなくては思わぬ事故を起こしかねない。

艦列は港の防波堤を過ぎ湾の中へと進んでいく。

《本番始まっとるし、そろそろ機嫌直さんといかんよ、皐月》

「わかってるけどさ……」

司令官が乗っているイージス巡洋艦を前に見つつ、川内の300メートル後方を航行する皐月は、乗ってきた無線に視線を落とした。無線の向こうは浦風……自分の同僚で右隣のフリゲート艦を挟んで反対側を航行しているはずだ。

艦隊はバターン半島を右手に10ノットほどのゆっくりとした速度で進んでいく。間もなく右前方に湾の入り口とその中央に浮かぶコレヒドール島が見えるはずだ。

《確かにここんとこの司令官は余裕がないんはウチも感じとるよ？

なにかウチらに隠しとるんも。でも司令官がウチらを陥れようとしとるとかそういうのは絶対にないんはわかっちゃよるけえ、信じてあげんさいや》

「信じてない訳じゃない、でも……やっぱり変なんだ」

艦速を気にしつつも、皐月の思考か自分の内側に落ちていく。

司令官が明らかに変わったのは観艦式に参加するようにとの通達が来てからだと思う。何度となく地図を広げて何かを書いては破り捨てを繰り返していた。司令官は艦娘をまるで人間のよう扱うところがあるし、心配性なほど作戦を何度も確認する癖があった。でも今回はそれに輪をかけて回数が多かった。

そうして、当日が近づくにつれて、皐月と目を合せなくなっていくた”。どこか遠慮するように視線をそらしているのだ。皐月だけじゃない、艦娘全員とだ。皐月とも、浦風とも、今基地を守っているはずの、鳳翔さんとも。

決定的だったのは、昨日の夜。即位記念式典の晩餐会の帰り道、疲れてうつらうつらしながら、彼に背負われている間のことだ。

——この子には話したのか？

聞きなれない男の声、たぶん月刀大佐だ。

——話せなかった。話せるはずがありませんでした。

今度は聞きなれた声、浜地賢一司令官の声だ。

——そっか、いいのか？

——そう言う大佐はどうなんですか？

——さあ、な……。

その場で聞き返すべきだったかもしれないと、今はすこし後悔している。

次に目が覚めた時には文月に抱き枕にされていて脱出に苦勞した。着替えて司令艦室に向かって、浜地司令官に昨日のことを謝ろうとして、部屋に入る前に足を止めた。開いているドアからは中の様子がかがいが見れた。

開襟の第一種軍装にサーベルを下げ、制帽を小脇に抱えた浜地司令官が見えた。小さなナイフを親指に当てると、その親指を何やら紙に押し付けている。紙を封筒にしまい、デスクの中に仕舞いこむ。心臓がとくと大きく跳ねる。あれは、なんだ？

そのまま浜地司令官が出てきそうだったので、いまきた風を装って司令室に飛び込んだ。互いにおはようを返すだけで終わってしまった。謝れなかった。

彼は何を書いていたのだろう。気になったがデスクには鍵がかけられ見ることはかなわなかった。

《……皐月》

「……なに？」

無線に考えを中断させられる。この声は、川内だ。

《来るとしたらそろそろだよ。司令官に言いたいことはちゃんと伝えただ？》

「……どういうことさ？」

心臓が跳ねた。

《国王の暗殺つてことは同じ船の同じブリッジにいる司令官たちは私たちと比べ物にならないぐらいに危険な状態にいるわ。それわかってる？》

「……！」

《川内さん、どういうことなのです？》

《電ちゃんも聞かされてなかったか》

川内は前を向いたまま平然と言葉を紡ぐ。

《……今回の私たちはある意味》

《——川内》

女性の声が割り込んだ。

《無線に「枝」がついてるみたいだ。周波数変換器スクランブラーパターン・ワン・シックス。スタンバイ、レディ、ナウ》

問答無用で会話を途切れさせた。ただそのための無線。

「……なにを隠してるの？」

皐月にはわからなかった。わからないところで何かが急激に動いている。

その直後に国王の乗っている船のブリッジの窓に真っ白くヒビが入るくらいには事態は急転直下で動いていた。

その数瞬前、気が付いたのは航暉だった。

国王に呼ばれて首を垂れながら話を聞いていた航暉だが、走った違和感に警告を出す。

《笹原、警備無線のノイズ、枝だ》

枝——それは電腦通信に割り込んだ盗聴ラインのことだ。通信に割り込み、盗聴やデータの改ざんなどを行うための横線。糸電話の中間に別の糸を結ぶことをイメージするとわかりやすいだろう。

《国連士官全員身代わり防壁展開、警護班の無線だから対象からは外れてると思うが警戒せよ。艦娘たちとの間にはちゃんとブレーカー噛ませろ。周波数変換器もだ》

《了解》

《はいはい》

警護班の無線に割り込んだノイズ。もしそれが——電腦に介入するためのアンカーだったとしたら。場合によっては航暉も含めた全員が国王に対する暗殺者に仕立て上げられることも可能だ。

人知れず冷や汗をかいていると「それ」が起こった。

「う、あ……」

国王の警備責任者である近衛隊長がわずかに身震いした。全身がけいれんでも起こしたように小刻みに震える。

「あ、が、だ、だだだだ、第7共和政権に、栄光あれっ！」

その屈強な右腕が腰から何かを引き抜きそれを振り上げる。

「隊長っ!？」

国王の右脇に控えていた近衛隊長は体を回し、何かを国王に叩きつけようとする。そこに、航暉が割り込んだ。

右足を大きく踏み込み、国王と近衛隊長の間に体を滑り込ませる。膝を曲げ姿勢を低くしたまま両手で彼の肘あたりを押さえにかかると、全身振り下ろされる腕のパワーを全身に分散させ、近衛隊長の獲物“スタン警棒”が国王に振り下ろされるのを防ごうとする。だが予想をはるかに超える力に航暉は顔を顰め、左肩から嫌な音がした。激痛が走る。

(こいつ全身義体か!)
サイボク

人間の力をはるかに超える鋼鉄の体を相手に生身の体で出力勝負を仕掛けても勝てるわけがない。右手に力はそのままに左腕を抜重、相手の腕の力を横方向に傾け、航暉は彼の懐に体をまわし込んだ。スタン警棒は国王の足元の床にあたり、わずかに火花を残す。

航暉は回転の勢いを左肘に乗せ相手の心臓があるであろう位置に叩き込み素早く引き戻す。ほんとは顎を狙いたいところだが、体格差を考えられると大きく伸びあがらねばならない。次の攻撃が来た時に対応が遅れる。予想よりも固い手ごたえ、チタンか何かで生命維持用の臓器を保護しているのだろう。激痛に歯を食いしばりながら、右脇に相手の右腕を挟み込み締め上げる。体重をフルに使ってその腕を無理な方向にひねっていく。警棒を持つ手が痛みにならずに開く。その隙に警棒を奪い取ると、相手の顔面に叩きつける。

「が、あああああああああああつ!」

悲鳴を上げる近衛隊長に警棒を押し付け続ける。強度を重視した金属を多用する全身義体は生身と比べても電気をよく通し、発熱する。また、脳と機械の体を結ぶ脳に強い電流が流れれば、脳の保護のために自動的に接続が切れる。

悲鳴を上げた時の姿勢のまま近衛隊長が硬直する。脳の保護に入り、義体部への信号が遮断されたためだ。その姿勢のまま地面に倒れ込むと奇妙な沈黙が降りる。それを破ったのは航暉だった。

「全員脳活性をチェックしてください! 敵は脳ハッカーの可能性

性大、誰がアンカーを仕込まれてるかわからない、相互に監視せよ！」
「りよ、了解！」

近衛兵士が慌てて返事を返す。

「電腦ハッカーだとなぜわかる!？」

「警備無線のノイズだ。おそらくそのノイズにスタックスネット型のウイルスが分割して紛れ込んでいた。発動条件がわからない以上何とも言えないが次に発狂するしたら電腦通信の管制キーを持つ隊長格以上か、近衛兵全員だ！」

だがその忠告も間に合わない。ブリッジの出入り口に立っていた近衛兵士がうつろな目で短機関銃サブマシンガンを構えていたのだ。

「全員伏せろー！」

航暉が叫びつつ、国王にタツクルを決めるとそのまま抱き地面に伏せた。

ハイテンポの破裂音と共に大量の鉛玉が船橋を蹂躪していく。航暉が盾にしているのは近衛隊長……彼の金属製の義体だ。それに当たって鉛弾が明後日の方向に跳ねていく。

拳銃の銃声が響いた。直後マシンガンの銃声がやむ。脳漿と血液を大量にぶちまけながら近衛兵士がどうと倒れる。拳銃を持っているのは……マルセロ・ピラール艦長だった。

「私の艦で小銃など使ってほしくはなかったんだが」

素晴らしいながら体を起こした艦長は小さく溜息をつきつつ拳銃を腰のホルスターに仕舞いこんだ。

《司令官さん、何があったのです!?!》

電の焦った通信が飛び込んでくる。

《電腦ハックを使った攻撃を受けた》

《だ、大丈夫なのです!?!》

《司令部要員と国王は今のところ健在だが、状況的にはかなりヤバイ》
《具体的には?》

割り込んだのは川内だ。

《一つめ、電腦ハックのせいで誰が国王を攻撃してもおかしくない。二つめ、国連派遣団の面々は儀礼用のサーベルしか持ってない。三つ

め、俺の左肩が外れて使い物にならない》

「左肩脱臼治せる？」

制御卓を挟んで反対側で伏せていたらしい笹原が声を上げた。

「やってはみるが骨をはめたところでもな戦闘行動は無理だ。戦力としてはカウントできない」

「あっちゃー。ヤバいねこれ」

「ああ、かなりヤバい」

航暉は返事をしながら、気絶していた国王の肩を叩いて起こすと、制御卓の足元まで国王を連れていき、それを盾にするように寝かせた。

「艦長！ この船のコントロールは？」

「今はオートパイロットでコース通り。機関制御システムも異常なし」

「艦隊司令！ 観艦式を中止し至急キャビテ港に入港することを意見具申いたします」

航暉がそう言うと言と後部の配電盤の影に隠れていたスルー海軍の大將が答える。

「なぜマニラノース港じゃないんだ？」

「地理的にキャビテ軍港の方が近いからです。スルー海軍の管理区画ならそのまま護衛体制を取ったうえでキレム国王を安全地帯までお連れすることも可能でしょう！」

「ダメだ、マニラノース港でなければ国王の安全を確保できん」

「なぜですか？」

「キャビテ軍港周辺は第7共和政権のゲリラグループが潜伏している可能性が高い。ここで相手が仕掛けてきたってことはおそらくキャビテに艦隊を入港させそこを襲う可能性が高い！」

「素晴らしいあつているところに笹原が割り込んだ。」

「緊急！ スルー海軍の武装管制制御装置が対艦モードで起動中！」

「はあっ!？」

「スルー海軍のフリゲート艦マニラ級の5番艦だ。その武装が起動

している。真っ先に反応したのはマルセロ・ピラール艦長だ。

「リカルテよりホロ！ 戦闘指示は出ていない！ 武装を解除せよ！」

「こちらホロ！ 管制システムが応答しない！ こちらの指示がすべてはじかれてる！」

混乱した声が返ってくる。その間にも戦闘用意が整えられていく。

「どこだ、どこを狙う気だ!? 艦長！ リンク32の起動許可を！」

ホロのCICの武装管制をミラー出力してください！」

航暉の叫びに反応して、ピラール艦長がうなじからコードを引き出し、制御卓につないだ。直後にブリッジの天井からつるされた液晶に画像が写る。

「左舷真横150メートル……！そこって」

「……皐月だ！」

DD-MT05 “SATSUKI” と表示されるべきマークがT-13に置き換わっている。ホロの武装管制システムは皐月を認識していない。武装管制システムはそれに気が付かないまま迎撃シーケンスを始動、その経過を高速で伝えてくる。

敵味方識別装置応答なし、
距離を保ったまま並走中。
脅威判定レベル4、T-13を攻撃対象として認定、武装選択
——MNB。

「ナトリウム反応式レーザー砲！ まずい！」
MNB Control / ONLINE
レーザー砲管制システム正常接続、
敵情報転送完了、
MNB Laser / MNB
レーザー照射用意よし

「皐月、逃げろ！ 取り舵一杯最大船速！」

浜地中佐が叫び、ブリッジの左舷見張り台へと駆けこんだ。それとタイミングを同じにして、

Fire / MNB
照射

浜地中佐の視線の先で、皐月の足元が、爆ぜた。

その瞬間、皐月は死んだと思った。

その数瞬間、ひびが入って白く濁ったイージス艦の艦橋を見上げながら、皐月は奥歯を噛みしめていた。

敵の攻撃は外から来るものだと思っていた。そして司令部も司令官もそんな風に説明していた。だが、内部からの攻撃がないとは限らないというのを皐月は失念していた。

でも、川内は聞いていたのだろう。だからこそ「司令官たちは私たちと比べ物にならないぐらいに危険な状態にいる」なんて言えたのだ。司令部は「内部からの攻撃を考慮していた」——それがなぜ伝えてくれなかったんだろう？　それがわかっていたら全力で止めたのに。

直線距離300メートル、その先に司令官がいる、3桁キロぐらいなら平気で走れる足と敵を穿つ武器を持っているのに、司令官を危険にしている相手を倒すこともできない。それが悔しくてたまらなかった。正確にはそうなるまでなにもしなかった自分に悔しかった。

《皐月、逃げろ！　取り舵一杯最大船速！》

その思考が途中で寸断される。当の司令官が叫び、リンクを強めていきなり主機を最大に叩き込んだのだ。

「——え？」

何を言っているのかわからなかった。

危険な状態にいるのは司令官たちの方で、ボクはそれをただ見ているしかできないのに。なぜ、慌てて外に飛び出してくる必要があるのだろうか？

そう思う間にも舵が切られ、左へ体は飛び出そうとする。

直後、なんの前触れもなく足元の海水が爆発し、焼けるような痛みが体を襲った。左足が焼けるように痛い。とっさに体を左に倒して

避けようとするが、いきなり艦のシステムが停止した。

ガクンと言う衝撃を伴って、足が海面に飲み込まれていく。バランスが保てない。揺れる視界で司令官が何かを叫んでいるらしいが、なって言っているのかここからはわからない。その思いすら宙に残して、ひっくり返って海水を思いっきり飲んでしまう、むせかえって肺の中の空気が全部出てしまえば、もうそこには海水しかなかった。

(なんにも見えないや……こんなことになるなら謝つとくんだったなあ……)

喉の痛みだけがリアルで海水のレンズの向こうはヴェールの彼方だ。金属の艤装は急速に彼女の体を海に引きずり込もうとし、それに抗うのも億劫だった。

——司令官泣くかな。それは、嫌だ)

その感情が、彼女を一気に覚醒させた。再起動シーケンス始動。出力最大、動力リソースをすべて浮力へ。照射を浴びた左足の浮力発生装置にエラー、停止、再起動。応答が弱い。完全に死んでいるわけではなさそうだが、綿密にダメージコントロールをしている時間もない。

(右だけじゃ浮力が足りない。嫌だ嫌だ嫌だ!)

無駄だとわかってても右手を伸ばす。海面の方へ、明るい方へ。このまま飲み込まれてたまるか!

——死んでたまるか!)

そしてその手を、誰かがつかんだ。

「……ぶはあつ！ 皐月生きてるな!？」

全身ずぶ濡れになりつつも、皐月を引き上げたのは皐月の後方150メートルを進んでいたはずの長月だった。

「……がはっ！ げほっげほっ、けほっ……マジで死ぬかと思ったあ……」

「クラ湾の借りだ。間に合ってよかった」

「……嫌味のつもり？」

「まさか、感謝してるさ」

心底安心したように笑う長月。

「戦術リンクの再接続、できるか？」

「やってみる」

皐月は改めて中継器を作動させると、ノイズが走るものの何とかつながった。

《やっほー皐月ちゃん。生きてるね?》

声は笹原中佐だ。

「死ぬかと思ったよお……司令官は？」

《浜地中佐は身代わり防壁が^{アクティブプロテクト}作動して中継器が吹っ飛んでる。彼自身はびんびんしてるから安心しなさい》

「そっか、よかった。……僕は何を受けたの?」

《フリゲートのMNB、レーザーの照射が掠めたの。浜地中佐に感謝しなさい。彼が中継器吹っ飛ばしてまであなたの艦装を動かさなかつたら、今頃あなたは全身大やけどで海に沈むか、蒸発して消えたわよ》

レーザー——Microwave Amplification
by Stimulated Emission of Radiation、無理足り訳せば「誘導放出による増幅マイクロ波」となるうか、それは目視することはかなわない。マイクロ波自体が

目に見えないからだ。マイクロ波に強い指方向性を持たせ、マイクロ波のエネルギーを対象にあてる、それがレーザーである。

マイクロ波をあてたらどうなるか、電子レンジを使うことを考えればわかりやすい。そこに含まれる水分子が振動し、急激に発熱する。それを応用して作られたのがHERF——高エネルギー電波兵器である。

今回使われたMNB——Maser of Sodium catalyzed Beam——ナトリウム反応式レーザー砲もその一つであり、艦船の自衛用兵器として開発されたものだった。艦橋にへばりつく四角い板のようなものが照射器でその板に無数の発振器が取り付けられている。

フェイズドアレイタイプの照射器は見た目は一切動かず、何の前触れもなく照射を行う。事前に予兆をつかむことは基本的に不可能だ。皐月が何の攻撃を受けたのかわからないのも当然だ、何の前触れもなく見えない電波で味方から攻撃されるなんてだれが予想できるだろう。

《被害状況は？》

「えっと、30ノットまでなら航行できるよ。武装は全部生きてる。レーダーも今のところは無事」

《ん、了解。……長月はそのまま皐月を連れて後方に下がって、今カズ君……月刀大佐がホロの武装管制を落とすにかかっている。安全が確保されるまで後ろで雷ちゃんたちと一緒になさい》

「了解した。……皐月、動けるね？」

「うん」

「よし、いい子だ」

「ボクのほうが姉なんだけど」

「でもお前のほうが危なっかしいじゃないか」

そんなことをいいながら皐月はわずかに出力を上げる。かなり先に司令官が乗っている船が見えた。

「……ちゃんと謝らなさい」

「ん？ 何か言ったか」

「ううん。何も」

「……皐月は無事よ。いま戦術リンクが復旧した。右舷出力68%が限度ね。あと彼女は報告してこなかったけど、彼女の左足、かなり酷い火傷になってるわ。ナノマテリアルが蒸発した時にできた火傷だと思うし、体内ナノマシンも正常に作動中だから、大方の応急修繕が終わるまで、……あと40分は大きく動かすのは無理ね」

笹原の報告を聞きながら浜地中佐は背中を壁に預け床に足を投げ出して天井を仰ぐ。

「そうですか……」

「……こっちは何とかホロの武装管制を落とす。やれやれだ」

「あら、恐ろしく早い。どうやったの？」

航暉はまだ管制卓にQRSプラグを差したままで力なく笑った。

「単純だ。大量のスパムデータとめちやくちやなリーダー情報を俺の使える中継器越しに叩き込んで処理落ちさせて、その間に武装システムの電源を物理的に落とさせた」

「……つてことは今“ホロ”は？」

「文字通りの丸腰だ。……だがセキュリティの割れ方からみてもうイージスシステムにもアンカーが仕込まれる可能性もある。処理落ちで何とかできたのもフリゲート艦でスペックの低いシステムだったことと、リンク32の論理接続が可能だったからだ。イージス艦にアンカーがついてたらどうしようもない」

力なく笑った航暉は艦長の方を見た。

「どこまで武装管制システムに潜られているかわからないが、おそろくほかの艦にもアンカーが仕込まれているはず……今度武装管制システムやリンク32を使ったらおそろくは……」

「……どの艦が暴走してもおかしくない、か」

艦長が苦々しい顔で言葉を継いだ。

「これでこの艦隊の武装はほとんど死んだに等しい。絶対に攻撃してはならない方の目の前でいつ暴発するかわからない武器を使えるわけがない。敵もいい腕してる」

「感心している場合じゃないでしょうが」

非難の声を上げるのは笹原だ。

「そうだな……来たぞ。案の定だ」

レーダーに反応、バターン半島を回り込むように高速で海面を走る物体、数は7つ。同時にコレヒドール島の影からも3つ

「レーダー反射波解析、25メートル級……魚雷艇か？」

「コレヒドール島に魚雷艇……洒落を利かせたつもりかねえ」

艦娘が前線に出るのは現実的ではない。——その前提は

「通常艦の搭載兵装が使用可能である」という前提に基づいている。イージスシステムが健在ならば外の船は近づくと困難になるし、もし近づいてきても艦に乗り移られる前にマイクロ波で「チン」されてしまうため、外から艦に乗り移ることは実質的に不可能だ。だからこそ内部からの暗殺者にだけ警戒していればよかった。

だが、武装管制システムへのハッキングによりその前提が崩れた。通常兵装が使えない状況ならば容易に接近できてしまう。強行接舷し乗り込むことも現実味を帯びてきた。

乗り移られてしまえばサブマシンガンやアサルトライフルなどを使った歩兵戦だ。だがこちらにも電脳ハックを再びかけられれば、抵抗なんてなすすべもなく瓦解するだろう。そうすれば国王やスールー海軍の兵士だけでなく国連士官も殺される。国連はフィリピンの海軍がスールー سلطان 国に寝返った途端に手のひらを反している。見逃してくれるはずもない。……もつとも危険なのはここに駐留していた浜地中佐だ。捕まれば、良くてそのまま処刑、悪くてリンチで惨殺だ。

抵抗しなければ、殺される。

その状況の中で抵抗手段として唯一生きているのが艦の武装管制

システムから外れた兵器運用システム…… 国連海軍水上用自律駆
動兵装指令システム”ただ一つ。

「……くっそ、おびき出されたか」

「で、どうするの？」

「……大将、観艦式を中止しマニラノース港への撤退を」

それを聞いたこの艦隊の司令官がキツと航暉を睨んだ。

「ならん」

「国王の命がかかっているのです。ためらう理由がありますか？」

「このような愚劣な行為に我々が屈するわけにはいかんのだ」

「貴方が守るべきはその矜持ですか？ それとも、この国ですか？」

「両方だ！ ここで撤退すればテロに屈した亡国となり下がる。それだけはさけなばならん。テロに怯えて逃げかえってきたという汚名を国王陛下に着せるわけにはいかん」

航暉はそれに関髪開けずに言葉をつなぐ。

「汚名はいつでも雪ぐ^{すす}ことができます。ですが、失った命をどう取り戻せばよいのです？ 貴方は国王を含めた全員に死ねとおっしゃるつもりですか！」

「死してでも守らなければならぬものもある。それに我々は死なんよ、大佐。君たちは自らの宝刀を抜かずに犬死するつもりかね？」

大佐と大将、二人はにらみ合い、その姿勢のまま航暉が無線を開く。「月刀大佐より国連所属各艦、これより国連海軍派遣団団長、月刀の独断による作戦を伝達する。参加を強制するつもりはないが、諸君らの参加を期待する」

中継器の無線は国連海軍派遣団の参加艦のみにチャンネルが開かれている。

「状況を確認する。現在スールー海軍の武装管制システムが沈黙している。皐月への攻撃で察しているかもしれないが、武装管制システム自体がクラッキングを受けた。それをうけて全武装を凍結してるためだ。したがって、現在艦隊に残された自衛手段は艦の足と、艦娘の武装のみである……そしてスールー海軍はこのまま観艦式を続行する方針だ」

無線の向こうは沈黙したままだ。目の前の大将を睨んだまま航暉は続ける。

「また、所属不明の高速船を確認、数は10、おそらく魚雷艇の類だと思われるが接近中だ。こちらには君たちの武装を除き、接近を阻止する手段を持たない」

なんと皮肉な状況だろう。人類の守護者たる彼女たちにこんなことを言わねばならぬとは。

「これより、停船を促す無電を発報し、それに応じない場合、また攻撃の意思を示した場合、国連軍規約第52条3項に基づき、自己防衛行動”を実施する。状況開始と同時に各艦の安全装置の解除を許可する」

指揮官は時に冷徹でなければならぬ。一時の情に流されれば守るべきものを見失いかねないからだ。

「テロリストと人間の戦いに付き合えとは言わない。司令部の人員など捨て置け」

目の前の大将の顔に朱が差した。

無電が発報される、共通緊急用の周波数での緊急無電。それに返ってくる返事はない。

「これより、自己防衛行動”を開始する。各艦の生存を最優先せよ。繰り返す、各艦の生存を優先せよ。状況開始！」

「貴ツ様ア！」

激昂して月刀の胸倉を掴み、つるし上げる大将。

「この状況で殺されるというのか！」

「死してでも守らなければならぬものもある！ あなたの臨んだ結末だ！ 何をいままさらうろたえる事があるのですか！」

つるし上げられたまま月刀は叫ぶ。ネクタイが食い込み、顔を徐々に赤く染めていく。

「艦娘は、彼女たちは対人用の兵器じゃない！ 貴官らは象を狩り出すのに漁船を使えといっているんだ！ 我々の国連軍の敵は深海棲

艦であってテロリストではない！ 艦娘というハイバリユーウエポンをこんなことで失うわけにはいかない」

「そうやって我々を見捨てるのか、世界の軍などを気取ってさも人類の代表のような顔をして！」

そう言つて大将は航暉を艦の制御卓に叩きつける。

「——っ！」

「世界を守る軍だ?!? 笑わせるな！ 人を殺す痛みも知らない臆病者の集団が、さも崇高そうに世界を守るなどとホラを吹く！ その現状がこれではないか！ それで貴様らは何を守った?!? 国か？ 社会か？ 経済か?!? このフィリピンの荒廃を見て何を守ったと言えなのだ!? この国を、この国の子供たちすら無視して見捨てた国際社会が今更何を救うつもりだ！」

航暉の首を締め、制御卓に頭を叩きつけようにガンガンと振りながら、大将は叫び続ける。

「フィリピンの火を見たか？ 戦火で行く当てのない子供たちを見たか？ その世界しか知らずに兵隊になるしかない少年を見たか?!? それを見てまだ世界を救える英雄気取りでいられるのなら今すぐ世界を救つて見せろUNネイビー！」

直後に腰のばねを使って航暉が蹴りを繰り出した。それを喰らつて数歩ふらつく様に航暉から離れる、首筋を赤く腫らしたまま、立ち上がる。

「……貴方たちに守らなければならぬものがあるように、我々にも守らなければならぬものがある。互いのそれに優劣などなく、互いにそれを守るためには手段を選ぶ余裕はない。貴方たちが社会に認められることを示すために国連の傘を借りたように、我々も我々が守るべきものを守るために全力を尽くす」

そういいながら航暉の脳裏に浮かぶのは年端もいかない少女たちの姿だ。

「人類の危機に立ち向かう艦娘たちは命を懸けて海を駆ける。それを見守るしかできない我々にできることは、その彼女たちの背中を守ることのみ。若輩に過ぎない士官を信じ、命と命令を天秤にかけ、命令

を取って戦っている彼女たちを守ること。それが我々、
水上用自律駆動兵装運用士官が命に代えてでも全うすべき使命で
あり、義務である！」

航暉が右手一本で長剣を抜いた。

「……これ以上艦娘たちを人間のくだらない争いに巻き込んでくれる
な、スルー海軍」

それが月刀航暉の回答だった。

「司令官さん……」

《月刀大佐はああ言ってるけど、私は死にたくない……どうする？》

軽いテンションで艦娘に問いかけているのは笹原中佐だ。ご丁寧
に笹原の視界の映像を添付してきている。後頭部から血を流しながら
毅然と言い放つ航暉の後姿を幻視する。

「……もし、ここで戦わなかったら」

《ほぼ間違いなく、司令官たちはテロリストたちに捕まって、リンチ
じやろうな》

浦風が無線越しにそういった。

《国連軍が手のひらを返したけえ、国連軍への報復戦も兼ねちよるん
じやろう、じゃから月刀大佐は“生存を最優先にせよ”なんて言つと
る。敵の魚雷艇もうちらの意思に関わらず攻撃してくるじやろうな》
《……ボクは戦う》

臯月の声だ。借りていた長月の肩から離れ12センチ単装砲を胸
の高さに掲げる。

《司令部要員を捨て置きなんて命令、ボクは聞きたくない。いつだつ

て司令官はボクたちを信じてくれた。守ってくれた。今だって命を張ってくれてる。それを見捨てたくない》

《……皐月ならそう言うと思っと思ったよ》

《皐月ちゃんを一人で行かせるのは怖いし。魚雷艇なんて蹴散らしちゃうよお！》

浦風の溜息交じりの声に、文月の声が被る。雷の声もそれに続く。

《私も、しれーかんを見捨てたくない》

《戦い方はあるはずだ、やろう》

長月の声にガリガリと頭を搔くのは望月だ。

《マジ面倒くせえ……でも、たまにはいいか》

《ん。……がんばる》

《結局、私たちの出番かあ》

弥生が、敷波が続く。

《……行きましょう、川内さん》

《そうだね。……夜戦じゃないのが残念だけど、やるしかないか》

綾波が、川内がそれに答える

《電ちゃん、どうする？》

川内が横を向く、リカルテを挟んで反対側を航行している彼女は、深呼吸をするように胸を上下させると前を見据えた。

《司令官をここで死なせるわけにはいけません。行きましょう、

川内さん》

《みんな決断おっそーい！》

そういいながら島風はもう舵を切っていた。

《みんなありがとー、作戦指揮は私、笹原中佐が管轄する。魚雷艇の接近を食い止めるよ！ 総員戦闘用意！》

《了解！》

彼女たちには似合わない、非正規戦闘が始まった。

「国連海軍所属艦艇、全艦転進、方位1—9—0、スール—海軍艦艇の間に割って入るルートに乗った」

笹原が笑って答える。それとは対照的に無表情な航暉。

「……命令に変更なし、各艦の安全を最優先し行動せよ」

「了解、各艦の安全を確保するため危険度の高い敵から優先的に無力化する」わね。指揮は私が執るよ、大佐。内部からの横やりだけは勘弁ね」

「わかった。……運が良かったですね、大将殿。たまたま彼女たちが守ってくれるみたいですよ」

航暉が皮肉な笑みを浮かべたままサーベルを仕舞う。鞘にバチンと硬質な音と共に収まったが、その右手はサーベルの柄に添えられたままだ。

「……何がしたい。国連海軍」

「別に、なにも。各艦が生き延びるための最善の状況を作りただけですよ」

頭がガンガンと痛むが、航暉はそれでも背筋をすらりと伸ばしたまま、大将を見返す。その後を笹原が継いだ。

「現状イージスシステムに枝が付き、各艦の武装は使えない。その中で安全を確保するための方法は大きく分けて2つ——逃げるか、戦うか。相手は40ノット近い速度が出るとなると、艦娘単体でも逃げ切るのは難しい。しかも地の利はおそらく向こうにある。その状況下で逃げるといえるのは現実的ではない——きつと彼女たちはこう考えたでしょうね」

笹原が静かに笑った。

「安心してくださいな、大将殿。貴方たちには生きてもらわなければいけないんですよ。国連海軍を内紛解決のために私的利用した海軍のトップ」として国際軍事裁判所へ出頭して貰わなきゃならない。

それまでは貴方の命を保証します」

「……ふ、ふざけるな！ 私的利用だ?!? この国事に参加することは君たちのトップ、国連海軍極東方面隊が承認している！ どこに私的利用の余地があるというんだ!?!」

その激昂を冷やややかに笑って、航暉は管制卓に腰掛けた。

「国連海軍規約第52条第一項『水上用自律駆動兵装は対深海棲艦兵器としてのみ行使されるべき兵装であり、いかなる場合であっても国益や個人の利益の為に運用してはならない』——国益のため、なんらかの攻撃があることが確定的な状況下で観艦式を強行し、国連海軍の参加を強制した時点でこの条項に違反している。また、攻撃があった時点で我々は再三観艦式の中止を進言しているにも関わらず、これを強行したことからも、国益を重視していることは明らかであり、これを守るために艦娘の対人戦闘の強要とも取れる言動は上記の条項への違反である……反論は?」

苦虫を噛んだように黙り込む大将を尻目に航暉は振り返る。

「笹原、第一種警戒体制、状況インディゴブラボー3—4、通常兵器による攻撃からの自己防衛戦闘。敵対艦船への直接的攻撃は最小限に抑えよ」

「了解」

あくまで“自己防衛戦闘”。相手を必要以上に沈めることは許されない。

「さて、頼むよみんな」

笹原はわずかに笑いながら無線を開いた。

《敵速40ノット、まともに並走できるのは島風ぐらいよ。防衛ライ

ンを割られたら対処しようがない》

「なら正面から潰せばいいだけの話でしょう?」

川内はそう言って安全装置を解除した。

「島風、走れる?」

「もちろん、かけっこなら負けませんよ!」

《相手は旧式の魚雷艇だ。追加武装といっても速射砲とかが来ることはまずないはず。ミサイルには気を付けて!》

「はーい、連装砲ちゃん! 一緒にいくよ!」

島風が艦列を飛び出す。それを見送りながら川内も転進、敵の艦列と向き合う。

「綾波、敷波! 二人もお願い!」

「わかりました!」

「久々のフロントかあ……それじゃいつきまーす!」

「くれぐれも射線には気を付けて、打ち合わせ通りだよ!」

島風を追いかけて綾波と敷波が走り出す。

「あの三人のバックアップに入るよ! 電、雷、ついてきて」

「はーい、いつきまっすよー!」

「なのです!」

さらにその後ろから川内と電、雷が飛び出す。

「月型のみんなと浦風で最終防衛ラインを形成、総合指揮は睦月、文月がバックアップ! 魚雷やミサイルの最終防衛頼んだ!」

「はいっ!」

「昼間だけど水雷戦隊の本領発揮だよー!」

相対速度72ノット、時速換算130キロオーバーで向かい合う。2分もかからず双方は交差するだろう。

「月刀司令、聞こえる?」

《島風か、どうした?》

「フリップナイトの使用許可出して! 連装砲ちゃんフルに使わないと間に合わない!」

《了解、月刀大佐より島風、フリップナイトシステムの起動承認、機動制限は600秒だ》

「10分もあれば十分!」

島風のタービンが一段と高い音を響かせる。同時に横を並走して
いた自律砲台3基も加速する。
フリツプナイトシステム起動準備よし

「いくよ! 連装砲ちゃん!」

次の瞬間、彼女の速度は限界を超える。

彼の目の前には鈍重な艦隊の群れが見えていた。

イージス艦も武装が使えなければただの船だ。接近すれば乗り移れるし、短魚雷で沈めることもできる。

「さて、そろそろ頃合いかなあ?」

魚雷艇の船室から上半身を乗り出して赤外線誘導式のロケットランチャーを構える。こんな内乱を引き起こした張本人である国王とやらに与する者たちだ。引き金を引くのにあまりためらいはなかった。

そのサイトに少女の姿を捉えるまでは。

艦娘というのを初めて見るわけではなかった。でもやはり奇妙だ。露出度の高い服装のシルバーブロンドの長髪をなびかせながら向かってくる少女をみてとつさにトリガーから指を離した。

きれいだと思った。

海の上をスケートでもするようにかけていく。スケートをするようにと言っても生でそれを見たことはなかったけれど。それは優雅で美しいと感じた。戦場にいるというのに奇妙な間隔だった。

「……でも、敵だ」

子供であつても、敵だ。少女であつても、敵なのだ。それに油断し

て何人も仲間が死んでいったではないか。爆弾を抱えて泣きながら飛び込んでくる子供たちを見てきたではないか。

改めてトリガーに触れる。

こんな世界は狂っていると何度叫んだだろう。それでも、生き残らなければならなかった。今回も同じだ。生き残るためには、撃たねばならない。

「…………ごめんな」

謝るようにしてトリガーを押し込んだ。

噴き出すブラストマス、それで反動を帳消しにして飛び出した弾頭は白い線を引いて前へ伸びていく。その白い少女の後ろからいくつかの線が伸びる、直後に放った赤外線誘導式のミサイル弾頭はふらふらと進路を変え、明後日の方向に向かい、爆発した。

「フレアデイスペンサー！」

白い少女の後方に同じように海面を進む少女たちが見えた。レーダースコープでそれを見ると信号銃のような短い筒を空に向けて掲げているのが見える。

直後に乗っている魚雷艇の真横に水柱が立った。近い。

魚雷艇が急激に進路を変える。砲撃の水柱が艇を追い立てる。左へ左へ。

「案外精度低いのか…………」

艇への直撃弾はゼロ。時速40ノットで動く物体に砲弾を当てるのは難しいとはいえ至近距離ともいえる距離で直撃弾が出ないのは練度が低いということか。

「…………いや、違う」

彼は直後に考えを否定する。常に右舷側20メートルほどに着弾している。そこを狙っている…………？なぜだ。

直後に響く異常接近警報。慌てて左舷を見ると味方の魚雷艇の舳先で顔を青くする同志の姿が見えた。

「まさか最初からこれを狙って！」

慌てて右に舵を切るが、かわしきれない程度には接近しすぎている。互いの舷をこすりつけるように40ノット同士の鋼鉄の塊が衝

突した。船乗りならば絶対に聞きたくない鋼鉄がひしゃげる音が響く。

《気づくのおっそーい！ 早く逃げないと沈んじゃうよ！》

真横で足を止めることなく白い彼女は叫ぶ。そうして彼女は急いで魚雷艇から離れるように走り出す。それを追って銃撃が走る。

彼は慌てて武器をかなぐり捨てて、海面に飛び込んだ。膨張式のライブベストが海水に反応して膨らんだ。それを頼りに船から離れるように泳ぎだす。沈没の渦に巻き込まれては一緒に海底に沈みかねない。

沈んでいく船を安全に眺められるころにはもう白い少女は遥かに後方で、仲間の魚雷艇と格闘戦を繰り広げるかのように縦横無尽に駆けている。四方八方からの銃撃をかわしながら海の上を駆けていく。

「……ははは」

なぜか笑いがこみ上げた。周りには同じように船から逃げ出した同志が浮いている。

「あの銃撃に俺たちを巻き込みたくなかった……っていうのは、ありえないか」

それでもいつの間にか危険域から自分たちは外れていた。それが偶然なのかそうでないのかはわからないが、その幸運に感謝するしかあるまい。

「防水無線は……生きてるな」

彼はとりあえず、生き残るための方法を思案し始めた。

「短魚雷数2！ “イロイロ”が射程内！ 浦風さん！」

「まかしとぎー！」

睦月が対潜ソナーのノイズをもとに魚雷の位置を割り出して叫ぶ。それに呼応して浦風が青い髪をなびかせて走り出す。同時に笹原中佐の中継器を通して睦月のレーダー情報が必要な情報だけをクリーンナップしたデータがリアルタイムで送られる。左手の機銃を航行位置に合わせて叩き込むとすぐに水柱と共に消えさった。

「うちの手にかかればこんなもんやね。……睦月、魚雷はもうないね？」

「今のところはないかにやあ。文月、対空の方は大丈夫？」

「問題ないよお。ほとんど雷ちゃんたちのフレアで誤作動起こしてふらふらになってるから、短距離の赤外線式誘導ミサイルしか持ってきてないんじゃないかなあ？」

「そっか、ならええんじゃないが……それにしても睦月、よくパツシブソナーだけでここまで鮮明に位置が特定できるもんじゃのう」

「えへへ、もつともーつと褒めるがよいぞー！」

「浦風さん、あんまり姉を調子にのせないでくださいね」

「あ、如月ひどーい！　ってなんで長月も頷くの!？」

どこか戦闘中だが気の抜けた会話が繰り広げられている。

「こんなんで、いいのかな……？」

対空機関砲を空に向けてそう疑問を口にするのは弥生だった。

「いいんじゃない？　アタシらは艦隊の防衛がメインだし、睦月もみんなもあんな風にしてるけどちゃんと哨戒してるし」

めんどくさそうにそう言うのは望月だ。

「でもちゃんとやらないとだめだよ？　みんな気を引き締めて〜！」

素晴らしいながら魚雷艇から距離を取りつつ航行を続けるイージス艦の艦橋を見上げる文月。それに気が付いた皐月が軽く目を伏せた。

「やっぱり気になる？」

「司令官もあそこにいるからねえ、気にならないわけないんだよ」

文月はどこか儂げに笑いながらそういった。

「気になるけど、心配はしてないかなあ」

皐月が目で促すとどこか照れたように表情が変わる

「うちの司令官は結構やんちゃだから、ちゃんと見てないとたいへんなんだよお？ 書類整理は苦手だし、そのくせ誰かを頼ろうとかしないのに、いつの間にか周りを乗せて何とかしちゃうし……だから今回も司令官なら何とかしちゃうんじゃないかって思うんだあ」

文月はそういいながら前線を見つめる。

「だから大丈夫だと思うよ、皐月ちゃん。きつと大丈夫」

文月は笑ってみせるとすぐに表情を引き締める。

最前線で水柱が立った。

「みんな早くしないと全部片づけちゃうよ！」

「ふんっ、無茶いわないですよ！」

「島風さんが早すぎるんですっ！」

軽く言い合いをしながらも綾波と敷波、島風は魚雷艇の間隙を縫うように走り回る。

彼女たちの役割は二つ。一つは相手の射線を翻弄し、正確な射撃を差せないこと。二つ目は魚雷の発射位置に相手を固定しないこと。

飛び出してくる対戦車ミサイルを信号銃で混乱させながら綾波は主砲を魚雷艇の足元……喫水近くの海面に向け、発砲。水柱を立ち上げて視界を遮りつつ反撃が来る前に後退する。

「さすがにこの数を相手にするのは厳しいですね……」

「とか言いながら、まだ被弾ゼロじゃんか」

「銃口を見てればちゃんとして避けられますよ、敷波もよそ見してないでほら動く！」

三基の自律砲台のポジションを目まぐるしく入れ替えながら魚雷艇を翻弄していく島風の飛び道具っぷりは放置しておくとして、綾波

と敷波は人間と同じサイズの体とそれを支える艤装を駆使して25メートル級の魚雷艇を相手に戦わなければならぬ。まともに砲撃したらおそらく乗組員ごと吹き飛ばしてしまうし、かといって攻撃しなければ司令官が危ない。乗り込んで無効化できるような器用なこともできないし、そもそも高速移動を続ける魚雷艇と接触して吹っ飛ばすのは艦娘の方である。いくら艦娘と言っても物理法則には抗えない。

つまり、艦娘は魚雷艇に対してまともな攻撃手段を持たない。

当然だ。艦娘は“深海棲艦との戦争のための兵器”であって、対人兵器や通常艦船用の兵器なんて積む必要がないからだ。電と雷が背負っている30連装噴進砲に詰められたウインドウ弾と信号弾、そして笹原中佐が用意した信号銃が唯一のまともに使える武器である。……どれもミサイル攪乱用の自衛武器に過ぎない。

「だからって、相手が撤退するまで足止めしつつ逃げ回って無理がないかなあー！」

「でもこれぐらいしかないでしょうっ！」

綾波はそういつつ、その場で回転、後ろから綾波を狙っていた兵士を脅かすように主砲を発砲、衝撃波で船体を揺らしにかかる。

「綾波も何気に飛び道具よね……」

「そんなことないですよっ！」

「そんだけ動き回ってどの口が言うんだか……」

綾波はその間にも綾波の背中を守るように飛び出し、綾波が元々狙おうとしていた船の鼻先を掠めるように弾を低く放つ。慌てて舵を切りすぎたのかありえない傾きで逃げ出す魚雷艇、おそらく船体が歪んだだろう。中で誰かが頭を打ってないことを願うばかりだ。

「——敷波！——」

「えっ？」

綾波が叫んだ。おどいて綾波の方を見る。

——幸か不幸

かその時の視界の端にわずかな影を捉える。空中から飛び込んでくるそれ見て、敷波の喉は変な音を出した。

（——対戦車ミサイルっ！ やばっ！）

慌てて姿勢を倒しつつ全力で前に跳躍、フレアを撃ち出す余裕もない。逃げ切れない。

直後、敷波の目の前、綾波が目を見開く中で、そのミサイルが弾ける。

「——っ！」

とつさに顔を腕で庇った敷波は爆風で身体が浮くのを感じる。全身が熱いが、それを感じる余裕があることを奇妙に感じる。

《もーっ！ ちゃんと気を付けてよね！》

無線が飛んできてまだ生きていることを悟る。足が海面につき、衝撃でかなり沈み込んだ。スカートの縁が海面をなぞっていく。

「……直撃したと思ったのに」

《フリップナイト展開中じゃなかったら間に合わなかったよー？ もう、しつかりしてよ》

なんとか薄く開けた瞼の端に島風が “連装砲ちゃん” と呼ぶ自律砲台が一基跳ねて戦線に戻っていった。

フリップナイトシステムは一時的にはあるが島風の速力や自律砲台の運用能力を底上げするシステム群の総称だ。当然反動もあるが自律砲台を複数活用するには必要なシステムでもあった。

自律砲台はその内部に航行用の推進部、自分の位置や敵艦との距離を測るための各種センサやジャイロをもとにモーターなどをコントロールする制御部、そして主砲となる攻撃部を組み込んでいる。島風はこれを3基同時にコントロールし続けなければならない。いわば自分と同時に3つの操り人形を動かしながら戦えと言っているようなものだ。ふつうはできるはずがない。事実、島風の前から自律砲台のテストモデルを運用していた天津風は1基で精一杯だった。出力の面でも、情報処理能力の面でも負担が大きいのだ。

それを解決するために開発されたのがフリップナイトシステムである。やっつてゐることは至極単純、主機の出力を無理矢理全開まで引き出して自律砲台が必要な出力を確保、情報処理は司令官の中継器経由で国連海軍のコンピュータとリンクさせ、そっちに負担させる。タイムラグが発生する分は予測位置で何とかするしかないなど改善点は

多いが、複数の自律砲台をフルに使うにはこうでもしないと使えないのだ。

島風はこれを駆使しつつ、島風自身も高い機動力を駆使して戦闘を推し進める、攻撃性の高い駆逐艦のテストモデルとして誕生した。

その面目躍如で敷波を狙ったミサイルを自律砲台で撃ち落としてみせたのである。

「……なにがなんだか」

「でもパフォーマンスには十分だったらしいですね。……攻撃が引いていきます。司令官」

《ん……こちら国連海軍派遣団、スールー海軍艦船に攻撃中の魚雷艇群に告ぐ。今すぐ戦闘を中止し撤退せよ。これ以上攻撃をつづけるようなら、こちらもそれ相応の攻撃をしなければならなくなる》

笹原の無線を最後に攻撃が止んだ。最初に二隻沈められ、残りの艦船も人死はないが、攻撃はことごとく食い止められこれ以上戦闘を続行してもイージス艦に接近できないであろうことを察しているはずだ。

まともにやりあっているのは島風・綾波・敷波のみ。

もし「艦娘側が全員でかかってきたら」。

その通信がはったりだとしても、それを試すにはリスクが高すぎる。

《5分間の猶予を与えるわ。その間に海に浮かんでる乗員を救助して転進なさい》

その通信を受けたあと、魚雷艇の一隻から旗が揚がった青、白、赤の横ストライプ、国際信号旗「チャーリーC」、それ一枚で掲げられた時の意味は「肯定、イエス」。

《こちら国連海軍派遣団司令部、状況終了。各艦戦闘行動を停止、一時

後退せよ》

笹原がそう言うのと敷波は胸をなでおろした。

戦闘開始からまだ10分も経っていない、なんとか誰も殺さずに済みそうだ。

それだけが救いかもしれなかった。

状況終了を宣言して、一番ほっとしていたのは司令部の要員かもしれない。

湾から逃げるように消えていく魚雷艇を見てから、隣の大將を横目で見る。

「……なぜ拘束しない？」

「拘束したとして、收容できるのはこの艦隊のみですが、よろしいので？」

そう言うのと黙り込む大將。

「……カズ君、そろそろ頭の怪我、止血しないとまずいと思うよ」

笹原がその声をかけると、航暉は僅かに笑った。

「そんなにヤバいか？」

「ヤバいね。少なくとも軽く消毒して包帯巻いてなさい。制服の後ろ身が血染めになってるよ？」

そういう会話をしていると救急キットが笹原に渡された。近衛兵の一人が取ってきてくれたのだ。

「ありがと。……動かないでよ、軽く髪も切るし消毒液大量コースなるから」

「んなこといいから艦娘たちを」

「そっちはもうケンちゃんがやってる。中継器が吹っ飛んでるとはいえ、無線くらいは何とかなるからね」

浜地中佐が軽く右手を上げた。それを見て航暉は苦笑いだ。

「……俺の出る幕がないな」

「当然、あんたは人を抑えるのが仕事でしょうが。実働は部下を信用してなさい」

テキパキとはさみで邪魔になりそうな髪を切り結構パツクリいつている傷を見て、一瞬眉をしかめた。

「……あんたこれ痛くないの？ 操作盤の枠の部分で肉ごと抉られてるんだけど」

「気になりはするがな」

「……あんた早死にするわよ」

「よく言われる。……っ、傷よりお前の消毒の方が痛いんだが」

「あんたの感覚はおかしい。これくらいは我慢しなさい」

半液体の消毒キットが傷口に押し付けられる。その上から滅菌ガーゼが当てられ包帯で固定すると、彼女は航暉の肩を叩いた。

「電ちゃんたちが心配してたよ、無茶が効く学生時代はもう過ぎたんだからもっとどっしりと構えた方がいいわよ」

「なんでこんな時に電が出てくるんだ」

「さっきの『演説』、私の視覚情報付で転送してたから、かな?」

「……余計なことをしてくれる」

航暉は思いつきり顔を顰めると頭を掻いた。

「こら、包帯巻いてるからあんまり乱暴にしない!」

「どうりで全艦の反応が良かった訳だ、勘弁してくれよ」

「でもおかげで相手の脅威をしつかり回避できたでしょう?」

「馬鹿野郎。お前らしくねえ、もつと頭をまわせ笹原。この船にプレスが乗ってるの忘れたか?」

「だから艦娘たちを戦線から遠ざけなければならなかったとでも言うつもりかな?」

皮肉に笑って笹原は航暉に顔を近づけた。

「カズ君の作戦当てて見せようか? ……艦娘しか動けないっていう想定外の状況下、その中で『自己防衛戦闘』とだけ指示して艦娘たちをわざと混乱させる。そうすることで艦娘たちの持っている数の利や戦術ネットを使った効率運用の利点を消失させる。もちろん護衛は困難を極める。最悪の場合このリカルテの砲システムを初期化、手動で再起動してこの船だけでも離脱させる」

笹原は航暉の頭を腕で抱き、逃げられないように固定した。

「プレスの『射程』から逃げてから改めて戦術リンクを使って魚雷艇を追っ払う。こうすれば艦娘の戦闘はカメラに残らない。そしてこの指示の遅れに対する責任は団長である月刀航暉大佐に集中する。』」

「わざわざ、月刀の独断による作戦を伝達する」な

んで大仰なことを言ったのは責任の所在を明らかにしておくためでしょう？」

笹原の目は笑っていない。冷たく冷えたまま航暉を至近距離で見つめた。

「そうしてあんたはスールースルタン国政府要人などの民間人が危険にさらされている状況下で、”まともな戦闘指揮を放棄した自分勝手な指揮官”として袋叩きにあう。艦娘たちに向くはずの非難も”戦闘指揮のせいだ”ということにしてカズ君が引き受ける。極東方面隊は世論をかわすためにも何か制裁を施すでしょうけど、あんたはそれで艦娘たちを守ったという自己満足だけで十分におつりがくると思ってる」

そこまで言って笹原は笑ったまま腕を放す。

「たしかにカズ君ぐらい電脳が使えるればそれも可能よね。何せ30機近くの艦載機を直接コントロールできるぐらいの破格の情報処理能力を持つてる、リカルテの砲への介入もその管制卓を使えば可能でしょうよ。でも——”あんたの部下はどうなるの？”」

笹原はそう言うのと初めて表情を崩した。怒気にも近い表情が走る。

「電ちゃんにも話してなかったんでしよう？ あの子はあんたに指揮官としての絶対的な信頼を置いてる。それをこんなことで全部ふいにする気だったんでしよう？ あの子はあんたが袋叩きにあつて軍を去った後も戦い続けなきゃならない。あの子はいつまた指揮官に裏切られるか怯えながらこの先も戦い続けなければならなくなる。そのくせあんたは護衛に失敗しかけた部下の失態を庇う形になるから、あんたにその怒りも恨みも向けることができないまま、出口のない後悔だけがあの子たちに残される。その後には私たちがあの子たちに真相を話したとしても”彼女の指揮官としてのあんた”はもうどこにもいない」

自分勝手なものよね、と笹原は吐き捨てた。

「あんたはいつつもそう。非常事態や緊急事態には恐ろしいぐらい頭が回るし、平気で自分の命を賭ける。命もあんたが大切にしたいはずの仲間との関係も、全部まとめて掛け金溜めに突っ込んで勝手にゲー

ムを進めようとする。それで残されたあんたの仲間をかえりみずに進んでいこうとする。それで残される女の気持ちを考えたことないでしょ？ 男ってばみんなそう、女を守ったっていうくだらないヒロイズムに酔ってる」

航暉はそれを無表情に聞いていた。

「そろそろ気がついたらどう？ あんたの部下はあんたが部下を心配する以上にあんたのことを心配してるよ」

「……それでも、だ」

航暉は無表情なまま静かに口を開く。

「自己満足だろうがなんだろうが、それであの子たちを守れるならば、な」

「……やっぱりバカだわ、あんた。女の気持ちなんて一つもわかってない」

「そういう笹原も男の気持ちなんてわからないだろう？」

「今も昔もわかりなんてしないわよ、ひたすらに平行線ね」

「ねじれの位置にないだけましか」

「勝手に言ってる、男子」

笹原はそう言うのとニカリと笑った。

「あ、今のも全部転送してるから」

「……テメエ！」

「司令官さん……」

電はイージス艦を右舷に見ながら接近していく。

「……結構熱く思われとるのう、電ちゃん？」

横に並んだのは浦風だ。クスクスと笑いながら浦風は電の肩を叩いた。

「男っていうのはそんなもんなんかのう……うちの浜地中佐もあんなじゃけえの。くだらないヒロイズムか、言えて妙じゃな」

「……そうでしょうか？」

電が顔をそらすと浦風が優しく笑った。

「男も女も、もちろんうちらも、言葉にせにやわからんことがよけえある。この世界を七日間で作るような神様も言葉を使って世界を作り上げていったそう。光も影もこの水も空も、神様がそう言葉にして作り上げたものなんじゃと。神様でもそうなんじゃ、うちらも言葉にしないといけないことはたーくさんあるじゃろう」

浦風は電と並走しながら笑った。

「電はちゃんと司令官に言いたいことは伝えちよる？」

電はそれを言われてさらに目線を沈めた。

「……自分の気持ちもわからないのです、何を、伝えたらいいやら……」

「それならそう伝えればええよ。言葉にすることで思いつくこともある。気が付くこともあるじゃろう。司令官は司令官じゃし、電は電やけえ互いにわからんこともあるじゃろう。それでも言わなきやいけんこともあるとうちは思うんよ。それでけんかになることあるじゃろうし、傷つき、傷つくこともあるじゃろう。でもそれでも言葉にせんにゃあ、いかんのお」

目を細める浦風は後ろを振り向いた。

「ほれ、臯月もそうじゃぞ？」

「な、なんでいきなりボクの名前が出てくるのさ？」

「あんだけ司令官司令官言っておいてちゃんと司令官に告白したんか？」

「こつ……！」

「瞬間湯沸かし器並みの速度で真っ赤になるようじゃあ、まだまだ先かのう……？」

「な、ななななな、なんでし、司令官とはそんな関係じゃないし！」
「両想いのくせに何をいつちよるか、さつさとくつつけこの臆病もん」
「だから……え？」

皐月の反論が途中で止まり、浦風は割と本気で頭を抱えた。

「……お互い鈍感すぎる。こりや大変じゃのう。皐月、悪いことは言わん。急がんと鳳翔さんに司令官とられるけえそろそろ本気出しんさい」

「は、え……？」

「忠告はしたけえ、うちはもう知らん」

「ちよ、ちよつと待ってよ。浦風、どういことなのさ！」

「自分で考えんさいや！」

そう姦しくなるイージス艦左舷側だがイージス艦を挟んだ右舷側では川内たちが複雑そうな表情をしていた。

「……あれだけわかりやすいカップルもないのにくつついてないんだね、皐月と浜地中佐」

「……そうよね、雷も恋のキューピットになれるかしら？」

「やめといたほうが、いいとおもう……雷の場合、そのまま即死させかねない」

「どーゆー意味よ弥生！」

溜息をついたのは弥生だ。その後ろを睦月と如月、望月がついていく。

「別に……。それより、川内さんは今回のこと、聞いてたんですか？」
「……昨日の夜に聞かされた。司令部は、最初から艦娘と通常艦艇の戦闘を失敗させるつもりだった。もちろん誰も沈めない程度には戦うけどさ。それでプレスには“人間相手に戦っても艦娘は戦えない”って示すつもりだったんだ。勿論、艦娘に触れてる軍部の人間は気が付くし、艦娘たちも気が付くと思うけどね」

川内はそう言つてどこか寂しそうに笑う。

「それが結果的に艦娘が人間同士の戦いに巻き込まれることを防ぐなら、つてことで司令部はそれを推し進めたんだ。結局うちの中佐がそのシナリオをぶち壊したけどね。艦娘が戦わなきゃ司令官たちも死んじゃうかもしれないだもん」

「……もしイージス艦がいつも通り使えたら？」

「艦娘への指示が遅れて混乱している間にイージス艦が魚雷艇を攻撃して戦闘終了。イージス艦の方が対人攻撃には使えるというのを見せつけて終わりにする気だっただろうね」

川内のその言葉を最後に沈黙が落ちる。皐月たちの喧騒が沈黙を際立たせた。

「決めた。私、一度しれーかんを怒る」

雷のその宣言に噴き出したのは川内だ。

「それはいいね。すっかり怒ってあげなきゃ……あれ？」

その時、緊急の通信が入る。発信元は——国連海軍極東方面隊南方第二作戦群司令部。

「——深海棲艦反応!? どこだ!?!」

航暉の中継器に叩き込まれた緊急無電は航暉と笹原の舌戦を中断させるには十分だった。それに真っ先に反応したのは浜地中佐だ。

「ルバング島沖西方40キロ、マニラ湾の入り口まで100キロ切ってます!」

「哨戒は何をやったんだ?……CTCは?」

「たった今出撃要請でした。作戦ナンバーOEDC—082103
0021S、優先事項です」

「OEDC? 民間人防衛緊急戦闘ってどういうこと?……つてまさか」

「そのままかだろうな。さっきの魚雷艇だ。ほぼ間違いなく深海棲艦との交戦エリアに入ってる。——国連海軍派遣団各艦へ、深海棲艦の存在を確認、民間艦船が巻き込まれている可能性が高い。各艦改めて状況を報告せよ」

航暉の声にすぐさま無線が返ってくる。

《こちら川内オールグリーン》

《電、グリーンなのです》

《雷もグリーンよ!》

《睦月はグリーンなのです!》

《如月もいけるわよー?》

《弥生、いけます》

《望月もいけるよーつと》

《文月はおっけーだよ》

《長月だ。いつでもいいぞ!》

その後少し間が空いた。

《綾波です、ちよつと弾薬が厳しいです……》

《あたしも……ってというか島風もだよね?》

《さつきフリップナイト使っちゃったし、ちよつと厳しいかも》

先ほどの前線組は確かに厳しいかもしれない。ここで負担をかけるわけにもいかない。

《浦風じゃ、うちはいいんじゃが……皐月は厳しいからう》

《そんなことない! ボクだって戦える!》

その声に航暉は言葉を切る。その先の言い分を聞くためだ。そこに割り込んだのは浜地中佐だ。

「皐月、無茶するな」

《無茶なんかじゃない! 信じてよ司令官っ!》

継ぐべき言葉が見つからず、浜地中佐が黙っている間にも臯月は無線に叫ぶ。

《ボクの司令官じゃないか！ ボクは司令官を信じてる！ 今回の作戦だってボクたちのことを守ろうとしてくれてたんでしょ！ わざわざ血判状まで書いて戦ってたんでしょ！ ボク見てたんだよ……！》

今朝、浜地中佐が机に仕舞っていたもの……臯月にはなんとなくわかっていた。わざわざ血で拇印を押した書簡。そこまでの決意をして何かをしたためなければならぬほどに司令官は思い詰めていた。なぜそうなる前に言葉にしなかったんだろう。なぜ、そうなる前に止めなかったんだろう？

《そこまで司令官が守ってくれようとしてるのに、ボクは、ボクはまだなにもできてないじゃないか！ そんなの嫌だ！》

「……臯月」

《一度でいい！ 信じてよ司令官！ 僕にあなたを守らせて……！》

声の最後は無線のノイズに消えていく。浜地中佐は強く握りこんでいた拳を一度開き、改めて強く握る。

「……月刀大佐、臯月に参加許可を」

「感情に当てられるな、浜地中佐」

「責任はすべて私が負います」

「どうやって。手遅れになった後じゃ、責任は取りたくてもとれないぞ」

「沈ませなければいいんでしょう!？」

怒気を通り越して、殺気。そこまでの気迫を込めて航暉を睨む。

「私の、私の部下だ。その責は、いかなる場合であってもその上官であ

る私が負う。誰だって沈ませない、それは私が司令官になってから唯一曲げてこなかった信念であり、義務であり、意地だ。今回だって変えない、変えさせない」

「――浜地中佐」

横から投げられた中継器を浜地中佐が慌ててキャッチする。

「貴方の中継器、吹っ飛んでるんでしょ？ 使いなさい。――カズ君、民主的かつ紳士的にいきましよう？ レデイの意見を足蹴にするのもあれだし、彼の意見も尊重しなきゃ。私は浜地中佐の意見に一票、2対1、わかるね？」

「ヒロイズムに酔ってるなんて言う割には感情的に動くんだな？」

「あら、そう言うところをくだらないと思いつながらもそれを支えてしまうのが女心つてもんよ」

「ダブルスタンダードって言わないか？」

「人の心はコンピュータじゃないからね、それぐらいの論理飛躍は日常茶飯事でしよう？」

航暉があきれたように笑いながら制帽を被りなおす。

「……綱渡りも大概にしろよ、*「夜鷹」*」

「あんたにだけは言われたくないわね、*「飛燕」*」

航暉は中継器の出力をわずかに上げる。全体を俯瞰するように意識が飛ぶ。

「月刀大佐より国連海軍派遣団全艦、これより状況を開始する。綾波・敷波、島風と弥生・望月はそのままイージス艦の護衛。残りの艦は即時転進方位2―1―0。民間人の安全確保を最優先としつつ、深海棲艦を退ける。総員かかれ！」

《了解！》

状況が、動き出した。

小さな船が8隻、海の上を進んでいく。

「どうしてあの無線に応じたんだ？」

「……ここで死んでも意味がないと判断したからだ」

その男「ヴォルテル」は苦々しい表情をして続ける。

「あの状況下で突っ込んだとして我々は何を得る？ 全員が犬死しかあるまい。まだ『彼女たち』は本気を出していないのは明らかだろう。あそこで無理に突っ込んで彼女たちに殺されたいか？……殺されるならまだいいだろう、王国軍に捕まったらどうなる？ 不利益しか生むことはないだろう」

「だが、戻ったところで俺たちはどうなるんだ！……どちらにしても終わりじゃねえか。ならせめて名を残さねばならないだろうが！」

「未成熟な人間の特徴は理想のために高貴な死を選ぼうとする点にある、それに反して成熟した人間の特徴は理想のために卑小な生を選ぶ点にある……そんな言葉を聞いたことはないか？……理想や正義など時によって変わっていく。なら、俺たちがすべきは俺たちが正義となる時まで矮小な生を耐え抜き、後に正義の種を残すことじゃないのか？」

「それは臆病者の言葉だ！ 臆病がうつる！」

「臆病だろうとその死の意味があるのか？ あそこで死ねば王国軍を活気づけるだけだ。そのために死に行くのも馬鹿らしくはないかね」

ヴォルテルはそう言ってエンジンのスロットルをわずかに絞る。

「……黙れよ臆病者が」

「その臆病者に対して銃を突きつけなければ物も申せないのか？」

ヴォルテルは僅かに笑う。

「……艦娘とやらの指揮官、いい腕をしていたな。わざと俺たちを泳がせた。こうやって仲間割れをすることをおそらくわかって泳がせ

たはずだ。手を汚さずに相手を始末できるし、そうはならなくても、この船を追いかけていけば本拠地の近くまでご案内だ」

「それをわかってなぜ舵を切らない！」

「……なあ、なぜ俺たちがこうやって魚雷艇で動けるか考えたことはあるか？」

「『ホルデン』がイージス艦の武装を潰して」

「違う。その前だ」

ヴォルテルはどこか柔和な表情を崩した。

「もし今ここで海原に飛び出してみろ、深海棲艦に捕捉される可能性が高くなる。これ以上陸地から離れたら深海棲艦に捕捉されてから陸に逃げ込むことができなくなる。そうなれば」

死ぬしかないよな？ とヴォルテルが笑う。

「この艦娘に攻撃をしている以上、もう俺たちは見殺しにされても文句は言えないんだぜ」

「だから適当に海岸線をドライブする気か？」

「それ以外に方法があるか？」

その直後、ヴォルテルは右肩に鋭い痛みを感じる。撃たれたと認識するまでに、数瞬の時間を要した。

「……こんな臆病者が指揮官だったと見抜けなかった自分に反吐がでる」

男はそう言ってヴォルテルを押しのとけると舵を切った。沖合から改めてマニラ湾にアプローチするルートだ。

「後ろからだ」と護衛艦を数隻抜かなきゃいけねえ、まったく酷いところまで逃げてくれたものだ」

男に合わせて船団は北へ、沖合の方へと舵を切る。島影が小さくなるころ、海の端が瞬いた。

「……………」

その瞬間まで何があったかわからなかった。

本当に深海棲艦のテリトリーに足を踏み入れたことなんて、わかるはずがなかった。

「非常用位置指示無線標識装置電波、キャプチャーですつ！」

睦月が叫ぶ、電波の方位と強度から大体の位置を特定して、全員にデータリンク。相手の位置を共有する。

「……思いつきり深海棲艦の予想進路上じゃね」

浦風がそう言うのと皐月が頷いた。

「後5分つてところかな？」

「おそらく8分半というところだと思っうのです！」

電の声を受けて航暉の声が割り込んだ。

《隊を分けるぞ。第一小隊は川内・電・雷・睦月・如月は敵の予想進路上へ展開、残りの皐月・浦風・長月・文月は第二小隊で浜地中佐の指揮下へ、ELTの発信元へ向かってくれ》

「了解！」

隊を代表して川内が答えると相手の予測位置へ向けて方位を微調整、そこに電たちが続く。その後ろから皐月が艦列から飛び出し、文月たちが続く。

文月が皐月の横に並んだ、その後ろに浦風と長月が並ぶ、複縦陣で主機を吹かし、相手へと向かって走っていく。水平線ぎりぎりあたりでかすかに何か光った。海面の反射にしては赤みが強い。それが皐月たちの前方まだ3キロほど先だろうか……そこに水柱を立てる。

「……急ぐよー！」

「うん！」

前へ、前へ、前へ。主機は唸りを上げ続け体をさらに加速させる。

「——見えた！」

皐月の目が海の上を必死に逃げ回る艦を捉える。同時に皐月たちも敵の射線に入ったのだろう。浦風の横にも水柱が立った。

《皐月、状況は？》

無線の声は浜地中佐だ。

「目視できるのは魚雷艇6隻！ 一隻は火災発生中。船員は海上に投げ出されてる感じみたい！」

《なら魚雷艇が投げ出された人員を回収できるまで時間を稼ぐ。……皐月、文月は敵本隊へ向けて転進、浦風と長月で魚雷艇を護衛しろ。魚雷艇からの攻撃も考えられる。護衛対象も十分に注意しろ》
「魚雷艇を誘導してどこへむかわせればええ？」

《……とりあえず、射程外に誘導し、キャビテ軍港へ移送しろ。国連海軍警邏隊に身柄を引き渡す》

浜地中佐がそれを言った直後、その無線に銃声が乗った。

「移送だと？ なぜ我々に引き渡さない！」

制帽が吹き飛ばされ、こめかみに血の筋をたらしつつ浜地中佐はその銃口を見据える。

「民間人保護の規定に則った正式な防衛行動です。一度最寄りの国連海軍基地へ保護しその上で彼らの身柄をどうするかを検討します」

「検討だあ!? 国王陛下に仇をなす者たち犯罪者の身柄などどこに検討の余地がある？ 基地から出てしまえば治外法権などない、しかもそこは我が海軍の管轄地域だ」

「だとしても、彼らが深海棲艦の脅威にさらされていることには変わりなく、またその脅威の排除は我々国連海軍の任務だ。犯罪者であろうと国王であろうと、深海棲艦の脅威にさらされていいのなら、我々はより危険にさらされている人から救援する。」「

浜地中佐はそう言いつて銃を向ける大将と向き合った。

「あなたたちは勘違いしている。我々の任務は国王や政府要人を守ることではない。我々は国連海軍であり、深海棲艦の脅威から人類を守ることだ。だからこの船にも急襲が来ることを想定して艦娘を残しているし、戦闘域に取り残された人員の救出を行っている。国連海軍が並走しているからといって貴方たちが優位に立っているわけではない。」「

浜地中佐はそう言った。目の前の大将は顔を真っ赤にしてわなわなと震えている。

「深海棲艦の脅威に対しては王様だろうとごろつきだろうと同等に扱う。人の命を守ることに、そのみが国連海軍としての任務です！」

「国王の身辺確保はこの国の根幹に関わるのだぞ！VIPだ！それが優先されるべきではないかね！」

「この位置ならば深海棲艦の攻撃が来る前に安全圏に離脱できる！」

こちらの護衛にもちゃんど艦艇を割いている。これ以上の措置は必要ない」

「必要があるかないかは我々が判断する」

「国連海軍にスルー海軍の指揮下に入れという意味ですか？」

浜地中佐は右目に入った自分の血で視界をゆがめながらも毅然と立つ。

「……調子に乗るなよ国連海軍。ここは私たちの海だ。だれの船に乗っていると思っている？」

「あら？艦の長はマルセロ・ピラール艦長よね？」

茶化したようにケラケラと笑うのは笹原だ。

「この海に放り出してやろうか貴様ら！王の御前で無礼な！」

「リモート義体の操り人形を信じろと？」

航暉がそう切り込んだ瞬間に大将の表情が凍った。

「親衛隊員の機銃掃射から庇ったとき、国王陛下の痛みに対する反射にワンテンポの遅れが見られた。遠隔操作式のリモート義体の特徴だ。痛みに対する反応も鈍い……国王の『本当の体』はマニラの核シエルターの中にもあるのではないですか？」

「途中から国王の動きがなくなつたのは電脳ハツカーの存在が確定的になり、国王が乗っ取られるのを恐れて、遠隔操作を切ったから、違う？」

笹原の追撃に顔を青から赤に変えていく大将。

「……気づかぬふりをしてただけと言いたいのか？」

「それで済めばよかったです、これ以上は私たちの任務に差し障ります」

「任務だと……！」

「深海棲艦の脅威に立ち向かう、それが我々の唯一と言ってもいい存在意義です……！」

浜地中佐はそう言って目の前の銃眼の向こう、大将を見据えた。

しばらく顔を真っ赤にしていた大将の右の人差し指が動き、響く銃声。

そして次の瞬間に男の絶叫が響く。

「——正当防衛だ。私の部下に何をする気だ」

月刀航暉がまだわずかに煙を残す拳銃の銃口を人のいない方向に向ける。

「大将殿、いくら気に喰わないからと言って銃を持ち出したのは失策でしたね。その時点で『我々も正当防衛として撃つ権利を与えることになった』」

右手を押さええてうずくまる大将。拳銃が銃撃を受けた衝撃で手の骨のどこかが折れたのだろう。地面を滑って離れていく拳銃を、笹原

が拾い上げた。マガジンを引き抜き、チェンバーをスライドさせるとそのまま確保する。

「あなたは仰いましたね。国連軍は人を殺す痛みも知らない臆病者の集団」だと。確かに水上用自律駆動兵装運用士官はその人物の適性が問われるため民間あがりの人間も多い。だが、全員がそうでないことは知っていると思っていたのですが……」

手に持った銃——マルセロ・ピラールと書いてあるフィリピン製の拳銃だ——を腰のベルトに挟むようにして仕舞うと大将の顔を覗き込んだ。

「残念かもしれないが、俺は日本自衛陸軍出身だね。人に対して銃を向けるのにはあまり抵抗がないんだ」

「……貴様、こんなことをして」

「それはこちらの科白だ。てめえがしたことは国連海軍の作戦行動時における作戦妨害だ。しかもそれをスールー海軍の艦隊司令が行った」となると、それはスールー海軍の総意として受け取られるかも知れないな」

直後、緊急の通信を告げるアラートが艦橋に響く。艦長が通信機を取る。

「……国連海軍極東方面隊総司令部からです」

「貴様、まさか……」

「深海棲艦に対して作戦行動に入っている将校を銃撃したとなると、その責任は計り知れない。また基本的にすべての作戦行動は極東方面隊のコンピュータに情報が集約される。……もちろんてめえが銃撃を行ったということも含めてだ。そして中央戦術コンピュータが速やかに司令部の安全を確保せよと言ってきている。今は上層部が中央戦術コンピュータを押さえてくれているらしいが、さて……」

緊急通信がスピーカー越しに響く。流ちょうな英語が流れ出した。

《国連海軍極東方面隊総合司令、海軍元帥、山本五六だ。スールー海軍の艦隊司令艦直々に我が部隊の左官に向けて発砲したと報告が上がったのだが、本当かね?》

目の前の大将が顔を青くする。

「……沈黙は肯定と受け取るぞ。きっと今頃国連本部の在ジュネーヴ
フィリピン大使館は蜂の巣をつついたような騒ぎになっているだろう。
我々は君たちのフィリピン内での喧嘩に付き合う余裕はないの
だが、君たちの海域が深海棲艦に襲われては他の国にも危険が及ぶ。
だからこそ国連が仲裁に乗り出して、決着を図った。国連が君たちに
協力したのは制海権を押しえられる海軍を所有しているからという
のが大きい。我々にスールースルタン国がフィリピンの政府に据
えねばならぬ絶対的な理由はない」……これ以上国連海軍の将兵に
手出しをするようなら切つて捨てるがよろしいか?」
疑問形でくくられたが、そもそもそれは回答を求めてはいなかつ
た。

「……それは、困る」

ノイズ交じりの英語が割り込んだ。

「……国王、陛下?」

大将が目を見開いた。航暉が指揮卓の裏側に寝かせたままの姿勢
で国王の口がゆつくりと開かれた。

「キャプテン・ツキガタ、コマンダー・ハマチ、コマンダー・ササハラ。
我が軍が大変な迷惑をかけた……」

枝がつかないように周波数変更器スクランブラーをかけたノイズだろう、その向こ
うの声は平坦だった。

「ジャパンはサムライの国と聞く。……キャプテン・ツキガタ、コマン
ダー・ハマチ……あなたたちはなぜ戦うのか、伺ってもよいか」

「——地球を救う」など、きれいごとならいくらでも言え
ましょう。ですがそれを求めているのでしょうか?」

「無論」

「ならば、私の答えはこうですね。——部下を死なせたくな
い」

航暉はそう答えて背筋を伸ばした。横に浜地中佐が並ぶ。

「私一人では何もできない。迫りくる深海棲艦の一隻だって止めるこ
とはできないでしょう。ですが、彼女たちは違う。彼女たちなら止め
られるかもしれない」

浜地中佐は顔の左半分を赤く染めたまま笑って見せた。

「そんな彼女たちがこんな私のことを『司令官』と呼んでくれる。私を信じて戦場に向かう。帰ってきてくれと言ってくれる人もいれば、信じてほしいと言ってくれる子もいる。そんな彼女たちが望むなら、私は何度だって戦場に立つ」

「……そうか。若いな、皆。貴方たちの正義が我々の正義と合致することを願っておる。……マーシャル・ヤマモト、我が国は事態を重く受け止め、大将の処分も含め、再発防止に努めさせてもらう」

《こちらは公式文章にて正式に抗議させていただきます。後始末はこんな無線ではなく正式な会見でお聞きしたいものですな。———今は脅威の排除が優先ですので。月刀大佐、戦況は？》

無線の矛先が航暉に向いた。

「こちら月刀、報告します。現状マニラ湾口沖合25キロで主力隊が交戦域に突入、浜地戦隊が魚雷艇の救援に入っています」

《魚雷艇の船員はキャビテ軍港に移送することに相違はないか？》

「ありません」

《応援は必要かね？》

「動かせるのであれば、重巡以上の艦艇を。水雷戦隊のみでは退けるのみで撃破は困難と思われまます」

《わかった、狭山に542と544を動かさせる。民間人の安全を最優先にし作戦を続行、可能であれば方位2―2―5方面へ逸らせ。なお、いかなる脅威の排除も私の権限で許可する、月刀大佐の判断で行え、以上だ。復唱》

「民間人の安全を最優先にし、可能であれば方位2―2―5へ敵艦隊を誘導、いかなる脅威の排除も大将権限を持って許可、私の判断で行使、以上です」

《復唱確認、作戦を続行せよ》

「了解、作戦を続行します」

無線が切れると妙な沈黙が降りた。

軍は戦う組織である前に、巨大官僚組織である。いくつもの文章が飛び交い、権力がものを言う世界だ。スーロー海軍の大将を見下ろす

航暉の袖の階級章は大佐だが、たった今の無線で大将権限の命令権が降りた。

この時点で、航暉とスールー海軍の大将は対等。だが、この場を握っているのは航暉だった。

「浜地中佐」

「海に投げ出された人の救助は7割がた終了、終了まであと……10分」

「わかった。終了次第浜地隊は転進、マニラ湾キャビテ軍港へ移送しろ」

「了解」

やっと動ける。

航暉は僅かに口角を吊り上げて笑って見せた。

「この距離からの砲撃ってことは少なくとも重巡がいるよね」

臯月はそういいながら一瞬取り舵を当てて、進路を変更、20メートルほど離れた場所に敵の砲弾が水柱を立てたのを見て少し後悔した。逃げる必要なかったじゃん。

「あと電探持ちがいるね〜」

のほほんとそう言うのは文月だ。メインの武装である12センチ単装砲の射程にはまだ遠い。だから前に飛び出していく。

重巡クラス以上に駆逐艦の砲の攻撃なんて豆鉄砲かもしれないが、それでも数が集まれば無視できなくなる。それに今回の攻撃の目的は「相手の撃破」ではないのだ。

「臯月ちゃん、主機大丈夫？」

「平気だよ。心配してくれてるの?」

「そりゃ心配だもん」

「そっか、ありがとね」

「うん、無茶しちゃダメだよ」

その会話の奥から第一小隊の交戦状況も同時に飛び交っている。

《こちら川内、皐月文月、大丈夫?》

「こちら皐月、問題ないよ!」

《敵編成は重巡1、軽巡2、駆逐艦3の輸送船らしき船が4。揚陸艦隊の可能性が高いけど、油断しないで! 重巡の砲撃精度が結構高い!》

「うん大丈夫! どこまで近づけばいい?」

《12キロまで近づいたら改めて報告を——》

《川内さん! 危ない!》

無線に割って入る声、この声は、如月だろうか?

直後に無線に殺人的ノイズが走った。反射的に目を閉じ、改めて目を開いた時には無線の奥が沈黙していた。

「川内さん! 川内さん!」

《こちら電、川内さんが被弾!》

それだけが無線に乗り、直後にまた無線が切れる。それどころではないのだろう。

皐月は唇を噛んだ。川内を助けるために皐月や文月にできることはないのだ。それは川内自身のダメージコントロールと指揮官のリンクによるサポート、川内と行動を共にしている電たちの仕事だ。

「ねえ、皐月い……」

横から震えた声が皐月の後悔に割り込んだ。横を見ると文月が俯いたまま棒立ちになっていた。

「——いつら全員やっちゃっていい?」

ぞつとするような声だった。直後に文月が飛び出していく。

「文月!?!」

皐月も慌てて追いかけるがどんどん引き離されていく。ここにきてレーザーの攻撃が恨めしい。

「文月!・ 文月、一回待って! 一人でどうする気!?!」

引き離されていく速度が速すぎる。主機の限界を無視して速度を上げている。

「文月、ダメだ!・ 文月っ!」

彼女は皐月の叫びに答えない。皐月の胸に大きな焦燥が去来した。

“それ”を見た時、なんの冗談かと思った。
海の上を進む少女がこちらにやってきている。

その時 “彼” は救命胴衣を付けていなかった。ライフルなどを構えるには邪魔になるのだ。マニラ湾で海に投げ出されたときはインフレータブル膨張式の救命胴衣を使ったのだが、一度使ってしまったためもう使えない。炭酸ガスのボンベの予備もなかったし、旧式の救命胴衣はかさばるから着ていなかったのだ。

それがあだになった。

水底は暗く沈み込み、そこに引きこまれるのは時間の問題だった。まだ砲撃を受け続けていて、水上に健在な同志の船も回避行動で一杯でこちらを助ける余裕などなさそうだ。

そこにきて “彼女たち” の登場である。引導を引き渡しに来たかと正直思った。

敵に殺されるくらいなら、いつそ。

「……諦めちやいけん！ 今助けちやるけん！」

直後少女の手が彼に触れぐいと海上に引き上げられた。そのまま肩を貸してもらおうような形で背負われた。

「君、生きとるね？」

「あんたは……」

「艦娘、浦風じゃ。今深海棲艦を追っ払っちゃるから、すこし耐えんさいー！」

青い髪をした少女はそう言っただけでニカリと笑った。

「長月！ そっちは？」

《救命胴衣なしはその人だけのようだ。……もう沈んでる可能性は否定しないがな》

「なら長月、対潜警戒を厳に！ 川内さんが本隊を叩くまで守り抜くよー！」

《当然だ》

ウラカゼと名乗った少女は左手に銃のようなものを持つとあたりに目を配る。

「……なんで、助けに来たんだ？」

「誰かを助けるのに理由が必要なん？」

「俺たちはあんたらを攻撃したんだぞ……」

「んー、確かに少し腹は立ったけど、深海棲艦に襲われているのを見殺しにできるほど凶太くないしなあ」

ウラカゼはそう言うのと照れたように笑った。

「それにこちらは人間を守るのが仕事じゃけえ、ここで守らんかったら、うちらはうちらじゃなくなるけえの。なんで君が戦ってるかはわからんけど、それでも助けるのを拒む理由にはきつとならん」

ウラカゼはそう言うのと彼を担ぎなおした。こちらに向く砲撃が散発的になりやがて消えていく。

「文月たちが囷になってるうちに逃げようか。みんなあ！ 国連海軍がこれから守っちゃるけえ早く海に落ちた人を回収しんさい！

あと指揮官は誰や？」

そう叫ぶと一隻の船が静かに寄ってきた。

「俺が指揮官だ。『ヴォルテル』と呼んでくれ」

「国連海軍南方第二作戦群の浦風じゃ、うちの司令官から国連海軍の基地にみんなを保護するようにと言われておるし、国連基地まで護送するけえ、一緒に来てほしい」

「……それを信用しろと？」

「引き渡す先はスルー海軍やなくて、国連海軍警邏隊じゃし、取り調べを行うんも国連が先や、ヴォルテルさん。国連基地は治外法権なのは知つとるじゃろう？ 死刑はないし捕虜への配慮をせんと、ジュネーブ条約を国連自らが破るなんてお間抜けなことになるしのお、身の安全と最低限の衣食住は保証できると思うんよ」

ウラカゼはそう言うって笑った。

「逃げ帰っても居場所はないんじゃろう？ 国連海軍に捕まったと言えばスーリースルタン国に捕まるよりも君たちのボスの溜飲も下が

るんじゃないかのお？……まずは生きてる人を助けたいんじゃないじやが、いいじやろうか？」

「……助太刀、感謝するよ。国連海軍」

「なら、素直に一緒に来んさい。今度はスールー海軍の砲撃からも守っちやる」

ウラカゼは笑うと肩に担いだ男をヴォルテルに引き渡す。生きている魚雷艇は5隻、そこに海に投げ出された人たちを乗せていく。

あと3人ほどで収容終了となった時にウラカゼの表情が曇ったのを「彼」は魚雷艇の上からぼんやりと眺めていた。

「……文月が？」

どこことなく不安そうな表情を見せる彼女を見て、本当に少女と変わらないんだなど、彼はぼんやりと考えていた。

「川内さん……！」

文月は前に飛ぶ。主機が悲鳴を上げている。それでも前へ、前へ、前へ。

《文月！ 一度止まるんだ！ 缶がもたないぞ！》
無線ががなる。今は耳障りでしかない。

“あのこと”を忘れることはなかった。忘れられるはずがなかった。今でも夢に見る。あの悔しい思いだけが加速し、眠りから意識を引き起こすのだ。

何のために強くなった。何のために戦っている。

敵艦目視、シルエットからして敵艦、重巡。ここからでは通常艦か

エリートクラス以上かはわからないが、今の文月にとってはどうでもいい”。

「こちら文月、攻撃開始っ！」

無線に一方的に叩き込んで改めてカット。返事など”ネガテイウ否”に決まっている。聞く必要はない。

重巡の発射炎が閃く、一瞬当て舵、視界がぶれる。耳の横を衝撃波が通り過ぎると、ポニーにまとめた長い茶髪が何本も宙を舞った。

あんな思いはもう二度としないと決めた。だから

「これでもくらえーっ！」

だから私は、強くなったんだ！

数瞬で砲弾が相手に突き刺さる。沈みこそしないが、ダメージを与えられればそれでいい。

サイドキックで進路を右へ、相手の砲弾が数瞬前に頭があつた位置を飛び抜け遠くに水柱を立てる。

砲を撃つては前へ。適度に舵を切り相手の銃身を見つつ弾を避けていく。

相手の眼前に躍り出る。笑いがこみあげてきた。

こんなに近づかれて、相手は悔しくないのだろうか。駆逐艦の攻撃だと相手にもしたくないというのか。

だとしたら間違いだ。

魚雷発射管に圧搾空気が押し込まれ、一気に飛び出した。あまりに近いためにすぐに敵艦に到達、爆裂する。

「……川内さん」

燃え落ちていく相手を見とどけていると背中に衝撃が走る。肺の空気が強制的に押し出され、前につんのめる。

(小口径……じゃないなあ)

そんなことを考えながら主砲を握り直し左足を軸に半回転、振り向

きざまに主砲を向けると存外遠いところに敵の軽巡がゆらりと立っていた。

「こんなところで、文月は終わらないんだから」

そう言っつてその軽巡に向かおうとしたところでその軽巡が揺らいだ。

正確には誰かが海面に叩き倒したのだ。

「……………なんとか、間に合ったあー！」

敵の軽巡を錨で思いつきりぶん殴つたらしい雷がそう言っつて笑つた。相手の艀装に叩き込まれた鎖を引きこみ、相手を固定すると、主砲を連射して黙らせる。錨を捨てて手近な駆逐に向けて発砲していく。

「電ー！」

雷が叫ぶと、雷が追い込んでいた駆逐艦のすぐ真横に影がひゅつと飛び込む。ほぼ接射と言っつていい超至近距離で電の主砲が閃く、相手は煙を上げながら逃げるように転進する。

スカートをふわりと広げながら電はその場でターン。その途中に魚雷が飛び出し、広い射角で放たれた。酸素魚雷は行く先を示すことはないが、射角の広さからして当たることはまずないだろう。でも、かわそうとすればあつという間にマニラ湾の方向からはそれてしまふ。

「……………こんな感じでいいのです？」

「輸送船は？」

「とつくに睦月ちゃんが転進させたのです。方向的には逃げる方向なのです」

「そつか。重巡とかで露払いをして乗り込むつもりだったのかしら」
雷はそういいながら後退していく敵駆逐の真横に水柱を立てている。

「特攻とか仕掛けてきてないってことは陽動部隊の可能性もあるのかな？……………そう。わかったわ」

「どうやら司令部と通信しているらしく、雷はそう言うとは一度目を閉じた。」

「南沙諸島付近に大規模な深海棲艦反応だつてさ。そっちが本隊かしらね」

「となるとおそらくマニラは陽動、メインはブルネイかシンガポールか……」

「でしようね」

雷はそう言うってから文月の方を見た。

「文月、歯食いしばつといた方がいいわよ」

その直後、思いつきり頬が張られた。

「……どういふつもりなのさ」

引つ叩いた手を振るのは皐月だった。皐月の主機ももう限界だったが、なんとかここまで飛ばしてきたのだ。

「一人でどうする気だったのさ。何とか目視できるところに電たちがいたからなんとかできたみたいだけど、捨て身の特攻なんてそんな無茶な攻撃、なんでしたのさ」

文月は俯いたまま答えない。

「言葉にしなきゃわかんないよ、文月。どうして……」

「——皐月ちゃんは悔しくないの？ 川内さんが攻撃されたんだよ……また、沈んじやうかもしれなかつたんだよ」

文月の頭を昔の記憶——純粋な駆逐艦だったころの記憶が過る。あれはいつだったか、〝この体を得た時〟に改めて調べたからよく覚えている。

1943年11月2日、日付が変わってすぐだった。場所はブーゲンビル島、エンプレス・オーガスタ湾——ブーゲンビル島沖海戦。

その前日に文月は小発動艇を持ってラバウルからブーゲンビル島へ向かっていた。米兵がブーゲンビル島のタロキナに上陸したため陸軍の兵隊を逆上陸させるためだ。

だが途中で引き返せという命令が出た。そして引き返している間に……旗艦の川内が沈没した。

また、見えないところで沈んでしまうのか。それだけは嫌だった。

川内は夜が似合う軽巡洋艦だった。艦娘となった今でもそうだが、夜戦が絡むと頭のねじがどこかに飛んでしまうが、部下思いで聡明で、頼りになる旗艦だ。今の笹原司令官が来てからは特にそうだった。

「臯月ちゃんは、川内さんが攻撃を受けても、何も思わないの？ ……
ねえ！」

「だからって一人で突入してどうなるのさ！」

「質問に答えてよ！ 臯月はあの時参加してないから、ブーゲンビル島へ向かってなかったから——」

直後に臯月が文月の胸倉を掴むように詰め寄った。

「だから何なのさ！ 悔しくないか？ 悔しいに決まってる！ でも、文月一人で突っ込んで、それで川内さんは救われるの？」

臯月の双眸にも涙が溜まっていた。

「悔しくないはずないじゃないか、川内さんはボクたちの旗艦だったんだ。ボクたちを引っ張ってくれた三水戦の旗艦だ。だから、だからって……文月が沈むような無茶をしていい理由にはならないんだよ！」

「臯月ちゃん、私はね、強くなるって決めたんだ」

文月の服を握りこんでいる臯月の手に、文月はそっと触れた。

「私たち睦月型は、対空も弱いし、装甲も紙だし、砲だつて弱い。でもね、関係ないんだよ。あの時、助けられなかったのは、任務のせいって言い訳をして、助けなかった」からなんだよ」

文月は臯月の手をゆつくりとほどいていく。

「もう、あんな後悔はしないって決めたんだ」

すべての指をそっとほどいて、ゆつくりと文月は下がる。

「あんな後悔をするくらいなら、私は……」

文月の主砲がかちやりと音を立てる。

「心配かけたのはごめんね。でも、止まれないんだ」

——あんな後悔をする必要がなくなるまで強くなるまでは

文月は涙を流しながら笑った。

「電ちゃん、誘導方位つて2—2—5だよね……」

「これ以上の許可は出せないのです」

「許可なんていらない」

文月の主機の音が変わる。動き出そうとしている。

「こんの……文月のわからず屋——っ！」

皐月が文月に殴り掛かろうとし、文月はそれを無視しようとし。

その間を一発の銃弾が駆けた。

「そこまでののです、それ以上はお姉ちゃんが許しません」

文月の肩を抱くようにして無理やり動きを止めながら睦月が割って入った。

「文月い、ずっと一緒だった戦友にそれはちよつとやりすぎなんじゃないのかにゃくん？」

「睦月、ちよつと苦しい……」

「お姉ちゃんたちに心配かけたバツです。少しは耐えてね。……強くならなきゃいけないのも、悔しい思いをしたくないのも、文月は間違ってるじゃないよ。でもね、その悔しさを誰かに押し付けるような方法は間違ってるんじゃないかな」

睦月はそう言つて両手で彼女を抱きしめた。

「文月はそれでもいいかもしれないけど、私は嫌だし、皐月はもつと嫌だと思ふよ。みんな、そうなんだよ」

文月の足元に小さく波紋が立った。

「怖かったんだよね。自分のせいで、大切な人がいなくなるんじゃないかって、怖かったんだよね」

睦月がそう言うと、文月は頬を濡らして小さく頷いた。

「怖いのはみんな一緒だよ、文月。だからみんながいるんだ」

それに、川内さんも無事だしね。と睦月がしたり顔で囁いた。

「へ？」

「無線のスイッチ入れればわかるよ。川内さーん」

慌てて無線のスイッチを入れると無線の奥で返答があった。

《はい、また”文月が暴走したって？”》

「川内さん、被弾したんじゃない？」

《うん、被弾したよー。ばっちりしたよー。あのまま行けば徹甲弾が缶直撃コースだったんだけど、電が足を払ってくれたおかげで電探と副砲が使えなくなっただぐらいで済んだよ……って言うより砲の直撃より”電の本気”の方が痛いんですけど》

「はわわっ、ごめんなさいなのです！」

《冗談冗談、後で覚えてなさい》

言ってることが矛盾してるのです！ と今更慌てだす電に笑いをこらえる雷。

「つてことは……」

「そう、文月ちゃんは早とちりで戦線に突っ込んだじゃったってこと。

まあ、無事だからよかったけどね」

そう笑うのは睦月だ。

「すごかったわよね、電つてばいきなり錨をフリスビーの如く投げるんだもの。ありゃ川内さんじゃなくても避けられないって」

「いつも錨をフルスイングしたり投げたりしてる雷お姉ちゃんだけに言われたくないのですっ！」

「いつそのことラムアツタクしてみたら？」

《それは川内型の誰かが引っ張らないといけない感じだから勘弁して》

「というより、お姉ちゃんは電をなんだと思ってるのですか!？」

「ん？ 時々とつびよーしもない作戦をいきなり繰り出す変な妹」

「変って！ 妹捕まえて変って!」

「敵艦載機の真下を突っ切ったり、模擬魚雷をフルスイングして飛龍さんノックアウトしたり、川内さんに錨ぶん投げたり？ 変じゃない

の？」

「それを言うなら、蒼龍さんの胸を揉みしだいて無力化したお姉ちゃんの変態なのですっ！」

「姉を変態呼ばわり？ ……よろしい、ならば戦争だ」

《おい、まだ作戦行動中だ。この惨状を上にも報告しなきゃいけない俺の気も考えてくれ、雷電コンビ》

無線に割り込んだのはあきれ声の航暉だった。

「しれーかん、敵の状況はわかる？」

《今、鳳翔さんの艦載機がコンタクトしてる。……この様子なら追撃は不要だ。今ラバウルから最上たちが動いてる。敵本隊の漸減も南方第一作戦群の管轄だ。撤収するぞ》

「魚雷艇の方はどうなったのです？」

質問を上げたのは電だ。

《浦風と長月が護衛中。あと5分少々で川内と如月が合流するはずだ……睦月、潜水艦の反応は？》

「今のところはクリアなのです。問題ないかにやあ」

《わかった、各艦は後退、戻るぞ。湾口の3キロ手前で魚雷艇を一度止めるからそこで川内たちと合流しろ。魚雷艇を護衛しながら湾内に進入。魚雷艇への報復攻撃に警戒しつつキャビテ軍港まで移送せよ》
「了解なのです」

電が代表して回答し、無線が切れる。

「それじゃあ撤収なのです」

その日のマニラの夕焼けはいつも通りで、どこかスモッグに覆われ

てどこかくすんだ朱色に染まっている。キャビテ軍港も例外ではなく、影は足から長く伸び、彼女たちの姿を赤く染める。

彼女たちの前に車が止まる。車から降りてきた三人を見て彼女たちは敬礼の姿勢を取った。

「おかえり、司令官」

「うん、ただいま。川内は大丈夫？」

「工場長直々に治療して貰ってるし大丈夫だよ」

そんな会話を交わすのは笹原と彼女の旗艦、川内だ。その横を金色の髪をなびかせて小柄な少女が駆けてゆく。駆け寄った先は……もちろん彼女の司令官、浜地賢一中佐だ。

「……無事でよかった」

「それはボクのセリフだよ。司令官……」

真正面から抱き着いた彼女は彼の制服に顔をうずめた。

「もう……帰ってこないのかと思った」

「うん」

「怖かったんだよ、司令官。わかってる？」

「うん」

「もう会えないかもって、怖かったんだよ」

「うん」

浜地中佐は彼女の頭に手を乗せて、柔らかい髪をぽんぽんと叩いた。

「心配かけたな」

「本当だよ。……司令官、ボクも、ごめん」

「なにが？」

「……謝りたかったんだ。ずっと危なっかしいことばかりしてたし、なんか、変な意地張って、司令官を困らせることも多いし……」

「……そんなことか」

浜地中佐は小さく笑って彼女の手を優しくほどくとしやがみ込んで目線を合わせて……真正面から抱きしめなおした。少しきつく、言葉にできないような気持ちも伝わるように、少しきつく。

「謝る必要なんてないよ、皐月。俺こそ、ごめんな」

「司令官も謝らなくていいよ」

それを遠くから見て優しく笑ったのは航暉だ。

「これでなんとかなったか」

「何ともなっていないのです」

航暉の横にやってきてそういったのは電だ。見るからに頬を膨らませて怒っていますという意思表示を航暉に向けた。

「司令官さん、電は怒ってます」

「……見ればなんとなくわかる」

「なんで司令官さんは電たちに話してくれなかったのです？」

「……君たちは『艦娘』だ。人間同士のいざこざなどに関わる必要なんてない」

「そうだとしても、私は、私たちはそれで司令官さんが倒れるところなんて見たくないのです」

電はそう言って腕を伸ばし、そっと航暉の頬に触れた。

「司令官さんが私たちを守りたいように、私たちも司令官さんの力になりたいんです。だから、話してください、頼ってください。電たちでは力不足かもしれませんが、それでも司令官さんのためなら私たちは頑張れます」

「そうそう、もーっと頼っていいのよ、しれーかん！」

「提督がしつかり頼ってくれないと睦月も寂しいのね」

「如月のことももっと頼っていいんですよ、司令官？」

それを聞いて、航暉は苦笑いだ。

「……努力するよ」

「約束はしてくれないのです？」

「守れるかどうかかわからない約束はしないたちでね」

「もう、司令官の意地っ張り」

如月が笑う。それに疲れたように笑い返す航暉。

「あれ、睦月も俺のこと提督呼びか？」

「文月が飛び込んだ時、提督、実は艦装に介入してたでしょ？」

睦月に言われ、バツの悪い顔をする。

「……ばれてたか」

「これでも睦月はネームシップなのです。妹たちの動きぐらいはぼつちり把握してるのね。……それに、文月の回避行動、電ちゃんが司令官とリンクしているときの回避行動にそっくりだったのです」

「驚いたな、あの時輸送船団側で戦闘中だったよな？」

「潜望鏡を見つげるためにも目は鍛えているのね。……文月を守ってくれてありがとうございます。提督」

睦月がそういって彼に抱き着いた。それを少しうらやましそうに見るのは電だ。

「……言いたいことはしつかり言った方がいいわよ、電ちゃん？」

「ふにやつ!」

後ろからいきなり声をかけられ慌てて振り向くと、にまにまと笑った笹原が立っていた。

「男って変なところで察しがいいクセに、肝心なところは鈍感……っていうか見ないふりだからね。言葉にして追い詰めないと振り向いてくれないぞ〜?」

「笹原司令官……」

「私が彼を『奪って』もいいのかしら？」

「!……それは」

「冗談冗談、彼を相手にするとこっちの身が持たないよ。彼は見た目より気性荒いし、不器用だからね。本気で彼を狙うなら、覚悟して挑みなさい、電ちゃん」

そう囁いて笑ってみせる笹原。

「わかっているとと思うけど、彼、結構お目にかかれない『上物』だよ。周りも結構狙ってるはずだ。……後悔だけはしないようにね」

電の肩を軽く叩いた。

「女は度胸よ」

そう言つて豪快に笑つて見せる笹原は腰に手を当てて自信満々に胸を張った。

「楽しそうだな。うちの電に変なこと吹き込んでないだろうな？」

「ガールズトークに口をはさむと嫌われるわよ、カズ君」

「ガールズってな、お前の場合は下手な男より男らしいじゃねえか」

「それがいい女ってもんよ」

「自分で言うかよ」

「悪い？」

和やかな空気の中少しづつ少しづつ日が陰っていく。夜の帳が降りるまであと少し。

「さて、とりあえずはデブリーフィングだ。反省会いくぞ」

「えー。明日でいいじゃん」

「明日には俺はウェークに戻るんだ。そんな時間ない。それに……早いうちに上層部に報告を上げとかなきゃな」

「ちえー、疲れたしとりあえず寝たいけどなあ……」

「寝たかったらさっさと終わらせるぞ」

「はーい」

司令官と艦娘たちが建物の中に消えていく。間もなく落日、濁っているが静かな海が目の前に広がっていた。

「風邪ね、安静にしてなさい」

デジタル体温計が37.9℃を示し、ドクターストップがかかった。

「あなたは働きすぎ、マニラ湾観艦式緊急戦闘後も働きづめだったじゃない。少しは休めっていう神のお告げね。さっさと寝てなさい」

航暉は投げてよこされた解熱剤とビタミン剤を片手でキャッチするとゆっくりと立ち上がる。六波羅夏海ウエーク島基地医務長は溜息と共に言葉をかける。

「医務室のベッドで寝ていったら？」

「俺の部屋なら電腦通信使えるから……」

「いいいから寝てなさい」

ずいっと詰め寄った夏海に航暉は目線をそらす。

「んなこと言っても書類はたまる一方だし」

「何のために合田少佐に副基地司令の肩書があると思ってるのよまったく。あなたのサインが必要なもの以外は私と合田少佐で振り分けるから安心しなさい」

「しかしだな……」

「……医師権限で電腦錠嚙ませましょうか？」

「わかったわかった、横暴ドクター」

そう言つて頭を掻きながら、かなり短くなった髪を掻いた。

「熱が下がるまで寝て得ればいいんだろ？」

「よろしい。さっさと寝てなさい」

手をひらひらと振つて医務室を抜けると雷が立っていた。

「ほら、あたしの言つた通りでしょ？ 見るからに顔赤いんだから」

「と言つてもなあ……」

「ほらほら、部屋に戻つて寝た方がいいわ。歩ける？」

「歩けるから押すなよ……」

ぐいぐいと押され階段を上り司令官室の隣の私室の前へ。

「寝てなさいよ。今日は仕事しちやだめ！ わかった？」

「お前は俺の母親か何か？」

「なんでもいいから寝てなさいっ！」

月刀航暉は部屋に押し込まれると後ろでドアがパタンと閉まった。ばたばたと足音がするところを見ると雷は部屋の前からいなくなつたらしい。航暉は上着を脱ぎ捨てハンガーに掛ける、久々の快晴に書類整理日和だと意気込んでいただけに気が抜けた。

「……マジで寝てろってか」

部屋に戻ると基地内へのコンピュータへのアクセスがブロックされていた。こちらからアクセスできるのは医務室のみ、中央戦略コンピュータはこちらを認識しているようなので何かあったら連絡は来るのだろう。

「……ベッドで寝てもいい夢見ないんだよなあ」

あの医者のことだ。下手したら監視体制を敷いてる可能性もある。医務室へ通信をつないで抗議してもいいが、そこまでの気力はなかった。そもそもワイシャツを脱ぎ捨てこちらもハンガーに。まずい、本格的にだるい。

腰を締め付けているベルトをはずしてストラップスを脱ぎ捨てると、そのままベッドに倒れ込む。

「……まあ、いいか」

静かなまどろみは緩やかに彼を包んだ。そして、意識が落ちていく。

「まったく、年頃の女の子捕まえて母親か何かかはないでしょ」

「あふれ出る母性ってわけだね」

「うわっはあ!? 響姉え! どっから湧いて出た!」

「油虫みたいに言わないでくれるかな?」

ぷりぷりと怒りながら廊下を突き進む雷の背後に薄い青にも見える銀髪の少女が現れた。

「で、司令は?」

「今部屋に送ってきたわ。やっぱり風邪みたいね」

「そうかい。まあ、マニラ湾観艦式から帰ってきてからも忙しかったしね」

響はそういいながら艦娘の待機室^{レディールーム}——— 実際は艦娘たちの談話

室だ——— の扉を開けた。

「あ、響、雷、お疲れ様。どこ行ってたの?」

「姉さんもお疲れ。私はお手洗いさ。雷は司令の付き添いで医務室。やっぱり風邪だった」

「そうなのですか……」

中でティーパックの紅茶を飲んでいたのは暁だ。その隣では電が目をつむって椅子に深く腰掛けたまま足を軽く振っていた。響はコートハンガーに掛けられた暁の帽子の隣に自分の帽子も掛けて、暁と向かい合うように座る。座面が高く、踵が床から浮くのが少々気持ち悪いがまあいいだろう。

「で、風邪ひき司令は?」

「私室に戻ったらしい」

「夏海医務長が医務長権限で司令の電腦アクセス権一時的に止めたらしいし、しばらくは寝てると思うわよ。……電は何してるの?」

「基地と司令官さん宛てのクラスC以下の書類の確認です。演習の申し込みやら補給日程やらそういうのなのです」

電は目をつむったままそう言った。

「クラスC以下で昨日の17時以降だけでも70件近く来てるのです。これの倍以上の数を合田司令官と二人で普段捌いてるんですよ……」

「……それと並行してマニラ湾観艦式緊急戦闘の事後処理、グアムで第一作戦群司令部定例会議に出席してとんぼ返りしてきたら基地運営、訓練実施と海域偵察？ そりゃ倒れるわ」

「うわー、という顔をするのは雷だ。その横でぐでつとテーブルに突っ伏しているのは響——彼女は朝が少し弱くて、その状態を長く引っ張ってしまう。彼女のスイッチが入るにはもう少しかかるのだろう。」

「で、無理がたたったわけだ。頭の傷もまだ完全には治ってないんだろう？」

「なのです。左肩もまだ時々痛そうにしていますし」

「マニラから帰ってきたのは一週間前ほどである。後頭部という繊細なところを挫傷したためかマイクロマシンの修復も慎重に行わなければならなかったため治療には時間がかかっていたことと、あまりに忙しくて医務室に行くことを航暉がサボっていた経緯もある。——

——結果として、まだ治ってない。」

「まあ、ゆつくりさせてあげましょう？ 昨日も利根さんたちの出撃の戦闘指揮取ってたんでしよう？」

「昨日ウチリック環礁ってことは、今クエゼリン？」

「なのです。もう少ししたら向こうを出港して荷を下ろした油槽船と一緒に夕方には帰ってきます」

「暁の質問に答えて電は目を開いた、一通りの確認を終えたらしい。小さく溜息をついた。」

「しばらく538は第三種待機よね？」

「何かいい案でも思いついた？」

「暁は自分でもちよつと砂糖を入れすぎたと後悔した紅茶を口に含みながら雷を見る。」

「……しれーかに恩返し、したくない？」

「トーンを押さえて紡がれた言葉に皆が耳をそばだてた。」

どうしてほしいんだ、お前は。

その銃で、私を撃って、と彼女は言った。
なぜ？

殺してくれなきや、私たち永遠にこのまんまだよ、と彼女は言った。
殺せば、終わるのか？

殺さないと、終わらないんだよ、と彼女は言った。

手にはA R | 5 7、M | 4カービンと似て非なるアサルトライフル。
ル。

カズにいに殺されるなら、それでいいかな。と彼女は言った。

安全装置解除、樹脂製のストックは嫌になるほどよくなじむ。セレクタをセミオートへ。プルは2. 3 k g、ことりと落ちるように

「ごめんね、ありがとうございます」

と、彼女は言った。

跳ね起きた。案の定ベッドで寝ると夢見は最悪だ。

「……あー、くそ。今何時だ？」

デジタル時計が11:48を告げる。三時間弱、睡眠は90分1サイクルと言われているから2サイクル寝たわけだ。東向きの部屋は窓際に太陽光が薄く張り付くように伸びていた。改めて枕に頭を押し付ける。横にはなるが寝る気は起きなかった。

「……ベッドに呪われてんのかなあ」

殺したり殺されたり、よりによって子供と、だ。こここのところの夜のお伴はずつとそれだった。全く気が滅入る、仕事になればまだ幼い雰囲気もある少女を戦場に送り出さないといけない分なおさら堪える。

悶々しているとドアがノックされた。

「あいてるよ」

「失礼するのです。お昼持ってきたのです」

「ああ……そういえば昼だな」

部屋に入ってきたのは電だ。一瞬「先ほどの子供」とシルエツトが重なり、わずかに目をそらす。

「熱は……大丈夫なのです?」

「あ、ああ、解熱剤が効いてて少しぼうつとしてるけどな」

「無理はしちやだめなのです。……食べられそうです?」

「いただきよ。動いてないのに腹が減った」

「わかりました。おねえちやーん!」

「呼ばれて登場じゃじゃじゃーん、暁型デリバリーです!」

ハイテンションで入ってきたのは土鍋を抱えた雷である。その後ろにはお盆を持った暁と響が続く。

「風邪ひきなしれーかんにお粥と白和えを作ってみました。みんなで食べよっ!」

「納豆オムレツもあるよ。……本当は出し巻を作ろうとしたんだけどね」

「しかたないじゃない! 上手く巻けなかつたんだから!」

部屋の中央のローテーブルに土鍋とお盆が置かれる。暁のお盆には五人分の取り皿とお箸とレンゲ、あとコップと麦茶の入った薬缶。響のお盆からはほうれん草と人参、こんにやくを使った白和えが乗っていた。大皿に盛ったものと小ぶりなさらに小分けにしてあるものと一つずつ。どうやら航暉のものだけ別盛にしてくれたらしい。

「これ全部作ったのか?」

「龍鳳さんに教わりながらね。ちなみに私と電がお粥担当、響姉えが

白和え担当で暁姉えがオムレツね」

雷がウインクをしつつお粥をよそっていくそれを見つつ布団から出て、艦娘たちが硬直した。

「……あ」

そういえば制服脱いだけでベッドに倒れてたんだっけ？

今航暉が着ているのは黒のノースリーブとトランクスのみ。暁型の面々が例外なく顔を赤く染めていく。

「……すまん」

その後の昼食が気まづくなつたのは言うまでもない。

「提督よ、お主が暇そうにしてるのを初めて見た気がするぞ」

「体調崩されたと聞いたのですが、大丈夫ですか？」

夕方近くになり、部屋に入ってきたのは利根と筑摩、若葉と初霜だ。ウチリツク環礁の敵拠点夜間砲撃作戦から無事帰ってきてくれたらしい。

「何を読んでいるんじや？」

「ん？ 『マクベス』だ。シェークスピア」

「提督も。劇作とか読むのか。」

そういったのは若葉だ。ベッドの端にちよこんと腰を下ろしのでき込んでくる。

「紙媒体の本ってのはいいぞ。重要書類が未だに紙に印刷されるように紙媒体ってのは人類始まって以来の優秀な外部記憶装置だ」

「かつこいいこと言ってますけど、電脳使えないからですよ……」

「冷めたツツコミありがとう筑摩……利根、作戦の状況を改めて口頭

で頼めるか?」

「うむ。飛龍さんたち第一作戦群本隊の合同作戦じゃが、状況は無事終了じゃ」

「こちらの被害は?」

航暉が聞くと利根は腕を組む。

「大鳳が中破ってところじゃな。今、六波羅医務長のところで診察を受けとるはずじゃ。……雷撃を気にしすぎて艦砲射撃の圏内に入っているのを忘れとった、改善の余地ありってところじゃろう。後は筑摩が小破しとったがクエゼリンで修復済みじゃ」

「打撃状況は?」

「敵勢力の完全排除まではいかなかったんじゃが、3週間はあそこも使えんじやろうしクエゼリンの千代田がトラッキングもしとる。鈴谷と熊野がクエゼリンに待機しとるしうちも動ける、今のうちに潜水総隊が後方の補給路を断ってくれば程なく瓦解するじゃろうて」

「わかった……戦術レポートはCSCに提出済みだな?」

「もちろんじゃ」

「お疲れさん。クエゼリンからの帰還組は明日1000までオフィストだ」

航暉がそう言うのと敬礼を交わす。

「そういえば司令の部屋に初めて入った気がします」

「そうか?……まあ、初霜たちが来てからは忙しかったしな」

「いろんな本があるんですね……提督はどんなご本読まれるんですか?」

筑摩が興味深そうにきよろきよろとあたりを見回す。

「そうだなあ……普段は忙しくてあまり読めてないんだが、SFとか古典とか好きで読んでる。未だに海大の教科書とかも引っ張り出すことあるし、基本なんでも読むかな」

微妙に嬉しそうにしているのは若葉だ。

「若葉もこういうのを読むのか?」

「少しな。——人はおおむね自分で思うほどには幸福でも不幸でもない。肝心なのは望んだり生きたりすることに飽きないことだ

「」

それを聞いてクスッと笑ったのは航暉だ。

「なるほど。彼は『魂の致命的な敵は、毎日の消耗である』とも言っている。なるほど、休息も刺激も人が生きていくには必要だ。忠告感謝するよ、若葉」

少し硬い髪感触を手のひらに感じつつ航暉は少しくすぐったそうにする若葉を見て微笑んだ。

「確かに提督には休息が必要かもしれませんが……。……お邪魔になってはいけませんし。この辺りでお暇いたします」

筑摩が頭を下げて出ていく。それに続いて艦娘たちが出ていくと航暉は静かに溜息をついた。

「……やれやれ、新入りにも気を使われるか」

航暉は本を開く。紙と黴の匂いはどこか懐かしく、また寂しかった。

「ごめんね、ありがとうございます。」

夢の中の少女、あの少女は誰だったか。

その面影を、あったことのないはずの少女の面影を探してしまう。手に収まるはマクベス。開かれた頁は第五幕第五場。

「消えろ、消えろ。束の間の灯火、人生は歩く影法師、哀れな役者だ。舞台の出の間だけ大威張りで喚き散らし、幕が下りれば沈黙の闇、たかが白痴の語る一幕の物語。怒号と狂乱に溢れていても意味などひとつもありはしない」

それは諦観か、はたまた嘆きか。航暉自身にも判断がつかない。

その胸騒ぎも含めて全て納得したことにして、彼は改めて横になった。

「にやゝ、疲れた……」

机にぐでつと伸びたのは睦月である。その向かいには望月が、望月の隣には弥生が、弥生の目の前、即ち睦月の隣では如月が同じように伸びている。

ここは第551水雷戦隊の待機室、時刻は1930、普段なら夜間の緊急出撃要員を除いてオフに突入する時間でもある。

「はいはいはいはい、みんなもう少しだから頑張るよー」

素晴らしいながら紙コップに入ったオレンジジュースを配るのは阿武隈だ。

「どうしてこんな時に提督が倒れちゃうかなあ……」

この事態は睦月が提督と呼ぶ人物——月刀大佐が倒れたことに端を発している。普段は合田司令官と月刀司令が捌いている書類——それを分担して捌かなければならないという事情があるのだ。

合田司令官が書類に圧殺されそうになっているのを見かねて551水雷戦隊旗艦の阿武隈が見かねて「手伝いますよ」と声をかけたのである。それを睦月たちにも分配して隊で処理しようとした結果が……これだ。

「……私たち、艦娘だし……書類の要約能力なんてあんまり使わない……」

「だよね。マジめんどくせえ」

やり直しが多かったのは睦月と望月だ。今やっているのはそのやり直し作業だが、やる気が下限目一杯まで下がり切っているため延々と進まないのである。

「でもできた方がいいに決まってるじゃない。睦月、ほら頑張らないと」

「望月も……頑張る」

それを横から叱咤激励するのは如月と弥生。この中で一番事務スキルが高いのは以外にも弥生だったりする。

「阿武隈さんの分は終わったんですか？」

「うん、一通りね。さつき真つ白に燃え尽きた司令官にできた分まとめて出してきた」

「あ、合田司令官もこういうの苦手なんですか？」

「苦手というより遅いの、こういう作業」

困ったように笑う阿武隈は自分の分のオレンジジュースを煽って笑った。

「まあそれも含めて支えてあげるのが私の仕事なんだけどね。さ、頑張るよー！」

阿武隈にそう言われて渋々書類に向き合う睦月と望月、如月たちの書類はもう消えている。

「ねー如月」

「ダメよ」

「むー、まだ何も言っていない」

「半分ことかそう言うことでしょ。しっかりノルマはこなしなさいな」

正直どちらが姉かわからないのはいつものことである。

「まああと4枚だし頑張っていこうー！」

「……はーい」

そんなこんなで夜は更けていく。

航暉に電腦通信がつながったのは十分に夜も更けた午後10時近くになってからだった。

《ようカズ、風邪ひいたって?》

「……誰から聞いた?」

《そりゃあ、お前ん基地から送信される書類にさ。お前のサインが一つもないからな。で、グアムの軍病院にコンタクトがないとなると、風邪などの軽い病気による病欠”ってわけだ》

通信の奥で高峰はくつくつと笑う。

「で、風邪つびきの俺に何の用だ? 冷やかして訳でもないだろう?」

《お見舞いと言ってほしいね。……まあ、あたりだが》

直後、一瞬のノイズ。回線がスイッチングして軍用のラインの奥深くに潜る。

《“ロビー”でできる話じゃない。“飛んで”くれるか?》

また厄介ごとか、と辟易としつつも航暉は通信先に意識を向ける。直後目の前の空間が引き伸ばされるように遠のき、すぐに別の空間――バーカウンターの備えられたパブのような空間を知覚する。自分の服装が第一種軍装のアバターに切り替わる。

「どこだんか」

「カズを招待したのは初めてか。特調六課のワードルーム」

振り向くと第二種軍装の高峰春斗が立っていた。……そういえばこいつのアバター年から年中夏服だっけと思いつく。

「……今から取り調べとか言うんじゃないだろうな」

「まさか、と言いたいところだが、場合による」

座れよ、とバーカウンターを進められ、そこに腰掛ける。その隣に腰掛けた高峰が腕を振るとひとりでにショットグラスが現れた。

「とりあえず飲んでくれ。盗聴ライン防止機能補強用のパッチだ」

グラスに注がれた液体を軽く傾け液体を“視る”。口にすると喉が焼けるような感覚を覚える。スモーキーフレーバーに少し驚く。

「……スコッチか」

「リンクウッドの10年物のイメージでメモリをいじってる。こうい

うのもおしやれだろ?」

けらけらと笑い、高峰もそれを口に含んだ。

「……いきなり呼び出してすまなかった。だが、〃そこそこ緊急性の高い話〃だと思ってくれ」

声色は世間話でも続けようかという色合いだ。

「俺がいま特調六課から出向してるの話したか?」

「いや、初耳だ」

「今、極東方面隊総司令部のカウンターテロ委員会に出向中だ」

「……マニラか」

苦い顔をしてもう一口液体を含む。

「そうだ。いま、カウンターテロ委員会はマニラ湾観艦式緊急戦闘の分析中だ。その途中経過について少しお前に話しておきたくてな」

「いいのか?」

「お前の身を守るためだ。聞いとけ」

高峰がショットグラスでマホガニー色の天板を叩くと波紋が広がるように天板が透き通り、画像が現れる。

「とりあえず、これを見てくれ」

「……これをどこで?」

「昨日、1734UTCに動画投稿サイトにアップロードされたものだ。これが電網監視局ビックブラザーに引っかけたよ。——見覚えがあるだろう?」

「ああ、この戦闘を俺たちは指揮したからな」

画像は荒れていて見にくいのが、映っているのは——島風。魚雷艇との間をすり抜けるように走り回っている。視点は……イージス艦のデツキからだろう。

「元動画は削除済みだ。だが転載も始まっているし完全削除もできないだろう……いよいよ対人戦闘から目をそらすことができなくなってきたわけだ」

ショットグラスが二回、天板を叩く。画像が切り替わる。

「これはまあ、些細な問題」だ。問題はこつち。これは別ルートで別のサイトにアップロードされたものだ。……なあ、この時お前、気が

ついでたか？」

息をするのをためらうほどの衝撃を受けた。

「……あり得るかこんなの」

「気づいてなかったんだな？」

「当然だ。気づいてたらとつくの昔に報告してる！」

その映像は視界のブレが激しく何をしているかわからないほどだ。音声はなくなつただ淡々と激しくブレる画像が続く。

「……どうやって盗んだんだ。『島風の視覚』なんて」

「この時のリンク状況は？」

「フリップナイト使用中だ。強度はほぼ最大に近い」

「枝が割り込む隙は？」

「あつたら潰してる。少なくとも俺と島風の間リンクには割り込まれてなかった。メモリ活用量も双方一致しているのは戦闘終了後のデブリーフィングでも確認済みだ」

「こちらに転送されていた戦闘状況も見ても枝が張られていた可能性は低い。……考えられる流出経路は三つだ。一つめ、フリップナイトシステムにセキュリティホールもしくはバックドアが設置されておりそこから第三者へ流出、二つめ、島風とカズの間枝が張られてそこから流出。三つめ、内部犯」

「……俺も被疑者つて訳だ」

わずかに笑つてそう言うと、高峰は悲しそうな顔をした。

「それが一番『手っ取り早い』んだよ。おそらく、フリップナイトシステム推進派の技術開発局も平菱インダストリアルもシステムエラーを認めない。だから『あの司令部の誰かのせい』にしてしまえばいい。そして、島風とリンクしていたのはお前だ、カズ」

「俺がそれをしてなんの益を……あーくそ、月岡コンツェルンか！」

「『月一族』の利権を守りたかつた……疑う理由には十分すぎる」

月刀航暉は軍閥『月刀家』の人間だ。軍需産業の一翼を担う「月岡コンツェルン」、そのトップに君臨する月岡家とは親戚関係にあたる。

そして、最近の艦娘建造プロジェクトでは、月岡コンツェルンの重

工業部門であるポセイドンインダストリー社がライバル社の平菱インダストリアル社に水をあけられている。そのきっかけとなったのが平菱インダストリアル社提案の「コンセプト・フリップナイト」であり、そこから誕生した「フリップナイトシステム」だ。

航暉は頭をガリガリとかきむしった。

「頭皮にダメージ与えてたらいつか剥げるぞ」

「その歳まで生きてればいいがな。……ここでフリップナイトシステムの危険性が露見してしまえば平菱インダストリアル社の優位性は白紙に戻る。そうすればポセイドンインダストリーの次期計画……

“理想郷計画” 実用化まで時間が稼げるって訳だ」

「状況がわかってもらえたようで何より。念のため聞くが、お前、本当に流していないか？」

「……高峰が言うか？」

「念のためって言っただろ。お前の実家嫌いは嫌というほどわかってるさ」

そう言った高峰はグラスを回す。

「だがお前の状況が “限りなく白に近いグレー” である以上、疑いの目は避けられない。限りなく黒に近いグレーが裁けないのと同じだな。だから、お前の白を証明するには」

「本当の黒が必要って訳だ」

「安心しろ、カウンターテロ委員会はお前を “第一被疑者” だって思ってるわけじゃない。——本命の “黒” の話に入るぞ」

高峰の表情がすつと冷える。

「カウンターテロ委員会ではスルー海軍のシステムにクラッキングを仕掛けた人物と同一の人物が島風の目を盗んだとみている」

そう言うときと天板にデータが表示される。表示されたのは大量のスクリーンショット。それがゆっくりとスクロールするように流れていく。

「これは？」

「割り込まれたリカルテの武装管制システムのテキストコピー。……あの時のテロリストグループの取り調べによると “あの戦略” を持ちかけてきたのは外部のクラッカーらしい。彼らの記憶をたどって

電紋——声や指紋が個人を特定するように、電脳によるネットへのアクセスも個人を特定しうる情報となる。そういう個人を特定しうる情報の痕跡が電紋だ。

「合田直樹……お前んとこの合田正一郎少佐の父親だ」

「はあ？ 死人がハッキングしましたとでも言うつもりか？」

「さあな、おそらくこの電紋もブラフだろうが、警戒した方がいいだろう。実際合田直樹の死体は首から上が吹っ飛んで脳殻が完全に破壊されてるんだ。首から下の生身の部分が一致したから死亡と判断したが、吹っ飛んだ脳みそが『本当に彼の脳みそだったのか』は証明できん」

それからしばらく無言が続いた。

「……高峰」

「なんだ？ カズ」

「この後の戦い、何が必要になると思う？」

「……さあな。少なくとも人間は必要だ」

「……そうだといいな」

航暉が立ち上がる。

「いい話が聞けた。こちらでも警戒しておく」

「待て、カズ。別件で一つだけ、聞きたいことがある」

去ろうとした航暉の肩を高峰がつかんだ。

「……なんだ」

「お前の前の経歴だ。日本国自衛陸軍第二五五歩兵中隊第三強化歩兵分隊、お前が海軍に来る前の最後の軍歴はこれで合ってるか？」

「それがどうした」

「……あつてるんだな？」

「ああ、その分隊長で最終階級は三等陸尉、これでどうだ？」

「シースクランブル7、17の時はどこにいた？」

「質問は一つじゃないのか？」

「……いや、悪かった。忘れてくれ」

航暉の姿が掻き消える。残された高峰はその記録を覗き見る。

「……カズ、まさかお前も『ごつち』の人間じゃないだろうな」

ミネラルウォーターを冷蔵庫から引つ張り出して、煽る。わずかに火照った体には心地よく染み渡っていく。

「……さて、どうしたものかな」

航暉は常夜灯に切り替えられた給湯室の隅で自嘲するように笑った。ペットボトルの中の透明な液体が自分を睨んでいた。

「……お礼くらいちゃんと言わせろ。合田少佐」

「よく気づかれましたね。体調は大丈夫ですか？」

部屋に入ってきたのは運動着姿の合田正一郎少佐だった。

「ああ、まだ完治って訳じゃないが大分よくなった」

「そうですか。なら明日の書類整理は楽できそうです」

「阿武隈にもお礼言っといってくれ」

「わかりました」

冷蔵庫のペットボトルを投げて渡すと乾杯をするようなジェスチャーをかわす。正一郎は軽く笑って背を向けた。

「病み上がりなんですから、早くお休みになられた方がいいと思いますよ」

「君も成長期だろう？ お互いしつかり休むとしよう」

正一郎が給湯室を出ていく。それをみて少し溜息をついた。

「……隠し事はお互い様か、寂しいもんだ」

航暉ははそう笑って部屋を静かに出ていった。

「……え？」

彼女は驚いていた。

「なんでこんな所に、深海棲艦が……」

彼女がすぐに「アレ」が深海棲艦だとわかった。それは彼女が艦娘だったからこそすぐに気がついた。

「……知らせなきや」

彼女は無線機をとりつつ主機を微速へ、少しでも目立たないように体勢を低くする。

「こちら578DSq——きやあっ!？」

直後に水柱がすぐ左横に立ち上がる。最速で海域を抜けなければと主機を吹かす。

「オフサイド、こちら578DSq……なんでこんな時に無線機が壊れちゃうかなあ」

この場合は時間が惜しい。使うなど言われていたけれど、非常通信用の通信機のアンテナを立てる。コード34、緊急事態発生。

とりあえずこれで少なくとも彼女に何かがあつた事は伝わったはずだ。

後はここから撤退するのみ。全速力で逃げにかかる。直後、彼女の意識が一瞬吹っ飛んだ。

砲弾が当たったのだと知るまでにあまり時間はかからなかった。

コンデイション・オレンジ
第二種警戒態勢が発令され、ウェーク基地の空気は一瞬で澄んだ。
緩んだものから張ったものへ、緩から急へ。

その10分後、食堂兼会議室には付近哨戒に出ていた睦月と如月を除くすべての艦娘と合田正一郎第551水雷戦隊司令官がそろっていた。そこに航暉が現れる。相互に敬礼、着席と同時にデータが壁に表示された。

「昨日11月1日14時38分、西之島周辺に敵の大規模泊地が発見された」

「西之島？」

頭に「？」を浮かべていたのは暁だ。

「父島から西に大体130キロつてところだ。これで父島をはじめとした小笠原諸島が襲撃予測域、関東州沿岸が襲撃警戒域、そのほか本州四国の太平洋沿岸が襲撃危険域に入った。これを受けて硫黄島の578DSqが小笠原諸島の人員の避難のための船団護衛を遂行中だ」

深海棲艦であれば130キロなんて軽く往復できる、むしろ近距離と言えるだろう。当然非戦闘員は避難しなければならなくなる。

それを聞いて口を開くのは天龍だ。

「規模は？」

「おそらく三個艦隊程度と見られる」

「おいおい、なぜそんな大部隊になるまで気が付かなかったんだ？」

「海底火山の活動が活発すぎて艦娘も偵察機も近づけなかったんだ。火山灰を機関が吸い込んだら溶融からの再凝固でエンジンが一発でアウトだからな。噴煙も酷くて衛星もアウト、通信もその火山灰のせいでジャミング状態のためアウト、レーダーは西之島上空が完全に飽和して使い物にならなかった。いや、今も」だがな」

「で、いつの間にか侵入されてた、と」

「そう言うことらしいな」

「それで、今もレーダーなどが使えないのにどうして部隊の存在がわかったんだい？」

疑問を投げかけたのは響だった。

「578DSqが一応偵察に出たんだ。そしたらばったり。……発見したのはDD—SR06 “五月雨”、敵艦隊発見直後に交戦し、命からがら逃げ延びた」

「それで、上層部は？」

先を促したのは合田正一郎少佐だ。

「極東方面隊総司令部は危機管理レベルを一段階上げてデフコンIIIへ。また敵艦隊の殲滅を目的とした “オペレーション・アリュキョクトクス 銀弓 作戦” の発動を宣言した。中部太平洋艦隊、西部太平洋艦隊及び潜水総隊の合同作戦となる。また国連空軍の支援も入る」

「コンデイションオレンジ第二種警戒体制が出たってことは私たちも参加ですか？」

そう言ったのは初霜だ。

「基地の防衛を553DSqの第2小隊に任せて基地所属全艦での参加となる」

「基地所属全艦……！」

「ミッドウエー攻略隊救出作戦以来の大型作戦だ。作戦部隊の総指揮官は西部太平洋第一作戦群総司令の中路中将だ。中部太平洋からは第三分遣隊と第551水雷戦隊、潜水総隊からは第597潜水艦隊が参加だ」

「……ほんとに大規模ね」

如月が珍しく沈み込んだような表情をした。

「ここが潰されれば日本は再び直接爆撃を喰らう。早急に対処しないと補給路も断たれてあつという間に極東方面隊は干上がるぞ。出し惜しみもくそもない」

そう言うのと航暉は声を張る。

「第三分遣隊の出撃は2時間と15分後、1300に先行して出発。マーカスで一度中間補給を経て、硫黄島基地へ。551TSqは553に引き続き後、輸送機で先に現地入りし哨戒任務にあたる。以上解散！」

「了解！」

全員の声がそろそろ。空は快晴、絶好の進撃日和だ。

硫黄島基地。

国連空軍の護衛機エスコートに連れられて降り立ったそこは名前の通り、わずかに硫黄の匂いが漂っていた。

「こんなに早く会えるとは思ってませんでしたよ。中将」

「うまくやってるようで何よりだ、航暉」

硫黄の匂いから逃げるように建物に入った指揮官たちは玄関口ビーで改めて敬礼を交わす。後ろから追いついた551水雷戦隊のメンバーが合田の後ろに並んだ。

「中部太平洋第一作戦群第三分遣隊司令、月刀航暉大佐、及び同第二作戦群第五分遣隊第551水雷戦隊司令官、合田正一郎少佐。只今到着いたしました」

「協力感謝する。551の君とは初対面だね。西部太平洋第一作戦群総司令、中路章人中将だ」

「申し遅れて申し訳ありません。第551水雷戦隊司令官、合田正一郎少佐です」

「それで、状況は？」

航暉が聞くと四角い箱が投げられる。電腦直結式の外部記憶装置インフォメーション・キューブだ。航暉は箱を押し込むと接続プラグが顔を出し、それを自分のうなじに押し当てた。わずかなノイズ、の後、データを取り出し、切り離す。同じようにして正一郎もデータを受けとった。

航暉は無表情のままそのデータをザッピングしていると、中路がザッピングが終わるのを待たずに口を開いた。

「到着早々悪いが551には付近の哨戒に出てもらう、合田君、大丈夫かね？」

正一郎が振り返り阿武隈を見る。彼女が頷き返すと正一郎は改めて中路と向き合った。

「問題ありません」

「よろしい。確認できている敵の艦隊に非戦闘艦らしき艦影が認められる。潜水母艦の可能性もある。対潜哨戒を厳としてくれ。……睦月君」

「ふえ、あ、はい！」

いきなり呼びかけられると思っただろう。ぼうっとしていた睦月は慌てて姿勢を正した。

「今回の作戦の対潜哨戒担当艦の適任として中央戦略コンピュータが君の名を弾き出した。相応の活躍を期待する」

「へ？……え？ それってどういう……」

「要は期待してるから頑張れってことだ」

航暉が笑う。直接の上司からは外れたとはいえ、部下が褒められて喜ぶくらいの感性は持ち合わせていた。

「合田君、この先の中央作戦指揮所のC-1卓を使ってくれ。阿武隈君以下551TSqは出撃用意を。その階段を降りたところで村雨君が待っているはずだ」

「了解しました」

551水雷戦隊の面々が動き出す。ロビーには航暉と中路中将が残された。

「なぜ合田少佐が呼ばれたのです？」

「……」

航暉の言葉に中路の表情がより硬いものへと変わる。

合田の所属は中部太平洋“第二作戦群”。水雷戦隊を主体にした防戦を主体とする作戦に従事する部隊の指揮官をわざわざ西部太平洋艦隊が管轄するエリアに配置するにはそれなりの理由がある。今回だって、わざわざエニウエトク基地から部隊を割いてウエークを守るなどかなり無理を押ししているのだ。航暉の疑問もある意味当

然だった。

第一種軍服のタイを少し緩めた中路は航暉に首の後ろから引き出したコードを渡す。それを受けとった航暉は自分のうなじに差し込んだ。

『……銀弓作戦発表15分前に極東方面隊司令部のトップダウンで急遽決まったんだ。理由は中央戦略コンピュータがDDMT01“睦月”の参加を提案したから。——指揮官付で派遣をねじ込むには不十分だ。航暉が出張ることは決定してたからお前が基地代表として出張る以上、睦月だけを臨時で538に編入すれば済む話だ』
『つまり、裏がある?』

『そう考えるのが自然だろう』

なるほど、そのための有線通信かと航暉は納得した。有線通信は外部から枝がつく可能性をほとんどゼロにできる。疑っていることを悟られたくなかったのだろう。

中路が溜息をついた。

『作戦部隊には知らされない“なにか”が“合田少佐”の周りで動いている。……航暉、“ホールデン”というハッカーについて聞いているか?』

『……高峰からは一通り』

『どこまで?』

『スールースルタン海軍のイージスシステムのクラッキングを行った人物で、島風の目を盗んだ可能性が高い人物。……電紋は合田正一郎少佐の父、合田直樹元中将与一致しているものの真偽は不明』

『追加でもう一つ、合田中将は撃たれる直前、大量のデータをどこかに転送した』

『……それが?』

『データの送り先がエシエロンから抹消されてる』

『……国連軍の最上部が絡んでいる、と?』

ぎよろりと中路の目が回る。エシエロンシステムと言えば深海棲艦が現れる前から存在する巨大な通信傍受網の総称だ。以前は帝政アメリカが運営していたが国連軍へと管轄がシフトしたはずだ。

『どのレベルかは知らん。だが極東方面隊の総合司令部以上の権限が絡んでいることは確かだろう』

航暉はそれを聞いて考え込むように黙っていた。中路がここでホールデンの話を切り出した意図を測り兼ねていたからだ。すると中路が言葉を続ける。

『私は“ホールデン”の正体を国連海軍上層部の自作自演の産物だと見ている』

『……目的は？』

『水上用自律駆動兵装運用体制の変革、といったところか。最近は最低限度の制海圏は確保できつつあったからな、深海棲艦との戦争の終結した後を見据えておきたいんだろう。そのためにマニラで艦娘の対人戦闘をカメラの前で行わせた。そのスケープゴートとして合田中将とその息子が利用されている可能性がある。』
——合田少佐の経歴は知っているか？』

突然の質問に面喰いながらも航暉は自分の記憶を探る。

UNNS-tac-Hiroshima

『国連海軍大学広島校の前は民間校で学生をしていたのでは？』

『そうだ。スカウトを受けた理由は？』

『父親の関係で軍のデータベースに登録されたDNAに運用士官としての適性が認められたから、だったはずですが』

『私もそう聞いている。……彼が情報オリンピックに出るほどの腕前を持っているというのは初耳かね？』

『……彼が？』

『そうだ。彼の経歴を見るとそこでスカウトが声をかけたことになっている。正確には“なった”って言う方がいいだろう。情報の書き換えが現在進行形で行われているようだ。』
——航暉、あの子を守れ。もうすぐ、あの子が“ホールデン”にされるぞ』

『軍に親を殺され、その復讐の為に俺や中将が関わる作戦でハツキングを行ったとなれば、お涙頂戴の三文悲劇の出来上がりって訳ですか。……安ついシナリオだ』

航暉が笑えば、中路は僅かに目を伏せた。

『もしこの予測が当たってしまったら、ほぼ間違いなくこ

ここで「ホールデン」が仕掛けてくる。ホールデンの役割自体はおそらくマニラの件で用済みだろう。誰かを犯人にでっち上げてとつと事態を収束させる。次の段階は別の要因で動かせばいい』

有線を切る。中路のうなじにコードが引きこまれ、彼はネクタイを整えた。

「深海棲艦だけが敵じゃない。いつの世も最も浅ましく、最も脅威となるのは「人間」だ。だが、我々が守らねばならないのも人間だ。彼を守れ、飛燕」

中路が歩き出す。その後について航暉も歩き出す。

「ミスは一つも許されん。付け入る隙を与えずに最速で叩き潰すぞ」

作戦指揮所に踏み入れる。

戦闘が幕を開けようとしていた。

海上を進む艦影はうつすらと見えてきた島影に溜息をついた。

「はあく、やつと到着かあ」

「結構長かったのです」

溜息をついたすぐ上の姉の隣で笑うのは電だ。

「もー、みんな遅いんだもん、退屈だよ」

「島風さんが速いんですよ」

「ぼやく島風をどうどうとなだめるのは龍鳳、赤に近い服は海の上では結構目立つ。」

「えへへ、やっぱり？ 深海棲艦がいるってわかってるのに海は静かなもんだよねー？」

「だからこそ気を付けなくちゃいけないだろう？ 潜水艦だっているかもしれないんだ」

響はそう言うのと隣を進む暁に目を向けた。

「姉さん、何か見えるかい？」

「硫黄島とこの艦隊以外にはなにも……利根さんたちはどうかしら？」

「こつちもなにも見えんのお」

利根と筑摩も付近の確認に入っている。この辺りは睦月たちがすでにクリアリングを行ってているはずだから大丈夫だとは思いますが、それでもやっておくに越したことはない。

「……雷撃だけは怖いからね」

「大丈夫だ。安心しろ。私たちが守ってやる。」

「なんだかえらそうだな、若葉」

不安そうな大鳳を励ましたのは若葉だ。それに突っ込むのは天龍、横では龍田が笑っている。その反対側でクスリと微笑んで初霜は目を横に向けた。わずかに煌めく海面を見て、声を張り上げる。

「方位三時半、距離2000に潜望鏡！」

「マスターアームオン、対潜戦闘用意なのです！」

初霜の報告に電がほぼ反射でそう叫び、自身の舵を右へと切る。ア
クティブソナーを一発。

「捕捉！・ASPパターンアルファで応戦します！」

《対潜警戒が薄いけど、動きはいいから及第点、なのね！》

訳のわからない無線が飛んできて、電は一瞬戸惑う。その間に電の
目線の先に一つの影が現れる。

「ぶはっ！ 遠路はるばるお疲れ様、そして硫黄島へようこそ西部太
平洋第一作戦群第三分遣隊の皆さん、潜水総隊第一潜水隊群第597
潜水隊の伊19なの！」

「み、味方あ……？」

暁が気の抜けた声を出した。

「長旅で疲れてるのはわかるけど、距離2000まで近づかれたらも
う魚雷を撃たれてるのね。もっと気を付けるのがいいの」

青い水着が豊満な体の曲線を強調している。そんな彼女が横に並
ぶ。背泳ぎのようにしながら電を下から捉える。

「あなたが電ちゃん？」

「はい……伊19さん」

「イクって呼んでもいいの。……アクティブソナーの発振のタイミン
グが少し早いと思うのね」

「あ、ありがとうございます。イクさん」

「さっきのお詫びなのね。……同じことを睦月ちゃんにもしようと
したら殺されかけたのね。あの子、こつちが無音潜航に入ったのにきつ
ちり居場所と深度きつちり合わせて爆雷落としてきたの」

「あっちゃあ……味方に対して何してんだ、あの野郎……」

頭を抱えるのは天龍である。

「初めてソナーでモールス撃つたのね……。とりあえずドックまで案
内するのついてきて……あと電ちゃん、もっと派手なもの履いても似
合うと思うの、味気ない綿の白よりいいと思うのね」

イクがそう言って先頭をすいっと滑っていく。電は何を言われた
かわからなかったが、5秒ほどたつて理解すると瞬間湯沸かし機並み

の速度で頬を染めた。

「ハーイ、第三分遣隊の人たちを連れてきたの！」

「ロ、ロリっ子じゃあああああああ！」

作戦会議のために会議室に足を踏み込んだら、男の人が奇声を上げながら宙を飛んで向かってきていた。ターゲットにされた初霜はかなりの速度で飛び退いて事なきを得る。まあ、飛びつかれる前に彼女の司令官たる月刀航暉大佐が腰の入った蹴りを決めて止めたのだが。

「な、なんなんですかこの人！」

「一言で言うなら、『変態』」

床に突っ伏している第一種軍服の横で航暉が溜息をついた。

「潜水総隊第一作戦群第597潜水隊司令、渡井慧大佐だ。案内を頼んだ伊19の直属の上司にあたる。潜水艦指揮だけは信頼していい」

航暉がそう言うと、突っ伏したまま渡井は左手だけを上げて挨拶をした。体形は中肉中背、突っ伏したままで顔は見えないが短く切りそろえられた髪は清潔感もあり、悪い印象はない。

「ちよ、容赦ぐらいしてよ……」

「初対面の女性に飛びつこうとする犯罪予備軍にどう遠慮しろと？」

突っ伏したまま呻いている渡井に冷たく返す航暉。その背後でケラケラと笑う声がして、電は声の方向へと注意を向けた。その視線の先にある椅子に窮屈そうに腰掛けている大がらな男が目に入る。第一種軍服の前ボタンをはずしたラフな格好、大きくはだけたワイシャツの胸元にはドツグダグが光っている。

「ちげえねえな。渡井、そろそろお縄につけよ」

「……杉田中佐？」

「おお、電の嬢ちゃんは覚えてくれてたか。MI撤退戦以来だな。その時は世話になった」

杉田は電のところまで来ると彼女に向かって右手を差し出した。褐色の骨ばった手が電の小さな白い手と重なり握手を交わす。

「いえ、お元気そうだなによりなのです」

「おう、月刀の部下はきつかりろう。飽きたら俺んどこに来いや」

「おいこら、長距離専門のスナイパーが駆逐艦口説いてどうすんだ？」

航暉があきれたようにそう言うのと地面に突っ伏していた渡井が起き上がりながら笑う。

「月刀の命令は結構無茶振りがくるからね。その下で働く彼女たちが心配なだけじゃない？」

「潜水母艦にスク水着せたら潜れるんじゃないかなんてほざくお前よりはマシな判断だと思いがなあ、渡井」

「……誰から聞いた？」

「高峰」

「……あの野郎」

苦虫を噛み潰したような表情をする渡井を笑って杉田は振り返る。

「その点うちはクリーンだよな？ 武蔵」

「さあな」

壁に寄り掛かるようにした少女にしては背丈の高い女性は眼鏡の奥で笑う。褐色の肌が艶やかに光る。

「楽ではないが、そうひどくもないぞ。32キロ精密射撃は勘弁してほしいが」

「そうかい、だがそれができるのはお前と大和ぐらいなものでね。しばらく耐えてくれや」

武蔵と呼ばれた女性は腕を組み、小悪魔のような表情を浮かべた。

「武蔵、そーいやお前の姉はどこへ消えた？」

「あいつは恥ずかしがりやだからな、中路中将といっしょだろう」

「ほう、本当に二人とも引つ張り出したのか？」

航暉がそう言うのと杉田が肩を竦めた。

「“作戦が作戦”だからな。金剛たちじゃ射程が足りん」

「それでガンナー付きで派遣してきたって訳ね」

そう言うことだ、といったタイミングで会議室のドアが開く。

「提督―？ ブリーフィング始まるんだって―？」

水着の上にセーラー襟の上着を着た少女を先頭に潜水艦らしき艦娘が3人と割烹着風のエプロンをつけた女性が入ってくる。それを見て驚いた表情をしたのは暁たちだ。

「あれ、龍鳳さんコスプレ？」

暁が振り返るといつもの赤い服の龍鳳がにこにここと微笑んでいる。

「え、あれ、龍鳳さん？ え、じゃあ、こっちの龍鳳さんは？」

雷がすごい勢いで首を振りながら見比べていく。

「お久しぶりです、龍鳳」

「お久しぶりです、大鯨 “姉さん”」

「姉さん!？」

暁型の声がそろった。

「はい、こちらは私の双子の姉、潜水母艦 “大鯨” です」

「妹の “龍鳳” がお世話になってます。第597潜水隊旗艦、AS―

TG01大鯨です」

「あらためてどうぞよろしくお願いします」

ステレオ状態でそう言われてぽかんとする第三分遣隊の面々。それを見てくつくつと笑うのは渡井だ。

「それにしても驚いたよ。大鯨に双子の妹がいたなんてな」

「軽空母が足りなくなりそうってことの苦肉の策なんですけどね」

そう言って笑うのは龍鳳、その隣で大鯨も笑う。

「でもこうやって会うのは本当に久々なんです。少しうれしいですね」

「大鯨優しいし、いい人だしね」

会話に割り込んできたのは大鯨と一緒に入ってきたスク水+セーラーの女の子の一人だ。日焼けした肌にオレンジのセーラー襟が映える。

「えっと、あなたは……」

「あ、そっか。私もMI攻略隊救出作戦に参加してたんだけど、会わず

に帰ってきたんだっけ。ごめんごめん。申し遅れました、潜特型の二番艦、伊401です！ しおいつて呼んでね。そしてこつちが」

「伊168よ、イムヤでいいわ」

「伊58でち。ゴージャって呼んでもいいよ？」

「その三人とイク、大鯨で597潜水隊だ。改めてよろしく頼むね」

最後に締めくくったのは渡井だ。痛みが引いたのか普通の笑顔を浮かべていた。

「MI作戦、潜水艦なんて参加してたの？」

「中路のおっさんが別命をだして先行配置してやがったんだ。最後の最後の雷撃だけ参加」

暁の声に航暉が苦笑いを浮かべそう言った。それを励ますように肩を全力で叩いたのは杉田と渡井だ。

「いてえなお前ら」

「中路のタヌキを出し抜くにはまだまだだってことだな」

「お前までタヌキになられちゃこつちも叶わないけどな」

「誰がタヌキだね？」

「げ、中将」

そのタイミングを見計らったかのように中路中将が顔を出した。その後ろには神通や雪風の姿、そして551水雷戦隊と合田少佐の姿も見える。

「待たせた。ブリーフィングを始めよう」

皆が席に着く。教壇のような正面の指揮官卓に中路中将が付き、残りの指揮官が最前列その後方に艦娘たちが着席する。

「現状を確認する。西之島周辺に確認された敵艦隊の規模は3個艦隊以上の規模と推測されるものの、詳細についてはわかっていない。現状確認できるのは戦艦ないし空母5、その他補助艦艇多数だ」

照明が落とされ、西之島周辺の海図が表示された。
「だが、最大の問題はそこではない。一番の問題は西之島及びその近海の火山活動によりその周辺に近づけないことだ」

西之島を中心にした半径20キロほどの円が一つ描かれ、内側が半透明な赤に塗りつぶされる。それに重ねて一つの焦点する東西に長

い黄色い楕円が地図にオーバーレイされる、東西35キロ、南北20キロぐらいだろうか。

「赤の楕円が西之島火山の噴煙により接近が難しいエリアだ。ここは静電気を帯びた火山灰が噴出しており、無線及び戦術リンクも使用できない。また、このエリアでの行動は缶の停止を招く恐れが高く、我々にとつては『死の領域』となる。黄色い楕円は噴出した火山灰が風にのって流れているエリア、ここでの戦闘も可能な限り避けなければならぬことに留意しろ」

地図にはもう一つ点が現れる。西之島のすぐ西側だ。

「敵艦隊が停留していると思われる地点がここだ」

「思いつきり危険域の中心じゃのう……」

コメントをしたのは利根だ。それに中路が頷く。

「どういう原理で活動しているかがわからないが、深海棲艦はこの状況でも活動が可能であるらしいな。さて、我々がこの艦隊を叩くにはこの敵艦隊との距離を詰めなければならない……そこで、だ」

中路は目線を走らせた。

「521戦隊の大和・武蔵による超長距離砲撃により敵艦隊を噴煙危険域から引きずり出す」

「射撃条件はどうなります?」

目を閉じ思案をしているらしい杉田が聞き返した。

「国連空軍のEA-18Gが高高度から投下式戦術情報ポット^{D T A C}を投下しその索敵結果を使用する」

EA-18Gといえば、深海棲艦発生前から活躍していたマルチロール機の電子戦対応バージョンだ。

「で、そのポッドが無事にデータを送ってくれる保証は? そのポッドだつて無線レーザー通信方式だったはずだ。長距離通信よりも信頼性が高いとはいえ、火山活動の最中で使えるもんじやないのでは? 曳航式の有線作戦ポッドは使えないのか?」

上官相手にする言葉遣いではないが、中路の部隊では日常的なものなのだろう、中路も気にせず進めていく。

「それを実行しようとすれば噴煙の中に空軍機を突っ込ませることに

なる。そうなれば火山灰がエンジンの中で固まってフレームアウト、墜落だ」

「曳航索の長さが足りんか……」

「いっそのこと空軍ご自慢のスマート爆弾で絨毯爆撃したほうが早い気がしますね」

そう言ったのは渡井だ。

「沈めることができないとしても通常爆撃がある程度の効果があることはわかっています。それでおびき出せませんか？」

「絨毯爆撃できるほどのスマート爆弾を用意するだけで1ヶ月以上かかる。そんな長い時間小笠原諸島沖の飛び石航路を封鎖していたら日本をはじめとした極東諸国が干上がる」

「……D-TACポットに託すしかないのか」

天井を仰いでそう言った杉田が目を開いた。

「精度がどこまで出せるか未知数だが何とかやってみる。だが移動する艦隊を砲撃だけで指定方位に誘導できる保証はないぞ」

「もちろんわかっている。だが相手が危険域から出てしまえばこちらに有利だ。今ここには龍鳳君と大鳳君がいるし、明日には525の祥鳳、瑞鳳が合流する。正規空母1、軽空母3で航空戦力を固める。大和・武蔵をはじめこちらには532戦隊の利根君、筑摩君、524戦隊の古鷹、加古、神通以下526水雷戦隊、538水雷戦隊、551水雷戦隊、578駆逐隊、597潜水隊」

「大攻勢と言っても差支えない編成だな」

笑うのは航暉だ。

「だが今回は事情が事情だ。危険域を挟んだ場所での戦闘が発生してもそう簡単には応援にいけない。数がいても少数で多数を相手にせねばならん状況は十分に考えられる。また急な風向きの変化や海底火山の影響、有毒ガス、噴煙、戦闘以外の状況の変化も考慮しなければならん。指揮官はいつも以上に慎重に部隊を動かさねば艦娘を沈めることを自覚し、艦娘たちはそう言う危険な状況で戦わねばならぬことを肝に銘じろ」

中路の言葉が部屋に響く。

「主に部隊は四つだ。大和を旗艦に戦艦、空母及び551水雷戦隊、578駆逐隊からなる第一班、古鷹旗艦で524戦隊、526水雷戦隊で第二班、電が旗艦で532戦隊、538水雷戦隊で第三班、潜水隊で第四班だ。戦況によつては主導権を私以外に渡すこともありえる。航空戦主体になった場合は航暉、お前が執れ」

航暉は簡単に了解とだけ答えた。

「作戦決行予定時刻は明日1030を予定。明朝の風向きや噴火の状況を確認したうえで実施判断、フォーメーションの確定を行う。各員はそれまでに作戦用のコードの確認や艤装のチェックなどを行つておくように」

第一次ブリーフィングは終了。作戦決行は、明日だ。

「……ここにいたか、大和」

杉田はそう言つてにかりと笑つた。

「杉田中佐……」

「初霜たちが探してたぞ。会いに行かんでいいのか？」

「……会つてなにを話せばいいのかわからないので」

わずかに硫黄がかおる屋上で杉田はマッチを擦る。そのあかりが彼の褐色の肌をオレンジに照らし、啞えた煙草に火がともる。

「……不安か？」

「何に対して不安なのかわかればいいのですが……」

「それがわかれば大抵の不安は解決するからなあ」

何が面白いのか杉田はけらけらと笑い紫煙をくゆらす。

「大和は生真面目だからな。何事も全力で向き合いすぎるところがあるだろう？」

「そうでしょうか……？」

「もつと力を抜けばいいと思うぜ。気楽にいこうや、大和。過去を忘れるとは言わないし、忘れてはいけないこともあるだろう。だが、この世界は果てしなく、俺たちはちっぽけだ。なのにそんな風に肩肘張つてちや見えるものも見えなくなる」

遠くに月が光る。薄雲の向こうに霞んだ月に向けて杉田は手を伸ばした。

「お前が知ってるよりも世界はきつと明るい。跳んでも跳ねても届かなかった月まで人は足を踏み出したし、今もまだ、俺たちは死に絶えていない」。あの時のような捨て身の戦術をしなければならぬほど世界はまだ追い詰められてないぞ」

大和の背中がびくりと震えた。

「中路のオヤジも月刀のバカも、〃そういう見極め〃は的確だ。アイツらが俺たちのヘッドにいるうちはそう酷い作戦にはならんさ」

「そうでしょうか……」

「まあ、信じろとは言わん。信じるも信じないもお前の自由だ。だが、俺の目が黒いうちはそう言うことをあいつらにさせる気はないぜ？」

杉田は携帯灰皿に灰を落とすと少しちびた煙草を啜えなおす。

「連合艦隊の最終兵器、その重責を背負わねばならぬことは俺も理解しているつもりだが、周りはお前が思うほど、お前に過去を求めていないぞ。第二次世界大戦は終わったんだ。今の戦争には関係ないぞ」

大和は黙り込んだ。その間にも杉田のタバコがフィルター直前まで燃え尽きて、彼は灰皿に押し付けた。

「君の『これから』は果てしなく、世界は無限大だ。肩の力を抜いていこうぜ、大和」

そう言つて杉田は屋上から階段室に足を踏み入れる。リノリウムタイルの階段を下ると階段の出口で立ち止まった。

「……大和なら上にいるぞ」

「ああ、知っている。だが、今会いにいつでも逆効果だろうからやめておく」

武蔵はそう言つて肩を竦めた。

「皮肉なもんだ、戦争はとつくに終わったつていうのに、みんな終わらない戦争にはまった拳句、命にけりをつけたがる」

「それ以外に止める手段がないみたいに、か？」

武蔵の言葉に杉田はへっと短く笑う。

「そういうお前はどうかんだ、武蔵よ」

「私か？ そう簡単に沈むつもりはないし、なにより、お前を見張るのがけっこう楽しいのでな」

「そう言うセリフは言う相手を選べよ」

「十分選んでいるつもりなんだが……遊んでほしいのかい？」

「遊んでほしいのはどっちだ？」

さあてね、とはぐらかして武蔵は杉田の肩を叩いた。

「……あの戦争は、終わってないんだらうよ。きつと、だれもがまだ戦ってるんだ」

武蔵はそう言った。

「私のなかでも、な」

「……そうか」

杉田は無表情に戻ってそう言ってから、彼女の肩を叩き返した。

「なら、終わらせよう」

「ほう？　それができると？」

「できるんじゃない。やるんだよ」

杉田はそう言って笑った。

僅かな気配に航暉は目を覚ます。暗いランプシェードのみに照らされた部屋で彼は机から頭をもたげた。気配の出どころは部屋の外、ドアの前に誰がいる。

「……電だろう？　入っておいで」

そう言うところろりとドアノブが回り、小さな影が入ってくる。

「こんばんはなのです。どうして私だとわかったのです？」

「足音の消し方。そろりそろりと歩くととき、電は若干右足を引きずり気味に歩く癖があるだろ。あと夜中に俺の部屋の前でドアを開けるのをずっとためらってるのは電ぐらいだからな」

電は彼女の制服ではなく、ゆったりとしたパジャマを着ていた。時刻は0114、深夜と言って差し支えない時間になっているからある意味当然といえた。

「眠れないのか？」

「少し変な夢を見てしまっ……。司令官さんは寝ないのです？」

「いや、寝てたよ」

「椅子に座ったままですか？ それにまだ制服姿なのです」

「ベッドで寝るのが苦手なんだ」

そう言って笑ってみせると、電はくすくすと笑った。

「もう、司令官さんもしつかり寝ないと駄目なのです。明日戦闘中に眠くなってもしらないですよっ」

「そうだな。気を付けるようにしよう」

航暉は備え付けのベッドの方に体を移す。それから電に手招きをした。とてとてと歩いてきた電は航暉の左側に腰掛ける。ふんわりと甘い香りが航暉の鼻孔をくすぐって何とも言えない感情を湧きあがらせた。

「……司令官さん。今回の銀弓作戦って『深海棲艦の撃滅を目的とした作戦』なんですよね」

「……ああ」

なるほど、そういうことか。と航暉は一人納得した。優しい彼女らしいなとどこか冷めた思いが過る。

「深海棲艦を一隻残らず沈めろって作戦なんですよね」

「……そうだ」

電は体をわずかに右に倒し、航暉の肩に頭を乗せた。

「……司令官さんは怖くないですか？」

「怖いって、なにが？」

電はその姿勢のままゆっくりと口を開く

「誰かを傷つけることが、怖くないですか？」

「……怖くないと言えばうそになるよ。でも、あまり抵抗はないかな」

「そう、ですよね……」

寂しげに俯いた電はいつもよりゆっくりと言葉を紡ぐ。

「……変な夢を見たのです」

「どんな夢？」

「私が沈んでいく夢でした。気がついたら深海棲艦になっていて、司令官さんの部隊に……」

「……そっか。変な夢だな」

「なのです。でも、どこかしつくりきってしまったって……」

パジャマの裾を握りこみ、電は言葉を切った。

「……深海棲艦の噂、知ってますか？」

「噂？」

「沈んだ船の魂が深海棲艦になるって噂、聞いたことありますか？」

「……たしか数年前にそんな論文が出たな。一笑に付されたはずだが」

電はこくんとうなづいた。

「確かにそうなのです。でも、MI作戦で人語を発する深海棲艦が確認されて、本当はどうなんだろうって思ってしまうのです。『守りたいものがあるのはあなたたちだけじゃない』……私たちはなにと戦っているんでしょうか、何のために、戦っているんでしょうか」

そういう姿はか弱く、まさに少女のそれだった。

「時々、不安になるのです。もう『私』なんていなくて、電はもう亡霊に過ぎなくて、実はもう沈んで深海棲艦になってるんじゃないかって。そうして……」

——いつか、司令官さんたちを殺しちゃうんじゃないかって、と震えた声で言った。

「おかしいですよ。私の体はここにあって、今だってこうやって司令官さんとおしゃべりできているのです。なのに、どこかこれが幻じゃないんじゃないかって、思ってしまうのです。夢幻に酔っているんじゃないかって」

電は静かにそう言った。

「司令官さん……『私』はなんなのですか？」

そう言った彼女はそっと航暉のワイシャツの袖を握った。

「……『事実など存在しない、存在するのは解釈だけである』」

航暉は彼女の手になんと触れた。航暉は見上げてくる澄んだ瞳からわずかに目をそらした。

「ニーチェの言葉さ。己とは何なのかという答えを出せた人間はいない。いるとすれば『神の子』や『悟りを開いたもの』ぐらいだろう」

航暉はそつと微笑んだ。

「……深海棲艦の正体がなんであれ、人間の領域に攻撃を仕掛けて無辜の民を危険に晒している以上、軍人は戦わねばならない。それが後の禍根になるとしても人民を救わねばならん。それが負の連鎖を繋げ、後の争いを招くとしても、軍人は守るべきものを守るためにも武器を取ってきた」

航暉は右手をそつと背中に回しホルスターに触れる。

「それはいつの時代も男の役割で、野蛮でなければできない行いだつたはずだ。それに大義名分をこじつけ、さも権威あるかのような理由を述べ、同族殺しに勤しむ。野蛮で、何も生まないもののはずだ」

ホルスターのスナップボタンをはずしゆつくりと拳銃を引き抜く。M93R————三点バースト射撃が可能な治安部隊向けの拳銃だった。電が目を見開く。

「……俺はずつとそんな世界で生きてきた。深海棲艦が襲ってくる前から、な。その戦いの本質は今も、この戦争も引き継いでいる……そこに君たちを巻き込んだ。戦い、死していく、不毛で何も生まない戦場に、君たちを巻き込んだ」

そう言つて航暉はチェンバーを引いて、放す。金属の擦れる音。驚くほど聞きなれた質感の音に電は目を伏せる。

「君たちは銃と同じで指揮官の指示に従うことのみを求められた。それを指揮する指揮官は『艦娘は人に非ず』と心を騙して指示を出し、その中で感覚を鈍らせていく。相手が変わったただけで戦争の本質は変わってない。そこに君たちが巻き込まれている異常を最近も誰も異常と思わなくなった」

コツキングされたハンマーをゆつくりと戻す。そうして安全装置をかけて右手の中でもてあそぶ。

「俺はきつとこの世界では異端なんだろう。どうやってもこれとお前を同一視できない。だから、模範解答である『お前は水上用自律駆動兵装だ』という単純な定義を口にできない」

「司令官さん……」

「……だから、こういうしかないんだ。『お前はお前だ』そうとしか

「言えない」

航暉はそう言って拳銃を置き、電の頭をなでた。

「……時々、俺も怖くなる。いつかお前たちを殺してしまうんじゃないかって怖くなる」

「司令官も、なのです……？」

「ああ、俺もな」

航暉はそう言うのと寂しげに笑った。

「でも、俺は戦うことしか知らん。何かを守りたいと思っても、暴力で解決することしかできん、矮小で愚かな人間の男だ」

「……そんなこと、ないのです」

「そうかい？ お前たちに戦うことを強いているというのにか？」

一瞬怒りにも似た感情が通り、電は一瞬肩を緊張させた。

「戦うことしかできないのに、自らは安全域でのうのうと指示を出すだけだ。戦いのリスクをお前たちに押し付けて、冷房がかかった地下室で戦場を傍観するだけの、ね」

酷い話だろう？ と自嘲気味に笑って天井を見上げた。

「……それでも、司令官さんは電たちと一緒に戦ってくれてると思うのです。それはきつと矮小なんかじゃなくて、優しくて強いことなのです」

「そんなできた話じゃないんだ」

「だとしても、です。あと、そう思ってるのはきつと私だけじゃないのですよ？ お姉ちゃんたちも、天龍さんたちも、睦月ちゃんたちも、利根さんたちも……きつと司令官さんの下で戦ったことのある艦娘ならそう思ってるのです」

電はそつと彼の頬を両手で挟んだ。彼の頬は少し冷えていた。

「司令官さんを守るにはいなづまはまだまだ弱いです。でも、司令官さんのためなら強くなりたいと思うのです」

電はそう言うてはにかんだ。

「司令官さんは優しくして強くて、電みたいな艦娘も信じてくれたのです。だから、電が司令官さんを信じることも許してほしいのです」

電は素直にそういい、航暉はそつと彼女の手に触れ、その手を優し

く押し戻した。

「……私じゃ、ダメですか」

「違うんだ電、いいとかダメとかそういう話じゃないんだ」

「……そう、ですか」

しゅんと俯いた彼女は航暉の方に体重を預けるように体を倒した。彼女の体はぼすん、と彼の胸板に収まる。子供特有の高い体温をワイシャツ越しに感じる。

「電……？」

「なら、せめて。せめて司令官さんのそばにすることを許してもらえますか？ DD-AK04としてでも、いなづま」としてでもいいです。あなたのそばにすることを許してくれますか」

じわりと浮かぶ水滴を彼のワイシャツに押し付けた。どこか汗が混じった硬い胸板、鼓動も小さく聞こえるなかで電は彼の体に腕を回す。

「怖いのです。司令官さんがどこかに行ってしまうようで怖いのです。また、一人になるんじゃないかって、怖くなるのです」

「……もうひとりじゃないだろう？」

「それは司令官さんがいるからなのです。司令官さんが繋げてくれたのです。司令官さんがこの部隊をまとめてくれているのです」

不安定に揺れる声が航暉の耳朶を打つ。彼女の肩を抱こうとする手を航暉は一歩手前で止めた。彼女に触れる資格は俺にあるのか？

「いなづまに理由をください。司令官さんを守るんだって言わせてください。この部隊を守るんだって言わせてください」

司令官さんをいなづまの戦う理由にさせてください、と彼女は泣いた。

どこかに軋んだ不協和音の気配を感じながら、航暉は電の泣き声を黙って聞くしかできなかった。

そつとドアの前から離れ、ゆつくりと部屋まで戻る。おそらく司令官は気がついていただろうが、一応マナーだ。あそこには電と司令官以外いなかった。だからこそ、電は心中を吐露できたのだろう。

割り当てられた部屋のドアを開け、中に戻る。ベッドの中から寝返りを打つような音が聞こえた。電気の消えた部屋は窓からの月明かりがほんのりと輪郭を照らすだけだ。

「……スッキリしたって顔じゃないわね？」

「なんだ、起きてたのか。姉さん」

ベッドから藍色の瞳が彼女を射た。

「電のことでしょ？ 気になってたの」

「……Da。電は優しいからね。殲滅戦の艦隊旗艦なんてやりたくないはずだ」

ベッドから上体を起こした暁は響をまじまじと見つめた。

「それで、あの子は？」

「司令官のところだ。……もつとも、司令官も悩んでいるみたいだけど」

「……電を銀弓作戦に出すことに？」

「水上用自律駆動兵装を戦場に出すことそのものに、といった方が正しいかもね」

響はそういいながら暁のベッドの端に腰掛けた。

「……司令官は優しすぎる。私たちの意義を殺してしまうほどに優しすぎる。このままじゃ……」

「司令官自身が壊れてしまう、かしら？」

「……いま電は戦う理由を司令官に求めている。このままいくと二人とも潰れる。気がするんだ」

響は無表情なまま暁を見た。

「姉さん。私は電を、司令官を守れるだろうか？」

「……真っ先に沈んだ一番艦にそれを聞く？」

小さく笑って暁は響に抱きついた。

「あんたは大丈夫よ、響。あんたのことはみんな信頼してる」

「……Спасибо。ありがとう、姉さん」

「雷の方はたぶん大丈夫。あの子はあの子で割り切ってる。少なくとも割り切れてない自分をわかって向き合おうとしてる」

後ろから抱き着かれた形のまま響は暁の腕に触れる。そうして目を閉じた。

「みんなで乗り越えよう。私たちで、司令官たちを守るんだ」

「……そうね。特Ⅲ型の力を合わせればきつと大丈夫よ」

その声は響に向いていたのか、暁自身に向いていたのかわからなかった。だが区別する必要もないのだろう。

「明日よ、響」

「わかってる、姉さん」

時刻は0132、後1時間半あとには天候調査機が飛行場を飛び立つだろう。空軍の早期警戒機はもう三沢基地を飛び立って、こちらに向かっているはずだ。

戦いの幕が、開こうとしていた。

通常照明が落とされた中央作戦指揮所では司令部が最後の調整を行っていた。

「それで、昨日はお楽しみだったのか？」

階段状になっている巨大な指揮所でそう言ったのは杉田勝也中佐だ。目線は彼に割り当てられた管制卓、B—3のディスプレイをなぞるが、声は隣のB—2卓をいじっている月刀航暉に向いていた。

「お楽しみってなんだよ」

「電ちゃんさ。目を腫らしてた。泣かせでもしたかい？」

「……まったく、変なところ気がつくよな、お前」

航暉は素晴らしいながらキーボードを叩いた。かしゃかしゃと爪がキーにすれる音が響く。

「お前のことだ、〃そういう誘い〃があつたとしても受けなかつたとは思うが、引きずるなよ」

「わかつてるさ……わかつてる」

「どうかな。お前にしては反応が鈍い気がするが」

杉田はそういいながらヘッドセットに頭をはめ込んだ。パシユンという音と共にクツションが広がりヘッドセットが固定される。目の周りをすつぽりとおおうように視覚デバイスを下ろすと、キーボードを叩き始める。

「グラスデバイス・ヘッドギア・レデイ・チェック。〃鷹の目〃
自律待機^{アライ}機・チェック……で、問題ないのか？」

「ベストとは言えないがな……硫黄島戦術^イコンピュータ^オオンライン、オルタネーツ・レスポンスノーマル」

声に出しつつ機材と自分の体をなじませていく。部屋のいろいろなところから同じように声が飛ぶ。脳はすでに戦術ネットに繋がれ、個人管制卓のディスプレイ、壁一面に広がる戦術スクリーンそして艦娘たちの視覚情報とさまざまな情報を受けて状況を整理していく。

「なあ、杉田」

「どうした」

「もしお前の部下から、お前を守るために戦わせてくれと言われたら、どうする?」

航暉は手を止めそう言うのと一瞬横目で杉田の方を見た。杉田はトラックボールを動かして何やらディスプレイをいじっている。

「そうだな……ふざけるな。かな?」

くつくつと笑いながら杉田はそう言った。

「信頼してくれるのは悪い気はしないが、上官への英雄信仰に近い盲信はそれが解けた時にその部下自信を危険にさらす。他人の戦う理由を拝借したところでそいつが強くなれるわけじゃない。理由のなき力をふるえばそれはただの暴力だ」

杉田が振り向いて視覚デバイスを跳ねあげた。

「……月刀、悪いことは言わねえ。そろそろ電の指揮から外れろ」

杉田はディスプレイの青白い光の中で航暉を見据えた。声のトーンが落ち、航暉にぎりぎり届くかどうかの音量になる。

「電がそう言ってきたつてことは、指揮官と部下の関係以上になるうとしてる可能性が高い。そしてお前はそれを否定してない。そうだな?」

「……ああ」

「ならその先は泥沼だ。銃を乱射しながら暴力反対つて言うようなもんだ、早々に破綻する。電ちゃんがお前に依存しきる前にお前から離れる。電は大人じゃない、艦娘なんだ。国連軍という閉鎖的な世界で過ごしてきた分、そこらの子どもと比べても初心で無垢だ。戦争に関係ない感情への対処法を知らないだろう。理性的に動かなきゃいけないのはお前の方だ。お前が離れなきゃ破滅するまでのめり込むぞ」
そう言つて杉田は視覚デバイスを改めて下ろし、目線を隠した。

「……お前の悪いクセだ。お前は艦娘の強みを飛躍的に伸ばすが、その艦娘に干渉しすぎる。金剛がいい例だ——お前が去った後、あいつは他の指揮官に馴染まない。中路中将の言うことなら渋々つてところだ。最近は榛名も似たような傾向を示してる」

杉田はそういうとわずかに口角を持ち上げた。

「艦娘をスポイルするのは大概にしておけ。いつか艦娘から刺されるぞ」

「……気を付ける」

そうしてくれや。と言いながら杉田は右手を上に掲げる。

「B―3 杉田、オールシステムグリーン・レディ」

それに呼応するようにB―1卓の渡井が右手を掲げる。

「B―1 渡井、グリーン・レディ」

「C―1 合田、グリーン・レディ」

それにワンテンポ遅れて航暉の目の前のディスプレイに緑色のタグが現れる。左脇のブラックライトパネル……警告パネルが全て消灯していることを確認し、右手を掲げる。

「B―2 月刀、グリーン・レディ」

全ての作戦参加士官の管制システムが正常接続されたことを正面のスクリーンが告げる。作戦指揮所の最後方――トップダイアス司令卓からそれを見下ろして中路が立ち上がる。首の後ろに接続されたコードが揺れる。

「全作戦参加士官、オンラインチェック。司令部ホテルケベックより全艦、戦術リンクオープン。ラジオチェック。シルバーボウ」

《シルバーボウ、レディ》

無線が答える、第一班「シルバーボウ」の旗艦、大和の声だろう。直後にスクリーンに《SLVB》とタグがついた船団が投影される。西之島の東南東38キロのあたりに固まって配置されている。

「チェックオンモニタ。ゴルフアルファ」

《ゴルフアルファ、レディです》

今度は古鷹の声。第二班「ゴールデンアロー」だ。同じく西之島の東北東42キロに《GLDA》のマークー。

「チェックオンモニタ。シエラアルファ」

《シエラアルファ、レディなのです！》

航暉にとっては聞きなれた声。どこか張りすぎた、から元気が混じったような声に航暉はわずかに視線をそらした。その間にもスクリーンには《SLVA》がプロットされる。西之島南西40キロ地点。

「チエックオンモニタ。サブマリナー」

《サブマリナー、レディ》

声はしおいだろうか。プロット位置は西之島北西36キロに一つだけ。他の潜水艦はもう潜っているらしい。

「チエックオンモニタ。気を引き締める。これより銀弓作戦オペレーション・アリュキユロトクソの第一段階を開始する」

銀弓作戦の開始が静かに無線に流れ、大和は僅かに俯いた。

「やはり不安か？」

そう聞いてきたのは同じ速度で並走する武蔵だ。褐色の肌が雲の合間に差す光を照り返す。

「いいえ、大丈夫です。武蔵こそ大丈夫ですか？」

「ふっ、私か？ 私たちの後ろには杉田がいるんだ。心配の必要などないさ。それに心強い同伴艦もいるんだ」

その視線の先には先導艦を務めるかのように前を進む阿武隈たち第551水雷戦隊の面々がいる。すぐ後方には装甲空母大鳳が、さらに1キロ後方には改造空母瑞鳳型軽空母——瑞鳳・祥鳳・龍鳳が揃い踏みしている。このアウトレンジ部隊を守るのは合田少佐指揮下に入った第578駆逐隊の村雨・夕立・春雨・五月雨と535航空戦隊所属の若葉・初霜だ。

「これだけのメンバーが揃ってるんだ。不安になる必要なんてないだろう」

「……しかしここまで変数が多い作戦もないと思うの。天候・火山活

動……そして、軍内部の事情」

大和がそう言うのと武蔵は鼻で笑った。

「そんなもの、私達で吹き飛ばせばいい。世界は広大でいくら私たちが小さい存在だとしても、相棒が望んでいるのなら、私は噴煙だろうが吹き飛ばすさ」

「……強くなりましたね、武蔵」

「強くならなきや生き残れない世知辛い世の中だからな」

武蔵はそう言うのと無線を開く。

「それで、どうする気だ？」

《空さんの戦闘機がD—TACポットを指定位置にすっかり落としてくれればいいが、そうならなければめっちゃくちな当てずっぽう射撃になる》

無線に答えるのは杉田中佐だ。作戦開始した後だというのにテンションは軽い。

「そこは何とかならんのか？下手なのは嫌いだよ？」

《先走りたくもないし無駄なタマも撃ちたくねえ。ちゃんとしっかりナカに撃たなきやな》

「なっ……？」

一瞬で顔が赤くなる大和。その横で大笑いするのは武蔵だ。

「頼むよ、杉田勝也中佐。こちらには太くて長いブーツがあるんだ。失敗したらそれを突っ込んでやろう」

《おーこわこわ。縮み上がる〃じゃねえか》

「杉田中佐！ 武蔵も！ 無線で何を破廉恥なことを白昼堂々話してるんですかつ！」

大和が叫んでも堪えた様子もなくけたけたと笑う杉田。武蔵も涼しい顔だ。

《わりいわりい。箱入り娘には辛かったか》

「駆逐艦娘だつて聞いてるんです！ 少しは慎重に発言してくださいっ！ まだ午前中ですよ！」

「ほう、夜ならいいのか？」

武蔵が茶化すと、副砲が武蔵の方に向いた。

「……少しはリラックスできたか？」

「ええ、仕事が終わったら育つ方向性を間違えた妹にひざ詰め説教確定ですけどね」

「おーこわこわ。縮み上がる”じゃねえか」

武蔵が杉田のマネをしてそう言うと、大和は口だけで笑った。

「中佐も同罪ですからね？」

《へいへい。……と、マスターアームオン。鷹の目”スナツプモードでリンクスタンバイ》

直後に会話が切れる。大和は逃げましたね？と思ったが、作戦が優先だ。しかたがない。

《D-TACポットリリース。鷹の目”エグゼキュート実行！》

杉田はD-TACポットの“賞味期限”を6分程度と予想していた。D-TACポット自体は投下後翼を展開し無線誘導で滑空しながら母機もしくは早期警戒機にリアルタイムで映像やデータを転送し続ける。その寿命は敵に撃墜されるか対地高度ゼロ——即ち墜落するまでで、リリース高度にもよるが1時間近い偵察行為が可能である。だが、今回は話が違う。どうやっても火山灰のせいで視界が確保できないうえに確保できた時点ではもう通信が通じない可能性もある。だから実際に使えるデータが得られる時間は6分もあれば上出来というところと予測していた。

「くっそ、敵艦隊の予測位置がずれてやがる！」

一度に投下された3基の情報ポットのうち、2基が艦影を捉える。

慣性航法装置とGPSからポッドに位置を、カメラの画像の写り方から敵位置を修正する。スクリーンには元画像とその合成による敵艦隊の位置が投影される。予測位置から5キロほどずれていた。

「武蔵！ 第一主砲左へ1・42、仰角追加で0・23！」

微調整を行いエンターキーを叩き込む。砲撃命令。

直後に着弾予測地点が正面のスクリーンに投影される。その時には大和の主砲が小刻みに位置調整を繰り返す。

「月刀、お前の脳も貸せ！」

演算処理も間に合わないらしい。サブの演算装置として航暉の電脳も活用する気だ。

「ポッドの通信が荒くなってきた！……通信断絶まであと30秒ちょい！」

「ふざけんじゃねえ！ なにが空軍の虎の子だ！ 着弾観測の修正も間に合わねえ！」

通信のモニターに入っていた渡井の警告に毒づく杉田。

「しやらくせえ！」

コンピュータが悲鳴を上げた。杉田が狙撃モードのまま大和・武蔵の主砲すべてを個別のターゲットに向けて操作しだしたからだ。スナップモードは超常的な砲撃精度を発揮する代わりに一門あたりの演算リソースを馬鹿食いする。偏差射撃の支援はもちろんのこと、地球の自転により発生するコリオリ力やその「射線上」の気温湿度、風力風向を最高で1メートルごとに予測するというトンデモ仕上げである。そんなものを大和と武蔵の主砲合計18門分を並列処理しようとしたらどうなるか。

「杉田てめえ！ 全員の脳を焼き切る気か!？」

「耐えろ！ 後2秒！」

杉田が叫ぶ。きつちり二秒後、負荷が一気に減る。同時にスクリーンに着弾予測地点が18か所現れた。

「……これで相手は焦るはずだ」

「こつちも焦ったぞ馬鹿野郎。司令部まとめて吹っ飛ばす気か?」
息を荒くしてるのは航暉だ。髪をガシガシと掻き上げている。

「次のD―TACポット投下可能時間は何時だ？」

「あと3分後、1041」

「なら頼む。また脳借りるぞ。3分も通信が持たないんじや一斉射が精一杯だ。着弾地点の状況把握に最低でも2分欲しいとこだ」

「1分半」

「……やってみる」

航暉の要求ににやりと笑みを浮かべると次の用意に入る。

「敵艦隊の位置よりわざと南側にずらした。敵が利口なら第二班の方に逃げるはずだ。そっちなら空母の支援も出しやすい」

「だといいが……」

現状の風向きは北北西から。風に乗って噴煙は南南東に長く流れている。今の位置だと大和旗艦の第一班と電旗艦の第三班を分けるように噴煙が伸びている。

ここで一番怖いのは第三班の方に敵が集中する場合だ。噴煙が邪魔で航空支援が難しく砲撃支援も困難を極める。北からの潜水隊の第四班の応援に頼ることになるのだ。

「第二次D―TACポット投下30秒前、次行くぞ」

「春の日やあの世この世と馬車を駆り」って感じだ」

「心をあの世に置いてくるなよ、月刀」

「るせえ」

航暉は溜息をつきほぼ間違いなく襲ってくる強烈な頭痛に備え、腹に力を入れた。

「……なんだかりンクにノイズが走ってないかい？」

そう言ったのは響だ。自身の右手を遠く緩く流れている噴煙を見つつ横を進む利根を見る。

「噴煙のせいかな？」

「どうじゃろうか……。通信のせいなのか提督たちのせいなのかかわからないからのう……」

利根はそういうと後ろを振り向いた。

「電よ。お主はどう思うかの？」

「はわっ!? えつと……。どうでしょうか？」

「電、作戦中なんだしそんなじゃダメよ。もっとしやきつとしなさい、しやきつと」

雷にそう言われちよつとしゆんとする電。それを見て響は少し眉を顰めた。

やはり、昨日のことを引きずっている。

「電」

「響お姉ちゃん、どうしたのです？」

「敵の本隊がこっちに来たとして、電はどうする？」

電の目が驚いたように見開かれた。それを響は目をそらさずに見続ける。……いま目をそらしたらいけない。

「……どうしたら、いいんでしょうね？ 司令官さんに任せるのです」

「そう言うことを聞きたいんじゃない。『電』はどうしたいんだと聞いているんだ」

「えつと、司令官さんに任せたいって言うのはだめなのです？」

響は黙った。横で暁が不安げに響を見ている。

言葉を絞り出す。

「電、考えることを放棄しちゃだめだ。考えるのをやめたら、私たちはただの兵器だ。誰かを殺すための機械に成り果てる。ただの銃と同じになるんだ」

「響お姉ちゃん、まさか……」

「私はそれを認めない。電、考えるんだ。思考を止めるな。機械になるな。それはただの逃げでしかないんだよ」

響は足を止める。視界の先では電の瞳が不安げに揺れていた。

「電、君はなんのために――」

言い切る前に警報が鳴った。

《ホテルケベックよりシエラアルファ。『パッケージ』がそっちに向かってる。迎撃用意！》

無線の声は中路だが、そこに航暉の声が割り込む。

パッケージ……敵の艦隊が丸々こっちに向かってきていているらしい。

《航空隊をを迂回させて回すが交戦開始にはギリギリ間に合わない。無理な攻撃は禁ずる。航空隊到着まで生き残れ！》

航暉がリンク率を上げる。直後、電はほつとしたような表情を浮かべ、それを見て響は心の中で苦虫を噛み潰した。

—— ПЛОХО、最悪だ

司令官とリンクした電に、私の言葉が、届くだろうか。

「利根さん・筑摩さんを中心にした輪形陣に移行します！」

響は下唇を噛みしめながら、電の指示に従い、ゆつくりと安全装置を解除した。

龍鳳は矢をつがえ呼吸を落ち着かせると弦を引き絞る。矢羽が空気を切る音と共に鋭く弦が鳴り、空中へと航空機が飛び出していく。

「こちら龍鳳、全艦載機発艦完了」

《ホテルケベック了解。高度を限界まで上げろ。誘導経路を今送る》

司令部の月刀の通信が帰ってくる、いつもより早口で、それほどに切羽詰まった状況なのだろう。

「まあ、それもそうよね。……というよりこの全機の航空指揮をほぼ一人で執り切るって、MIの時も思ったけど、正気の沙汰じゃないよね？」

そう笑うのは瑞鳳だ。海松色の袴は波に映え、噴煙の合間から射す光をわずかに煌めかせた。

「こんな状況で空を飛ばすことは初めてなんですけど、大丈夫でしょうか……？」

不安げなのは祥鳳だ。すでに発艦を終え、彼女の直掩機を除いた機体は編隊を滑らかに組みつつ大きく北回りで敵へと向かっている。

「そんなのみんな一緒だもん、言っても仕方ないよ、祥鳳」

「そうなんだけどね……」

やれやれといった雰囲気です。溜息をついた瑞鳳に祥鳳はやはり不安げに笑う。

「大鳳さんも大丈夫かなあ……大鳳さーん」

《なに龍鳳？ 潜水艦でも見つけた？》

「いたら睦月ちゃんたちが見つけてますって。……大鳳さんの方が噴煙に近いですし、大丈夫ですか？」

《私の所は大丈夫。問題ないわ》

「私の所は」というと？」

《司令部通信のウオッチ、ちゃんとしてる？》

大鳳の言葉に一瞬ほかんとして、中継器の反応を確かめる。

「え？……応答なし？」

そんな馬鹿な。

「第一班龍鳳より全隊、ホテルケベックへのリンクを確認してください！」

《こちら第二班古鷹、オフラインになってます！》

《第三班電です、し、司令部の応答がありません！》

全ての作戦部隊の無線が生きている以上、噴煙が原因の通信障害と
言うことはあり得ない。司令部は硫黄島基地であり、作戦域からざつ
と300キロは離れているから司令部がこの戦闘に巻き込まれるこ
とはないだろう。

《……こちら第一班大和、全作戦部隊に通達します》

龍鳳の思考を大和の声が遮った。

《司令部機能が回復するまで私が代行して指揮を執ります。間もなく
第三班が交戦距離に入ります。電探に捕捉視し次第第一班より砲撃
支援を開始、航空隊もそちらに優先的に回します。全機全艦、風向き
に注意し戦闘行動を開始してください。これは最優先命令です》

機械的とも取れる大和の指示に祥鳳がさらに不安げな表情をした。

作戦参加艦の総指揮をとる大和が指揮代行を宣言した。この措置
が取られる場合はそう多くない。頭の中に叩き込まれた知識が引き
ずり出される。

国連海軍水上用自律駆動兵装交戦規定第47条。水上用自律駆動
兵装の完全自立運用のための規定。

第一項・水上用自律駆動兵装は以下の場合において、事前に、時宜
によつては事後に国連海軍司令部の承認のもと、完全自律運用による
作戦実行が許可される。

第二項・水上用自律駆動兵装の完全自立運用が許可される場合を
以下のように定む。

一、人命や人権の保護のためにやむを得ないと判断されるとき

二、司令部機能を喪失、またはそれに類する状況下での作戦行動が不可避であるとき

三、軍司令部が必要であると認めたととき

第三項・完全自律運用時において、複数の水上用自律駆動兵装が自律行動をとる場合、旗艦たる水上用自律駆動兵装が作戦指揮を代行し、可及的速やかに国連海軍司令部の承認を受けなければならない。

大和の宣言が不安を掻き立てる。

大和は『司令部機能を喪失、またはそれに類する状況』だと判断したのだ。

急速に不安が広がっていく。それは個を超えて伝播していく。それをどうすれば打ち破れるのか、龍鳳にはわからなかった。

航暉が三次元の噴煙分布予測をもとに、航空隊の安全が確保できる最短ルートを組み立てていると、一瞬だけブラックパネルの一角が点った。赤いランプに目を走らせ、内容を理解するころにはライトが消える。

「……不正規アクセス警告？」

戦術ネットの情報インポートがエラーを示すが、すぐにキャンセルされる。誘導経路の予測を続けながら、異常判断プログラムを走らせ

る。

「……B―2月刀より司令部員、不正規アクセスエラーを確認。電腦活性の確認を――」

そう言っていると暗い司令部の中、視線の先で何かが動いた。位置は真正面、個人ディスプレイの陰だ。そこは……C―1卓か。

「合田……？」

明るいスクリーンのせいで黒に塗りつぶされた彼がゆっくりと水平に腕を伸ばしていく。そのシルエットは何かを手に持ちゆっくりと“それ”を横に伸ばしていく。

「――杉田！」

直後に響く破裂音。同時に杉田がのけぞるように頭を振った。鉄とプラスチックが混じった破片が飛び散る。その無機質な破片の間を埋めるように赤黒い液体も飛び散った。

航暉はその音に反射的に右手を腰の後ろに回し、スナックボタンを乱暴に親指で弾きつつそれを引き抜いた。昨日の夜に薬室に弾を送り込んだままになっている。右手でセレクタをセミオートに、その流れで親指付け根の位置にある安全装置をオフに。

立ち上がり、右腕をディスプレイに乗せ安定させると、引金を握りこむ。鋭いショック、ほぼ同時にスライドが高速で後退し次弾が薬室に叩き込まれる。飛び出した弾は“彼”の右手に握られた拳銃、ベレッタ90―Twoの横っ腹を狙うがそれより早く目標が動いていた。

航暉の放った9 x 19 mmパラベラム弾が空を切り、スクリーンの一枚をブラックアウトさせた数瞬後、航暉の鼓膜を叩き割らんとするかのように、40S&W弾が起こした衝撃波が突き抜けた。

航暉と“彼”は互いに銃の照準を相手の眉間に合わせながら睨み合う。

『こちらホテルケベック、緊急事態発生』

「無駄だよ。司令部無線も含めて全て掌握したからね。いくらあなたたちがここで喚こうともあなたたちを思ってくれている“あの子たち”には届かない」

「彼」はそう言うのと航暉に笑みを送った。

「……『ホールデン』」

「やっぱりそう呼ばれてるのか『ボク』は」

その直後に戦闘指揮所のスクリーンが真っ白に輝いた。さらに「彼」の表情を見えなくする。その光を正面から受けて中路は僅かに呻いた。二発目の弾丸が肩を掠めていたのだ。視線を「彼」に向けたまま、航暉は隣に声を投げる。

「杉田、無事だな？」

「左耳を吹っ飛ばされたがな……クソ痛てえ、俺の耳は生身だつっの」

「中将」

「無事だ。……まいったね。これだけでラインを監視しておいて誰も気がつかないとは」

「全くだ」

中路の声に返事をしたのは渡井だ。彼も無事らしい。それを聞きつつ、航暉は椅子を後ろに引き、立ち上がった。左手でQRSコードを抜くと床に落とす。床で跳ねたコードが軽く音を立てる。

「何者だ、合田正一郎じゃないな？」

「己が誰かを証明する手段がないから、その質問には意味がないな」

「彼」は右手一本で銃を保持したまま、部屋の壁際の通路へ向けて歩き出した航暉の眉間に狙いをつけ続ける。

「何が目的だ？」

「説明してもらえないから説明しないでおきま
す、月刀大佐」

「わざわざ軍の戦術ネットに乗ってやってきてんだ、来訪の理由くらい話してくれてもいいんじゃないか？」

「……偽善で戦うしかできないあなたには、まだ話したくない、それだけですよ」

航暉はその答えを聞いて鼻で笑った。

「なら本当の『善』とやらを教えてくれ」

航暉は部屋の端のゆっくりと階段状の部屋を下っていく。互いに

銃を向けながらの嘲笑のキャッチボールが続く。

「人間は『偽善』に走らずに生きることなど不可能だ、なら偽善を突き通すしかない」

「いつかそのインチキが誰かを殺すとしても？」

「さも自分が純粹で『善』であるかのような物言いだな」

航暉の言葉に『彼』は肩を震わせて笑う。

「ボクが純粹かどうかはわからないけどね、あなたたちほど汚れてもいないつもりだよ」

「『あなたは世界中で起こる何もかもが、インチキに見えてるんでしょね』……そのインチキを除いていった先に真実があるとして、その真実は『偽善』で動いている。そしてその偽善のイツワリを剥いでいったとしてもその先にあるのは人の本心だ。善なんてどこにもない。それでもお前は『善』を騙るか？」

航暉の言葉に笑みを浮かべ『彼』は銃口を上に向ける。直後、B―1卓の陰で動いていなかった渡井が急に飛び出そうとした。

「動くな渡井！」

直後渡井の目の前を弾丸が横ぎった。慌てて卓の陰に隠れる渡井。

「……いい判断です、月刀大佐」

「視覚野に侵入しておいて気づかれないとでも？……目を盗むのはいが、投影する映像はちゃんと物理的に可能な動きにしておこうな」
「やれやれ、こんなに早くばれるとは。弾丸がためらいもなく飛んでくるなんて思ってたんで」

「合田少佐とは組んで時間があまり経ってないし、そもそも指揮系統が違うからね。信用できるほどの交流はなかったのさ」

直後ノイズが走り『彼』の姿が揺らぐ。背格好は変わらないが両手に拳銃を構え一方を航暉に、もう一方を渡井に向けていた。

「世界を守るなどと齒の浮くような理由を並べ、彼女たちを戦争に駆り立てておきながら、その『偽善』を是とする？ それほどのインチキを僕は見たことがない」

そう言つて航暉を見据える『彼』は両手の銃を航暉に集中させた。
「その偽善が彼女たちを追いこみ、世界が彼女たちを切り捨てようと

するのを黙認させているんじゃないのか？」

「軍人に今更道德の授業か？ 何様のつもりだホールデン」

航暉はそう言うのとC―1卓のある通路に立ち、足を止めた。同じレベルの床に降り立ち、相互に銃口を向けあう。

「ある種のものごとって、ずっと同じままのかたちであるべきなんだよ。大きなガラスケースの中に入れて、そのまま手つかずに保っておけたらいちばんいいんだよ」

歌うようにそう言った。彼はくつくつと笑う。

「彼女たちを兵器に変え、この世界を変えようとした。それがこの結果だ。無理に世界に逆らうからどこかで傷つき、痛みが出る。そしてあなたもそのことに気がついていないはずだ」

「ほう？ ならこのまま殺されろと言っても言うつもりか？」

「あなたは彼女たちが純然で無垢なことを知っている。そしてそれが傷つくことを恐れている。だからあなたは電の問いに応えられなかった。『戦う理由』にされることを恐れたからだ。それが彼女たちを穢すことを知っているから」

「黙れよ」

「あなたは偽善で戦っていることを自覚している。だから恐れた。無垢な彼女たちがあなたの心に触れて穢れることを恐れた」

「黙れ」

「あなたはわかっているはずだ。自らの『偽善』が彼女らを傷つけ、同時にあなた自身を傷つけることを知っているはずだ。そしてそれでも偽善を嘯き続けることに酔っている」

「黙れつつつてんだよ！」

航暉は銃のセレクタを三点バーストに押し下げた。

「ふざけるなよホールデン。てめえの哲学は結構だ。理解した。そんなに世界が嫌いなら箱庭作って死ぬまで遊んでろ。てめえの大好きな修道女と『ロミオとジュリエット』について語り明かしていればいい」

航暉はそう吐き捨てた。

「それでてめえはさもホールデン・コールフィールドになりきったか

の如く、世界とてめえのインチキについて語り明かしてそれで満足するだけだ。電たちが俺の心に触れて穢れることを恐れた？ 余計なお世話だ馬鹿野郎」

「彼」はどこか侮蔑が混じった目を航暉に向ける。

「てめえは耳と目を閉じ、口を噤んだ人間になろうと考えた。それでもその孤独に耐えられず、さも自らが善かのように高説を垂れる。それこそがてめえの偽善だ。『ホールデン』！」

航暉はそう叫んだ。直後に「彼」が溜息をつく。

「……僕は期待してたんですよ。あなたならボクの気持ちを理解してくれるんじゃないかって。でもやめた。やっぱりあなたからは『偽り』のおいがる」

「そうしてくれ、未来永劫俺らに関わるな。てめえの死体はせめて海に沈めてやるから安心しろ」

「良心があるふりですか？」

「偽善者にはちようどいいだろ？」

航暉はそう言つて銃を握りなおした。それがゴングだった。

響く銃声。音は一回、単発だ。放たれた弾丸は過たず航暉の頭を突き抜け後ろに吹っ飛ぶ。

「—— 何でもそうだが、あんまりうまくなると、よっほど気をつけないと、すぐこれ見よがしになつてしまうものだ。そうなつたら、うまくも何ともなくなる」。……技術に酔つたな『ホールデン』」

後ろに吹っ飛んだ航暉の体は地面に着く前に空気に溶けて消える。次の瞬間には「彼」の足を薙ぎ払い地面に叩ねじ伏せた。右手で「彼」の頭を地面に押さえつけた。

「視覚情報に頼りすぎだし、明らかに罫を張ってるやつほどハメやすい奴はいないぞ」

首筋に黒光りする機械を叩きつける。直後にずっと白く輝いていたスクリーンがブラックアウトした。

「……終わったか？」

真つ暗になつた作戦指揮所の隅から声が響く。渡井の声だろう。

「最新式の電脳錠を噛ませた。いくら凄腕のハッカーでも自前の脳インターセプター

だけで暗号化済み64ケタ32進数の乱数コードを解こうとしてたら寿命が終わる」

息を荒くした航暉が暗闇の中でそう答える。

「で、お前は何をした？」

真つ暗な部屋の上の方から声が振ってくる。最上部にいる中路だろう。

「彼」は渡井にしたように全員の電腦の視覚野に侵入していた。そのラインに逆進入をかけました」

「……ホールデン」もトンデモだがお前のトンデモだな、月刀」

荒い息でそういうのは杉田だ。

「で、システムは復旧できそうか？」

「ホールデンに食い荒らされてめちゃくちゃだ。これを復旧しようと思ったら時間がかかりすぎる」

渡井がそう言って溜息をついた気配がした。

「めちゃくちゃだってわかるってことは……システム自体はこちらのスク립トに反応してるんだな？」

「ああ」

「なら勝ち目はある。とりあえずはどこでもいい、外部との連絡手段の確保が必要だ」

航暉はそう言って立ち上がる。手探りでC-1卓のジャックを探し出し、QRSコードを差し込んだ。

「航暉、戦術リンク、音声無線、スク립ト、レーザー衛星通信、なんでもいい、破れるか？」

「破りますよ。こんなことで倒れてたまるか」

航暉の言葉に笑う気配がした。

「銀弓作戦はまだ実行中だ。艦娘は今、深海棲艦と対峙しているはずだ。戻ろぞ」

暗闇の中でそんな声が響いた。

「敵艦隊捕捉よく。戦艦ないし空母3、重巡5……おそらく後方にもまだいるわね」

呑気にも捕れる声でそう言うのは龍田だ。

「くっそ、なんでこんな重要なときにあの司令はつながらないんだ、ちくしょう。どこで遊んでやがる」

「怒りたいのは山々じゃが、ここを何とかしないと生きて帰れないのう」

利根の声に頷くのは筑摩だ。

「とりあえずは航空隊が来るまで足止めしないと……」

「どうする、電。……電？」

天龍は後ろを振り返る。返事がないことを訝しく思ったのだ。そして、認める。

「電!? どうした! おい!」

「どうして、なんで、なぜなのです……!」

天龍は海面にうずくまるような姿勢で頭を抱え込んでいる電に慌てて駆け寄った。

「どうして、なんで繋がらないのです……司令官さん、いやっ、いやああああああ!」

電の絶叫がこだまする。

「電! 電っ!」

世界の壊れる、音がした。

「どうして、なんで繋がらないのです……司令官さん、いやっ、いやああああああー!」

電の叫びが水面に反射する。

「おいっ、電、どうした、どうしたんだ!」

電はうずくまったまま叫び続ける。それについていけないのは島風だ。

「え? なに? なにがあつたの?」

「……Πλο^プρο^{ロー}ξ^ハ」

「響? 電ちゃんどうしちゃったの?」

「司令官とのリンクが切れたせいだ。その状態での戦闘に耐えられないんだろう」

響はそう言つて武装を前に向けた。

「天龍、今回電に旗艦を任せるのは無理だ。天龍か利根が旗艦を代行するべきだ」

「……それでどうなる」

渋い顔をして天龍が聞き返す。響は表情を消して天龍のほうを見つつ前進する。

「どうもならないよ。でも、いまここで死ぬわけにはいかないんだ」

響は振り返る、その背後遠くに水柱が立った。

「……向こうにも捕捉された、距離からして重巡以上がいるのは確かだよ。撃ち返さなきゃ、殺される」

響の言葉に電の肩が震えた。

「……電、司令官を守るんじゃないのかい?」

響の声に電はうずくまったまま答えない。

「……タイムリミットだ。電、司令官に何かあったとしても私たちは戦わなきゃいけないんだ。ここであぐまっついていても敵にいいようにされるだけだ。私は御免だ、そんなことは。その危険に司令官を晒すことも、私が晒されることも御免だ」

「——ならどうしろっつていうのですっ!」

海面に向かって叫んだ電に暁が不安げな表情を浮かべた。

「沈めるために沈めて、殺されたから殺して……私はそんな戦争は嫌なのです。なのに私も砲を振るって、相手を沈めて。それで守れたって言って満足して!。そうやって沈めながらずっと戦っついていかなきゃいけないのですか? 誰かを殺せばこの戦いは終わるのですか!?!」

電は顔を上げて響の方を睨んだ。赤く腫れた目に涙を浮かべ、響を睨む。

「もう、嫌なのです……誰かを沈めることしかできない私が、嫌なのです」

直後電の横に影が差す。その影は思いつきり電の頬を張った。乾いた音が響く。

「……電のバカチン!」

そのまま涙をぼろぼろと落としながら雷は電を見下ろした。

「沈めることしかできない? ならなんでマニラ沖の魚雷艇のみんなを助けることができたのよ、M I 攻略部隊のみんなを助けることができたのよ、エンカウンター乗員を助けることができたのよっ!?! それすら助けたあんたが否定するの!?!」

雷はそう言うのと右手を後ろに回し、錨を手取る。

雷は相手に肉薄しての戦いを好む。錨を振り回して届く範囲での戦闘を得意としていた。

その距離は、相手の手を取ろうと思えば届く距離だ。助けたいと

思ったときにすぐに手を差し伸べられる距離だ。

「私はあきらめない。今は戦うしかないかもしれない。助けられないかもしれない。ううん、助けられないことも絶対沢山ある、でも！私は手を伸ばすことをやめない。やめないって決めたんだ。それが私の誇りだから。戦う理由だから！」

雷は背筋を伸ばした。次から次へと流れる涙は止まることはなかったが、それでも目を開く。

「……それが、あの日、艦長が見せてくれた、私の……道だから。いくら偽善だと言われても、蔑まれたとしても、あの日の誇りを私は忘れたくない。だから私は戦う。生き残って、ひとつでも多くの命を救うために！」

守ってみせる、救って見せる。それがあの“オヤジ”が見せた力だった。あの残酷な歴史の中で、今でも誇れる魂だ。

それを聞いて暁はクスリと笑った。

「……いいじゃない。レディにしては男らしいけど」

「なによ暁姉え、文句ある？」

「文句なんてないわ。男らしいぐらいの方がいい女って聞くこともあるし……それで、電、どうするの？ 本当にそろそろ動かないと射撃の的になるわよ」

暁の言葉に電の視線は再び落ちる。

「私は、いなづまは……雷お姉ちゃんみたいに強くはないのです」

「電、あんたね……！」

再び声を荒げようとした雷を遮るように天龍が手で遮った。

「そうかい。なら沈むか？」

天龍は薄い金属音と共に赤い刃を鞘から引き出し電の目の前に切っ先を突き付けた。

「ちよ、ちよつと天——」

「黙ってるちんちくりん。……電、オレは今とんでもなく頭に来てる。こんなにキレそうなのは生まれて初めてかもしれないねえってくらい頭に来てる。なんでかわかるか？」

隻眼がすつと細められ電を見据えた。

「……電、いつまで“ひとり”で“戦ってるつもりだ？ お前の周りには司令官しかいないのか？」

電の震えが、止まる。

「確かにお前は弱い。戦うには致命的なほど甘い。今のお前ひとりじゃ誰かを守ろうなんて、ましては戦いをやめさせようなんて夢のまた夢だろうさ。それはお前がひとりで何もかも背負おうとしてるからだ」

天龍は切っ先をわずかに下げ電の首元へ。

「周りを見る電。誰がいる？」

「……」

「答えろ！」

天龍が怒鳴る。一瞬ぴくりと震えた電の首筋に一瞬刃が触れる。

「……天龍さんに龍田さん、お姉ちゃんたちに利根さん、筑摩さん」

「そうだ。今お前は月刀大佐からその目の前の奴らを指揮しろという命令を受けているはずだ。銀弓作戦第三班“シルバーアロー”を率いる部隊の旗艦であれと言われてるんだ」

天龍はそう言うのと刀を電の肩に預けた。

「他の班を見る。第一班は大和、第二班は古鷹……その部隊で一番の強さを誇る艦に旗艦は預けられた。でも第三班だけは違う。他の班に習えば利根に与えられるはずだ。利根の方がこういう作戦になれるはずだ。それでも月刀司令は、お前の指揮官は“お前”を指名したんだ。それがどんなにすごいことかわかるか？」

一瞬間を開け、天龍は声を張った。

「それだけ“お前”を信頼してるんだ。駆逐艦の、戦うこともままならないようなお前じゃないといけないって判断したんだ、あの大佐は。これ以上の答えが必要なのか？」

天龍は刀を肩からおろすと鞘に戻した。そうして膝をつくように腰を落とし電の頬にふれた。

「電、お前には旗艦を全うする義務がある。月刀大佐の期待に全力で応えようと努力する義務がある。一人じゃ無理だというなら、周りを

見ろ。力を貸してくれって言え。この部隊でそれを拒むヤツはいねえよ。お前に頼られてるんだ、信頼されてるんだって思えるだけできっと十分におつりがくるだろうさ」

そう言って天龍は電の目をのぞき込んで笑った。

「もちろん、俺も、な」

「天龍、さん……」

「なんだ？」

「……いなづまを、信じてくれますか？」

「もちろんだ。いつだってそうしてきただろう？」

電は手の甲で目元をこすった。

「……力を、貸してくれますか？」

「任せろ」

電の肩を叩いて勢いよく天龍が立ち上がる。

「島風、電探は？」

「捕捉済みは戦艦2、重巡5、軽巡3の駆逐艦2！」

「暁、敵の砲撃精度、割り出せるか？」

「あんまり高くないみたい。向こうは噴煙の真ただ中だから電探なんてあってないようなものじゃない？」

天龍はそう言って、立ち上がった電の肩に腕を回した。

「みんなお前を信頼してる。お前の指揮なら生きて帰れるって信頼してるんだ。情報も、仲間も揃ってる。あとはみんなで乗り越えるだけだ」

隣にもうひとり影が差す。龍田だ。

「銀弓神——アリユギユロトクソスの話、知ってるかしら？」

「いえ……」

「アリユギユロトクソス——アポローンはね、文化の守り神にして神託を授ける神、そして弓矢の神なの」

龍田はそういつて電の頭をなでた。

「馬鹿にしたり敵対したりすると、結構ひどいことをあつさりやつちやう神様なんだけどね。銀の弓を使って矢を射ると百発百中なの。金の矢を使えば射られた人はあつという間に死んでしまうらしいわ。

でも、彼はそれだけじゃないのよ。医学の神様でもあったのね〜」

龍田はいつもより優しく笑った。

「銀の矢を放ち、それに触れた人はどんなに瀕死の状態でも瞬く間に元通りに治した神様よ」

龍田は薙刀を右手一本でくるくると回すとそのまま切っ先を前に向け構えた。

「なにもすべてを焼き尽くす必要はないわ。その力はきつと誰かを守るための矢となるわ。やさしくて強い、そんな世界を切り拓く銀の鏑矢になるって思えるの〜」

龍田はそう笑って己の持つ薙刀の切っ先を見つめた。

「命を守り、命を吹き込む強くてしなやかな矢になるわ。……それをみんな信じてる。天龍ちゃんも暁ちゃんも、響ちゃんも雷ちゃんも利根さんも筑摩さんも睦月ちゃんたちもみーんな信じてる。もちろん私も信じてるわよ」

あなたの力を見せて、と龍田は微笑んだ。天龍がそれに頷き、笑う。電は深呼吸を一回。

司令部とのリンクはい未だに復旧しない。それでも、戦えるか。この戦いを終えられるか。

「……第三班旗艦電より全艦、敵主力艦隊との交戦に入ります。誘導方位2―3―0、公海中央部へ向け敵艦隊を退けます！」

『了解！』

電の声に僚艦の声が呼応する。

「利根さん筑摩さんは敵艦隊への砲撃を開始。照準を若干東側にずらして砲撃を」

「了解じゃ！ いくぞ筑摩！」

「はい、利根姉さん！」

「水雷戦隊は前進強速、敵の陣形を崩しにかかります。島風ちゃん、一番槍頼めますか？」

「任せて！ 指示遅かったけど、ま、許したげる！」

島風が飛び出す。その後ろを天龍が、龍田が、響が、暁が、雷が続く。

「……助かった」

横に並んだ天龍に囁くように言ったのは響だ。

「なんも解決してねえぞ。今のは寄ってたかって餌撒いて食いつかせただけの応急処置だ。電自身が答えを見出さなきゃ意味がねえんだ。わかりやすい一例だけを置いちゃった。……この後の方が問題だぞ、響」

「わかってるさ。でも、お礼を言いたかったんだ」

「そうかい。じゃ、ありがたくいただいちゃおうよ」

彼我の距離が詰まっていく。付近に水柱が立ち始めた。

「第三班、交戦開始！」

電の声が、無線に乗った。

「グアムの時も思ったけどなんで司令部のドアを戦闘指揮所の管制システムに組み込むかなあ……」

真つ暗な部屋の中で航暉はそうぼやきながら手探りで壁際のジャックを探していた。

「つてか、なんでオルタネート電源に切り替わらないんだよ」

「ぼやいてる暇あったら手を動かせ月刀」

「なら杉田も動けよ、ほら」

内部の電源が落ち真つ暗になった地下室で外部への連絡手段を確保する。そのために一番手っ取り早いのは「外にでてしまう」と言うことなのだが、ドアがうんともすんとも言わなくなってしまう。無線もホワイトノイズを返すだけであり、完全に孤立している。

通風孔がふさがってないから一酸化炭素中毒になる心配はないものあんまり気持ちのいい状態ではない。

「なあ、やっぱり『ホールデン』に吐いてもらった方がいいんじゃないか?」

「吐くと思うかあの野郎が」

「電腦錠を解くことと引き換えにしたら?」

「そう言う渡井を航暉は鼻でわらった。」

「あの『ホールデン』は傀儡^{リモート}だ。本体は遠く離れたどこかにいるよ。電腦錠を解いたところで逃げられて終了だ」

「ならなんで今も電腦錠かけっぱなしなんだよ。電腦自体は合田少佐のものだろう?」

「電腦錠がかかっていたら傀儡といえども動けない。電腦自体の動きを封じるわけだからな。忘れたか? まだこの管制システムはホールデンの掌握下だ。ここで電腦錠を解いたらどうなるかわかったもんじゃない。それに傀儡を抑えていれば感染経路や方法が割り出せる」

「証拠隠滅の防止ってわけね」

「そう言う会話をしながらも壁際のQRSプラグのポートを探り当て、航暉はそこにコードを差し込んだ。」

「さて、ドアの制御スクリプトが全削除されましたとかやめてくれよ……………」

航暉は壁際に寄り掛かるようにして体を楽にした。意識はドアの制御部に行き着き、パスワード入力エリアにとってかかる。とりあえずはパスワードの変更と暗号化だけらしい。

「…………中将、無線の方はどうです?」

「さっぱりだ。というよりよくこんなのをいじれるなお前ら。どれをいじればいいのかすらわからん」

中路が疲れ切った声を出した。どうやら中路の知識の範囲を超えていたらしい。

「…………みんな無事つすかね?」

「やめろ辛気臭え」

杉田がそう言って渡井の泣き言を叩き切った。沈黙が降りる。

「月刀、ドアの解除は？」

「素数をもとにアトランダムに暗号を変えてやがる。最短で4時間つてところか？」

「んなに待てるか。無線の方が早いんじゃないか？」

「物理的に一度回線を切ってCTC用のラインにバイパスすれば……」

「ミスったら外部への連絡手段が一切なくなるが覚悟の上か？」

「なんでバックアップ削除用のゴミデータまで暗号化してやがるんだ。暗号の手がかりが一切ねえ」

「艦娘との無線ダイアログ一字一句照らし合わせてみれば？」

「……ありだな。この暗号化されまくってるテキストのどこからどこまでが無線のバックアップかがわかればだが。渡井、任せた」

「お前はとうすんだよ？」

「ドア解除を続行する。くっそ……せめて空調システムぐらい残してほしかった。どんどん暑くなつてねえかこの部屋」

そんな会話をしながら航暉は暗号の変動パターン解析に入る。

「……月刀」

「なんだ」

「……どうして電ちゃんを旗艦に据えたんだ？」

杉田の声に航暉は笑う。

「……さあな。似た者同士だからかな？」

「ハン、よく言うぜ」

杉田が動く気配。

「……偽善、偽善ねえ。月刀、お前、どうして水上用自律駆動兵装運用士官になつたんだ？」

「そんな昔のことは忘れたよ」

「……あつそ、ならいいや」

くつつつと笑い声が響く。

「なら月刀、お前はいつたい誰なんだ？」

空気が冷える。一気に張りつめ、息苦しくなるほどの重圧がかかった。

「……なにが言いたい？」

「なんで『ホールデン』が昨日のお前と電の問答を知ってたんだ？」

航暉の動きが止まる。

「考えてみれば変だった。確かに月刀航暉は艦娘の空戦管制ができるほどの電脳使いだ。そう転がっている人材じゃない。だが、軍用ネットを食い破れるほどの腕は持ってない。そんな人間が特A級のハッカー『ホールデン』に気付かれずに視覚野に逆進入した？ 嘘だ」

金属が擦れる音、誰かが拳銃のスライドを引いた。

「可能性は二つ、月刀航暉の電脳が完全にハッキングされており、月刀航暉の体にホールデンが侵入しているか、月刀航暉自身がホールデンかだ。……どっちにしてもお前の電脳がこの状況の元凶だ」

きゆるきゆると何かをひねるような音。拳銃用の弱音器サブレッサーだろうか？

「上手いこと考えたよな。合田少佐は俺たちに恨みがあってもおかしくないし、彼がホールデンならこれ以上わかりやすい構図はない。そして彼を檻にして傀儡を捉えるというのもまあ無理のないシナリオだ。でもな」

杉田の声が一気に荒くなる。

「月刀を侮ったな。お前が言った通り電と月刀は似た者同士だ。電が敵に向けて銃を向けるのをためらったように、いくらいい好きないガキが相手でも『アイツ』は絶対仲間に銃を向けないんだよクソツタレ！』」

杉田はそう叫んで銃を発砲。『彼』の真横に弾丸を送る。バシユツという抑制された発砲音が響く。マズルフラッシュユがちかりと光った。

「こちとら国連海軍大学広島校以来アイツと何度も組んできたんだ。気がつかんと思ってたのか？……その体、返してもらおうぞ」

杉田は暗闇の中、にかりと笑った。

「さて、第二ラウンドと洒落込もうや。『ホールデン』。俺は月刀のバカほど甘くないぞ」

一瞬舵を当て方向を調整するとすぐ真横に砲弾が着弾する。その勢いも載せてしま風は前へ前へと加速する。

「スターボード！」

暁が叫ぶ。それを受けて島風は右に舵を当てる。暁がその航路をなぞるようにほぼ全力で駆けていく。暁の予想通り敵の砲弾が左舷側に着弾。爆風の殺傷域の縁をなぞるように飛び抜けながら暁は空を睨み、10センチ高角砲をまわした。対空電探がさつきからなりつばなしだ。その方位に目を向ければ米粒——否、ゴマ粒くらいの黒い点が見えている。

「あーもう、ただでさえ少ない水雷戦隊を分けてるのに……」

「文句言っても仕方ないじゃない。敵航空隊、くるわよ！」

「わかってるっ！ 連装砲ちゃん、対空戦闘用意だよ！ 戦闘モードを航空戦で固定。ついてきて！」

島風が合図を出すと背中に乗っていた連装砲ちゃんが海面に飛び降りた。島風を守るように周囲に散開する。自律砲台の防空域はかなり広がり、暁の隣にも一基展開した。

「あなたの支援なんていららないんだけど」

「私が必要な。ここで倒れられたら誰が弾道を『視る』のよ。期待してるんだよ。暁『先輩』？」

島風の言葉を聞いて暁がくすりと笑う。

「面白いじゃない、期待してなさい、島風」

ここで先頭が交代。暁が最前列に出る。

「暁より電、敵航空隊視認、ホットよ。数は16、艦戦と艦爆のミックスね」

《了解なのです。大丈夫なのです？》

「問題なし！」

《では、島風さん、暁お姉ちゃんはそのまま前進してください。間もなく筑摩さんたちが敵艦隊との交戦域へ入りますが……そっちの航空

隊落とせますか?》

「大丈夫っ!」

「お姉さんを信じなさい! こっちは大丈夫。姉と最速を信じてて!」

味方の直掩機はまだ到着していない。その状況で戦艦込みの敵の主力打撃部隊を叩かなければならない。電たちの第三班主力から斥候部隊の暁たちに追加の戦力を送ることはできないのだ。

《……ご武運を、お姉ちゃん》

「そつちもね。……信じてるわよ、電。第三班第二小队、戦闘開始!」

暁は無線を切って飛び出す。その後ろから島風と自律砲台が追従する。暁は敵の航空隊を遠くに眺めつつ主砲弾を打ち上げる。決して一機だけを睨んではいけない。視界を狭めては思わぬところから敵の攻撃が飛び出してきて驚くことになる。

主砲弾が敵航空隊のど真ん中を突っ切る。当たるものではないが出鼻を挫ければ十分だ。

「島風、いけるね?」

「もつちろん!」

「ついてこないと置いてくわよ」

「……38ノットがぬかすじゃない」

「盆踊りに付き合うつもりはないわ。下手に踊りたくなければついてきなさい」

暁が敵航空隊を嘲笑うかのように突っ込んでいく。砲弾一発で陣形を崩された航空隊がむかってくる。位置としては左舷前方に敵機だ。

暁に向かってくる先頭の敵機が爆散する。その破片を避けるように相手の僚機は右にブレイク。直後に連装砲ちゃんの砲撃を受けて散る。

上空をフライパスした残りの敵機のうち数機がインメルマンターン。そのまま頂点を通過し垂直降下の姿勢に持ち込もうとする。それを見て島風が何かを撃ちだした。敵機の鼻先で砕けたソレが敵機を切り裂いて周りの数機を道連れにした。

「けっこう上手いじゃない」

「こんな信号銃みたいなのでフレッシュト弾を撃ちだすなんて誰が考えたんだろうね」

「たぶん……杉田中佐」

「あー……」

確かに無茶な発案しそう。と島風は納得した。手に持っているのは後込め式の単発銃。マニラの時に信号弾を撃ちだしたのと同様だ。そこに詰まっているのはフレッシュト……短い矢を詰めたような弾だ。発射後に一定時間立つと爆裂、周囲に金属弾が飛び散るという凶悪兵器だ。それが敵の航空隊のど真ん中で弾けたわけである。

島風は連装砲ちゃんにエリア防空を任せ、信号銃の発射筒の根本を折るように叩くと発射された後の馬鹿でかい空薬莖が飛び出す。次弾を突っ込み、スナップを利かせるように振り上げ薬室を閉鎖、ロックがかかったことを確認して頭上に掲げる。

暁が舵を左に切る。島風もそれに追従。直後右脇に敵の爆弾が落ちてくる。爆弾を抱いているのはあと3機。その残りの機体に向けて島風が発射筒を向けるが暁が叫ぶ。

「高度が高すぎるー！」

それを受けてわずかに迷って島風は発射筒を下ろす。

「じゃあどうするの?」

「ここは突っ切れればいいの! だから無理に落とす必要はない!」

暁は主砲で艦戦を牽制しながらそう言っただけで方位を修正。水上電探の影を正面に見るように舵を切る。

「それに……くるよー!」

残りの三機が慌てて降下してくる。

魚雷が主兵装の駆逐艦が夜戦で活躍する理由。それは夜闇に紛れて接近でき、魚雷を十分に使えるからという言葉に尽きる。昼の太陽の元では航空機の爆撃や重巡などの射程の長い砲の餌食となり、魚雷の射程に入る前に疲弊してしまう。だから夜闇に紛れての奇襲を強いられるのだ。

だがもし、昼戦で航空戦をかわし、砲撃も逃げ切り、被弾せずに魚雷の有効射程まで近づいてくる駆逐艦がいれば？

魚雷は船の天敵だ。そんなものを満載して迫る敵を本隊に近づけるわけにはいかないのだ。

慌てて飛び込んだ敵艦爆が弾け飛ぶ。島風は信号銃を振りおろし、空薬莖を排出していた。

「お見事。んじゃ、敵の二次攻撃が来る前に取り付くわよ。リードは任せるわ」

「ついてこないと置いてくからね！」

「島風が言うど洒落にならないのよね……」

ここで改めて先導が交代、島風が飛び出していく。敵の輝きが水平線に薄っすらとのぞいていた。

「さて、こっちも行くこうか！」

暁たちが交戦を宣言したのを聞いて利根が砲を動かした。その横では筑摩が海を睨む。

「なんとか相手が上手く避けてくれればいいのですが……」

「どうなるかのう……まあ、なるようになるし、なるようにしかならんもんじゃ。吾輩たちに任せておくのが最善じやろう。電は時に頑張る」

「それでしょうか……？」

「なんでも背負おうとしすぎるからのう。そこは周りがカバーせんといけんことじやろうて」

「利根姉さんが言うならそうなんでしょうけど……」
「不安か？」

筑摩は横でわらう姉艦を見てどこか不安が混じった笑みを浮かべた。

「……電ちゃん、やっぱり今も無理してます」

「当然じゃな。さっきの天龍たちの言葉は答えになつたらんからの。期待されているからとか周りから信頼されているから戦うというのは、電がここで相手を殺める理由にはならんじやろう。それでも、あそこで電の疑問から目をそらさせなければ彼女を切り捨てるしかなかった。だからあんなふうに言ったのじゃ」

砲の角度を見極めつつ、利根は夢げに笑う。

「わざと疑問をすり替えたのじゃ、筑摩。彼女の疑問を周りの期待でかき消した。信じているというより甘い真実で目を眩ましたのじゃ。そうでもしなければ、彼女を切り捨てざるを得なかった。そうして、電にその期待に応えることを強いたのじゃよ」

利根はそう言つて無線を開く。

「第一小隊利根より本隊電へ、砲撃用意完了じや。電探も何とかとらえておるぞー！」

《了解なのです。砲撃を許可します！》

「許可を確認、砲撃を開始するぞー」

利根はそう言つて砲を撃ちだした。噴煙の危険域が近く偵察機の飛行可能エリアも限られる。うまくあたるかどうかはわかったものではない。

「それでもな、筑摩。吾輩たちは生き残らねばならんのじゃ！ 吾輩も、筑摩も、天龍たちも電も！ 提督もじゃ！ 全員で生き残らねばならんのじゃー！」

利根は着弾の報告……偵察機の報告もいつもより大雑把だ……を聞きながら砲を調整、再度砲撃。

「これが最適だったのか、吾輩にはわからん。それでも突き進むしかなかろう。ここでむぎむぎと殺されるのを待つよりはよっぽどマシじやった。だから、彼女を焚きつけたのじゃよ」

着弾観測。敵艦隊の駆逐艦に命中、爆炎確認。再装填、修正、発射。
「……本当はこういう問答は、戦う前に終わらせたかったのじゃが
のう。もう間に合わん。じゃから、今できるのは電たちが殺されるこ
とのないように全力で撃ち続けるしかできんのじゃ。不甲斐ないこ
とにの」

利根の目の端にわずかに涙が浮かんでいることに筑摩は気がつく。
それでも彼女は見ないふりをした。

「……生き残るぞ、筑摩。皆を生きて帰すのじゃ」

「はい、利根姉さん」

爆炎が二隻分、飛び出していく。

「——武蔵」

「どうした？」

大和はゆっくりと隣を進む武蔵に声をかけた。

第三班が戦闘を開始したことは無線で知っていた。大鳳が言うに
は航空隊の到着にはあと10分はかかるらしい。

「……私たちにできることはないんでしょうかね？」

「さあな、だが向こうの司令艦がなにも言っていないと言うことはな
いと判断していいだろう。……怖いかな？」

「何がですか？」

「戦場から離れることが、さ。奴らは私たちを避け、第三班の方に戦い
を挑んだわけっだろう？ 最終兵器として温存され、死にゆく仲間の
最期を無線で聞くだけなんじゃないか、違うか？」

「……そうかもしれませんね」

大和は僂げに笑った。

「それでも国を守る最後の砦であり続けることは、私の使命であり、誇りでしたから、不満はないんです。日本民族の誇りであり矜持であること、それを背負うことができた。それに胸を張っていられる。それが私を私でいることを許した。そうじゃなきゃいけないのよ。そうであるべきなのに、どこか否と言ってほしいだなんて思ってしまうのは——驕りなのでしょうね」

「そんなことはないだろうさ。あの海に——私が知らんあの海に死んで来いなんて言われた過去はもう変えられん。あの時はあれが最善だったと信じるしかできん。でもな、大和。それをお前が望まないなら、それでもいいと思うぞ」

武蔵はついと目線を落とす。

「過去は変わらない。一億特攻の先駆けたれと言われた過去も、私がシブヤンの海に沈んだ過去も変わらんさ。どんなに地団太を踏んだっていくら砲を撃ったって変わることはないだろう。だが“これから”はいくらだって変えられる」

「……ほんと、杉田中佐に似てきましたね」

「うれしいことを言ってくれるじゃないか。アイツもきつとこういうぞ——“君の“これから”は果てしなく、世界は無限大だ。肩の力を抜いていこうぞ”」

昨日の夜の彼の声が蘇る。大和はそれにわずかに笑う。

「ほんと、武蔵はいい殿方を見つけたのですね」

「当然だ。私が選んだ」

武蔵はそう言うのと割り込んだノイズに眉を顰めた。

「……ほう、こっちにも来客だぞ？」

武蔵がそう言った直後、かなりの前方でピケッターをしていた阿武隈の無線が乗る

《こちら551阿武隈、水上電探コンタクト！ 大型反応複数ですー》
「こちら武蔵、こちらでも捉えた。空母もしくは戦艦が2、そのほか反応があるが数はわからん。奴さんは隊を二分したらしいな。……ど

うしても戦いたいと見える」

武蔵は寧猛な笑みを浮かべる。

「大鳳、艦載機はあといくつある?」

「艦戦24、艦爆16、艦攻16ね。第三班の方は軽空部隊のほうがやってくれているから結構余裕があるわ」

「よし、大和……。大和?」

「艦載機は全機発艦させてください。ただし第一次攻撃のみ、それが終わったなら直掩を残して後退を」

大和が速力を上げる。

「……何をやる気だ?」

「女の顔のあなたを見れて良かったです。武蔵、貴方に指揮艦権限を委譲します」

進行方向は……捕捉した敵艦隊、第二敵艦隊。

速力全開で一気に飛び出していく。

「やま——、あのバカ!」

武蔵はそう叫んで手を伸ばそうとして、やめた。

「あいつがそうそう止まる訳ないな、なんだかんだでじゃじゃ馬だ」

どうしてこんなところだけ似たのだろうと武蔵は思いつつ無線を開く。

「こちら武蔵、これより第一班「シルバーボウ」の指揮を執る。大和が最前線で戦線をかき回す。乱戦になるぞ、各艦は対艦戦闘に備えろ。戦艦同士の殴り合いだ。しっかり避ける」

武蔵はそういつつ安全装置を解除した。

「——大和。後で杉田と中路中将に怒鳴られる覚悟はできてるだろうな?」

「当然です」

「なら結構、一緒に怒鳴られてやるよ。——作戦目標は変更なし、敵艦隊の撃滅だが、全員の生還を以て作戦を成功とする。総員くれぐれも早まるな。ここは坊ノ岬沖じゃない、小笠原諸島の西之島沖だ、沈むなよ?」

武蔵は笑顔で砲をまわす。

「戦闘開始だ、諸君。遠慮はなしだ、撃てえ！」

「大和、推して参ります！」

武蔵が戦いの火蓋を切って落とす。その号砲は高らかに海の上を鳴り渡った。

「……敵艦隊を分けてきた？」

電は武蔵の無線を聞きつつ頭上を駆けていく味方の砲弾の着弾を眺める。敵のわずかに西、噴煙から引き離すように砲弾が落ちていく。

電の横に天龍が並んだ。

「まあ、こつちにとつては楽でいいじゃねえか。これ以上デカブツは来ないんだろ？」

「それはわかりませんが、三個艦隊全てを相手取ることにはならずには済みそうなのです。……龍鳳さん聞こえますか？」

《こちら龍鳳、ノイズは酷いけどなんとか！》

「今、島の南西方向の噴煙はクリアー。最短距離で回してもらえますか？」

《なんとかやってるけどもう少しかかります。一番クリアな高度はどのあたりかわかりますか？》

電が目を凝らし空を睨む。

「極低空か高度1500から2000の間が薄そうです」

《わかった。艦攻を低空で回して残りを2000で回すね。現着まで……あと7分！》

200メートルほど左に立った水柱を見つつ電は速度を上げる。

「反航戦で敵艦隊と接触、状況が許せばその後、急速回頭し丁字戦もしくは同航戦に持ち込みます」

「あら〜……」

龍田が不敵な笑みを浮かべる。その横では響が、しんがりの雷も笑みを浮かべた。

「面白いじゃない……!」

天龍が速力を落とし電の後ろに入った。

「単縦陣で切り向けます。右舷戦闘用意!」

電の戦いも切って落とされる。

戦場が加速していく。

銃声は立て続けに3回。ベレッタM93R独特の上面ガスポートから漏れるマズルフラッシュが閃く。管制卓の一つにへこみを作り、金属の鱗片が火花となつて一瞬あたりを照らした。

「そろそろやめにしないか、杉田」

「月刀のボキャブラリを勝手に引用してんじゃねえ、虫唾が走る」

火花の影にいた杉田はその大ぶりの凶体に似合わずわずかな物音のみを残して壁をなぞるように横へ、暗闇の中、それを追って横なぎの三点バーストが走った。杉田の左腕にあたるが、ボスンと妙な音を立てるだけで血はにじまない。

「義体化率高いんだったな」

「それをわかつて撃ってるわけじゃないだろうに」

「痛覚を切れるというのは便利なものだな、撃たれても動ける」

「月刀なら〃生身でなければ感じれない空気がある〃って言うぜ？」

人工筋肉とタンパク由来のナノマシン溶液のシミが制服を少し濡らした。すぐにその溶液の弁が閉じられ油圧の低下を抑えにかかる。すぐに溶液の流出は止まる。腕の動きを確認、伸ばす側にすこし違和感があるものの、動く。

「そろそろ限界かい？ お前にはこの状況を止めることはできないだろう」

「さあね」

杉田は手の内にあるFN FiveSevenを暗闇の中で見下ろす。たしかにこのままでは勝ち目がないのだ。

「お前には撃てないんだよ、杉田。俺を撃ち、結果として停止するのは月刀航暉の脳だ。俺との肉体的対決に意味はない。また、お前はハッキング技術ではホールデンに勝てない。コンピュータのバックアップが受けられれば話は別だがアクセスできる全てのコンピュータは俺の掌握下だ。そこに接続した途端にお前の体に乗っ取られる。その状況で安全なアクセス方法はキーボード入力による手動でのスク

リプト入力だが、それでQRSプラグ直結の高速通信に追従できるはずがない」

そう、現状のままでは勝ち目がない。それでも諦めればここで終わるのだ。

管制卓の影から飛び出す。電腦通信を自閉モードへ移行させた。どうやらこの電腦にはまだホールデンは進入してきていないらしい。軽い銃声、わずかな間隔を置いて2回。暗闇とはいえある程度気配で動きはわかる。

向こうも応射、ヘッドショットを狙ってくるが左腕で防ぐ。チタン合金の骨にあたり、生身にも衝撃が響くが無視できる程度だ。そのまま姿勢を低く、彼の射線を避けつつ懐に飛び込んだ。

「——セイツ！」

当身をかける。金属交じりの115キロの当身を喰らえば必然的に相手は後方にたたらを踏む。勢いを殺すことなく前へ。左の掌底を態勢が整ってない彼の鼻頭目がけて繰り出す。それを後ろに重心を意図的に崩すことで回避した彼は大きく後ろに足をすりだし、腰を落とすことで態勢を持ち直す。

杉田はそこへ向け右足で低く回し蹴りを繰り出す。決して重心を上げないように低く繰り出されたつま先を彼は左腕で受け止めた。一瞬表情が歪むが、暗闇ではまともに表情は見えないだろう。

「——ホールデン。お前には大きな弱点がある」

受け止められた右足で彼の左の膝を潰すように踏み切った。空中に放り投げたFN Five sevenの放物線を追うように側転の要領で体を上に回す。相手の左腕を掴み無理やり捻り上げつつ彼の後ろに降り立つとそのまま首の後ろに左の肘を叩き込んだ——左肩が外れたような感覚が残る。航暉に心の中だけで謝りながらも、右手は地面すれすれをなぞり、彼の獲物が地面に落ちる寸前にかっさらう。

「確かに傀儡を使つての電腦ハックは便利だ。だがその相手の動きまでトレースできるわけじゃねえ」

痛みに呻く彼は無理やり腕を振りほどき距離を稼ぐ、その横を

5. 7 x 28 mm弾が通過した。

「新品のアンドロイドやガイノイドでもない限り個体差は存在する。その置かれた状況や個アイデンティティ・インフォメーションの情報によって体の発達・摩耗具合はことなり、それに合う形で体の運用がなされているからだ」

「彼」が振り向き銃を向けようとしたタイミング、ちょうど銃の横っ腹が無防備にさらされたタイミングでFive—sevenの弾丸が「彼」の銃を弾き飛ばした。

「お前が問借りしている月刀航暉の体はな、電腦化以外はほぼ生身で戦闘用義体って訳じゃない。戦闘用の義体制御プログラムをそのまま流し込もうとしたところでそのプログラムと月刀航暉の肉体とがコンフリクトを起こすのは当然だわな。まして月刀は自分の体を陸軍などでしつかり使い込んで自分用にチューンしている。他人がおいそれと使いこなせるわけじゃねえ」

杉田は自分の左目——義眼化したその眼で彼の熱を捉える。重心は右に寄っている。おそらく左ひざを今動かすと激痛が走るはずだ。左肩も脱臼させ銃も弾き飛ばした。杉田は地面を蹴り彼の懐に改めて飛び込むと右足を払う。左足でバランスを取ろうとしたようだがあつけなく「彼」は地面に引き倒され、マウントポジションを取られる。

「月刀航暉は眼も自前のはずだ。この暗闇の中で戦闘を繰り広げるには機械のバックアップがいる……たとえばこの部屋の赤外線センサーのモニタリング情報を合成して使用するのかな。それに加えて戦闘中は有線での接続はできない上に、お前は他のシステムを破られないように維持しなければならぬ。無線式の通信を常に展開しつづけ、電子攻撃と物理攻撃を同時に捌く。そんなジャグリングが続くはずがないよな？」

バーチョークをかけられ、「彼」の顔が紫色を帯びてくる。

「意識をなくすまであと45秒、死亡まで2分つてとこかな」

「あ………がつ、………」

「苦しいだろう？ 生身の体だから痛覚の切断もできない。上手く絞めれば7秒で意識を刈り取ることもできるんだが、あまりに味気ない

だろう?……さて、電腦化及び義体化した兵士が死亡すれば軍用電腦はサージ電流によって破壊される。情報漏洩防止の通常処置だ。傀儡とはいえ己の魂を分けた分身が焼き殺される衝撃に、お前は耐えられるかな?」

「……ゆ うじん を ころ す の、か?」

「殺せるさ。なに、俺の体を砕きやがったのは中等教育校時代の親友だったからな。ためらいなんて無い」

腕で相手の首を押しつぶすようにしながらどこか影のある顔を浮かべる杉田。

「月刀の電腦にある俺の人事記録を参照してみるといい。俺の母親はフィリピン人だな。第三次大戦期の外国人排斥運動に巻き込まれ、家族そろってリンチにあった。そのリンチの首謀者は父親の同僚。くだらない国粹主義に酔った馬鹿な青い親友は日本人であるために鍬で俺の体を腐葉土の中にすきこもうとしたんだ。命からがら逃げ延びたものの、左腕と腰から下が壊死して。ダルマ状態で病院で腐っていたところに日本国自衛軍のスカウトだ」

右手の拳銃を「彼」の頭に突き付ける。

「国連派兵団の一員でフィリピン内紛に介入したこともある。ゲリラになった現地の人たちを皆殺しにしたこともある。仙台の外国人排斥運動デモの過激派を抑え込むためとかいって弱装填弾をぶっ放したこともあったけな。……仲間に殺され、殺し返して、仲間を殺し、そうするうちに泥沼化した戦場さ。その経験は俺の血肉になって今も流れてる。今更一人増えたところで何が変わるわけでもないさ」

セーフティを解除、引金をなでるようにそつと触れた。

「最後の警告だ。サージ電流で魂を焼き殺されたくなければさつさと出ていけ」

「……おま えは 撃てな い」

———そうかな?

「彼」はその回答に驚愕した。目の前の男の声のほかには自らの声が混じったように思えたからだ。

それを最後に感覚が途切れる。「彼」の体は力を失ったように

ぐったりと倒れた。

「……オルタネット電源、切り替わります」

渡井の声に杉田は我に返るように腕を航暉の首元から外しポケットから何かを取り出した。それを航暉の首の後ろにはめ込んだ。

「悪く思ふなよ月刀、今お前を指揮に上げるわけにはいかないんだ」

スクリーンが再起動する。そのあかりに目を細めながら部屋の最上部、総合司令卓——A卓を見上げる。

「……これで終わったんだろうな」

「さあ、わかりませんよ。『ホールデン』は消えたのか、はたまた月刀中佐の中に残ったままなのか。今答えを出すには危険です。ここにいる全員がいつ『ホールデン』になってもおかしくない状況には変わりありませんよ、中将」

左腕に4発、義手の付け根が傷むが無視できるレベルだ。

「渡井、ITCの初期化、実行できるか？」

「……無理やり全消去するのでどう転ぶか知りませんよ。それに通信はどうする気です？」

「とりあえず『ホールデン』のこれ以上の拡散は避けたい。オルタネット電源が入ったってことはドアも開くはずだ。外にでて簡易中継器経由で指揮をとる」

「……簡易で3個戦隊の指揮をとると？」

杉田の声に中路が頷いた。

「航暉が使えんのは痛い。空戦指揮は門外漢なんだが、やるしかないのはわかり切ってるのでな」

「とりあえずは部隊を何とか抑えなければ、ってどこですか？」

「ああ、杉田君力を貸してくれるかね？」

「お望みとあらば」

ドアの開閉端末に非常用サインを流す。ロックだけが開いたドアを杉田が無理やりこじ開けた。

「さて、艦娘たちを迎えに行くでしょう」

敵艦隊を遠目に認め電はさらに速度を上げる。

「さて、こちらでも速力限界な訳だがちゃんと相手より早いんだろうな？」

「大丈夫なのです」

天龍の問いに電は落ち着いた声で返した。横から浅い角度で合流してきた島風と暁を認め手を振った。これで水雷戦隊が改めて集合したことになる。

「龍鳳さん、こちらを捕捉できましたか？」

《なんとか、今暁ちゃんたちをコンタクト》

「今から先に艦隊戦に入ります。艦爆、艦攻はこちらの指示があるまで上空待機してもらえますか？」

《いいですけど、敵の艦載機が来たら保証できませんよ？》

「大丈夫です、たぶん」

電はそう言って敵艦隊との距離を測る。10,000メートルを割った。

「8500までこのまま接近します！」

「了解だ！」

天龍はそういつて笑った、後ろをちらりと見やると最後尾の龍田までの僚艦を見て取れる。そこに島風と暁が合流する。第538水雷戦隊の勢ぞろいだ。

龍田が天龍の視線に気がついたのか目で笑って見せる。残り9000。

完全に敵艦隊の射程内。だがそこで下がる訳にも行かないのだ。

「逐次回頭用意！左舷取舵160度！……回頭、はじめ！」

電が取り舵を切る。そのあとをトレースするように天龍が続く。船速を維持できるうちの最小半径での旋回、できる限りコンパクトに。電は重心を思いつき倒し、遠心力に打ち勝とうとした其の間にも相手の先頭艦——戦艦ル級を見据えたまま、回頭の角度を見極める。

「……本当は戦いたくないのです。それでも」

電は下唇を噛みしめた。わずかに鉄のような味を感じ、それでも噛みしめた。

——それでも、それが司令官の望みなら

いなづまを信じてくれた司令官がこれを望むなら、いなづまは引き金を引く。それで誰かを守ることになるのだろうか、誰かを救うことになるのだろうか。

もつと平和な海だったなら、わたしは戦わなくて済んだのだろうか？ 深海棲艦が現れなければ、わたしは戦わなくて澄んだのだろうか？ そんなことを考えても仕方がないのだろう。なにせ前提条件がおかしい。現状わたしは水上用自律駆動兵装、兵器だ。戦わなくなれば私はただの廃棄物に成り下がるのだろう。

わたしがわたしであるためには敵を屠らなければならない。それが兵器に課せられた使命だ、その屠った屍の上に平和を積み重ねるための凶弾だ。

不思議なことにそれを悲しいとは思えなかった。間違っているとさえ思えなかった。ただ「そうあるべきだからそうなのだ」。

わたしは兵器、水上用自律駆動兵装。深海棲艦を殲滅し、人間を守る、そのための兵器。

それで——いいのだろうか？ いや、いいのだ。

電は一人そう納得し——納得したふりをして声を張り上げる。

「回頭終了！ 目標、右舷敵艦隊先頭艦、戦艦ル級！ 砲戦はじめ！」
敵艦隊を右舷に見渡した。反航戦から一気に同航戦よりの丁字戦

このままいけば三分もかからずに互いの航跡が交差する。そんな近距離では魚雷を外す方が難しくなるだろう。敵艦隊も転進、距離を保とうとするように逃げれば結果的に同航戦に持ち込むことになる。

「決まったじゃねえか！ 東郷ターンー！」

そう、敵前大回頭、日露戦争で日本の有利を決定づけた日本海海戦。バルチック艦隊を打ち破った東郷平八郎が取った戦術だ。

これの最大のメリットは敵の進路を圧迫し、敵に進路の変更を強いること。これで丁字戦に持ち込めれば御の字だが、敵もおそらくバカではない。そうなる前に回頭し、相手の前に出ようとしてくるだろう。だが、戦艦が水雷戦隊相手に速力で追従できるはずがない。最初に頭を抑えてしまえば、敵は相手の進路に沿って、同航戦で戦うことを強いられる。

駆逐艦の主砲が先頭のル級に集中する。電探が不明瞭とはいえ、この距離なら外すことはない。

「右舷雷撃用意！ 敵艦列同位の艦を狙ってください！」

電の声に合わせて皆が雷撃の用意をする。ル級の砲撃が電の鼻先を飛び抜けたが足は止めなかった。

「雷撃構えー！ サルツォー 一斉射！」

海面に飛び込んだ酸素魚雷が静かに海面下を走る。同時に回頭の用意をかけ、ル級の足元に水柱が立ったタイミングでさらに取舵。相手を噴煙から引き離していく。

追従してくる敵艦は8隻。先頭を曳いていたル級は目に見えて速度が落ちているが砲はいまだにこちらを向いている。

だが、ここまでくれば彼女たちの独壇場だった。

「——龍鳳さんー！」

太陽を背に艦爆隊が急降下を決める。いくつもの爆炎が立ち、その爆炎を目がけて利根たちの砲火も飛来する。電に挨拶をするように翼を振って目の前を通過した艦攻隊が魚雷を落として去っていく。その後には海面を包む炎だけが残された。

「……これで、よかったのでしょうか？」

「さあな、だがお前の指揮があったから上手くいったと思うぜ。お疲

れさん、旗艦殿」

天龍が電の頭をぽんと叩いた。

「あとは大和たちの第一班だ。応援にいければいいが、この噴煙を抜けていくのは……無理だな。初霜たちを信じるしかないか」

「はい……」

電は返事をするがどこか上の空で、天龍は僅かに目を顰めた。

「気を抜くなよ電。そういうのは全部終わってからだ」

「はい……」

わずかな後悔のような気持ちが去来する。それでも、電は顔を上げた。

涙は出なかった。

《大和、左舷3—5—6度！》

武蔵の声に大和の副砲が反応する。その方向から飛び出してこようとした駆逐艦を跡形もなく消し飛ばした。

「なかなか、数が多い……！」

大和は歯噛みしつつも速度を上げる。出力リミッターがもどかしい、もう非常事態ということでも勝手に解除してしまおうか。

敵の水雷戦隊が先行して接近、エアカバーはまだ拮抗しているが、敵空母の上では発艦準備中の機が何機か残っている。すなわち、このままでは制空権を取られかねない。当然だ。向こうは正規空母3隻。こちらは装甲空母の大鳳と軽空母三隻、そのうち龍鳳が第三班のカバーにあたっているから正規空母一隻と軽空2隻がこちらの正味の航空戦力になる。数は向こうの方が上だ。これ以上相手が上がってきたら航空戦で押し切られる。主砲の照準を合わせていく。鷹の目がまだ復旧しないのが痛い。昔ながらの試射を重ねての着弾観測砲撃に頼らざるを得ない。だが、制空権は拮抗、下手すれば不利に傾きかねない。……その状況で水観を出せるか。無理だ。

だからこそ前に出たのだ。目視での攻撃圏内に相手を捉え、戦艦の中でももつとも重い砲弾を相手に高速で叩き込むために。

「第一・第二主砲、徹甲弾装填！ 砲管制システムをマニュアルへ電探情報リンクリクエスト！」

電探の情報、測定儀の情報を統合、敵の艦影を見極め砲の角度を調整する。鷹の目ほどの精度は望めない。それでも撃たなければならぬ。ない。

「——撃てっ！」

爆炎がほとばしり、衝撃波を伴った徹甲弾が超音速で飛び出している。着弾まで約20秒、再装填間隔はどんなに短縮しても25秒、実質30秒。約40秒に一斉射が限度だろうか。その間にも敵の航空隊に水雷戦隊も相手にしなければならぬ。再装填を急ぎながら砲弾の行方を追う。

(……近・近と言うところでしょうかね)

副砲を回し大和を迂回して戦闘に向かおうとしている水雷戦隊の鼻先へ砲弾を撃ち付ける。左舷側を大きく回り込むように動いていた敵の水雷戦隊は先頭を曳いていた軽巡の進路がぶれたことにより陣形を崩していく。あそこまで行けば武蔵と大鳳がいれば瞬殺できよう。

そのうちに水柱が立つ。真つ白の水柱が4本、相手との間にカーテンを引くように水柱が立つ。それを割るように飛び向けた砲弾が水色の水柱を立てる。

「……武蔵ですか」

《いいところを全て姉に持っていかれるのは癪なのでな。アイツの無茶な砲さばきで慣れたさ》

かなり後方に位置する武蔵だがしつかり計算を合せてくる。妹ながらいい腕をしている。

再装填完了、角度をわずかに増加させ発砲、同時に首の後ろがちりりとするような感覚、はつとして上を見上げれば敵の艦爆がダイブブレーキを開いて飛び込んでくるところだった。時間が引き伸ばされたように感じる、急いで左へ舵を切りつつ機銃掃射。あつという間に蜂の巣になった航空機、曳光弾が爆弾にヒットしたのか空中、至近距離で爆弾が破裂した。

《大和っ!?!》

「大丈夫です！ 砲撃続行！」

直撃したわけではない。缶をはじめとした推進部や武装管制システムなど基幹機能は無事だ。だが対空電探が完全に沈黙し、水上電探もノイズまみれになったのがつらいところではある。それでも距離測定儀は生きているし砲もまわる。戦闘は続行できる。和傘を模した電探アンテナが使い物にならなくなってしまった。爆風避けの足しにもなればと振りかざしたから当然ではあるが。それを適当な敵機に向けてやり投げの要領でかつ飛ばすと慌てて距離を取っていく。

(武蔵や大鳳たちにも攻撃が向いているのは少々面白くないですね。

私を無視しても海上に浮かんでいられると思っただけなのでしょうか……)

そう思った直後に体を直に揺さぶられた。足に軽い痛みが走る。

「……魚雷？」

ダメージコントロールシーケンスを開始する。痛みは左足、左舷からの雷撃だ。あの水雷戦隊が目標をこちらに変えたのだろうか？
上等上等、まとめて相手にしてやる。

《大和、無茶するな！》

「わかってますとも」

武蔵の声に笑って大和は空を見る。何機かがこちらとの距離を窺うように飛び回っていた。三式弾で追っ払ってしまおうか。

どこか状況が他人事のように、大和の感情はひどく落ち着いていた。感情は極端にフラットだった。

「とはいえ負けるのも癪ですし」

大和は目視で遠くの艦隊に狙いをつけ砲弾を撃ちだすと、舵を左へ。かなり近いところに敵の駆逐艦が飛び込んでいた。副砲で海面を切るように鉛を撃つと駆逐艦はあつという間に海の中へと消えていく。それを見送ることなどしない、時間の無駄だからだ。上空を飛び交う影を気にしつつも大和は速度を維持したままどんどん距離を詰めていく。

また左上方から艦爆が一機、突っ込んでくる。空に遠く豆粒が散らばっているところを見るに、直接的な攻撃は航空隊に切り替えるつもりらしい。それを待たずに突っ込んできた敵機を捌きながら大和は苦笑いを浮かべる、単騎でこの大和型に何ができるといふのだろう。当たってやるつもりもないし、当たったとしてもこの装甲は爆弾一発ではどうこうできるものでもないつもりだ。たった一機の飛行機で立ち向かってくる勇氣には賞賛を送るが、それは勇敢というよりは蛮勇と言うべきものだろう。

回避のために右に舵を当てる。わずかにぶれた進路は艦爆が放った爆弾をギリギリでかわし切った。海水交じりの爆風が吹き付ける。

《大和！》

武蔵の叫びが無線に響く。その尋常ならざる声に一瞬眉をしかめた。直後に背負った艦装から爆炎が上がる。その衝撃に肺から強制的に空気が押し出される。

「ッ……まさか、特攻……？」

あの時、敵機は一機、吊つてる爆弾も一機だったはずだ。爆弾をかわした直後に上空からぶち当たってくるものといえば爆弾を運搬していた航空機以外なさそうだ。

いつかの記憶がフラッシュバックする。

あのことを悔いているわけではない。そうでもしないと、そこまではないとあの時は活路が見いだせなかつたのだ。

一億特攻の先駆けたれと言われ、海上特攻に挑んだあの時の心意気を忘れたわけではない。死して名を残すこと、国の名を冠した戦艦が、命を惜しみ醜態をさらすことは許されないので。

だのに、何を怒っているのだろう。相手が「同じことを仕掛けてきたから」だろうか？

「……ああ、そうですね」

悲しいんだろうと思う。どこか冷めた心でそう思ったのだ。あの時の亡霊を重ねてしまったのだろうか。

相手もそれほどまでに追い詰められているのだろうか。特攻などしなければ活路が見えないほどに後がないのだろうか。

あの戦争のときの敵兵はこんな気持ちでそれを見ていたのだろうか。なんと痛ましく、なんと浅ましい攻撃だろうと思ひ、唇を噛んだ。だが悲しいと思うことを大和は是とできない。それは昔の自分を憐れむことだ。あの思いを否定することだ。あの時の自分が憐れみの対象となることを認めることだ。

水柱がおさまる。低空で突っ込んでくる艦攻隊がぼんやりと見えただ。数は——30程度だろうか、かなり多い。

砲を向けてそこで止める。照準を合せる。

「……」

引き金を、引けなかった。

なぜだろう、引く気が起きなかったのだ。あれを潰してしまったら、昔の自分を否定してしまう気がしたのだ。

雷撃機がもう一段高度を落とす。そろそろ雷撃がくるのだろうか。左舷にあれだけの魚雷を喰らえば無事で済む保証はないだろう。

大和は息を吐きだし、動きを止める。

《大和、回避だ！ スターボード！》

武蔵の声がなる。ゆつくりと無線を切った。

中路中将と杉田中佐に謝るべきだろうが、謝る手段はなさそうだった。

ひとり覚悟を決めて、ひとり微笑んだ。

直後――

「――諦めちゃダメですっ！」

目の前をいくつもの水柱が立つ大和への直撃コースの魚雷が狙い撃ちされていく。

はっとして横を見ると、急速に影が迫ってきていた。

「大和さん！ ひとりで勝手に諦めないでください！ 私が、貴方を守ります！」

両手に構えた砲を撃ちこみながら駆けてきた彼女は必死の形相で大和と魚雷の間に体を滑り込ませた。初霜は大和の盾になる位置でスライディングのように海面を削りつつ級制動をかける。そこで停止したまま短いサイクルで砲撃を続ける。そのたびに大きな水柱が

立ち、魚雷をせき止めていく。それでもそこに立っていれば魚雷の直撃は免れない。

「初霜、どきなさいー!」

「どきませんー!」

次々と魚雷を主砲弾で撃ちぬきながら初霜は叫ぶ。

「大和さんの命令でもどきません!　ここは坊の岬沖じゃないんです!　こんなところで、大和さんは犬死する気ですかっ?」

水柱の立つ位置がどんどん迫ってくる。

「若葉っ!」

「任せろ。」

追いついてきた若葉が横から機銃を放つ。主砲で右手が塞がっているからか、左手一本で快調に空薬莖を飛ばしながらフルオートで横なぎに鉛玉を叩き込んでいく。強烈な反動を利用して射線を変え撃ち込まれた鉛玉が魚雷の行先を狂わせ、誤作動を起こしていく。

「大和さんがどんな思いでここで戦ってるかなんてわかりません!

もう戦いたくないと思ってるかもしれないし、死にたいのかもしれないんですけど、私の前で沈むのだけは許しません!」

初霜は主砲の発砲サイクルを無理矢理に縮めて発砲を続ける。右手の連装砲の右砲が撃発不良を起こして、弾が詰まる。強引に薬室を解放し不良弾を強制排除、次弾を叩き込む。

「あんな思いはしないって決めたんです。護衛だけが、貴方を最後まで送り届けられなかった護衛だけが帰ってくるような、あんな惨めな思いだけはしないって決めたんです!」

今度は左手の単装砲の銃身が熱を持ちすぎたというエラーが出る。連装砲を撃ちつつも腰を落として左手を海水に向けて振り下ろす。ジュン!　と海水が泡立つ音がした後で、赤熱エラーが解除される。海水から引き上げ、まだ湯気を上げている砲を構え直す。

「沈ませない、私は貴方を沈ませない!」

飛び出した砲弾は衝撃波を引きながら魚雷に一直線に突っ込み、爆

散させる。

「最後一本！」

右手の連装砲でほぼ足元まで来ていた魚雷を打ち砕く。派手に立った水柱のしぶきを浴びながら初霜は振り返った。

「今度こそ、大丈夫です。守って見せます。ここで私はあの戦争を、私の中のあの戦争を終わらせるんです。だから私のためにも大和さんには生きて帰ってもらわないと困るんです」

そう言つて微笑んだ初霜は無線を開いた。濡れてより黒さを増した髪を耳にかけるようにして気にならないようにすると改めて空を睨む。

「こちらら535初霜、阿武隈さん聞こえてますか？」

《こちら阿武隈、あと5分で着けるよ！》

「初霜了解しました、対空戦がメインになりそうです」

《わかった。気を付けてね》

「阿武隈さんもです。通信終わり」

「航空隊、来るぞ。」

若葉がすいっと前に出つつそう言った。

「わかつてるわ。……大和さん、あなたの命はあなただけのものじゃない。私たちの希望なんです。だから、沈ませません。生きて帰るんです。必ず、絶対に、何があつても生きて帰るんです！」

迫りくる航空隊に向けて両手の主砲を掲げる初霜は胸を張った。

「初霜、これより対空戦闘に入ります！」

そう宣言し、初霜も前が出る。

「大和さん、三式弾撃てますか？ 撃てるならお願いします」

おそらく航空戦に持ち込む気だろう。敵の本隊は大和から距離を取るように動いている。おそらくはそのまま進む気だ。まだ武蔵の砲撃圏内なのだろう。いくつも弾丸が上空を飛び抜けていく。

初霜も負けじと砲を振り上げた。主砲弾は対空防衛としては心もとない。だとしても。

「負けるわけにはいかないの」

爆炎と共に撃ちだされた鉛玉が敵の進路を妨害し散り散りに編隊

を別れさせる。煙幕を展開しつつ大和を大きく取り囲むように走り出す。

艦爆の場合、敵艦に有効な打撃を与えるためには適切な位置と角度で爆弾をリリースしなければならない。したがってどの位置に航空機を侵入させてはいけなかがわかっていればある程度の行動予測が立てられる。そこを狙って砲撃を繰り出し、そこでの攻撃を防ぐことさえできれば最低限「負けはしない」。

艦攻だつて敵の位置さえつかめてしまえば攻撃は容易い。

大和を落とそうと必死になっていた艦爆隊が目標を変えた、隊を二分し、初霜と若葉に同時に急降下を仕掛ける。弾道を見極めつつ加速して落下地点から飛び退くと同時、若葉の上空へと砲弾を走らせる。

「無茶をするな。私は大丈夫だ。」

「大丈夫ならちゃんと避けてよ！」

素晴らしいながら上空に目を走らせる。艦爆の応援がむかってくる。きりがない。

「大和さん、三式弾、方位2―5―4、仰角40度、撃てますか？」

「ええ、あと7秒待ってください」

煙幕の影から声がする。それを聞いてほっとした。

大和が戦ってくれる。大和と肩を並べて戦える。

そのことにほっとしたのだ。

———それがある意味隙になったのかもかもしれない。

気がついた時にはもう距離は1500を割っていた。

極低空に敵機、数は3。大和の肩越しに見つけてしまったその敵機は雷撃を放った前なのか後なのかはわからなかったが危険なのは変わりなかった。

「———大和さん！」

飛び出そうとした初霜の目の前に水柱が立つ、自分を狙っている艦爆機の攻撃だ。

「邪魔しないで！」

クルリと振り返りつつ砲撃、一機を爆散させて大和の反対側へ急ぐ。

「
」
高速で突っ込んでくる敵機は大和の髪を掠めるような角度で飛び抜ける。雷跡を確認しようとして、硬直した。水切り石のように何かが海面を蹴り上げて宙に浮いた。

「反跳爆弾!？」

スキップボミング
反跳爆撃。それを見て一瞬で喉が干上がるのを感じた。バックスピンがかけられた円柱状の反跳爆弾は至近距離から放たれ、海面の張力を利用して飛び跳ねて相手に突っ込む。空中から相手に直接投げつける水平爆撃や急降下爆撃と違い、放つ方向さえ合っていれば高確率で相手のどこかにあたる。しかも喫水以下の船体に大穴を開けることも可能なうえ、魚雷よりも早く相手に向かう。しかも至近距離から放たれるゆえに偏差もあまり気にしなくてもいいのだ。

それが放たれ、初霜の目の先で跳ねる。バックスピンで大きく跳ねた“それ”は大和目がけて飛び込んでいく。――先に受けた爆撃で生じた破損した艀装部目がけて突っ込んでいく。

応戦は間に合わない。大和が逃げるにも遅すぎた。

大和型の装甲ならきつと持ちこたえられるはず、そんな希望的観測を信じるしかもう手はない。

初霜が祈るような気持ちで反跳爆弾を目で追っているとそれを貫くように線が走った気がした。その爆弾が弾かれたように方向を変えた直後、爆発。

「くあっ……い！」

大和がその爆風に身を叩かれて呻いた。だがそれ以上の痛みは襲ってこなかった。

「スキップボミングを空中で狙撃した……?！」

初霜が呆然としながらさきほどの線の出どころを探す。味方の艦隊からほぼ反対側からの援護射撃だった。そんなことがあり得るのだろうか。

《司令部も大概だがこっちも大概だな、おい》

初霜にとってはあまり聞きなれない男の声、これは――

「なんとか間に合ったみたいだね……」

《無茶した甲斐があったってもんだろう、響嬢》

無線の奥、杉田中佐の声に息の荒い肉声が答える。

初霜の視線の先には、噴煙を挟んで反対側で戦っていたはずの響が全身ずぶ濡れで立っていた。

「再接続、いけそうか？」

「これで、なんとか」

デスクの下に潜っていた渡井が顔をのぞかせる。QRSプラグを中路に渡すと渡井は額の汗をぬぐった。

「物理的に司令部の回線を切断、それと連動して横須賀などの他の司令部には疑似信号で目を眩ませ、CTCやCSCとの戦術リンクに枝を付けたうえで再接続……となると月刀と合田少佐以外にもまだ協力者がいるな」

「ぞつとしねえな」

「だよな、まだ月刀や合田少佐みたいに乗っ取られてるやつがいるかもしれない訳だ」

基地の司令官室に詰めていた三人、中路中將、杉田中佐、渡井中佐はそれぞれQRSプラグを首の後ろから伸ばしデスクの有線ジャックに突っ込んだ。

「この三人にいないことを信じるが、先に作戦行動中の部隊を確認し、最速で戦闘を切り上げさせることが最優先だ」

中路の言葉に二人の中佐が頷く。意識は同時にネットの海へ。部隊のレーダー情報呼び出す。

「第一班が交戦中。大和が単騎駆けしてるな」

「現状交戦中は第一班のみ、と言うことは第三班は捌ききったのか？」
杉田の声に中路はレーダーの表示範囲を広げるが、第三班の方に流れていた敵の部隊は見当たらない。それは即ち沈めきったか第一班の方に流れていったと言うことだろう。

「さて、響はどこだ？」

中路は第三班の表示が一隻分足りないことに気がついた。同時に汗がどつと噴き出る。

響のシグナルは出ていないが、作戦参加艦の情報を見ると響が沈ん

だという情報も表れない。ただ「作戦行動中」と出ているだけだ。
(つまり、まだ沈んでいない？ なら響はどこだ?)

中路はデスクの音声入力装置のスイッチを入れる。

「第三班に繋ぐぞ」

「いや、こつちで捕まえました」

そう言ったのは渡井だ渡井は潜水艦の位置を表示する。

「過去15分のソナーデータログ解析完了、音響パターンからして海域の潜水艦は現在4隻、イク、イムヤ、ゴーヤ、あと未確認一隻」

「未確認？」

「潜航音からしてかなり大型、伊400型かそれ以上の大きさだ。位置は噴煙の真下」

「敵の増援か？」

杉田の声に首を振る渡井。

「ならとつくに電たちが落としてるさ。しおいが何かを水中で曳航してるんだ」

「……無茶をするな」

「月刀の部下ならありえるな」

中路があきれたようにいうと、杉田が笑った。

「曳航しているとして、どこに向かっている？」

「おそらくは大和のところでしょうな」

中路の疑問には杉田が答えた。

「大和はこの作戦に天一号作戦を重ねていた。彼女もそう考えてもおかしくない」

そうか、とつぶやくようにいった中路は声色を切り替える。

「渡井はしおい以外の潜水隊と第二班を担当、第三班と第一班の航空隊は私が持つ、第一班の打撃群は杉田、お前がやれ」

「了解」

作戦指揮所のような十分な設備はないが、今使える設備では最上のものだ。その回線を手繰り、それぞれの意識が戦の海に散っていく。

司令部が息を吹き返した。

時は僅かにさかのぼる。

「……大和さんが？」

響は無線の奥の状況に眉をしかめた。それを見た天龍が怪訝な顔をする。

「どうした、響？」

「大和さんが単騎突撃したらしい」

響は噴煙の向うを見据えると一瞬焦りのような表情が見えた。

「……気になるのです？」

「気になるさ。あの時も私は傍にいたことができなかったから」

「そら、そうだよな」

天龍はそう言つて優しい目で響を見つめた、天一号作戦では彼女が最後まで戦うことは叶わなかったのだ。

「……信じるしかできないのかしらねえ」

「もどかしいけど、それしかないんじゃない？」

龍田のどこか諦めが入った声に返したのは島風だ。空の方を見ると龍鳳の艦載機が上空をグルグルと回り、付近の哨戒を行っていた。

「———それでもないかもしれないのです」

そう言ったのは電で、周りの目が一齐に電に向く。

「どういうことだい、電？」

「響お姉ちゃんだけなら大和さんたちの方に送ることができるとも思いません……」

そう言うともールス式の通信を飛ばす。

「……潜水艦用の通信符号？」

「はい、呼びました？」

「しおいさん、やっぱり待機してたのですね」

「パツケージがそつちに向かつてるって聞いたから、北はイクたちがいればなんとかなるし、伏兵はいるに越したことはないでしょ？」

海面を割って飛び出してきたのはしおいこと、伊401である。日差しで小麦色に焼けた肌と、海水で茶色に焼けた髪を輝かせながらしおいは海面に姿を現した。

「で、呼び出したってことはなにか御用？」

「あの噴煙の下、潜って通過することってできますか？」

「うん、水温がおかしいところもないし、問題ないよ」

「では、もう一つ質問です。晴嵐とか下ろせるものを全て下ろしたとして、余剰浮力どれくらいですか？」

電がそう聞くとはっとしたような表情を浮かべる天龍。その横でしおいがニヤリと笑った。

「——いいね、いいと思います」

「まさかとは思いますが電、お前は響を潜らせる気か？」

「迂回しては間に合いませんし、ここから全艦を動かすわけにはいきません。ですが、潜水艦と駆逐艦一隻位ならなんとかなると思うのです。それでしおいさん、駆逐艦娘一人曳航して潜ることってできますか？」

「晴嵐全機下ろしておけばいけるかな。呼吸用の空気は飛行機格納塔のものを使えば行ける。この距離なら5分くらいで着けるよ」

「どんだんお前の思考回路がぶっ飛んでいくな」

呆れた表情でそう言った天龍は頭をかいた。

「おそらく月刀司令なら許可しないと思うぞ」

「浮上に関しては動力リソースを全部浮力にすれば持つていけますし、海面近くまではしおいさんのサポートが受けられます。それに噴煙をかわせればいいので深く潜る必要もないのです。しおいさんの浮力なら大丈夫です」

電はそう言って響の方を見た。

「お姉ちゃんは、どうするのです?」

響は噴煙の方——噴煙の奥の大和たちを眺めるように視線を投げかけた。

「やるさ」

「決まりですね。とりあえず晴嵐さんを全機下ろすのでだれか持つててくださいね」

しおいは肩にかけた飛行機格納塔を開くとぱたぱたと航空機を組立て、海上に置いていく。

「それじゃ、潜ります?」

「ああ、ナビゲート頼むよ」

しおいが右手を差し出し、その手を響の左手がつかんだ。直後、浮力装置を切った響と艦装の動力を燃料電池に切り替えたしおいが海面下に消えていく。それを不安げに見送ったのは暁だった。

「本当に大丈夫かしら……」

「お姉ちゃんなら、大丈夫だと思うのです。私たちは索敵範囲を広げつつ、こちらに深海棲艦が流れてこないか警戒します」

電は噴煙の向う側を気にしつつ踵を返すようにして哨戒に戻るのだった。

海中ではなく海上にあるということがこんなにもいいものかと思いながら、響は顔を海面に出した、そのまま浮上する。武装制御システム再起動、各武装の情報が網膜に直接投影される。

「よし、いける」

大和を探そうとして視線を巡らせ、目を見開いた。大和に航空機が突っ込もうとしている。初霜や若葉もいるようだが位置的に合うまい。

考えている余裕もなかった。マスターアームオン、連装砲が駆動し、砲身が動き出す。

「ダメだ、近すぎる！」

響の射線だと風に流されたら大和や初霜にあたってしまう。そんなシビアな射撃ができるか。

一瞬の迷いが命取りになるとわかっていても、迷ってしまう。その迷いがまた守れないことにつながるかもと恐れているのに、ためらってしまう。

そのことへの怒りと悲しみをごちゃ混ぜにしたような感情に歯噛みをしつつ、砲を動かす。

《慌てるな、力を抜け》

そんな声が無線に乗ると、ずっとフラットだったリンク率が跳ね上がった。その数秒後に砲が発砲。ごく低い放物線を描く砲弾が初霜の鼻先を掠め、大和に迫っていた物体を弾き飛ばした。

「——杉田中佐？」

《司令部も大概だがこつちも大概だな、おい》

その声にどこか安堵を感じつつリンク率を確認する。ちゃんと戦術リンクが復旧している。

「なんとか間に合ったみたいだね……」

《無茶した甲斐があったってもんだろう、響嬢》

初霜が驚いた表情で響を見る。それに軽く微笑み返した。

「響さん、噴煙の向う側にいたはずじゃ……」

「大和さんが頑張ってるのに一緒にいれないのは嫌だからね。やっと追いついたよ、初霜」

響は初霜の肩をぽんと叩いて大和に向かう。

「大和さん、無事でよかった」

「……そうでしょうか？」

「安否を気遣う言葉に裏の意味なんて込めないさ。今度こそ、一緒に

戦える」

そんな会話を交わしていると無線に感が入る。

《ホテルケベックより全艦、これ以上の戦闘の続行は危険だ。これより先、積極的戦闘は停止、追撃してくる敵艦への防戦に専念せよ》

声は中路だ、それを聞いて大和が息をのむ。

「私はまだ戦えます！」

《誰も艦娘が力不足だなんて思ってねえよ、大和。これは司令部の問題だ》

「……どういことですか？」

大和の叫びに応えた杉田の声に、思わず聞き返してしまう。

《司令部コンピュータ及び司令部員がクラッキングを受けた。深海棲艦の攻撃ではなさそうだが、司令部員に負傷者も出ている。これ以上の戦闘に司令部が耐えられない可能性が高い。すまん、耐えてくれ》
そう杉田が言っている間に敵機が近づいて来ていた。初霜が飛び出す。

《初霜・若葉・響は大和の直掩に入れ、対空見張りを厳とせよ。方位0—9—3へ転進、相手の艦隊は武威で蹴散らす》

「了解！」

低空で寄ってくる敵機に向かって響は砲を向ける。今度は視界にいくつもの情報が投影される、電探の情報が統合され相手の位置が明瞭に見て取れる。主砲弾を撃ちだすと過たず先頭の敵機を弾き飛ばした。その僚機はたけり狂ったように突っ込んでくるがそれを初霜が撃ち落とす。

「若葉、左舷側おねがい！」

「大丈夫だ。」

若葉は大和の前を回り込むように動きながら上空を飛びかう敵の艦爆隊に脅しをかけていく。その精度は段違いに上がっている。

響も負けじと砲を振る。今度は高めの高度だ。おそらく艦爆機だ。その機体の翼をもぎ取り煙をあげさせ海面に叩きつける。

対空射撃は対艦砲撃と比べても難易度が跳ね上がる。なにせ的は小さいうえに三次元で動き続けるのだ。また予測して撃つにしても

相手の機動は自由度が高い。そんな目標に主砲弾を撃ち込もうとしてもまず当たらない。

それをほぼ確実に当ててくる。

(これが……「千里」の杉田勝也の実力)

初めてリンクした相手、しかも重巡や戦艦を指揮してきた人が駆逐艦の砲で航空機のような三次元で動き回る小さい的を落としていく。その曲芸をこなしながら杉田は撤退戦の指揮も飛ばしていく。

敵の航空隊が瞬く間に減っていく。大鳳の航空隊がエアカバーを奪取していく。その圏内に大和や響が逃げ込んだ。武蔵の砲煙が遠くに見えた。もしかしてあれも杉田が同時にコントロールしているのだろうか？

《響、武装制御を渡してくれるか？》

「了解。武装制御を全て中佐に渡す」

そんなことを考えていると杉田の声が割り込んだ。武装のコントロールを移譲された杉田は砲をまわすと右砲と左砲を交互に発砲しながら敵の航空隊を次から次へと撃ち落としていく。そのため、照準を響は見ているのだが、そのあまりの情報量とせわしなさに目が回りそうになった。

それが5分ほど続いただろうか？

《――よし、敵航空隊撤退、今のうちに帰投するぞ》

艦娘だというのに船酔いしかけた響にすべての制御が帰ってくる。

「――大和さん、こんなリンクを毎回こなしているのかい……？」

見るからに青い顔をしていたのだろう。不安そうな表情をしていた大和が微笑んだ。

「あんな航空戦を捌くことはあまりないんですけどね。時々あります」

「……正直、杉田中佐の部下はきついかもしれない」

《悲しいなあ、響嬢。これでも鷹の目使ってないぞ、使うともっと情報量が増える》

「まだこの上があるのか……」

「けらけらと杉田の無線が響く。」

《なあ大和、気が済んだか?》

「……さあ、自分でもわかりません」

「そう言うと杉田の声がふつと柔らかくなる。」

《それでいいんじゃないの? 誰だって自分の気持ちなんてよくわからないもんさ。電腦化ですべての情報が数値化されたってそれでも人の心はその数値を超える。でも、その思いはきつとお前ひとりのものでもないだろうさ》

「そう諭され黙り込む大和。」

《もつと周りを頼れ、頼ってくれないと周りもお前を頼れない。それはお互い辛いもんさ。お前の孤独も悩みも葛藤もお前のものだ。でもな、周りだってその悩みを抱えてる。だから勝手に心を閉ざすな。理解されないだろうと勝手に見切りをつけるな。お前の周りには体を張って守ろうとしてくれる仲間がいるだろうが》

初霜が、響が頷く。若葉は涼しい顔だがわずかに頬が赤くなって、その顔を初霜は見逃さなかった。

「はい——」

大和が頷いた直後、中路の無線が飛び込んだ。

《作戦海域におけるすべての戦闘の停止を確認した。伊401はそのまま敵艦隊をトラッキング。第2班と大鳳は現地にとどまり哨戒を続行。残りは硫黄島に帰投しろ》

しおいのものだろう、無線のオンオフによる返答が届き、残りの艦隊の旗艦の声が続く。

《中路中将、あの、月刀司令は……? 合田少佐も無線にでないですし……》

電の声がノイズまみれで帰ってくる。返答にはかなりの間が空いた。

《……月刀司令と合田司令官は、電腦ハックを受け負傷している》

《それは……!》

《命に別状はない、そこは安心しろ。……とりあえず帰投してくれ。西之島周辺の深海棲艦の状況によっては再出撃の可能性もある》

それだけ言って無線は一方的に切られた。

「……司令部にクラッキングなんてことがあり得るのかしら？」

呆然としながらそう言った初霜は響の方を見やる。

「深海棲艦との戦いが続いてほしい人がいる……？」

響は浮かんできた可能性に戦慄しつつ、船速を速める。とりあえずは司令官のことが心配だ。

「——とりあえず、戻りましょう」

戦闘がひと段落ついたはずなのに、休める気配はなさそうだった。

真っ白な部屋の中で航暉は頭を起こす。正確には飛び起きる。

「……………どうして、電なんだ？」

夢の内容に頭を抱えながら航暉は溜息をついた。

見えるのは病院着のような浅黄色の上下。あと清潔な白いシーツ。病院着というのは間違いではない。ここは実際に病院だからだ。国連海軍極東方面隊後方支援部隷下、横須賀電脳義体研究所付属病院。その電波暗室のひとつに航暉は「収容」されていた。

銀弓作戦第一次戦闘——つまり航暉が指揮に参加したあの戦いからもう一週間たっていた。その戦闘でのこちらの被害は大和が中破した程度で終わったらしい。そのほかの被害はほぼ皆無。相手は最低で轟沈8、中破以上7。取り逃がしたのは11隻。それも応援に来た金剛たちが潰し切ったと聞いている。西之島周辺ではいまだ火山活動が続いているものの深海棲艦の反応は消滅。中路中將が昨日作戦終了を宣言したらしい。こちらの被害は大和一隻、修繕のためにかなり長時間大和は動けないがそれで飛び石航路が維持できたのなら安いものなのだろう。

航暉にはそれらの情報は印刷された紙媒体として渡された。航暉の電脳をまだネットにつなぐことが許されないからだ。

航暉の電脳は何者かの侵入を受けて汚染された。それも確実に悪意を持った何者かの侵入を受けたのだ。そんなものを軍のネットワークに接続されたらどうなるかわからない。だからその情報の削除が行われるまではネットワークから隔絶された電波暗室で電脳通信を封じられたまま過ごさなければならぬ。

《……………よう、お目覚めか》

部屋のスピーカーから声が流れる。マジックミラー式の面会窓のくもりが取れて向こう側が透ける。そこには杉田が立っていた。

「ああ、暇すぎて死にそうだ」

《うなされておいてよく言うぜ。ほら、差し入れだ。後で医師から受け取れ》

「なんだ？」

《ここなら電嬢たちに見つかる心配もないだろ？ ……ボインとつるぺた、どつちが好みだ？》

「軍病院にそれを持ちこむか？」

杉田はブリーフケースから取り出した冊子を二冊航暉に見せる。肌色成分マシマシの薄い冊子である。民間向けの資源が潤沢にないこの日本において「そういう本」は超がつくほどの贅沢品。褒められた部類の本じゃないことも後押しして値段が跳ね上がってる。それを二冊も抱えてにやつく戦友に割と本気で頭を抱えた。

病院とはいえ軍施設、見つかったら大目玉であるのは間違いない。

《答えろ。どつちが好みだ？》

「……………ボイン」

《よし、電嬢に今後頑張れと伝えておこう》

「なんで電が出てくるんだよ」

航暉がそう言うとなやニヤ笑いを深くする杉田。

《電嬢はお前のことを大層気に入ってるらしいな。俺のところ司令官さんの具合は大丈夫なのですか》って連絡が来たよ。軍の情報規制に引っかかってるらしくてお前の状況が向こうには透けないからな》

「そうか。ウイルス除去は明日にはできるらしいからもうすぐ戻れると伝えてくれ」

《……大丈夫か？ お前》

「なにがだ？」

雑誌をしまつて窓ガラス張り付くようにした杉田が不安げな声を出した。

《いや、お前も何かを抱え込む癖があるだろう？ 今回も抱え込んでないかって話さ。うなされて飛び起きるような奴が大丈夫だと思えないんだけどな》

「……この所夢見が悪くてね」

《ほおう。どんな夢だ？》

「電を撃ち殺す夢さ。状況は違えど必ず最後は俺が電を撃ち殺して目が覚める」

《……そりゃあ悪夢だな》

「だろ？　こここの所ずつとき。これもウイルス除去と一緒に消えてくれると助かるんだが」

航暉はそう言っつてベッドから立ち上がる。病院着と同じ色のスリッパをつつかけ、杉田のように歩いていく。

「子供を撃ち殺す夢自体は何度も見てるが、ここんところはずっと電で固定だ」

《子供を撃ち殺した経験は？》

「あるよ。……フィリピンのスルー国独立紛争で、爆弾抱えた子供相手に。死んだかどうかわからないのも含めれば3人ほど撃ってる。爆撃支援も含めれば陰で何人殺したやら」

そう言っつて自嘲するように笑った航暉はスツールを引きずつてくと、杉田の前に腰掛けた。

「あの時はそうでもしないと生きて帰れなかったからな。それ自体は後悔してないさ。あそこで撃たなきゃ部隊全員が死滅してた」

《お前の陸軍時代か。初めて聞いたな》

「そう話したいものでもないしな。……電たちには言うなよ。話すときは俺が話す」

《わかった。まあ明日には汚染情報の除去か。退院は5日後ぐらいか？　それまで体は大丈夫そうか？》

「何事もなければな。銀弓作戦における記憶の全てを消去したうえで今後に必要なだと思われる部隊の情報や戦闘の推移だけを脳に再入力する。乱暴な情報手術さ」

《この手術、何回目だ？》

「まだ初めてだよ。大丈夫、一回の手術で記憶中毒の症状が出たって話はない」

大規模な記憶の改ざんや消去はその脳に大きな負担がかかる。記

憶や思い出などの過去の出来事を消すということはそこで発生した変化を消すという意味だ。しかし自分が経験した物事自体が消え去ることはない。そこに生じた齟齬に脳が拒否反応を起こすことがある。体や精神自体はその経験を経て変化しているが、その記憶はごっそりと抜け落ちた状況になるのだ。その違和が誤差の範囲に収まればよいがそれを越えた時に人間の体は記憶と体を合致させようとし、機能不全を起こすことになる。その状況に合うように記憶を改ざんし続けなければ生きることすらままならなくなっていく。『記憶中毒』の症状だ。

「まあ、ここでやって失敗するならどこでやっても失敗するだろう。そう不安そうな顔をするな」

航暉はそういつて、わざとらしく『そういえば』といった。

「高峰はどうしてる?」

《今は『ホールデン』を追ってアリューションに飛んでるよ》

「アリューション?」

《銀弓作戦の不正規アクセス、お前と合田少佐が乗っ取られたシグナルになった時のやつだ。そんなときの枝を逆探知できたんだ。それをたどると最後にたどり着いたのがアリューションなんだとき》

「これまだ妙なところに……あのあたりは人も少ない。世を隔絶して暮らすにはいいかもしれないが部外者が入ったら一発でばれるだろう」

《それが目的なんじゃないの? もしそこに昔から住んでいる、もしくは顔なじみなら問題ない。そこに怪しい調査員が来ただけで一発で知れ渡る。もしくは北方難民のスラムとかに潜伏してるか、だな。キスカやウガマク島には難民キャンプがあるし違法キャンプも含めればかなりの数がある》

杉田がくつくつと笑った。

《前はマニラ、さつきは火山列島、今度はアリューション。奴さんも忙しいな》

「それに伴って高峰も大変だ」

《実質的被害はお前さんたちが被ってるがね、迷惑な話だ》

互いに笑いあった時に非常灯が灯る。反射的に顔を引き締めいつ

でも動けるように身構えた。直後、杉田のいる廊下に拳銃型のスタンガンを構えた病院職員が飛び込んでくる。

《何事ですか?》

《あなたは?》

《西部太平洋第一作戦群第521戦隊所属士官杉田中佐だ。手伝えることがあれば協力するが、なにがあった?》

《はっ!》

どうやら病院職員は下級士官だったらしく敬礼の姿勢をとる。

《合田正一郎少佐の病室からの脱走が確認されました。いま身柄の確保に移っています》

「合田少佐が?」

航暉の言葉にその職員は一瞬眉を顰めた。

《逃走幫助の疑いをもたれたくならなかつたらそこでじっとしててください》

「言われなくてもそうするよ」

同じ基地で働き、同じ容疑でここに收容された正一郎と航暉は共犯関係としてあつかわれている。ここで動けばお互いにとってマイナスにしかなるまい。

病院職員がスタンガンを構えて再び走ってどこかに向かう。それを見て杉田は盛大に溜息をついた。

《……どう思う?》

「合田少佐が脱走するメリットが見当たらない。逃げる必要もないはずだ」

《……彼が“ホールデン”もしくはホールデンの関係者である可能性を除いては、か?》

「さあな、どうしてもここから逃げ出さなきゃいけない事情があるんだろう。もつとも、ここで逃げるのが彼の意思かどうかかわからないかな」

航暉はそう言って目を閉じた。

「杉田、頼みがある」

《いってみろ》

「合田少佐の経歴、調べられるだけ調べてくれないか？」

《そういうのは高峰の仕事だろう》

「今頼めるのはお前くらいだろう？」

《……期待はすんなよ》

「恩に着る」

杉田にそう言うのと航暉は目を閉じ、考えを巡らせ始めた。

「なあ、青葉」

「何か見つけました？」

冬の入り口で僅かに霧が出ている寒村を歩きつつ、私服の高峰は隣の少女に声をかけた。隣の少女は大きな荷物を背負って、長身の男を見た。朝早いせいか息が白くなるほど冷え込んでおり、二人分の息が空気に溶けて消えていく。

「あれ、なんだと思う？」

「んー？」

薄い霧のヴェールの向こう、街並みよりも高い位置を太陽光を遮るように何かが横ぎった。

「なんででしょうかね……司令、実はわかってんじゃないですか？」

「予測はついてる。じゃあ、セーのでそれぞれ答えをいつてみよう」

高峰はそういつてかるく「セーの」といつた。

「深海棲艦の艦載機」

「……やっぱりそう思う？」

「司令官こそ目がいいんですね」

互いに笑ってから向かう方向を海の方に変える。

「こちらの偵察機は？」

「3機用意してますよ」

「なら、アポを取れてないのは恐縮だがお邪魔させてもらおうか」

「了解です。久々の取材ですね」

誰もいない防波堤にたどり着くと高峰は青葉が背負った大荷物……背負った艤装の偽装カバーを取り外した。青葉が海面に飛び降りる。

「艦載機に飛ばさせるのはいいとして、私たちはどうします？」

「敵戦力がつかめない。少なくとも空母がいるのは間違いないだろう。艦載機だけでこちらは動かずここで操作するだけにしよう」

「なら、青葉一番機、いっけー！」

火薬式のカタパルトを使って撃ちだした偵察機がぐんぐん高度を上げて空気に溶けていく。

「この辺りも激戦地だからな、なにが出てきてもおかしくはなさそうだが、さて何が出てくるかなあ」

高峰はそういいながら空を眺める。霧のような薄ぐ雲の下でぼうと考える。

「まったく、こうやっての実戦は久々だっけ？」

「特調六課だと人間相手の情報戦が主ですもんね」

青葉は苦笑いしつつもうきうき顔で航空機を操っていく。航空機は西へ西へと向かっていく。

「その情報戦の結果こんな北の端で戦わねりやいけない訳だ」

「それにしても『ホールデン』はどうしてこんな北の外れに来たんでしょう？？」

「……枝の終着はここだった。このサーバーがホストになっていたのも裏がとれた。だが、どこだれがそのサーバーに出入りしていたのかが分からなかった」

「物理的に爆破されましたもんね。黒なのは間違いないんですけど……」

「ここに来た理由である『ホールデン』の搜索は行き詰っていた。

「サーバールームに出入りしていた人物はなし、電気系の支払い口座から辿るとペーパーカンパニー化したダミー会社につながるだけ」
「サーバールームの監視カメラの解析ってまだ終わってないんですか？」

「解析班の結果待ちだが、スカじゃないかな。スカだったと想定して動いておけば失敗はないか」

「どうするんです？」

「電子的な情報が途切れたとしても現地のどこかに足を運んでいた以上、どこかにその痕跡が残る。基本に戻って地道な聞き込みからかろう。とりあえず、深海棲艦の問題を片づけてからな」

そう言って高峰は防波堤に腰掛けうなじからプラグを引き出す。

「青葉、パス」

「うわつとと」

「艦載機の情報、リアルタイムで俺に送れ。俺の方にもバックアップを取る」

青葉の電腦と高峰の電腦が直結される。青葉の偵察機の回してくる映像が彼の電腦に流れ込んだ。前方遙か遠くに先ほどの深海棲艦の偵察機。それを遠くからトラッキングしていく。

「斥候ですかね？」

「だろうな。このまま飛ぶと……アツツ島か？」
「ですです」

しばらくはその後ろを追いかけていくだけに終わった。30分も飛んでいただろうか。

「……高度落としていきますね」

「……高度そのまま。敵がいると思われる上空でエンドレスエイトに入れ」

「りよーかいです」

高度と降下率から計算しておそらくこのあたりに下りただろうと予測を付ける。そこで大きく八の字を描くように旋回に入る。ここからは互いに言葉もなく八の字を保ったままゆっくりと高度を落とすしていく。

そしてその前兆を高峰は見抜いた。

「——キックレフトラダー！」

急激に舵が切られたことでバランスを崩した機体が頭を左に振りつつ斜め下にスライドしたその横を機銃の曳光弾が通過した。

「急降下！・速度を上げろ！」

「もうやってます！」

一気に視界がぶれ一気に雲を突き破る。

「なん——!?」

《——コナイデ》

直後に視界がブラックアウト、反応が途切れる。

「……落とされる寸前、あれ、なんに見えた？」

巨大な火砲に滑走路をかたどった航空機の射出装置、それらが納まる巨大な艀装らしき鉄塊につながったのはあまりに肌の白い幼子の容姿をした「なにか」。

「もしかして青葉、すごいもの見ちゃいました？」

「あれ、どこかで見たことあるか？」

「あつたら『すごいもの』なんて言わないでしょう……」

「だよなあ……」

青葉がQRSプラグを引き抜いて高峰に返した。

「アレが立っていた場所、陸上だったよな？」

「ですね」

「お前、無線に『来ないで』とか言ったか？」

「言っていないです」

「最後に質問だ。アレ、深海棲艦だと思うか？」

「それ以外ない気がします」

「だよなあ……」

高峰が頭を抱える。青葉も難しげな表情をする。

「『ホールデン』 搜索がかすむくらいの大スクープになりましたね」

「お偉いさん方腰抜かすぞ……戻るぞ。今のデータ持つてるな？」

「もちろんです！」

青葉が再び陸に上がる。あの様子だと単騎で突っ込んでも勝てる

相手ではない。最低でも一個艦隊、それも第一作戦群の攻勢部隊が必要だ。

その？分後、二人が送信したスクリプトと偵察機の映像が極東方面隊司令部に蜂の巣をつついたような騒ぎを起こすことになる。

発 国連海軍極東方面隊特設調査部第六課 高峰春斗中佐

宛 国連海軍極東方面隊総司令部元帥 山本五六大将

アツツ島に未確認種の深海棲艦を発見す。未確認種は陸上における行動能力を持つとみられ、人語を解す可能性が高い。また現状のキスカ島の勢力での撃破は不可能であると判断される。深海棲艦の発生に伴い難民キャンプの人員を含めた住民の避難が急務である。

したがって戦艦及び空母を含む強力な打撃群、および大規模輸送船団による支援を求む。

「退院おめでとうというべきかな？ 航暉」

「転院扱いですがね。で、なんで俺がいきなり国連海軍医療隊のクリスク病院に転院になるのか説明してもらえますか」

航暉は病院着から第一種軍装に着替えて西部太平洋第一作戦群司令部に出頭していた。

「術後で安静にしてなければいけないのは重々承知だが、中央戦略コンピュータが

お前しか適任がないという結果を弾き出した。重要度AAA+、最優先事項のカテゴリーVだ」

「……とんでもないランク付けですねカテゴリーVとかMI撤退戦よりも重要度高いじゃないですか」

MI撤退戦のカテゴリー分けはIVa。そのさらに上、最重要かつ最優先の事項だ。

「話してる時間も惜しい。……お前には奇跡の作戦を再現してもらう」

「キスカ島撤退戦？」

「そうだ。アツツ島に未確認種が確認された。敵性コード〃北方棲姫〃。陸上活動が可能かつ高度な指揮能力、人語による無線への介入が確認されている」

「……それはまたぶつ飛んできますね」

「その撃滅に向けて今523一航戦、533二航戦と511の長門型姉妹、うちからも金剛型全艦が用意を進めている。高雄型も予備戦力としてクリリスクに待機することになる。それに先立ってキスカ島の全島民と難民キャンプの人員を避難させる。その輸送船団を護衛してもらいたい」

「輸送船の速力は」

「船団の速力としては最速27ノットだ」

「もつと速い船は？」

「用意しようと思ったたらアツツの姫様が押さえられるかわからない」
中路が印刷した資料を渡してくる。それを捲りながら航暉は中路を見た。

「現地の状況は？」

「いま高峰君がキスカにいるし、565駆逐隊の分遣隊が現地にいる」
「565？」

「DD―HH01 『初春』とDD―HH02 『子曰』、あと高峰君のパートナーのCA―AB01 『青葉』が現地に入っている」

「避難要員は？」

「民間人534人、軍人132人に難民キャンプに2100人程度だ」
「で、輸送船10隻で敵に気がつかれることなく収容して避難させろ
というわけですね？」

「そうだ。護衛に使えるのは君のところにいる軽巡駆逐と現地の艦
だ。残りの部隊総出で姫のご機嫌取りをしなきゃいけない」

「つまり航空支援も期待するな、と？」

「君たちの動きを姫に知られるわけにはいかないんだ。そしてこれは
――君に選択権はない。月刀航暉大佐しか適任者はいないとCSCが叩きだした。活躍を期待する」

そう言うってから中路は一枚の書類と箱を航暉に差し出した。

「今回の任務は北方難民が反抗する可能性が高い。彼らは日本国が加
盟した連合軍によって住処を失い、追い出された人たちだ。最悪の場
合暴動騒ぎになる可能性もある。持っていけ」

箱を開けると航暉の拳銃、ベレッタM93Rが綺麗に整備されて
入っていた。書類は武装の使用許可証だ。防弾装備にライフル、スタ
ングレネードなどの携行非殺傷兵器、電脳錠複数。

「……自衛用にしては物騒だな」

「現地での誘導などを行う警邏隊の標準装備だFive―seven
ももってけ。お前に死なれるわけにはいかんだ」

航暉は拳銃を取り出し、腰のベルトにホルスターを取り付けた。

「……ひとつ質問してよろしいですか？」

「なんだ？」

「アツツ島にも守備隊がいたはずですよ。彼らはどうなりました？」

「行方不明だ。だが、全員死んでるだろう」

表情を変えずに中路は言い切った。

「おそらく他の基地に状況を伝える間もなく死滅したんだろう。それだけの敵だ、そんな敵の目の前に軍人以外を並べるわけにはいかん。だからこそお前たちの作戦が必要だ」

「ついでにもう一つ質問しても？」

「なんだね」

「この作戦、生きて帰れる確率は？」

中路はそれには答えずに敬礼の姿勢を取る。

「……死ぬなよ、航暉」

「ええ、死にませんよ」

それだけ交わして航暉は部屋を出ていく。一人になった部屋で中路は溜息をついた。

「……次の世代の礎とならんことをと願ってやってきたが、いやはや」

中路はデスクに戻り椅子に腰かけ目を閉じた。

「恨むなら俺を恨めよ、航暉」

「周囲の状況は？」

「いまのところ問題なしです。霧が濃いので今日明日で攻めてくるってことはないでしょうし。そっちの村長さんのほうはどうでした？」

キスカ島でのねぐらにしていた安宿で高峰は帰ってきた青葉に声をかけた。

「村民への根回しは協力してくれるそうだ。ここから先はキスカ軍港の港湾長の仕事だ。もう任せても大丈夫だろう。そしてもう一つ笑えない新情報だ」

「何です?」

「三日前から船が一隻帰ってきてない」

「え?」

その情報に青ざめる青葉。

「今初春たちが近海を探ってる。もしかしたら深海棲艦の潜水艦が港の入口を張ってる可能性もある」

「ちよ、ちよっとそれヤバいじゃないですか!」

「ああ、かなりヤバい。まったく、ホールデンの問題も残っているってのに」

「せめてホールデンの傀儡がどこから月刀大佐たちに紛れ込んだかくらい掴めればいいんですけど、民間人の保護が最優先ですもんね」

当然だと返した高峰はホルスターに突っ込まれていた拳銃を取り出すとマガジンを抜き取り薬室に残った弾も抜き取った。それをビニール袋に突っ込みバックにしまう。

「……青葉、お前はキスカ防衛隊の傘下に入れ。高火力艦が来た時に駆逐艦二隻だと危ない」

「司令官はどうするんですか?」

「俺はスラムの様子を確認してからじゃないとまずいから、そっちに合流できない。軍の狗だとバレると動きづらいところだしな」

「……ひとりでいくんですか?」

「大丈夫、相手は化け物じゃない。人間だ。言葉も通じるし安心して潜れる」

「嘘じゃないですね?」

「当然」

防寒着を羽織りながら高峰は胸元に拳銃を突っ込んだ。軍正式拳銃のFive-seveNではなく、黒星と呼ばれるトカレフ拳銃のコピーモデル。そうはいつても銃身などを高精度なものに改装してあるので見かけが粗雑に見えるだけだ。拳銃だけではなく、身分が割

れそんなものは全てすり替えるか外しておく、ボディチェックで現役軍人だとばれればその場で殺されかねないデリケートな地域に向かうのだから用心にこしたことはない。

「青葉、これ預けとく。必ず返せよ」

そう言つて青葉に放つたのは国連海軍所属を示す軍属バッジだったそれを見て青葉が複雑な表情をした。

「形見分けじゃないですよね」

「返せつて言つてるだろ。それ恐ろしく高いんだぞ」

薄手の帽子をかぶつた高峰は部屋のドアを開けた。

「ここを引き払つといってくれ。いろんなの残すなよ」

「了解です。……ご武運を」

「お前もな」

高峰は非常階段から飛び降りて裏道に出ると、そのまま素知らぬ顔で街を歩く。

「……さて、ここに深海棲艦が来るといつてどれだけの人が信じてくれるかね」

そんなことを思いながら高峰は進む。メインストリートとはいえない通りは少ない。いるのはいつものものかもわからない缶詰を売っている店の店番をしている少年と値切り交渉で紛糾しているしなびた赤いハンチング帽を被つた男、家に帰るのかよろよろと杖をついて歩く老婆、物乞いの男に子供をあやす少女ぐらいだ。

ポケットに手を突っ込んで肩を締めながら速足で街を抜ける。しばらく行くとブラック街が見えてくるだろう。

「とりあえず長老に声をかけてみるか」

どこか笑顔を張り付けたまま高峰が霧の中に消えていく。

冬の入り口11月ではもう雪がちらついてもおかしくない時期だ。実際みぞれ交じりの冷たい雨粒が落ちてきている。

択捉経済特区、その一角にある国連海軍極東方面隊クリリスク基地に降り立った航暉は防水外套に制帽を被り大型の輸送艦を見上げていた。

「司令官さんっ！」

遠くから投げかけられた声に航暉はゆっくりと振り返る。ピーコート風の雨衣に士官用の作業帽を身に着けた電が駆けてくる。

「こんなところにいたのですか。風邪ひいちゃいますよ」

「すまん。……少し頭を冷やしたかった」

航暉は横まで駆けてきた電の頭を作業帽越しに撫でてから改めて船を見上げた。帽子は雨で冷たく冷え切っていた。

「……国連陸軍が船を持つてたんですね」

「正確にはこれ丸々艦装らしいが。陸軍用にチューンされた輸送特化型水上用自立駆動兵装、念動式水上輸送船のプロトモデル、開発コードLHD-AMOX、パーソナルネーム“あきつ丸”。陸軍義制研とポセイドンインダストリー社が満を持して発表した新造艦だ」

「……これ全部艦装なんですか？」

「既存の船の船体を改装して艦娘の義体制御とリンク可能なようにラインを構築……まあ、お前たちの艦装とやってることは変わらない。だが、このシステムが安定したらお前たちも本格的なミサイルを撃つたり、ポストイージスシステムを搭載したり、そんな話も出てくるかもしれないな」

どこか遠い目をしている航暉に電がどこか不安げな視線を投げる。

「……なにかあったのですか？」

「何も無いと言ったらウソになるな。……今回の作戦内容、聞いているか？」

「キスカ島の人たちの避難ですよ」

「それも水雷戦隊だけで、だ。コンピュータもゲン担ぎつてものを覚えてたのか旗艦に阿武隈を指定、若葉・初霜・島風に特Ⅲ型4隻……一水戦で奇跡の撤退戦をリプレイしろつてさ。残りは北方艦隊に臨時編入、俺の指揮下から一時的にはあるが外れることになる……航空戦力はこのあきつ丸のVTOLだけになる」

制帽のつばを伝って落ちる冷たい雨が航暉の襟首を濡らした。

「相手は無線に割り込みをかけて人語を発する以上、隠密行動をとる俺たちは無線を使えない。また戦術リンクも最小限にとどめなければならぬ。『ホールデン』の問題だつて片付いてないしな。その状況で霧の湾内に進入、ごく短時間で約3千の人員を回収し最速で離脱。これだけでも難易度が高いが……」

航暉がこめかみを叩く動作をした。電はそれを見て戦術リンクを起動する。航暉の電腦からファイルが一つ送られてくる。

「回収する人員のほとんどが北方難民、第三次世界大戦で住処を失った人たちだ。形を変えたといえども軍の命令には反発してくる可能性が高い。住人が暴徒化した場合などに備えて作戦参加者には対人兵器の携帯が許可される。……もちろん、お前にもだ。電」

それを言うと、電が緊張したように肩をこわばらせた。

「特Ⅲ型の防弾板2枚の裏それぞれに伸縮式のスタン警棒、音響手榴弾、電磁パルスグレネードをそれぞれ携帯することになった。残りの艦もスタン警棒と音響手榴弾を携帯する」

「そんな……」

「もちろん使わないに越したことはないしお前たち艦娘が使う機会はずないだろうが、万が一の可能性もある。……これは総司令部の決定事項だ」

そう言つて航暉は視線を落とした。制帽のつばから水が滴る。

「攻撃は強制しない。そう言うのは男の仕事だ」

「……司令官さんは武器を持っていくんですか？」

「フルセットでな」

「司令官さんは、武器が重いとか、怖いとか思いませんか？」

「思うさ。でも『もう何人も殺してきた俺にはそんなことを口に出す

資格はない”」

そういいきつて航暉は電の方を見た。涼しげな目元が細められ、航暉の冷えた右手が電の頬をなせる。

「俺はそんな男だよ、電。お前が思い描くような立派な司令官じゃない」

「そんなことないのですっ！」

「……そう言ってくれるとうれしいがな」

どこか卑下した笑みを浮かべて航暉は電の肩を叩いた。

「いこうか、さすがにここは冷える。レディを寒いところに立たせておくのもあれだしな」

航暉が荒れだしそうな鈍色の海を横目に歩き出す。その横を歩きながら電はどこか距離を感じるのだった。

「……合田正一郎、男、13歳」

調べ上げた資料を印刷し杉田は頭を掻いた。

「国籍日本国、出生地は神戸、母親は彼が4歳の時に深海棲艦の侵攻に巻き込まれて死亡、父親の合田直樹は日本国自衛海軍時代から名をはせる叩き上げの軍人で根室上陸阻止戦やPKFファイリピン派兵に従軍。その息子として英才教育を受け、10歳にして国連軍の情報トリアルをクリア、情報オリンピックでの優勝が決定的となり国連海軍にスカウト……」

荒れに荒れた部屋にはビールの空き缶や山盛りになった灰皿、食べたあとのサラミのビニールなどが散乱している。カッターマットが

置かれたデスクに半分座るようにしてプリンターから吐き出された紙を眺める。

「まったく、どこに手がかりが転がってるやら」

「書類整理とは珍しいな」

「これが整理に見えるか？」

「いやなに、書類をいじってるのじたいが珍しいじゃないか」

杉田は振り返ることなくそう言った。見なくてもだれだかわかる。

「……少しお疲れかい？」

「慣れないことをするもんじゃないね……で、姉の様子は大丈夫なのか、武蔵。大和のところに行ってたんだろう？」

「問題ない。被害は艦装に集中していたから大和自身がどうこうってもんだいじゃないしな」

「そんなのを聞きたいわけじゃない、心の方だ」

「……さあな、今回特攻まがいの攻撃を受けたのはかなり堪えたらしいな。自分たちがしてきた攻撃がどれだけ悲惨か目の当たりにした。だがそれを否定することは昔の大和が守ろうとした国を否定することになるかもしれない。それが怖いんだろうよ」

「……そうか」

杉田は手に持った書類から目を上げる。

「なあ、ひとつ聞いていいか」

「お前の質問ならスリーサイズまで答えてやってもいい」

武蔵の冷やかしには答えなかった。

「今の自分を幸せだと思うか」

「いきなりなんだい。……難しい質問だ」

武蔵はそう言って笑った。

「だが、私の場合は単純だ。『イエス』」

「……なぜだか聞いても？」

「『武蔵』の幸せは二つの面で満たされている。一つ目、兵器としての幸せだ。私の実力を十二分に引き出してくれる人物と万全な整備体制、私の存在意義を満たしてくれる環境が揃っていることで、私は私として戦える。二つ目、あんたの存在だ、杉田勝也。あんたの下で

働けるという私個人の幸せだ」

「俺が何かしたか？」

「質問に質問で返すのはどうかと思うが聞かせてくれ。艦娘が主体的な感情を持つと思うか？」

「……さあな」

「そうやってはぐらかし自分の立ち位置を曖昧にするのは悪い癖だな、杉田よ。まあいい、私はあると信じたい。この気持ちアイデンティティ・インフォメーションが船の記録をもとに人類が製作した偽の個アイデンティティ・インフォメーションの情報だとしても。それによつて指揮官に好意を抱くように作られたとしても、この気持ちを信じてみたい。そう思えるほどにこんなにも気の合う男の下で働ける。それが幸せだと私は感じる」

武蔵はそう言つて不敵に微笑み杉田に詰め寄つた。

「この感情が人工的に生成された偽物の魂だとしても、それに組み込まれた自己学習プロトコルの果てに見えた最適な行動パターンアウトプットの出方だとしても、だれがそれを証明できる？」

武蔵は杉田の肩に腕を回し、そのまま正面から抱きしめた。

「艦娘が抱いているのは本当に感情か？ そう見えているだけの現象か？ 人間に受け入れてもらうための手段か？ ……艦娘である私にはその判別がつかない。なあ、お前はど思う？」

「……感情なんてそんなもんさ」

抱きしめられたまま笑つた杉田はそつと彼女の肩を押し返した。

「お前の電腦がゼロとイチのデジタル信号で動いていることが感情を持つかどうかの判断基準にはならないし、その羅列で感情が構成されるかは不明だ。それなら人間の脳にコンピュータを直結した時点でとつくに心のしくみが丸裸にされてるはずだ」

「なあ、同じ質問を返させてほしい、杉田勝也。今の自分を幸せだと思うか？」

「……これじゃあ、月刀を笑えないな。ああ、言つてやる。幸せだとも」

「なぜだか聞いてもいいか？」

「二つ目、今生きてる。二つ目、この先もうまくやれば生きていけそ

う。三つ目、仲間にも恵まれた。上げだせばきりが無いが、まあこんなところだろう」

「ふふん、なら私のことは部下な訳だ」

「ああ、それ以上の関係にはならんだろう。……誰かへの思い、特に好意は抱けば抱くほどその分だけ重みを背負うことになる。それはやがて枷となり、枷は力を奪い、失った力は死神を招く。だから俺は誰かを好きになることをやめた。守るものは少ない方がいい。そうでなければ、生き残れない」

「どうだか、私には好んで背負ってるようにしか見えないがね」

「それは男の性つてもんだ。艦娘が司令官に気に入られるように刷り込まれるように男には何かを成すことで自らの立場を守ろうとするという意思が刷り込まれる。それぐらいしないと男は女に勝てないのさ。今も昔も、多分これからも」

杉田はそう言うのと脇に置いていた書類を改めて手に取った。

「で、杉田よ。なんでいきなり幸せかなんて聞いたんだ？」

「……これを読んだと、どんな気持ちでこれを実行したのかなと思ってるね」

手渡された紙を見て怪訝な顔をする武蔵。

「合田正一郎少佐……ああ、ウエークの月刀大佐の部下だったか？」

「その彼が軍を脱走して行方をくらましてる。その情報を集めてくれと月刀の頼みでね、集めてみたがどうも妙だ」

「なにがだ？」

「彼が脱走する理由が見えてこない」

「……経歴だけでわかるもんなのか？」

武蔵が紙から目を上げると机に置いた紙に杉田が何かを書いているようだ。それをのぞき込む。

「なんの理由もなく人は行動を起こさない。行動を起こさないという意思を示さずなんとなく進むこともあるが、今回のように脱走するには必ず理由があるはずだ。そのかけらを探しているんだが。そのかけらが見えてこない」

「それがさっきの質問につながるのか？」

「行動理由としてあり得るのは復讐。母親殺しの復讐なら深海棲艦相手だから軍に残るはずだ。父親殺しの復讐だとするならターゲットはおそらく俺、月刀、高峰、中路の親父のだけかだ。だがこれにしても軍を離れるメリットがない」

紙に復讐と書いた杉田はその上にバツをつけた。

「脱走は重罪だ。それを決意するほどの出来事があるならきつとどこかにその経験の記録が残る。今回はそれが見当たらない」

「つまり何が言いたい？」

「可能性は三つ。そもそも俺の見間違い。この記録が間違っている。かれがホールデンである、だ」

杉田はホールデン⇨合田？と紙に書いた。

「いくら凄腕のハッカーで病院のセキュリティを全て破ったとしても、所詮子供の足だ。逃走には無理がある。そもそも彼は電波暗室から消えたんだ。その電脳戦ができないところからどうやって消えた。

……彼だけでは不可能なんだ」

「つまり、共犯者がいると？」

「俺はそれを国連軍そのものだと見てる。国連軍がわざと彼を逃がした。彼をホールデンと接触させるのか、彼をホールデンとして処理するのかは知らないが、なにかが動いてる」

そうやってその資料にライターで火をつけると灰皿の上で燃やした。

「仮に彼がホールデンもしくはその共犯者だとして、愉快犯にしては手が込んでいるし目的も理由も見えてこない。だからおそらく合田正一郎はホールデンじゃないんだ。そこで、ホールデンはどんな気持ちでこんなことをしてるんだろう」とか考えてしまったわけさ」

そうやって杉田は笑った。

「彼はこの戦いをインチキだと言った。この戦いを憂いているんだろう、なにを憂い、何を思っているのか。その結果として誰の幸福を願い、どこに敵を作るのか。考えていると自分すらその感情に吞まれそうになる」

ほぼ燃え尽き小さくなった火を見て杉田が肩を揺らした。

「要は自信がないのさ。この戦いが是であるという理由が。この先に幸せがあるという確証がない。だから揺らぐ」

武蔵は初めて見る杉田の姿に声をかけられないでいた。灰となった紙の後を見つめたまましばらく時間が立つ。

「……お前の意見を聞いて良かった、少しは整理がついたよ」

話を打ち切るようにして杉田が立つ。

「飯にしよう。この戦いは、ホールデンとの戦いは俺たちに無関係じゃねえ。いつかまた俺たちに襲い掛かってくる可能性もある。休める時に休んで、食べる時に食っておこう」

杉田はそう言うのと部屋を出ていく。

「……まったく、守るものは少ない方がいいと言いながら、守る気満々じゃないか」

「自分にかかる火の粉は自分ではらうだけさ。それにここで月刀に恩を売っておくのも悪くない」

杉田の目に色が戻る。それぞれの戦いが始まろうとしていた。

「?老、??你允?与我的会?（長老、面会をお許し下さり感謝します）」
高峰はバラックの中でも一番大きな家、その中にいる柔和そうな老人の前で膝をついた。子供たちが物珍しげに部屋をのぞき込んでいた。

「来客来?个村新奇。孩子?的事希望?介意。是那么、?何来遇到我的?（来客が珍しいのでしよう、なに、子どものことは気にせんでください。それで、なぜ儂の所に?）」

「我有想?你?求事……（どうしてもお願いしたいことがありまして……）」

わずかに目を走らせる。それを察した長老が笑った。

「你快要有只有不成的情况了。是也不想??被听?的??（何やら事情がありそうじゃの。どれ、人払いが必要かの?）」

長老が優しい口調でそう言うと、手を叩いた。子供たちが声を上げながら離れていく。入れ替わりに屈強な男が入ってきた。

「因??个人和其他的人使不?入?个房?（人払いを、込み入った話があるようだ）」

男が頷いて去っていく。

「さて、慣れない華僑語はもういいぞ、日本人」

「……やっぱりバレてましたか」

「確証はなかったがの。それにお主は軍属経験があるな? 筋肉のつき方でわかる」

高峰は内心舌を巻いた。それをさらっと見抜くこの人は何者だ?

「それで、日本人がこの老いぼれに何の用じゃ?」

「……素直に話した方がよさそうだ」

高峰は背中にわずかに汗が出るのを感じた。おそらくこの老人は元軍人だ。それも現場で叩き上げられたタイプだろう。

「率直に申し上げます。深海棲艦が攻めてくる可能性があります。おそらく数日以内に避難用の艦船が到着します。その時の避難誘導に

協力をしていただきたいのです」

「ほお、おぬしは軍人じやったか、それも現役の」

「ええ、国連海軍の正式な協力要請とでも考えて頂ければ」

それを聞いた長老が喉の奥で笑った。

「正式要請ならなぜ同朋のふりをして会いに来た？　ちと誠意が足りんな。騙す気満々なことが見え透いている詐欺師ほど滑稽なものはないぞ？」

「手厳しいですな、長老。軍服を着ていればここまでたどり着くことすらかなわないでしょう。私は命が惜しい。――痛くもない腹を探られるのは居心地が悪いので、さっさと本題に戻らせていただきたい」

「それがものを頼む側の態度かね？　日本軍の質も落ちたな」

「国連軍ですよ、長老」

「それは失礼した。国連軍の斥候君――――そろそろ李？超などという偽名ではなく本物の名前を教えてくださいな」

「――高坏とでもお呼びください」

高峰がそう言うと言身を乗り出した長老は品定めをするかのように目を細めた。

「それでは高坏君。手伝うとは何をすればいいのかね？」

「移動を渋る方への説得、それだけで結構です」

「それは無理だな」

「なぜです？」

「ここは我々に与えられた土地、住処を追われた我々が得た第二の土地だからだ。またそちらの都合で我々をもてあそぶ気か？　恥を知れ、国連軍人」

「たしかにこちらの事情ですが、今回ばかりは命に関わりましょう」

「それでも守らねばならないものがあるだろう。軍人ならわかるのではないかね」

長老は目を伏せた。

「……何より、儂は軍が嫌いだ。華渤戦争^{かほくせんそう}では我が祖国、渤海民主主義人民共和国の一兵として剣を取ったが、それで得たものなどこの腐っ

た足だけだ。戦後処理だなんだでおぬしたち日本軍が敗軍だった儂らをこの北の地に我々を追いやった。違うか？」

「勘違いされているようですが」

高峰は語気を強める。

「我々国連海軍は日本国自衛軍とは完全なる別組織です。またこの移動も第三次世界大戦の戦後処理とは関係ない。国連海軍はあなたたち一般市民の命を守る責務を負い、それを実行するためにおいてのみその武力をふるうことを許された軍隊だ。一個人の意思や思いを蔑ろにする気はないが、それによって約3千人の命が奪われることを看過できない」

長老は高峰の目を見据えた。互いに互いの瞳を睨みながら高峰は続ける。

「国連海軍は今、近海に発生した大規模な深海棲艦の部隊を壊滅させるべく用意を進めている。この島の近海で戦闘が発生すれば海沿いにできたこのバラックは極度の危険にさらされる。ここで築いてきたあなたたちの生活を壊すことになることは遺憾に思うが、ここに拘泥し死にゆくのも馬鹿らしいではありませんか」

「ここでの生活に拘泥させたのはどこのだれだったかのお？」

「あなたの考えはどうであれ、ここの人たちを死なせる訳にはいかない。だから私がここに来た」

「……今更我々に生きろと？」

「ええ、生きてもらわねば困るのです」

それを聞いた長老が溜息をついた。

「未だ生を知らず。焉んぞ死を知らんや……生にも死にも意味はない。生きて居ることに意味があるとすれば、死んではいけないというだけのことだ。なあ若人、おぬしは本当に生きてもらわねば困ると思っておるか？　ここで誰にも迷惑をかけぬよう、閉じた暮らして生き、死んでいく我々におぬしはどんな意味を見出す？」

「物事には必ず意味がある。ここであなたたちがいることに何らかの意味があるはずだ。それが具体的に何を指し示すのか、私にはわからない。しかしながらわからないということは可能性があるということこ

とだ。可能性の芽を摘めるほど私は偉くもないし、傲慢でもない」

「……いい答えた。だが青いな」

長老はそう言うとう目をぎらつかせた。

「いいだろう。深海棲艦が攻めてくることをバラック民に伝えよう。じやが、ここに残る判断をしたものにはそれ以上の言葉をかけん。これ以上の要求をするには、おぬしの礼は足りん」

長老はそう言った。高峰を見据える目には深い色が宿る。

「理非無きときは鼓を鳴らし攻めて可なり——孔子様のお言葉じや。おぬしの行動は儂ひとりに通告したことで説明責任を果たしたという建前を作り、それでも難民たちは動かなかったのだという言い訳づくりにも見える。儂はおぬしを信用しとらん。信用に足る礼も時間も積んでないからの。我々を殺すのが国連海軍の鉛玉じやないことを切に祈っておるよ」

そう言った長老が出ていくようにとジェスチャーをした。頭を下げてから無言で退出する。そのままバラックの外に出ると相変わらずの霧の中を人がぎつしりとうごめいている。

（人口は北方難民だけで約2500から3000、あきつ丸と揚陸艦「さろま」「しこつ」とでLCCは6隻。一隻で一回に280人の移送が可能として約2往復。うまくいったとして1時間半、現実的には2時間、トラブル発生で4時間……港の方は貨客船「にゅーあぎれあ」と「にゅーさざんか」が直接乗り入れるとして……最短で1時間。北の監視所の要員は人員だけをへりで回収、4機で1時間。南端の防空レーダーサイトの人員は港に合流できるからいいとして……）

頭の中では移動のパターンをシミュレーションしつづける。

「攻撃が来たら可燃物の塊のバラックはひとたまりもないな」

そんなことを口に出しながら高峰は道の構造を把握、記憶している。

まだ把握すべきことはたくさんある。LCCのランディングゾーンはどこがいいか、ここで力を持っている人はだれか。深海棲艦が来た時にどこに部隊を配置すれば人を守れるか。——ど

うすれば難民の動きを掌握し、避難させることができるか。

「未来予知ができればなんて言っても仕方ないか」

高峰は再び霧の中へ消える。

阿武隈は船団の先頭に立って鈍色の空と鈍色の海の間を進んでいく。

「阿武隈さん、大丈夫なのです?」

「私はおつけー。ありがとね、電ちゃん」

阿武隈は前を見据え、下唇を噛みしめた。そうでもしなければ叫びだしそうだった。

司令官が脱走するなんてありえない。阿武隈には確信的な感情があった。

合田正一郎司令官。彼はこんな向こう見ずなことをする人物だっただろうか?

何度考えても答えは否だった。

阿武隈はここに配属になる前まで江田島の国連海軍大学校UNNS t a C | H i r o s h i m aに教導艦として配置されていた。正一郎が士官候補生としてそこにやってきてからの彼の様子は知っていた。周囲はどんなに若くても20代前半、それでも最速の部類だ。彼はそれすら超える12歳で入学した。国連の未来を担い、世界を守る盾を支える士官としての登龍門を潜り抜け、周囲と比べても遜色ない成績を残した。文字通りの“大人も顔負け”な実力である。

水上用自立駆動兵装運用士官になるには、国連海軍大学で
水上用自立駆動兵装運用士官課程と通常の指揮幕僚課程を修了しな
ければならない。この二つを無事修め、艦娘と組むことが許されるま
でに、人員は半分以下に減っているのがほとんどだ。民間大学を出
て、軍人としてのキャリアを持つ人ですらそれだ。その中で正一郎が
生き残っていると言うことは並大抵の努力や才能だけではなし得な
い。

国連海軍大学での生活は孤独だっただろうと容易に想像がつく。
周囲からの好奇の視線に耐え、けっしてお飾りや広報のための広告塔
でないことを証明するために常に成績を維持しなければならぬ。

その中で彼は全く子供らしくない慎重さとバランス感覚、そして周
囲に呑まれないための精神力と振る舞い方を覚えた。

その過程を阿武隈は見ていた。
大学校の学長だった少将から、気にかけてあげると命令されていた
からでもあるが彼は良くも悪くも目を引いたし、大人についていこう
と無茶をすることもあった。でもその背景には必ず論理的に紡ぎだ
された理由があった。今回の脱走には理由が見えない。

作戦指揮は堅実でプロセスをしっかりと踏む慎重派。危機的な状
況に陥ったとしても確実な戦術の積み重ねによつて潜り抜けようと
する。

そんな彼が軍から指名手配がかかるのを承知で脱走する？

そんなはずがないのだ。

「……あーもう。なんで司令官は……」

つぶやくようにそう言つて阿武隈は鈍色の世界を見る。

自分の鈍色の艦装、背中に配置された武装マウントに据えた主砲の
わきには小さなラックが取り付けられ、そこには固定された伸縮可能
なスタン警棒が据えられていた。

「見つけたら引つ叩いてもいいかな……?」

「さすがに警棒で叩いたら怪我させると思うのです」

独り言に答えを返してくれたのはまだ横を進んでいた電だ。電の

艦装についている防弾板の内側には警棒とスタングレネードなどが固定されていた。

「でも電ちゃんも月刀司令が消えたら同じこと思うんじゃないかな？」

「それは……そうかもしれないけど、警棒はやめときましよう」

「でも……やっぱり気が済まない！ まったく何してるんだろ、うちの司令官は……」

手首を覆うように装着された砲がぶんぶんと揺れる。電も苦笑いだ。

「きつと帰ってきてくれるのです」

「当然！ 帰ってきてくれないと困るもん」

ゆらりと揺れる波の間で阿武隈は大声でそう言った。

作戦海域突入まで30時間を切ったところだった。

「……はあ、はあ、はあ」

上がった息を整える。こんなに早く防壁が破られるとは思っていなかったのだ。電子戦は攻撃を行うアクセスポイントがバレてしまえば物理的に攻撃を受ける可能性がある。バレたらすぐに位置を変えなければならぬ。

床に刺さったQRSプラグを引き抜こうとしやがんだときに、ポケットに違和を感じて手をつ込んだ。細長い板状のもの、黒地に金のライン——階級章だ。

やはり人の気配がする。飛び上って、天井近くの壁に埋め込まれた

通気ダクトのふたをはずして体を振り入れる。ダクトのふたを戻して息をひそめる。先ほどの階級章がダクトにもれこむ光にわずかに反射し、慌ててポケットに戻した。

わずかな揺れが長いスパンで続いている。……大型船らしく波のゆれはあまり気にならない。ダクトの壁に背中を押し付けるようにして体を安定させる。自分の下から律動的な足音が響く。

『……あきつ丸。本当にこの辺りなのか?』

『そうなのでありますが……。艀装のエラーだったみたいでありますね』

『ならいいんだが……』

『月刀大佐殿は心配性であります。陸軍の船ですが安心してほしいのであります』

女性と男性の声、この船の管制官と海軍の総指揮を執る指揮官だ。

『陸さん海さんの縄張り争いをする気はさらさらないよ。ただ……』

『ただ、なんなのでありますか?』

『今回は民間人の救出が任務だ。絶対に失敗は許されない。だから万全を期したいだけだ。何者かの電子的侵入なんて笑えないからな』

『なにを言っているでありますか。このあきつ丸の各種防壁は軍用防壁の中でも最上位クラスを搭載しているのであります。それに今はスタンドアロン運用でありますし、その状況で外部からの接続があれば一発なのであります』

『でも今攻勢防壁の一つが作動し、エラーを叩き返した。……楽観視はするべきじゃないな』

男の声がすると足元の通路の壁の一部を外すような音がした。

『……この回線が短絡しててありますね、これがエラーかもしれないかもしれません』

『単純な整備ミス……?』

男の声は訝しむようだったが、女の声はスッキリしたように明るかった。

『心配には及ばないのであります。このあきつ丸、潜水艦だろうと航空機だろうと人間相手であろうと負けないのであります』

『……だといいがな』

その男の声を最後に足音が遠ざかっていく。小さく溜息をついて「彼」は力を抜いた。すごい力で歯を食いしばっていたことを知る。

このダクトはこの船の設計図には存在しない。設計図を先ほど書き換えたからだ。そもそも、このダクトは自然換気用のダクトであり電子的な役割を担っているわけではなく、このだくとを潰したところで前部キャビンと後部キャビンで気づかない程度の気温差ができるかどうかである。航海中にはだれも見向きもしないスペースだ。

そこで横になった「彼」は僅かに微笑んだ。小柄な彼ならここで横なってしまうえば終点まで安泰だろう。スポーツドリンクを薄めたような味のする飲み水だけは持つてきている。一日ちよいならんとかなる。……上手いことこの船に潜り込めた。後はどう降りるかだけだ。

先ほどの階級章を取り出して指でなぞる。金属のひんやりとした感覚を指に感じ、笑いをかみ殺した。もうこれに意味はないのかもしれない。それだけではなく身元が割れる可能性がある以上捨ててきた方がいいのだろう。でも捨てられなかった。

何をしているのだろうかお思わなくもない。それでも、追いかけない訳にはいかなかったのだ。

追いかけてでも知らなければならぬことがキスカ島に眠っている。それが真実かどうかはわからない、それが罠だとしても追いかけてにはいられないのだ。

(やっと追いつくよ、父さん)

帰ってこれないかもしれない。それでも、確かめなければいけないことがある。

「……阿武隈、怒ってるだろうなあ」

そんなことを考えながら彼は瞼を閉じる。

船は北の島——キスカ島を直指す。

「だれかあ！　だれかいませんかあ！」

霧の中——正確には霧に包まれた海上で少女の声が溶けていく。

《子日、そつちに誰かおらんか？》

「だめー、静かすぎるくらいで何の反応もないよう」

半ば諦めた声がある。子日と呼ばれた彼女は手にはめ込んだ単装砲を周囲に予断なく振り向けながらも声をかけ続ける。

「ねえちゃんは見つかった？」

《見つかったら誰かおらんかなんて聞かないじやろうて》

「それもそつか——行方不明から2日かあ……この海水温じゃ絶望的かなあ」

《海に投げ出されておれば、な。機関の故障で漂流とかなら生きとるじやろうし、この辺りにいるとすれば見つかるはず、なん、じゃが……》

この霧の中で航海灯が何とか見える距離、そのぼんやりとした距離から声が帰ってくる。姉にあたる初春が僅かに先行しながら航行していた。

「……やっぱり沈んでるのかなあ」

《もしくはもっと遠くまで流されてるかじやな。じゃが、わらわもそろそ戻らねばならん。あと5分進んでも見つからなければ引き返すぞ》

「はあ」

子日はそう言って進んでいた。

足元に白い航跡が真横から迫ってることなんて気がつかないまま進んでいた。

「子日の非常用位置指示無線標識装置が作動した？」

一通りの下準備を終えた高峰に非常用電脳通信が飛び込んできていた。

《はい！ 初春さんが対潜戦闘機動を開始。子日さんはごく低速で回頭、最短ルートでキスカ本港を目指しています》

高峰はあたりを見回してから人気のない方に少々早足に向かった。スラムのはずれから村に向かう方向へ歩いていたが途中から枝道に入った。この先はせり立った山に通じるだけであり、後3時間で避難作戦が開始されることが周知された状況ではここを通る人は皆無だった。

途中まで登ってから後ろを振り返る。海なんて見えないほどに濃い霧がかかっていた。

「潜水艦相手に重巡じゃあ分が悪すぎる。この霧じゃあ航空機でのサポートも無理だ。……パッケージジロメオまであとどれくらいだ？」

《あと15分です！》

「パッケージジロメオもおそらくELTを受信してるはずだ。合流したら応援を出してもらえ」

《了解です！》

高峰はそう言うってからウエストバックから三日月型の機械を取り出すと首の後ろに接続する。

ユーザー認証開始、パスコード入力、承認。簡易中継器が正常に起動すると周囲の海図と通信情報が表示される。確かに子日の非常事態を告げる電波が発されていて。その周囲をぐるぐると回るように

初春が動いている。そこからかなり離れたところを青葉のマーキングが進んでいく。その行く先には薄い半円が描かれておりそこには救難用輸送船団到達予測域と注釈が振られている。

輸送船団本隊は電波封鎖状態でスタンダアロン運用がなされている。敵が無線通信に割り込みをかける可能性があったためだ。それで避難民収容中に襲撃を受ければ大変なことになる。収容が終わるまでは絶対に位置を知られることは避けなければならない。青葉が15分と言ったがそれが確かなのかどうかはわからない。だが……

「青葉、左舷一ポイント転進用意、方位1―8―7へ回頭、かかれ」
《方位1―8―7了解ですっ！》

高峰は迷うことなく指示を出してから無線を切った。高峰には船団が「視えて」いた。

（合流まではおそらく12分……おそらく応援といっても二人くればいい方だ。そして子日が攻撃を受けて応援がすぐに駆けつけなければ……敵はこちらに増援が来ていることを知る）

その偵察のために深海棲艦がこちらに来てしまったら。

（急がないとヤバそうだな……）

そう言ってから中継器を隠すように防寒着の襟を立てて坂を下りる。坂を降り切ったところで赤いハンチングをかぶった男とすれ違いつつ、あたりを見回す。もう少し下ればキスカの港がある村に出るだろう。

（――赤いハンチング？）

高峰は浮かんできた疑問に足を止めた。

そつと振り返ると霧のヴェールの向うに足だけが見えた。革靴の底を見せるようにしながらその足も白い闇に消える。

（この先にあるのはただの山林とわずかな畑だけ、民家もない。そんなところはこのタイミングで「革靴で行う用事」があるか？）

赤いハンチングを被り、革靴で土を踏みしめながら消えていく姿、それを思い出しながら坂の上方を睨む。

（――まさか）

高峰は電腦のチャンネルを開き、ある文章を呼び出す。出版年19

51年、作者J・D・サリンジャー。書名——『ライ麦畑でつかまえて』

検索して、ヒットした。主人公の男とその友人アックリーの会話のシーン。

——「違いますね」、僕は帽子を脱いで、眺めた。それに狙いを合わせるみたいに片目を軽くつぶった。「こいつは人間撃ち帽なんだ」と僕は言った。「僕はこの帽子をかぶって人間を撃つのさ」

この『僕』の帽子は……

(1ドルで買った赤い鹿撃帽！^{ハンチング} くそ！)

道を引き返す。懐の拳銃を引き抜き低く構えながら初弾を薬室に送り来んだ。

深い霧の先頭をゆくのはシフトを後退した阿武隈だった。

「みんな、気を付けてね！」

この霧の中で無線封鎖状態で動くには前の船の航海灯を頼りに進むしかない。すなわち、航海灯が見える範囲で密集して進まねばならないのだ。

「初霜。寄るな。」

「しっかりと距離を取ってますっ！」

その中で弄られすぎた猫のように警戒心を丸出しにしているのは若葉だ。

「全く、同じ轍は二度も踏みませんって」

「お前は信用ならん。」

「……いくら妹とはいえさすがに扱いひどくないですか、若葉」

「でもこの霧は確かに怖い」

その会話に乗ってきたのは響だ。

「いつぞやのことを思い出すね。島風はどうだい？」

「……はやくかつ飛ばしたい」

「はいはい、しっかり耐えるよー」

阿武隈がそう言うのとそわそわしながらも島風は黙った。というより黙ってじつと耐えてないと走り出しそうなのだろう。阿武隈がそれに苦笑いしていると島風がぱつと振り返った。手に持った信号灯を護衛船団の先頭を征く旗艦「あきつ丸」に向けた。

「どうしたの？」

「非常用位置指示無線標識装置、結構近いところで船が沈みかけてる」

「え？……どこで？」

信号灯の発光モールスでそれを伝えるとすぐに返信が帰ってくる。

同じように発光信号だ。

「カ・ク・ニ・ン・シ・ジ・ヲ・マ・テ……だつてさ」

「ELTってことは結構危険だよね。島風、場所わかる？」

「うーん、方向と強さからして……ここからざっと40キロ、キスカ港から東に60キロつてところかなあ」

「深海棲艦……なのかなあ」

「その可能性が高いと思うよ。アツツ島にでかいのがいるって言うても、敵がそこだけにいるわけじゃないもん」

阿武隈はそれを聞いてどうするべきか考えた。

島の安全を考えるなら応援に行くのと、艦娘の応援が来ていることが敵にばれる。そうなれば、秘密裏にキスカ島を空にするという作戦が瓦解することになる。4000人近い人員を避難させることを考えれば見捨てるという選択肢も考えられる。最大多数の最大幸福だ。

でも、それを私たちは許せるだろうか？

それをして、いいのだろうか？

そんなことを考えていると前の霧が揺れた。

「……深海棲艦!」

反射的に安全装置をオフ。この距離なら魚雷を放射状にばら撒いたほうが確実だ。

「こちら阿武隈、深海棲艦を捕捉! 防衛戦闘に入ります!」

「あ、阿武隈待っ……!」

島風が制止するより前に阿武隈は魚雷を撃ちこんだ。酸素魚雷が伸びていく。

「うひゃあ!」

遠くでそんな叫び声が聞こえた気がした。

「阿武隈、魚雷自爆させて!」

「え?」

「早く!」

島風が焦った声を上げる。阿武隈は訳が分からない。直後魚雷を放った方向がちかりと光った。断続的に光が続く。

「あれ、味方だった!」

「ワ・レ・ア・オ・バ………え? 青葉さん!」

「だから待ってって言ったじゃん!」

島風にそう言われ慌てて魚雷の自爆コードを送信する阿武隈。結構走っていたのかかなり遠くで爆発音がする。

「もく。酷いじゃないですかー。本気で当たるかとビビりましたよ」

霧の中からよろよろと浮出てきたのは額の汗をぬぐっている青葉だった。損傷はなさそうだ。

「ごめんなさい! ほんつとごめんなさい!」

「一番が敵だ敵だとなんとやら……」

響のあきれたような声にも取り合わず、ひたすら頭を下げる阿武

隈。実弾誤射とは絶対にやってはいけないミスであるだけに必死だ。それに追い打ちをかけるようにあきつ丸の艦橋から発光信号だ。先ほどの魚雷は何かと説明を求めている。なんとなく事情が分かっていたのか、島風が代表して状況を伝えると『周辺警戒を厳にせよ』と信号が来ただけだった。

「で、青葉さん、ランデブーポイントってもっと先でしたよね？」

「それがそうとも行かなくなっちゃって……こつちでELTって挿んでます？」

「うん、さつき確認したけど……」

島風がそう言うのと青葉は若葉と初霜の方を見てから、落ち着いて聞いてね、と前置きした。

「それ、子曰さんのなんです」

「え!？」

「キスカ港を母港にする漁船が一隻行方不明になってるんです。それを捜索に出た初春さんと子曰さんが深海棲艦と接触、交戦しました。潜水艦のみだったみたいで初春さんが対潜警戒に入ってから攻撃なし、今キスカ島に向けて動いています」

「子曰の状況は？」

「そう聞いたのは若葉だ。」

「今のところは動いています。ELTを打つには少々軽いくらいの損傷らしいです」

「つてことは沈んでないし、すぐ沈んでしまうような状態ではないんだね？」

「はい、でもこの速度ではキスカ島撤退終了までに港にたどり着けるかどうかわかりませんし、初春さんの負担も大きすぎます。曳航役だけでも必要だと判断しました。青葉はそのメッセンジャーです」

「そう言うのと有線通信用の鉄線をあきつ丸に分投げた。磁石兼用のおもりが舷側に張り付いた。」

「こちら青葉、有線にて交信中。あきつ丸座上中の月刀司令どうぞ」

《こちら月刀、こちらの部下が失礼した》

「いえいえ、ワレアオバで撃ち返されたらどうしようかとそつちの方

が内心バクバクだったのでよかったです。それで……」

《E L Tの件だね?》

「はい。実は——」

状況を確認すると月刀は数刹那の間迷ったように間を取った。がそれも本当に数刹那で切り替わる。

《島風に走らせる。島風ならE L T逆探も上手いし、何より足がある。護衛に暁も連れて行かせる。そこで深海棲艦に襲われたならもうこつちも捕捉されてる可能性が高い》

「了解です。なら私はこのまま予定通りですかね?」

《ああ、45分後にL C A Cを発進させる。その護衛は暁を除く特III型と阿武隈、初霜・若葉で貨客船とキスカ港の防衛だ。青葉はあきつ丸他揚陸艦の直掩に入ってくれ》

本当は若葉たちも揚陸の護衛チームだった。初春たちが港の護衛をしてくれるはずだったからだ。しかしそうはいかなくなった。

《ランディングゾーンの確保は?》

「こつちの司令が何とかしました。予定通りバラック街の北の端の浜辺に二隻、中央に4隻でいけます」

《了解だ。何事もなければ45分後に作戦を開始する。次の発光信号まで待機》

「わかりました。次の発光信号まで待機します。通信おわり」

《通信おわり》

そう言う電磁石の電源を切り、通信ケーブルを回収する。

「やっぱり月刀司令って冷静で優秀ですね。応援に初霜たちを入れませんでした」

青葉は満足したようにそう笑った。

「どういうことだい?」

「たとえば響さんは暁さんが無線の奥で沈むかもっていうと助けに行きたいと思いますよね?」

「当然だね」

「でもそれは周りを見ずに突っ込む可能性が高いってことがわかるわけです」

「それは……そうだね。否定できない」

青葉は笑った。

「だから月刀司令は島風さんを出したんです。暁さんも同じ一水戦とはいえ若葉三よりも落ち着いて対処してくれそうです。もし睦月型のどれかがこつちに来てたら睦月型の子を出したでしょうね。救助はできるだけ要救助者と関係のない人が行うってのは鉄則です」
「なるほど……言われてみればそうだね」

青葉の声に納得した響はそう言ってあきつ丸の船橋を見上げる。
この距離ですら僅かにかすむほどの深い霧だ。

「でも——」

「響さん？」

「いや、何でもない」

響は目線を船橋からそらした。

たしかに司令官は優秀だ。そして冷静なのだろう。兵器である私たちがまるで本物の人間のように扱ってくれる、優しい人でもある。

でも、本当にそうだろうか？

今回の作戦、艦娘の配置に響は疑問を持っていた。

北方難民の避難キャンプの人員の避難にL C A Cを使って避難させるが、そのL C A Cの護衛に電他特Ⅲ型が割り振られていた。またそちらの指揮は月刀司令が直接執ることになっている。

避難キャンプの住民が避難に反対して攻撃してくる可能性も指摘されている。その対策として警棒やスタングレネードなどが艦娘に搭載され、非殺傷武器であるそれらの使用は自衛に限り独断での使用が可能となっている。つまり、そういう事態が十分に考慮される地域に電を投入することになる。

（電は今戦う理由を見つけられないでいる。その状態で、守るべき人間に向けて武器を使うことになったら……）

今度こそ電の精神は耐えられるかどうかかわからない。

響は自分の盾の裏側に固定された武器を眺める。

(電は自分が兵器であるということを知っている。でも、傷つけないと思っっている)

守るための兵器といえども、要は守るために他の何かを傷つけて蹴落とすための兵器。電はそのことを認識しているのだろう。その上で——司令官を守ろうと考えているのだろう。司令官を守るために誰かを傷つける、それは致しかねないことだと納得したいのだ。

でも電自身がそれを善しとできないのだ。

そんな状況で、電と司令官と一緒に危険地帯に飛び込む。もし司令官が攻撃を受けた場合、そこに電が居合せれば……

(どちらに転んでも、電は自分を許せなくなる。司令官を守れなかったとしても、守るために誰かを殺したとしても)

響は艦列を離れていく島風を見送った。暁らしき影が霧の向うにおぼろげに見えた。二人は霧の向うに消えていく。もうしばらくすれば揚陸艦の後部ハッチが開き陸に向けて滑走を始めるのだろう。

お願いだ、神様。どうか

どうか私の妹の心を壊さないでくれ。

爆音が響く。巨大なファンが高速で回り、それで得た推力で海面を文字通り飛んでいく。

「ランディングゾーン視認！ 原速赤20！」

《原速赤20！》

ホバークラフト式の船が4隻、海岸線に近づきそのまま乗り上げる。海岸線に集まった人たちから見れば、霧の中から不気味に現れる鋼鉄の塊だっただろう。その横から海面に立っている人型がついていればなおさらだ。

バラック街に人を入れまいとするように人の壁ができていた。それを見て誰かが「歓迎されてるって感じじゃなさそうだ」とつぶやいた。

十分に減速して砂浜に乗り上げるとそのままファンを停止する。正面のランプが海岸に下ろされるとスロープのような形になった。そこを真っ先に下りていく人影が一つ。——国連軍を示す水色のヘルメットにグレーの防具をつけた月刀航暉だ。その後ろに国連海軍警邏隊が整列、電と雷が上陸し、響と阿武隈は海上待機だ。

航暉が手に持ったメガホンを構える。

「国連海軍です。近海に強力な深海棲艦が発生しています。皆さんを安全なところまでお連れ致しますのでご協力お願いします」

英語を使ってメガホンで呼びかけるも、その声も聞こえない程の騒音に包まれていた。

『返回！返回！返回！返回！（帰れ！帰れ！帰れ！帰れ！）』

「……ランディングできたかもしれませんが、もう少し説得してくれてる」と助かったなあ、高峰」

そんなことをぼやきながらも、航暉は引かず立ち止まったままメガホンを構えた。

「深海棲艦の襲撃を受ければここは持ちこたえられない可能性もあ

る」

『返回！返回！返回！返回！（帰れ！帰れ！帰れ！帰れ！）』

説得も聞く気はないのだろう。それでも説得は続けなければならぬのは痛い。航暉の横に電が駆けてきた。航暉の護衛のつもりだろうか？

「艦娘の護衛付きで今から皆さんを択捉クリリスク市までお送りします。どうか協力をおねがいします！」

帰れ帰れの大合唱の中、一人が石を航暉に向けて投げた、航暉はそれを避けなかった。

「司令官さん!？」

「動くな電！」

ヘルメットにあたって硬質な音を立てる。それがきつかけになったかのようにいくつもの石が飛んでくる。航暉の後ろ、L C A Cを守るように立っていた海軍警邏隊の面々が銃を構えようとする。航暉がとつさに叫ぶ。

「総員武器を向けるな！」

航暉のヘルメットや防弾チョッキなどにガスガスと石が当たっていく。電が前に出て守ろうとしたがそれを航暉は押し戻した。同時に電脳通信がつかなくなる。

《攻撃に転ずるな、ここで攻撃したら相手に銃を出してくる理由を与える！》

《でも、司令官さんが！》

《おれは大丈夫だから自分に向けて飛んでくる石だけ守ってる、命令だ》

《……っ》

ガラス瓶が飛んできたのかその破片で頬を切りながらも航暉はそれでも背筋を伸ばして立っていた。涼しい顔とは言わないがそれでも澄ました顔で前を見続ける。

「司令官さん、ごめんなさい！」

それでも前に出た電は航暉の前に出て両手を横に広げた。まるでとおせんぼするかのような位置だ。武器を向けるなど言っただけだ

からまだ命令違反にならないはずだ。

「やめてください！ 私たちはあなたたちを助けに来たんです！」

ちようど飛んできた大きな石が電のこめかみにあたる。一瞬視界にノイズが走るがすぐに止んだ。ナノマテリアル被膜があれば人間が投擲した石ぐらいなら難なく防げる。それでも衝撃は十分に電の脳を揺らし、くらりとよろめいた、その肩を支えるようにしながら航暉は一步前に出る。

「電、下がってろ。ここは男の戦場だ」

「你要女孩子盾不害羞? (女の子を盾にして恥ずかしくないのか!)」

「保? 弱的人的?? 不存在! (弱きを守る軍隊が聞いてあきれる!)」

電のことを無視したかのように罵詈雑言は航暉に向けられたままだ。

航暉はメガホンの電源を切ると大きく息を吸い込んだ。

「那个是你? 的正?! (それがあなた方の正義か!)」

その声量に前に立っていた電は思いつきり肩を跳ねあげた。英語ですつとしゃべっていた航暉がいきなり華僑語で怒鳴ったことに周りは一瞬怯み、投石が止む。

「不久”深海栖”来! 如果那个来? 里定??、生存的可能性? 得非常

低! 你? 尽管如此留下在? 里?? 你? 不听想生存?? 的人的意?、逐

回我??? 弃而不? 想生存?? 的人的正?! (もうすぐここに深海棲艦が

やってくる! そうすればここは戦場になって、生きて帰れるかわか

らないんだ! それでもここに残るか? 生き残りたいと思う人の

意見を封殺し、船を追い返すことがあなたたちの正義か!)」

場の空気が一瞬だけ冷え込んだ。それだけで場の主導権が航暉たち国連海軍に移る、

「?? 的意? 正? 没有? 系。帮助生命的重。如果死? ? 失全部的可能性! (どちらが正義かなど関係ない。生き残ることだけがこの場では重要だ。死を迎えることは、可能性を全て失うことだ!)」

航暉の叫びを、電の電脳は日本語訳して理解する。

「私からもお願いです！ 今は一緒に避難してほしいのです！」
電も慣れない英語を繰り返り、叫ぶ。

生き残ってほしい、救ってほしい。このままいけば死ぬとわかって
いるのにそのまま突っ走ることには許せない
だから電も叫ぶ。

「お願い、します。一緒に逃げてください……！」

最後は僅かに声が揺れた。場がしんと静まり返る。どこからか吐
き捨てるような笑いが漏れた。

「笨拙的表演已？ 充分。快速——（茶番はもう十分だ。早く
——）」

「？ 停止！（やめんか！）」

投石をしようとした若い男を引き留めるように太い声が上がった。

「他？？ 我？ 投了石？？」（彼らが石を投げ返してきたか？） 逐回来的人失
礼， 光是？ 也？ 着听吧。（わざわざ訪ねてきてくれた人を追い返すの
も失礼だ、話だけでも聞こうじゃないか）」

人ごみを割るように車いすに乗った老人が出てくる。十分な距離
を保ったまま車いすが止まる。

「さて、君も日本人だね？ 名を何という」

その男が日本語でそう聞いてきた。航暉は僅かに面喰いしつつもす
ぐに答えた。

「月刀航暉、こここの避難の指揮を任されているものです」

「軍人か？」

「はい、国連海軍極東方面隊中部太平洋第一作戦群第三分遣隊指揮官
を務めております」

「その隣の嬢ちゃんは部下かね？」

「はい」

品定めするように航暉を見る老人は車いすをゆつくりと近づけた。

「我々渤海民主主義人民共和国は国を追われここまでたどり着い
た。もう信ずる国もなく、ただここで閉じた暮らしをするしかない
我々だ。国連という戦勝国の集合体の都合で生活を狂わされるのは
御免被りたい。それはわかってくれるな？」

「確かに、貴方たちの祖国はもう存在しない。その時の戦争では我々日本人は敵として貴方たちと殺しあつた。それは認めましょう。その戦後処理の一環でこの土地に追いやつたのも事実だ。それをどうとらえ、恨むも妬むも自由ですし、それに対する批判は日本人として甘んじて受けましょう。ですが、もうすぐここは戦場が変わる。深海棲艦という化け物を相手にしての戦いが始まるんです。その前には――」

「――人間同士の愚かな戯事に興ずる時間はない、か？」

「はい」

航暉はそう言つて瞳をそらすことなく見つめ返した。

「なら一つ聞かせてほしい。これは国連軍を信じるかどうかの問題じゃなく、指揮官である君を信じるができるかに関わる大事な質問だ。――君は戦争に正義があると思うか？ 我々が興じ、

殺しあつた戦争に、いま直面している戦争に正義があると思うかね」「そこに意味を求めてしまうのは人間の性分なのでしょう。何かを得るために他者を蹴落とす行為にさも崇高な理由を付けた時点でそこに正義は存在しえない」

「なら今君がしていることはなにかね？」

「あなたたちの命を保護という目的に則つてあなたたちにここから退去してもらつたための交渉です」

「それに正義はあるかね？」

「これまでに正義があつた戦いはありましたか？」

そう、これは戦いだつた。難民キャンプの人々の命がかつた戦いだつた。

「なら最後の質問だ。もしここで君たちを殺すと宣言したら、どうする？」

電が動こうとするのを航暉は目で制した。

「それでもここから皆さんを避難させるよう全力を尽くします。もちろん」

攻撃してくるようであれば応戦させていただきます。と航暉は笑つた。

「……？位、？要？個人？？的那？。（……みんな、この人たちの言う通りにしなさい）」

バラック民がどよめく、それを制するように老人が声を上げる。

「？了重画我？的屈辱的？史、我？必？生存。？了逃□不是逃□，？了？逃□。？在追随那个人吧。（我々の屈辱の歴史を塗り替えるためにも、我々は生き残らねばならない。逃げるために逃げるのではなく、立ち向かうために逃げるのだ。今は恥を忍び、この人に従うべきだろう）」

「理解感？、？老（ご）理解いただき感謝します、長老）」

航暉が膝をつき首を垂れると、その男は溜息をついた。

「そんなものしとらんよ。理解なんてものは概ね願望に基づくものだ。ただ客観的に判断しただけだ」

老人はそう言つて車いすから立ち上がる。

「忘れるな日本人。お前らと戦つた我が祖国渤海の民は生きている。我々の最期の一人が失われるまで、我々は日本人を許さない。最後の一人に至るまで我々はお前らを憎み、戦い続ける」

老人は一步前へよろりと前に出た。子供が飛び出してきて、その老人を支えた。

「世界が我々を否定しようとも我々は生き続ける。お前ら日本人を恨み続ける。忘れるな、深海棲艦と戦つていても、お前らが儂らを守つたとしても、その恨みは消えることはない！」

そう言つと急き込んで背を丸める老人。それを聞いたうえで航暉は叫ぶ。

「国連軍全兵！ 傾注！」

その号令に電たち艦娘も含め背筋を伸ばす。

「これより、全バラック民の避難誘導を開始する。各員最大限の敬意を払い、迅速に行動せよ！ 一人たりとも置いていくな！ 総員かれ！」

「了解！」

その号令で全員が動き出す。それを見送つてから航暉は目の前の老人と改めて目を合せる。

「あなたの判断に敬意を表します」

「ふん。かわいらしい女の子に泣かれては男が廃る、それだけだ」

長老は航暉の横に立つ電に目を向けてから航暉に戻した。

「優しいいい目をしておる……、感情を持ついい目だ。大切にしてくれ」

「言われなくとも、私の自慢の部下ですから」

「すまんな、もう一度名前を覚えてもらえるか？」

「国連海軍大佐、月刀航暉です」

「月刀大佐、これも何かの縁だろう。一つだけ忠告しておこう」

「なんですか？」

長老は笑った。目だけは冷えた笑みだった。

「D I Hには近づくな。いくら月一族のバックがあっても、パンドラに触れれば脳を焼かれるぞ」

長老はそういつて車いすを自力で押していく。

「……あなた、何者ですか？」

「なに、ただのバラック街の年寄りさ」

すれ違いざまに長老は獰猛な笑みを一瞬浮かべた。

「渤海^B対^I外^S偵^V察^R局の椅子にしがみついているしかできなかつたしがな
い老兵さ」

「……」

「高峰中佐にもよろしく伝えておいてくれ。ものを頼むときは偽名なんて使うもんじやないときつくいておけよ。さすがに目に余る」

航暉は弾かれたように振り返る。電が怪訝な顔をした。

「あの、渤海対外偵察局って……？」

「……アジアで絶対的な強さを誇った諜報部隊だ。すべての情報は渤海に集まると言われたほどの情報収集能力と操作能力をもち、第三次世界大戦においてアジアで核が使用されなかったのは、最悪の事態を避けるように彼らが暗躍していたからと言われている。間違はなく世界トップクラスの諜報機関だよ」

航暉はその後ろ姿に敬礼を送ってから、笑いをかみ殺すように笑った。それを見て電は恐るおそる口を開く。

「……じゃあ、もしかして」

「ああ、おそらく渤海対外偵察局のトップ、元渤海陸軍上将劉華清^{リュウ・ファチン}だ。……こりやあ、出来レースに組み込まれたかな？」

航暉は引きつった笑いを浮かべながらバラックの方を振り返る。

「とりあえず、暴動なく収容が進みそうだな。避難誘導、急ぐぞ」

「はい、なのです！」

「……やっぱりおかしい」

杉田は紙のデータをぱらぱらと捲りながら唸った。

「杉田、なにか見つけたか？」

テーブルの向かいに腰掛けた武蔵は眼鏡の奥の瞳を細めた。人気がない食堂の一角でカステラをつまみつつ2人は印刷資料を広げていた。

「やっぱり月刀と合田少佐の通信量が合わない」

「通信量？」

「ホールデンが傀儡を送り込んだとして、傀儡を送り込めるほどの膨大なデータを送った信号がない」

杉田はその紙を武蔵の方に回した。こっちの PROJ やないから確かなことは言えんが、と前置きしたうえで杉田は口を開く。

「航暉に銀弓作戦へ参戦が確定してからの電脳通信のログだ。右端の積算棒グラフはその内訳のパーセンテージだ。傀儡のようなスクリ

プトを紛れ込ませることができるとバッファ込みの通信量は全体の10.4%、容量として50GB程度だ」

「……この容量じゃ収まらないのか？」

「収まらないことはない。だが、義体制御プログラムやクラッキングツールや月刀自身の攻勢防壁の突破プログラムなども含めて転送し、月刀の体を操るにはまるで足りない」

眼鏡を押し上げて紙を眺める武蔵はそのまま口を開く。

「この情報が改ざんされている可能性は？」

「もちろんあるが、このデータベースの防壁が攻撃を受けた痕跡がない。外部アクセスについてはゼロ、通信自体が存在しないんじゃない。枝もへったくれもねえな」

「つまり、月刀大佐や合田少佐は傀儡の侵入を受けていない？」

「データだけをみるとそうなる。ただし戦術ネットへの不正規アクセスがあった時、おれが最初に撃たれたときだな、合田少佐の電腦の傀儡が活性化している。なんらかの方法で対外アクセスの制限や攻勢防壁をすり抜けて二人にアクセスしたんだ」

「そんなことができるのか？ アクセスした痕跡も、防壁破りの痕跡を残さず電腦にアクセスする方法なんて」

「あつたら魔法か毒電波か？」

杉田はそう笑って武蔵から紙を取り返す。

「ネットを介さずに電腦にアクセスできる方法なんて……ある、わけが……」

「……どうした？」

杉田の顔が凍り付く。目を見開いたまま一点を見つめ杉田は固まった。

「おい、おい杉田！ どうした!?!」

「……ある。ひとつだけ、例外がある」

「なんだと？」

杉田はいきなり立ち上がり近場のQRSジャックに首の後ろから引き出したコードを叩き込んだ。アクセスするのは硫黄島基地の監視カメラの映像記録。

「……、見つけたぞ『ホールデン』」
「なに?」

QRSプラグを引き抜くと速足でそこを離れ部屋に戻る。

相変わらず汚い部屋に電気が灯る。鍵付きの引き出しを開けると拳銃とマガジンを取り上げる。

「どうする気だ?」

「武蔵、悪い。艦娘続けたいなら知り合いの艦娘のところに避難してろ」

「なにを始める気だ?」

「ん? 軍への反逆。急がないと月刀も高峰も危ねえ」

そう言っつて、杉田は拳銃にマガジンを叩き込んだ。サプレッサーも取り出し、マズルに取り付けていく。

「そんな物騒なものが必要なのか?」

「話し合いで解決できれば越したことはないが、今回ばかりは分かり合える気がしねえ」

「シーザーを理解するためにシーザーになる必要はないらしいぞ」

武蔵はそう言っつて冷や汗を流しつつ笑った。

「悪党と話し合うのに悪党になる必要はないが、武器は必要だろうか?」

予備のマガジンをチーフポケットに突っ込んで、ジャケットの下に拳銃を隠すようにした。

「おい、一番の武器を忘れてないか?」

「なんだ?」

武蔵は部屋のドアをふさぐように立っつて笑った。

「どこに殴り込みをかけるか知らないが、射程は広いほうがいいだろう? 射程41キロの最終兵器があるのに置いていく気か?」

「……馬鹿野郎」

「正確に女郎だろうか?」

そう言うと素早く拳銃を引き抜いた杉田は引き金を引く。ガスンという抑制された発砲音が武蔵の耳のすぐ隣に穴をあけた。

「早死にするぜ？ 武蔵」

「あんたには言われたくないよ、勝也」

「はん、名前呼びか？」

「失敗すれば軍籍抹消ものだろう？ たまには女の私も見てくれよ」

「勝手に言ってる」

改めて拳銃をジャケットに隠した杉田が部屋を出る。その後ろを武蔵がついていく。

「急ぐぞ、高峰たちがあぶねえ」

暗くひび割れたコンクリートを蹴って高峰は進む。暗く冷えた地下通路は結露に覆われ、歩きたびにパシヤパシヤと足音が響く。

拳銃はすぐに撃てるように肩の高さに構えたままだ。曲がりくねった廊下で方向感覚が狂っていく。道がわかるように所々マーキングはしてあるが、今どこに向かっているのかわからなくなりそうだ。

（山の中腹の地下通路……砂利交じりのコンクリートってことはかなり古いな、第二次世界大戦の時のものか？）

大きく回り込むように角を周り、拳銃で警戒しつつクリアリング。先に進んでは警戒してを繰り返す。

そのうちにあかりが見えてきた。青白いあかり、LEDだ。（扉が開けてある、罨のつもりか？）

高峰はゆっくりと足音を消して進む、扉の影で息を殺した。

(電子機器の作動音……誰かいるな)

一度ゆっくりと息を吸い、二割ほど吐きだして息を止めた。

(虎穴に入らずんば虎子を得ず……か)

壁を蹴るようにして一機に部屋の前に躍り出る。

「動くな！」

高峰は部屋の真ん中でこちらを見て笑う男に狙いを付ける。

「君なら気がついてくれると思っていたよ、国連海軍極東方面隊司令部隷下特設調査部第六課所属、高峰春斗中佐。いや——」

赤いハンチングを後ろ向きに被って笑う糸目の男性。真っ白な壁に照らされたまま高峰を見て笑みを深めた。

「日本国外務省条約審議部の高峰春斗審議官と呼ぶべきかな？」

“彼”は高峰の構える銃口を歓迎するかのように両手を広げて笑っていた。

《こちら暁、司令官聞こえてる?》

「こちら月刀、クリア&ラウド」

浜辺で第二陣のLCCACが到着したのを確認しながら無線を開く。

《今初春が子日を曳航してあきつ丸につくところよ。今のところはクリア》

「戦闘は?」

《報告した通りよ、潜水艦が最低1、駆逐口級2隻と交戦したわ。駆逐の方は島風が落とし切った。対潜のほうは中破ぐらいまでいけたと思うけど、圧潰音は確認できなかつたし取り逃がしちゃったみたい。ごめん》

「各艦損傷は?」

《子日が大破一步手前の中破、あとは全員無傷よ》

交戦場所と各艦のルートが記録されたデータが送信されてくる、この位置からして敵は東側、南北アメリカ方面隊の管轄地域からやってきたらしい

「睦月を連れてこれなかったのが悔やまれるな」

《そうね……。睦月がいればここで潜水艦も沈められたし、対魚雷防衛戦もうまいもんね》

「まあ、アツツ島奪還部隊の方に必要なのもわかるからな、そっちはそっちでうまくいくことを願おう。——子日をあきつ丸乗員

に引き渡した後、島風はキスカ港防衛の応援に、暁と初春は青葉と一緒に揚陸艦の護衛に入れ」

《わかったわ》

《じゃあ、走って港に行くね!》

《こちら初春じゃ、助けに来てくれて助かった》

「札をいうのはまだ早い。潜水艦を落とし切れていない以上、こつちの様子は深海棲艦に知られていると思うべきだ。撤退戦での戦闘も

考えられる、哨戒直後で疲れていると思うが頼むぞ」

《わかっておる。まかせてくりやれ?》

やたらと古風にそう言われて航暉はそれに返事を返して無線を切る。

いまのところは避難も順調、数人が国連隊員に殴り掛かろうとした事態も発生したが双方軽傷で済んでいる。

「あとどれくらいかかるんでしょう?」

「あと一往復で終わればベストだな。港の方は民間系の人員の回収を終了、あとは軍人の乗り込みだけだからすぐ終わる。こっちはあと1時間で完了させたいところだ」

隣に立つのはL C A C第二陣の誘導を終えた阿武隈だ。ランプが下ろされると難民キャンプの人たちを詰め込んでいく。

「でも、今回の撤退戦もここまでは順調ですね」

「お約束の魚雷もやったしな」

「あー言わないでくださいっ!」

航暉は口角を持ち上げて笑うが目まぐるしく周囲を見回す瞳は笑っていないかった。

「……月刀司令、どうかしたんですか?」

「いや、……何でもない」

そう言う航暉だが、阿武隈は彼の手が一点保持式スリングに吊られたライフルに伸びていたのを見逃さなかった。

「避難漏れの人がいないかの確認に入る、阿武隈はここで待機、第二陣の出発準備が整ったらあきつ丸まで護衛しろ」

「はいっ」

航暉はそう言ってゆっくりと海岸線を離れていく。濃くなっている霧の中、航暉は速足へとテンポを変え、すぐに走り出した。

(高峰の姿がどこにもない。俺たちが上陸した時点で合流、撤収のはずだ。どこだ、どこにいる?)

直後に響くくぐもった音に航暉はライフルを手を取った。

「……だれだ、サプレッサー付きの銃を撃った奴」

この霧でかつ高音域をカットされどこから聞こえたかわかりにく

い状況での銃声である。

(……ヤバいな)

国連軍、特に海軍は対人戦闘の訓練を積むことはあまり重視されていない。したがって、国連軍になってから軍に志願したような若い兵は人間を相手どっての戦い方など知らない。その状況でこの低視界の中で“誰かがどこかに向けて銃を撃った”。それは普段とは別の意味を持つ。

その直後、タタン、タタン、タタンとハイテンポの三点バーストの音が響いた。サプレッサーなしの音——おそらく国連海軍用の個人防衛火器AR—57の発砲音だ。

「撃つな撃つな撃つな！」

無線に叫んでもそれに誰かが応射した。

「国連軍各員撃ち方やめっ！」

航暉もそういいつつ地面に伏せた。いつ流れ弾が飛んでくるかわからないのだ。キンキンに冷えた土に頬を押し付けつつあたりを確認する。不気味なくらいに一気に銃声が止む。

「なにがあつた!？」

《宮原曹長被弾！ ポイントW—03付近!》

「長淵・長谷バディは宮原・牧下バディの撤退をサポートしろ。霧の中で撃つてもまず当たらん！ 相手も同じはずだ。静かにかつ急げよ」
航暉はそういういつつ低い姿勢を維持したまま歩を進める。

《電、緊急なのです!》

きたか、と航暉は唇を噛んだ。

《L C A C 近くでパニック発生なのです。皆がいきなり——
きやあつ!》

霧や夜、見通しの利かない場所での発砲音。

それは人間の恐怖をおおるには十分だった。それも撃ちあつていくように二種類の銃声が響いてしまったら、死の恐怖を植え付けるには十分だ。それにここは“人間同士の戦争で生じた難民を收容するキャンプ”だ。その時の記憶を呼び覚ましてしまうかもしれない。

航暉が引き返すように戻ろうとした直後、もう一つの無線が入っ

た。

《司令官っ！》

阿武隈の悲鳴じみた叫びだった。

「どうした？」

《合田司令官が今、バラックの方に……！》

「合田少佐が？」

何とも最悪なタイミングで見つかったものだ。

《月刀司令、すいません！ 合田司令官を連れ戻してきます！》

「さて阿武隈、おい！ 一人で突っ込むな……くそっ」

一方的に切れた無線に思いつきり眉をしかめながら航暉は一瞬迷ったように立ち止まる。

「……無茶だけはするなよ、阿武隈」

航暉はL C A Cの方にむけ全力で駆けだしていく。

「こうも堂々と外務省セ条約審議部ターが紛れ込んでるとは僕も驚いた。外務省所属でありながら防衛省や経産省ともつながりが深い防カウ諜ンター 専門チーム、その最年少隊員として取り込まれた君は結構有名だ。君はもつと自分の知名度を理解しておくべきだ、高峰審議官」

真っ白な部屋の中にたたずむ男はそう言った。 “彼” は部屋の真ん中に置かれた椅子の背に寄り掛かるようにして高峰を見つめていた。

「まあいい、君と少し話がしたかったんだ。……世界を守る国連海軍

で日本の利益を守るのはどんな気分だい？」

「……何が言いたい？」

高峰は予断なく銃を構えたまま先を促す。メタリックシルバーの眼鏡のリムが僅かに光る。それを見ながら「彼」は歌うように続ける。

「君は極東方面隊の上層部が未だにほぼ日本人で占められている理由を考えたことがあるだろうか？　なにせ君はそのために派遣されたんだから」

「彼」が指を鳴らすとホログラムが部屋の中央に浮かぶ。

「理由は単純だ、国連海軍が保有する技術を日本国が独占するため。極東方面隊所属の艦娘が日本の船ばかりなものも、その言語フォーマットが日本語なものも、艦装製造元が日本自衛軍御用達の国内兵器カルテルグループに限られているのも艦娘のシステムが他国に渡ることを恐れているからだ。それ以外の意見は日本政府派閥が全てなかったことにした」

「彼」の隣に浮かぶホログラムは司令部レベルごとの出身国別の人員リストだ。司令部レベルが上がるにしたがって日本人以外の名前が減っている。

「こんなことができたのも、国連海軍設立時に日本が安定した経済基盤を維持し、国連海軍設立予算の6割を負担した。そして技術の粋を集めて「開発」した水上用自立駆動兵装を独占した。————日本

本の利益を守るために」

皮肉な笑みを浮かべて、「彼」は糸目をさらに細めた。

「君も自覚してるんだろう？　日本の利益のために正しい意見を封殺してるって、その片棒を担いでいる自覚があるはずだ。無かったらただの馬鹿か、嘘つきだ」

もう一つのホログラムが現れる。

「君の仕事は軍人の横領や技術の民間人への流出を防ぐこと。それは日本人以外への機密情報流出を防ぐことだ。そのために君は日本政府から派遣され、それを国連海軍は黙認した。それができるポストも融通された。君が検挙した人物もこの通り……人員構成の割に日本

人以外の検挙数が多いのはなぜだ？」

“彼”はホログラムを消すと改めて高峰君、と呼びかけた。

「君はそれに命を賭ける価値があるのかい？ この国の安泰だけを考えて戦うことで正義を騙るような軍隊に君は何を見出す？」

それを聞いて高峰は鼻で笑った。

「正義かどうかは関係ないさ。戦う理由なんて後付けで何とかできてしまうものだからな。それを正しい正しくないと言っていたってそれこそ後の火種になる。俺のこの行為がどういう結果をもたらすかわからない訳ではないよ。でも“現状稼働しているこのシステムを組み直す間の空白期間はいったい誰が人間を守るんだ？”。もう水上用自立駆動兵装を主軸に据えた対深海棲艦戦略は止められない。ポスト艦娘システムが誕生するか、深海棲艦が根絶できるまでは止めるわけにはいかないんだよ」

高峰はそう言うへとへらっと笑った。

「俺がどうだったかを決めるのはこれが歴史になってから、後世の人たちが決めるだろう。その時世紀の大悪党だと罵られるなら甘んじて受けよう。だがね、それを神様気取りの男がその場で叩き潰して自己満足を得て終わるのは我慢ならないね」

それを聞いて男がくつくつと笑う。

「僕に説教をたれるか、面白いね。」

「――遊んでいる暇もないんだ。そろそろ本題に入ろうぜ、ホールデン」

ノックもなしに勢いよく開けられたドアの中にいた男が顔を上げる。そこには杉田中佐と彼の担当艦の武蔵が立っていた。

「どうしたね」

横で補佐をしていた古鷹が咎めるような目で杉田を睨む。杉田はそれには答えずに速足でデスクに近づきつつ懐に手をつ突っ込んだ。それを引き出してデスクに腰掛けた男に突き付ける。

とっさにFN Five-sevsNを引き出し杉田につき付けようとした古鷹はそれより先に向けられた銃口に矛先を変える。同じFN Five-sevsNの銃口が古鷹の左目を捉えるように向けられる。古鷹はそれに一瞬遅れてその銃の持ち主の頭に狙いをつけた。

「すまんね、古鷹、こいつを撃たせるわけにはいかんのだ」

「——杉田中佐、どういうつもりですか？」

目の前の武蔵を睨みつつ古鷹は低く問いかけた。それを無視するように杉田は表面だけの笑顔を浮かべた。

「……どういう要件かわかってるだろう、中路中将。いつからあなたはアナーキストに鞍替えした」

銃口をびたりと眉間につき付けられていても中路は涼しい顔だ。

「さあ、いつだったか。人の心は簡単に移ろいゆくものだ」

「月刀も合田もハッキングなんて受けていなかった」

その答えに取りあわずに杉田は真顔でそう言った。

「傀儡なんて仕込まれていないし、彼らの電腦を追っていても『ホールデン』なんて出てこない。理由は単純だ。彼らの操作は『ホールデン』によるものじゃないからだ」

「……その根拠を聞こう」

中路は銃口をつき付けられたまま顔の前で手を組んだ。全員が動くことができない状況の中で杉田だけが発言の権利を有する。

「硫黄島の電子戦防衛システムに引っかからず、軍用回線経由で傀儡をコントロールするにはかなりの情報量がある。常に膨大なデータを捌かなければならない。それだけのトラフィックを軍の防壁に気付かれずに行うことなどほぼ不可能だ。かつそれを二人同時に捌く

なんてジャグリングはそうそうできるものじゃない」

横須賀の冬の日差しがぼんやりと部屋を照らす。逆光でわずかに影の多い中路の顔は静かに杉田を眺めていた。

「だが、もしそれを『合田や月刀が自分の意思だと思い込んで』行動していたとしたら？ 実行犯の意思を被害者の電腦に上書きしたとしたら？」

杉田はそう言うと言つて銃の安全装置を外した。それを見た古鷹が動くうとするが武蔵がそれを抑え込む。

「電腦への侵入・記憶の偽造・洗脳を同時に行い、プログラム終了後に自動消滅するスタックスネット型電腦ウイルスプログラム、それが『ホールデン』の正体。そしてそれを持っているのはあんた、違うか？」

「何を言っているんですか!? 中路さんは——!」

「スタックスネット型の特徴はネット環境を介さなくとも感染させることが可能であり、スタンドアロン型の機材にも破壊的な電子戦を仕掛けることが可能な点にある。時限爆弾式に行動を起こさせることも可能だ」

古鷹が抗議するように声を荒げたが問答無用で杉田が押し切った。

「……続けたまえ」

「戦術リンクにクラッキングの形跡は一度だけ、たった数バイトの意味不明なシグナルのみ。それは合田正一郎の電腦に仕込んだ傀儡の起動プログラムだと考えられていた。だがそうじゃない、あの信号自体には何の意味もなかったんだ。ただ外部から傀儡が侵入しホールデンが合田を乗っ取ったというブラフのためだけに発せられた囷の信号だ」

侮蔑すら混じった視線を中路に向け杉田は笑う。

「じゃあ、いつ月刀と合田がそのウイルスに感染したのか？ 分散して少しずつ送り込んだのか、違う。戦術リンクの通信量を改ざんしたのか、違う」

拳銃を中路の眉間に押し付けた。

「硫黄島基地のロビー、あんたが作戦データを渡すためにわざわざ使った電腦直結式の外部記憶装置インフォメーション・キューブ、あれにウイルスを仕込んでおけば戦術リンクを網渡りなんてしなくて済む」

中路は表情を崩さなかった。

「監視カメラのデータは残ってたよ。俺らは先に到着してたから現地のコンピュータ経由で受け取っている。戦術ネット経由で受け取れる資料をわざわざ外部媒体を経由して渡す理由は何だ？」

杉田の疑問に中路は答えない。

「プログラム自体は自己消滅している、痕跡は残ってないんだろう？」

それでも月刀の記憶手術を実行したのはインフォメーションキューブの通信記録の抹消と俺が月刀の態度が厳しいと気がついてから、あんたの電腦から飛ばされた追加のウィルスパッチの痕跡削除ってところか？」

「……それで、杉田君は私になにを求める」

「は！ 否定すらないか」

古鷹は目を見開いた。杉田はそれを見て笑った。

「否定したら君は私を信じるかい？」

反語だ。

「質問は二つあるが、今はこれだけ答えてくれれば十分だ。てめえ、月刀たちをどうする気だ？」

銃を突きつけたまま杉田は顔を近づけた。

「杉田君、我々の後ろには何がある？」

「あ？」

「40億を超える人員、ズタボロになったインフラ、疲弊しきった農作地に終わらない戦争……。これらは全て深海棲艦によって引き起こされている」

ぽつりぽつりと語られる言葉を杉田は待った。

「私はね、杉田君。君が生まれる前から日本国自衛海軍の船乗りだった。ミサイル艇から始まり、いくつもの役職をやった。第三次世界大戦の間はミサイル護衛艦“ゆうぎり”の艦長だった。そこで生き

残ったところにはもう人虎などと呼ばれていたな。そのあと深海棲艦がやってきてからも、国連海軍に艦丸々所属が切り替わってからも最低限のシーレーン防衛のために戦ってきた」

その瞳は杉田を捉えていない、どこか遠くに据えられていた。

「何人も何人も見殺しにした。『あさぎり』を見捨て、『はしだて』を処分し、最後は乗艦の『ゆうぎり』すら見捨てた。ゆうぎり航海長の吾妻三佐は家族持ちで、娘の自慢をよく聞かされた、長坂一尉はひょうきんなムードメーカーだった。副長の九鬼二佐は厳格な人でなあ、歩く規則とか言われていた。——全員私が見捨てた。生きて帰せたかもしれない人を見捨て、おめおめと艦の長が生きて帰った」

力なく笑って中路は初めて視線を落とした。

「深海棲艦出現後、私の部下だった船員は全員で568人、うち死亡及び行方不明375人。自らの可愛さに生き残った臆病者が彼らの墓前に何をささげればいい？ あなたたちの犠牲を糧に我々は平穩を取り戻した、深海棲艦を一掃したのだという勝利宣言以外に何を供えればいい？」

デスクの横に置かれた制帽を中路は引き寄せるとそのつばを撫ぜた。

「私はもう長くない、電腦の負担に耐えられず生身の脳が急激に衰えているそうさ。軍務につけるのはもってあと5年、このまま進めばあと3年だ。それを過ぎれば己が誰かすら忘れてホスピスの中で朽ちていくだけの老人に成り下がる……なりふり構っておれなくなった」
そう言って中路は笑う。

「艦娘の技術を日本や帝政アメリカなどの数国だけが独占する今の状況では戦力が足りない。総力戦とはいいいながら各国間のパワーゲームを続けていけば当然だな。戦力を拡充し深海棲艦を押し返すためには、今のままでは勝てんのだ」

そういって、一言二言、告げる。

「……………」

.....」

「てめえ！」

それが言い切られる前に杉田が左手一本で中路をつるし上げる。踵が完全に浮くほどの力でネクタイを掴み、怒鳴りつける。

「いくらなんでも冗談が過ぎるぜ中将！ アイツらが一体何をした!? 世界を信じ、守れると信じて戦ってきてんだろうが！ それをてめえが押し付けてきたんだろうが！ それをてめえの都合で切り捨てるだあ!?! 寝言は寝て言え！ アイツらを信じて戦っている電嬢たちを、俺たちの代わりに体を張ってる艦娘たちを侮辱するのもいい加減にしろ糞野郎！」

ネクタイを放すと中路は足元に崩れ落ちる。咳き込む中路を見下しながら杉田は吐き捨てる。

「てめえの思い通りにはさせねえ、5期の黒烏を舐めるなよ」

拳銃を右手に提げたまま杉田は振り返ることなく部屋を出ていった。

響は慌てて陸に上がる。思い臆装を背負った体では足を取られそうになるがそれでも全力でなだらかに傾斜した砂浜を駆け上がる。横には雷もついてくる。

「まったく、どうなってるのよ!」

「わかんないね。とりあえず、危ないってのは確かみたいだ」

響は雷にハンドサインを送る。二手に分かれて回り込もう。

雷はそれを見て頷くと、走る方向を変える。今上陸したままになっているL C A Cを挟み込むように抜けて、今騒ぎが起きている広場に回り込む。

「落ち着いてください! 落ちつ——つ!」

電の声が途絶える。L C A Cのランディングゾーンに飛び込むと難民キャンプの住人達が国連兵士に向けて鉄パイプを振り下ろしたり、何かを投げつけたりしていた。電は国連兵の塊と難民キャンプの人たちの塊のちょうど中間ぐらいの位置でうずくまっている。

「電?!」

「お前らが来たからこんなことになったんだっ!」

誰かが叫んで電を蹴り上げる。半ば狂気をはらんだ声がこだまし、共鳴し、ひとつの波になっていく。

「ここはいい場所だった。銃声なんて響かないいい村だったんだ!」

響は蹴り上げられて咳き込んでいる電のところを駆け寄ろうとした。その直後自分の目の前に鉄パイプが繰り出される。とっさにバックステップ、両腕を顔の前に出して顔面を守りつつ姿勢を低く。鉄パイプは響の帽子を掠めるようにして後ろに振りぬかれた。

「それがお前らが来て一時間も経たないうちにこれだっ! 市民を守るとかどのツラさげて言う気だお前らっ!」

電の胸に男のつま先がけり込まれたらしい。電の体が激しく上下する。響はとっさに叫ぶ

「やめてくれ！ その子を蹴るなっ！」

「こんなにしても血の一つも流さない相手に手加減なんてできるわけがないよなあ？」

国連の警邏隊が楯を構えながら前進する。そこに向けて今度は火炎瓶が投げられた。隙間なく盾を並べた向こう側に火炎瓶は消え、直後に盾の陣形は崩れる。数人がアルコールを被ったのか、燃えようとする服を砂浜に押し付けて消火を急ぐ。その間にも一つ、二つと火炎瓶が宙を舞う。

「ほら、だれもお前を本気で助けようとしてないみたいだぜ。お前が命がけで飛び込んだのに、だれも前に出てきてくれない」

電の髪を乱暴につかみ無理やり上を向かせた男はその顔を見て笑った。響は艦装につけられた盾を回しロックを解除、飛び出してくるスタン警棒を振りぬいた。当てることは叶わなかったがそれで鉄パイプを持った男はそのリーチ分下がらなければいけない。その隙に響は前進する。

「自分のことしか考えてない人たちに使われている気持ちはどうだ？

え、嬢ちゃん？」

「……………使われているんじゃないのです」

その姿勢のまま電はそう言った。呼吸器を集中的に蹴られたせいで、発声は安定しない。かすれたような声でさういう。

「私たちは兵器かもしれない、それでも誰かに言われたから戦っているわけではないのです。守りたい、自分の力で誰かを守れたらって、そう思いながら戦っているのです」

苦しそうに胸を抑えていた手を男の腕に添える。髪を乱暴につかんだままのその男の腕に添える。

「……………深海棲艦を殺せる化け物が人間のマネをしてると笑いますか？

ただの兵器だと蔑みますか？ いなづまはそれでもいいのです。それであなたたちが救えるなら、それでも、いいのです」

電の手に力が入る。その直後に男が呻いた。

艦娘は少女の外見をしているがその体は極限まで強化された作り物だ。

艦装につけられた水素エンジンによる発電があればナノマテリアによる対貫通防護膜と強化骨格によって砲弾を喰らってもある程度は耐えられるし、自分よりも重い艦装を背負って駆け回れる人工筋肉をフルスペックで活用することもできる。

そんな艦娘がもし加減をせずに生身の体を掴んだら。

「あ、ああああああっ！」

痛みに男は電の髪を手放す。同時に電も力を抜いた。血の代わりに涙で顔を汚した電はゆっくりと上体を起こす。

「あなたがどんなつらい思いをしているか電は知りません。国連軍にどんな考えを持っているかもわかりません。でも、ここでこうやって戦うことがあなたにとって本当に最善なのですかっ!？」

電の声を聴きながら響はスタン警棒を袈裟に振りぬいた。それを受け止めようとした鉄パイプに触れ、相手の男はけいれんを起こして膝をつく。

「——電っ！」

「わたしは、いなづまはそうじゃないと思うのです。戦わなければいけないのは、本当に戦わなきゃいけないのは、誰ですか？」

電は立ち上がる。武器のない両手を横に広げとおせんぼをするように広げる。

「それがわたしだというならば、殴るなり蹴るなりしてください」

電はその姿勢のまま一步前へ、それに気圧されるように男は一步下がる。

「そうでないなら、攻撃をやめてほしいのです。ここでこうしている間にも深海棲艦が来てしまうかもしれない。そうになったら、あなたが守りたいものも消えてなくなってしまうかもしれないのです。それは避けるべきではありませんか？」

「お……お前らになにがわかる!？」

男は叫んだ。

「守りたいものなんてとっくになくなった! お前ら戦勝国が土地も仲間もお金も全部むしり取っていったんだろうが! それでこのうとうと俺らを守るとか言ってるやつに、お前らみたいに戦場に出てもま

ともでいられる狂ったやつに何がわかるんだあつ！」

殴り掛かろうとしたところにもう一つ小さな影が飛び込んだ。その影は相手の腕をからめとると、そのままコンパクトに体を回し、相手を砂の地面に叩きつける。

「確かに私たちは狂ってるかもしれない。でも、それは貴方の暴力を正当化していいものじゃないと思うわ」

相手の腕をとったまま、雷は泣きそうな顔でそう言った。

「電、ごめん。あたしは電みたいに優しくはなれそうにないわ」

わずかに顔を向けて雷は妹に微笑みかけた。そして顔をすぐに引き締める。

「ごめんなさいね、お兄さん。あたしは電の……あなたが殴ったりけつたりした子ね、電のお姉さんなのよ。妹を殴られるところを見て何も感じないほど化け物でもないわ」

そう言うとき雷は彼の首の後ろに電脳錠をあてがった。彼の動きが止まる。それから雷は声を張り上げる。

「他にどうしても戦いたい人はいるかしら！」

雷は俯いたまま盾に固定されたスタン警棒のロックを解除する。それを手に取り、袈裟に振りぬいて中段に構えた時には警棒が展張されていた。

「いるなら前に出なさい、私が相手になるわ。他の人は避難を続けてください。キスカ島の60キロ沖合で深海棲艦が確認されています。もういつ深海棲艦が来てもおかしくないの。死にたくなければ、誰かを泣かせたくなければ戦うのをやめて避難してください」

その宣言に双方がざわついた。

「何をするきだい？ 雷」

横に並んだのはなんとか追いついた響だった。姉二人で電を守ろうとするような位置取りだ。

「言った通りよ。どうしてもわたしたちを許せないって人だけを残して他の人を先に船に乗せる」

「そんなでたらめな。全員動かなかつたらどうする気だい？」

「私はそれでも信じるわ」

ゆっくりと人ごみは後退していく。戦う意思はないというかのようだった。

「まったく、電も策士よね？」

「ああ、自分の外見つてのを利用してうまくやってる」

「……ふえ？」

雷と響はそう笑うと要領を得ていない電の方を見た。

世論や感情というのは金属のようなものだ。熱しやすく冷めやすい。今回だつて銃声によって引き起こされた恐怖が国連軍への攻撃という形で吐きだされた形だ。それを電は国連軍を守る形で攻撃を受けることによつて、民衆が少女に対して暴力をふるうという構図にすり替えた。涙を流す少女に対して暴力をふるうというのは普通の神経ならばそうできることではない。それは「悪役」のすることだからだ。

そこで一気に熱を冷ましてしまった。そうなればこの暴動騒ぎもこれ以上加熱することはないだろう。

「——何やってる、やつちま」

「そこまでだ」

民衆の中で声があがるが、その前に止められた。そのあたりが一瞬で人が引ける。

「……司令官さん？」

「サブレッサー付きの銃とは物騒なものを持つてるな。最近撃つたみたいだが、何に使ったかおしえて頂けますか？」

その男の右手を押さえ、銃をひねりとつた航暉がマガジンを引き出してそう笑う。

「……」

「お答えいただけませんか？」

「……クソツタレ」

「クソツタレで結構。別に正義のヒーローになり来たわけではないのでね。……国連軍への発砲の疑い、及び暴力の扇動行為を働いた疑いにより拘束します」

航暉がそうしている間にも避難民のLCCAへの誘導が再開され

る。そこに担架に乗せられた国連警邏隊の隊員も混じった。

「電、雷、響。大丈夫か？」

「大丈夫なのです」

「電が大丈夫なら全員大丈夫よ」

雷はそう言つて軽くウインクした。その頭を航暉は軽くはたいた。流れ作業で電にも軽く。

「なによ、雷たち頑張ったじゃない！」

「無茶すぎだ馬鹿野郎。後ろだと火炎瓶だけじゃなくて爆薬も用意してやがったんだ。あのままやつてたらお前ら爆薬で吹き飛ばされてたかもしれないんだ」

「え……」

あとで警邏隊の人にお礼言つとけよ。といつてから、二人の頭をなでた。

「まあ、無事だったことに免じて今回は不問に処すが次はないぞ。

……響もだ」

「私になにかしたかな」

「三人とも海上警戒はどうしたんだ？　いま海側がから空きだ。全員で陸に回ってたら深海棲艦対策はどうなる？」

「ああ、そういうことか……」

「少しは仲間を信じな、響」

「そう……だね、うん。気を付けるよ」

響の頭を一撫でしてから航暉は改めて表情を引き締めた。

「避難民の誘導を最優先、あともう一往復しなきゃいけないとなるとかなりきついぞ。負担をかけるが、頼む」

「了解」

「それぐらいなら楽勝よ」

「がんばるのですっ」

三者三様答えを聞いてから航暉は改めて陸に目を向ける。

「おれは……阿武隈を連れ戻してくる」

「大丈夫ですか？」

「さあな、でも連れて帰ってくるぞ」

航暉は改めて霧の中へと駆けていく。それをみて雷は笑った。

「まったく、もつと私たちを頼ってくれてもいいのに……さ、私たちを信じて置いていつてくれたんでしようし、頑張りますか」

「なのですー！」

「――遊んでいる暇もないんだ。そろそろ本題に入ろうぜ、ホールデン。お前、何者だ？」

高峰はゆつくり一歩前に踏み込んだ。『彼』はオペラ役者のように堂々と両手を広げた。それに警戒するように拳銃を構え直す高峰。「モーセは神に言った。『私がイスラエルの人々の所へ行つて、彼らにへあなた方の先祖の神が、私をあなた方の所へ使わされました』と言う時、彼らがへその名はなんというのですか」と私に聞くなれば、なんと答えましょうか』

――出エジプト記、第3章第13節

「それを聞いて外部記憶装置を探るようじゃあ君もまだまだだね。これくらいは覚えておいた方がいいよ、高峰審議官。長きに渡り読み継がれ淘汰されることのなかったものには、必ずそこに価値がある。後世に残すにふさわしいものだけが残るんだ」

「お前の講義には興味ない。質問に答えてもらおうか」
「焦るな焦るな。それに神はなんと答えたかな？」

高峰は鼻で笑うように声を漏らした。だが顔は笑っていない。

「『我は我である』、お前は神にでもなったつもりか？」

「それほど豪胆ではないよ。ただ、己という存在を表現する方法がほ

かにないだけさ。君のいう何者かという問いは範囲が大雑把すぎる」
「なら言い直そうか、お前の姓名と所属する組織があるならその組織名を述べる」

高峰は苛立ちを隠そうともせずそう言った。相変わらず「彼」は余裕の笑みを崩していなかった。

「そうだねえ、それもまた難しい。君たちに関係ある名前でもいいなら……そうだね、合田直樹とでも名乗っておこうか」

「ほー、やっぱり死んでなかったか。合田中将」

「もう中将じゃないだろう。もう軍籍は抹消され、僕の死亡は受理されているはずだ」

「彼」はそこで笑う。

「もつとも、この記憶が『本当に僕の記憶なのか』すらもうわからな
いんだけどね。……僕の中には既にいろんな人の記憶が混在してい
てね、自分なんてどこにもないのさ。そう言う意味としては一種の超
越状態、神に近いと言ってもいいのかもしれないが」

「彼」はそう言うと言を鳴らした。

「さて、君の質問に答えた。あと君が聞きたいのは、ここは何なのかと
か、なぜこんなことをしたのか、かな？ それにはあいにくながら答
えられない。君は聞くべき人間じゃない。聞いたらまた君はインチ
キを擁護してしまうだろうからね」

「それはおまえが決めるのか？」

「主観というものを無くした僕なら君たちよりは客観的だ」

「そうかい、じゃあ、誰なら答えられる、ホールデン？ 答えられる人
のところまで連れて行ってやろう」

「それには及ばない、もう呼んである」

阿武隈がバラックの中を駆けていく。

「司令官！ 司令官待つてください！ 合田司令官っ！」

叫びながら、木の根に躓きそうになりながらも駆けていく。

「司令官、返事してください！」

「……きちやだめだ、阿武隈」

「司令官！ どこにいるの？」

どこか沈んだ声に阿武隈はあたりを見回す。霧であたりが見えないのがもどかしい。バラックの壁に反響してか、どこから声が響いているかもわからない。

「きちやだめなんだ。阿武隈」

「司令官、どうして！ 出てきてよ！ ねえ!？」

「これは僕の戦いなんだ。阿武隈は関係ないんだ。だから、来ちやだめだ」

「戦い？ 司令官の戦いってなんですか？」

少年の声がまるで亡霊のように響いてくる。空気中とはいえ環境音からわかるかもしれないとソナーをオン、耳を澄ますようにあたりに注意を向ける。

「父さんの敵を取るんだ」

息をのむ。その空気を感じ取ったのか少年の笑った気配がした。左手前方、近い。

「こんなことするのを阿武隈に見られたくないもん、だから見ないで来ないで」

「……なんで」

阿武隈は走ってそこまで向かう。小さな路地を曲がると足元で何かが光っていた。通信機の液晶と金属のプレート。

「ごめん、阿武隈。心配してくれてるのもわかってる。阿武隈ならそ

んなことしないでっていうのもわかってるよ。でも、僕は僕の父親を奪った人たちを許せない。だから、さよならだ」

無線機の声に阿武隈は涙する。足元のプレートを拾い上げる。冬服の名札と夏服用の少佐の階級章だった。

「合田正一郎は軍を脱走した。阿武隈特務官の上司だった合田少佐はそのときにいなくなった」

「そんな、私は認めません！　そう言う大事なことはちゃんと目を見ていってください！」

「目を見て言ったら僕がもたないよ。だからごめん。……阿武隈、ありがとうね」

「司令官、司令官！」

阿武隈は泣きながらも耳を澄ます。

足元に落ちてる通信機はワンウエイトーク用、ボタンを押している間だけ話せるタイプだ。それで阿武隈と会話が成立した。

すなわち、まだ阿武隈の声が届く範囲に司令官はいる。

どこだ、近くにいるはずだ。まだ追いつけるはずだ。

「司令官のバカ！　かってにさよならいって逃げないでよ！」

そう叫んで阿武隈は走り出す。ソナーの耳を頼りに霧の中を駆けていく。

択捉島、国連海軍極東方面隊クリリスク軍港。コンクリートの四角い無機質な建物が並んでいる。

睦月は荒れ気味の海を眺めていた。窓ガラスに移る顔は我ながら

浮かないものだと思う。

「……睦月、大丈夫？」

「にやつ？」

真横から人差し指で頬をつつかれ、肩をびくと跳ねあげる。

「や、弥生……？ 来てたの？」

「ノックしたけど返事がなかったから。……如月は？」

「たぶん艀装調整棟にいると思うけど、如月に用事？」

「ううん、用事はないんだけど、最近睦月や如月が元気ないから気になつて」

弥生はそう言うのと、窓の近くまで寄ってきた。

「そんなに落ち込んで見えた？」

「うん。基地に慣れてないからかなつて最初は思ったけど、違うんでしょ？」

水上用自立駆動兵装管理棟——睦月たちがんこの基地で寝泊まりしている部屋には簡単につくりのベットと机ぐらいしかない。それでもここに不満があるわけではない。二人一部屋で寂しくないし、部屋は快適に保たれている。

ここで睦月たちが待機しているのにもわけがある。

アツツ島の打撃部隊に対潜警戒要員として参加するためだ。キスカ島の作戦が終了し次第出撃命令が出るのだろう。そのための待機である。

「……そっか、ふふ。妹にまで心配かけちゃうようじゃお姉ちゃん失格かな」

「やつぱり月刀司令がいなくなったから？」

「……うん」

睦月は頷いた。弥生はベッドに腰掛けると睦月の方を見て少し首を傾げた。

「睦月は月刀司令のことが好きなの？」

「うん……って、にゃああああっ！ 違うっ！ そう言う意味じゃなくってっ」

さらっと言われたことにあまり考えずに返事をしたことを睦月は

すごく後悔した。顔が赤くなる。

「？」

それを訳が分かってない顔で弥生はその反応を眺めた。

「……月刀司令って睦月にとってどんな人？」

「うー、……提督は、優しくてちよつと変な司令官、かにやあ」

どこか顔を赤くしながら睦月は椅子の向きを変えた。弥生と向き合うようにして改めて腰掛ける。両手を行儀よく膝の上に乗せる。

「睦月型って、他のみんなと比べても弱いでしょ？ 特I型の吹雪ちゃんたちとくらべても、電ちゃんたちと比べても、島風ちゃんとかと比べても、火力はないし、装甲薄いしってずっと言われてきたじゃない」

「うん。いいのは……コストくらいって……言われたっけ」

弥生の言葉に睦月は頷いた。

「弥生はここに来る前、どんな司令部にいた？」

「私は……586でずっと商船警備だった」

「その時、なにか言われたりしたことあった？」

「ううん、……司令部の人とはあんまり話したこと、ない。コンテナ船とかの船長さんから、時々無線で話しかけてくれるぐらいだった」

睦月はそれを聞いてわずかに考え込むような表情をした。

「そっか、私は、さ。提督が私の上司になる前にね、敵を沈めて帰ってくるか、帰ってくるなって言われたこともあったんだ」

「え？」

「風見司令……今はもう死んでるんだけどね、その人。その人はすごく喧嘩っ早い人で怒りっぽい人だった。叩かれることなんてしょっちゅうだったし、私たちを完全な兵器として扱うし、完全な兵器であることを求める人だった。それが、少し嫌だったんだ」

睦月は椅子に深く腰掛けると足を軽く振った。

「おかしいよね。睦月たちは兵器なんだよ。水上用自立駆動兵装、かんむす”って書くときは娘むすめってつくけど、私たちにはお父さんやお母さんはいないし、ふつうの女の子は何十キロもある艦装背負って戦ったり、砲弾にあたって生きてることなんてないんだよ。だから

私は兵器だってわかってるし、それで平気じゃないとおかしいんだよ」

睦月はそう言ってふふつと笑った。

「だけどき、少し嫌だって思うことを提督は認めてくれたし、睦月たちをまるで人間のように扱ってくれる。睦月型は特型のみならず、比べても弱いつて言われるし、実際弱いし。それでも提督はそれでも睦月たちを大切にしてくれているのです。それを暖かいつて思うし、そうしてくれるのがうれしいんだにゃん」

そういつつてから少し視線を落とす睦月。

「だから、提督の力になりたいいつて思うんだけど……指揮系統が違うから話す機会も減つちやつたし、なんだか遠くなつちやつたし。ずつと一緒にいる電ちゃんたち見てるともやもやしたり……」

「嫉妬？」

「……弥生、結構さくつと気にしてること言うんだにゃー」

睦月は肩を落とす。

「電ちゃんたちはすごいもん。戦艦や空母を相手にしても結構互角の戦いしたりするんだもん。戦果じゃかなうことないんだなあつて思つちやう」

「でも、睦月は対潜トップクラスでしょ？」

「駆逐艦は対潜はできて当然だもん……あー、どうしたら提督は振り向いてくれますかねー」

大きく天井を仰いだところで、電腦通信が接続を求めてきた。視線を弥生の方に向けると、弥生も戸惑った顔を見せた。

「問答無用で回線が開かないつてことは、命令以外の通信だにゃあ……どれどれ、相手は……」

「――杉田中佐？」

睦月たちに送られた通信はテキストメッセージだった。

——月刀大佐に関わる緊急要件、協力求む。

「……このリンクを踏めつてことだね、弥生はどうする？」

「睦月は、行くの……？」

弥生がそう聞くと、睦月はタイムラグなしに頷いた。

「これが罠だとしても、提督が危険になったら行かない理由はないのです」

「……わかった、弥生もいく」

「そっか、じゃ、行くよ」

睦月はメッセージに添付されたアドレスを踏む。意識は吸い出されるようにネットへと繰り出し、ひとつのチャットルームに行き着いた。

アバターの再構成が行われ、それぞれの姿がチャットルームに投影される。睦月たちは制服姿で投影された。暖炉の火が一番明るい光源であるような薄暗いチャットルームだった。睦月たちは部屋の中央にある大きなローテーブルを囲むように置かれたソファの上に落とされた。上質なソファなのだろう、適度な柔らかさで睦月たちの体を押し返した。

（……むー、かなり凝ったつくりのチャットルームです）

壁沿いには猟銃や鹿の剥製が飾られ、狩猟小屋のようなイメージだ。暖炉の熱も再現されているところからみると、かなりお金をかけたチャットルームであることがわかる。

「……これで全員だな。あんな文章で呼び出してしまつて申し訳ないが、感謝する」

暖炉の火に照らされた男の姿が見えた。呼び出した張本人、杉田勝也中佐だ。

「……それで、作戦参加士官でもない杉田中佐が何の用だ？」

少々陰険な空気を出しながらそう言ったのは天龍だ。睦月が部屋

を見回すと、睦月たちのほかに天龍と龍田、如月に望月、大鳳、龍鳳、利根、筑摩の月刀大佐隷下の艦娘が揃っている。そのほかに一航戦と二航戦、511戦隊の長門と西部太平洋第一作戦群から参戦している金剛型4姉妹の姿も見える。

「結論から言おう。極東方面隊上層部は月刀大佐及びキスカ島撤退戦参加艦を見捨てる算段で作戦を進めている」

「……どういう意味ネー？」

眉を顰めたのは金剛だ。杉田が領いてテーブルを叩くと立体ホログラムがローテーブルいっぱい立ち上がる。

「君たちにこの情報がわたっているかどうかで話が決まると思う」

ホログラムには立体地図が投影され、アリュージョン列島近海が表示された。キスカ島近海には月刀大佐の指揮する揚陸艦隊群の予測位置が表示されており、アツツ島のあたりには北方棲姫のマークが付けられている。そのほかにも味方の早期警戒機の飛行パターンや旧来の護衛艦の位置情報などがマップに示されていた。

「君たちに知らされている情報はこれで全部か？」

「これでも多いくらいだが……」

長門がのぞき込んで答えた。長門は今回の作戦における総旗艦を務めることになっている。彼女が知らなければ他の艦にも知らされることはないだろう。

「そうか。なら上層部は“クロ”だ。……正しくはこうだ」

杉田がホロを切り替える。直後にキスカ島の近海にいくつものマークが現れる。

「な……」

「キスカ島周辺にもうアツツ島の主力が移動している。それを潜水艦隊で事前に把握していた。月刀大佐が作戦に参加する以前から知っていたんだ」

アツツ島に予測されていた戦力の七割がキスカ島へ向けて航行中となっている。もしキスカ島撤退作戦が滞りなく進んでいたとしたら、輸送船団と敵艦隊が接触するまで、あと8時間。

「だがもし35ノット以上で航行できる部隊、すなわち艦娘部隊だけ

なら、交戦せずに逃げ帰ることも可能だ」

「……杉田中佐は何が言いたいんだ？　うちの司令が避難民を乗せた船を見捨ててくると思ってるのか？」

そう聞くのは天龍だ。

「まさか、彼ならそんなことはしないさ。月刀大佐に指揮権があればな。……これがなければ、だが」

「……？」

杉田が改めてテーブルを叩く。周辺諸国の戦闘艦艇、つまり艦娘以外の戦闘艦の位置情報がオーバーレイされる。

「華僑民国の護衛艦隊が3日前から消息を絶っている」

「それがどうしたっていうんだ」

「中路中將から聞き出した。国連海軍極東方面隊と華僑民国が所属する東アジア軍事同盟との間に密約が存在する。深海棲艦よりも先に華僑民国海軍が月刀たちに接触して拿捕、艦娘と司令官を華僑民国に連れ去る。その後は『突如として現れた深海棲艦の大群から避難民を守ろうとしたものの全員戦死』と一言で処理する算段だ」

「……そ、そんな馬鹿なことが可能なのか？　というよりその密約とこのは何なんだ？」

面喰った顔でそう言うのは長門だ。杉田は俯いたまま声を絞り出した。

「水上用自立駆動兵装開発技術及びそのサンプルの輸出、国連海軍が独占している技術の一般軍事への転用への足掛かりとして、即時運用可能なユニットを一つ、華僑民国に譲渡する。その代償として国連海軍への資金援助の拡大と基地提供、そしてこの密約の存在が知れた場合には華僑民国側が泥をかぶることが条件つてところだろうな。――もしこれが成功すれば艦娘の増員が爆発的に行える。その輸出ユニットが」

「……今回のキスカ島撤退戦の参加メンバーってことか」

苦虫を噛み潰したような天龍の声を否定する声がどこからも出な

かった。

「ふつつつぎけんじやねえっ!」

ガンっ!とテーブルが揺れた。天龍が八つ当たりでテーブルを蹴りつけたのだ。それに睦月と弥生の肩が跳ねる。

「電たちが何をした!? 月刀司令が何をしたっていうんだ!」

「天龍ちゃん、杉田中佐に怒鳴ってもどうにもならないわよ」

龍田にそう言われ、渋々押し黙る天龍。だが黙ったことで逆に陰険な雰囲気になった。

「でも、私も天龍ちゃんと同意見かなあ。優秀な司令官と水雷戦隊のユニットを殺してまでやるメリットがあるのかしら? ばれたときのリスクの方が大きいと思うけれど」

「深海棲艦との戦いが膠着状態に入って人間側のインフラもある程度回復した。このまま技術革新が進めば、近いうちに深海棲艦を退けることが可能だろう。と背広組のお偉いさんは考えている。対深海棲艦戦争が終結したあとの戦後処理は、どうなると思う?」

「戦後処理なんて考えたことはねえよ。俺は深海棲艦と戦ってる記憶しかないからな、それが終わったらなんて考えたことないな」

天龍が半ばやけっぱちにそう言った。

「戦後処理で一番の問題はな、深海棲艦のせいで主権不在となった海岸地域、国連海軍が占有している港、深海棲艦によって国自体がなくなった海洋島嶼、これらをどこの国が手に入れるか、そのパワーゲームが展開されることだ。これはおそらく国連軍にどれだけ貢献したかでパワーゲームの優劣が左右される。それを承知で艦娘に関わるすべての技術やノウハウを数か国で握っていた。いわば寡占状態だ。日本国はその寡占を行っていた国の一つさ。だから西太平洋、東南アジア戦線に日本由来以外の艦娘は存在しないし、君たちが普段使う言語も日本語だ。それは日本以外の国の参入を避けるためにやっていたことだ。その構図自体が狂っていたのさ」

杉田は笑う。

「実際今の上層部はほぼ全員が日本人だ。それがアジアでの国連軍への風当たりの強さにつながっている。ウエーク島は全域が国連軍租

借地だから世間の風当たりは気にしなくていいかもしれないけどな」

杉田の言葉にくもりを見せるのは龍鳳だ。

「では……月刀司令はその体制を崩すために……?」

「だろうな。これで華僑民国が水上用自立駆動兵装を保有したとしたら国連海軍上層部は華僑民国を無視できなくなる。同じようにして国連海軍の上層部にいろんな国が参入していくことになるだろう。日本国にとっては痛い状況だがそのほか多数の国々にとってはこれ以上の福音はない。月刀大佐は避難民を守ろうとして散る悲劇の英雄として没し、華僑民国の軍人として国連軍に切り込みをかける民衆の英雄に祀り上げられることになるだろうな」

それを聞いた加賀は右手を軽く上げた。

「状況や背景はわかりました。ですがその通りに進む可能性はどれくらいでしょうか?」

「……霧島、お前は どう見る?」

杉田にそう言われ、霧島が立体地図をのぞき込んだ。

「……この配置が本当なら、不可能な話じゃありません。勿論国連海軍が華僑民国の動きを容認しているならという条件がつきませんが、ですが月刀司令がそれに素直に従うとは思えません」

「まあそうだろう。俺も月刀が避難民を見捨てて生き残れなんて命令を聞くとは思っていない。だがそこで戦闘を行いながら撤退戦を繰り広げられるだけの戦力はない。アウトレンジからのミサイル攻撃を受ければ揚陸艦のECMとCWISくらいしか護衛方法はない。相手を沈めてもいいならいくらでも対策を練ることはできるが、電嬢たちがいる状況で相手を沈めろと命令するとも思えない。そこで逃げ回っていたら深海棲艦の大艦隊とご対面になるのは間違いない。このままいけば死人が出るのはほぼ間違いないと言っているだろう」

そこで、だ。と杉田が本題を切り出した。

「この状況を防ぐには方法は一つしかないと考える。月刀たちが拿捕されるより前に我々が現場海域へ向かうしかない」

「なるほどな。近くに空母を含めた艦娘の艦隊がいれば突如湧いた深海棲艦によつて戦死というシナリオが使えなくなるわけか」

長門が腕を組んで笑った。その後を龍田が継いだ。

「その指揮をとる指揮官が日本国内にいるのに現地の指揮官たちを連れ去ろうとすれば、その情報が公に流れる可能性がある。そうなれば叩かれるのは華僑民国でしょねー。まともな指揮官なら私たちがいる時点で作戦は失敗するわけね〜」

「そういうことだ。現地に実働隊を飛び込ませてしまえば。たまたま近くにいた護衛艦に援軍を頼むこともできる。そうして月刀たちが情報にない護衛艦隊の存在を知れば、裏になにかあると気がつくはずだ。そうしてしまえばこちらのものだ」

「要するにだ」

話をまとめるように天龍が大声を上げた。

「深海棲艦の大艦隊の動きを察知した態で現場に急行すればいいだけだろう？」

「そう言うことだ。ただし、これは明らかかな抗命行為だ。しかも後に尾を曳くタイプの命令違反だ。成功するにしろ失敗するにしろ、動き出した時点でもう今後の華々しい活躍は諦めなきやいけないレベルのヤバい話だ。それを知ったうえで選んでくれ。今から俺は一度口グアウトする。3分経ったらもう一度ログインする。その時点で……」

「その必要はねえよ」

天龍がそう言った。口の端を凶悪に引き上げて笑う。

「俺たちを指揮した指揮官と、可愛いガキどもが絶体絶命の危機に瀕しているのに自分の今後の算段を整えられるほど頭はよくないし、薄情でもねえ。俺は行く」

「そうねえ、ここまで焚き付けておいて判断は自分でとか杉田中佐も卑怯じゃないかしら〜？」

龍田の言い草に苦笑いを浮かべたのは卑怯と言われた杉田本人だ。

「睦月も行く！ 提督がいなくなっちゃうのは絶対にやだ！」

「お姉ちゃんがそう言ってるのに妹が行かないのはアレよねえ……」

「ふたりが、行くなら……」

「たまには本気出さないとマジイかなあと思ってたところだしまあい

「どうか」

睦月型が行くことを宣言すると後ろでずっと黙っていた利根が笑った。

「めったにできない恩返しじゃな。提督には後で責任取ってもらわんといけんのお。のお筑摩？」

「まあ、たまにはいいでしょうしね」

「命令を踏み外すのは初めてですけど、まあ……」

「いいじゃないですか大鳳さん。これでだれも死なずにすむならそれが一番です」

第三分遣全員がそう言うのとそれを待っていたかのように金剛が声を上げる。

「カズキが危ないなら行かない理由は無いネー！」

「お姉さまのためなら、たとえ火の中水の中！ 比叡、ご一緒します」

「これだけの深海棲艦を相手取つての戦いでは高火力艦が必須です。勝利のためには私の参加が必要でしょう。霧島、志願します」

「榛名は大丈夫です！ MI撤退戦の借りを返します！」

表情を引き締めて視線を上げたのは赤城だ。

「月刀大佐には一宿一飯の恩がありましたし、MIの借りもありますね。加賀さん」

「ええ、借りを返さないのは落ち着かないですし、いいでしょう。私たちを無視した命令で頭に来ていたところですし。二航戦の二人はどうするの？」

「アハハ……。この空気で断れないよねこれ……」

「断る気なんてないんだからいーじゃんいーじゃん。二航戦飛龍・蒼龍、志願します」

正規空母4隻が戦列に加わることが確定し、最後に笑ったのは長門だ。

「ここの全員大馬鹿だな」

「なんだよ？ 文句でもあるか？」

軽くメンチを切りながら天龍がそう言うのと長門はいよいよ大笑いした。

「こんな馬鹿げた事態に馬鹿げたことを無許可で行おうとしている。深海棲艦と人間との両面戦争だぞ。これに即答で参戦宣言が揃うってのは、くくく」

「長門、豪傑と蛮勇の違いを知ってるか？」

その笑いに吊られたように笑いながら杉田はそう問いかけた。

「生きて帰るかどうかだ。生きて帰れば豪傑、帰ってこれなければ蛮勇だ。どっちも思いつきりのいい馬鹿だってことは変わりねえ。さて長門、お前はどっちだ？ 事なかれ主義の臆病者か、無謀な馬鹿か。どっちだ？」

「舐めるな、ここの誰よりも大馬鹿者だ。久々に馬鹿になって暴れられそうでうずうずしてる」

「なら頼りにしてるぜ馬鹿野郎ども。15分で艀装の使用許可とテイルトローター3機の手配を完了させる。出撃は45分後。作戦指揮は俺がとる。水雷戦隊の指揮はもうひとり応援を読んである。現地合流後の空母部隊は航暉の指揮下に入れ。いくぞ」

「了解！」

揃った返答を残して全員のアバターが掻き消えた。

「阿武隈」

ライフルを抱えた航暉が駆け寄ると阿武隈は弱々しく振り返った。

「……この中か？」

「間違いないです」

急な土の坂を上ったところで航暉は阿武隈が見ている小さなトン

ネルをのぞき込んだ。入口は小さく食糧庫の一つといても通じそうな様相だ。入口の土のところを見ると足跡は三つ。

「一番新しくて小さいのが合田少佐、少なくともあと二人、この中にいる、か……」

「司令官は父親の敵を討つんだって言ってました。おそらく敵討ちの相手がこの中にいるはずですよ」

「……残りの二つの中一つはヘヴィサイボーグかアンドロイドだな。体重3桁なけりやこんなくつきり靴跡は残らない。もう一つは……おそらく高峰だ」

航暉はそう言ってから壁に触れた。

「古いものだな、おそらく第二次世界大戦頃のものだろうが、これだけ厚ければしばらくは保ちそうだ。艦娘の砲撃に耐えられるかどうかは未知数だがこの小銃程度なら何ともあるまい」

そう言うのと航暉は銃を構え直した。

「阿武隈、45分だ。45分経った時点で撤退する」

「大丈夫です。45分で片づけます」

阿武隈が前に出ようとするのを航暉は腕で抑えた。フラッシュライトを銃のマウントに取り付け、点灯させる。赤いフィルターを通した光が前を照らす。その上で首の後ろからQRSプラグを引き出すと、阿武隈に手渡した。

『悪いな、俺が先行させてもらう。後方警戒は任せた』

『……わかりました』

『大丈夫だ。俺だつて助けられるなら助きたい。時間を無駄にする気もない。……いくぞ』

ゆっくりと踏み込んだ航暉は足元を照らしつつゆっくりと坂を下りていく。下層にむかってトンネルが緩やかに傾斜しているのだ。

『阿武隈にとって合田司令官はどんな人だ？』

航暉の問いに阿武隈は考え込むような間が空いた。

『……目の離せない弟、みたいな感じでしようか。司令官は賢すぎて、周りの求めていることがわかりすぎて、抱え込んでしまっんです。だからちやんと見てないと破滅するまで突き進んでしまっそうです……』

『その司令官は親の敵を討つためには人殺しも辞さない男だったか？』

『……わかりません。軍人だった合田中将を尊敬してたのは確かです。でも敵討ちのために人殺しなんて、司令官は似合いませんよ』

『同感だ……つと、』

航暉が歩みを止める。濡れた壁に向けてライトを向ける。ライトの赤フィルターをわずかにずらして、白い光で壁を照らす。

『……間違いないな。少なくともここに高峰が来てる』

『わかるんですか？』

『ああ、高峰たちとは海大時代にいろいろバカやったからな。ある時銀蠅用に誰がどこをどう通ったかがわかるようにオリジナルのマーキングを作ったんだ。仲のいい5人しかわからないマーキングだな。……このチョーク跡、高峰のマークだ。これがあるってことは……』

そのマークの下あたりをこそごとと手入れて何かを探す航暉に阿武隈はそわそわしていた。早く先に進んで司令官を探したかったのだ。

『……あった、マイクロチップだ』

航暉はそのマイクロチップを防壁越しに開く。いつでもその内容を焼き切れるように待機したまま航暉は中に入っていた音声ファイルを再生した。

——これを聞いてるといふことはカズがここに到達し、俺がまだ脱出していないと言ふことだと思う。この先に“ホールデン”と思わしき人物が消えていくのを確認し、それを追っている。マークを残して進んでいくが、間に合わないと思えば捨てていけ。

『……つたく、こういう時だけ頼るなよな』

阿武隈に合図をして先ほどよりも速足に進んでいく。いくつもの分かれ道があったが、そのたびに高峰が残したマークがあった。右は行き止まり、直進せよ。左に行け。この先に行くな。など航暉が確実

にマークを見つけて進んでいく。

そして、足が止まる。

『……電磁波確認。こんな山奥で電子機器を盛大に動かしてるやつがいるな。阿武隈、有線終了、電腦を自閉モードへ。覚悟はいいな?』
『はい……』

航暉は有線コードを回収し、ゆっくりと前進する。阿武隈にはそこにいるとハンドサインをだしてから部屋に向けて歩を進めていく。ライフルを両手に構えたままゆっくりと部屋から伸びるあかりの中に体を晒していく。

「そこまでだ、合田少佐、銃を下ろせ」

航暉のその声に弾かれたように阿武隈が部屋の中に突入する、航暉は通路を阿武隈に開けつつも部屋の中にライフルを向け続ける。

「司令官っ！」

阿武隈は正一郎の姿を認めると彼に飛びついた。彼の右手を無理矢理捻るように外に向ける、飛び出した弾丸が阿武隈を掠めて飛び抜けた。

「あぶ……くま……?」

「なにしてるんですか! なんで自殺しようとしてるんですかっ!」

目の焦点があつてない正一郎の肩をゆすりながらその手元の拳銃を遠くに放り投げる阿武隈。硬質な音をたてて地面に落ちた拳銃はからからと床を滑って「彼」の足元で止まった。

「高峰答えろ、この男は誰だ。合田少佐が自殺しようとしてたのはなぜだ。お前はそれを止めなかつたのはなぜだ?」

足元で止まった銃を拾い上げる「彼」に銃を向けながら同じように銃を向ける高峰に問いかけた。

「彼は自称合田直樹元中將で「ホールデン」の最初の一人にてその代表。合田少佐が自殺しようとしてたのは、合田元中將の正体に絶望したから。それを止めなかつたのは彼にその選択の自由があるからだ」
「……、大体把握した。……こんばんはって言うべき時間だな。こんばんは「ホールデン」硫黄島以来らしいが俺は覚えてないんでね、マニラ以来だな」

「会いにくるならそんな物騒なものがなくてもよかつたんだけどね。歓迎しましょう、月刀航暉海軍大佐」

「彼」はそう言って笑った。

「高峰君も劉さんとも話してて楽しくはあったんだけどね。一番は君との話し合いを楽しみにしてたんだ。やっと面と向かって話ができる」

「俺は顔なんて合わせたくなかったよ」

「つれないなあ、君からもインチキの匂いがするんだけど、君のはまだ耐えられる。それに、僕と似ているんだ」

「ほう、どう似ている？」

「大切なものを失い、その復讐に燃え、壁を感じているところ、かな？」
「……！」

「君の経歴を見せてもらったよ。これだけのことがあつたのによく軍部で働き続けることができるなって思うくらい君の精神は強固で健全だ」

「それが似ていると？ イージス艦で乱射騒ぎを起こした人物がよく言うな」

その切り替えしに「彼」は笑う。

「何がおかしい」

「いや、手厳しいね。……まあ、似ているといえれば似ているかな。でも「僕」のやり方ではうまくいかなかったらしい。まあ、これも国連海軍が狂ってるからでもあるんだけどね」

彼は両手を見上げ天井を仰いだ。

「君たちはここがどこか疑問に思ったはずだ。第二次世界大戦時に日本軍が設営した防空壕を拡張して作られた巨大な地下空間。その奥に設置されたこの巨大な電波暗室。ついでに言うならこの壁の後ろは巨大なスーパーコンピュータが稼働中だ。……ここまでわかれば月刀大佐あたりなら見当つくんじゃない？」

「——旧日本国自衛軍の電腦実験施設」

航暉の答えに満足げに笑って見せる「彼」は航暉の方に向けて歩き出した。

「正解だ。ここは日本国自衛陸軍の管理下にあつたみたいだね。もつともこの辺りは『僕』も知識でしか知らないけど」

革靴の音が硬い床に反響する。航暉はそれを聞きつつほぼ無表情にライフルを構えるだけだった。

「君たちの電腦が実用化するまで莫大な犠牲があつた。デジタルな情報をアナログな人間の脳にぶち込むんだ。危険には違いないがこればかりは動物実験という訳にも行かない。すなわち人体実験が必要になる。だがそれを公にはできない。だから地下でやる必要があつた。……ここは適地だっただろうね。戦争で死亡扱いになつた捕虜を連れ込んでも霧がでてればまず見つからないし、民間人が好き好んでここに来ないからね。他にもあつたんでしょ？ アリユーシヤンのほかには？ 北海道の山奥が一番日本寄りだったのかな？ フィリピンの山奥にもあつたつて聞いたし、まだまだわからないことがあるしね。この手の研究所のナンバーが23まであるしね。それで得たノウハウで安全な電腦化ができるようになり、それに伴い義手義足の発展形である全身義体が実用化、歩兵の強化が進んだ」

そう語つたころには航暉の目の前まで『彼』が迫つていた。

「そうして戦争の高威力化が頂点に達したころ、深海棲艦が現れた。全ての軍隊が勝てもしないまま、海を奪われている間に、人間は何をしていた？ そう、まだ人間同士で殺しあつてたんだよね。エネルギー問題、食糧問題、難民問題、これらが一気に噴き出してそれでもまだ誰かを恨んで妬んで殺し合う。電腦化によってさまざまな情報に感覚的に触れるようになってからは住民感情も過激化したしね」

もはや銃よりも拳の方が近い距離になつてやつと『彼』は足を止めた。

「人類共通の敵が現れて以降も人類は同族殺しをやめられなかった。それが僕は悲しくてね。最近やつと収まってきた、恒常的な外敵の存在による人類統一国家の形成なんてヴィジョンも見えてきたと思つただけだね」

「それがお前の目的か？ お前の行動は人間同士の争いを加速させているだけに見えるが」

「うん？ そうなってる根源はインチキだらけの国連海軍にあるんだよ？ それを壊さないでどうするの」

子供のような笑顔を見せた「彼」は極至近距離で笑った。

「おかしいと思わなかったのかい？ 全ての海軍が意味をなさないほどに壊滅し、シーレーンが破たんしているのにたったの3年で艦娘という存在が人間にもたらされた。そんな幸運があるはずないって」

「なにが言いたい？」

「わかってるくせに」

「彼」はその距離で狂ったように笑う。

「答えろ月刀大佐、艦娘」とは何だ？」

笑い声が乱反射する。それに重なるように声が響いた。

「月刀大佐、君は答えを知っているはずだ。答えられない時点で君は自分に嘘をついている！」

直後航暉の姿がぶれるように後ろに動いた。間髪置かず響く銃声。

「……ほごくな、ホールデン」。艦娘」とは何か？ 俺の部下だ」
態勢を後ろにずらし、下がるようにしてライフル分のスペースを稼いだ航暉は3点バーストモードで引き金を2回引いた。正確に「ホールデン」の左ひざを砕く。ホールデンは前に跪くように体を崩したのを見てさらに3点バーストを1回。今度は左肘から先が吹き飛んだ。その断面からは金属質なホースが幾重にも見える。

「それ以上戯事を弄するようならお前の電腦を吹っ飛ばす。もともとそれがお前の本体じゃなさそうだがな」

床に這いつくばったホールデンの頭を銃口で押さえつけながら僅かに視線をずらす。

「……合田少佐、大丈夫か？」

「ぼく、は……」

「何を言われた？」

「……父さん、は……電腦操作の、ウイルスを開発して、それで……人を操作して……」

「マニラのテロそのものだな。安心しろ。ホールデン」がまともな存在ではないこととお前の父親がまともでないことはイコールじゃ

ない。そして父親がどうであつてもお前の存在には何ら影響を及ぼさない」

「息子を前にしてそう言われると、傷つくんだがね」

その姿勢のまま声を出す。彼を航暉は鼻で笑った。

「息子？ 何を言っている。彼の父親合田直樹元中將はもう死んでいる。クリリスクス市で狙撃されて死んでいる」

航暉は冷ややかに見下ろしたまま笑った。

「『ホールデン』、ひとつでも思い出せるものはあるか？ 生まれ故郷の風景、母親の顔、幼心に響いた宝物、怒られた記憶、母親の顔。何か思い出せるものはあるか？」

「……」

「思い出せないならお前が『生きてない』ことの証左だ。お前に合田直樹元中將の記憶があり、それを引き継いでいたとしても、その背景にある経験が引き継がれるわけじゃない。記憶と経験、その組み合わせによって人は意志を決定し、行動していく。お前には記憶はあつても生身の体、ネットに広がる意識以外で成長した経験がない」

航暉はそう言つて銃のセレクタを単発にセットした。

「お前の正体はいくつもの記憶で練り合わされた疑似記憶。取り込んだ合田直樹元中將の記憶が色濃く出ているだけの記憶の集合体に過ぎない。違うか？」

「彼」は黙りこくつてしまう。返答を航暉は辛抱強く待ったが、答えは出なかった。

「電脳化や義体化によって自らのアイデンティティすら塗り替えることが可能になったかもしれない。だれだつてこの記憶はたしかなものか、はたまた誰かに植え付けられたものかと怯えながら暮らさなければいけない社会になつたさ。それでもな、俺たちは機械でなければ物でもない。誰かの記憶を借りて生きてるように振る舞う人形とは違うんだ」

そう言つと「彼」は笑った。大声で高らかに笑った。

「それが偽善さ、月刀航暉！ 生きていないというのなら、俺をモノだというのなら、艦娘はモノだな！ それを生きてるように扱うお前は

人形遊びに興ずる狂人って訳だ！」

“ホールデン”は叫んだ。狂ったように叫んだ。

「生きているという否定はできない！ 何せ国連海軍は水上用自立駆動兵装として艦娘を“開発”したんだもんなあ！ 全身義体に昔の船の戦歴を記憶に見立てて組み立てた自我を入力したガイノイドだもんなあ！ 俺を否定することは彼女たちを否定することだ！」

ホールデンはバネのように跳ね起きると生きている右手で航暉のライフルを抑え込み自らの頭にひきつけた。

「インチキと一緒に死の舞踏を踊り続ける、国連海軍！ 自らの業にその身が焼け落ちるまで踊り続けるがいい。そこまで行けばお前と僕は似た者同士だってことがわかるだろうよ！」

「ああそうかい。せいぜい気を付けておくよ」

銃声が一発分、力なく地面に伏せ落ちた義体は活動を止める。

「……殺してよかったのか？」

高峰が銃を下ろす。同じ姿勢で長時間いたからか、渋い顔で肩をまわしながら低い声でそう問いかけた。

「言っただろう。これは本体じゃないって。本体はこの奥のスーパーコンピュータだ。おそらくここは電脳の情報共有による兵士の平均化とかそんな研究をしていたんだろうな。そのデータが蓄積された結果として、こういう事態が可能になった」

「笑えねえな。お前らは機械に殺されかけたってことかよ」

「深海棲艦に殺されるのとどっちがましか微妙なラインだよな。……こここの外部通信装置を破壊して撤収するぞ。急いで逃げよう。嫌な予感がする」

航暉はそう言うと、通信装置を探し始めた。

阿武隈の方を一切見なかった。

クリリスクで巨大な風車が高速回転を始める。数は6つ。テイルローター機が離陸推力を得るために回転数を上げていく。

「だから何度も言わせるな。出撃ナンバーEOP08211010001A、キスカ島救援のための戦力派遣だ。CSCにそのミッションが登録されている」

《しかし……総司令部から待機指示が……》

「待機指示だあ？ むぎむぎと2千人規模の死者を出す気か！ グレイハウンド01、これより離陸する」

《ツ》

《スリー》

《待ってください、許可が出るまで……》

航空管制を振り切って3機のテイルローター機が夜空に飛び出していく。

「……すまん。こんなことに付き合わせてしまった」

「国連の飛行士を舐めんでください。長門さんみたいな美女に頼まれて動かんかったら男が廃るつてもんでしよう。それに杉田一曹……もう中佐つすね、杉田さんには大きな借りがあるんで、返せてよかったです」

一番機の機長席をのぞき込んだ長門に機長は笑う。

「杉田中佐とは懇意だったのか？」

「懇意って程でもないんですけどね、仙台での在日外国人排斥運動鎮圧作戦の時に、杉田さんの部隊に救われたんです。ゲリラがどこから手に入れたかわからないステインガーを封じてくれたのは杉田さんだった。あれがなけりや俺たちはとつくに墓の下だった。その杉田さんに頭を下げられちゃあ、断る訳にも行かないし、積み荷が女の子ならなおさらね。いつも冷静沈着、北方艦隊の守護神、長門さん。一緒に飛べて光栄です」

操縦桿はいま副操縦士が握っている。それを確認してから機長は

後ろを振り向いた。後ろには長門と睦月型、天龍が乗っている。緊張した面もちだが貨物積載責任者ロードマスタとなにか話している。

「このまま巡航高度で最速で飛ばします。現場海域につくころには夜が白みだすでしょう。今は少しでも休まれた方がいい。何かあればサイレン鳴らしますんで」

「ん、なら頼めるか？」

長門は頷いた機長の肩を叩いて機体後方に向かう。

「ここで緊張していても仕方がない。今は休ませてもらうとしよう」

そう言つて長門は機内の椅子に腰かける。横に座っていた睦月はどこか緊張した顔で長門の方を見た。

「なんだ、私の顔に何かついていないか？」

「い、いえ……そんなことはないんですけど……」

どこか顔を赤くした睦月に怪訝な視線を向けていると睦月を挟んで反対側に座っている如月がくすくすと笑った。

「まさか長門さんと一緒に出撃できると思つてなかったから緊張してるんですよ。暖かい目で見守つてやってくださいね」

「むく、如月は睦月の母親かなにかですか？」

「あら？ お姉さんつて言つてくれないの？」

「お姉さんは私だし……つて痛い痛いっ！肩をギリギリ締めないでっ！？」

弥生は睦月如月姉妹の通常運転ぶりに上瞼だけを器用に細めた。いわゆるジト目と呼ばれる表情をした。

「睦月たち……緊張してないのかな？」

「んあ？ 考えるだけ無駄でしょ。無視でいいよ無視で、それよりあたしは寝ときたいなあ」

そう言う望月もかなりのものである。大物揃いなのか、案外考えていないだけなのか、弥生には判断がつかなかった。

「それにしてもよかつたのかよ？」

「ん？ 何がだ？」

長門の方を見てそう口を開いたのは弥生の隣に座る天龍だ。行儀悪く開いた両ひざに肘をつけて手をみ、口の端だけで笑った。

「お前北方第一作戦群の連合旗艦だろ？ 司令官の信頼も篤いはずだ。この出撃で全部ふいにしたかもしれないんだぜ？」

「これくらいでふいになるようなら私の提督はそこまでの男だつてことだ」

長門は腕を組んで目をつむりそう言った。

「天龍、お前は義賊つて言われてどういう輩か想像つくか？」

「義賊？」

「犯罪者ながら民衆に支持される人物のことだ。日本なら石川五右衛門とか鼠男、外国文学ならアルセーヌ・ルパンとかロビン・フットとかがそう呼ばれるな」

長門はそう言うわずかに首を前に倒しすべり止め付きの床を眺めるように俯いた。

「義賊には定義が2つあるそうだ。一つは権力者からみれば紛れもない犯罪者だが、民衆から『正義』を行ったイメージとされていること。もう一つは民衆と必ず関わり合いをもっている賊であることだそう。政府や軍が成せなかつた正義を成すことで誰かを救おうとした。その心意気と覚悟はきつと賞賛に値するものだろう」

長門はそれを言うとき笑った。

「私はそういうものに憧れていたのかもしれないな。だから軍を裏切つてまで仲間を救おうとする杉田中佐に賛同したのかもしれない」

「……義賊、ねえ」

「今のこの状況がまさにそうじゃないか。軍は2千人を超える難民と水雷戦隊一つを生贄に世界を救おうと考えた。でも私たちはそれにNOと言った。それが民衆に支持されるかはまだわからないが、こちらに『義』があると感じる人は少なくないだろうと思う」

長門はそう言うとき薄く瞳を開いた。

「私は、あの戦争を生き抜いた。私の船員だった人たちはあの世界の中で必死に生き抜いた。それぞれがそれぞれの『義』を抱いて生きていた。それを守って戦艦として、核に身を焼かれるまでずっと守つてこられたことは私の誇りだ。この体を得てからも幾度も作戦に参加したが、その誇りを違えるようなことは一度もなかつたと自負して

いる。己の信じる正義に殉じてきたつもりだ。今もだ。ここで誰かを見捨て勝利を得たとしても、それは私の正義に反する」

薄く見える目はどこか遠くを睨むように据えられる。

「私が私であり、海軍を代表する艦であるためには、私は正義であらねばならない。ここで引いては、私は私を失いそうだったから話に乗った。これで我々が罰せられるというのなら、私は国連軍っていう組織を過大評価していたってことだろう。その組織で戦うよりはきつと解体された方が私は幸せだ」

「……そういうのは一人でつぶやくもんだぜ、長門さんよ。艦娘は人じゃねえ、思想統制の対象になるぞ」

「上層部の待機命令のなか無理矢理出撃しておいて、今更思想統制もないだろうし、言わせてほしいものだな」

「そーいやそーうだな」

天龍は笑った。しばらくは無言の時間が続く。

「……そーいや下手したらこれが俺たちの最終出撃の可能性もあるわけか。なんなら間宮羊羹とか食ってくるんだったかな？」

「最後の晚餐か？ 少しばかり辛気臭いな」

長門がそう言うのと天龍は肩を揺らして笑った。

「大丈夫だよ、長門。うちの指揮官ならうまくやる。駒さえそろえば国連軍相手でも何とかするだろうよ。40隻の深海棲艦相手に水雷戦隊他数隻で傷ついた主力艦隊を逃がし切る化け物級の腕前だ。きつと大丈夫だろうよ」

「……そうか、いい上官を見つけたな」

「だろ？ めったにない上玉だと思っぜ。残念ながら長門にはやらん。すでに狙ってるのがいっぱいなんだ」

「ほう……？」

長門が僅かに視線を横にずらした。視界の端にどこか落ち着かない睦月を捉える。天龍の方を見ると笑みを深くした。

「電もそうだろうし、響もかなり強敵だ。利根もチャンスがあれば狙いに行くだろう。電いわく南方第一作戦群の笹原中佐ってやつもいい空気だったらしいな」

「……天龍、お前もか？」

「いんや、俺は上司部下で十分だ。あの下なら存分に動けるし退屈しねえ。司令官助けに命令無視なんて熱い展開の出撃もできる」

長門はそれを聞いて笑った。

「なら、笑い話にできる程度には頑張らないとな」

「だな」

テイルトローターは北東を目指して闇夜をかけていく。戦域まであと6時間を割っていた。

あきつ丸のブリッジに航暉が入ると、数人の見張り員と共に海域を睨んでいた少女が敬礼をしてきた。

「お疲れ様であります」

「あきつ丸もお疲れ。乗員は？」

「乗員34名、事故0名、航空要員23名、事故0名、乗客は増えて1254名であります」

「下甲板は一杯か……」

「ぎゅうぎゅうとは言いませんがかなり一杯でありますな。資料よりも難民キャンプの人員が膨れたので仕方ないのですが」

「わかった……あきつ丸、第一種警戒体制を維持。攻勢防壁全種展開、ECMやCWIISも即時使用可能な状態で維持してほしい」

「穏やかではないでありますね」

あきつ丸は無表情ながらそう言った。

「事態は急を要する可能性もある。勘だが……おそらく戦闘になる」

「腕がなるのであります」

あきつ丸がそう言うのとブリッジにもうひとり入ってくる。

「高峰春斗中佐、入室します」

「高峰、子日の様子はどうかだった？」

「高速修復材つてホントすごいよな。完全回復とは言わないが、怪我はほぼ回復。副作用で船酔い状態になってるがそれもあと1時間ちよつとで抜けるそうだ。艦装は初霜若葉の予備武装が使える。戦闘行為も大丈夫だろう」

「緑のバケツサマサマだな」

高速修復材——他のクスリと分けるために蛍光緑の台形型容器に入った注射薬だ。使い切り容器だが見た目がブリキのバケツのミニチュアに見えるため、バケツと呼ばれることがある。艦娘の負傷を治すための薬品である。普通のマイクロマシんでもまる2日はかかるような怪我でも1時間少々で最低限動けるようになる。半ば強制的に怪我を治すため艦娘側の負担も大きく、修復終了まで痛覚を切らなければならぬほどに強引な治療だ。使用は最低限に収めるべきという投薬ガイドラインも存在する。

子日は修復をほぼ完了、副作用で三半規管がやられているらしいがしばらくすれば回復するそうだ。今は一隻でも戦力がほしい。

「カズ、リンクは？」

「とりあえず霧を抜けてからだ。この霧で深海棲艦を呼び寄せると回避行動もままならん」

「……わかった。が、反対だ」

紺の作業服を着た高峰は腕を組んでそう言った。潜入用のコートなど一式はもう脱ぎ捨てたらしい。

「指向性のレーザー通信ができるのところまで抜けるのにおそらく2時間以上、そして……約270キロ先、キスカとアツツの中間地点あたりが臭い。反対側の匂いもヤバそうだ。仮に2時間で霧を超えたとしてもそれからじゃ対応が間に合わん」

「……その確度は？」

「金曜カレーを諦める程度には」

「無類のカレー好きのお前が言うには確かだなそりやあ」

航暉は高峰の首の横を指さした。中継器がもう首筋に刺さっている。艦内の艦隊指揮システムとリンクしているはずの中継器だ。今手に入る情報すべてを統合し、高峰がそう言った。

“幻視”の高峰がそう言ったのだ。その索敵・誘導技術と並外れた危機察知能力を航暉は全面的に信頼していた。

「で、高峰。艦隊誘導は任せていいのか？」

「ああ、回頭2ポイント、転進1―9―3。前進強速」

「あきつ丸、各艦に伝達、回頭2ポイント転進1―9―3、前進強速。艦隊機動は高峰中佐に従え」

「了解であります！」

船が僅かに方向を変える。後続艦も発光信号を頼りに方向を変えた。

「カズ、アクティブレーダーを短信一発試したい」

「おいおい正気か？ 艦娘の電探ならともかくここで艦隊のレーダーを作動させればどうなるかわかっているだろう」

「なにもすぐにじゃない。艦娘たちの補給作業が終了したらだ」

「……マジかよ」

「おおマジさ。……アツツ側の塊は十中八九深海棲艦だ。だが反対側の塊が妙だ。……深海棲艦の可能性も捨てきれないが、おそらく……有人艦だ」

航暉の眉がピクリと動いた。

「指方向性を高めてその塊を狙い撃ちしてみるか？」

「どっちにしても艦娘の補給作業を急いで完了させて全員出した方がいい。カズ、最速だ」

「といつても1時間近くかかるぞ」

「45分できないか？」

「らしくないな。なにを焦ってる？」

航暉がそう言うとき高峰は溜息をついた。

「……あきつ丸、3分ほど指揮権を譲渡、大佐と俺は少しだけ下がる」
「指揮権譲渡了解であります。早く戻ってきてほしいのであります」

「すぐ戻る」

高峰は半ば強引に航暉を引っ張り出すと海図保管庫に航暉を押し込み、自分も中に入った。

「ここにきてホールデンの正体、らしきもの」が割れ、失踪騒ぎを起こした合田少佐は見つかり、その父親の合田中将射殺事件への足掛かりが出てきて、軍用施設の秘密が飛び出てきた。偶然にしてはいくらなんでもできすぎてる。電腦ハックを受けた指揮官をすぐに実践に差し戻すのも怪しすぎる。それに日本国自衛軍が絡んでるとしたら、
「お前の頼み事」にも関わってくる可能性すら出てくる。……軍の奴ら、臭いものをまとめてポイするつもりでこの編成で送り込んだんじゃないのか？」

航暉の頼み事、ウエーク島の前司令官の前歴と行動の意味を探ってほしいと頼んだやつのことだろうと。航暉は思い出していた。ここ最近は何れすら考える余裕がないくらいにいろんなことがありすぎた。

そんなことが頭をよぎるが今はこちらが優先だと、高峰の言葉を精査する。

「……可能性としてない訳じゃないだろう。俺もお前もいろんなところで恨みは買ってるだろうからな。で、それが焦る理由か？」

「もしこのまま動いたら夜明けとほぼ同時に両方の艦隊に挟み込まれる形で接触する。有人艦と思しき東の艦隊が味方ならいいが、そうじゃなかったときは難民を満載した鈍足な貨客船を守りながら両舷戦闘だ。お前の部下がどんなに優秀だろうと両舷から挟み込まれた状態で一発も難民に当てないままに抜け切るのは無理だ。それにエアカバーも望めない状況で昼戦になったら、青葉以外短射程艦じゃとてもじゃないが太刀打ちできない。航空機が出てきたら一巻の終わりだ。だから両者の距離があるうちに夜闇に紛れて突破。もしくは片方を排除したうえでもう一方を落としたい。今俺たちが生き残るにはこれしか方法はない」

「……うまくいく確率は？」

「知らん、そんなもん。だがこれを逃して霧もなく夜が明けたらそれ

こそほんとに打つ手なしだ。まだ手が打てるうちに足掻かなければ死ぬぞ」

「……わかったよ高峰。俺の負けだ」

そう言って海図保管庫から出る。艦内通信を開いた。

「初霜・若葉・島風・初春、補給は終わってるか？」

《初霜です。子日さん以外はいつでも出れます、戦闘ですか？》

「まだ先だが艦列らしきものがあるようだ。夜明け前に接触することになりそうだ。できるだけ早くに戦闘準備を整えたい」

《わかりました。なら電さんたちと交代ですね》

「そうだ。休みなしですまないが頼む」

《24時間、寝なくても大丈夫。》

「その声は若葉か。いつぞやのサラリーマンみたいだな。無茶はするなよ」

航暉はそう笑うと通信を切る。暗いブリッジで航暉は腕を組む。

「高峰、失敗しましたじゃ許されんぞ」

「それはお互い様。——補給が終了したら、前進強速、24

ノットで進路を維持。東の艦隊に向けてレーダーを照射、正体を突き止める。その後は戦闘態勢を維持したまま全速でクリリスクまで最短ルートで直行だ」

「上手くいったらカレーと牛乳で乾杯だな」

高峰がそれを聞いて笑う。その笑いは瞬時に引き締められた。航暉に目配せをすると航暉があきつ丸に声をかける。

「第二種戦闘用意に入る。俺たちはCICに潜るよ」

「……ご武運を！ つといても下では私のホログラムがサポートできるのでありますが」

「それでもあきつ丸はこっちにいるわけだ。あきつ丸もご武運を、だな」

互いに敬礼を交わして、司令官二人はブリッジを降りる。海戦が幕を開けようとしていた。

「司令官、あの人に何を言われたの……？」

L C A C を格納したドライテツキの片隅で、阿武隈は自分の指揮官だった男に声をかけた。その男、合田正一郎少佐はすべり止めの利いた床に座り込んだまま、阿武隈を見上げた。

「父さんも僕も人間じゃなかった」

「え？」

「違う……元々父さんなんていなかったのかも」

「わかんないよ。わかるように説明して」

それを聞いて彼は侮蔑と諦観が入り混じったような、悲しい顔をした。

「……阿武隈はさ、ゴーストダビングって知ってる？」

「ううん」

「クローニンング手術とかに使うんだ、人間の魂————
アイデンティティ・インフォメーション

個の情報をコピーしてアンドロイドとかに移植する。でも完全なコピーをしようとするとう元の脳が耐えられない。うまくできてもその魂は劣化する。だから人間でやることは禁止されてる。父さんは……合田直樹のオリジナルはゴーストダビングで僕が生まれる3年前に死んでるらしいんだ」

阿武隈は静かに彼の言葉を待った。正確にはなんて言葉を返せばいいかわからないからだ。

「ゴーストダビングで生まれた魂の入れ物は機械の体じゃなきゃいけない。体と脳が一致しないから拒否反応が出る。生身の体は
アイデンティティ・インフォメーション

個の情報の記憶を持つてるから、そこでの拒否反応で死んでしまう。じゃあ、クリリスクで撃たれた僕の父さんは誰？ クリリス

クで死んだあの体の遺伝子情報は僕の肉親だつてことを示した、生身の部分の体組織が一致した。なら、ずつと僕たちのために戦つてくれた合田直樹は誰？ その子供の僕は、何？」

そう言うのと正一郎は俯いた。

「ゴーストダビングで生まれた固体は人間としての権利を持ちえない。遺産の相続権もないし、生存権だつて持ちえない。それはモノとしてあつかわれるからだ。なら『機械の子供』はどうなるの？——父さんが人間じゃないなら、僕は何なんだよ。劣化した合田直樹というモノの魂と母さんの魂を合成してできたこの体は？ 魂は？」

阿武隈は耐えきれずに彼を抱きしめた。

「司令官、司令官は人間だよ」

阿武隈は彼の頭を抱くようにしたまま、目を閉じる。

「ほら、司令官はあつたかい。ちゃんと生きてて、ちゃんと悩んで、ちゃんと泣いて、ちゃんと悲しめる。だから、人間なんだよ」

そう言つてもどれだけの慰めになるだろう。兵器であり、機械の体であり、合成された魂をもつ阿武隈がそう言つた所でどれだけの意味があるだろう。阿武隈は自分の言葉が届かずに落ちて行くのを感じ取っていた。

「機械はね、泣かないんだよ。悩まないんだよ。だから司令官は人間なの。機械にそんなこと言われてうれしくないとは思うけど、私はそう思つてる。大丈夫、大丈夫だよ。司令官は人間だし、私たちはそれを知つてる。不安になることだつて、怖くなることだつてある。だから、合田正一郎さん、あなたは、司令官は人間です」

阿武隈は彼を抱きしめたまま彼の肩に頭を預けた。彼女の目からあふれた水が彼の肩に染み込んでいく。

「人間じゃないなんて言わせない。絶対に言わせない。それはあなたにも言わせないよ。司令官は優しく、意地っ張り、一人でなんでもしようとするのに寂しがりやな男の子です。私の大切な司令官です。そんな素敵で、大切な人が人間じゃないはずない」

「阿武隈……」

「司令官がもし、それでも信じられないなら、自分を信じられないな

ら、阿武隈のことを信じてほしい。私だけは絶対に司令官の味方。絶対的に、何があっても、世界中が司令官を否定したとしても、私は司令官を信じる。だから」

私から司令官を奪わないで、と彼女は強く抱きしめた。

「ごめん、司令官。あたし、司令官に無理させようとしてるね。でも、いま司令官にいなくなられたら私をもたないんだ。司令官のためならいくらだって頑張れる。深海棲艦が相手でも、なにが相手でも頑張れる。でも、司令官なしじゃ、私が駄目なんだ」

ああ、そうか。と彼女は思う。

私は、彼のことが好きだったんだ。

「阿武隈じゃ、だめですか。あなたが自分を信じる理由になりませんか?」

《国連軍総員、コードラズベリー、エコー2―3―1》

艦内放送が戦闘用意を告げる。阿武隈は彼を抱きしめたまま静かに笑みを浮かべた、

もう少しこうしていたい。いま目を合せたら、泣いていたことがばれる。

「いつてきます、司令官。帰ってきたら言いたいことがあるんだから、ちゃんと待っててくださいね」

阿武隈はゆっくりと腕をほつき、ゆっくりと見つめ合う。彼が驚いたような表情をするのを見て、笑った。

阿武隈は頷いてから。立ち上がり、デッキの後方に向かう。甲板員が阿武隈の艤装の用意を進めていた。小型クレーンで吊り上げた艤装を背負い、両腕の主砲を手首にはめ込んだ。正規接続確認、武装管制システムアライン。缶の始動を確認。

(こういうの死亡フラグっていうのかなあ……)

阿武隈はそんなことを考えながら、夜の海を見る。別の艦から飛び出した舷灯がぼんやりと見える。あれは青葉さんだろうか?

「阿武隈、出撃用意完了」

甲板員が脇に整列し敬礼を送る、それに答礼を返してから海面に向けて足を踏み出した。そして振り返る。四角く照らされたドライデッキの奥に小さく彼が立っていた。

「……レーダー波確認？」

北太平洋を驀進中のテイルローターの反応を追っていると長門からの通信が入った。空路はもう半分を過ぎ、あと2時間ほどで現場海域だ。

《そうだ。位置的にはどう考えても月刀艦隊だ。レーダーの波長からして護衛艦のレーダーを単発で打ったんだ。レーダー照射時間は0.3秒、その後また沈黙した》

杉田が使っている管制卓にデータが転送される。

「……思い切った位置でレーダー使いやがった。こりゃあ、向こうもおかしいって気がついてる——長門」

《これ以上飛ばせは無理だぞ。すでに全速だ。夜明けに向かって全速力で飛んではいるが、この夜闇じゃ空母のメンツはまともに戦えない》

「別に何かを頼みたいわけじゃねえ。でもこのレーダーで月刀もおかしいって気がついてるってことがわかったんだ。朗報だ」

レーダーの弱い反射波が帰ってくる。どこかから反射した波をテイルローターが捉えたのだ。

「……うわあ、ビンゴ。当たってほしくない予想だけ当たるよな全く。大型船舶確認だ。これで中路中将の告白が立証されたわけだ」

……おそらく華僑民国の艦隊はいま騒然としているはずだ。電波を封じてのサイレントランで来るはずの相手が、自らレーダーを打ってきたのだから。

「どうする気だ？　これですぐに戦闘になったら間に合わないぞ」

「だな、少し早いパッシブからアクティブへ切り替えるぞ。長門、無線の用意を。最大出力全方位へ向けかき鳴らせ」

《……こちら国連海軍極東方面隊、キスカ島沖200キロを航行中の所属不明艦船に告ぐ。速やかに艦名、所属と航行目的を述べよ》

それは緊急コール用の無線周波数に乗り、航暉たちの耳にも届いていた。

「この声……」

「長門どのでありますな」

LEDディスプレイのみに照らされた部屋でほぼ青く光るあきつ丸（のホログラフィー）が答えた。

《貴艦は国連海軍の作戦海域に侵入している。ただちに応答せよ》

「長門たちの位置、逆探できるか？」

「方位2-1-4、500キロオーバーで距離不明であります。おそらく航空機かなにかから通信を行っているかと。東の艦隊を指名して所属不明艦と言ったとなると、レーダー派をキャッチできるところにいるはずでありますから、航空機で飛んでいる。もしくは飛んでいる航空機の報告を受けて呼びかけたかであります」

「どちらにしても長門が声をかけるのはまずありえない……少なくとも

も軍規に沿っているかぎりはあり得まい」

そんな会話をしていると無線の奥は黙り込んだ。

「……無線の故障を決め込む気かねえ。ここで馬鹿正直に答えたらこちらの艦隊に送られた情報に齟齬があったことがばれる。民間艦船の名前を使えばこつちが保護をするという目的で艦娘を差し向けられたら嘘がばれる。国連海軍の艦艇を名乗るにしても問い合わせてるのが国連海軍だからなあ、使えない」

高峰がそう言っていると相手の艦列に動きがあった。

「おっと、撤退していくかと思えば奴さん、まさかの回頭、ヘッドオン」
「レーダー波の解析は終わった？」

航暉の質問にはあきつ丸が答える。

「完了してあります。ホンコン型イージス巡洋艦が3隻、たしか今保有しているのは東アジア軍事同盟だけでありますね」

「となると華僑民国とかシャム共和国とかか。うわ、渤海の人たちを目の敵にしてるんじゃない？」

あくまで軽い調子でそう言った高峰は椅子の座り方を深くする。

「で、どうするの？ イージス巡洋艦相手だと戦術がかなり変わる。

VLSで対艦ミサイルとか洒落にならんよ」

「……口にするとほんとに起こりそうで怖いな」

直後、警報。

「高速熱源確認であります！ 10時方向から数2！」

「マツハ1・2!? 速いつ！ 到達まで17秒！」

「ああもう、高峰がそう言うこと言うから！」

「うるせえ！」

対艦ミサイルであることはわかり切っていた。高峰が驚いている間にも航暉は無線のキーを叩いていた。

「無線封鎖解除！ 戦術リンクサイレントモードカット！ あきつ丸、ECMモードバラージ！ フレアー放出！」

「了解であります！」

即時にあきつ丸が欺瞞手段を実行する。

「電・響・初春・阿武隈！ 10時方向から対艦ミサイル！ 機銃掃射

用意！」

《りよ、了解なのですっ！》

左舷側を守っていた4人が慌てて砲を振る。レーダーの光点は瞬く間に接近してくる。

「攻撃開始！」

その命令を受けた阿武隈たちの視界にはミサイルを示すターゲットマークが表示されていた。1秒ごとに500メートル近く接近してくるそのターゲットに向けてひたすらに弾を吐きだしていく。

「着弾まであと5秒！」

暗闇ではミサイルを目視することは叶わない。だがターゲットマークの奥にぼんやりとマークが見えている気がした。

横で機銃をふるっていた電の「主砲」が閃いた。重い砲撃音が響く。主砲は当たれば一発でミサイルを撃ち落とせるかもしれないが、当たるとは思えなかった。

「4・3・2……」

ミサイルの推進剤の炎がまっすぐこちらへ向かってくる。狙いはあきつ丸かその奥の護衛艦「さろま」か。

「当たってえ……！」

阿武隈がそう言った頃にはもう彼我の距離は一キロを割り、はつきりとミサイルの明かりが見えた。

そして、阿武隈の目の前で爆裂した。

強烈な爆風に体が煽られる。海面を削るように強制的に体が後退

する。鋼鉄が軋むような音が響く。

気管が焼けるように熱い。でもその熱は急激に引いていった。

「——こちら電、迎撃成功なのですっ！」

喜びに弾んだ声が無線に乗った。

「電ちゃん……なにをしたの？」

声を出そうとすると喉が焼けるように痛かった。熱風をわずかだが吸い込んだらしい。

「主砲のガス圧を使って、電磁パルスグレネードを撃ちだしました。ミサイルの近くで強いサージ電流を発生させてミサイルの電子回路を焼き切ったんです」

「それで自爆させたのじゃな？」

無線越しにそう言ったのは初春だ。それを聞いて頷く電。

「私たちの軍用電脳なら至近距離でサージ電流が流れない限り大丈夫ですから」

下手したら、自分たちも戦闘不能になりかねない攻撃法だが、電には自信があったらしい。

「司令官さん、そっちは大丈夫でしたか？」

《レーダーがざりざり言っている以外は問題なし。対艦ミサイル飛ばしてくる馬鹿はどこのだいっだ？》

無線の奥の声は以外に落ち着いていた。

《さて、夜でアウトレンジ戦だ。……長門達に助けてもらおうこととしようか》

航暉はそう言うが無線チャンネルを切り替えた。

《パーンパンパン、こちら国連軍艦船“あきつ丸”、現在対艦ミサイルによる攻撃を受けている。至急応援頼む》

無線は軍用チャンネルだけ“ではなく”、一般艦船なども使用する緊急用のチャンネルだった。全ての国の機関が傍受しているはずのチャンネルだ。

《あきつ丸へ、こちら国連海軍極東方面隊第522戦隊。これより応援に向かう》

男性の声がその無線にすぐに応答した。

「この声……」

「杉田中佐だ」

《感謝する、攻撃対象と思われる艦船はキスカ島沖200キロ地点。レーダーの反射波からしてイージス巡洋艦ホンコン型と思われる》

攻撃の対象まではこの無線で告げる必要はない、だがここでわざと相手に聞かせることに意味があった。

国連軍の艦船に攻撃をすることは深海棲艦に加担することと同義だ。唯一ともいえる深海棲艦への攻撃手段を握っているのは国連軍だからだ。

この無線が不特定多数に発せられた時点で相手には人類の敵といった評価がつけられる。

《あきつ丸、こちら552戦隊、貴艦の位置を捕捉した。近海に深海棲艦の反応もある、そのまま注意して航行されたし》

杉田中佐の声がそれで途絶える。どうやら通信チャンネルを軍用の秘匿回線に切り替えたいらしい。

「さて……、これで深海棲艦も寄ってくるかもしれないとなると怖いけど……」

この状況でやっばちの攻撃が来る可能性は減った。一発なら誤射の可能性があるが、これ以上撃ってきた場合は国連議会が許さないだろう。

「あとは、深海棲艦をどう捌くか、かな……」

阿武隈はそう思いつつ、弾薬の残りを確認するのであった。

彼女は何かをしたくてそうしたわけではなかった。
彼女は誰かを傷つけたくてそうしたわけではなかった。
彼女は生きていたかっただけなのだ。
欲を言えばみんな楽しく過ごせればそれでよかったのだ。

——ただ、それだけだったのに。

「西側の塊が動いた。ヘッドオン。真っ直ぐこちらに向かってきている」

航暉は高峰の報告を聞きながら残りの武装を確認する。

「CWISの弾薬の補填は？」

「艦首側完了、艦尾側あと30分で完了であります」

暗い部屋でレーダーを確認した。無線封鎖を解除した分、敵の動きが早い。

「接敵予測まで2時間03分、応援部隊到着まで2時間10分、日の出まで2時間05分……」

「夜明けと同時に接敵か。明るい気分で日の出を拝んでるのは無理そうだな」

高峰が軽口をたたく。

「夜明け前に夜間艦載機が出てくる可能性もあるし通常艦船の灯火管

制は続行だな。問題の陸上型新種が出てこなければ逃げ切れるか？」
「だといいいねえ」

そこに無線が割り込んだ。

《ハッピーかい、月刀・高峰。いいニュースと悪いニュースがあるがどっちから聞きたい？》

「重要度の高い方から」

航暉が即答すると無線の奥で笑う気配がした。

《つれないねえ。まあいい、じゃあ、いいニュースからだな。今追加の応援が向かってる。そっちでもそろそろキャプチャーできるはずだ。お前から見て方位1—8—1、数1、航空機だ》

「高峰」

「視えた。エンジェル3、戦闘機か？ 到着まであと約2時間半」

《開発中のジェットVTOL輸送機だ、横須賀から速達扱いだ》

「……中身は？」

《武蔵と夕張、こっちが片付いたら応援部隊でこのままアツツに殴り込みをかけることになるだろうしそっちの追加応援ってことで話をつけた》

「……杉田お前どれだけ上層部を脅したよ？」

高峰はそう笑って、レーダーの表示範囲を広げて表示した。かなり遠くに戦闘機が高速でこちらに向かってきていた。

《それに関わって悪いニュースだ。その指示を中路中將が出した後、中將が電脳自殺を凶った》

「はあっ？」

《命だけはとりとめたらしいが、中路中將の発言に責任能力がなくなった。今横須賀はその関係で上へ下への大騒ぎの最中だ。精神不安定で古鷹に鎮静剤を叩き込まなきゃいけないぐらいに荒れてるよ》
「で、その原因は俺たちちってか？」

《さあ？ で、その直前に俺が中路中將に会ってたってことで即時出頭命令が出てるんだ。——悪い、俺はここまでだ》

どこか寂しげな声色で無線が告げる。

《勝てよ、月刀》

「当然。ちゃんと生きて帰るさ。全員で」
《それ信じるぞ、がっかりさせんなよ?》

「こういう時土壇場で約束を反故にしたことがあったかい?」

《……そういやそうか。長門、武蔵、聞こえてるな?》

《長門、クリアに聞こえてる》

《こちら武蔵、聞こえている》

《これより部隊の全指揮を月刀大佐に移譲する。以降は月刀大佐の指示に従え。長門、復唱》

《こちら長門、部隊の全指揮権を月刀大佐に移譲、以降は月刀大佐の指示に従う。復唱おわり》

《復唱確認。……じゃあな、月刀、高峰。うちの秘蔵っ子を預ける。負けましたは許さねえからな》

「おう、任せとけ。これより杉田中佐より臨時作戦群の指揮を受けとる。——杉田、ありがとな」

《横須賀で待つてる》

杉田がそうやって無線を切った。その直後に改めて無線がつながる。コールしてきたのは長門だ。

《こちら長門、月刀大佐、どうすればいい?》

「今戦術リンクで各艦の位置を指示する」

まだ外は夜闇、あともう少しすれば水平線がわかるくらいには夜が明けだすだろう。

いつの間にか霧がはれ、夜空には星が瞬いていた。

「艦隊へ通達、転進1—4—5、艦娘総員第一種戦闘態勢へ移行。深海棲艦の艦隊を迎え撃つ」

「子曰よ、もういいのか?」

ゆつくりと海の上を滑ってきた子曰にそう声をかけたのは姉の初春だった。

「もー大丈夫! でも主砲がこれだとちよつと落ち着かないかなあ……」

子曰はそう言って左手を振った。右手の砲はいつも通り手首から先をはめ込んで固定するタイプの単装砲だが、初霜の単装砲を応用したのだろう、左手は通常タイプの砲を持っていた。

「攻撃の手段があるだけましといった所かのお……。でも懐かしいのう、なあ阿武隈」

そう声をかけられた阿武隈はふふつと笑った。

「初春ちゃんたちと一緒に航行するのってこの体になってからは初めてだよね」

「そうそう、暁ちゃんたち六駆と子曰たち二一駆と阿武隈先輩で一水戦! 子曰もなんだかうれしいなあ」

「はなしてていいのか?」

会話に割り込んだのは若葉だ。

「いつまたミサイルが飛んでくるかわかったもんじゃない。それに深海棲艦も来ることが確定してるんだ。」

「若葉の真面目が加速してるのお……」

「でもまあ、大丈夫だよ。ちゃんとすぐ反応できるようには用意してるから」

「……ならいい。」

若葉は少し面白くなさそうにそう言った。

「……もしかして、すねてる?」

「……たぶん」

子曰と阿武隈がそんなことを言い合えば、聞こえていたのだろう、若葉はぷいと顔をそむけた。それを見て嘖き出しそうになるのをこらえた阿武隈が明るく声をかける。

「若葉の言うことにも一理あるよ。周辺警戒を厳にしていこう！」
「了解！」

「レーダーマスキングも意味ないか……、ぴつたりついてくるな」

レーダーにはもう敵艦隊の反応が見えている。戦艦ないし空母4隻、重巡4隻、軽巡2隻に駆逐艦12隻。そして後方に未確認反応が一つ。

「陸上種って話だったじゃねえかよ」

高峰は変な汗を隠すこともできずにそう言った。航暉は溜息をついて時計を見た。

「あと10分で夜が明ける」

「……夜が明けたらどうなる？」

その切り替えしを聞いて航暉は口の端だけを器用に吊り上げた。

「知らんのか——日が昇る」

そして過たず、その10分後に日が昇った。

彼女たちを望む声はなかった。

どこに向かっても砲火に晒され、彼女を守って誰かが沈んでいった。

戦いたいわけではない。でも、戦わなければ生き残れない。

それでいいとも思わないが、彼女はそれを受け入れていた。

戦いを避けようと消極的な防衛だけではいつまでたっても終わらない。

楽しい海で、いつか。笑いあって過ごせる海を。

「艦載機……発艦。攻撃シテクル相手ハ沈メテ来テ」

彼女はそう言って暁の空に自らの矢を放つ。それに呼応するように仲間が前に飛び出していく。

彼女は長だった。だから胸を張り、前を向く。

自らの選択の結果を受け止めるために。

《敵艦載機確認。数——72！ 迎撃用意！》

航暉の声を受け電たちが船団から離れるように進路を取った。近づかれる前にできるだけ落とす切らなければならぬからだ。直掩

は初春型4人と阿武隈に任せる。先陣を切ったのは島風だ。

「連装砲ちゃん、ちよつとハードだけど耐えてね！」

対空戦闘モードに設定し、島風自身が先頭を切る。それに続くように暁、響、雷、電が続いた。

《第二波確認、これもしかして全部空母か？ 追加で120、もう200機ちかく放つてきやがった》

「今となつては都合がいいよ！ だって砲撃を気にしなくて済む！」

暁がそう発破をかければ、切り込み五人がそれぞれに砲を振る。

「敵航空隊視認！ エンゲージなのです！」

電の声に一齐に砲火を閃かせる。航暉の電脳経由で射線が修正され、危険度の高い機体から煙を上げさせていく。

「当たれ————ッ！」

島風の叫びに呼応するように自律砲台の主砲が閃く。駆逐艦の主砲で航空機を狙うにしては驚異的な命中率を叩きだすが、それでも70機は多すぎた。

数機がくるりと裏返る。急降下する気だ。

「島風！ キックポート！」

暁の叫びに左足で海面を蹴る。ほぼ反射だった。

右側に飛び退くと同時に水柱が幾重にも立つ。暁は島風が回避したことを目の端に捉えながらも右手の砲をふるう。砲弾は航空機よりも速い。島風の回避でできたカバーの穴を埋めるように砲をふるった。相手の弾道を予測する「眼」の持ち主だ。自分の弾道くらい簡単に予測がつく。

「暁の目から逃げられるとも思ってるのかしらっ！」

過たず2機を串刺しにした暁は自分の真上の敵機に向け背負った艦装の主砲を振り向ける。編隊を崩してしまえば即座に爆弾で誰かが沈むと言うことはあるまい。

その散らばった編隊に追い打ちをかけたのは響の主砲だった。体勢を崩しきりもみに入った機体が極低空まで下りていく。そのつばさを機銃の一連射で砕くとそれに目もくれずに次のターゲットを探す。

「ダメ！ 抜けられた！ 若葉！」

《任せろ。》

雷の声に無線が反応する。噴進砲が起動し敵の航空機を数機火だるまに変える。その最中を鈍足の艦隊が悠々と——全力で進んでいるのは知っているが、悠々と見えてしまう速度だ——海域を離脱するように動いていく。

「電！ どうするの！ この調子じゃ、抜けられるのも時間の問題よ！」

「あと、3分耐えてくださいっ！ もうすぐ——つ！ 後方に艦攻隊！」

雷をカバーしようと振り返った電が低空で抜けてきた艦攻隊を見つける。慌てて砲を振り戻した。射線的にはぎりぎりの位置、とつさに撃った狙いだが相手を慌てさせ、海面に叩きつけるには成功する。だが——一歩遅い。

「電より『さろま』！ 貴艦右舷後方より魚雷3！ 回避してくださいっ！」

殿艦を務めていた『さろま』が危険域のど真ん中を航行していた。慌てて左へ舵を切るが避難民を満載したさろまは普段より重く、のっそりとしか動けない。

さろまに直撃するまで、あと5秒。

「避けてえー！」

電の叫びが響く。その刹那にさろまを飲み込むかのように水柱が立ち、電の視界から船を覆い隠した。

あの水柱の立ち方は火薬が爆裂したのだろう。不発弾ではあんな立ち方はしない。それでも水柱の影から悠々とさろまが姿を現した。

「迎撃が……間に合った？」

《……真打登場！ じゃじゃーん！》

水柱の影から小さな影が飛び出してくる。右手に主砲、左手に機銃を構えた。少女の姿。

《こちらら臨編キス力救援隊、現着ですっ！》

「睦月！」

雷の弾んだ声に睦月は頷いた。その横に如月も降りてくる。

《こっちの護衛は引き継ぐわ。あとは頼むわね、大鳳さん》

《任せて、機動部隊を舐めないで！》

味方の艦載機が極低空で睦月たちの上空を飛び抜けた。そのまま蹴上げるように攻撃機が上昇、巴戦に突入していく。

《こちら月刀、暁たちは一度後退、陣形を整え、再度敵艦隊に喰らいつく》

「了解なのです」

真打登場！ と名乗りを上げたはいいものの、睦月は心臓バクバクだった。

「いくら魚雷対策が得意だからって高度20から叩き落とされるなんて予想外ですう……」

「叩き落とすんじゃないかってファストロープ降下じゃない。そんなに焦らないの」

睦月たちの上空からテイルローターが離れていく。まだ機内には睦月と如月以外の艦娘は乗せたままだ。制空優勢を取るまではまともに艦娘も下ろせないのだ。とはいえ弓を使う航空艦装は狭いテイルローター機内では使えない。

空中に停止したら態のいい的になる。

だから低速とはいえ低空を飛ぶ機体から命綱頼りで海面に飛び降

りるしかできなかつたのである。それも艦装も含めた重量が軽い駆逐艦クラスに限られる。フル装備の長門型などをロープ一本で叩き落とせばどうなるか予測不能だし、それでバランスを崩せばティルトローター機ごと落ちる。

そんな現状で降下させるのに適した艦娘は————魚雷などの対策ができ、練度が高く、イレギュラーな状況でも判断を下して行動できる駆逐艦。そんな条件が出てきた段階で睦月が降下することはほぼ確定事項だった。

本当はもう少し着水場所を吟味するはずだったが、さろまの危機にそんな余裕はなくなった。さろまのかき分けた波の最中にターザンロープの要領で飛び降り、その勢いを殺しながら主砲と機銃を手に取り、上空で確認した雷跡の予測位置に目掛けて砲弾を叩き込む。そんな難易度AAAの一発勝負を敢行したのである。ことを終えた時には心拍数200を超えていたと思う。

「でもまにあつてよかつたじゃない」
「うん。あとは守り切るだけだね。対空戦メインつてのがちよつとふきつかにやあ」

「それでも司令官がついてるじゃない」
「そうだね、それに大鳳さんがついてる」

まだ降下したのは睦月と如月のみ。それでも味方の艦載機が飛びたてたのはなぜか。

ティルトローターの畿内からの艦載機の発艦は困難を極める。

主力空母の艦装は弓を模した発艦用艦装を用いて艦載機ユニットを撃ちだし初速を稼ぎ、艦載機ユニットを展開することで発艦作業を完了する。『弓持ち』と呼ばれる空母勢はこのステップが必須だ。今回参加した赤城、加賀、飛龍、蒼龍、大鳳、龍鳳は全員『弓持ち』である。

だがティルトローターの内部では弓を構えられる空間はない。弓を伏せて射ることもできなくはないが弓を取回すには圧倒的にスペースが足りなかった。

すなわち弓を使って行う艦載機をティルトローターの畿内から発

艦させることはできない。——唯一ボウガンを使う大鳳を覗いて。

「こういう時くらいは活躍しなきゃ、ね」

艦上戦闘機の艦載機ユニットが詰め込まれたマガジンが空になり、機械仕掛けの洋弓からはじき出される。展張された機体後部のスロープにペタリと座り込み、両足を広げて座射の姿勢を取った大鳳はそのマガジンを左手でキャッチする。背負った艤装からひとりでに装填済みの艦載機マガジンが弾き出され、それを右手のマガジンで掬い取る。空いたマガジンはマガジンケースに落とし込み、それからボウガンのローディングハンドルを引いて、最初の艦載機を射出可能状態に持っていく。

「機械仕掛けの弓なんて子供じみたものを使うと思っていただけ……五航戦よりは筋がいいわね」

後ろからそれを見ていた加賀がそんな感想を漏らす。それを聞いて苦笑いを浮かべるのはその横の赤城と言われた張本人である大鳳だ。

「加賀さん、そんな批判じみたくない方しなくても……」

「批判なんてしてないわ、客観的な事実よ」

「一航戦の先輩に少しだけ認められたと素直に受け取っておきます……つとー！」

交戦中の機体の指揮権を渡してほしいと航暉からのテキストメッセージが届いた。ここからでは外の様子が見にくいこともあり即座に了承、指揮権を月刀大佐に引き継ぐ。直後にマニュアル操作の機体が一気に艦隊上空に行き着いた敵機を駆逐していく。

「……私より月刀司令の方が艦載機のコントロールが上手いのはなかなかへこむんですけどね」

「それは……そうね。月刀大佐、MIの時も20機の艦戦で空母10隻分の敵艦載機を捌いた方ですし……」

「あ、その話本当だったんですね」

大鳳はそういいながら艦載機を打ちだす。護衛艦隊の周りだけであるが安全圏が確保されていく。その範囲外から飛び込んでくる雷

撃は睦月の指示で片っ端から潰されていた。

「もう、あの時はそれどころじゃなかったんですけどその後が大変だったんですよ。加賀さんは自信喪失で倒れる寸前まで訓練に走るし。瑞鳳ちゃんとか祥鳳さんもそれに付き合わされてバテるし……」
「赤城さん、それは言わない約束では……、そういう赤城さんも月刀大佐に航空教官

の依頼を出せないかと言っていましたよね？」

「ムー、カズキを狙ってるのが着々と増えてるデース」

機の奥からそう不満げに声を上げるのは金剛だ。

「カズキを真っ先に見つけたのは私デース。最初の秘書艦も私デース、私の指揮官ですから何でもそつなくこなせるのは当然ネー」

金剛はそう言っただけでなぜか勝ち誇ったように笑う。

「カズキの心を掴むのは私デース！ 他の誰にも負ける気はないネー！」

「そうですか。でも今は私たち中部太平洋第一作戦群第三分遣隊の指揮官ですのぞ」

「……タイホー、貴方結構凶太いネー？」

「事実ですのぞ。……艦隊から半径一キロの制空権を確保、月刀大佐から進入許可出ました。降下して大丈夫です」

「————実戦で勝負ネー」

「空母と戦艦では比べることに意味はないと思いますけど……」

部隊を乗せた機体が海面に向かう。どす黒い煙で夜明けの空はすでに燻されていた。

「長門型1隻、金剛型4隻、利根型2隻、青葉型1隻、正規空母5隻に軽空母1隻、天龍龍田に睦月型暁型初春型各4隻……この面子がよく集まったな。これは普段の行いが現れたかな?」

「未確認種が大量に艦載機を放ってくるのを除けばな」

全速で南下中のおきつ丸のCICで航暉はキーボードを叩きつつそう返した。敵味方合わせて800機近い航空機が飛び交っている。戦域は僅かに押し返し、船団は航空戦エリアから外れていた。敵の艦隊が距離を詰めてきている。龍鳳の偵察機が敵艦隊の上空まで強行偵察を行った結果、未確認種は「北方棲姫」と断定、大型艦は戦艦夕級2、空母ヲ級2と判明した。それで400機を超える艦載機が飛んでくるとなると北方棲姫がふざけた量の艦載機を飛ばしてきている計算になる。

「艦戦の搭載量が少ないとはいえ航空優勢で耐えられるとは……どうする?」

「まだ北方棲姫が艦載機を繰り出してる。短期決戦に持ち込むしかない」

航暉の言葉に高峰は眉をしかめた。

「お前は航空戦で手一杯だろう。俺だって護衛艦隊の指揮でいっぱいっばいだ。この編成だって杉田の指揮があることを前提にして組んでるんだ。搭載コンピュータの自動管制じゃ話にならんし、圧倒的に人手が足りん」

航暉はそれに答えない。わかり切っていることを言うなという無言の返答だ。

「……なら、僕が」

CICのドアが開く。大人にしては小柄すぎる影が飛び込んできた。

「賢明な判断とは言えないな、合田少佐」

「人手が足りないんでしょう?」

そう笑う合田正一郎少佐はグレー系の私服の裾を揺らして航暉の横に立った。

「合田少佐、お前は今軍法会議待ちの身分だつてわかつてるか？ 脱走及び武器の無断使用だ。それにハツカー、ホルデン」との関係も疑われている。そんなやつを部隊指揮に復帰させろと？」

「そんなことは関係ない。こんな僕を信じてくれる人が今前線で体を張ってるんだ。脱走して、死のうとしたこんな子供を信じて、命を賭けている人がいるんだ。それなのに一人船倉で腐っているのは許せない」

航暉は一瞬手を止め正一郎を睨んだ。物怖じすることなく相手は航暉を睨み返した。

「二つ答える。万が一にも誰かを守れなかったとき、お前は どうする？」

「そんなことにはしないし、そこまで何もしないなんてありえないですが、その時はきつと、助けられるように全力を尽くし、それでもだめなら、守れるものを守るしかない、違いますか」

航暉がタッチパネル式のディスプレイを操作する。空いていた管制卓の一つにあかりがともる。

「沈めたら承知しねえぞ、合田少佐」

「そんなへまは踏みませんよ」

「月刀より阿武隈。応答せよ」

《こちら阿武隈、感度良好です！》

管制卓に飛び込んだ正一郎の首筋にQRSプラグが接続される。ID認証が行われ、戦術リンクに正一郎が参加する。

「部隊編成を変更する。阿武隈以下暁型4隻、初春型4隻と島風で水雷戦隊を編成、旗艦は阿武隈、以降コールサインは1Sd、一水戦を使用、指揮権を合田正一郎少佐に移譲する」

《!!———了解しました!》

「天龍旗艦で龍田、睦月型、以上で551T Sqを臨時編成。さろま以

下避難船の護衛、龍鳳はこちらの護衛に専念してほしい」

《こちら天龍、了解だ！》

《龍鳳、了解しました！》

海図が次々と更新されていく。予測接敵位置修正、艦隊の編成が変わっていく。

「残りの空母は航空戦を続行！ 押されるな！」

《こちら赤城、一航戦の実力、お見せします！》

無線には覇気を含み、これまでの押されていた雰囲気打ち壊してゆく。

「打撃群は戦艦と重巡で構成、旗艦金剛、いけるな？」

《ハイっ！ カズキの指揮は久しぶりネー！》

「盛り上がっていると悪いが航空戦メインで管制をする。高峰がメインだ」

《それでもこの連合艦隊司令長官はカズキ、貴方デース！》

「……司令長官、か」

航暉がクスリと笑う。

「合田少佐以下一水戦は打撃群と共に敵艦隊に接近。合田少佐、行けるか？」

「もちろんです」

正一郎は即答して笑う。

「1時間で終わらせる！ 打撃群・一水戦前進！ 目標敵艦隊！」
《了解！》

戦いが、大きく動く。

Chapter 5—10 戦の果て

敵の砲弾が迫りくる。

彼女は泣きそうな顔で笑った。

間違っていないかった。

やっぱりこうなるのだ。姿を見せただけでこうなる。

やはり私たちはこういう存在なのだと言った。

「さすが空母が6隻、対空を気にしなくていいネー！」

そう言つて砲弾を吐きだすのは金剛だ。高速航行中とはいえ安定した弧を描き、敵艦隊のど真ん中に弾を落としていく。

「さすがは高速戦艦、足が速いな」

「当然ヨー！ 久々のカズキの部隊だもの、腕が鳴るわ！ コマンダータカミネ！ 次はどこに飛ばせばいいネー？」

《そろそろ敵の精度も上がっていくからなあ。近い敵から順番に潰していつてくれ。おそらく俺が指示を出すよりも金剛たちが自力で標的を選んだ方が精度は高いはずだ。くれぐれも味方を撃つなよ》

「じゃあ中央は一水戦の皆さんの花道デース。両脇の重巡から潰していくネー」

《了解……中央の突破は一水戦メイン、打撃群は残りのルートを潰してくれ。標的の割り振りはこちらでするかい？》

「それは旗艦の仕事！ 任せなサーイ！」

そう言つと金剛は振り返った。

「比叡と霧島で第二小隊、敵右翼の艦隊をお願いしマース、榛名は私と左翼を叩いてくれますカー？」

「わっかりました！」

「はい、榛名は大丈夫です！」

「利根さんたち重巡と長門さんは第三小隊、中央で一水戦の砲撃支援を続行してくだサーイ！」

「うむ、心得た」

「ビックセブンの力、久々に使えそうだな」

その答えを聞いて金剛が笑う。

「さっさと終わらせてモーニングティーと洒落込むネー！ 第一、第

二小隊、散開！」

「ハイっ！」

金剛型が二隻ずつに分かれて散っていく。金剛と榛名は左へ、比叡と霧島は右へ。それを横目に見つつ、長門を守るように陣取った青葉、利根、筑摩が前進する。

「全砲門開け。効力射で叩き込むぞ！」

長門はそう言って砲門を前に向けていく。波も少なくこの海ならば波でぶれることもないだろう。

「全砲門、斉射！ テーーツ！」

黒い煙を伴って遠くへ飛び抜けていく砲弾。それに合わせて重巡三隻の砲弾も前へ駆けていく。

「行け、一水戦。道は拓いてやる」

長門の言葉通りに一水戦の上を飛び越えた砲弾は轟音と共に進路に浮かぶ部隊を一掃した。

出来上がった道を水雷戦隊が駆けていく。35ノットという速力、彼我の速度差は時速120キロを軽く超える。その速度をもつて一気に本丸へとなだれ込む。

「さっすが長門さんたち！ このうちに飛び込むよ！」

「了解っ！」

先頭を曳くのは阿武隈だ。

《上空直掩を回してもらう、無理はしないで！》

「わかってるー！」

無線越しに合田少佐の声を聴く。それを聞いて阿武隈は笑った。

「いくよ、六駆、二十一駆のみんなついてきて！」

「了解！」

さらに速度が上がる、38ノット、隊が出せる全速だ。長門達の砲で処理しきれなかった駆逐艦などがこちらに向かってきていた。味方に近すぎる敵は撃てないからどうしても撃ち漏らしが出る。

《阿武隈、交戦を許可。暁と子日で相手の頭を押さえて！》

指揮を飛ばすのは正一郎だ。

「レディファーストって訳ね！」

「待つてましたあ！」

暁と子日はそう言つて前に出た。

《暁・子日を響・初春がバックアップ、残りの艦は阿武隈を先頭に奥の軽巡を叩いて。最速で切り抜けて「本丸」を叩く！》

「了解です！」

先頭の明瞭な視界で相手の砲弾を読んでいく。

「子日！ 左へ5メートル！」

子日が指示通りに動くときちょうど子日の右側5メートルに砲弾が落ちてくる。殺傷域のすれすれをなぞるようにして敵の駆逐艦と接触した。

「突撃するんだから！」

「ねーのーひーアタッククッ！」

暁に続いて子日が飛び出した。アタッカー二人の後ろをそれぞれ響と初春がフォローに入る。そこに生じた空隙に阿武隈が飛び込んだ。

「司令官、お願い！」

阿武隈のリンク率が上がる。武装の一部を合田正一郎少佐に預け、阿武隈は前を見据えた。軽巡が目の前に迫っている。

「——がら空きなんですけどおっ！」

両手首の砲を同時に発砲、相手にヒットして上体をぐらりと揺らす。そこに阿武隈の脇をすり抜けた雷が躍りかかった。手にした錨で正確に相手の横っ腹を砕き、進路を拓く。その奥には駆逐艦が二

隻、それを待っていたかのように砲を撃ってきた。錨を振りぬいたばかりで体制の整っていなかった雷に砲が向いている。とつさに電が足を払い盛大にずっこけたおかげで雷は何とか被弾を回避した。

「いったーい！」

「ごめんなさいなのですっ！」

その間に飛び出してきたのは初霜と若葉だ。雷と電を射線から庇うように立つとその手の連装砲を発砲相手に正確にダメージを叩き込んでいく。

「ほんつと、詰めが甘いんだから」

「大丈夫だ。私が守る。」

若葉と初霜が射線を塞いだあと、横から影が走った。

「しまかせからは、逃げられないよ！」

連装砲ちゃんがきつちりと相手に弾丸を叩き込み、進路は完全にクリアになった。

彼女らの前には敵の「本丸」しかない、最短の直線ルートに乗っていた。水雷戦隊の動きを止めようと両翼に展開していた敵の部隊が砲を向けようとする。その眼前に影が割り込んだ。

「この金剛型を目の前によそ見とは今年一番のジョークよネー」

至近距離で戦艦の主砲が閃いた。強い朝日の影で顔を塗りつぶした金剛は主砲の反動で艀装を大きく振り回しながら、その勢いを殺さずに回し蹴り、重巡を吹き飛ばす。

長射程と高威力が取り柄の戦艦が駆逐艦の射程の1/4以下の距離で戦うなどナンセンス。

だが、艦娘はその例外となりうる。艀装を背負う人型という特徴を活かせば至近距離でも戦える。

砲撃と艀装の重みと反動をうまく使った殴打を組み合わせ敵を文字通り蹂躪していく。

「金剛姉様！」

「大丈夫ネー！」

一斉に襲い掛かってくる駆逐艦に向かって、金剛は不敵な笑みを浮かべた。

この至近距離なら狙いもへつたくれもない。銃身を向ければ当たる。それぐらいの距離まで来ている。

まず二隻喰う。残り2隻は魚雷を放ってくる。いい判断だろう。戦艦相手に砲撃戦になれば勝ち目はない。それにこの距離なら砲が当たるように魚雷も当てやすい。

「でも、甘いネー。砂糖を入れすぎたミルクティーより甘いネー」

ここで金剛はあえて前進、魚雷の距離を測りつつ前に跳躍。魚雷の上を飛び越える。

その勢いでほぼゼロ距離まで踏み込んだ。踏み分けた水のカーテンで相手を脅かしつつ砲を振る。カーテンが解けるころには主砲が眼前に広がっていた。

「金剛型を相手にしたことを恨むがいいネー」

砲が閃けば文字通り跡形もなく消え去る駆逐艦。その瞬間に酔ってないといえは嘘になる。

「姉様ー」

後ろに駆逐艦が迫っている。ぎりぎりだが十分に対応できる距離だ。だが金剛の意志より先に艤装が反応した。

背負っている一番副砲が急速に回転。相手の喫水線目がけて砲撃を叩き込みその反動で体ごと半回転、それに驚いて行き足が遅くなつた駆逐艦と向き合うと同時に装填が終わっていた二番三番主砲が閃いた。相手が吹っ飛んでいく。

「……まったく、ダーリンは過保護なんだから」

直後に低空を艦娘の艦載機が低空を通過した。挨拶するように翼を振って反転する。

「姉様無事ですか？」

「当然ネー。久々にカズキのリンクが楽しめたワ」

そう言つて微笑んでから周囲を見渡せば一水戦が敵の本丸に近づいていた。その城郭を守る航空隊は艦娘六人がかりの航空機が総がかりで崩していく。

「カズキ、もしかしてあっちの指示をしつつこっちのサポートをしてたのかしら……」

「相変わらずというか、なんとというか……」

「カズキらしいと言えばカズキらしいネー。さて私たちは側面に回り込むワ！」

「はい、お姉さまー！」

金剛は本丸の位置を見つつ前進していく。

「比叡姉様、2時方向距離300」

「まっかせてー！」

長女と三女が乱闘騒ぎを起こしてるのを尻目に正攻法で攻めているのは次女比叡と四女霧島の第二小队である。艦装用のアームを小刻みに調整しながら一水戦に向かおうとする駆逐艦を確実に黙らせていく。

「それにしてもみみっちいですね。もっとドカーンと黙らせられませんか？」

「なら姉様、月刀提督に航空支援を要求しては？ 次、3時方向距離285、いや288」

「了解。でもなんだか月刀提督を頼るのは癪なんですよねー」

「どうせ、お姉様を盗られたようで嫌なだけでしょう？」

「……そうじゃないけど、たぶん」

「でもどこが気に入らないんです？ 優秀で出世頭、家柄もよく優しく紳土的、めったにない優良物件——データだけ見てもこれで、データ以上にすごい方だと思いますが」

「なんというか、どこか辛そうなんですよねー。あ、手前の落とすね」
お願いしますという霧島の答えを聞いて相手を沈めていく。

「辛そうというと?」

「うーん、なんだか提督、隠し事してるんじゃないかーと比叡の勘がね。それが金剛姉様を傷つけないかなと心配になる……この辺りの匂いは中路提督もしてたからそんなものかもしれないけどね」

「まあ、秘密の一つや二つ誰にでもあるでしょう? 気にしすぎのような気がします。データによると男女の——」

「あーはいはい」

霧島はロジカルな思考回路の持ち主だ。感覚で物事を考える比叡にとっては少々小うるさい存在である。でも霧島の言うことも的を得ているのだ。だからこそ、引つかかる。

「うーん、今考えていても仕方ないし……そろそろ相手も減ってきたし、距離を詰めましょう。金剛姉様も榛名も大暴れしてるみたいですよ」

「荒っぽいことは好きじゃないんですけどね」

「〃姉御〃霧島が何をいうやら。至近距離での殴り合いは一番強いせに」

「得意と好きは違うんですよ、姉様」

すこしげんなりとした表情の霧島が溜息をついた時、無線がつかまった。それを聞いて、比叡と霧島は顔を見合わせるようになった。

《私タチガ何ヲシタト言ウンダ!!》

「睦月」。潜水艦反応はー?」

語尾がだらつと伸びる独特なしゃべり方をするのは望月だ。あきつ丸の隣を並走しながら睦月は首を横に振った。

「大丈夫。反応自体クリーン。今は問題ないよ」

「防空戦一方だと不安にもなるんだけど、ねー如月」

「そうでもないわよ。高角砲なら応戦も楽だし龍鳳さんが守ってくれてるしね」

龍鳳の直掩に入っている如月が笑った

「でも確実を期するためにも気は抜かないでくださいね」

「わかつてる……」

無表情にそう言ったのは弥生だ。対空砲を撃つと敵機の編隊が散り散りになった。あとは戦闘機同士のドッグファイトの時間だ。

「でも。そうも言ってられない感じがしらー」

そう言ったのは龍田だ。頭の上の電探のアンテナがふらふらと揺れる。

「だな、こつちでも捉えた。航空隊が追加だ北東から35機、龍鳳だけじゃ辛いだろう?」

「プラス35はちよつと……ですすね」

「と言うことだ。前進するぞ、睦月如月ついてこい」

「はーい」

「髪が傷まなければいいけれど……」

天龍は対空砲を動かしつつ敵の航空隊と向き合う。前進しつつ狙いを付けていく。

《天龍止まれ! 射線に突っ込む!》

聞こえた高峰の声に一瞬あきれた声を上げた。

「あ、射線って――」

――なんだよ?と言おうとしたのだが、目の前をゴツ!!という音と共に何かが通過して声が止まる。

――あん?」

その直後、鼓膜が割れんばかりの勢いで空気の壁にぶつ叩かれた。衝撃波だと理解する前に、後ろから吹き付ける強烈な風に前につんのめる。一步前に踏み出すと空気自体が熱せられたのだろう。いきなり頬が火傷したように熱く感じた。

「あつちい！ なんなんだ、よ……？」

よく見ると接近していた35機が綺麗さっぱり消え失せている。あとその何かが通った後だけ海面から湯気が見えるのは気のせいだと信じたい。

《おまたせ！ やつと追いついたわ！》

その湯気の列をたどると遠くにだが人影が見える。

「あー！ あれって……！」

「兵装実験軽巡、夕張！ 只今到着しました！」

そう言うのはグレーの髪を緑のリボンでポニーテールにまとめた少女だ。夕張と名乗った少女を見て口をあんぐりと開けるのは睦月たちと天龍である。正確には夕張の持っている武装を見て口をあんぐりと開けている。

「ど、どうしたの……？」

「それって……！」

「いつぞや睦月が開発した謎兵器!？」

「ああ、これ？ 今、艦装研究開発実験団で試験中よ。そういえばウエークで開発できたんだっけ？」

そう。夕張の右脇には夕張の身長を超えるのではないかと思えるサイズの砲が搭載されていたのだ。他の艦装マウントにはなにも乗っていない。

「も、もしかしてとは思いますが……さっきの攻撃、それか？」

「ええ、これよ。もっと軽くできるといいんだけどねー。ってどうしたの？」

「——高峰中佐、警告遅いぜ」

《悪い。合田少佐のサポートに入ってた》

前の夏にウエーク基地で開発された謎兵器、正式にOIGAMIと名づけられたそれを簡単に説明するなら特大の榴弾砲だった。ただ

し子弹が詰まった榴弾を衝撃波で海面を割り、大気との摩擦熱で射線上を灼熱に変えるほどの超高速で撃ちださなければの話である。もはやその発射体プロジエクトイルの速度自体が最大の脅威だ。

「夕張、よくその反動殺せたな」

「実験軽巡舐めないで。こんなの苦勞の中に入らないわよ。まだ扱い楽な方よ、これ」

「うわ、艤装実験団恐ろしや」

ふんす、と胸をはる（どこかはりが足りないのはご愛嬌である）夕張は砲を軽く振る。如月は試験に挑んだ暁がこの反動で15メートルほど吹っ飛ばされ砂浜に埋没したことを思い出していた。それをここでさらつと使ってくる夕張に正直脱帽だ。

《おーい、そろそろ任務に戻ってくれ》

「あ、わりい。すぐ戻る」

高峰にせかさされるようにして天龍が踵を返す。

「で、もっと試し打ちしたいんだけど……」

「対空目標が飛んできたらな。それ対艦兵装として使われると、ミンチよりひでえや」って事態にしかないから。……くっそ、おれの電探も持っていきやがって」

衝撃波と急激な加熱で電探がぐずってるらしい。天龍に片手で詫びると夕張は対空目標を探し始める。どうやら本当にもっと撃ちたらしい。

「そういえば武蔵もいっしょじゃなかったのか？」

「今打撃群の方に向かつてるわ」

「そうか。まあ妥当っちゃ妥当だな」

天龍が笑ったタイミングで無線が走る。作戦共通周波数帯で流れる聞きなれない声に天龍は眉を顰めた。

《私タチガ何ヲシタト言ウンダ!!》

その声を聴いた時、電は息を止めた。

この声のアクセントに聞き覚えがある。忘れるわけがない。MI
撤退戦の時のあの声と同じだ。だとしたらこれは――

深海棲艦の声だ。

《何ガ楽シクテ私達ヲ屠ル!? 私達ガ貴様ヲニ何ヲシタ!?》

「え、どういう……」

阿武隈の困惑した声が響いた。周りも状況がつかめていない。

「攻撃が……止んだ?」

すでに海域の深海棲艦は敵の本丸、北方棲姫とその周りの駆逐艦3
隻のみまで減っていた。航空隊の攻撃も止む。戦場に奇妙な空白が
生まれた。

混乱からの回復が早かったのは暁型の面々だ。一度あの声を聴い
ている。

電が僅かに加速する。

「電……?」

「こちら電、月刀大佐、応答願います」

《……どうする気だ?》

電は砲を向けたままわずかに笑った。

「深海棲艦との接触の許可が欲しいのです」

そう言うと電は後ろを振り向いた。それぞれが不安げな表情を浮
かべる仲間を見回してから口を開いた。

「あの子は、あの深海棲艦はもしかしたら、ううん、たぶん間違いなく

戦いたくないと思っっているのです。だとしたら戦わないですむ方法があるかもしれません。……交信と接触の許可を頂けませんか？」

「危険だ！ そんな危険なことをさせる訳には——！」

響が叫ぶがそれを遮るように電も叫ぶ。

「今のままじゃ！ いつまでたつても戦争は終わらないのです！ 相手が戦うことを嫌だと言っているのなら、こちらも攻める理由もなくなる、お互いの妥協点も見えてくるかもしれないのです！」

《……電、接触の許可と言ったな。直接至近距離で話し合う気か？》

「はい」

《危険だつてわかってるか？ その至近距離ではこちらの砲撃カバ―も見込めん。相手が攻撃してからの応戦だと間に合わない可能性が高い。それでも飛び込む気か？》

「はい」

その答えを聞いて不安げに瞳を揺らすのは響だ。

「電、電の考えはきつと正しい。でもね、それが電を殺すことになるなら。私はそれを認めない」

「それでもいなづまはそうするしかないと思うのです」

その答えに響は言葉を切った。即答だった。こういう時の電は意固地だ。

《司令官、俺も電の意見に賛成だ》

「天龍まで何を言ってるんだ！」

無線に割り込んだ援護射撃に響が反応する。

《月刀司令官よお、もう少し電たちを信じてやれ。——お前が来るまでの電は演習でも実戦でも文字通り使えないヤツだった。守れもしなければ攻めれもしない、戦争に向いてない優しいだけが取り柄のヤツだった》

ここまで言われると電も少し不満が募るが無線の主導権は天龍が

握ったままだ。

《それをお前が育てたんだ。お前が救ったんだ。そんな弱つちかつたやつが今じゃどうだ？ 戦艦相手でも空母相手でも戦えるだけの力をつけた。広い視野と柔軟な思考を武器に部隊を指揮する能力ならだれが相手でも絶対に負けねえ。俺はそう思ってる。そんなやつが戦いを終わらせるきつかけを掴んだかもしれないねえんだ。深海棲艦が現れてから10年間、誰も手が届かなかったことだぜ？ ずっとお前の命令に応えてきただろう。十分すぎる成果を残してきただろう》

だから司令官、と天龍は言葉を切った。

《自信をもって背中を押してやれ。その部下の功績に胸を張れ。それが上官つてもんだらう》

天龍さん、と電は無線に乗せずにつぶやいた。

《電、俺は信じてる。俺は戦うしか能のない馬鹿だからよ、戦わなくて済む世界なんて想像できないし、つかめない世界かもしれないねえ。でもお前ならできるはずだ。だから自信を持て。お前は間違ってる。お前が間違ったら俺が叱ってやる。誰かに頭を下げなきゃならなくなったら一緒に下げてやる。だから今は、自分の信じるベストなことを納得するまで突き通してこい》

無線が僅かに沈黙した。溜息をつくような気配、もしかしたら誰かが笑った気配。

《赤城と加賀、蒼龍の艦爆隊は上空待機。飛龍の艦攻隊は北方棲姫東側2キロでホイールワゴンを維持して待機しろ。打撃群はすぐに砲撃可能な状態を維持》

「司令官、正気かい？」

《正気でこんなことができると思うか？ だが、目が覚めた。——

電、戦術リンクを予備回線オルタネートに切り替える。できる限りのサポートはするがなにが起こるかかわからん。響の言う通りでもある——

——もしそれで電が危険だと判断したら相手を問答無用で叩き潰す。それを間近で見る覚悟はいいいな？》

「わかりました——司令官さん」

電は胸に手を当てる。

「——見ていてくれますか？ いなづまのそばにいてくれますか？」

その問いに無線の奥が笑う。

《ああ、見ている。リンクを切るな。絶対だ》

その答えに電は頷く。その後無線の奥にはいと告げた。

戦術リンクを予備回線に切り替える。その反応が強くなる。ほぼ最大強度、自分の中に司令官の存在を感じるほど、強く共鳴した。

《——電、接触を許可する》

「はい。——こんにちは。はじめまして。深海棲艦さん。少しお話しがしたいのです」

《——こんにちは。はじめまして。深海棲艦さん。少しお話しがしたいのです》

電の問いかけを無線越しに聞く。航暉は目を閉じ、電の声に集中する。

「あきつ丸、撮れてるな？」

「全データ収集集中なのであります」

「高峰、お前は戦術リンクから抜ける。万が一のことがあった時に備えてくれ」

CICの中で航暉はそう言った。高峰が驚いた表情で見てくる。

「深海棲艦との通信なんて初めての事態だ。何が起こるかわからん」

「——それをわかって最大強度でリンクするか、普通」

「普通なんて異常を内包するものさ。——俺に何かあった時は、頼む」

「あいよ」

高峰はQRSプラグを引き抜くとモニターの監視に入った。

「合田少佐も身代わり防壁噛ませてるな？」

「当然です。こんなところで死ぬわけにもいかないのです」

「別系統で入ってるとはいえ油断するなよ」

「わかってます」

《——帰レ！ 私達ハ静カニ暮ラシタイダケダツタンダ》

無線に反応が入る、その声に全員が肩を強張らせていた。航暉は電の視覚情報を流し込んだ。遠くに幼子にも見える影が立っている。艦装には所々に穴が開いている。——おそらく金剛たちの砲弾が開けた破孔だろう。

《私達ハ生キテイタカツタ。タダソレダケダツタ。ナノニ、オ前達ガ撃ツテクルカラ、皆死ンデイツタ。ルナモ、ソルモ、ラジエンドラモ、ミンナ、ミンナ、オ前達ガ沈メテシマツタ！ 長ノ私を守ツテ沈メテシマツタンダ！》

電がその声の主——北方棲姫の下へと寄っていく。

《クルナツ！》

『わかりました。これ以上は寄りません。でも、もう少しだけ話を聞かせてほしいのです』

電の砲塔は明後日の方向で固定され、魚雷発射管も上向きに固定されたままだ。攻撃の意志がないことを伝え両手の手のひらを相手に見せる。武器を持っていないことの証明だ。

『あなたは戦いたくない、できるなら平和に暮らしたい。そうですね？』

《ソウダ！ ナノニオ前達ガソレヲ許サナカツタ！》

『……もしかしたら、あなたたちも私達も、間違っていたのかもしれないな

いのです。私達も平和に過ごしたい。そう思っているのです』

《嘘ダ！ ナラ、何デ撃ツテクル!? ドウシテミンナヲ殺シテシマウ!?》

『それは……』

北方棲姫の方から一步前に踏み出した。航暉は隣の管制卓を見やる。電以外の艦を監視している合田少佐に目で待てと伝える。まだだ、まだ電の交渉は続いている。

『私たちがあなたたちの言っていることを理解できたのは本当に最近のことなのです。あなたたちがこの言葉で声をかけてくれるようになってから、それからの話です。今でもなんであなたたちが私たちと敵対しているのか、お互いどうすれば戦わないですむのか、わからないです』

敵の駆逐艦がすつと距離を詰めた。それでも電は武装のロツクを解かない。

『あなたの知り合いを私たちは沈めてしまった。きっとあなたは悲しんでいるし、私たちを憎んでいると思うのです。私たちにもあなたたちの仲間の攻撃で沈んでしまった仲間がいます。私と一緒に過ごしてきたある子も沈んでしまいました。その時は悲しくて悲しくて、弱い私は泣いていることしかできなかったのです』

電は思い出す。

駆逐艦『疾風』。風見大佐隷下の第551水雷戦隊で電のパートナーを務めてくれた艦娘だった。電はその日は出撃できず、彼女の最期を看取ることはできなかった。回収できたのは奇跡的に無傷だったバレッタとへしやげた主砲、それにくっついていた右手の人差し指のみ。帰ってきた仲間を見て、電はただ泣いていることしかできなかった。三日三晩は食事も喉を通らず、バレッタを握りしめて泣くしかできなかった。

『死んでしまった人はもう帰ってきません。いくら泣いても、いくら怒っても、帰ってこないのです。相手を倒しても、帰ってこないの

す』

その時、同じ部隊だった睦月と一緒に泣いてくれた。如月は黙って肩を抱いてくれた。天龍は半ば狂ったように出撃しその時の残党を狩りつくした。それでも疾風は、電のパートナーは戻ってこなかった。電の手元にはバレッタと思い出だけが残った。そのバレッタは寝るとき以外はいつもつけるようにしている。弱い自分を忘れないために、彼女を忘れないために、今もつけている。

『だから恨むなどはいけません。泣くなどいいません。でも、今からできることを探すことはできると思うのです。みんなが笑って過ごせる海を作ること、それをするために何をすればいいか考えることはできると思うのです』

電はそう言うのとゆっくり前に進み出た。護衛の駆逐艦が止めるべきか否かを迷うように揺れる。

『もしよければ教えてください。あなたの大切な人は、できるなら平和に暮らしたいと言ったとき、何をしてくれましたか？』

北方棲姫は僅かに俯いた。

《……イイ夢ダツテ言ツテクレタ、頭ヲ撫デテクレタ》

本当に大切にしてもらっていたのだろう、その大きな双眼に雫が溜まる。

《叶ウトイイネツテ言ツテクレタ。ソノ時ハ一緒ニ散歩シマショウツテ言ツテクレタ！ ミンナデ遊ボウツテ言ツテクレタ……い！》

『きつと分かり合える、話し合えると思うのです。今だつてこうやってお話できているなら、きつと、きつと話し合って戦いを止めることができると思うのです。そうすればみんな楽しく過ごせる海になると思うのです』

もう手の届く距離まで来た。本当に小さい幼子だ。電よりも小柄だろう。

『すぐに仲直りとはいかないと思うのです。でもいつか仲良く暮らせる海になるって、私は信じているのです。だから、握手から始めませ

んか?』

電はしやがみ込み右手を差し出した。

『すぐに友達になれないし、お互い怖いこともつらいこともあるのです。でも、戦いはもうこりこりだ、もう戦争をやめにしようって思っているところはいつしよだと思うのです。だから一緒に戦争を終わらせていくために頑張っていてこうねって握手をしたいのです』

北方棲姫は手を伸ばして、それから躊躇った。

《——信ジテモ、大丈夫?》

『信じてほしいです』

《戦争ヲ終ワラセタイノハ、嘘ジャナイ?》

『嘘じゃないです』

北方棲姫はそれからゆつくりとミトンのような手で電の手にそつと触れた。

《——アナタノ、名マエハ?》

それを聞かれて彼女は微笑んだ。

『いなづまです。あなたは?』

《名マエ、ナイケド、〃ヒメ〃ツテ呼バレテタ》

『じゃあ、ヒメちゃん。これからよろしくお願いします』

そつと手を放し、電は北方棲姫——ヒメを見て微笑んだ。

『ヒメちゃんはこの後どうしたいですか?』

《——デキレバ、モウ戦イタクナイ。デモ、戻ル所モ、ナイ》

ヒメはそう言って俯いた。電はゆつくりと口を開く。

『戻るところがないってどういうことなのです?』

《前ノ場所ハ、追イ出サレタ。一緒ニ来テクレタ人モイナクナツタ》

『前の場所って?』

《アクタン》

アクタンと言えばさらに東側、南北アメリカ方面隊の管轄地でそこから側の激戦地だ。どうやら地名の認識はある程度人間側と一致しているらしい。

航暉はそこまで聞き、振り返った。後ろには高峰が立っている。

「……………どう思う?」

「感情の上下はあるが理性的で自制もできている。精神年齢的にはおそらく10歳前後相当——いや、もつと上。口調に騙されそうだがかなり思考が発達しているな。ディスインフォメーション 偽情報の可能性もある」

「騙すつもりも無きにしもあらず、か」

「だがおそらく本当だ。声を聴いている限りではという条件付きだから確証はない」

高峰はそう言って腕を組む。

「話は極東方面隊だけのレベルを軽く超えるはずだ。深海棲艦との意思疎通に成功、かつ友好関係の兆しありとなると世界発だろう。この面子でどうにかできる問題じゃない。——とんでもない爆弾を拾い上げたな」

『ヒメちゃんはその後行くあてはあるのですか?』

《……ドコニ行ケバイインダロウ》

ヒメと電の会話も続く。それに耳を向けつつも航暉は口を開く。

「判断材料が少なすぎる。だが今決めなければ期を逃す、か……」

航暉は司令卓に向き直った。

「北方棲姫を確保する。万一にそなえて打撃部隊は砲撃用意。電、ヒメちゃんに一緒に来ないか伝えられるか?」

『……ねえ、ヒメちゃん。行くところが無いならいなづまたちと一緒に行くっていうのはどうでしょう?』

《……一緒?》

『はい。もしかしたら戦争を終わらせるために何かできることが見つかるかもしれないのです。いなづまよりももつと頭のいい人が沢山いるのです。その人たちと相談したりしながら考えていきますせんか?』

うまい、と航暉は内心舌を巻いた。ヒメは悩んでいるようなそぶりを見せる。

《……一緒ニ行ケバ、戦争ガ終わる?》

『すぐには無理なですけど、早く終わらせるための手伝いぐらいならできると思っています』

《……》

再び沈黙。航暉は背中がじつとりと汗で濡れるのを感じていた。

《……ワカッタ。イナヅマト一緒二行ク》

「——シヤッ！」

高峰、ガッツポーズ。その間にも航暉は電だけのリンクから全部隊へのリンクに切り替える。

「月刀より全艦、電が北方棲姫——正式名“ヒメ”の説得に成功。ヒメを監視しつつ南下する。一水戦と打撃群は電とヒメを先頭に艦列を組め。進路1—9—5、速度は25ノット以下に抑えろ。航空隊は燃料の少ないものから順次補給、上空に常に艦爆15と艦戦を待機させるんだ。電たちの入港先及び時間は追って連絡する。事態が急変する可能性もある。551と夕張はそのまま護衛任務を続行してほしい。護衛艦群はヒメとの距離を維持したまま航行する」

《こちら打撃群旗艦金剛、了解デース！》

《一水戦阿武隈、了解です》

《機動部隊赤城、了解しました》

《551天龍、了解だ》

帰ってくる答えを聞きながら航暉は額の汗をぬぐった。

「極東方面隊総司令部に緊急通信を繋ぐ。あきつ丸、今のデータ、添付できるな？」

「当然であります！」

「とんでもないお土産付きになったな」

航暉はそう言って急告を届けるべく通信回線を開くのだった。

クリリスクに帰港したのはあの日から数えて三日目の真夜中のことだった。難民たちは船から降りた後択捉島の難民キャンプに合流した。かなりの人口密度になっているので、急ピッチで拡張工事をしているらしい。

ヒメはとりあえず単冠湾に連れていき国連海軍の監視下に置かれることになった。ヒメは長門とも打ち解けたので（意外に打ち解けるのは早かった）長門が相手をしつつ情報を探るといのがとりあえずの方針だ。日本だけでなく各国の有識者が集まった緊急対策チームが結成されて国連海軍総合司令部の主導で進むことになるそうだ。

中路中將は意識が回復したものの、言語障害が残ったらしい。その経緯についての調査が入っているが、延々として進まないでいる。慎重な調査云々などと説明されているが、ヒメ事案が飛び込んだためそれどころじゃないというのが本音だ。それよりも空いた西部太平洋第一作戦群司令長官の椅子に誰が座るかという椅子取りゲームのほろが面白いらしい。

これがヒメ事案と軍部で呼ばれるようになり、作戦が一通り終了してからあつという間に2週間がたった。

その合間にバタバタと世界が動き回る中その中でひっそりと――

合田正一郎少佐の処分人事が下された。

「大尉への降格処分と減俸3カ月、艦隊指揮権の剥奪、か……」
ウエーク島の暗い司令官室の中でぼつりと正一郎はつぶやいた。
南国の気候はまだ熱い。ジャケットは脱いでワイシャツ姿の正一郎
は大きなボストンバッグに私物を詰め込んでいる最中だ。

彼には1週間の猶予が与えられた。その間に引き継ぎ書類を作成
し私物をまとめなければならぬ。次の正式な551水雷戦隊の指
揮官は決まっていない。正式に決まるまでは航暉が兼任すること
になっている。

「次は後方支援部の補給部門かあ、書類多そうだなあ」

ここに着任して三か月弱、短い間だったがかなりの忙しさだったと
思う。前線の忙しさから離れることも必要なかもしれない。そう
切り替えなければやってられないのだ。

この処分も脱走していろいろやったことを鑑みると驚くほど軽い
処分だった。文句は言ってられない。いきなり放り出されるわけ
じゃないし次の仕事もある。食いはぐれることもないなら次の仕事
に飛ぶべきだ。そう割り切った。

「司令官……」

551水雷戦隊司令官室に入ってきたのは阿武隈だった。

「どうしたの？」

「明日……行っちゃうんですよね？」

「……うん」

ゆつくりと頷いた。阿武隈を少し見上げる視線。いつもの距離だ。

東向きの窓からは上がったばかりの満月がぼつかりと光を落とす
ていた。四角く切り取られた月光のキャンバスに阿武隈の影が落ち

る。

「明日で、さよなら……なんですよ」

「うん。今度こそ、さよならだ」

寂しげにそう笑った正一郎の前で阿武隈はぼろぼろと涙をこぼした。慌てる正一郎。

「あ、阿武隈っ!？」

「ごめんね、司令官。さよならだってわかっているのにどうしてもどうしても言いたいことがあったんだ。最後に阿武隈のお願い、聞いてくれますか?。」

「僕にできることなら、何でも」

そう言うと正一郎は阿武隈と向き合うように立った。阿武隈は彼の肩にそつと手を置いてそのまま抱き寄せた。緊張して彼の体が一瞬強張ったが、すぐに力を抜いて抱き込まれるのに任せた。

「司令官、ううん。合田正一郎さん。私は貴方が大好きです」

目を閉じて、そっくりきつた。

「そっか……」

彼も彼女の胸で目を閉じていた。

「はい、大好きです。ずつと好きでした。今も大好きです。きっとこの後も大好きだと思います」

そう言って阿武隈は彼の頭を抱き込んだ。強く抱きしめる。それでもしないと切り切る前に決心が揺らぐ。

「だから、今晚だけは、私の司令官でいてください。私だけの司令官でいてください。そして、明日、私の指揮から外れたら——」

阿武隈は彼の体を抱きしめたまま天井を仰いだ。

「——私のことは、忘れてください」

それが阿武隈の最後のお願いだった。彼は抱かれたままつぶやいた。

「覚えてるのも、ダメなんだ……」

「私は司令官には幸せになってもらいたい。絶対に絶対に、幸せになってもらいたいんです。だから私じゃダメなんです。私じゃ司令官を幸せにできないんです……!」

ダメだ、阿武隈は自分の中で何かが決壊するのを感じた。抑えることができない。

「私は軍の備品なんです。水上用自律駆動兵装、艦娘、CLINGO 6。だから、司令官の部下じゃないと一緒に過ごせないんです。明日からはもうどんなに頑張ったって赤の他人の關係にすら届かない、軍人と備品の關係に戻るんです」

納得したはずなのに。これがベストのはずなのに。

「司令官には私よりももっと可愛くて優しい子が似合います。これから司令官は大きくなってきつと素敵な恋をして、いろんなことを知って、泣いて、笑って……もつと素敵な男の人になるんだと思います。だから私よりもっとあなたにぴったりな人を見つけてください」
どうして涙が止まらない。

「司令官のいる世界なら、私は戦えます。あなたのいる世界なら守れます。兵器の最期なんて、壊されるか捨てられるかで終わってしまう。それは私も怖いけど、司令官の世界を守るためなら、私はそれでもいいんです」

鼻をすすって言葉を飲み込んだ。

「だから明日になったら、忘れてください」

正一郎は静かに彼女の肩を押して腕をほどいた。

「わかったよ、阿武隈」

その答えを聞いて彼女は笑った。

ああ、これでハッピーエンドだと笑った。

「でも、ダメだ」

その瞬間に攻守が切り替わる、阿武隈に抱き着いた正一郎が声を荒げた。

「僕も好きだよ！ 阿武隈が僕のことを好きだって思ってくれるよりずっと前から好きだったよ！ 海大の時も！ 父さんが死んだ時も！ 551でも！ ずっとそばにいてくれたのは阿武隈じゃないか！ 何回阿武隈に助けられたと思ってるんだ！ 明日になったら忘れる？ 大好きな人を忘れられるほど僕は器用な人間じゃない！」
その後は嗚咽交じりの泣き声だけが部屋に響く。

どれだけの時間が経つただろう。

「……阿武隈」

「なあに、司令官」

互いに赤く腫らした目を向け合った。

「必ず、戻ってくるよ。大尉としてキャリアを積んで、海大をイチからやり直して、戻ってくる。それまで、待っていてくれる？」

それを聞いてくすと笑った。大好きな男ひとにそう言われたら、答えなんて一つに決まっている。

「私的にはオツケーです、司令官」

「ははっ、やっと笑った」

正一郎の言葉に笑っていることを知る。

「本当は逆なんだろうけど……」

彼は踵を浮かせ阿武隈の首に手を回した。

月明かりはその二人の輪郭を映し、その影は際限なく近づいて、触れあった。

「しばしの間のお別れとはいえ騎士と王女に必要でしょ？」

「まったく、おませな司令官なんだから」

笑いあっている所でいきなりあたりが明るくなって二人ははつと
する。電気スイッチの方を見るとスイッチを押したのはどこか意味
深な笑みを浮かべた如月、その隣では顔を真っ赤にした睦月、ドアの
向うには暁型の面々と天龍龍田の姿も見える。

「仲いいところ悪いけど合田司令官の指揮官退役記念パーティの料理
ができたわよー?」

あらあらと言いたげな笑みでそう言う如月に酸素不足の金魚の如
くパクパクと口を動かす阿武隈。

「も、もしかして……見てた?」

「ええ、ばっちり」

「ど……どこから?」

「明日でさよならなんですネ、あたりからかしらあ」

さらっとそう言うのは龍田である。

「ほぼ全部じゃない!　くくくくくくくくくくくく!」

顔を真っ赤にして如月たちに襲いかかる阿武隈。

「人の恋路を邪魔して楽しいかあああああ」

「楽しいわよ〜!」

逃げる野次馬追う阿武隈。残された正一郎は一人で笑いをかみ殺
した。

——ああ、今頃になって名残惜しくなってきた。

「指揮官復帰は最速で1年半後、かあ……」

長いようで案外短いものだ。そう思いながら合田正一郎は阿武隈かのじよ
の後を追いかけるのだった。

て

「もー我慢ならんわっ！」

暁は司令官の机をバンと叩いてそう叫んだ。

「ど、どうした？」

「どうしたもこうしたもないわ！ 初春よ！」

「……あー」

半分納得したような曖昧な表情をした航暉は僅かに距離を置くように上半身をそらした。それすら暁は間を詰めるように身を乗り出してくる。

ヒメ事案にあたる専門チームが到着し、航暉たちがウエークに帰れる日が見えてきたちようどその頃、近海警備から帰ってきてそのまま臨時の司令室にやってきた暁が航暉につめよっているのである。

「あー、じゃないわよ！ 初春ってばレデイのことを “こぼか” にしたように笑って。頭をなでてくるのよ！ レデイに対する扱いじゃないわ！」

荒くなった息がかかりそうなほどの近距離で暁はそう叫ぶ。

「そこでよ司令官！ 協力してほしいの！」

「きよ、協力っていつてもなあ……」

「どっちがレデイに相応しいか、勝負してはつきりさせてやりたいの！」

「勝負、ねえ……」

「もちろん戦いもそうだし料理とか教養とかレデイが身に着けておくべきものでも勝負するの。司令官にはその許可を取り付けてほしいの！」

初春の所属は北方第二作戦群であり、指揮は完全に別系統だ。戦闘なら演習ということでもなるとかなるだろうが、そのほかについては正当な理由を提示して先方から許可をとって、それを上層部に承認してもらってとかなりめんどくさい。主に正当な理由を提示してのこ

ろがめんどくさいのである。

「……レディなら相手を許容する余裕も大切だぞ？」

「でもでもでもっ！」

「——なにやら面白そうなこと話してますね」

やんわりと諦めるようになだめていると暁の後ろから声がかかった。

「ああ、青葉。ヒメ事案の方で不眠不休らしいけども体は大丈夫なのか？」

「はい、もうぴんぴんです。いざとなれば24時間フル稼働できる記者魂をなめてもらっちゃ困りますよ」

「そこは艦娘魂と言った方がいいと思うわ……」

暁が遠慮がちに突っ込んだが、それを気にせず青葉は笑う。

「さっきの話ですけど、初春さんたちと合法的かつ公式に勝負できればいいわけですよね？」

「青葉さん協力してくれるの？」

「ええ、面白そうなので、青葉、一肌脱いじゃいます！」

その笑みを見てちよつと背筋が冷えた航暉だが、この時はそれ以上突っ込まなかった。

その次の日、極東方面隊広報局からの正式要請で駆逐艦代表者同士による多種目競技会が“中部太平洋大規模合同総合演習”の名目で作戦スケジュールに組み込まれているのを見て頭を抱える航暉の姿が見られたという。

「それでは、第一回駆逐艦コンペ、いえ、〃中部太平洋大規模合同総合演習〃開催しまーす！ 司会は私、重巡洋艦娘〃青葉〃と」
「衣笠でお送りします！」

マイクを手にそう宣言したのは見ての通り青葉型コンビである。カンペ要員が拍手！と書かれたスケッチブックを掲げて高い天井の部屋にぱちぱちと音が反響する。拍手の音の出どころは設えられた客席に座ったそれぞれの部隊の僚艦や部隊関係者だ。

ここは横須賀鎮守府内、後方支援部広報局のスタジオ。張りぼてのセットにテレビカメラ3台、たくさんのライトに照らされたホールを眺めて航暉は改めてこめかみを押さえた。彼がいるのは客席最後尾。できるだけ目立たない位置に陣取っていた。

「広報材料の提供ってことで話を付けたにしろ、ここまでやるのか……？ しかも今何時だと思つてやがる。ちようど起床が今頃じゃねえか」

「いいじゃない、面白そうで。それに早起きは三文の得つていうじゃない」

「暁お姉ちゃんの晴れ舞台ですし見ない訳にはいかないのです」

その航暉の隣でケラケラと笑うのはこの舞台を青葉と共に嬉々としてセッティングした高峰春斗中佐だ。反対隣では電もちよこんと椅子に腰かけ成り行きを見守っている。

「結構みんなやる気じゃない。たまには娯楽も必要だよ」

「合同演習にこんなセットを作るなんて聞いたことないがな」

「まあ、そうなるな」

そう言っている間にも青葉はハイテンションに進行役を務めていく。

「今回は艦娘の皆さんのいろんな一面を掘り下げようと言うことで現役駆逐艦娘3名の方にいろんなクイズやトリアルに挑戦してもらいます」

「クイズとかトリアルという？ 青葉さん」

「たとえばそうですね。駆逐艦や艦娘についての問題だったり、演習

をしてもらったり、あとはそれ以外のスキルについて、いろいろなことに挑戦してもらおうと思います！」

「それは楽しみですねえ！　それでは今回演習に挑戦してもらおうお三方を紹介しましょうか」

「そうですね、では今回の参加者はこの三人です、どうぞ！」

一斉にカメラがパンしてセットに入ってくる艦娘を捉える。

「あっちゃー。暁、右手と右足同時に出てる」

「運動会の行進って感じだな」

「お姉ちゃん……」

カンペで拍手！と出ていることと、部下が出ているので航暉は手を叩きながらも苦笑いだ。頭を抱えているのは電である。

「可愛い子ちゃん揃いだけど、この子たちも艦娘なの？」

「はい！　我が国連海軍極東方面隊が誇る駆逐艦、その中でも歴戦の一番艦のお三方です」

青葉はそう言って一番左端に立っている艦娘に近づいた。

「まずは縁の下の力持ち、睦月型の一番艦、睦月さんです！」

「こんにちは！　睦月です、対潜哨戒ならだれにも負けないのです。よろしく願います！」

睦月頑張つてーと声援が飛ぶ。応援幕まで持ち込んで何してんだとか、いつ作つたんだよとか航暉はいろいろ突っ込みたい。特に如月、お前いつそのチアのコスプレ手に入れた？

「睦月さんは商船の警備とかで広い太平洋を飛び回ってるそうなのでもしかしたらあったことある人もいるんじゃないでしょうか？　駆逐艦娘の中でも古強者の域に入る彼女の活躍に期待です！　さてさ

てお隣は中部太平洋第一作戦群の暁型ネームシップ、暁さんです」

「暁よ。一人前のレディーとして頑張るわ。よろしく願います」

暁はちよこんとスカートをつまみお辞儀をした。カテーシーをまねたらしい。おかげでスカートの下が見えそうになったがぎりぎりで止めていた。

がんばれー！　と声が飛ぶ。声の出どころは最前列、雷と響が出張っている。手にはやはり横断幕。だからそれをいつ用意した。

「第一作戦群というと領土奪還をメインとする攻撃部隊！ その実力者と言われる暁さんの活躍に期待しましょう。最後は北の海から緊急参戦！ 北方第二作戦群から初春型一番艦、初春さんです！」

「わらわが初春じゃ、よろしく頼みますぞ。強者揃いの初春型の名を穢さぬよう全力で取り組む所存じゃ」

そう言つて扇子を広げる姿はどこかさまになつていて違和感がありないうのだからすごい。それに指笛が飛ぶ、意外なことに若葉の指笛のようだ。頑張れー！と両手を振るのは子曰————せめて艦装は置いて来い。

「北方の激戦地で戦つていらつしやつた初春さんの活躍を見れるのが楽しみです、青葉、わくわくしちやいます！ それではさつそく演習を始めてまいりましょう！」

航暉は青葉のハイテンションな宣言に溜息をついた。

「ここに居る皆さんは一流の方々ですから当然こちらのセットも一流のものを用意させてもらいました。今からあなたたちが一流の駆逐艦に相応しいクイズや実技で応えてもらいたいと思います！」

赤いビロード地の椅子に腰かけた三人に説明を加えていく。そのわきでは着々と用意が進められている。

「それでは最初の演習に入りましょう。最初に挑戦して頂くのはクイズです。第二次世界大戦期以降の簡単なクイズに答えてもらいます。ジャンルは艦娘として身に着けておくべき基礎知識から暗号解読まで幅広く用意してるので頑張ってください。問題は全部で10問、7

問以上で合格点です」

「もし7問未満しか答えられなかったらどうなるのじゃ？」

「『それなり』の対応に変えさせていただきます」

「なるほど、生き残りをかけたバトルロワイアルって訳ね」

青葉は暁の言葉に上機嫌でその通り！と答えるところで出題者をお呼びしましょうと誰かを呼んできた。みな拍手で迎える。

「今回の問題は軽巡洋艦の夕張さんに作成してもらいました！」

「よろしくお願ひします。解き終わったら後で感想きかせてね」

夕張はそう言うとういんくを送る。スタジオの隅でそれを見ていた航暉は『そういえば睦月と夕張は仲良かったな』と思ひ出していた。

「それじゃあ、フリップボードはいきわたってますね？ それじゃあ第1問から参りましょう。夕張さんよろしくです！」

「はい。では第一問ね」

そういうと後ろの液晶に文字列が表示された。

問1 以下の部隊と指揮官の称号、階級を適切に組み合わせ部隊規模の大きい順番に並べ替えなさい。(称号と階級の重複使用は可とする)

部隊——水雷戦隊 連合艦隊 駆逐隊 機動部隊

階級——大佐 少将 中将

称号——司令 司令官 司令長官

「おお、最初は並べ替え問題ですか」

青葉がそう言うとういんくは嬉しそうにはい、と答えた。

「どんな部隊を指揮しているかで相手の称号が変わるので注意が必要です。今回は第二次世界大戦期の日本海軍の階級で並べ替えてくださいね」

そんな会話をしている間にもペンはさらさらと動いていく。一瞬悩むそぶりを見せたのは暁だがそれでも何かを書きつけペンを置く。

「はい、では皆さん回答をオープン！」

何が書かれてるかを青葉が軽く見ていく。

「ふむふむ、ふむふむふむ。全員同じ答えに至ったようですねー」
そう笑って回答を確認すると上から

連合艦隊——中将——司令長官

機動部隊——中将——司令長官

水雷戦隊——少将——司令官

駆逐隊——大佐——司令

となっている。

「さてさて夕張さん、判定は？」

わざわざドラムロールを鳴らして間を伸ばすあたりどこか安っぽい。
「——正解です！」

暁、ガッツポーズ。残りの二人は笑みを浮かべるにとどめた。

「さすがにこの辺りは間違えませんねー」

「当然よ。レディーに死角はないわ」

そう言っ胸を張る暁に航暉はカメラの外で少し不満げな表情を浮かべている。

「そう言う割にはいまだに俺を司令官呼びなんだよなー。一応戦隊3つをまとめる司令長官クラスの指揮権持つてるんだけど」

「まあ階級的にはお前 “司令” だし」

そう言う高峰は駆逐艦長クラスだろうが、と航暉は笑う。

「司令官って呼ばれるの、嫌なのです……？」

「いやって訳じゃないんだけどね」

航暉の笑みがバツの悪いものに変わる。電も航暉のことを司令官呼びである。

「まあ艦娘の部隊は既存の括りで語るの難しい。それにこの問題も艦娘部隊の実情に触れないように “工夫されてるからこれが実情って訳じゃない。下手に機密に触れちゃまずいし”」

航暉がそう言うとうと高峰もフオローを入れてくれた。

「水上用自律駆動兵装運用士官は特殊だからな。切り札兵器の関係で邪険にもできないが精々30人ちよつとの部下の権限しかない指揮官と千人近いクルーを抱える艦隊司令長官を同列に扱えば既存艦隊との摩擦が生じるし、艦娘の司令官には民間出身者も多い。そこに配慮した複雑怪奇な指揮系統つてわけだ。艦娘も船の記憶もあるから結構呼び方はあいまいだし、それでいいんだと思うよ」

その助け舟に航暉は目で詫びた。そうこうしている間にも問題は次の段階へ進んでいく。

「次は水雷戦隊についての問題です。水雷戦隊は軽巡洋艦と駆逐艦で構成されますが第二次世界大戦の開戦時点において水雷戦隊として成立するには軽巡洋艦1隻と駆逐艦が最低何隻必要か答えなさい」

航暉は6と即答したが、意外にペンが止まっているのが睦月だった。

答えが出そろってみたら暁が8、睦月が6、初春が6と書いていた。慌てだすのは暁である。

「え、駆逐艦2つと旗艦で構成だから、会ってるはずよね!？」

「レディーは少々早とちりが過ぎるかのう……」

「うっさい、ういはる!」

「初春じゃ、うつけもん」

カメラ担当は苦笑いだ。もし編集されて一般公開になるとしてもここはカットかなと高峰はのんびりと構えていた。

正解は6隻でしたー。と青葉が言うのと地団駄を踏みかねないほど悔しがる暁。勝ち誇ったような笑みを浮かべる初春が暁の神経を逆なでしていく。

「では次の問題参りましょう、次は電探の種類について——」
問題は次々に進んでいった。手旗信号の出題では実際に旗を持って言われた問題の答えを紅白の旗で伝えることになったし写真を見てどこの基地かを当てる問題などではうっかり地元の基地の名前を間違えた初春が赤面するなど珍しい光景が見られた。

「……夕張のヤツ、絶対に落とす気で問題を作ってきたな」

そう高峰が笑ったのは9問目、軍の知識からは外れて暗号解読スキ

ルを問うという毛色の違う問題が飛び出した時だ。暁は特に残留か否かの瀬戸際に立っているため必死である。

「この問題は10分で解いてもらうねー」

問題文には F v b o h c l a v k v h z o p w | a v
| h p y l e l y j p z l h m a l y a o p z w y v n y
h t . と表示されている。

「スペースもハイフンも入ってるし簡単でしょ?」

さらつとそう言った夕張に文字列を睨むのは衣笠だ。

「これは簡単ですねー?」

「青葉さん、解かっても言っちゃダメですよ?」

「これくらいなら簡単でしょう、ねー衣笠?」

「真面目にわかんない」

「衣笠、お前もか!」

そう言って出題者側はほのぼのとしているが暁たちは必死である。

「なにこれ……」

頭から煙を出しそうにしているのは暁で。その横ではフリップボードをこつこつと叩いている睦月。初春は文字数かなにかを数えているように見える。

「一番答えに近いのは初春ちゃんかなー?」

それを見て笑みを浮かべ続けるのは高峰だ。

「さすがに早いな。もう解き終わったのか?」

「一応ヒントのつもりだったんだろうねー。衣笠への『衣笠、お前もか!』ってやつ。気がついてるのがいないみたいだけど」

「シーザー暗号か」

「ぞ。ジュリアス・シーザーのほのめかしたうえでアルファベットの暗号とくればシーザー暗号だ」

シーザー暗号は、単一換字式暗号と呼ばれるタイプの暗号で、暗号化前の平文の各文字を辞書順に一定数シフトして暗号文をつくるものだ。古代ローマのガイウス・ユリウス・カエサルが使ったとされる初歩的な暗号作成法だ。

そんな会話に置いていかれてるのは電だ。航暉は解説は青葉たち

それを聞いて高峰は笑った。

「なるほど、決戦開始の号砲ってわけだ」

そう笑うと航暉は席を立った。次の種目は艀装を背負っての海上演習、その監督官をしなければならなかったためだ。用意だけはしておかないといけない。

「さて、うまくやってくれよ。ネームシップ諸君」

なんだかんだ言って航暉も楽しむ気満々なのであった。

Chapter 5. 5-2 対空戦は危険なかほり

「むー、お菓子の待遇も変わるなんて聞いてないわよ」

「5問しか答えられなかったおぬしのせいじゃろう？ 一流駆逐艦と通常駆逐艦の差じゃな」

控室という名のブリーフィングルーム。そここれ振る舞われた甘味に明らかな格差があるため暁は不満タラタラだった。

そりやあ目の前の間宮アイスに不満がある訳じゃない。ちゃんとアイスが溶けないようにガラスの器もキンキンに冷やしてある。普段のウエーク島では紙のカップに入ったアイスしかないし、ミントの葉っぱなんて乗せてくれない。小さいウエハースなんてものも乗らない。それでもだ。隣で9問トップ通過の初春と7問すれすれで通過した睦月が間宮さん手作りの特性パフェをおいしそうに優雅に食べているといろいろアレな気分になるのである。

あの間宮さんの！ 手作りの！ パフェ！

なんで私が食べられないのよ！

「それにしても間宮さんのパフェは豪華じゃのお、ソフトクリームも美味じゃ」

「くううううううううううううううううううう！」

その反応に暁は絶対に次は勝つと心に刻む。そうしていると次の演習種目についての説明が始まった。壁のスクリーンに青葉と衣笠が映ったのだ。何やらアナウンサー席のようなところで陽気に手を振っていた。

『はいはい、そろそろ次の種目に行きますよー』

「次の種目って対空演習じゃな？」

『初春さんその通り！ ですが対空演習の後に商船護衛を想定した演習を行います。この2種目の間での装備換装はできないので注意して装備を選んでくださいね』

青葉の言葉にムムムと唸るのは睦月だ。

「質問です」

『はい、何でしょう睦月さん!』

「商船警備に僚艦はつきますか?」

『軽巡洋艦2、駆逐艦2を僚艦としてつけますよ』

青葉の答えに睦月たちは黙り込む。

対空だけに特化しすぎては対水上艦戦では火力不足に陥る。潜水艦対策も考えたいところだ。どれかに特化しすぎては結果的に不利になりかねない。それでもある程度は再作を対空によせても大丈夫そうでもある。その線引きをどうするかが悩みどころだ。

そのような葛藤を無視して衣笠が話を振った。

『それで対空演習って何をするんです?』

『それはですねえ、艦上爆撃機と艦上攻撃機各10機程度と戦ってもらいます』

『10機ずつというのとそれって多いんでしょうか?』

『まあ少なくともはないですねえ。特に今回は中部太平洋第一作戦群のEース、二航戦こと蒼龍さんと飛龍さんが参戦します』

「江草隊に……友永隊……」

初春がぐくりとつばを飲み込んだ。蒼龍の江草隊と言えば急降下爆撃の成功率80%を超える爆壁のEース部隊。飛龍の友永隊も雷撃のEキスパートだ。それが一隻の駆逐艦めがけてすつ飛んでくる。『攻撃可能機が全部攻撃した時点で航行可能ならクリアです。皆さん頑張ってくださいね!』

青葉の声に唯一微笑んだのは暁である。暁には「眼」がある。弾道を見切つて弾をかわせる目があれば爆弾を避けることもできない訳ではない。ある意味暁にとっては有利な種目と言える。

『今回の演習の監修は国連海軍大佐、月刀航暉中部太平洋第一作戦群第三分遣隊司令に頼んであります』

青葉の言葉に暁の顔から余裕が消えた。睦月も顔が青ざめる。

『それではクジ引き通り初春さんから始めていきましよう!』

「お疲れさん」

「いいデータが収取できたからよかったです」

戦闘指揮所^{T C C}の一角に夕張が顔を出した。管制卓に座っていた航暉が顔を上げる。

「月刀司令補……つとすいません。月刀司令と話すのは久々ですね」

「そうだな。実際指揮を執ったのは第二次日本海海戦だけだから3年ぶり？ もつとか」

「はい。命令無視であの人を救いに指揮を執った向こう見ず大尉がたったの3年で大佐とは正直驚いてます」

「今更それを蒸し返すか？」

「褒めてるんですよ？」

航暉は困ったように笑うと管制卓に視線を落とした。

「急な任務だったのによく間に合ったな」

「データ系は得意ですから！ それに艤装研究開発実験団^ちの試験も兼ねさせてもらえますし」

「ごいつか」

そう言うのと航暉は管制卓を叩く。

「月岡コンツェルンも理想郷ネットワークとは大した名前を付けたもんだ」

管制卓の画面にはAggressive Raid—type
Control Armaments Dis—contact
Network Systemと表示されていた。無理矢理訳せば
強襲型武装群遠隔管制ネットワークシステムとでもなるうか。頭文字を取ってARCA—DIA——牧歌的な理想郷とはいかにも皮

肉なネーミングである。

「艦娘への干渉をより強めて無理矢理艦装のスペックを引き出し、力技で人間の管理下に置く……」世代前の考え方だと思いがね」

「マルチコントロールでより安全にたくさん艦の指揮をとれますよ？」

「誰にとつての安全だ？ これで最大出力を使われた艦娘の寿命を削りそうで怖いね」

航暉は愚痴を言いながらもリンクの用意を進めていく。

「……このシステムって試験はもう最終段階だっけ？」

「はい、早いところだとあと3カ月もすれば管制システムがこれに上位互換されます」

「で、今日は空母の管制試験ってわけね」

「正確には第53回目の空母管制試験です」

「トラブルがないことを信じるがな」

リンクの用意が整う。航暉の管制卓に3つのマーキングが現れる。

「飛龍、蒼龍。聞こえるか？」

《こちら飛龍、感度良好です》

《蒼龍、聞こえています》

「演習機に訓練弾装填済みを改めて確認してくれ」

《グアムの二の舞は懲り懲りですしね》

無線越しの苦笑いの空気に航暉は意識をゆっくりと馴染ませていく。

「蒼龍、3機だけコントロールを渡してくれるか？」

《えつと……3機でいいんですか？》

「ああ、頼む」

航暉は無線のチャンネルを変更する。演習参加者が全員監視する共用無線だ。

「初春、用意はいいか？」

《こちら初春じゃ、いつでもいいぞ。お主が指揮を執ると聞いた途端に睦月と暁が青ざめておつたがなにかあつたのかえ？ 睦月なんか机に突っ伏しておつたが》

「あー、大鳳の機体借りて対空訓練やってるからなあ。それ思い出したかな？」

《私も月刀司令の航空戦を相手取つての戦闘は御免被りたいかな……ハハハ》

蒼龍の乾いた声が乗る。

《MIの時のあれを見せられるとねえ……》

飛龍も蒼龍に消極的賛成という感じだ。

「そんなにアレか、俺の戦闘指揮」

《……黙秘権を行使させていただきます》

飛龍の声に《こりや訓練も荒れるかの》とどこか怖いもの見たさの色が含まれる声色が答えた。

「そこまで変な指揮をしているつもりは無いんだけどね。————対空演習を始めよう。状況開始！」

初春は空を睨み、ゆつくりと足を前にすり出した。電探が僅かに影を捉える。

「……捕捉は7。艦攻はもう低空に下りておるじやろうし、さてどうなるかのお」

初春は背部の艤装を操作する。第3の腕ともいえるマニピュレーターが稼働し主砲が前に向いてくる。今回は模擬弾装填を示す水色のテープが巻かれたものになっている。

肉眼ではまだ見えない。でも、確かにそこにいるのはわかる。

「飛行機はちよつとばかり苦手なんじゃが、仕方ないかの」

主砲弾で当たらないのはわかっている。でも少しは足しになるだろう。

すり出した足が一気に加速度を掴む。相手を右に見ながらの之の字運動。やつとゴマ粒程度には見えてきた機影を横目でとらえる、電探の情報と掛け合わせ、距離を合せていく。あと1200メートル。速度を掴んだまま急旋回。上空の航空隊と正対する。機銃のライオンを合せ……わずかに上にずらして連射する。そして左へステップ。横にスライドしたのち急旋回後、主機全開。急加速。

「……さすがは蒼龍さんの艦爆、弾幕などものともせんか！」

射程外からの攻撃とはいえ銃口を向けられれば、あまつさえ発砲などされれば、普通は怯んでしまう。それで相手の陣形を崩すことができばと思つたのだが、そう簡単には行かないらしい。

タイミングを合わせて左足を蹴りだすようにして急ターン。一発目の爆弾が落ちてきた。そのまま進めば直撃の位置。初端から高精度を叩きだしてくるあたり、相手の練度が窺える。続けて急降下してくる機体を認め機銃を斜めに振りぬくように弾幕を張った。相手は散開^{ブレイク}——初春の予想よりワントンポ遅かった。その数刹那の間隙に敵は翼をひねるように旋回すると爆弾を空中に残して離脱したのだ。数は3つ、自分の目の前を掠めるように飛び込んでくる。

「くっ……！」

そのうち一発が至近弾判定、小破まであと皮1枚とも思える数値が叩きだされた。それでもおちおち悔しがっている余裕もない。足を止めれば文字通り一卷の終わりだ。

（遊ばれてるのお）

そんなことをニヤリと笑いながら初春は機銃と主砲を振り回す。相手の機動はマニュアル通りではない。航空機が登場してから1世紀半近く経過してその間に空対艦攻撃にもベストと言われるセオリーがある。最小のリスクで最大の成果を上げるための方法だ。勿論そのような方法にも対策が存在する。その対策を艦娘は叩き込まれているのだ。

しかし今回はそのセオリーを破ってきていた。セオリー通りに動

いたらこちらが「喰われる」。

之の字運動のターンのタイミングを一度キャンセル。直後すぐ右隣に水柱が立つ。あのまま旋回していたら爆弾に自分から突っ込んでいた。これまで落ちてきた爆弾は7つ。そろそろ折り返しといったところか。

「——近いっ!?!」

一瞬の違和感だった。電探が一瞬だけぱっとノイズを返した。波とかの影響でノイズが映ることはよくある。自然クラッター波と呼ばれるそれかと思えるほどの自然で、一瞬のノイズ。それに振り返ると極低空——海面からの距離は3メートルを切っている。いくら波が穏やかと言っても波に突っ込みかねない低高度で海を割るように残りの機体が一斉に突っ込んできたのだ。

(雷撃は13条か! 手厚い歓迎じゃ!)

機銃を水平方向に打ち込みつつその射線から逃れるように全速で飛ばす。そして一気に編隊が散っていく。魚雷の射線が伸びていく。初春は笑った。一隻を相手にするには射角が広い。これなら何とか避けられる。

——その思い込みが仇になった。

三機がそのまま突っ込んでくる。太陽光できらりと光ったド派手なテイルマークに水色の二本線。

(蒼龍艦載機!?! この高度でじゃと!?!)

その驚きが一瞬の勝機を逃した。初春の髪を掠めるようにして九式艦爆が後ろに飛び抜ける。ガツンという衝撃と共に主砲がぶれる。驚きで慌てて確認すると主砲を支えていたマニピュレーターに緑色のペイント弾がべつとりと付着していた。

《——全攻撃可能機攻撃終了。対空演習を終了する》

航暉の落ち着いた声がそれを告げた。判定は中破でぎりぎりどどまった形——ぎりぎりでのクリアといったところか。

「最後の攻撃じゃが、肝が冷えたぞ」

《驚いていただけたなら光栄だ。極低空水平爆撃だ。反跳爆撃にも応用できるぞ》

無線がそう答えるとふふつと初春が笑った。

「対空戦はだいぶ得意にしたつもりじゃったんじやがまだまだかのう。これが実戦じゃったら主砲を失い機銃の弾薬も少なく後はじりじりと沈められるのを待つだけじゃ。これをいい機会に精進することにしよう」

《総評は後でしっかりじっくりな。とりあえずお疲れさん。飛龍、蒼龍。20分後に第二ラウンドだが大丈夫か?》

《……こりや、多聞丸の訓練並みにきついわ》

飛龍の声に蒼龍の笑い声が被る。

《まああと1時間ちよつとで終わるんだし楽勝楽勝。頑張つてこうねー》

「ちなみに大佐よ、他の二人にも同じことをするのか?」

《こうなる前に行動不能にならなきゃな。睦月はともかく暁がどう応えてくれるか楽しみだな》

——もしかして、睦月や暁はこういう訓練をいつも受けるのかのう?」

初春は控室でも睦月たちの反応の意味を少しだけわかったような気がした。

「うにやああああああああつ!」

《睦月大破判定、対空演習を終了する》

背負った艤装にべつとりと緑色のペイント弾を頂戴した睦月は溜息をついた。

《一機一機に時間かけ過ぎたな。危険度の判断も甘い。目では十分に追えてるんだけどなあ……》

「ううう……」

安全な模擬弾、それも重さを抑えたペイント弾とはいえ当たれば相手に痛い。目じりに涙を浮かべつつ上空でくると回っている艦爆機……まだ爆弾持ちが残っている……を恨めし気に見上げる。

至近弾のラツシュで焦っていたことと睦月の耳の良さが災いした。上空の艦爆機を処理しきれないまま雷撃機が交戦域に突入。雷撃機の魚雷の着水音に一瞬気を取られ、そつちに砲を振ったのが運のつき。その空隙に艦爆機が急降下してきたのである。頭からペイント弾を被ることはなかったが、背中にべつとりとついたゲル状のペイントが気持ち悪い。

《得意苦手は誰にでもあるが、死なん程度には得意にしてこうな。お疲れさん》

ヒュパンツ！ という空気を切り裂く音が耳朶を叩いた。耳の真横を極低空で突っ込んできた艦爆機の衝撃波だ。そいつが投げよこした爆弾の横っ腹を防弾板でぶつ叩き、無理矢理に方向をずらす。斜め後ろに飛ばされた爆弾が海上に飛びこみ、緑色の染料が海に流れ出した。

「ふう」

左腕に下げた防弾板に添えた右手を振って痺れを飛ばす。とつさに爆弾の横腹を叩いて直撃を回避という荒業に走ったが、やろうと思えば何とかなることに暁自身も驚いた。

《演習終了。……ほんとに無傷で抜け切るとは思わなかった》

「ひどーい。レディの言うことは信用するものよ?」

暁は最後の突撃をしてきた艦爆機に向けてピースを送った。気分は上々である。

「すごいことしたわけだし私には褒美を要求する権利があってもいいと思うの。それに司令官は私のことを疑ってたわけだし、そのことに対する謝罪もあつていいわよね?」

なんか風向きが怪しくなってきたと思う航暉だがとりあえずは聞く態勢にはいる。

《……何が欲しい》

「後で間宮パフェ奢って!」

どうやら隣に並ぶ間宮パフェの“おあずけ”をくらったことが相当に答えているらしい。一瞬噴き出しかけて航暉は笑った。

《……考えておくよ。お疲れさん》

とりあえず要求を否定されなかっただけで暁はルンルンである。初春の鼻も明かせた今、相当に気分がいい。とりあえずの目的は果たせたように思える。

だが、ふと気がついた。初春はこの試験ぎりぎりを通っている。つまり。

いま、総合点では負けている。

暁は気合新たに次の種目に備える。

次は商船護衛を想定した航海演習だ。負けるわけにはいかない。

「この後は完璧なレディとして完璧にこなして見せるんだから!」

「夕張、見ていてどう思った？」

リンクを切りつつ航暉は振り返る。夕張は実戦データを外記憶装置にダビングするとそれをポケットに突っ込んだ。

「うーん。あそこまでアグレッシブな運用されるとちよつと処理が不安ですかねー。地表効果の演算に難ありかも。そういう月刀司令はどう思いました？」

「干渉がきついな。もう少し遊びが欲しいところだ。これじゃババいと思ったときになかなか修正が効かないぞ」

「わかりました。提案してみます」

「頼むよ。……で、次は航行演習の訳だが、こっちの監視は俺と高峰中佐で交代交代だったな？」

「そう聞いてます」

夕張はそう言うのと敬礼の姿勢を取る。

「この後は青葉さんと一緒に解説席なのでお先に失礼いたします」

「ご苦勞様。熱を入れすぎて倒れないようにな」

「データ編集で慣れてるので大丈夫です！」

航暉が答礼を返すと管制室から夕張が出ていく。それと入れ替わりになるように3人の少女が入ってきた。その後ろにももう三人ついてくる。

「ああ、そういえば僚艦役だったか。——マニラ以来だな、川内。その節は世話になった」

「ほんとにね、月刀大佐。笹原中佐も来れたらよかつたんだけどねー、佐世保で綾波に縛られて書類整理に明け暮れてるから、よろしくつい

でに助けてくれーってさ」

「自業自得だがまあがんばれと伝えとけ」

軽口を叩きながら航暉は立ち上がって敬礼の姿勢を取る。それに応えるように敬礼の姿勢が揃うが左端の影が少し頬を膨らませた。

「江田島以来なのに再会の挨拶もなしですか？ 月刀さん」

「久々だな、阿賀野。……これでいいか？」

「なんだか投げやりで祝われてる気がしないんだけどー」

「はいはい」

そんな会話をしているとクスリと笑う気配、川内だ。

「あがのんとは知り合いなんだ？」

「実は俺が海大にいた時の実技担当艦だった。卒業試験とかでは世話になったんだ」

そういいながら航暉は目線を右側に移す。

「君は長良……でいいんだよね？」

「はい！ CL—NGO1 長良」です！ よろしくお願いします！

妹の阿武隈がお世話になってます」

「こちらこそよろしく、つと言っても君たちの指揮は駆逐艦のチビツ子たちがとるんだけどね。まあ、迷惑かけると思うけどお願いね。さつき君たちを含めた兵装のオーダーが出そろった。もうドックでは換装作業が始まつてるはずだ」

素晴らしいながら航暉はそれぞれに感熱紙を渡していく。今回の旗艦たちが指示した武装の指示が打ち出された紙を、三人は戦闘指揮所の暗い照明の中で目を通す。

「あ、私の旗艦初春ちゃんなんだ……」

「ぶつけられない様に気を付けてね」

「もう、言わないで下さいよ！」

長良を軽くからかっつてから航暉は笑う。その後ろでずっと黙っていた影がにししと笑った。

「それでー？ 商船役のあたいらはずっと一緒についていけばいいって訳かい？」

「隼鷹さん？ しつかりしないと駄目ですよー？」

「アハハー、ちよつち口の利き方は気を付けにやあかんでー？」

そう言ってくるのは軽空母チーム……発言順に隼鷹と祥鳳、龍驤の三人である。今回は輸送船役ということで協力してくれる。

「悪いな、軽空母のみんなに任せるような仕事じゃないんだが」

「いいのいいのー。北方での作戦の予備役でこつちに来てた帰りなんだからさあ」

「まあ途中で本当に深海棲艦が出てきた時とかは艦載機の出番になる。悪いが気を抜かないでくれよ。あと隼鷹、迎え酒も禁止な？」

「えー」

「えーじゃないやろえーじゃ」

龍驤はどこから取り出したのかハリセンで隼鷹の頭をスパーンと叩いていた。

航暉はそれをみて笑みを噛み殺しつつ敬礼の姿勢をとった。

「みんなの善戦を期待する。暁たちをよろしく頼むな」

「了解しました！」

改めて敬礼。演習は次のステージに進む。

Chapter 5. 5-3 海上でワルツを踊れば

「それじゃあ、張り切って参りましょー!」

意気揚々と出港するのは睦月が率いる護衛部隊である。横須賀軍港を出港した部隊は進路を南東へ向けゆっくりと海上を滑っていく。航空機輸送任務を受けた軽空母を護衛し指定地点まで護衛する。それが今回の護衛部隊に課せられた任務だった。

「それにしても晴れてよかったです」

「でもなんで私が朝一のチームになるかなあ……。絶対夜戦できないじゃん」

冬の太平洋の好天を仰ぎながら気持ちよさそうに笑うのは吹雪である。一方その隣で太陽光に溶けそうになってるのは川内だ。

「川内姉さんはなんでそんなに夜が好きかなあ。ライブでもないのに……」

姉の反応が納得できないのか不思議そうな顔をするのは那珂で、最後尾でそれをほのぼの眺めるのは綾波。今回の護衛船団のメンバーはこんな布陣となった。

「まあ、川内さんらしいと言えらしいです」

「よくいうよねー。綾波も戦闘になったら性格豹変するくせに。ってか、そういうええもしかして本当に司令官縛って放置してきたの?」

「敷波に艦装使用許可出して司令官室に缶詰にするよう言いつけてあります」

「うげ、本当にご愁傷様司令官」

川内がそう言って佐世保の方に向かって手を合わせると、くつくつと笑う声があった。

「〃五期の黒鳥〃の周りは面白いねえ」

肩を震わせるのは隼鷹だ。今回の護衛対象である彼女はのんびりと構えたままあたりを見る。

「綾波も川内も夜鷹の笹原の部隊でしょー。睦月は飛燕の月刀、司会

やっつた青葉は幻視の高峰……キャラが濃いこと濃いこと」

「た、確かに他の部隊だとあんなことできませんよね……」

静かに同意したのは吹雪だ。それに首をかしげるのは睦月である。

「あんなことってどんなことですか？」

「え？ たとえば演習用の魚雷でぶん殴ってきたり、錨を投擲して相手にぶついたり？」

吹雪の言葉にあー……と遠い目をする川内だ。そういえば電に錨を投げられてぶつけられた張本人である。助けるために仕方なかったとはいえかなりアレらしい。

「あと睦月ちゃん、テイルトローターから飛び降りて無双したって本当？」

「と、飛び降りたのは飛び下りたけど、無双ってどこからそんな情報が出たのかにやあ……」

「え？ 数多の魚雷を撃ちぬいて船団を守り切った救世主って如月ちゃんから」

「きさらぎい……話盛りすぎです……」

睦月は溜息と共に肩を落とした。救世主だというなら叩き落とされるようにバンジージャンプはしないと思う。

その空気を読んでか、隼鷹が話題を切り替えた。

「それにしても結構予定はキツキツなんだよねー。60海里を4時間っていうのもアレよねー」

「おそらく相手も仕掛けてくるでしょうし、ね」

吹雪がそう返した。どんな相手が来るかはわからない以上、対艦、対潜、対空、すべての警戒が必要だ。艦隊二番手の川内が睦月の方を見る。

「睦月、配置はこのままでいいの？」

「うーん、そうですねー」

睦月は素晴らしいながら何か紙の束を取り出した。それをパラパラとめくっていく。

「なにそれ？」

「この辺りの海流のデータとここ一週間の海水温のデータです」

「……何に使うの？ それ」

「え？ ソナーの誤差修正ですけど……」

睦月はそういいながら紙をめくり、そーですなー、と何かをつぶやいていた。吹雪などは目が点になっている。

「海水温とか何に使うの……？」

「水中の音って温度境界層サーモクラインがあったりしてソナーの死角になるところがあるのです。で、どこに不感知領域シャドールゾンがあるか予想して潜水艦だったらどこにひそむかなあとか考えるわけです」

「へー……ってそんなの簡単に予測できるの？」

「難しいですよー。でもやらないと怖いからやっています」

パラパラとめくってから睦月はあたりを見回した。

「一応綾波ちゃんと私が場所交代しておきましょう。那珂さん対潜装備積んでますよねー？」

「もっちろん！ 那珂ちゃんに死角なーし！」

「なら那珂さんが左舷でお願いします。綾波ちゃんポジション交代です」

「わかりました」

最後尾に睦月がつき、先頭は川内と綾波、その後ろの隼鷹を守るように左舷に那珂、右舷に吹雪のスタンスと、輪形陣を組む。

「で、周囲を見た結果、どうするの？」

川内が改めて振り返る。

「進路1―8―4で、25ノットを維持してください。睦月の指示があるまですつとそのままですよー？」

睦月がいたずらっ子のようにニヤリと笑った。

その艦影を捉えていた艦娘がいた。

(いたいた……これなら十分に狙えそうでち)

水深140フィート、艦娘が団子になって進んでいく独特な推進音を耳に伊58はそろりそろりと海中を進む。手に持った魚雷発射管を確認しゆつくりと近づいて行く。

焦りは禁物である。ゆつくりと忍び寄り確実に落とせる距離で相手を穿つ。

それが潜水艦の戦い方だ。

(イクが睦月の相手だけはごめんなのって怯えてたけど、案外警戒薄いかも……)

相手は伊58に背を向けるようにして悠々と進んでいく。水上艦の方が早いのでから少しづつ離される形になっている。射程内に収めるためにこちらも急いではいるがそれでもわずかに離されていく。

(之の字運動って訳でもなさそうでち。なんで184度に転進なんてしたんだろう……?)

伊58は疑問に思いながらも後を追いかけていく。そうすると相手のプロペラの音が僅かに弱まった。ここで減速? なぜ?

離される割合は少なくなっているようだ。伊58にとっては願いやつたりな状況だがどうも腑に落ちない。それでも状況は伊58にとって有利。演習相手だが徹底的に叩いて良しとも言われている。遠慮はいるまい。

メインタンクブロー。体はゆつくりと引き上げられるように水面へと向かっていく。潜望鏡深度到達まであと3分ちよつと。目視でターゲットを確認したらあとはショータイムだ。伊達にオルモツク海峡に潜つてない。クルーズと呼ばれる敵の輸送隊を待ち伏せ、数多の敵を沈めてきた腕がある。

そう思って伊58は凜猛に笑う。ゆつくりと上昇していく。直後不可思議な波の音を聞いた。位置は——真上?

(え?)

見上げれば……艦影。そこから落ちてくる円柱形の物体は……三式機雷の模擬弾頭!?

「で、でち——っ!?!」

瞬く間に落ちてきたそれは伊58を取り囲み、爆裂。

「那珂さん! 8時方向距離2400! 深度30に潜水艦反応! お願いします!」

「はーい!」

睦月は主機を再起動、出力最大で転進。捉えたもう一つの影の方に急行する。三式機雷の次弾がセットされる。アクティブソナー発振、短信一発、無音潜航で逃げる気だ。

「爆雷深度80! 那珂さん!」

「はーい。那珂ちゃんの攻撃! いくよー!」

海面に波紋を残して急速に吸い込まれていく機雷の影を視界にとらえ、ソナーを一度カットした。爆裂の音で耳を潰すわけにはいかなからだ。

いつもより穏やかな衝撃、海中から白旗の合図の信号が聞こえてくる。

「睦月ちゃん那珂ちゃんタツクの勝利! いえーい!」

ハイタッチを求めてくる那珂にぱちんと手を合わせると二人で笑いあう。

「それにしても睦月ちゃんすごいねー。二隻が追いかけてるっていうから気がついてたの?」

「実は……港を出た後から怪しいなーとは思ってたんですけど」

「げ、最初からじゃん。もしかしてその時から真後ろと左後方にいるってわかってた?」

「なんとなく、ですけど……ずーっとトレースしてくるのでおそらくはチャンスを窺いつつ、別の部隊に連絡する気だなと思って、通信可能域に浮上される前に仕留めたかったんです」

「でもエンジン止めてゆっくり艦列を離脱した時はビビったんだよー? 二ノツト減速とか言うしきー」

「ご、ごめんなさい……」

「責めてないよー? 自分の足元に相手ができるように艦隊に指示を出して、無音で接近していきなりドカンだもん。すごいよ」

「素晴らしいながら、艦列に戻っていく。隼鷹に上機嫌に肩を叩かれ、睦月はちよつと顔を顰めた。

「潜水艦はこれでクリアですけど……おそらく別働隊がいます。空母か巡洋艦か、潜水艦かはわかりませんが」

「なら警戒を強めつついったほうがいいね。進路は元に戻すの?」

「最短距離でいきましょう。おそらく罨這って待ってると思いますけど」

睦月たちはただひたすらに、洋上を目指す。

「伊58と伊19からのネガティブレポートが来ません」

「そうですか。……二隻とも落とされましたかね」

「そうみたいです」

「では、こちらもいくとしましょう。予定より5海里手前で迎え撃ちます」

「わかりました。行きましょう」

「うーん、電探に影があるね」

川内がそう言った。演習開始から2時間、演習の行程のだいたい2／3をこなした時だった。

「ほぼ間違いなく敵艦だと思うよ。1時の方向から数3。真っ直ぐ突っ込んでくる」

それを聞いて睦月は一度目を閉じ、すぐに開いた。

「……、川内さん、綾波ちゃん。前に出れますか？」

「はいー！」

「任せといて」

そう言うと綾波と川内が船団を離脱し前の方に出ていく。

「では川内さんと綾波さんで迎撃、那珂さんと吹雪さんはそのまま隼鷹さんを護衛します。迎撃隊は進路そのまま、船団本隊は進路1―6

―5へ転進します！」

睦月自身はその合間に位置を取る。その時、水平線が閃いた。

「敵艦役はよりによって神通か！ 姉妹対決といこうかね！」

「ごめんなさい、姉さん。今日ばかりはやめておきましょう。――」

——不知火、標的黒毛、陽炎は標的栗毛をお願いします」

船団に向かつて突進してくるのは川内と同じ制服を着た神通だ。すぐ後ろをついてきている二人に声をかけるとそのまま突っ込んでくる。

「おつとお！ 姉を無視かい。いただけないねえ」

「それでも旗艦の命令ですので、川内さん」

「で、私の相手はぬいぬいって訳ね」

「不知火です」

「よろしくね、ぬいぬい」

「不知火です」

砲火を交えながら漫才のようなやり取りをかわす。本当は神通を止めたいところだが不知火をフリーにするわけにもいかず、川内は横目で妹を追いつつ反航戦に持ち込んだ。

「私の相手は陽炎さんですか……」

「一度戦ってみたかったのよねー。鬼神”綾波！ いや、標的栗毛！」

「私はゆつくりお茶でもできればよかったです、そうも言ったられませんか」

砲火綾波がUターンを決めるように反転しこちらは同航戦だ。強烈な量の砲火が飛び出しあたりが黒い煤のような煙に燻されていく。その間を縫うようにして神通は駆ける。腰に差した魚雷管の発射システムを起動。砲を手に船団に向かつて走る。

「目標視認です……！」

神通は流れる視界の中で“敵”を見据える。

「砲雷撃戦、用意」

相手は船団を庇うように進路上に立っていた。手に持っているのは高角砲だろうか。まだ相手の武装がなにもあるかは見えない。だが、神通が足を止める理由にはならない。恐怖を認識できる余裕があるうちは“まだ安全”なのだ。

真正面から向き合う反航戦——互いの距離は瞬く間に迫っていく。相手の砲の射程距離に入ったのか向こうから砲弾が飛んで

くる。鉢金を止めた布地の脇を掠めるようにして後ろに飛び抜けた弾丸はおそらく1キロ近く余分に飛行し海面に落ちたのだろう。神通は振り返らない。

こちらの弾丸を真横に飛び退くようにして避けた相手を見て神通は静かに笑う。相手が進路を譲った。たたらを踏んでいる状況では砲撃も当たらないだろう。

「この勝負、あなたの負けですよ。睦月さん」

神通はそう呟いて相手を右に見つつ全速力で駆け抜ける。同時に魚雷発射管に触れて――直前で飛び退いた。

「隙ありなのです!」

飛び退いた姿勢を立て直す前、まだ海面に膝をついたような不自然な姿勢のまま相手は主砲を構えていた。演習弾が眉を掠めるような位置で飛び抜け、神通はバックステップを踏む。そこまで来て、神通は僅かに下唇を噛んでいた。ここで下がるとはなんと手緩い。

相手は左手に持っていた鎖を手放す。艦装から水面に吸い込まれる鎖はついに途切れ、海の底に向かって落ちていく。

(突っ込んで来るのがわかって投锚して飛び退いた……?)

あのまま突っ込めば鎖にからめとられ神通も動けなくなる。勿論睦月も巻き添えになるが相手を引き摺り込む錘となり、相手の動きを完全に封じることになる。直前で真横に蹴るようにして回避できたものの、あと数刹那気がつくのは遅ければ巻き込まれていた。それでも神通にとっては状況は悪い方向に転がっていた。全速で走っていた神通は加速度を殺し切れずまだ十分な回避行動がとれないのだ。

その間にも相手は持ち直し、機銃の射撃も加わったハイテンポな砲撃が続く。機銃の掃射とはいえ喰らえば痛い。相手の主砲が轟き神通の1番主砲を吹き飛ばした――正確にはピンク色のペイント弾が主砲に張り付いたのだが、これで一番主砲は破壊されたと判断される。

神通は海面を左に蹴って円運動を描くようにして回避しつつ、2番主砲を叩き込んだ。互いに小破。同じ小破だが神通と相手では意味が異なる。相手にとっては格上の相手からもぎ取ったダメージであ

り、神通にとっては中破以上のダメージを出して当然の場面で決められなかったという意味になるからだ。――まだ戦えることが救いだ。

神通は魚雷を展開、数は2条、睦月は避けることはせず機銃で叩き落とした。推進剤の空気が暴発し演習とは思えない水柱が立つ。睦月はその水柱から逃げるように後進、距離を稼ぎつつそのままバックする。神通はそれを見て目をわずかに細めた。

今のはこれまでの動きを見れば間違いなく避けられる射線だ。それを回避せずわざわざ迎撃した。

(こちらの動きが読まれてる……?)

相手が避けるとしたら神通から見て左側に体を振るしかない。右に振ればわざとずらして撃ったもう一つの魚雷の射線に飛び込むからだ。勿論避けるために無理な航跡を描けば建て直す前に二番主砲がお出迎えだ。駆逐艦の装甲なら簡単に破ることが可能な主砲を用意していた。

それを相手は見越して動いた？

「……どうしてでしょう。体が火照ってきました」

高々一隻。それも駆逐艦の中でも旧式で火力も装甲も低いといわれた相手だ。

神通は相手失礼だとは思うが、この勝負は最初から勝つと思って疑っていなかった。あの“月刀艦隊の一員とはいえ、一対一サッに持ち込めば絶対に勝てる

と踏んでいた。それに相手は対潜戦闘に明るく、それゆえに対潜に特化した装備で臨んでいるはずだ。

火力も装甲もリーチもこちらが上、華の二水戦仕込みの心意気ならだれにも負けないと自負もしている。

それなのにきつちりと食いついてくる。もう商船護衛のチームは水平線の向うに消えようとしていた。

この戦いをイーブンに持ち込まれた挙句、目的の船団は遠ざかっていく。状況はもはや戦術的敗北状態だ。

だのに、こころが踊る。

互いに回り込むように左へと動いていく。互いに距離を詰めることも逃げることもできない千日手。それでも相手を打破しようとフェイントをかけ合い回り続ける。再装填のタイムラグを先に作つた方が負けるからだ。だから、互いに撃てない。

神通はフェイントをかけるが相手は読み切っているかのように冷静だ。

なぜだ、なぜフェイントに乗ってこない。

回り込み、回り込み、じわりじわりと円の半径は小さくなっていく。舵をわずかに当てて回り込みを続ける。そこではたと気がついた。

“ソナー”……？

主機の音をソナーで捉え、フェイントかどうかを判断してるとしたら。

瞬間的に出力を上げ前に踏み込んだ。

相手の反応は激烈だった。バックステップを踏みつつ主砲をポイント、爆炎と共に砲弾が飛び出してくる、首をひねってそれをかわし、砲を向ける。今度こそ、チエックメイトだ。

「———そこまでだよ」

砲だけ向けてピタリと止める。聞き覚えのある声に止めていた息を神通は吐きだした。

「お見事です。睦月さん、綾波さん、川内姉さん」

同時に砲が二つ、後ろからつき付けられているのがわかる。主砲の再装填を諦めたのか相手が向けている機銃を含めれば銃口は三つ。ここからの逆転は不可能ではないが、リスキーにもほどがある。だれか一人に向けて砲弾を打ち出せば、残り二人から蜂の巣にされる。好天の真昼、冷静沈着な相手を前にここで単騎で暴れてもどれだけの効果があるか。

「投降してください」

機銃を構えたままそういう相手に、神通は満面の笑みで両手を上げ

たのだった。

「……マジでか」

艦隊上空でぐるぐると回る飛龍の偵察機から送られてきたその様子を見て航暉は顎を撫でつけながらそう呟いた。

「川内綾波の練度もさることながら睦月すげえな」

そう言うのは演習の監督をしていた高峰である。暗い指揮所にくぐもった笑い声が漏れる。

「やってることは時間稼ぎだがな。もともと誰かが抜けてくることを見越してた。前線二人のうちどちらかが片付き次第応援に回ってもらうつもりだったろう」

これだけ戦えれば応援なんていらんだろ、と高峰は大笑いだ。

「朱に交わればなんとやら、だな。あの戦術は電の影響、無理な姿勢での砲撃の安定度は天龍の教育のたまもの、投錨して相手を絡めとるつてのは雷ちゃん直伝つてところかな？ カズ、あつてる？」

「おそらくあつてる。……最初はセーブしてもらったとはいえ神通に勝つとは思ってなかった」

「まあ、一応神通がチェックしてるから戦技では神通の勝ちだ。試合には勝ったが、実弾で神通が覚悟決めちゃってたら睦月は沈んでる。でもあの神通を前にこれだけやれば十分だろう。これで睦月の専門分野は対潜だつていうから末恐ろしいよ。……つていうかイクだけじゃなくゴーヤもッもーいやでち！ 睦月だけには絶対近づかないでち！」つて叫びの電信が届いてるけど？」

「敵じゃないから安心しろって返しとこう」

「で？ どうするの？」

「なにが？」

「睦月の第一作戦群への編入の話、打診あったんでしょ？」

「……ああ」

航暉は僅かに影のある顔をした。

「動かせるのは睦月だけ、それも西部太平洋第一作戦群だ。如月たちとも離れ離れにしちゃうからな、どうも切り出し難くてね」

「睦月たちは可能性の塊だ。その可能性を司令のエゴで潰すなよ」

「ああ、肝に銘じておくよ」

視界の先、画面の奥では演習審査のための航海が終わったところだ。このあとは他の演習艦の邪魔にならない様に帰港するだけだ。その管制を任せて航暉も隣の卓につく。

「イク、ゴージャ、インターバルは十分か？」

《正直しおいに来てもらえばよかったでち……》

《イムヤに押し付けてやればよかったのー》

その答えに航暉は苦笑いだ。

「まあ、潜水隊の山場は終わったから頑張ろうよ。もうすぐ暁チームが出港する、気張れよ」

《でちー》

《了解なのねー》

「——大丈夫だよな？」

一抹の不安を抱えながらも航暉は通信回線を開く。暁が岸壁を離れた。航海が始まった。

Chapter 5. 5-4 昼下がりに剣を交えて

「開幕早々潜水艦なんて聞いてないわよ……」

「す、すみません……避けられたかもしれないのに……」

「潮のせいじゃないわよ。島影から雷撃で気づくの遅かったっていうのは艦隊の責任、艦隊の責任ってことは旗艦の責任よ。貴方のせいじゃないわ」

暁はそういいながら泣いている潮の手を引いて艦隊に合流した。

「それにしても、横須賀軍港出て10分で雷撃一発とかどこまで潜り込まれてるのよ潜水艦に！」

横須賀哨戒圏のど真ん中で雷撃の洗礼を受ける羽目になって暁は必死に頭を回す。

「矢矧さん、そっちのほうは大丈夫？」

「何とか追い返したわ。それにしても不運ねー。あれだけ射角を広くとった魚雷にあたるなんて」

「うう、面目ないです……」

「いいのいいの、自力航行できる？」

「はい、28ノットまでですけど……」

矢矧は大振りな艤装を背に静かに笑った。船団に合流した後、潮を船団の真ん中に寄せるように配置する。

「おー、大変やったなあ、お疲れさん」

落ち込んでいる潮の肩を龍驤がぽんと叩く。そうしたあと龍驤は横を見る。両サイドを固めるように軽巡コンビ、阿賀野と矢矧。先頭の定位置に戻った暁と最後尾には霞、今回のチーム編成はそんな形になった。その周りを見回して、龍驤は人知れず溜息をつく。

(……4番目やなあ)

何がとは聞かれなくなかったので務めて口にしない様に気を付け

る。

それでも気になってしまうのは自分の性なのだろうと龍驤は人知れず諦めていた。

「それにしても君い、本当に駆逐艦なんか？」

「ひやつ!? ご、ごめんなさい! 頼りなくて……」

「いや、そんなことを言っているわけじゃないんやけどなあ、アハハ……」

左から強い目線を感じれば矢矧が睨んできている。だからそう言う意図はなかったんやけどなあと思いつながら龍驤は乾いた笑みを浮かべるのだった。

「お疲れ様です! 睦月さんどうでした!」

艀装を背負って現場レポーターのように飛び出してきたのは青葉だ。海上演習の予定をクリアし、一度横須賀に帰港することになったのだが、その前にどうやら感想を聞きたくて飛び出してきたらしい。

「えっと……神通さんと戦って、すごく勉強になりました!」

「そう言われた神通さんはどう思いました?」

睦月たちの後ろをついてきていたニコニコ顔の神通に青葉がマイクを向ける。

「動きにはまだ改善できるところがあると思いますが、アイデアや行動力はすばらしいと思いました。第一線で活躍しているだけあると思います。私も久々に楽しい演習ができてます」

「おーっと、高評価出ました！」

青葉がハイテンションにそういいってインタビューを続けている。その後ろでペイント弾まみれになって肩を落とすのは陽炎である。

「……綾波、想像以上に鬼神だったわ」

「陽炎、自分の訓練が足りてないのを相手にせいにするのはよくありませんよ」

「そういう不知火も川内さんを抑えきれなかったじゃない」

「——不知火に落ち度も？」

そう言つて眼光を鋭くする不知火に陽炎は肩を落とした。

「いや、どう考えでも落ち度でしょ。川内さんに見事に誘い込まれてさ。いつの間にか戦つてる相手が入れ替わってましたとかどういう状態よ」

そう言うのと無言で拳を向けようとしてくる不知火と押し合いになった。

神通が艦隊を落とすに向かった間、迎撃に来た川内と綾波を相手にしていた。最初は押ししていたのだ。上手いこと足を使わせて川内の機動力を削ぎ、確実に攻め落とそうとした不知火と、近距離の乱戦で綾波を抑え込もうとした陽炎。だが不知火の砲から逃げていると思つていた川内の航路と綾波の航路が交差した途端、対戦相手が入れ替わつた。綾波が一気に不知火に躍りかかり、それに困惑した陽炎が川内の砲撃で一発中破。後は相手にされるがままで演習が終了した。そのあとは川内と対峙していた睦月に加勢する背中を見ているだけの演習だ。

「——陽炎、次の演習で勝負です」

「いいわよ、どっちが早く相手を仕留めるか、ね」

元々戦闘意識の高い二人である。そう言う展開になるのはある意味当然と言えた。

……さつきみたいに二人とも負けるといふ事態は端から頭にならないらしい。

「それで、次の部隊はもう進撃してるんでしょう？　用意しなくていいのですか？」

「あれ、不知火聞いてないの？ 次の暁ちゃんの相手は別の子たちがやるの。私たちは補給とか一通りして休んでから初春ちゃんたちの相手だよ」

「別の子たち……というと？」

「そろそろ始まつてるんじゃないかなあ？」

そう言うのと陽炎はニヤリと笑ったちようどインタビューが終わったタイミングのようだ。

「はい！ ヒーローインタビューは以上です！ ……つとど、どうやら沖合では暁ちゃんたちが敵艦隊と接触したようですよ！ マイクをそちらに戻しまーす！」

《マイクをそちらに戻しまーす！》

「はい、現場の青葉からのインタビューでした。さて、スタジオでは引き続き解説役として夕張さんと天龍さんに参加してもらいます。さて天龍さん、暁さんの水上戦が始まるうとしていますますがどう見ますかね？」

衣笠がそう言つて笑う。

「そうだな……暁は強力な眼の持ち主だから水上戦は有利に進めると思うな」

天龍はカメラが入っているにも関わらず緊張せずになう言つた。

「強力な眼、という視力のことですか？」

「視力つて言えば視力なんだが、動体視力がめちゃくちゃいいんだ。距離にもよるが撃ちだされた砲弾を見て着弾地点をピタリと予想し

て動くことができる。戦闘の個人技能ならおそらく暁はトツプクラスのものを持つてるぜ」

「なるほどなるほど。では夕張さん。この相手の陣容をみて暁さんはどんなふうに動くと思いますか？」

次に話を振られたのは夕張である。

「そうですね。……暁さんの目を活かしつつ艦隊を誘導しながら中距離で戦うのが最適解でしょうか。軽巡の阿賀野型二隻も揃ってますし、遠くからの射程にも対応でき——」

「たぶんそれはないな」

天龍はそういいきった。それに怪訝な顔をするのは夕張と衣笠だ。「なぜですか？」

「暁は自分の強みを知って運用しているが根は単純思考のちんちくりんだ。おそらく前に出張ってくる。前線で戦うことにも慣れてるし攻撃の腕もあるだから前に出てくるね、かならず」

「なるほど、ずっと一緒に任務をこなしていた天龍さんの言葉には説得力がありますねー。さて、暁ちゃんチームにも動きがあったみたいですよ。迎撃に動き出したみたいですよ。動いているのは……え、一人？」

衣笠の声に天龍はあからさまに眉をしかめた。

「みんなはそのまま護衛を続行！ 之の字運動開始！ 艦隊指揮は矢矧さんお願いね！」

「え？ あ、ちよー！」

先頭を走っていた暁は海面を蹴り込むと艦列を離脱した。一気に加速する。ほぼ全速35ノットで敵に向かって真っ直ぐ駆けていく。「え、暁ちゃん!？」

慌てたのは右舷を守っていた阿賀野だった。一応艦隊序列では第二位で阿賀野となっていているはずなので暁が離脱した後は阿賀野に指揮権があるはずである。

「旗艦の命令なら仕方ないか。阿賀野姉、悪いが私が指揮を執る。総員転進用意」

矢矧はそういいながらもどこか不本意そうだ。

「暁も何も一人で突っ込む必要はないだろうに。どうしてそう攻撃に走るかな」

「対潜もそんな感じだったもんなんー」

そう言うのは中央でのんびりと構えた龍驤である。横では心配そうな顔をした潮が航行している。

低く轟くような砲の音が聞こえだして、戦いが本格的に始まったことを知る。

「矢矧さん、意見具申よろしいでしょうか？」

「なに、霞」

最後尾でずっと黙って航行していた霞が武装を確認しながらそう言った。

「三対一では分が悪いでしょう。旗艦の命には背きますが私も前線に出た方が結果的にいいのでは？」

「命令違反だけどねー」

そう言うのは阿賀野だ。それを涼しい顔で流す霞。

「されるのは慣れっこですし、旗艦を守るのも僚艦の役目でしょう」それを聞いて矢矧が笑った。

「いいだろう。行ってきなさい。暁の直掩、任せたわよ」

「はい、矢矧さん」

そう言うと霞も戦列を離脱。遅れながらも暁を追う。その顔には複雑な表情が浮かんでいた。

「本当は矢矧さんも前に出たいんでしょうに……ほんと、バカばつか

りなんだから」

速度を上げてく。主砲弾装填。遠くに暁を捉えた砲弾行きかう戦場に飛び込んだところらしい。

「——まったく、危なっかしくて見てられないっただら！」

そう言うと霞は全速にギアを入れ替えるのだった。

両脇から飛び込んでくる駆逐艦を見て暁は僅かに口角を吊り上げた。

《さあ暁、一緒に華麗に踊りましょう？》

「盆踊りは嫌いなものっ！」

ポニーテールを揺らして突っ込んできた舞風を暁は右の踵を軸にしてクルリと体を回して避けるそのまま、回り込み艦装にマウントされた砲が火を噴いた、

「おっと、えげつないところ狙ってくるねー」

それを舞風は上体をそらすようにしてかわすと舞風の主砲がこちらを向いた。

「じゃあお返しね！」

真正面で放たれた砲弾を暁は首をひねるだけで回避、バックステツプで距離を取りつつ右手を真横に伸ばした。そこから放たれた弾丸が横を走っていた誰かにぶち当たる。

「げ、ばれてたか」

「当然。斜め後ろで魚雷管用意してて視えない訳ないじゃない」

横で涙目なのは巻雲である。思いつきり足元に弾丸を喰らっている。判定は——自力航行不能、あっさり行動不能に追い込まれて不満タラタラだろうがしかたない。

「やっぱり強いね。月刀艦隊のみんなって」

「そりやどうも」

「でもしつかり踊らないと、次には進めないから！ ほら行くよ！」

舞風が砲を撃ちこもうとし、その真横から影が割り込んだ。

「暁！ 駆逐なんかに構ってないでさっさと軽巡倒してきなさい！」

「か、霞！ なんでこっちに！」

「多勢に無勢でかっこつけてんじやないわよ。ほら行った行った！」

「~~~~~ああもう！」

「それはこっちのセリフよまったく」

暁はくるりと背を向けて海面を蹴る。直後真横に水柱が立った。

「私を討つ気ならもつと狙ってきなさい！」

「そうかい、それは失礼したな」

目の前には不敵に笑う影、黒いマントには飾緒が揺れ、暁を見て笑みを深くした。

「勝負よ、木曾！」

「いいぜえ、本当の戦闘ってやつを教えてやるよ」

そう言うのと木曾は刀を——正確には竹光を引き抜きニヤリと笑う。暁も防弾板の裏に手を伸ばし、警棒を振り抜いた。伸縮警棒が展張され正眼に構えた。

「いぎ」

「尋常に」

「勝負！」

そして、互いに一気に踏み込んだ。

「ちよつとまって!」

戦闘指揮所で航暉が叫んだとしても演習は続く。航暉は今回指揮権を持たないからだ。その後ろでは高峰が遠慮なしに大爆笑している。

「暁のヤツまったく演習の意図を理解してねえ! 誰が殴り合えと言った!?!」

「眼で砲撃をかわして接近して警棒振り回して大乱闘。ひー、笑いきぎて腹痛い」

高峰が管制卓のコンソールを操作しリアルタイムの映像を呼び出した。

リーチで木曾に軍配が上がるためか、木曾の方が有利に進んでいるように見える。暁は基本的に相手の攻撃を受け止めようとせず、回避に徹し、時に思い出したように砲撃をしたり警棒で刺突したりを繰り返している。

「でも案外暁ちゃん警棒捌き上手いじゃない。これ持つてすぐの動きじゃないよ?」

「……天龍が刀持つてるだろ。暁はあれがかっこいいんで少し憧れてるんだと」

情報元は響だ、と航暉が追加情報を漏らすと、高峰は肩を揺らす。

「あー、つてことは練習してたかな?」

「時々手合せしてもらってた。天龍も天龍で熱いからな。わりかし本気でやってたよ」

「なるほどねー。で、前のヒメ事案の時に晴れて警棒が正式装備に追加されて機会を窺ってたと」

「おそらくな。示し合わせたようにそれに付き合う木曾も同類か?」

そう言うともまた笑い出す高峰。あまりの接近戦に周りは誰も援護できない状況だ。……といつてもまわりにいる霞も舞風も巻雲も、あまりの超展開に足を止めている。

《はっ！ なかなか筋がいいな》

《と、当然よ！》

二人はさらにヒートアップ。もう砲弾すら飛ばず、文字通り鎬を削る戦いに移る。サブの画面に映し出されたスタジオの方では天龍も教え子の戦闘にヒートアップしているらしく、〃行け！ そこだ！〃とか〃なんで担ぎ胴なんて大技選ぶんだ!?〃とかそういう声が聞こえる。

「天龍はあんな感じだし、木曾も最初の威嚇射撃だけで砲撃してないし、もうお前ら何やってんだよって感じだ」

航暉が本気で頭を抱えると高峰はご愁傷様と肩を叩いた。

「本人たちは楽しそうだからよしとしようよ。絶対に広報資料としては使えないだろうけど」

「当たり前だ。木曾戦は全カットだ、全カット。警棒は対人兵器だぞ、そんなのをぶん回して戦ってる絵面なんか公開できるか。いろんなところがうるさい」

「ただでさえいろいろ問題抱えてるもんねー、艦娘関係は」

高峰はそういいながら映像を拡大していく。

「あーあ、竹光だと強度不足か、折れてら」

「……で、砲撃戦。順序が逆だ二人とも。接近戦用の武器は自衛用の最終手段だろうが」

暁の砲が木曾のマントをピンクに染め、木曾の砲弾が暁の帽子を吹き飛ばした。そのころになって再起動を果たしたのか霞がまだ呆然としている舞風をあつさりと落として暁に加勢した。

「ま、二対一なら暁陣営の勝ちっぽいな。で、どうするの?」

「——暁・天龍・木曾に少しくらい文句言っても許されるよな?」

「さあね」

高峰は笑いを噛み殺しながらその様子を眺めた。最後は霞が背後

から砲撃を決めて戦闘終了。結果的にだが今回の戦闘、撃破数は霞が3で暁が0で終了した。与えたダメージ数なら暁の砲が上なのだがどうも攻めきれずに終わっている。

「ここで完全に決めきれないところが暁ちゃんらしいよね」

「知らんがな。暁の眼の良さとか旗艦向きの能力なんだがなあ、ワンマンショーで何とかしようとしたりするのがあるだ」

航暉はそう言うと言子椅子の背もたれに体重を預けた、椅子がぎしりと音を立てる。

「で、次は初春か？」

「こんな飛び道具な戦いにならないことを祈るよ」

航暉はそう言うと言子椅子の背もたれに体重を預けたのだった。

Chapter 5. 5—5 黄昏に探照灯は煌め
き

「……で？ 言いたいことは？」

「は、反省してます……」

横須賀に帰還して早々に怒られているのは暁だ。何とが艤装を下ろすぐらいの余裕はあったが、すぐにこうして怒られていると恥ずかしいやら情けないからで結構複雑である。

「で、何で怒られてるかわかったか？」

「指揮権譲渡のステップ完全無視での突撃と、その後の無謀な接近戦について……よね？」

「そうだ、霞が飛び出してきてくれたからよかったものの3対1での戦闘になるってわかってるんだからひとりでも無茶する必要もないだろう？」

半分涙目で正座している暁をのぞき込むのは天龍だ。

「攻撃に自信があるのは結構だが、それだけだとなんにもできないだろう。部下がいる時ぐらいは落ち着け、特に今回は護衛任務だろうが。せめて艦隊はどっちに向かえばいいかぐらいは指示を出して、指揮を預ける相手の返事を聞いてから動け」

指摘はもつともであり、暁にも自覚があるためぐうの音も出ない。その横で腕を組んでいた木曾がニヤリと笑った。

「まあ、その辺にしてあげな。旗艦経験もあまりなかったんだろう？」

いきなりそこまで考えて動けてのでも難しいさ」

そう言うの木曾は暁の頭を少々乱雑に撫でた。

「な、何するのよー！」

「いいじゃねえか、チビスケ。褒めてるんだぜ？」

「木曾、このチンチクリンを甘やかすな」

「チビスケだのチンチクリンだの、こども扱いもいい加減にしろー！」

「この眼帯！」

「あ？」

「す、すいません、なんでもないです……」

いきなりおとなしくなった淑女。がたがたと震えだす彼女を見て天龍は頭をガシガシとかいた。

「はあ」天龍が溜息をつき、

「はあ」木曾が溜息をつき、

「はあ」航暉が溜息をついた。

それに暁たち三人は驚いて飛び退いた。それを見て溜息を深くつく航暉。

「そこまで驚くか？ お疲れさんだ。ほれ、飲み物」

航暉はそういいながら缶コーヒーを投げてよこした。天龍と木曾にはホットの微糖、暁はホットココアの缶だ。買ってからちよつと時間が経っているからか、ちよつと飲みやすい温度になっている。天龍と木曾は片手で難なくキャッチしたが、暁は慌てて何度かジャグリングのようにココア缶を放り投げていた。

「司令官、いつから見てやがった？」

「結構ずつといたぞ、木曾は久しぶりだな。M I撤退戦以来か」

「久しぶりだな、月刀提督」

木曾が敬礼を向けてきたので航暉も答礼を返す。その光景に天龍はなぜだか違和感を覚えた。缶コーヒーに口を付けながら天龍は考える。

——どこか、ぎこちない？

「月刀提督はここにおいて大丈夫なのか？ 演習の安全監督をしていると聞いてたが」

「初春の演習は高峰中佐が担当しているから大丈夫だ。あまり長時間は抜けられないけどね」

そんな会話を交わす二人を見つつ天龍は頭をひねっていた。なぜ目の前の上官に違和感があるのだろうか。

「様子って？」

「ああ、広報資料の撮影っていうこの演習の第一目的を完全無視して至近距離の剣技に走った部下の様子とか、それを嬉々として受けて立った仮想敵約の艦娘の様子とか、それを見てヒートアップしてたのにそれを柵に上げて説教たれた教官役の艦娘の様子とかを、ね」
この時になって天龍は理解する。

あ、この司令官地味に怒ってる。

その雰囲気にも木曾も暁も顔がさつと青ざめる。

「温いもの飲んで落ち着いたところで、少し話をしようか」

これ逃がさない気だ。天龍はそう悟って肩を落とした。

一方その頃、大分傾いた日の中で初春率いる護衛艦隊は全速に近い速度でかつ飛ばしていた。

「潜水艦を巻くのに時間を取りすぎたのお。今から全力で走っても時間ギリギリじゃ」

「でもなんとか潜水艦には勝てたんですから良しとしましょう?」

先頭をひた走る初春に後ろから声をかけたのは五十鈴だ。それを聞いた長良は苦笑いを浮かべる。

「まさか長距離走をここでやることになるとは思ってなかったなあ」

「わたしは、全力に……近いんですけど……ね」

艦隊に守られながら上がった息でそう答えるのは祥鳳だ。この中では一番足が遅い分速度を上げるのは負担がかかるのである。

「すまんのお、わらわの作戦ミスじゃ」

「作戦ミスというよりは私達の準備不足じゃないかしら？ 対潜で動けるのは私くらいだったし」

五十鈴がそう言うのと最後尾を進む駆逐艦、雪風が暗い顔をした。

「すいません。ゆきかぜがもつと早く気づいていれば……」

「雪風のせいじゃないと思うよ。右舷後方からの雷撃なら反応すべきは僕か長良さんだ。それより先に左舷後方を警戒してた雪風が先に気がつくんだから、僕たちの面目丸つぶれかな」

雪風と並走する時雨がそうフォローを入れると長良がバツの悪そうな顔をした。

「それにしても雪風ちゃん目がいいんだね」

「あれは落ちかけた双眼鏡のレンズカバーを拾おうとしたらたまたま……」

「それで潜望鏡を発見できるんだから幸運ってすごいわね」

五十鈴が笑いながら会話に参加する。それを耳にしながらも初春は僅かに眉を顰めた。

「なんだか嫌な予感がするのじゃが……何か電探に映ってはないかの？」

「クリーンだけど……あ」

「ど、どうしたの、長良姉？」

「あ」というのは戦場で一番聞きたくない言葉でもある。いいことも悪いこともあるがたいい悪いことであり、起こってほしくないことが状況予測として瞬時に頭の中を駆け巡る。

「7海里先が一瞬だけ光った気がしたんだけど……クラッター波かな」

「思い込みは厳禁じゃの。総員戦闘用意、……時雨、雪風」

「うん？」

「なんでしょー？」

「何が出てくると思うかの？」

夕暮れの近い時間帯、青みを増してきた空をバックに初春が振り返った。それを見て時雨が口を開く。

「そうだね。……この時間帯なら空母は来ない。着艦するころに夜になつちやうからね。7海里先にいるとしたら戦艦や重巡でもなさそうだ。おそらくは——水雷戦隊」

「魚雷を用いた夜間奇襲、じゃな？」

「その可能性が高いと思うね。それなら日暮れを待つて攻撃してくる理由もわかる」

時雨の意見に頷いて、初春は笑う。

「ならどうすればいいじやろうか、雪風よ」

「そーですねー、こつちから仕掛けちゃいますか」

雪風はそう言うとう自分の太ももあたりをいじりだす。左足の太ももには探照灯が縛り付けられている。それをいつでも使えるようにしながら雪風は笑った。

「初春さん、仕掛けるならゆきかぜを切り込み隊長にしてくれませんか？」

「うむ、ではどれだけの人員が必要じゃ？」

「では時雨さんを」

「ふたりで十分か？」

「こつちに三人必要でしょう？」

雪風は笑うと双眼鏡にレンズカバーをかけ、手に砲を持った。

「不沈艦の名は伊達じゃないので。いいところお見せますっ！」

「雪風との共闘は久しぶりだね。少し気合を入れるかな」

時雨もそう言うて笑う。背負った主砲のほかに右手に持った副砲を確かめると笑う。

「それでは二人に戦闘を頼もうかの、わらわは後方サポートに徹しよう。それでは行動開始なのじゃ」

初春の声にゆっくりと部隊が行動に移す。

「まずいかもしれませんよ」

そういったのは用意を進めていた神通だ。

「まずいというと？」

沈みゆく夕日を見据えたまま神通は口を開く。

「ゆつくりと隊を二つに分けてきてるみたいですよ」

「こちらに気がついたのでしょうか？」

「そうみるべきでしょう」

神通は鉢金をきゅつと結び直した。

「戦場で一番怖い相手はどういう相手か知っていますか？」

神通の言葉は投げかけであり、問いかけであったが、答えを求めてはいないようだった。

「私は戦場で常に冷静である相手が一番怖いです。たくさんの砲弾に死角を走る魚雷、いくつもの閃光に爆炎。特に夜の戦いでは至近距離になるまで敵味方の区別がつかない。その状況下で誰がどこまで戦えるかの確に把握している部隊ほど相手に回して恐ろしい部隊はありません」

戦場と言うのは非日常であり、異常事態だ。その中で正気を保ち、虎視眈々と機会を窺い、的確に相手を見定めたうえで攻撃してくる相手。それを可能にする司令塔がある相手を相手にするのは本当に骨が折れる。

だからこそ神通はそれを味方に叩き込み、その上でその相手を崩すための戦術を教え込んでいた。

「この感覚は、何度経験しても怖いものですね」

「……神通さん？」

陽炎が怪訝な声を出した。直後神通が右腕を上げた。

「探照灯、照射。敵に切り込みます」

神通が煌々と明かりを煌めかせながら先陣を切った。
日が沈もうとしていた。

互いに目つぶししながらの反航戦に入った。

「相手は神通さんかい？」

「間違いないですっ！ こんな突撃をまともに受けて立つ相手なんて
“あの旗艦”以外にないですよ！」

魚雷を撃つには相手の位置と速度を見極めなければならない。だ
からこそ雪風は探照灯で相手の目を潰しつつ全速力で接近する。

「時雨、覚悟はいいです？」

「言われるまでもないね、——行くよ」

「それは先頭のゆきかぜのセリフですっ！」

文字通りの目くらましをかけながら真正面のライトを感じる。直
視したら目がつぶれる。視線をずらしたまま相手との距離を測る。

「時雨！ イロハのイでいきますよ！」

「了解」

時雨に指示を出してから雪風は僅かに進路を変更、文字通り相手の
真正面に躍り出る。

「神通さんの攻撃がどれだけ恐怖か思い知らせてあげますよう」

互いに譲らぬまま距離があつという間に詰まっていく。砲火が轟

きだし、演習弾が辺り一面に降り注ぐ。それでも雪風は止まらない。二水戦名物、逆落とし。

反航戦と言うのも生ぬるいチキンレース。真一文字に接近するこの戦法はクレイジー以外の何者でもないだろう。逆落としはスピリッツのぶつけ合いなんですっ！と雪風は豪語する。一步間違えば速度差100キロオーバーの運動量で互いに大けがに繋がりにかかないこの戦法をまともに取れる人材は限られる。

「一度やりたかったんですよこれ、神通さん。覚悟してくださいね」

無線に乗せずに雪風はそう呟いた。相手の弾丸が肩を掠める。探照灯で目つぶしを受けていなければもう誰何しなくとも相手がわかる距離だろう。交差まであと3秒。

「——っせい！」

雪風は重心を大きくずらし右斜め前へと飛び込んだ。直後耳の脇を掠めるようにして神通の砲弾が突き抜けた。衝撃波に耳を傷めながらも雪風は砲を振る。小柄な体をさらにコンパクトにまとめ神通の脇をすり抜けた。探照灯の明かりの影に隠れた眼光と一瞬目が合う。

相手が笑っていたのはおそらく見間違いない。

足元の魚雷を飛び越えるようにそのまま交差、僚艦としてついてきていたらしい陽炎に飛びかかる。

「よりによってあんたか雪風！」

それには答えずに砲を閃かせる。次の刹那には雪風は陽炎の後ろに回り込んでおり、思いつきり陽炎の臀部を蹴り飛ばした。

「いったあ！ あにすんのよ！」

スカート越しにお尻を押さえる陽炎に雪風は容赦なく魚雷を放つ。「神通さんの僚艦を務めるならもつと魚雷を当ててください。つまらないです」

この至近距離で外すことは無いので見極めることなく左へステツプ。そろそろ神通がこちらに転進してくるころだ。

「雪風え！ 姉を蹴るか普通!?!」

「姉さんだから蹴るんですっ！ あとで慰めてあげるので今は黙って

てくださいい！」

「姉の扱いひどっ！」

夜戦でコントのようなやり取りだが、文字通りの全速で神通が戻ってきたため終了する。神通の砲撃が頭をかすり電探が使用不可になった。問答無用でヘッドショットを狙ってきているところを見ると神通も本気らしい。

そこから先はひたすらな乱戦である。共に撃ち、傷つきながら相手を穿つ決定打を狙う争いだ。

それを尻目に輸送本隊に近づいていく影が一つ。不知火だ。乱戦になった直後以外に勝ち目はない。だからこそ動いた。

輸送隊に向けて照準を合わせ、魚雷発射管を繰る。直後、不知火は寒気を感じ、雷撃をキャンセルした。とつさに海面を蹴るとその横に水柱がたった。

「……いい判断じゃのう、不知火よ」

「旗艦直々にお相手して頂けるとは、この不知火、光栄です」

「護衛対象に矛を向けられては出ざるおえんじやろう」

初春はそう言うとう扇子を一目だけ開いては閉じるを繰り返し、笑った。扇子が閉じるたびにぱちぱちと音が響く。

「不知火と手合せ願えますか？ 初春」

「わらわでよければ喜んで」

先に砲を放ったのは不知火で、直後に初春も発砲。互いに動き回りながらも一気に距離を詰めた。

夜戦の場合は特にそうだが、艦娘同士の戦いは通常戦闘よりも交戦距離が短くなる傾向がある。艦娘同士の戦闘は特殊な場合を除いては演習であり、大胆な戦術が可能になることに加え、新しい戦い方を模索するいい機会にもなるからだ。初春たちの戦いも例にもれず夜闇でも相手の顔が認識できるほどの超至近距離での砲火の応酬となった。

「なかなか当たりませんね」

「そうじゃの、ほれ」

砲を取回す限界に近い距離でくるくと動き回る二人。不知火は笑って砲を避ける。その動きで左足でターン、次の瞬間には魚雷が飛び出している。

「狙いが甘いのお」

「その言葉、熨斗つけてお返しします」

仕切り直しをするように初春が下がる。不知火は相手の息が上がっているのを見てニヤリと笑った。

「もう終わりですか？ そんなことでは不知火は沈みませんよ」

「ならこれならどうか？」

直後視界が揺れた。ほぼ接射と言っていい状況でペイント弾が撃ち込まれたのだ。そう気がつくまでに数刹那の時間を要した。

「後方支援に徹するっていった人まで駆り出しちゃってごめんね」

「時雨の服は夜闇に溶けるからのう。気を引くだけなら支援の範囲内じゃろう」

初春はそういつて時雨とハイタッチを交わす。

「雪風のほうは？」

「痛み分けだね、双方大破。敵の追加戦力が来る前に曳航したいところだね。とりあえず長良に引っ張ってもらうのがいいかな？」

初春は頷き、無線を開く。

「こっちの戦闘は終了じゃそっちは無事じゃな？」

《もっちゃん！ 初春ちゃんたちは？》

「雪風が大破しとる。長良、ちと手伝ってくれるか？」

《すぐ行くよ》

初春は無線を切って空を仰いだ。

「これでおわりだといんじゃがの……」

「さて、結果発表——！」

「どんどんパフパフ」

全員が帰還した夜、参加者が揃ったスタジオでハイテンションに言うのは、いまだに元気な青葉衣笠コンビである。

「とりあえず皆さんお疲れ様でした、事故なく海上演習が終わったのでよかったです」

「そういえば青葉さん」

「はいはいなんでしよう衣笠さん」

「海上演習の評価ってどうなるんです？」

「艦隊戦は終了時の行動可能艦の数とクリアタイム、あとは対潜と対艦の技能点で判断です。制限時間は4時間なので大幅にオーバーしてしまった初春さんにはちよつと不利ですかねー」

「味方を捨て置くわけにもいかんし仕方なかったのお」

すこし不満そうな顔をするのは初春だ。最初の対潜で時間を喰ったことと、大破した雪風を引っ張りながらの移動だったので時間がかかってしまったのである。

「個人の対空演習の結果は単体評価で暁さんと初春さんはランク維持、睦月さんだけ残念ながらランクダウンとなっちゃいました。現在トップで一流駆逐艦は初春さんだけ、睦月さんと暁さんは同ランクで通常駆逐艦ですねー。さてさて、それでは結果発表に参りましょう！」

青葉の声に会場のテンションが嫌でも上がる。ドラムロールが鳴り終わると青葉が声を張り上げた。

「ランク維持は、睦月さんと初春さんです！ おめでとうございます

！」

「ちよつと待ってよ！ 私もちやんと任務完遂したじゃない！」

手を振り回して講義するのは暁である。

「講評は夕張さんどうぞ」

「みなさん対艦戦闘ではかなりの好成績を残されています。分け目となったのは前半の対潜戦闘でした。対潜に関してですが睦月さんは担当の伊58と伊19兩名から、絶対に睦月にだけはケンカを売りません」というコメント付きで満点評価が下りています」

あ、やつぱりイクさん来てたんだと納得するのは睦月である。どこかで聞いた推進音だと思ったら硫黄島沖で会っている。

「で、暁さんの演習は個人技能としては十分であるものの、指揮系統の混乱を招き、艦隊を危険にさらした可能性があると言うことで減点が入っています。それが一番の敗因つてとどこですかね」

暁はその言葉に押し黙る。同じようなことを天龍からも航暉からも言われた後であり、正直堪えていた。

「さてさて、演習はまだまだ続きますよー。とりあえず皆さんにご褒美の紅茶をご用意いたしましたので、皆さんに召し上がっていただきましょう。それではこちらにどうぞー」

どうやら紅茶を振舞ってくれるらしい。暁は立ち上がると後についていく。少々不本意な結果だが終わってしまったものは仕方ない。気分を切り替えて頑張ろう。対空演習のごほうびで間宮パフェも待っているのだ。

それを見守っていたのは航暉だ。横には高峰も見える。

「気づいてんのかなあ？ その紅茶も評価対象だって」

意地の悪い笑みを浮かべる高峰に航暉は肩を落とした。

「で、俺も行かないといけない訳？」

「招待状が出るんでしょ？ 行かないと可愛そうじゃん」

「俺はコーヒー派なんだけどなあ」

「いいから行った行った」

航暉は高峰に背中を押されて青葉たちの後ろについていくのだった。

い

「ハイ、みんなお疲れ様ネー！ 金剛型4姉妹が腕によりをかけてアフターディナーティーを用意したから、みんな楽しんでいってネー！」

移動した会場では素晴らしいながら丸いテーブルで一足先にお茶を楽しんでいる金剛が待っていた。その横に立っている榛名が笑顔で会釈し、比叡や霧島がチョコレートなどのお菓子を運んでいる所だった。

「うっわ、この背景ホロ、いくらかけたんだか」

「コマンダータカミネ、そう言うメタな発言はノーですよ？」

英国風の中庭式庭園を模したホログラムはかなり立体的に表示され、いくつものレイヤーを重ねたことが見て取れる。足元にカメラ用のレールが敷かれており、カメラが動いているのもわかるのだが、カメラが動くとわずかにノイズが走りなんとか判別をつけられるような高いレベルで擬装されている。軍用ホロの無駄遣いとも思えなくもない。

「で、なんでカズキは少しうんざりした顔をしてるんデス？」

「だから俺はコーヒー派なんだって」

「ウー、まだあんな泥水みたいな飲んでるんですカー……おいしい紅茶を好きになるように毎日毎日丹精込めて紅茶をご馳走してたのニー」

「紅茶は紅茶で悪くないんだが好みは変わらんよ」

そんな会話をしていると睦月と暁の眼がすつと細くなった。

「提督と、金剛さんが、毎日……？」

「司令官がコーヒー派って、電知ってるのかしらねー」

そう言って二人は後ろを振り返る。列の最後尾にいた航暉はやれ

やれといった風貌であるが、二人にはなんとなくわかるのである。あれはポーズだ。なんだかんだ言つて本気で嫌がつてない。端から断る気もないんだらうなと思う。

「ど、どうした……」

「べつにー」

意味ありげな視線を送っていた睦月と暁だが視線をついとそらしてそう言った。

高峰が終始肩を揺らしていたのは言うまでもないだろう。

「さーて、それじゃ、レッツ・ティータイム！」

暁たち三人が席に着くと周囲の風景が切り替わった。というよりいるべき人、航暉たちが見えなくなった。驚いて周りをきよろきよろする三人。

「問題ナッシング。ホログラムをかけただけネー。今からミス・アカツキたち皆さんの味覚をチェックしマース。今から4種類の紅茶の銘柄を当ててもらおうのでよろしくお願いしマース」

「紅茶の銘柄とな？」

「イエス！ ラインナップはオールグレイからフォートナム&メイソンのフォートメイソン、キーマンからトワイニングのプリンスオブウエールズ、ブレックファストからスタッシユのアイリッシュブレックファスト、あと紙パックの紅茶を用意したのでー、飲み比べてどれがどれだか当ててもらいマース」

初春の質問にカタカナばかりが返ってきて睦月と初春はちんぷん

かんぷんである。アールグレイが紅茶の種類だつてことくらいは知っている。そのあとに続くのが紅茶の銘柄なんだろうなというのも想像がつく。だが、どれがどんな味なのかさっぱりわからない。ブレックファストなど訳せば朝食である。紅茶の種類にそんなのがあ
るのもはじめて知った。

そんな中でもティーカップにゆつくりと紅茶が注がれている。カップは赤、黄色、青、緑に色分けされており、それぞれ一つずつが皆の前に置かれる。

「スコーンやケーキ、チョコレートも用意してあるネー。あとお水はおかわり自由デース。紅茶の好き比べはそれぞれ一杯ずつで判断してほしいデース。それでは、レッツスタート」

それぞれが恐るおそるカップを手取る。暁は赤いカップに手を付け、口にする。

「……にがっ」

そう呟いてカップを置くとチョコレートに手を伸ばし、口に放り込んだ。強い苦みを和らげてから水でさっぱりと流す。レモンのかけらが入っていたのかさわやかな風味が残る。

「むむむ、味が違うのはわかるんですけどねー……」

横では睦月が一口ずつ口に含んでは首をかしげている。無言で固まっているのは初春だ。

「うーん、雑味が多いかしら」

一人つぶやきながら暁はテイスティングを続ける。水を飲んだりお菓子を挟みながら一口ずつ口に含むと暁は顔を上げた。

「金剛さん、用意したのはパックのやすいやつとフォートメイソン、プリンスオブウェールズにアイリッシュブレックファストで間違いないわよね?」

「ハイ、その通りデース!」

「わかった答えはどうすればいいの?」

「後で教えてもらいマス。自信の程はありますカー?」

「これだけ味が違いばね。間違いないと思うわ」

暁はそう言うと笑った。

「このガトーショコラおいしいわね。もしかして手作り?」

「はい、榛名が作りました!」

そう笑うのはずっと金剛の脇で待機していた榛名である。榛名はおいしいと言われたことが素直にうれしいのかニコニコの笑みをさらに深くした。

「さすがは榛名姉様ですね、私ももっと精進しなくては」

「霧島はレシピに拘りすぎなんじゃない? だって誰が0.1グラム単位で粉の量あわせたり、0.1秒単位で焼き時間計ったりするのよ」

「比叡姉様はまず食のリーサルウェポンを作るのをやめましょう。少しはレシピを参考にしてください」

「愛はたっぷり込めたんだけどなー」

そんな会話を聞きながら金剛はくすくすと笑った。その頃には皆の手が止まっていた。

「みんないいかナー。それじゃあ今から言う銘柄が入ってると思うカップを指さしてくださいサーイ」

聞いてみると紙パックの紅茶以外はみなばらけた結果になった。暁だけは自信満々、残りの二人は至極不安そうである。

「さて、答え合わせは、カズキっ、お願いしマース!」

「そのために俺を呼んだのか?」

ホロが解除され茂みをかき分けたように冬服の男が姿を現す。言わずもがな、月刀航暉である。いつのまにか制帽まで被ったフル装備である。ホロの裏側でいろいろあったらしい。

「何回も紅茶淹れてあげたんだからびしょと当ててよネー」

そういうと航暉の席も用意され、席に着いた。

「どれ、自分もお菓子を頂いてもいいのかな?」

「勿論デース」

「比叡、料理の苦手は克服できたのか?」

「あー! 月刀さんもそう言うこと言うー!」

帽子を外しながら航暉は笑った。帽子を背もたれに掛け、布ナプキンを手早く膝の上に広げた。

「比叡のカレーには何度か殺されかけてるからな。言いたくもなるさ」

航暉はそう言ってカップを手に取った。ソーサーごと持ち上げて胸の前へ、ゆっくりとカップに口をつけ一口飲んだ。

「苦みが強いな、ミルクと合わせたいところだが、ふむ。……アイリッシュブレックファスト、金剛、合ってる？」

「That's right. 赤いカップはスタツシユのアイリッシュブレックファスト、目覚まし代わりに飲む紅茶デース。だからブレックファスト」

金剛の説明にぼんと手を打つ初春、考えればわかりやすかったかもしれない。

「で、緑は……ウーロン茶のような香り、キーマンだね。プリンスオブウェールズ」

「さすがテートク。その通りデース」

「青は……つと柑橘系か。ダーズリン系、フォートメイソン。で残りの黄色は雑味が強いことから紙パックの紅茶で決まりだ」

「パーフェクト！ さっすがわたしが選んだダーズリンデース！」

「だから俺はコーヒー派だ」

「むー」

そんな会話を聞きながら睦月と暁は目を細める。そのじとつとした目線に既視感を感じつつ、航暉は返す。

「な、なんだよ」

「べつにー」

その日の演習はこれで終了残りの科目は翌日にやることになった。「で、やっぱり待遇が変わると……」

翌日の朝、広報局の用意した控室に入るとそれぞれの朝食が用意されていた。

「朝は和定食に限るのお」

「そ、そうですね。ははは……」

乾いた笑みを浮かべるのは睦月だ。朝から小鉢ものがついた豪華な定食がついている初春の前に、質素な焼き魚定食を並べられると結構アレである。まあ、ウエーク島と補給物資到着前の朝食など、時々こうなることがあるた慣れてはいるのだが、目の前にこういう食事を並べられるとかなりアレである。非常にアレなのである。

つやつやのふつくらはんに納豆は最高だと睦月も思う。ウズラの卵に小口ねぎも用意されており至れり尽くせりだとも思う。でも暖かい里芋の煮物をそこまでおいしそうに食べられるという思うところがあるのも間違いないのだ。

「睦月はまだマシよ。なんで私だけ弁当なのよ、ねえ」

一応全員間宮さんの監修のものなので、美味しいことに違いはない。弁当も弁当で冷えることを前提に料理が作られている。間宮さんの弁当はそこで売られている弁当と比べてもすごく美味しい部類に入る。それは間違いないのだ。間違いないのだが、辛いものがあるのはお分かり頂けると思う。

「なんだか申し訳ない気分になつてくるのう……」

「じゃあ、遠慮せずに変わってあげるわよ？」

「ふふっ、い・や・じゃ」

その反応に嬉しそうな笑み。睦月はどこかすがるような目で横の暁を見た。

二人は思うのだ。敵同士には違いない。でも

これ以上は、負けない！

次の種目は深海棲艦や第二次世界大戦時の艦艇のシルエットクイズ。これは全員なんとなくクリアした。さすがに「キスカ島突入時に煙突を偽造した阿武隈」など紛らわしいのはどうかと思ったが、誰も引っかけからなかったので出題役の利根は悔しそうだった。

大和の軍楽隊の演奏聞き分けはその分大パニックに陥った。

演奏楽器の値段が高いのはどっちかとか聞かれてもそんな知識を持っていてのは誰もいなかったのである。「睦月さんは耳がいいので有利ですかねー」とか青葉に言われたが、そんなことはない。知識がなければ楽器の聞き分けなんてできないのである。なんとなくこつちで選んだ暁以外不正解という結果になってしまったのである。

「あれはわからないわよねー」

最後の種目を前に伊良湖さんのクッキーをつまみながら暁はそうぼやいた。暁もヤマ勘だったのである。横では睦月が月餅を頬張っている。

「そうじゃのう……。軍楽隊の演奏なんて式典ぐらいでしかきかんからなのう」

小豆アイスを入れた最中を食べるのは初春だ。初の土がついたことで少々不満そうだ。

「で、次の種目って何なのかしら？」

「なんでしょー、睦月にもできることだといんですけど……」

そんな風に自信なさげなのは睦月、暁は逆に紅茶問題以降快進撃を続けているので余裕そうだ。

「なにがでるんかのう……」

最後の種目は面白いですよ？ と青葉に言われても、予測がつかない

いのである。

怖いような期待するようなそんな変な空気の中、三人が呼ばれる。最後の戦いが幕を開ける。

「はい！ 長いこと続いてきた演習ですが、これが最後の種目です！
皆さんのいいところ、見たいですねー」

カメラは青葉と衣笠をドアップで映している。

「はい、私もわくわくしてます。ところで青葉さん、最後の種目って何
なんですか？」

「それは……ジャジャーン！」

青葉たちが飛び退くとそこにはピカピカに磨き上げられたステン
レスの流しにコンロ……。キッチンが3セット用意されていた。

「ここでやることといえば、そう、料理です！ 最後の種目は《腕自慢
は誰だ！ クッキング対決》となりまーす！」

これまでで一番大きな拍手が沸き上がる。今回はかなり観客も
入っている。最初のクイズの時にいた姉妹艦も揃っている。

「皆さんにはそれぞれ指定した料理を作ってもらいます。時間は1時
間半、姉妹艦なら二人までアシスタントを付けることもできますよ。
付け合せは自由。白ごはんは私達青葉型で用意しました。1時間半
でおいしい夕食を作り上げてください！」

暁たちが青葉の声にぼかんとしたまま聞いているうちにどんどん
説明が進んでいく。

「料理の判定は、海軍が誇る料理自慢、間宮さん、南方海域から駆けつ

けてくださった。お艦。こと軽空母の鳳翔さん。司令官代表で月刀航暉大佐に実食してもらいます。皆さん頑張ってくださいねー」

その説明に睦月が再起動した。これは、チャンス？

ちらりと観客席を見ると、如月が小さく手を振った。

「それでは、クッキンググスタート！」

1時間半の真剣勝負が始まった。

Chapter 5. 5-7 料理の腕と僅かな疑念

「じゃ、始めようかの」

真つ白の割烹着を着たのは初春である、その横には同じく割烹着姿の初霜と若葉が立っている。

「はあ、まさか私が参戦することになるなんて……」

「初霜は嫌だったかの？」

「いやって訳じゃないんですけど、その……料理に実はあんまり自信がなくて……」

「大丈夫じゃ、わらわが心得とるからな」

初春がそう言って白い三角巾で髪を縛っている。若葉は三角巾を結ぶのに手間取っていて、結局初霜に結んでもらっていた。

「で、何を作るんです？」

「わらわたちのお題は『肉じゃが』じゃ。肉じゃがはうちが作るから付け合せのお味噌汁とお浸しを頼めるかの？」

「わかった。」

「が、頑張ります」

それを聞いて初春はぱぱっと包丁とまな板を取り出し、人参に玉ねぎ牛肉と材料を並べる。

「ふたりとも、ジャガイモと人参の皮をむいて乱切りにしてくれるかの？ 玉ねぎのくし切りも余裕があればいいからお願いできる？」

「任された。」

「わかりました」

そうやっている間にも用意がテキパキと進められていく。野菜とは別のまな板で牛の薄切り肉を適当にカット。間宮さんと鳳翔さんと月刀大佐で3人分、少し量を多めにして4人分で作って少しづつつまめばいいかと思いつながら適当に肉を切る。

「ジャガイモってこれぐらいの大ききでいいんでしょか……？」
「んー？ それぐらいかの。次のは気持ち小さ目に切ると味が染みや
すいかもしれんのう。切ったジャガイモは水に晒しといてくれるか
？」

ボールに水を張り、ジャガイモを投入する初霜たち妹艦の様子を見
て、初春はほう、とし静かに感嘆の溜息をついた。意外にも手早く進
めるのは若葉だ。人参の皮をピーラーで手早く切ると乱切りで仕上
げていく。それを見て初春は少し驚いていた。若葉が包丁の使い方
を心得てるとは思っていなかったのだ。

初春はその間にも肉に砂糖をまぶして下味をつける。糸こんがな
かったので普通のこんにやくを底が深めのフライパンで乾煎りして
取り出す。

「〜♪」

初春は料理が嫌いじゃない。創意工夫でおいしくもなるし、味を損
なうこともある。そのさじ加減を見極めて成果がすぐに現れる。そ
れが結構楽しいのである。

「3人いれば調理も楽じゃのう。基地に戻ったら子曰に料理でも教え
てみるかの」

初春はそんなことをつぶやきながら油を引いたフライパンに牛肉
を投入した。

さつそく漂い出した肉のいい匂いに負けじと合挽き肉を炒めだし
たのは睦月・如月・弥生の睦月型連合である。睦月たちに課されたお

題はコロツケ。みじん切りにした玉ねぎと肉一緒に炒めているのはどこか恥ずかしそうにピンク色のエプロンをしめた弥生である。横でサイコロ状にしたジャガイモにくしをさす睦月の姿がある。

「こんなもんかにゃー」

抵抗なくぷすりとくしが刺さったのを見極めて弥生の方を見る。

「そろそろジャガイモ大丈夫そうだよー。そっちは大丈夫？」

「玉ねぎ、もしんなりしてるし……肉も火が通ったと、思う……」

「うん、じゃあ、火を止めてー、ジャガイモをすりつぶしながら合わせる！ だよね？」

「そうそう、頑張ってるねー」

確認をとられた如月は付け合せのためのごぼうをささがきにしなから笑う。

「これじゃあ、睦月の試験というより私の試験かしら？」

「むー、ちゃんと睦月の試験ですっ！ 如月はアシスタント！」

「はいはい」

そう膨れる睦月だが、どこか危なっかしいエプロン姿で動き回る睦月の姿は慣れているとは言い難かった。それを眺める如月の視線は慈愛にあふれてどちらがメインかわからないのがアレである。

「睦月は案外舌肥えてるのよねー」

如月の次の仕事はコンロはが空かないとできないため少々手持無沙汰である。あく抜き中のごぼうとスライスした玉ねぎを見ながらそんなことを考える。味が濃いものよりも下味を利かせた料理などを好むところは案外姉らしいのかもしれない。今回参加していない望月は「んあ？ ソースがあればなんとかなるでしょ、あとマヨネーズ」という濃い味信者と化している。そう考えると案外睦月はいいのかもしれない。

……玉ねぎのみじん切りで指を切りかけたり、跳ねたお湯で熱がっていたりと、おっちょこちよいを直せばの話であるが。

「もつとしっかり潰した方がいいかな？」

「ごろつとしたジャガイモがあっても、いいと思います」

そんな会話を交わしながらコンロの前で悪戦苦闘する姉と妹。夕

イトルをつけるなら、むつきとやよい はじめてのおりょうりだ。
「コロツケ、破裂させずにできるかしら……」

コロツケは何気に難易度が高い。茹でる、炒める、揚げると三拍子揃っている。今回無難なポテトコロツケにしたのは一番簡単だからだ、クリームコロツケなどに挑戦した日には阿鼻叫喚な事態になりかねない。

「それに、月刀大佐の前で姉に恥をかかせる訳にいかないしね」

「如月ー？ 何か言ったー？」

「ふふつ、何でもないわ。コンロ片方空いた？ そろそろポタージユの用意を始めたんだけど」

「あー！ ごめん。空けなきゃいけないの忘れてた！」

「焦らなくて大丈夫よ。熱湯だから気を付けてねー」

如月は笑いながらごぼうの水気をきってバットに空けると、コンロの方へと足を向けた。

「……お姉ちゃんたちがすごく心配なのです」

初春型、睦月型が和気藹々とうまくいってるのを見つつ、電は観客席でそわそわしていた。残り時間は30分を切り、そろそろ温かいものの調理に入るところだ。

「まあ、なるようになるでしょ。のんびり構えてようよ。のんびり」

隣に座るのは高峰だ。航暉は間宮さんたちと一緒に審査員席にいたため隣にはいない。その席に一緒に見てていいかい？と高峰が腰掛けてきたのである。

「心配になるのはわかるけどね。オムライスとは難易度高いのをぶつけられたしね」

「暁お姉ちゃんに玉子料理は鬼門なのです……!」

「何があつたんだい?」

「前に司令官さんが風邪で倒れた時にみんなでおひるごはんを作ったことがあつたんですけど……だし巻に挑戦したお姉ちゃんが、その……」

「失敗したんだ?」

高峰がそういうと、電はこくと頷いた

「スクランブルエッグというより、ぐちゃぐちゃ卵って感じのものが完成したのです」

「ああ……」

「そのお姉ちゃんが半熟玉子のオムライスなんてできるとは思えないのですっ!」

なぜかそう力説する電。笑っていいのか何なのか判断ができなかった高峰は曖昧な笑みを返した。そのまま視線を暁チームのブースに向ける。メンバーはもちろん暁と響、雷である。

三人とも割烹着。暁はエプロンよりも割烹着の方がいいと言って割烹着に袖を通していた。理由は何でもエプロンするよりも难道か大人の女性って感じじゃない?というものだ。確かに日本昔ながらの女性がそれを着ていれば大人って感じがするのだが、着ているのは揃って小柄な暁型である。

「……どう見ても給食当番なんだよなあ」

三角巾ではなく白い衛生帽子であることもそれに拍車をかけている。雷がフライパンを握りケチャップライスを作っているところだ。玉ねぎのスライスに苦戦しているのは暁である。

「代わろうか、姉さん」

「大丈夫よ! レディなんだから、これくらい……!」

そういつて包丁を当てては涙を流すを繰り返しているのを見て高峰は肩を震わせた。

「やっぱりカズのところはバラエティに富んでて面白いね」

「そうですか……?」

「ああ、やっぱりカズの方針なんだろうねー、あれ。ここまで艦娘を自由にするところも少ないし、規律を第一とする軍隊では珍しいほうだよ」

わかるでしょ? と高峰が言うと電は頷いた。

高峰が僅かに目をすつと細めた。

「電ちゃん、カズのこと、どう思ってる?」

「どうっていうと……?」

「上官として、というのがベストなんだろうけどね……それだけじゃなくて月刀航暉っていう男をどう思ってる?」

いきなりそんな言葉を言われ、電は押し黙った。暁が包丁で指を切りかけたらしく、小さく悲鳴が上がる。ちよつとした騒ぎになるが電は気がつかなかった。

「司令官さんは……司令官さんは大切な人です。司令官さんのためなら、私は戦えるって思ってるのです」

その言葉に高峰は僅かに眉を顰めた。そのことに誰も気がつかない程度に僅かだった。

「司令官さんは私を、いなづまを助けてくれたのです。キスカ撤退戦、ヒメちゃんと話した時だって私を信じてくれたのです。いつだって撃てるようにしてたのは知っています。でも、撃たずに話が終わるのを待ってくれた。それが嬉しかったし、そんな人を死なせたくないな、守りたいなって考えるんです」

役立たずと言われた電を連合艦隊の中でも活躍できるまで強化した。その功績は確かに大きいのだろう。自分に劣等感を持っていた電を変化させた影響は計り知れない。

「いつか、司令官さんが異動してしまうってこともわかってるんですけど、怖くてたまらなくなってしまうのです。だから考えない様にしていきます」

「いなくなってしまうのは怖い?」

「……怖い、です」

「そっか……」

高峰はどこか憐れむような、落ち込んだような色を目に浮かべた。それを隠すように笑って目線を前に戻す。睦月チームがコロツケの「揚げ」に入ったらしく、会場がどよめいている。

「電ちゃん。仮定の話をしよう」

電が会場の様子を見守る高峰を見上げる。電の眼にどこか不安げな表情が見える。

「カズが大量殺人犯だって言ったら、電ちゃんは どうする？」

「はい！ 終了です！ 皆さん出来上がりましたか？」

青葉が明るく宣言する。会場は拍手に包まれた。3チームともなんとか盛り付けまでたどり着き審査員3人分の用意が整っていた。

「それではまず……睦月さんチームの料理からです！ 睦月さん、メニューは何でしょう？」

はいっ！と返事をした睦月が慎重にカメラの前に料理を運ぶ。

「コロツケ定食、二種類のソースを添えて、ですっ！」

副題付きの定食とはいささか驚きではあるが何とか綺麗に仕上がっている。

「ポテトコロツケとごぼうと玉ねぎのポタージュスープを作ってみました。ソースはウスターソースとケチャップを合わせて煮詰めたブラウンソースと、大葉と大根おろしと醤油とレモンで作った和風ソースです！」

そう言ってる間に如月と弥生が審査員にコロツケ定食を配膳していく。

「大根おろしとコロツケって意外な組み合わせですねー。それでは実食と参りましょうー!」

それじゃ、いただきますね。と審査員長の間宮が箸をとった。和風ソースをかけてゆつくりと口に運ぶ。

「あ、和風ソース合いますね。さっぱり入っちゃいそうです」
「粗くつぶしたジャガイモのホクホク感もおいしいです」

それを聞いた睦月と弥生がハイタッチする。それを見てから笑ってごぼうポタージュをスプーンで掬ったのは航暉である。

「うん、ポタージュもおいしくできてる。しっかりごぼうの味が効いてるな」

それを聞いてうれしそうなのは如月だ。タイミングを見計らって青葉がマイクを取った

「さて、そろそろ判定と参りましょう。判定は持ち点一人10点の30点満点、20点以上でクリアです。審査員の皆さん、用意はいいですかー? それでは睦月さんのコロツケ定食 二種類のソースを添えての判定をどうぞ」

それぞれ数値が書かれた札を掲げる。

「8点、7点、8点! 合計23点! 合格判定でした!」

会場が拍手に包まれる。

「鳳翔さん、どうでしたか?」

7点を出した鳳翔に青葉がマイクを向けた。

「オリジナルのソースなど工夫されてよかったのです。少し栄養が偏ってしまうかなと思ったので7点にしましたが、料理としての完成度は高く仕上がってると思います」

「最初から高い判定が出ますねえ! それでは次、初春さんの料理に行きましょう。初春さんお願いします!」

「初春特製、肉じゃが定食じゃ。肉じゃがとじゃこ酢、味噌汁、ごはんにも日本酒にも合うぞ。本当は青菜のお浸しでも作りたかったところなんじゃが、材料がなくてのお」

素晴らしいながらもきれいに盛りられた料理が航暉たちの前に並べられた。

「……肉のパンチがすごいです。ご飯が進みそうですね」

そう言うのは間宮である。初春は得意げに笑う。

「砂糖で下味をつけたからの。関西風すき焼きを参考にさせてもらった」

「あー、なるほど。だから味しつかりしてるのにくどすぎないのか……」

航暉が感心しながら肉じゃがをつまむ。その横では鳳翔がじゃこ酢を口に運んで笑った。

「……これは日本酒が欲しくなりますね」

「鳳翔さん、さすがにここでお酒はNGですよ」

笑いながらそう言うのは青葉だ。会場も少し和む。

「それでは判定、どうぞー！」

間宮から順に7点・9点・8点と合計24点と高いスコアが現れた。初春、静かにガッツポーズ。もう少し創意工夫があれば最高でしたとは間宮の談である。

「さて、最後は暁さんチームです。それでは、どうぞー！」

「暁型特製、オムライスよ！」

場が一瞬静まり返った。

……申し訳ないがこの後の状況はある駆逐艦の尊厳を守るためにも描写は控えさせてもらいたい。

ただ、ことが終わってから「あれでも姉さんを止めようと頑張ったんだよ……」とある銀髪の駆逐艦が愚痴っていたとだけ付け加えておく。

「結果としては初春が通常駆逐艦、睦月と暁が二流駆逐艦かあ、戦闘では結構いいところ行くんだけどなあ、ムラがでかいか」

航暉はそんなことを言いながら伸びをする。2日間にわたって続いた演習が終わったのである。

「芸能人格付けチェ○ク風にランキングにしたらしいけど、こうなると結構へこむなあ……」

部下の睦月と暁がそういう扱いになるのは少々不本意なのである。ジョークを利かせたパロディネタだからそこまで真に受けるべきものでもないのも確かなのだが。

「で、ベそかくほど悔しかったのか？ 暁」

「……う、うるさいわよ。そ、そんなんじゃないもん……！」

「そっかそっか」

航暉は暁の頭をなでる。子ども扱いしないでと言われるかと思っただが、されるがまあ間になっていた。

「もしかしたら次があるかもしれないし、料理の練習でもしてみるか？」

頷く暁。

「んじや、龍鳳にでも頼んでみよう。それじや、行こうか」

「……？ どこへ？」

「おいおい、自分で頼んどいて忘れたのか？ 間宮さんとこだよ。間宮パフェ奢ってほしいんじやなかったのか？」

「———いいの!?!」

「演習お疲れ様記念だ。みんなで行こう。間宮さん、悪いけど」

「ふふっ、では30分後くらいにいらしてくださいね」

間宮が手を振って出ていくのを見送って航暉は立ち上がった。

「さてっと、片づけ手伝ってから行こう。明日にはウエークに戻る訳

だしね」

「うんっ！」

暁の顔に笑みが戻る。それを見て航暉は笑う。

「それじゃ、片づけ開始！」

散っていくウエーク基地のメンバーを見つつ航暉も腕まくりをした、こういう時は上が動かないと示しがつかないのである。あたりを見回して、観客席のところに電が一人でぼーっとしているのを見つける。

「電、どうした？」

「はわっ!？」

電は驚いたように顔をあげ、航暉を見る。

「な、何でもないのです」

「? そうかい? なら撤収を手伝ってから間宮さんのところにパフェ食べに行こう」

「はいなのです」

航暉がセットの解体のチームに混じっていく。電はそれを見て胸に手を当てた、自分の服を握りしめ、つぶやく。

「司令官さん、あなたは……」

電は深呼吸を一つして航暉の後を追った。

「……で、高峰さんの意見は?」

カズのことか？と高峰は聞き返した。広報局の建物を出ると息は白く曇る。

「ううん、電のこと。キーに使えそう？」

「とりあえず種はまいた。あとは芽吹くかどうかだが……芽吹かないほうがマシかもしれない」

「撒いたのは麦？ それとも毒麦？」

その答えを聞いて高峰は笑う。

「さあね、芽吹くまでは見分けがつかん。無理に集めるなら実りの良い麦まで刈ってしまう。……実った時に毒麦だったら、束ねて焼かれるだけさ」

高峰は自嘲するように笑った。

「頼むよ。最悪の場合にはお前が最後の切り札になるかもしれない」

「わかってます。追いかけるのも艦隊戦も負けませんよ！ 速きこと島風の如し、ですっ！」

その答えを聞いて高峰は背を向ける。夜闇に溶けゆきながら高峰はつぶやいた。

「カズ……お前はいったい何者だ？」

その問いにはどこからも答えは返ってこなかった。

「へ？ もう一回やる？ 今度は最初からチーム戦？ ちよ、ちよつとまで！ その間の島嶼防衛どうする気だ!?」
ウエーク島に帰った航暉の下に届いた連絡がもうひと騒動起こすのはしばらく先の話である。

「それでは」

「ああ、551水雷戦隊の指揮を受けとる。お疲れ様、合田少佐」
「もう大尉ですよ」

ウエーク基地の駐機場、横須賀に向かう輸送機の前で正一郎がどこか寂しそうに敬礼をした。それを航暉は複雑そうな表情で受ける。

「阿武隈に手を出したら許しませんからね？」

「出さないよ。俺を何だと思ってるんだ」

航暉の言葉に二人で笑った。そうして彼は去っていく。

輸送機を見送りつつ航暉は溜息をついた。

「……なーに隠れてるんだ、阿武隈」

「えへへ、ばれてましたか」

「気配でバレバレ。泣いてるところを合田少佐に見られたくなかったんだろ？」

「そんなところまでばれてましたか」

「お姉ちゃんは大変だな」

「ほんとにです」

阿武隈は赤い目をこすって航暉に向かって敬礼をした。

「改めて、551水雷戦隊旗艦、阿武隈です。よろしくお願いします」
「本日付で551水雷戦隊司令官となる月刀航暉だ。こちらこそよろしくな、阿武隈」

互いに敬礼。一人欠けたウエーク基地は、再び動き出そうとしていた。

……と、ここまでではよかったのである。

「書類が、終わらん……っ！」

航暉が指揮をとる部隊は532戦隊、535航空戦隊、538水雷戦隊、551水雷戦隊、ウエーク特別根拠地隊と全部で5つ。

軍隊は巨大官僚組織だ。部隊一つ捌くだけでもいくつもの書類がいるのは当然である。それが5つも降りかかってきたら当然のごとく忙殺される。サインと印鑑だけでもかなり疲れ果ててしまうのだ。

「司令官さん、コーヒーを淹れたのです」

何とか8割を捌いたところで電が現れた。手にはお盆を持ち、無地のコーヒーカップが乗っている。

「ありがとう電、正直助かった」

「いえ、司令官さんの役に立てるならそれでいいと思うのです」

その声にしつこく複雑そうな顔をするのは航暉だ。

「——無理はするなよ」

「それは司令官さんにも言えることですよ。しつかり私たちを頼ってください」

「十分頼りにさせてもらってるさ。こういうのは中間管理職の宿命だ。逃げるわけにはいかないしね」

航暉はおどけたように笑う。それを見た電も笑う。そのうちに心は中へと落ち込んでいく。

『仮定の話をしよう。——カズが大量殺人犯だって言ったから、電ちゃんはどうするっ?』

落ち込んだ先はある時の記憶。隣には高峰中佐が座っていた。

『な、なにを言い出すのですか……？』

『言ったでしょ？ “仮定の話” だって』

『そんな仮定はあり得ないのですっ！ どうしてそんな仮定をするのですか？』

電の声に彼は笑顔のままだった。——それが無性に腹が立つ。

『そんなこと、あり得ないのですっ』

『ありえないことを仮定で聞いているんだ』

『だからといって言っていないことと悪いことが……』

電は反論しかけて言葉を切った。きつといつまでたっても平行線だろう。

『いなづまのことを信じてくれた指揮官はこれまで月刀航暉司令官以外いませんでした。その司令官のことを信じるって決めてるのです』
『そっか……その言葉に嘘はないね？』

『なんでそんなことを聞いたのか教えて頂けますか、中佐さん』
電の声が硬質に変わる。それが答えとなった。階級呼びが変わったのは意図したものか自然にそうなったのか、自分でも判断がつかなかった。

『単純な興味……って言っても納得してくれないだろうね。いいよ。話してあげる』

高峰のどこか楽しそうな声。

『月刀大佐の陸軍時代……電ちゃんには聞いたことがあるかい？』

『いいえ』

『日本国自衛陸軍第二五五歩兵中隊第三強化歩兵分隊……そこに所属したことになっている。いや、所属したというより指揮したことになる』

『なにか含みがあるような言い方なのです』

『含みを持たせてるからね。この部隊はね、帝政アメリカ主体のPKF……実質連合軍なんだが、それに参加して華渤戦争に参加した。渤海国の難民問題を引き越した戦争だね。それに関わっただけで、その

後は国内防衛についているんだ。もつとも華渤戦争でも基地防衛だけで実戦らしい実戦をこなしているわけじゃないんだけどね』

『それがどうしたのです?』

『電ちゃんに質問だ。カズが睡眠障害を抱えているのは知ってるか?』

『え……?』

電が戸惑った声を上げる。高峰はやっぱり知らなかったかと軽く溜息をついた。

『正確には悪夢みたいなものを見るんだそうだ。それもベッドとか布団とかで寝るとそういう夢を見るんだそうだ。だからカズは“ベッドで寝れない”らしい』

『……』

『問題はそれが発生した内容と発生理由だ。ここから先は又聞きでしかないけど、カズが杉田中佐に話したことだから確度は高いと思う』

言いよどむような間が落ちる。

『……カズは子どもを撃ち殺す夢を見るそうだ。そして実際に“子どもを撃ち殺した経験がある”』

『……だから、司令官さんが殺人犯だっていうのです?』

『それを言い出したら軍人全員殺人犯だ。爆撃機の爆撃員とか稀代の大量殺人鬼だね。まあ、さっきの質問は仮定の話って言っただろ。……話を戻そう、問題は“この経験をした場所”なんだよ。状況はスールスルタン国独立紛争中……場所はフィリピンだ。カズが所属したつていう第二五五歩兵中隊はフィリピンPKFに参加して^{……}いない』

双方に沈黙が重く落ちた。

『……どうしてそれを私に聞かせるのです? それをどうして中佐さんが知っているのです?』

『カズは何かを隠してる。それも、日本自衛軍もしくは国連軍上層部が“隠蔽に協力するようなヤバいこと”を隠してる。隠すってことはばれると都合が悪いつてことだ。それがカズ本人だけの問題に終始するならそこまで問題ない。だが経歴が改ざんされそれが認可さ

れている以上そういう底の浅い問題じゃない。隠しているのはカズに不都合な問題なんじゃない。軍組織に関わる問題なんだ』

高峰の声色が変わった。いつものどこか軽い声が消える。

『カズが関わったもの……ホルデン関連の事件、ヒメ事案、軍閥をたどればいくらでもダーティな事案が溢れてくる。カズはおそらくそれらの中で国連上層部にとって不都合ななにかを知ったんだ。だから、カズは話さない、いや、話せない』

『なにを……言いたいのです……？』

電の声が震える。どこか恐れが含まれていた。

『結論から言おう。国連海軍は月刀航暉を本気で失脚させようと動く程に警戒している』

『な……』

『電、考えてみてくれ。月刀航暉の部隊運用法は独特だ。戦闘時の積極的な高密度リンクの多用、艦娘を兵器としてではなく、感情を持つ個体として扱う。月刀航暉にその意図があるかどうかは別として、それは艦娘のコントロールに長けているとみられる。だがそれは軍務としてではなく、彼の性格、人格に心酔させることでコントロールしているように映る』

電はその先を聞くことに恐怖を覚える。だが先を聞かない訳にはいかなかった。

『実際に金剛は月刀航暉を自らの付く人と決め、彼に絶対の信頼を置いている。上官の中路中将の命令よりも月刀航暉大佐の命令を優先する。似たような反応は榛名や睦月、響、天龍、利根、赤城、加賀……月刀航暉の指揮下で戦ったことのある艦娘に決して無視できない数存在する』

高峰は電の名を上げなかったが、電はそこに彼女が含まれていることを知る。絶対の信頼を置いているのは確かであり、キス力島の難民避難の時、もし択捉で待機になっていたらほぼ間違いなく駆けつけるという確信があったからだ。

そこで高峰は一度言葉を切った。高峰の目は電の考えを読み取るうとするかのように見える。

『軍令に背いてでも上官に従うという「艦娘」という私兵」を抱えた月刀航暉が国連軍に反旗を翻したらどうなると思う?』

電は言葉を失ってしまふ。

『クーデターだよ。報復と言ってもいいかもしれない。そしてそれができるだけの力を月刀航暉は手に入れつつあるんだ。持つてる知識に人脈、そして——水上用自律駆動兵装という優秀な駒。だからキスカ沖で国籍不明艦が出た。月刀航暉の人脈を霧散させ水雷戦隊以上の戦力を手に入れさせないために』

『……』

『月刀航暉にその意思があるかどうかは関係ない。月刀航暉がクーデターで実権を握り、不都合なネタをばらされるかも知れない。そういう恐れさえあれば命令は下る』

そこまで来て電は理解した。

『そしてカズには軍を敵に回して戦う気がないだろうしその余裕もないはずだ。カズを抱え込んでいた中路中將が軍から身を引かなければならなくなった以上、軍上層部で航暉を守ってくれる勢力はない。航暉を潰す命令は水面下で何の抵抗もなく承認される』

高峰中佐は

『いま、軍上層部が動けば、カズは潰される』

——航暉を守ろうとしている。

『潰す理由はなんでもいい。一番簡単な方法は——非戦闘員への意図的な攻撃。子供を撃ち殺したという事実を絡めて、それが非戦闘員だった、意図的に攻撃したのだという証拠さえでつち上げればカズは一気に戦犯扱いだ』

その顔には焦りが浮かんでいた。

『物理的に口封じでもいい、戦術リンクの高負荷で脳を焼かれて死亡なら疑われにくい。航暉の艦隊運用スタイルなら十分にあり得る』

『——なら、いなづまは司令官さんの盾になります』

電は高峰の言葉を切るように言った。

『いなづまにできることは限られていると思うのです。でも、今いなづまは司令官さんの部下です。司令官さんを守るとは任務の一つに入ります』

電はそういうと微笑んだ。

『司令官さんのためなら戦えるって思えたのです。だから、今だけでも自分のこの考えを信じたい。戦えるって思えた自分を否定したくない。だから、いなづまが司令官さんを守ります』

それを聞いた高峰が溜息をついた。

『その考えが上層部の恐れることなんだぞ』

『それでも、です。それに、そういう高峰中佐もこちら側なのではないのです？』

高峰が口角を吊り上げた。

『一本取られたかな。でも、忘れるな。電のその行為がカズを陥れる結果になるかもしれない』

『はい』

『考えたくもないが本当にカズが離反する可能性もある』

『それはいなづまたちで止めるのです』

高峰は溜息をついた。

『——俺はカズのそばにいられない。頼むぞ』

『頼まれたのです』

『——電？ どうした？』

『なんでもないのです。早く仕事を終わらせて休んだ方がいいので』

す。電も手伝います」

「そう?」

航暉は飲み終わったコーヒーカーップをデスクの脇に置き、笑った。

「じゃあ、頑張りますか」

「なのです!」

電は笑う。

願わくは、高峰中佐との約束が杞憂に終わることを。

自らが司令官を守れることを、ただ願う。

しかしながら時計は残酷に時を刻み。

——その時はすぐにやってきたのだ。

雷にはちよつとした日課があった。朝食の後、業務開始の前の朝の巡回である。スクランブル待機やよほどの夜間訓練がない限り朝は基地の中を見て回る。腹ごなしにもちようどよかった。

「本当は料理とかで役立てればいいんだけどねー」

料理は主計科のスタッフがやるし、司令官の補佐は最近専ら電の仕事である。もつと頼ってもらいたいというのが雷の本音なのだが、それを前に押し出し過ぎてお節介なやつと思われたくないのもまた本音だ。

「そのさじ加減がわからないのよねー……」

雷はそういいながら外に出た。昨日の夜は慌ただしく補給物資を下ろしていいいた輸送機はもういなくなっており、駐機場はがらんとしていた。

「昨日補給ってことは……あと5日くらいはサラダとかが出るわね。やっぱり野菜があると違うわ」

朝にレタスとハムのサラダが出たことを思い出しながら笑う。主食がロールパンとごはんから選べたにも関わらず、ほぼ全員ごはんを選んだことも一緒に思い出したのだ。訓練にしろ何にしろ、兵の仕事は肉体労働である。それなら腹に溜まって元気が出る白米に行き着くのはある意味当然と言えた。なにより、食べなれている。エネルギーになるなら糖分のような気もするがあれはすぐスタミナ切れになる。

フリーズドライの長ネギとかはいつでもあるもののやっぱり生野菜があると気分が違う。一週間はサラダとか果物とかが食べられる。それだけで結構うれしいものなのだ。

雷はそのままぐるっと建物を回って海沿いへ。今日も砂浜は白く澄んでいる。遠くは紺碧に、足元に向かうにしたがって翡翠、白へと変わっていく外海も今日は穏やかだ。

「波がないっていうのも楽なんだけどねー……面白くはないよねー」
波打ち際を見てから電は引き返そうとして……棕櫚の木々の間に人影を見つける。誰だろう？

雷はとてとてと寄っていく。近づくと見覚えのない男だった。この海のだ真ん中に民間人が来ることはあり得ないので軍関係者であることは間違いないのだろう。

「あなた、どちら様？」

「あ、艦娘の人か。輸送隊なんだが、置いてかれちゃったみたいでね。途方に暮れてたのさ」

頬に一文字の傷をつけたその人は身分証を見せながら笑った。

「輸送隊って……今朝早くに帰っちゃったあれ？ もう、おじさんドジねえ」

「返す言葉もないね」

「そう言うことならしれーかんに言えば何とかしてくれるはずよ。案内してあげる」

雷が背を向けた直後、体が硬直した。

「？」

首筋に違和感が走る。強制的に電腦が活性化され、何かを送りこまれるのを感じた。

「人間に気楽に口を利くんじやないよ、DD—AK03」

目の前に警告文が現れては消える。声を上げようにも筋肉という筋肉が言うことを聞かない。体勢を維持できずに膝をつく。

体の感覚が朦朧としていくのに意識だけが冴えていく。電腦への不正規アクセスが正規アクセスに改ざんされていく。これは——

——ウイルスプログラム？ 自動で展開されるはずの攻勢防壁が作動しない。いつの間にか正規の命令として処理されていく。

だめ。

叫ぼうとしたが、叫ぶことも叶わなかった。命令系統が書き換えられていく。

上官は国連海軍極東方面隊中部太平洋第一作戦群第三分遣隊司令官、月刀航暉大佐。

その一文が削除されていく。

やめて！

それに上塗りされるように新たな一文が現れる。

国連海軍極東方面隊後方支援部情報課、鬼龍院彰久特務大尉

それが示すのは雷の上官が挿げ替えられたと言うこと。その不条理に声を上げようにも雷の体は瞬き一つ許さない。

「さて、DD-AK03」

首の後ろに差し込まれていた機械が外された。体の制御は戻らないままだ。

「DD-AK03に指揮官権限で命令、月刀航暉のところ以案内しろ。途中誰かが襲ってくるようなことがあれば対象を排除、不可能なときは私が離脱するまでの時間を稼ぎ、その後——」

右手に何かを握らされた。これは……ナイフ？

「は——自害しろ。わかったな」

「はこ」

恐ろしく冷え込んだ声が答えた。聞き飽きた自分の声だがぞつとするような声だ。

体が言うことを聞かない。ナイフを袖口の中に隠すように動く自分の体を雷は必死に動かそうとする。

なんで、なんで動かないの。

体の感覚は残っている。視覚、聴覚、嗅覚、触覚はすべて正常、なのに、体の制御だけが外部コントロールに移された。

いやだ。いやだいやだいやだ！

ひとりでに立ち上がった自分の体は、建物の位置口の方へと体を向ける。

「お姉ちゃん、そろそろ仕事なの……」

司令部棟から出てきた影は電だ。

来ないでと叫びたいがやはり体は言うことを聞かない。電の目が見開かれる。

「あなたは——!?」

「久々だDD―AK04、まだ死んでなかったのか」

「お姉ちゃんに何を――」

「騒ぐな。DD―AK03、DD―AK04を無力化しろ」

体が前に飛び出す。電の足を払い、バランスを崩した相手の右手を掴み捻り上げる。そのまま地面に押し倒し、マウントポジションをとった。電の驚いたような怯えた目が雷を捉える。

「お姉ちゃん、もしかして、体に乗っ取られてるのです……?」

答えない。答えようとしても体が言うことを聞かない。

「このシステムはまだ開発段階でね、うまくコミュニケーションを取らせることができないんだよ。そうだDD―AK04、この司令官に用があるんだ。DD―AK03に案内させる気だったけど、一緒に来い」

男の声が上から降ってくる。電の瞳が一瞬収縮し、すぐに戻った。

「司令官さんになにをする気ですか……」

「機械は知る必要がない。DD―AK04、案内しろ」

「――わかりました、案内します。お姉ちゃんをどけてもらえますか」

「いいだろう。DD―AK03、自害条件にDD―AK04が反抗した時を追加。その上でDD―AK03の上からどけ」

「はい」

雷がどくと電が制服についた砂をパンパンと払った。

「……大丈夫なのです」

電が雷だけに聞こえる声でそういった。

「案内します。――鬼龍院大尉」

電が歩き出すその後ろに男が、男の隣を歩くように雷の体がついていく。

0900WAKT. ――ウエーク島時間午前9時。始業のベルが鳴った。

電は静かに前を歩く。後ろにちゃんと人影が確認できる速度でゆっくりと歩く。

「たかだが9カ月程度じゃそこまで変わらんなあ」

「そうですね」

あくまでつつけんどんだが返事をしておく。電は軽く後ろを――

――正確には後ろの床を確認してすぐ視線を前に戻した。そして思考回路を巡らせる。

電単体で相手取ることとは不可能だ。どういう手品を使ったのかわからないが、電が行動を起こした段階で雷に危害が及ぶ。それに雷に押し倒された時、混乱していたとはいえなすがままだにされてしまった。――今も右腕が傷む、この状況で暴れてというのは現実的じゃない。機装もなければ大の大人とパワーゲームをして勝てるわけがない。

考えろ、考えろ。その思いだけが加速する。

「おお、電。ん、その後ろの人はどうしたのじゃ？」

「あ、利根さん。……司令官さんにお客さんなのです」

「お客さん？」

利根と廊下ですれ違う。利根はそれを聞くと軽く目礼した。

「はて、連絡なんて来てたかのお……」

「帰りの輸送機に乗り遅れてしまったらしいのです」

「ほお、だから“お客さん”か」

なので。と言いなながら笑う、笑えて――いるだろうか？

「いつ帰れるかわからんとは思うがゆっくりしていくといいぞー」

利根が豪快に笑うが電は内心びくびくだった。後ろの男が一番嫌いな接し方だ。

「そうだ利根さん」

「ん？ どうした？」

電が振り返る。

「今から司令官さんに話を取り次ぐので天龍さんに訓練プランのプレゼンは後にしてくださいと伝えてもらえますか?」

「伝えておこう」

そういうと利根が敬礼をして去っていく。電と雷、男が答礼。

「……行きましょう」

電が階段を上る。その階段を登った先3階に司令官室がある。

「のお、天龍」

その足で2階の538水雷戦隊が揃っているブリーフィングルームに入った利根がそう言っただけで笑った。

「利根、俺に用か?」

「用と言えば用じゃな。電と雷以外揃っているな?」

「いきなりなんだよ」

利根がドアを閉めた後表情を切った。真剣な表情をする。目を走らせ、天龍に龍田、暁、響、島風が揃っているのを確かめた。

「何かあったのか?」

「司令官さんにお客さんだそうなのじゃが、連絡を受けている人はおるか?」

「客? 電なら把握しているだろ。どれ——」

「通信はなしじゃ。もう電にはあつた。天龍よ、昨日の夜訓練プランを思いついたのは本当か？」

「いや、爆睡だったけど？　なあ龍田？」

「そうねー。私より早く寝たもんねー。それで、利根さん。何がありましたかー」

「怪しい男を連れて電と雷が司令官室に向かつてる。吾輩は電から天龍の訓練プランのプレゼンは後にするよう伝言を授かったのじゃが、天龍、そんな予定はないな？」

「ねーな、そんなもん。第一、訓練プランのプレゼン資料なんて用意したことはねえ、司令官なら計画書と口頭説明だけで理解する」

天龍は隻眼で利根を見る。

「怪しいと思うわけだ」

「うむ。雷が一言も話さなかったことも気になるし、電の笑みも少々ぎこちなかったのだな」

「その男の人の様子は」

響がそう言うのと利根は顎に手を当てた。

「身長は175前後、かなり筋肉質。……左頬に傷があつたかなあ」

「……利根、電はその男の方を見たか？」

「いいや。見てなかったと思うが……それがどうかしたかの？」

「それともう一つ。そいつの瞳の色、解かるか？」

「確か……赤、じゃな」

それを聞いた天龍が立ち上がった。

「龍田、急ぎで大鳳か龍鳳を呼んできてくれ、艦載機があつた方が早い。利根、筑摩を連れてこい。スクランブル要員も含めて全員に出撃用意をかけとけ」

「ちよ、ちよつとどうしたのよー！」

慌てたのは暁だ。電たちが関わってる条件だけに気が気ではないのだろう。

「急いでくれ、司令官と電たちが危ない！　……くそつ、なんで今更あの野郎が出てくるんだ」

「天龍ちゃん……明らかな越権指示だけど、理由はなんなのかしらく。

その男の人はお知り合い〜?」

「鬼龍院彰久特務大尉! 風見大佐隷下のウエーク基地の整備主任で

天龍が叫ぶ。

「俺の左目を焼きつぶしやがった男だ!」

ノックの音に航暉は手を止めた。二回、わずかに間が空いて一回。
「どうぞ」

ドアを開けて誰かが入ってくる。その影を認めて航暉は笑った。
「私に用事ならアポを取っていたきたかった。それだったらコー
ヒーぐらいはご馳走しましたよ」

「ああ、構ってくれるな。カフェイン入りのものは苦手なんだ」
そう言った男に航暉はあくまで笑顔で応じる。だが目の色が急速
に冷えていった。

「それで、人質を取ってまで何の用です。鬼龍院彰久、貴方は今横須賀
の精神病院にいるはずでは?」

「大尉を付けろ、俺を知ってたことは褒めてやるがね」

「引継ぎの書類が一切なかったから大変だったんですよ? これっ
ほっちもなくて、どんな奴が管理してたのかと憤慨して調べたので一
通りは」

「ふん、話に聞いた通りめんどくさがりって訳ではなさそうだ」

鬼龍院はドアを閉め、鍵を回した。

「で、何の用です?」

「ああ、そう時間を取らせるつもりは無いよ。月刀航暉、遺書書いて死んでくれ」

それを聞いて電は目を見開いた。鬼龍院は口角を吊り上げ懐から何かを取り出した。電がとっさに航暉の間に割り込もうとする。

「動くな電!」

その声に電は肩を跳ねあげる。

「動くな、電」

航暉がゆつくりと言い直した。電は鬼龍院を睨んだまま動きを止める。

「ほーお、あの穀潰しが司令の弾除けになるか。案外いい目をするようになったじゃねえか」

電は鬼龍院が持っている拳銃Five—sevenを、正確にはその引き金を注視した。

「趣味で痛めつけるだけの奴らよりはマシで健全な基地運用していると思ってるが? で、俺に死んで欲しいんだっけな、まったく、それくらいなら人質使わなくてもよかったのに」

そう言った航暉は笑った。慌てて振り返った電にも笑って見せる。

「それで? 最後の晚餐は用意してあるのか?」

「腹が減ったら地獄で出してもらえばいいだろう?」

「そりやないなあ、ワインがあつたかどうかは知らんがパンぐらいならあるだろう?」

「聖者気取りか、司令官さま」

「司令官さまさま。なんならそのパン代くらいは経費で落としてもばれないくらいの権限は持つてる」

航暉は軽口を叩きながら笑っていた。そうしながら万年筆を取り上げると鬼龍院の方を見る。

「デスクの中に便箋が入ってるんだが開けてもいいか?」

「立場をわきまえてるようで結構、DD—AKO3、デスクから便箋を

とりだしてやれ」

雷がそばに寄っていきデスクの引き出しを開けた。中には私信用の便箋が入っている。和紙のような風合いの縦書き便箋だった。

「で？ シナリオは？」

「あ？」

「俺が自殺する理由さ。ヒメ事案の重責？ 人間関係不信？ それともフィリピン関係？」

「ま、実際なんでもいいんだがな、〃生きることが嫌になりました〃って感じでよろしく」

「だったらなおさら人質なんていらなかったなあ……」

航暉はそういいながら万年筆のキャップを外し、金色のペン先でさらさらと時を書いていく。

「雷、悪いな。迷惑かけて、電も」

航暉はそう言うと言雷の目を見て笑いかけた。そのまま電と目線を合わせる。

その笑みに電は恐怖を覚える。

「どうしてとか聞かないんだな」

「聞いたところで冥途の土産にもなりはしないさ。こんな仕事だから恨んでくる相手には事欠かない……で？ もし聞いたらどんな答えが返ってくるんだい？」

「敵に情けをかけるようなオヒトヨシに軍務を続けさせる理由は無い、かな？」

鬼龍院の言葉に青ざめるのは——電だった。

敵に情けをかける——十中八九ヒメ事案のことをさしていると見て間違いないだろう。床がぐらりと揺れた気がした。立っていることもままならなくなりそうだ。

「なるほど戦争が今すぐ終わってもらっても困るというわけだ」

もしそれがこの状況の理由だというのなら。

「月岡コンツェルンに顔が効くあんたならわかるだろうに。対深海棲艦戦に関わる軍需が日本を日本たらしめると言うことは言うまでもないはずだ。今すぐに戦争が止まるとどれだけの失業者が出ると

思う?」

電は、司令官を殺す理由を作ったことになる。

「詭弁だな。国連軍の最終目標はなんだ?」

航暉はペンを走らせていた手を止める。紙からあげられ相手を見据えた目は一種の覇気を感じさせた。

「世界平和の実現だろうが。深海棲艦の撃滅はその手段にすぎん」

そのまま腕を組んで相手を見据えるところか勝ち誇ったような笑みを浮かべた。

「深海棲艦の撃滅は人類の悲願とされてきた。その理由は相手の目的が知れず、勝利宣言をすることも白旗を上げることもしななかったからだ。深海棲艦の目的が知れ、講和を結ぶことができれば戦争は終わる。兵器を作っていた人たちも戦後復興に駆り出されるからすぐ廃業というわけでもあるまい」

「だから、ヒメ事案の対応に間違いはないと?」

「そう確信しているが?」

鬼龍院の言葉に航暉はそう答える。改めて航暉は万年筆でさらさらと言葉を書きつけていく。書きつけられていくその言葉を雷はただ見つめている。体はそこから視線をそらすことを許さなかった。

毎日の艦隊、部隊運用の重責に耐え

兼ね、夢を達することも道を見いだ

せないまま、ただ流る時をないがし

ろにすることに疲れ果ててしまった。

「せめて墓になんて刻めばいいくらい考えさせてほしいもんだが……」

航暉はそんなことを言うと鬼龍院がへつと笑った。

「馬鹿につける葉はない」でいいんじゃないか?」

「それだったらせめて女の子に銃を向けられたいね」

「ほう、ならそれをかなえてあげよう。銃はどこだ?」

航暉は溜息をつきながら笑った。

「電、後ろの棚の上から2番目の段、右端のファイルを頼む」

電はゆつくりと壁際により、指示されたファイルに手を伸ばす。

「さて、DD-AK03にやらせる。DD-AK03今の指示を実行しろ」

鬼龍院の言葉に雷が動く。上の棚から何とかファイルを取り出すとそれがダミーファイルであることがわかる。それをデスクに置いて開くと緩衝材のハードスポンジに包まれて自動拳銃が入っている。

「……ベレッタのM93Rとはなかなかエグい趣味なこと」

「結構使いやすくてね、サブウェポンにはちよūdいいい」

そういいながら書き終えた紙をひらひらと振る。

而して私にはこの席に拘ってはなら

ぬ理由もある。加えて深海棲艦を穿

つ矢を番えるべき格はなくその手腕

も足りぬ私が長など、どうしておご

りたかぶったことができようか。日

なが悩みしことであるが、本日今日、

死することを決心した。

「こんなんでどうだ？ あとは僕本月本日をして目出度死去仕候間この段広告仕候也……とでも書いておくか？」

「死に目に会えず残念でしたってか？」

洒落が効いてていいだろう？と航暉は笑いながら朱肉で拇印を押し、サインを書きつけた。

「で、あとは死ぬだけかい？」

「そうだな。あと一つだけ聞かせてくれよ」

鬼龍院は笑って銃を下ろした。動こうとする電を航暉は目で制して言葉を待つ。

「高々兵器になぜそこまで入れ込む？ なぜだ？」

「睦月、聞こえるか？」

「すんごくもごもごしてますけど……なんとか」

艦装を背負った睦月が耳を壁に当てていた。コップを増幅器にして壁越しに音を聞こうと耳を澄ましている。その横にいるのは不安げな表情を浮かべた如月と天龍龍田、暁と響だ。

睦月は目を閉じて状況を探る。

やっているのはコンクリマイクの真似事だ。壁越しに会話を聞き取ろうとしている。

「えっと……聞こえた」

睦月がチューニングを終えた。ソナーのスキルを応用してよくやると天龍は感心した。

「なぜ？……彼女たちを兵器として扱うこと自体が間違っている」

聞こえたことを睦月が読み上げる。睦月の目が一瞬揺れた。

「デイ、DD-AK04にしてもDD-AK03にしても深海棲艦を倒すための兵器に過ぎない。兵器は扱い方を間違えれば暴走し、害悪となる」

「艦娘は人に非ず」か？」

睦月の背が震えるのを見て。如月がその背をさすった。

「確かにふつうの人間ではないだろう。だが、兵器としてその尊厳を黙殺してよい存在でもない。確立した自我を持つ個としての一面を持つ以上、それを尊重する必要があると思っている」

「危険思考そのものだな。核ミサイルに核ミサイルの発射ボタンを押

させるようなもんだ」

「睦月、鬼龍院で間違いないか？」

天龍が声をかけると睦月は頷いた。その体が震える。

「もう突入した方がいいんじゃない？」

「それに睦月も限界よ」

響が小声でそう言った。加勢するのは如月だ。それを止めたのは龍田だ。

「まだ龍鳳さんたちの用意が終わってないわあ。今突入して逃げられたらどうにもならないもの」

「如月、まだ、まだ大丈夫。提督が……提督がまだ戦ってる」

「睦月……」

睦月は震えながらもそう言った。

睦月も如月も知っているのだ。あの男が何をしたか。あの男がいる基地で何があったかを知っている。

だからこそ、今逃げるわけにはいかないのだ。

ここに電を置いて逃げてしまった、自分に戻らないために。

「人間が人間を完全に掌握することが不可能なように、人間が艦娘を完全に掌握することもまた不可能だ」

睦月が聞こえた声を読み上げていく。おそらくは、航暉の声。

「ならば互いに独立した主体を持つ存在として信頼関係を築くことで、双方向な関係を確立しなければ、最大限のパフォーマンスを発揮することはできない」

睦月は如月の手をぎゅつと握った。

「常に正しい判断というものは存在しない。それは常にその場のTPOに左右され、その場の最善が後の誤りとなる可能性を十分に内包しているからだ。お前のいう、人間至上主義の方針は5年前なら最善だったかもしれない。だがもう違うぞ」

「天龍ちゃん。大鳳さんたちの展開が完了したわ。艦爆合計48機が上空待機中。彩雲も10機がいつでも追えるように用意できてるわ。利根さんたちも動ける」

龍田の報告に天龍が頷いた。

その時、雷は一瞬で航暉の目が変わるのを見ていた。

瞬きすら許されない現状の中、セーフティが解除された銃を航暉の右こめかみに突き当て、引き金に力を込めたのだ。

叫び声が出たのか出なかったのか、それは自分でもわからなかった。

雷管を撃針が叩く寸前、即ち鉛玉が飛び出す寸前に雷の右手を航暉は掌底で叩き上げる。同時に航暉は大きくのけぞるように椅子に体重を預け銃口から頭を遠ざけた。飛び出した鉛玉は航暉の臉をなぞるように飛び抜け、壁に三連星を刻む。

掌底で突き上げられるようにバランスを崩したことに加え、銃の跳ね上げるような反動で、雷の右手は大きく上に振り出されることになった。それを打ち消そうと体は力を入れる。右手を押し下げるときに筋肉を緊張させた。その瞬間を航暉は待っていた。

その手を掴んで今度は思いっきり真下に引き下げたのだ。雷自身の力と総重量1キロを超えるM93Rを持った右手を引っ張られ今度こそ修正不可能なまでにバランスを崩した。雷は背中を叩きつけるようにデスクに倒れ込む。それでも雷の体は動きを止めない、左手に持ったナイフを振り出すとそれを航暉の頭に向けて振り抜く。

直後、肉を刺す感覚が帰ってきた。雷の頬にぼたりと有色の雫が落ちてきて、頬を汚して垂れていく。出どころはナイフの鏝、その先にある——月刀航暉の右腕。

彼は、笑っているようにも見えた。その笑みが雷を心配させない様になっているのが丸判りで、笑いきれてなくて。眉から血をしたたらせているのを無視して笑おうとしていて、痛みを耐えているのが目に見えていて——

その笑みが雷を傷つける。

「ちっ！」

その舌打ちの音がしたタイミング、航暉は雷の右手から銃を叩き落とした。足元でガシャンと鉄が落ちる音がする。どこか遠くで銃声が鳴った。航暉の姿がぶれる。黒いジャケツトの右肩に風穴が空いて、そこからジャケツトがどす黒く染まっていく。ドアを粉碎した勢いそのまま誰かが飛び込む気配がした。

「司令か——!? てめえ！」

天龍の声。ここからは見えないがあそこまで問答無用で怒鳴る。てめえ”は初めて聞いた。そのてめえの相手は鬼龍院か、私か、どっちだ。雷はそんなことをとっさに考えた。

「天龍！ そいつを殺すな……あがつ！」

雷は血で濡れた左手でナイフを引き抜いた。ぐじゆりと嫌な感覚と共に切っ先が現れ、航暉が呻く。噴き出した血を被りながら、雷の体はそのナイフが航暉の喉元めがけて突き出した。

ワイシャツの襟を真っ二つにしながらナイフが首筋を通過する。航暉はその手を押さえたまま足を払った。二人そろってデスクの影に倒れ込む。

マウントポジションを取ったのは航暉だ。ナイフをむしり取り、それも弾き飛ばした。両手に獲物がなくなつた雷は航暉の首筋に両手を回した。雷の両手ではカバーしきれない太い首筋、彼の喉仏を親指で押し込むようにして絞めていく。

「しれーかん！ 撃って！」

声が出た。視界の先にはベレッタM93Rが落ちている。

「私を撃ってよ！ 眼を撃てば脳まで届くでしょ！ お願い！ 私しれーかんを殺したくない！」

両手で彼の首を絞めながら、叫ぶ。

「だから、撃ってよ！ 私を止めてよ！ お願い……だから！」

航暉は両腕で雷の手を押さえると力づくで腕をほどく。右腕と肩から血が溢れていく。まるで地面に貼り付けにするように両腕を抑え込んだ。

「——おれに部下を撃てってか」

冗談じゃないと潰れた声で吐き捨てて航暉が叫んだ。

「だれか来てくれ」

飛んできた睦月が叫び声を上げる。

「ていとくっ!?!」

「俺のQRSプラグを引き出してくれ」

「提督、血が……」

「早くー!」

睦月が航暉の首筋からコードを引き出した。

「雷……今からお前の電腦を一度ロックする」

航暉は顔を深くしかめた。笑おうとしたらしかった。

「必ず助ける。それまで待てるか?」

頷こうにも頷けない。それでも何とか言葉にしようと口を動かす。

「わかった……」

「いい子だ。必ず助ける、必ず止める。迎えに行くから、それまで……死ぬなよ」

航暉は雷を抱きとめるように態勢を崩し、雷の首を動かない様に固定した。そのまま横を向かせる。

「睦月、プラグを雷に接続しろ!」

首筋に違和感が走る。一瞬視界が乱れ、全ての感覚が途切れるその刹那に。

待ってろという声と、航暉の体温を確かに感じた。

「……貴様あ！ 雷に何をした!？」

航暉が体を起こすと、天龍が鬼龍院をつるし上げていた。脇腹には天龍の刀が貫通している。

「天龍、代われ」

航暉が睦月の手を借りながら立ち上がるとそう告げる。

「電、無事か？」

「は、はい！」

血のせいで右目が開けられない航暉がそう聞くと電が震えた声で返事をした。

「ここにいるのは睦月と電、天龍と……あと誰だ？」

「司令官、まさか……」

「あと誰がいる、視野がぼやけて見えん」

「如月と暁、響、龍田さんです！」

隣の睦月がそう言うのと航暉は頷いた。

「暁、伊波少尉のところに行つてバーナーアクセイププロテクト一基と身代わり防壁ありつたけ、あと簡易中継器を持ってきてくれ」

「わ、わかったわ！」

「響と電は雷の様子を見てくれ。電脳にロックをかけてるから反応は無いと思うが万が一変化があったらすぐに伝えろ」

「了解」

「な、なのです！」

航暉はそう言うのと右手に下げた拳銃を手に鬼龍院に近づいた。

「天龍、下がってろ。龍田、そこで待機だ」

「お、おう」

「わかったわあ」

書類棚を背にして座り込んだ鬼龍院を航暉は見下ろした。血のじむ右手一本でM93Rを構える。セーフティ解除、セレクトはセミオートに変更した。

「さて、鬼龍院。雷の電腦に何をぶち込んだ？」

航暉が問うても返事はない。銃口をわずかに下げ、引き金を引いた。その音に電は目を逸らそうとして、止める。

逃げちやだめだ。これは……私のせいで起きた惨事だ。逃げるな、電。

「が、がああああああああつ！」

「気絶したふりとは趣味のいいことで。おめでとう、義体化しない限りはこれでベッドの上で芋虫生活確定だ。答えろ。雷の電腦に何をぶち込んだ？」

航暉の表情は変わらない。表情を忘れたかのような無表情で痛みに叫ぶ鬼龍院を見下した。

「……答える奴がいると思うか……？」

「さあ？」

「敵に情けをかける売国奴に味方する奴に話す気なんか」

さらに銃声。先ほどと同じ場所に一発。悲鳴が響くがその悲鳴すら押しつぶすように口許に何かを突っ込んだ。突っ込んだのはナイフの柄、無理矢理に下あごを押し下げないようにして悲鳴を潰す。

「叫んでいいとは言っていないだ。答えろ。雷の電腦に何をぶち込んだ？」

航暉はよろりと体を揺らすように膝をつくとその膝を刺さったままの天龍の剣の柄に乗せた。声にならない悲鳴が響く。

「さて、答える気になったかな？ いま視界が朦朧としていてね、急所を外してあげられる自信もないんだ、そろそろ答えてくれないか？」

ナイフの柄を口から引き抜くと荒い息だけが返ってくる。

「……それがお前の、本性か」

「答えてやる義理も糞もねえよ」

航暉は相変わらず無表情で右手の銃口を相手に押し付けた。そこに伊波ハルカを連れた暁が返ってくる。小さな悲鳴が上がる。

「で、何をぶち込んだ？」

「あ、……アイマイミーだ。解除コードは知らされてない……」

「そりやどうも」

航暉は鬼龍院の頭を鷲掴みすると後ろの書類棚に打ち付けた。今度こそ本当に気を失った鬼龍院が脱力する。

「龍田」

「何かしら〜」

「こいつを医務長のところへ連れていけ。止血などの処置をしたのち
電脳錠と手足拘束の上監視しろ」

「監視までですか〜」

「暴れるなどした場合は実力行使を許可する。万が一、誰かに危害を加えた際は」

航暉は言葉を切った。

「その場で撃ち殺せ。大佐権限での命令だ」

「了解よお」

その声に電は目を見開いた。航暉はそんな命令を出すとは思えなかったのだ。驚いた気配を感じたのか右半身を血に染めながら航暉が笑った。

「電、言ったら。俺はそんなできた人間じゃないって」

その声は初めて聴く声色のようで、耳に馴染んだ声色だった。

優しいだけじゃ、救えないのかもしれない。

雷を救おうとしてくれてるのはわかっている。

それでも

司令官のこんな姿を見たくなかったと思うのは、間違ってるだろうか。

航暉は血塗れでデスクのそばまで行くと膝を折るようにしてデスクにもたれた。

「提督?」

睦月がそれを支えようとやってくる。この算段になって航暉が油汗でびっしりになっていることに気がついた。

「睦月、悪い。服の右腕の部分、切り裂いてくれるか?」

「は、はい……」

「伊波少尉、そこにいるな？」

「そんなことより！ 血を、血を止めないと！」

「バーナー、持ってるな？」

「え、あ、まさか……」

「貸せ」

航暉が左腕を伸ばす。伊波少尉は手に持ったバーナーを胸に抱え込んだ。

「司令官……」

「命令だ！ バーナーを渡せ！」

その怒声の音量に全員が首を竦めた。その音量に伊波少尉はバーナーを渡してしまう。

「月刀大佐、まさか……!?!」

睦月に服を割いてもらって露出した傷を確認した航暉は服の切れ端を加えた。そして、バーナーに火をつけ、目をつむり、傷口にかぎした。

「っ！」

時間にして1秒足らず、それでも皮膚の表面は焼けただけ、肉の焼ける匂いが漂った。

「司令官さん、何をしてるんですか!?!」

バーナーの火を止めて航暉は口に含んだ布きれを吐きだした。

「これで血が止まった！ 目も覚めた」

「バーナーで止血ってんな無茶な！ 死ぬ気か司令官！」

「この程度で死んでたまるか」

天龍にそう言って、弱々しく笑う。よろよると立ち上がった航暉が雷の後ろに回り込む。

「簡易中継器と身代わり防壁。アクティブプロテクト 急がないと雷が危ない」

「そんなことより月刀大佐、早く治療を」

「野郎の腕の一本や二本で部下一人救えるなら安いもんだろ」

「しかし……!」

「それよりもこつちを急がないと手遅れになるんだよ！」

航暉はそう叫んだ。治療を促そうとした伊波少尉が気迫に押され、一步下がる。

「雷の電脳に突っ込まれたアイマイミーは電脳殺人に使うウイルスだ。強烈な幻影と幻聴効果で自らの意志で自殺させるプログラムコード、発動キーはおそらく俺の殺害実行だ。もうウイルスが動き出してー！」

航暉はデスクの一番下にある大きな引き出しを開く、中に入っているのはウエーク島戦術コンピューターの制御ユニットだ。その制御レバーを引き上げる。警告音が司令室に鳴り響いた。それを無視して航暉は独立運用モードに叩き込む。

「ウイルスの発動から完了までおおよそ30分。それまでにウイルスを除去しなければ、雷の電脳がサージ電流で破壊される。今動かなければ、雷は！」

そう言ってコードを簡易中継機に繋いだ。並列回路でWTCにも接続。

「……もう、俺のせいでガキが死ぬのは懲り懲りなんだよ」

そう絞り出した航暉の手を小さな手がそつと包んだ。

「司令官さん」

電が自分の首筋から引き出したコードを中継器に突っ込んだ。

「一人じゃ、いかせないのです」

電がそういいながら航暉の顔を覗き込んだ。航暉のどこか戸惑ったような瞳が見える。

「私は旗艦です。そして司令官さんの補佐役でもあるのです」

電は彼の頬に触れる、瞼から流れたまだ乾いてない血が、彼女の手に残る。

「司令官さんはいなづまを信じてくれました。ヒメちゃんと話すことを許してくれました。私がわたしであることを許してくれました。だから」

電は彼を抱きしめた。傷に触らないように、優しく。

「私についていかせてください」

電はそう呟くように言った。

今の司令官は危うい。今一人で行かせたら、二度と帰ってこない気がするのだ。

「私がしつかりしていれば、こんなことにならなかったかもしれないのです。司令官さんを守ることでできてません。まだ弱いなづまのままです。でも、せめて私に司令官さんをサポートさせてください。……私もお姉ちゃんを助けたいのです」

司令官が雷を救うなら、その司令官を私が連れ戻す。

「だから、一人でいかせません」

それを聞いた響が中継器にコードを差し込んだ。

「妹が死にかけてるのを黙って見てるわけにもいかないよ」

そう言つて航暉の目をのぞき込んだ。

「少しは恩を返させてくれ、司令官。自棄になつた私を諭してくれたのは、司令官じゃないか。電をこんなにも強くしたのも司令官さ。だからたまには、艦娘らしく、司令官を守らせてくれ」

暁が、睦月が続く。

「ジェントルマンが無茶してるのに黙ってちゃあレディの名が泣くじゃない」

「軍用電腦なら出力が必要だよね、提督」

如月が最後に空いているソケットにコードを突っ込んだ。

「たまには私達にもかっこつけさせてくださいね」

それを見て航暉は黙る。航暉は中継器を雷の電腦に直結した後、自分のコードを直接雷に繋いだ。

「まったく、どいつもこいつも馬鹿ばっか……」

「その筆頭がお前だろうが司令官」

天龍がそう言つて肩を叩いた。

「司令官、勝算は？」

「七割……いや、7割5分」

天龍にそう返して航暉は深呼吸をした。

「全員アクティブプロテクトを装着しろ。天龍」

「おう」

「一人でもアクティブプロテクトが吹っ飛んだら中継器のコードを引き抜け」

「わかった」

「伊波少尉はデスクから状況のウォッチ頼む」

「わ、わかりました！」

航暉はただ俯いた。

そして、彼女の電脳に繋がった。意識はすでに彼女の電脳に吸い込まれ、彼のアバターが電脳に突っ込んだ。

自分がどうなったかなんて興味はなかった。

あたりは薄暗いジャングルのような熱帯雨林が広がっている。自分を嘲笑うかのように鳥の鳴き声が響いていた。その中で自分は白いワンピースを着て、裸足で歩いている。

「……何やってんだろ」

雷はそう呟いた。

自分の意志じゃなかった。体を操られていた。

それが言い訳になるのだろうか？

司令官

私が傷つけた。どんなに繕ってもその事実は変わらない。

その考えを振り払おうとして空を仰いだが、薄暗い光が落ちてくるだけで気分なんて晴れなかった。

私のせいじゃなかった。そんなつもりじゃなかった。傷つけたくなんてなかった。守りたかった。

どんなにそう思ってもその声はすぐに腐敗して、饴えた臭いを撒き散らす。言い訳を並べていることは自分自身が一番よく知っていて、すり替えたことを声高に主張する。

あの時、何ができただろう？

私に、何ができただろう。

それを考えることすら億劫になってくる。

ああ、そうか――

「私が死んじやえば、良かったんだ」

思えば簡単だった。自らの記憶ごとすべてを焼き切ればよかったんだ。自意識が残っており、それにプログラムが寄生している以上、自らの意識を焼き切ればよかった。それで話が済んだはずだ。

そうすれば司令官を傷つけることなくすべてが終わった。司令官や電たちに会えなくなるのは怖いが、私が彼らを殺してしまうよりよっぽどマシだった。

「私、最低だ……」

今からでも遅くないだろうか。どうせ司令官に合わせる顔もない。殺そうとした相手にどんな顔をすればいい。

光景がフラッシュバックする。

ああ、最後にみた司令官の顔が血塗れだったなんて、ひどい話もあつたもんだ。

私にはちょうどいいだろうか。ちつとも役立たなかつたな。妹の電はあんなに頑張つて誰かを守ろうとした。天龍さんたちもきつと今後司令官を助けるのだろう。

足を引つ張るしかできない私に何の価値がある。

グダグダ迷っていることさえもうやめてしまったほうがいいだろう。

また誰かを傷つけてしまう前に。

「しれーかん、どこ？」

せめて最後は、あの声を聴きたかつたと思うのは傲慢だろうか。もう一度一目でいいから見たいと思うのはきつと強欲なのだろう。

ジャングルを見回しても、人影どころか生きてるものの気配がない。鳥の声が聞こえるはずなのに、どこか死んだ雰囲気だ。

「あは、なに言ってるんだろう。もう、こえもきこえないわ……」

ああ、そういえば最後に司令官、きつく抱きしめてくれたっけ。

そういえば電もされたことないって言ってたな。ちよつと申し訳ないや。でも、それにちよつと嫉妬してくれば、スパイスとしては最高よね。

「ごめんね、みんな。雷、楽しかったよ。ダメなお姉ちゃんだったけど、電、ちゃんとしれーかんを守るんだよ」

地面に銃が落ちている。ああ、司令官を撃とうとしたやつとおんなじだ。目を撃ちぬけば脳まで届くかしら。その銃を拾い上げてしめった土をはらい落とすと新品のように見える。十分に機能するだろうと自分の右目に押し当てた。

あとは引き金を引くだけだ。

「しれーかん、雷ね。貴方のことが大好きだったんだよ」

仄暗い銃口をのぞき込みながら、雷はつぶやいた。ゆっくりと膝をつく、ひんやりとした土が心地よい。もしここで倒れたとして、私は土に戻るだろうか。

「嘘でもいいから、一度でも、雷が必要だって言ってほしかったな。雷じゃなきゃだめだって、お前じゃないと駄目なんだって言ってほしかった……貴方の隣には、もう電がいたもんね。私が追いつけるはずなんて、ないもんね……」

ああ、妹まで憎くなってきた。そろそろ本格的に駄目らしい。

「でも、しれーかんは覚えててくれそうだね。だって、殺そうとした女の顔なんて忘れるはずないもん」

できればそんな終わり方をしたくなかったと言っても、もう遅い。

「ダメダメだな、私」

せめて笑って引き金を引こう、それが一番私らしい。

「じゃあね、しれーかん」

指に力を込める。ああ、司令官の声が聞こえた気がした。それで、満足だ。

そのはずだ、満足しなきゃいけないはずなのに。

戻ってこい。

そんな声を聴いた気がした。だめだ、決心が揺らぐ。

会いたいよ、司令官。でも会えるわけがないのだ。

直後、周囲が弾ける。衝撃、弩に弾かれるってきつとこんな感じだ。意識が一気に覚醒する。

「何勝手に自己完結しようとしてんだ、雷」

誰かが両手で銃を押さえこんでいた。

「しれーかん……？」

「おう、迎えに来たぞ」

銃を抑え込む手が白くなるほどに強く握りしめていた。ゆっくりと銃を動かし、誰もいない方向に銃口を向けた。

「どーして……？」

「どうしてもなにも、迎えに行くからそれまで死ぬなって言っただろう。んな物騒なモノ持ってたのは後でしっかり叱るとして、ちゃんと生きてるうちに間に合ってよかった」

航暉が雷の指の一本一本をほぐすように開いていく。その様子を雷は黙って見ていることしかできなかった。

「……私、しれーかんに大げがさせたのに」

「大した問題じゃない。今生きてる」

「それでも……傷つけたじゃない」

「傷つてのは男には勲章になるのさ。時に女を守ってできた傷は一生誇れる。大切な人だとなおさらだ」

「私は……その大切な人に入ってる？」

「じゃなかったら、ここまで来ないよ」

人差し指をトリガーから外し、親指、中指とほぐしていき、薬指をほぐした時、その銃が地面に落ちた。その影が掻き消える。

「大丈夫。誰も死ななかつた。いくらでもやり直しがきくし、いくらでも取り戻せる。……なあ雷」

「？」

「勝手にいなくなろうとするんじゃないよ。ちゃんと、雷の場所はあるじゃねえか」

「……うん」

「姉妹揃って心配してるぞ」

「うん」

「睦月たちもお前を助けようと頑張ってたぞ」

「うん」

「それはな、雷だからなんだぞ。わかってるか？」

「うん」

「ほんとに？」

「うん」

そう言うのと航暉は雷の前に回り込んでそつと頭を撫でた。

「雷、つらかったな。よくがんばった」

それを聞いた途端、彼女が決壊する。

「しれーかん……雷、頑張ったよね」

「ああ」

「すつごく、怖かった。しれーかんを殺しちゃったんじゃないかって、怖かったんだよ……？」

「ああ」

「すつごくすつごく、怖かったんだからね!？」

「ああ、心配かけたな」

「怖かった、怖かったんだからあああああああああつ」

縋り付くようにして、雷は大声を上げて泣いた。こんな泣き方をしたのはいつ以来だろう。艦娘になってからこんな泣き方してない気がする。

そう思った直後、ノイズが走る。感じた違和感は急速に膨らんでいく。

「雷、どうした？」

「しれーかん……？ なにか、変よ」

違和感の正体はわからず腫れた目で航暉を見上げた。

再び、ノイズ。

「わ、わたし……」

司令官が笑ったように見え、そのまま彼は雷を抱きしめた。

「大丈夫だ、ウイルス除去が始まった。目が覚めれば、ウエーク基地にいるはずだ」

ノイズがひどくなる。首の後ろに違和感がある。QRSプラグが刺さっているのだ。

熱帯雨林が遠のいていく。その中で雷は違和感の正体に気がついた。

「わたし、昔——」

そして、視界が暗転した。

「お姉ちゃんっ!」

うつすらと目を開ける。何かが覆いかぶさってるらしく、やけに薄暗い。目のピントを合わせようとするも近すぎて見えない。

「私が誰だかわかりますか!?!」

「……え、いなづまでしょ?」

ほぼ声で判断したがその影が急激に遠のく。

「~~~~~よかつたあ」

直後に胸の方が苦しくなる。誰かが頭を乗っけているらしい。

視界のヴェールが晴れてきてや々と周りが見えるようになってきた。ゆっくりと頭をもたげると胸の位置に茶色の髪の毛の塊が見える、赤茶色のバレッタも見えるから電だろう。

体の感覚も大分戻ってきていた。何かを枕にして横になっているらしい。

「……心配したのです」

「なによもう、雷は大丈夫よ?」

「全く持って大丈夫じゃないだろう?」

後ろから声がかかると銀の髪が頬に触れた。

「もう少しで本当に電脳が吹っ飛ぶところだったんだ。今の今まで目が覚めたらなにも覚えてないんじゃないかって全員ひやひやしてたんだよ」

「ご、ごべんばぎい」

枕にしているのは響の膝だったらしく、響は雷の頬を両手で押さえてぞき込んでいた。その状態だと謝罪もまともにできない。

「このバカヅチ! すっごいしんぱいしたんだからねっ!」

いきなり振ってきた嗚咽交じりの怒声に雷は身をのけぞった。

「……ごめん、暁姉え」

「ほんとよ。みんなみんな、本気で心配したのよ!」

「うん。ごめん……」

あー、謝ると言えば司令官にも謝らなきゃなー。そんなことを想いながらまだ上手く回らない頭を必死に回す。

「つてしれーかんは!」

「無事目が覚めた?」

「しれーかん、ごめんなさ……つてその腕の火傷なに!? というよりなんで手当もしてないの!?!」

航暉は苦笑いで受ける。

「ほら雷にも言われた。目も覚めたことだしさっさと医務室行くぞおら」

「ああ、そうだ……な……」

安心したからか航暉の視界が一気にぼやけていく。

消えゆく視界の中で航暉は思う。

最悪だ、と。

横須賀鎮守府付属海軍横須賀病院編

00000000

セントニコラス・イン・マニラ

鳳翔がマニラに戻ってきたのはクリスマスの前だった。なんだかんだあってやっとのことで帰ってこれた。北方といい西部太平洋といいこのところが戦況がひっちゃかめっちゃかだった。

ここところは鳳翔もいろんなところを転戦していた。理由は単純だった。

空母不足。

商船護衛のエアカバーも含めると圧倒的に空母が足りないのだ。拠点防衛や近海警備は陸上機もつかえるため何とかなっているものの、遠洋となるとそうもいかない。どうしても洋上基地たる空母が必要になる。

鳳翔は空母としては小型のため補助戦力扱いだだったがそれでも重要だった。

夜中のマニラ軍港は恐ろしいぐらいに静まり返っていた。内紛はまだ続いているとはいえ大分沈静化した。どこかすえた匂いがする。いい匂いではないが、だいぶ慣れてしまった。彼女の指揮官、浜地賢一中佐がいる場所の匂いだ。

「ふふ、きつと部屋は散らかってるのかしらね」

ダニエロアチェンザ地区の国連軍パースに足を向ける。何とか帰ってきた。一緒に東南アジアに下りてきた最上たちとはもう別れた。湾内とはいえ夜間で単独航行だと緊張する。パースを見てほつとした。司令官室がある司令部棟にあかりがともっている。まだ浜地中佐は仕事なんだらう。相変わらず多忙な司令官だ。

艦娘専用の出撃ドックに進入、艦装を外して整備を担当してくれる特務技官と妖精たちに艦装を託す。

その足で司令官室に報告に向かう。ほぼ一カ月近く司令官には会

えていなかった。勿論通信は毎日のようにしていたし、時には画像通信もあった。それでも面と向かって会うのは一カ月ぶりなのだ。気分が弾む。

すでに常夜灯に切り替わっている時間。非常口の明かりが眩しい廊下を歩いて司令部に向かう。

「……！」

「……！」

司令官室から何か話声がする。一つは皐月だと思うが、もう一つは誰だろう？

ドアをノック。ゆっくりと入る。

「浜地ていと……く!?」

慌てて飛び込む。中にいるのは目的だった浜地中佐とその秘書艦で、彼を守るように立つ駆逐艦皐月。向き合っているのは開襟の国連軍の制服を着た——女性左官。

「あ、あなたは……笹原中佐!?!」

「ああ、鳳翔さん。お騒がせして申し訳ない」

そう言うのと笹原は笑う。皐月はそんな彼女を睨んだままだ。

「だから、なんだっていうんだ! 司令官が悪いことをしたのか!?!」

「悪いことだとは一言も言っていないよ、皐月。ただ、彼の記憶に少し用があるんだ。どうしても思い出してもらわないといけないことがある」

終始笑顔の仮面の裏で、笹原がぞつとする声を出している。それを見た鳳翔は戸惑うだけだ。

「なにが、あったんですか。浜地司令に何か御用時でしょうか?」

「うん? 用事といえば用事よ。もつとも、軍の正規のお願いじゃないけどね」

「……正規の命令じゃない、個人的なお願いというわけですか?」

「理解が早くて助かるわ。でも外れ」

そう言うのと笹原は笑った。

「日本の準法的機関からの協力要請、ってことにしといて」

「だから、司令官をそんな怪しいことに——!」

「文月」

その言いぐさに反感を抱いた皐月が前に出ようとする。それを小さな影が止める。

「——っ」

「いくら皐月ちゃんでも司令官に手を上げようとするのは許さないよ」

茶色の長いポニーテールを揺らして、文月がそう言った。手に持っているのは——旧式のリボルバー、S & W M36レディスマス。両手で真正面に構えるその銃口は正確に皐月の右目を狙っていた。

「笹原中佐、あんた……！ そんな小さな子に何を持たせてるんだ!」
それを見た浜地が激昂する。それをどこか優しい笑みで受けた笹原が腰に手を当てて俯く。

「そこに怒るのは非論理的だ。普段水上用自律兵装運用士官は艦娘たちに砲を持たせ、深海棲艦を排除するように命令を下している。使ってるのが銃か砲かの違いだ。普段の行動とどう違う?」

「だからって……!」

「だからって、なにかな? 人類を守るために化け物を排除するのは奨励し、実際に指示をだせるが、自己防衛のために銃を握らせることは下劣で許されざる行為とでも言う気かな?」

そう言うとうすうと目を細める笹原。

「その理論、深海棲艦が消えた後、艦娘たちに振りかざされる理論だつて気がついてるよね? 化け物を殺すために人間は人間に従順な化け物を生み出そうとした。残されるのは化け物を殺せる化け物……その化け物を人間は野放しにできないだろう?」

痛い沈黙が下りる。音がないと言うことがこれほど辛いことがあるのかと思いつながら皐月は銃口を、正確にはその後ろにある文月の表情を忘れたような目を見つめた。

笹原が溜息をつく。

「まあ、外道なことをしている自覚はあるよ。こんな戦争がなければ、その戦争が腐敗してなければといつも思う。でもそれで大多数を救

えるなら、私は何度でもこの手を汚すし部下に汚れ仕事をさせる」

「最大多数の最大幸福ってつか、くだらない」

「そうかな？ それならなぜ議会は多数決をやめない。完全一致のコンセンサス会議がなぜできない？」

「そう言う話をしてるんじゃないんだよ。その多数のために少数を踏みにじっていいのかと言ってるんだ」

「私の部下を甘く見ないでよ、浜地中佐。私が臯月をよく知らないように、あなたも文月をよく知らないはずだ。それで決めつけるのは判断が早すぎると思うね」

半ば喧嘩腰の会話が続いたが、ああ文月、と笹原が声をかける。

「もう銃は下ろしていいよ。ごめんね、友達に向けさせちゃって」

「司令官に必要なんでしょお？ ならしようがないよ」

「文月……」

臯月がどこか慄いたような視線を送る。その先には屈託なく笑う文月の姿があった。

「それが人にものを頼む態度でしょうか、笹原中佐」

鳳翔はそう言って浜地の隣に立った。

「私にはただの恫喝にしか見えないのですが、少なくともこちらの納得のいく事情を申し上げて頂けないことには、犯罪行為と判断せざるを得ません」

鳳翔は一步前へ。浜地を笹原の視線から守る位置に立つ。

「お話頂けないのであれば、どうぞ今夜はお引き取り下さい」

それを聞いた笹原が口角を吊り上げた。

「——Program R.Y.E.ライ麦計画、聞き覚えは？」

浜地は答えない。正確には答えられない。鳳翔の後ろに立ったままの浜地の顔を見て笹原は答えを得たと笑った。

「答えたなくても答えられない、なぜならそれを聞いたことがあるかどうかすらわからないから、そう言いたい表情ね」

「何を言いたいかさっぱりわからないよ。笹原中佐、ボクの司令官に何をしたいんだよ」

臯月がそう言うが臯月に目を向けないまま笹原が言葉を続ける。

「正確には貴方は聞いたことがあるはずよ。そして記憶を消された――
貴方のすべての記憶と一緒に。違う？」

「な、なにを……？」

驚いた顔で固まるのは皐月だ。鳳翔の声が震えた。

「て、提督……？ 笹原中佐、あなたは何を……」

「母親の顔、生まれた町の風景、怒られたこと、友達とのくだらない喧嘩の理由。何か一つでも覚えてる？」

「……」

「その記憶が、軍中枢に奪われたとしたら、どうする？」

全員の視線が浜地に集中する。

「司令官……ほんとうなの？」

浜地は答えない、笹原をじっと睨んだまま時間が過ぎる。

「協力の強制はしないわ。でも一つだけ覚えておいてほしいな」

そう言つて笹原は笑った。

「その記憶はその彼女と無関係じゃない。正確には彼女たちと無関係じゃない」

「……艦娘に関わると言いたいのか？」

「正確には艦娘の今後に関わる問題というべきかな。宝箱かパンドラの箱かは開けてみないとわからないし、人によつては甘味でも人によつては苦味になるだろうしね」

彼女はそう言つたと笑った。

「……それを探す理由は」

「さあ？ と言いたいところだけど教えておいてあげる。……ある軍人が戦争終結への切り札を手に入れた……かもしれない。あと3年もすれば戦争は終結する。その後、水上用自立駆動兵装はどうなると思う？ マニラ基地にいてわからないはずないよね？」

「……」

ほぼ間違いなく、人間同士の戦いに投入される未来が来る。薄々と

思っではいたがそれを考えることはあえてしなかった。

「それを覆せるジョーカー、正確にはその一部かもしれないんだ、貴方の記憶は」

そう言うのと笹原は仮面のような笑みを深くした。

「どう？ 少しは興味を持ってくれた？」

「……あなたは俺の何を知っている？」

「深くは知らないわよ。そもそも調べていてあなたに行き着いたのは偶然に過ぎない。そしてそれが意味を持ち始めるまでは興味なんてなかった。そう言う関係性よ、浜地中佐。でも『戦後の艦娘たちの行く末を憂う』という共通項があると私は考えてるわ」

そう言うのとメモ用紙を浜地に渡した。

「少なくとも戦友ぐらいにはなれると思ってるけど？」

「——共犯になれと？」

受け取りながら浜地がそう聞くと笹原は破顔した。

「あら、非正規戦だっばれてるわけか。……ま、共犯とも言うわね、どう呼ぶかはお好きなように。やっぱりあなた侮れないわ。マニラ観艦式でもセックススパイを見抜いてたわけだし。いい返事を期待してるわ」

そう言うつて笹原は伸びをした。

「それじゃ、お暇させてもらうね。鳳翔さんの目がだんだん据わつてきて怖いし。あ、その情報は一回こっきりのルートだから気を付けて。攻勢防壁とかもバリバリ貼つてある軍用極秘データベースにつながる裏口、^{バックドア}その先に一通りの概要と『こちらで入手できたあなたの記憶』が詰まってる。それを使って判断してもいい。ただし使ったら即そのルートを廃棄してね。火消しはこっちでやるし、不用意に他のルートを使うと攻勢防壁に脳を焼かれてお陀仏になるから。お六になってみんなを泣かせなくなったら慎重に考えて使つてね」

「待つてくださいい！」

司令官室から出ていこうとした笹原を鳳翔が呼び止める。

「あなた——何者ですか？」

笹原は一瞬だけ笑みを深めた。

「笹原ゆう、だよ。偽名だけどね」

「……話す気はないと言うことですか？」

「だったら偽名ってことも言わないさ。——迷惑料代わりに鳳翔さんにプレゼント」

そう言うとなんかが投げた。鳳翔はそれを両手で受け止めると手の中のものをみる

「……小型カメラ？」

「この司令部の室外機の裏にあったよ。ついでにコンクリマイク。一度しらみつぶしにしたほうがいい。……監視されてるよ。あんたら」
今度こそ笹原は部屋を出ていく。

「よいクリスマスを」

その笑みはどこか楽しそうだった

PHASE 1

「だから、さっさと転院しなさい、月刀大佐」

ウエーク基地の医務室で六波羅夏海が青筋を浮かべながらそう言った。

「この設備だとこれ以上の対応は不可能。その腕を腐らせないでつないでおくだけで精一杯なの。横須賀に戻って再生医療を受けるなり義手にするなり対策をしなさい。あと右目の治療もー」

その怒りを真正面で受けているのは当然ベッドに転がされた航暉である。包帯でぐるぐる巻きにした腕と右目を覆うように巻かれた包帯で印象は全体“白”。病院着の上着もその印象を強くした。

「まったく、止血する必要があったからってよりにもよって高出力バーナーで焼いちやうかな。火傷治療の方が刺し傷より悲惨よ、おかげで二の腕より先の神経ほぼ死んでるし」

「……耳が痛いな」

「痛いこと言ってるんだから当然。これで懲りてなかったら困る」

こんなことになっているのも3日前に発生した“ウエーク基地司令官射殺未遂事件”のせいである。その被害にあった航暉が右腕と右目にダメージを追っていた。他には司令官室のドアが吹っ飛んだり、血糊で染まった床の張替などでかなりのお値段が吹っ飛ばらしい。

「ご、ごめんねしれーかん」

「雷ちゃんは悪くないわ。この事態の4割は月刀大佐の選択ミス。残りの6割は鬼龍院の攻撃のせい。雷ちゃんの落ち度は一つもないわ。」

——伊波少尉に感謝しなさいよ？ 大佐の血液補填のために全血で750mlも出してくれたんだから」

航暉のベッド脇のツールで申し訳なさそうに縮こまっているの

は雷である。 电脑汚染を受けた雷は今出撃停止措置の真つ最中である。 やることもないので「しれーかんのお世話くらいはやるっ！」と専属の看護婦役を務めている。 そんな彼女の頭をポンポンと叩いて夏海は優しい目をした。 航暉の方を見たときはもう冷え切っていたが。

「大佐が動きたくない理由もわかるけど、 そう言う訳にもいかない事情があつてね」

「しれーかんが動きたくない理由って？」

「鬼龍院のバックには明らかに軍関係者がいる。 その状況で不特定多数の軍人が集う軍の病院になんて行ったらいつ殺されるかわかったもんじゃない。 そうよね？」

「それよりもその方法が艦娘への介入プログラムだったことの方が怖いね。 いつ反逆者に仕立て上げられるかわかったもんじゃない」

航暉はそう言つて動く左手で頭を掻いた。

「部下を乗っ取られるのは懲り懲りだからな、 できる限り目の届く範囲で運用したいってのが本音だね」

夏海にそう言つて彼女は何やら二つのバインダーを取り出して振つて見せた。

「そんな大佐に悪い情報と悪い情報があるけどどっちから聞きたい？」

「どっちにしても悪いじゃねえか。 優先順位が高いのは？」

「ん？ じゃあ命令レベルの高い方からいこうか。 ちよつと関係者呼んでくるわ」

夏海がそう言つて病室を出ていくとほんとはすぐに帰つてきた。

「司令官さん、 体調は大丈夫なのですか？」

「寝てたら体が鈍りそうだ」

夏海に連れられてやってきたのは電である。 電もスツールに腰かけると、 夏海は航暉にバインダーを手渡した。

「二つあるんだけど、 一つは電ちゃんの転属命令書。 転属先はヒメ事案緊急対策本部、 国連海軍総合司令部直属よ。 どうやらヒメからご指名があつたみたいだね」

「わ、私がなのですか？」

「当然だろうな、ヒメにとっては艦娘とファーストコンタクトを取ったのはおそらく電だ。これまで指名が来なかったのがおかしいくらいだ」

膝の上に置いたバインダーのページをめくる。

「転属というよりは貸出扱いってことか、部隊の所属はそのまま、勤務地だけを変更すると」

「で、横須賀ってわけよ」

「なるほどな、だから俺の治療もグアムじゃなくて横須賀ってことか」

ウエーク基地から一番近く、高度治療ができる病院があるのは帝政アメリカ領のグアムだ。グアムには中部太平洋艦隊の司令部もあることもあり、中部太平洋で何かあるとグアムに向かうことになる。

「まあ、なんで横須賀かっていうところちもでかいんだけどね」

そうやって渡されたのはもう一つのバインダー。

「……艦装研究開発実験団への出頭命令？ 雷に？ なんでだ？」

「元凶が不思議そうな顔しない。電脳6つに中規模スーパーコンピュータを繋いで並列処理させたって言っても30分で電脳最深处まで潜ったわけでしょ？ そんな脆弱性を放っておくわけないじゃない」

「あー……ってことは俺のせいか」

「どう考えても大佐のせいよ。それもルート権限を書き換えられた状態からだから向こうはなんてこ舞いになってるらしいわよ」

「その脆弱性を埋めるためのパッチをつくるからそのサンプルとして雷を貸せってことか」

「そうね。で大佐も大げがしてるしまとめて横須賀で治療してきなさいってこと」

航暉はそれを聞いて頭を掻いた。

「……このままじゃ任務復帰は無理だし仕方がないよな」

航暉は苦笑いを浮かべる。そうして一時的にはあるが、航暉がウエーク基地を去ることが決定したのである。

「それではあとは頼みます」

臨時司令を引き受けてくれた大佐に敬礼を送り、航暉は輸送機に乗り込んだ。横には電と雷もついている。

昨日の夜は艦娘たちがメッセージカードを書いてくれたり、いろいろに別れを惜しんでくれた。

「俺は2ヶ月そこらで帰ってくるし、雷は2週間もあれば戻ってくるんだけどね」

「一番長期になりそうなのが電かあ……」

「ヒメとの交渉次第だから先が読めないんだよなあ……」

輸送機の中で航暉はどこか寂しげな苦笑いを浮かべた。その表情は電たちも同じである。

滑走路を蹴って飛び出した輸送機の窓から遠くウェーク基地を眺める三人。

「……少し寂しいな」

「基地のみんなで家族のようなものなのです。寂しいのは、当たり前のことかもしれないですね」

そう言った電に雷が笑う。

「じゃあ、父親はしれーかんで決まりでしょ？」

「こんな大家族の長になれるほど甲斐性ないぞ俺。ちなみに母親は誰になるんだ？」

そう言うと、雷は顎に人差し指を当てて考える。

「それっぽい人いないわねえ……バツイチ？」

「おいコラ。言うことに事欠いてそれはないだろ」

「でも龍鳳さんも幼な妻にしてはアレだし、医務長としれーかんがくつついてる凶は浮かばないしなあ……あ！ あたしがいるじやない！」

「それこそ犯罪臭がするから却下だ。ってかそうなると利根や筑摩よりも数段年上設定なるぞ？」

それを聞いた電がくすくすと笑う。

「雷お姉ちゃんがお母さんだと、いなづまが親戚のお姉さんポジションになるのです？」

「親戚設定ありなら子供は……睦月型のみんなか島風？」

「キヤラ濃いなあ……」

航暉が頭を抱える。

「そういえば、司令官さんのご家族の話って聞いたことないのです」

「俺か？」

「あ、あたしも聞きたーい！」

話題を振られて航暉は少し笑った。

「あんまり面白くないぞ？ 大家族っていえば大家族だけだな。親父におふくろ、姉1人に兄1人、妹が3人。あと使用人数人」

「使用人!？」

雷が驚いた顔をする。航暉は苦笑いだ。

「月刀家は軍関係に顔が広くてね。家も結構広いから家族だけじゃ仕事回らないのさ。だから執事にハウスメイドがいる」

「ってことは……しれーかんってかなりお坊ちやま？」

「かもな」

「す、すごいのです……」

なんだか目をキラキラさせている部下二人に苦笑いで返す。

「もつとも、最近は実家とも疎遠になって、ていうか大ゲンカして家を飛び出したもんだから最近会ってない」

「ご家族とは仲悪かったのです？」

「下の双子の妹とは仲良かったけどね、あと執事の虎爺、今では連絡も

取ってない。アイツら今どうしてるやら……」

航暉はそう言って窓から空を眺めた。その顔はどこか寂しげに見える。

「ご実家ってどちらなのですか？」

「ん？ 北陸州だ。金沢……って言ってわかる？」

「えっと……舞鶴の近くだったわよね？」

「まあ近くって訳じゃないけどな。日本海側ってのは合ってるし舞鶴の哨戒圏だ」

「……ってことはこの機会に会ってくるってのも難しいですね」

電の言葉に航暉は笑った。

「会いに行くのも気が重いんだよなあ。クソジジイに挨拶に行くのも面倒だし」

「クソジジイって……」

「つきがたとしこみ月刀利郁……70目前にしてまだ権力に縋り付いてるただのジジイ
ヤ」

そう言って航暉は顔を顰め、肩をさすった。

「痛いのです……？」

「いや……。さすがに気圧がさがるとあれだな。少し違和感がある」

「無理はしないで……って言っても機内だからやりようないわよね」

「まあ数時間だ。ゆっくりやるさ」

航暉はそう言って笑って見せる。機体は一路横須賀を目指して飛んで行った。

「……なあ、青葉」

「んー、なんですか？」

オフィスでひたすらにキーを叩いていた高峰が横で同じようにキーを打っている青葉に声をかけた。

「ウェークの司令官射殺未遂事件、どう見るよ？」

「高峰中佐は管轄外ですよね」

「なんだよ、友達の安否を気遣うのに理由があるか？」

「理由云々じゃないですよー。それって三課の仕事なんですから六課の青葉たちが首突っ込んだらなんて言われるか……」

それを聞いて高峰は笑った。

「首を突っ込むつもりはねえよ。三課も優秀だ、うまくやるさ。俺が聞きたいのは個人的な見解、感想、その他噂程度の話。青葉、お前は どう見る？」

そういいながら高峰は胸ポケットから箱を取り出す。

「青葉」

「少し休憩ですか？ ぐー一緒にしますよ!？」

「ヤニを吸ってくるだけだぞ？」

「それでもですよ」

そう言うのと連れだって屋上に出る。8階建ての横須賀国連合同庁舎の屋上からは青く海が見えていた。屋上の喫煙コーナーはまばらに人がいる程度である。輸入ルートが断たれ煙草も高級品になったし、健康志向が後押ししたせいで喫煙率も大分低くなった。それでも高峰は煙草を手放せずにいたのである。

真つ黒の紙箱から煙草を取り出すとフリントライターで火をつける。

「……高峰さんって、ずっとフリントライターなんですね」

「ん？ ああ、これカズからの貰いものだ」

「月刀大佐から？」

「ああ、あいつも海大時代は愛煙家だね。そんな時に使ってたのをもち

らったのさ。フrintライターはオイルもいらないうし、まず壊れな
い。火打石さえ乾いていれば極低温化でも問題なく作動する。煙草
なんかに使うにはコツがいるが慣れればどうってこともないしな」
「月刀大佐がタバコ好きだったって初めて聞きましたよ？」
「そうか？ アイツはダヴィドフのクラツシツクをよく吸っててさ、
煙草の趣味で言い合いになったこともあるんだ。あれも結構うるさ
い」

そう言つて高峰が笑う。

「そう言う高峰さんはジョンプレイヤースペシャルって訳ですね」

「この煙草らしさが好きなんだけどねえ」

そういいながら吹かした煙が冬の青空に溶けていく。

「青葉……ライ麦計画って聞いたことあるか？」

「ライ麦計画……？ たぶんないと思いますけど」

「俺も名前ぐらいしか知らん、というより名前しか出てこない」

煙草を口の端に啞えたまま高峰は空を仰ぐ。

「予備青年士官教育プログラム……。ここまでは出てくるんだ。だが
その先の一切の情報がロツクされてる」

「教育つてことは後方支援部のプログラムですか？」

「それも不明……だが、これに関わったと思われる人物が何人か割れ
た。ごく最近になつてな」

それを聞いた青葉がどこか胡散臭げな目を向けた。

「……なーんか嫌な予感するんですけど」

「俺も見た時はしたよ。……一人目、風見恒樹元大佐」

「ウエーク基地の元司令官……ですよね？」

「ああ、二人目、合田直樹元中将」

「……元北方第二作戦群司令」

「三人目……中路章人中将」

「……元西部太平洋第一作戦群司令……高峰さん、すごくやな予感す
るんですけど」

「今、ライ麦計画に関わつたって思われる人物が死亡もしくは証言能
力不能に陥つてる。……明らかに証拠隠滅を凶つてるんだよなあ」

高峰は一度煙草から口を放し、青葉の方を見た。

「風見元大佐と合田元中将は殺害、中路中将は電腦自殺に失敗して言語能力喪失。偶然にしてはできすぎてる気が……」

「青葉もそう思うよな。それにもう一つ、32分前に入ってきた情報だ」

高峰がコードを差し出してくる。青葉は受け取ると、それを首の後ろに差し込み、うえつ、といって引きぬいた。

「予告なしになんてもん見せるんですか!？」

「声がでかい。……風見元大佐をよく知る鬼龍院彰久特務大尉が自殺した。自殺に見せかけた他殺の可能性もあるそうだから今四課が動いてる。個人的にはカズに風穴開けてくれやがった人物だから複雑な気分だ」

「月刀大佐に……つてこれ!？」

「気がついた？ 死んでる人物をたどるとなんらかの形で月刀航暉に行き着くんだよ」

高峰はフィルター直前まで燃えた煙草を灰皿に落とすと溜息をついた。

「こうなってくるとカズ自身が怪しく見えてくるんだよなあ。そんなはずはないってフィルターをかけてる俺でさえそう見えてくる。まあ、あんまりに露骨だからパフォーマンスって線が出てくるけどな」

「これ……どうするんですか?？」

「どうするもこうするもないだろ」

高峰は溜息をつく。

「ライ麦計画について少し探りを入れるよ。裏に誰がいるにしろ、ここまで上級将校を殺しているとなると性質が悪すぎる」

「探りつて言っても、ロツクかかっているんですよね。探りつてどこから……?？」

「青葉、お前どれだけこの仕事やってるんだ？ いくら情報を潰しても必ずどこから顔を出す。人の口に戸は立てられぬって言ってな、そこからいけば結構いけるもんさ」

「内部スパイをするつもりです?」

「まさか。ただのHUMANINTだよ」

対人諜報活動——それを聞いた青葉がニヤリと笑う。

諜報員と聞くとスパイを真つ先に思い浮かべることが多いが実はそうではない。スパイは非合法に諜報活動を行う人物のことを指す。諜報活動のために非合法なことをせざるを得ないことがあるのは事実だが、それだけではなく合法的に諜報活動を行う集団も数多く存在する。

国連海軍特別調査部——「特調」もその一つだ。人を相手取った組織のため、対深海棲艦戦争と化している今の戦争では優先順位は下がるものの、重要な任を担うことには変わりはない。国連軍に反感を持つ国家の折衝や各種下地交渉を行う一課から始まり、全部で九つの課が稼働している諜報組織。その一つのチームに高峰は所属していた。

高峰の専門は防諜活動カウンターインテリジェンス、即ちスパイ活動の炙り出し、特に通信諜報コミントを中心に暗躍する非合法諜報員イリールガールを摘発するのに特化した嗅覚を持っていた。

「直接動くのは苦手なんだけどね、しかたない。身内の電腦に潜って攻勢防壁に焼かれましたとか笑えんし、地道にいくぞ」

「当てはあるんです?」

「とりあえずは、な」

高峰が笑う。煙草の箱をポケットに無造作に突っ込むと笑った。

「最初の一人は誰にします?」

「とりあえずすぐに面会できそうな奴から当たってみよう」

「というと?」

「AV—CTO1、水上機母艦『千歳』……風見大佐のお気に入りだった艦娘だ。なにか知ってる可能性はある。風見元大佐殺害の件でまだ横須賀に勾留処置になってるはずだ。とりあえず面会手続きを経て堂々といこう」

階段室に入った高峰の口角が吊り上がった。普段は見せない獰猛な目線が前を射る。

「久々の狩りだ。気取られることなく慎重にいこう」
そう言って高峰は建物内へと消えていった。

0000010 ヨコスカ・アツプサイドダウン
PHASE 2

「ア、イナヅマ！」

「お久しぶりなのです、ヒメちゃん」

「ウンウン、イナズマヲ待ッテタ！」

真つ白な壁に覆われたプールの中で電は嬉しそうに抱きついてくるヒメ——敵性コード『北方棲姫』——に再会していた。

横須賀軍港の一角にある電波暗室、気温や水温に、赤外線、放射線、観測できる情報は全て数値として記録されるこの監視室の中で、深海棲艦の少女はあくまで朗らかに笑っていた。

「ヒメちゃん、ここでの生活には慣れたのです？」

「ダイブ。真ツ白ナ男ノ人達ガ少シウルサイクライ」

「そうですね。狭さとか大丈夫なのです？」

「全ク、アクタンノ方ガ肩身狭クテ大変ダツタ」

「深海棲艦の中でもそうなのですか？」

「ウン。深キ者タチノ間デモ、ツヨイヨワイアルカラ」

そんな会話が続く中、その部屋を天井近くから見下ろすマジックミラーの奥で少女と呼ぶには少々大人びた姿の女性が溜息をついた。

「さすが電だ。私ではああもいかん」

「それでも長門は上手くやってた方よ？　うちのスタッフがやって何度警報鳴らしたと思ってるのよ」

ヒメ事案緊急対策本部。そう呼ばれる部署のメンバーが全員集まっていた。

極東方面隊から艦装研究開発実験団団長吾妻道久少将率いる長門と夕張が、欧州方面隊からオットーリエ・シュニーヴィント中将率いる派遣団として戦艦ビスマルク、重巡フリントツ・オイゲン、駆逐艦乙1が参加。インド・オセアニア方面隊から豪州のクリス・ダンピア中

佐と駆逐艦ワラビー、南北アメリカ方面隊からグレース・ホッパー准将と航空母艦ホーネットに戦艦サウスダコタ……そうそうたるメンバーが勢ぞろいしていた。他にも生物学、電子工学、情報学などの専門家が世界中から集められヒメのどんな些細な動きも見逃すまいとその動向を見守っている。

「そう落ち込まなくてもいいと思うわよナガト」

そう言ったのは金髪をさらりと揺らすビスマルクだ。それに長門は溜息で答える。

「それでもさ。世界の情勢に関わる事態を個人の両肩に預けなければならぬことが腹立たしいな」

そう、ヒメは国連軍が矢面に立つ人類側で初めて獲得したコミュニケーション可能な友好的個体だ。その戦略的意義は計り知れない。

Essential Elements of Enemy Information
E E E I ——— 敵情報における必須要素、それ

を得ることなくして軍の作戦はまともに機能しない。どこに敵の部隊が配置されていてその中での高価値目標はどれか。どれだけの部隊規模があれば相手を打破することが可能でそれが与える損害はどれくらいが予想されるか。軍事作戦はそれら情報に支えられて機能する。

これまではその情報すら得ることがかなわないまま、いわば場当たり的な作戦に頼らざるを得なかった。それは相手の事情を探ることができなかつたためだ。その前提をヒメは覆す。だからこそ軍は持てる英知を余すところなくつぎ込もうとしている。

ヒメとまともにコミュニケーションを取ることができ、その情報戦の最前線に立っているのは、現状、電のみ。見方によっては国連軍全体の命運が電にかかっているともいえるのだ。

だからこそ、長門は溜息をついたのだ。

国を背負うだけでも重責だった。国の期待を背負うだけでも押しつぶされそうになった。電には長門が背負ったものとは比べ物にならないほどの重責がかかっているはずだ。それは個人に預けていいものじゃない。世界の命運なんて個人で扱いきれるものではないのだ。

だのに、それを見ているしかできない自分を恥じている。電の肩に預けなきやいけないことに憤りを感じている。

「ナガトさん、辛いのはわかるけど根を詰めちゃだめだよ？」

どこか甘い声が聞こえて目を向けるとプリンツ・オイゲンが少し傍げに笑っていた。

「ああ……でもな、不甲斐ないんだ」

「そんなこと言ったら、話すらしてもらえないあたし達は無能になっちゃうわよ。ナガトさんもあたしたちもできることをやった。たまたまイナヅマちゃんも成功した。それだけのことでしょ？そこは認めて支えてあげなきや」

「そうだ、な……ありがとう」

「B i t t e s c h n ! どういたしまして！」

プリンツ・オイゲンの言葉にシュニーヴィント中将が笑みを浮かべる。

「何はともあれ、これでコミュニケーターは確保できたわけだ。できる限り深海棲艦の情報を収集して解析。やっと本題にはいれるな」

対策本部長を務めるシュニーヴィント中将が流暢な英語でそう言った。国際部隊のため言語は英語に統一されているためだ。銀の髪を揺らす女性将校は笑って振り返る。

「とりあえずイナヅマにはそのまま話してもらおう。今は信頼関係を確立してもらうのが最重要課題だ。ナガトはイナズマの交代要員として待機。残りの水上用自立駆動兵装I D r i v e A W Sのみんなは万が一の事態に備えて待機ね」

中将の言葉に一同、敬礼。

その頃、そこから湾一つ挟んだ対岸にある軍病院では航暉がベッドでうなされていた。

「だ、大丈夫しれーかん……?」

「……麻酔が切れると、やっぱりつらいな」

航暉は笑って見せるがなかなか酷い笑みだった。それも当然、義手装着のために肩関節から先を切除し接続用のアダプタを体に埋め込んだ手術直後である。痛くないはずなのだ。

「どんな屈強な軍人でも泣き叫ぶって言われる手術でよく耐えていらつしやったと思いますよ」

発熱を抑えるための薬剤を投与した看護師が慈愛に満ちた視線を航暉に向け、その後雷に向けた。

「月刀さんは恵まれてますね。こんなに可愛い部下がいらつしやつて」

「わかりますか?……俺の自慢の部下ですよ」

航暉が笑ってそう言った。左手はシーツを握りしめている。

「絶対に、守るって決めた部下たちですよ……」

熱にうなされながらそんなことをつぶやく航暉。モニタリングされているバイタルが無機質に航暉の状況を伝える。体温は38度を超えていて汗が噴き出し、それでも笑って見せる。

「電も雷も睦月も如月も響も暁も、天龍も龍田も利根も筑摩も龍鳳も大鳳も弥生も望月も阿武隈も初霜も若葉も島風も……」

「しれーかん……」

雷はそのシーツを握った左手を両手で包む。限界まで強張った手をそっと包んだ。航暉はそれに気がついただろうか。

「絶対に、見捨てないって決めたんです」

そう呻くように言った航暉の手を握りしめる雷。その顔に笑みが浮かぶ。どこか泣きそうな笑みだ。

「ほんとに……いい上官を持ちましたね」

看護師の声に頷く雷。

「家族みたいな部隊なんです。しれーかんの部隊は、みんな仲良くて」「そうなんですか」

「もうしれーかんつてば……そう言うことはみんなに聞かせてあげなさいよ。あたしだけじゃなくてさあ」

航暉の手からふっと力が抜ける。鎮痛剤が効いてきたらしい。

「看護師さん。しれーかんのこの状態つてどれくらい続くんですか？」

「個人差はありますが、この後24時間がヤマです。それを超えてしまえば熱も下がりますし普通に動けるようになると思いますよ」

「わかりました」

「早く切り抜けられることを祈りましょう。祈りの効果は科学的にも実証されてますよ」

「はい……！」

雷はそう言つて手を握り続けた。そうしていると病室がノックされる。

「……邪魔したか？」

「杉田中佐！」

入ってきたのは褐色の肌の大男、杉田勝也中佐が入ってきた。国連海軍の制服を窮屈そうに着た彼を見て雷は少し頬を崩した。

「雷嬢、久しぶり……つて程でもないな。どうだ、月刀の様子は？」

「見ての通り……今寝たところ」

「あー、見事に発熱中か。そりやそうだな。術後どれくらいだ？」

「今三時間くらいです」

「それでこの落ち着きようなら上出来だろう」

そう言うと杉田は小さく笑った。

「義体化つてのはどうしてもマイクロマシンだけじゃできないからな。電脳化みたいにマイクロマシンの点滴で何とかできればいいんだがね」

そう言うと杉田はスツールを持ってきて雷の隣に腰掛けた。看護

師が「異常があつたら教えてくださいね」と出ていく。気を使つてくれらしい。

「杉田中佐は確か義体化してましたよね？」

「ああ、腰から下と左腕に左目、あと最近左耳も義体化した。継ぎ接ぎだらけのフランケンさ」

おどけてそう言うのと杉田は笑った。

「まっさか航暉が義体化するとは思ってなかったよ。生身を大切にする奴だから再生医療を選ぶもんだと思つてた」

「再生医療だと指揮官復帰が遅れるからって……」

「そっちの方が月刀らしいな」

再生医療を選ぶこともできたが、入院期間が半年を超えると聞いた段階で義手に即決したのだ。そんな長時間穴をあけるわけにはいかないと言つていた。

「ウェークのことは聞いた……辛かったな」

そう言つてわしわしと頭を撫でる杉田に雷は頷いた。

「気にしてやるなよ、月刀の負傷は選択の結果だ。腕一本と雷嬢の命を天秤にかけてお前さんの命を取つたんだ。それでお前さんが塞ぎこんじまつたら月刀が浮かばれねえ」

ごつい右手が雷の肩を叩いた。袖からは煙草のような線香のような煙の香りがした。

「男つてのは難儀な生き物だ。男ならだれでも一度はヒーローに憧れる。で、実際にそんな機会があつたら身の丈以上に頑張っちゃうのさ。だから怪我する。でもな、それでも後悔なんてしないんだよ。後悔なんてしないから頑張れちゃうのさ。何度でもね」

どこか気恥ずかしげに笑つた杉田が雷の方をみる。

「男は基本馬鹿だ。身の丈知らずで単純、特に可愛い女の子が絡むと誰だつてヒーローになりたがる。月刀も雷嬢のヒーローになりたかつたんだらうさ」

「そうなの……かな？」

「そうだろうよ。だから認めてやればいい。馬鹿な男の見栄を認めてやれ、それで月刀航暉つて男は報われる。男はそのために命だつて賭

けるんだ、馬鹿だから」

そう言いながらと雷をあやすように肩をぽんぽんと叩く。

「そういえば雷嬢、航暉の『腕』の仕様書って見れるか?」

「仕様書っていうと……これかしら?」

雷がデータを呼び出すとそれを確認する杉田。仕様書を見て彼が笑う。

「月岡コンツエルンに媚びてないところが何とも……ってこれほぼフルカスタムだなおい」

幾らかけるんだかと杉田が笑う。

「軍属決め込む気だな、こいつ。仕込み義手じゃねえか。仕込みは……液体ワイヤーのランチャーとかいつ使うんだ。空中戦する予定でもあるのかねえ」

ナイフを格納してるのはいかにも月刀らしいが、と付け加えた。

「ナイフがしれーかんらしい……?」

「あ、海大の伝説知らないのか。海大で大学校公認で教官をタコ殴りにできる行事があつてな。司令部にテロリストが侵入したって設定で屋内戦の訓練が一日だけあるんだ。これの参加は任意なんだが、相手は幹部候補生を新兵なみにシゴキ倒す訓練主任が日本陸上自衛軍から出向してきた陸戦隊を指揮してやってくるわけよ。陸戦なんて知らない生粋の海軍兵はあつという間に返り討ちに合う訳」

いかにも楽しそうに杉田は笑う。

「で、月刀が俺や高峰、笹原、渡井を誘って5人でチーム戦。月刀も俺も陸軍出身だし、高峰も結構戦える。消火栓とか事務机とか駆使して大乱闘になった。相手役の隊長を人質に取った航暉がナイフで少しずつ髪を切ってくるの。訓練教官が薄毛を気にしてんの知っててさ。あれは傑作だった」

杉田は懐かしそうに目を細め、頭を掻いた。

「で、訓練教官が投降するから髪だけは! って叫ぶのを高峰がレコーダーで録音して、みんなで大爆笑。勿論後で大目玉。でもその訓練自体は有効になった。その次の日に教官、髪を全部剃って来て、また大爆笑からの大目玉。今でもあの教官は月刀のこと恨んでるだろうな」

楽しそうな杉田が航暉を見て笑みを深くした。

「あの時から『五期の黒鳥』って呼ばれるようになったんだ。腕は立つが思考回路が吹っ飛んだ馬鹿集団って教官に言われたよ。あんときは不満タラタラだったけど、教官なりに俺たちを認めてくれたんだって今ならわかる。その後も高峰が銀蠅しようとしてミスって警報鳴らして機動隊呼び寄せたとか、スキンヘッドになった訓練主任から航暉が恨みの金的くらって涙目とか……おっと」

杉田がしまったといった顔をした。

「雷嬢、今のは月刀の弱みになっちまうから秘密な？ 他言無用で頼むぜ？」

それを聞いた雷が嘔き出した。

「杉田中佐わざと言ったでしょ？」

「さて、何の事だかな。……まあ、どうしてもこいつの手綱を握らなきゃいけない時は使え。俺から聞いたって言うなよ？」

「ええ、わかったわ」

それを聞いた杉田が雷の頭をもう一度撫でて立ち上がった。

「それじゃ、俺はそろそろ行くぞ、電嬢よろしく。……月刀を頼む」

「もちろん、この雷が責任をもって預かるわ！」

「そりゃ心強い。……目が覚めた時ぐらいは笑ってやれよ？ その方がきつと月刀も喜ぶ」

「そうするわ。ありがと」

「礼はいらねえ、月刀に返しな」

手を振って病室の外に出て扉を閉めるところらえるような笑い声でした。

「気障すぎて似合わんぞ、勝也」

「うるせえよ」

扉の脇に寄り掛かっていた武蔵が笑えば、ポケットに手を突っ込むようにして杉田は武蔵に帰るぞと言った。

「それにしても本本当なのか？ 屋内訓練の話、初めて聞いたぞ」

「あんだよ？ 俺を疑うのか？」

「いや、疑う訳じゃないさ。ただの確認だ」

姿勢を低く前へ——暗転。

子供の悲鳴——暗転。

ブラックリリーを踏み倒し前進——暗転。

泣きそうな顔でこちらを見る誰か——暗転。

銃を構え発砲——。

「——っ！」

焼けつくような痛みには飛び起きる。正確には飛び起きようとしてバランスを崩してベッドに再び倒れ込んだ。その衝撃に意識が飛びそうになる。

「司令官さん、まだ起きちゃダメなのです」

「大丈夫しれーかん？」

その声に直前の風景がフラッシュバックする。唇を噛む。切り替える。ここは横須賀だ。

「……すまん」

左腕で頭を押さえつけた。心拍数が高い。横で電子音がピーピーうるさい。ぱたぱたと音がして。ドアがノックされた。

「月刀さん、ご気分どうですか？」

「……最高ですね」

それを聞いた看護師が笑った。

「それはよかったです。とりあえず熱が高いようなので解熱剤を投与しますね」

看護師が注射をして去っていく。航暉は枕に頭を埋めると溜息をついた。

「大丈夫……？」

そう聞いてきた雷に航暉は笑って見せた。

「これぐらいでへばってたまるか」

「でもうなされてたのです……」

心配そうにそう言う電の頬に航暉の左手が触れた。汗で冷えた手だった。

「大丈夫さ、安心しな」

「……怖い夢でも見たの？」

雷に聞かれて航暉は苦笑いだ。どこか疲れ切った笑みだった。

「怖い夢と言えば、そうだな。そんな感じだ」

「大丈夫よ、雷も電もここにいるわ。安心して」

「……ああ、そうだな」

その声に航暉は目を閉じた。夢の光景が瞼の裏に張り付いている。

なぜ、あの光景が。ジャングルでの攻防が

なぜあの時の相手が電にすり替わる？

「……弱ったなあ」

「司令官さん？」

「何でもないよ」

航暉はそういつて力を抜いた。目を開ければ、本当にあの夢が現実に現れてしまいそうで、目を開けることはできなかつた。

PHASE 3

「初めまして、だな。急にすまない。千歳」

「いえ、私も時間が余って余って仕方ないですから」

ガラス越しの面会室。底にいるのは銀のような灰色のような髪色をした女性。高峰はそれがAV—CTO1千歳であることを確認して笑いかけた。

「そりゃそうか。ここで飼い殺し状態だもんな、辛いわな」

そう言うのと千歳の目線が落ちた。

「あの……電、DD—AKO4たちは？」

「あれ？ 情報行ってない？ もう中部太平洋第一作戦群の主力級になつたよ」

「え、その話、本当だったんですか？」

「なんなら写真あるぞ、青葉」

「はいっ！」

面会室の端で立っていた青葉がごそごそと何枚かプリントアウトした写真を並べる。月刀司令隷下の551への査察の時の写真やM1撤退戦後の写真、中部太平洋第一作戦群第三分遣隊の集合写真などを並べる。

「ああ……睦月ちゃんたちも戻ってきたんですね」

「そのの現指揮官、月刀航暉大佐は俺の同期だ。人柄は保証する。電なんかもうゾッコンだし、睦月も対潜要員としてスカウトが来てるらしい。仲良くやってるいいチームだ。この前なんか北方で深海棲艦の上位種の拿捕に成功、今、電は横須賀で国連海軍総合司令部直属で動いてる」

「なんだか、昔の電じゃないみたいですね」

「そうなのかい？ 俺は月刀大佐が指揮官になってからしか知らないからずっとそんな感じなんだが」

「戦いに出るのを怖がっているような……誰かを傷つけることをとて
も恐れている感じで、ずっとそんな感じだったんです」

「傷つけるのを恐れてるってのは今でもそうかもしれないな。でも、
強くなった。今度機会があれば連れてこよう」

「ありがとうございます。そこまでしてくれるってことは一つの交換
条件と言うことですかね？」

「うん？ そんなつもりはさらさらないんだけどね。とりあえず今か
らする質問について知ってることを教えてほしい」

そう言うのと千歳は困ったように笑った。

「私に知っていることであれば、ですが」

「大丈夫、元々あなただけに聞くつもりもない。たくさんの人に聞いて、
その上で判断する」

そう言うのと高峰は胸ポケットに差したペンの頭をいじった。

「さて、ライ麦計画というのに聞き覚えがあるかい？」

横須賀鎮守府付属海軍横須賀病院。

義体化や電脳化、再生医療などの外科手術でトップクラスの実績を
誇る病院は横須賀軍港の軍用地の端に位置する。15階建てという
大規模な建物は軍人だけでなく民間病院から回されてきた重篤患者
も含め常にパンク寸前の激務で業務を回していた。

その13階、軍専用フロアにある高官用個人病室1306号室には軍人にあまり見えない二人の少女の姿があった。

「ほら、しれーかん！ あーん！」

「だから左手使えるから……」

「あーん！」

半ば強引に病院食を口に突っ込まれた航暉はゆっくりと咀嚼する。熱も下がったし粥から白米になって最初の食事だ。料理が乗ったベットテーブルを挟んで航暉の膝にまたがるようにした雷がスプーンを手に航暉に甲斐甲斐しく料理を運ぶ。

「美味しい？」

そう笑顔で言われると航暉は首肯せざるを得ない。実際病院食としては美味しい部類に入るだろう。

「お姉ちゃんばかりずるいのです……」

それを上瞼だけを器用に閉じたじととした目線で見据えるのは電だ。働きづめだった電に休息をと言うことで久々のフルオフの一日なのだが、目の前でこんなことを繰り返されると精神的にくるものがあるのである。

「前は龍鳳さん、今回はお姉ちゃん……」

そう言うつぶやきで航暉はウエークの記憶がフラッシュバックする。11月1日事件とウエーク島基地所属の人員は呼んでいる、航暉にとっては悪夢以外の何者でもない事件だ。まあいろいろあったのであるが、本人以外にとっては些細なことなので、ここではあまり触れないでおく。まあ、いろいろあつて“司令官にあーん”はいろいろ禍根を残しているとだけ伝えておこう。

「それにしてもやっとな普通の食事だもんね、しれーかんもたいへんねえ」

「明日にはもう義手の装着、その後リハビリか。先は長いな。目の方はさつきと治ったからいいんだけどな」

そんなことを言いながら航暉は右肩をさする。あるべき手がそこがないというのは結構痛々しい。

そんな会話をしていると、コンコンとドアがノックされる。雷が飛

び上ってベッドから飛び降りた。

「どうぞ」

入ってきたのは国連軍の制服を着た男性だった。年は60くらいだろうが、若い頃は体を鍛えてたのだろうとなんとなく想像がつく体は定規でも淹れたかのようにピンと背が伸びておりどこか風格を感じるものだった。髪は上品なグレーアッシュ、オールバックに固めたその姿は年相応の気品にあふれていた。

その姿をみて、真つ先に反応したのは航暉だった。右手がないことを思い出して、慌てて左手を額に上げる。ほぼ同時に電も敬礼。雷はきよんととしていた。

「あなた、だれ？」

「自軍のトップぐらい覚えとけ！ 山本五六元帥だ。国連海軍極東方面隊の総合司令長官！」

航暉の小声の早口にそう言われ、雷が真つ青になりながら敬礼。

「左手で申し訳ありません。部下が大変失礼いたしました。山本元帥」

「いやなに、突然の訪問だったからな。驚かせてしまったようですまなかった。月刀大佐はマニラでの観艦式の時に通信した時以来かな？」

「はっ、その通りです。その節は大変お世話になりました」

「通信一つであの場を押さえられるのならばいくらでもするさ。君が恐縮する理由は無い」

凜と澄んだバリトンは場を一気に引き締めた。その後ろには何やらブリーフケースを持った女性秘書が控えている。

「この度は災難だったな、月刀大佐」

スツールに腰掛けながら山本はそう言った。

「いえ、私も軍属の身、死の覚悟はしております。腕一本で生き長らえたのですから僥倖というものでしょう。……海軍元帥御自ら護衛を付けずにいらっしやるとは、どのような要件でしょうか」

航暉がそう聞くと山本は朗らかに笑った。

「月刀大佐に少し用事があったな」

航暉は山本が「用事」と言ってきたことで、非公式かつ内密な話であると判断する。極東方面隊のトップが下りてくる以上、かなりの重要度だ。

「電、雷、人払いを」

「了解なのです」

「ああ、すまないがDD—AKO4電は残ってくれたまえ。君にも関係がある。DD—AKO3雷も話を聞いていなさい」

「え？ あ、はっ！ 了解なのです！」

「わかりました」

航暉はそれを聞いて目の前の元帥と視線を合わせる。

「……それで、御用事とはなんでしようか」

「この度のキスカ島難民輸送作戦、及び北方棲姫、ヒメの拿捕、大変ご苦勞であつた。その厳しい状況下で死者ゼロ、喪失艦ゼロで作戦を成功させたという功績は近年稀に見る快挙だと司令部は考えている。また高等種の深海棲艦を拿捕するというのは世界中のどの軍を見ても前例がないほどの戦果だ」

そう言うのと航暉はすまし顔を繕ったまま先を待った。横では電がどこか複雑そうな表情で元帥を見つめている。

「戦術中央コンピュータの試算によると、ヒメの拿捕によって戦争は最短であと3年、当初の試算より5年以上早く終結する可能性がある」と弾き出した。実際に何人を救ったかなど計算することに意味はないが、この戦果で億単位の市民が死を免れたかもしれない。それだけの功績を月刀大佐とその部隊が成したのだと極東方面隊司令部をはじめ、各上層部は認識している」

電はそこまで話が大きくなっているのかと驚いていた。

「まだ公表されていないが、この功績をたたえ、国連軍長官のドメック・ガルシア元帥より月刀航暉国連海軍大佐に殊勲十字章が贈られる」

航暉は眉を顰めた。

国連軍の殊勲十字章——国連軍人が得ることができる勲章の中では名誉勲章に次ぐ第二位の勲章であり、国連軍が国連議会を通さ

ずに送ることが出来る最上級の勲章でもある。

「大変失礼ですが、その評価を出すには時期尚早かと」

航暉はそう言って横に立つ電たちに目を向けた。

「それに、その戦果は電をはじめとした部下に送られるべきものだと私は考えています」

「司令官さん、それは……」

「私の戦果は彼女たちの声に耳を傾けた程度、それを戦果と認めるのならば、ですが」

電の声を押し切るようにして航暉はそう言った。

「……実に謙虚で日本人らしい意見だ。だが、国連軍には兵器として登録されている彼女たちに与える勲章は設定されていない。彼女たちの代表として受け取ってもらいたい」

航暉は笑ってそう言う山本のことをまじまじと見つめたまま何かを考えているようだった。

「拒否されると、推薦した私と極東方面隊のメンツが潰れてしまうから受け取ってもらえると助かる。……頼む。お願いできないか」

元帥自らに頭を下げられ航暉は焦った。航暉は頭を上げてもらい、「わかりましたっ」と半ば叫ぶように言う。

「受勲するほどの格も戦果もないとは思いますが、作戦参加者の代表として受け取らせていただきます」

「正式な手続きに時間がかかるが4月の半期末には授賞式があるはずだ。とりあえずはこのまま話を進める。……そしてもう一つ、こちらが本題になる。DD-AK04、電、君にも関わる話だ」

「……ヒメ事案、ですね？」

航暉が声のトーンを落として聞き返した。山本が頷く。

「事態は急速に変化している。現在の軍組織では対処しきれない事態が今後予想される」

「予想されるのではなく、そういう戦略に切り替えるのでは？」

「月刀大佐は手厳しいね。その通りだ」

そう言うと山本は後ろで控えていた秘書を目で呼ぶと、ブリーフケースからホロ投影機を取り出した。

「本日、国連海軍総合司令部より第50太平洋即応打撃群の新設が認可された」

「第50……」

「……太平洋即応打撃群？」

電と雷が頭の上にはてなを浮かべる。航暉が呻くように口を開いた。

「十桁目ゼロ番台……特設艦隊を創設する気ですか？」

部隊名の数字には意味がある。たとえば電の所属、第538水雷戦隊。百の位の5は極東方面隊——太平洋西側とその付属海を担当する艦隊群の所属であることを、十の位は艦隊所属、中部太平洋艦隊の中で攻勢部隊たる第一作戦群に所属することを、一の位は戦隊番号を示す。常設されているのは510番台の北方艦隊、520番台西部太平洋艦隊、530番台中部太平洋艦隊、540番台の南方艦隊だ。そのほかに550から580番台はそれぞれの艦隊の第二作戦群に、590番台は潜水艦隊に割り振られる。それで全てのはずだった。

しかし今言われた第50太平洋即応打撃群はそのどれにも対応しない、500番台の部隊となる。

「極東方面隊総司令部直属、最優先ラインの作戦部隊だ。海軍だけでなく、空軍、陸軍の作戦ユニットも参加する統合作戦群。真の意味での攻勢部隊として設立される」

そう言うのとホロスクリーンに組織図などの部隊概要が現れる。

「作戦カテゴリーIV以上の重要作戦に投入される海域の枠にとらわれない精鋭部隊だ。権限は既存艦隊と同等、作戦行動中は兵站・情報・支援などあらゆる面において最優先で処理されるという面では既存艦隊よりも上位としてあつかわれる」

「……海域防衛に関わらない攻勢組織の設立。それによる海域の奪還及び深海棲艦の制圧を主任務とする、そんなことですか？」

「近いようで遠いな。正確には深海棲艦への武力交渉の実働部隊といった所だ」

そう言うのと山本が手を組んだ。

「ヒメの確保によって人類は深海棲艦と交渉するという可能性を得

た。だが、交渉をするためには相手には交渉のテーブルについてくれないければ話ができない。だから、相手のトップを会議室まで連れてくる。それが新設部隊の目標だ」

「なるほど、そうなるとその部隊は深海棲艦との接触がこれまで以上に多くなる。もちろんヒメの情報も必要になる。できることなら平和的に交渉、無理なら実力行使で連れてこい。そういうことですか？」

「その通りだ」

山本元帥はそう言って笑って見せる。

「だから、電をその部隊にというお話ですか」

「正確には打撃群旗艦を任せるつもりだ」

「わ、わたしが……艦隊旗艦つなの、ですっ!？」

それに頷く元帥に航暉も雷電姉妹も言葉を失った。

「それって……どの艦隊旗艦よりも優先順位上ってことですよね？」

「その通りだよ、DD—AK03雷」

「あの長門さんよりも、ですよね？」

「北方艦隊旗艦BB—NT01長門と平時は同等の扱いだが、作戦実施中に相反する要請が出された場合は打撃群旗艦の要請が優先的に実施される」

雷の質問にさらつと返って来て、雷はどこかふらふらと壁にもたれた。

「電が……連合艦隊旗艦より上になるなんて……」

件の電は状況が読みこめていないのか、口をパクパクとさせている。

「事態を飲み込んでもらえたようで何よりだ。ヒメの手綱を握れるのは現状DD—AK04電のみだ。勿論、深海棲艦とのネゴシエーターを彼女ひとりに任せるつもりもないし、個人と個人の関係性に世界を預けるつもりもない。だが、それを待ってもいられない状況だ」

そう言うとホロが切り替わる。暗闇の中で何かが燃えている映像が映し出された。

「二昨日の映像だ。ブラジリア連合の軍港、サントスが急襲を受けて

壊滅した。死者最低で3400、軽症者まで含めると万単位になると見られている」

電が口許を覆うようにしていた。航暉はその映像を越しに山本を見た。

「深海棲艦との戦いで唯一拮抗できているのは極東方面隊だけだ。それでも島嶼奪還まで行き着いていない。このままでは深海棲艦との交渉がまとまる前にどこかの方面隊が……壊滅する。今危ないのは南北アメリカ方面隊だ。南アメリカの民間人をまとめて避難させる計画も始動したとも聞く。もつとも、5億人規模の難民なんて、今更受け入れられるキャパシティを持つ地域はない。逃げる場所なんてないが、南北アメリカ方面隊は南アメリカまでカバーしきれぬ戦力を、もう持っていない。後1年もしないうちに南アメリカを放棄する決断を迫られる可能性もある」

だから、と山本は言つて、電を見た。

「和平交渉を急ぐしかない。太平洋一帯で停戦条約が発効すれば南北アメリカ方面隊は大西洋に専念できる。その交渉をする相手を是が非でも交渉テーブルに引き出さなければもう後がないんだ。そのためには、DD-AK04電、君の力が必要だ」

沈黙が下りる。誰もが次の言葉を探していた。

「……いなづまには、少し荷が重いのです」

そうつぶやくように言った。

「今でも、結構いっぱいはいいのです。自分の一言が、世界を壊しちゃうかもしれないんだって結構いっぱいはいいのですよ?」

震えた声は航暉の耳朵を打った。

「司令官さん」

「……ああ、なんだ?」

航暉は電の方を見る。電は今にも崩れ落ちそうなほどに震えていた。

「私に、出来るっていつてくれませんか? いなづまなら大丈夫だって言ってくれませんか?」

そう言つて電は航暉の目を見返した。

「私は、この世界が平和な世界だといいなって、思ってます。いまはそうじゃなくて戦時中だつてもわかってます。だから、早く平時にしたいのです。それが私にできるかもしれないって思うと、私はそれをすべきだと思うのです」

元帥に目で詫びてから、航暉はベッドから起き上がる、まだ少しふらつくが電の前まで行くと片手でそつと肩を抱いた。

「大丈夫だ、電。お前ひとりで戦ってるわけじゃない。お前ひとりが頑張つてどうにかなり問題でもない。だから、無理するな。怖いままでいろ、辛い時はつらいって言え、出来ない時はできないって言え」

航暉は笑つて見せる。

「なあ、電。最初にウェーク島基地に俺が赴任した時、ルール作ったの覚えてるか？」

ゆつくり頷く電。

「ちゃんと周りに耳を傾け、自分の意見も言つて、チームとして乗り越えていく。黙っていたらだれもわからない。聞かなければ理解もできない。それじゃあ、相手を疑つて戦うしかできない。だからあんなルールを作ろうつて言つたんだ。あの時の電は、自分の意見を言わなそうだったからね」

航暉は電の肩を叩いた。

「でももう大丈夫だろう。電、お前が行きたいなら、行つて来い。電の実力は俺が保証する。お前は全くもって手放すのが惜しいぐらいの実力者だ」

「……ありがとう、なのです」

そう言つて背中を押した後航暉は振り返つた。雷は彼の顔にどこか悪戯じみた笑みが浮かんでいるのを見る。

「……つて感動的に終わればいいんですけど、その指揮官は誰を想定しています？」

航暉は山本にそう言つて笑つた。

「さすが五期の黒鳥筆頭だと思えばいいかね？」

「この話、電には命令と言うことで配置転換命令書を一枚交付するだけで済みます。そこに私にそれを説明する必要はない。ですよね？」

山本が笑った。

「月刀航暉君、君には第50太平洋即応打撃群の前線指揮官を務めてもらう。来年の4月1日の部隊発足を持って月刀大佐は一階級特進、准将として任についてももらうことになる予定だ」

それを聞いて電は航暉の顔を見上げた。どこか寂しそうな、嬉しそうな複雑な表情だった。

「そのための殊勲十字章の受勲もあるんでしよう?」

「この部隊は深海棲艦との交渉という任を帯びる、だからこそ過去に接触した経験を持ち、かつ、説得に成功した経験者を配置する必要がある。DD-AK04電はそれを成し、それを管制したのは月刀大佐だ。これからの活躍を期待するよ」

そう言うと山本は立ち上がる。

「私も忙しい身でね、そろそろいかないとならん。……正式発表があるまではくれぐれも他言無用で頼むよ、月刀大佐。水上用自律駆動兵装の配置などで意見を聞くこともあると思う、その時は協力を期待する」

「はっ!」

航暉は左腕の敬礼で山本を見送った。

「……まさかこんなことになるとはなあ」

「……なのです」

「……まったく、台風みたいに過ぎ去って行ったわね」

残された三人がへたり込む。元帥の前で極度の緊張を強いられた上に内容が内容だった。さすがに疲弊する。

「とりあえずはこれからよろしくってことになるのかな?」

「なのですね……」

今は12月初頭で4月頭に部隊設立なので、少なくともあと4カ月にはウエーク島基地の司令官を続投することがほぼ確定したのである。

「それでも、四月までかあ……」

「ウエーク島基地司令も1年弱しかやらない訳か、癒着を防ぐために頻繁に異動するといえ短いな」

「というよりその期間で中佐から准将とか聞いたことないわよ?」

雷の声に航暉は頭を掻いた。

「俺もびつくりだよ。昇進じゃなくて特進扱いで無理矢理階級上げる感じだもんな」

「それだけ司令官が優秀ってことなのです」

「部下に恵まれたからだと思うがなあ……」

そんなことないのですっ！という電が航暉に半ば抱きつくように寄り添った。それを見て雷は僅かに青筋を立てた。

航暉の異動が確定した以上、新設部隊に異動にならない限り航暉の部下ではいられない。現状確定しているのは電のみ。

なんとなく、腹立たしい。

「しれーかーん！ ご飯の途中だったもんね、お腹すいてるでしょ！

この雷が食べさせてあげるわ！」

「え、ちよ、なにいきなり……ふっ！」

「お姉ちゃん！ そんなにいつぱいご飯詰めたら窒息しちゃうのです！」

わいわいと昼下がりが過ぎていく。

騒いだことで看護師に怒られながら、電も雷も思うのだ。

———こんな日常が続けばいいのに。

「……なんでこんなに硬くプロテクトかけてあるんだ？」

高峰は自分のデスクで天井を仰いでいた。

「お疲れですっ」

「あ、青葉、どうだった？」

「ダメですねー。合田直樹元中將の線も切れましたー」

戻ってきた青葉を逆さに見ながらそんなことを聞く。

「……こうなると航暉の白を証明した方が早い気がするなあ」

高峰は隣に座った青葉にコードを差し出した。青葉はそれを受けとってうなじに差し込む。

「……状況を整理しよう」

有線による電腦通信を開始する。

〈ライ麦計画——Program R.Y.E. は第三次世界大戦の間に発足したプロジェクトの一つで日本国が行った予備青年士官教育プログラムと同一〉

〈で、それ責任者の一人は合田直樹元中將で、風見元大佐と交友があった。……で、そのことは千歳さんの証言と一致〉

〈千歳は風見元大佐が酒に酔った時にライ麦だけはまずかつたと言っていたのを聞いている〉

青葉がそれを聞いて腕を組んだ。

〈予備青年士官教育プログラム自体は深海棲艦登場後に凍結されたりしいものの、その全貌は不明ですよ。それって75年……〉

〈76年だ。2076年、国連海軍が水上用自立駆動兵装の運用を始めて各国軍が縮小を迫られたころさ。予算もなくなったから凍結つてところだろうな〉

高峰は通信をしながらキーを叩く。データの閲覧記録を探っている。

〈怪しいのは怪しいよな。教育隊のプログラムになぜ防衛情報総司令部が絡んでるんだ？〉

〈第三次世界大戦期といえば日本はいろんなところにPKFとして派

遣われてたんでしよう？ その時のことを青葉は知りませんが、その時の士官の数って足りてたんですか？

〈不足気味だったのは確かだ。日雇い士官なんて呼ばれる奴らも出ててな。その頃から日本PKFの質が落ちたって言われるようになった〉

〈青葉の勘なんですけど……非公式の臨時士官の教育とかをやった計画なんじゃないですか？〉

〈あり得るのはそのあたりなんだけど、なんか引つかかるんだよなあ〉

〈どのあたりがです？〉

〈ここまで高いプロテクトを張る必要がない〉

高峰はそう言って目を細めた。

〈反乱因子の炙り出しのための疑似餌の可能性も考えてたが、こりやマジモン臭いぞ〉

〈えっと……？〉

〈千歳の証言は電子情報として共有されない。その整合性を揃えての偽情報を用意する必要はないだろう？〉

かなり凶悪な防壁を揃えているものの、それがかなり巧妙に秘匿されていることもその可能性を強くした。

〈判断するには情報が足りんな。千歳との面会から一週間かけてこれだけしか集まらないとは思ってなかった〉

高峰はそう言うと言ったと首を回した、コードが揺れる。

〈中路中将の方から探るのがいいかもな。古鷹とは仲良かったし古鷹なら何かきいてるかもしれない〉

〈あー、やっぱりそうなのちやいますか〉

青葉が困ったような声を出す。

〈どうした〉

〈いま古鷹に中路中将の話はタブーなんです。電腦自殺をした後からかなり参ってて、下手するとパニック状態になっちゃうんです〉

〈……ほかに聞けそうなのは、赤城とかか？〉

〈中路中将ずっと補佐官古鷹で固定してたんであんまり期待しない方が〉

「へだよなあ……それに中路中將が口を滑らせてるとは思えないんだよな」

「へですよねえ……」

「へとりあえずもう一度千歳のところ行ってみるか。電もつれていけるといいなあ」

そんなことを言っただけで笑っていると。高峰の電腦に通知が届く。

「ん？」

電腦通信を解除、ウイルス入りのメッセージのことを考えて一度通信を完全にオフ、ウイルススキャン、レスポンスノーマル。通信が切れたことで不審に思った青葉が顔を覗き込んできた。

「高峰さん？」

「カズ宛てのメッセージのBCC？」

ブラインドカーボンコピーのメッセージに高峰は眉を顰める。タイトルはブランクのみで何も記されていないかった。

「B—P? なんだから？」

そう呟いた直後低く、ずんと揺れた。数瞬遅れて轟くような爆音。「な、なに!？」

青葉の声を無視して椅子を蹴倒して立ち上がった高峰が窓に張り付く。

「……くそっ、やられた!」

どす黒い煙が上がっている建物が一つ。

高峰の記憶に間違いがなければあの建物は——海軍横須賀病院。

直後に全員に緊急メッセージが送付された。

横須賀病院13階にて火災発生。付近職員は避難してください。

高峰が階段へ走る、その後ろを青葉が慌てて追いかける。

「高峰さん、どこ行く気ですか!？」

「あれがただの火災なわけあるか?! 爆破テロだ! しかもその標的は十中八九、月刀航暉だ!」

外に飛び出した高峰が見上げたビルでは轟々と炎が猛っていた。助けに行くことなど不可能なのは遠目にもわかっていた。

「生きてろよ、馬鹿野郎」

高峰の噛み殺した叫びは炎の音にかき消された。

00000100 ヨコスカ・アツプサイドダウン
PHASE 4

電が緊急呼び出しで病院に駆け付けた時にはもう火は僅かな燻りを残すまでになっていた。階段を13階まで駆け上る。

「お嬢ちゃん！ この先は軍関係者以外立ち入り禁止だ！」

「その軍関係者なのです！ DD-AK04電、データベースと照合してください！」

10階で警備兵に呼び止められる。相手が網膜スキャンをかざす数秒がもどかしい。

「は、はっ！ 失礼しました！ 電特務官！」

特務官として大尉相当の権限を持っていることに感謝して怪談を駆け上がった。13階は黄色いテープで封鎖されていたが、それをくぐって中に入る。揮発したオイルの匂いが鼻を衝く。

「電、来たか」

「高峰中佐、司令官さんは!? 月刀司令官は無事なのです!?」

「電落ち着け、ここで騒いでも状況は変わらん！」

その声に、電は最悪の状況を覚悟する。

「……司令官さんは、無事なのですか？」

高峰が立ち上がって、おいで、といった。

「爆発は12月18日、今日の13時34分、爆心地は1306号室、カズの部屋のと真ん中だ。現状確認できているのは死者6名、重傷者23名、軽傷者82名、身元不明のアンドロイドの残骸が一つに行方不明者1+1だ」

「1+1?」

電が聞き返す。その頃には1306号室の前についていた。部屋全部が焼けこげ、窓枠があったであろう位置にぽっかりと大穴が空いていた。

「行方不明者は月刀航暉大佐、及び一緒にいたはずのDD―AK03、雷だ。二人の死体がどこにもない」

「それって……!」

「おそらく、まだ生きてる。どこに姿をくらませてるのかわからないがな」

高峰はそう言つて部屋の壁に突き刺さった破片を見る。

「生きてるなら、司令官さんから連絡があるかもしれないのです」

「いや……おそらくしばらくは無いな」

「どうしてなのでしょう?」

「これ見ろ」

突き刺さった破片を高峰が指さした。高峰はゴーグルのようなアイウェアを付けると、QRSプラグを電に渡す。

「これって……アンドロイドのパーツ?」

「だな。で、このパーツの素材を解析すると」

電に高峰の視界が流れ込んでくる。アイウェアはどうやら物質の解析に使うアイテムらしい。

「平菱インダストリアル製の空間把握用センサーの一部……?」

「破損が激しいがな。爆心に近いところにあっただらう。で、これを搭載しているのは、表向きには一つしかねえんだよ」

「それって……」

「水上用自律駆動兵装、それも平菱インダストリアル社の軽巡クラス以下のロットに限られる」

高峰はそう言つと眉を顰めた。

「特にこのタイプは……」

「……冗談はよしてくれよ」

どこかのバーを模した部屋で天龍が頭を抱えていた。特調六課の専用チャットルーム、ワードルームと呼ばれるその部屋には天龍だけでなく、龍田や雷電姉妹を除く特Ⅲ型駆逐艦や睦月たちが揃っていた。……航暉がまだ中佐だったころの第551水雷戦隊のメンツである。

「おれはその時チンクリンたちの訓練中だ、アリバイもあるし、そのセンサーの持ち主が俺だったとしてなんで俺が生きてるんだよ」

喧嘩腰というよりは困り切った感じで天龍がそう言った。

「ウェーク島基地から爆破できるなんて考えたりしてないよ。って言うよりウェーク島基地の面々に動機がない」

高峰はそう言った。季節外れの夏服のアバターが困ったように笑っていたがすぐに表情を引き締めた。

「状況を整理する。というより君たちには知っておいてもらった方がいいだろうと思うからできるだけわかりやすく説明するつもりだ。質問があったらしてくれ」

高峰はテーブルを叩き、そこに画像を表示した。

「13時29分、爆発5分前、犯人と思しき人物が病院の正面ロビーを通過。この様子が監視カメラに残っているんだが」

「見れば見るほど天龍ちゃんにそっくりねえ……」

龍田がそう言った。その映像が拡大され骨格表示に切り替わる。

「天龍の骨格パターンと照合したところ適合率96.9%、一般人なら同一人物と断定できる。だが……」

その骨格モデルが動き出す。それを一通り見た後、高峰が天龍を見た。

「天龍、そこを歩いてみてくれ」

「お、おう……」

言われた通りに歩くと、高峰は、うんOKと言ってまた座るように促した。

「何をしたかったんだ？」

「まあ見てなってる」

高峰がテーブルをショットグラスで叩くと天龍が歩いた位置に二人の天龍が投影される。

「手前が病院の監視カメラに映っていた犯人、奥が天龍だ。動かすぞ」
そう言うと二人の天龍が歩く。一定距離を歩いていくのを見た後天龍が口を開いた。

「……何がしたかったんだ？」

「犯人の方が足が重い」

「え？」

指摘したのは響だった。言われて暁が映像に目を凝らす。

「響ちゃん正解。足の上げ幅が犯人の方が少ない」

そう言うと二人のホロを重ねて表示する。確かに足の上げ方が犯人の方が重い。

「13階まで向かうエレベーターの感圧板にデータが残ってた。犯人の体重は230キロ前後だ。勿論艤装なし」

ぐるんと全員の視線が天龍に向いた。

「お前らふざけんなよ。俺がそんなデブに見えるかつ!？」

「犯人は体の中に爆弾詰め込んでるんだ。外殻は天龍のモデルを使っているものの、中身はおそらく爆薬と起爆装置とそれに必要なコンピュータが詰まってるだけの張りぼてだ」

「そんな兵器があるんですか……?」

睦月がどこか恐怖が混じった声でそういった。

「自走爆弾……第三次世界大戦で使われた兵器だ。おそらくこれはARB-00451の派生モデルだろうな。女性型義体に仕込むことを想定した奴だ。製造元は平菱インダストリアル、とつくの昔に終了しているがね」

高峰はそう言つて、時間を進めよう、といった。

「爆発―2.5秒の時点でカズへの最後の電脳通信。発信者不明、メッセージはB―Pとだけあった。その8秒後の―1.7秒、犯人が1306号室、カズの入院している部屋に進入、これ以降の画像はないが、5秒前後にパンパンと何かが破裂する音を聞いた人がいる。あと爆発直前に窓ガラスが割れるような音がしたという人もいる」

「破裂音……?」

おうむ返しの声は如月だ。

「現場から2.2口径の弾頭が見つかった。数は3つ、銃はベレッタの950BSジェットファイア、所有者は月刀航暉で間違いない。おそらく、カズが撃った。二発が壁に、一発は犯人の脳殻ケースに突き刺さって止まっていた」

「撃つたつてことは……司令官は危ないつて判つてたつてことよね?」

「そうなる」

高峰はそう言つた。

「ここから予想するに、カズは危ないと気がついてた。で、隠し持つてた2.2口径で抵抗、もつとも戦闘用ガイノイド相手に2.2口径なんて意味なかつただろう。で、雷連れて窓から飛び降りて逃走」

「窓からつて……1.3階だぞ?」

「カズの義手に仕込みのワイヤーランチャーがついてる。おそらくはそれで地面に下りたんだろう。義手の接続から1週間たつてないつて言うのによくやる」

胡散臭げな目を向けていた天龍が口を開く。

「そのワイヤーは見つかったのか?」

「ああ、現場の足元に落ちてた。長さ的には足りないが、おそらくはとりあえず落下しながらワイヤーを撃ちこんでそれで降下つてところかな」

「つてことは少なくとも提督は外に出てるつてことだにやあ」

睦月の声に暁が首を横に振つた。

「ほぼ間違いなく雷も一緒ね、司令官が雷を置いていくとは思えない

もの」

「俺も同意見だ。カズが艦娘を置いてひとり逃亡なんてシナリオは想像がつかんし、雷の体のパーツが何一つ見つからないってのもそういうことだろうと思う」

「……少し質問いいかなあ」

龍田がニコニコ笑顔で手を上げた。

「月刀司令の死体はまだ上がってないし、雷ちゃんも行方不明、でもそれでも司令と雷ちゃんが一緒にいる線が濃厚なのよねー？」

「そうだ」

「雷ちゃんの戦術リンクは使えないのかしら？ リンクを使えば少なくとも生きてるかどうかはわかるんじゃないかなあ？」

「雷の電腦通信は軍の方でロックがかけてある。電腦に不法侵入を受けた後だからな。で、パッチの作成で安全が確保されるまでロック状態が続いている」

「今も、か……」

響の苦々しい声が響いた。

「それに自走爆弾は軍装備で嚴重に管理されているはずだ。それを使ってきた以上軍の方が怪しい。カズなら、一度姿をくらませるはず。そして、カズにも協力者がいる」

「パトロン？」

暁が聞き返した。

「軍の敷地内でカズが見当たらない以上、軍の敷地からは脱出して見ると見るべきだろう。病院の爆発でテロ騒ぎの中、カズひとりで脱出できるとは到底思えない。鎮守府の門番は馬鹿じゃない。犯人を逃がすまいと監視を強化しているんだ。それでもカズは軍敷地から忽然と姿を消した」

それに、と高峰は続ける。

「俺にBCCで送られてきたメッセージ、B―Pってやつだな。あれを送ってきた奴がいる」

高峰が腕を組む。

「B―Pと略される人物や標語、格言などを調べてみるとそれらしい

もんにあたった」

「それらしいというと?」

「ロバート・ベーデンIIパウエル卿……B—Pと呼ばれたボーイスカウトの創設者だ」

「ボーイスカウト?」

「その組織の標語は備える常に。……一種の警告と見て間違いないだろう。そして。俺とカズのことを知っている。どこの誰だか知らないがな」

高峰がゆつくりと腕をほどき、周囲を見回した。

「この警告は今回のテロだけに当てたものじゃない。おそらくはまだ先があるんだ。だから気を抜くなど言っている。カズと雷の死体が上がってこない以上はこの先も続く可能性がある。カズの関係者の誰がいつ標的になってもおかしくない。全員に警戒をさせてくれ」
「了解した」

天龍が代表して答え、その後不安げな表情を浮かべた。

「電、大丈夫か?」

「……かなりヤバイ、つてのが正直なところかな。軍上層部が血眼になってあたりを搜索しているがまだカズは見つかってない」

高峰はそう言うのと溜息をついた。

「カズを見つけるのが先か……」

「……電が精神的に限界を迎えるのが先か、かい?」

響の声に高峰はこめかみを押さえた。

「タイミング的には最悪なんだ。ここまで極端に相手が動いたのにはおそらく新設部隊の指揮官にカズが内定したことがある」

「新部隊? 初耳だぞ」

「初めて言ったから当然。ヒメの情報を元に動く深海棲艦との交渉にあたる専門チーム、第50太平洋即応打撃群。その実働部隊のトップにカズ、旗艦に電、大和型、金剛型、一航戦は参戦確定。それに二個水雷戦隊、空軍に陸軍。場合によっては欧州や南北アメリカ方面隊からの派遣隊を巻き込んだ超大型の特務部隊だ。衝撃的だろう?」

「……なんというか、ぼくのかんがえたさいきょうのかんたい」つて

感じだな」

「で、こんなことになるのと困るのは今権力の椅子に座ってるお年寄りとか軍需産業で栄えてる経済界の皆様とか、あとカズもなんだか黒い事情に関わってたっぽいしなあ、ヒメの登場が与えた衝撃でただでさえ目を付けられてたカズが一気に袋叩きにあう状況になったわけ」

高峰は頭が痛いよとぼやく。

「……で、その発端がヒメ、でヒメを助けたいって言ったのは電で、電は私のせいで司令官さんがって見当はずれの自己嫌悪がノンストップ。こういう時に抑えになるようにって航暉もまとめて横須賀に呼んだつもりなんだろうが、一気に悪化しやがった。俺の言葉じゃ止まりもしねえ」

「おいおい、どうするつもりだ?」

「ほんとどうしようかねえ。……天龍」

「あんだよ」

高峰の目が細められた、

「お前らしき人影が写ってたから観察処分になる。というより重要参考人扱い……まあ、正確には物証扱いなんだろうが、まあそんな感じになる」

「はあ? だから関わってないってわかってるだろ?」

「顔の骨格まで含めたデータがいつ盗まれたんだと思う? ……そこからへんの確認をしたいから少し横須賀まで来てくれ」

「……俺は文字通りの無実なんだが?」

「ならこっちで無実を証明してくれ。すぐに手配書を回す。来い」

それを聞いた天龍が肩を竦めた。

「あまり下がってると戦いの勘が鈍る。迅速に頼むよ?」

「それは、調査次第と言うことで」

それを聞いた龍田が笑った。

「それで、高峰中佐は月刀大佐がどこに消えたのかのあたりがついてるのかしら?」

「少しは、ね。とりあえず探ってみるよ」

そう言うのと高峰が場を畳んだ。天龍たちの意識はあつという間に

ウエーク島基地に引き戻される。

「……な、なによあの態度！ 天龍さんを犯人扱いして！ 物証拠い
だくとかどういうつもりよ！」

暁が腕を振って抗議する。それを見た天龍が噴き出した。

「わかつてないな、ちんちくりん」

「な、なによっ！」

「ああすれば、俺は証拠品として横須賀に送られる。送られた先にお
そらく高峰中佐がいるはずだ、で、高峰中佐が電の様子を細かく把握
していると言うことは、電は高峰中佐の監視下にある。さすがにここ
まで言えばわかるだろ？」

「え？ どゆこと？」

「おい大丈夫かバカツキ。要するにだな、俺に電を怒りに来いってこ
とだろう」

「バカツキじゃないっ！ ……って、え？」

高峰は一度ウエーク島基地の監査に来たこともあるし、キスカ撤退
戦に指揮官のひとりとして参加している。天龍が電に大きな影響を
与えていることを知っているはずだ。ヒメとの交渉の時も背中を
真っ先に押したのは天龍だ。それを見ていれば自然とこの人選にな
るのだろう。龍田はそう思いながら天龍の様子を眺める。天龍が
笑って暁の頭を乱雑に撫でていた。

「ちゃんとお前らの分も怒ってくるし、とりあえず電を再起動させて
くるさ」

「あ、頭をなでなでしないでよーっ！」

「ちんちくりんにはこれぐらいで十分だ、ちんちくりん」

「ちんちくりんちんちくりん言うなーっ！」

そんなやり取りを見ながら龍田は笑顔の裏で願う。

雷ちゃん、大佐、無事でいてね。

「冗談、だろ……!」

浜地は首筋のQRSプラグを引き抜いて荒い息を抑え込もうと必死になった。

「恨むぞ、笹原中佐。こういうことをなんで早く言わないんだよ……」
浜地はそう言って天井を仰いだ。暗く沈んだ天井はどこか不気味に彼を包んでいる。

「もし、この情報が本当だったとしたら……、国連軍は……」
今の地位を無数の屍の上に築いたことになる。

そして、それに浜地も加担していたことになる。

「くっそ、情報が整理しきれない、とりあえず誰かに……」

誰かに、誰に？

誰に話せばいい？

鳳翔？ダメだ。 皐月？もっと駄目だ。 艦娘たちに話すわけにはいかない、あの子たちは優しすぎる。こんなことを相談するわけにはいかない。自分を信じ、国連を信じて戦っているみんなにこれを伝えるのは、あまりに残酷すぎる。

「……駄目だ、話せない。下手したら戦術核を超える危険物じゃねえかこの情報」

そう言った浜地はQRSプラグを繋ごうとして動きを止めた。

「……手を止めて頂けますかな、浜地中佐」

背中に何かが当てられている。小さい何か。

「そう言うおたくはどちら様？」

動きを止めたまま視線だけを動かした、黒色の迷彩、室内迷彩が見えた。心拍数が一気に上がっていく。

「当ててみるかい？」

「DIH? EPCO? それともCIRO?」

あまりに早い鼓動に笑い出しそうだった。それでも頭を回していく。後ろの感触はおそらく――サブレッサー減音器。

さあね、と男の声が答える。

「……いや、どれもないね、たぶん」

「ほう？」

「国連海軍極東方面隊特調三課分遣隊……強行偵察班」

「大正解。おめでとう。軍中枢への無料招待券をプレゼントだ。ただで旅行させてあげよう」

垂れた汗が床にはねた。QRSプラグを手に浜地が一気に振り返る。

抑制された銃声が、跳ねる。

0000101 ヨコスカ・アツプサイドダウン
PHASE5

ごめんな、すぐ帰ってくるから。

彼はそう言っただけで去って行った。行かないでと言いたかったが涙で詰まって声が出ない。離しちゃだめだと思うのに、その手はするりと彼女の手の中から抜けて去っていく。

ちゃんといい子にしてろよ？

やだ、いけないで。置いてかないで。

そう叫びたいのに叫べないまま視線の先で彼女が知っているよりも幼さが残る彼は三本指で敬礼をして背を向ける。

「——司令官さんっ！」

電が飛び起きる。大丈夫か？と声がしてそちらの方を見ると男の人の背中が見えた。デスクに向かって何かを書きつけているらしい。

「高峰中佐、私……」

「ヒメ事案対策本部に行く途中でふらついてたんだ。余計なおせっかいかと思ったが休養扱いにさせてもらった。少しは休め」

「どれくらい、寝てました……？」

「今は1134、ざっと4時間だ」

ソファで寝かされていたらしい、膝に乗っている毛布を抱く。

「……カズの夢かい？」

「はい……」

電は毛布を抱いて目を閉じた。

「……司令官さんが私を置いていっちゃやう夢でした。……変な感じなんです」

高峰が振り返った。その顔はどこか不安そうだ。

「どこか、懐かしいような、変な感じなのです……。時々、司令官さんが本当の家族だったらいのについて思うこともあるのです。夢だと、司令官さんが本当のお兄さんみたいで……。歯止めが利かなくなりそうなんです」

それを聞いて高峰は机に向き直った。

「大丈夫だ、カズは帰ってくる。必ず」

「……司令官さんからの連絡ってないんですよね？」

「ああ、今のところはね」

「軍以外に連絡を取りそうなどころとかありませんか？」

「……カズが連絡とるかなあ」

高峰はそういいながらどこか焦りを感じていた。

電の限界が近い。

天龍が横須賀に来れるまであと5日、その間に何事もなければいいがとただ願う。それぐらいしかできないのがもどかしい。

「軍以外だと……司令官さんのご家族とか」

「ないな。カズは月刀家の相続権を一切放棄してる。カズが今更月刀の血を頼ると思えん」

「でも、双子の妹さんとは仲が良かったとも聞きますし、執事の方なら連絡が言っているかも……」

「——今なんていった？」

聞き返すと電の肩が一瞬ピクリと跳ねた。高峰も自分が気が立っていることを知る。

「えっと……執事の方なら」

「その前だ！」

「……双子の妹さんとは仲が良かった、の部分ですか？」

それを聞いた高峰が書類を漁る。一枚の書類を掴んで電に見せた。

「月刀家に双子の姉妹なんて存在しないんだ」

「え？」

「カズは次男、その下は妹一人でおしまいのはずだ」

「じゃ、じゃあ、司令官さんが言ってた妹さんって……?」

高峰が頭を掻く。デスクのジャックにQRSプラグを差し込んだ。電脳がネットにつながる。

「カズ自身も怪しくなってきたなこりや」

「何をするので……?」

「月刀家について調べる。——手伝ってくれるかい?」

「わ、わかったのです!」

電が横でQRSプラグをいじるのを見ながら高峰は蛍光灯を見上げた。

「……まったく、聞きたいことが多すぎるぞ、カズ」

お前、いったいどこに消えた?

「くっそ、なんで13階からバンジーする羽目になるかな」

振ってくるがれきから逃れるように航暉は走る。左脇に抱えた雷を下ろさないまま建物から距離を取るように走った。

「しれーかん! 大丈夫?」

「雷こそ無事か?」

航暉はある程度距離を取ったところで雷を下ろした。空いた左手で右肩をさする。

「さすがにリハビリもままならない中でこれはきついな」

視界の先ではどす黒い煙が立ち上がっている。

「こつちだ」

航暉は雷の手をひいて、現場から離れるように走った。

「え、なんで逃げるの?」

「アレが部屋に入ってから起爆までのタイムラグがありすぎだ。まだたぶん敵がいる。……天龍の骨格を使った自走爆弾か、なんの冗談だクソ」

航暉は腰に差した22口径を取り出した。

「こんなんじや屁にもならんか」

「しれーかん、警邏隊に保護してもらった方がいいんじゃない?」

「天龍の骨格情報なんて民間に転がってるはずがない。あれは軍用品だ。バツクにかなり潤沢な資金源をもつ軍関係者が存在する。警邏隊が買収されてる可能性も高い。今軍にいるのは危険だ。逃げるぞ」

航暉は病院着に裸足ということを気にせず走っていく。建物の裾を縫うように走っていく。建物の間で強い向かい風が吹き抜ける。

「逃げるってどこに逃げるのよ!」

「いいからついて来い。来たぞ、ストーカーの登場だ」

航暉がいきなり立ち止まり、雷と前後を交代する。

「そのまま20歩前進してそこでしゃがんで待機、いいな?」

航暉はそう言うのと反転、逆走を始めた。

「え、しれーかん!」

後から路地に飛び込んできたのは青い作業服を着た清掃員だ。その手に見えるのは拳銃。

いつ発射されたのかわからないほどに抑制された発砲音、航暉の髪を数本散らして後ろに鉛玉が飛び抜ける。

「——っせいー!」

小さな石を拾って航暉は全力で投げつけた。過たず額にぶつかったそれで相手はふらついた。その男の懐に一気に飛び込んだ航暉は

相手の拳銃を両手掴むようにしてひねり取るとそのまま地面に引き倒す。そのまま肩関節を外してから絞め落とした。

「PSSモデルとは清掃員が持つていい銃じゃねえな」

航暉は奪った銃のマガジンを引き抜いてそんなことを言った。

PSS———「特殊自動拳銃《Пистолет самозарядный специальный》は銃の発砲音の主な要因である発射時の燃焼ガスを薬莖の中に閉じ込める特殊なカートリッジを使う拳銃だ。弾頭も衝撃波を生み出さない^{サブソニック}亜音速弾を使うという消音性にとことん気を使った特殊な実包、そんなものを使う機会なんてそうそうないし、そもそも軍や諜報機関ぐらいいしか使う場所がない。

「雷、生きてるな?」

「え、ええ!」

マガジンを再び叩き込み、拳銃を右手に持つと雷の方を振り返った。少しばかり煤で汚れた雷の怯えたような顔を見て航暉は苦笑いを浮かべた。

「走れるな?」

「もちろんよ!」

いい子だ、と言って航暉は走る。右肩の義手接続部にうつすらと血がにじんでるのを雷は見つけた。

「しれーかん……血が……」

「大丈夫、死ぬほどじゃない。とりあえず今は追っ手を巻かないと」

ビルの縁を回ると、フェンスが前一面に広がっていた。軍用地の端だ。それに沿って走る。

「しれーかん、まさか軍用地から出る気!? それって脱走罪よ?」

「それが今は一番安全だし、緊急避難が適応されるはずだ。逃げなきゃ殺されるぞ」

そう言っている間にも影が二つ飛び出してきた。

「全く、キリがねえ」

航暉はそう言うのと雷の足を払った。0.5秒前まで雷の頭があった位置を一本の線が通過する。それに取り合わずカシャン!と遊底

が稼働する音を響かせれば、相手の胸元に赤い花卉を散らし地面に引き倒す。雷は地面に叩きつけられた反動に顔を響めながらそれを見ていた。

「顔を上げるなよ」

航暉の声からは感情が抜け落ちていた。それが当然だというように落ち着いた声だった。

「しれーかん……」

口の中だけでつぶやいた声は彼に届かない。雷の目の前に小さな葉莢が落ちる、熱で膨れた空葉莢は輝いてなどいなかった。そこにもう一つ葉莢が落ちてくる。

「移動するぞ」

航暉が左手を差し出していた。右手一本で拳銃を構えて雷の方は見ていなかった。その手を取って立ち上がろうとして、雷は後方遠くに誰かが立っているのに気がついた。

「後ろー！」

弾かれたように振り返ると同時に航暉の右肩に何かがぶち当たった。金属質な音がして病院着をめり込ませて止まる。

「クソっ！」

航暉が銃を構えると同時

「Head down」

メツゾソプラノの声が割り込んだ。

とつさに雷に覆いかぶさるように伏せた航暉の真上をスローイングナイフが通過する。

「へーい、ゲッターウェイドライバーは入用かい？」

航暉が声の主を確認する、それを見てわずかに笑った。いつの間にかフェンスに大穴が……否、ホログラムで隠されていたフェンスの大穴から入ったらしい女性が笑っていた。その向こう側には大型の業

務用バンが見える。

「今なら一人あたり5000米帝ドルだ、悪いが子供料金は無い」

航暉は拳銃を手にしたまま電を引き起こす。

「毒を喰らわば皿まで、か。行くぞ雷」

雷の手をひいてフェンスの大穴を潜る。航暉はスライドドアが開かれたバンの後方に雷を押し込むと自分も飛び乗った。先ほどの女性はその後に続く。

「スキャンプ、出せ！」

「はいよつと」

急発進したバンの扉を閉めた女性が航暉の方を見てニカツと笑った。

「ヤバかったな、ガトー。生きてるうちに回収できて何よりだ」

「やっぱりお前らか、ロロ、スキャンプ。張ってやがったな？」

「文句言わない、ちゃんと助けてあげたじゃん？」

「なら自走爆弾が来る前に抑えてくれよ」

雷は半ばパニック状態だった。

「えつとー……しれーかん？」

「安心しろ、こいつらは俺の陸軍時代の同僚だ」

「戦友って言ってくれないのかい、ガトー？」

運転席から野太い声がする。

「同僚以外の何者でもないだろ、スキャンプ？」

「えつと……ガトーって言うのは……」

「俺の昔のコードネームみたいなもんだ。目の前の女がロロ、運転席がスキャンプ……スキュラはどこだ？」

「姉様はセーフハウスで電腦戦の真つ最中。姉様のメッセージが役だったようで何より」

「いきなりB―Pとか来るから何事かと思っただぞ。もつとマシンな信号はなかったのか？」

「メッセ担当はスキュラだからスキュラに言っただけ」

雷は煙を出しそうになる頭で必死に理解しようとした。

とりあえず航暉がここではガトーと呼ばれていること。で、ロロと

呼ばれた黒髪ロングで出るところが出た女性と、良く見えないが車を運転してるスキャンプと呼ばれる男性、あとここにはいないスキュラと呼ばれる女性がいること。で、全員顔見知りで陸軍関係者であること。あと、助けてくれたらしいこと。

「で、どこの命令だ？」

「あん？」

「今のお前らの上部組織はどこかって聞いてるんだ」

航暉がそう聞くとロロがけらけら笑った。

「戦友を救うのに理由が必要かい？」

「必要だ。特にお前らの場合はな」

「冷たいねえ……ま、いいよ。今回はC I R Oからの依頼だ」

「内閣情報準備室？ 今更何事だ？」

航暉が聞き返すとロロが笑う。

「今国連軍がファイリピンPKF参加者を狩り出してる。特にサンセツト作戦に関係した将校を中心にね」

「……スールースルタンの大量破壊兵器密造工場襲撃作戦、ねえ」

航暉の言葉に雷が首を傾げた。なにそれ？

「で？ 今更それを掘り返してるっていうのか？」

「正確にはそれに関わってたスタッフがどんどん殺されてる感じね、もちろんあなたもそのリストに入ってるわよ。ガトー」

「そのリストやはどこから手に入れた？」

「C I R Oから渡された情報だけど？」

「確度は？」

「スキュラに聞いて。実働専門の私ができる訳ないじゃない。……それにそういうのはガトーの方が詳しくんじゃない？」

ロロがいじわるな笑顔を浮かべる。

「どうも予備青年士官教育プログラムも関わってるらしいし、ね」
「……そうか」

「案外驚かないのね？」

「予想はしてたよ。確証はなかったけどね」

航暉はそう言っつて溜息をつく。

「で、どこに向かう気だ？ 高速道路に乗ったっぽいが？」
ロロが笑う。スキャンプの笑い声も乗った。

「旧首都、東京シティ内部、いいセーフハウスを用意してある」

合図はなかった。

浜地はサイドステップで銃口を避けつつ相手の銃に取り付いた。相手の腕を押し上げながら、そのまま銃をむしり取る。部屋には2人。銃を確保しながらも相手の体を盾にする。

「……………」

相手がナイフを下から突き出してくる。両手首をクロスさせて相手の腕を受け止める。軽く皮膚が刃に触れて皮一枚切れる。その一瞬の痛みの隙について半歩下がった相手が前蹴りを突き出してきた。体が固まっていた浜地はそれをもろに喰らってしまう。息が詰まらせながらたたたらを踏んだ。苦しかったがそれよりも相手との密着状態が崩されたことの方が危険だ。撃たれる。

直後銃声。減音器なしサブレッサーの派手な銃声だ。

「……………」

相手は減音器付きの銃を使っているはずだ。むしり取った銃の銃

把でナイフ持ちのこめかみをぶん殴りつつ浜地は後ろを振り返る。相手の一人が膝をついたところだった。もう一発銃声、膝をついた相手の手首が弾け飛ぶ。

「浜地司令官、生きてます?」

「ふ、文月!?!」

叫ぶ相手の後ろに回った文月が容赦なく電腦錠を叩き込んだ。浜地にも電腦錠を投げ渡してきたので、ナイフ持ちの首筋にあてがった。

「ちゃんと生きてるみたいでよかったあ。浜地司令官が死んじゃったら、臯月ちゃん泣いちゃうもん」

文月は手に持ったレイスマイスの回転弾倉を振り出すと空薬莖を抜き取った。スピードローダーで新しい実包を弾倉に突っ込むと再び弾倉を戻す。よどみのない慣れた動作だった。

「それじゃ、脱出しましょう」

「脱出って、どこに?」

「ちゃんと手配してますよう。うちの司令官が言ったじゃないですか、〃火消しはうちでやる〃って」

文月はそういいながら廊下に出て、手招きした。浜地はその笑みにつられるようにして廊下に出る。

「……文月、君は何者だ? 笹原中佐は何者なんだ?」

それを聞かれると文月は無邪気に笑った。一階に続く階段の踊り場で彼女はクルリと振り向いた。

「さあ、私はだれでしょお?」

その笑みはとても無垢で、浜地は背中に鳥肌がたっていた。

司令部棟の正面にトラックが飛び込んでくる。浜地はとっさに拳銃を構えたがそのピックアップトラックの荷台に見知った顔があるのを見て慌てて銃口をずらした。見間違えるはずもない金髪の少女

——臯月だった。トラックの運転席の窓が開く。

「中佐、文月、急いで!」

笹原中佐だった。先に文月に荷台に飛び乗った。それに遅れて浜地も荷台に飛び乗った。直後急発進。

「……もう、浜地中佐データベースに長居しすぎ。ただでさえ見張られてるってわかってるのになんで不用意に長期滞在するかなあ」

「……そう言うあなたも監視してんでしようが」

「援護するにはそれしかなかったわけだからね。許して頂戴な」

荷台と運転席を繋ぐ窓は開いておりそこから会話をする。

「で、ライ麦計画Project R.Y.E.に触れた感想は？」

「……あれわかっててあんたは文月たちにあんなことさせてるのか？」

「それで世界が救われるならね」

「狂ってるよ、笹原中佐」

「よく言われる。で？ どうするの？ この話、乗る？」

軍の敷地を飛び出したピックアップトラックが曲がる。

「一つ教えてほしい。……俺の記憶が本当にライ麦計画を止められるのか？」

「止まるよ。間違いなくね。でも、それがいいことかどうかはわからない。でも私はそれを止めるつもり」

「……あともう一つだけ、いいか？」

「どうぞ」

笹原が笑っているであろう声で先を促した。

「あんた、何者だ？」

「言ったはずだよ、笹原ゆうだよ。本名は知らない方がいい」

そう言うわずかに浜地の方を見た。

「内閣情報準備室C.I.R.O.の特殊諜報員ノンフィシャルカバの身の上知ったとしてもろくなことにならないからね」

そう言う喉で笑う笹原。

「とりあえずこのままマニラ市内に向かうよ。夜風は寒いかもしれないけど少し耐えてね」

それっきり会話はなくなった、いつの間にかナイフで切ったはずの血は止まっていた。それをぼんやりと見ながら夜闇に溶ける国連海軍基地を見る。

菅原が上機嫌に鼻歌を歌いだす。これは……故郷の空だろうか。その声はマニラの空に溶けて消えていった。

私とその女にあったのは佐世保の桜が葉桜になってからしばらく経ってからだった。

「こんにちは、キミが川内？」

茶色に見えるサイドポニーを跳ねさせその女は笑った。品定めをするかのように舐めるような視線を向けてくる。

「そう言うあなたは？」

「あ、ごめんごめん。ここの司令補として着任した笹原ゆう少佐よ。米津大佐から話いつてない？」

「ああ、海大からやってくるっていう」

「そ。それがあたし。よろしく、川内？」

人懐っこいどこか纏わりつくような視線。問答無用で警戒線を破って勝手に呼び捨てにしてくる人。

「足を引っ張らないでね、下手な指揮は嫌いなもの」

「努力するわ。それじゃ、よろしく」

「……よろしく」

ああ、あたしの苦手なタイプだ。それがその女の第一印象だった。

その女、笹原ゆうとの正式な顔合わせは翌日の朝礼の時になった。女はあたしの所属する第547水雷戦隊の司令付の補佐官となるらしい、ようは見習いだ。なんでも海大にいた時は中部太平洋艦隊が大苦戦した第二次日本海海戦で予備士官として投入されるほどの実力者らしいが、正直どうでもいい。あたしの仕事に差し障らなければそれでいいのだ。

「敷波い〜。綾波がいぢめる〜」

女はそう言って敷波に抱き着いていた。それでも顔は笑顔だ。時刻は1225JST、日本標準時12時25分、艦娘たちも食事をとる下士官食堂にわざわざやって来て一緒に食事を食べている。あたしの横に座る綾波が溜息をついた。

「笹原少佐の書類のミスが多いからです。いじめているわけではありません」

敷波が苦しそうに女の腕をタップした。どうも女が腕をきつく回し過ぎていたらしい。

「でもあそこまで厳しいチェックはじめて見たよ？」

「中途半端な仕事は周りに迷惑をかけますからね」

「うー。厳しいなあ」

「というよりそんな状況でよく海大でれたね、司令補さん」

そう言ったのは敷波だ。女はどこか嫌気の差した笑みで天井を仰いだ。

「あたしは現場肌なんだよ。実技なら負けないんだけどね〜」

「実技って艦隊指揮ですか？」

綾波が湯のみを置いてそう言った。

「そ、実戦経験不足とは言われるけどねー。そこはこれからフォローしていくさ」

「それに付き合わされるのはたまったもんじやないね」

あたしはそう言ってお盆を持って立ち上がる。椅子が案外大きな音でがたと鳴った。

「ちよつと川内さん。そんな言い方……」

綾波が小声で咎めるように言ってくるがとりあえず無視。

「海大の戦場と違って佐世保の戦場では普通に艦が沈むし司令部員も無事じゃすまないんだ。実戦経験を積んで勲章の華にしたいとか考えるくらいならやめておいた方がいいわよ」

「その通りだね。でもね川内、あたしがそう見えるかい？」

「知らないわよ。まだ会ってから2日も経ってないじゃない」

「それもそうか。……ふふっ、気に入った。優秀ってよく言われるでしょう？」

「さあね」

このまま話す気にはなれないから背を向ける。

「出撃は2215、送れないようにね」

飛んできた事務連絡にも答える気にはなれなかった。

それから数回出撃する機会があつたけれど、あの女が指揮に出てくることはなかった。ビツクマウスでないことを祈るだけの日々だ。女も夜型らしく昼間少し眠そうにしている所を見るとどうもイライラする。……周りの目線の冷たさにもこう見られているのかと理解した。

「川内さんはどうして笹原司令補を毛嫌いしてるの？」

敷波からそう聞かれたのは梅雨時に入ったころだろうか？ 待機

室のデスクで適当にペンを弄びながら半分上の空で答えていく。

「毛嫌いしてるわけじゃないけど？」

「毛嫌いというか……なんとなく話す気がないって感じ？」

「それは否定しないかな。どうも好きになれない」

「なんでだろうね。結構親身だし、話しやすいと思うんだけどなあ」
そう言われてペンを止めた。

「話しやすいのと話したいのは違うよ」

「でも、笹原司令補、川内さんのこと褒めてたよ。人をしつかり見る優秀な部下だって。あと、川内さんと話したいって言ってた」

「実際に指揮をとらずにわかるもんなんかな、優秀かどうかって」

「さあ、でも好意を寄せてくれてるのは確かなんじゃない？」

「その好意が打算込々な気がするんだ。なんだか嘘くさい気がするんだよね、あの人」

「嘘くさい？」

「あの笑顔が嘘っぽいというか、どうして笑ってるのかが分からない感じ」

そう言うところかなあ？と敷波は頭をひねる。

「笑いたいから笑ってる感じがしない。笑ってる裏になにかある。そう感じるんだ」

敷波はよくわかんないや、と言って視線を逸らした。

「でもさ、悪い人じゃない気がするんだよね、あたし」

敷波のその声にはあたしは答えられなかった。

次の週ぐらいだったと思う。あたしたちに出撃命令が出た。ホンの沖合で深海棲艦の襲撃があったらしい。その時に取り逃した敵本隊の撃滅が任務だ。

「スタガット1マイル、全艦警戒を厳にして行くよ」

夕暮れが近づく中おそらく敵がいるであろう海域に進入する。各艦の間隔を1マイルずつ確保する単縦陣。

夕日がどんどん沈んでいく。あたしはこの時間が実は嫌いだった。早く終わってしまえと思う。黄昏とはよく言ったものだ。この時間はすべてを曖昧にする。意識も存在も感覚も、視覚情報も曖昧で、誰何をするには明るく、見分けるには暗い、そんな時間だ。だから嫌い。闇なら闇に溶けてしまえばいい、光なら光に包まれればいい。その曖昧な時間が嫌いだ。薄く浮かんだ月にすらイラついてしまう。

その時間に敵艦を見つけるとか最悪だ。そして今回はその最悪なパターンらしい。

「敵艦軽巡1、駆逐4、数で押されてるけどなんとかなるね」

軽く判断して速度を上げる。敵からも信号弾が上がった。捕捉された。

「米津大佐、交戦許可を」

《547、交戦を許可。帰ってきたらご褒美やるから頑張れよ》

交戦許可に対して了解を伝える。セクハラの米津と呼ばれるうちの上官のご褒美はどうも罰ゲームを受けている気分にはかならないからご遠慮願いたいものだ。

夕闇に相手が溶けていく、どんどん溶けていけ。暗闇の方がこちらに勝ち目がある。

「綾波と私でフロント、敷波は後方でバックアップお願い。とりあえず突っ込むよ」

あたしが速度を上げる。その後ろに綾波がついてくる。少し距離を置いて敷波だ。狙うは反航戦。探照灯のスイッチに触れる。

「敵先頭から潰すよ。総員砲撃用意！」

探照灯、投射。一瞬の光度の変化にこちらの目もわずかに眩む。そ

れでも不意打ちで喰らわされた相手よりはマシだろう。

「——テッ！」

鋭いショックと共に発砲、爆炎、飛翔音。夜闇に溶けて水柱が2つ、わずかに閃光。どれかの弾が当たった。初弾にしては上等。

「面舵！」

相手も面舵、反航戦に入った。直後再装填完了。砲を向こうに合わせたタイミングで閃光、光の見え方からして照準は……敷波だ。

「敷波！」

「わあつてる！」

敷波ならドジは踏むまい。さらに速度を上げて接近。敵の二番手、三番手も発砲してくる。弾幕としては薄いがこの夜では十分に脅威だ。閃光が走る。今度はこちら側、あたしの主砲だ。極端に低い放物線で相手の頭を叩きのめす。

「ぎやあ!？」

「綾波!？」

後ろから上がった声にあたしは一瞬だけ振り返る。右肩を押さえて歯を食いしばる綾波が見えた。

「綾波、航行できる!？」

「まだ、やれるはず、です！」

「敷波、綾波のカバー！ 大佐、攻撃を続行します、……大佐?」

戦術リンクの反応がフラットになっている。背筋が冷える。

過剰同調事故——艦娘の指揮に使う戦術リンク、リンク深度を

深くすればそれだけ繊細な指揮がとれる、しかしながら、艦娘の痛覚や感情が流れ込むほどにリンクした場合、そのフィードバックで脳をやられることがある。——過剰同調事故なんて呼ばれ方をするそれが発生した可能性がある。

《川内、こちら司令部笹原、米津大佐は現在指揮能力喪失中、代理で指揮をとる。戦闘続行了解》

わずかに舌打ち。無遠慮とも思えるリンク率が弾き出される。

さっきの今でここまでリンクするかと正直感を疑った。

《川内、煙幕展張その隙に綾波は一度距離を取って》

「なに、逃げる気？」

《まつさか。こんな美味しい敵をみすみす見逃すとも？》

その声は弾んでいた。煙幕を張りつつさらに増速。被弾した綾波を覆い隠すようにわずかに取舵を切り相手に寄る。相手とすれ違う寸前に面舵を切り、適当に弾をばら撒きながら離脱する。探照灯を消灯。

「で、どうする気よ？」

《決まってんじゃない》

女の声が脳に滑り込む。煙幕の展張終了、限界まで速度を上げて面舵を取り続ける。

《さあ、場面を変えて見せよう——用意はいいか野郎ども》

女はそう言った。この夜闇の中誰も見えない中で走る。

《それ、3・2・1——》

煙幕に突っ込むと同時に、自分が笑っていることを知る。

《——Let's Jam!》

煙幕を突き抜ける、同時に探照灯再点灯。相手の軽巡の真横に突っ込んだ。極至近距離で目くらましを使われた相手が避けようと進路をぶれさせる。その一瞬で勝負がついた。

魚雷を至近距離で叩き込みほぼ垂直に交差する相手に手をつき、飛び越える。

相手の驚いた顔を見ながら空中で半回転、その間抜け面に左腕の主砲を打ち込んでさらに1／4回転。着水と同時に同航戦に持ち込んだ。

《頭は任せるよ、敷波！》

「結局、あたしの出番かあ！」

半ばヤケクソの叫び声とともに敷波が煙幕を突き破ってくる。敷波の射線を横切らないようにしながら魚雷を射角いっぱいに斉射水柱が何本も立っていく。

《キックバック!》

無理矢理後ろに飛び退くと同時に相手の砲弾がすぐ目の前を横切った。そのまま後ろに蹴り込みながら主砲を叩き込む。燃え落ちる敵を見つつ、砲撃の強いシヨックをそのまま回転に変えて進行方向を変更。180度回頭、前進いっぱいの反航戦へ。装填が終わった砲から撃ちまくる。

はは。

どこか笑みが漏れてしまう。

「戦場って、こんな狭かったかなあ……」

夜戦は、特に目視で戦うしかない夜戦は距離が詰まってテンポの速い戦闘になる。だが、今日は違う。

狭いのは狭い。だが、あまりに狭すぎる。戦場をどこか俯瞰するよ
うな、相手の砲の動きすら見切っているような感覚。自分以外のすべ
ての動きが緩慢に思える。

《ハッピーかい、川内?》

最後尾で砲を向けようとした駆逐口級に向けて砲を振る。

その砲の射線が、魚雷管の向きが、見える。

悔しいが、とてつもなく悔しいが。

「——うん、楽しいね」

《そりゃよかった》

引き金を引く。当たるかどうかは見なくてもわかった気がした。

《戦闘終了、此方は綾波が中破、敷波が小破、彼方は全滅。きれいにど
はいかなかつたけどまあアリかな》

無線越しの声は弾んでいた。

「一応感謝しとく、ありがとう」

《どういたしまして。あーあ、夜戦にしては早い時間に終わっちゃったね》

「だね。まあ、綾波も中破してるしこれ以上の戦闘は不可能だ」

《それはそうだ。綾波、応急処置はいるかい？》

「いいえ、大丈夫ですよ。佐世保まで何とか持ちます」

《一応鹿児島の方に連絡を入れてある。きつかったらそっちに向かって。その時は必ず一報を入れてほしい》

「わかりました」

それを聞いてからあたしは空を見上げた

「やっぱり夜空はいい」

だれもなにも見えない夜闇の中なら、誰もが不安になる。

その不安に自分の不安をすり替えられる。

だから、夜は好きだ。

弱い自分を悟られずに済むから。

薄い月が照らす海を見て軽く溜息をついた。

「みんな、帰るよー！ さーて、夜だ、楽しんでいこう！」

雨の佐世保に帰投した三人を出迎えたのは件の女だった。防水外

套に制帽、制帽には雨衣カバーがかけられている

「ねえ、何したの、あの時？」

「うん？」

わかりきってるくせにと思うが口にはしない。その笑みが気に入らないのもまずは置いておく。

「あの夜戦の時の艤装への干渉率、尋常じゃなかった。過剰同調事故を起こした大佐よりも深く潜ってるでしょ」

「うん、それが？」

「怖くないの？」

それを聞いた女が嘔き出した。

「なによ」

「川内が心配してくれるとはね。話すのを避けられてた出撃前とは大違いだ」

「で、質問に答えてほしんだけど」

「なにしたのって質問には電探の情報を視界情報にオーバーレイしたうえであたしの電脳経由で射角情報を修正してフィードバック、あなたの体で無理のない範囲で動けるエリアかつ優先順位の高い敵を倒すように介入、そんなことかな。で、あんたならどこでどう動くかなんとなく読めるし、実際にやってみると意識のブレも少ない。だから被弾して脳が吹っ飛ぶようなことにならないと思ったから怖くはなかったよ」

その答えを聞いて半ば呆れかえる。

「そんなこと裏でやってた訳？」

「案外何とかなるもんでしょ？」

そう返されてもそれだけのタスクをこなしておきながらタイムラグほぼゼロでフィードバックできる人間をまず見たことがない。目の前のこの女は何者だ？

「艤装を預けた後、ゆっくり風呂に入っておいで。体を冷やすと風邪ひくよ」

「そんな軟弱にできてないよ、水上用自律駆動兵装は」
「それでもさ」

そう言った女の声が野太くなる。まるでオペラの男優のような動作だ。背中を向けた彼女の声が響く。

「You are not machines. You are not cattle. You are men. You have the love of humanity in your hearts. You don't hate, only the unloved hate. Only the unloved and the unnatural」

その背中はどこか大きく見える。

「――『独裁者』」

「お、敷波良く知ってるじゃん。はなまるをあげよう」

防水外套の裾から雨水を垂れさせながら女が振り返る。

「君たちは兵装としてあつかわれる。でもね、それを容認するべきではないとあたしは考えている」

そう言うのと両手を広げる女。笑みの奥にどこかそれだけじゃない色が見える。

「君たちは人間の奴隷でもなければ家畜でもない。君たちは人間だ。個を持つ人間にして、この世界を守れだのいうお題目を信じることを強いられている人間に過ぎない」

彼女は笑う。その表情の裏に何があるのだろうか。

「人間に使われることに慣れるな。人間以下に扱われることに慣れるな。マシーンとして消費されることに慣れるな」

彼女の声が軍の棧橋に吸い込まれて消える。

「いつか、戦争は終わる。いつかこの悲劇の毎日にも終わりが来る。その時に君たちには、私の部下には笑っていてほしい。そのために私はある」

そう言うのと両手を下ろした彼女は改めて全員に向き直った。

「水上用自律駆動兵装の未来は決して明るくない。それは君たちが戦時という状況下において活動を許された猟犬だからだ。だが、その状況は変えることができる。私は思う。そのために君たちの力を貸してほしい」

相変わらず笑みを張り付けたままだ。同じ笑みの裏で感情が怒涛のように過ぎ去っていく。

「全員の生還、軍人としても、私個人としても感謝する。その指揮をとったのはあんただ。川内」

彼女が前にくる。あたしよりも少し高い背。濡れたサイドポニーが防水外套に張り付いていた。

「私は結構優秀な人間に目がなくてね、かっこいい奴を見ると手放したくなくなるんだ」

「……どうも」

「川内、あんたは私のそばにいろ。そして自分の考えを崩すな」

「……どういう意味よ」

「いつか私は、きつと間違う。その時にあんたはこれを使って」

そう言うのと彼女はあたしに何かを押し付けた。訳も分からず受け取ってしまう。

「私を撃ち殺せ」

そう言うて押し付けられたそれはおそらく私物のSIG SAUER製自動拳銃。

「……正気？」

「さあ？ でもその権利はあんたにあると思うよ。あんたはちやんと人を疑える。司令官を盲信せず、その上で動ける人材だ。そういうやつは優秀だと思うよ？」

彼女は笑って背を向けた。

「外で話してもアレだね。とりあえずみんな温まっておいで。作戦報告はその後にしよう。美味しいココアを用意して待ってるよ」

終始笑ったままの彼女の背中を見て、三人で首を傾げた。そのあと、なぜか笑えてきた。

「川内、どうしたの」

笹原に呼ばれてコーヒーから顔を上げた。

「ううん、最初の出撃のこと思い出してた」

「最初……ああ、ホンコン沖のやつ？」

「そ。帰ってきたら拳銃渡されて正直ビビったやつ」

そういうと笹原は笑った。今では547の司令官だ。あれから3年、出世したものだと思う。

「好きかどうかはわからないけど、信頼はしてるよ、司令官」

「そう言ってもらえると嬉しいね、でもあたしは異端だ。それはわかってる？」

「異端だからって信じない理由にはならないよ。それに、司令官との夜戦は楽しい、これを知るとなかなか他の人につく気になれないよ」

「そうかい？ でも約束は忘れないですよ？」

「もちろん、司令官が間違えたら、あたしが止める。そこは違えないつもり。これまでも、これからも」

それを聞いた笹原が笑って——どこか寂しそうに笑った。

「明日からしばらく、姿を消すよ」

「——いきなりだね。どうしたの？」

「まだ話せない。でも、いつか必ず話すし、帰ってくる」

そっか、と言って黙る。それ以上の返事のしようがなかったからだ。

「司令官、そろそろ教えてよ。司令官はさ、何を知ってるの？」

やっとのこと絞り出した答えはそれだった。笹原は小さく笑った。

「……あんたたちの出生の秘密について少々深いところを知っている、かな？ それはかなりの爆弾だね。国連海軍全体を吹き飛ばせる

ぐらゐの威力を持つてる。今からそれを処理してくるよ」

「それは、司令官じゃないとだめなこと？」

「さあ、でもできるのは私と他数人くらいしか知らない。だから行く」
そう言った笹原の目を見て、あたしは溜息をついた。

「止めても行っちゃうんでしょ？ 条件があるよ」

「なに？」

「必ず生きて帰って来て、それまでここは守るから」

「了解、旗艦どの。やっぱりあんたは優秀だ」

そう言った笹原はコーヒーストをすすった。あたしはそれを見つめる。

「……必ずだよ、司令官」

「ああ、必ず」

次の日の朝には本当に司令官はいなくなっていた。人事部には休職届が出され、異常な速さで処理されたらしい、窓口の人が首をかしげていた。どう考えても軍の上層部に噛んでいるのは間違いなく、それだけのヤバい事情に関わっている可能性がある。ついでに文月も一緒についていったらしい。

「……まったく、司令官はほんとに……」

早く帰ってきなさいよ、司令官じゃないと夜戦の調子が狂うんだ。

あたしは口の中だけでそう言って、冬の日差しが入る踊り場で空を見上げた。

00000110 ウエーク・ウエークポイント
PHASE 1

「……よくこんなところ見つけたな」

「昔の電気屋、回線も電気も生きてるよ。と言っても窓なしの部屋しか使えないけどね」

「十分」

航暉たちが連れてこられたのは旧東京シティ内部にある廃棄区画の一部、『秋葉原』と呼ばれる地区だった。

「高々10数年でここまで廃れるんだから深海棲艦も怖いわよね」

「艦載機に手ひどくやられたからね。良くここまできれいに残ってること」

「あ、ホロかけたうえでかなり手が加えてあるよ。対戦車ロケット砲^R_P^Gぐらいなら数発は大丈夫」

「そりゃ僥倖」

軽口をたたいて航暉は動作をとめたエスカレーターを登る。雷はその後ろを不安そうについていく。血が滲んだ病院着の背中がどこか遠く見える。

「来たね、ガトー坊や」

「まだ坊や扱いかよ、スキュラ」

3階の中心部に明るいデスクトップ型の画面のライトに照らされた影からソプラノが告げる。航暉がそう返すと笑った気配と共に影が床から飛び降りる。

「で、その横の可愛い嬢ちゃんは誰だい？」

「あ、あの、国連海軍極東方面隊西部太平洋第一作戦群第538水雷戦隊所属、DD-AK03、雷ですつ、あの、たすけていただき……」

雷が言葉に詰まった。飛び降りたその影は雷よりも小柄だったのだ。白いワンピースに包まれたその姿はこの廃墟の中では著しく浮

いている。亜麻色の髪に粒の大きな紫色の双眸は深窓のお嬢様と
いった雰囲気だ。

その影がすつと近づくと雷の顎を支えるように右手で押さえ、その
目をのぞき込んだ。

「えつと、あの……」

「ああ、ごめん。どれを名乗ればいいかわからないけど、とりあえずス
キュラって呼んでよ。歓迎するよライちゃん」

「い、いかづちよっ!」

「雷、気を抜くなよ。そいつに飲まれるぞ」

「へ?」

航暉はそう言って雷を見下ろした。訳が分からないような顔で雷
は航暉を見上げた。

「そんななりだが中身は60オーバーの婆さんだ。下手に目を合わせ
るなよ、全て読まれるぞ」

「へ、え?」

「言うようになったなガトー坊や。今度有線しようや」

「スキュラと繋がったらこっちが果てるからなしにしてくれ」

「ふん。度胸のない男だね」

「それはもう知ってることだろうに」

航暉はそう言って肩を竦める。目の前の少女——スキュラは
意味深な笑みを浮かべる。

「とりあえず着替えなよ。病院着はこの季節じゃ寒いだろう?」

そう笑った彼女は背中を見せて画面の方に向かう。

「えつと……スキュラさん……でいいのかしら?」

「なんだい、ライちゃん」

「貴方達はどうして私達をたすけてくれたの?」

画面を背にスキュラが振り返る。紫色の瞳が怪しく光る。

「理由一つ目、日本政府からの依頼。ヒメ事案のキーとなる日本人の
抹殺計画が進行中、至急安全を確保されたし、と言うことで私達に依
頼が来た。理由二つ目、月刀航暉——ここではガトーと呼んでる
が、そいつは私達の元同僚だね。そいつが死なれるのはいささか忍び

ない。私達としてはこっちの方が大きいんだけどね」

スキュラはそう言うのを背に向けてデスクに向かい合った。

「ライちゃんの疑問も正しい。私達が何か訝しむのは当然だ。ガトー坊や、私達のことは話してないんだね？」

「話せるかこんなイリーガルな組織を」

イリーガル……違法組織と言った。そのことに雷が驚きを隠せなかった。

「……ガトー坊やのたらしは治ってないんだね。まったく」

「たらし言うなよ。あんたに比べればマシだろう。スキュラ、いやスクラサス」

そう言うときスキュラは笑った。

「ウエルカム・バック、ガトー。そしてようこそライちゃん。我々『ノウエム』は歓迎するよ」

電が通常業務を終え、ヒメがいる兵装実験施設を出ると高峰が待っていた。……横には天龍の姿もある。

「天龍さん！」

「おう、電。……大丈夫か、お前。顔色悪いぞ」

「……やっぱりそう見えますか？」

「目元にクマ作ってたらそりや言うだろ。そんなんじゃ司令官が帰ってきた時に心配するぜ？」

「はい……わかつてはいるのです。でも……」

「でももなにもねえ、休めるときに休む。軍隊行動の基本だ」

天龍はそう言つて頭を撫でた。それを見た高峰は少し笑つてから二人の肩を叩いた。

「とりあえず河岸を変えるぞ、カズの線をたどるとんでもないもんが出てきた」

そうだけ言つて高峰は歩き出す。電と天龍は顔を見合わせながらついていく。案内された先は高峰のオフィスにある小部屋だった。そこには青葉が先に来ていて、全員が入ると鍵が閉じられる。

「で、司令官の線をたどつて出てきたとんでもないものつて何だよ？」

「カズの経歴、かなり嘘っぱちだった」

「嘘っぱち？」

高峰がそう言つると天龍が彼を睨む。

「どういうことだ？」

「軍歴が改ざんされてるんだ。書類上は日本国自衛陸軍第二五五歩兵中隊第三強化歩兵分隊に所属したことになっているが、映像記録や通信記録に月刀航暉は存在しない。それを確認したうえで、航暉の骨格データを使つて画像検索を試みたところ、一件だけヒットした」

「一件だけ？」

天龍が聞き返す。部屋の中央にスクリーンが立ち上がり映像を映し出した。白い建物の壁に真っ黒な突入服を着た男たちが張り付き、窓を破つて突入していく様子が映っている。

「これは？」

「2072年12月、深海棲艦発現の8か月前、場所はフィリピン、在マニラ日本大使館立てこもり事件における救出作戦の報道映像だ。この映像の1:32の地点に一瞬だけ映る」

高峰が早送りすると建物全景を映したシーンで止まった。屋上の影が拡大され、人の姿を浮き彫りにした。

「……高峰中佐、これよく見つけたな。軍用の光学ホロ被つてほぼ壁と同化してんじゃねえか」

「見慣れてんだよ、俺はな」

高峰がそれを拡大し、顔の骨格を航暉のデータとかぶせた。

「光学ホロの下にフェイスマスク、ホロが中和されたときを考えて対策するほど念の入れようだ。でもたとえ顔を隠していても、骨格は変えられない。照合率は97.3%、間違いなくカズだ。……この作戦には日本の対テロ特殊部隊とフィリピン陸軍の部隊が参加していることになっているんだが、どこにも航暉の名前はない。だが……」

もう一つのファイルが開かれる。

「これに関する自衛陸軍の機密資料にはもう一つ部隊が参加したことになっている」

「おいおい、機密資料なんて持ち出して大丈夫なのかよ?」

「まずいよ。だから他言無用でよろしく」

高峰はさらっとそう言う。電の顔が引きつった。

「そんな危なそうなものを持ち出してるのです……?」

「そうじゃないと捕まらないんだよ、カズの足取りが。……そもそも存在しないことになっている部隊に所属してるんだから」

「どんだんきな臭くなつてくなあ。おい」

天龍の声に高峰も溜息で答えた。

「途中から吐き気がしそうだったよ。日本国自衛陸軍第九師団特殊殲滅部隊、通称“ネーム・ノウエム”、非正規作戦や非対称戦のエキスパートチームだ」

「部隊名だけは聞いたことある。与太話のレベルだと思ってたんだが……」

天龍がそう言った。

「天龍、どこまで知ってる?」

「日本版デルタフォース、少数精鋭の特殊技能持ちが集まって膠着状態になった戦況を打破したり、裏で暗躍するって感じだ」

「間違つてはない、ノウエムは強行偵察や奇襲による拠点確保をメインに活動する部隊だと言われている。そこにカズは所属していた」

「その情報は確かなのか? とういか司令官は確か泳げなかっただろう? 泳げない奴が特殊部隊にはいれるのか?」

天龍の声に高峰は笑って見せた。

「歩兵がチタン骨格やらそういうもので武装したヘヴィサイボーグが主流になってから浮上具^{フローター}なしでの水中訓練は廃止された。そんなサイボーグはそもそも泳ぐ前に問答無用で沈んでしまうからな。だから泳げなくてもはいれるようになったんだよ」

高峰はそう言うのと煙草を吸っても？ と確認を取ってから火をつけた。

「コードネーム『ガトー』。ノウエムに参加した戦術航空管制要員だ」

聞きなれない言葉が並び、電の頭はオーバーヒート寸前だった。

「そのタック要員つてのが司令官さんなのですか？」

「カズの能力を考えてもこいつだろう」

高峰はガトーのファイルを見ながら至極真面目な顔でそういった。

「戦術航空管制要員は戦場でお目にかかりたくない敵兵トップ5に間違いなく入る。戦術航空管制要員の一番怖いところはこいつの指示一つで攻撃ヘリや無人爆撃機、場合によっては歩兵を満載した輸送機が飛んでくるところだ。歩兵同士で張り合つてればよかつた戦場にいきなり文明の利器で殴り込みをかけてくる。それに必要な知識や技術を叩き込まれてる上に、特殊部隊っていう戦闘のプロについているだけの体力と技術を持つてるんだ。相手にこいつが紛れ込んでるだけで味方の不利が加速度的に増していく。俺が相手だったら真っ先に潰せと命令出す」

高峰はそう言うつてガトーのファイルの従事作戦一覧を引き出した。

「華北戦争では旅順突破戦、フィリピン内乱ではクラーク空軍基地急襲作戦やスービック海軍基地攻略戦……どれも無人爆撃機や攻撃ヘリが活躍した作戦だ。その航空管制を一括してこのガトーが行っている」

そこまで言つて溜息をついた高峰。ホログラムを切り替える。先ほどから機密資料のオンパレードだ。

「ここから先はガトーが月刀航暉であると仮定して聞いてほしい。カズが参加した作戦の中で一つ気になる作戦がある。これだ、サンセツト作戦」

ホログラムに現れたのはサンセット作戦の概要だった。

「スールー Sultan 国の大量破壊兵器密造工場への突入した作戦だ。それなんだが、作戦関係者に妙な名前がある」

「妙な名前？」

「情報提供及び作戦立案協力者の欄を見てほしい」

「……自衛海軍大佐、中路章人。これって！」

電が驚いた声を上げる。高峰が頷いた。

「今の中路中将だ。この時、中路中将は海軍の教育隊の教官をやっていたはずで、ここになぜこの名前がある理由がわからない」

そう言うのと高峰が振り返る。

「青葉、頼んでた情報は？」

「ちゃんと持ってきましたよー！」

青葉がホロに手をかざす。

「中路中将の経歴です。中路章人——現在58歳、日本国自衛海軍時代から名をはせた護衛艦乗りでした」

青葉はそう言うのと従軍後の詳細な経歴をクローズアップする。

「華渤海戦争などで活躍し、後続のために一度教官として退くもフィリピン内乱への第二次PKFに合わせて前線に呼び戻されています。国連海軍が水上用自律駆動兵装の実用化に成功すると、その指揮官の第一期生として抜擢された水上用自律駆動兵装運用士官の最先任です」

それを確認した直後さらにもう一枚のファイル。セキュリティのかけ方からしてこれまでのファイルよりぐつと重要な資料であることが見て取れる。

「で、中路中将が現場復帰直前に関わっていたプロジェクト。これに関わる人物が今どんどん姿を消している」

Program R.Y.E.
「ライ麦計画」

「中路中将に始まり、合田直樹元北方第二作戦群司令官、風見恒樹元ウエーク島基地司令、鬼龍院彰久元大尉。そして——月刀航暉大佐」

「司令官さんが、風見大佐たちと交流があった、と言うことなのです

？」

「ライ麦計画は日本国自衛海軍教育隊の士官教育プログラムのひとつだ。ガトー、即ちカズはどうもこれの卒業生らしいんだ」

高峰はそう言うと言いライ麦計画のファイルに触れる。

「表面上は、〃限りなくグレーに近い黒〃。中身は、〃限りなく純粋な黒〃だ。優秀な人材の青田刈りを行って、エリート教育を受けさせ軍部にとって有能な人材を確保する。これだけなら白なんだが、洗脳に近い思想教育や実弾訓練、果てには実戦投入も行われたらしい。しかも幼少期の子どもも対象にする、ジュネーブ条約も真つ青の違法行為だ」

「完全に黒じゃねえか」

「まあ、それも深海棲艦登場後の特別徴兵法で合法化されたがな。今じゃ後方部隊と水上用自律駆動兵装運用士官に限り10歳以上が活躍できるような世も末な軍隊に成り下がった。カズはそのハシリ、言うなら合田正一郎大尉の先輩だな」

天龍の声に肩を竦めて答えた高峰がファイルを消した。

「そして、問題が一つ——これまで死亡したり殺人未遂になってたり失踪している人物の共通点として上がったのが全員一つの作戦に関わってたこと。その作戦が……」

「サンセット作戦、です」

言葉を青葉が継いだ。

「フィリピン内乱のきっかけになった作戦で、独立を訴えていたスールースルタン国が秘密裏に製造していた大量破壊兵器の製造工場の情報で全世界的にリークされたことに端を發します。フィリピン陸軍と多国籍軍の連合部隊が現場を押さえるまで続いたもので、フィリピンの内乱に多国籍軍が介入することになったきっかけの作戦です」

「それにライ麦計画関係者が何らかの形で関わっている。情報提供者として中路中将、支援護衛艦隊の指揮官として合田中将、実働部隊の一つを率いた鬼龍院大尉。D1Hから派遣された風見大佐。そして、非公式に参加したと思われる、カズ」

高峰が視線を上げる。

「中路中将の自殺未遂や合田元中将の死が仕組まれた必然であり、カズスの爆殺未遂が同一の目的で仕組まれたものだとは仮定すると、そのすべての線はライ麦計画及びそのメンバーが参加したサンセット作戦に集約される。俺と青葉はこの線で探ってみるつもりだ」

高峰はそう言つて全員を見回した。

「カズが戻つてくるためにはその身の安全を確保すること、即ち、犯人の炙り出しが必要だ。そのために動いていくが電たちにも協力を頼むかもしれない。その時はよろしく頼むよ」

「わかつたのです！」

電が領いたタイミングで警報が鳴った。

「なんだ？」

「デフコンが切り替えられました！ デフコンⅢ “ラウンドハウス” 発令！」

青葉の報告を示すように電腦にメッセージが叩き込まれる。

デフコン——危機管理の警戒度がデフコンⅣ “ダブルテイク” から一段階引き上げられたことになる。

「クエゼリン基地が襲撃、未確認種の深海棲艦によつて基地を放棄つ

て……おいおい」

「クエゼリンつてウエークのご近所じゃねえか」

天龍の声が険しくなった。

「……ヤバそうだぞ、これ」

高峰がホログラムを映し出した。

「敵艦隊——いや “敵艦” は優雅に北上中、ウエーク基地に一直線だ」

皆の背中が凍った。

「それで、C I R O が今更俺にどうしろって言うんだ？」

マニラのぼろアパートの一室で浜地がそう言うのと笹原が振り返った。

「国連海軍の方針だと日本国の貴重な人材がすり減らされる。それに危機感を持ったって訳よ。そして」

「公になる前にライ麦計画を抹消したい、だろ？」

「ご名答。聡明なあなたのことだから気がついてるでしょ。ライ麦計画の裏、そしてサンセット作戦で確保されたスールースルタン国の基地で何をしていたか」

浜地は黙る。彼が周囲に目を走らせたのを見て笹原が腰に手を当てた。

「安心していいよ。臯月ちゃんなら隣の部屋で文月が相手してるはず、聞かれることはない」

「……日本は、いや国連がスールースルタン国を利用したんだな？」

「そう言うことね。もつともフィリピン内乱は世界にとってはちやうどいい戦争になった。戦争の連続で荒れに荒れた世界規模の産業構造を修復するため、戦争による特需と、わかりやすい正義を必要としたんだよ。ちやうどベトナム戦争に韓国軍が軍を派遣したような構図、いや、湾岸戦争やイラク戦争の方が近いかな？ 戦後の政権の正義を見せつけるための戦争。スールースルタン国は大量破壊兵器を作っている悪いやつらだ。だからみんなで剣を取って平和な世界を取り戻そう！ 戦争で傷ついた人を助けるために、さあ、みんなでパンを作ろう。……第二次世界大戦後の日本が朝鮮戦争の特需を起爆材に復活を遂げたように、韓国の漢江の奇跡のように、対スールースルタン戦線に加担した国々は驚異的な経済的復活を遂げた」

それを聞いた浜地は似合わない皮肉な笑みを浮かべた。

「それを仕組んだのはお前らガバメントの奴らだろう」

「そうね。否定しないわ。戦争を終わらせるためという名目で大量の武器を持ち込んで戦場を泥沼化させる。同時に大量の食品などの支援物資を送ることで一般産業を活性化させ、お金を回す。日本を中心に数か国がフィリピンの内乱を使い捨ての独立戦争にした」

酷い話よね？ と笹原は笑った。

「そうやって東南アジアを利用してきたからこそ、今の日本は地位を占めている。だからこそ、この現状を変えなくちゃいけない」

「このシステムが公になった時のために、か？」

「そう。ライ麦計画はもう止めることのできないゲームになってしまった。だから本当に手を付けられなくなるまえに手綱を握らなければならぬ」

「ゲーム……だと？」

浜地の手が強張った。

「そのゲームのせいで何人死んでいった？ そのゲームのせいでどれだけの子供たちが戦うことを強いられていると思ってるんだ？」

「だからこそ、だよ？ 今止めないと次から次へと新しい子どもたちが戦争に送られる」

「……、やっぱりお前はいかれてる。笹原ゆう、お前は、ひとでなしのくそ野郎だ」

それを聞いた笹原は額に手を当てた。弾ける笑い声。彼女の首が触れ、顔は天井を向いた。

「いいね、いいねそれ！ やっと本当のことを言ってくれる人がいたよ。そんな言葉を久しく聞いてなかった」

手がのけられて戻ってきた笑みはぞつとするような狂気に満ちた笑みだった。

「それなら止めて見ろ、このクソツタレな現実とこの軍隊を止めて見ろ、浜地賢一。お前にはそのためのピースを持っているはずだ」

「それが目標なんだろう？ 内閣情報準備室が描くシナリオの第一目標

なんだろう？ 日本国の膿をスールースルタン国に押し付けて、戦後の艦娘たちの行く末も全部押し付けて、フィリピンの内乱をまた再発させる」

「さあね、私は工作員に過ぎない、その上の話になるから答えられない」

「……させねえよそんなこと。そのシナリオは、止めて見せる」

そう言うのと浜地は目を怒らせたまま続ける。

「そう。ならとっておきを用意しておくわね。で、とりあえず利害が一致する間は共闘関係と言うことでいいわね？」

「俺の手綱を握れると思うなよ」

「結構。じゃあ一つ目から行きましょう」

そう言うのと笹原は笑みを崩さぬままに身を乗り出した。

「『ホールデン』のマスターファイル、あなた、どこに隠したの？」

0000111 ウエーク・ウィークポイント
PHASE 2

「……もうすぐ到着か」

ウエーク基地司令官室で司令官代理を務めている宮迫大佐がそう言った。懐中時計をしまい、後ろに控える少女に目を向ける。

「利根、咸臨丸の出迎えとアンローディングの指示をしろ」

「了解じゃ」

利根は敬礼し、それから律動的な動きで部屋を出た。直後、走り出す。走りながら見た目には変わっていない基地を見る。それでも中身はだいぶ変わった。

トップがすぐ変わったことで基地は若干の混乱を招いたものの、だいぶ落ち着いてきている。宮迫大佐は事なかれ主義が過ぎ、腰が重い。が平時には至極優秀な司令官だ。基地所属の艦娘たちのある意味共通見解だった。なんだかんだで平時からぶつ倒れる寸前まで働いてしまう月刀航暉大佐よりも平時は安定して仕事をこなす。

別の司令官の指揮下に入って利根は思う。

やはり月刀司令の指揮は“特別”だ。

航暉は艦娘の意見や感覚を重視し、それに合わせて作戦を切り替えたり部隊の配置を構成したりするなど、現場指向が強い指揮官だと言える。そして兵器として扱われる艦娘たちを認め、その上で十分に力を引き出す。自らが駒ではなく、大切にされているとわかるからこそ、ウエーク基地の艦娘たちは戦い、生きて帰ってきた。帰ってくれば居心地のいい基地で司令官が待っており、仲間と労い、バカもして、笑っていられる。それがこの基地の日常だった。

その感覚に慣れていたことを宮迫司令代理になつてからウエーク基地所属艦は強く思い知らされた。宮迫大佐はいわゆる普通の司令官だった。艦娘を兵器として扱い、それ以上の干渉を避ける普通の司令官だ。公私をしっかりと分けているともいう。

それが物寂しいとおもってしまうのはきつと贅沢なのだろう。

「ま、贅沢だと思つても恋しいものは恋しいのお……」

今、航暉は行方不明の最中でありそれが遅効性の毒のように隊内を回っている。利根はそれを是正しなきゃいけない立場————第三分遣隊旗艦についているのだが、もしかしたら利根自身が一番毒されているかもしれないとなるとなかなかきついものだ。

「それでもなんとかしなきゃなのう……」

これから入港する輸送船がその毒の打破のきつかけになってくれればいいのだが……。

「今回の荷物にはアレが入っておるからのう……!」

クリスマスと年末年始のご祝辞を兼ねて嗜好品や注文品が乗せられているはずだ。それで少しは心を紛らわせたいところである。

そんなことを考えていた利根の横に追いついて———というより追い越す勢いで影が並ぶ。島風だ。

「ねえ利根、そろそろ咸臨丸到着よね?」

「そうじゃ、さて出迎えるのでしょうか。お主の妹も来るんじゃない?」

「うん!」

島風が全力疾走に入る。

「こ、こら、置いていくでない!」

「だって遅いんだもん!」

12月24日、ウエーク基地は雪のないクリスマスイブを迎えた。

入港が近づいてきて水上用自律駆動兵装搭載型ドック型輸送船“咸臨丸”^{かんりんまる}の船内はぼたついできていた。入港と言っても寄港先の泊地に止めてもらって自慢のLCCで荷揚げになるだけなのだ。

そんな時間だからか、そもそもここに用がある人は少ないからか、人気の無い艀装整備室の片隅で、島風に似た服装の黒髪の少女は“小さな砲台を模した自立機動ユニット”の一台に話しかけていた。

「エルフィーナ…私達とお別れするのが寂しいの？」

ゆつくりと労うように自律砲台を磨き上げる彼女はゆつくりとつぶやいた。

「……うん。私も寂しいよ、生まれてから今日までずっと一緒に居たから、貴方を手放すのは凄く辛い」

島風型の彼女にとって自律砲台は最強にして唯一の矛だ。自らの分身ともいえる。

「ねえ、お願いがあるの、私のかわりにお姉ちゃんを守ってくれないかな？」

エルフィーナと呼ばれた自律砲台を抱きしめる。

「大丈夫だよ、お姉ちゃんの所にも貴方の兄弟が3人居るからね。

……約束する、年に何回かこの船に乗って必ず遊びに行くよ。だから

……その時まで……元気でいてね……」

ドックの後方でサイレンが鳴っている。どうやら無事投錨し、荷下ろしにはいるらしい。

「それじゃ、いこっか、エルフィーナ」

小さなその影を抱いて、彼女は立ち上がった。

「水深が足りないからL C A Cでの荷揚げじゃな」

利根はゆっくりと船速を落とす。咸臨丸の後部ハッチはすでに開いており、そこに速度と艦首の向きを合わせてゆっくりと進入する。

「輸送ご苦労様じゃ！ ウェーク基地所属C A—T N O 1利根である！」

ドックの中で声を張ると案外声が反響した。返事は頭上、L C A Cなどの出発管制をするキャットウォークから返ってきた。

「出迎えありがとう！ 後方支援群第53輸送隊の坂本遊馬中佐だ。島風ならもう奥に入ってるよ」

「まったく、久々の再会なのはわかるんじゃがな……」

「姉妹ですから多めに見ませんか？ 利根特務官」

「なら内密に頼むぞ？」

「もちろん」

利根は奥のドライデツキに上がるとL C A Cを見上げた。そこに坂本と名乗った士官が下りてくる。中佐にしては若く、20代後半といったところか。

「それにしても……なかなかすごい量じゃのう……」

「年始の年賀もまとめたの支給ですからね。それに、艦装研究開発実験団からの配備品も含まれてます」

「とりあえずL C A C一台分で収まるのかのう」

「重量の関係で先にスケジュールの分を下ろしてからプレゼント系を下ろします」

基地の消耗品の定期輸送物資スケジュールからおろしていくらしい。

「了解じゃ。今日の夜はここで錨泊じゃったな？ 時間は十分あるんじゃないろう？」

「ええ、少し主機の様子も見つつですね」

その答えを聞いて利根は少し眉を顰めた。

「どこが悪いのか？」

「まあ、気にしなくてもいい程度ですが、一通り」

「日頃の整備は重要じゃからな。さて先に言ったという島風はどこに行ったやら……おい、島風！どこに……なんじゃそこにおったか」

LCACの後ろで自律砲台を大量に侍らせた島風が手を振った。

「利根！ 微風そよかぜが連装砲ちゃんひとり私に預けてくれるって！」

「ほう、そりやよかったのう。連装砲ちゃんもこれでゆとりをもつて運用できるのう」

「うん！」

島風が自律砲台——連装砲ちゃんを抱きしめる。その横では島風より少し小柄な少女が立っていた。黒い髪に白の猫耳、ちようど島風の色合いを反転させたような姿のその少女は嬉しそうに島風を見ていた。

「微風と言ったかの？ 吾輩からも礼を言うぞ」

「あ、申し遅れました。極東方面隊後方支援部艦装研究開発実験団所属、DD—SKO2“微風”です！」

「うむ、中部太平洋第一作戦群第三分遣隊旗艦代理、CA—TN01“利根”である。微風は島風の妹さんなんじゃったな？」

「うんっ！ あ……はい！」

「そんな堅苦しくせんでもよいぞ。ここはみんな仲が良いし、艦娘同士は平等じゃ」

「わかりました！」

「ねえ微風、早くかけっこしようよ」

「だから全部荷揚げが済んだらって言ってるじゃない」
「え〜」

そんなやり取りを聞きながら利根は笑った。

「なんじゃ、どっちがお姉ちゃんかわからんのお」

「そう言う利根も筑摩とどっちがお姉ちゃんかわからないじゃない」

「そ、そんなことないぞ。筑摩よりは少しだけじゃがお姉ちゃんじゃからな……っ？」

「目が泳いでちや説得力ない！」

「な、島風っ！」

利根が実力行使をしようとする所持前の早さで逃げる島風。そこに三機の連装砲ちやんがついていく。

「ほら、エルフィーナ！」

島風に呼ばれてもう一機ついていった。それを見て微風はくすりと笑った。

「お姉ちゃんなら、大丈夫よね」

追いかける利根の背中と島風に寄り添う4人の騎士。

「エルフィーナ泣かせたら、いくらお姉ちゃんでも許さないからね？」

微風はゆつくりと周りを見回した。

「アル、バーニイ、キャロ、ドーファン、追いかけるよ！」

二人の後を追って走り出す。口には笑みが浮かんでいた。

その日の夜。

龍田主催で睦月型ファツションショーが繰り広げられたり輸送隊が持つてきてくれたアイスクリームケーキが振る舞われたりと談話室ではゆつたりとした時間が過ぎていく。輸送隊の出発は明日になるので今日は微風も一緒だ。

「微風ちゃんが輸送隊に出向になつてるとはねえ」

「フリップナイトシステムを使った輸送船護衛の先行配備です。これが上手くいけば輸送の安全性がグンと高くなります。お姉ちゃんみ

たいに攻略戦だけじゃなくて防衛もこれで何とかなるんじゃないかなって」

「でも輸送船の速度で動き続けるのも結構退屈だよお……」

艦装研究開発実験団で面識のある大鳳島風微風の三人が盛り上がる中、横に響がやってきた。

「ってことはあの船に乗ってる艦娘は微風ひとりなのかい？」

「うん。でも寂しくないよ？ アルたちもいるし」

部屋の隅では8基の自律砲台が戯れている。

「……どれがどれだか区別がつかなくなりそうだ」

「え、響ひどい。私たちはすぐに区別つくよ」

ねー？ と笑いあう島風型二人。

「チーム微風みんな整列〜」

「島風組のみんなも！」

「島風組ってなんとなく組関係でヤクザなお仕事してそう」

「してないよっ！」

響のコメントに島風が即ツツコミを入れる間にも連装砲ちゃんがトコトコかけてくる。4基ずつのグループに分かれ整列した。

「響いいい？ 左からウルファイブ、ケイ、ルーカン、そして今日加わったエルファイナー！」

「こつちからアルフォンス、バーニイ、キャロル、ドーフアンね！」

島風と微風の説明を聞いてもあんまりわからない響だがとりあえず頷いておく。

そのタイミングで着替え終わったお姫様コースの睦月が顔を真っ赤にして出てきて場がわいた。そつちに響は逃げることで島風の「じゃあこの子は誰でしょう？」という質問をスルーする。

「うー、少し恥ずかしいかにやーん」

「ハロウインの時……弥生も着せられたから……お返し」

「あれほとんど如月のせいだよ？ なんで私なの？」

「如月にやると……あとが怖い」

そのコメントに如月以外のメンバーが嘖き出した。当の如月は不満顔だ。

「ちよつとー。さすがにそれは無いんじゃない？」

「その反応が怖いんだよ如月ねーちゃん」

望月があくびをしながらそう言った。そんな中で暁はばれないように溜息をついた。

「……みんな無理してる」

「仕方がないさ」

「……戻ってきたんだ、響」

「連装砲ちゃんの見分けテストなんてしたら自信がないからね」

隣に腰掛けた響がそつと暁の方を盗み見た。

「司令官が行方不明なんだ、無理にでも明るくしないとみんな狂ってしまう」

「……わかってるわよ。でも、やっぱり見てるとつらいよ」

「うん。こればかりは司令官が早く戻ってくれることを祈るしかない。きつと雷も一緒に帰ってくるさ」

「わかってる……わよ」

暁はそう言うと言線を落とした。

「電も頑張ってる、天龍さんもあつちに合流した。あたしたちにできることはこの基地を守ること」

「そうだね。帰ってくる場所を守ることだ」

「わかってるわよ。だから、だから不甲斐ないんじゃない」

「うん」

この基地、正確にはこの基地で過ごした時間は大切に何事にも代え難いものだ。暁にとつてもそうだ。なら電にとつてもそのはずだ。そしてそこには司令官がいなければならぬ。だからこそ、司令官が帰ってくるまでここを守らなければならない。それは万が一に備えて準備をし、待ち続けるということだ。

それがもどかしくて堪らない。

「大丈夫、きつと帰ってくる」

「わかってる。司令官は死んでないし、雷たちを見捨てたりしない。帰ってくる」

「うん」

響がそう返したとき、警報が鳴った。第二種警戒態勢、コンデイションオレンジ。

「デフコンが切り替えられたようじゃな」

利根の声が一気に硬質になる。周りの空気も一気に張った。その切り替えに微風は追いつけなかった。

「大丈夫微風、お姉ちゃんたちに任せて」

島風が笑う。それに微風は僅かに頷くしかできなかった。

微風にはまともな実戦の経験がなかった。部隊での戦闘も実験団の模擬戦でしか経験していない。心拍数が上がるのを感じていた。そつと隣を見ると島風は特段緊張した様子もなく様子を見ていた。

ああ、やっぱりお姉ちゃんはお姉ちゃんだ。頼りになる。

「出撃用意だけはしといてほしい、吾輩は司令代理に指示を仰いでくるぞ」

利根が出ていった。聖夜に戦いの足音は急速に忍び寄っていた。

「敵は一隻？ 高々一隻のせいでクエゼリンが壊滅したのか？」

「正確には、捕捉できたのが一隻」だ。一隻で艦載機最低120と雷撃と戦艦並みの火炮なんて持ってたら世界がひっくり返るぞ。間違いないなくバツクに別働隊がいる」

高峰はオフィスのデスクでキーを叩いていた。その後ろには電に天龍が控えている。青葉は高峰の指示で極東方面隊総司令部に向

かっているところだ。

「捕捉されずに動ける別働隊?」

「それも正規空母二隻分の艦載機をもつ機動部隊だ。そうじゃないと話が合わない。潜水空母という可能性もあるが、そうなれば水面下に3桁近い潜水艦が潜むことになるさすがにありえんだろう」

「雷撃は? 応戦に出たチームは何も捉えられなかったんだろ? 戦艦一隻以外」

「大型戦艦と思しき未確認種だがな。雷撃はそれこそ潜水艦だ。水温乖離層サーモクラインの裏にでも隠れてた可能性がある。もしくは戦艦の真下にコバンザメみたいに張り付いてるか……」

高峰はそういいながらキーを叩き続け、データを呼び出した。

「よし。リアルタイムアクセス認可出た。中部太平洋の現状、出すぞ」
高峰がそう言うて立体ホロを立ち上げる。そこに現れたのは海図だ。

「クエゼリン基地放棄から2時間半、中央戦術コンピュータCTCの情報信じると敵パッケージは5時間後、明日の0345JSTにウェーク基地に到達する。ウェーク基地はちようど夜明け、航空戦が発生する時間帯だ」

「最悪じゃねえか。120機を龍鳳と大鳳の艦戦だけで捌かなきゃいけないのか。司令官がいれば余裕だろうが現状だと相当骨が折れるぞ」

「二航戦の飛龍さんたちに応援は頼めないのです?」

その声は電だ。

「ダメだ。グアムからじゃ夜明けに間に合わない」

「ティルトローターでの空輸はどうだ?」

間髪入れず聞き返したのは天龍だ。高峰がキーを叩く。

「上層部でも審議中だが……テナンの稼働機が今、南北アメリカ方面隊の南アメリカ難民移送作戦の応援に駆り出されて、ほとんど残ってない。動けるのはクリリスクと旅順、香港と台湾。……横須賀で赤城達を拾うにしても、グアムで飛龍たちを拾うにしても途中で燃料補給がいる。ホットフューエリングをするにしてもそんなことし

てる間に夜が明けるぞ。大型ヘリは動かせるが航続距離が足らんし、アイランドホッピングで飛ばしてたらそれこそ間に合わねえ」

「なにもテイルトだけが空輸じゃないだろう。どこかの輸送機すぐに使えないか？ ウエークの滑走路使えるなら下りれるはずだ」

「無防備な輸送機を護衛なしでは飛ばせない。国連空軍の返次第になるだろうが、国連海軍はまだ要請を出してないみたいだ。今から連携をとるのはほぼ無理だ」

「……つまり増援はなしってことか」

天龍の声に高峰は頷いた。そして手が止まる。

「……どうしたのです？」

「上層部から緊急作戦が下命された。オペレーション・エキソドス発令。エニウエトク・マジユロ・ウチリツクの各基地に撤退命令。ウエークに出撃要請だ」

「哨戒線の南半分を放棄する気か？」

「だろうな。おそらくウエーク島基地の撤退も視野に入れてるはずだ。ルートによってはウエーク島基地だって孤立しかねん」

「そんな……」

電はそう言って胸元で手を組んだ。その肩を軽く叩くのは天龍である。

「お前の部下たちは優秀だろ？ 信じてやろうぜ？」

電は上の空のまま頷いた。

「大丈夫だ。電、お前のお姉ちゃんたちを信じてやれ」

接触予定まで残り4時間45分少々。極東方面隊の眠れない夜が始まった。

00001000 ウエーク・ウイークポイント
PHASE 3

「咸臨丸が動けないってどういうこと?」

戦闘準備が整えられていく中、微風の声が聞こえる。横で用意を進めていた島風が振り返った。

「どうしたの?」

「咸臨丸の第一エンジンの整備に入ってたエンジンが完全に落としてたんだって。暖気も含めて動けるようになるまでに2時間かかるって……」

「……二時間も待ってたら戦闘に巻き込まれるわよ」

「ど、どうしよう……」

「とりあえず司令代理に指示を仰ぐよ。微風は出撃用意を続けてて、私の連装砲ちゃんもお願い」

「え、無線で済むんじゃないの?」

島風の分の自律砲台を押し付けられた微風が怪訝な声を上げると、島風は苦笑いだ。

「うちの司令代理は直接いかないと動いてくれないの」

「そうなの?」

「うん、うちの提督なら判断早いんだけどね……」

「提督?」

「うん、月刀航暉大佐ね。今どこにいるやら……」

島風はそう言って司令室に向けて足を向けた。

「ガトー坊や、軍の方が慌ただしくなってるみたいだよ」

そう呼びかけられて航暉はのっそりと動き出した。もう夜半と
いって差し支えない時間帯。椅子に座って銃を抱くようにして仮眠
をとっていた航暉だがすでに意識は覚醒していた、視聴覚センサー内
蔵のグラスデバイスを外すとベッドで横になり寝息を立てている雷
を振り返ってから扉を閉める。

「そんな防犯^{スリープレスアイ}グラスなんて使ってさ、ここはフィリピンのジャングル
じゃないんだよ？ そんなに寝首をかかれるのが怖い？」

「ここだからこそだ、スキュラ」

光度や赤外線の変化、一定距離内の空間の揺れを感知し電腦に直接
警告を転送する防犯グラスを胸ポケットに差しながら航暉は笑う。

廊下は仄暗いコンクリート一色だ。電気屋のバックヤードだった
らしいが今はがらんとしている。

「この面子を信頼しているわけじゃねえ。で、要件は何だ？」

「3時間前、軍のデフコンが切り替えられた。ワンランクアップでラ
ウンドハウスだ」

「スキュラにしては情報が遅すぎるな。何してた？」

「アンタに教える必要もないんだけどね、ガトー坊や。リスク計算し
てたら遅くなったのさ。新種の深海棲艦がウエーク基地に向かつて
る。捕捉できてるのは一隻だそうだ。その一隻がクエゼリンを壊滅
させた」

航暉はそれを聞いて目を見開き、すぐに伏せた。

「で、俺に今から軍に戻れとでもいうつもりか？」

「そんなことしたらこっちの努力が水の泡だ。だから無理」

雷よりも小柄なその少女は葉巻を取り出すとシガーカッターで吸い口を切る。

「でも、無視させるのもあれだと思ってね。私の手元には艦隊へ連絡を付けるための鍵がある。裏口バックドアの鍵だ。それを使えばあんたはウエーク基地の艦隊に割り込める。バックドア、使ってみるかい？」

スキュラはそう言うと言いつつライターに火をつける。整った顔が橙に揺れ、すぐに暗い色に戻った。

「……大切な仲間だったらしいじやないか」

「死なせたくねえと思う程度にはな」

そう言った笑みは暗く沈み込んでいた。それを見てカカカと笑うスキュラ。

「仲間は否定しないか」

「仲間だって言ってくれるガキを否定できるほど強くないさ」

「いや。それは違うねガトー坊や」

スキュラの目がすつと細くなった。

「そろそろ自分を騙すのをやめるべきだ。そして贖罪としてその子たちと付き合うこともやめるべきだ」

「贖罪？ 何のことだ？」

「覚えはないかい？」

そう聞くとスキュラは笑みをひっこめた。冷たい目が彼を射ぬく。

「あんた、ライちゃんの記憶、書き換えたね？」

それを境に沈黙が下りる。重い重い沈黙だった。

「……沈黙もまた答え。ライちゃんが電脳クラッキングを受けた時とあんたの記憶に齟齬がある。雷はただ真っ白な空間に放り出された」と記憶していた」

「雷の記憶を読んだのか？」

それが私の仕事だからね。とスキュラは笑う。

「妖怪スキュラの名は伊達じゃないわよ。そして、あんたの記憶も見せてもらった。恐ろしくノイズが多かったけどね」

「……どこから枝をつけやがった？」

「それを言ったら商売上がったりだもの。言うわけないわ」

やはり笑みを浮かべてスキュラ。その瞳の色だけがどんどん暗く落ちていく。

「ライちゃんの記事の記憶のかけらを元にその時の雷の視界情報を復元した。……書き換えたくなる気持ちもわかるわよ？」

そこで紫煙を深く吸い込んだスキュラは煙と一緒に答えを吐き出した。

「あれはサンセット作戦の時の風景だものね。あんたがノウエムを去るきっかけになった」

「……ああ」

「なぜ書き換えた？」

「……あの記憶を雷に植え付けるべきじゃない。あのジャングルの風景を、あの醜えた臭いを、あの火薬の味を植え付けるべきじゃない」

そう言うのと航暉は背中を壁に預けた。スキュラは彼に向き合ってその顔を覗きこむ。

「スールースルタン国の大量破壊兵器密造工場襲撃作戦。……まだ夢

に見るんだらう？ その兵器と戦った記憶がリフレインする」

「兵器……だと？」

「兵器さ。自走爆弾、忘れたかい？」

「いや……」

航暉はそう言うのと頭を押さえた。

「……吸うかい？」

「……禁煙したはずなんだが、な」

自分で巻いたらしい葉巻をもらうと、航暉はゆっくりと口を付ける。スキュラがライターの火を差し出した。

「——久々の煙草のはずがちつとも旨くねえ」

「そうかい。ならその一本でやめときな。体に毒だ」

スキュラはそう言うて二本目の葉巻に手を伸ばす。航暉は葉巻を右手に持ってその煙を眺めていた。

「ライちゃんの記事とあんたの記事からアンタの部下の情報を抽出さ

せてもらった。電とかいう子にご執心じゃないか。何があった？」

「……さあな。理由なんているか？」

「今回は必要だ。答えろ」

「……さあな」

「正解は理由がないんじゃない。理由が消された。そうだね？」

スキュラの問いに航暉は答えられない。

「……何を言っているんだ？ 何を言いたいんだ？」

溜息が、一つ。

「本当にわからないのかい。——しかたがないね。アプローチを変えようか」

スキュラはそう言うと言を伏せた。仄明るく光る葉巻の火が暗闇に消える。

「生まれた町の記憶、軍属の記憶、家族の記憶、私達との記憶、電との記憶、雷との記憶。……あんた、今どこまで思い出せる？」

「いったい何をした……いん、だ？」

反論しようとした時に脳にノイズが走った。

「え……？」

「思い出せ。＼お前は誰だ？＼」

かくんと膝から力が抜けた。ただ指の間で燃えていただけの葉巻がコンクリートの床に落ちる。電脳通信が強制的にオープンになる。

視界に警告文がちらついた。——電脳ウイルス感知。

「スキュラ、き、さま……葉巻に……！」

「思い出せ。＼なぜ電に執着する？＼」

分散型ウイルスの合体が進む。処理速度が追従しない。筋肉が引きつるように痙攣した。

溶け落ちていく意識の間に葉巻の匂いが漂う。この葉巻がウイルスの発動キーだった。いつ、どこで仕込まれた？ 電脳ウイルスなんていつ感染した？

そんな記憶、どこにもないのに。

「く、あ、ああ、あ……！」

「思い出せ。＼サンセット作戦でなにがあった？＼」

「あ、あああああああああああああああつ！」

ごめんな、すぐ帰ってくるから。ちゃんといい子にしてろよ？
やだ、いかないで。置いてかないで。

そうだ、帰ってきたら一緒にソフトクリームを食べに行こう
ソフトクリーム？

好きだったろ？ 牛乳ソフト

うん。……うん

あたしも！

わかったわかった、三人で行こう。俺が帰ってくるまでいい子にしてろよ？

うん！……やくそく

やくそく！

やくそくだ

——暗転。

本日午前10時半ごろ、砺波ジャンクションで発生した化学薬品運搬車と自家用車の衝突事故により子ども2名を含む——

——暗転。

こんな子に爆弾持たせて突っ込ませるなんて、どうかしてる。ガトー。お前は悪くない。悪くないんだ。

この子も泣いてた、泣いてたんだ。それを、撃ち殺したんだ。恨んでくれよ。せめて罵ってくれよ。なんで、なんでこの子は笑って死んでるんだよ！

——暗転。

本日付で第551水雷戦隊に配属となります、登録コード「DD—AK04」駆逐艦「電」です！ど、どうかよろしくお願いいたします。

君は——

——暗転。

いなづまに理由をください。司令官さんを守るんだって言わせてください。この部隊を守るんだって言わせてください。司令官さんをいなづまの戦う理由にさせてください。

——暗転。

生きていないというのなら、俺をモノだというのなら、艦娘はモノだな！ それを生きてるように扱うお前は人形遊びに興ずる狂人って訳だ！

——「ごめんね、ありがとうなのです」

あの子は誰だ？

俺は誰だ？

どこまでが俺のキオクダ？

コノキオクハダレノキオクダ？

ノイズが重なり、視界すら浸食していく。

「ガトー、あんたは気がついていたはずだ。記憶の不整合性、そして消されている事実気がついていた。そしてその自分をなかつたことにされた」

「……お れは……」

「気がついたかい？」

「スキュラ、いつからだ？」

「なにがだい？」

「いつから、間違ってたんだ？」

「それはシステムが？ あんたが？」

揺らぐ視界に少女の靴が見える。上から降ってくる声に航暉はうなだれる。

「自分の面が曲がっているのに、鏡を責めてなんになる」

「……鏡は悟りの具にあらず、迷ひの具なり。一たび見て悟らんも、二たび見、三たび見るに及びて、少しづつ、少しづつ、迷はされ行くなり……か」

「ガトー、あんたはライ麦計画——その先のプロジェクトに従ったまでだ。否、従わされたまでだ。その結果、内面は醜いまでにそれと酷似した。違うな。そうなるようにコーデイネートされた。それが今の悪夢の根源だ」

航暉は答えない。

「あんたにはそれを止めることもできる。同時に世界に喧嘩を売った反逆者になるがね」

「……それでもやらなきや、俺たちは永遠にこのままだ」

「そう、ならガトー。もう一度聞こう。デフコンが切り替えられ、

ウエーク基地に危機が迫っている。バックドア、使うかい？」

「咸臨丸が出港できるまであと1時間40分、接敵まで約2時間……」

宮迫大佐は目を伏せる。デスクを挟んで利根と島風が立っていた。

「司令代理、ここは一度引くべきじゃと吾輩は思うぞ」

「この基地を捨てると言うことか？」

「そうじゃ。幸い咸臨丸は動ける。なら基地の人員をそちらに移してしまふべきじゃと思う。咸臨丸を守りつつウエーク基地を守るといふのは実質的に不可能じゃ。なら全員が生き残る道を模索するべきじゃ」

利根の言葉に明らかに眉を顰める宮迫大佐。島風はただ澄ましてよこに立っているだけだ。

「……しかし、そんな命令受けていない」

「命令がなければできないほどの立場なのかのう？ 基地司令と艦隊

司令を代理とはいえ引継ぐ宮迫大佐ならばその権限があるはずじゃ」

「その責任を取るのは誰だと思ってる」

「宮迫大佐じゃろう？ 生憎、吾輩たち水上用自律駆動兵装は人として認められてないみたいじゃからの」

さらっと言い切って利根は皮肉な笑みを浮かべた。その笑みに苦りきった顔をする目の前の司令代理に言葉を続ける。

「551は今対潜重視で待機、龍鳳は艦戦専用艦として艦載機ファイターキャリアーの入れ替えを行っておる。ウエーク基地全部を守り切るよりも輸送船一隻を守り切る方が容易い。全員が生き残ること、吾輩たち艦隊が洋上に健常であることが敵にとって一番の脅威であるはずじゃ。ならば基地を放棄し防衛戦を一時的に引き下げ押し返せばよい。幸いこの辺りに鉦山もないことじゃし死守する目的も薄いじゃろう」

「その判断は上がすることだ。現場は黙ってそれに従うだけだ」

「その現場を率いるお主にはそれを聞いてくる義務があるじゃろう？」

笑みはあくまで冷めたまま、互いの目を睨む。

「とりあえず出撃態勢で待機だ」

「その判断の遅さが命取りにならなきゃいいがのう……」

利根はそう言うのと背を向けた。島風もあとに続く。

司令室から出ると何かを蹴る音が聞こえた。

「そのデスクは司令代理のものじゃないんじゃがのう……」

出撃ドッグに足を向けつつ利根はそう嘆いた。

「利根」

「わかっておる。わかっておるとも。今のままじゃ防衛すらままならん。宮迫大佐に従うだけじゃ、ここも火の海に沈み、咸臨丸も水底じゃろう」

利根はそう言うってから笑った。

「島風、反逆者になる覚悟はあるかの？」

目の前にぽっかりと暗く沈み込む穴、これを下れば出撃ドッグ直行だ。

「微風を沈ませるわけにはいかないからね。……でも、艀装はどうするの？」

「勿論正規の手段で持ち出すつもりじゃ」

「……伊波少尉を脅すのは正規の手段に入るの？」

「脅すなんて人聞きの悪い。交渉と言え」

利根はそう言うのと急な滑り台のようなシューターに足を突っ込んだ。そのまま体を振り入れる。下るとすぐに脇に避けた。上から島

風が下りてくるだろうからだ。

「それで、シューターの出入り口に揃って何をしていたのかのう？」

「利根姉さんの考えることぐらいお見通しですからね。何時間一緒に戦ってきたとおもってるんですか」

筑摩はそう言つて腕を組んだ。その後ろには大鳳や龍鳳、龍田、阿武隈が見える。そこに滑り降りてきた島風がおうっ!?!と驚いた声を上げる。

「駆逐艦たちから伝言よ。総員出撃準備良し、合図を待つ」

「伝言をよこしたのは響か？」

「残念でした。睦月ちゃんです。意外とあの子ノリノリよ？」

龍田が答えれば利根が笑う。利根が龍田に向かって企み顔を向けると似た笑みを龍田が返した。

「伊波少尉と六波羅医務長にはもう許可を取り付けました。機密書類の処理についてはまだですが、人員の避難だけなら咸臨丸出港までに終わらせられるわよ」

「咸臨丸の方は今用意しています。出港可能時間修正――13分で0532 WAKTを予定。坂本中佐は今作戦を承認済み」

「伊波少尉の指示で艦娘用の武装キャニスターの積み込みを開始します。作業終了まで後35分」

「医務隊はすでに移乗を完了、いつでも動けるとの連絡を受けてます」

大鳳が、阿武隈が、龍鳳が続く。

「もしかして……用意してた？」

「こうなりそうな予感があったからの。デフコンが切り替えられた後からちよこちよこつとな」

「……それで、どうする気です？ 利根姉さん、いいえ。第三分遣隊旗

艦代理、利根」

筑摩の声に利根は高らかに笑った。

「全く、吾輩も大馬鹿じゃと思つたが、皆変わらんか」

「基地を守りたいのも本ただけど、みんなが死んだら意味ないもん。それに、あの子が迎えに来るまで阿武隈は死ねないんです」

「何を今更、って答えるべきですかね？」

「電ちゃんたちが帰ってくるまで誰一人欠けてはいけないんですから」

そんな声を聴いて龍田が笑う。

「私達は月刀艦隊よ。月刀司令が死んでおらず、まだ指揮権が月刀司令にあり、解隊されていない以上、私達は月刀艦隊の所属艦。そしてあの人は……」

「吾輩たちを信じ、吾輩たちの誰一人として沈むことを許さなかった」
「そう。だから私達の達すべき目標はただ一つよ」

皆の顔には笑みが浮かぶ。

「——誰一人死なずに生きて帰ること」

皆の声が重なった。

「全員いかれとるのう。吾輩たちは兵器じゃ、上官の命令に愚直に従うだけの機械じゃったはずなのに」

「利根姉さんがそれを言いますか？ 前から結構反発してたじゃないですか」

「うむ。でもな、正直提督を失うのはちと惜しい」

「それは同感ね」

龍田が返したタイミングで利根は踵を鳴らす。全員が姿勢を直した。

「月刀艦隊旗艦として通達。吾輩たちの目の前まで未確認種を含む敵艦隊が迫っておる。吾輩たち532戦隊と龍田たち538水雷戦隊は前進待機、535航空戦隊と551水雷戦隊は泊地待機。敵航空隊の存在が確認されておる。対空警戒を厳とせよ。——主不在の艦隊と言えど、最強の艦隊であると自負しとるつもりじゃ。全員生きて帰って提督から存分に褒めてもらおうぞー！」

利根の最後の宣言に嘖き出しながらも皆が敬礼の姿勢をとる。敵はもうすぐそこに迫っていた。

00001001 ウエーク・ウイークポイント
PHASE 4

艦娘の出撃ドックが次々に解放され、艦娘たちが飛び出していく。その様子を見て無線に怒鳴り散らすのは宮迫大佐だ。

「誰が出撃していいと言った!? 出撃命令を出した覚えはないぞ!」

《国連海軍水上用自律駆動兵装交戦規定第47条に基づき、水上用自律駆動兵装の完全自律運用を開始したまでじゃ》

返ってくるのは利根の声、それを聞いた宮迫は拳を握る。

「完全自律運用だ!? 誰の許可を取って……」

《第47条第一項! 水上用自律駆動兵装は以下の場合において、事前に、時宜によつては事後に国連海軍司令部の承認のもと、完全自律運用による作戦実行が許可される!》

利根の怒声が相手の発言を許さない。

《第二項の適用条件より一! 人命や人権の保護のためにやむを得ないと判断されるとき! 咸臨丸の乗組員及びウエーク島基地特別根拠地隊の人命保護のため即時出撃が必要であると第三分遣隊旗艦の権限を持つて吾輩が判断した。六波羅軍医大尉の指示ですでに咸臨丸に基地所属隊員の収容を開始しておる。この出撃を輸送隊の咸臨丸船長坂本中佐、六波羅軍医大尉、伊波特務少尉をはじめとした基地士官が支持しておる。あとは貴官だけじゃ。どうする?》

あまりの状況に宮迫大佐は二の句を告げない。

《宮迫大佐、吾輩たちは貴官と一緒に基地で心中するつもりは無い。自殺志願者なら止めはしなないができれば咸臨丸に移り艦隊の指揮を開始してほしい。もしくは自律運用を認めてほしい》

「貴様ら、兵器の分際で誰にもものを言っている……!?!」

《その兵器にすら愛想をつかさされる指揮官だと自覚せい、宮迫大佐》

その物言いに宮迫は顔を赤くする。怒りにわなわたと震えながら

無線に怒鳴り返した。

「明らかな命令違反行為だぞC A—T N O 1！ 司令官たる私を差し置いて——！！ その出撃の責任をだれがとると」

「宮迫大佐、だよな？」

無線ではない肉声が答え、宮迫は顔を上げた。司令室の入口には黒いカチューシャを付けた露出度の高い服を着た少女が立っている。

「おお、島風か。島風お前は私の指揮下に残ってくれたのか」

背中につけた魚雷管に気を付けながら島風は入室して笑った。

「一応代理だけど司令官だしね。それで、宮迫司令。利根たち出てっちやっただけど、どうするの？」

「上層部の指示通り動く。それだけだ」

島風は右手を腰に当てたラフな姿勢のままその言葉を聞く。

「なら私達は何をすればいい？」

「島風はとりあえず命令違反をした艦たちを連れ戻してくれないか？ 私も艦娘たちがいなければここで何もできなくなってしまいうからな」

そのまわりつくような目線を遠慮なく島風に向けながら宮迫はそう言った。そしてそれが、最後の指示となった。

「……宮迫大佐、先に言っとくね。ごめんね」

「島風……？」

「貴官の指揮権停止申請を極東方面隊総司令部およびC S Cに提出、C S C承認、山本元帥、承認。……たった今を持ってあなたの指揮権を凍結します」

「な……なぜだ!？」

「なぜも何もないよ？ 利根たちが動かなかったら今頃どうなってたかわからないもの」

そう言うのと島風は笑う。そして背を向ける。

「ま、まて！ お前は残ってくれ！」

「どうして？ 指揮官でもない人に命令権はないもの」

「残れと言っている！」

そう言って机の下から伸ばした手には、軍支給の拳銃が握られていた。海軍の正式拳銃F N—F i v e s e v e N。それを見た島風が

笑って半身を返した。肩から水平に伸ばされた右手には同型の拳銃。互いに銃口を向け合う構図だが、そこに浮かぶ表情は正反対だった。驚愕の表情を浮かべる宮迫と薄い笑みを浮かべる島風。

「な、なぜ艦娘が人間用の拳銃なんぞを持っている!？」

「あれ、知らない？ 少佐以上の権限があれば部下の艦娘に交付させることが可能なんだよ？ まあそれをする必要なんてないだろうけどね。司令官が外出する際のボディガードとして艦娘を使ったりする時に艦娘に持たせるためにね」

「だとしても！ お前に許可を出した覚えはないぞ！」

「うん、だってあたしの本当の司令官は貴方でも月刀提督でもないもん」

「な……！」

島風が笑みを深くした。

「私の指揮官は高峰春斗中佐、月刀航暉大佐の監視のために特別調査部から派遣された監査役なんだから」

彼女が構える銃口は過たず相手の眉間を捉えたままびくともしない。

「第三分遣隊って実験的な要素もあつたし、司令官が司令官だったから手放しに承認って訳にはいかなかったの」

「実験的要素、だど？」

「中央即応打撃群構想、優秀な艦を優秀な指揮官のもとで集中運用する。聞いたことあるでしょう？ そして今度第50太平洋即応打撃群として成立する。その前身としてこの分遣隊は設立された。だから海域を超えて出動させられることが多かった訳だけど」

向けられた銃口越しに宮迫大佐の目を見て笑った。

「その査察も兼ねてあたしが送られてたわけ。非公式だけどね、その様子を特調と総司令部に送ってた。そして私には最悪の場合に備えて銃の所持と指揮官の罷免を上申できる権利を与えられていたの」

この辺りは月刀大佐も知らないはずだけどね、といって笑う。

「そしてあたしは第三分遣隊指揮官代理である貴方が指揮官として非適格として上申した。それを上層部が支持した。だからあなたはここの指揮官じゃなくなった。そろそろ横須賀が指揮代行を開始するはずよ」

「き、さま……」

「貴方は優秀だった。それは間違いないよ。ただし前線向きじゃなかった。そしてこの非常時に対応できなかった。それだけの話」

そう言うのと笑って見せる島風。

「……貴様ごときに、兵器ぐんぐごときに……!」

「うん、あたしは兵器だよ? でも利根も言ってたよね。その兵器にすら愛想をつかさされる指揮官だと自覚せい」宮迫大佐?」

「貴様——!」

銃声が響く。それをあつさりとかわすと島風はデスクを飛び越え宮迫の懐に飛び込んだ。相手の右手を取るとあつさり銃を引き剥がし、左手一本で宮迫大佐をデスクに叩きつける。

「うがつ……」

「貴方って遅いのね。照準も下手だし。まあ、あたしの動きに追いついても艤装を背負った艦娘に拳銃なんて効かないだけだね」

「う……あ……うぐつ!」

顎に掌底を打ち込んで相手を昏睡させると島風は脱力した男の体を抱きかかえた。

「うーん、案外体鍛えてるのかなあ。結構重いなあ」

そういいながらデスクを回り込む。

「こちら島風、宮迫大佐を確保したよ」

《了解、そうしたらそのまま咸臨丸に放り込め。その後は咸臨丸の防衛を551に任せて島風は最大船速で538に合流してほしい》

「わかった。高峰中佐の指揮で戦うのって実は初めて?」

島風が通信の先に声をかけると男の笑った雰囲気が帰ってきた。

《だろいな。俺は後方支援メインだからな。……こっちは焦ったぞ?」

いきなり島風から緊急通信飛んでくるんだからさ》

「しょうがないじゃん。こっちの司令が遅いんだもん。高峰司令は大

丈夫？」

島風の声に高峰が笑った。

《言っておくがまったく自信がない。今マーカスの駆逐隊がそちらに急行中、二航戦も出港したが、間に合わないものと思え。守り切れんと思ったら威臨丸を守りながら撤退しろ》

「りよーかい。でも、負けませんよ？」

《おう》

通信が切れると同時に、浮かんでいた笑みが消える。

「さて、微風の前じゃカツコ悪いところ見せられないし、頑張らなきゃね」

「で、代理の司令部がこんなことになってるわけか」

「ようこそ、ごたごたの最前線へ」

高峰は管制卓のキーボードを叩きながらそう答えた。入ってきたのが誰だか見なくてもわかる。杉田だ。

「杉田中佐」

「おう、電嬢と天龍もいんのか」

「バックアップ要員でいらってる。何かあるかわからないしな」

極東方面隊第三戦闘指揮室、急遽あてがわれたその部屋の壁面いっぱいスクリーンにはたくさん情報が並んでいる。杉田はそれを

ぱぱつと確認しながら遠慮なくずかずかと入り込む。

「で、この状況になっても月刀の馬鹿は連絡を取ってこないと」

「ああ、まったく、どこで何してるやら」

高峰の隣の席についた杉田はバックレストからQRSプラグを引き出すと自分のうなじに突き立てた。

「状況は？」

「あと12分で538と敵との距離が30キロを割る。いつ砲撃が来てもおかしくない。島風と微風があと3分で538と合流」

「航空隊」

「龍鳳の烈風が咸臨丸と各艦隊の直掩に入ってる。利根の偵察機からの連絡は23分前に途絶えた」

「落とされたか？」

「暗闇の中だな。正直めちゃくちゃな精度だ。かなり高精度の電探を積んでるらしい」

「らしいってお前、らしくないな。幻視の名が泣いてるぜ？」

そう言われて苦い顔をする高峰。

「俺でも視えないんだよ。敵が」

「あ？」

「敵が本当に一隻しか視えない」

それを言われて杉田は考え込むように黙った。

「……つまり可能性は二つだろう。高峰の目を欺けるほどのステルス戦隊か」

「120を超える艦載機運用能力と戦艦クラスの長距離高威力の主砲と片舷16門なんてふざけた数の魚雷管を備えるトンデモ深海棲艦の単騎突撃か」

「……どっちがトンデモかねえ」

「どっちにしても変わらねえよ。前者のトンデモが後者のトンデモに切り替わるだけだ」

その切り替えしに杉田が笑った。

「ま、その通りだわな。どっちにしてもやることは変わらないわけだ。……利根と筑摩はこっちで持つ。鷹の目が見えるから何とかなると

思うが……」

「水雷戦隊は俺が持つ、空母は……」

「私がやろう」

飛んできた声に高峰は顔を上げ、すぐに立ち上がった敬礼の姿勢を取った。すぐ後に杉田も同じように敬礼の姿勢をとる。数テンポ遅れて艦娘たちが敬礼をする。

「山本元帥……！ どうしてここに！」

「月刀君にはマニラで借りがあるのでな。人が足りんのだろう？ 飛燕のようにはいかんだろうがやれるだけやらせてもらおう」

「はっ！」

高峰が敬礼の姿勢のまま答えると山本は高峰の隣の卓につく。

「私が指揮に上番するのは実に3年ぶりだな。少々自信がない。全体指揮は任せるよ。高峰君」

「へ？ りよ、了解しました！」

背中に汗をかきながらも高峰は無線をオープンする。

「ホテルケベックよりウエーク艦隊、これより高峰春斗中佐が指揮をとる」

《こちら第三分遣隊旗艦利根じゃ。自律運用を終了し指揮権を高峰中佐に引き渡す。どうすればいい？》

「捕捉できるのは未確認種一隻のみ。これを叩く。利根と筑摩は杉田中佐の指揮下に入れ、鷹の目を使った遠距離射撃で前方展開する水雷戦隊を支援。航空隊は山本元帥の指揮下に」

《や、山本元帥!?!》

無線の奥で何人もの声が被った。その反応を聞いて高峰は自分の感じる違和感が自分一人のものじゃないことを確信した。

《元帥御自ら指揮をとられるんですか!?!》

この声は大鳳だろう。山本も通信をオープンにする。

「久々で自信はないが、協力させてもらうよ。諸君の働きに期待する」
《はっ！》

そして全員が配置につく。電と天龍も管制卓についた。指揮をとることはできないのだが状況を監視する目としての役割を担う。そ

してその時を高峰が見極めた。

「ターゲットマーク！ 敵艦砲撃態勢！」

「こっちも射程に入った！ 利根、徹甲弾！」

《了解じゃ！》

リンクした視界が明るくなった東の空を見る。一条の光が差し込むと同時。

「交戦開始！」

双方の砲が閃いた。

「ホントに航空隊が出てきたっ！」

先頭を切るのは島風だ。40ノットの高速で航空戦が展開される空域の真下に飛び込んだ。数瞬遅れて微風が突入する。

《突出しすぎるな！ 後続が追いついてない！》

「後続を待つより相手に突っ込んだ方が早い！」

島風は高峰の声を無視する。その上で遠く点のように見える相手を見る。

「ウルファイス、ケイ、頼んだ！」

二機の自律砲台が前面に出る。遠くの点がチカリと瞬いた。数瞬

後に島風から500メートルほど離れたところに着弾した。続いていくつか落ちてくる。

「遠近峽差！」

「お姉ちゃん！ 上！」

微風の叫びにとつさに転舵。海面を蹴れば左手に爆弾が落ちてきた。その水柱を見つつ空を見上げれば爆弾を抱えた数機が急降下しようとして背面飛行に移ったところだった。

「エルフィーナ！」

島風の叫びに呼応するように主砲が閃く。敵機を脅すように飛び抜けた砲弾のために一度敵機の編隊が散る。そこに龍鳳の艦載機が飛び込んできた。

《上空はなんとか押さええます！ 島風さんたちは前へ！》

「ありがと！」

改めて前に飛ぶ。再び敵の点が瞬いた。想像以上にサイクルが早い。島風の頭上をかすめるようにして飛び抜けた鉛の塊が起こした衝撃波が島風を叩く。一瞬眉を顰めるが、これくらいなら問題ない。その衝撃波すら利用して加速する。

《龍鳳より島風、航空隊が雷跡視認！ 数8！ そっちに一直線！》

「了解！」

上空の航空戦は拮抗、いや、こちらの分が悪い。だからこそ早々に相手に食いつく必要がある。警告のあった雷跡が見えた。射角も広く避けるのは容易い。連装砲ちゃんもこれなら楽に避けるはずだ。

「微風！ そっちに一本！ うまく避けてね！」

「わかってるっ！」

微風がそう答えてわずかに進路を変える。それを横目で見ながら島風は笑った。思ったよりもうまく避けている。この全力についてきてくれるのも微風だけだ。

「やっぱり嬉しいなあ、こういうのは」

こういつては不謹慎なのかもしれないが、微風と一緒に戦える機会になったのは嬉しい気がする。そしてそう言う思考をする余裕がある自分に驚いた。

「案外慣れてきたかな……つと！」

真上で敵機がひっくり返って落ちてくる。速度を緩めつつ右へ転舵。左前に爆弾が落ちてくる。

水柱が治まるころに敵艦から小さく煙が上がった。どうやら利根たちの砲を当てたらしい。

《徹甲弾だぞ!? どんだけ硬いんだあの船!》

杉田の声が無線に割り込む。

(それじゃあ駆逐艦の砲じゃ抜けるわけないね)

そう思いながらも島風は歩みを止めない。止めることは相手に負けることになるからだ。

「それでも、魚雷なら！」

島風は全速で前へ。そろそろ駆逐艦の砲も射程に入る。

ここまで来たらやることは単純だ。砲で牽制しながら全速で相手に近づいて魚雷をありったけ叩き込むだけの簡単なお仕事だ。

「高峰司令！ フリップナイトの使用許可を！」

《高峰より島風微風、フリップナイトシステム起動承認。無茶するなよ!》

「保証できないけど了解っ！」

「了解です！」

島風の背中に乗っていた最後の一基——ルーカンが海上に飛び降りる。

「ルーカンから順に砲撃開始！ 目標、敵艦船！」

「こつちもいくよ！ アル！ 一番槍お願いね！」

4基8門を操りつつ島風は前を見据える。そこに並ぶように同じく4基の連装砲を繰る微風が追いつく。

私達は“島風型”だ。

最速の駆逐艦にして、最強の駆逐艦だ。速いだけではなく、火力と雷撃能力を高い水準で備えた駆逐艦だ。誰よりも速く、誰よりも強く。

視界にメッセージが現れる。RDY／Flip Knight。
8基の自律砲台がうなりを上げる。エンジンが一際甲高く鳴いた。

フリップナイトシステム、エグゼキュート実行。

それを合図に8人の騎士はそれぞれの女王の命の元に動き出す。

「微風、連装砲ちゃん、一緒に行くよ！」

そして、さらに加速する。最速の名に恥じぬ速度で前へ。
まだ遠い敵が笑った気がした。

00001010 ウエーク・ウエークポイント
PHASE5

「しれーかんに何をしたの?」

雷は目の前の少女を睨んだ。

「なにも、と言ったら信じる?」

「まつさか。しれーかんの叫び声がして慌てて出てきたら、そのしれーかんが蹲ってて貴女がその横で笑って立ってる。物証がある訳じゃないけど、状況的にはクロよね?」

東京シテイ内廃棄区画、秋葉原地区、そこにある部屋で雷とスキュラは向かい合っていた。3階の真っ暗な部屋には小さな非常灯だけが灯っている。その隣の部屋では巨大なコンピュータがフル稼働しており少しでも電力をそちらに回すためだ。その部屋に航暉は何も言わずに入っていった。

「別に彼の精神をいじったとかそういうことじゃないわよ?」

「何をしたかって聞いているの」

「……アイデンティティ・インフォメーションって知ってる?」

「個の情報……個性を数値に置き換えて電腦で把握させるためのコードだったと思うけど?」

雷がそう言うとおレンジ色の非常灯に紫色の瞳が光る。

「そう。義体化のイニシヤライズとかに使うやつね。もつとも真の意味でのアイデンティティ・インフォメーションはリアルタイムで変化し続けるから把握なんて困難なんだ。人は成長し変化する。それまでの経験、そしてその記憶と思い出からアイデンティティ・インフォメーションは干渉を受けるからね。それでも個人の行動予測が可能ないように、急激に全てが書き換えられるような場合はまず存在しない。だからそのアイデンティティ・インフォメーションの中でも変化しにくい部分をまとめたPIXコードピックスというものが存在する。これ

アイデンティティ・インフォメーション
が皆の個の情報と呼ぶものにあたるんだけど……」

「その説明必要なのかしら？」

「まあね」

スキュラが呑気にそう言うのと雷が目をさらに細くして睨む。

「……つまり、しれーかんのアイデンティティ・インフォメーションに何かしたの？」

「何かをしたのは私じゃない。私はそれをあるべき状態に戻したただけだ」

「あるべき状態？」

聞き返されたスキュラはくつくつと笑う。

「改ざんされてたんだよ、記憶が。それも何回にもわたってね」

「……」

「言つとくけど私が何もしなくても遅かれ早かれああなつてたよ、彼。そしてこれ以上遅くにああなつてしまうと、こちらでも庇いきれなくなる」

「庇うつてなによ。何から庇うのよ！」

半分怒声に切り替わった雷の声にスキュラはやはり笑みを崩さない。
「い。」

「軍から」

「軍、から？」

「そ。まあ殺されるって訳じゃないだろうけどね。今軍に戻っても少しずつ狂っていくのを見る羽目になるよ？」

「どういうことよ」

「ライちゃんなら記憶あるでしょ？ 鬼龍院特務大尉の電腦ウイルス」

「……！」

「あれのマイナーチェンジ版。あれ、元は日本陸上自衛軍の電腦ウイルス。その亜種。大本は昔私が作ったやつで、それを元に今の軍属技師がいろいろいじったみたいだね」

「……それがどうつながるのか全然見えてこないんだけど」

スキュラが笑う。

「あたしが製作を依頼された時の使用目的は『記憶の短絡を起こさせ相手をコントロールするための簡易洗脳ウイルス』だった。スタックスネット型のウイルスで使い終わったら自己消滅するように組んだから最初の侵入時に検知できなければウイルスの存在にすら気がつけない。普通の洗脳と違ってパターン決めて生成したウイルスを感染させてあとは起動キーを送るだけだから、一斉に何人でも同時に洗脳状態にすることが可能だ」

歌うようにそう言ってスキュラは立ち上がる。

「もし、ガトーがそのウイルスに感染していたとしたら、そしてそのウイルスの感染元が軍のサーバーだとしたら、どうする?」

「……どうするって聞くってことはしれーかんは感染してたのね?」

「うん、ばつちり。しかも『起動しっぱなし』でね。いつから起動してたのか知らないけど」

「……」

「私はそれを止めただけよ」

納得して頂けた? と行ってスキュラは微笑んだ。

「なら洗脳が解けたんでしょ? ならなんでしれーかんは……」

「どうしてあたしを無視して行っちゃったの? かな?」

スキュラは腕を組む。非常灯の明かりは彼女の輪郭だけを映し出した。

「それをしっかりと説明するにはかなり時間がかかるんだよね。まあ一言で言う……」

スキュラの輪郭がぐにやりと揺れた。笑みを深くしたのだろうか。

「君と電の存在が彼にとって悪夢そのものだからだよ、雷ちゃん?」

朝焼けの空に翼端から雲を曳きながら彗星が海面に向けてダイヴする。対空砲火をすり抜けてただ一隻の敵艦に向けて頭から突っ込む。放たれた爆弾は敵艦に向けて吸い込まれていくが、その背中から伸びる龍の尾のような部位に叩かれ、ずらされた。それでも何とか直撃を免れた程度、極至近距離での爆発のはずなのだが、それでも傷一つない敵に山本は舌打ちをした。

「爆弾一発ではどうにもならんか……。CVL—ZHO2龍鳳」

《は、はい！》

「制空権何とかならんか？」

《これでも可動機全機投入しての全力です！ これ以上は……！》

「CA—TNO1利根、三式弾で防げるか？」

《やってみるが、保証はできんぞ》

「ならやってくれ。532の直掩3機を前線の支援に回せ。もう一度同じ場所を叩く」

《りよ、了解！》

高峰は涼しい顔で指示を出していく山本に内心舌を巻くと同時に困惑していた。

（なんだこの攻撃一辺倒な指示。攻めしか考えてない）

攻撃は最大の防御というような指揮にわずかに手を止める。

（艦爆艦攻の直接指揮による高精度航空攻撃……艦戦重視のカズとも違う方向性の“天才”か）

三個戦隊使って戦況は拮抗——いや、若干こちらが不利。相

手の底が読めない。

相手は一隻のみ、そこから航空機が発艦するのを確認し、同じ船から戦艦クラスの砲撃が飛び出し、雷撃も確認できた。

「551睦月、ソナー波の解析は？」

《こちら睦月、砲撃と雷撃の嵐で海面ひっちゃかめっちゃかなんで細かいところまではわかりませんが……海中に怪しい影は無いです》
睦月がそう言うとき高峰はひとり頷いた。

海上には敵艦一隻以外に影はなく、対空・対艦レーダーは正常に起動しているし、空中で先頭を練り広げている航空機からの映像でも敵艦影は攻撃中の一隻を除き確認できていない。敵に位置は正確に掴めている状況だ。それは高峰が視る戦況とも合致している。だが敵艦の情報が不足する場所が存在していた。それが水中である。

高峰は水中からの魚雷攻撃を警戒していた。もし潜水艦が潜んでいたとして魚雷を撃って当てるには深度を調整しなければならぬ。その時には必ず動きが出る。その音を聞き取るのがソナーだ。そして水中探索、そこからの対潜戦闘に明るいのが睦月だ。

「了解、睦月はそのまま対潜警戒を続行。551はそのまま咸臨丸を護衛しろ」

《551阿武隈了解です！》

睦月を咸臨丸から離すことはできない。潜水艦が襲ってくるとしたら咸臨丸のような輸送船を狙ってくるだろうと予測できるからだ。その時に対潜指揮をとれる睦月が必要になる可能性が高い。

それと同時に睦月を最前線に向かわせたいとも考えてしまう。

(もつと正確な海中データがあれば……)

距離が延びれば伸びるほど、ソナーの結果は誤差を生じさせ、難解になっていく。海中の音波の進み方は反射したり屈折したりと一定ではない。それを修正することは非常に難しい。

(それでも、何とかするしかないよな)

ひとりそうこじると高峰は意識を前線に戻した。同時にチリツとした痛みを感じる。誰かが被弾した。非常用スイッチがまとめられた非常用パネルにあかりが灯って、リンクのセーフティが起動した

ことを告げる。リンクのチャンネル3―4。これは――
「島風！」

爆炎の影から飛び出しながら島風は相手を睨んだ。

「至近弾だったはずなのに……」

左の足首に鈍痛が走る。それでも無視して動くしかない。今ここで死ぬわけにはいかないのだ。

敵の砲弾から掠った。掠っただけでこれである。もしあと数瞬気がつくのが遅れていたら、文字通り海の藻屑となっていたとぞっとする。敵には重巡の命中弾4、至近弾多数、艦爆の直撃2、至近弾4が出て相手はやっと小破になったかどうか。

「ルーカン！」

一番小型の自律砲台が真上に迫っていた敵の艦爆機を蹴散らした。

《お姉ちゃん！》

「大丈夫、まだ動ける！ 攻撃続行！」

無線に乗った妹分の声を聴きながら、島風は速度を上げようとする。ダメージのせいだろう、36ノットが限界となりそうだ。

「この島風がやられるなんて……！」

それでも止まる訳にはいかない。さっきの砲撃で背負った魚雷管がやられなくてよかった。魚雷は駆逐艦の持つ切り札なのだから。

「ケイ！ ついてきて！」

相手に向かつて飛び込んでいく。どこか驚いたような、とぼけたような笑みを浮かべる敵はそれを見てさらに笑みを深くする。それを見た島風は背中に冷や汗をかきつつ速度をあげられるだけあげた。そのまま相手に向かつて突っ込んでいく。

「まさかこれをやることになるとはね……神通さんに感謝かな」

島風はそう呟いた。

島風がまだ純粹な艦だったころ、第二次世界大戦時の所属は第二水雷戦隊、華の二水戦と呼ばれた攻勢部隊だ。その記憶が呼び覚まされる。その速力を活かしての戦いはできなかったが、それでもその戦術は生きている。なにせ島風自身も二水戦の旗艦として戦ったこともあるのだから。

前へ踏み込め。どの艦よりも速く。

「私にはだれも、追いつけないんだから!」

雷撃用意。相手の砲がこちらを向いていた、その砲を見て一瞬足が止まりそうになる。それでも前へ。援護するように砲弾が飛来した。おそらく……鷹の目を使った利根の精密砲撃。

「いっけ——っ!」

背負った魚雷管が魚雷を吐きだすと同時、相手の主砲が閃いた。

相手の目は赤く輝き、至極嬉しそうに細められていた。

それを認めたのを最後に彼女の記憶は途切れることとなる。

「島風！」

セーフティを無視して感度を最大まで上げる。それでも繋がるはずの戦術リンクの反応はフラットな波形を返すだけだ。戦域を示した海域図からも島風のシンボルが消え去っている。高峰の手が強く強張った。

ロストコンタクト
行方不明。

現状だけ言えばそうだ。だがこの状況でそんな楽観視ができるはずがないのだ。もつとも考えられる可能性は。

敵艦の攻撃による撃沈。

「落ち着け高峰、てめえが焦ってもどうにもならねえ」

酷く落ち着いた声でそう咎めるのは杉田だった。鷹の目用のヘッドディスプレイを付けたままそう言って引き金を引く。敵艦に向かって吸い込まれていく砲弾は過たず敵艦にあたるが、わずかに敵を揺らしたただけだった。

「くそ！ 微風！ 島風は見えるか!？」

《こちら微風、お姉ちゃんは……え?》

通常無線に一気にノイズが走る。

「微風、おい！ 誰でもいい、538応答しろ。おいつ!？」

高峰の焦った声が戦闘指揮所にこだまする。同時に警報が鳴り響いた。

「不正規アクセス警報!?! なんでこんなタイミングでハッキングされるんだ!?!」

同時にマップから指揮下にあった艦の情報がどこかに転送されていく。転送された艦から通信回線がクローズに移行されていく。微風、暁、響、龍田、利根……。

「おい、どうなってる? 戦術リンクの通信コードが書き換えられているぞ!?!」

「俺が知るかよ!?! ハッキングの迎撃が追いつかない」

高峰は叫びながら予備回線オルタネートを開き、部隊のリンクを取り戻そうと試みる。そこに山本の声が割り込んだ。

「高峰君。クラツカーの迎撃はできるかね？」

「迎撃よりも艦娘との指揮系統を奪われないことを優先します！このままじゃ、艦娘全員乗っ取られる！」

「了解した、現在使用しているコンピュータ群ネットワークを独立運用に、CTC、CSCオフライン」

「助かります」

高峰は短く答えてからキーボードを叩く。

「杉田、一度オフラインにしろ！ 全員乗っ取られるぞ」

「了解。オフライン」

「なんだこの尋常じゃないパワー、デカトンケールクラスのスパコンがバックにいるぞ。個人レベルでできる攻撃じゃない」

防壁の再構築も間に合わない。ハッキングに使われてる信号が乱数を元に暗号パターンを変更していることは予測がつくものの予測が立つ前に次のテーブルに飛んでおり解読ができない。

「防壁042突破つてことはネットワーク丸々乗っ取る気かクソつ！」

「高峰中佐！ 電がハックされてる！」

前方にある予備の管制卓から声が上がった。天龍の慌てたような声に交じって、少女の呻き声がかすかに響く。

「だめ……しれいか さ……」

「コードを引き抜け！ 早く！」

「ダメっ！」

電が叫ぶのとほぼ同時、天龍が電のうなじから伸びるQRSコードを引き抜いた。同時にスクリーンがブラックアウトし、オレンジ色の文字が浮かび上がった。

生死去来

棚頭傀儡

一線断時

その文字が消えると、消える直前の画面が戻ってきた。全艦「作戦行動中」のタグが出ているがコントロールは効かない。だが隊としての陣形が整えられている所を見ると、利根あたりが指揮を代行しているのだろうか？

「司令官さん……です」

電がぽつりとそう言った。

「このリンクパターン、司令官さんのパターンなのです……」

息荒くそう呟いた電の肩を支えながら天龍が聞き返した。

「このハッキングが司令官の仕業だって言うのか？」

電が弱々しく頷くとそれに被るように山本が声を上げた。

「コントロールシステムに戦闘系プログラムがロードされ始めたぞ」

山本の指摘が正しいことを示すように画面にプログラムが新たに実行されたことを示す表示が現れた。

「ARCA DiA—Network System——！」

それと同時に航空隊が作戦を開始するように動き出す。数機の烈風が恐ろしい勢いで加速し、一気に敵機の陣形を崩し、蹴散らしていく。

「まさか……」

無線は途切れ、戦闘の推移だけが送られてくる画面をただ茫然と見上げる高峰。

あれは、あの動きは……。

「カズ……？..」

00001011 ウエーク・ウエークポイント
PHASE 6

その時、響の視界にはたった一文だけが表示されていた。

I have control. / DD-AK02

それが消えると同時、視界にフィルターがかけられたように様々な情報が追加される。

敵まで1.8km、相手の艦首方位、進行速度。それらが不自然なほどに明瞭な視界に投影される。武装管制システムが起動し勝手に狙いを付けていく。

RDY Gun. Attack it. / DD-AK02

砲撃用意完了、攻撃せよ。響。

艦装の電探情報とリンクされ明瞭になった視界の先に見る敵に向かって砲弾が叩き込まれる。体はその反動を殺そうと前に加速するように動く、そのまま前へと駆けだした。

「この感覚は……」

《響、聞こえてる?》

「姉さん?」

体の自由は効かないが声は出せる。

《無線は生きてるわね。全く、銀弓作戦のリプレイみたいな状況なんだけど、そっちは大丈夫?》

「こっちは……うん、リンクが回復、というより姉さんの電探情報と行動予測がリンクされてきてる」

《へっ? そんなことしてないんだけど……ってホントだ。いつの間に……》

「おそらくは……このリンクの感覚はおそらく……司令官だ」

《……戦闘神経症とかじゃないでしょうね?》

「どうだろう。自分じゃ判断できないけど……たぶん大丈夫だ」

響はなぜかその確信を持っていた。このリンクは、このリンクの先は……

「間違いないよ。月刀航暉司令官だ」

「くっそ、防壁021突破されたぞ！」

「分散型ウイルスを電の電脳経由で叩き込んだんだ。電のキーを利用して電のアクセス権を掌握、それを使つての管理システムヘクラッキング、いい腕してやがる」

「高峰、感傷に浸つてる余裕はねえぞ！ おかげでこっちはただの監視室になつてる」

杉田の叫びを聞きながら高峰はひたすらにキーを叩き続ける。

「青葉、聞こえてるか？」

《こちら青葉、クリア&ラウド！》

「ウエーク近海の戦況、そつちのスクリーンにどう出てる？」

司令部からわざと外していた青葉に問いかける、今は極東方面隊総司令部にいるはずだ。

《それが……》

「どうした？」

《指揮官名に月刀航暉と表示されてるんです。

中央戦略コンピュータ、中央戦術コンピュータともに指揮官の変更を承認、正規アクセスとして処理されています》

「……カズ、なにやってんだよ」

高峰はそうつぶやくように言うで一瞬手を止めた。

「高峰君、正直な意見を聞きたい」

「……なんでしょうか、山本元帥」

「このハッキング、月刀君のものだと思っかね？」

その質問に今度こそ手を止めた。

「……確かなことは言えませんが、確率が高いと思います」

「その根拠は？」

「月刀大佐は電の電腦キーを所有しています。電への何らかの接触、もしくは電を通じての救難支援要請を回してくる可能性があるとして、その電腦キーの停止は行われていませんでした」

「即ち、電への侵入はいつでも可能だった？」

「はい。そして艦戦重視の航空機動パターン、艦装への介入率の高さの特長も月刀大佐の戦術リンクの特長と一致します。ですが……」

「なんだね？」

山本が聞き返すと高峰は悔しさを耐えるように指を握りしめた。

「電に電腦ウィルスを送り込むようなことをするとは到底思えませんが……」

山本はそれを聞いて顎を撫でてからコードを引き抜いた。

「戦略・戦術双方の中央コンピュータが正規アクセスとして処理している。まずはこれを止めねばな。高峰君と杉田君はこのままここで指揮権の奪還を続行しろ。私は総司令部に行く、CTCとCSSCに今指揮をしている月刀君のアクセスをすべて拒否させるように説得することしよう」

「お願いします」

「くれぐれもDD-AK04電を繋がないように」

「了解しました」

高峰がそう返せば、山本が指揮所を出ていく。高峰はそれを敬礼で見送ることをせずにただ作業を続行した。

「……それで、実際のところどうなんだ？」

「なにがだ？」

「これが月刀のハックかどうかってことだよ」

高峰はキーを叩きながら杉田の声に目を伏せた。

「十中八九カズだ。だが、理由が視えない。CTCとCSCに月刀航暉と表示された時点でカズが生きていることを知らしめたことになる。その時点で行方をくrams意味がなくなった。なら、不正アクセスでこつちにコンタクトを取る理由は何だ？」

死者を殺すことはできない。航暉にとって今は死んでいた方が都合がいいはずだ。それを覆してまで何かをしようとしている。

行方不明の利点を捨ててまで艦隊を守ろうとしているなら電を経由する必要はない。直接軍のサーバーにアクセスすればいい。なぜ不正規のルートを使って乗り込む必要があつたのだ？

「誰かが月刀を騙ってる場合は？」

「この戦闘の進み方を見てもそう言えるか？」

杉田に即答で返すと彼は黙り込んだ。

「……直接確認するしかないか」

「何をやる気だ？」

高峰は改めて席に座り直す。うなじに刺さったQRSプラグが揺れる。

「介入元を突き止める。ハードの位置にカズもいるはずだ」

「正気か？ パワー負け確定した状況で潜って何になる？」

「諦めるわけにはいかないんだよ、俺たちは。月刀航暉と電は国連が待ち望んだ貴貨だ。これを逃せば二度とないかもしれない講和への貴貨なんだよ。今カズに死なれる訳にはいかない、絶対に！」

高峰はそう言うコンソールを操作した。

「30分経つても俺が戻ってこなかったらどこかの研究機関にでも放り込め」

「死ぬなよ」

「カズなら聞いてくれるはずだ」

高峰の意識がネットの海にダイヴする。乗っ取られたラインを遡

上する。

(お願いだ、カズ)

お前まで俺を見捨てないでくれ。

「……」

空になった魚雷管がかちりと音を立てていた。真つ赤に歪む視界の中で彼女は目の前を見据えていた。自分の体が相手に吊るさされているのはわかる。だがその体の信号はとつくと途切れていた。機能としては死に体、相手に掴まれている右手なんてもうおかしい方向に捻じれているし、腰から下の感覚は完全に消えていた。かろうじて電脳が最後の抵抗を続けているといった所だろうか。

「……キヒ」

目の前の相手は笑う。笑い返そうとするがもはや表情すら動かないようだ。

「キヒ、キヒヒヒ……」

相手は彼女を放り投げるようにして持ち替えた。右の手首をもつて吊るしていたのを、直接頭を鷲掴みにした、力なく赤く染まった右腕が垂れる。

「キヒヒヒ……」

チタン合金の脳殻を押しつぶそうとするかのように力が加えられていく。もはや痛いという感覚すらない。それでも電脳の活動限界

が近いことを理解した。これが押しつぶされるとき文字通り私は終わるんだらうと理解した。

せめて妹の前では避けたかったなあ。

彼女はそんなことを考えていた。武器も残っていない。体も動かない、無線もつながらないではできないことなんてない。そうなれば案外呑気にそんなことを考える余裕もあるのだから。

暗い掌に覆われた視界はなにも映さない。きっとこのまま終わるのだから。

「――！」

誰かの叫び声。同時に視界が揺れる。一気に明るくなった視界に処理が追いつかない。

視界が急激に揺れる。何かに引きずられているのだろうか。ノイズの多い視界で誰かに担がれたのを知る。

「まだ生きてる?」

「……」

ピントの調整もできない状況だ。だが声である程度わかる。

「アル、バーニイ! ケイも!」

砲撃の音がくぐもって聞こえる。急激に後進に入ったのだから。敵の全貌が見えるところまでは下がったらしい。首の後ろに違和感を覚える。どうやらQRSプラグが刺されたらしい。

〈……微風、だよね?〉

「よかった……間に合った……! こちら微風、島風を奪還! 島風は大破状態、戦闘続行不可!」

隣から声がする。揺れる視界で相手の砲が動くのが見える。

《微風! 2秒後左へ!》

「了解!」

有線経由で指示が飛ぶ。この声は……暁か。

微風の右耳を掠めるように砲弾が駆け抜けた。

〈連装砲ちゃん、達は……?〉

「ウルファイスマケイもルーカンもエルフィーナも無事! ウルファイスの弾丸はからっぽだけどね!」

島風の最後の記憶ではまだウルファイスに弾丸は残っていたはずだ。それを使い果たしたと言うことは……微風が操作したことになる。

視界の先では島風と微風を守るように自律砲台が動いている。見えるだけで6基、これを全て微風が操作してるのだろうか。

「ちいつ！ 装甲が硬いつ！」

それを示すように自律砲台の一つが砲弾を撃ちだす。あれはバーニイだろうか。続いてケイ、向こうの主砲が瞬いた。

「アル！」

呼ばれた微風の一番機であるアルフォンスが右に飛んだ。直後に巨大な水柱が立つ。

自律砲台8基を繰るなんていくらなんでも無茶が過ぎる。攻撃をさせようと照準を支持するたびに脳にヤスリをかけられるかのように鋭い頭痛が襲っていた。

「いろいろ言いたいことはあるけど、とりあえず後！ 一度退くよ！」

〈……基地は？〉

「お姉ちゃんは自分の心配する！ お姉ちゃんはひとりで戦ってるわけじゃないんだからね！」

言われて気付く。ああ、そうか。仲間を頼むという手があったか。

島風の視界の先に飛び込んだのは暁だろう。その後ろには響の姿も見える。二手に分かれて突っ込んでいく。相手の砲が動いていく。

〈微風、私の声を無線に中継してくれる？〉

「わかった、……オツケー、いいよ」

〈こちら島風、みんな聞こえてる？〉

《おお、無事じゃったか》

〈その声は利根ね。私の魚雷攻撃が通っているはず。向かって左側、あいつの右舷側を狙える？〉

《やってみるわ！》

暁の声。それを聞いて島風は通信終わりを宣言した。

〈微風……〉

「なに？」

〈ごめん、心配かけた〉

「うん。でも生きてたからいいよ。許す」

〈ありがと〉

砲撃音が遠のいていく。戦闘エリアを離脱しようとしているのだ。

結局、いいところ見せられなかったなあ。

ノイズまみれの視界の中でぼんやりと思う。

独断専行気味だった自覚はある。これはある意味その罰なのかもしれないなど、薄れゆく視界の中でそう思うのだった。

爆風。

それを感じつつも、左へ転舵。右腕につけられた主砲が煙を上げる。

「ヘッドショットでも揺らぎもしないって、どんな神経してんのよ」

暁はくるりと円を書くように砲撃の勢いを流しつつ、左へ左へと回り込む。

「間違いないわ、右舷側を庇ってる」

無線を開いてそう言うのが早いのか、視界に文字が表示された。

Go A s t e r n. / D D—A K O I

後進せよ。体はそれを理解するよりも速く動いていた。直感的にそうするべきだと感じたのだ。そしてその目の前を何かが猛スピードで通過した。その衝撃波で耳が痛い。それでも暁の眼はその刹那

に通過したものが何であるか見きわめていた。

「大鳳さんの艦爆機!？」

数は3機、高度5フィート——1.5メートル。いくら波穏やかとはいえ無茶な高度でわずかに機首上げをしながら敵に向けて飛び込んでいく。直後敵を包み込むように爆裂が発生する。その中で初めて敵の顔が苦悶に歪んだ。

極低空水平爆撃。暁がそれを見るのは二回目だ。一度目は……演習で蒼龍の江草隊が決めるのを見たことがある。それを1.5メートルなんてふざけた高度でできる人物を暁は一人しか知らない。

「……司令官!」

無線に問いかけるが答えはない。その代りに指示が改めて投影された。

Illuminator Links C M P L. R D Y T
orpedo. S L V / D D—A K O 1, D D—A K O 2

暁、響、諸元入力完了、魚雷射出用意よし。全門斉射せよ。

視界に弧が描かれ投射域が表示される。暁は迷うことなく指示を実施。両脇に備えられた2基8門の魚雷管から圧搾空気が噴き出す音と共に魚雷が押し出された。

G o A s t e r n. / D D—A K O 1, D D—A K O 2

再び後退の指示。今度は響にも指示が出た。相手の足を賽の目に区切るように魚雷の雷跡が伸びる。だが、射角をいっばいとった雷撃は躲すのも容易い。この攻撃で沈めることは難しいはずだ。

それを見つつ後退していると頭上を砲弾が駆け抜けた。相手の右舷に吸い込まれた砲弾はその舷側を食い破る。

《上手く当たったかしら?》

「ナイスよ筑摩さん! ばっちり!」

相手の顔が歪む。それでも相手は沈まない。直後に相手の主砲が閃いた。暁はその弾道を視る。息をのんだ。

「響!」

響の真横を突き抜ける。直後爆炎。

《……っ!》

「響!？」

《……まだ、沈まんさ。主砲をまるつと持っていていかれた。駆動系は正常に動く!》

とりあえずは生きていたことに安堵するものその声は聴いているだけで痛みが伝わってくる。これ以上の戦闘続行は難しい。

(咸臨丸は逃げ切れる場所まで逃げたかしら?)

そうであってくれと願う。咸臨丸が逃げ切る態勢になるまでここを引くことはできないのだ。

CAUTION! Anti-Shock Position.
Breath Impact.

意識に警告文が割り込む、対ショック姿勢をとれ。暁がお腹に力を入れると同時に、敵に向かって何かが落ちていき一気に光球となった。

「――!」

強烈な爆風が暁をシイクする。ほぼ水平方向からの爆風で体は一気に後退していった。ナノマテリアル被膜が蒸発する音がする。

敵から800メートルは離れたはずだ。それでもこの威力。それが立て続けに2回襲ってきた。

(爆撃? いや、ただの爆撃じゃないわ)

暁は両腕で顔を庇いそれに耐える。爆撃にしては爆風が長い。そこで気がついた。

サーモバリック爆弾。

——通称、気化爆弾。

爆薬の爆発ではなく、酸化エチレンなどの気体と空気の混合物の爆燃により、空間そのものを爆発させる。3000度近い高温と12気圧という人を圧殺するに足る強烈な衝撃波を広範囲に発生させることになる。殺傷範囲は数百メートル。

サーモバリック爆弾の威力はその爆轟による爆風が長時間連続的に全方位から襲いかかってくることにあり、それにより人体のような柔らかい物体はことごとく圧搾されることになる。

(それにしても艦娘用の兵装にそんなものを装備してたって聞いてないんだけどー!)

ようやく衝撃波が納まれば何とか目を開けることが可能になった。

敵の方を眺める。あれだけの衝撃を受けておきながら沈んでいないのを見て暁は慌てて砲を向けた。そして引き金を引く。

その砲弾が相手にあたる前に相手が海面に吸い込まれて消えていく。アクティブソナー発振。相手はゆらゆらとただ真下に吸い込まれていくようだった。この水深は1500メートルほど、気化爆弾で潰れる程度だとしたらその水圧には耐えられまい。

「……終わった、の?」

「みたいだね」

右肩を赤く染めた響がよろよろとやってくる。

《こちら大鳳、みんな無事?》

「暁よ、最後の気化爆弾よね? 思いっきり巻き込まれかけたんだけど……」

《咸臨丸の支援物資の一つ、といっても艤装研究開発実験団が送付した試験モデルね。遅れてごめんなさい、彗星への装備に手間取って……》

「まあ、間に合ったし大丈夫よ。兎にも角にもこれで海域クリアよね」
《……だったらよかったんだけどにやあ》

「睦月?」

睦月の声が無線に乗る。声はどこか疲れ切っていた。

《敵艦は海中をウエーク島に向けて移動中。水中航行能力があるなんて聞いてにやいしい……》

「でも手負いの一体だけなら……!」

《一体だけじゃ無いみたいじゃの》

無線にさらに割り込んできたのは利根だ。

《暁たちから300キロ南に大規模艦隊を捕捉。どうやら奴さんは単騎駆けでこちらを漸減、本隊で殲滅って作戦らしいの》

「300キロってどうして捕捉できなかったの?」

《クエゼリンのレーダーサイトは死んでおるし情報も錯綜しておる、ある程度は仕方があるまい》

利根が悔しそうにそう言った。

《弾薬を消費しておるし、島風が大破、響も中破、吾輩も爆弾を喰らっ

てしもうて中破になってしまっておる。これ以上の戦闘続行は困難じゃ。予定通りマーカス島に向けて撤退する。暁たちはこつちに合流してくれ」

「……りよーかい」

響の手を取って担ぐようにしながら暁は踵を返す。その視界にメッセージが流れる。

Bon Voyage.

それが消えると同時に戦術リンクにノイズが入った。

「司令官……」

どこか冷える背筋を気にしながら暁は威臨丸に向けて主機の回転数を上げた。

「Bon Voyage. じゃねえよ、クソツタレ！」

杉田がひたすらにキーを叩く。その横でピクリと痙攣のように体を揺らしたのは高峰だ。

「お目覚めか？」

高峰の体が跳ね起きQRSプラグをむしり取った。

「場所が割れた、東京シティだ！」

「ハードの場所か？」

「秋葉原地区の死んでるはずの回線がアクティブになってる！ そして……」

「そして、なんだ？」

高峰は立ち上がって画面を見つめた。そこには戦術リンクの正常接続、CTCとCSSCに利根たちの艦隊が復帰したことを示していた。

「昔の仕事の親戚筋が絡んでやがる。……杉田、後は頼む」

「どこに行く気だ？」

「直接出向く。急がないと間に合わない！」

それだけ言い残して高峰は部屋を飛び出した。

「なんで内閣情報準備室^Cが出てくるんだ。カズ……お前何に触れたんだ？ 何をやる気だ!？」

ただ焦りだけが加速する中、高峰は階段を駆け上がる。その先には公用車を止めた駐車場待っている。

「……しれーかん」

ドアを開けて出てきた彼を見て雷はただそう言うことしかできなかった。

「終わったかい？」

「ああ、とりあえずはな。島風が沈みかけてたが何とかなった」

「その代償としてこっちの位置が割れた訳だけど、どうしてくれるんだい？」

「わざと通したくせに」

「おかげでセーフハウスも放棄だ。ここも使いやすくて気に入ってたんだがね」

「ご愁傷様」

航暉はそう答えると肩を竦めた。

「……しれーかん、しれーかんよね？」

ふらふらと航暉の方に歩いてきた雷は彼の服の袖をきゅつと握った。彼は彼女の質問には答えない。

「しれーかん、なにがあつたの？ なにか言つてよ。辛そうなしれーかん見てるのはもういやよ」

それを聞いた航暉がそつと膝をついた。雷の肩に右手を乗せる。

「大丈夫だ、大丈夫だから安心しろ」

「うそだよ、しれーかん無理してるもん。少しだけ聞いたよ、記憶書き換えられてたんでしょ？ ずっと戦つてきたんでしょ？ しれーかんもうボロボロじゃない……！」

彼の顔から表情が抜け落ちたように見える。その顔が歪んで雷は初めて自分が泣いていることを理解した。

「私がいるじゃない、しれーかん。お願いだから、お願いだから一人で行こうとしないで……！」

「大丈夫だ、雷。一緒にいるから」

そう言つて航暉はそつと彼女を抱きしめ、動きを止めた。

「し、れ……か……！」

「……ごめんな雷、電によりしく伝えてくれ」

首の後ろに回つた手を外すと雷の体からかくんと力が抜けた。袖の内側を通したQRSプラグがその手元に光る。雷の体はロツクされ彼にもたれるように倒れ込んだ。航暉は雷を壁にもたれさせるようにそつと座らせるとその手に何かを握らせた。国連のマークに錨を重ねた国連海軍の徽章だった。

「……行くのかい？」

その背中に声をかけるスキュラ。その声は慈愛の色が感じられた。彼女は持っていた

アタッシユケースを彼に投げ渡す。

「今日の2230、横田から北京経由でクラークエアベース行きだ。国連空軍の函南少尉殿？」

アタツシユケースの中身を見ると空軍の制服に軍IDやミツシヨナンバーまで交付された異動命令書などが収められていた。IDには函南友一とある。

「クラークに下りたら私の弟子が待っているはずだ。頼るといい。武器ぐらいは入手できるだろう」

「恩に着るよ、スキュラ」

「この地下から旧銀座線に出られる。そこから脱出してくれ。私達もそろそろ隠れる。……この子は置いていくんだね？」

「ああ」

「……それでいいなら何も言わないさ。動くなら早めに動きな。猛スピードで軍の検問を抜けた車がある。到着まであと15分つてところだろう」

「手間をかける」

そう言うのと航暉は停止したエスカレーターに足を乗せる。

「ガトー」

呼びかけられて振り返った。

「記憶と思い出を分かつものはない。そしてそれがどちらにあったにせよ、評価されるのは後になってからのことだ。あんたの記憶が導き出した行動が評価されるのはずっと後のことだ、あんたにはそれを背負う義務がある。……それまで死ぬなよ」

それには答えずに航暉はエスカレーターを降りて行った。

「さて、最後の詰めだ。後は頼むよ、スクラサス」

東京はようやく日の出の気配が近づいてきた。スキュラはラツカーの Spreuer 缶を取り出すと雷が背にする壁に大きく書きつけた。

B—P

「さて、高峰君は止められるかね、これを」

その言葉を残してスキュラも階段を下る。その先には口口たちが

待っていた。

「で？ 姉様はどうする気？ あたしはこのまま東京シテイ内に潜伏するけど」

「ロロに言われ方を疎めるスキュラ。」

「久々に高峰君に会ってもいいんだけどね。ついていくさ」

「高峰って言うと……ああ、外務省条約審議部の」

「あれはあれで優秀だ、これだけのヒントがあれば追いつくだろうさ」
スキュラはそう言うのと配電盤を開けて中を確認していく。

「姉様よお、ガトーを応援したいのかい？ それとも軍を応援したいのかい？」

「ロロがそう聞けばスキュラは笑った。」

「その二つは排反事象かな？」

「だってそうじゃん。ガトーが行き着く先は予想ができる。マニラからルートをとどって、あの工場に向かう。そしたらそこで待っているのは……」

「ロロ、あんたはライ麦畑でつかまえてを読んだことはあるかい？」

「はあ？」

「キャッチャーインザライ、大人になりたいけど大人がきらいな男が好き勝手に思いをぶちまけるだけの小説さ、私は正直好きじゃない」

話の展開にロロは困惑しつつも先を待つ。こういう事象についてはスキュラに何を言っても叶わないと身をもって知っているからだ。「ライ麦畑から落ちそうな子どもを捕まえるそう言う存在になりたいとかほざいた自意識過剰な青年は、口先だけで誰も救えない。いや、救えないんじゃないな。すでに救っていることにも気づかない。そしてそれに気がつくには青年は一度捕まえられなきゃならなかった」
そう言うのと笑って見せるスキュラ、その手には拳銃が握られていた。

「青年にフィービーが必要だったように、彼には救済の手が必要だ。それもとびきりのやつがいる。それは私達じゃないんだよ。わかるかい、ロロ」

引き金が引かれ、あたりの電気が落ちる。その背中はどこか寂しそ

う
だ
っ
た。
。

00001100 フロムマニラ・ウィズラヴ
PHASE 1

今や、わずかに残っていた彼の血も、細い筋をなして彼の手首をつたって滴り落ちた。彼はオンバに顔をそむけるように命じた。オンバは啜り泣きながらその命に従った。それから笑い男は自分の仮面を剥ぎ取った。それが彼の最期だった。そしてその顔が、血に染まった地面に向ってうつむいたのである。(J・D・サリンジャー『ナイン・ストーリーズ』)

仮眠とも言えない浅いまどろみから目覚めた高峰はこめかみを揉んでからソファから立ち上がる。

「高峰さん……」

「青葉、雷ちゃんは？」

「電ちゃんや天龍さんと一緒に艤装研の方にいます、杉田中佐も一緒だと思えます。……大丈夫ですか？」

「ああ、少し寝て大分整理できた」

高峰は首を回しながらそう言うのと少ししわになった制服をパンパンと叩いた。

「……なあ、青葉」

「なんですか？」

「……いや、何でもない」

「なんか気になりますよ、そこまで言われると」

「いやな、俺も酷い顔してるんだろうなと思ってな」

「……否定はしないでお願いします」

青葉にそう言われ高峰は苦笑いを浮かべた。

「とりあえず、雷に話を聞きつつ状況の共有だな」

「ですね。どこか部屋確保しときます」

「頼む」

高峰は答えて小さなオフィスを出た。

「……少しは落ち着いたか？」

「ごめん、な……さい」

「雷嬢が謝ることはねえ。話を聞く限りじゃどう考えても月刀が悪い」

そういうと杉田は雷の肩を叩いた。

艤装研究開発実験団の実験棟の廊下で雷の肩を軽く押すようにしながらゆつくりと歩く。杉田はそのままどこか病院のような消毒液の匂いが漂う廊下を抜け、小さな部屋に入った。小さい部屋だが中はテーブルと椅子、コーヒーセットがあるぐらいでどこか殺風景な雰囲気もある。

「それにしても、同行者が俺でよかったのかい？」

「素晴らしいながら雷を椅子に座らせた。彼女の横に座りながら軽く苦笑い。」

「なんだか……電に会うのが……申し訳なくて」

「電嬢はそんなこと思ってないと思うが……、まあ俺でいいなら付き合うよ。非常線を張ってるとはいえ人ひとりいなくなつて機能しない軍隊じゃないしな」

杉田には本来、武蔵と大和の砲撃管制官として待機が下るはずであった。しかし、司令部へのクラッキングが発生したこと、それに月刀航暉が絡んでいるらしいことなどが関係し、一時的に指揮から外れることになった。これには雷が杉田にそばにいてほしいと頼み込んだことも影響している。これには正直杉田も驚いていた。

「しれーかんを守るって約束……守れなかったから、謝るのも失礼かもしれないけど、ごめんなさいって言いたかったから」

そう言われてしまったては、お前のせいじゃないと言ってそばについていることしかできなかったたのである。

「どうして、なのかなあ……どうしてしれーかんだったのかなあ」

雷はそう言って俯いた。

「ダメだな、あたし。しれーかんじゃなかったらよかったのにか、ずっと考えてる……」

「それは仕方がないさ。俺が同じ立場だったらたぶんそう考えてる」

そう言うくとアルミの灰皿を引き寄せてから、煙草を吸ってもいいかい？と雷に問いかけた。頷く雷。

「世界にはいろんなことが転がっている。そしてそれらは必ず何かと、どこかとつながっている」

小さなマツチ箱を片手で器用にかけてそのまま、右手だけでマツチを擦った。オレンジ色の火を煙草にかざすと、すぐに振り消した。

「それが縁えだしってやつさ。縁があるやつは時間も空間も超えて目の前に現れる。手を伸ばそうと思わなくても手が届いてしまうこともある。逆に隣にいても助けられないこともある」

甘い丁子の香りが漂いパチパチと何かが弾ける音がした。ほのかな茶色の染みが浮かんだ煙草が明るく光る。

「きつと今回の出来事はこうなるべくしてなったんだ。宿命とか運命みたいなものだと思えばいい。だからそれで悩んでも仕方がないぜ」
取り繕ったような明るさでそう言った杉田だが、でもまあ、と付け足した。

「……まで付き合わされたんだ。俺たちがそれを止めるのもまた運命かもな」

「……杉田中佐って案外ロマンチスト？」

「童心を忘れてないって言ってくれ。最近武蔵に似合わんって言われたんだ、酷い話だろう？」

「そうかしら？」

雷がそう返せば、オーバーなりアクションで自分の額を叩く杉田。そのタイミングでドアがノックされて開いた。

「案外早いお着きだな、高峰」

「お前が早すぎるんだよ。……青葉からの連絡か？」

「ココを押さえたって言うんで先に来させてもらってた」

「あつそ、……またガラム吸ってんのか」

「線香みたいな香りで落ち着くんだ」

「そんな甘いのがよく吸えるね」

そういいながらも高峰は雷の向かいに腰掛けた。

「で？ お前の方はいいのかよ」

「中路中将の後釜の鈴坂中将が上手くやるさ。新任の井矢崎少将もいるしな」

杉田の答えに高峰は一瞬考え込んだ。

「井矢崎少将というと……ああ、523のコートマニア」

「なんで井矢崎海将補の息子って肩書よりもそっちが先に出てくるんだよ。対馬シーレーン防衛戦の英雄、日本国自衛海軍海将補、”智将

” 井矢崎、その息子にして水上用自律駆動兵装運用士官の3期生、井矢崎莞爾少将。航空戦重視に走るところもあるが、まあバランスよく指揮出来る優秀な器用貧乏タイプ」

「523といえば五航戦メインにシフトしたんだよな」

「一航戦が第50太平洋即応打撃群にとられるからな。その後釜で習熟訓練中だが、なかなか大変そうだ。瑞鶴と加賀が毎日のようにコンフリクトしてる。……なんの話だっけ？」

「そんな状況でここで道草喰ってていいのかって話さ」

「その言葉そっくりそのまま返すぜ。本当はこれに関わる調査権ないんだろ？」

けらけらと笑いながら杉田がそういえば一瞬だけ目の色が変わっ

た。

「俺たちは月刀に関わりすぎて。公平な調査ができるとはいいがたい。だのになぜお前や俺が動けるのか」

「……」

「そろそろ隠し事は無しにしようや高峰。お前、今だれの指示で動いてる？」

「……お前はそういうやつだって忘れてたよ。海大の頃から勘のいい奴だったな」

「なんども殺されかけてれば嫌でも鋭くなるさ。それで？」

「国連海軍がトップというのにかわりはないが、俺の古巣の筋を利用してプレッシャーをかけてもらってる」

「古巣というと……外務省か総務省かそこらへんだったな。お前も真つ黒だな」

「必要経費さ。キャリア組の実弾は案外強力だ。おかげで内債を気にせずに済む」

「その実弾がアキレス腱を貫かないことを祈るがね」

呆れたようにそう言ったタイミングでドアがノックされた。青葉に連れられて電と天龍が入ってくる。

「全員そろったな。作戦会議を始めよう」

高峰がそう言うのと部屋の電気が落とされた。中央にホログラムスクリーンが立ち上がる。

「とりあえずカズの今のバックが誰かってことだが、おそらく今は日本政府のサポートを受けているとみて間違いないだろう」

「お前の仕事の筋つてやつか」

杉田がそう言うのと高峰は頷いた。

「カズが『戦艦レ級迎撃戦』へのハッキングに使ったサーバーは内閣情報準備室^{IC}のもともみて間違いない」

そう言うのと人事ファイルらしきものが表示される、顔写真が表示されるべきところにはただの空白が浮かぶだけだ。

「高坏滯、日本のインテリジェンスネットワークの中では重鎮クラス
の諜報員だ。高度なハッキングスキルを持つ全身義体の婆さんで義

体をとつかえひつかえ入れ替えながら作戦を行うことからついた異名は「怪物スキュラ」。どっかのスーパーコンピュータのAIじゃないかという説もあるが、おそらく人間だ。雷の証言と廃ビルに残されたハードディスクも彼女の関与を裏付けている」

「で、そのビルに司令官と雷は約一週間潜伏していたが、ハッキングの後、雷と司令官の国連海軍章を残して残りのメンバーが失踪、ほぼ丸一日たった今も行方不明……だな」

「そういうことだ」

天龍の声に頷いた高峰の向かいで雷が俯いた。

「で、その現場に残されていたのが……」

現場検証の時の映像が投影される。

「真つ赤なスプレー塗料でB—P……。Be Preparedの略つてことでいいんかね？」

杉田がそう言うとき高峰は頭を掻いた。

「警戒せよつて言われてもつて感じた。その対象を暗示してくれれば楽なだけだね」

「B—Pだとボーイスカウト……偵察員スカウトに気を付けろつてか？」

「さあな、すくなくともこのメッセージを送ったのはカズじゃなくてスキュラ他ネームノウエムの誰かだろうな。それもカズではなく俺たちに向けてのメッセージを送つてきた」

「司令官さん宛てなら直接言えばいいのですし、考えればそうかもしれないのです」

電の声に杉田は頷いた。

「B—P……ボーイスカウト……ベーデンパウエル……」

「ベーデンパウエル卿の著書だと少年のための斥候術スカウティング・フオア・ボーイズや成功への旅路ロバリング・トゥ・サクセスつて線もあるな」

「……杉田、詳しいな」

「小さい時にやつてたんでな」

杉田はそう言うとおどけた敬礼をした。肘を水平横に出す陸軍式の敬礼だが、三本指を広げた姿勢での敬礼だった。

「あつ……」

「どうした電嬢？」

「その敬礼……夢で見た司令官さんと同じ敬礼だなんて……」

それを聞いた司令官一人が目を見開いた。

「三指の敬礼をした……？」

「月刀がボーイスカウト関係者ってことか？」

「電ちゃん、カズがそんな敬礼をしている所を見たことは？」

「な、ないのです……」

「だが、ありえなくはないぞ。雷嬢の話だと、月刀には電脳ウイルスが仕込まれていたって聞いている。記憶を短絡させて洗脳状態に置くなら一度大きな出来事を読みこむはずだ。それを電に共有してたとしたら」

「そんなこと、あり得るか？」

高峰が胡乱な目を向ける。

「今更あり得るあり得ないなんて議論をする意義は無いだろうさ。確かめるべきだ」

「それはそうだが……カズの経歴をたどつてもあてにならないぞ」

「なら骨格データなりPIXコードを使えばいいだろう」

「幼少期の骨格データなんてどこで手に入れる気だ？」

「予測を立てればいい」

「……こともなげにそう言つて杉田は笑つた。

「おいおい、そんな技術を持つ人物に心当たりなんて無いぞ？」

「あ？ 何だ高峰、知らなかったか？」

くつくつと笑つた杉田は肩を竦めた。

「『明鏡』がいるじゃないか、第597潜水隊の渡井慧がいる。あいつは元々平菱電工……今の平菱インダストリアルスのホロコデーネーター、ホログラムのプロだぞ？」

「月刀の幼少期の骨格再現？」

「さうだ。カズの10歳前後の時の骨格と外見データを再現してほしい。できるか？」

呉の潜水隊基地の個人執務室でそれを聞いた渡井は甘いキャンデーをかみ砕いて聞き返した。

「期限は？」

『できるだけ早く』

「どのレベルで再現すればいい？」

『20年前の電子データと比較して個人を特定できればいい』

「現在の骨格データは？」

『軍のデータベースにあるパーソナルインフォメーションをレベルⅢまで解放する』

その答えを聞いて渡井は砕いた飴を飲み込んだ。いちごの風味だけが舌に残る。

「データベースの情報を今すぐ個人IDに送れ。5時間で仕上げる」

『5時間!』

「遅いか？」

『いや、想像以上に早い。恩にきる』

「それなら横須賀のカワイイ子の画像でも送ってくれよ。なんならコンパのセッティングも」

『わかった、希望の条件を送れ。ひと段落したら場を設けよう』

そう言うとともに電脳に膨大な情報が届く。それを独立運用のパーソナルPCに流し込む。データのザッピングを始めたところで部屋に白い割烹着を着た女性が緑茶の乗ったお盆を手に入ってきた。

「あれ、提督？ そっちのコンピュータを付けてるなんて珍しいですね」

「大鯨の前で使うのは初めてだった。こっちは仕事で使うことないからね」

「……趣味用ですか？」

「まあね、でも今日は仕事さ。これから4時間は最優先事項にかかりきりになる。しおいたちはもう瀬戸内に入ってるから巡航時の指示は大鯨に任せる。頼んだよ」

そう言うところD造形用の眼鏡をかけた。

「この天才に久々のご指名さ。……腕が鳴るね」

クラーク空軍基地に降り立った青年士官はそのままフィリピンへの入国を済ませると、合同庁舎を出た。

「さて……」

周りを見回すと古い黒色のセダンが見える。運転席の窓から腕がだらんと垂れ、その手がドアを叩いていた。そのセダンの後席に乗り込む。

「無事入国おめでとう、函南少尉」

「……やっぱりあんたか。スキュラの愛弟子ってのは」

「丁稚みたいなものだったんだけどね。さて、今はなんて呼ぶべきかな、カズ君？ やっぱりガトー？」

「……好きに呼べ。そう言うお前はなんて呼べばいい？ 笹原ゆう」
それを聞かれた笹原が車を発進させながらけらけらと笑う。

「笹原ゆう、皆川明日実、朝比奈瑞稀、高坏梓、まああたしもなんでもいいんだけどね。スクラサスって呼んでよ」

「……化物の娘はやっぱり化物か」

「娘じゃなくて孫ね。……まあ、どっちでもいっしょか。あたしたち裏の人間に出自もへったくれもありやしない。お涙頂戴の話には事欠かないが、それを語る暇があったら生きるための隙間を探す」

笹原は笑ってハンドルの左に切る。

「あんたもそうだったんだろう？ パワーゲームに翻弄され、それでも自分で生き残らなければならなかった。その中で身に着けたのは、人脈と、資金力と、殺しの力」

荒れた町並みにはどす黒い煙と白い炊事煙とが入り混じっている。航暉はそれを見ながらぼうつと話を聞いていた。

「あんたのことは調べてたからね。華渤海戦争直前の泥沼お家騒動の後、いきなり現れた月刀家の次男坊。これまでは存在しなかったはずの存在、養子にとられたという記録すらなく実子として認可されていた月刀航暉は何者か……」

「……嗅ぎまわっていたわけだ」

「そもそも笹原ゆうはそのための身分だからね」

道端で泣く子供たちを一瞥して笹原は車をそのまま走らせた。

「月刀家……月一族は軍事政権化してしまった日本国にとって強大な影響力を持つ。兵器産業を中心に戦時から戦後の国内経済の大動脈を握った月岡家。空軍に絶大な影響力を持つが、持てる者の義務ソブレスオブリージュを唱え人道支援に力を置いた月詠家、そして陸軍と政界への顔の広さを武器に一気に自衛軍を掌握した月刀家。それらがまとまって月一族として日本の実権を握ろうとした……陸軍四・二六事件」

ハンドルを握る笹原の顔は終始笑顔だった。

「……あんたが出てきたのは陸軍四・二六事件の直後だったわね。そして表舞台に出ることなく闇から闇へ」

ハンドルを右に、葬儀の列に出くわしてブレーキをゆっくりと掛ける。

「その中で生きぬくことができたただであんたの有能性は証明される」

「……いろんなことを覚えて、鞭のように鋭い切れ者になったって、それで仕合せになれなかったら、一体何の甲斐があるんだろう」

「―― J. D. サリンジャー、『フラニーとゾーイー』」

つぶやいた一文に笹原はくすりと笑った。

「とっさに検索しなきゃ出てこないなんて私もまだまだだね」

葬儀の一行を見ながら笹原はハンドルにもたれかかる。その先では悲痛に歪んだ顔が並んでいた。

「それでも、あんたは生き残らなきゃいけなかった。だからいろいろなことを覚えていった。誰かの敵にならない技術、それもアクティブなやつだ。そして敵になりそうなやつは……」

「消していった」

「違うね、消えていったんだ」

それからわずかに沈黙。葬列の流れはゆっくりと車の横に差し掛かった。

「クラムボンは笑ったよ」

「……殺されたよ」

「それなら、なぜ殺された？」

葬列が横を進む。それを見るときもなく見ながら航暉は窓にゆつくりと右手の人差し指――機械となった人差し指を滑らせた。

「……わからない」

「それでもクラムボンはまた現れ、笑った」

道が空いたので車をゆっくりとスタートさせる笹原。ルームミラーの端に空軍の制服が映る。

「宮沢賢治の『やまなし』に出てくるクラムボンの正体にはいくつもの説がある。c r a b やかすがいを意味するc r a m p o n に由来するとする説、アメンボ説、泡説、光説、母蟹説、賢治の妹トシ子説、全反射の双対現象として生じる外景の円形像説、『蟹の言語であるから不明』、蟹の兄弟にとって初めて見たやまなしの花につけた造語だったとするもの。コロボツクル説や人間説もあるね。……ま、考えたとところで仕方がないんだけどさ」

そこまで言うところか自嘲するように笹原が笑う。

「それでも、沢蟹にとってはクラムボンが興味の対象であり、それらの生死を見つめた。それにはきつと意味があるんだろうさ」

「……沢蟹のように成長できてるだろうか」

「さあね、それは沢蟹の父に聞いてみなきゃ」

再び車内に沈黙が落ちた。

「……イサドの場所はわかってる？」

「ああ」

「荷は何がいる？」

「タクティカルショットガン一丁とM93R二丁、サブマシンガン一丁、リーパー数機、マチェット二振り」

「リーパーはそろえるのに時間がかかる。3日待てる？」

「ああ……」

笹原はそれを聞いて上々と笑った。

「ねえ、カズ君」

答えはない。

「好きな人を捨てるって、どんな気持ち？」

「……何も」

「そっか。うん」

その後しばらく間が空いて。

「そうやってあんたもあたしも生き残ってきた、そうだね？ 月刀航

暉、いや——月詠航暉」

寂しそうにそう言った。

「いた！ コイツだ！」

復元ホロの骨格データを照合し、一人の少年の姿が浮かび上がった。高峰が興奮気味にデータを読み上げる。部屋には高峰と青葉、杉田が詰めている。

「月詠航暉！ 北陸州金沢出身、ボーイスカウト北陸支部に所属した経歴がある。享年12歳、行方不明からの死亡扱い。砺波ジャンクションでの交通事故に巻き込まれたとみて死亡扱いになってる」

「それよりも月詠ってことは月一族の親族だ」

「ああ、たしかこの事故って……ああ、そうだ」

事故のデータを国交省の記録から呼び出した。

「化学薬品を積んだタンクローリーがジャンクション内でスリップ、ガードレールを突き破って下を走る道路に落下して大破炎上。死体すら強酸で溶けきったやつだ。現役の空将補が巻き込まれたんでテロだと週刊誌が騒ぎ立てた。これで月詠家の当主が死亡し、後継者もなくなっただけだった」

「だが、月詠家の長男は月刀航暉に名前を変え生き残った」

「三文小説もびっくりの展開ですね」

青葉がそう言うとき高峰は小さく頷いた。

「……これでカズの言葉の意味も分かった」

「え？」

「電に下に双子の妹がいると電ちゃんたちに話していた。月詠家は一男二女、長男航暉の6つ下に双子の姉妹がいる」

「この二人も行方不明からの死亡扱いか。……生きてる可能性も出てきたな」

それを聞いた高峰は黙り込んだ。

「……問題は、だ」

「……なんで電はカズがボーイスカウトに所属していることを知ってたんだ？」

重い沈黙が落ちる。

杉田が踵を返した。

「どこに行く気だ？」

「前から気になってたことがある」

「なんだよ？」

「青葉」

「はい？」

呼びかけられて青葉は首を傾げた。

「お前らのアイデンティティ・インフォメーション、どうやってできてるか知ってるか？」

「それは……前に存在した艦の記録を記憶に見立てたうえで個の情報を合成して……」

「なら微風は？」

「微風ちゃん、ですか……？」

「島風型二番艦の微風のアイデンティティ・インフォメーションは何からできている？」

「あ……」

クルリと振り返った杉田は高峰を見た。

「微風の艦としての記憶は存在しない。島風型は島風一隻のワンオフだったからだ。艦の記憶を合成する理由は艦娘用の艦装システム、妖精が開発した艦装を使うにはそうするしかなかったからだ。それを量産できるようになったとしてもそれは変わらなかったはずだ。なら、なぜ微風が存際するんだ？」

高峰はそれに答えられない。

「水上用自律駆動兵装の開発には明らかに矛盾がある。艦娘の電脳に収められているのは艦の情報だけじゃない」

「——艦娘の個アイデンティティ・インフォメーションの情報に“オリジナル”が存在する？」

「それなら、それが電の夢の理由なら、筋が通らないか？」

杉田がドアを開けた。

「知ってそうなやつに心当たりがある。……手分けをしたい。高峰、お前は中路中将のところに行ってくれないか？」

「その根拠は？」

「中路中将は艦娘に最初期から関わっている。知っていてもおかしくない。……そうしろって囁くんだよ、俺の勤が」

「お前はどこに行く気だよ？」

「総合司令部棟最上階」

「……正気か？」

杉田は笑った。

「つぎはぎだらけのフランケンに恐怖心なんて存在しなくなったさ。

……方が一のときは、頼む」

高峰は立ち上がって制帽を取った。

「青葉、俺と来い。電たちには知らせるな」

「わかりました」

二人ともが部屋を出る。廊下をそれぞれが反対方向に進む。

「2時間後にここに集合、緊急用のチャンネルは開いておく」

「わかった」

二人の男が、動き出した。

00001101 フロムマニラ・ウイズラヴ
PHASE 2

ノックと共に杉田は中に入り込んだ。

「いきなりどうしたかね、杉田君」

軍の中でもかなり広い部屋……個人執務室の中では最大ともいえる広さの部屋だ。ここで会議をすることもあるのだろう。だからこそこれだけの広さが用意されている。専属秘書もつくのはこの部屋の主、極東方面隊総司令官である山本五六元帥がそれだけの多忙な職務を送っているからだ。

「突然の訪問お許しください、元帥。ですがどうしてもお聞きしたいことがございまして」

「聞きたいこと、とは？」

「ライ麦計画……いえ」

杉田は言葉を切った。

「水上用自律駆動兵装について少々」

「お隣いかしら？」

電が一人屋上に立っていると後ろから声がかかった。電は振り返る。夕日に染まるコンクリートの屋上は夜の冷気の気配を感じさせている。

「ビスマルクさん……?」

「イナヅマが階段を寂しそうに上がっていくのを見ちゃってね」

「見られちゃってましたか……」

「見られちゃってたわよ」

そう笑ったビスマルクは電の隣、柵に寄りかかるようにして立った。

「……貴女のアドミラル、すごく大変なことに巻き込まれてるって聞いたわ」

「……なのです」

小さく笑って俯いた電を見てビスマルクは微笑んだ。

「大丈夫? 無理してないかしら?」

「今は無理をしないとイケない時期ですから」

そう言うとう電はもう一度夕日に染まる海を眺めた。海に向こうから夜がやってこようとしていた。アルミの柵は冷え冷えとしており、触れた電の体温を少しずつ奪う。

「ビスマルクさん」

「何かしら?」

「……これから言うことは独り言なのです」

「そう」

「……司令官さんを追いかけることがこんなにも怖いことだとは思ってませんでした」

電の声を聴きながらビスマルクは空を見上げていた。

「私達艦娘になる前のことを司令官さんは話そうとしませんでした。軍人だったことは知ってましたけどどこでなにをしてたかなんて話してくれませんでしたし、私達も聴かなかったのです」

夕日がどんどんと山影に迫っていく。海側の青が濃くなっていく。

「司令官さんが何かを隠していることは薄々気がついていました。そして限界に近いことも薄々気がついていたので」

寝ることもままならない睡眠障害を抱えた状態で彼は電たちのそばに寄り添い、戦ってきた。時間が経てば経つほど疲れが溜まっていたのを見ていた。それを電たちは心配していたが、彼はそれをやめようとしなかった。

今となつては仕事をすることで何かを忘れようとしていたように見える。

「それでも止めなかったのです。司令官さんと少しでも一緒にいたかった。優しくて、私達を仲間として扱ってくれることに甘えて、司令官さんとの関係を崩したくなかったから、司令官さんに嫌われたいなかったから、止めなかったし、質問もしなかったのです」

電の海岸線が歪む。

「司令官さんはいなづまを信じてくれた、なのに、なのに……いなづまは」

落下防止の柵に乗せた手が強く握りこまれた。

「いなづまが止めなきやいけなかったのに。一番近くにいたのに、どこかおかしいって気がついていたのに、司令官さんに嫌われたくなかったから、止めなかった！」

ビスマルクは電の肩を抱き寄せその胸に抱き込んだ。電の体は痙攣するように小さく揺れていた。

「司令官さんに甘えていただけで、いなづまはなにもできてなかった！ いなづまたちのために命がけで助けてくれたのに、いなづまは、いなづまは……！」

ビスマルクはなにも言わずただ抱きしめた。

ビスマルクはドイツ帝国本国で旗艦を務めたことがある。だからこそわかる部分がある。

司令官や旗艦というのは不安や疑念などの心内を胸の中にひた隠し、仲間を率いる立場にある。仲間や部下を信じていないからではない。信じているからこそ隠すのだ。信じてくれているとわかるからこそ隠すのだ。

状況が絶望的だとしても、どれだけ不安に駆られたとしても、仮面の下に押し隠し、毅然と前を向かねばならない。それが旗艦というも

のであり、指揮官というものだ。

「……手を伸ばすことをしなかったのです。こんなことになるとは思ってなかった。それでも、こうなるかもしれないっていうのはわかってたのです」

「こうなるかもって言うのはなにかしら？」

「いなづまたちを置いてどこかに行っちゃうんじゃないかって」

ビスマルクは電を抱きしめたまま空を見上げた。だいぶ青が浸食してきた。

「……私は貴女のアドミラルと話したことはないけれど」

夕日を背負ったままビスマルクはゆっくりと言葉を選ぶ。

「貴方にとってアドミラルは大切な人だった」

頷く電。

「大切にしてもらった」

再び首肯。

「そして、今も大好きなのね」

時間を置いて、首肯。

「ならやることは一つよ」

そつと電の肩に手を置いてゆっくりと見つめるビスマルク。

「追いかけてなさい、貴女のアドミラルを」

手を肩から外す。

「大好きなんでしょう？ 諦められないんでしょう？」

電は答えない。無言の肯定。

「だったら追いかけるべきよ。女をそこまで本気にさせた男に振り向いてよって叫びなさい。大好きだって言いなさい。ちゃんと自分のことを見てって言いなさい」

ビスマルクはにかつと笑った。

「貴女なら大丈夫よ。貴女みたいないい子に好きだって言われてなにも思わない男なんていないわ。だから、行きなさい。女は度胸よ！」
しばらくぼかんとしていた電がゆっくりと頷いた。

「……まったく、手間をかけさせるぜ」

それを物陰から見ているのは天龍だ。隻眼を細めゆつくりと溜息をついた。

「客人にこんなことをさせてすまなかつたな」

「いえ、ビスマルク姉様も私もイナヅマには助けられていますし、もうゲストって訳にもいかないから……」

「そう言ってくれると助かる」

天龍はそういうと上体を振って壁から離れた。

《青葉です！ 緊急事態なんです！》

その時に入った無線に天龍が眉を顰める。

「天龍だ、どうした？」

《中路中将が消えて、古鷹が！》

天龍と電が指定された病室に駆け込んだ。

「古鷹!？」

「やめるのですっ！ 落ち着いてください！」

天龍の視線の先では古鷹が自分のこめかみに拳銃を突きつけ泣いていた。部屋には青葉と古鷹の二人きりであり高峰の姿が見えない。

「ごめんなさい……ごめんなさい……!？」

《後10秒で現着！ 状況は!？》

鳴き声交じりの古鷹の声にかぶさるように高峰からの電脳通信が

響いた。天龍は自分の視覚情報を通信に乗せた。

「馬鹿野郎っ！」

その怒声が響くと同時に高峰が天龍を押しつけるように飛び込んだ。直後、破裂音。破裂音の出どころは……高峰の右手FN—Five—seven。

破裂音は二回、放たれた5. 7 x 28 mm弾は過たず古鷹の持っていた拳銃を弾き飛ばし、彼女の右手に破孔を穿った。

「……っ！」

そのまま高峰は古鷹の懷に飛び込むと肘鉄を叩き込み、彼女をベッドに叩きつける。うつ伏せに倒れ込んだ彼女に半ば馬乗りになる様に抑え込み後ろから頭を鷲掴みにするように抑え込んだ。

「な……何してんだよっ!?!」

「あんな時間稼ぎだ！ 殺す気ならとっくに死んでる！」

左手で自分のうなじからQRSプラグを引き出すと彼女に直結する。

「じ、時間稼ぎ!?!」

「誰かが古鷹の脳をハックしてやがる！ 口封じじゃねえ、何かをさぐろうとしてんだ。何かを！」

アクティブプロテクト
身代わり防壁を展開。

「古鷹の脳に誰が潜りこんでんのか、ここで確かめる！」

そう言った次の瞬間に、高峰の意識は真っ黒なキューブの前に立っていた。周囲は白。脳空間に距離の概念は存在しない。左右も上も足元も正確にはただの空間が広がっているだけだ。

——古鷹のチャットルーム？

そんなことが頭をよぎったタイミングで声をかけられた、

「久々かしら、高峰君」

「——怪物スキュラ、やっぱりあんたか」

「あんたとは失礼ね、私を呼び捨てにする貫禄を何処で拾ったの？」

「世話になりこそしたが、病院を爆破したり、仲間の脳をハッキングしたりするヤツにつける敬称なんてあるかよ」

「あ、やっぱりばれてたんだ。あの病院の自走爆弾を送り込んだのが

私だって」

「カズの病室に入ってから天龍の骨格に仕込まれた爆弾が爆発するまでの時間が長すぎる。あんな殺す気のない爆発だとカズを軍から引き離すのが目的としか思えない。そうだな？」

真つ黒なキューブがぐるぐると空中で回る。

「あら、わかってて泳がしてくれてたってわけ？」

「そうじゃないと話が合わなくなってきたからな。電経由でハックするのように仕組んだのもあんだだな？」

「正解。ま、ここはガトーとの利害の一致があつたからね」

「利害の一致、だと？」

「私は貴方たちがどこまで進んでいるかを知る、ガトーは電ちゃんのアイデンティティ・インフォメーションを閲覧できる」

「電のアイデンティティ・インフォメーション？」

キューブが回転をやめた。ピタリと止まった後、上がぱかりと開く。周囲の色合いが変化した。同時に何人もの姿が投影される。

「え、なに!？」

「お、お姉ちゃん……?」

投影されたのは雷電姉妹に天龍、青葉だ。

「……見事に枝を付けてたってわけだ」

「御足労頂いて悪かったわね。そしてライちゃんは2日ぶりかしら?」

「その声……スキュラね？」

「そうよ。会えてうれしいわ」

キューブがぐるぐると回る。それを雷は胡乱な目で見ていた。

「しれーかんは今一緒にいるの?」

「ああ、そうか。ライちゃんは視覚情報まで完全にロック掛けてたんだもんね、見えてないか。ガトーならもう日本にいないよ。昨日の夜無事出国したわ」

「それならどこにいるのです?」

「まあそう話を焦らなくてもいいだろう、デンちゃん。あんたの司令官は少なくともあと二日は行動を起こせない。向こうでの武器を手

に入れられないからね」

キューブが半回転して空中を滑っていく。付いて来いという気持ちいい。

「さて、君たちはガトー……月刀航暉という人間についてどこまで知ってるかな？」

キューブはそう言うのと裏返る様に一度展開し、すぐに立方体に戻る。正確には裏返ったのだ。黒かったキューブの色が今度は白に切り替わる。

「……カズは元々月刀家の傍系、月詠家の人間だった。下には双子の妹が二人、家族全員が砺波ジャンクションの交通事故で死亡したはずだった。だが、カズは生きていた」

「そう、その時月詠航暉はボーイスカウトのキャンプに行くために立山に行くバスの中だっからあの場にいなかった」

周囲の白一色の空間が歪んだ。風まで吹き抜ければ気の早い枯れ葉が皆の前を吹き抜けた。周囲は秋口の風景に切り替わる。目の前には瓦屋根の平屋の大きな家が映る。

「ガトーの脳から抽出した記憶にクリーニングをかけたものだ」

濡れ羽黒の髪をした和服の女性に連れられた少女が二人、年齢的には5歳か6歳ぐらいだろうか？ 一人の女の子はすでに半泣きであり、もう一人の女の子の方もどこか悲しそうにしている。その二人の前にしゃがみ込む少年の姿も見える。

「あれ、この風景って……！」

少年は少女の二人の頭を撫でて立ちあがる。

「ごめんな、すぐ帰ってくるから。ちゃんといい子にしてろよ？」

オレンジ色のネツカチーフを締めた少年がいう。離れようとした少年を引き留めるように半泣きの方の少女がその袖を引いた。

「やだ、いけないで。置いてかないで」

もうひとりの少女も頷く。それを見た和服の女性が苦笑いをした。

「弱ったなあ……、僕はそろそろいかないといけないんだけど……。」

そうだ、帰ってきたら一緒にソフトクリームを食べに行こう

「ソフトクリーム？」

少年は腰をかがめて本格的に泣き出した少女の頬に触れる。ピクリと全身を震わせた少女を見て少年は頬の涙の跡を親指でぬぐった。「好きだったろ？ 牛乳ソフト。街にでてき、本屋さんとか回って、ソフトクリームを食べにいこう」

「うん。……うん！」

「あたしも！」

「わかったわかった、俺と雪音と琴音の三人で行こう。俺が帰ってくるまでいい子にしてろよ？」

そう言うと、皆が笑った。……この場にはいないはずの高峰たちの表情が険しくなっていく。

「うん！……やくそく」

「やくそく！」

「約束だ」

直後、明転。その風景が消え去る。宙に浮いたキューブが上機嫌そうに笑う。

「どうだい、デンちゃん、ライちゃん。見覚えはないかい？」

「……そんな」

「なんだか電ちゃんたちがカズの妹だったって言いだけだな」

そう言うとキューブが一段と早く回った。

「だとしたら、どうする？」

「水上用自律駆動兵装開発計画なら少佐以上の権限があれば閲覧可能だったと思うが、わざわざ私に聞くことかね？」

「申し上げたはずですよ。私が聞きたいのはライ麦計画の裏で進められていた方の水上用自律駆動兵装計画です」

窓から差し込む光は日が沈んだことで消え去り、暗めの室内灯だけが灯っていた。

「話が見えないね。ライ麦計画といえは……」

「日本国自衛軍の教育プログラムの一つ、予備青年士官教育プログラム。だがそんなちやちなもんじゃなかった。違いますか？」

目の前の元帥は顔の前で手を組んだ。

「それで、そこになぜ水上用自律駆動兵装開発が絡んでくるのかね？」

「それは貴方の方がご存知でしょう。ライ麦計画発足当時の日本国自衛海軍幕僚長は貴方だったはずですから」

それを言うと山本は溜息をついた。

「君は運がいい。たまたま私の仕事かひと段落ついていた。そうでなければ追い返していたよ。……続けたまえ」

「はい。ライ麦計画は極秘裏に進められた。理由は未成年の優秀な人材を青田刈りし、それを優秀な士官に育て上げるといいう手法ゆえ、ジュネーブ条約に触れる可能性があったから……そうですね？」

「高々中佐程度の権限でよく調べたね。その通りだ」

「嘘だ。なぜならばライ麦計画の本来の目的は優秀な人材を集める隠れ蓑に過ぎないからだ」

言葉遣いが粗雑なものに切り替わる。杉田は片足に体重をかけ姿勢を崩した。

「そろそろ本音を教えて頂けませんか」

「やれやれ、君はせっかちな。陸軍時代もせっかちでお節介だったようだが」

「よくご存知で。そんな風にして月刀の過去も知っているの？」

「月刀君は特別だからね。なにせ——」
「記憶も全部操作して艦娘の指揮官としての全体最適化トータルオブティマイズに成功したから、か?」

杉田の右手が腰の後ろに回った。

「やめたまえ、杉田君。私を殺してもライ麦計画は止まらない」

「だろうな。ライ麦計画——俺はもっと早く気がつくべきだった。月刀と俺は硫黄島のあの司令部で気がつくチャンスがあった。そして高峰も気がつくチャンスは平等にあったんだ」

「ほう、なににかね?」

「通信システムの脆弱性とそこに仕組まれたバックドア。あれは意図的に残されたもので、そこから俺たちの通信パターンが盗まれどこかに転送されていた」

「転送先はどこかわかるかね?」

「それはあんたの方が知ってるだろう? なにせ、それをしたのはあんたの指示のはずだ」

「さて、どこだったかな?」

「フィリピンのルソン島山間部やキスカ、……違うか?」

山本はニヤリと笑う。

「だからどうしたというのかね? ……非公開ラインがあったところで軍規には反していない?」

「ああそうだな。軍規には反していない。だがそれをあんたの口から利けるとは思ってたよ。『ホールデン』!」

「彼」が笑った。その額に銃口が向けられる。

「Program—R. Y. E. ……もつと早く気がつくべきだった。J. D. サリンジャーの『キャッチャー・イン・ザ・ライ』——
——ライ麦畑でつかまえて。ライ麦計画の本当の目的は自律駆動兵装を救う指揮官ホールデンの養成にあった、違うか!」

「彼」が肩を揺らす。だんだんと振れ幅が大きくなり、最後には大声で笑いだした。

「おめでとう杉田中佐。君はやつと答えに行きついた訳だ」

「こんなことは信じたくなかったがな」

「行きつくとしたら君か月刀君だと思っていたよ。君は中路の元に長いこといたからね。ライ麦計画について知っているならわかっているでしょ？　中路がなぜ月刀君に固執するのか」

「……罪滅ぼし」

「その通り、笑つちやうよね。高々一枚の書類にサインしただけなのにさ」

「そこまで欲しかったのか、月刀の頭脳が」

「正確には彼じゃない。本当に用があったのは彼の妹たちのほうさ」

「雷と電が、カズの妹……？」

「そんなに驚くことかなあ、これ」

キューブは笑う。

「おかしいとは思わなかったの？　どうして水上用自律駆動兵装なんて兵器に感情なんてつけたのか。兵器は兵器だ、そこに感情なんて機能を入れてしまえば、その兵器の運用者は兵器に情が湧く。それは明らかに不利なはずだ。理由は単純、機能を付けたんじゃない、排除できなかつたんだ」

キューブはくるくると回る、再び反転、今度は黒だ。

「自律駆動兵装って名前はね、艦娘が生まれる前、まだ深海棲艦が生まれる前から存在していた。戦争なんて機械にやらせて人間サマはそれを遠くで高みの見物ってわけね。その構想は20世紀から生まれ

ていた。それを推し進めた発展形、それが自律駆動兵装だ」

キューブがクルリと回れば周りの風景が変わる。今度は白い部屋だ。

「高峰君は見覚えあるんじゃない？ これと同じのがキスカにあったから」

「日本国の電腦実験施設……」

「そうね。笑えるでしょう？ こんなものを国外にいくつも作ってたんだから。日本の札付きODAに使う物資ってことで持ち込んだものがこんな形で使われてたんだから」

「……笑っていい問題じゃねえな」

「どういう面で？」

キューブが問いかければ高峰は苦虫を噛み潰したような顔をした。

「……違法人体実験」

「そうね。電腦化によって生じる弊害を洗い出し、その抗体ワクチンを作成すること。普通ならそうだった。でも自律駆動兵装開発においてはちがう。何せ必要なのは人命ではなく、人間のようにその場で判断し、行動しできる都合のいい歩兵、いわば生きた人形を欲していた。だから高性能AIを欲していた。人間のような判断力を持ちながら死を恐れず戦うことを可能にするAIを。そのために、人間の脳を丸々コピーしようとした」

「ゴーストダビング……」

高峰がなんとかそれだけをつぶやいた。

ゴーストダビングは個人の個アイデンティティ・インフォメーションの情報情報を大量複製して魂の入っていないものに乗せることで自らの分身を作るという構想の下生み出された技術だ。ただ、元の脳がそれに耐えきれず破壊されることから人間での使用は国際法で禁止されている。

「人間の脳の情報をコピーしてそれから必要のない要素を抜き取ればいいじゃないか。そんな風に考えたどつかのマッドサイエンティストの意見が通ってしまい、それが実施された。そのために大量の人間が消費された」

「消費って……」

戦慄したような声を上げるのは青葉だ。

「消費よ。『敵国の兵士』なんて隊長クラスより下は情報的価値も薄い。だからせめて有効に使おうとしてそうなったわけ。まあそれも大きな戦争が終わればできなくなるんだけどね。華渤戦争中はそれでよかった、それでも研究は終わらない。だから次の場所が必要になったそれが……」

「——フィリピンか!」

「フィリピン共和国とスールースルタン国の内乱。ちょうどいい規模で泥沼になってくれたから研究ははかどったみたいよ? もっとも、使われたのは敵兵だけじゃなかったみたいだけど」

「ま、自律駆動兵装に向いてる脳と向いてない脳がある訳だ。誰彼かまわず使う訳にもいかないのは当然だ。私達は軍隊であつて蛮族ではないからね」

「被検体の数4ヶタ台に乗せてるんだろ、それだけ殺しておいて蛮族じゃないと言ひ張るか」

杉田の銃口の先で『彼』が笑う。杉田は照星越しの笑みをこれでもかと睨みながら吐き捨てた。

「それで何万の味方兵士が救われる。意味ある死だと思うよ。倫理に悖ると言われても倫理なんて時と場所に左右されるものだしね」

「違うな、意味がある死でなければならなかった。自らの存続理由に

関わるからな。そうでなければ、自らの心を満たすことができない」
「そんなもんかな。わからないんだけどね」

「そうだろうな、生きたことのないあんたにはわかるはずがないよな。被験者の劣化した魂ゴーストの寄せ集め、それらの混沌から生まれた『魂のよ
うなもの』にしか過ぎないあんたには」

「まあそれも正しい認識ではある。だが、『僕』は艦娘の誕生に関
わった何千もの魂を知り、それらの思いを継ぎ、その魂がせめて無駄
ではなかったと言われるために、彼女たちを導く役割を与えられた。
そういう意味では君の存在理由に関わるという指摘は適切だ」

そう言うと、『彼』は笑みを深くした。

「まあ人としてというよりモノとしてだがね」

「どういう意味だ？」

「あるじゃない、常にすべての艦娘の出撃を監視し、その行く末を見
守ってきたものがあるよね？」

『彼』は手を横に広げた。

「人は『僕』をこう呼ぶんだ——中央戦略コンピュータc s cタつて
ね」

00001110 フロムマニラ・ウィズラヴ
PHASE3

「それで？ カズ君はどうする気？」

メタルターゲットを全て倒した彼に向ってそう問いかける。キリングハウスの中を駆け回り、マガジンを二回交換しての室内戦訓練を終えた後だというのに彼の息は一つも上がっていない。

「すべてを終わらせたその後、どうする気？」

「……スキュラの金言その1」

「隣の便器を覗かない」、か……」

「それが生き残るコツだ、スクラサス。それは俺よりもあんたの方が知ってるはずだぞ」

「そうなんだけどね。どこかしっくりこないのさ」

笹原はそう言うのと目の前の男を眺めた。空になったマガジンに9×19mmパラベラム弾を詰め込んでいく彼の目元は野球帽の鏝に隠れていた。

「……そうやって心に忍び込んでいくのか、スクラサス」

「普段ならそうなんだけどね、あんたにそれは効かないでしょ。特にあの事件に関わった人間には」

「……陸軍四・二六事件、お前らも関わってたのか？」

「私はまだ子供だったから関わってないよ？ でもスキュラは絡んだ。月刀利郁の部下による同時多発クーデター。それ自体は失敗したはずなのに、現代政治に愛想をつかしていた市民の賛同を集めて軍国主義寄りの政権が誕生することになった」

「……月詠家はそれに反対していた。だから」

「そう、だから月詠家は御取り潰しになった、月刀家によってね」

彼はそれを聞いてマガジンに弾を詰め込む手を止めた。

「よりによって親殺しの犯人の養子にとられてるなんてね。実家と疎

「遠なわけだ」

「使い勝手のいい駒が必要だったんだろう。月刀家の直系には男子がない。兄にしても月岡家の次男坊を養子にとったんだ。スペアの一本は欲しいところだったんだろう」

「駒、ねえ」

「……そのせいで雪音と琴音は」

「それが妹たちの本当の名前？」

彼は答えない。

「そのせいで、彼女たちは実験素材としてライ麦計画に差し出された。そうよね？」

航暉は答えない。

「あんたはそれを止めようとした。少なくとも彼女たちの生死を確認しようとした。そうやって、陸軍第9師団特殊殲滅部隊に接触した。よくやるわよ。その時まで14歳でしょ？」

「13だ。その1週間後に14だが」

「そしてスキュラに拾われた。月刀家もそれを認めた。これであんたが活躍すれば月刀家にまた一本「箔」がつく。そうして「裏」に飛び込んだ」

詰め込みが終わったマガジンをM93Rに叩き込んで遊底をスライド、セーフティをオン。

「そうして、知ったのね。ライ麦計画を」

航暉は答えず、またキリングハウスに飛び込んだ。

「大人の脳はね、いろんなことでスポイルされていろいろんなことができるバツファが少ないんだ。一概には言えないんだけど、機械化するには子どもの方が効率的だ。AIのモデルタイプとするには特にね。そしてその適用者はなぜか女性に限られた」

「彼」はそ落ち着いた髪色に似合わない若い声で言った。

「だから、少女をわざわざ選んでゴーストダビングを繰り返した」

「そう、そうして抽出してできたモノが結集してできたのが『僕』さ。もつとも最初期の人間の兵士の魂ゴーストも含まれていてその影響が強いんだ。まあ『僕』って名乗ってるのはそういう部分が邪魔をしてるんだけど」

「彼」はデスクのペンをもてあそびながら続ける。

「月詠琴音、雪音姉妹は中でも特別な存在だった。電腦化していなかったから脳はへたつてないし、覚えも早くて従順だった。それでも強い自我を持っていた。……素材としてこれほどいいものはなかったよ」

「素材……だと……!」

杉田の腕が力んで銃口がカタカタとぶれる。

「そして、ゴーストダビングにかけて、殺したんだな?」

「殺してなどいないよ。殺そうとしたのは人間の方じゃないか」

「なんだと?」

「遺伝子の再利用だよ。福祉事業の一環さ。彼女たち……いや、ここでは月詠航暉も含めて彼らとしておこうか。彼らは交通事故で殺される運命だった。それを救ったんだよ、僕たちは。ライ麦畑げんじつから落ちそうになった子どもを助けたのさ。琴音、雪音姉妹は新たな体を得て、月詠航暉は別人として生きること第二の人生を踏み出した」

「そんな……そんなクソツツタレな理論で人を救ったつもりか!」

杉田は撃鉄を起こしFN—FiveSevenを両手で保持する。

「その結果がどうなった!? 月刀航暉は破滅目指して驀進中だ!」

「破滅ねえ、彼には正直がっかりしてるんだ。彼ならきつとわかつて

くれると思つてたのに」

「そんな狂つた理論で誰が判れというんだ!？」

「彼の役割はね、そうやって救われた少女たちを導くこと。そういう人間になつてもらいたかつた。ライ麦の捕まえ手、ホールデンぼくたちにできなくなつたそれを担い、純粹でイノセントな存在である少年少女を救う存在。もう生身の体を持たない僕たちじゃ魂は救えても肉体は救えないからね。そういう後継者を作るための人材集めの名目が予備青年士官教育プログラムPr. o. g. r. a. m. | R. Y. E.な訳だけど……でも、理解してもらえなかつたんだよなあ」

「当然だ馬鹿野郎。神にでもなつたつもりか」

「いいねそれ。まあ、装置としての神に近いかもしれない。人の罪を背負つて死んでいった神の子とでも言おうか」

「勝手に言つてろ人間もどき、そんな理論で何が救える、何ができる?」

「それを言うならなぜ人間に神が必要なのか考えてみるといい」

「彼」は両手を広げた。

「責任転嫁さ。人はよくわからないこと、自分じゃどうしようもないことを「神のせい」として処理してきた。自らより次元の上の存在を作ることにより高次元にいる神という存在の傀儡となり『神がそう言うから、神がそうするから仕方ない』としていろいろなことを納得できるようにした」

「彼」は銃口の先の杉田に笑みを送る。

「今でも死という未だに理解が追いつかない現実に対しての恐怖心を抑制する装置として神が使われているし、神の後光を借りて人はいろいろなことを正当化する。それは人殺しという最大の禁忌さえ可能にした。神様が言うなら仕方がない、これは聖戦なんだ。神のために必要なことなんだっていう感じでね」

すでに日は落ち、間接照明だけが照らす部屋に彼の声が朗々と響く。

「でも神は劣化した。いくつもの神様が生まれ、その存在に疑いの目が向けられた。それでは機能不全を引き起こす。これを解消するに

はどうすればいいか。簡単だよな?」

「……自らが現人神だとも言うつもりか?」

「まあ近いかな。機能不全の原因は神の存在を証明できないことだ。なら確実にこの世に存在するもので、人間より上位の存在を置けばいい。人間が関わらない審議により行動が決定されれば、国家元首さえ『コンピュータが言ったことだから』と責任転嫁できる。絶対上位者に責任を押し付けることで自らの精神を保つことが可能だ。たとえば人殺しをしたとしても、コンピュータのせいとして処理することで狂わずに済む。これほど合理的で機能的な統治機能は過去に存在しないと思うよ?」

「……狂ってやがる」

「そんなことないでしょ、これは合理的だ。責任を全て僕たちに押し付けることができるんだよ? 君たちは必要な要求をこちらに提示し、それを審査したうえで僕たちが与える命令コマンドをこなすことができるじゃないか。死ぬような危険なことは機械にやらせればいいからエアコンの効いた安全なところで機械に指示を出せばいい。構図としては今の『水上用自律駆動兵装運用士官』となりが違う?」

杉田はそれを聞いて引きつった笑みを浮かべた。

「そうして人を飼って殺しておく気か」

「これは人間が望んだシステムでもある。なにせこのシステムを提案してきたのは人間なんだから」

「その提案者とは?」

「目の前にいるじゃないか、『山本五六』さ。もつとも彼も『僕』の一部となってるけどね」

それはすなわち、山本五六の『中身』はもうここにはないと言うことで。

「……狂ってやがる。そんなに権力の座が魅力的か」

杉田はそう吐き捨てて一瞬視線を逸らした。

「ふざけんなよ……その神の偶像の中に『月詠航暉の妹たちも含まれる』のか?」

「第九師団特殊殲滅部隊ウエムに配属になった彼が陸軍時代に最後に戦ったのが『サンセット作戦』ね。これは公になつてはいる通りスールスルタン国が開発した大量破壊兵器工場を押さえることが目的だった。その大量破壊兵器というのは……」

「……自走爆弾、だな」

キューブは高峰の答えを聞いて上機嫌に回った。

「それも……ゴーストダビングで劣化した魂ゴーストを注ぎ込まれた人型の自走爆弾、質が落ちることを承知で大量複製した魂を持たされ、人間社会に溶け込んでいく自走爆弾。そのうち自らが爆弾であることを忘れ、ある日指令が来たときに指示の場所で指定された時間に爆発する。……そう言う爆弾を作っていた」

「……ひでえな」

「天龍ちゃんはそう思う訳だ。でも作った人にとってはそんなこと些細な問題だっただろうね。なにせその魂の出どころは自律駆動兵装開発計画やその指揮官たる人物を生み出そうとしたライ麦計画からドロップアウトした人物の脳を使うんだ。無駄をなくして口封じもできる一石二鳥の方法つてわけさ。そもそもこの作戦は、内戦を泥沼化させるために日本軍が作った施設を、日本軍が襲うって滑稽な茶番だ。失敗したところで内乱の起爆剤になればそれでよかった」

キューブは回転をやめる。

「ライちゃん、デンちゃん。こつから先、君たちにとってはかなり

シヨツキングになるけど。映像だすかい？」

「……しれーかんはそれを見てきたのよね」

「うん、そしてライちゃんやハツキングを受けた時に見た光景であり、ライちゃんに見せたくないとかトーが消した光景でもある。どうする？」

「映像出して。私はそれを見る義務があるわ」

雷がそう言うのと電も頷いた。

「それが……司令官さんを止めることにつながるのなら、見たいのです」

「……そうかい。なら出すよ。覚悟しときなさい」

キューブが反転。周囲には一気に熱帯雨林が広がった。

「作戦開始と同時にガトーの指示でECM搭載型無人機が所定の位置でホイールワゴンに入ると、機銃と爆弾を満載した直掩の無人VTOLと共に私達が工場への侵攻を開始。そして、自走爆弾の兵士たちとの戦闘に入った」

散発的に響く銃声。思い出したようにズンと響く爆発音。

「ガトーの役割はまだ遠い敵を爆弾と機銃の掃射で薙ぎ払うことそれが課された役割だ。でも最前線で動く特殊部隊と一緒に動いているから同時に接近戦もこなしている。ガトーに死なれると航空支援が途絶える。致命的ではないが数段難易度が跳ね上がるから死なれるわけにはいかない。もちろん他のメンツでカバーして少しでもガトーが航空戦に専念できるようにした。それでも完全に防ぐことなどできなかつた」

森の向こうで戦ってる迷彩服の集団。その中の一番中央、まだ少年の雰囲気を残したままの彼の姿を認める。

「司令官さん……」

「そう、あれがガトー。そして、彼だけが先に気がつく」

それを待っていたかのように彼が叫んだ。

「敵襲！ 4時方向！」
インカミング

直後銃声が響く。発砲炎が大きく二手にわかれて光る。

「現れたのはまだ一桁台の年齢だろう少女たち、手にはMP5系のサ

ブマシンガン。それをもつて突っ込んできていた」

瞬く間に片方の陣営の火が減っていく。少数になっていく陣営の少女が一気に跳躍した。彼に襲いかかろうとする。

「……ガトーー！」

いくつもの銃声に紛れて単発の発砲音が響く、吹き飛ばされたその影を盾にするようにもう一つ小柄な影が飛び出してくる。

「お願い、殺し」

銃声。

「——ありがと、おにい……」

それを最後に銃声が止んだ。

「そんな……そんな」

「こんな子に爆弾持たせて突っ込ませるなんてどうかしてる。ガトー。お前は悪くない。悪くないんだ」

男の声。震えた少年の声が続く。

「スキヤンプ、俺たちがすることって。こんな子供を殺すことなのか。それにこの子は今、俺のことを……」

「ガトーー！ それはお前の妹なんかじゃねえ！ お前の妹は日本でいなくなったんだろ？ こんなところにいるはずがない」

「でも今この子は日本語で……俺のことを」

「それはお前の妹なんかじゃねえ！ それによく似た姿でお前を殺そうとする死神だ！ 切り替えろガトーー！ ここで切り替えなきゃこくなるのはお前だった、俺たちだった！ お前は正しいことをしたんだ。部隊の一員として正しいことを成した。やるべきことを成したんだ！」

「そうだとっても……！ この子も泣いてた、泣いてたんだ。それを、撃ち殺したんだ、俺が！ 恨んでくれよ。せめて罵ってくれよ。なんで——なんでこの子は笑って死んでるんだよー！」

そう言った彼の頬を誰かが張った。

「グダグダ喚くなガトー、くだらんヒューマニズムは捨てる。自己満足の正義なんぞに拘るな。自分の脳みその色が知りたいなら戦場を出てから迷惑にならないところで自前の銃を額に当てる。今のあなたには私たちの命も乗っている。こんなところで機能不全に陥ることは許さんよ」

そう言った女性は小銃をローレディに構え直した。

「時限式信管が作動する前に抜けるよ」

そう言つて部隊が去つていく。それを見送つた雷が震えた声を上げた。

「今のつて……まさか」

「月詠姉妹のゴーストダビングで生まれた自走爆弾。そのテストモデルだろう。この段階でまだ月詠姉妹由来のAIを搭載した自走爆弾は量産されていない。理由は単純、ゴーストダビングの後、ダビング前のオリジナルがその自我を保っていたから、研究材料としての価値が上がったから」

「そんな事例聞いたことないぞ」

高峰がそう言うときューブはどこか落胆したように揺れた。

「ごくまれにそう言うことがあるのよ。……貴重な事例だったんでしようね、それから観察に当てられた。姉妹両方ともが生き残つたことでその遺伝子に特徴があるのではないかと予測がたち、今度はガトーにも白羽の矢がたつた。ライ麦計画へのご招待だ」

「……」

「そこから先については私も知らない。予測は付くけどね。そして、彼はその後、国連海軍大学広島校に入校するまでのほぼ10年間の記録は存在しない」

周囲の熱帯雨林が遠のき、周囲には白い空間だけが残つた。啜り泣きの声が響く。

「そんな……そんなのつてないのです……。司令官さんは二回も、妹さんを無くしてるなんて……そんなの、あんまりなのです」

「それは違うねデンちゃん。同情なんかであいつを侮辱するな」

キューブの声はキンと澄んだ。不純物のない——敵意。

「そこで同情が真っ先に出てくるようじゃ。月刀航暉を捕まえることはできない。それに、月刀航暉をここまで追い込んだのはあんたたち全員だ」

「琴音・雪音姉妹はゴーストダビングに耐えた数少ない個体だった。だからこそ、コピーを温存した。一種の鍵だったからね。そしてそのカギを使わざるを得なくなっただけ」

「……深海棲艦の登場か」

杉田の声に「彼」は笑う。

「そのまま流用して訳にもいかなかったけどね。ゴーストダビングで劣化した部分を補う必要があった。そのために用意されたのが「昔存在した艦の記憶から合成した疑似記憶」だ。これを過去に経験した思い出と見立てそれを合成、戦いの経験を持つ極めて優秀な兵器として水上用自律駆動兵装は生まれてきた。もともと定期的に記憶を修正しないといけないんだけどね」

「彼」は笑って見せる。

「でも、個体として優秀と兵器として優秀というのは別だというのはすぐわかった。二回目のゴーストダビングにも耐えて見せた月詠姉妹だが、それを元にして生まれた特Ⅲ型後期ロットはそこまで突出した特性は出さなかった。それどころかDD—AK04に至っては兵

器としては最低クラス。そこで再調整ができないかと調整員を最適と判断された僚艦をパッケージングして送り込んだ」

「それがウエーク島なんだな？」

「そう。万が一にもDD―AK04が暴走を起こした時にでも重要な他施設に危害を与えることがない場所として適切だったんだ。……そして、それに失敗する」

肩を竦めて“彼”は続ける。

「失敗も失敗、大失敗。こちらは優秀な指揮官を一人失った。ま、調整員の方は腕はいいが少しばかり狂ったのも一因としてあるのかもしれないけど、そこらへんの分析は後回しにしたままだ。それよりもなぜ高いポテンシャルを持つはずのDD―AK04が成果を上げられないのか突き止める必要があった。そして最後の手段を使った」

「……月刀航暉の派遣」

「元々兄妹で似たような個アイデンティティ・インフォメーションの情報を持つ二人だ。なんらかの

共鳴が起きるかもと期待したら予想以上の結果を出してくれた。とても興味深い結果が出た。代償として月刀航暉の“ホールデン”としての適性が薄れるってことになったけど。少なくともあと3年は持たせられそうだからそのまま運用する予定だった。でも――――
――邪魔が入ったんだ」

「邪魔だと？」

「中路章人中将……ライ麦計画の全貌を知る人物であり、DD―AK03とDD―AK04が月刀航暉の妹を元にした個体であることを知っている。彼の思考は論理的じゃないんだけどね、月刀航暉大佐とDD―AK03、DD―AK04をセットにして軍の指揮下から外そうと考えたらしい。そのためにいろいろ仕組んだみたいだよ？」

「中路中将は君たちの絶対的な保護者であろうとしたのさ」

「保護者、だと?」

「思い出してごらん? “ホールデン” の名前が出てくるとき、その状況は必ず “水上用自律駆動兵装” の想定外の事項に限られているはずだ。マニラ湾観艦式では対人戦闘を余儀なくされた。その後の銀弓作戦ではCSCとのリンクが途絶えた。そして、北方棲姫を拿捕した時は謎のイージス艦に攻撃された」

キューブはそう言うてゆっくりと旋回する。

「観艦式の時、武装勢力に月刀航暉と浜地賢一中佐、笹原少佐が捕まれば、殺されることなくそのままどこかに連れていかれて行方不明になるはずだった。そう言う手筈にするように中路中将は “私に頼んできたのさ”」

「……ならあの時のハッカーは」

「そう、私だよ。ホールデンを騙って武装集団に襲撃させる。そこでライちゃんとデンちゃんも一緒に回収、というより司令官を引き連れて逃走したら艦娘もついてくるだろうからね。そうして一緒に帰って帰るつもりだった。でもこれは月刀航暉が上手く処理しちやつて残念な結果になった。そして、次の銀弓作戦で司令部ごと通信遮断して完全スタンドアロンにしたのは中路中将、そうしなければあそこで何人も戦術リンクで焼き殺されてた」

「そんな……」

「具体的には合田少佐、高峰君、杉田中佐、渡井大佐、このあたりが殺されてたよ。月刀航暉の周りでCSCの真実に気がつきそうな人物、かつそれを月刀航暉に伝えそうな人物で今後の重要度が比較的低いと判断された人ね。こういうのを過剰同調事故に見せかけて殺すつてのはよくあるのよ。水上用自律駆動兵装運用士官で事故死してる

のはこれがメインね。ネオMI作戦、月刀航暉が救援に向かったあの時の北川少将はこの手口で殺されてる」

さらりとキューブが告げてゆらゆらと旋回。

「なんとか月刀航暉が指揮官不適格と判定させればその時点で彼が管制卓につくことはなくなる。それを狙ったものの、すぐに復帰。そして目を付けたのが……」

「華僑民国、イージス艦に拿捕させて国連海軍の指揮下から追い出そうとした……？ これも……」

「中路中将の筋書よ。そのためにわざわざ渤海対外偵察局の劉華清上將に交渉を持ち掛け、協力をこぎつけた。もともと杉田中佐が全部おじゃんにしたけど。どれも目指すべき帰着点は雷と電が一緒にいる状況で軍の指揮下を外れること。そのためにいろいろな手を尽くしてきた。その結果、CSCによって言語能力を奪われた。そして近々CSCに取り込まれる算段が組まれた。勿論表向きは脳死状態ってことになるけどね。そうして彼もまた“ホールデン”の仲間入りってわけさ」

皮肉なもんだよね、とキューブは乾いた声色でそういった。

「中路中将は月刀航暉を助けようとした。それを全部全部、あんたたちが潰してきたんだから」

どこか楽しそうな声が響く。

「中路中将は勇敢だと思うよ。何せ一度ライ麦計画をリークしようとしたことがある。失敗してその見せしめとして息子は殺され、一緒に告発しようとした優秀な部下は記憶の一切合切を奪われた。その部下は自らの記憶を奪われたまま未だ軍に縛られている。それでも、中路中将は月刀航暉を救おうとした」

青葉がそつと口を開く。

「中路中将はなぜ……」

「そんなことをしたのか、かい？ 贖罪だろうね、二度も妹を失った彼への贖罪として」

「贖罪、か……」

「責任者の一人だったからね、中路中将。思うところがあるんでしょ

うよ。それもまたくだらないと思うけど」

「そう言つて、スキュラさんは……スキュラさんは司令官さんを理解しようとしてもしないんですか？」

目を腫らした電がそう言つた。

「……どういうことかな、デンちゃん」

「いなづまです。司令官さんは辛いことも全部抱え込んできました。それに手を差し伸べることは悪いことじゃないはずなのです」

「差し伸べた後に責任を持つことなんてできはしない。その安価な同情やいたわりは逆に人を傷つける」

「逆です。あなたは、人を傷つけることを恐れているのではないですか？ そうやっていたわること誰かの懐に入ること恐れている。そこで拒絶されることを恐れているのではないのですか？」

初めてキューブの輪郭がぶれた。

「……その言葉そっくりそのまま返すよ、電。だから彼を救えない」

「それはお互い様なのです。でも、これからは違う」

「は、言うじゃないか。どう違う？」

キューブは回転を止めているはずなのに、その輪郭が揺れ続ける。

「わたしは、いなづまは司令官さんを見捨てない。わたしが誰なのか、それすらまだいなづまには整理がついていないけれど、いなづまには司令官さんを止める義務がある」

「なら、その義務をどうやって果たす？ 彼はもう君を君だと認識できるか怪しいものだ。妹してみるか部下としてみるか、あの日殺してしまつた少女の亡霊とみるか、そこは誰も予測ができない。艦隊指揮官として彼は過去の記憶の多くを短絡させられ続け、その記憶も精神も歪んでいる。君の声が届くか怪しいよ？」

「それでも届けて見せる。救つて見せる。いなづまは司令官さんの部下なのです。司令官さんは決して仲間を見捨てませんでした。ならその部下の私が見捨てられるわけにはいかないのです」

「それを相手が拒絶したとしても？」

それを言われて、電は一瞬間をおいた。

「——司令官の気持ちなんて、知りません」

その答えに高峰は目を見開いた。

「理由づけるのはやめるべきですね。はっきり言っておくのです。——いなづまは司令官が大好きなのです。だから追いかけてたい。だから行くんです。それ以上の理由はきつといなづま自身を正当化する理由でしかないのです。だから、何度でも何度でも手を伸ばすのです。司令官が拒絶するかもしれないからといっても、手を伸ばすのは自由です」

キューブはゆっくりと回りだし徐々に速度を上げていく。

「これはこれは……いいねえ。その自己中心的な行動で止められるものなら止めて見ろ」

「待ってください、私は貴女の答えを聞いていないのです」

「答え？ なんのだい？」

「スキュラさんは司令官さんを理解しようとしませんか？」

鼻で笑うような音が響く。

「理解する気はないさ。……いい機会だ、教えといてあげよう。 ”ホールデン” を生み出したゴーストダビング装置、個の記憶の合成／蓄積のためのコードを作ったのは私だ」

「！」

「いわばこの戦場のお膳立てをした実行犯だ。そう、だから——」

「2回のゴーストダビングに耐えた月詠姉妹は、『僕』とひとつになった。そのことを知った月刀航暉は、月詠姉妹を解放しようとそのもとへ向かっている」

「……フィリピンか」

苦々しい声に『彼』は嬉しそうに声を弾ませる。

「さて、杉田中佐。君に仕事だ」

「仕事だあ？」

「お門違いなのはわかっているがね、いまCSCが危機に瀕している、人間の手によってCSCを破壊しようとする動きが進行中だ。これを排除し世界の平和を守ってくれたまえ」

「貴っ様アツ！」

『彼』の胸倉を掴み引き上げる。

「電嬢のチューンナップが終わったらもう月刀は用済みか!? テメエらが壊した人間をただ使い潰すそれがお前の正義か!？」

「君の怒りは非論理的だ。人類全体の危機に勝る個人の危機は存在しない。そして最大多数の最大幸福を優先すべきであるのは国連軍の性質からして自明の理だろう?」

どこか勝ち誇ったような笑みを浮かべる『彼』はつき付けられた銃口など気にせず続ける。

「確かに月刀航暉の能力は惜しい。でも『代わりが無いわけじゃない』。もう彼の生体パーツは生成済みだ。彼を元にしたバイオロイドが用意できてる」

「人造人間はオリジナルじゃない! 今彼を殺せば二度と返ってこない! 電嬢もそれに気がつくだろう、月刀航暉が別人にすり替わったことに気がつけば、こんどこそ電は使い物にならなくなるぞ!」

「DD-AK04の記憶自体を書き換えるからね。軍の管理下にある限り問題ない」

「月刀で上手くいかなかったのか!？」

「勿論フィードバックはしてあるさ。月刀航暉が死ぬことと、今国連

海軍の全水上用自律駆動兵装を統括している中央戦略コンピュータが機能を停止することを天秤にかければどっちが重いかはわかるよね？」

「どこぞのB級映画だ、と杉田は吐き捨てた。世界か個人か、そんな選択を強いられるなんてそんな安っぽい展開。一昔前のハリウッド映画のようじゃないか。」

「——やらせねえよ。そんなこと」

その答えを聞いて「彼」は口角を吊り上げた。

「期待してるよ、杉田君。では——」

『止めてみる。止められるものなら』

00001111 フロムマニラ・ウィズラヴ
PHASE 4

「ふう……」

「正ちゃん、そろそろ終業だよ？ 大丈夫？」

「これだけはやっておきたいんで先に上がって下さい」

「後方支援部兵站管理部門」と書かれた札が渡されたオフィスの一角、「南方セクター統括班」の札がかかるデスクの塊。そこで渡されたディスクを読みながら彼は小さく溜息をついた。

咸臨丸はウエーク島基地所属隊と一緒に無事にマークスまで撤退した、損傷の激しかった島風はそこからグアム基地に空輸され治療を受けることになるらしい。とりあえずは死者ゼロで一安心だ。……

「彼女」が無事なこともわかってとりあえず仕事に集中できそうだ。

「ひやひやさせるよなあ……月刀大佐はどこに行ったやら」

「正一朗ちゃんは今日も残業？ 寝ないと体に毒だよ？ 成長期なんだから」

「わかってます。残業と言っても30分も残らないんですけどね。安川中尉は上がりですか？」

「うん、娘がママを待ってるからね。正ちゃんぐらい聞き分けがいいと子育て楽なんだろうけどなあ」

「自分は仮にも軍人ですので」

「わかってるけどさあ……こんど遊びにでもおいでよ、待ってるわよ？」

「機会があれば窺わせてもらいます」

「機会は作るものよ、では、お先に失礼させていただきます。合田大尉」

「お疲れ様でした、中尉」

出ていった「部下」……階級的には部下だが、最先任の彼女を敬礼

で見送って溜息をついた。そうして視線を戻したタイミングで。

『——司令官、聞こえてる?』

“彼女”の声が出た。

「無人小型爆撃機……BQ—32リーパーを1ダース、これで全部かしら?」

「ああ、助かったよスクラサス。これがなきや自走爆弾の地雷原を突破できない」

「よりによって搭載するのは気化爆弾、デイジーカッターの代用品にする気?」

マニラにあるビルの1階に止められた幌付きのトラックの荷台に積みこまれたのは翼の部分を畳んだ無人航空機の群れだ。組み立てても5メートル四方ぐらいの小型機と翼下面に懸架する武装用ハードポイントには気化爆弾用のアタッチメントが取り付けられている。「2×2で合計4個の45キロ級サーモバリック爆弾、予備含めて60、感謝しなさいよ? ルソン島にあるありったけをかき集めてもらったんだから」

「わかってるよ。トラックも2台体制にしてもらったしな」

「仕方ないじゃないの、こうでもしないと途中の橋の重量制限で足止

め喰らうわよ」

それで？　とここではスクラサスと呼ばれている笹原が腰に手を当てて胡乱な目を向ける。

「これで本当にあの基地に乗りこむつもり？」

「問題が？」

「死に行くようなもんよ。工場には20人態勢で警備が敷かれてるのよ？　そこにたった二人で乗り込む気？　それも浜地君は戦闘慣れしてない。特殊部隊出身のあんたとはわけが違うんだよ？」

「なんだ、お前は来てくれないのか？」

「私は頭脳派なの。こんなところに骨を埋める気はないわ」

「あつそ。ならいいよ」

航暉はトラックの荷台に個人携帯武装を並べ確認していく。UT S25タクティカル・オート・ショットガン戦術自動式散弾銃1丁、MP5KF短機関銃1丁、M93R自動拳銃2丁、オンタリオ製軍用マチェット2振り、自由空間蒸気雲爆発抑制装置に義手に搭載した液体ワイヤの予備カートリッジ。

「いくらワンマンアーミー状態で挑んだところで数の暴力の前じゃ勝目薄いわよ」

「そんなことはわかってるさ。それでもいかなきゃいけないんだ」

「琴音ちゃんたちが待ってるから？」

彼は答えない。

「……そして、あんたも生きて帰る気ないんでしょう、月詠航暉」

9×19mmパラベラム弾が詰まったMP5の予備弾倉をトラックの荷台に乗せて、俯いた。

「俺たち」は16年前に死んでんだ。生きること死ぬことも出来ない哀れなゾンビーさ」

「砺波ジャンクションの交通事故で、か……」

「そうだ。あそこで琴音も雪音も、父さんも母さんも月詠航暉も、全員が死んだんだ。月刀家に歯向かったからという理由でな。それが全てさ。そうであらねばならなかった」

目の前に並ぶのはマッドに仕上げられ光を返さない銃器の重み。

刃物の鋭い煌めきを返してもよさそうなマチエツトも炭素鋼の黒味を返すだけだ。

「あの時に月詠の血は途絶えたんだ。だれもあそこから残ってはいけなかった。なのに、『俺たち』はその後も存在した。死者としてでもなく、生者としてでもなく、ただ、存在した。この世界を動かすための歯車となった。死んだ後も生き続け、生者の代わりに引き金を引く。それが『俺』の仕事だった」

「へえ、そんな風に思ってたんだ」

「『俺』ならいくらでも引き金を引こう。それが歯車の仕事だというなら、その役割を果たしてみせる。だが、だが……なんで俺の妹たちまでこの殺しの連鎖に加担しなきゃいけなかったんだ？」

ゆっくりと拳銃を取る。M93R、新品の匂いにする治安部隊用の自動拳銃、その銃把にぽっかりと空いた空白に弾倉を差し込んだ。

「琴音は少しませててなあ、家に帰るとだらだらしている父親を叱咤したもんだ。年長組だぜ？ 小学校入学前だったのにこの先どうなるんだと父さんは愚痴ってた。それを聞いた琴音がノータイムで父さんのお嫁さんになるわ！と胸を張って返した時は家族で大爆笑になった」

マガジンキャッチが音を立てて弾倉を固定する、遊底を1往復させてセーフティをオン、改めて弾倉を引き抜いた。

「雪音の方はうって変わって引つ込み思案だった。琴音の後について歩いてて、自己主張をあんまりしない甘えんぼだった。ケンカとか痛いことが大嫌いでさ、それを見るのが何よりも苦手だった。犬のケンカに割り込んで犬に襲われたこともあったな、そういえば。わんちゃんたちがケガしなくてよかったのです、とか擦り傷とか噛み傷だらけで言われてもさ、お前が怪我してどうするんだって話」

弾薬一発分軽くなった弾倉に9ミリ弾を詰め込む。コイルスプリングの圧がきついが押し込む。

「雪音はなぜか俺にべったりでさ。なにかあると俺のところに来たもんだ。嬉しいことも辛いことも、いろんなことを話にきた。あまりにべったりなもんだから俺の同級生にからかわれたもんさ。それを気

にして雪音は一回離れるんだけどすぐに耐えきれなくて戻ってくるんだ、兄バカだと思うが、可愛かったよ」

再び弾倉を拳銃に差し込んだ。カチンと鋭い音がする。

「なあ、スクラサス、教えてくれよ。どうしてそんな子たちが、暴力とは無縁の女の子がこんなめに遭わなきゃいけないかったんだ？」

そう言った彼の目は手元の銃しか移していなかった。あまりに慣れ親しんだこの感触に変な笑いが出る。

「雪音たちは、殺しなんてできる人間じゃない。それを大人の都合で殺しの道具にされたんだ。死んだあとも、ずっと」

セーフティを確認、セレクタが三点バーストになっていることを確認してレツグホルスタに突っ込んだ。

「16年、16年だ。点の上で爪先立ちを続けるやじろべえのように、生きることも死ぬこともできずに、殺しのためのシステムとして使われてきた」

「……その大半は深海棲艦っていう化け物相手だとしても？」
「だから？」

もう一丁の拳銃に同じように薬室に弾をセットしつつ目線だけを笹原に向けた。

「だからなんだ？ 世界のためだから仕方ないと言うつもりか？ あんたも」

「感情としてはわからないではないよ。でもさ『ガトー』。あんたの役割を思い出せ」

薄い笑みを向けて笹原は相手の目を射ぬく。

「あんたが着ているものはなんだ？ 軍服だろう？ なら軍人としての『役割』をこなせ。あんたの冷酷で理性的な部分は何と言っている？」

「……ノーだ、このシステムは破壊しなければならない」

「やれやれ、革命家になったつもり？ アナーキズムもここに極まりりってかい？」

笹原は肩を竦める。

「アナーキズムはシステムを否定するだけの思想ではない。国家や支

配者層の否定を行うのはシステムがそれらの支配下と位置づけられてしまう市民を抑圧するからよ。非人間的構造を退け、人間的なシステムの構築を望む。それを履き違えればただのテロリストだ」

笹原はそう言うのと右手を腰の後ろに回す。同時に航暉も手に持った拳銃を彼女に向ける。

「あんたはどう考えるんだ、〃月刀航暉〃、私はあんたのすべての主体を総合した〃あんた〃に問いかけている」

FN—Five sevenの銃口を睨んで彼は小さく溜息をついた。

「頭の中が不純物でごちゃごちゃだがな。笹原、CSCというシステム、お前はどうか考える?」

「やつと話が地に足を付けだしたね、カズ君。結論から言えばこのシステムは破壊すべきかもしれない、だけど、壊さなきゃいけないのは今じゃない。今壊せば、艦娘を用いた対深海棲艦戦線は瓦解する。今度こそ人類は海を失うわよ。違う?」

「だがこの機会を逃せばシステムを突き崩すことはできなくなる」

「そうね、微風の事例が証明したように〃実存した艦の記録／記憶によるアイデンティティ・インフォメーションの補完〃は必要なくなり、記憶を特定の形にフォーマットするだけで対応可能になった。それは史実の制限なしでの生産が可能になると言うことであり、それだけの少女が使い潰されるということでもある。そしてカズ君と電ちゃん、〃ヒメ〃が持ってきた講和の可能性により終結したあと艦娘というシステムは維持・管理され続けるというヴィジョンが見えてきた。それによってなにが生じるか、聡明な貴方ならわかるはずよね?」

「全世界規模で〃ホールデン〃による防衛システムが強化され、このシステムがスタンダードになる。そうすれば……」

「機械による統治、機械によって作られた箱庭で偽りの平和を享受する理想郷が現れるのも時間の問題になる」

「どちらかといえばパノプティコンだろう。機械による人間の管理運用、その段階まで進んでしまえば」

「それこそ、突き崩すのは不可能になる。ホールデンの実権がまだ、艦娘の運用に限られている今がラストチャンス」……確かに筋は通ってるように見えるわよね」

そう言っただけで笹原はくぐらぬ。と一蹴した。

「なに？」

「くだらないって言ったのよ。そうとしか考えられないあんたが」

「なにがどうくだらないというんだ？」

「あんたは死ぬ理由を探しているだけよ。ゾンビーが死ぬ理由を。まだあんたが生きていると信じて手を伸ばそうとしている子たちを無視して、勝手に一人で諦める理由を探しているだけ。ほんと、くだらない。ただの現実逃避じゃないの」

「……てめえに何がわかる」

「でた、弱い奴の常套句。あんたに俺の何がわかるんだ」。ご愁傷サマね。わからないわよ。わかりたくもない。夢幻に囚われ、そのためにしか生きられない。そろそろ目を覚ませよシスコン野郎。あんたが残してきた、あんたが見捨てた電ちゃんたちの立場はどうなると思ってるの！」

「黙れっ！」

銃声。

「——つたく、男ってばいつつもそうよね」

こめかみから流れてくる血を舐めながら笹原はへらつと笑った。

「命もあんたが大切にしたいはずの仲間との関係も、全部まとめて掛^{ホッ}け金溜^トめに突っ込んで勝手にゲームを進めようとする。それで残されたあんたの仲間をかえりみずに進んでいこうとする。それで残される女の気持ちを考えたことないでしょ？ 男ってばみんなそう、女を守ったっていうくだらないヒロイズムに酔ってる。そして」

笹原は衝撃波で切ったこめかみの傷を気にしながらも拳銃をしまった。

「何事にも理由を付けたがる。戦争にも思いにも、自分にも、相手が向けてくる好意にも。そろそろ認めなさい。電ちゃんたちは追ってくるわよ。損得勘定も理由もなく、ただ追いかけていから追ってくる。」

それ以上の背景なんてなく、上官命令もなにも効きはしない。それだけの感情を持って追いかけてくるわ」

「……なら追いつかれる前に終わらせるさ」

「そう、それより早く追いつくと思うけど。……覚悟した方がいいわよ。女の子は恋をして初めて女になる。逆に言えば恋をした時点でもう少女は女になっているものよ。そうなったら最後、どんなに論理武装したところで、好きだからの一言でその全てを飛び越える。その様を見てみるといいわ」

笹原がぐるりと背を向ける。その後には硝煙のわずかな匂いが残った銃を構える航暉だけが残された。

「……阿武隈？ 大丈夫？」

『なんとかね、正一郎さんは大丈夫？ 体調崩してない？』

ホログラムの映像付きの通信に正一郎は思わず頬を緩めた。それと同時に違和感を察知する。

「うん、大丈夫。……阿武隈、チャンネルを変えてこっちからかけるから……」

《その必要はないよ、合田大尉》

電脳通信が飛び込んでくる。思わず身構えるがその声に聞き覚えがあった。

「……枝を付けたのは貴方でしたか、高峰中佐」

《さすが、一発で気がつかれるとは思ってなかった》

サウンドオンリーの通信にそう返してから、阿武隈が割り込みを知っていたかのように落ち着いているのを見てわずかに眉を顰めた。

「……もしかして阿武隈もグルですか？」

《まあね……頼みがある》

そういつて送られてきたのは見たことのないアドレスだ。軍の非公開チャットルームらしい。

「はあ……わかりましたよ」

そのアドレスに意識を飛ばす。周囲の情報が切り替えられ、バーのようなチャットルームに案内される。

「それで、頼みって言うのは？」

そこには高峰中佐と阿武隈が控えていた。チャットルームの端には青葉の姿も見える。

「輸送機を一機、大至急チャーターしてもらいたい。行先はフィリピンのキュービポイント飛行場まで直行、積み荷は2名と艦娘4名。今晚中に出発したい」

「……本当に急ですね。目的は？」

「極秘だ。ミッションナンバーEOP0821229031S、これに関わる措置だ」

「艦娘の緊急派遣……なおさら臭いですね。それをわざわざ秘密裏に僕に頼む理由は？」

「予想通りこのミッションナンバー自体が偽造されたものだからだよ」

「……」

正一郎は考え込んだ。

「……僕に片棒を担げと？」

「もちろんタダとは言わん」

高峰はそういうと何かの紙を差し出した。

「今君は喉から手が出るほど欲しいはずだ」

「……国連海軍大学への入校許可証!」

「この手続きをすれば来月の恩赦で君への制裁措置を解除、人手不足

を補うために国連海軍大学広島校の水上用自律駆動兵装運用士官養成コースの後期課程に転入命令が下る、うまくやれば3ヶ月後には指揮官に返り咲きだ。予定より1年以上早いがね。どうする?」

「……卑怯ですね高峰中佐。この条件をわざわざ阿武隈の前で提示するなんて」

苦笑いをしながらもそういえば、似たような笑みで返された。

「こちらもそれだけ追い込まれていると認識してくれ。……状況はまともに話せない。だが今行方不明になっている月刀航暉大佐に関する事項だっただけ伝えておく」

「……月刀大佐が、ねえ」

そう呟くと、阿武隈が小さく頷いた。

「司令官……」

「なに、阿武隈」

「飛行機、出せないのかな。電ちゃんたちは月刀大佐を追いかけたかと思ってる。私は、なんども電ちゃんたちに助けられたし、同じ基地の仲間として、助けたいんだ」

「……こんなものをチラつかせることがすごく怪しいんだよ、これ、どこから手に入れました? 高峰中佐」

「山本五六元帥から、かな? 上層部一致というわけではないから個人的なトップダウンさ」

そういった高峰中佐に影が落ちたのを正一郎は見逃さなかった。そこには、何かを隠そうとする意図が感じられ、それがなおさら怪しくさせる。

「司令官……今回だけは高峰中佐たちを信じてあげてくれないかな」

「……気に入らない。阿武隈、なんで阿武隈はこの人の味方をするんだい?」

「それは……」

「この解決は君にも関わるからだ、合田大尉。君の父親の行方にも絡んでくる」

「父親の……?」

質問に答えたのは阿武隈ではなく高峰だった。

「月刀大佐は……あなたの父親がどうなったのか掴んだらしいの。月刀大佐はもともと別の目的でいろいろ調べてたみたいんだけど……」

「その過程で合田直樹元中将に繋がった」

「それを高峰中佐が知っていると言うことはどうつながったかをあなたも阿武隈も知っている。どうつながったんです?」

「……『ホールデン』、あの時の亡霊にカズは挑もうとしている。だがその過程で月刀航暉は矛先を国連海軍そのものに向けようとしている。それを止めに行くんだ」

「……『ホールデン』」

「いつか必ず事情を白日にさらすことになると思う。だが、今は協力してほしい」

正一郎はそれを聞いて溜息をついた。

「一つ聞かせてください。高峰中佐、あなたはだれの味方であろうとしていますか?」

「……カズと、彼の部隊の仲間のために」

その答えを聞いてもう一度溜息。

「4時間15分後、2130、横手に燃料満載のC-3を待機させます。ただし条件があります」

「なんだい?」

「……ホールデンの行方、帰ってきたら教えてください」

「わかった。必ず」

「……司令官」

拳銃弾をマガジンに突っ込んでいく彼を見て彼女は弱く声を出した。

「どうした、皐月」

「司令官のこと……実はあんまり知らないなって……」

「そうかい？」

浜地はそう答えるとマガジンをM9A1拳銃に突っ込んだ。

「俺は皐月が一番俺のことを見てくれてたって思うけど」

その言葉はいつも通りの暖かさなのにすでに過去形で語られていた。

「そうかなあ。司令官のふるさとも、なにも知らないのに？」

「呉市だよ。もともと本土の方じゃなくて沖の小さな島だけだよ」

そう言っでどこか笑う彼を見て、皐月は下唇を噛んだ。

浜地が何かをしようとしていることは知っていた。それが艦娘に関わることで、それで艦娘たちを守ろうとしていることも。そのため軍の施設に強行突入するつもりだということも。

艦娘のことを考えて行動しているのだと知っている。

でも、それでも。

「……今はききたくなかったな、司令官」

「え？」

すつくと立ちあがった彼女はそれでも彼を見上げるようにして言葉が続ける。

「そうやって、ボクが知りたいことを全部教えたら、司令官は行っちゃうんでしょ？ だったらボクは、知らないままにいる！」

その瞳の端に涙が浮かんでいるのを浜地は見ないふりをした。

「わがまま言わないでくれ、皐月」

「やだー！ これだけは絶対にやだー！」

彼女は目を逸らさない。それでも目線がすれ違ったのは、彼が見ようとしなかったからだだった。

「司令官が行くことで誰かが救われるのかもしれない！ たくさんの人が笑顔になるのかもしれない。それでも司令官が死んだら何の意味があるの!?!」

「死ぬ気なんて……」

「だったらなんでボクを連れてかないのさ！ どうしてここまでだつて言つて置いていこうとするのさ!」

その幼い叫びに浜地は圧倒される。

「……このままじゃ、お前たちは殺されるかもしれないんだぞ。この戦争が終わつたとしても、ずっと戦い続けなきゃいけないかもしれないんだぞ」

「それでもいい！ 司令官がいるなら、それだつていい！ ボクはそれでも、それでも戦つて見せる!」

司令官と一緒にならどんな残酷な世界だつて許容してみせる。受け入れて見せる。

「救おうなんてしなくていい！ 背負わなくてもいい！ ヒーローみたいな司令官なんて望んでない、だから、だから……!」

涙で歪んでいく視界は彼の顔を捉え続ける。

「だから……行かないで、死んじやうような危険なことをしないで……!」

「——わかれよ!」

怒声が耳朵を叩き、急に体を抱きしめられた。乱暴に、強く。

「お前に先に死なれたらこつちが保たないんだよ!」

耳元で怒鳴られた声の内容を理解するころにはその部屋から司令官は消えていた。

「……なんで、ねえ」

それは自分の命よりも臯月を優先すると言つたことで。ゆつくりと膝をつき、耐え切れずに顔を覆う。

「それで会えなくなったら元も子もないじゃん……！」

「いいのか？」

「ああ、最後に泣かせちゃった。不甲斐ないよ」

「泣く程度でよかったじゃないか。これから俺は妹を殺しに行くんだぞ」

男二人は素晴らしいあつてトラックに乗り込んだ。

「さあ、終わらせにいこう。こんな気味の悪い白昼夢を終わらせにいこう」

O O O l O O O O S i V i s P a c e m ,
P a r a B e l l u m P H A S E I

「……？」

軍用航空機しか飛ばなくなった現代では民間の航空管制官の仕事は比較的楽になったと言える。まあそれでもレーダー監視業務は残るのだが。

「……鳥か」

ルソン島北部、熱帯雨林のど真ん中で一瞬レーダーが光った。それはすぐに自然クラッターとして処理され、レーダーから消え去った。

「まったく、レーダーの感度がよすぎるってのも問題だよな」

レーダーを前にそうぼやいた管制官のデスクの通信機が鳴る。

「はいはい、こちらMNLレーダー管制……え？ スケジュールのない国連機？……ああ、はい。先ほどキュービポイント飛行場までのクリアランスを確認して……え？ クリアランスルートから外れた？ 待つてください、こっちのトラッキングデータではもう飛行場の下りてるはずでは……」

航空機のコールサインを探すがそれを検索しても全飛行過程終了としか出てこない。

「どうなってるんだ……？」

自分のあずかり知らぬところで何かが始まっているらしかった。

トラックの荷台のホロが開かれ、そこから大きな怪鳥が翼を広げていた。火薬式のカタパルトによって弾き出されるそれは周囲に強力なバックブラストを撒き散らしながら飛び出していく。

「……リーパー全機射出完了、浜地、いけるか？」

「はい、いつでも」

黒の上下にセラミックプレート入りのタクティカルベスト、ヘルメットなどに身を包んだ浜地が答える。その手にはUTS25ショットガンが握られていた。彼の目を守るクリアのスポーツグラスにはいくつもの情報が浮かんで消えていく。

「目標までここから2、3キロ、ここから先は自走爆弾の地雷原だ。その自走爆弾には『艦娘によく似た爆弾』が紛れている可能性が高い。……それを吹っ飛ばす覚悟は？」

「……とつくのとうに」

「なら行くぞ」

航暉は晴れているにも関わらず薄暗い森を見て帽子をかぶった。迷彩色のハンチングを唾を後ろにするようにして深くかぶる。

「……ヘルメットじゃないんですか？」

「インナーヘルメットは付いてるよ。破片ぐらいなら防ぐし、脳殻自体も丈夫なんに変えてある。それにこれは人間撃ち帽子。これを被って人を撃つんだ」

「……様式美ってやつか」

「そんなもんだ。……いこうか」

航暉はショットガンをローレディのポジションで保持しつつ森の中に分け入っていく。その後ろから間隔を開けて浜地がついていく。前をゆく彼の背中にはバックパック型の大きな機械が張り付いている。浜地を後ろから見ても同じように見えるだろう。

「……さて、来るぞ」

入ってすぐに航暉がそう言った、直後に機関銃のテンポの速い射撃

音が降ってくる。その銃撃は二人の花道を作るかのように伸び、10メートル先にどきりと何かが落ちてくる……迷彩色の、なにか。

ショットガンの重い発砲音、同時にその頭が吹き飛んだ。いくら強化骨格と言えど10番ゲージのスラッグをまともに喰らえば大穴があく。

「ぼさっとするな、動くぞ」

航暉が走り出す。同時にいくつも樹冠を突き破るようにして影が現れる。航暉は木の幹を盾にするように飛び退きながらショットガンの引き金を引く。飛び出したスラッグ弾の先、銀の髪を揺らすその額を撃ちぬき、同時にそれが爆発する。間隔としてはほぼ同時、二人の背負ったバックパックが何かを撃ちだした。

二人が背負っているのは自由空間蒸気雲爆発抑制装置。気化爆弾の発生させる燃料に不活性化ガスを撃ち付けそれを相殺する装置だ。爆風が発生するものの、その威力は生身が耐えられる程度まで減衰させられている。まだ体は動く。

爆発の光量に反応してサンングラスのようなスモークになっていたグラスがクリアに切り替わる。それを確認して浜地が飛び出す頃にはもうとつくに航暉は走り出していた。

距離をかなりおいて爆発がいくつも起きる。ECMが始動し周囲の情報網を破たんさせ始めた。

「動くな浜地！」

上空から空気と耳をつんざくような音が降ってくる。直後、頭上の樹冠が揺れた。

「――！」

そのまま飛び抜けたリーパーが何かを空中に投下する。同時に警告。伏せる。同時に背負った機械が再び起動する。

発生した爆炎があたりを白く染める。次の瞬間に急速に熱が引き、目を開けてみると一気に周囲が明るくなっていた。

「……デイジーカッターの代わり、ねえ」

いくつも爆弾を使ったのだろうか、熱帯雨林が切り拓かれた道が伸びる。吹き飛ばされた部分は燃えるものもなくただ煙を上げるだけ

だが、その両脇からは小さく火の手が上がっていた。それと同時に石油臭いにおいが鼻を突く。人工物が焼かれた匂いだ。

「次が来る前に急ぐぞ」

「……了解」

航暉は油断なくショットガンを構えたままそう言った。道の縁で動こうとしたそれをショットガンで黙らせる。空になったシエルがゲートから飛び出すとくすんだ地面に落ちた。それを見て浜地は歯を食いしばって立ち上がる。

覚悟していた。それは間違いない。ただ、その覚悟にリアリティがなかったただけだ。

こうなるのはわかっていたはずじゃないか。それでも終らせると決めたんじゃないか。だから、進むんだ。あの子がもう道具として扱われなくてもいいように進むと決めたはずだ。だから、この葛藤を今は置いていかねばならない。そして事が済んでから、背負うしかない。今消えゆく影のことを今は見ないふりをして進むしかない。そうして消えゆく影の中に。

金髪が混じっていたことは目の錯覚だと信じたかった。

浜地はショットガンを握り直すと前を進む航暉について走る。

その後には薙ぎ払われた木の後が残っていた。その一角が不自然に揺れる。

「……ま、マジで死ぬかと思ったあ」

周囲に誰もいないことを確認してから臯月はのっそりと体を起こした。口の中に飛び込んできた砂利を吐きだすと僅かに鉄の味がした。こういうとき艦娘というのは便利だ。機装さえ付けていれば飛んでくる枝葉や土砂ぐらいなら耐えられる。

「……で？　なんで笹原中佐もついてきてるのさ」

木の影が揺れる。空気の屈折率が変わるのか気の輪郭が不自然に

揺れている。

「まあ、種を蒔いたのは私の身内だしね。せめてもの罪滅ぼしって感じかな。で？　まだ続けるの？」

足元の赤い土が不自然に踏み固められる。

「臯月ちゃん、悪いけどこれ以上は命の保証ができないと思うよ。わかったでしょう？　戦闘はカズ君がイニシアティブを握ってる。そして、臯月ちゃんがそこにいるとわかってて気化爆弾を使用した。……少しは遠慮してくれたみたいだけどね」

「だからなんなのさ、笹原中佐」

その木の輪郭に向けて木の枝を投げつける。その木の枝がまるで誰かに掴まれたように空中に止まった。

「今更姿を隠す必要もないでしょ？」

「他の自走爆弾を集める可能性はあるんだけどね。ま、お望みなら半透明だった影に色がつく。グレーの防水外套のような格好にゴーグル型のアイウェア、アイウェアからは顔の下半分を覆うように外套と同じ色の布が垂れている。」

「……光学迷彩、か」

「軍用ホロの投影スクリーンよ。そこまで万能じゃないけどさ。結構蒸れるしね」

顔の大部分を覆っていた布地を脇に払うとアイウェアを跳ねあげ整った顔を晒した。

「で、どうするの？」

「もちろん追いかけるさ。今日を放したら司令官は帰ってこない。そんな気がするんだ」

「そういう勘がいいのはいい兆候だよ、臯月ちゃん」

笹原がくすりと笑えば臯月はその顔を睨む。

「……帰ってこないってわかってて送り出したの？」

「まあね、死にたがりの戦闘バカとそれについてくお人好しじや行く末は言わずもがなだよな」

「なんで止めないの？」

笹原は笑みを深くする。

「ふたりとも機密保護や適正の補正の関係で記憶を操作されてる。でもそれは小手先の手段に過ぎないんだ。記憶や記録がなくなつて、体と脳はそれを経験している。そこから齟齬が発生して体はエラーを叩きだす。そうなれば末路は二つに一つさ、体を壊すか脳が壊れるか。弱いほうが先にいかれる。……記憶中毒ってやつだね。カズ君はそれの中期、浜地君はその初期症状が出てる」

「記憶中毒？」

「覚えがないかなあ。妙に疲れたような表情が増えたりしなかった？

あとはワーカホリック気味になつたり」

皐月は黙り込んだ。

「覚えがあるみたいだね。ワーカホリック気味になるのはそれに没頭して考えない様にしようとするのもあるけど、あの二人の場合はCS Cが記憶の補正を行うからよ。CS Cに繋がることで機械により記憶の修正を受ける。……本人たちがあずかり知らぬうちにね。それを受けてる間は記憶と経験のコンフリクトが解消される。でも、記憶と経験のズレは大きくなるから依存症のような症状がでる。……これがカズ君と浜地中佐のワーカホリックの正体だ」

「……その中毒症状が」

「遅かれ早かれ二人はああなつた。だから彼らが完全に狂う前に“ホールデン”についての切り札を得る必要にかられた。だから利用した。それだけの話よ」

笹原はそう言うアイウェアを戻す。ホログラムが起動し、その体が半透明になるように透けていく。

「追いかけるなら急ぎなさい。そろそろ私達も次の爆弾に捕捉されるわよ」

「その前に教えてほしいことがある」

「なにかしら？」

笹原は顔を覆う布をセットしながら聞き返した。

「……笹原中佐は追いかけてどうするの？」

「もう切り札のありかはわかったし逃げてもいいんだけどね、しかたないから付き合うつもり。私は彼らを狂わせた側の一人だからね」

そして彼女の姿は完全に空気に溶けたのだった。

「レーダーには写ってないか、そっちはどうだ？」

「見えてるよ、ぼつちり見えてる。盛大におっぱじめやがった」

首の後ろからQRSプラグを垂らした高峰が苦々し気な顔をする。

「状況的には？」

「間に合ったかどうかは疑問だが……すごいことなってるぞ。今送る」

そう聞いてきた天龍に高峰はそう言った。中継器が作動して全員に高峰の視界をレーダーマップに落とし込んだ映像が送られる。

「これは……どうなってんだ？」

「12機の無人航空機をジャグリングしながら進路を更地にしつつ目標の建物に向って最短経路で驀進する図、だな？」

苦笑いで杉田が言えば高峰が頷いた。

「自殺志願者かなにかかって思える進路だが……この無茶をやり通せるのが月刀の能力ってことなのかねえ」

それを聞いた電と雷が俯いた。

「高峰さん、司令官さんがどこにいるかわかりますか？」

「工場まで1.3キロ、この速度で行けば後20分で工場の敷地に入る」

「その前に止めることは……」

「無理だな。これ以上近づけばおそらく飛び回ってるリーパーにこっちが落とされる」

電の意見をバツサリ切って捨てたのは杉田だ。

「あいつと屋外でやありあつたら勝ち目はねえ、少なくともあのリーパーが全部落ちてくれないことにはな」

「じゃ、じゃあ……」

怯えたような声を出したのは雷だ。

「俺たちが勝負に出れるのは月刀が工場に入ったあとだ。工場は元々特殊義体製造がメインだ。電脳を扱うことから工場の建物の中は巨大な電波暗室になってる。月刀が建物に入ってしまったらリーパーはただのグライダーに切り替わる」

「工場に入ってからカズがゴールに到達する前に俺たちが追いつけばハッピーエンド、そうじゃなければバッドエンドってわけだ」

シンプルでいいじゃねえか、と杉田は答えた。そう言うのと積み込んでいた小型コンテナを開く。

「さて、降下まであと20分少々つてところか。そろそろ用意を進めておこうぜ」

杉田はそう言うのと高峰にポストンバッグを放り投げた。中には屋内戦を重視して、プロテクターやヘルメットが入っている。

「野郎勢は装備しながらになるが、突入の最終ブリーフィングというや」

対人戦闘に関しては杉田が一番詳しいので彼がそう言った。

「屋内だとおそらく警備用にチューンされたアンドロイドやガイノイドとご対面になる。おそらく腹の中に爆弾抱えてるはずだ。気化爆弾をフルに使うと工場自体への被害がひどいことになるから多用してくることはないと思うが警戒は必要だろう。となると近づかれる前に止めていくしかない。だから……これを使う」

コンテナから大振りな銃を取り出した。

「大口径ショットガンのストッピングパワーに頼ることになる。弾種は一粒弾と大粒鹿討弾、^{スラッグ}^{ダブルオーバック} 艦装を使える天龍は砲撃でもいけるはずだ」

「で、大手を振って使っているのかよ?」

「まずいよ。国連軍規約違反スレスレだ。国連海軍規約第52条第一項『水上用自律駆動兵装は対深海棲艦兵器としてのみ行使されるべき兵装であり、いかなる場合であっても国益や個人の利益の為に運用してはならない』……一応国連海軍の指示ってことでなんとかするが、前半部分が特にまずい」

高峰の言葉に苦りきった顔をする天龍。

「だがまあ、正当防衛の範囲内になるだろう」

「これから工場にアポなし突入するのにか？」

「違う違う、破壊的作業をしようとする人物の身柄差押え、そしてその応援。何ら問題ない」

「しれーかんの扱いはすごく問題ある気がするけどね」

雷がそう言うのと、違いねえなと天龍も同意した。司令官ふたりは苦笑いである。

「高峰、工場のスキャニング終わったか？」

「電力消費量が著しいところが3つ、第1製造ラインとそれの検査をする検査区画、最後の一つが地下4階」

「地下4階？」

「凶面だと建物の基礎でコンクリートの塊しかないはずなんだがな、そこで全体の半分以上の電力が消費されてる」

「見るからに怪しいわね、それがゴール？」

「おそらくな。そこがゴールだろう。そこにおそらく……」

高峰が目を細めると、その言葉の後を杉田が継いだ。

「そこに、CSCのメインサーバーが存在する」

杉田が襟元をいじった。

「こちらバナナフィッシュ。CSC、聞こえているな？ パッケージ・タンゴが内部に進入した後、俺たちも突入する、内部セキュリティのキーを転送しろ」

杉田がそう言うのと杉田達の網膜にIDが映し出される。扉などのロックはこれで自動解除されるはずだ。

「こうして『ホールデン』すら利用しなければ月刀のバカに近づくとすらできない。皮肉なもんだよ」

そう吐き捨てて、杉田はショットガンの薬室にスラッグ弾を送り込んだ。高峰も皮肉に笑う。

「俺たちはカズを止められる、ホールデンはその中心たるCSCのサーバーを破壊されずに済む。この点に限っては利害が一致しているわけだからな」

「そうして追いついたとしても、月刀が俺たちをまともに認めるかどうかはわからない訳だしな。全くオツズが悪すぎる」

「確かにポッドオツズは悪いが……」

高峰が笑う。その手には大振りの自動拳銃。――――月刀航

暉が使っていたM93Rだった。

「ゲーム終了に間に合わせればいいだけの話だ。幸いにも最強の切り札はまだこつちが持つてる」

「もう場のカードはそろった段階だぞ、高峰」

「ここにきて月刀航暉は掛け金上乗せ、CSCは様子見とききた。カズを排除できてないのはそう言うことさ。カズの動きをまだ予測できていない。そして俺たちのカードも読めていないんだ。だから止められない。そこに勝ち目がある。まだ天秤は傾き切っていない！」

そう言うとき高峰は獰猛に笑って見せた。

「掛け金上乗せといこう、それだけの手札が揃ってる。最後の最後にそのポッドを手繰り寄せられればいいんだ」

高峰の笑みに杉田が頷いた。

「お前のポジティブシンキングがうらやましいよ……案外早く落ち着きそうだな。そろそろ行けるか？」

杉田がそう問いかければ高峰が頷く。パイロットに合図をだしてゆっくりと工場の方に機首を向ける。

「屋上のヘリデッキからアクセスすることになる。ローターのダウンウォッシュに気を付けろ」

杉田がひざ当てなどをセットしながらそう言った。高峰が後方のハッチを開く。空の青さが目に染みる。

「あの、高峰さん」

それに目を細めながら、電は高峰の袖を引いた。

「お願いが……あるのです」

00010001 Si Vis Pacem,
Para Bellum PHASE 2

「……本気か？」

「なのです。司令官さんを止めるにはこれが一番だと思います」
「た、確かにそうかもしれんが……」

高峰は電の笑みを見てわずかに頬をひきつらせた。テイルトロクターの端から漏れこむストロボのような日差しに彼女の笑みが映える。

「大丈夫なのです。私は艦娘ですから、それに……」

司令官さんを信じているのです、と儂げに笑う。

「……電のプランで行くのが一番いいと思うぜ」

天龍が電の肩を叩く。

「司令官がどういう状況であれ、止めなきやいけないのは変わりねえ。なら一番止められる可能性があるのは電と雷だろう。なら電たちが思うようにやらせるのが一番じゃねえか？」

「……杉田、今回のリーダーはお前だ。どうする？」

「……電嬢、雷嬢。お膳立てはしてやるが、うまくはいかないはずだ。月刀航暉は特殊部隊出身、戦闘になったら俺たちじゃおそらくまともに勝てない。月刀に聞かせる体制に持っていかなきゃならぬ。可能性はある。それでも、できるか？」

「きつと大丈夫です。司令官さんなら、きつと」

「……だそうだ。行動は俺と雷嬢、高峰と電嬢がバディ、天龍は切り込みで動いてもらえるか？」

「おうよ」

「野郎二人と天龍の仕事は雷電姉妹を月刀航暉の元に送り込むことだ。無駄に相手を殺す必要も戦う必要もねえ。いいな？」

杉田がそう言つて後部ハッチに近づいていく。

「さて、降下用意といこう」

戦場の黒い煙が近づいてくる。一列に上がる煙の終点には大きな工場があった。周囲の金属には錆が生じているが、機能としては問題ないのだろう。

「嬢ちゃんたち、見えるか」

杉田がハッチから視線を外に向けつつそう言った。

「あれが、あそこが月刀航暉の、お前たちの司令官の戦場だ。この煙と石油と鉄の匂いが混じったこの空気だ。これがアイツの風景だ。これがアイツの戦場だ。……ここはな、まともであろうとすればするほど気が狂う、文字通りクレイジーな場所だ」

熱帯雨林を見下ろして杉田が辛そうな顔をした。

「この惨状を見るに、自走爆弾をもう50体は撃破して進んでいるはずだ。お前らと同じように子どもアイデンティティ・インフオメーションの情報を元にした魂を積んだそれを50も壊して進んでる。……もう、お前らのこともこうとしか見えない可能性もある。それくらい狂っている可能性があるんだ」

横に立つ二人の少女を見て、至極真面目な表情で二人の頭を撫でた。

「もしそこまでアイツが狂っていて、お前達の声すら届かないようなら……お前らは下がれ」

「杉田さん……」

「その時は俺がアイツを撃つ。いいな？」

杉田はポンプアクションのショットガンの薬室を解放し、スラッグ弾のシエルを叩き込んだ。室内での取回しを意識して銃身切詰処理ソウダオしたその薬室が改めて閉鎖され、鋭い金属音が響く。セーフティをオン。

「わかりました。でも、そんなことにはさせないのです。……そうですよね、お姉ちゃん？」

「当然よ。しれーかんは私達で止める」

それを聞いた杉田が笑う。高度が下がりヘリパッドが目の前にスライドしてくる。

「降下！」

2メートルほど下のヘリパッドに飛び降りる。機装の分重い天龍の膝が深く沈み込み、全員が飛び降りるとティルトローターが一気に高度を上げて去っていく。

『無事着いたようで何よりね、高峰君、杉田君』

「スキュラ———じゃないな、誰だお前」

飛び込んできた合成音声の通信に高峰は眉を顰めた。

『スクラサスって呼んでよ。スキュラからあなたたちのサポートを頼まれててね。パッケージ・タンゴは西階段の地下2階と3階の踊り場でシヨットガン片手に乱闘中』

パッケージ・タンゴ

目標 T……月刀航暉の位置までご丁寧に教えてくれるスクラサ

スと名乗った合成音声に高峰は歯噛みする。

「気に入らねえが信じていいのかそれ」

『信じるも信じないもあなたたち次第だけど、ここで嘘をついてもどうしようもないでしょ？』

高峰が歯噛みする横でヘリパッドの端にある階段室のドアを蹴破る杉田。

「今のところは情報提供感謝しとくぜ、スクラサスさんよ。急ぐぞ」

『杉田君。悪いけどもう一つ情報』

「あん？」

『パッケージ・タンゴと一緒に工場に侵入した人物は把握してる？』

「当然、浜地中佐だろう？」

『それを追って駆逐艦娘DD—MT05皐月が後を追って工場に侵入した。くれぐれも撃ち殺さない様に。ちなみに浜地中佐は地下二階でうろろうろしてるわ』

「……厄介ごと増やしてくれてどうも。行くぞ」

杉田は苦い顔をしながらも階段室に入る。高峰は階段室の外側に小さな機械を取り付ける。

「青葉、聞こえてるか？」

《はいはい、こちら青葉、クリアアンドクラウド》

「さすが技術班、しつかり繋がるな。しつかり俺の眼に乗ってるか？」

《当然です。司令官の突入ですから》

巨大な電波暗室となつている工場内部へ戦術リンクを持ち込むための中継器が無事作動していることを確認して高峰は僅かに頬を持ち上げた。

《工場内部のデータ、ロード完了です。今からサポートに入ります》
「頼むぜ」

リンク中継器を残して高峰が最後尾で階段室に入る。

「西階段への最短ルートは？」

《今いるのは東階段なので、その階段を3階から出て右へ30メートル先のキャットウォークを左へ、その先が西階段です》

「ならもう一つ、図面の最下層、地下三階への最短ルートは？」

高峰の言葉に一瞬青葉は沈黙。

《西階段は1階までしか通じていません。管理用の北階段か、もしくは、今いる階段室の隣のエレベーターシャフトです》

「高峰！ お前ファストロープのスキル持ってたな？」

その通信を聞いていた杉田が声を飛ばす。

「電嬢連れてエレベーターシャフトからアプローチできるか？」

「いける。そっちは西階段から？」

「ああ、頼んだ」

4階の踊り場の表示を確認して高峰は電に合図をだした。高峰もショットガンを構えゆっくりと廊下に顔を出す。廊下は非常電源に切り替えられたのか薄暗い赤い常夜灯だけが灯っていた。

「やな感じだ。急ぐぞ」

「なのです」

リノリウムの床をわずかに鳴らし、急ぐ。その先には荷物用の大型エレベーターのドアが鎮座していた。

「青葉、タイプわかるか？」

《三菱重工の貨物輸送用バーチカルリフト、今外部操作で屋上にリフトを動かします！》

「頼む。上まで移動したらエレベーターをテストモードへ」

エレベーターの表示の数字が上がっていく、それを見ながら高峰は

首の後ろからQRSプラグを引き出すとエレベーターの呼び出しボタンが納まる操作盤の前に膝をついた。表示板の下にあるジャックにプラグを差す。Rの表示を確認してドアを見る。

《テストモード切り替え完了、エレベーター動作停止します》

「上出来だ、青葉」

高峰はエレベーターの管理プログラムに潜りこむと4階のドアを開けるよう操作する。わずかな機械音と共にドアが開けば、真つ暗な空間が口を開けた。そのままドアを開けっ放しにするように指示を出してからジャックからQRSプラグを引き抜く。

「電、エレベーターケーブルを伝って7階分滑り降りるぞ。しっかりつかまってるよ」

高峰はショットガンを釣り紐スリングで胴に吊るすと電をおんぶするように背負った。一応スリングでも電を確保する形だが気休めにしかならないだろう。

「しっかり足回しておけ。衝撃で落ちると艦娘とはいえ目が当てられないことになるぞ?」

「は、はいっ!」

電はどうなるか想像してしまったのか慌てて両足をしっかり前に回してくる。それに苦笑いしながらも高峰は両手の対刃グローブを確認してエレベーターシャフトの壁面を這うケーブルの一本を掴む。「〃彼ら秋の葉のごとく群がり落ち、狂乱した混沌は吼えたけり〃、か」

わずかにつぶやいて、奈落へと身を躍らせた。

ショットガンシエルが宙を舞う。視界の先で藍のような髪をした少女が弾け飛ぶ。それを確認する間もなく航暉はその後ろから現れた真つ青な髪の少女を同じように破壊する。

「……浜地と別行動にしたのは間違いだっただか」

まだ使っていないスラッグ弾が詰まったチューブをUTS25ショットガンにはめ込みながらぼやいた。素人とはいえ周囲を確認する眼が減ったのは痛かったかもしれない。

見たことのある顔を見つけてわずかに目を細めたがそれをどかして地下3階のドアを開けた。

「……さすがに、ここで自走爆弾がネタ切れってこともあるまい」

ショットガンは装填されているスラッグ弾14発で打ち止めだ。後は9mm径のサブマシンガンで何とかするしかない。サブマシンガンではストッピングパワーに欠けるためできればショットガンを温存したいところではある。

「……そこか」

電脳に収められたマップを確認しさらに下へ続く通路がどこにあるかあたりを付ける。そこに向けてショットガンをすぐ撃てるように用意しながら走る。向こうから走ってくる影が見える。その面影は彼が551水雷戦隊の指揮官だったころの部下に似ていて一瞬下唇を噛んだ。

発砲、直後にその相手は頭をのけぞらせるように倒れる。その刹那に部隊の記憶が蘇る。

「……消えろ、影法師」

その軀をまたぐようにして廊下の角に立つ。わずかに顔を除かせるとライフルの弾が耳の脇を飛び抜けた。その弾痕を見て小さくつぶやいた。

「……30口径か」

機動戦になる。背負っていた自由空間蒸気雲爆発抑制装置を置く

と腰のガンベルトに差していたマチェットを引き抜いた。それを左手に持つと右手一本でショットガンを保持する。……義手ならショットガンの片手撃ちも可能だろう。戦闘用義体制御プログラム起動。

「……っ！」

深呼吸をしてから射線に飛び出した。相手は二人——獲物は30口径機関銃と短機関銃と見きわめると同時に重い発砲音。30口径機関銃を持った少女の首筋を抉るようにスラッグ弾が飛び抜ける。銃撃が一瞬止んだ。相手が持ち直そうとしたその時には機関銃の間合いはとうに過ぎ去り、至近距離の戦闘に切り替わる。

短機関銃を持った少女の脳天に向けマチェットを振り下ろす。相手はそれを機関銃で受け止めた。そのために相手の全面はから空気になる。そこを前蹴りで弾き飛ばすそうして確保した空間に武器をねじ込み、相手の頭に向けて狙いをつける。——イナーシャ・オペレーション式のUTS25はすでに再装填を終え、シエルはすでに撃発の時を待っていた。

発砲。彼女の頭を跡形もなく消し飛ばす。

「……っ！」

もう一度発砲。今度は地面で倒れている30口径を持つ少女の電脳を破壊する。いくら痛覚がないと言っても、首が半分持つていかれた状態で生かしておくのもかわいそうだ。

「……畜生」

こみあがってくる吐き気のような不快感に壁を叩く。ここにきて見たことある顔ばかり現れる。

「ダンカンに手をかけたマクベスはこんな気持ちだったのかね」

その眩きに答える声はない。航暉は唇を噛んで再び走り出す。目標の部屋に飛び込んだ。部屋はおそらく義体用のパーツの保管庫だ。その中を目標目指して駆ける。

オートメーション化された倉庫には人の気配はない。ひたすらに走っていく。

目標の地点についた。

「ベンゴ」

そこに現れたラツタルに足を掛ける。埃一つないラツタルが示すのは、日常的にここが手入れされていると言うことであり、その先に明かりが灯っているというのは、今現在ここが使われているということを示す。

「——そろそろだと思っていたよ、航暉」

下りた先、現れた広い空間に不釣り合いな椅子が一つ、ポツンと置かれていた。

「……こんなところで会うとは、意外ですね。中路章人中将」

「先を急ぐとはわかってはいるが、少しだけ付き合ってほしい。この老害の懺悔の一つ、聞き届けてくれないか？」

「……………ここを渡れってか」

杉田は苦笑いをしながら前を見た。灰青く光る培養プールの真上を渡るキャットウォークを見ながら杉田はセーフティを解除しながら前を見る。

「俺が先頭に行く。天龍、後方警戒は任せた」

「了解だ」

「雷嬢は俺の後ろから離れるな。万が一のことがあっても俺の体が盾になるはずだ」

「わ、わかったけど無茶しないでね……………」

「それこそ無茶な相談だ」

杉田はそう言ってからグレーチングのせいで足元が透けるキャットウォークに踏み出した。足元の鉄の格子の下には角柱のようなものが等間隔を保ってプールに浮かんでいた。

「こ、これって……」

「義体製造の神経接続工程用の溶液プールだな。溶液には微弱な電流が流れてて、皮膚のセンサと内部の光ファイバーを接続させる作業をしてるらしい」

杉田はそういいながら青い足元からの光を浴びながら雷の声にこたえる。

「わ、私の体もこうやって……」

「そうだろうな。全身義体はこうやって作る訳だ。個の後は皮膚の仕上げと動作確認とかが控えるだけだから、ほぼ完成形だな。おそらくプールに浸かってるあのケースの中に1つずつ義体が詰まってるんだろう」

杉田がそう言ったタイミングで青葉の無線が繋がった。

《杉田中佐！ 上です！》

その警告に散弾銃を振り上げる。同時にその視界には白い肌の少女型の義体が落ちてくるのが映る。

「南無三ー」

その腹を撃ちぬいてショットガンの銃床で横に吹っ飛ばすように殴りつける。キャットウォークの手すりにぶつかって跳ねたそれは雷の驚いて目を見開いた顔を眺めるかのようにしながらプールに向けて落下していく。歪んだ手すりには白濁したナノマシン溶液がべっとりと付着した。

「走れー」

一気に前へ駆けだす杉田、キャットウォークが盛大に鳴る。

盛大にガツン！ という金属音と共に真上から直立姿勢の義体が降ってくる。義体はその姿勢のままキャットウォークに下りると、マリオネットのような不自然な動きで杉田目がけて動き出した。

「……昔見た映画を思い出すな」

引き金を引く杉田。正確なヘッドショット。左の義眼には銃口の向きに対応した照準ドットが揺れている。それでも義体は止まらない。

「往生際が……悪い！」

その上体を再び銃床で叩き、プールへと落とす。同時に後方でもガツンと強い音がした。

「——天龍！」

「問題ねえっ！ 先に渡り切れ！」

天龍が居合の要領で抜刀、相手の喉笛を掻き切った。同じ色の瞳を睨み天龍は返す刀で相手を両断する。

「……いつ……！」

予備動作もなしに繰りだされた手刀を、上半身を逸らすように避けながら相手の首筋目がけて突きを繰り出した。勢いは半端だが、それでも相手に突き刺さり、生体部品を潰す嫌な感覚を天龍の手のひらに返した。

「これでも止まらないのかよっ!？」

「天龍、バック！」

杉田の叫びにとっさに飛び退くと、相手の電腦が正確に狙撃され、吹っ飛んだ。どさりとキャットウオークの手すりにもたれるようにその義体が動きを止める。

「……50口径を持ってくるべきだったかな」

「ソウドオフしたショットガンでよくやるな」

天龍の呆れのような賞賛に、杉田は肩を竦めて答えた。ショットガンをひっくり返してチューブ型弾倉にスラッグ弾のシエルを突っ込んでいく。

「……おい、さっきの」

「気づいたか。気がつくよなそりや。……病院を襲撃したのと同じ型だ」

「……やっぱりか。気味が悪いぜ」

天龍は刀が歪んでいないことを確かめて鞘に戻した。カチンという音と共にロックされる。

「青葉、他に反応は？」

《ほとんどが地下3階に集中している見たいです。……と言っても工場内の稼働している機体は元々数が無いので、残り……6体。そのうち3体が地下3階で……あ、反応途絶えました。おそらく……月刀大佐です》

それを聞きながら杉田は再装填を終えたショットガンを持ち直すと、薬室にスラッグ弾を差し込んで、セーフティをかけた。

「なら月刀は無事西階段を突破したわけだ。急ぐぞ。追いつけなくなる」

《今高峰中佐がガイノイド2体と交戦中、残り一体は浜地中佐と戦っています》

「浜地中佐の方に応援は必要そうか？」

《いえ……おそらく大丈夫かと》

青葉の声が僅かに安堵のような声に変わった。

《皐月ちゃんが間に合いました》

単装砲が火を噴いて、相手の右肩から先をもぎ取った。

「さ、皐月……？」

「司令官、動かないで」

浜地の盾になる位置に立って皐月は振り返らずにそう言った。左

腕には相手の銃弾が掠めた傷から赤い血が流れる。それを無視するように皐月は単装砲に次弾を装填する。

「……まだボクとやり合う気なの？　かわいいね」

両手に提げた単装砲を構えながら相手を見やる。

「さよならだ。ボクのそっくりさん」

二発の砲弾を受けて金髪の義体が倒れる。それを確認して単装砲にロックをかけた。そこに来て、皐月は初めて浜地の方を振り返った。

「さて、司令官、ボクに言わなきゃいけないことがあるんじゃないかな？」

「え……？」

「え、じゃないでしょ」

「ま、待て。なんでお前がここにいるんだ!？」

「なんでも何も。後を追っかけてきたんだよ？」

「後って……もしかしてあの爆撃の跡辿って？」

「それ以外にないよね？　月刀大佐の爆撃で死ぬかと思っただけど」

「そ、そんなすぐ後を追ってきたの？」

「うん。何回か月刀大佐と目があったし、気がついてたはずだよ？」

その答えに言葉が継げない浜地。

「で、追いついてみたらなんだかボクのそっくりさんに追っかけられてピンチみたいだから加勢したわけなんだけど、ボクがこれなかったらどうする気だったの？」

「……す、すまん」

「それよりもいうべきことがあるでしょ！」

どこか顔を赤くしながら叫ぶ皐月。浜地はその気配に気圧されながら、恐る恐る口を開く。

「……助かった。ありがとな」

「……どういたしまして」

及第点、と言いたげな視線を向けて皐月はついと顔を逸らした。

「それで？　この後どうする？　ボクはこのまま撤退を強く強くつよく勧めるけど」

さあ、帰るよと言いたげに砲を振る皐月。

「悪いけど、まだ帰れない」

「……司令官はこういう場面に限って意固地だよな」

「月刀大佐を放って一人で逃げるわけにはいかない」

そう言うのと浜地は空薬莖の排出不良を起こしたショットガンをいじる。機関部の樹脂製のカバーを外して振ると歪んだプラスチックのシエルを取り出した。改めてカバーを閉じて、ポンピング。スラック弾が改めて入ったことを確認する。

「まさか、ここまで来てボクを置いていくとか言わないよね？」

「……まさか」

「その間は何なのさ……ボクが信用できない？」

「そんなんじゃない……そんなんじゃないんだ」

浜地は俯いた。

「ここは戦場だ。皐月たちが戦う戦場とはまた違った戦場なんだ。こんな戦場を、お前に見せたくなかった」

「さつきみたいに誰かのそっくりさんが出てくるし？」

黙り込む浜地。

「……スクラサスから聞いた。ここは艦娘の元になった人たちが集まる場所だって。ゴーストダビング？ そのための施設だって」

「……」

「その結果生まれたのがボク達だってことも聞いた。それを壊そうとしていることも聞いた。それを壊すこと……ていうよりはこの施設のことを知らしめることで艦娘の扱いを変えようとしてるってことも聞いた」

皐月は浜地の目を見つめる。今度こそ、彼に目を逸らすことを許さない。

「だから、もう隠さないで。ボクは何があっても司令官の味方になる。だから信じてほしいんだ」

単装砲をベルトにひっかけ両手を空けた皐月は彼の頬に触れる。

「ボクは司令官のそばにいたい。言ったよね？ そのためだったらボクは戦える。どんな相手だって戦える。ボクはボクの意志で戦える。」

司令官の見えるものを見て、一緒に考えて、一緒に戦って、そうしていたいから」

司令官、と皐月は呼びかけた。

「だから、一緒にいさせてよ。あなたのそばにずっといたいんだ」

皐月はそれを言ってから、しばらく経って顔を真っ赤にした。

これって、遠回しな告白では？

「……………ぷっ」

その様子を見て浜地は小さく噴き出した。

「な、笑うだなんて酷いじゃないか！」

「悪い悪い、俺の負けだ」

浜地は黒いグローブに包まれた手を握りしめる皐月に向けた。

「皐月、一緒に来てくれるか？」

その問いかけに、皐月は笑って——満面の笑みで笑って拳を重ねる。

「まっかせてよ、司令官っ！」

00010010 Si Vis Pacem,
Para Bellum PHASE3

彼は「彼」の元へと向かう、ハンチングを後ろ向きに被った彼は「彼」の姿を見て静かに笑った。「彼」の手元には黒の国連海軍の制帽があつた。上級士官であることを示す鍰に入った金の桜花紋がどこかオレンジのきつい室内灯に照らされる。

「……言語能力を喪失したと聞いていたんだがな」

「スキュラのおかげさ。補助電脳のおかげで言語能力がある程度回復した。イメージから言語の変換に僅かにタイムラグがある。そこは許しておくれよ」

「それで?」

彼は「彼」の前まで来るとわずかに笑った。

「俺に聞いてほしいと言うことはなんだ?」

「君の妹たちをこうしたのは、私だ」

その告解に彼は静かに目を細めた。

「どういうことだ?」

彼のその問いに「彼」は小さく項垂れた。

「自律駆動兵装の開発計画……その計画のために私は尽力した。誰も死なない、もう誰も死ぬことのない世界を作る、その手助けができると信じていた」

要領を得ない答えに彼は静かに苛立つ。それでも「彼」の言葉の先を待った。

「……君たちの父親が亡くなったことで、軍の実権はほぼすべて月刀利郁のものとなった。軍人にして、持てる者の義務——ノブレ スオブリージュを成す人格者であろうとした君たちの父親は、月刀家にとっては目の上のたんこぶでしかなかった。だから殺されてしまった。それが暗殺であることは暗黙の了解だった。そしてその後

にクーデターがあることも、各軍の将クラスの人間は知っていただろう。私はその時は自衛海軍の二佐だったがうつすらとその空気を感じていたものさ。上官の海将補から身の振り方を考えておけとも言われたこともあった」

「彼」の目元には影が落ちその色を窺うことはできない。それでもそこには悔恨の匂いが混じっているように見える。

「その頃、私は30代後半、油が乗り切ったところで、出世のペースは中の上といったところだった。出世欲がなかったとは言わない。下心がなかったとも言わない。でも、私は私なりの正義を持ってこの職務についてきた。……いつか、日本を再び平和な社会へと引き戻す。そのため礎となり、血の川を渡る、その覚悟を持ってやってきたつもりだ。自らの部下を守り、その部下はまた、その部下を守るだろう。軍を守り、その軍が守るべき日本の社会を守るためにはその鼠講の頂点、できる限り上に就く必要があった。だから私は力を欲した。だから月刀家のクーデターを黙認した。防衛組織の地位を高め、より皆を守る組織にするために」

そう言うと「彼」は自嘲するような笑みを口の端に浮かべた。噛み殺したような笑いが響く。

「部下が死ぬところを何度も見てきた。その度に上に立つ必要性を感じた。そう言うタイミングで、そのチャンスがやってきてしまったんだ。次世代型無人兵装の開発プロジェクト、その立ち上げメンバーとして関与しないか。……プログラムの計画を読んで、それは戦場を変えると確信した。高性能AIと高火力武装を積んだアンドロイドによる戦線、陸軍の計画を元に海上用に転用できないかという構想……実に魅力的だった。もうこれで部下が死ぬところを見なくて済むと、本気で歓喜した。これは次世代の防衛構想の根幹を担うプログラムだと思った。これの運用士官第一期生、いや、その教官として関わることになれば、それで成り上がれる。それで得た権力でさらに仲間を守る。……そう考えて私はライ麦計画のプロジェクトチームに入った」

あたりは地鳴りのような機械の駆動音がどこからともなく入り込

んでいた。〝彼〟の言葉の余韻はそれの合間に消えてゆく。

「その時は、本気でその理想を信じていた。それを成せると信じていた。そのために予算獲得のための暗澹な会議に参加し、上がってくる報告を聞き、サインをし続けた。そのサインがどこでどういう使われ方をしてるか知らないままに。そして、私は……ただの傀儡と成り果てた」

〝彼〟の頭は完全に地面を向き、彼からはその口許すら見えなくなる。

「……〝それ〟に気がついたのは、その結果が艦娘となって帰って来た時だった。気がつくのにはあまりに遅すぎた。疑うきっかけはいくつもあった。それでも私は見ないふりをしてきた。そのツケが返ってきたんだ。兵器に載せられたのは拡張型AIではなく、子ども之魂だった。……絶望したよ。私のサインはそれのゴーサインだったんだ。子どもに銃を持たせ、戦場に送り出したのは他でもない、私だった」

その声はわずかに揺れ、それはすぐに収まる。いつの間にか制帽は地面に落ちていた。

「私は予定調和のように水上用自律駆動兵装運用士官のテストオフィサーとなった。重巡洋艦のテストでね、私の元に最初に来た少女は古鷹だった。……偽りの記憶も、出自も疑うことなく受け入れている彼女に私は最初は嫌悪すら抱いたもんだった。自らが生み出したものなのに……身勝手なものだよ」

〝彼〟はそう言うと言を振った。

「古鷹は、きつとそういう私を見抜いていたんだろうと思う。それでも私を信じて疑わない彼女は痛々しくもあった。次々くる子も同じような感じだ。当然だった。元々艦娘は指揮官に敵意を向けられない様に調整されてくる。その歪さにすら慣れていく。どんどん水上用自律駆動兵装が実用化されていくにつれ、その歪にも慣れていく」

彼はただ言葉もなく聞いていた。

「そうして……君の妹たちもやってきた。それとほぼ期を同じにして君が国連海軍に入隊したとの連絡も入った」

「彼」は両手を組んで額に当てた。……まるで祈りでも捧げるかのようなポーズだ。

「やっと、やっとこれで罪滅ぼしができると思った。いくら言葉を尽くしても、いくら君を守ってもそれは私の罪を薄めようとする自己満足的な贖罪に過ぎないことはわかっている。だが事実として、君の妹たちをモルモットにしたのは紛れもなくこの私であり、少しでもこの罪を軽くしたかった。軽くはならないと知っていてもいたがね」

彼はそれをただ静かに聞いていた。表情を忘れたような顔でただ「彼」を見下ろす。

「……航暉、頼む。私を殺してくれ」

「彼」はそう言うかわずかに肩を揺らす。

「……こんなことを君に頼むのは、傲慢なのだろうと思う。だが、私は殺されるなら君にと決めていた」

囁くような声がやけに響いた。

「君の人生をめちやくちやにした。家族も名前も奪い、その家族すらまともに弔えないまま君を戦場に追い立てた。その苦しみは私の貧弱な想像力をはるかに上回るだろうと思う。その罪は私の首一つで収まるものじゃないことは百も承知している。そして、私がこう話すことすら、もう傲慢であることも、把握してるつもりだ」

「彼」は顔を上げた。彼の知っている顔より幾分老けた顔だった。「私が君と君の妹たちを知ったときには、もう君しか救えなかった。咎人の唯一の贖罪として、君を死なせないことをずっと……自らに課してきた。だが、もう私は君の力になれそうもない。だから……」

「中将」

彼が口を開く。

「もう、俺しか救えなかった？ 違うな、全然違う。もう俺は「ゾンビー」なんですよ。あの日、砺波ジャンクションの事故で死に損なった、ただのゾンビーだ」

レッグホルスタに手を伸ばしながら彼はそう言った。

「死ぬことも、生きることもしないまま、16年間過ごしてきた。……ねえ中将？ あなたにとって守りたいものってなんでした？」

「……部下だった。その部下ももう、戻ってこない」

「……俺は、家族だったよ、中将。それももう、戻ってこない」

取り出したのはM93R、すでに薬室には9×19mmパラベラム弾が送り込まれていた。セレクタをセミオートにずらす。

「死ねないゾンビーの願いつてわかりますか？」

「……死ぬこと、か」

「中将が死を望むように、俺もまた、死に場所を探してた。……死にたがり同士のよしみです」

エレベーターシャフト、地下三階。

そのドアの影で高峰はショットガンのシエルを薬室に叩き込んだ。手にはダブルオーバーバックの散弾が詰まったシエルがあり、それが一気に飛び出していく。

「こちとら生身できついんだよ」

金属製のドアはすでに弾痕でぼこぼこだった。

「電、跳弾とかで死んでないだろうな？」

「だ、大丈夫なのです……」

エレベーターシャフトは1メートルほど床面レベルよりも低いところに最下面があり、電はそこにしゃがみ込んでいた。その頭上を機関銃の乱射の射線が飛び抜ける。

「……熱源に向って銃弾を送り込むだけとなると、ゴーストダビング

した後アフターケアを入れてないな？……つとー！」

高峰はそう言うのと扉の影で体を回す。ドアの強度がそろそろ限界らしい。高峰のヘルメットの脇に弾痕を空けた。ゆっくりとドアから下がるように距離を取ると少しずつ視界が開けてくる。射線の影いっぱいまで下がると相手の影が僅かに見える。

「電、今は動くなよ！」

その影の大体の位置に狙いをつけ、引き金を引く。同時に反対側のドアの影に向けて走る。そうしながら引き金を引きつばなしにしたままポンピング、ワンストローク終わるときにはもう次弾が飛び出していた。——スラムファイア、そうして飛び出した散弾はある程度の面を持って相手に食い込んだ。

「防弾チョッキサマサマだなくそっ！」

反対側のドアの影で高峰は毒づいた。まだ銃撃は続く。目視した限りでは2体のガイノイドに数発は確実にヒットしていた。エイミングがおろそかだったとはいえ、普通の人間やアンドロイドなら動きを止める。

「完全に痛覚切って、警報も全部解除してるのか？……イカれてるぜ、まったく。文字通り電脳止めるまで相手は止まらんか」

「高峰さん……足……」

「問題ねえよ、高々22口径の跳弾が一発掠っただけだ。当たっても鉛筆の芯みたいなもんさ」

電の視線の先に僅かに血が垂れる。血の筋を遡れば、左の太ももから黒いズボンの色が僅かに変わっているのがかろうじて分かった。高峰は毒づきながらもスラッグ弾をローディングゲートから弾倉に突っ込んでいく。相手の銃撃の角度が僅かに変わる。

「……移動してんな」

薬室に直接スラッグ弾が詰まったシエルを放り込み、フォールディングストックを肩に当てる。高峰は小さく溜息をついた。

「そろそろ決めたいが、いけるか」

高峰はもう一度扉の影でライフルを構える。そのタイミングで重い「砲撃音」が響いた。

「……!?!」

銃撃がほぼ同時に止む。高峰はゆっくりとエレベーターホールを覗きこむ。

「……大丈夫か?」

「それはこっちのセリフだよ」

煙を上げる単装砲を担ぐようにした少女の金色の髪が揺れる。その足元には小さく火花を上げる義体が二つ転がっていた。

「皐月ちゃん……だね?」

「うん、ちゃんとそっくりさんじゃなくて、DD-MT05の皐月だよ」

「……君がいると言うことは、浜地中佐は」

「ここですよ」

苦りきった声がする。その方向を見ると黒い服を着た浜地中佐が見えた。

「皐月、先行しすぎだ」

「ごめんごめん司令官、でもちゃんとやったでしょ?」

「ちゃんとやったのはいいが置いてくなよ」

それを聞きながら高峰は小さく溜息をついた。

「俺たちを助けたってことは月刀航暉の確保に協力してくれるってことでいいのかな?」

高峰はショットガンのストックを肩から外しつつそう言った。電は彼がまだセーフティを駆けていないのを見て息をひそめていた。

「まあ、そういうことで。……俺にとってはここを止める理由が薄くなっちゃったんで」

「……そうかい」

高峰は皐月と彼を見比べて、大体何があったか察したようだった。

「上がれます? 中佐」

「……俺の階級は月刀大佐から聞いたのか?」

「俺がいなくなっても部下のことは高峰がなんとかするだろう」って言ってましたからね」

その声にビクツと肩を震わせたのは電である。

「電ちゃんは久しぶりかな」

「お、お久しぶりなのです。あの、さつき言ってた、俺がいなくなっても〴〵って本当ですか?」

「俺はそう聞いたけど?」

「……生きて帰る気なしってか」

高峰は浜地の手を借りながらエレベーターホールに上がる。

「……止血帯ありますけど、使います?」

「頼むよ」

浜地から受け取った止血帯を足に巻きながら高峰は改めて地下三階のマップを確認する。

「青葉、まだ通信残ってるか?」

《こちら、青葉。ノイズ結構走ってますけど》

「警備室のデータ掌握してるな? 侵入者のトラッキング、カズらしいものはどこで途切れた?」

《えっと……最後は地下二階ですが、最後に警備ドローンの通信途絶の跡をたどると地下三階B―5通路、その先には合金骨格の保管庫だけなので、そこに向かったかと》

「わかった、杉田は? 死んでないだろうな?」

《もうすぐ地下三階に到着します》

青葉の声を聞きながら高峰はショットガンからFN Fives even拳銃に持ち替えた。痛みを気にしながらも立ち上がる。

「浜地中佐、悪いがこちらの指示に従ってもらおう。いいね?」

「……わかりました」

高峰は拳銃を低く保持したまま廊下を歩く。

「……っ!」

「ひでえな……こりゃ」

正確に電腦を吹っ飛ばされた義体が1つ、近くの廊下の角には2つ転がっていた。壁にはいくつもの弾痕が散らばっていた。空葉莢と白濁したナノマシン溶液に塗れた義体を見て電は足を竦めた。

「10番ゲージのブリネツキスラッグか……物騒なもん使ってる」

高峰は感情を殺してそう言った。

「向こうからきて、ここで二発。この子を壊して前進、その角でガリルの掃射にあうが、重みを減らしたうえで飛び込んだ。短機関銃に……マチェットかなにかを振り下ろしてるな。どちらも電脳をスラッグで吹っ飛ばされてるか」

「そんなところだな」

後方で野太い声がする、杉田陣営が合流した。

「なんだ、お前被弾したのか」

「跳弾だ」

「不用心だな」

振り返った高峰はどこか皮肉げな笑みを浮かべた杉田に向って肩を竦める。

「これは……司令官がやったのか？」

「だろうな。10番ゲージなんて軍じゃ使わないからな」

天龍の声に杉田が答えれば杉田も銃を拳銃に持ち替えた。

「で？ この先だな？」

「ああ」

高峰が先導するように歩き出す。その背中を追うように雷電姉妹が小走りについていった。

「今のって、いまの義体って……」

「わかっているのです。お姉ちゃん……言わなくても、わかっているのです」

電はそう言って前に向かう。高峰が第三保管室と書かれた部屋に拳銃を構えながら入っていくところだった。

「誰もいない、か……」

「司令官さんは……」

「そもそもここに来なかったか、ここから忽然と姿を消したか」

天龍のその声に応えず高峰は迷うことなく進んでいく。

「お、おい」

その後ろを慌てて艦娘たちが追いかける。

「……ここだ」

「何が？」

高峰は一つの柱の前で立ち止まる。

「ヒミツの入り口」

高峰は柱に向けてそつとショットガンを向けた。そのまま柱にゆっくりと近づいて……その銃口が柱に突き刺さる。

「……ホログラムか」

「そうだ。杉田、地下三階のマップを参照してみろ、地下二階に重量物が置いてあるわけじゃないのに、地下三階にしかない柱を置くんなんておかしいと思わないか？」

「構造上必要のない柱って訳か」

「そう言うことだ。で、この奥には……」

高峰の姿が半分ホロに潜りこむ。すぐに、ズズツとなにかがこすれる重い音がした。

「……地下に続くハッチ、すでにロックが外されていることから見ても」

「この下か」

杉田がホロを潜る。

「お前は殿でたのむよ、杉田。下りたところで奇襲を受けても、お前のでかい凶体越しにどう支援を送るんだよ」

「……それもそうか」

高峰がハッチの奥に消える。急なラツタルを下っていく。その後ろを電が後ろ向きでゆっくりと確実にステップを踏んで下りていく。奥が仄明るく光っている。

高峰が一気にそこへと飛び出した。

「動くな！ 銃を置け、……カズ」

電が下りた先では拳銃を構えた高峰春斗と、M93Rを構える、司令官の姿があった。

——ああ、やっと追いついた。

こちらを向く彼の顔を見て、電はただそう思った。

00010011 Si Vis Pacem,
Para Bellum PHASE 4

天井の高い地下空間で1人と5人は向き合っていた。

「……銃を置け、カズ」

高峰はFN Five sevenを向けながら努めて静かに素晴らしい直した、高峰の横には同じ型の拳銃を持った杉田が並ぶ。……しんがりを務めた杉田が下りてきたのを確認して、高峰はゆっくりとセーフティを解除した。コツキングインジケーターが起き上がっており、すでに内蔵ハンマーは雷管を叩こうと待機している。

「揃いも揃ってよくこんな山奥まできたな」

「勝手にいなくなった奴を捕まえに来ただけさ」

航暉越しに中路の影を認め、高峰は小さく舌打ちをした。まだここもスキュラの掌の上か。

「なあ、カズ。まだ俺が見えているか。誰だかわかるか」

照準を相手の胸元に合わせながら高峰はそう問いかけた。射線の奥には同じようにM93Rを構える航暉の姿があった。オレンジ色に近いあたりが2階分ほどもある天井から降り注いでいた。まるでナトリウムランプのようなオレンジの色合いの光にそれ以外がまるでモノクロームになったかのようにも見える。

「……カズ、頼む。銃を置いてくれ」

高峰はそう言って、人差し指をトリガーガードから引き金に移した。

「……撃つなら撃てよ、中佐」

「カズ……」

「ただし、その時点から敵同士だ」

高峰は僅かに口の端を持ち上げた。

「なら今は味方か？」

「まさか」

航暉はゆつくりと拳銃を振った。

「ただの他人だ」

「そうかい。そこまで薄情だとは思ってなかったよ、月刀。それとも月詠と呼ぶべきかな、それともガトー？」

茶化するような軽い口調で杉田が笑う。航暉は軽く溜息をついた。

「調べたのか」

「一通りな。で、あんたがここに何をしにきたのかも知ってる」

「ほう？　で？　君たちは俺の味方なのか？　それとも止めに来たのか？」

「……両方だと言ったら？」

「排反事象だ。それは」

航暉がそれを鼻で笑う。

「……それは違うのです」

凜と澄んだ声で電がその会話に割り込んだ。

「司令官さん。もう抱え込まなくても大丈夫なのです。一人でいようとしないでいいのです」

電はそう言って一歩前が出る。

「司令官さんがするべきなのは敵討ちでも、あきらめることでもないのです。だから、ここでこんなことをしなくてもいいのです」

「……何がわかる？」

「わからないからこそわかりたいと思う。それは間違っていないと思うのです。司令官さん、あなたは妹さんたちを守りたかった。大切な家族だった。だから守りたかった。なのに守れなかった」

「黙れよ……」

「黙りません。司令官さんがいなづまのことは見てくれるまでは、こちらでも黙れないのです」

電はそう言ってさらにもう一歩、前へ。

「守れなかった、だから強くなりたかった。違いますか？」

「黙れって言ってるんだよ！」

拳銃が電の方に向おうとしたそのとき、その前に大きな影が飛び込

んだ。杉田だ。

「……銃の向きすら忘れた馬鹿野郎が」

その一言がゴングの代わりとなった。杉田の右手の人差し指が引き金を引いたのだ。その銃弾はとっさに額を守ろうとした航暉の右手にあたり……ガスンと鈍い音と共に腕にわずかに食い込んだだけで止まった。それとほぼ同時に航暉も引き金を引く。杉田の義手の左手に弾かれて弾丸は明後日の方向に消え去った。義足の強力なパワーで杉田が一気に踏み込んでいく。

拳銃弾の応酬が続く中航暉は左へサイドステップ、そこに刀を抜刀した天龍が飛びかかった。

「そろそろ目を覚ませこの馬鹿司令官っ！」

振り下ろされる峰打ちを見切り、髪を数本散らしながら避けるとその足元へローキックを叩きこむ。

「だっ！」

天龍がバランスを崩すと同時、背後を取った杉田が航暉に躍りかかる。手には大振りなナイフ。航暉は振り向きざまに左手で引き抜いたマチェットを振りかざしそのナイフを受ける。金属の鳴く音の余韻が響く余裕もなく受け止められた勢いを利用して杉田はサイドに回り込んだ。追撃するように拳銃の音が響く。火花を上げたのは航暉の義手だ。

「てめえの妹はもう『死者』だ！ てめえがあがいてももう帰ってこない！」

航暉の右手に握られたままの拳銃がその答えの代わりとなった。3点バーストの射撃音。9×19mmパララム弾が三発放たれ、2発が杉田の防弾チョッキに、1発が後ろに跳び抜けた。

「黙れフランケン」

その答えを聞いた杉田が凶悪な笑みを浮かべる。

フランケン——それは元々杉田が自らを貶めて言うときのあだ名だ。つぎはぎだらけのフランケンシユタイン。

ああ、そうだな。俺はフランケンシユタインだ。

「なんだ、覚えてるじゃねえか」

そう言うと同時に左腕の義手が展開する。戦闘服を裂くようにして腕の外装が立ち上がり、手首のヒンジが下へずれると円柱状のものが現れた。現れた銃口——10番ゲージの単装砲から圧縮空気で発射されたのは大振りな飛翔体。プロジェクタイル航暉の足元に着弾すると同時にその視力を焼きつぶさんと爆裂した。同時に発生した電磁波がその場に在るものの電腦に襲い掛かる。

「天龍っ！上だ！」

天龍の背部艤装が駆動した。速射重視で装備された対空砲が数発発射される。それから逃げるように航暉は壁際に設置されたキャットウォークを走る。

「なんであんなところにいるんだよ！」

「あいつの義手に液体ワイヤ入ってるの忘れたか!？」

天龍の驚きに杉田が叫び返して、彼は走り出す。義体出力の制限を解除する。ズガンツッ！という生身の体ならあり得ないような音を出しながらコンクリートの床を蹴ると、一気に航暉がいるのと同じキャットウォークに飛び上った。

《浜地中佐、中路中将の安全を確保しろ。月刀はこちらで対処する》

《了解》

電脳通信を叩き込むとさらにキャットウォークを蹴る。義体と生身の接続部が悲鳴を上げるがそれを無視した。そのまま至近距離に飛び込む。

航暉はマチェット突きだすようにして間合いを確保しようとするが、床を這うようにまで姿勢を低くしこれを避ける。強化された脚力によって生み出した速度を殺すことなくボディブローを叩き込んだ。115キロのその巨体から繰り出される拳を受けて航暉は真後ろに吹っ飛ばされるが、その動きは空中で斜め上方に変わった。——

—航暉の拳銃を掴んだままの右手がありえないほど外側に曲がりワイヤの射出口が現れ、半透明の液体ワイヤが天井に向って伸びていた。

「舐めんじゃねえよ」

杉田は拳銃を左手に持ち替え狙いを付ける。左の義眼が照準を補

正しそれを義手に伝えていく。

「伊達にガンナーやってねえんだよ」

その銃弾が航暉と天井を吊るすワイヤを断ってみせる。落下した航暉に向って高峰が蹴りかかる。それをバック転するように身を反して躲し航暉は右手の拳銃をレッグホルスタに戻し、もう一振りのマチェットも振り出す。そこに天龍が踏み込んだ。

リーチでは天龍の刀の方が長い、航暉の間合いの外側をなぞるようにフットワークを駆使して回り込みを続けながらマチェットをいなしていく。

「もうこんなことはやめようぜ、司令官。電や雷だけじゃねえ、ちんちくりんも、響も待ってる。利根たちだってお前の帰りを待ってたんだ」
「ゾンビーに帰る場所なんて、ねえよ……」

互いを弾いて一度距離を取る。直後に上から杉田が降ってくる。左手にナイフを持ちその懐にいきなり飛び込んできた杉田の影に航暉は一瞬で対応した。その左手を切り落とさんとマチェットを振り下ろす。

鈍い音がして杉田の腕に半分めり込んで止まったマチェットを見て、杉田はニヤリと笑った。航暉を前蹴りで蹴り飛ばす。どうじに腕を曲げて航暉のマチェットをひねり取る。

「悪いな、義手だ」

「知ってるよ」

「そりや僥倖。これは月詠航暉もガトーも知らないはずだ。ならお前は何んのゾンビーだ？」

杉田が再び強烈な踏み込み。義手に刺さったマチェットを引き抜き、彼に切りかかる。

「答えろ、てめえは誰のゾンビーだ？」

数回火花が散る。メリーゴーランドのように互いが互いに回り込もうとしながら斬撃の応酬が続く。展開が速すぎ周りは誰も追いつけないまま斬撃が続く。

「てめえの記憶が何であれ、出自がなんであれ、今の仲間を捨ててまで押し通すべきことか？ やらうとしていることは、それほど重要か

？」

杉田が不意にマチェットを捨てた。航暉の右腕を取りそのまま相手を背中に乗せ放り投げる、一本背負いだ。航暉は受け身を取るのではなく、空中で身体を反すと左手を地面につき、地面に叩きつけられることなく。持ち直した。

「てめえは一人じゃねえだろ！ ホールデン気取りで世を憂う以外にもできることがあるだろ！ 一人で勝手に終わらせようとしてんじゃないよ！」

杉田の声に航暉は無表情のまま改めてマチェットを握り直す。答えないまま改めて距離を詰めていく。振りかざしたマチェットの横を何かが叩き、航暉の獲物を真つ二つにする。

「……いい加減にしろ、カズ」

火を噴いたFN Five sevenを構えて高峰がそう言った。「そうして、仲間ですら手を上げて、お前は何を守る？ そこまでして通すべき筋があるか？」

「……俺がやらんで、誰がやる」

小さく呟くように言って折れたマチェットを正眼に構えマチェットを構える杉田を睨んだまま、航暉は続ける。

「雪音や琴音になんの罪があった。どうして死なねばならなかった。どうして死んだ後も、この狂ったシステムに取り込まれなければならなかった」

航暉は左手にマチェットを握る。右の袖の中からナイフが現れ、それを振る。

「終わりにするしかない。ここで終わらせるしかないんだ。雪音たちを飲み込んだこの名前のない怪物を、このシステムを終わらせなければならぬ。そうでなければ」

「誰も救われない。お前も、お前の妹も、か……。そのために、お前を信じる子たちを置いていくのか？ カズ」

高峰の言葉を航暉は鼻で笑った。

「さあね、その解釈は残されたものに任ずさ。死者にはもう関係ない話さ。俺にはもう関係ない」

それを聞いた杉田がマチェットを捨てると、ホルスタからFN FIVE SEVENを引き出した。それを両手で構える。

「月刀、正直お前の口からは聞きたくなかったよ。それだけは」

コツキング、わずかな金属音が響いた。

「俺の知ってるお前は、もっと格好良かった。女だったら惚れたかも知れねえと思えるぐらいだった。痛みを痛みとして受け止めること。それを知っているからこそ、仲間を見捨てなかった。優秀な指揮官として部下からの信頼を集める。そういう奴だった。月刀航暉は、俺には関係ないなんて、絶対に言わなかった……！」

照星越しのその瞳にはただ悲しみの色が浮かんでいた。

「月刀、最後に1つだけ教えてくれ。……16年間、満足したか？」

引き金に指がかかる。答えは無かった。

「……もうこれ以上、あの子たちを泣かせるなよ、月刀」

そして、撃鉄が落ちる——その刹那。

「——ダメです！」

電が二人の間に割り込んだ。彼女の耳の横を拳銃の弾が通過した。

「まだ、終わらせちゃダメなのです」

杉田と向き合うように立ち、両手を横に広げ通せんぼする。航暉からはセーラーの後ろ襟とバレッタが見える。その姿はまるで……航暉を守ろうとするかのようだ。

「高峰さんも、銃を下ろして」

「雷……」

「しれーかんが始めたことよ、幕を引くのも、しれーかんじゃないと」
「そうよね？」 と雷が訊けば、電は頷いて振り返る。電はセーラーのスカートのポケットに右手を差し込みながら、航暉の方に向き直った。

「司令官、私を誰だと思っているのか、いなづまにはわからないのです。それでも、ずっと会いたいと思ってたのです」

そう言うとき小さく笑う。

「おかしいですね。私も私が誰だか、もうわからないのです。会いたいと言っているのはいなづまなのか、月詠雪音の記憶なのか、指揮官を求めるように組み込まれたDD-AK04のプログラムが反応しているだけなのか。わからないのです。……それでも、私は司令官に、あなたに会いたいと思っていた。本当に夜も寝れないほどに思っていたのです」

電はそう言って目を細める。

「ここでこうして会えた。それでもう私は満足しちゃってたりします。だって司令官はなにも言わずに行っちゃうから、とつてもとつても、心配したのです。その気持ちは、きつと作り物じゃないと、私は思います」

少し俯いてから、再び顔を上げる電。

「司令官、私は誰に見えますか？ あなたは誰だと思えますか？」

「……っ」

航暉が拳銃を抜いた。同時に高峰と杉田が航暉の電腦に狙いを付ける。

「……今更俺になにをしろと言うんだ」

航暉の顔が一瞬歪んだ。

「もう、止まれないんだよ。16年間、俺はこのためだけに生きてきた。雪音と琴音を助け出す。死の連鎖から救い出す。ただそれだけを願って生きてきた。そのためにどんなことだってしてきた。電脳化もした、銃の使い方も、ナイフの使い方も全部覚えた。なのに今更、今更、お前が止めるのか、雪音！」

それを見た彼女が笑う。

「……もう、大丈夫なのです」

スカートのポケットから出てきたのはベレッタM93R——航暉の愛銃だった。それで幾人も撃ってきた銃が、彼女の小ぶりな手に収まっていた。

「それ、はっ……！」

「もう、いいのです。16年間、あなたは一人で戦ってきた。その“あなた”が終わらせたいと言うのなら終わらせましょう」

拳銃のスライドをゆっくりと引き、放す。

「やめ、やめろ……」

「きつとあなたは間違つてなかった。だれもこんな顛末を望んでなかったと思うのです。それでも、こうなつてしまった。それ以上の意味はきつとないのです」

「やめるんだ……」

電は緩慢とも思える速度でゆっくりと右腕を上げていく。

「だから、今ここで、私と終わりにしましょう」

「やめろおおおおおおおおお！」

銃声が二発分響いた。

航暉が膝をつく。電も煽られて数歩下がった。電は肩を押さえるが、そこから血が流れることはなかった。弾丸は電の服にあたって動きを止めていた。それが落ちると同時に電の背後が揺らぐ。……何も無い空間から現れるように、電の背負った艤装が姿を現した。――

――渡井謹製の空間ホロを解除した瞬間だった。

航暉は呆然とそれを見る。電脳に何かがぶち当たった感触はあった。それでもわずかに血が滲むだけで、まだ生きている。そこに拳銃を投げ捨てた電が飛びついた。そのまま航暉を押し倒す。

「……これで、二人とも死んだのです。『月詠航暉』も『ガトー』も死んだのです。もう、ゾンビなんてどこにもいないのです。司令官さん」

彼に馬乗りになつたまま、電はそう言った。ゆっくりと

「あなたは『わたし』を殺した、わたしは『月詠航暉』と『ガトー』を殺した。だからここには月刀航暉司令官といなづまが残つたのです。……雷お姉ちゃんも、きつと今の銃撃で……」

「そうね、私がしたことつて撃たれただけじゃないかしら？」

雷が肩を竦めて笑った。

「もう大丈夫よ、しれーかん。もう、復讐に走らなくていい。誰かを殺そうとしなくていい。私が、私達がいるじゃない。私達があなたを、助けるわ」

「船は一人では進めない。目的地に着くためには羅針盤と灯台が必要なのです。もし司令官さんの羅針盤が狂ってしまったら、私達が灯台になるのです。私達の羅針盤が狂った時は司令官さんが灯台になってください」

電はそう言って彼を抱きしめた。その眼尻に珠を浮かべて。

「もう、離さないのです。司令官さん」

「電……」

「ふふっ、やっと私を見てくれたのです」

電は笑ってからもう少しだけきつく抱きしめた。

「おかえりなさい、司令官さん」

「……ごめんな、電。ただいま」

彼の手からM93Rが落ちる。それを見て杉田と高峰も笑みを浮かべた。

「賭けは電の勝ちか」

電が撃った拳銃を高峰が拾い上げる。チェンバーをスライドすると、中から出てきたのは——真つ青な弾頭、模擬弾だ。

「ったく。手間かけさせやがって、カズ」

「全くだ。こちとらマチェットのせいで義手一本おしやかだ」

そう言った二人が航暉を立ち上がらせた。そのまま航暉の武装を取り上げる。

「今から自害されると死体の処理がめんどくさいからな。……それじゃ、行くか」

「行くってどこへ?」

「なんでここまで来たのか忘れたのか? —— 死者は弔わなければ成仏できないんだぜ? —— ここまで来たなら墓参りぐらいしても

「ばちは当たらんだろう」

杉田は笑ってから航暉の肩を叩いた。

00010100 Si Vis Pacem,
Para Bellum PHASE5

「……最深部はこの真下、私のIDはまだ生きているはずだ」

そう言ったのは中路章人中将だった。彼がゆつくりと先導するよ
うに奥へと消える。奥は色合いが一変し、青のような光度を落とした
LEDがまばらに光るだけだ。それがキャットウォークをおぼろげ
に浮かび上がらせた。そこを迷いなく進む中路についていきながら
天龍はどこか呆れたように目を細める。

「で、本当にいいのかよ。司令官を奥に連れてつても」

「必要なりリスクさ。……こういう言い方は好きじゃないが、月刀がこ
こで機能不全を引き起こせば、深海棲艦との和解は極端に遅くなる可
能性が高い。今彼に必要なのはメンテナンスだ。その仕上げにはど
うしても『彼女たち』が必要だ」

真下に続く階段を下りながら杉田は僅かに振り返る。最後尾を固
める高峰は拳銃を手にしたまま周囲を警戒している。その前を進む
のは両脇を電と雷が固めた航暉だ。

「そして航暉が戻ってきた以上、もうこれでCSCに義理立てする必
要はない。もつとも今はポストCSCシステムの用意はできてない
から、今すべてのシステムを破壊することは避けなければならないの
は確かだ」

「ならこの奥で何をさせる気だ？」

「供養だよ。死んだ月詠航暉の願いの代理執行とも言うかな」

「まさか……」

中路が足を止める。それに合わせて一行も足を止めた。ただの壁
面にぽっかりとタッチパネルがあるのが妙に映る。そこに中路が手
を当てた。

〈生体認証開始・中路章人管理主任、音声認証を開始します〉

「……Si Vis Pacem, Para Bellum」

合成音声の女性アナウンスに中路が答える。それにすぐにシステムが反応した。

〈声紋照合、正規登録管理者です。システムロックを解除します〉
壁面の一部が奥に一度入り込んでから再び手前へ、それがドアとなり真上にスライドする。

「——平和を欲さば、戦に備えよ、ねえ」

「人間はいつの時代も抑止力に頼って戦争を回避してきた。その点では間違っていないだろう」

杉田の声に中路はそう言って中へと入った。仄暗いシステムのパイロットランプだけが照らした空間に煌々と明かりが灯る。

「これは……」

「これがゴーストダビング装置——いや、『ホールデン』の本体だ」

両脇に並ぶのはいくつもの機械。

「……通信ノイズがない、完全な電波暗室か」

「有線は繋がるがね。ここで全てが統括される。もつともサブは他の電脳実験施設にもあるし、サブの一つが日本国暫定首都、長野にも設置されている。公には長野がメインとされているけどね」

中路がそういいながらゆっくりと進んでいく。

「自律駆動兵装開発計画……その正式名称を知っているか？」

「ライ麦畑計画……か？」

「それは隠れ蓑となった予備青年士官教育プログラムのほうだな。それではなく、この施設を作った本当の計画の名前の方だ」

「知らないな」

杉田が答えると中路は小さく笑った。

「ホールデン、私達はその名前をプロジェクト名にしたんだよ」

「ホールデン……」

「Holder of Excellence Network……」

これまでの歩兵を覆す機械の兵隊、その超越した能力を持つものを複数同時に運用する。そのためのネットワークワーク整備と個体の開発。そのためにいろいろなものを作った。この施設もその一つだ」

いくつもの大振りな機械には確認用の窓が空いているが。その奥は暗くて見通すことはできなかった。その窓の間を歩く。

「運用のためのネットワーク、そこには自律駆動兵装に登録されているP I Xコードがいくつも記録・管理されている。それを元に最適なパッチを常時アップデートすることで自律駆動兵装は自己を維持できる。そう言うシステムになってる」

「……そしてそのネットワークが今の中央戦略コンピュータってわけか」

「そうだ。中央戦術コンピュータをはじめとした通常コンピュータのネットワークがそのバックアップも兼ねているが、C S Cに勝る処理能力がある訳じゃなかった。そしてその処理能力が300を超える水上用自律駆動兵装の運用に不可欠だった。だから止められなかった」

中路はそう言って進み続ける。

「皮肉なものだ。名は態を表すというのか、まさか“ホールデン”が蓄えられたP I Xコードから自我を獲得し、ホールデン・コールフィールドのように振る舞いだすなんて考えていなかった。今となっては見通しが甘かったとしか思えないがね」

そうして、ひとつの操作盤の前で立ち止まる。

「ホールデンを隠すなら麦畑とライ麦計画なんて名前を付けたが、まさかそこから本当の“ホールデン”を生み出そうとするなんて思ってもいなかったよ」

中路はそういうとその操作盤に触れる。そしてその前に会った機材がわずかな機械音を上げ始めた。

「スーパーコンピュータを上回る処理能力を持つ演算装置……」

高峰が戦慄したような声を上げる。

「まさか、脳？」

「ああ、ゴーストダビングで一つ当たりの処理能力は落ちるが、それでもスーパーコンピュータを上回る処理能力を誇る。もっとも、生体維持に必要な部分もフルに使えばの話になるがね。それをいくつも並列させたものが、これだ。現在は832の脳殻がここに繋がれたまま

演算に駆り出されている。もう、表向きに存在しない子供たちだ」

中路はそう言うとう目を閉じた。

「中には自我を保っているから見られる個体も存在する。彼女たちもまた、そのなかの二人だ」

操作盤の前の機材ののぞき窓がほの明るく光る。

「……君たちのお兄さんを連れてくるのに、ここまで時間がかかってしまった。寂しかっただろう。いま、代わるよ」

中路が操作盤の前を空けると航暉を呼んだ。ゆつくりとその前に立つとのぞき窓の奥に記憶にあつた顔が浮かんでいた。中路がマイクを渡す。

「……久しぶり、だな。琴音、雪音」

——うん、久しぶり、カズにいはずつと雪音に首つたけだったけどね／ No. 023

——お久しぶりなのです、カズにい／ No. 024
声はなく、画面に文字列が現れる。名前が表示される訳じゃないがどつちがどつちかわかる。

「元気にしてたか、なんて聞くのも変だな。……だめだな、言いたいことはたくさんあるのにな。今更何を言えればいいかもわからない」

——無理に話さなくてもいいのです。カズにいにはカズにிட
もん。カズにいの考えてることなんてわかるもん、ね？／ No. 024

——そうね、雪音もわたしもずつとカズにいのそばにいたんだもん／ No. 023

「そっか……そうだな」

航暉は操作盤に触れる。

「……なあ、雪音、琴音」

——なに？／ No. 023

「俺は、間違ってたかな」

現れる文字列を指でなぞる。声は聞こえないが、それでも確かにそのトーンがわかる。

「どこから、俺は間違えたんだろう。どこから俺たちは間違えてたん

だろうな」

——きっと間違えてなかったと思うよ。カズには／ N O
0 2 3

——私もそう思うのです／ N O・ 0 2 4
「優しいな、お前たちは。それでも、きつとどこかで、何かを間違えた。だからこそ、お前たちはこの独房に囚われ、俺はただの殺人鬼と成り果てた」

航暉はそう言うのとゆつくりと目を閉じた。

「間違えてなかったなら、こうなるべくしてなったのかな？ それだとすこし、寂しい気がするよ」

「司令官さん……？」

航暉の横に來た電が彼の袖に触れる。

「電、安心しろ。全部をここでなかったことになってしないから」

——そっか、電ちゃんもいるのです？／ N O・ 0 2 4

「ああ、いるよ。話すかい？」

——少しだけいい？／ N O・ 0 2 4

「もちろん。雷もいるからね。ちよつと待って」

航暉は一步下がって電と雷を操作盤の前に呼んだ。

——直接会うのは二回目なんだけど、きつと覚えてないよね。

月詠琴音です／ N O・ 0 2 3

——月詠雪音なのです／ N O・ 0 2 4

画面にそのように連続して文字列が浮かんだ。

——兄がご迷惑をかけたみたいで申し訳ないのです／ N O・

0 2 4

「いえ、そんなことないのです……雪音さん、でいいのです？」

——どんなふうと呼んでもいいですよ／ N O・ 0 2 4

「しれーかんの妹さんよね？」

——そうよ、うちの馬鹿兄の騒動に付き合わされちゃって大変だったでしょう？／ N O・ 0 2 3

「まあ、はい」

「……自覚はしてるが即答されるといろいろ思うところがあるな」

——カズにいは黙ってる！／ No. 023

——少しは反省するのです！／ No. 024

妹たちの反応に航暉は肩を竦めた。

「でも、嬉しかったんじゃない？」

雷がマイクを取った。

「16年間も、あなたたちのことを忘れずにいてくれた。あなたたちのことを考えてくれた」

——もちろんよ？ 私たちが生きていたことを覚えていてくれる。私たちがどうなったか、知っていてくれる。カズにいがいたから、私達はここで耐えられた。カズにいが生きてるってわかってたから私達はこうしていることができた／ No. 023

——もう一度、カズにいに会いたかったです。だから生き残ったのかもしれないですね／ No. 024

「琴音、雪音……」

——でも、でもだよカズにい／ No. 023

「？」

航暉が疑問符を浮かべると、新たな文字列が現れる。

——もう私達だけを見なくていいの。そろそろカズにいは自由になっていいと思うの／ No. 023

——電ちゃんに雷ちゃんがいるのです。もう私達がついていなくてもいいと思うのです。カズにい、私達ももう大丈夫です。だから、カズにいも自由になっていいのです／ No. 024

それを聞いて航暉は一步前に出た。

「戦術リンクに繋がった、俺はどこかお前たちの影を感じてた。やっぱり……」

——そっか、気がついてくれてたんだ／ No. 023

「気がつかないと思ったか？ 俺はお前らの兄だぞ？」

——それもそっか／ No. 023

その文字列にどこかもの悲しさを感じるのは、間違っているだろうか？

——カズにい、私はまだ私かなあ／ No. 024

「当然だ。お前はお前だよ、雪音。お前らはお前らだ。お前らは俺のたった二人の妹だ。それを否定することは俺も許さんよ」

——あは、やっぱりカズにはカズにいだ。そういう強引なところ小学生のころから変わらないね／ No. 023

「そういう琴音たちは、大人になったな。いつの間にか、大人になった」

——そうでもないのです。カズにいに追いつきたくて背伸びして、手を伸ばしているだけなのです／ No. 024

小さく笑った航暉はゆっくりと手を前へ。二人の納まるその箱の前へ。

「……見えるかい、雪音、琴音。やっと迎えに来た」

——うん、見える。でも、手を伸ばしても、もう届かないかな

／ No. 023

「そっか。……じゃあ、どうすれば届く？」

航暉の問いにわずかに時間が開いた。

——雪音、いい？／ No. 023

——もう大丈夫なのです／ No. 024

ふたりで何かを確認するような会話があつて。

——カズに、私達の生命維持装置を停止させてほしいのです

／ No. 024

そう、表示された。

「……やっぱりそうなるか」

航暉は苦笑いを浮かべて、操作盤に触れた。

「似た者同士か、俺もお前たちも」

操作盤にバーチャルキーボードが表示された、それをタイピングしていく。それを見て高峰が拳銃を構える。

「おいカズ、お前なにを——！」

——警告 高峰春斗中佐 CSC内部でのこれ以上の武力行動は許可しない。強行介入開始／ No. 023

高峰の視界にその言葉が表示されると同時、その姿勢のまま動きが固まる。電腦の一部にロックがかけられている。体の制御権が乗っ取られた。

「くそっ！」

「高峰、大丈夫だ。全部をここで止める気はない。この二人を止めるだけだ」

——高峰さん、大丈夫なのです。『月刀航暉』を信じてあげてほしいのです／ No. 024

高峰の視界にはそう表示される。その先では画面をひたすらタイプする航暉の姿があった。

「……これで終わる訳じゃない、解かってるだろ？」

——もちろん。でもこれがきつと『これ』をとめる最初の鏑矢になるわ／ No. 023

「鏑矢なんて言葉、どこで覚えてくるんだか」

航暉はひたすらにキーを叩き続けた。

「なあ、一つだけ聞いていい？」

——なあに？ カズにい／ No. 023

——なんなのですか？／ No. 024

「幸せだったか？」

そう問いながら航暉は『ホールデン』維持管理システムにアクセスしていく。管理用のセキュリティパスはNo. 023が解除していた。一度もとがめられることなく潜りこむ。

——なあんだ、そんなこと？／ No. 023

笑っているのだろうか、その声は。

——当たり前なのです／ No. 024

——こんなに意地っ張りで、強引で／No. 023

——誰よりも強くて、誰よりも優しいお兄ちゃん是世界中どこを探してもいないのです。カズには世界一の私達のお兄ちゃんです。そんなお兄ちゃんを持てた私達が幸せじゃないはずなのです

／ No. 024

——私達は幸せよ。だからカズに何も幸せにならなきや／

No. 023

その表示を見て航暉は笑った。

「……妹たちにこう言われたんじゃ、そう簡単に死ねないじゃないか」

——当然。私達の分もしっかり生きて／ No. 023

——お土産話はたくさん欲しいのです／ No. 024

「いつか、もう聞きたくないってぐらい聞かせてやるよ」

航暉の手が止まる。

——ねえ、カズにい／ No. 024

「どうした？」

——小さい時に読んでくれた本、まだ覚えてるのです？／ N

o. 024

「どの本だい？」

そう問いかければ少しだけ間を置いて文字列が現れる。

——ぼくは、あの星のなかの一つに住むんだ。その一つの星

のなかで笑うんだ／ No. 024

「……だから、きみが夜、空をながめたら、星がみんな笑ってるよう

に見えるだろう。すると、きみだけが、笑い上戸の星を見るわけさ。

“……サンテグジュペリ、『星の王子様』か、そういうえば寝る前に

ちよつとずつ読んでたっけ」

——うん。大好きだったの。あの本／ No. 024

「そっか。俺も好きだった」

——だれかが、なん百万もの星のどれかに咲いている、たつ

た一輪の花がすきだったら、その人は、そのたくさんの星をながめる

だけで、しあわせになれるんだ。“私たちのこと、好きでいてくれる

? まだ、覚えててくれる？／ No. 023

「当たり前だ、バカ」

航暉がそう言つて俯いた。

「……スキュラ、どうせ見てるんだろ？」

航暉がぼつりと呟くと、電脳通信がつながった。それもその場にい

る全員に同時に繋がった。

《ええ、ちゃんと眼に乗ってるわよ。で？ どうするの？》

「CSCを3秒だけオフラインにしろ。このシステムを設計したプログラマーはお前だ。どうせバックドアの一つや二つ残してるな?」
《まったく、最後のバックドアをこんなことに使う気? 次にハードアタックする機会があったとしても、その時はもう私に提供できる切り札は無いわよ?》

「合図を送ったらオフラインにしてくれ」

《……おまけで4秒、有効に使いなさい》

航暉は首の後ろからQRSプラグを引き出した。制御卓にはジャックポートが顔を出している。

「そうだ。忘れるところだった。雪音、琴音」

—— なんなのですか? / No. 024

—— どうしたの? / No. 023

「帰ったらソフトクリーム食べにいきましょうって約束、破っちゃってごめん。またいつか」

—— いいよ、気にしてないわ / No. 023

—— 次会った時に、です / No. 024

「そうだな。次会った時に。正直、もうこの世で会うことがないことを願うよ。俺はもう少しこっちで頑張る。だから向こうで元気でいてほしい。不甲斐ない兄からの最後のお願いだ」

航暉はジャックポートにジャックをあてがった。

—— 約束なのです。カズに何も元気で頑張って / No. 0

24

—— 約束したからね? カズに、元気で / No. 023

「ああ、元気でな」

航暉は笑ってから目を閉じる。

「スキュラ、3カウントでいくぞ」

《了解、いつでも》

「3、2、1……」

ゼロのカウントと同時にジャックにQRSプラグが叩き込まれた。

同時に膨大な量のコマンドが制御卓のスクリーンを流れていく。音は無かった。きつちり4秒で航暉はコードを引き抜いた。

「……気が済んだか、月刀」

杉田の声が響いた。

「CSCは復旧、いまリアルタイムで接続していた端末にはエラーが返されただろうが、もう問題ないはずだ」

航暉は淡々と答えた。高峰がふっと力を抜く。体の制御が戻ってくる。

「月詠姉妹は？」

「どこかに消えたよ」

航暉はそう言っつてゆっくりと膝をつく。

「司令官さん！」

「大丈夫だ、大丈夫だから……」

航暉はそういいながら俯いた。でもそれをすぐに否定する。

「……ぜんぜん大丈夫じゃねえよ。どうして俺は3回も妹に死なれなきやいけなかったんだよ。どうしてだよ、畜生……」

床に水滴が落ちる。

「大好きだったよ。お前らが大好きだったんだよ。なんでお前らを殺さなきやいけなかったんだよ畜生——っ！」

航暉の絶叫がこだまする。その背中を雷がさすった。電が彼の頭を抱く。

「泣きたい時は、泣いていいのです」

「……電、雷」

「はい」

「どうしたの、しれーかん」

航暉の声が揺れる。

「約束してくれ。命令でもいい。解釈は任せる。……絶対に生き残れ」

ゆっくりと言葉を紡ぐ。

「お前たちが琴音や雪音じゃないことはわかってる。お前たちは電であり、雷だ。でも、今だけは、今だけは許してくれ。もう、これ以上妹たちを失うのは、もう無理だ。4回目はどう、耐えられない」

電にすぎないようにその肩を抱く。震える両手は確かに血が通っていた。

「絶対に俺より長く生き延びろ。無茶なこと言ってるかもしれない。それでも、生き残ってくれ、頼む」

なんと残酷な願いだろう。自らが見てきた、耐え切れないような思いを相手に強いる。それを航暉は是としない、だとしてもそう言わなければ耐えられなかったのだ。

「……ひとりはもう、いやだよ」

その震えた呟きに、電は目を細めた。その拍子に目じりから水滴が落ちる。

「大丈夫なのです。司令官さん。私はここにいます」

「そうそう、しれーかん、私がいるじゃない！」

答えはなかった。ただ嗚咽が響くだけだ。ただ、それだけの時間が続いた。

「……すまん、迷惑かけた」

どれだけの時間が経っただろう。互いの腫らした目を見てどこかバツの悪い表情をしながら航暉が立ち上がった。

「……もう大丈夫か？ カズ」

「ああ、もう大丈夫だ」

航暉は小さく笑った。

「……俺のM93R、今高峰が持つてるのか？」

「ああ、それが？」

「ここに置いていくよ。もう、必要ない。あの子たちはもういないし、もうそれにこだわる必要もない」

「……そっか。ほら」

高峰から銃を渡され。それを制御卓の脇に置いた。

「今度こそ、いこうか」

「なのです」

「うん」

電と雷が頷く。天龍が笑って航暉の方に近づいて来る。そのまま肩を叩いた。

「もう勝手にいなくなるんじゃないやねえぞ、俺たちが待ってる。そこに帰ってこい、司令官」

「ああ、そうするよ」

航暉は頷いた。

「航暉」

その彼に一つ、声がかかった。中路だ。

「……お前には、もうこっちがいいだろう」

中路が彼の頭に帽子をかぶせた。黒の制帽、国連海軍の上級士官用の制帽だった。

「私はおそらく予備役に落とされることになる。私の電腦も限界が近い。……みんなのことを頼む」

中路が敬礼の姿勢をとる。航暉はそれに答礼を返した。

「さて、帰ろうか」

「ああ、行こう」

一丁の拳銃を置いて去っていく。それが一人と二人の墓標の代わりとして、置いていく。

——Bon Voyage.——

制御卓にはただそう表示されていた。

下ったことだし」

「無事帰ってきたね、スクラサス」

「ええ、なんとかね」

笹原はそう言うとう肩を竦めた。新首都・長野のアパートの一室はゆるりとエアコンがかかっていた。

「足は付いてないでしょうね？」

「私を誰の孫だと思ってるのよ。……言われた通り『月刀航暉』以外にはブラフ囃ませである」

「上等、ちゃんと浜地中佐にも？」

「そうしろって言ったんはあんたでしょうが。浜地中佐も皐月も『スクラサス』の顔も声も覚えてないわ」

そう。と返してスキュラは目を細めた。

「それにしても、納得いってないって顔だね？ どうしたんだい？」

「結局、スキュラは何をしたかったのかなあってね」

笹原はそう言うときスキュラの隣の椅子に腰かけた。

「アンタなら気がついてると思っただけだね、梓」

スキュラは彼女を本名で呼んだ。

「ねえ、ばあちゃん。何がしたかったのかそろそろ教えてよ」

少女型の義体が椅子から飛び降りる。

「月刀航暉の今後の行動予測、できるかい？」

「それってPIXコードからの予測ってこと？」

「やりやすいように。……私はね、対深海棲艦作戦が終結したタイミングで、月刀航暉は『アレ』をリークすると見てる」

「……それが？」

笹原は振り返ったスキュラの笑みを見て……半ば睨むようにしながら聞き返した。

「月刀航暉をはじめとした五期の黒鳥にCSCの真実を告げる。『ホールデン』は何者かを知らせる必要があった。そうでなければ『ホールデン』が政治分野にまで介入を開始するのは秒読み段階に入ってしまう」

「カズ君がその真実をリークすれば止まるとでも？」

「まあ、それで止まるぐらい単純なことならもうとつくのとうに止まってるよね」

スキュラは笑みをひたすらに浮かべ、続ける。

「なら、世界を救った英雄がそれを口にしたら、どうかな？」

それに、笹原の笑みが凍る。

「……カズ君を、切り捨てる気？」

笹原の声に怒気が混じる。

「切り捨てなんてしないよ。ただ、この事実を白日の元に知らしめてもらうだけだ」

「それを切り捨てるって言うのよ。国連海軍がその事実を容認するはずがない。だからこそこれまで秘匿され続けてきた。それを公に口にしたらどうなるか……」

「だがそこで生じる民衆の熱、そこに賭けるしかないんだよ。それに、英雄の最期はさらに油を注ぎその熱はさらに増す。その死が唐突で疑惑に塗れるほどにね」

「……スキュラ。あんた」

「元々月刀航暉には扇動者アシテーターの素質がある。人の心を奮い立たせ、それを一つの方向に導き、個々の小さな力をまとめて大きな力とする能力。それが彼の能力の本質だ。その力は月詠航暉の時代からすでに発揮していたものであり、彼が最初に影響を与えた人物、月詠雪音のアイデンティティ・インフォメーション個の情報を継ぐDD-AK04電が発揮しうるものでもある」

そう告げたスキュラは何でもないことのように笑って見せる。

「だから、彼にはその効力を最大にするためにも、英雄になってももらわなきゃいけない」

「ふざけないでよ。いくらなんでもそれはあんまりじゃないの?」

「おやおや、梓。自分の感情に飲まれない方がいいわよ?」

スキュラは肩を竦める。怒気が混じったその声に心底呆れたような表情をつくる。

「『笹原ゆう』の感情に飲まれるな。あんたは好きになる人を自在にコントロールし、自分を好きでいてくれる人をコントロールできる。

『月刀航暉』への好意も、『持つべくして持ったもの』だということ
を忘れたかい?」

それを聞いて笹原は押し黙った。

「私達ノンオフィシャルカバはオオカミ少年の手下なのさ。政治家が外敵が来たひつじかいと叫ぶたび、国民は財産を守るために一致団結する。私達は羊飼いの手下として動き回り、本当に敵が来たときのために備えつつ、羊飼いのご機嫌取りをする。そう言う立場さ。それ以上でもそれ以下でもない。『スクラサス』、君はそれをわかってこの世界に踏み込んだはずだろうか?」

「……そうして人を使い潰していくの?」

「ああ、そうだよ。それで最大多数の最大幸福が得られるなら」

スキュラは続ける。

「……だからその使い潰す人を最小限にするのさ。だから彼を使う。それしか残ってないんだよ」

「……認めない。私はそれを認めない」

スキュラはそれを聞いて小さく笑った。

「なら精々あがいてみる。それを卒業課題にしようかね。私を出し抜けたら卒業だな、”スクラサス”」

それを言うときュラは近くの棚から一部の封筒を差し出した。

「辞令だ。『笹原ゆう中佐』、受け取りたまえ」

「結局スクラサスの正体も掴めずじまい。CSCは通常通り稼働中。お前は抗鬱剤を飲みながら記憶中毒脱却のための集中セラピー……まったく、こっちはくたびれもうけもいいところだぜ？ カズ、どうしてくれる」

高峰はそうぼやくと隣で煙草を吸う航暉に声をかけた。手にはダヴイドフのクラシックがあつた。紫煙を吐いてわずかに笑う航暉。

「迷惑かけたな。たぶんもうないよ」

「当然。二度あつたら今度こそ捨て置くぞ」

そう言うとき冬の空に小さく浮かんだ雲を見上げる。一月の屋上は喫煙にはいいかもしれないが長居する場所ではなさそうだ。

「で、本当に覚えてないのか？ ”スクラサス”のこと」

「何なら無理矢理取り出してみたらどうだ？ ゴーストダビングでさ。月詠の子たちが耐えたんだ。俺も耐えるかもしれないぞ？」

「洒落のつもりかもしれないが、まったく笑えねえぜ」

高峰は二本目のJPSにフリントライターで火をつけながらそう言った。

「そういえば、お前、卓上テレスコープ買ったって？」

「……青葉からか？」

「ああ、対艦娘諜報網ならアイツのほう为上だからな。人間の意地汚いところはまだ俺の方が上だがね。……星探しをする気か？」

「……まあね、星を眺めるのも悪くないと思ってるさ」

未練がましい奴だな。と高峰は笑った。航暉もつられたように笑う。

「そうだ、俺のところに辞令が来るそうだ」

「もう喋っていいのか？」

「カズは口が堅そうだからいいんだよ」

こう切り出した時点でもう先の展開は読んでいる。

「頼むぜ、相棒」

「おう」

素晴らしいあったタイミングで屋上のドアが開いた。

「あー！ またしれーかん煙草吸って！」

「おいおい、これまだ今日一本目だぞ？」

「かつこつけなくていいから、ほら吸うのやめる！」

ここで渋々ながらまだ吸える煙草をポケット灰皿に押し付けるあたりに力関係が見て取れる。高峰がくつくつと笑った。

「〃おかん〃を持つと大変だな。カズ」

「全くだ」

「誰がおかんよ！ 高峰さん！」

「それだけ頼りがいがあるってことだよ、雷ちゃん」

高峰が茶化せば雷は高峰の方にもずばつと指をさす。

「ほら、煙草は紳士のたしなみと言っても体に毒です！ ほらもうやめるー！」

「へいへいっと」

そう言うのと三人で笑いあった。

「雷ちゃんも待つてるんだらう？ ならそろそろ休憩時間は終わるか」

「悪いな、高峰」

「なんの。これぐらいは付き合うよ」

「……これで満足か、『ホールデン』」

暗い執務室で杉田はつつけんどんにそう言った。

「月詠琴音・雪音姉妹を失ったのは痛手だがね。最善といえる結果だと思うよ。月刀航暉がちゃんと司令官として機能してくれるようになったしね。本当によくやってくれた、杉田中佐、いや、大佐と呼ぶべきかな？」

「ありがとうよ。こんなクソみたいなミッションで階級上げてくれるなら願ひ叶ったりだ」

杉田はそう言って肩を竦めた。

「任務はこれで完了だな？」

「うん、ご苦労だったね」

目の前の元帥の張りぼてにそう聞いて杉田は背を向ける。

「ああ、そうだ。君に辞令を出さなきゃいけないかったんだ」

「ほう？。こんどは左遷か？」

「そう僻まなくてもいいのに、杉田君」

デスクを開けて書類封筒を差し出す山本元帥。それを受けとって中身を改める杉田。

「彼」には君たちが有効らしいからね。この世界を守る盾とならん

ことを祈るよ」

中身を見て再び封筒を閉じる。

「……いつまで軍を牛耳るつもりか知らんが、この人事が身を亡ぼすことを覚悟することをお勧めしますよ、 〃元帥〃」

そう言つて杉田は改めて背を向ける。

「……マキャヴェツリの本を読んだことはあるかな 〃ホールデン〃？」

「結果さえ良ければ、手段は常に正当化される……だったかな？」

「アンタにぴったりだよその言葉。それを単純な解釈しかできなかつたマキャヴェリストそっくりだよ、お前は。そんなお前に1つの言葉を送ろう。同じくマキャヴェツリという言葉からだ」

それを言つて半身だけ返す。

「次の二つは絶対に軽視してはならない。第一は、寛容と忍耐をもつてしては、人間の敵意は決して溶解しない。第二は、報酬と経済援助などの援助を与えても敵対関係は好転しない」

「なにが言いたいのかな？」

杉田は執務室のドアを開ける。

「——宣戦布告だ、受け取りやがれ馬鹿野郎」

司令部赤裸々座談会―そのいち

作者「えー、どうも。いきなり締まりませんが作者のオーバードライヴです。いつも艦隊これくしょん―啓開の鎬矢―にお付き合いましたきありがとうございます。えっと、残りのメンバーは……」

航暉「月刀航暉だ。よろしくな」

高峰「高峰春斗です。改めてよろしく」

杉田「杉田勝也だ。ちよつと椅子小さくないかこれ」

渡井「お前がでかいんだよ。あ、やつと最近出番が回ってきた渡井慧です。よろしくね」

笹原「とりあえず私で最後か。笹原ゆうよ、よつろしくう☆」

渡井「無理すんなもうすぐにじゅう……あ、なんでもないです」

笹原「よろしい」

作者「えー……はい。以上5期の黒鳥の皆さんとお送りします。

えつと……ここでは裏話とか設定の補完とかしていきます。とりあえず質問とかあったのから答えていきますかね」

杉田「毎回結構ガバガバ設定なのがバレるな」

作者「もうばれてるからいいんじゃないかな？ えーつと、ではさつそく……」

Q. それぞれのキャラクターの名前の由来は？

杉田「ほら、答えろよ」

作者「えつと……案外適当？」

高峰「おい頭から答える気なしかよ？」

作者「そんなことないですよ。航暉君に関しては結構悩んだんだよ？ 真つ先に主人公の家系については結構ドロドロにするし黒い部分満載になるからまずないだろうなって言う苗字。でも有りそうな語感にしたかったんです。だから元々「がとう」って苗字に月刀って

漢字を振ったのが最初期案。でパソコンに月刀Ⅱがとうで登録するために「つきがたな」で変換かけた時「ん？ つきがたでよくね？」ってなって決定」

航暉「結局深い意味ねえな」

作者「名前に意味を込めるのもアリですけど、主人公クラスは誰にでも受け入れられるように普通の名前っぽくしてます！（キリッ）」

杉田「キリっじゃねえよ。で？ 名前の方は？」

作者「航暉って名前は航海の航の字を入れたいなって程度でした。で、キラキラネームを避けたかったから漢和辞典とにらめっこしながら決めたのがこれ」

航暉「そこは……まあ」

作者「まあもつとも主人公のバックボーンとして軍閥出身で養子にとられたってのは最初期から決まってました。で上手いこと「月」って字が苗字に入ったからこれはいける！ってかんじで「月一族」って軍閥関係が生まれました。月は神聖視される文化が世界中にあるから、なんとなく偉い家柄ってのが連想されやすいかなって思ってます」

笹原「じゃあ、私達の名前は？」

作者「ん？ 口にしたときの語感とかで決めてます。あんまり意味とか考えてない……。基本場当たりに物語進めてるので……」

高峰「じゃあ逆にキャラに重視するものってあるの？」

作者「オリキャラについては必要な配置を考えていれてるかなあ。

あと属性」

高峰「風とか土とか？」

笹原「カードゲームじゃないんだから」

作者「案外近いかなあ。航暉は風属性とか杉田土属性とか考えることとはあるけどねえ……。属性というよりは役割ロールといった方がいいかなと思ってます。航暉にはあるけど今は明かせません。後のみんなは高峰なら「相棒」だし、杉田は「兄貴」、笹原は「サタン」

笹原「私サタン？ 悪女？」

航暉「そこで嬉しそうにしない」

作者「まあ構図的には新約聖書でイエスを誘惑するサタンなんだよね。この辺りは今後絡んでくると思うけど」

渡井「で、俺は？」

作者「変態」

渡井「え？」

作者「変態」

一同沈黙

作者「じゃあ次行こうか」

杉田「逃げやがったよ（笑）」

Q、よく出てくるQRSプラグってなによ？

杉田「あー、首の後ろで抜き差ししてる描写しかないもんな。専門は渡井か？ これは」

渡井「だねー。これは電脳と外部を繋ぐインターフェース。で、QRSってなんの略かっていうとQuantum Resonance Spectrometerで、日本語訳するなら量子共鳴計測器ってこと？ これもすつごい皮肉なネーミングだよ？」

笹原「似非科学の権化みたいな感じよね、これ。気になる人はアルバート・エイブラムスで検索すると恐ろしい数ヒットするわよ？」

作者「まあこれを引つ張ってきた元ネタは攻殻機動隊。首の後ろにコードはこういうのだと定番になった感があるので、SFを見ている人はなじみがあるかもです、なら次」

Q、艦娘の数とか教えて！

渡井「ここは月刀どぞー」

航暉「俺か?……極東方面隊の場合各戦隊平均4隻ずつぐらいになるから……360隻ぐらいだな。現役で活躍してるのは。戦没除籍されているのも含めればかなりの数いるがね」

渡井「そういえば艦これ原作だとドロップ設定あるけどここだとないよね?」

航暉「あつたら第三部の話を根幹から覆すからな。なあ、戦没した艦の再建造ってあり得るのか?」

笹原「あり得るよー。〃元の脳が生きてれば〃」

航暉「……」

高峰「なら月詠姉妹の最期は正解、か……」

笹原「といつても、現役の艦に配慮して再建造はしてないらしいけどね」

杉田「あと気になったんだが、作者。艦娘の設定に元ネタつてあるのか?」

作者「えーっと、ハイ。あります。漫画『ガンスリンガーガール』に出てくる義体の少女たちが一応メインです。それより先に映画『イノセンス』に出てくるガイノイド〃ハダリ〃の方が頭にあつたんですけどね。こっちはどちらかというとき自走爆弾の方のイメージです」

杉田「人形ぎたいに子供の魂ゴースト叩き込んで、か。趣味悪いな」

作者「自覚しております……」

笹原「義体の製造元とか薄っすら感想返しとかで出てきてるけど、まとめといた方がいいんじゃない?」

作者「あ、そうですね。極東方面隊管轄地域ではポセイドンインダストリー社と平菱インダストリアル社の二社による寡占状態です。大本の技術……というより元となった自走爆弾は平菱インダストリアル社が、それに積み込むソフト……まあ、子どもの魂なのですが、それを搭載することで水上用自律駆動兵装として昇華させたのはポセイドンインダストリー社という設定です。正統派でシンプルな艦装に仕上げる傾向があるのがポセイドンインダストリー社、マルチロール機のように一人で何役もこなせるように武器の拡張性とか死角の排除とかいろいろこだわるのが平菱インダストリアル社。イメージ

的にはこんな感じで振り分けてます。特型駆逐艦はポセイドンインダストリアル社、初春型とか島風型、秋月型、天龍型とかは平菱インダストリアル社ですね。睦月型は平菱インダストリアル社製ですが、艦娘登場の初期ロットなので拡張性よりもそのテストモデル的要素が強く追加の機能を乗せることを考えなかったという設定があつたりします。浮力も開発当時はカツカツで魚雷もシールドなしの三連装、紙装甲などひたすら軽量化に励んでいました」

航暉「睦月型はなあ、ゲームでも遠征メインとか言われてるしな」

作者「睦月と如月、あと文月はうちだと主力張れます」

笹原「このロリコン」

作者「まあ、睦月型の軽量設計重視というこの設定のおかげで睦月型を飛行中の航空機から叩き落として魚雷撃破という活躍（Character 5―9）をさせることができたんですけど……空挺部隊的な艦娘の運用っていう飛び道具もなかなかアレですね。ヒメ事案系は艦娘の設定を結構活かせたので楽しかったです」

笹原「あと他の艦種の製造元とかは？」

作者「そーですねえ……決まってるのは扶桑型が平菱インダストリアル社ぐらいです。あとは説明が必要になった時に考えます」

航暉「気軽に言ってくれるぜ」

作者「艦装設計の大本は『妖精さん』が成し遂げたものですし。それとのマッチングもいろいろ大変だったのですがバツサリカットしてます。この辺りは4部の話になると思うので……」

杉田「そういえば妖精フェアリーの設定第三部はガン無視だったもんな」

作者「そこまで含めると第三部が異様に長くなる感じがしたのでバツサリカットしてます。第三部があれ以上伸びると作者は間違いなくSAN値直葬になるので。読者の方でもこれ以上は無理という方もいらつしやると思っただのでバツサリ行きました。……さすがにおっさんで動かし過ぎたかなとも思いますし」

航杉高渡「おっさん言うな」

作者「おっさんじゃん。少なくとも艦娘から見れば30目前の二十代なんておっさんなんですよ。自分も二十歳過ぎたころからおっさ

ん化始まつてるよ」

杉田「義体化すれば？ 体力の減衰無視できるぜ？」

作者「そんな技術こっちにはないんだよ！」

笹原「まあまあ……で、第三部を短くしたという割には15万字超えてるんだけど。これでも短くなったの？」

作者「かなりなりました。西向く侍さまのご提案で参戦した微風が参戦で3万字は軽く短縮できたと思います。もつとも非参戦モードを文字に起こしてないんでどれぐらい短くなったかわかりませんけど……」

笹原「西向く侍さんっていうと、毎回感想欄で鋭いこと言ってくる方よね」

作者「毎回どんな質問が来るかと楽しみにしています。微風のおかげでウエークウィークポイント編の後挟む予定だったトーキョー・ダンスホール編がバツサリカットできました。……これ、超絶鬱展開救済なしのバッドエンドコースなんで避けたかったんです」

杉田「……一応聞くがどんな話だったんだ？」

作者「当初のBーPはこのダンスホール編に備えよの意味だったんですよね。自走爆弾による横須賀鎮守府への第二次攻撃で武蔵と雪風を巻き込んで、時津風の外装を模した爆弾が起爆します。ちなみに時津風は本編開始前に雪風の目の前で沈んでいる設定でした。武蔵が雪風を庇って雪風は無事ですが、武蔵が重傷を負います。まあバケツ使用ですぐ治すんですけど」

渡井「もうこの時点で非難轟々だろうね」

作者「はい。で、それを見た雪風が文字通り狂っていきます。勿論雪風の所属部隊の旗艦の神通たちは怒り心頭。何せ昔の僚艦の思い出を踏みにじるような攻撃ですからね。で、武蔵に怪我を負わせたことで杉田が静かにマジグレしていきます」

笹原「まあそこは容易に想像つくけど……、その決着つくの？」

作者「まあ、つく予定でした。……このルートで一番輝く予定だったのは青葉なんですよね。青葉が自走爆弾の起爆コードを送った電波を捕まえて飛び込んだ先で待ってたのはスキュラと航暉、航暉はマ

ニラへの高跳びの準備をしている所に出くわします。そこで青葉vs・航暉で肉弾戦という誰得カード発生、航暉が青葉を文字通りねじ伏せたところで高峰登場、こっちはスキュラが対応。血でにじむ高峰の視界の先、彼の言葉が届かないまま航暉が行方をくらましてトーキョー・ダンスホール編エンド……この裏だと金剛が鬱状態になつてたりしてました」

高峰「で、青葉の出番がないまま第三部終了か」

作者「青葉の出番は今執筆している高峰外伝で補完しますです。……ダンスホール編経由ルートだと工場への国連海軍派遣殴り込み勢から高峰が抜けて神通&雪風&金剛が加勢、航暉が狂わせた自走爆弾の大群とご対面になると神通と天龍が無双するという展開の予定でした。怒りに駆られた杉田と航暉のガチの殺し合いが発生、そこに電が割り込んで決着。これはこれで熱い展開だと思えますが艦これ的にはアウトかなと」

渡井「司令官勢の無双化が進む進む……」

作者「深海棲艦相手だと手も足も出ませんけどね。その分、陸では強くしてます。元からアクション要員で杉田を入れましたから」

杉田「やっぱりそのポジションなのか、俺」

作者「杉田には元々キャラクターイメージをまとめる段階で攻殻機動隊のバトラーを強く意識しています。映画やアニメよりも漫画よりのバトラーのイメージです。下ネタ言ったりラフプレーも多い。でも義理堅くて少々感情的、それでも大人。そんなキャラクターにしてみました。書いてたらこんなこと……まあ次行きましようか」

Q. 軍関係の情報を教えて！

作者「軍関係というと……艦娘関係だと出撃系とかそう言うことになるんですかね？」

航暉「まあ、言い淀む時点であんまり考えてないんだろ？」

作者「うん！」

杉田「元氣よく答えるんじゃないよ、そんなこと」

作者「国連海軍といえども極東方面隊は実質的に日本軍と化してるんですよね。だからこそ日本語で会話が続きし日本の船ばかり出てくる。その裏には艦娘のシステムを作り出したのが日本自衛軍の研究機関と日本の兵器産業だからそれを独占できたって感じですよ。他の方面隊にはこの技術を輸出しています。もつとも他の方面隊でも艦娘の正体はきつとブラックボックスでしょうけど」

杉田「だろうなあ……というよりさ、作者」

作者「はいなんでしよう杉田さん」

杉田「設定とかも根本の部分しつかり詰めないまま始めてないか？
どうも後付のような設定が目立つんだが」

作者「……はいそうですね！ ライ麦計画とか思いついたの完全に第二部の締めあたりから考えだしましたよ！」

航暉「え？」

笹原「それって、話の根幹も根幹じゃない。というよりその前の伏線って……？」

作者「適当に思わせぶりなことをばら撒いてただけです」

笹原「よくそれでまとめたわね。っていうよりなんで上手くいったの？ それで」

作者「とりあえず使えそうな情報ばら撒いて読み返しながら矛盾のない設定を組み込むというのが自分の執筆スタンスです。勿論書くときにある程度設定を練り込んでいますが、文章化されていません。ノリで最新話を書いて、それを元に次の話を練る。ひたすらその作業を100回近く繰り返し返してたら文庫本5冊分になってました」

高峰「なんというか……雑。ホールデン関係とかそれでよくまとまったな」

作者「まとまってません。ホールデンの再登場も元をたどればヒメ事案の時の“ホールデン”との問答が不発に終わったから追加したシナリオです。第二部でのホールデンの行動と、ホールデンの実態との差は中路章人中将が“ホールデン”を騙って航暉を軍から外すことで守ろうとしたっていう過程を入れることで無理矢理矛盾を回避

しただけです」

航暉「お、おう……」

作者「話の大まかなイベントとか艦娘の仕組み自体は固まっていたけどその経緯とか陰謀の大部分は書きながら考えてます。ライ麦計画の名前が出てきたのは第三部冒頭、セントニコラス・イン・マニラですが、艦娘開発計画のネーミングはこの時に考え付いたものです。だからひたすらノリで陰謀ものを進めるっていうやってはいけないことを押し通してます」

笹原「幻滅しました。那珂ちゃんのファンやめます」

Q. アニメ始まったけど設定とかどうするの？

作者「現状維持で行きますが所々でアニメネタを挟んでいこうかなと思います。さっそく吹雪が赤城に憧れを抱くという部分を入れ込みました。第四部だと夕立が出てくる回を入れることが確定してます。いろいろキャラクターを掘り下げていきたいですね」

航暉「睦月も出てるしな」

作者「そう、それ！ 睦月がメイン張るなんて自分幸せです……！」

睦月はこちらでも準主役級、出番作りたいですねえ……dアアニメストアで最新話無料を確認して只今二話まで視聴完了です。23日にはウエーク島攻略作戦ベースの第三話が公開されますが……如月も睦月も出番がありそうで楽しみです、如月……大丈夫でしょうか」

Q. 今後の展開について聞かせて！

作者「第4部から再び艦娘たちが頑張っていきます。舞台は4月、新設部隊でスタートです」

航暉「その前に《軽快》の方でコラボするんだろ？」

作者「はい。もう始まっています。軽快な鏑矢にて自分の作品を初期から助けてくださっている東方魔術師さまからのご提案頂いた企画を行います。Chapter 5. 5の続き、もしChapter 6以降が怒らなかつたらというIFルートです。極東方面隊艦種対抗大演習編、開幕してます。アニメ登場キャラもどんどん出してお祭り騒ぎで参ります。しばらくはそちらをメインで更新していくかと思えますのでよろしく願います」

航暉「また審査員ポジか……」

笹原「がんばってー。今回は私も出るけど」

杉田「俺も参戦する予定だ」

渡井「杉田、お前はおとなしくしてろ」

作者「本編では高峰外伝と第三部ダイジェスト版を投稿した後第4部に入りますが……高峰外伝というよりは青葉外伝になってるような……」

高峰「おい、俺の出番なしとか言うなよ？」

作者「もちろんあります。というよりスピンの回なのにスピンオフした主人公が出てこないんじゃない意味ないじゃない」

高峰「まあいいけどさ。一応俺が特調に着任した直後あたりの過去回なんだろ？ となると……青葉といういろいろあったあれか。まあ、あれなら公開してもいいのかな」

作者「公開できないようなあれやこれあるもんね（機密的な意味で）……まあとりとめない感じだったけどこんな感じでこういう情報欲しー！とかあれば気軽におっしゃってください。活動報告の方でフォローするかい反響があればまたこんな座談会を設けるのもアリかと思います」

航暉「まあ、またメタしかないけどな」

作者「まあ、そんなこんなでここまでありがとうございました。よろしければ今後とも《啓開の鏑矢》シリーズにお付き合いいただければこれほどうれしいことはありません」

「……司令官、そろそろ教えてくれないんじゃないですか？」

そう言った私を私の司令官、高峰春斗少佐は半笑いの奥に答えをしまつてしまう。細身の体にどこか不似合な制服に包まれた肩を竦めるようにしていつものように口を開くんです。

「……俺の防壁を抜けたら教えてやるよ」

「高峰春斗少佐……26歳、男」

私はほつりとつぶやくと、案外部屋に響いてしまいました。

「北アメリカ連合ニューヨーク生まれ、父親はニューヨークにあるジャパンタウンのお寺の住職で日本人、母親は中国系アメリカ人だから日米連のダブル。国籍も当初は日本と北アメリカ連合の双方を取得していた。第三次世界大戦勃発と同時に戦火から逃れるように日本へ。通信制の大学で18歳にして学士認定を受ける。北アメリカ連合の国籍を返納して日本国外務省入省。その後は……出入国管理部？ 怪しいのはここからですかねえ」

「なに、青葉？ 浮かない顔して」

同室の衣笠が部屋に入ってきました。私はそれを椅子に座ったま

ま体を逸らして向田のですが、衣笠はどこか呆れた表情をしています。

「ほら、そんなだらしない恰好しないで、両足閉じる」

「いやじゃないですかあ。男の人がいるわけじゃないんですからあ」

衣笠も言っつきかないことをわかってるのでしよう。それ以上は言っつきません。

「今度は何？ またいらんことに首を突っ込むの？」

「いらんことは失礼な。今の司令官の経歴です。聞いても聞いてもおしえてくれないんですよ」

「聞かれないことの一つや二つ誰にでもあるでしょ。なんでも掘り返そうとするのは悪い癖ってわかってるでしょう？ だから上手くいかなくなつて前線に出してもらえなく……」

「がっさ」

少々トーンを落として言うと言笠は「……ごめん」と謝っつきました。謝ってほしかった訳ではなかったんですけどね。

「でも、この司令官。それにしても変なんですよ」

「変つてなによ？」

「高峰少佐って経歴みるとスーパーエリートなんですよ。飛び級して18歳で学士、そのまま外務省入省。海大の成績も次席、しかも実戦をすでに経験してるし、電探の情報解析とかの索敵関連では史上最高点をマーク。そんな人物がどうして前線じゃない特調に、それも青葉みたいな落ちこぼれと組まされるのか。全く筋が通りません」

そうなのです。そこが通らないんです。今の司令官のポストが低すぎる。だから怪しく見えてしまうんです。

「やっぱり潜るしかないのかなあ……」

カタログスペックを信じるなら高峰少佐の電腦はHAL2501型、パワー勝負ならとんとん。ですがどんな防壁が仕込まれているかは完全に未知数です。どうもカウンターハッキングスキルには自信があるみたいですし、潜るには少々リスクが大きいのは確かです。

それでも、また知的好奇心に耐えきれなくなるんだらうなあとも思いつつ、司令官の資料を閉じました。

決行日時は案外すぐにきました。

「身代わり防壁よろし。バックアップよろし」

高峰少佐は残業でネットワークに接続しっぱなし。私だけが先にあがりました。なので今は高峰少佐の電腦に直接アクセスすることが可能です。

「……一応こっちのバックアップも通しておくかな」

個人端末を一度迂回してからさらにネットワークに接続。その上で秘匿回線をいくつも用意しておく。ここまで用意するのはひさしぶりです。ねえ。

「さて、潜りますか」

ポニーテールにまとめているので髪が邪魔になることはないのですが、それでも少し髪を避けてQRSプラグを引き出して、ジャックに差し込みます。深呼吸を、一つ。

意識は次の瞬間にネット上に引き出され、アバターを形成します。それはいくつも回線を経由し、高峰少佐のネットに飛び込んでいく。

——案外、甘い？

そんなことが頭を過りますが、油断は禁物。第一レベルは甘くて当然なので。すから。

電腦の階層分けは何段階がありますが基本的に6段階に分けるのがふつう。

第一段階「ロビー」。ここは誰でも通れる場所、電腦通信の受け取りなどはここ。

第二段階「リビング」と第三段階「ルーム」までは許可があれば進入可能。リビングはともかくルームまで招くとなるとよっぽどの信頼関係がないと無理ですね。

各段階に飛ぶときに防壁を突破するのですが、ルームと第四段階「マネツジ」の間の防壁が特に強固につくられることが多いのは定石です。「マネツジ」では文字通り体の動きをマネジメントする部分。私達みたいなアンドロイドやガイノイドは電腦キーがあればここまですべりゃうんですけどね。

でそこから先の第五段階「レコレクション」では記憶を、最終段階にはバイタルコントロールと魂たるPIXコードなどが記憶されているはず。まあ第六段階まで潜ることはないんですけど。今回の目標はレコレクションへの侵入、マネツジからレコレクションの間にはゴーストラインと呼ばれる強力な防壁線を超えなければなりません。

第二段階まではほぼ抵抗なく到達。できる限り手がかりになるような情報を消しながら進みます。無事に第三段階まで進入。ここまでは予想通り。高峰少佐の「ルーム」は両脇に酒が詰まった壁が並び書斎のような部屋。お寺出身の人とは思えない配置です。そこに長居しては気づかれます。防壁破りを展開。ゆつくりと防壁を展開しつつさらに奥へ。

—— 案外、口だけ？

「防壁は無事解除され奥に踏み入れた時に見たのは……私の姿。」

鏡面防壁。防壁破りがリバースで跳ね返る。同時に周囲の活動が活発になりました。その鏡に投影された画像が像をむすばなくなつた時、自らの防壁破りで私の電腦の防壁は成り立たなくなってしまう。急いで防壁破りを解除。間違いなくこれは——
「気づかれたー！」

ここからはパワー勝負。複数のデコイを展開。私の似姿が散らばっていくのを確認しながら目の前の防壁を強行突破します。デコ

イ03凍結^{フリーズ}。最終バックアップをリロードし再試行。防壁の再構成の速度が速すぎる。デコイ01反応消滅、デコイ02フリーズ、リロードは……間に合わない！

「くあつ……い！」

アクティブプロテクト
身代わり防壁を一つその場に残して無理矢理潜り抜けましたが……どこなんでしょうここ。

「マネツジ」の上層部？　「レコレクション」への直結通路に乗っちゃったかな？」

あたりは一転、いきなりコンクリートとアスファルトに固められた人工物しか見えない空間。足元のアスファルトのマーキングからして……地下駐車場の入り口。

「高峰少佐の記憶野に入った……？」

とりあえず奥へ向かいます。駐車場の発券機から「駐車券をお取り下さい」と日本語の合成音声 flowed からおそらく日本、……となると、第三次世界大戦期、もしくはそれ以降の記憶なんだろうと予測がつかず。さて、知りたかった本題に近づいてきましたよ。

「……。」

「……。」

誰かの話声。地下の駐車場なので声が少し響きます。そこへ向かえば欧米人っぽい子供を連れた青い目の大男と日本人らしき東洋人……見たことのない顔です……が何やら話しています。

——ロシア語？

その疑問を持ったタイミングで強力なフラッシュライトがその二人に向けて放たれました。

「!?」

「He двигайтесь! Поместите оружие!

フラッシュライトと銃を構えて飛び出してきたのは高峰少佐で間違いない。その口からは流暢なロシア語が飛び出します。語調からして動くな!といった所でしょうか。

そこで外国人風の大男が懐から銃を取り出し高峰少佐に向って引

き金を引こうとしますがそれより早くフラッシュライトが相手のこめかみにヒット。反射で跳ね上がった銃口は明後日の方向に鉛玉を飛ばします。……ってか

「高峰少佐、強っ！」

ライトを投げてその後ろを追うようにして走り込み相手の顎に掌底を叩き込むとかどんだけですか。もうひとりの東洋人が銃を取り出すと同時に相手の銃の横っ腹撃ちぬいて吹っ飛ばすし。明るくない地下駐車場がよくやりますねえ。

「投降しろ。それとも朝鮮語で言わないとわからないか?」

東洋人の人、銃もぎ取られた衝撃でおそらく手の骨軽くやられてそれどころじゃなさそうなんですけど。大男の方は伸びてますし。それを確認したのか周囲からスーツ姿の男たちがぞろぞろ出てきます。完全に囲んでから高峰少佐が突入した形でしょう。

「これで全部ですか、高峰審議官」

「だろうと思いますよ。……怖かったな、もう大丈夫……つと、Он в порядке? Мы приехали, чтобы по мочь Вам」

子どもと目線を合わせて高峰少佐……ここでは審議官と呼ばれているらしいですね……がにこやかに話しかけました。その時点で違和感に気がついたんです。

その子供の姿に見覚えがある。どこだったっけ? ああそうだ、今朝洗面所で鏡越しに見た顔によく似ている。その顔を幼く再構成したらこんな感じだろうなと見えて。

「……違っ！」

その少女は笑って何かを取り出し、それを高峰少佐に向けて、

乾いた音が響いた。

その音を遠くに聞いた私は地下駐車場に駆け込みました。今のは間違いなく銃声です。音は確かにこの中から響いてきました。〃駐車券をお取り下さい〃と流す発券機のバーを飛び越えると、やはり薄暗い駐車場の途中でいくつもの発砲音が聞こえます。音からして拳銃、そこまで口径は大きくない。

「まったくなんなんですかもう!」

銃撃戦の現場に行きつくとスーツ姿の高峰少佐が西洋人っぽい大男を掌底でのしている所でした。

そしてその銃口がこちらを向く。

「投降しろ。それとも朝鮮語で言わないとわからないか?」

「?????!」

そして、それに違和感を覚えました。

——同じ言葉を聞いたことがある。

「これで全部ですか、高峰審議官」

「だろうと思いますよ。……後はあんただけだ。」

???

???

??

???????

???

???

???

それを聞いて私はやっと理解しました。

「ここは……高峰少佐の記憶野ではなく——」

「防壁迷路の中!」

おそらくこの銃撃も、そこに伏せている〃私そっくりの子ども〃も、全部まやかし。ただここでこの幻を見ている間にも私の防壁パターンが解析されているはず。急がなければ私は……

「?? ?!」

どこかに防壁迷路の出口があるはずです。そのカギはおそらく……。

「Не приезжайте!」

私によく似た少女が怯えた顔で叫ぶ。来ないで……といったみた

いです。詳しいことはわかりませんが。

この場において私は第三勢力として認識されているらしい。高峰少佐たちから見ても大男たちからみても他人だから、そのカギとなっているらしい少女に近づけば、双方から反撃を受ける。だから少女に近づくのは難しい。だから、そこが……

「出口ですっ！」

その少女に飛びつくと空気が一変した。暗い空気から水の中に浮いているような浮遊感に間隔が切り替えられます。

「……切り抜けた？」

そんなはずがありません。記憶野にはまだたどり着いてないはず。もし記憶野だとしたら、高峰少佐は水面^{アンダーウォーター}下の訓練経験者か人魚姫的な何かになつてしまいます。

「それでも仕掛けてこないということは……上手いこと防壁と防壁の合間の未感知領域に落ち込みましたかね……」

素晴らしいながらわずかに移動してみます。本当に無重力のように移動できる空間みたいです。足元の方が明るいので一般的には逆さま状態にいるのでしょうか。……まあ、電脳空間には上下もなにもないのですけど。

明るいほうに行ってみます。本当に海水面みたいな印象です。おそらくその水面が感知領域と未感知領域の境目でしょう。水面の向こうはおぼろげに透けて見えます。

「……だから、母さんを捨てたのか」

「捨ててなどいない。全部、お前のためだった」

そんな会話が聞こえてきます。

「俺のため？ 俺のためってなんだよ。母さんがチャイニーズアメリカンだったから？ それが理由になるって言うのかよ！」

「あの時そうしなければ、お前はどんな扱いを受けてたか！」

「有難迷惑もいところだ禿げ親父」

男性同士の会話。若い方がおそらく高峰少佐、弱ったような声はおそらく……少佐のお父さんでしょう。

「親父はいつもいつも、俺の気持ちも考えず、大切なものを奪ってい

く。ニューヨークの友達も置いてきた、向こうの思い出も置いてきた。今度は母さんまで置いていくのか？ いい加減にしてくれ！」

その声は本当に悲しみに揺れている。

「親父は俺のため俺のため言いながら、自分が安全圏に逃げているだけじゃないか！ 俺はいつまでそれに付き合えばいい？ 親父のわがままにどこまで黙っていればいい？ 答えて見ろよ！」

そう言う背中小さく震えていて、誰かが支えなければいけないほどに危なっかしくて。思わずそれに手を伸ばし――

世界が暗転した。

「――あれ？」

「やつとお目覚めか、サースデー」

そう言った男の声に驚いて私は慌てて体を起こしました。医務室……ではなさそうです。たくさんの本が並ぶ部屋のベッドに寝かされていたみたいです。私の寝ているベッドに頭を預けるようにして寝ている顔を見て首をかしげました。

「……衣笠？」

「お前の看病をずっとしてたんだ。今は寝かせてやれよ」

ベッドの反対側の壁に備え付けられたデスクに座った男の人……

高峰少佐が優しく笑いました。

「あの……ここは？」

「俺の私室、狭いけどな。ようこそ俺の城へ」

おどけて笑った彼の手元には古い文庫本があった。

「わたしは……」

「衣笠が起きたらお礼言っとけ。お前が意識失つてるところを発見して連絡してくれたんだ」

「え……？」

「身代わり防壁いくつ使ったか知らないがかなり無茶したみたいじゃないか。電腦のサーバーサーバが起動してオートで接続をカットしたんだよ」

それを聞いてはつとずる。そういえば、私は……。

「あの防壁迷路……」

「いい出来だろ？ まさか2週目で見破られるとは思わなかったけどね。さすがに難易度設定簡単過ぎだったかな？」

「……あれ、一から組んだんですか」

「ループはオリジナルだが元ネタは存在するよ。それに、俺の本物の記憶を流し込んで、リアリティを上げてある」

「じゃああれは……」

「うん。間違いなく俺の記憶の一部さ」

そう言うとき、高峰少佐は私の方に印刷資料を渡してきました。

「防壁を抜けたら教えてやるって約束だったからね」

その紙には少佐の写真と一緒に印刷された用紙で紙の左上には外務省の公印が押されています。

「日本国外務省条約審議部第一分室……？」

「表向きの名前だ。そこそこ詳しい人には、”セクター4”と言った方が通じる」

高峰少佐はどこか懐かしそうに目を細めました。

「非常にデリケートな事案、貿易相手国の高官が絡んでいて日本の警察や軍が動けないような場合に出動する公安組織だ。スパイのあぶり出しや工作員の確保などを行う。俺はそのカウンタインテリ

ジエンス部門に所属していた」

「カウンターステリジエンス……」

「それも電腦系のね。特^{ウィザードクラス}A級のハッカーを相手取り、こちらの機密事項を守り、そのハッカーを突き止め、生け捕りにする。そのためのあれやこれは一通り知ってるつもりだ」

それを聞いて私はなぜか笑えてきました。つまり私は……電腦戦に長けたプロ相手に勝負を仕掛けた訳で。

「勝てない訳ですね……」

「それでも2週目でもうキーを見つかるあたり観察眼と発想はいい線いってると思うぜ？」

そう言うのと青葉から経歴の書類を取り上げてしまいます。

「お前が見たのは俺がそこでやった仕事の一部だ。戦争難民を日本が受け入れた時、日本経由で難民の人身売買のマーケットが発生した。そこにいくつかの国の高官が絡んでる可能性が出てきてね。その現場を押さえることが必要になった。その突入シーンの記憶を元に組んでる。だから防壁迷路にしては妙にリアリティがあるものに仕上がった」

「最初、記憶野に飛んだかと思いましたがよ」

「そう言っていただけだとありがたいな。ま、もともと今回のお前のランで脆弱性も視えたから組み直すけどね」

書類を仕舞いながらそう言う高峰少佐の背中を眺めていると不意に振り返った。

「女性の経歴を覗くのはあれだと思ったが、見させてもらったよ。……前線で問題を起こしたことで戦闘要員から外されたと記載されているね。で、その内容は僚艦との関係の著しい悪化が複数回にわたって見られたから、具体的には相手のトラウマを聞きだしてその古傷を擦ったからってことになってる。……でも、そうじゃないよね？」

高峰の目がすうつと冷えて、私を見ています。

「……もう、終わった話です」

「そうだね。君が本当にやろうとした。〃司令官の資材横流しの告発

“は握りつぶされて終わった”

返す言葉を探しますがなんていえばいいかわかりません。

「で、お前についての悪い噂を流布してレットルを張り、前線から遠ざける。意趣返しとしては微妙だし、ずさんだがね。よっぽど前の司令官はお前のことを恨んでたんだな」

そう言う和高峰少佐はまた別の書類をひらつかせました。そのレイアウトには見覚えがありました。

「……残ってたんですね、その書類」

「正確には消されそうになってたものを押さえた。拝見したが、艦娘という制限された身分でよくここまでつかんだものだと思うよ。証拠集めも十分、そこから推察される情報も矛盾なく全容を浮かび上がらせるに足るものだ。おかげで横流しルートを一網打尽にできそうだよ」

「……恐縮です」

「そんなに警戒しないでよ」

高峰少佐は微笑みながらそう言いました。

「重巡青葉、君には俺たちに似た素質がある」

「素質？」

聞き返すと高峰少佐は冷えた目の色のまま笑みを深くする。

「狩人の嗅覚と電子空間への適応性の高さ。そして、感情のコントロール能力の高さ。君は前の司令官が流したレットルを受け入れた。そうして輪から外れることで相手を告発できる機会を待ってたんだろ？ レッテルを事実であるかのように演じながら相手を欺き懐に飛び込む機会を窺う……それには並外れた感情のコントロールが必要だ」

そう言った高峰少佐は両手を広げました。

「こちらに來い、青葉。お前にしかできない仕事が待ってる」

それを聞くとなぜか笑いが込みあがってきました。

「……そう言って協力者を得ようとしているスパイみたいにも見えませんよ。高峰少佐？」

「かもな。だが、その感覚が本当かどうか確かめてみるのもまた一興

だと思うよ?」

そう返して高峰少佐はデスクに置いてあった文庫本を投げてよこしました。カバーが外された裸の本を慌ててキャッチ。

「……ロビンソン・クルーソーの生涯と奇しくも驚くべき冒険?」

「読んでみるといい。必要なエッセンスが詰まった本だ。頼むぞ」

それが高峰少佐からもらった最初のものになりました。

「少し感傷的過ぎますかねえ……」

出てきた文庫本を閉じて、私は浸っていた思い出を仕舞います。今はデスクの整理中、こんなことをしてる場合じゃないのは確かです。

「まあ、電ちゃんがいろいろ大胆なことをしてたのも一因ですかねえ」

月刀大佐を電ちゃんが捕まえて早一週間。そろそろこの関係の書類を片付けないとまずい時期です。私にとっても大きい事件だったので少々感慨深いですが。

「電ちゃんは月刀大佐を捕まえて、か……」

私達が兵器として扱われることに慣れていたせいか、それがどこか悪いことのように思えてしまいます。でもきつと間違っているのは私の方で、先入観に囚われているんだらうなとか思ってしまう。手に持っていた文庫本の背表紙をなぞっていると少しだけ落ち着いてきました。

ロビンソン・クルーソー、その作者ダニエル・デフォーはイギリス・ステュアート朝最後の女王、アンの下でスパイマスターを務めるほどにインテリジェンスに造形が深い人でした。それを知った時、初めて高峰中佐がこの本を渡してきた意味を知りました。

ロビンソン・クルーソーは28年間の無人島での生活を描く物語。その筋書きは異国でスパイを続ける影を重ねることもできるように思えてきます。

スパイを追うスパイ。スパイをあぶり出して捕らえるためにはスパイの手口を知る必要がある。そうして高峰中佐にもこの影の匂いが染みついたように見えます。

そしてその影を支えるもう一つの影が。

「フライデー……か」

スパイとは孤独なモノでしょう。自らを隠し、仮面をかぶりただ愚直に与えられた仕事をこなす。スパイを狩り出すスパイである高峰中佐もまた、孤独であることを強いられる。仲間はいても、時に孤独にならねば相手に追いつけない時もある。

防壁迷路の間に落ちて、私が彼の記憶を知ったことを、私は話していません。彼がそのことを知っているかどうかは私にはわかりません。

彼は孤独を知っている。仲間や家族から切り離される恐怖を知っている。それでも彼はこの仕事を選んだ。なぜかはわからないけれど、孤独と向き合わねばならないこの仕事を選んだ。

時々。本当に時々、あの時見た記憶のかげらが今の高峰中佐に被るときがあります。月刀大佐が関わる時はいつもそうで。それでも、彼は弱音を見せようとしません。

私に、その彼を支えられるでしょうか。

「青葉」

後ろから声がかかりました。もう3年も一緒に働いている上官です。すから声だけでわかります。

「仕事ですね？」

「ああ、12分前に呉ローカルでシーン16。ピーピングトムは黄色だ」

それだけである程度の事態は把握できます。呉の基地内LANから違法アクセス感知、容疑者の絞り込みは完了しているものの証拠は無し。

「対象は？」

「メインサーバーのアクセスキーを探っているらしい。ランクAAにアタックをかけてるところからして狙いはおそらく」

「基地セキュリティシステムの解除キー、ですか？」

「おそらくは」

高峰中佐は私の隣のデスクにつくとQRSプラグを引き出して準備を進めていきます。それを見ながら潜入用のデコイを確認したり、バックアップ用のハードを起動したりとこちらも用意。

「行けるか、フライデー」

そう言われると少しうれしい気がします。

「はい、いつでも行けますよ！」

「嬉しいことでもあったか？」

「いえいえ」

文庫本の背表紙を撫でて深呼吸。

「では、取材に伺いますか、マスター」

「それじゃ、ついて来いフライデー」

願わくは、^{ロビンソン}貴方を支えるフライデーであることを。

私の意識はあつという間にネットの海へと飛び出しました。

【ダイジェスト版】横須賀鎮守府付属海軍横須賀病院
編

Yokosuka Cluster Upside
Down

横須賀鎮守府付属海軍横須賀病院。

義体化や電脳化、再生医療などの外科手術でトップクラスの実績を誇る病院は横須賀軍港の軍用地の端に位置する。15階建てという大規模な建物は軍人だけでなく民間病院から回されてきた重篤患者も含め常にパンク寸前の激務で業務を回していた。

そのこの13階、軍専用フロアにある高官用個人病室1306号室には軍人にあまり見えない二人の少女の姿があった。

「ほら、しれーかん！ あーん！」

「だから左手使えるから……」

「あーん！」

半ば強引に病院食を口に突っ込まれた航暉はゆっくりと咀嚼する。熱も下がったし粥から白米になって最初の食事だ。料理が乗ったベットテーブルを挟んで航暉の膝にまたがるようにした雷がスプーンを手に航暉に甲斐甲斐しく料理を運ぶ。

「美味しい？」

「旨いことは旨いが……そこまでしてくれなくてもいいんだがな……」

航暉はそう言つて苦笑いを浮かべた。

「でも、私のせいみたいなものだし……」

「だから何度も言ってるだろう？ あれは鬼龍院大尉のせいだ。お前のせいじゃない」

でも、と言いよどむ雷の頬を電が引っ張った。

「大丈夫なのですよ。司令官さんもお姉ちゃんたちも生きているので

す。だから、大丈夫なのです」
電にまでそう言われてしまえば黙るしかない。

航暉がなぜ入院しているかといえば、約3週間前に発生した「ウエーク基地司令官射殺未遂事件」のせいである。その被害にあつた航暉が右腕と右目にダメージを追っていた。他には司令官室のドアが吹っ飛んだり、血糊で染まった床の張替などでかなりのお値段が吹っ飛ぶらしい。まあそれが航暉の財布から引き落とされる訳ではないのでそこまで痛くないのだが。

とにかくその時の無茶のせいで、航暉は右腕を義手にする必要に迫られてしまった。そのために横須賀に來ているというわけである。電は先のヒメ事案への協力、雷は義制研への一時貸出ということで航暉についてきて早2週間以上が過ぎていた。

「それにしてもやつと普通の食事だもんね、しれーかんもたいへんねえ」

「明日にはもう義手の装着、その後リハビリか。先は長いな。目の方はさっさと治ったからいいんだけどな」

そんなことを言いながら航暉は右肩をさする。義手接続用の手術の後であるべき手がそこにないというのは結構痛々しい。

そんな会話をしていると、コンコンとドアがノックされる。雷が飛び上ってベッドから飛び降りた。

「どうぞ」

入ってきたのは国連軍の制服を着た男性だった。年は60くらいだろうが、若い頃は体を鍛えてたのだろうとなんとなく想像がつく体は定規でも淹れたかのようにピンと背が伸びておりどこか風格を感じるものだった。髪は上品なグレーアッシュ、オールバックに固めたその姿は年相応の気品にあふれていた。

その姿をみて、真っ先に反応したのは航暉だった。右手がないことを思い出して、慌てて左手を額に上げる。ほぼ同時に電も敬礼。雷はきよんとしていた。

「あなた、だれ？」

「自軍のトップぐらい覚えとけ！ 山本五六元帥だ。国連海軍極東方面隊の総合司令長官！」

航暉の小声の早口にそう言われ、雷が真つ青になりながら敬礼。

「左手で申し訳ありません。また、部下が大変失礼いたしました。山本元帥」

「いやなに、突然の訪問だったからな。驚かせてしまったようですまなかつた。月刀大佐はマニラでの観艦式の時に通信した時以来かな？」

「はっ、その通りです。その節は大変お世話になりました」

「通信一つであの場を押しえられるのならばいくらでもするさ。君が恐縮する理由は無い」

凜と澄んだバリトンは場を一気に引き締めた。その後ろには何やらブリーフケースを持った女性秘書が控えている。

「この度は災難だったな、月刀大佐」

スツールに腰掛けながら山本はそう言った。

「いえ、私も軍属の身、死の覚悟はしております。腕一本で生き長らえたのですから僥倖というものでしょう。……海軍元帥御自ら護衛を付けずにいらつしやるとは、どのような要件でしょうか」

航暉がそう聞くと山本は朗らかに笑った。

「月刀大佐に少し用事があってな」

「私に……ですか？」

航暉は僅かに首をかしげると元帥は小さく頷いた。

「この度のキスカ島難民輸送作戦、及び北方棲姫、ヒメの拿捕、大変ご苦労であった。その厳しい状況下で死者ゼロ、喪失艦ゼロで作戦を成功させたという功績は近年稀に見る快挙だと司令部は考えている。また高等種の深海棲艦を拿捕するというのは世界中のどの軍を見ても前例がないほどの戦果だ」

そう言うと航暉はすまし顔を繕ったまま先を待った。横では電がどこか複雑そうな表情で元帥を見つめている。

「戦術中央コンピュータの試算によると、ヒメの拿捕によって戦争は

最短であと3年、当初の試算より5年以上早く終結する可能性がある
と弾き出した。実際に何人を救ったかなど計算することに意味はな
いが、この戦果で億単位の市民が死を免れたかもしれん。それだけの
功績を月刀大佐とその部隊が成したのだと極東方面隊司令部をはじ
め、各上層部は認識している」

電はそこまで話が大きくなってきているのかと驚いていた。

「まだ公表されていないが、この功績をたたえ、国連軍長官のドメツ
ク・ガルシア元帥より月刀航暉国連海軍大佐に殊勲十字章が贈られ
る」

航暉は眉を顰めた。

国連軍の殊勲十字章——国連軍人が得ることができるとある勲章の
中では名誉勲章に次ぐ第二位の勲章であり、国連軍が国連議会を通さ
ずに送ることができる最上級の勲章でもある。軍務についている間、
公式の場で最優先で敬礼を受ける権利を得る。

戸惑っている元帥が先回りして口を開く。

「拒否されると、推薦した私と極東方面隊のメンツが潰れてしまうか
ら受け取ってもらえると助かる。……頼む。お願いできないか」

元帥自らに頭を下げられ航暉は焦った。航暉は頭を上げてもらい、
「わかりましたっ」と半ば叫ぶように言う。

「受勲するほどの格も戦果もないとは思いますが、作戦参加者の代表
として受け取らせていただきます」

「正式な手続きに時間がかかるが3月の半期末には授賞式があるはず
だ。とりあえずはこのまま話を進める。……そしてもう一つ、こちら
が本題になる。DD-AK04、電、君にも関わる話だ」

「……ヒメ事案、ですね?」

航暉が声のトーンを落として聞き返した。山本が頷く。

「事態は急速に変化している。現在の軍組織では対処しきれない事態
が今後予想される」

「予想されるのではなく、そういう戦略に切り替えるのでは?」

「月刀大佐は手厳しいね。その通りだ」

そう言うと山本は後ろで控えていた秘書を目で呼ぶと、ブリーフ

ケースからホロ投影機を取り出した。

「本日、国連海軍総合司令部より第50太平洋即応打撃群の新設が認可された」

「第50……」

「……太平洋即応打撃群？」

電と雷が頭の上にはてなを浮かべる。航暉が呻くように口を開いた。

「特設艦隊を創設する気ですか？」

「極東方面隊総司令部直属、最優先ラインの作戦部隊だ。海軍だけでなく、空軍、陸軍の作戦ユニットも参加する統合作戦群。真の意味での攻勢部隊として設立される」

そう言うのとホロスクリーンに組織図などの部隊概要が現れる。

「作戦カテゴリーIV以上の重要作戦に投入される海域の枠にとらわれない精鋭部隊だ。権限は既存艦隊と同等、作戦行動中は兵站・情報・支援などあらゆる面において最優先で処理されるという面では既存艦隊よりも上位としてあつかわれる」

「……海域防衛に関わらない攻勢組織の設立。それによる海域の奪還及び深海棲艦の制圧を主任務とする、そんなことですか？」

「近いようで遠いな。正確には深海棲艦への武力交渉の実働部隊といった所だ」

そう言うのと山本が手を組んだ。

「ヒメの確保によって人類は深海棲艦と交渉するという可能性を得た。だが、交渉をするためには相手には交渉のテーブルについてくれないと話ができない。だから、相手のトップを会議室まで連れてくる。それが新設部隊の目標だ」

「なるほど、そうなるとその部隊は深海棲艦との接触がこれまで以上に多くなる。もちろんヒメの情報も必要になる。できることなら平和的に交渉、無理なら実力行使で連れてこい。そういうことですか？」

「その通りだ」

山本元帥はそう言って笑って見せる。

「だから、電をその部隊にというお話ですか」

「正確には打撃群旗艦を任せるつもりだ」

「わ、わたしが……艦隊旗艦っなの、ですっ!？」

それに頷く元帥に航暉も雷電姉妹も言葉を失った。

「それって……どの艦隊旗艦よりも優先順位上ってことですよね？」

「その通りだよ、DD—AKO3雷」

「あの長門さんよりも、ですよね？」

「北方艦隊旗艦BB—NT01長門と平時は同等の扱いだが、作戦実施中に相反する要請が出された場合は打撃群旗艦の要請が優先的に実施される」

雷の質問にさらっと返って来て、雷はどこかふらふらと壁にもたれた。

「電が……連合艦隊旗艦より上になるなんて……」

件の電は状況が読みこめていないのか、口をパクパクとさせている。

「事態を飲み込んでもらえたようで何よりだ。ヒメの手綱を握れるのは現状DD—AKO4電のみだ。勿論、深海棲艦とのネゴシエーターを彼女ひとりに任せるつもりもないし、個人と個人の関係性に世界を預けるつもりもない。だが、それを待ってもいられない状況だ」

そう言うのとホロが切り替わる。暗闇の中で何かが燃えている映像が映し出された。

「南米のサントス軍港が壊滅した。……深海棲艦との戦いで唯一拮抗できているのは極東方面隊だけ。このままでは深海棲艦の攻撃でどこかの大陸を放棄しなければならなくなるのも時間の問題だ。南アメリカの民間人をまとめて避難させる計画も始動したとも聞く。南北アメリカ方面隊は南アメリカまでカバーしきれぬ戦力をもう持っている。後1年もしないうちに南アメリカを放棄する決断を迫られる可能性もある」

だから、と山本は言っつて、電を見た。

「和平交渉を急ぐしかない。太平洋一帯で停戦条約が発効すれば南北アメリカ方面隊は大西洋に専念できる。その交渉をする相手を是が

非でも交渉テーブルに引き出さなければもう後がないんだ。そのために、DD-AK04電、君の力が必要だ」

沈黙が下りる。誰もが次の言葉を探していた。

「……いなづまには、少し荷が重いのです」

そうつぶやくように言った。

「今でも、結構いっぱいはいっぱいなのです。自分の一言が、世界を壊しちゃうかもしれないだって結構いっぱいはいっぱいなのですよ？」

震えた声は航暉の耳朶を打った。

「司令官さん」

「……ああ、なんだ？」

航暉は電の方を見る。電は今にも崩れ落ちそうなほどに震えていた。

「私に、出来るっていつてくれませんか？ いなづまなら大丈夫だって言ってくれませんか？」

そう言って電は航暉の目を見返した。

「私は、この世界が平和な世界だといいなって、思ってます。いまはそうじゃなくて戦時中だつてこともわかってます。だから、早く平時にしたいのです。それが私にできるかもしれないって思うと、私はそれをするべきだと思うのです」

元帥に目で詫びてから、航暉はベッドから起き上がる、まだ少しふらつくが電の前まで行くと片手でそつと肩を抱いた。

「大丈夫だ、電。お前ひとりで戦ってるわけじゃない。お前ひとりが頑張つてどうにかなる問題でもない。だから、無理するな。怖いままでいろ、辛い時はつらいって言え、出来ない時はできないって言え」
航暉は笑って見せる。

「なあ、電。最初にウェーク島基地に俺が赴任した時、ルール作ったの覚えてるか？」

ゆっくり頷く電。

「ちゃんと周りに耳を傾け、自分の意見も言つて、チームとして乗り越えていく。黙っていたらだれもわからない。聞かなければ理解もできない。それじゃあ、相手を疑つて戦うしかできない」

航暉は電の肩を叩いた。

「電、お前が行きたいなら、行って来い。電の実力は俺が保証する。お前は全くもって手放すのが惜しいぐらいの実力者だ」

「……ありがとう、なのです」

そう言つて背中を押した後航暉は振り返つた。雷は彼の顔にどこか悪戯じみた笑みが浮かんでいるのを見る。

「……って感動的に終わればいいんでしようけど、その指揮官は誰を想定しています?」

航暉は山本にそう言つて笑つた。

「さすが五期の黒鳥筆頭だと思えばいいかね?」

「この話、電には命令と言ふことで配置転換命令書を一枚交付するだけで済みます。そこに私にそれを説明する必要はない。ですよね?」

山本が笑つた。

「月刀航暉君、君には第50太平洋即応打撃群の前線指揮官を務めてもらう。来年の4月1日の部隊発足を持って月刀大佐は一階級特進、准将として任についてももらうことになる予定だ」

それを聞いて電は航暉の顔を見上げた。どこか寂しそうな、嬉しそうな複雑な表情だった。

「そのための殊勲十字章の受勲もあるんでしよう?」

「この部隊は深海棲艦との交渉という任を帯びる、だからこそ過去に接触した経験を持ち、かつ、説得に成功した経験者を配置する必要がある。DD-AK04電はそれを成し、それを管制したのは月刀大佐だ。これからの活躍を期待するよ」

そう言つたと山本は立ち上がる。

「私も忙しい身でね、そろそろいかないならん。……正式発表があるまではくれぐれも他言無用で頼むよ、月刀大佐。水上用自律駆動兵装の配置などで意見を聞くこともあると思う、その時は協力を期待する」

「はっー」

航暉は左腕の敬礼で山本を見送つた。

「……まさかこんなことになるとはなあ」

「……なのです」

「……まったく、台風みたいに過ぎ去って行ったわね」

残された三人がへたり込む。元帥の前で極度の緊張を強いられた上に内容が内容だった。さすがに疲弊する。

「とりあえずはこれからもよろしくってことになるのかな？」

「なのですな……」

今は12月初頭で4月頭に部隊設立なので、少なくともあと4カ月はウエーク島基地の司令官を続投することが確定したのである。

「それでも、四月までかあ……」

「ウエーク島基地司令も1年弱しかやらない訳か、癒着を防ぐために頻繁に異動するとはいえ短いな」

「というよりその期間で中佐から准将とか聞いたことないわよ？」

雷の声に航暉は頭を掻いた。

「俺もびつくりだよ。昇進じゃなくて特進扱いで無理矢理階級上げる感じだもんな」

「それだけ司令官が優秀ってことなのです」

「部下に恵まれたからだと思うがなあ……」

そんなことないのですっ！という電が航暉に半ば抱きつくように寄り添った。それを見て雷は僅かに青筋を立てた。

航暉の異動が確定した以上、新設部隊に異動にならない限り航暉の部下ではいられない。現状確定しているのは電のみ。

なんとなく、腹立たしい。

「しれーかーん！ ご飯の途中だったもんね、お腹すいてるでしょ！

この雷が食べさせてあげるわー！」

「え、ちよ、なにいきなり……ふっ！」

「お姉ちゃん！ そんなにいっぱいご飯詰めたら窒息しちゃうのですー！」

わいわいと昼下がりが過ぎていく。

騒いだことで看護師に怒られながら、電も雷も思うのだ。

——こんな日常が続けばいいのに。

航暉の部隊は仲がよくて安心できる。それが来年の3月でおしまいかと思うと少し寂しいのだ。

「そういうえば、司令官さんのご家族の話って聞いたことないのです」「俺か?」

「あ、あたしも聞きたーい!」

話題を振られて航暉は少し笑った。何とかご飯は飲みこめた形だ。

「あんまり面白くないぞ? 大家族っていえば大家族だけだな。親父におふくろ、姉1人に兄1人、妹が3人。あと使用人数人」

「使用人!?!」

雷が驚いた顔をする。航暉は苦笑いだ。

「月刀家は軍関係に顔が広くてね。家も結構広いから家族だけじゃ仕事回らないのさ。だから執事にハウスメイドがいる」

「つてことは……しれーかんってかなりお坊ちやま?」

「かもな」

「す、すごいのです……」

なんだか目をキラキラさせている部下二人に苦笑いで返す。

「もつとも、最近は実家とも疎遠になって、ていうか大ゲンカして家を飛び出したもんだから最近会ってない」

「ご家族とは仲悪かったのです?」

「下の双子の妹とは仲良かったけどね、あと執事の虎爺、今では連絡も取ってない。アイツら今どうしてるやら……」

「……おかしい」

高峰は小さく呟いた。隣のデスクに座っていた青葉が彼のデスクを覗き込んだ。

「どうしたんです?」

「いや……なんでもない」

「そんなことないですね? 青葉にはわかりますよ?」

青葉がどこか目の色を輝かせながらそう言った。高峰は一番知られたくないヤツに知られたと頭を抱えた。

「その野次馬根性は認めるが好奇心猫を殺すって故事を知らんのか?」

「それ故事なんですか? まあでも私が知りたがりと言うことは知ってますよね?」

「……」

高峰は諦めたように首の後ろからQRSプラグを引き出した。青葉に渡すとそれを彼女は自分の首筋に差し込んだ。

『ウエークの司令官射殺未遂事件、どう見る?』

『高峰中佐は管轄外ですよね』

『なんだよ、友達の安否を気遣うのに理由があるか?』

『理由云々じゃないですよー。それって三課の仕事なんですから六課の青葉たちが首突っ込んだらなんて言われるか……』

それを聞いて高峰は笑った。

『首を突っ込むつもりはねえよ。三課も優秀だ、うまくやるさ。俺が聞きたいのは個人的な見解、感想、その他噂程度の話。青葉、お前は どう見る?』

そういいながら高峰は胸ポケットから箱を取り出す。ここで話していてもあれだ。河岸を変えようとコードを回収した。

「青葉」

「少し休憩ですか？　ご一緒しますよ？」

「ヤニを吸ってくるだけだぞ？」

「それでもですよ」

この流れでしつかりやりたいことを汲んでくれる青葉は優秀だ。そう思いつつ8階建ての横須賀国連合同庁舎の屋上へ向かう。屋上からは青く海が見えていた。屋上の喫煙コーナーはまばらに人がいる程度だった。真つ黒の紙箱から煙草を取り出すとフリントライターで火をつける。

「青葉……ライ麦計画Program R.Y.E.って聞いたことあるか？」

「ライ麦計画……？　たぶんないと思いますけど」

「俺も名前ぐらいしか知らん、というより名前しか出てこない」

煙草を口の端に咥えたまま高峰は空を仰ぐ。

「予備青年士官教育プログラム……。ここまでは出てくるんだ。だがその先の一切の情報がロックされてる」

「教育つてことは後方支援部のプログラムですか？」

「それも不明……。だが、これに関わったと思われる人物が何人か割れた。ごく最近になってな」

それを聞いた青葉がどこか胡散臭げな目を向けた。

「……なーんか嫌な予感するんですけど」

「俺も見た時はしたよ。……一人目、風見恒樹元大佐」

「ウェーク基地の元司令官……ですよね？」

「ああ、二人目、合田直樹元中将」

「……元北方第二作戦群司令」

「三人目……中路章人中将」

「……元西部太平洋第一作戦群司令……高峰さん、すごくヤな予感するんですけど」

「今、ライ麦計画に関わったって思われる人物が死亡もしくは証言能力不能に陥ってる。……明らかに証拠隠滅を図ってるんだよなあ」

高峰は一度煙草から口を放し、青葉の方を見た。

「風見元大佐と合田元中将は殺害、中路中将は電腦自殺に失敗して言

語能力喪失。偶然にしてはできすぎてる気が……」

「青葉もそう思うよな。それにもう一つ、32分前に入ってきた情報だ」

高峰がコードを差し出し出してくる。青葉は受け取ると、それを首の後ろに差し込み、うえつ、と行って引きぬいた。

「予告なしになんてもん見せるんですか!？」

「声がでかい。……風見元大佐をよく知る鬼龍院彰久特務大尉が自殺した。自殺に見せかけた他殺の可能性もあるそうだから今四課が動いてる。個人的にはカズに風穴開けてくれやがった人物だから複雑な気分だ」

「月刀大佐に……ってこれ!？」

「気がついた？ 死んでる人物をたどるとなんらかの形で月刀航暉に行き着くんだよ」

高峰はフィルター直前まで燃えた煙草を灰皿に落とすと溜息をついた。

「こうなってくるとカズ自身が怪しく見えてくるんだよなあ。そんなはずはないってフィルターをかけてる俺でさえそう見えてくる。まあ、あんまりに露骨だからパフォーマンスって線が出てくるけどな」

「これ……どうするんですか?」

「どうするもこうするもないだろ」

高峰は溜息をつく。

「ライ麦計画について少し探りを入れるよ。裏に誰がいるにしろ、ここまで上級将校を殺しているとなると性質が悪すぎる」

「探りって言っても、ロックかかっているんですよね。探りってどこから……?」

「青葉、お前どれだけこの仕事やってるんだ？ いくら情報を潰しても必ずどこから顔を出す。人の口に戸は立てられぬって言ってな、そこからいけば結構いけるもんさ」

「内部スパイをするつもりです?」

「まさか。ただのHUMANITYだよ」

対人諜報活動——それを聞いた青葉がニヤリと笑う。

諜報員と聞くとスパイを真つ先に思い浮かべることが多いが実はそうではない。スパイは非合法に諜報活動を行う人物のことを指す。諜報活動のために非合法なことをせざるを得ないことがあるのは事実だが、それだけではなく合法的に諜報活動を行う集団も数多く存在する。

国連海軍特別調査部——「特調」もその一つだ。人を相手取った組織のため、対深海棲艦戦争と化している今の戦争では優先順位は下がるものの、重要な任を担うことには変わりはない。国連軍に反感を持つ国家の折衝や各種下地交渉を行う一課から始まり、全部で九つの課が稼働している諜報組織。その一つのチームに高峰は所属していた。

高峰の専門は防諜活動、即ちスパイ活動の炙り出し、特にカウンターインテリジェンス通信諜報を中心に暗躍する非合法諜報員を摘発するのに特化した嗅覚を持っていた。

「直接動くのは苦手なんだけどね、しかたない。身内の電腦に潜って攻勢防壁に焼かれましたとか笑えんし、地道にいくぞ……ん？」

いきなり届いた通信に高峰は眉を顰めた。

「カズ宛ての通信のBCC？」

今や少なくなつたEメール式の通信だ。メッセージ欄にはただB——Pとあるだけだ。通信の送り主は不明。

「B——P？……なんじゃこりゃ？」

訝しんでいると腹に響くようなずんとした空気の振動が走つた。数瞬遅れて爆発音。高峰は弾かれたように振り返る。青葉が慄いたように声を震わせた。

「あ、あの建物は……！」

「——クソツタレ！」

踵を返して高峰が全力疾走で階段室に駆け込んだ。慌てて追いかけた青葉が階段を2段飛ばしで駆け下りている最中に緊急の警告文が電腦に叩き込まれる。横須賀病院13階にて火災発生。付近職員は避難してください。

「高峰さん、どこ行く気ですか!?!」

「あれがただの火災なわけあるか?!? 爆破テロだ! しかもその標的は十中八九、月刀航暉だ!」

青葉が高峰に追いつくのとほぼ同時、外に飛び出した二人が見上げたビルでは轟々と炎が猛っていた。助けに行くことなど不可能なのは遠目にもわかっていた。

「生きてろよ、馬鹿野郎」

高峰の噛み殺した叫びは炎の音にかき消された。

「……で、俺がその重要参考人ってわけだ」

「そういうことだな」

高峰が肩を竦めてそう言った。ウエーク基地からわざわざ呼び寄せられた天龍のは笑いだ。病院の窓には一部青いビニールシートが張り付いていた。

「もちろん俺じゃないことはわかってるんだろうな？」

「当然。ウエーク島から病院を爆破する意味がわからんし、病院の監視カメラに映っていたお前のそっくりさんは重量がお前と合わない。どう考えても別人だ。それに自走爆弾なんかと一緒にされたくないだろう？」

「もちろんだ。あんな張りぼてと一緒にするな。何が悲しくて雷と司令官を吹っ飛ばさなきゃならないんだ……で、そうわかってるのに容疑をかけたってことは……電の方が問題か？」

「ああ、今回のビル爆破による航暉の暗殺未遂……生死不明を未遂と言っつていいもんじゃないが、生きてるとして話を進めるぞ」

「疑いたくもないが、司令官が生きてるっていう確証があるのかよ？」

「ああ、雷ともども死体どころか衣服の一つも見つかっていない。

……俺たち以外にもカズに死んで欲しくない人たちがいるんだ。そいつらがカズと俺にB—Pなんてメッセージを送った」

「意味は分かったのかよ？」

「おそらくはな、ボーイスカウトの創設者、ベーデン—パウエル卿の言葉で『Be Prepared 備えよ常に』だろうな。おそらくはその襲撃に備えろという意味に取れる。カズの義手に備えられた液体ワイヤがあれば脱出も無理じゃないしな」

高峰は疲れ切った笑みを浮かべた。

「話が逸れたな。電の方は精神的にもう限界を明らかに超えている。一度立ち止まらせないと体がもたないが、立ち止まらせると心がもた

ない」

「やっぱりか」

「この一連の事件の背景には発端がヒメの存在がある可能性が高い。戦って倒してた相手が講和を望む知的生命体でしたなんて言ったら許せない人もいるのさ。主にはそれに抗議することで自己満足したい方々だがな。で、ヒメを助けたいって言ったのは電で、電は私のせいで司令官さんがって見当はずれの自己嫌悪がノンストップ。こういう時に抑えになるようにって航暉もまとめて横須賀に呼んだつもりなんだろうが、一気に悪化しやがった。俺の言葉じゃ止まりもしねえ」

「で、俺の出番ってわけか？」

「そう言うことだ……噂のお嬢の登場だ」

電が通常業務を終え、ヒメがいる兵装実験施設を出てきたことを認めると二人は笑みで迎えた。

「天龍さん！」

「おう、電。……大丈夫か、お前。顔色悪いぞ」

「……やっぱりそう見えますか？」

「目元にクマ作ってたらそりや言うだろ。そんなんじゃ司令官が帰ってきた時に心配するぜ？」

「はい……わかってはいるのです。でも……」

「でももなにもねえ、休めるときに休む。軍隊行動の基本だ」

天龍はそう言って頭を撫でた。それを見た高峰は少し笑ってから二人の肩を叩いた。

「とりあえず河岸を変えるぞ、カズの線をたどるととんでもないもんが出てきた」

そうだけ言っただけで高峰は歩き出す。電と天龍は顔を見合わせながらついていく。案内された先は高峰のオフィスにある小部屋だった。そこには青葉となぜか杉田中佐が待っていた。

「俺までなんで呼ばれてるんだ？」

「カズの状況の整理だから。陸軍出身のお前がいた方がいいと思っ
な」

高峰の言葉に杉田は肩をすくめた。

「で、司令官の線をたどって出てきたとんでもないものって何だよ？」

「カズの経歴、かなり嘘っぱちだった」

「嘘っぱち？」

高峰がそう言うと天龍が彼を睨む。

「どういうことだ？」

「軍歴が改ざんされてるんだ。書類上は日本国自衛陸軍第二五五歩兵中隊第三強化歩兵分隊に所属したことになっているが、その証拠がどこにもない。で、カズの痕跡をたどると一件だけヒットした」

「一件だけ？」

天龍が聞き返す。部屋の中央にスクリーンが立ち上がり映像を映し出した。白い建物の壁に真っ黒な突入服を着た男たちが張り付き、窓を破って突入していく様子が映っている。

「これは？」

「2072年12月、深海棲艦発現の8か月前、場所はフィリピン、在マニラ日本大使館立てこもり事件における救出作戦の報道映像だ。この映像の1：32の地点に一瞬だけ映る」

高峰が早送りすると建物全景を映したシーンで止まった。屋上の影が拡大され、人の姿を浮き彫りにした。

「……軍用の光学ホロ被ってほぼ壁と同化してんじやねえか。よくわかるな」

「見慣れてんだよ、俺はな」

高峰がそれを拡大し、顔の骨格を航暉のデータとかぶせた。

「光学ホロの下にフェイスマスク、ホロが中和されたときを考えて対策するほど念の入れようだ。でもたとえ顔を隠していても、骨格は変えられない。照合率は97.3%、間違いなくカズだ。……この作戦には日本の対テロ特殊部隊とフィリピン陸軍の部隊が参加していることになっているんだが、どこにも航暉の名前はない。だが……」

もう一つのファイルが開かれる。

「これに関する自衛陸軍の機密資料にはもう一つ部隊が参加したことになっている」

高峰はざらつとそう言う。電の顔が引きつった。

「そんな危なそうなものを持ち出してるのです……？」

「そうじゃないと捕まらないんだよ、カズの足取りが。……続けるぞ。極秘裏に参加した部隊に正式な名前はない。そもそも存在しないはずだから当然だな」

「どんどんきな臭くなつてくくなあ。おい」

そう言ったのは杉田だ。高峰も肩をすくめる。

「途中から吐き気がしそうだったよ。日本国自衛陸軍第九師団特殊殲滅部隊、通称“ネーム―ノウエム”、非正規作戦や非対称戦のエキスパートチームだ」

「部隊名だけは聞いたことある。与太話のレベルだと思つてたんだが……」

天龍がそう言った。杉田も変な笑みを浮かべた。

「俺も眉唾物だと思つてたんだがな。天龍、お前どこまで知つてるよ？」

「日本版デルタフォース、少数精鋭の特殊技能持ちが集まつて膠着状態になった戦況を打破したり、裏で暗躍するって感じだ」

「間違つてはねえな。ノウエムは強行偵察部隊、SRとか呼ばれる任務だ。闇夜に紛れて国境を越え、相手に破壊的な攻撃を仕掛けて、再び闇に溶けるように姿を消す。……ノウエムは電子戦と陸上戦を同時進行で進める義体兵士のオンパレードと聞いていたんだががなあ」

「だが、そこにカズは所属していた」

高峰はそれを聞いて人事ファイルのようなものを開いた。

「コードネーム“ガトー”。ノウエムに参加した戦術航空管制要員だ」

聞きなれない言葉が並び、電の頭はオーバーヒート寸前だった。

「そのタック要員つてのが司令官さんなのですか？」

「カズの能力を考えてもこいつだろう」

高峰はガトーのファイルを見ながら至極真面目な顔でそういった。

「戦術航空管制要員は戦場でお目にかかりたくない敵兵トップ5に間違いなく入る。戦術航空管制要員の一番怖いところはこいつの指示

一つで攻撃ヘリや無人爆撃機、場合によっては歩兵を満載した輸送機が飛んでくるところだ。歩兵同士で張り合つてればよかつた戦場にいきなり文明の利器で殴り込みをかけてくる。相手にこいつが紛れ込んでるだけで味方の不利が加速度的に増していく。俺が相手だつたら真つ先に潰せと命令出す」

そこまで言つて溜息をついた高峰。ホログラムを切り替える。先ほどから機密資料のオンパレードだ。

「ここから先はガトーが月刀航暉であると仮定して聞いてほしい。カズが参加した作戦の中で一つ気になる名前を見つけた」

ホログラムに現れたのは何やら作戦の計画書のような書類だ。

「気になる名前？」

「情報提供及び作戦立案協力者の欄を見てほしい」

「……自衛海軍大佐、中路章人。これって！」

電が驚いた声を上げる。高峰が頷いた。

「今の中路中将だ。この時、中路中将は海軍の教育隊の教官をやっていたはずで、ここになぜこの名前がある理由がわからない」

そう言うときと高峰が振り返る。

「青葉、頼んでた情報は？」

「ちゃんと持つてきましたよー！」

青葉がホロに手をかざす。

「中路中将の経歴です。中路章人。華渤戦争時などで活躍し、後続のために一度教官として退くもフィリピン内乱への第二次PKFに合わせて前線に呼び戻されています。国連海軍が水上用自律駆動兵装の実用化に成功すると、その指揮官の第一期生として抜擢された水上用自律駆動兵装運用士官の最前任です」

それを確認した直後さらにもう一枚のファイル。セキュリティのかけ方からしてこれまでのファイルよりぐつと重要な資料であることが見て取れる。

「で、中路中将が現場復帰直前に関わっていたプロジェクト。これに関わる人物が今どんどん姿を消している」

Programmer, Y. E.
「ライ麦計画」

「中路中将に始まり、合田直樹元北方第二作戦群司令官、風見恒樹元ウエーク島基地司令、鬼龍院彰久元大尉。そして——月刀航暉大佐」

「司令官さんが、風見大佐たちと交流があつた、と言うことなので？」

「ライ麦計画は日本国自衛海軍教育隊の士官教育プログラムの一つだ。ガトー、即ちカズはどうもこれの卒業生らしい」

高峰はそう言うと言いつつライ麦計画のファイルに触れる。

「やってることは『限りなくグレーに近い黒』。優秀な人材の青田刈りを行つて、エリート教育を受けさせ軍部にとつて有能な人材を確保する。これだけなら白なんだが、洗脳に近い思想教育や実弾訓練、果てには実戦投入も行われたらしい。ジュネーブ条約も真つ青の違法行為だ」

「完全に黒じゃねえか」

「まあ、それも深海棲艦登場後の特別徴兵法で合法化されたがな。今じゃ後方部隊と水上用自律駆動兵装運用士官に限り10歳以上が活躍できるような世も末な軍隊に成り下がった。カズはそのハシリ、言うなら合田正一郎大尉の先輩だな」

天龍の声に肩を竦めて答えた高峰がファイルを消した。

「そして、問題が一つ————これまで死亡したり殺人未遂になつてたり失踪している人物の共通点として上がったのが全員一つの作戦に関わつたことだ。その作戦が……」

「サンセット作戦、です」

青葉の声に杉田が補足を入れた。

「フィリピン内乱のきっかけになつた作戦で、独立を訴えていたスーパールスタン国が秘密裏に製造していた大量破壊兵器の製造工場の情報が全世界的なネットワークから始まり、フィリピン陸軍と多国籍軍の連合部隊が現場を押しやるまで動いた作戦。フィリピンの内乱に多国籍軍が介入することになつたきっかけの作戦だ」

「それにライ麦計画関係者が何らかの形で関わっている。情報提供者として中路中将、支援護衛艦隊の指揮官として合田中将、実働部隊の

一つを率いた鬼龍院大尉。D I Hから派遣された風見大佐。そして、非公式に参加したと思われる、カズ」

高峰が視線を上げる。

「中路中将の自殺未遂や合田元中将の死が仕組まれた必然であり、カズの爆殺未遂が同一の目的で仕組まれたものと仮定すると、そのすべての線はライ麦計画及びそのメンバーが参加したサンセット作戦に集約される。俺と青葉はこの線で探ってみるつもりだ」

「探るって言ってもどうする気だ？」

「方法はいくらでもあるが……杉田、お前カズの家族構成聞いたことがあるか？」

「ないな」

「電ちゃんたちの話によると住民票に存在しない家族がいる。下に存在しないはずの双子の妹を家族としてカウントしたそうさ。」

杉田がそれを聞いて鼻で笑った。

「そりやそうだろうな。そんな非合法組織にいたなら身分も全部でたらめだろう。その人数が合わないとかザラじゃないのか？」

「カズが嘘を言うにしても、調べればすぐに嘘だとわかるようなちやちな嘘を言うとは思えないんだ。おそらく……まだハマってないピースがあるんだ」

高峰の言葉に沈黙が落ちる。その合間を警報が埋めた。

「デフコンが切り替えられました！ デフコンⅢ ッラウンドハウス”
発令！」

青葉の報告を示すように電腦にメッセージが叩き込まれる。

デフコン——危機管理の警戒度がデフコンⅣ “ダブルテイク” から一段階引き上げられたことになる。

「クエゼリン基地が襲撃、未確認種の深海棲艦によって基地を放棄つて……おいおい」

「クエゼリンってウエークのご近所じゃねえか」

天龍の声が陰しくなった。

「……ヤバそうさぞ、これ」

高峰がホログラムを映し出した。

「敵艦隊——いや、敵艦」は優雅に北上中、ウエーク基地に一直線だ」

「ガトー坊や、ちよつといいかい？」

そう呼びかけられて航暉はのっそりと動き出した。もう夜半とあって差し支えない時間帯。椅子に座って銃を抱くようにして仮眠をとっていた航暉だがすでに意識は覚醒していた、視聴覚センサー内蔵のグラスデバイスを外すとベッドで横になり寝息を立てている雷を振り返つてから扉を閉める。

「そんな防犯^{スリープレスアイ}グラスなんて使つてき、ここはフィリピンのジャングルじゃないんだよ？ そんなに寝首をかかれるのが怖い？」

「ここだからこそだ、スキュラ」

光度や赤外線の変化、一定距離内の空間の揺れを感知し電脳に直接警告を転送する防犯グラスを胸ポケットに仏頂面で差し込んだ。

スキュラと言われたその影はソプラノの声でころころと笑った。姿は雷よりも小柄でまだ年齢は一桁に見える。だがその中身はチタンの骨格や人工筋肉で構成された少女型の全身義体^{ハイスাইボーク}に身をやつした60歳超えのご婦人だというから恐れ入る。

「仲間じゃないか、ネーム・ノウエムのさ。このスーパーハッカー、スキュラの牙城たるこのセーフハウスで何を恐れることがある？」

「お前を信用するぐらいならカリオストロ伯爵を信頼した方がマシだ」

「酷い言われ様だね。せっかく助けてあげたというのに」

それについては感謝しているがなと吐き捨てるとかなり低い位置から笑い声が漏れる。その声は仄暗いコンクリート一色の廊下に長く反響した。電気屋のバックヤードだったらしいスペースはがらんとしており、いつまでも音の余韻が残る。

「この面子を信頼しているわけじゃねえ。で、要件は何だ？」

「168分前、軍のデフコンが切り替えられた」

「スキュラにしては情報が遅すぎるな。何してた？」

「リスク計算してたら遅くなったのさ。新種の深海棲艦がウエーク基地に向かつてる。捕捉できてるのは一隻だそうだ。その一隻がすでにクエゼリンを壊滅させた」

航暉はそれを聞いて目を見開き、すぐに伏せた。

「で、俺に今から軍に戻れとでもいうつもりか？」

「そんなことしたらこっちの努力が水の泡だ。だから無理」

雷よりも小柄なその少女は葉巻を取り出すとシガーカッターで吸い口を切る。

「でも、無視させるのもあれだと思ってね。私の手元には艦隊へ連絡を付けるための鍵がある。裏口バックドアの鍵だ。それを使えばあんたはウエーク基地の艦隊に割り込める。バックドア、使ってみるかい？」

スキュラはそう言うのとジッポライターに火をつける。整った顔が橙に揺れ、すぐに暗い色に戻った。

「……大切な仲間だったらしいじゃないか」

「死なせたくなえと思う程度にはな」

そう言った笑みは暗く沈み込んでいた。それを見てカカカと笑うスキュラ。

「仲間は否定しないか」

「仲間だって言ってくれるガキを否定できるほど強くないさ」

「……それは違うねガトー坊や」

スキュラの目がすっと細くなった。

「そろそろ自分を騙すのをやめるべきだ。そして贖罪としてその子たちと付き合うこともやめるべきだ」

「贖罪？ 何のことだ？」

そう聞くとスキュラは笑みをひっこめた。冷たい目が彼を射ぬく。

「あんた、ライちゃんの記憶、書き換えたね？」

「……………雷の記憶を読んだのか」

それが私の仕事だからね。とスキュラは笑う。

「妖怪スキュラの名は伊達じゃないわよ。そして、あんたの記憶も見せてもらった。恐ろしくノイズが多かったけどね」

「……………どこから枝をつけやがった？」

「それを言ったら商売上がったりだもの。言うわけないわ」

やはり笑みを浮かべてスキュラ。その瞳の色だけがどんどん暗く落ちていく。

「ライちゃんの記憶のかけらを元にその時の雷の視界情報を復元した。…………書き換えたくなる気持ちもわかるわよ？」

そこで紫煙を深く吸い込んだスキュラは煙と一緒に答えを吐き出した。

「あれはサンセット作戦の時の風景だものね。あんたがノウエムを去るきっかけになった」

「…………あの記憶を雷に植え付けるべきじゃない。あのジャングルの風景を、あの醜えた臭いを、あの火薬の味を植え付けるべきじゃない」

そう言うのと航暉は背中を壁に預けた。スキュラは彼に向き合ってその顔を覗きこむ。

「スールー Sultan 国の大量破壊兵器密造工場襲撃作戦。…………まだ夢に見るんだろう？ その兵器と戦った記憶がリフレインする」

スキュラはゆっくりと煙を吐き出した。

「…………吸うかい？」

「…………禁煙したはずなんだが、な」

自分で巻いたらしい葉巻をもらうと、航暉はゆっくりと口を付け

る。スキュラがライターの火を差し出した。

「――久々の煙草のはずがちつとも旨くねえ」

「そうかい……話を戻させてもらおうか。ライちゃんの記事とあんたの記憶からアンタの部下の情報を抽出させてもらった。電とかいう子にご執心じゃないか。何があつた?」

「……さあな。理由なんているか?」

「正解は理由がないんじゃない。理由が消された。そうだね?」

スキュラの問いに航暉は答えられない。

「……何を言っているんだ? 何を言いたいんだ?」

「生まれた町の記憶、軍属の記憶、家族の記憶、私達との記憶、電との記憶、雷との記憶。……あんた、今どこまで思い出せる?」

記憶の釜が開く。

「ごめんな、すぐ帰ってくるから。ちゃんといい子にしてろよ?」

「やだ、いけないで。置いてかないで。」

「そうだ、帰ってきたら一緒にソフトクリームを食べに行こう」

「ソフトクリーム?」

「好きだったろ? 牛乳ソフト」

「うん。……うん」

「あたしも!」

「わかったわかった、三人で行こう。俺が帰ってくるまでいい子にしてろよ?」

「うん!……やくそく」

「やくそく!」

「やくそくだ」

――暗転。

こんな子に爆弾持たせて突っ込ませるなんて、どうかしてる。ガトー。お前は悪くない。悪くないんだ。

この子も泣いてた、泣いてたんだ。それを、撃ち殺したんだ。

——暗転。

あの子は誰だ？

俺は誰だ？

どこまでが俺のキオクダ？

コノキオクハダレノキオクダ？

ノイズが重なり、視界すら浸食していく。

「……お れは……」

「しれーかん？ どうしたの？」

その声に彼が顔を向ければ、明るい茶色の髪が揺れていた。

「」。

つながってはいけない線が、つながった。

「さてガトー。もう一度聞こう。デフコンが切り替えられ、ウエーク基地に危機が迫っている。バックドア、使うかい？」

「高峰、状況は？」

「ウエーク艦隊が今代理司令の反対押し切って強行出撃。接敵まで時間もないがぎりぎり補給艦での脱出ができそうだ」

極東方面隊第三戦闘指揮室、急遽あてがわれたその部屋の壁面いっぱいのスクリーンにはたくさんの情報が並んでいる。杉田はそれをぱぱっと確認しながら遠慮なくずかずかと入り込む。

「たまたま補給艦がウエークに入ってたから良かったが、なんでウエーク艦隊は前線待機してねえんだよ」

「電ちゃんたちがいる状況でそれを言うか？ 代理司令が事なかれ主義がひどすぎて動かしてなかったんだよ」

「使えねえな」

「それでも平時は優秀だよ？」

「軍が活躍するのは非常時だろうが。非常時にカカシじや話にならねえ」

高峰の隣の席についた杉田はバックレストからQRSプラグを引き出すと自分のうなじに突き立てた。

「それでもまだマシだ。島風型が“二隻”使える」

「島風型二番艦？……微風そよかぜだったか？ たしか、第二次世界大戦の記憶に引きずられない艦娘が作れたとかいって話題になった」

「そ。その子がたまたま補給艦と一緒に行動していたからね。島風とも面識があるし心強いのは間違いないな」

高峰が笑えば杉田はそれには答えずに“鷹の眼”用のヘッドギアを装着していく。

「まあ使えたところでウエーク艦隊の指揮権がなければどうにもならないんだけどな」

「そのための秘蔵っ子だろう？」

「……対月刀監視要員だった島風の出番で指揮官を罷免ってことか？」

「今、最終確認させて……おっと、罷免申請をCSCと上層部が即時承認、これで極東方面隊総司令部に指揮権が移譲される。これで大手を振って指揮をとれる」

高峰が案外あっさり行つたな、と言つて肩を回していると通信が入つた。

《こちら島風、宮迫大佐を確保したよ》

「了解、そうしたらそのまま補給艦に放り込め。補給艦の防衛を551に任せて島風は最大船速で538に合流してほしい」

《わかつた。高峰中佐の指揮で戦うのつて実は初めて?》

通信の声に高峰が笑う。

「だろうな。俺は後方支援メインだからな。……こつちは焦つたぞ?

いきなり島風から緊急通信飛んでくるんだからさ」

《しようがないじゃん。こつちの司令が遅いんだもん。高峰司令は大丈夫?》

それに噴き出しそうになつたのは杉田だ。目だけで睨みながらも高峰は通信を返す。

「言つておくがまったく自信がない。今マークスの駆逐隊がそちらに急行中、二航戦も出港したが、間に合わないものと思え。守り切れんと思つたら咸臨丸を守りながら撤退しろ」

《りよーかい。でも、負けませんよ?》

「おう」

通信が切れると杉田はくつくつと笑いながらキーボードを高速で叩いていた。

「お前は遅いほうか? 我慢できないタイプか?」

「まずその下品な笑みを仕舞えエロジジイ。それでもこれでやつと動ける状況が整つたが……」

「……この状況になつても月刀の馬鹿は連絡を取つてこないと」

「ああ、まつたく、どこで何してるやら」

高峰がわざとらしく肩を竦めた。

「結局は動かせるのは重巡二隻と空母2隻、二個水雷戦隊か。航空部隊は?」

「龍鳳の烈風が咸臨丸と各艦隊の直掩に入つてる。利根の偵察機からの連絡は23分前に途絶えた」

「落とされたか?」

「この暗闇の中でな。正直めちやくちやな精度だ。かなり高精度の電探を積んでるらしい」

「らしいってお前、らしくないな。幻視の名が泣いてるぜ？」

そう言われて苦い顔をする高峰。

「俺でも視えないんだよ。敵が」

「あ？」

「敵が本当に一隻しか視えない」

それを言われて杉田は考え込むように黙った。

「……つまり可能性は二つだろう。高峰の目を欺けるほどのステルス戦隊か」

「120を超える艦載機運用能力と戦艦クラスの長距離高威力の主砲と片舷16門なんてふざけた数の魚雷管を備えるトンデモ深海棲艦の単騎突撃か」

「どっちがトンデモかねえ」

杉田が笑った。

「どっちにしてもやることは変わらないだろう。……利根と筑摩はこっちで持つ。鷹の目が使えるから何とかかなると思うが……」

「水雷戦隊は俺が持つ、空母は……」

「私がやろう」

飛んできた声に高峰は顔を上げ、すぐに立ち上がって敬礼の姿勢を取った。すぐ後に杉田も同じように敬礼の姿勢をとる。

「山本元帥……！ どうしてここに！」

「月刀君にはマニラで借りがあるのでな。人が足りんのだろう？ 飛燕のようにはいかんだろうがやれるだけやらせてもらおう」

「はっ！」

高峰が敬礼の姿勢のまま答えると山本は高峰の隣の卓につく。

「私が指揮に上番するのは実に3年ぶりだな。少々自信がない。全体指揮は任せるよ。高峰君」

「へ？ りよ、了解しました！」

背中に汗をかきながらも高峰は無線をオープンする。

「ホテルケベックよりウエーク艦隊、これより高峰春斗中佐が指揮を

とる」

《こちら第三分遣隊旗艦利根じゃ。自律運用を終了し指揮権を高峰中佐に引き渡す。どうすればいい?》

「捕捉できるのは未確認種一隻のみ。これを叩く。利根と筑摩は杉田中佐の指揮下に入れ、鷹の目を使った遠距離射撃で前方展開する水雷戦隊を支援。航空隊は山本元帥の指揮下に」

《や、山本元帥!?!》

無線の奥で何人もの声が被った。その反応を聞いて高峰は自分の感じる違和感が自分一人のものじゃないことを確信した。

《元帥御自ら指揮をとられるんですか!?!》

この声は大鳳だろう。山本も通信をオープンにする。

「久々で自信はないが、協力させてもらうよ。諸君の働きに期待する」
《はっ!》

そして全員が配置につく。電と天龍も管制卓についた。指揮をとることはできないのだが状況を監視する目としての役割を担う。そしてその時を高峰が見極めた。

「ターゲットマージ! 敵艦砲撃態勢!」

「こっちも射程に入った! 利根、徹甲弾!」

《了解じゃ!》

リンクした視界が明るくなった東の空を見る。一条の光が差し込むと同時。

「交戦開始!」

双方の砲が閃いた。

「しれーかんに何をしたの?」

雷は目の前の少女を睨んだ。

「なにも、と言ったら信じる?」

「まっさか。しれーかんの叫び声がして慌てて出てきたら、そのしれーかんが蹲ってて貴女がその横で笑って立ってる。物証がある訳じゃないけど、状況的にはクロよね?」

東京シテイ内廃棄区画、秋葉原地区、そこにある部屋で雷とスキュラは向かい合っていた。3階の真つ暗な部屋には小さな非常灯だけが灯っている。その隣の部屋では巨大なコンピュータがフル稼働しており少しでも電力をそちらに回すためだ。その部屋に航暉は何も言わずに入っていった。

「別に彼の精神をいじったとかそういうことじゃないわよ?」

「何をしたかって聞いているの」

「……アイデンティティ・インフォメーションって知ってる?」

「個の情報……個性を数値に置き換えて電腦で把握させるためのコードだったと思うけど?」

雷がそう言うとおレンジ色の非常灯に紫がかったスキュラの瞳が妖しく光った。

「……まさか、しれーかんのアイデンティティ・インフォメーションに何かしたの?」

「何かをしたのは私じゃない。私はそれをあるべき状態に戻したただけだ」

「あるべき状態?」

聞き返されたスキュラはくつくつと笑う。

「改ざんされてたんだよ、記憶が」

「……」

「言つとくけど私が何もしなくても遅かれ早かれあなつてたよ、彼。」

そしてこれ以上遅くにああなってしまうと、君の愛しい司令官は軍から消されるわね」

「軍、から？」

「そ。まあそうすぐ殺されるって訳じゃないだろうけどね。今軍に戻っても少しずつ狂っていくのを見る羽目になるよ？ 記憶に喰われていく様は悲惨だろうね」

「……どういふことよ」

「ライちゃんなら記憶あるでしょ？ 鬼龍院特務大尉の電腦ウイルス」

「……！」

「あれのマイナーチェンジ版。あれ、元は日本陸上自衛軍の電腦ウイルスでその亜種を掴まされていた。大本は昔私が作ったやつで、それを元に今の軍属技師がいろいろいじったみたいだけどね」

「……それがどうつながるのか全然見えてこないんだけど」

スキュラが笑う。

「あたしが製作を依頼された時の使用目的は“記憶の短絡を起こさせ相手をコントロールするための簡易洗脳ウイルス”だった。スタッフクスネット型のウイルスで使い終わったら自己消滅するように組んだから最初の侵入時に検知できなければウイルスの存在にすら気がつけない」

歌うようにそう言ってスキュラは立ち上がる。

「もし、ガトーがそのウイルスに感染していたとしたら、そしてそのウイルスの感染元が軍のサーバーだとしたら、どうする？」

「……どうするって聞くってことはしれーかんは感染してたのね？」

「うん、ばっちり。しかも“起動しっぱなし”でね。いつから起動してたのか知らないけど。私はそれを止めただけよ」

納得して頂けた？ と言ってスキュラは微笑んだ。

「なら洗脳が解けたんでしょ？ ならなんでしれーかんは……」

「どうしてあたしを無視して行っちゃったの？ かな？」

スキュラは腕を組む。非常灯の明かりは彼女の輪郭だけを映し出した。

「それをしっかり説明するにはかり時間がかるんだよね。まあ一言で言うけど……」

スキュラの輪郭がぐにやりと揺れた。笑みを深くしたのだろうか。「君と電の存在が彼にとって悪夢そのものだからだよ、雷ちゃん？」

「爆弾一発ではどうにもならんか……。CVL—ZHO2龍鳳」

《は、はい！》

山本五六元帥は小さく舌打ちをして無線を繋いだ。

「制空権何とかならんか？」

《これでも可動機全機投入しての全力です！ これ以上は……！》

「CA—TNO1利根、三式弾で防げるか？」

《やってみるが、保証はできんぞ》

「ならやってくれ。532の直掩3機を前線の支援に回せ。もう一度同じ場所を叩く」

《りよ、了解！》

高峰は涼しい顔で指示を出していく山本に内心舌を巻くと同時に困惑していた。

(なんだこの攻撃一辺倒な指示。攻めしか考えてない)

攻撃は最大の防御というような指揮にわずかに手を止める。

(艦爆艦攻の直接指揮による高精度航空攻撃……艦戦重視のカズとも違う方向性の「天才」か)

三個戦隊使って戦況は拮抗——いや、若干こちらが不利。相手の底が読めない。相手は一隻のみ、そこから航空機が発艦するのを確認し、同じ船から戦艦クラスの砲撃が飛び出し、雷撃も確認できた。「551睦月、ソナー波の解析は？」

《こちら睦月、砲撃と雷撃の嵐で海面ひっちゃかめっちゃかなんで細かいところまではわかりませんが……海中に怪しい影は無いです》睦月がそう言うとき高峰はひとり頷いた。

高峰は水中からの魚雷攻撃を警戒していた。もし潜水艦が潜んでいたとして魚雷を撃つて当てるには深度を調整しなければならぬ。その時には必ず動きが出る。その音を聞き取るのがソナーだ。そして水中探索、そこからの対潜戦闘に明るいのが睦月だ。

「了解、睦月はそのまま対潜警戒を続行。551はそのまま咸臨丸を護衛しろ」

《551阿武隈了解です！》

睦月を咸臨丸から離すことはできない。潜水艦が襲ってくるとしたら咸臨丸のような輸送船を狙ってくるだろうと予測できるからだ。その時に対潜指揮をとれる睦月が必要になる可能性が高い。

それと同時に睦月を最前線に向かわせたいとも考えてしまう。

(もつと正確な海中データがあれば……)

距離が延びれば伸びるほど、ソナーの結果は誤差を生じさせ、難解になっていく。海中の音波の進み方は反射したり屈折したりと一定ではない。それを修正することは非常に難しい。

(それでも、何とかするしかないよな)

ひとりそうこじると高峰は意識を前線に戻した。同時にチリツとした痛みを感じる。誰かが被弾した。非常用スイッチがまともな^{フラット}非常用パネルにあかりが灯って、リンクのセーフティが起動したことを告げる。リンクのチャンネル3—4。これは——

「島風！」

セーフティを無視して感度を最大まで上げる。それでも繋がるはずの戦術リンクの反応はフラットな波形を返すだけだ。戦域を示した海域図からも島風のシンボルが消え去っている。高峰の手が強く

強張った。

ロストコンタクト

行方不明。いや、これは敵艦の攻撃による撃沈の可能性が高いか。
「落ち着け高峰、てめえが焦ってもどうにもならねえ」

落ち着いた声でそう咎めるのは杉田だった。鷹の目用のヘッドデバイスを付けたままそう言うって引き金を引く。敵艦に向かって吸い込まれていく砲弾は過たず敵艦にあたるが、わずかに敵を揺らしただけだった。

「くそ！ 微風！ 島風は見えるか!？」

《こちら微風、お姉ちゃんは……え？》

通常無線に一気にノイズが走る。

「微風、おい！ 誰でもいい、538応答しろ。おいつ!？」

高峰の焦った声が戦闘指揮所にこだまする。同時に警報が鳴り響いた。

「不正規アクセス警報!？ なんでこんなタイミングでハッキングされるんだ!？」

同時にマップから指揮下にあつた艦の情報がどこかに転送されていく。転送された艦から通信回線がクローズに移行されていく。微風、暁、響、龍田、利根……。

「おい、どうなってる？ 戦術リンクの通信コードが書き換えられているぞ!？」

「俺が知るかよ!？ ハッキングの迎撃が追いつかない」

高峰は叫びながら予備回線オルタネートを開き、部隊のリンクを取り戻そうと試みる。そこに山本の声が割り込んだ。

「高峰君。クラッカーの迎撃はできるかね?？」

「迎撃よりも艦娘との指揮系統を奪われないことを優先します!？ このままじゃ、艦娘全員乗っ取られる!？」

「了解した、現在使用しているコンピュータ群ネットワークを独立運用に、CTC、CSCオフライン」

「助かります」

高峰は短く答えてからキーボードを叩く。

「杉田、一度オフラインにしろ! 全員乗っ取られるぞ」

「了解。オフライン」

「なんだこの尋常じゃないパワー、デカトンケールクラスのスパコンがバックにいるぞ。個人レベルでできる攻撃じゃない」

防壁の再構築も間に合わない。

「防壁042突破つてことはネットワーク丸々乗っ取る気がクソつ！」

「高峰中佐！ 電がハックされてる！」

前方にある予備の管制卓から声が上がった。天龍の慌てたような声に交じって、少女の呻き声がかすかに響く。

「だめ……しれいか さ……」

「コードを引き抜け！ 早く！」

「ダメっ！」

電が叫ぶのとほぼ同時、天龍が電のうなじから伸びるQRSコードを引き抜いた。同時にスクリーンが一瞬ブラックアウトし、消える直前の画面が戻ってきた。しかし全艦のコントロールが奪われていた。

航空隊が作戦を開始するように動き出す。数機の烈風が恐ろしい勢いで加速し、一気に敵機の陣形を崩し、蹴散らしていく。

「まさか……」

無線は途切れ、戦闘の推移だけが送られてくる画面をただ茫然と見上げる高峰。あれは、あの動きは……。

「カズ……っ？」

「……しれーかん」

ドアを開けて出てきた彼を見て雷はただそう言うことしかできなかった。

「終わったかい？」

「ああ、とりあえずはな。島風が沈みかけてたが何とか安全圏まで逃がすことができたよ」

「よくやるね」

スキュラがどこか呆れたような賞賛を送る。

「まあ、その代償としてこっちの位置が割れた訳だけど、どうしてくれるんだい？」

「わざと通したくせに」

航暉はそう答えると肩を竦めた。スキュラはそれには答えない。

「……しれーかん、しれーかんよね？」

ふらふらと航暉の方に歩いてきた雷は彼の服の袖をきゅつと握った。彼は彼女の質問には答えない。

「しれーかん、なにがあつたの？ 辛そうなしれーかん見てるのはもういやだよ」

それを聞いた航暉がそつと膝をついた。雷の肩に右手を乗せる。

「大丈夫だ、大丈夫だから安心しろ」

「うそだよ、しれーかん無理してるもん。少しか聞いたよ、記憶書き換えられてたんでしょ？ ずつと戦ってきたんでしょ？ しれーかんもうボロボロじゃない……！」

彼の顔から表情が抜け落ちたように見える。その顔が歪んで雷は初めて自分が泣いていることを理解した。

「私がいるじゃない、しれーかん。お願いだから、お願いだから一人で行こうとしないで……！」

「大丈夫だ、雷。一緒にいるから」

そう言つて航暉はそつと彼女を抱きしめ、動きを止めた。

「し、れ……か……！」

「電によりしく伝えてくれ」

首の後ろに回った手を外すと雷の体からかくんと力が抜けた。袖の内側を通したQRSプラグがその手元に光る。雷の体はロックされ彼にもたれるように倒れ込んだ。航暉は雷を壁にもたれさせるようにそつと座らせるとその手に何かを握らせた。国連のマークに錨を重ねた国連海軍の徽章だった。

「……行くのかい?」

その背中に声をかけるスキュラ。その声は慈愛の色が感じられた。彼女は持っていた

アタツシケースを彼に投げ渡す。

「今日の2230、横田から北京経由でクラークエアベース行きだ。国連空軍の函南少尉殿?」

アタツシケースの中身を見ると空軍の制服に軍IDやミツシヨナンバーまで交付された異動命令書などが収められていた。IDには函南友一とある。

「クラークに下りたら私の弟子が待っているはずだ。頼るといい。武器ぐらいは入手できるだろう」

「恩に着るよ、スキュラ」

「……この子は置いていくんだね?」

「ああ」

「……それでいいなら何も言わないさ。動くなら早めに動きな。猛スピードで軍の検問を抜けた車がある。到着まであと15分つてところだろう。おそらくあんたのお友達だ」

航暉はそれに答えずに停止したエスカレーターに足を乗せる。

「ガトー」

呼びかけられて振り返った。

「記憶と思い出を分かつものはない。そしてそれがどちらにあったにせよ、評価されるのは後になってからのことだ。あんたの記憶が導き出した行動が評価されるのはずっと後のことだ、あんたにはそれを背負う義務がある。……それまで死ぬなよ」

それには答えずに航暉はエスカレーターを降りて行った。

「さて、最後の詰めだ。後は頼むよ、スクラサス」

東京はようやく日の出の気配が近づいてきた。スキュラはラツカーのスプレー缶を取り出すと雷が背にする壁に大きく書きつけた。

B—P

「さて、高峰君は止められるかね、これを」

あたりの電気が落ちる。スキュラの背中はどこか寂しそうだった。

Manila Clears Nightmare

「ふふ、きつと部屋は散らかってるのかしらね」

鳳翔はマニラ湾ダニエロアチエンザ地区の国連軍パースに足を向ける。何とか帰ってきた。所用で横須賀に行っていた帰り、疲れ切っていたが気を抜けない。湾内とはいえ夜間で単独航行だ。何事もなければいいと思いつながら進んでパースを見てほっとした。司令官室がある司令部棟にあかりがともっている。まだマニラ基地の司令官である浜地中佐は仕事なんだらう。相変わらず多忙な司令官だ。

艦娘専用の出撃ドックに進入、艦装を外して整備を担当してくれる特務技官と妖精たちに艦装を託すし陸に上がった。その足で司令官室に報告に向かう。ほぼ一カ月近く司令官には会えていなかった。気分が弾む。

すでに常夜灯に切り替わっている時間。非常口の明かりが眩しい廊下を歩いて司令部に向かう。

「……!」

「……!」

司令官室から何か話声がする。一つは皐月だと思うが、もう一つは誰だろうか？

「浜地ていと……く!？」

ゆつくりと中を覗いて慌てて飛び込んだ。中にいるのは目的だった浜地中佐とその秘書艦で、彼を守るように立つ駆逐艦皐月。向き合っているのは開襟の国連軍の制服を着た——女性左官。

「あ、あなたは……笹原中佐!？」

「ああ、鳳翔さん。お騒がせして申し訳ない」

そう言うのと笹原は笑う。皐月はそんな彼女を睨んだままだ。

「だから、なんだっていうんだ! 司令官が悪いことをしたのか!？」

「悪いことだとは一言も言っていないよ、皐月。ただ、彼の記憶に少し用があるんだ。どうしても思い出してもらわないといけないことがある」

終始笑顔の仮面の裏で、笹原がぞつとする声を出している。それを見た鳳翔は戸惑うだけだ。

「なにが、あつたんですか。浜地司令に何か御用時でしょうか？」

「うん？ 用事といえば用事よ。もつとも、軍の正規のお願いじゃないけどね」

「……正規の命令じゃない、個人的なお願いというわけですか？」

「理解が早くて助かるわ。でも外れ」

そう言うとき笹原は笑った。

「日本国の準法的機関からの協力要請、つてことにしといて」

「だから、司令官をそんな怪しいことに——！」

「文月」

その言いぐさに反感を抱いた皐月が前に出ようとする。それを小さな影が止める。

「——っ」

「いくら皐月ちゃんでも司令官に手を上げようとするのは許さないよ」

茶色の長いポニーテールを揺らして、文月がそう言った。手に持っているのは——旧式のリボルバー、S & W M36レディスマス。両手で真正面に構えるその銃口は正確に皐月の右目を狙っていた。

「笹原中佐、あんた……！ そんな小さな子に何を持たせてるんだ！」

それを見た浜地が激昂する。それをどこか優しい笑みで受けた笹原が腰に手を当てて俯く。

「そこに怒るのは非論理的だ。普段水上用自律兵装運用士官は艦娘たちに砲を持たせ、深海棲艦を排除するように命令を下している。使っているのが銃か砲かの違いだ。普段の行動とどう違う？」

「だからって……！」

「だからって、なにかかな？ 人類を守るために化け物を排除するのは奨励し、実際に指示をだせるが、自己防衛のために銃を握らせることは下劣で許されざる行為とでも言う気かな？」

そう言うときとすうと目を細める笹原。

「その理論、深海棲艦が消えた後、艦娘たちに振りかざされる理論だつて気がついてるよね？ 化け物を殺すために人間は人間に従順な化け物を生み出そうとした。残されるのは化け物を殺せる化け物……その化け物を人間は野放しにできないだろう？」

痛い沈黙が下りる。音がないと言うことがこれほど辛いことがあるのかと思ひながら皐月は銃口を、正確にはその後ろにある文月の表情を忘れたような目を見つめた。

笹原が溜息をつく。そうしてからああ文月、と声をかけた。

「もう銃は下ろしていいよ。ごめんね、友達に向けさせちゃって」

「司令官に必要なんでしょお？ ならしよやないよ」

「文月……」

皐月がどこか慄いたような視線を送る。その先には屈託なく笑う文月の姿があった。

「それが人にものを頼む態度でしょうか、笹原中佐」

鳳翔はそう言って浜地の隣に立った。

「私にはただの恫喝にしか見えないのですが、少なくともこちらの納得のいく事情を申し上げて頂けないことには、犯罪行為と判断せざるを得ません」

鳳翔は一步前へ。浜地を笹原の視線から守る位置に立つ。

「お話頂けないのであれば、どうぞ今夜はお引き取り下さい」

それを聞いた笹原が口角を吊り上げた。

「——Program R.Y.E.ライ麦計画、聞き覚えは？」

浜地は答えない。正確には答えられない。鳳翔の後ろに立ったままの浜地の顔を見て笹原は答えを得たと笑った。

「答えたくても答えられない、なぜならそれを聞いたことがあるかどうかすらわからないから、そう言いたい表情ね」

「何を言いたいかさっぱりわからないよ。笹原中佐、ボクの司令官に何をしたいんだよ」

皐月がそう言うが皐月に目を向けなまま笹原が言葉を続ける。

「正確には貴方は聞いたことがあるはずよ。そして記憶を消された——

——貴方のすべての記憶と一緒に。違う？」

「な、なにを……?」

驚いた顔で固まるのは皐月だ。鳳翔の声が震えた。

「て、提督……? 笹原中佐、あなたは何を……」

「母親の顔、生まれた町の風景、怒られたこと、友達とのくだらない喧嘩の理由。何か一つでも覚えてる?」

「……」

「そしてここにはそのカギがある」

笹原は外部記憶装置インフォメーションキューブを浜地に投げ渡した。

「司令官……ほんとうなの?」

浜地は答えない、笹原をじつと睨んだまま時が過ぎる。

「協力の強制はしないわ。でもその記憶はその彼女と無関係じゃない。正確には彼女たちと無関係じゃないってのは覚えておいて」

「……そこまでの理由は何だ?」

浜地のそんな声を聴いて笹原は笑った。

「人助け、かな? とりあえずその中の情報を見てから決めな。話はそれからだ」

「あなた……何者ですか?」

鳳翔の声に笹原は笑った。

「笹原ゆう……まあ今はスクラサスって呼んでよ。それ以上は知らない方がいいよ? 日本国内閣情報準備室ケースオフィサーの作業員の身の上話なんて知らなくたって生きていけるからね」

「全員そろったな。作戦会議を始めよう」

高峰がそう言うのと部屋の電気が落とされた。中央にホログラムスクリーンが立ち上がる。部屋には高峰のほか、杉田、天龍、青葉、電。そして廃墟の電気店から救出された雷が詰めていた。

「とりあえずカズの今のバックが誰かかってことだが、おそらく今は日本政府のサポートを受けているとみて間違いないだろう」

「お前の仕事の筋つてやつか」

杉田がそう言うのと高峰は頷いた。

「カズが『戦艦レ級迎撃戦』へのハッキングに使ったサーバーは内閣情報準備室ICIRのもとみて間違いない」

そう言うのと人事ファイルらしきものが表示される、顔写真が表示されるべきところにはただの空白が浮かぶだけだ。

「高坏濤、日本のインテリジェンスネットワークの中では重鎮クラスICIRの諜報員だ。高度なハッキングスキルを持つ全身義体の婆さんで義体をとつかえひつかえ入れ替えながら作戦を行うことからついた異名は『怪物スキュラ』。どっかのスーパーコンピュータのAIじゃないかという説もあるが、おそらく人間だ。雷の証言と廃ビルに残されたハードディスクも彼女の関与を裏付けている」

「で、そのビルに司令官と雷は約一週間潜伏していたが、ハッキングの後、雷と司令官の国連海軍章を残して残りのメンバーが失踪、ほぼ丸一日たった今も行方不明……だな」

「そういうことだ」

天龍の声に頷いた高峰の向かいで雷が俯いた。

「で、その現場に残されていたのが……」

現場検証の時の映像が投影される。

「真つ赤なスプレー塗料でB―P……。Be Preparedの略つてことで本当にいいんかね？」

杉田がそう言うのと高峰は頭を掻いた。

「警戒せよつて言われてもって感じた。その対象を暗示してくれば楽なだけどね」

「B―Pだとボーイスカウトって線が出てきませんか?」

青葉の声に杉田が頷いた

「ボーイスカウトやベーデンパウエル卿関連だと。本って可能性もあるんじゃないか? スカウティング・フオア・ボーイス 少年のための斥候術や成功への旅路ローバリング・トゥ・サクセスって線もあるな」

「……杉田、詳しいな」

「小さい時にやってたんでな」

杉田はそう言うとおどけた敬礼をした。肘を水平横に出す陸軍式の敬礼だが、三本指を広げた姿勢での敬礼だった。

「あつ……!」

「どうした電嬢?」

「その敬礼……夢で見た司令官さんと同じ敬礼だなんて……」

それを聞いた司令官二人が目を見開いた。

「三指の敬礼をした……?」

「月刀がボーイスカウト関係者ってことか?」

「電ちゃん、カズがそんな敬礼をしている所を見たことは?」

「な、ないのです……」

「だが、ありえなくはないぞ。雷嬢の話だと、月刀には電腦ウイルスが仕込まれていたって聞いている。記憶を短絡させて洗脳状態に置くなら一度大きな出来事を読みこむはずだ。それを電に共有してたとしたら」

「そんなこと、あり得るか?」

高峰が胡乱な目を向ける。

「今更あり得るあり得ないなんて議論をする意義は無いだろうさ。確かめるべきだ」

「それはそうだが……カズの経歴をたどってもあてにならないぞ」

「なら骨格データなりPIXコードを使えばいいだろう」

「幼少期の骨格データなんてどこで手に入れる気だ?」

「予測を立てればいい」

「……ともなげにそう言って杉田は笑った。

「おいおい、そんな技術を持つ人物に心当たりなんて無いぞ?」

「あ？ 何だ高峰、知らなかったか？」
くつくつと笑った杉田は肩を竦めた。

「『明鏡』がいるじゃないか、第597潜水隊の渡井慧がいる。あいつは元々三菱電工……今の三菱インダストリアルホロコーデイネーター、ホログラムのプロだぞ？」

「無事入国おめでとう、函南少尉」

「……やっぱりあんたか。スキュラの愛弟子ってのは」

函南と呼ばれた航暉が車に乗り込むと運転席に座った女性がケラケラと笑う。

「丁稚みたいなもんだったんだけどね。さて、今はなんて呼ぶべきかな、カズ君？ やっぱりガトー？」

「……好きに呼べ。そう言うお前はなんて呼べばいい？ 笹原ゆう」

それを聞かれた笹原が車を発進させた。

「笹原ゆうでもいいんだけどね。スクラサスって呼んでよ」

「……化物の娘はやっぱり化物か」

「娘じゃなくて孫ね。……まあ、どっちでもいっしょか。あたしたち裏の人間に出自もへったくれもありやしない」

笹原は笑ってハンドルを左に切る。

「あんたもそうだったんだろう？ パワーゲームに翻弄され、それでも自分で生き残らなければならなかった。その中で身に着けたのは、

人脈と、資金力と、殺しの力」

荒れた町並みにはどす黒い煙と白い炊事煙とが入り混じっている。航暉はそれを見ながらぼうっと話を聞いていた。

「あなたのことは調べてたからね。華渤戦争直前の泥沼お家騒動の後、いきなり現れた月刀家の次男坊。これまでは存在しなかったはずの存在、養子にとられたという記録すらなく実子として認可されていた月刀航暉は何者か……」

道端で泣く子供たちを一瞥して笹原は車をそのまま走らせる。

「月刀家……月一族は軍事政権化してしまった日本国にとって強大な影響力を持つ。その力をまとめ月一族が日本の実権を握ろうと決起した……陸軍四・二六事件」

ハンドルを握る笹原の顔は終始笑顔だった。

「……あなたが出てきたのは陸軍四・二六事件の直後だったわね。そして表舞台に出ることなく闇から闇へ」

ハンドルを右に、葬儀の列に出くわしてブレーキをゆっくりと掛ける。

「その中で生きぬくことができただけであんたの有能性は証明される」

「……いろんなことを覚えて、鞭のように鋭い切れ者になったって、それで仕合せになれなかつたら、一体何の甲斐があるんだろう」

「——J. D. サリンジャー、『フラニーとゾーイー』」

つぶやいた一文に笹原はくすりと笑った。

「それでも、あんたは生き残らなきゃいけなかった。だからいろいろなことを覚えていった。誰かの敵にならない技術、それもアクティブなやつだ。そして敵になりそうなやつは……」

「消していった」

「違うね、消えていったんだ」

しばらく沈黙が続く。

「ねえ、カズ君。行くんでしよう？ あの工場」

「ああ」

「荷は何がいる？」

「タクティカルショットガン一丁とM93R二丁、サブマシンガン一丁、リーパー数機、マチェット二振り」

「リーパーはそろえるのに時間がかかる。3日待てる？」

「ああ……」

笹原はそれを聞いて上々と笑った。

「ねえ、カズ君」

答えはない。

「好きな人を捨てるって、どんな気持ち？」

「……何も」

「そっか。うん」

その後しばらく間が空いて

「そうやってあんたもあたしも生き残ってきた、そうだね？ 月刀航

暉、いや——月詠航暉」

寂しそうにそう言った。

「いた！ コイツだ！」

渡井から届いた復元ホロの骨格データを照合し、一人の少年の姿が浮かび上がってきた。高峰が興奮気味にデータを読み上げる。部屋には高峰と青葉、杉田が詰めている。

「月詠航暉！ 北陸州金沢出身、ボーイスカウト北陸支部に所属した

経歴がある。享年12歳、行方不明からの死亡扱い。砺波ジャンクションでの交通事故に巻き込まれたとみて死亡扱いになってる」

「確かこの事故って……ああ、そうだ」

事故のデータを国交省の記録から呼び出した。

「化学薬品を積んだタンクローリーがジャンクション内でスリップ、ガードレールを突き破って下を走る道路に落下して大破炎上。死体すら強酸で溶けきったやつだ。現役の空将補が巻き込まれたんでテロだと週刊誌が騒ぎ立てた。これで月詠家の当主が死亡し、後継者もなくなつたはずだった」

「だが、月詠家の長男は月刀航暉に名前を変え生き残った」

「三文小説もびつくりの展開ですね」

青葉がそう言うとき高峰は小さく頷いた。

「……これでカズの言葉の意味も分かった」

「え？」

「電に下に双子の妹がいると電ちゃんたちに話していた。月詠家は一男二女、長男航暉の6つ下に双子の姉妹がいる」

「この二人も行方不明からの死亡扱いか。……生きてる可能性も出てきたな」

それを聞いた高峰は黙り込んだ。

「……問題は、だ」

「……なんで電はカズがボーイスカウトに所属していることを知ってたんだ？」

重い沈黙が落ちる。

杉田が踵を返した。

「どこに行く気だ？」

「前から気になってたことがある」

「なんだよ？」

「青葉」

「はい？」

呼びかけられて青葉は首を傾げた。

「お前らのアイデンティティ・インフォメーション、どうやってできて

るか知ってるか？」

「それは……前に存在した艦の記録を記憶に見立てたうえで個の情報を合成して……」

「なら微風は？」

「微風ちゃん、ですか……？」

「島風型二番艦の微風のアイデンティティ・インフォメーションは何からできている？」

「あ……」

クルリと振り返った杉田は高峰を見た。

「微風の艦としての記憶は存在しない。島風型は島風一隻のワンオフだったからだ。艦の記憶を合成する理由は艦娘用の艀装システム、^{フェアリー}妖精が開発した艀装を使うにはそうするしかなかったからだ。それを量産できるようになったとしてもそれは変わらなかったはずだ。なら、なぜ微風が存際するんだ？」

高峰はそれに答えられない。

「水上用自律駆動兵装の開発には明らかに矛盾がある。艦娘の電腦に収められているのは艦の情報だけじゃない」

「——艦娘の個アイデンティティ・インフォメーションの情報に“オリジナル”が存在する？」

「それなら、それが電の夢の理由なら、筋が通らないか？」

杉田がドアを開けた。

「知ってそうなのやつに心当たりがある。……手分けをしたい。高峰、お前は中路中将のところに行ってくれないか？」

「その根拠は？」

「中路中将は艦娘に最初期から関わっている。知っていてもおかしくない。……そうしろって囁くんだよ、俺の勘が」

「それで、C I R O が今更俺にどうしろって言うんだ？」

マニラのぼろアパートの一室で浜地がそう言うのと笹原が振り返った。

「国連海軍の方針だと日本国の貴重な人材がすり減らされる。それに危機感を持ったって訳よ。そして」

「公になる前にライ麦計画を抹消したい、だろ？」

「ご名答。聡明なあなたのことだから気がついてるでしょ。ライ麦計画の裏、そしてサンセット作戦で確保されたスールースルタン国の基地で何をしていたか」

「……日本は、いや国連がスールースルタン国を利用したんだな？」

「そう言うことね。もつともフィリピン内乱は世界にとってはちやうどいい戦争になった。戦争の連続で荒れに荒れた世界規模の産業構造を修復するため、戦争による特需と、わかりやすい正義を必要としたんだよ。戦後の政権の正義を見せつけるための戦争。スールースルタン国は大量破壊兵器を作っている悪いやつらだ。だからみんなで剣を取って平和な世界を取り戻そう！ 戦争で傷ついた人を助けるために、さあ、みんなでパンを作ろうってね」

それを聞いた浜地は似合わない皮肉な笑みを浮かべた。

「それを仕組んだのはお前らガバメントの奴らだろう」

「そうね。否定しないわ。戦争を終わらせるためという名目で大量の武器を持ち込んで戦場を泥沼化させる。同時に大量の食品などの支援物資を送ることで一般産業を活性化させ、お金を回す。日本を中心に数か国がフィリピンの内乱を使い捨ての独立戦争にした」

酷い話よね？ と笹原は笑った。

「そうやって東南アジアを利用してきたからこそ、今の日本は地位を

占めている。だからこそ、この現状を変えなくちゃいけない」

「このシステムが公になった時のために、か？」

「そう。ライ麦計画はもう止めることのできないゲームになってしまった。だから本当に手を付けられなくなるまえに手綱を握らなければならぬ」

「ゲーム……だと？」

浜地の手が強張った。

「そのゲームのせいで何人死んでいった？ そのゲームのせいでどれだけの子供たちが戦うことを強いられていると思ってるんだ？」

「だからこそ、だよ？ 今止めないと次から次へと新しい子どもたちが戦争に送られる」

「……、やっぱりお前はいかれてる。笹原ゆう、お前は、ひとでなしのくそ野郎だ」

それを聞いた笹原は額に手を当てた。弾ける笑い声。彼女の首が触れ、顔は天井を向いた。

「いいね、いいねそれ！ やつと本当のことを言ってくれる人がいたよ。そんな言葉を久しく聞いてなかった」

手がのけられて戻ってきた笑みはぞっとするような狂気に満ちた笑みだった。

「それなら止めて見ろ、このクソツタレな現実とこの軍隊を止めて見ろ、浜地賢一。お前にはそのためのピースを持っているはずだ」

《どうなってる!?!》

高峰の脳通信が響いた。青葉が焦った声を上げる。

《中路中将は病室から消えて、古鷹が、古鷹が……!》

青葉の視線の先では古鷹が自分のこめかみに拳銃を突きつけ涙を流していた。

「ごめんなさい……ごめんなさい……!」

「馬鹿野郎っ!」

その怒声が響くと同時に高峰が青葉を押しつけるように飛び込んだ。そのまま高峰は古鷹の懐に飛び込むと肘鉄を叩き込み、彼女をベッドに叩きつける。うつ伏せに倒れ込んだ彼女に半ば馬乗りになる様に抑え込み後ろから頭を鷲掴みにするように抑え込んだ。

「な……何してるんですか!?!」

「あんなん時間稼ぎだ! 殺す気ならとっくに死んでる!」

左手で自分のうなじからQRSプラグを引き出すと彼女に直結する。

「古鷹の脳に誰が潜りこんでんのか、ここで確かめる!」

そう言った次の瞬間に、高峰の意識は真つ黒なキューブの前に立っていた。

「久々かしら、高峰君」

「——怪物スキュラ、やっぱりあんたか」

「あんたとは失礼ね、私を呼び捨てにする貫禄を何処で拾ったの?」

「世話になりこそしたが、病院を爆破したり、仲間の脳をハッキングしたりするヤツにつける敬称なんてあるかよ」

「あ、やっぱりばれてたんだ。あの病院の自走爆弾を送り込んだのが私だって」

「カズの病室に入ってから天龍の骨格に仕込まれた爆弾が爆発するまでの時間が長すぎる。あんな殺す気のない爆発だとカズを軍から引き離すのが目的としか思えない。そうだな?」

真つ黒なキューブがくるくると空中で回る。音声はそこから聞こ

えていた。

「あら、わかってたんだ。まあ当然か」

キューブが回転をやめた。ピタリと止まった後、上がぱかりと開く。周囲の色合いが変化した。同時に何人もの姿が投影される。

「え、なに!?!」

「お、お姉ちゃん……?」

投影されたのは雷電姉妹に天龍、青葉だ。

「……見事に枝を付けてたってわけだ」

「御足労頂いて悪かったわね。そしてライちゃんは2日ぶりかしら?」

「その声……スキュラね?」

「そうよ。会えてうれしいわ」

キューブがぐるぐると回る。それを雷は胡乱な目で見ていた。

「しれーかんは今一緒にいるの?」

「ああ、そうか。ライちゃんは視覚情報まで完全にロック掛けてたんだもんね、見えてないか。ガトーならもう日本にいないよ。昨日の夜無事出国したわ」

「それならどこにいるのです?」

「まあそう話を焦らなくてもいいだろう、デンちゃん。あんたの司令官は少なくともあと二日は行動を起こせない。向こうでの武器を手に入れられないからね」

キューブが半回転して空中を滑っていく。付いて来いという気持ちいい。

「さて、君たちはガトー……月刀航暉という人間についてどこまで知ってるかな?」

キューブはそう言うのと裏返る様に一度展開し、すぐに立方体に戻る。正確には裏返ったのだ。黒かったキューブの色が今度は白に切り替わる。

「……カズは元々月刀家の傍系、月詠家の人間だった。下には双子の妹が二人、家族全員が砺波ジャンクションの交通事故で死亡したはずだった。だが、カズは生きていた」

まあ及第点かなという周囲の白一色の空間が歪んだ。カメラがパンするように映像が切り替わる。

「ガトーの脳から抽出した記憶にクリーニングをかけたものだ」

濡れ羽黒の髪をした和服の女性に連れられた少女が二人、年齢的には5歳か6歳ぐらいだろうか？ 一人の女の子はすでに半泣きであり、もう一人の女の子の方もどこか悲しそうにしている。その二人の前にしやがみ込む少年の姿も見える。

「あれ、この風景って……！」

電の声を無視するように少年は少女の二人の頭を撫でて立ちあがる。

「ごめんな、すぐ帰ってくるから。ちゃんといい子にしてろよ？」

オレンジ色のネツカチーフを締めた少年がいう。離れようとした少年を引き留めるように半泣きの方の少女がその袖を引いた。

「やだ、いけないで。置いてかないで」

もうひとりの少女も頷く。それを見た和服の女性が苦笑いをした。「弱ったなあ……、僕はそろそろいかなんといけないうだけ……。そうだ、帰ってきたら一緒にソフトクリームを食べに行こう」

「ソフトクリーム？」

少年は腰をかがめて本格的に泣き出した少女の頬に触れる。ピクリと全身を震わせた少女を見て少年は頬の涙の跡を親指でぬぐった。「好きだったろ？ 牛乳ソフト。街にでてき、本屋さんとか回って、ソフトクリームを食べにいこう」

「うん。……うん！」

「あたしも！」

「わかったわかった、俺と雪音と琴音の三人で行こう。俺が帰ってくるまでいい子にしてろよ？」

そう言うと、皆が笑った。……この場にはいないはずの高峰たちの表情が険しくなっていく。

「うん……やくそく」

「やくそく！」

「約束だ」

直後、明転。その風景が消え去る。宙に浮いたキューブが上機嫌そ
うに笑う。

「どうだい、デンちゃん、ライちゃん。見覚えはないかい？」

「なんだか電ちやんたちがカズの妹だったって言いだけだな」

そう言うときューブが一段と早く回った。

「だとしたら、どうする？」

「P
R
O
J
E
C
T
I
D
A水上用自律駆動兵装開発計画なら少佐以上の権限があれば閲覧可能
だったと思うが、わざわざ私に聞くことかね？」

山本元帥がそう言うってレンズの小さな老眼鏡を外した。執務机を
挟んで立つ杉田を見据える。

「申し上げたはずです。私が聞きたいのはライ麦計画の裏で進められ
ていた方の水上用自律駆動兵装計画です」

窓から差し込む光は日が沈んだことで消え去り、暗めの室内灯だけ
が灯っていた。

「話が見えないね。ライ麦計画といえは……」

「P
r
o
g
r
a
m
o
f
R
e
s
e
r
v
e
d
Y
o
u
n
g
s
t
e
r
o
f
f
i
c
e
r
E
d
u
c
a
t
i
o
n日本国自衛軍の教育プログラムの一つ、
予備青年士官教育プログラム。だがそんなちや
ちなもんじゃなかった。違いますか？」

目の前の元帥は顔の前で手を組んだ。

「ライ麦計画は極秘裏に進められた。理由は未成年の優秀な人材を青

田刈りし、それを優秀な士官に育て上げるという手法ゆえ、ジュネーブ条約に触れる可能性があったから……そうですね？」

「高々中佐程度の権限でよく調べたね。その通りだ」
「嘘だ。なぜならばライ麦計画の本来の目的は優秀な人材を集める隠れ蓑に過ぎないからだ」

言葉遣いが粗雑なものに切り替わる。杉田は片足に体重をかけ姿勢を崩した。

「俺はもつと早く気がつくべきだった。月刀と俺は硫黄島のあの司令部で気がつくチャンスがあった。そして高峰も気がつくチャンスは平等にあつたんだ」

「ほう、なににかね？」

「銀弓作戦やマニラの観艦式で問題となった通信システムの脆弱性とそこに仕組まれたバックドア。あれは意図的に残されたもので、そこから俺たちの通信パターンが盗まれどこかに転送されていた」

「転送先はどこだかわかるかね？」

「フィリピンのルソン島山間部やキスカ、……違うか？」

山本はニヤリと笑う。

「だからどうしたというのかね？ ……非公開ラインがあつたところで軍規には反していない？」

「ああそうだな。軍規には反していない。だがそれをあんたの口から利けるとは思つてなかつたよ。『ホールデン』！」

「彼」が笑つた。その額に銃口が向けられる。

「Program—R. Y. E. ……もつと早く気がつくべきだった。J. D. サリンジャーの『キャッチャー・イン・ザ・ライ』——
——ライ麦畑でつかまえて。ライ麦計画の本当の目的は自律駆動兵装を救う指揮官ホルデンの養成にあつた、違うか!？」

「彼」が肩を揺らす。だんだんと振れ幅が大きくなり、最後には大声で笑い出した。

「——おめでどう杉田中佐。君はやつと答えに行きついた訳だ」

「……こんなことは信じたくなかつたがな」

「行きつくとしたら君か月刀君だと思っていたよ。君は中路の元に長いこといたからね。ライ麦計画について知っているならわかっているでしょ？　中路がなぜ月刀君に固執するのか」

「……罪滅ぼし」

「その通り、笑つちやうよね。高々一枚の書類にサインしただけなのにさ」

「そこまで欲しかったのか、月刀の頭脳が」

「正確には彼じゃない。本当に用があったのは彼の妹たちのほうさ」

「そんなに驚くことかなあ、これ」

キューブは笑う。

「おかしいとは思わなかったの？　どうして水上用自律駆動兵装なんて兵器に感情なんてつけたのか。兵器は兵器だ、そこに感情なんて機能を入れてしまえば、その兵器の運用者は兵器に情が湧く。それは明らかに不利なはずだ。理由は単純、機能を付けたんじゃない、排除できなかつたんだ」

キューブはくるくると回る、再び反転、今度は黒だ。

「自律駆動兵装って名前はね、艦娘が生まれる前、まだ深海棲艦が生まれる前から存在していた。戦争なんて機械にやらせて人間サマはそれを遠くで高みの見物ってわけね。その構想は20世紀から生まれ

ていた。それを推し進めた発展形、それが自律駆動兵装だ」

キューブがクルリと回れば周りの風景が変わる。今度は白い部屋だ。

「高峰君は見覚えあるんじゃない？ これと同じのがキスカにあったから」

「日本国の電腦実験施設……」

「そうね。笑えるでしょう？ こんなものを国外にいくつも作ってたんだから。日本の札付きODAに使う物資ってことで持ち込んだものがこんな形で使われてたんだから」

「違法人体実験用の施設か、笑えねえな」

「そうね。電腦化によって生じる弊害を洗い出し、その抗体ワクチンを作成すること。普通ならそうだった。でも自律駆動兵装開発においてはちがう。何せ必要なのは人命ではなく、人間のようにその場で判断し、行動しできる都合のいい歩兵、いわば生きた人形を欲していた。だから高性能AIを欲していた。人間のような判断力を持ちながら死を恐れず戦うことを可能にするAIを。そのために“人間の脳を丸々コピーしようとした”」

「ゴーストダビング……」

高峰がなんとかそれだけをつぶやいた。

ゴーストダビングは個人の個アイデンティティ・インフォメーションの情報情報を大量複写して魂の入っていないものに乗せることで自らの分身を作るという構想の下生み出された技術だ。ただ、元の脳がそれに耐えきれず破壊されることから人間での使用は国際法で禁止されている。

「人間の脳の情報をコピーしてそれから必要のない要素を抜き取ればいい。そのために大量の人間が消費された」

「消費って……」

戦慄したような声を上げるのは青葉だ。

「消費よ。敵国の兵士”なんて隊長クラスより下は情報的価値も薄い。だからせめて有効に使おうとしてそうなったわけ。まあそれも大きな戦争が終わればできなくなるんだけどね。華渤戦争中はそれでよかった、それでも研究は終わらない。だから次の場所が必要に

なったそれが……」

「——フィリピンか！」

「フィリピン共和国とスールースルタン国の内乱。ちよūdい規模で泥沼になってくれたから研究ははかどったみたいよ？ もつとも、使われたのは敵兵だけじゃなかったみたいけど」

「ま、自律駆動兵装に向いてる脳と向いてない脳があるが誰彼かまわず使う訳にもいかない。私達は軍隊であつて蛮族ではないからね」

杉田の銃口の先で「彼」が笑う。

「それで何万の味方兵士が救われる。意味ある死だと思ふよ。倫理に悖ると言われても倫理なんて時と場所に左右されるものだしね」

「……人間の所業じゃねえな。聞いているこつちが罪の意識で潰されそうだ」

「そんなもんかな。まあ「僕」は人間じゃないんだけどさ」

「ならお前は何者だ？」

杉田がそう言うのと「彼」は笑みを深くした。

「あるじゃない、常にすべての艦娘の出撃を監視し、その行く末を見守ってきたものがあるよね？」

「彼」は手を横に広げた。

「人は「僕」を中央戦略コンピュータと呼んでいるよ」

「第九師団特殊殲滅部隊ウエムに配属になった彼が陸軍時代に最後に戦ったのが“サンセット作戦”。これは公になっている通りスーパースルタン国が開発した大量破壊兵器工場を押さえることが目的だった。その大量破壊兵器というのは……」

「……自走爆弾、だな」

キューブは高峰の答えを聞いて上機嫌に回った。

「それも……ゴーストダビングで劣化した魂ゴーストを注ぎ込まれた人型の自走爆弾、質が落ちることを承知で大量複製した魂を持たされ、人間社会に溶け込んでいく自走爆弾。そのうち自らが爆弾であることを忘れ、ある日司令が来たときに指示の場所で指定された時間に爆発する。……そう言う爆弾を作っていた」

「……ひでえな」

「天龍ちゃんはそう思う訳だ。でも作った人にとってはそんなこと些細な問題だっただろうね。なにせその魂の出どころは自律駆動兵装開発計画やその指揮官たる人物を生み出そうとしたライ麦計画からドロップアウトした人物の脳を使うんだ。無駄をなくして口封じもできる一石二鳥の方法ってわけさ。そもそもこの作戦は、内戦を泥沼化させるために日本軍が作った施設を、日本軍が襲うって滑稽な茶番だ。失敗したところで内乱の起爆剤になればそれでよかった」

キューブは回転をやめる。

「ここまで言えばわかるんじゃない？ 勘のいいあなたたちなら」

「まさか……」

天龍が震えた声を出した。

「まさか、そこで司令官は妹に会ったのか？」

「正確には月詠姉妹のゴーストダビングで生まれた自走爆弾のテストモデル。この段階でまだ月詠姉妹由来のAIを搭載した自走爆弾は量産されていない。理由は単純、ゴーストダビングの後、ダビング前のオリジナルがその自我を保っていたから、研究材料としての価値が上がったから」

「そんな事例聞いたことないぞ」

高峰がそう言うときューブはどこか落胆したように揺れた。

「ごくまれにそう言うことがあるのよ。……貴重な事例だったんでしようね、それから観察に当てられた。姉妹両方ともが生き残ったことでその遺伝子に特徴があるのでないかと予測がたち、今度はガトーにも白羽の矢がたった。ライ麦計画へのご招待だ」

「……」

「そこから先については私も知らない。予測は付くけどね。そして、彼はその後、国連海軍大学広島校に入校するまでのほぼ10年間の記録は存在しない」

「琴音・雪音姉妹はゴーストダビングに耐えた数少ない個体だった。だからこそ、コピーを温存した。一種の鍵だったからね。そしてそのカギを使わざるを得なくなつた」

「……深海棲艦の登場か」

杉田の声に「彼」は笑う。

「そのまま流用つて訳にもいかなかったけどね。ゴーストダビングで劣化した部分を補う必要があつた。そのために用意されたのが「昔存在した艦の記憶から合成した疑似記憶」だ。これを過去に経験した思い出と見立てそれを合成、戦いの経験を持つ極めて

優秀な兵器として水上用自律駆動兵装は生まれてきた。もつとも定期的に記憶を修正しないとイケないんだけどね」

「彼」は笑つて見せる。

「でも、個体として優秀と兵器として優秀というのは別だというのはすぐわかつた。二回目のゴーストダビングにも耐えて見せた月詠姉妹だが、それを元にして生まれた特Ⅲ型後期ロットはそこまで突出した特性は出さなかつた。それどころかDD-AK04に至つては兵器としては最低クラス。そこで再調整ができないかと調整員を最適と判断された僚艦をパッケージングして送り込んだ」

「それがウエーク島か」

「そう。万が一にもDD-AK04が暴走を起こした時にでも重要な他施設に危害を与えることがない場所として適切だったんだ。……そして、それに失敗する」

肩を竦めて「彼」は続ける。

「失敗も失敗、大失敗。こちらは優秀な指揮官を一人失つた。ま、調整員の方は腕はいいが少しばかり狂つてたのも一因としてあるのかもしれないけど、そこらへんの分析は後回しにしたままだ。それよりもなぜ高いポテンシャルを持つはずのDD-AK04が成果を上げられないのか突き止める必要があつた。そして最後の手段を使った」

「……月刀航暉の派遣」

アイデンティティ・インフォメーション

「元々兄妹で似たような個体の情報を持つ二人だ。なんらかの共鳴が起きるかもと期待したら予想以上の結果を出してくれた。と

ても興味深い結果が出た。このまま動かせればよかつたんだけどね。邪魔が入ったんだ」

「邪魔だと?」

「中路章人中将……ライ麦計画の全貌を知る人物であり、DD-AK03とDD-AK04が月刀航暉の妹を元にした個体であることを知っている。彼の思考は論理的じゃないんだけどね、月刀航暉大佐とDD-AK03、DD-AK04をセットにして軍の指揮下から外そうと考えたらしい。そのためにいろいろ仕組んだみたいだよ?」

「中路中将は君たちの絶対的な保護者であろうとしたのさ」

「保護者、だと?」

「思い出してごらん? “ホールデン” の名前が出てくるとき、その状況は必ず “水上用自律駆動兵装” の想定外の事項に限られているはずだ。マニラ湾観艦式では対人戦闘を余儀なくされた。その後の銀弓作戦ではCSSCとのリンクが途絶えた。そして、北方棲姫を拿捕した時は謎のイージス艦に攻撃された」

キューブはそう言っただけでゆっくりと旋回する。

「観艦式の時、武装勢力に月刀航暉と浜地賢一中佐、笹原少佐が捕まれば、殺されることなくそのままどこかに連れていかれて行方不明になるはずだった。そう言う手筈にするように中路中将は “私に頼んできたのさ”」

「……ならあの時のハッカーは」

「そう、私だよ。ホールデンを騙って武装集団に襲撃させる。そこでライちゃんもデンちゃんも一緒に回収、というより司令官を引き連れて逃走したら艦娘もついてくるだろうからね。そうして一緒に帰って帰るつもりだった。でもこれは月刀航暉が上手く処理しちゃって残念な結果になった。そして次の銀弓作戦で司令部ごと通信遮断して完全スタンダードアロンにしたのは中路中将、そうしなければあそこで何人も戦術リンクで焼き殺されてた」

「そんな……」

「具体的には合田少佐、高峰君、杉田中佐、渡井大佐、このあたりが殺されてたよ。月刀航暉の周りでCSCの真実に気がつきそうな人物、かつそれを月刀航暉に伝えそうな人物で今後の重要度が比較的低いと判断された人ね。こういうのを過剰同調事故に見せかけて殺すつてのはよくあるのよ。水上用自律駆動兵装運用士官で事故死してるのはこれがメインね。ネオM1作戦、月刀航暉が救援に向かったあの時の北川少将はこの手口で殺されてる」

さらにとキューブが告げてゆらゆらと旋回。

「なんとか月刀航暉が指揮官不適格と判定させればその時点で彼が管制卓につくことはなくなる。それを狙ったものの、すぐに復帰。そして目を付けたのが……」

「華僑民国、イージス艦に拿捕させて国連海軍の指揮下から追い出さうとした……？ これも……」

「中路中将の筋書よ。もつとも杉田中佐がおじゃんにしたけど。どれも目指すべき帰着点は雷と電が一緒にいる状況で軍の指揮下を外れること。そのためにいろいろな手を尽くしてきた。その結果、CSCによって言語能力を奪われた。そして近々CSCに取り込まれる算段が組まれた。勿論表向きは脳死状態ってことになるけどね。そうして彼もまた“ホールデン”の仲間入りってわけさ」

皮肉なもんだよね、とキューブは乾いた声色でそういった。

「中路中将は月刀航暉を助けようとした。それを全部全部、あんたたちが潰してきたんだから」

「中路中将のおかげでこっちはスケジュールが狂っててんでこ舞いさ。2回のゴーストダビングに耐えた月詠姉妹は、『僕』とひとつになった。そのことを知った月刀航暉は、月詠姉妹を解放しようとそのもとへ向かっている」

「……フィリピンか」

苦々しげな声に『彼』は嬉しそうに声を弾ませる。

「さて、杉田中佐。君に仕事だ」

「仕事だあ？」

「お間違いなのはわかっているがね、いまCSCが危機に瀕している、人間の手によってCSCを破壊しようとする動きが進行中だ。これを排除し世界の平和を守ってくれたまえ」

「貴様アツ！」

『彼』の胸倉を掴み引き上げる。

「電嬢のチューンナップが終わったらもう月刀は用済みか!? テメエらが壊した人間をただ使い潰すそれがお前の正義か!？」

「君の怒りは非論理的だ。人類全体の危機に勝る個人の危機は存在しない。そして最大多数の最大幸福を優先すべきであるのは国連軍の性質からして自明の理だろう?」

どこか勝ち誇ったような笑みを浮かべる『彼』はつき付けられた銃口など気にせず続ける。

「確かに月刀航暉の能力は惜しい。でも『代わりが無いわけじゃない』。もう彼の生体パーツは生成済みだ。彼を元にしたバイオロイドが用意できてる」

「人造人間はオリジナルじゃない！ 今彼を殺せば二度と返ってこない！ 電嬢もそれに気がつくだろう、月刀航暉が別人にすり替わったことに気がつけば、こんどこそ電は使い物にならなくなるぞ！」

「DD-AK04の記憶自体を書き換えるからね。軍の管理下にある限り問題ない」

「月刀で上手くいかなかったのか!？」

「勿論フィードバックはしてあるさ。月刀航暉が死ぬことと、今国連海軍の全水上用自律駆動兵装を統括している中央戦略コンピュータが機能を停止することを天秤にかければどっちが重いかはわかるよね?」

「どこのB級映画だ、と杉田は吐き捨てた。世界か個人か、そんな選択を強いられるなんてそんな安っぽい展開。一昔前のハリウッド映画のようじゃないか。」

「——やらせねえよ。そんなこと」

その答えを聞いて『彼』は口角を吊り上げた。

「期待してるよ、杉田君」

「くそ、遅かったか!？」

「いや、まだだ! まだ間に合うはずだ!」

原生林の真上を飛ぶテイルトローターからどす黒い煙を上げる一帯を見下ろして杉田が歯噛みした。その横で諦めていないのは高峰だ。

「状況的にはイーブンだ。どちらにしるカズが建物に入るまではこちらも近づけないんだ。カズが扱う無人戦闘機（バトルドローン）が黙らないことにはな」
高峰はそう言うのとテイルトローターに積まれたコンテナからショットガンを取り出した。

「なにがあるかはわからないし、自走爆弾にこちらが狙われる可能性も高い。気を抜くなよ」

当然だと返した杉田が降下の準備に入る。

「嬢ちゃんたち、見えるか?」

杉田が外を見てそう言った。

「あれが、あそこが月刀航暉の、お前たちの司令官の戦場だ。この煙と石油と鉄の匂いが混じったこの空気だ。これがアイツの風景だ。これがアイツの戦場だ。……ここはな、まともであろうとすればするほど気が狂う、文字通りクレイジーな場所だ」

熱帯雨林を見下ろして杉田が辛そうな顔をした。

「この惨状を見るに、自走爆弾をもう50体は撃破して進んでいるはずだ。お前らと同じように子ども（アイデンティティ・インフォメーション）の個々の情報（情報）を元にした魂を積んだそれを50も壊して進んでる。……もう、お前らのこともこうとしか見えない可能性もある。それくらい狂っている可能性があるんだ」

横に立つ二人の少女を見て、至極真面目な表情で二人の頭を撫で

た。

「もしそこまでアイツが狂っていて、お前達の声すら届かないようなら……お前らは下がれ」

「杉田さん……」

「その時は俺がアイツを撃つ。いいな?」

杉田はポンプアクションのショットガンの薬室を解放し、スラッグ弾のシェルを叩き込んだ。室内での取回しを意識して銃身切詰処理したその薬室が改めて閉鎖され、鋭い金属音が響く。セーフティをオン。

「わかりました。でも、そんなことにはさせないのです。……そうですよね、お姉ちゃん?」

「当然よ。しれーかんは私達で止める」

それを聞いた雷が振り返った。

「高峰さん、お願いがあるのです……」

「なんだい?」

「それを、貸してほしいのです」

そういつて指さした先には、拳銃が納まったホルスタがあつた。

「それで? まだ続けるの?」

足元の赤い土が不自然に踏み固められた。航暉の操るリーパーを何とかやり過ぐそうとして、容赦ない爆撃の嵐に死にかけた直後の臯

月はそこをキツと睨んだ。

「臯月ちゃん、悪いけどこれ以上は命の保証ができないと思うよ。わかったでしょう？ 戦闘はカズ君がイニシアティブを握ってる。そして、臯月ちゃんがそこにいるとわかってて気化爆弾を使用した。……少しは遠慮してくれたみたいだけどね」

「だからなんなのさ、笹原中佐」

その木の輪郭に向けて木の枝を投げつける。その木の枝がまるで誰かに掴まれたように空中に止まった。

「今更姿を隠す必要もないでしょ？」

「他の自走爆弾を集める可能性はあるんだけどね。ま、お望みなら」

半透明だった影に色がつく。グレーの防水外套のような格好にゴーグル型のアイウェア、アイウェアからは顔の下半分を覆うように外套と同じ色の布が垂れている。

「……光学迷彩、か」

「軍用ホロの投影スクリーンよ。そこまで万能じゃないけどさ。結構蒸れるしね」

顔の大部分を覆っていた布地を脇に払うとアイウェアを跳ねあげ整った顔を晒した。

「で、どうするの？」

「もちろん追いかけるさ。今日を放したら司令官は帰ってこない。そんな気がするんだ」

「そういう勘がいいのはいい兆候だよ、臯月ちゃん」

笹原がくすりと笑えば臯月はその顔を睨む。

「……帰ってこないってわかってて送り出したの？」

「まあね、死にたがりの戦闘バカとそれについてくお人好しじゃ行く末は言わずもがなだよな」

「なんで止めないの？」

笹原は笑みを深くする。

「ふたりとも機密保護や適正の補正の関係で記憶を操作されてる。でもそれは小手先の手段に過ぎないんだ。記憶や記録がなくなつて、体と脳はそれを経験している。そこから齟齬が発生して体はエラーを

叩きだす。そうなれば末路は二つに一つき、体を壊すか脳が壊れるか。弱いほうが先にいかれる。……記憶中毒ってやつだね。カズ君はそれの中期、浜地君はその初期症状が出てる」

「記憶中毒？」

「覚えがないかなあ。妙に疲れたような表情が増えたりしなかった？

あとはワーカホリック気味になったり」

皐月は黙り込んだ。

「覚えがあるみたいだね。ワーカホリック気味になるのはそれに没頭して考えない様にしようとするのもあるけど、あの二人の場合はCS Cが記憶の補正を行うからよ。CS Cに繋がることで機械により記憶の修正を受ける。……本人たちがあずかり知らぬうちにね。それを受けてる間は記憶と経験のコンフリクトが解消される。でも、記憶と経験のズレは大きくなるから依存症のような症状がでる。……これがカズ君と浜地中佐のワーカホリックの正体だ」

「……その中毒症状が」

「遅かれ早かれ二人はああなった。だから彼らが完全に狂う前に“ホールデン”についての切り札を得る必要にかられた。だから利用した。それだけの話よ」

笹原はそう言うといく。プログラムが起動し、その体が半透明になるように透けていく。

「追いかけるなら急ぎなさい。そろそろ私達も次の爆弾に捕捉されるわよ」

そして彼女の姿は完全に空気に溶けたのだった。

「ダンカンに手をかけたマクベスはこんな気持ちだったのかね」

そう呟きながら周囲の安全を確認した。もう襲ってくる相手はいない。少なくとも今所はないことを確認して彼は残弾を確認する。心もとなない量しかないことを改めて確認する。それはそれだけ撃ってきたと言うことで。

彼は唇を噛んで再び走り出す。目標の部屋に飛び込んだ。部屋はおそらく義体用のパーツの保管庫だ。その中を目標目指して駆ける。オートメーション化された倉庫には人の気配はない。ひたすらに走っていく。目標の地点を見下ろして静かににやりとした。

「ビンゴ」

そこに現れたラツタルに足を掛ける。その先には明かりが灯っている。

「そろそろだと思っていたよ、航暉」

下りた先、現れた広い空間に不釣り合いな椅子が一つ、ポツンと置かれていた。

「……こんなところで会うとは、意外ですね。中路章人中将」

「先を急ぐとはわかってはいるが、少しだけ付き合ってほしい。この老害の懺悔の一つ、聞き届けてくれないか？」

そこに座った「彼」がそう言う。彼は「彼」の方を見て皮肉げに笑った。彼は「彼」の姿を見て静かに笑った。「彼」の手元には黒の国連海軍の制帽があった。上級士官であることを示す鍰に入った金の桜花紋がどこかオレンジのきつい室内灯に照らされる。

「……言語能力を喪失したと聞いていたんだがな」

「スキュラのおかげさ。補助電腦のおかげで言語能力がある程度回復した。イメージから言語の変換に僅かにタイムラグがある。そこは許しておくれよ」

「それで？」

彼は「彼」の前まで来るとわずかに笑った。

「俺に聞いてほしいと言うことはなんだ？」

「君の妹たちをこうしたのは、私だ」

その告解に彼は静かに目を細めた。

「どういうことだ？」

彼のその問いに「彼」は小さく項垂れた。

「自律駆動兵装の開発計画……その計画のために私は尽力した。誰も死なない、もう誰も死ぬことのない世界を作る、その手助けができる」と信じていた」

要領を得ない答えに彼は静かに苛立つ。それでも「彼」の言葉の先を待った。

「出世欲がなかったとは言わない。下心がなかったとも言わない。でも、私は私なりの正義を持ってこの職務についてきた。……いつか、日本を再び平和な社会へと引き戻す。そのための礎となり、血の川を渡る、その覚悟を持ってやってきたつもりだ。自らの部下を守り、その部下はまた、その部下を守るだろう。軍を守り、その軍が守るべき日本の社会を守るためにはその鼠講の頂点、もしくはそのすぐ下にもつく必要があった。だから私は力を欲した。そのために君のお父さんの暗殺とその後のクーデターを黙認した」

そう言う「彼」は自嘲するような笑みを口の端に浮かべた。噛み殺したような笑いが響く。

「そうしてのし上がっても、部下が死ぬところを何度も見てきた。その度に上に立つ必要性を感じた。そう言うタイミングで、そのチャンスがやってきてしまったんだ。次世代型無人兵装の開発プロジェクト、その立ち上げメンバーとして関与しないか。高性能A Iと高火力武装を積んだアンドロイドによる戦線、陸軍の計画を元に海上用に転用できないかという構想……実に魅力的だった。もうこれで部下が死ぬところを見なくて済むと、本気で歓喜した。これは次世代の防衛構想の根幹を担うプログラムだと思った。これの運用士官第一期生、いや、その教官として関わることになれば、それで成り上がれる。それで得た権力でさらに仲間を守る。……そう考えて私はライ麦計画のプロジェクトチームに入った」

あたりは地鳴りのような機械の駆動音がどこからともなく入り込んでいた。『彼』の言葉の余韻はそれの合間に消えてゆく。

「その時は、本気でその理想を信じていた。それを成せると信じていた。そのために予算獲得のための暗澹な会議に参加し、上がってくる報告を聞き、サインを続けた。そのサインがどこでどういう使われ方をしてるか知らないままに。そして、私は……ただの傀儡と成り果てた」

『彼』の頭は完全に地面を向き、彼からはその口許すら見えなくなる。

「……『それ』に気がついたのは、その結果が艦娘となって帰って来た時だった。気がつくのにはあまりに遅すぎた。疑うきっかけはいくつもあった。それでも私は見ないふりをしてきた。そのツケが返ってきたんだ。兵器に載せられたのは拡張型AIではなく、子どもの魂だった。……絶望したよ。私のサインはそれのゴーサインだったんだ。子どもに銃を持たせ、戦場に送り出したのは他でもない、私だった」

その声はわずかに揺れ、それはすぐに収まる。

「そうして……君の妹たちもまた、その素体とされた。その書類も、私がサインをした。それがどんな書類かも知らずに……それが言い訳となるとも思っていないがね」

『彼』は両手を組んで額に当てた。……まるで祈りでも捧げるかのようなポーズだ。

「いわば、私の仇だ。いくら言葉を尽くしても、いくら君を守ってもそれは私の罪を薄めようとする自己満足的な贖罪に過ぎない。私にその意思があつたかどうかは関係ない。事実として、君の妹たちをモルモットにしたのは紛れもなくこの私だ」

彼はそれをただ静かに聞いていた。表情を忘れたような顔でただ『彼』を見下ろす。

「……こんなことを君に頼むのは、傲慢なのだろうと思う。だが、私は殺されるなら君にと決めていた。……航暉、頼む。私を殺してくれ」
囁くような声がやけに響いた。

「君の人生をめちやくちやにした。家族も名前も奪い、その家族すらまともに弔えないまま君を戦場に追い立てた。その苦しみは私の貧弱な想像力をはるかに上回るだろうと思う。その罪は私の首一つで収まるものじゃないことは百も承知している。そして、私がこう話すことすら、もう傲慢であることも、把握してゐるつもりだ」

「彼」は顔を上げた。彼の知っている顔より幾分老けた顔だった。「私が君と君の妹たちを知ったときには、もう君しか救えなかった。咎人の唯一の贖罪として、君を死なせないことをずっと……自らに課してきた。だが、もう私は君の力になれそうもない。だから……」

「中将」

彼が口を開く。

「もう俺は『ゾンビー』なんですよ。あの日、砺波ジャンクションの事故で死に損なった、ただのゾンビーだ」

レックホルスタに手を伸ばしながら彼はそう言った。

「死ぬことも、生きることできないまま、16年間過ごしてきた。……ねえ中将？ あなたにとって守りたいものってなんでした？」

「……部下だった。その部下ももう、戻ってこない」

「……俺は、家族だったよ、中将。それももう、戻ってこない」

取り出したのはM93R、すでに薬室には9×19mmパラベラム弾が送り込まれていた。セレクタをセミオートにずらす。

「死ねないゾンビーの願ってわかりますか？」

「……死ぬこと、か」

「中将が死を望むように、俺もまた、死に場所を探してた。……死にたがり同士のよしみです」

そうしてセーフティを解除、指を引金にかけた。その時。

「——そこまでだ、カズ。銃を置け」

もう一つ声が降ってきた。

「さ、皐月……？」

「司令官、動かないで」

浜地の盾になる位置に立って皐月は振り返らずにそう言った。左腕には相手の銃弾が掠めた傷から赤い血が流れる。それを無視するように皐月は単装砲に次弾を装填する。

「……まだボクとやり合う気なの？　かわいいね」

両手に提げた単装砲を構えながら相手を見やる。

「さよならだ。ボクのそっくりさん」

二発の砲弾を受けて金髪の義体が倒れる。それを確認して単装砲にロツクをかけた。そこに来て、皐月は初めて浜地の方を振り返った。

「さて、司令官、ボクに言わなきゃいけないことがあるんじゃないかな？」

「……す、すまん」

「それよりもいっべきことがあるでしょ！」

どこか顔を赤くしながら叫ぶ皐月。浜地はその気配に気圧されながら、恐る恐る口を開く。

「……助かった。ありがとな」

「……どういたしまして」

及第点、と言いたげな視線を向けて皐月はついと顔を逸らした。「それで？　この後どうする？　ボクはこのまま撤退を強く強くつよく勧めるけど」

さあ、帰るよと言いたげに砲を振る皐月。

「悪いけど、まだ帰れない」

「……司令官はこういう場面に限って意固地だよね」

それには答えず浜地は空薬莖の排出不良を起こしたショットガンをいじる。機関部の樹脂製のカバーを外して振ると歪んだプラスチックのシエルを取り出した。改めてカバーを閉じて、ポンピング。スラッグ弾が改めて入ったことを確認する。

「まさか、ここまで来てボクを置いていくとか言わないよね？」

「……まさか」

「その間は何なのさ……ボクが信用できない？」

「そんなんじゃない……そんなんじゃないんだ」

浜地は俯いた。

「ここは戦場だ。臯月たちが戦う戦場とはまた違った戦場なんだ。こんな戦場を、お前に見せたくなかった

「さつきみたいに誰かのそっくりさんが出てくるし？」

黙り込む浜地。

「……スクラサスから聞いた。ここは艦娘の元になった人たちが集まる場所だつて。ゴーストダビング？ そのための施設だつて」

「……」

「その結果生まれたのがボク達だつてことも聞いた。それを壊そうとしていることも聞いた。それを壊すこと……っていうよりはこの施設のことを知らしめることで艦娘の扱いを変えようとしてるつてことも聞いた」

臯月は浜地の目を見つめる。今度こそ、彼に目を逸らすことを許さない。

「だから、もう隠さないで。ボクは何があつても司令官の味方になる。だから信じてほしいんだ」

単装砲をベルトにひっかけ両手を空けた臯月は彼の頬に触れる。

「ボクは司令官のそばにいたい。言ったよね？ そのためだったらボクは戦える。どんな相手だつて戦える。ボクはボクの意志で戦える。司令官の見ているものを見て、一緒に考えて、一緒に戦つて、そうしたいから」

司令官、と臯月は呼びかけた。

「だから、一緒にいさせてよ。あなたのそばにずっといたいんだ」
皐月はそれを言ってから、しばらく経って顔を真っ赤にした。

これって、遠回しな告白では？

「……ぷっ」

その様子を見て浜地は小さく噴き出した。

「な、笑うだなんて酷いじゃないか！」

「悪い悪い、俺の負けだ」

浜地は黒いグローブに包まれた手を握りしめる皐月に向けた。

「皐月、一緒に来てくれるか？」

その問いかけに、皐月は笑って——満面の笑みで笑って拳を重ねる。

「まっかせてよ、司令官っ！」

「——そこまでだ、カズ。銃を置け」

「……撃つなら撃てよ、中佐」

航暉が高峰を認めるとそう言った。

「カズ……」

「ただし、その時点から敵同士だ」

高峰は僅かに口の端を持ち上げた。

「なら今は味方か？」

「まさか」

航暉はゆつくりと左手に拳銃を持ち替え、右手を空けると背負ったショットガンを右手に持った。

「ただの他人だ」

「そうかい。そこまで薄情だとは思ってなかったよ、月刀。それとも月詠と呼ぶべきかな、それともガトー？」

茶化すような軽い口調で杉田が笑う。航暉は軽く溜息をついた。

「調べたのか」

「一通りな。で、あんたがここに何をしにきたのかも知ってる」

「ほう？　で？　君たちは俺の味方なのか？　それとも止めに来たのか？」

「……両方だと言ったら？」

「排反事象だ。それは」

航暉がそれを鼻で笑う。

「……それは違うのです」

凜と澄んだ声で電がその会話に割り込んだ。

「司令官さん。もう抱え込まなくても大丈夫なのです。一人でいようとしないでいいのです」

電はそう言って一歩前に出る。

「司令官さんがするべきなのは敵討ちでも、あきらめることでもないのです。だから、ここでこんなことをしなくてもいいのです」

「……何がわかる」

「わからないからこそわかりたいと思う。それは間違っていないと思うのです。司令官さん、あなたは妹さんたちを守りたかった。大切な家族だった。だから守りたかった。なのに守れなかった」

「黙れよ……」

「黙りません。司令官さんがいなづまのことは見てくれるまでは、こちらでも黙れないのです」

電はそう言ってさらにもう一歩、前へ。

「守れなかった、だから強くなりたかった。違いますか？」

「黙れって言うてんだよ！」

その叫びを銃声がたち切った。

「……いい加減にしろ、カズ」

火を噴いたFN Five sevenを構えて高峰がそう言った。

「そうして、仲間ですら手を上げて、お前は何を守る？ そこまでして通すべき筋があるか？」

「……俺がやらんで、誰がやる」

小さく呟き、航暉は俯いた。その手元にはM93R自動拳銃が納まっている、

「雪音や琴音になんの罪があった。どうして死なねばならなかった。どうして死んだ後も、この狂ったシステムに取り込まれなければならなかった」

もはや誰に向けて話しているのかわからないようなおぼろげな声で彼は続ける。

「終わりにするしかない。ここで終わらせるしかないんだ。雪音たちを飲み込んだこの名前のない怪物を、このシステムを終わらせなければならぬ。そうでなければ」

「誰も救われない。お前も、お前の妹も、か……。そのために、お前を信じる子たちを置いていくのか？ カズ」

高峰の言葉を航暉は鼻で笑った。

「さあね、その解釈は残されたものに任ずき。死者にはもう関係ない話さ。俺にはもう関係ない」

それを聞いた杉田がホルスタからFN Five sevenを引き出した。それを両手で構える。

「月刀、正直お前の口からは聞きたくなかったよ。それだけは」

コツキング、わずかな金属音が響いた。

「俺の知ってるお前は、もつと格好良かった。女だったら惚れたかも知れねえと思えるくらいだった。痛みを痛みとして受け止めること。それを知っているからこそ、優秀な指揮官として部下からの信頼を集める。そういう奴だった。俺には関係ないなんて、絶対に言わなかったよ……！」

照星越しのその瞳にはただ悲しみの色が浮かんでいた。

「月刀、最後に1つだけ教えてくれ。……16年間、満足したか？」

引き金に指がかかる。答えは無かった。

「……もうこれ以上、あの子たちを泣かせるなよ、月刀」

そして、撃鉄が落ちる——その刹那。

「——ダメです！」

電が二人の間に割り込んだ。彼女の耳の横を拳銃の弾が通過した。

「まだ、終わらせちゃダメなのです」

杉田と向き合うように立ち、両手を横に広げ通せんぼする。航暉からはセーラーの後ろ襟とバレッタが見える。その姿はまるで……航暉を守ろうとするかのようだ。

「高峰さんも、銃を下ろして」

「雷……」

「しれーかんが始めたことよ、幕を引くのも、しれーかんじゃないと」
「そうよね？」と雷が訊けば、電は頷いて振り返る。電はセーラーのスカートのポケットに右手を差し込みながら、航暉の方に向き直った。

「司令官、私を誰だと思っているのか、いなづまにはわからないのです。それでも、ずっと会いたいと思ってたのです」

そう言うとき小さく笑う。

「おかしいですね。私も私が誰だか、もうわからないのです。会いたいと言っているのはいなづまなのか、月詠雪音の記憶なのか、指揮官を求めるように組み込まれたDD-AK04のプログラムが反応しているだけなのか。わからないのです。……それでも、私は司令官に、あなたに会いたいと思っていた。本当に夜も寝れないほどに思っていたのです」

電はそう言うって目を細める。

「ここでごうして会えた。それでもう私は満足しちゃってたりします。だって司令官はなにも言わずに行っちゃうから、とつてもとつても、心配したのです。その気持ちは、きつと作り物じゃないと、私は思います」

少し俯いてから、再び顔を上げる電。

「司令官、私は誰に見えますか？ あなたは誰だと思えますか？」

「……っ」

航暉が拳銃を抜いた。同時に高峰と杉田が航暉の電腦に狙いを付ける。

「……今更俺になにをしろと言うんだ」

航暉の顔が一瞬歪んだ。

「もう、止まれないんだよ。16年間、俺はこのためだけに生きてきた。雪音と琴音を助け出す。死の連鎖から救い出す。ただそれだけを願って生きてきた。そのためにどんなことだってしてきた。電腦化した、銃の使い方も、ナイフの使い方も全部覚えた。なのに今更、今更、お前が止めるのか、雪音！」

それを見た彼女が笑う。

「……もう、大丈夫なのです」

スカートのポケットから出てきたのはベレッタM93R——航暉の愛銃だった。それで幾人も撃ってきた銃が、彼女の小ぶりな手に収まっていた。

「それ、はっ……！」

「もう、いいのです。16年間、あなたは一人で戦ってきた。その“あなた”が終わらせたいと言うのなら終わらせましょう」

拳銃のスライドをゆっくりと引き、放す。

「やめ、やめろ……」

「きつとあなたは間違つてなかった。だれもこんな顛末を望んでなかったと思うのです。それでも、こうなつてしまった。それ以上の意味はきつとないのです」

「やめるんだ……」

電は緩慢とも思える速度でゆっくりと右腕を上げていく。

「だから、今ここで、私と終わりにしましょう」

「やめろおおおおおおおとおおとおおとおおっ！」

銃声が二発分響いた。

航暉が膝をつく。電も煽られて数歩下がった。電は肩を押さえるが、そこから血が流れることはなかった。弾丸は電の服にあたって動きを止めていた。それが落ちると同時に電の背後が揺らぐ。……何もない空間から現れるように、電の背負った艤装が姿を現した。――

――渡井謹製の空間ホロを解除した瞬間だった。

航暉は呆然とそれを見る。電脳に何かがぶち当たった感触はあった。それでもわずかに血が滲むだけで、まだ生きている。そこに拳銃を投げ捨てた電が飛びついた。そのまま航暉を押し倒す。

「……これで、二人とも死んだのです。『月詠航暉』も『ガトー』も死んだのです。もう、ゾンビなんてどこにもいないのです。司令官さん」

彼に馬乗りになったまま、電はそう言った。ゆっくりと

「あなたは『わたし』を殺した、わたしは『月詠航暉』と『ガトー』を殺した。だからここには月刀航暉司令官といなづまが残ったのです。……雷お姉ちゃんも、きつと今の銃撃で……」

「そうね、私がしたことって撃たれただけじゃないかしら？」

雷が肩を竦めて笑った。

「もう大丈夫よ、しれーかん。もう、復讐に走らなくていい。誰かを殺そうとしなくていい。私が、私達がいるじゃない。私達があなたを、助けるわ」

「船は一人では進めない。目的地に着くためには羅針盤と灯台が必要なのです。もし司令官さんの羅針盤が狂ってしまったら、私達が灯台になるのです。私達の羅針盤が狂った時は司令官さんが灯台になってください」

電はそう言って彼を抱きしめた。その眼尻に珠を浮かべて。

「もう、離さないのです。司令官さん」

「電……」

「ふふっ、やっと私を見てくれたのです」

電は笑ってからもう少しだけきつく抱きしめた。

「おかえりなさい、司令官さん」

「……ごめんな、電。ただいま」

彼の手からM93Rが落ちる。それを見て杉田と高峰も笑みを浮かべた。

「賭けは電の勝ちか」

地面に落ちた電が撃った拳銃を高峰が拾い上げる。チエンバーをスライドすると、中から出てきたのは——真っ青な弾頭、模擬弾だ。

「ったく。手間かけさせやがって、カズ」

「全くだ。こちとらマチェットのせいで義手一本おしやかだ」

そう言った二人が航暉を立ち上がらせた。そのまま航暉の武装を取り上げる。

「今から自害されると死体の処理がめんどくさいからな。……それじゃ、行くか」

「行くってどこへ?」

「なんでここまで来たのか忘れたのか? ——死者は弔わなければ成仏できないんだぜ? ここまで来たなら墓参りぐらいしてもばちは当たらんだろう」

杉田は笑ってから航暉の肩を叩いた。そのまま置くへと向けて歩き出す。

その奥、地下深くにあるいくつもの生体維持装置の前で中路がコン

ソールをタイプする。その音が高い天井に反響した。

「……君たちのお兄さんを連れてくるのに、ここまで時間がかかってしまったね。寂しかっただろう。いま、代わるよ」

中路が操作盤の前を空けると航暉を呼んだ。ゆつくりとその前に立つとのぞき窓の奥に記憶にあつた顔が浮かんでいた。中路がマイクを渡す。

「……久しぶり、だな。琴音、雪音」

——うん、久しぶり、カズにいはずっと雪音に首つたけだったけどね／ No. 023

——お久しぶりなのです、カズにい／ No. 024

声はなく、画面に文字列が現れる。名前が表示される訳じゃないがどっちがどっちかわかる。

「元気にしてたか、なんて聞くのも変だな。……だめだな、言いたいことはたくさんあるのにな。今更何を言えばいいかもわからない」

——無理に話さなくてもいいのです。カズにいにはカズにいたもん。カズにいの考えてることなんてわかるもん、ね？／ No. 024

——そうね、雪音もわたしもずっとカズにいのそばにいたんだもん／ No. 023

「そっか……そうだな」

航暉は操作盤に触れる。

「……なあ、雪音、琴音」

——なに？／ No. 023

「俺は、間違ってたかな」

現れる文字列を指でなぞる。声は聞こえないが、それでも確かにそのトーンがわかる。

「どこから、俺は間違えたんだろう。どこから俺たちは間違えてたんだろうな」

——きつと間違えてなかったと思うよ。カズにいには／ No. 023

——私もそう思うのです／ No. 024

「優しいな、お前たちは。それでも、きつとどこかで、何かを間違えた。だからこそ、お前たちはこの独房に囚われ、俺はただの殺人鬼と成り果てた」

航暉はそう言うのとゆっくりと目を閉じた。

「間違えてなかったなら、こうなるべくしてなったのかな？ それだとすこし、寂しい気がするよ」

「司令官さん……？」

航暉の横に來た電が彼の袖に触れる。

「電、安心しろ。全部をここでなかったことになってしないから」

———「そっか、電ちゃんもいるのです？」／ N o . 0 2 4

「ああ、いるよ。話すかい？」

———「少しだけいい？」／ N o . 0 2 4

「もちろん。雷もいるからね。ちよつと待って」

航暉は一步下がって電と雷を操作盤の前に呼んだ。

———「直接会うのは二回目なんだけど、きつと覚えてないよね。」

月詠琴音です／ N o . 0 2 3

———「月詠雪音なのです」／ N o . 0 2 4

画面にそのように連続して文字列が浮かんだ。

———「兄がご迷惑をかけたみたいで申し訳ないのです」／ N o .

0 2 4

「いえ、そんなことないのです……雪音さん、でいいのです？」

———「どんなふうと呼んでもいいですよ」／ N o . 0 2 4

「しれーかんの妹さんよね？」

———「そうよ、うちの馬鹿兄の騒動に付き合わされちゃって大変

だったでしょう？」／ N o . 0 2 3

「まあ、はい」

「………自覚はしてるが即答されるといろいろ思うところがあるな」

———「カズには黙ってる！」／ N o . 0 2 3

———「少しは反省するのです！」／ N o . 0 2 4

妹たちの反応に航暉は肩を竦めた。

「でも、嬉しかったんじゃない？」

雷がマイクを取った。

「16年間も、あなたたちのことを忘れずにいてくれた。あなたたちのことを考えてくれた」

——もちろんよ？ 私たちが生きていたことを覚えていてくれる。私たちがどうなったか、知っていてくれる。カズにいがいたから、私達はここで耐えられた。カズにいが生きてるってわかってたから私達はこうしていることができた／ No. 023

——もう一度、カズにいに会いたかったのです。だから生き残ったのかもしれないですね／ No. 024

「琴音、雪音……」

——でも、でもだよカズにい／ No. 023

「？」

航暉が疑問符を浮かべると、新たな文字列が現れる。

——もう私達だけを見なくていいの。そろそろカズにいは自由になっていいと思うの／ No. 023

——電ちゃんに雷ちゃんがいるのです。もう私達がついていなくてもいいと思うのです。カズにい、私達ももう大丈夫です。だから、カズにいも自由になっていいのです／ No. 024

それを聞いて航暉は一步前に出た。

「戦術リンクに繋ぐたび、俺はどこかお前たちの影を感じてた。やつぱり……」

——そっか、気がついてくれてたんだ／ No. 023

「気がつかないと思ったか？ 俺はお前らの兄だぞ？」

——それもそっか／ No. 023

その文字列にどこかもの悲しさを感じるのは、間違っているだろうか？

——カズにい、私はまだ私かなあ／ No. 024

「当然だ。お前はお前だよ、雪音。お前らはお前らだ。お前らは俺のたった二人の妹だ。それを否定することは俺が許さんよ。お前らがお前らを否定することも許すつもりはない」

——あは、やつぱりカズにいはカズにいだ。そういう強引など

ころ小学生のころから変わらないね／ No. 023

「そういう琴音たちは、大人になったな。いつの間にか、大人になった」

———それでもないのです。カズにいに追いつきたくて背伸びして、手を伸ばしているだけなのです／ No. 024

小さく笑った航暉はゆっくりと手を前へ。二人の納まるその箱の前へ。

「……見えるかい、雪音、琴音。やっと迎えに来た」

———うん、見える。でも、手を伸ばしても、もう届かないかな

／ No. 023

「そっか。……じゃあ、どうすれば届く？」

航暉の問いにわずかに時間が開いた。

———雪音、いい？／ No. 023

———もう大丈夫なのです／ No. 024

ふたりで何かを確認するような会話があつて。

———カズにい、私達の生命維持装置を停止させてほしいのです

／ No. 024

そう、表示された。

「……やっぱりそうなるか」

航暉は苦笑いを浮かべて、操作盤に触れた。

「似た者同士か、俺もお前たちも」

操作盤にバーチャルキーボードが表示された、それをタイピングしていく。それを見て高峰が拳銃を構える。

「おいカズ、お前なにを———！」

———警告 高峰春斗中佐 CSC内部でのこれ以上の武力行動は許可しない。強行介入開始／ No. 023

高峰の視界にその言葉が表示されると同時、その姿勢のまま動きが固まる。電腦の一部にロックがかけられている。体の制御権が乗っ取られた。

「くそっ！」

「高峰、大丈夫だ。全部をここで止める気はない。この二人を止めるだけだ」

—— 高峰さん、大丈夫なのです。 “月刀航暉” を信じてあげてほしいのです／ No. 024

高峰の視界にはそう表示される。その先では画面をひたすらタイプする航暉の姿があった。

「……これで終わる訳じゃない、解かっているだろ？」

—— もちろん。でもこれがきつと “これ” をとめる最初の鎚矢になるわ／ No. 023

「鎚矢なんて言葉、どこで覚えてくるんだか」

航暉はひたすらにキーを叩き続けた。

「なあ、一つだけ聞いていい？」

—— なあに？ カズにい／ No. 023

—— なんなのですか？／ No. 024

「幸せだったか？」

そう問いながら航暉は “ホールデン” 維持管理システムにアクセスしていく。管理用のセキュリティパスは No. 023 が解除していた。一度もとがめられることなく潜りこむ。

—— なあんだ、そんなこと？／ No. 023

笑っているのだろうか、その声は。

—— 当たり前なのです／ No. 024

—— こんなに意地っ張りで、強引で／ No. 023

—— 誰よりも強くて、誰よりも優しいお兄ちゃん是世界中どこを探してもいないのです。カズには世界一の私達のお兄ちゃんです。そんなお兄ちゃんを持てた私達が幸せじゃないはずなのです

／ No. 024

—— 私達は幸せよ。だからカズに何も幸せにならなきゃ／

No. 023

その表示を見て航暉は笑った。

「……妹たちにこう言われたんじゃ、そう簡単に死ねないじゃないか」

—— 当然。私達の分もしつかり生きて／ No. 023

—— お土産話はたくさん欲しいのです／ No. 024

「いつか、もう聞きたくないってぐらい聞かせてやるよ」

航暉の手が止まる。

—— ねえ、カズにい／ No. 024

「どうした？」

—— 小さい時に読んでくれた本、まだ覚えてるのです？／ N

o. 024

「どの本だい？」

そう問いかければ少しだけ間をおいて文字列が現れる。

—— ぼくは、あの星のなかの一つに住むんだ。その一つの星

のなかで笑うんだ”／ No. 024

「…… だから、きみが夜、空をながめたら、星がみんな笑ってるよう

に見えるだろう。すると、きみだけが、笑い上戸の星を見るわけさ。

“…… サンテグジュペリ、『星の王子様』か、そういうえば寝る前に

ちよつとずつ読んでたっけ」

—— うん。大好きだったの。あの本／ No. 024

「そっか。俺も好きだった」

—— “だれかが、なん百万もの星のどれかに咲いている、たつ

た一輪の花がすきだったら、その人は、そのたくさん星をながめる

だけで、しあわせになれるんだ。” 私たちのこと、好きでいてくれる

？ まだ、覚えててくれる？／ No. 023

「当たり前だ、バカ」

航暉がそう言つて俯いた。

「…… スキュラ、どうせ見てるんだろ？」

航暉がぽつりと呟くと、電腦通信が繋がった。それもその場にい

る全員に同時に繋がった。

《ええ、ちゃんと眼に乗ってるわよ。で？ どうするの？》

「CSCを3秒だけオフラインにしろ。このシステムを設計したプロ

グラマーはお前だ。どうせバックドアの一つや二つ残してるな？」

《まったく、最後のバックドアをこんなことに使う気？ 次にハード

アタックする機会があつたとしても、その時はもう私に提供できる切り札は無いわよ?」

「合図を送ったらオフラインにしてくれ」

《……おまけで4秒、有効に使いなさい》

航暉は首の後ろからQRSプラグを引き出した。制御卓にはジャックポートが顔を出している。

「そうだ。忘れるところだった。雪音、琴音」

—— なんなのですか? / No. 024

—— どうしたの? / No. 023

「帰ったらソフトクリーム食べにしようって約束、破っちゃってごめん。またいつか」

—— いいよ、気にしてないわ / No. 023

—— 次会った時に、です / No. 024

「そうだな。次会った時に。正直、もうこの世で会うことがないことを願うよ。俺はもう少しこっちで頑張る。だから向こうで元気でいてほしい。不甲斐ない兄からの最後のお願いだ」

航暉はジャックポートにジャックをあてがった。

—— 約束なのです。カズにいいも元気で頑張って / No. 024

24

—— 約束したからね? カズにいい、元気で / No. 023

「ああ、元気でな」

航暉は笑ってから目を閉じる。

「スキュラ、3カウントでいくぞ」

《了解、いつでも》

「3、2、1……」

ゼロのカウントと同時にジャックにQRSプラグが叩き込まれた。同時に膨大な量のコマンドが制御卓のスクリーンを流れていく。

音は無かった。きっちり4秒で航暉はコードを引き抜いた。

「……気が済んだか、月刀」

杉田の声が響いた。

「CSSCは復旧、いまリアルタイムで接続していた端末にはエラーが

返されただろうが、もう問題ないはずだ」

航暉は淡々と答えた。高峰がふっと力を抜く。体の制御が戻ってくる。

「月詠姉妹は？」

「どこかに消えたよ」

航暉はそう言つてゆつくりと膝をつく。

「司令官さん！」

「大丈夫だ、大丈夫だから……」

航暉はそういいながら俯いた。

「……ぜんぜん大丈夫じゃねえよ。どうして俺は3回も妹に死なれなきゃいけないかったんだよ。どうしてだよ、畜生……」

床に水滴が落ちる。

「大好きだったよ。お前らが大好きだったんだよ。なんでお前らを殺さなきゃいけないかったんだよ畜生——っ！」

航暉の絶叫がこだまする。その背中を雷がさすった。電が彼の頭を抱く。

「泣きたい時は、泣いていいのです」

「……電、雷」

「はい」

「どうしたの、しれーかん」

航暉の声が揺れる。

「約束してくれ。命令でもいい。解釈は任せる。……絶対に生き残れ」

ゆつくりと言葉を紡ぐ。

「お前たちが琴音や雪音じゃないことはわかってる。お前たちは電であり、雷だ。でも、今だけは、今だけは許してくれ。もう、これ以上妹たちを失うのは、もう無理だ。4回目はもう、耐えられない」

電にすぎるようにその肩を抱く。震える両手は確かに血が通っていた。

「絶対に俺より長く生き延びろ。無茶なこと言ってるかもしれない。それでも、生き残ってくれ、頼む」

なんと残酷な願いだろう。自らが見てきた、耐え切れないような思いを相手に強いる。それを航暉は是としない、だとしてもそう言わなければ耐えられなかったのだ。

「……ひとりはもう、いやだよ」

その震えた呟きに、電は目を細めた。その拍子に目じりから水滴が落ちる。

「大丈夫なのです。司令官さん。私はここにいます」

「そうそう、しれーかん、私がいるじゃない！」

答えはなかった。ただ嗚咽が響くだけだ。ただ、それだけの時間が続いた。

「……すまん、迷惑かけた」

どれだけの時間が経っただろう。互いの腫らした目を見てどこかバツの悪い表情をしながら航暉が立ち上がった。

「……もう大丈夫か？ カズ」

「ああ、もう大丈夫だ」

航暉は小さく笑った。

「……俺のM93R、今高峰が持つてるのか？」

「ああ、それが？」

「ここに置いていくよ。もう、必要ない。あの子たちはもういないし、もうそれにこだわる必要もない」

「……そっか。ほら」

高峰から銃を渡され。それを制御卓の脇に置いた。

「今度こそ、いこうか」

「なのです」

「うん」

電と雷が頷く。天龍が笑って航暉の方に近づいて来る。そのまま肩を叩いた。

「もう勝手にいなくなるんじゃないやねえぞ、俺たちが待つてる。そこに帰ってこい、司令官」

「ああ、そうするよ」

航暉は頷いた。

「航暉」

その彼に一つ、声がかかった。中路だ。

「……お前には、もうこっちはいいだろう」

中路が彼の頭に帽子をかぶせた。黒の制帽、国連海軍の上級士官用の制帽だった。

「私はおそらく予備役に落とされることになる。私の電脳も限界が近い。……みんなのことを頼む」

中路が敬礼の姿勢をとる。航暉はそれに答礼を返した。

「さて、帰ろうか」

「ああ、行こう」

一丁の拳銃を置いて去っていく。それが一人と二人の墓標の代わりとして、置いていく。

——Bon Voyage.——

制御卓にはただそう表示されていた。

Starting Point is Here

「へえ、僕が作ったホロ、役に立ったんだ」

《みたいですよ。うまいこと電ちゃんのお膳装隠せたみたいです》

呉の個人執務室で通信を受けながら渡井は口に飴玉を放りこんだ。

「それで、青葉、我らが月刀大佐は無事帰ってきたってことでいいんだね？」

《完全無傷という訳にはいかなかったですけど。とりあえずは検査入院という名の謹慎タイムです》

「まあ公にできるわけではないか。『現在停止したはずの工場に急襲をかけて謹慎』とかどんな理由だよって話になるもんね………というより、この話題通信で大丈夫？」

《あ、ちゃんとこつちで秘匿回線回してますよ》

「さすが青葉、高峰仕込みのことあるね」

渡井はそう言うとう肩を回す。

「まあ、そうだね。とりあえずはハッピーエンドか」

《月刀大佐本人は複雑そうですね》

「そりやそうだろうな。ただでそんな状況を乗り越えられるはずがない。そういう状況を切り抜ける代償は大きいと思うよ？」

《それもそうですね》

「でもそこは時間に任せるしかないのさ。大切な人と一緒に時間を過ごしていくこと。可能なら電たちと一緒に退役するのが精神的には一番楽だろうけど、電たちは軍の『備品』扱いだからね。そんなこと端からできない。となると月刀も軍に残るしかない……。ま、そっから先は当人たちの問題だな。外野が喚いてどうにかなる問題じゃない」

渡井はそう言うってから笑みを深めた。

「まあ、それをじっくり眺めるのもまた良しかもね、ちようど辞令も下ったことだし」

「無事帰ってきたね、スクラサス」

「ええ、なんとかね」

笹原はそう言うとう肩を竦めた。新首都・長野のアパートの一室はゆるりとエアコンがかかっていた。

「足は付いてないでしょうね？」

「私を誰の孫だと思ってるのよ。……言われた通り『月刀航暉』以外にはブラフ囃ませである」

「上等、ちゃんと浜地中佐にも？」

「そうしろって言ったんはあんたでしょうが。浜地中佐も臯月も『スクラサス』の顔も声も覚えてないわ」

そう。と返してスキュラは目を細めた。

「それにしても、納得いってないって顔だね？ どうしたんだい？」

「結局、スキュラは何をしたかったのかなあってね」

笹原はそう言うときスキュラの隣の椅子に腰かけた。

「アンタなら気がついてると思っただけだね、梓」

スキュラは彼女を本名で呼んだ。

「ねえ、ばあちゃん。何がしたかったのかそろそろ教えてよ」

少女型の義体が椅子から飛び降りる。

「月刀航暉の今後の行動予測、できるかい？」

「それってPIIXコードからの予測ってこと？」

「やりやすいように。……私はね、対深海棲艦作戦が終結したタイミングで、月刀航暉は『アレ』をリークすると見てる」

「……それが？」

笹原は振り返ったスキュラの笑みを見て……半ば睨むようにしながら聞き返した。

「月刀航暉をはじめとした五期の黒鳥にCSCの真実を告げる。」「ホールデン」は何者かを知らせる必要があった。そうでなければ「ホールデン」が政治分野にまで介入を開始するのは秒読み段階に入ってしまう」

「カズ君がその真実をリークすれば止まるとでも？」

「まあ、それで止まるぐらい単純なことならもうとつくのとうに止まってるよね」

スキュラは笑みをひたすらに浮かべ、続ける。

「なら、世界を救った英雄がそれを口にしたら、どうかな？」

それに、笹原の笑みが凍る。

「……カズ君を、切り捨てる気？」

笹原の声に怒気が混じる。

「切り捨てなんてしないよ。ただ、この事実を白日の元に知らしめてもらうだけだ」

「それを切り捨てるって言うのよ。国連海軍がその事実を容認するはずがない。だからこそこれまで秘匿され続けてきた。それを公に口にしたらどうなるか……」

「だがそこで生じる民衆の熱、そこに賭けるしかないんだよ。それに、英雄の最期はさらに油を注ぎその熱はさらに増す。その死が唐突で疑惑に塗れるほどにね」

「……スキュラ。あんた」

「元々月刀航暉には扇動者アジテーターの素質がある。人の心を奮い立たせ、それを一つの方向に導き、個々の小さな力をまとめて大きな力とする能力。それが彼の能力の本質だ。その力は月詠航暉の時代

からすでに發揮していたものであり、彼が最初に影響を与えた人物、月詠雪音の個の情報アイデンティティ・インフォメーションを継ぐD—AKO4電が發揮しうるものでもある」

そう告げたスキュラは何でもないことのように笑って見せる。

「だから、彼にはその効力を最大にするためにも、英雄になつてもらわなきやいけない」

「ふざけないでよ。いくらなんでもそれはあんまりじゃないの?」

「おやおや、梓。自分の感情に飲まれない方がいいわよ?」

スキュラは肩を竦める。怒気が混じったその声に心底呆れたような表情をつくる。

「笹原ゆう」の感情に飲まれるな。あんたは好きになる人を自在にコントロールし、自分を好きでいてくれる人をコントロールできる。

「月刀航暉」への好意も、「持つべくして持ったもの」だということを忘れたかい?」

それを聞いて笹原は押し黙った。

「私達ノンオフィシャルカバはオオカミ少年の手下なのさ。政治家がひつじかい外敵が来たオオカミと叫ぶたび、国民は財産を守るために一致団結する。私達は羊飼いの手下として動き回り、本当に敵が来たときのために備えつつ、羊飼いのご機嫌取りをする。そう言う立場さ。それ以上でもそれ以下でもない。『スクラサス』、君はそれをわかってこの世界に踏み込んだはずだろうか?」

「……そうして人を使い潰していくの?」

「ああ、そうだよ。それで最大多数の最大幸福が得られるなら」

スキュラは続ける。

「……だからその使い潰す人を最小限にするのさ。だから彼を使う。それしか残ってないんだよ」

「……認めない。私はそれを認めない」

スキュラはそれを聞いて小さく笑った。

「なら精々あがいてみる。それを卒業課題にしようかね。私を出し抜けたら卒業だな、『スクラサス』」

それを言うとスキュラは近くの柵から一部の封筒を差し出した。

「辞令だ。『笹原ゆう中佐』、受け取りたまえ」

「結局スクラサスの正体も掴めずじまい。CSCは通常通り稼働中。お前は抗鬱剤を飲みながら記憶中毒脱却のための集中セラピー……まったく、こっちはくたびれもうけもいいところだぜ？ カズ、どうしてくれる」

高峰はそうぼやくと隣で煙草を吸う航暉に声をかけた。手にはダヴィドフのクラシックがあった。紫煙を吐いてわずかに笑う航暉。

「迷惑かけたな。たぶんもうないよ」

「当然。二度あつたら今度こそ捨て置くぞ」

そう言うのと冬の空に小さく浮かんだ雲を見上げる。一月の屋上は喫煙にはいいかもしれないが長居する場所ではなさそうだ。

「で、本当に覚えてないのか？ 『スクラサス』のこと」

「何なら無理矢理取り出してみたらどうだ？ ゴーストダビングでさ。月詠の子たちが耐えたんだ。俺も耐えるかもしれないぞ？」

「洒落のつもりかもしれないが、まったく笑えねえぜ」

高峰は二本目のJPSにフリントライターで火をつけながらそう言った。

「そういえば、お前、卓上テレスコープ買ったって？」

「……青葉からか？」

「ああ、対艦娘諜報網ならアイツのほうが上だからな。人間の意地汚

いところはまだ俺の方が上だがね。……星探しをする気か？」

「……まあね、星を眺めるのも悪くないと思つてさ」

未練がましい奴だな。と高峰は笑つた。航暉もつられたように笑う。

「そうだ、俺のところに辞令が来るそうだ」

「もう喋つていいのか？」

「カズは口が堅そうだからいいんだよ」

こう切り出した時点でもう先の展開は読んでいる。

「頼むぜ、相棒」

「おう」

そういいあつたタイミングで屋上のドアが開いた。

「あー！ またしれーかん煙草吸つて！」

「おいおい、これまだ今日一本目だぞ？」

「かつこつけなくていいから、ほら吸うのやめる！」

ここで渋々ながらもまだ吸える煙草をポケット灰皿に押し付けるあたりに力関係が見て取れる。高峰がくつくつと笑つた。

「〃おかん〃を持つと大変だな。カズ」

「全くだ」

「誰がおかんよ！ 高峰さん！」

「それだけ頼りがいがあるつてことだよ、雷ちゃん」

高峰が茶化せば雷は高峰の方にもずばつと指をさす。

「ほら、煙草は紳士のたしなみと言つても体に毒です！ ほらもうやめるー！」

「へいへいつと」

そう言つと三人で笑いあつた。

「雷ちゃんも待つてるんだらう？ ならそろそろ休憩時間は終わるか」

「悪いな、高峰」

「なんの。これぐらいは付き合つよ」

「……これで満足か、『ホールデン』」

暗い執務室で杉田はつつけんどんにそう言った。

「月詠琴音・雪音姉妹を失ったのは痛手だがね。最善といえる結果だ
と思うよ。月刀航暉がちゃんと司令官として機能してくれるように
なったしね。本当によくやってくれた、杉田中佐、いや、大佐と呼ぶ
べきかな?」

「ありがとうよ。こんなクソみたいなミッションで階級上げてくれる
なら願ひ叶ったりだ」

杉田はそう言って肩を竦めた。

「任務はこれで完了だな?」

「うん、ご苦労だったね」

目の前の元帥の張りぼてにそう聞いて杉田は背を向ける。

「ああ、そうだ。君に辞令を出さなきゃいけないかったんだ」

「ほう? こんどは左遷か?」

「そう僻まなくてもいいのに、杉田君」

デスクを開けて書類封筒を差し出す山本元帥。それを受けとって
中身を改める杉田。

「『彼』には君たちが有効らしいからね。この世界を守る盾とならん
ことを祈るよ」

中身を見て再び封筒を閉じる。

「……いつまで軍を牛耳るつもりか知らんが、この人事が身を亡ぼす

ことを覚悟することをお勧めしますよ、 『元帥』」

そう言つて杉田は改めて背を向ける。

「……マキャヴェツリの本を読んだことはあるかな 『ホールデン』？」

「結果さえ良ければ、手段は常に正当化される……だつたかな？」

「アンタにぴつたりだよその言葉。それを単純な解釈しかできなかったマキャヴェリストそっくりだよ、お前は。そんなお前に1つの言葉を送ろう。同じくマキャヴェツリという言葉からだ」

それを言つて半身だけ返す。

「次の二つは絶対に軽視してはならない。第一は、寛容と忍耐をもつてしては、人間の敵意は決して溶解しない。第二は、報酬と経済援助などの援助を与えても敵対関係は好転しない」

「なにが言いたいのかな？」

杉田は執務室のドアを開ける。

「——宣戦布告だ、受け取りやがれ馬鹿野郎」

ウエーク島の奪還。

「……ウエーク島、かあ……」

私の隣で如月はすこし憂鬱そうに笑った。

「大丈夫、如月？」

「大丈夫よ、少しジnkクスはあるけど、それぐらい覆して見せるわ」

そう言つて笑うすぐ下の妹……書類上私の方が姉となっているだけだから……妙な言い方ですがすぐ下の姉といった所でしょうか？

まあそんな関係の如月を見て、私も……睦月も笑ったのです。

「……波が高くなってきたわね」

夕張さんがそう無線越しにつぶやくのが聞こえます。

「でもまあ今回は上陸部隊を上げなきゃいけない訳じゃないし、何とかなると思うわよ？」

こちらは如月の声、それを聞きながら私は背負った艤装を改めて確認。無事缶も指導してるから大丈夫だよね……？

「大丈夫？ 睦月？」

「大丈夫、いっつも整備してるし」

そう答えてから少し唇を噛んだ。今回の駆逐隊のリーダーは私、それは皆を率いる立場にあるということ。だからこそ私はその不

安も全部押し隠さなければならぬ。

「弥生も望月も大丈夫ー？」

小さく笑って私は波を超えるタイミングに合わせて後ろを振り返る。波の谷間を必死に超えていこうとする弥生や望月を見てわずかに笑みが浮かびます。

「大丈夫……です」

「こんな天気で砲雷撃戦なんて気が滅入るよねー」

いつも通りの答え、それを聞きながら私は再び視線を前に。前を進む神通さんが旗艦の537水雷戦隊を見ます。……夕立ちちゃんも吹雪ちゃんも波を超えるのが大変そうです。ひとり神風型ながら夕立ちちゃんたちを誘導する疾風ちゃんは私が見ていることに気がついて、ニコリと笑って波を超えていきました。……私よりも小柄なのに安定して波を超えていくところはさすが先輩だなあと感心してしまいます。光の当たり具合によっては鳶色にも見える黒髪もこの薄暗い天気では黒ずんで見えます。それが逆にお気に入りで入ると言っていた錨のマークが入った髪留め（如月があればバレッタって言うのよと教えてくれた）を目立たせていました。

そんなセーラー服姿の先輩を見ている間に私も波の谷間に向けて落ちていきます。このままでは波の谷間から上がる波に突っ込んで完全に海に飲まれてしまいます。タイミングを合わせてつま先を浮かせるような感覚で後方に荷重、加速度を体全体で受け止めるようにして波を登ります。一瞬コントロールが効かなくなる瞬間があったからもしかしたら一瞬だけブローチングに近いことにもなったのかもしれません。

「むー……難しいのです」

この嵐を超えればもうすぐウエーク島。この嵐を超えても緊張が続くことには変わりありません。気を引き締め直さなければ……。

「大丈夫、大丈夫だから……」

そう言い聞かせながら前へ進みます。嵐を抜けるまで後2時間程、波の飛沫を感じながらひたすらに前へ向かいます。

暗雲垂れ込めるとはこの時のためにあった言葉だと思いながら主砲弾を装填。

《こちら夕張。飛龍艦載機より入電、敵艦隊見ゆ。方位345、距離1万7千！ 航空戦力確認、航空戦が私達より先に始まるわよ！ 対空対艦戦闘用意！》

所属する553水雷戦隊の旗艦の夕張さんからの報告を聞けば北北西微北から敵艦隊、私は対空機銃を背負った艤装の横から引つ張り出して左手に持ちます。対空戦のエリアに入るなら主砲弾の威力よりも弾数が必要になります。

《私が先頭に出るわ。輪形陣に移行、衝突の危険を考えて各艦離散1500》
スタガツト

夕張さんが先頭で私と如月、弥生、望月の5隻で輪形陣。私は後続艦に発光信号を出してから左翼へ。

《あれ……わたしが中心？》

如月の声に笑う気配がする。夕張さんでしょうか？

《お守りしますよ、姫様？》

夕張さんの声に噴き出しかけた。右手に見える如月の衝突防止灯コリジョンライトがぼうつと光る。そういえば如月中心で守ろうってのはサプライズで隠してたんだっけ？

《あらあら……旗艦の夕張さんに代わって対空指示を出せってことかしらっ？》

《照れ隠しで毒吐くのやめようぜ如月ねーちゃん》

望月のどこか呆れたような声を聞きながら私も無線を繋いで、努めて明るい声で話しかけます。

「如月も頑張らないと、みんなで全部落としちゃうよ？」

《あらあら、ならもつと強く、美しく決めなきや、ね？》

その声はいつの通りの声に聞こえて————わずかに硬い。弥生や望月は……気がついてるだろうか？ なんとなく気がついてない気がします。

(意識しないってことの方が難しいもんね)

ウエーク島は「純粋な船だったころの如月」が沈んだところ。私のご先祖さま……って言っているのかわからないけど、船としての「睦月」も参加したウエーク島攻略作戦。それを再現し、その上でウエーク島を奪取すること、これが今回の任務。私の記憶の奥底で何かが警鐘を鳴らしています。……如月や疾風ちゃんにとってはこの海域は因縁のある場所なのです。

「大丈夫、変えられる。今のみんななら変えられる」

《……そうだね。変えよう、みんなで今、歴史を変えにいこう》

無線に乗せてしまったらしくて、独り言に夕張からの答えが返ってきてしまいました。少しだけ恥ずかしい。

《————533 飛龍より553、敵航空隊がそっちに向ってる。

こっちも追いかけるけど到達前の迎撃は無理そう！ ごめん！》

《553夕張了解！ 対空電探コンタクト、こっちでも捉えたわ。この数なら何とかするわ。————ということよ。対空戦用意！》

対空機銃のセーフティを解除、送られてきた電探情報の方位に機銃を向ける。暗雲に紛れて姿は見えない。

でも！

「てえええええええええいっ！」

機銃の撃鉄を引く。機銃を横向きに構えて反動で銃口をスライドさせながら引金を引けば小口径の弾の帯ができる。ワンテンポ遅れ

て虚空に花が咲きました。

《ナイス睦月！ この調子で行くわよ！ 左舷対空戦開始！ 弥生！

右舷警戒頼むわね！》

夕張さんの声が無線に乗る。夕張さんは今回換装可能な武装マウントには機銃を満載しているだけあつて一段と濃い曳光弾の帯が走る。その曳光弾の帯の隙間を埋めるように鉛玉が駆けているはずだ。

如月の弾幕も頭上を越えていきます。白い曳光弾が仄暗い雲を流れるほうき星のように……そんなことを考えて戦闘中にこんなことを考える余裕がある自分に驚きながら前進。空になった弾倉を落とすつつ新しい弾倉を叩き込む……タクティカルリロード、もう体が馴染んだ動きで初弾を薬室に送り込み機銃を再度空に向けた時にはもう敵の艦載機を目視で確実に追える距離になりました。この天気で見えるということはかなり近いことになります。

「いっけーっ！」

無我夢中で引き金を引きっぱなしにしたままスライド。無駄玉が多く出ても今は確実に落とすことを最優先にします。

《睦月、下がって！》

右から衝撃、敵の機銃を浴びたらしい。視線を追えば頭上を艦載機が駆けていきます。後を追うように機銃弾の帯を作れば火を噴いて爆散する。

「はあ、はあ……」

心拍数が上がる。……機械の体は適正な心拍と呼吸を保つはず。息が上がると言うことはそれだけの酸素を消費したと言うことで、体のどこかに無理が生じているということになるのですが……。

「今は、無理をしない」と

警報装置を解除。一時的に痛覚を切ります。カキンという金属の音と共に薬室を解放して止まった機銃をとっさに振りつつマガジンキャッチを押し込み弾倉を振り落とし再装填。上空の空気を裂くように右舷側から機影が飛び込んできました、両翼端から細い雲を曳きながらインメルマンターンで反転するそれは――青2本の識別

線を鈍色の空に光らせる、飛龍さんの零戦。

《こちら飛龍、上空支援に入る。遅くなつてごめん。みんな無事だね？》

《こちら夕張、ええ、助かったわ。……一度陣形を立て直して艦隊戦に持ち込みます。睦月ちゃん被弾大丈夫？》

「いくら紙装甲でも機銃ぐらいなら問題ないですよっ！」

改めて痛覚を入れるとわずかに違和感が残る程度、まったく問題なしとは言わないけど十分動けます。これなら大丈夫。

《無茶しないでよ、睦月》

「大丈夫だって、如月こそ無理しないでよ？」

如月の声に肩を竦めると、無線の奥でくすくすと笑う気配。

《睦月ねーちゃんが言つても説得力ないとおもうなー、航空機に向つて距離を詰めるのはかなり無茶だからねー》

《たしかに一瞬、ドキッとしました……》

望月の声に続いて弥生の声。……そこまで無茶したかなあ。

《ふふっ……私を守ろうとしてくれたのかしら？》

そのタイミングで聞こえた如月の声にドキッとしました。

「べ、別に如月だけを守ろうとしたわけじゃないよ？ 艦隊みんなを守るなら攻撃できる時間が長い方がいいから……」

《でもちゃんと陣形は守つてね？ 前進していくから見ているこつちはちよつとヒヤツとしたのよ？》

「ごめんなさい……」

《でもありがとうね。おかげでこつちでも助かった》

夕張の声を聞いて少し顔がゆるむのがわかります。役に立てたならよかった……。

《ふふふ……私からもありがとう。睦月お姉ちゃんの姿、かつこよかったわよ？》

「もうっ！ 茶化さないでよ！」

《あら、茶化してなんかいいわよ？》

うふふふと続く笑い声に言い返すけど、それが互いに照れ隠しなのは暗黙の了解です。

《さて、もう一度気を引き締めて行くよ、右舷艦隊戦用意!》

そこからの艦隊戦自体はこちららに有利に進んで、川内さんや那珂さんが上手いこと相手の頭を押さええてくれて挟撃できたのが功を奏しました。

《これで……終わりがしら?》

「かなあ……」

如月の声が無線に乗る。案外あっけなく終わってしまったというのが正直な気持ちだったり。

《……ごめん、こちら蒼龍。天気がさすがに危険域だから航空隊を撤退させます》

《こちら537神通、了解しました。無理を言つての航空支援でしたし、ここまで航空支援をさせていただいて感謝しています》

《こちら553夕張、こちらも了解です。帰還時どうぞご武運を》

周囲は次第に強くなる雨に強風で波が優に3メートルほど、僚艦を覆い隠してしまうほどの波だから結構怖い。

《周囲の海域クリアを確認したわ……これでピーコック岬側も大丈夫そうね》

夕張さんの無線にほっとして如月の方を振り返って……全身が凍りつく感覚を覚えました。

「きゃんら——!」

叫んで手を伸ばしても手が届かない距離。如月の頭上で反転する艦爆機。機銃の銃撃も間に合わない。

なぜ、なぜ気がつけなかった!

爆音と同時に暗い雨に紅色の柱が反射します。

「そんな、なんで、なんで……!」

真正面からの波がもどかしい。その波を最速で駆け上がり、頂点に立った瞬間、一瞬、如月の笑みが見えた気がして、直後、如月が波に呑まれる。

「き、如月——っ!」

「……なんてこともあったわねえ」

咸臨丸の船内で笑みを浮かべる如月の前で、私も苦笑い。何もこのタイミングで思い出さなくてもと思うのは正直ナイショです。基地を放棄しての撤退戦をした直後で思うところがあるのはわかるけど、出撃終わったタイミングでなんで自分が沈み“かけた”話をするんだろう……？

「またウエーク島攻略作戦があることになるのね。同じ島を三回も攻略しなきゃいけないってなると何かの縁を感じるわね」

「今度こそちゃんと沈まずに完遂させないとね。あんなドキドキ感もう懲り懲りなんだからね？」

「わかってるわよ」

如月は優しく笑みを浮かべながら小声で言った。そしてその笑みが、どこか心に引っかけました。

「如月……本当にあの時、あれだけだったの？」

「……何が？」

「今だからわかるんだけど……如月の損傷で無事にウエーク島の砂浜に押し流されて助かったっていうのは、少し無理があるように思うのね」

そう言うとい瞬如月の目が揺れました。

「……そうよね。睦月なら気がつくわね。対潜のために潮流の流れや

水温まで考えてソナーを使える睦月なら」

「あの時の風向きは南からだし、あの時の波はウエーク島から離れる方向だったよね？　なら動力喪失で漂うしかない如月があの海岸につくには……」

それを聞けば如月がクスリと笑いました。

「私がいみんなに見つけてもらえるまでの間……何も覚えていないって話したの覚えてるかしら？」

ゆつくりと頷くと如月は笑みを深くした。

「あれは半分本当で半分嘘。自分でもはつきりとは覚えてないから幻覚か何かだろうって思ってたんだけど……電ちゃんがヒメちゃんを助けてから、なんとなくあれが本当のことだったんじゃないかって思えるようになってっちゃんね」

「あれって……？」

如月は少し躊躇うように口を噤んで、そっと囁いた。

「懐かしい子に……あつた気がしたの」

「懐かしい子？」

「夕月……覚えてるでしょ？」

それを聞いてはっとしました。だいぶ前にいなくなってしまった人懐っこい笑顔を思い出して、自然にしゅんと目線が落ちてしまいました。

「忘れるわけ……ないよ」

「うん、私も覚えてる。『前の戦争』だと私達の中で最後まで生き残ってたあの子が、真っ先にいなくなっちゃうなんて、信じたくなかったから……」

如月の声もどこか悲し気で、なおさら視線が落ちてしまいます。そうして見えてしまった睦月型バッチと呼んでいるピンバッチを見て、もつと胸が締め付けられました。金色の三日月型のバッチを作ったのも、夕月がいなくなったのがきっかけで作ったものです。私たちが姉妹艦であることを忘れないように、いなくなってしまった姉妹を忘れないように、いつか自分が沈んだ時に『忘れないでいてくれるように。』

「あの子にあつた気がしたの。……仲間を守ろうって気持ちは人一倍だったあの子だから、もしかしたら私のことを覚えててくれたんじゃないかって、そんな気がしてね」

如月の言っていることを信じるなら、如月を助けたのは深海棲艦と言うことになります。これを言ったのが如月じゃなかったら私も信じなかったかもしれないし、ヒメちゃんを電ちゃんが助けてなければ、気のせいの一言で済んだかもしれない。

「沈んだ艦娘が深海棲艦になるって噂、……信じたくなくて、私もあれは幻だっと思ってたんだけどね。なんだか、それもあり得るのかなあって思えるようになってしまった」

そう言うのと如月はそつと私の肩に手を乗せてそのままそつと抱きついてきました。

「ねえ、睦月。私達、何と戦ってるのかしら？ ヒメちゃんを電ちゃんが助けてから、余計なことばかり考えちゃって……、私を助けてくれたのが深海棲艦なら、わたしたちが戦う相手は……」

ゆつくりと抱き返す。如月の体は少しだけ震えていました。声をかけていいのか、悪いのか……わからないけど、それでもきつといいんだと思いたい。

「……私たち、沈んだら深海棲艦になっちゃうのかなあ。深海棲艦になつて、みんなを襲うのかなあ」

「大丈夫だよ。沈まなければいいだけの話だもん。ちゃんとみんなで乗り越えていけばいいだけの話だもん」

ゆつくり抱きしめる。やつとあの時のことを如月が話せるようになったんだろう。今はそれだけできつと大丈夫なのです。

「怖かったね。大丈夫、お姉ちゃんがついてる。今度こそ、みんなで乗り越えていこう？ 如月は私が守るから」

「うん……うん……！」

怖くて怖くてたまらなかつたんだと思う。誰かを怖がらせたくなくて、誰かに嫌われたくなくて、その恐怖を吐きだすことも出来ないままずっとこうしてきたのかもしれない。

「大丈夫だよ。私は如月を信じるし、ぜつたいに味方になるよ。だか

ら大丈夫」

如月の肩に回した手をポンポンと叩きながらそういうえば、如月の頭が上下しました。頷いたらしい……きつともう声に出す余裕もないんだと思います。

噛み殺した泣き声が、二人しかいない船室に響きます。私も少しだけもらい泣き。

「大丈夫、大丈夫だよ。大丈夫」

ひたすらにそれを繰り返すしかできないけれど、それで如月が少しでも楽になるのなら、きつとそれに意味があるんだと思う。

「大丈夫、睦月がついてるから……今度こそ、みんなで乗り越えよう？」

今度こそ、守り抜く。〃みんなで〃生き残る。

そう思いながら如月の背中を叩き続けました。きつと今はこれでいいんだと思います。

INTERVAL 第50 即応打撃軍設置準備室編
INTERVAL 01 譲れないものがあります

二月、それは乙女にとっては見逃せないイベントがある月である。

「うふふ、うふふ、うふふふふふ」

「三三七拍子で笑わなくてもいいんじゃないかなあ、如月？」

同室の如月が嬉しそうに笑う。その笑い方を聞いて振り返るとベッドにうつ伏せなつて何やら本を読んでいる如月がニマニマと笑っていた。足が上下にゆったりとぱたぱた揺れる。

「だって、バレンタインよ、バレンタイン。司令官にいろいろあげたいじゃない」

「それはそうだけど……」

「それに横須賀ここなら設備もあるし、ウエーク島の時に貯まりにたまつたお小遣いもあるしね」

お小遣い……水上用自律駆動兵装は兵器であるから本当は給与が出ることはない。それでも雀の涙ほどではあるがいくらかもらえることが通例だ。それはほとんどの場合、司令官本人の財布から落ちている。

「それは……そうだけど……」

「なあに睦月、躊躇っちゃって」

動いていた足が止まった。

「せっかく大きな基地にすることだし、大好きな司令官に思いを伝えるチャンスじゃない」

「そんなこと……！ なくは……ないけど……」

今いるのは横須賀鎮守府、ウエーク島基地を一度放棄した関係で一度横須賀に戻ってきてきていたのだ。そのまま第50 太平洋即応打撃群設置準備室勤務になるとは思つてなかつたが。

「なーにをためらつてるの？」

「……私なんかが、チョコあげて嬉しいのかなあ……」

「睦月」

弱気な声を如月がびしやりと叩き切った。

「〃なんか〃とかはやめなさいな。そういうネガティブな発言は自分の価値をそれこそ落とすものよ。それに……このまま電ちゃんたちに司令官とられて、睦月はそれでいいの?」

「私は、そりゃあ、提督のこと好きだけど……提督は……」

「——人を好きになるのに相手の意志は介在しない?」
「え?」

如月はそう言うのと微笑んだ。

「好きになるのに相手の意志は関係ないわ。好きになるのも嫌いになるのも睦月の自由よ? だから睦月がしたいようにしなさいな。それにね、睦月」

如月はゆつくりとベッドから離れ、睦月の隣に陣取った。

「女の子からチョコもらってその女の子を嫌いになる殿方なんていないし、睦月のことを大切に思ってくれているからこそ、睦月を即応打撃群にスカウトしたんじゃないの?」

「そうかも……しれないけどさ」

「もう、そんなうじうじしないっ! 女は度胸よ!」

如月さんにまかせなさい! と如月が言っただけで微笑んだ。

そして来たるべき当日である。考えることはみんな同じらしく艦娘が使えるキッチンにはいろいろな子が詰めかけていた。

「これ……こんなところでできるの？」

「大丈夫よ。スペースはもう確保してあるから」

如月が笑う。この状況でスペースを確保ってどういうことだろう？

「あ、如月おつそーいっ！」

「ごめんなさいね。少し用意に手間取っちゃって」

ガス台と流しがセットになった作業台で島風が手を振った。

「あれ、島風ちゃん？」

「もー。わたしここで14分も待ったんだよー？」

「ごめんなさいね。でもちゃんとあとでチョコあげるから」

どうやら友チョコで島風を釣ったらしい。島風の顔色が晴れ晴れとしたものに変わる。

「絶対だよ！ 私も作るから！」

「誰にあげるのかしら？」

「もちろん微風と天津風！ もちろん如月たちの分も作るよ！」

「楽しみにしとくわ。喜んでくれるといいわね」

「うんっ！」

如月が微笑み返したタイミングでエプロンを抱えた弥生と望月が顔を出した。

「私達が……最後？」

「私たちのチームはね。でも他のところだといろいろまだ大変みたいだけど……」

そう言うと隣のテーブルを見る。吹雪と夕立のチームと……大井がどうやら場所取り合戦しているらしい。

「あれは……あははは……」

場所取り合戦のほずが憧れの人の自慢合戦になっているらしく北上さんのほうがとか赤城先輩だつてとか聞こえてくる。どんどん論点がずれており、そこにちやつかりと雪風たちが場所を奪い取った。それに気がつかないまま言い合いを続ける吹雪と大井。

「あの、吹雪ちゃんも大井先輩も場所取られちゃったっぽ……」

「夕立（ちゃん）は黙ってて！」

「ぽ、ぽいい〜……」

なんて返せばいいかわからないままその様子を見つめる睦月たち。

「と、とりあえず作り出しますか」

「だね……」

そう言つて湯煎用の用意をしていると疲れ切った顔の夕立が声をかけてきた。

「睦月ちゃん……」

「夕立ちちゃん？」

「結局やる場所なくなっちゃったっぽい。できればまぜてほしいっぽい……」

そう申し訳なさそうにいう夕立の後ろではさらに疲れ切った顔の吹雪が立っていた。

「大変そうだったもんね。如月、一緒にやっても大丈夫？」

「全く問題ないわよ？ 一緒にやりましょう？」

「ぽいっ！」

「ありがとう如月ちゃん！」

吹雪と夕立が笑顔になると如月も笑って賑やかな方が楽しいからね、と言った。少々引つ込み思案な弥生は少し恥ずかしそうだ。

「夕立ちちゃんと吹雪ちゃんは誰に渡すの？」

「私はさみと村雨姉えに持っていくの！」

「私は、エニウエトクの時の司令官さんに……」

「あ……」

エニウエトクはウエーク島と同様に一度撤退した場所だ。

「そんな暗い顔しなくても大丈夫だよ、みんなと連絡はしっかり取れるし次の部隊だと夕立ちちゃんと一緒だし！」

「ねー。吹雪ちゃんと一緒に戦うのは久しぶりっぽい！」

そう笑った二人に睦月たちは複雑そうな笑みを浮かべた。

「なら、より一層美味しいチョコを作りましょう？」

「あーい、頑張ろうかー」

望月も案外乗り気だ。それを見て睦月もクスリと笑った。

「じゃあ、張り切つて参りましょー！」

そしてその日の夜である。

「あれ、提督は？」

「司令官さんなら休憩で屋上にいると思うのです」

恐ろしく緊張しながら部屋のドアを開けると電がひとりで部屋にいるだけだった。月刀司令がいるべき席の隣のデスク、そこに座つてのんびりと何かを眺めていた。

「そ、そうなんだ……」

「バレンタインなのです？」

「ひゃつ、いや！ えと……」

「大丈夫なのです。誰にも渡したってばらしませんし、邪魔したりはしないのです」

「そ、そうなの……？ って、あれ？」

そういえば今日チョコレートを作る中に特Ⅲ型のみんなの姿はなかった。一番気合を入れていそうなのに。

「あの、電ちゃんたちは……」

「司令官さんにバレンタインを渡したのか、なのです？」

電はそう言うとき小さく笑って立ち上がった。何かをスカートのポケットに入れながらゆっくりと歩いてくる。

「もちろん、渡したのです……と言ってもチョコじゃないんですけどね。雷お姉ちゃんと協力してちよつといいものを送りました。司令

官さんは受け取ってくれたのです」

「そう……なんだ」

「司令官さんは優しいですから、きつと拒まないと思うのです。せつかく作ったなら、渡してくるべきだと思います」

電はそう言つて笑つたあと、一瞬だけ意地悪そうな似合わない笑みを浮かべ、睦月を指さした。正確に右手の人差し指を睦月の眉間に向けて。

「でも、渡した時点で睦月ちゃんといなづまはライバル同士なのです。睦月ちゃんが相手でも、負けるつもりはないのです！」

そう言つて目の色をふつと柔らかくした。右腕をそつと下ろす。

「司令官さんのことが好きならそう伝えてきてください。それでいなづまと睦月ちゃんはやつとイーブンです。その先で司令官さんが誰を選んで恨みつこなしなのですよ？」

「誰をつてことは……？」

「響お姉ちゃんはお昼にボルシチを持ってきましたし、金剛さんからは高級そうなチョコレートと紅茶の茶葉のセットを持って午後の三時を見計らつて押しかけてきました。他にも利根さんから司令官さんのコーヒーに合わせたビターチョコ。大鳳さんと龍鳳さんからもそれぞれチョコレート、初霜ちゃんと若葉ちゃんの連名でチョコクッキー。笹原中佐からコーヒーミル……どれも手の込んだ本気のプレゼントなのです。特に金剛さんが淹れてくれた紅茶は……悔しいですけど、すごくおいしかったのです」

電がここまで嫉妬を見せるのも珍しい。そこで電は小さく笑う。

「まあその後雪風ちゃんが来たのを皮切りに他の部隊からも義理やら憧れやらでいろいろ来てまして……。特に17:00の終業の後は集中するのが目に見えたので逃げましたけど」

「そう……なんだ」

「あんな真つ青になつてる司令官さん初めて見たのです」

電がくすくすと笑う。あの月刀大佐が逃げるぐらいだ。本当にかのりの量が来たのだろう。そんな中で私の贈つても大丈夫だろうかと思つてしまう。それを見透かしたように笑う電。

「まあ、艦娘の分は受け取ってくれているのです。でも基地の女性隊員からかなりの量が来てて……殊勲十字章の授与が公表されてから司令官さん本当に大変そうなのです」

「あー……。えっと、玉の輿狙いの人たちが寄り付くようになったってこと、なのかな？」

「前からすごかったそうなのです。軍閥出身で家は裕福、将官出世間違いなしで名譽的なステータスも手に入る……そんな打算込々のチョコを受け取って何が嬉しい？　って司令官さんが珍しく毒づいていました」

だからつていなづまにその人達の対応押し付けて逃げられると困るのです。と頬を膨らませるが、それを押し付けられるほどの間柄になつているといふことでもある。それが少しうらやましく思つたことに睦月はちよつと悲しくなつた。

「……ちよつと意地悪でしたね、ごめんなさいなのです」

バツが悪そうな彼女に睦月は慌てて手を振る。

「大丈夫だよ!?　別に……」

別に、何と言おうとしたのだろう。睦月自身もわからなくなつてしまふ。

「ありがとうございます。睦月ちゃんは優しいですから、きつと司令官さんは受け取ってくれると思うのです。自分の部隊に指名したひとりの訳ですし」

「え？」

「あれ？　聞いてないのです？　第50太平洋即応打撃群に睦月ちゃんをスカウトしたのは司令官さんなのですよ？」

睦月はそれを聞いて驚いた。確かに航暉が部隊長になるにあつて人事に囁んでいるという話はきいたことがあるが、自分が推薦を受けていたとは思つてなかつたのだ。

「そう……だつたんだ」

「きつと、司令官さんにとつても睦月ちゃんは大切な人だと思うのです。それでも、私は負けるつもりもないのですよ？　誰よりも司令官さんのそばにいたい。だから私はここでこうしているのです。司令

官さんが帰ってきた時に、迎えられるように」

電はそう言うのと笑った。

「睦月ちゃん、ライバルは本当に多いですよ。笹原中佐に一度言われたことがあるのです。『彼、結構お目にかかれぬ上物で周りも結構狙ってるはずだ。後悔だけはしないようにね』。そんなことを言われたのです」

電の笑みはどこか寂しそうだ、それでも、その目はどこか力が入っていた。

「本当にたくさんの人が司令官さんを虎視眈々と狙っているのです。だから、司令官さんを振り向かせたいなら急いだ方がいいのです」

「……電ちゃんは、それでいいの？ 睦月が提督に告白しても」

とつさに口に出た言葉に電は笑った。

「もちろんなのです。それでも最後に勝つのはこのいなづまなのです」

電の絶対的な自信に満ちた答え、それを聞いて睦月も笑った。

「負けないよ、電ちゃん」

「いなづまだって、負けないのです」

互いに笑みを向けて、それぞれが背を向ける。それが互いに向けたエールであり、互いへの宣戦布告だった。

電の背後で扉が閉まる。電は小さく笑った。

「そっか、睦月ちゃんもやっぱり司令官さんが好きなのですね……」
電はスカートのポケットに右手をすべりこませた。小さな巾着袋を取り出すとその上からそつと指でなぞった。小さな歪な四角のものが一つだけ入っている。中身は彼女と同じものを持っている雷だけが知っている。金属の小さな————男物の時計バンドのコマ。

「ふふっ、負けませんよ、睦月ちゃん」

今彼女はきつと屋上に続く階段を駆け上っているのだろうか。そんなことを考えながら電はデスクに戻った。掌で巾着袋を転がして微笑むのだった。

睦月はそつと階段室から外を覗いた。蛍のように小さく光る煙草の火が見えた。それに仄かに照らされるのは冬の常装である第一種軍服……航暉だ。

(提督が煙草吸ってるどころ……実は初めて見たかも……)

そう思いながら意を決して階段室のドアを開けた。

「て、提督……」

「ん？ ああ、睦月か。どうした？」

航暉は睦月を認めると笑って煙草を携帯灰皿に押し付けた。

「いま、少しだけ、いいですか？」

「休憩中だしな。おいで」

そう言われ外に足を踏み出した。冷気が僅かに肌をさす。マフラーを持ってきてよかった。案外寒い。首筋に息を吹き入れながら持ってきたものを背中に隠してゆつくりと進む。わずかな香草の匂い。航暉の吸っていたものだろうか。

「あの、提督。これ……！ 睦月からのチョコ、差し上げます！」

真っ赤になってしているだろうことは百も承知だ半ば頭を下げるようにしながら両手で持ってチョコレートを渡す。

「……ありがとう、いただくよ」

そつとそのチョコが手から離れた。そのことにほつとするような少し名残惜しいような感覚に睦月は小さく溜息をついた。

「そんなに緊張することないんじゃないか？ ほら、おいで」

航暉は微笑みながら彼女をより近くに呼び寄せた。ドキドキしながらも前に進むと彼の手が彼女の髪を撫ぜた。女の子にしては少々固めの髪をゆっくりと梳くように撫でた。

「いっつも睦月にはお世話になってるしな、こんなチョコレートまでもらつて、自分にはもつたないくらいだ。渡す相手が俺でよかつたのか？」

「そんなことないですっ！ 提督は……私が知ってる司令官の中で、一番ステキな提督なんですよ？」

「面と向かつて言われると恥ずかしいな」

すこし照れたような表情を見せる航暉。前よりも……ウエーク島にいた時よりも少しだけ表情が明るい気がする。

「提督は……睦月たちのことを見捨てないでいてくれましたから」

「見捨てるって？」

航暉が一瞬眉を顰めた。

「どうやっても睦月型だと火力が足りなかつたり積める装備に限界があつたりするので……風見大佐には、提督より前の551司令官には敵を沈めて帰ってくるか、帰ってくるなって言われたこともあつたのです」

それに航暉は答えなかつた。黙り込んでいるだけだ。

「睦月型は特型のみんなが出てきてから旧式だつて言われるようになってしまつて……それからは、運用コストだけが取り柄みたいになられることもあつて。私のせいで妹たちもそう言われてる気がして、ずつとずつと、怖かつた」

「……そんなことないだろ」

「そういつてくれるのは、睦月が知っている限り、提督が初めてなので。提督はちゃんと、私達を見てくれる。カタログスペックじゃなくて、私達を見てくれる。そういう司令官と働けるっていうのは、とつ

てもとつてもうれいんですよ?」

睦月は笑って自分から一步前へ。

「提督、ありがとうございます、です。睦月は今、きつと一番幸せです」
小さな幸せかもしれない。それでも、この幸せに身を委ねてみた
い。

潮風が睦月のマフラーを揺らした。目の前にいる彼はそれを聞いて、小さく口の端を持ち上げた。……その表情の意味を、睦月は読み取れなかった。

「……睦月、睦月が俺の部隊に初めて入った時のこと、覚えてるか?」
「? えつと……天龍さんと一緒にウエークに戻った時、です?」
「そうだ、会って初日に泣き付かれたときのことだ」
「にやつ!」

そう言われ記憶を手繰ると……確かにいきなり泣き付いた覚えがある。一気に血行が良くなったのか顔が火照る。

「その時、俺が言ったこと、覚えてるか?」

「……」司令官として君達を全力で守る。この部隊を君達が絶対に安全だつて思える部隊にしてみせる。この基地なら大丈夫だつて思えるようにしてみせる。……でしたっけ?」

「本当に一字一句覚えてるんだな。……だから、この司令官なら信じてもいいと思えるようになったらでいいから力を貸してほしい。そんなことを言ったと思う」

航暉はどこか辛そうな顔をした。

「なあ、睦月。俺の部隊はそうだったかい? 睦月が帰るべき部隊だつて言えるようになったかい?」

「……そんなこと、聞かないとわかりませんか?」

睦月は一瞬むっとした表情を作った。そして、その表情を保つことが難しくなつて、やはりいつも通りの笑みを浮かべてしまう。

「とつくのとうに、提督の部隊が睦月の居場所になりました。だから

嬉しかったんです。第50太平洋即応打撃群への転属命令が来た時に、まだ提督の部下でいられるって、本当にうれしかったのです」

ゆつくりと航暉の方に手を伸ばし、そのまま彼に抱き着いた。

「電ちゃんから聞きました。睦月のスカウト、提督の希望なんですよね?」

「……電も口が軽いな」

「でも、嬉しいです。提督の部隊に呼んでもらえて」

「元々睦月には第一作戦群への転属要請が出てたんだ。どうも、伝えにくくてさ」

どこか困ったような彼の表情を見上げる。

「君たちの幸せは誰が決めることでもない。君たち自身が決めるべきことだ。それでも、自分のエゴが邪魔をする。今の部隊で如月や弥生たちと一緒にいた方がいいだろうなんて俺が判断することじゃない。睦月たちが大きく飛躍する可能性を俺は潰したかもしれない。それがすごく怖かった」

「提督……」

航暉はそつと睦月の手を外し、ゆつくりとしゃがみ込んだ。視線を合わせる。

「なあ、俺は聖人君子じゃないし、きつと間違う。そして自分は軍人だ。時に非情な命令を下すこともあるだろう。睦月の守りたいものを壊すかもしれない。……それでも睦月はついてくるか?」

「……その質問もいまさらです。提督」

睦月は彼の頬を両手でそつと包んだ。夜風で冷えた頬だった。

「睦月は提督を信じます。だからついていかせてください。まだまだ頼りないかもしれないけど、頑張りますから」

睦月の声に航暉は小さく笑う。

「まったく、ここの所はちっちゃい子に励まされてばかりだな」

「むー、小さくなんてないですよ? これでも対潜のプロですから!」

「頼りにしてるぜ、睦月」

「はいっ!」

航暉が立ち上がった。

「おそらくウエーク島奪還作戦にも第50太平洋即応打撃群は投入されるはずだ。——あの基地を取り返しに行くことになるだろう」

「望むところですよ。負けませんよ」

「だれに向けての宣言だ、それは？」

「もちろん——」

いろんな人にです、と言って満面の笑みを浮かべる睦月。それを階段室から見て如月はくすりと笑った。その横には弥生と望月の姿も見える。

「作戦成功……かな？」

「まー、そうなんじゃない？」

「久々に、睦月があんなに笑ってるの、見た気がします」

無表情ながら小さく威圧感を増しているのは弥生である。

「うらやましくなんかいいです。うらやましくなんか……!」

「——そろそろお邪魔してもいいかしらね。それじゃ、行きましょうか。旗艦睦月の元へ、突撃よー」

「おー」

一斉に駆けだすと睦月がにやっ!?!とすつとんきような叫び声を上げた。それを聞いて航暉も笑う。彼の左手には睦月からもらったチョコとアルミの無垢の輝きが光る腕時計があつた。

「大和、少し相談がある」

そう切り出したのは彼女の妹分、大和型二番艦、武蔵である。

「あら、珍しいですね、武蔵から相談なんて。ほら、なんでも言ってみなさい」

至極真面目な顔で向き合う武蔵に大和は微笑んで見せた。可愛い妹はどんな相談をしてくれるのかしら――

「待てど暮らせど勝也が襲ってこないのだが、どうすればいいと思う？」

飛んできた爆弾発言に大和は瞬間的に相談を受けているという状況を忘れた。

「待て待て待て待て。なぜいきなり首を絞めにかかる」

「育て方を間違えました。最初からやり直します」

「大和よ、お前は私の母親か何か――わかった、姉だったな。とりあえず落ち着け。それ以上はいけない」

無理矢理腕を押さえつけ、首から手を離させる。

「……で、何をいきなりハレンチなことを？」

「うむ」

うむではないでしょう、とツツコミたいがとりあえず先を聞くことにした。

「私は常々思っているのだが、勝也は奥手だとは思わないか？」

大和は武蔵が勝也と呼ぶ人物、杉田勝也中佐――四月期から大佐に昇進することが確定しているが――を思い出す。普段から武蔵とは一緒にいることが多い男で、大和にとっても直属の上官にあたる。

「……まあ、普段の言動では気になる部分はありませんが、場を弁えた言動はされるかと思いますが」

「そう、それだ。場を弁えるのは結構だが、弁えすぎるのもどうかと思

う。オフの時でも、もつと男なら、こう……男としての本性をだな、出してほしい。私もいろいろ手を尽くして攻略しようとしているのだが」

「攻略って言いますか普通」

じとつとした目を送ればどこか焦ったように目をそらす武蔵。

「こ、攻略というよりは、攻略されたいというかだな。せ、戦闘指揮の時はあんなに凛々しいのだから、もつとこう、夜もだな……」

「そうですか、遺言はそれでいいですね？」

「だからすぐ首に手を回すのはやめないか、大和」

なぜ私の妹がこんなハレンチな娘に……と不満げに溜息をついた。

「……で？ 私になにをどう相談するつもりなんですか？」

「勝也は……私のことを、どう思ってるのだろうか？」

「ずつとあなたをそばに置いているのに、それを貴女が疑いますか？」

大和が即答すると、武蔵は一瞬言葉を詰まらせた。

「……そういう意味ではないんだ。勝也は……私を一つの個として、どう見ているのだろうか」

そう聞いてから武蔵は視線を落とす。その様子を見て溜息をつく。

「……まさか貴女からそんな言葉が出てくるとは思いませんでしたよ。ひと昔前のあなたなら、兵器でいいとか言いそうなものですが、一つの個として、ですか」

そう言って武蔵の頭にポンと手を乗せた。

「杉田中佐がどういうことを考えているか、私にはわかりませんし、誰に聞いてもわからないでしょう。そこは直接聞くしかありません」

「し、しかしだな……どう、どうやって切り出せばいい？」

「普段の大胆不敵な貴女はどこに行ったんですか」

「……」

「そうですね……どうしてもきっかけが欲しいなら、あれなんてどうですか？」

「あれ……？」

大和はクスリと笑う。

「2月14日、バレンタインです」

こんなな廊下は短かったか、と思うほど、あつという間に杉田の部屋の前まで来てしまった。夕方をとつくに過ぎ、昼間の活気が過ぎた廊下はどこか寒々しい。

「ふ、普段はここまで緊張することなんてないんだがな……」

伊良湖に微笑まし気に笑みを浮かべられながら買ってきた菓子用チョコを大和に手ほどきを受けながらチョコトリュフに仕上げた。その間大和はどこか楽しそうだったのが少し癪に障るが、チョコトリュフなるものを作る知識はなかったので背に腹は代えられない。なんとかラツピングだけは一人でなんとかしたが、なんとなく私の手作りという気がしなくてどうも落ち着かない。

ウイスキーも添えるのもアリじゃないかと思っただが、そのあたりのこだわりが強い杉田に渡すのも気が引け、結局チョコだけを持って部屋を訪れている。

「……」

深呼吸をしてドアをノック。思ったより大きく響いた。力加減がわからない。ええい、ままよ。

「か、勝也、いるか……?」

『武蔵か、入れ』

部屋の中からいつも通りの声。こちらはこんなになっているのに、どういふつもりだと、八つ当たりの感想を持つ。

「入るぞ……」

ゆつくりとノブを回す。隊舎でも一番端にあるこの宿直室は杉田がほぼ毎日入り浸っている関係で、実質的な杉田の私室と化していた。中には杉田の私物の情報端末などが持ち込まれており、どこか甘い煙草の煙に燻された部屋になっていた。

「どうした？」

左手に挟んだ煙草から目を上げた杉田がドアを開けた武蔵を見る。

「か、勝也……チョコレートを用意した……その、疲れたら、食べてくれ」

「武蔵が菓子を持ってくるとは珍しいな。こりやありがたくとっておくかな」

「え、遠慮はいらん！ た、食べてくれ」

普段より声のトーンが高い。自分で話していてもわかるくらいだから杉田も変に思っているだろう。その証左にどこか笑っている。

「なら今食ってくか。どれ」

そう言って棚を漁る杉田。

「飲み差しで悪いが、チョコといえはウイスキーだろ。本当はもつといいのを飲みたいところだが、今日はこれぐらいで勘弁な」

そう言って武蔵に投げられたのは銀色のスキットルだった。開けるときついアルコールの匂いが鼻をつく。

「勝也は飲まないのか？」

「まだ書類が終わってなくてな」

そう言って肩を竦めると武蔵の渡した箱を開けた。

「ほーう、こりやあ手が込んでる。武蔵も料理できるんだな」

「や、大和に少し手伝ってもらったのだが……あんまりうまくいかなくてだな……ってー！」

「ん？ 十分に旨いぞ。これでうまくいってないっていうなら武蔵も舌が肥えてる」

すでに二つ口に放り込んで杉田が笑う。

「リキュールはラムか。オーソドックスでいいじゃねえか」

「……勝也よ、お前も十分舌が肥えてるじゃないか」

「酒に係る部分だけさ。ツマミだったりでこだわるようになっただけ」

だ」

チョコレート之余韻を楽しんでいるのか煙草には手を付けず笑って天井を仰ぐ杉田。

そろそろ、聞かねば。と武蔵は思う。このままだと『ありがとうな、ごちそうさん』とか言われて場を畳まれてしまう。

唾を飲み下し、口を開く。

「……なあ、勝也」

「一線を超えるようなお願いはお断りだぞ、武蔵」

「……え？」

いきなり出鼻をくじかれ、動きを止めた。

「今から2時間ぐらい前にな、大和が俺のところをやってきた」

あんのバカ姉、と武蔵は心の中で罵るが、言葉にはならない。それ以上に杉田が真剣な顔をしていたからだ。

「大和はただ、武蔵の願いを聞いてやれと言ってきただけだ。それ以外は何も言っていない。だが、それで察せないほど俺はそこまで純朴ではなくてな、なんとなくだが察しはついた」

視線が落ちる。

「……私では、不釣り合いなのか。勝也にとっては」

「いんや、そんなことはないさ」

「ならなせ——！」

声を荒げそうになって、飲み込んだ。マッチを擦る音。いつもとは違う銘柄らしい煙草に火をつけていた。丁子の弾けるようないつもの音はせず、静かに燃える煙草を吹かす。

「……軍隊、特に陸軍での娯楽というのは酒に煙草に賭博に女と相場が決まっている。俺は陸軍にいたころはそのどれも嗜んだもんだ。最初はどれも苦手だったが、上官の誘いとあらば断れねえ。人付き合いのツールとしてどれも覚えた。だが、女だけはもう抱かないと決めた。……とくに褐色の肌の女だけはな」

「……なぜだ？」

「痛むのさ、左腕が」

そう言って杉田は左腕の付け根を擦った。その服の下に義手の

接続部があることを武蔵は知っていた。

「……幻の痛みか」

「そんなものじゃないさ。これは、そうだな……クソ野郎がヒーローとやらになろうとした神罰、だな」

「……なにがあつたんだ？ 勝也の陸軍時代に何があつたんだ」

杉田はしばらく黙っていた。煙草を一本吸いきるぐらいの間が空いた。

「……東北地区での難民の暴動が、ゲリラ活動に切り替わった後のことだ。市街地戦が沈静化して自衛陸軍の緊急対策チームが解散になった後も、俺たちの隊は東北に留め置かれた。目的は残党狩りだ。山の中の隠れ里のように偽装された難民の村を探し出しては一つ一つ確認し、ゲリラが隠れていないか探し出す、それが任務だった。だが、確認とは名ばかりで、村は見つけ次第いちやもんを付けて焼き払うのが日常茶飯事だった。特に、小隊長が不機嫌な時はそんな感じだ。俺は狙撃手として、大抵木の上からそれを、ライフルスコープ越しに見ていた」

口から紫煙の残滓を吐きだして目を細める杉田。その目はどこか遠くにピントが合っていた。

「あの日も、そんな日だった」

そう言って、新しく煙草に火を付けた。

もう2月の後半でな、小雪が降っていた。あの日の村は“あたり”だと小隊長が言ったのをよく覚えている。雪の寒さと足場の悪さで皆ストレスが溜まっていた。そのストレスの発散ができるから“あたり”だった。とりあえず見かけたら引き金を引いて、あとで武器を見つければいい。武器は肥後守でも鋏でも鉞でもなんでもよかった。それで打ち掛かってきたといえればよかった。できれば若い女が沢山いるといいなと小隊長は下品に笑っていたものさ。本心はどうであれ、それにはそうですねと答えるのが小隊内部でのルールだった。俺もそう言った。

その日見つけた村はものの30分もかからず“鎮圧”できた。自衛陸軍の正式装備をもつ軍人と、持っけていても狩猟用の空気銃しかない難民だったら、比べるまでもない。文字通りの瞬殺だった。その時、俺は村の北に立っていた一番大きな杉の木に登って、木の幹に寄り掛かってサプレッサー付きのスナイパーライフルを構えていた。隊長たちがその村を“検分”をしている間も、俺はずっと木の上からスコープ越しに見ていた。威嚇で引き金を引いたぐらいだったかな、その時は。

その村は任務的に見たら“はずれ”だったが、小隊長にとってみたら“あたり”だった。ちゃんと難民の村で、抵抗をまともに受けず、軽快に引金をひけた。それでよかった。年を取った爺さん婆さんしかいない村でも、まともに武器を見つけられなくてもそれでよかった。ゲリラが持つていましたと提出するための武器は調達してあった。それをさも村で鹵獲したように提出すればいいと、小隊長は悪ぶることもなく言いきつたよ。

……少し話題が逸れたな。その村の検分が終わって俺は小隊長が俺を呼んだ。木から降りてこいって言ってな。ところどころに赤く溶けた雪に降ってきた雪が消えていく。そんなものを見ながら村の中心まで入っていった。そこには俺以外の小隊員全員が揃っていた。小隊長は難民の女の子を連れてきた。薄いボロを纏っただけの少女

の髪を掴んで半ば引きずるようにして連れてきた。歳は多分14か15つてところだろう、下手したらまだ12か3かもしれない。まだ華奢な女の子だ。褐色の肌に赤い目……口からとつきに出たらしい悲鳴は、タガログ語だった。

小隊長はその子を俺の前に引き出して、その子に後ろから銃を突き付けてその場に立たせた。そしてへらへら笑いながら言ったんだ。『杉田、お前はいつも木の上から俺たちを守ってくれる。殺したゲリラの数は少ないが、俺たちの恩人であることには変わりない。だから、これは俺たちからの感謝の品だ』

絶句した。そこまで腐り切っているとは思わなかったからな。言葉を継げなかったら小隊長は女の子を後ろから小突いて前に突きだした。『どんなにまずいレーションだつて一口目はうまい。なんだつて最初が一番いい。だからお前に最初を譲つてやるんだ。ありがたく味わえ』と言いだした。

そこに来てやつと気がついたんだよ。女の子と俺が同じ肌の色をしていることにさ。小隊長は俺を試していた。小隊長は俺のことを味方かどうか試したんだ。この女の子を罅れば小隊長は俺のことを仲間と認めただろう。そうせず少女を守ろうとすればゲリラに加担する反乱分子として俺を撃ち殺すつもりだろう。ご丁寧に小隊長が持っている銃は鹵獲したことにするゲリラ御用達の銃だった。

日本国自衛陸軍が守るのは日本国民だ。難民は、国民じゃない、守る必要はない。そもそも山にこそこそすまなきやいけない難民はゲリラだ。だから殺すのも罅るのも自由だ。そういう理屈だ。母国にも見捨てられた難民なら煮ても焼いても自由らしい。小隊長はそう考えているみたいだった。それが俺の肌にとれだけ馴染まなくても、部隊の規律は絶対だ。軍でまともに生きようと思つたら従うしかない。

女の子は恐怖の眼で俺を見ていた。後ろには銃を突き付けている男がいて、日本語がわかるのかわからないのかは知らないが、俺がその女の子の命を握っていることはわかったんだろう。恐怖のせいなのか2月の東北で過ごすにはあまりに薄い服のせいなのか、酷く震え

ていた。その子に小隊長が服を脱ぐように英語で言った。

小隊長に逆らっては部隊の居場所はなくなる。ここで言うことに従っておけば、俺は安泰だと思った。だが、俺にはそれができなかった。タガログ語でこっちに来るよう叫んで女の子を引き寄せた。引き寄せた体が異様なほどに冷えているのをよく覚えててな、今でも思い出す。

タガログ語で声をかけ、女の子を庇った時点で、小隊長や部隊にとって俺はもう抹殺対象だった。全員俺に向かって銃を向けてきた時は変な笑いが出たのを覚えてる。

小隊長は俺を嘲るように『正義の味方のつもりか』って言ったんだ。そればかりは言えて妙だと思っただよ。俺は正義の味方にはなれっこない。それでもあの時俺は俺であるために、正義の味方であらねばならなかった。正義の味方になるしかなかった。

だから、俺は小隊長を撃った。そこから先はあまり覚えてない。必死だった。撃って撃って撃ちまくった。部隊の全員を撃ち殺した。気が付いた時に残っていたのは恐怖で泣きじやくる女の子と俺の使い物にならなくなった左手だけだった。

「……へりを呼んで、俺は仙台の病院に緊急搬送された。左手は使い物ならないから義手にするしかないと言われた。俺は実家に仕送りをしなければならなかったから軍に居続けるしかない。迷わず義体

化を選んだ。御咎めは報告義務違反で減給という軽い措置で済んだが、同属殺しと味方からも言われることが多くなった。そこから先は針の筵だったよ。深海棲艦登場後に海軍に移るときはそれこそ逃げするようにやってきた」

煙草はとつくのとうに燃え尽きていた。口にしないまま燃えていく灰を灰皿に落とした。

「女の子は政府の公営孤児院に一時的に収容になったらしいがあの村以降は会ってない。女の子が俺に会いたいと言っていると聞いてその孤児院を訪ねたことがあったが、俺が行く前にマニラに送還されたらしい。身寄りもないが、日本に置いておくことも難しかったんだろう。その女の子の行方は知れず、それっきりだ」

杉田はそういつて小さく笑った。

「その後、女を抱こうとしたこともある。だが、そうするたびに、あの日のことを思い出す。苦味と痛みとしてな。俺は正しいことをしたはずだ。だが、それはあまりに遅かった。あの小隊長は小隊長としてふさわしくなかった。だが、それを俺はずっと黙認してきた。小隊長とどこが違う。自分の血にフィリピンの血が混じっているから助けたのかもしれない。あの時あそこにしたのがフィリピン人ではなかったら小隊長に従っていたかもしれない。——そんなクソ野郎がお前に触れることを、俺は許せん」

そういうことだよ、武蔵。と杉田は呟いて煙草を灰皿に投げ捨てた。

「……くだらないな」

武蔵の言葉に杉田が眉をひそめた。

「……今なんつった？」

杉田の声が尖る。それでも、その先を飲みこむことは思いつかなかった。

「聞こえなかったか？　くだらないと言ったんだ」

そういつて武蔵は杉田の右手を押さえ彼の懐に体を滑り込ませた。

「私に触れていい人間は私が決める。男のくだらない意地やら罪悪感に左右されることではあるまい」

そういつて杉田の顎に手を添え、唇を重ねた。煙草の味とチョコの甘さが混じった複雑な味だった。

ゆっくりと唇を放すとどこか驚いた顔の杉田が見えた。

「——私は、お前が好きだぞ、勝也。お前の葛藤も痛みも忘れさせてみせる」

笑って見せる。彼はまるで時間を止められたようにピクリともしていなかったが、嘔き出すようにして笑った。

「全く、強引にもほどがないか武蔵。キスはそんないきなり奪うもんじゃねえ、もっとロマンチックにやるもんだ」

「なら勝也がレクチャーしてくれ。いかんせんこちらはそんな経験がないからな」

「俺に付いたことを後で後悔するなよ」

「そんな脅しでこの武蔵が怯むとでも？」

それには答えず杉田は左手で武蔵を引き寄せた。

「一月ほど早いが、お返しだ」

もう一度二つの影が重なった。

大和は溜息をついてドアの前から離れた。

「まったく、どうしてあんな豪快な妹に育ったんでしょうか」

そう憂う彼女だがどこか笑みが浮かんでいた。

「ま、淑女へのレクチャーは杉田中佐にお任せしますかね」

そう呟いて、一応用意しておいたチョコレートを仕舞った。地味に独占欲の強い妹はそれで嫉妬してしまうだろうから。

ハッピーバレンタインです。武蔵、提督。

大和は笑って自分の部屋へと戻るのだった。

「はい、どうぞなのです」

ノックを聞いて電は顔を上げた。

「どうも恐縮です！ 青葉ですう！」

ひよこつと顔を覗かせたのは青葉だ。第50太平洋即応打撃群設置準備室の執務室によく出入りしているから（高峰がオブザーバー参加しているためだ）珍しいことではないが、その顔は……プライベートル用の笑顔だ。

「月刀大佐はお休みですよね？」

「なのです。司令官さんはどうも頑張りすぎるきらいがあるのでこれぐらいにコンスタントに休んでくれると助かるのですが……もしかして司令官さんにご用事なのです？」

「いえいえ、電さんや雷さん、あとは金剛さんあたりに面白い情報を提供しようかなと」

「司令官さんに知られたくない内容ですか？」

電が胡乱な目を向けると青葉は慌てて手を振った。

「そんなことはないですよ、ただ司令官さん『が』知られたくない話題かもしれないけど……まあ、今回は口ハで情報差し上げますよ？」

青葉が首の後ろからQRSプラグを引き出して電に差し出した。電は僅かに躊躇いながらもそれを受け取って首の後ろに差し込んだ。電腦同士は直結されるとその刹那にデータが送付されてオフラインになった。この情報以外はないということだろう。コードを返しつつ、電は注意しつつ……電腦ウイルスなどがないことを確認しながらファイルを——画像が数枚入れられたフォルダを開いた。

「……………んっ!？」

「ちなみに画像は今日の朝0821のものです」

それでは恐縮ながらお先に失礼と言い残して青葉が去っていく。電は呆然としながらその場に立ち尽くした。

その画像ファイルは超望遠のレンズで狙ったのだろう。少々荒い画像にブラッシュアップをかけたものだ。横須賀鎮守府のゲート、そ

この門が大写しになっている。そこを超えて横須賀鎮守府から出ていく人たちが映っていた。映っているのは4人。ひとりは門兵。ひとりは私服姿の航暉だ。私服と言ってもスーツのようなジャケットに同色のスーツでにこやかに微笑んでいるのがわかる。それ自体はいい。問題は同行者の二人——同僚の艦娘だ。

「へーい！ カズキどういう……！ って、電だけですカー？」

「金剛……さん？」

執務室の扉を蹴破らん勢いで飛び込んできたのは電が問いかけたように金剛である。

「どーいうことですカー！ 青葉から貰ったこのPhotograph！ 若葉と初霜を連れて……！」

その言葉に電は金剛が自分と同じ写真を見ていたことを悟る。

写真には恥ずかしげに目を伏せて頬を赤くしている初霜と、クールに振る舞おうとしているどこか浮き足立っているのが見て取れる若葉が映っていた。

写真を送ればゲートを出ていくその後ろ姿を捉えていた。初霜の背中を押すようにしてエスコートする航暉の後ろ姿。これではまるで……。

「カズキがまさかロリコンだったなんて……」

「いえ、まだそうと決まった訳ではないのですっ！ そういう……訳では……！」

電はそう言うが言うが、言うてからどんどん怪しくなってくる。

そういえば、前のバレンタインでは駆逐艦の子たちからかなりの数のチョコレートをもらっていて、まんざらでもなさそうだった。大人の女性——特に基地職員からの逃げていたのに。

そういえば航暉には浮いた話の一つも上がってこない。顔も悪くはないし、軍人としても人間としても特に優秀な部類に入るだろう。家柄に至っては軍閥のお金持ちで最高クラス、准将への昇格が確定しているとなれば、おそらくは相手を選びたい放題より取り見取りのはずだ。だのにそれを全てシャットアウトしている。女性職員の間では月刀航暉ホモ説が取り沙汰されるほどだと青葉からいらぬ情報

を聞かされたこともある。

もしかして、大人の女性に興味ないんじゃない？……？

そんな考えがほぼ同時に頭を過ったのか金剛と電は同時に首を振った。

「と、とりあえず帰ってきたら少し話してみます……」

「同席させて欲しいネー」

「わかりました。それではそういう方向で行くのです」

金剛は「カズキが帰ってくるまでに今日のWorkを終わらせるネー！」と言つて、執務室を飛び出していった。電はそれを見送って自分のデスクについた。

とりあえずは待つことしかできないがそれすらもどかしくなつていく。

「はーあ、どうしてこんな人を好きになっちゃったのでしょーかー」
そう呟いて、一人で勝手に赤くなつた。言うんじゃないかとすら思う。

それでも考えずにはいられない。

もしも、もしもである。

もしも彼がそういう趣味だったとしたら、自分にもチャンスはあるだろうか？

こつちに来てから……本土勤務で生鮮食品が潤沢に使えるようになつてから、電には毎日続けていることがある。

毎日牛乳を飲むこと。

自分の体は豊かとは言いがたい。どこがとは言わないし言いたくもないが豊かとは言えないのである。義体のリサイズをしなければ大きくなれないことはわかっているが、それでもわずかでも大きくなるような気がするのだ。あくまで気持ちの問題だが。

今の子どもチックな体の方が司令官が喜ぶというのなら、それはそれでいい気がする。

笹原中佐みたいにボンキュッボンな体型の方が航暉の隣に立つには似合う気がしていた。それを目指して努力はしてみたが、もし彼が大きいのが好きではなかったら、今の私の方が彼にとって魅力的なのではないだろうか？

そこまで考えて思う。

そうして彼が私のことを想ってくれたなら、それを行動で示してくれたなら。どんなに素敵なことだろう。

そうしてそれを世間様が知ったら航暉はどう思われるだろう？

電はしばらく冷や汗をかいてから、頷いた。

——自分達のこれは家族愛だからセーフ！

電がそんな風に自己弁護をしているころ、黒いジャケットを翻して月刀航暉は振り返った。

「とりあえずはこの辺りでなにか探すか」

「あの……」

航暉の後ろをおずおずと進みながら初霜は航暉に声をかけた。

「本当に一緒に行くのが私達でよかったですか……？」

「女性にあげるプレゼント選びなんて野郎には選びにくくてね。意見を聞けるだけでも助かるよ」

「それにしても……横浜特区まで出てくる必要は……」

彼らがいるのは横浜特区、旧横浜市——過去には深海棲艦の襲撃を避けるため放棄地区になった地区だが、国連海軍が日本近海の深海棲艦を一掃し、特別区として再興した地区だ。軍の高官や国連職員やその家族などの高所得者向けのブティックから、下町的なマーケットまで揃う関東の一大商業地区になっている。

「大宮あたりまで行けばさらに物が揃うがそこまで行くには時間が足りない。ここで我慢するしかない訳だ」

「我慢つて……。ここ、横浜特区のアップパーブティック街ですよ？」

「それが？」

即答で聞き返されて初霜は絶句した。

「ねえ、若葉……金銭感覚違いすぎて意見が合うかどうか今更ながら自信がないです……」

「大丈夫だ。問題ない。」

その返答にそこはかとなく不安を覚える初霜。その調子で一番いいのを頼んだらどんなものが出てくるのか想像だにできない。

「えっと……とりあえず誰にどういうものを送るかから決めていきましようか……」

「お付き合いいただくと助かる。頼むぞ」

そうして街中を歩きだす航暉と初霜たち、初霜はどうなることやらと冷や汗を掻きながら航暉の後について歩いた。

……のだが、そのさらに30メートル後方で動く影があった。

「こちらバンブーブレード、対象はアップパーブティック街に入った、オーバー」

《こちらブルーリーフ、了解した。そのまま尾行を続ける。オーバー》
「……昼間っから引っ張りだされたと思ったらこういうこと？ 提督も物好きだよね」

「そういう川内は気にならないの〜？」

「真昼間から黒スーツにサングラスってお約束かもしれないけど目立つよこれ」

「気分気分♪」

そう言っつて小さくサングラスをずらしてくつきりとした二重の目を覗かせるのはコードネーム「バンブーブレード」の女性——
—— 笹原ゆうだ。その横では呆れ顔で同じような恰好をした川内の姿も見える。

「で、女の子を引きつれて街にでて、ブティック街で買い物ねえ……」
笹原がにしと笑っつてその様子を眺めていた。その時向かいから出てきた集団に笹原は眉を顰めた。

「あーあ、ここも質が落ちたかなあ」

「あのチンピラたちがどうしたの？」

「あの白のジャケット、善良な市民様の意見を代弁するとか言っつて自分が暴れたいだけの集団。まあ警察も自治警も手を焼いてるらしいんだけど、こんなところまで出てくるんだねー」

そう言っつてる間にも子供連れでなに豪遊してんだというようないちやもんをつけている声が響いてくる。普通の子供連れなら親の後ろに子どもが隠れるのだろうが、堂々と睨み返すあたり、さすが軍属である。直後に響く汚い悲鳴。

「あー、カズ君にケンカ売るから……」

「相手の重心を崩してそのまま吹っ飛ばした……だよな？」

「まあそんな感じ。というより相手がトロすぎ。あれじゃ殴っつてくたさいっつて言っつてるようなもんだしねー。見た目が派手に見えるけどそこまでダメージ入っつてないんじゃないかな」

「で、激昂したところで月刀大佐にかなうことはない、と……」

「うっわ、上手いこと右肩外してる、カズ君チンピラ相手にそこまでやるー？」

「というより初霜に蹴られて涙目とかどうなんだろ」

「まあ艦娘としての機能を殺してはいるけど、まあ腐っつても義体っつてことだね。艦娘二人引きつれた元特殊部隊隊員にケンカ売った時点で死亡確定だよな。あれでアウトレンジ専門の戦術航空管制要員と

か身分詐欺だよ身分詐欺」

あーこわこわ、と気楽に言ったタイミングで笹原の肩が叩かれた。

「横浜特区警察です。ここで何をやっているんですか？」

「……へ？」

私服姿の警官2人組に提示されたのは立体ホロ式の警察手帳。

「えっと、いや、その……？」

「スーツを着込んだ怪しい二人組がいるという通報を市民の方からいただきましてね。御同行願いますか？」

「え、あ、ちよ——！」

そうしてコードネーム「バンブーブレード」の冒険は早々に幕を閉じ、特調六課所属の某同期が火消しに翻弄することになったのである。

高峰が珍しく額に青筋を浮かべてしつかり腰の入った男女同権パ
ンチを笹原に叩き込まんと全力疾走をしていたころ、無事に買い物
を終えた航暉たちは本日最大の危機に直面していた。

「ヘーイ提督ウ、お楽しみだったみたいネー？」

「休日の過ごし方ぐらい自由にさせてくれよ、金剛」

苦笑いでそう言う航暉、同行していた初霜若葉は雷電姉妹と睦月が
満面の笑みでどこかに連れ去った。そのせいか、航暉の前には金剛と
その姉妹+αが揃っていた。どうやら全員金剛が呼んだらしい。そ

のほかにも暁や響がじとつとした目線でお出迎え。大鳳や龍鳳が大規模改装が終わった報告に来た後から付き合わされていた。その他にも利根や筑摩の姿も見える。

「金剛お姉さまをこんなに……」

小さくぶつぶつぶつぷやいているのは比叡だ。そこから先は聞こえなかったが聞こえなくてよかったかもしれない。霧島は眼鏡の反射で目が見えないのが怪しく見える。榛名だけはにこにこ笑顔で航暉と金剛のやり取りを見守っていた。

「まあ金剛さんそこまで責めなくてもいいじゃないですか」

「そうじゃぞー。浮気も男の甲斐性のうちと言うじゃろう？」

航暉にとつては浮気前提で話が進んでいることに少々不満が残る。こういうとあれだが、浮気などしたつもりはないし、そもそも金剛と恋仲になった覚えはない。

「そうだとしても認めた覚えはありませんヨー？」

「買い物に付き合ってもらっただけだよ」

「何を買に行ったネー」

「そこまで今日言わなくちゃいけないか？」

「お姉さまを愛してないんですか!？」

そう詰め寄る比叡に航暉は半歩左足を引いた。

「大切な仲間だと思っているさ。それでも……はあ、なんでお前が捨てられた子犬みたいな顔をするんだよ、比叡。わかったわかった、本当は明日まで黙っておくつもりだったんだがな」

そう言うのと足元に置いたバックから何かを取り出した。

「ほら金剛、おいで」

そう言われて一瞬ぼかんとした金剛が顔を真っ赤にして航暉におおずとお近づいた。

「I present this to you with my thanks. 受け取ってくれるかい？」

差し出したのは真っ白なラッピングがされた小さな箱、それを金剛は震える手で受け取った。

「これ……開けても、okay?」

「もちろんだ」

航暉が笑えば、袋を破かない様に丁寧にテープをはがし、中身の紙箱のふたも開けた。

「……あ」

中身を見て驚く金剛に榛名が声をかける。

「今日は3月13日ですから」

「榛名、わかってるなら止めてくれよ」

「嫌ですよ。女性にとって殿方は自分以上に大切な方。金剛姉様は貴方が心変わりをしたんじゃないかと心配になるのも榛名には痛いほどわかります。そこまで想われていると言うことを月刀提督は知るべきですよ。それで？ 何を買ってきたんです？」

榛名が覗き込んだ先には金の地に黒が乗った小ぶりな缶とクッキーの詰め合わせがあった。

「RIDGWAYSのH・M・B……」

好きだっただろ、リτζジウェイ。と航暉が頭を掻きながら視線を逸らした。

「覚えててくれたの……？」

「……どれだけお茶に付き合っと思ったって」

そう言った航暉はどこか不機嫌そうで、それが照れ隠しであることも丸わかりで……

「——テートクウ！」

金剛が飛びつくもの無理はないと榛名は思った。

「とつてもとつてもうれしいデース！ そうだ！ ちょうどアフターディナーティーの時間ネー！ カズキ、淹れてくだサーイー！」

「今からか？」

航暉が抱きつかれた金剛の体に引きずられるように背中を丸めると、金剛は満面の笑みで頷いた。

「しよがないなあ……。下手でも文句言うなよ？」

「もちろんデース！ 一緒に淹れましょうネー」

その様子を見て霧島と榛名は頷き合った。比叡だけはどこか不満そうである。

「お姉さま……」

「金剛姉様が楽しそうだから良しとしましょうよ、比叡姉様？」

「そうなんだけどなー。なんだかなー」

比叡が腑に落ちない感じで首を傾げたタイミングでドアがノックされた。電や睦月が顔を真っ赤にして、初霜は目を赤くして入ってくる。唯一通常運転なのは若葉だ。

「……ごめんなさいなのです」

電のいきなりの謝罪から向うでも話したらしい。できれば話さないでほしいとは言ったが、お話というよりはO☆H A☆N A☆S I だったららしい。若葉も少し汗をかいているところからも見て取れる。

「まあいいよ。初霜若葉にもすっかり謝っておけよ。久々に紅茶を淹れようか」

航暉が疲れたような表情をしながらも用意を始める。その後ろを金剛が至極嬉しそうについていった。

その後は英国王室御用達の紅茶の味を振る舞った結構な規模のお茶会になった。金剛がストックしていたスコーンなども出てきて夜のお茶を楽しんだのだが……。

「ホワイトデーは明日だっていうのにほぼ今日で終わってしまったじゃねえか」

最後の片づけを終えて執務室の椅子に腰かけた航暉の前にコップ

がごとりと置かれた。コーヒーを淹れてくれたらしい。

「しれーかんは頑張りすぎよ。今日一杯も紅茶飲まなかったでしょ？」

「自分が贈ったものだけ？ 普通に考えて飲まないだろ」

そう言った航暉に雷はそれでも納得しないようだった。

「金剛さんに聞いたわよ？ リτζジウェイの紅茶ってあんまり日本に入っていないでしょ？ 見つけるの大変だったんじゃないの？」

「そうでもないよ。金剛へのお返しはもう決めてあったからな。それよりも睦月たちに何を送るかの方が大変だったよ」

航暉は苦笑いしながら今日のことを思い出す。暁と響にはそれぞれ色違いのテイデイベア、睦月には深緑色のハンカチ、如月にはコンパクトミラーなど一人ひとりに別々のものを買っている。買い物に付き合ってくれた若葉にはチェスボード、初霜には香水の小瓶をプレゼントしていた。

「電、雷」

二人を呼んで航暉はデスクを開けた。引き出しから取り出した小さな箱を二人にそれぞれ手渡した。

「……他の人には内緒だぞ？」

航暉はにやりと笑みを浮かべてそう言った。ラツピングはされていないが化粧箱に入ったそれを二人はしげしげと眺める。持ってみると結構重い。

「開けてごらん？」

航暉にそう言われゆつくりとふたを開ける二人。

「これって……」

「万年筆……なのですか？」

化粧箱の中には黒い艶のある万年筆が入っていた。それと小ぶりのインク瓶が一つ。

「あ、これって……！」

「俺とお揃いだ。若干違いはあるけどな」

そう言ってペントレーに乗っていたペンを振った。二人が持っているのとそっくりなその万年筆はかなり使い込まれていてしっくり

と手に馴染んでいるのがわかる。

「これ、名前が入ってる……？」

インク瓶に張られた手書きのラベルを見て雷がそう呟いた。

「ふたりとも濃紺のインクだが、それぞれ色の配合を変えてある。世界に1つだけの色だよ。月詠オリジナルとでも言おうかな？」

そう言って航暉はどこか寂しげな笑みを浮かべた。

「軍はお前たちに機械としての性能と成果を求めるだろう。でも、それに慣れちゃいけない」

二人の前にしやがみ込んで航暉は頭をそつと抱いた。

「人間らしさを失うな。感情を失うな。お前たちは代替が効くような機械じゃない。世界でたった一つの色（こせい）を持つ人間だ。俺はそう信じてるし、信じていたい」

少女特有の温かみを感じる二人の頭を抱いて航暉はそつと目を閉じた。

「俺は今度准将になる。そうなれば今まで以上に俺はお前たちに兵器としての性能と成果を求める立場になる。それに慣れるな」

それは命令なのかお願いなのか、彼自身にはわからなかった。だが、それを分けるつもりもなかった。それできつといいのだと思う。

「ありがとうございます」

「大切にするからね！」

静かな空間に広がる余韻を味わっていると、ドアの外から騒がしい足音が響きだした。

「こんの、待ちやがれパラッチ——！」

「すいませ——ん！ 悪気はなかったんですう！」

「すまんで済むなら特調はいらねえんだよ！ とりあえず笹原焚きつけた分と掛け金巻き上げた分——……」

ドップラー効果で音程が上がって下がると足音が一気に遠のいていく。

「今のって……」

「高峰と青葉……だな」

　　「どういう展開になったか読めたところで三人はほぼ同時に噴き出したのだった。」

INTERVAL 04

救いたいものがあります

□ 笹原の場合

「あー、タカ君は結構デスクワーク派だと思ってたのになあ……」
「そりゃ司令官が悪いでしょ」

背中を丸めて笹原は木に手をついていた。その横に飛び降りてきたのは川内である。木から木へ飛び移りながら逃げていた（もつとも高峰氏は笹原一人に狙いを定めていたためあまり意味はなかった）のだ。

「やつぱり『メンゴ☆メンゴ』が駄目だったかなあ」
「それ以前の問題でしょうが」

じとつとした目で睨めば笹原は頬を掻いた。

「まあ、常識的に考えればホワイトデーの買い出しだよねえ、青葉の口車に乗った時点で先は見えてるよ」

「よく言う。……わかっててやってたんでしょ？」

「さつすが……よく見ていらっしやる、川内さんよ」

「本気でトレースすれば司令官なら見つかることなく行ったし、そもそも追いかけてなかったでしょ？」

「まあね。でも気になってたのは確かだよ」

丸めた背を伸ばすと逆に伸びをする。

「さつてと、後で詫びの酒でも持っていくかな。タカ君、昔の筋も使つて最短で助けてくれたみたいだし」

「へえ、司令官がお酒なんて珍しい」

「そう？・ けっこう好きだよ。でも私はあんまり強くないけどね。でも『仕事柄』お酒の味と良さぐらいは知ってないとダメだからね」

そういう笹原の顔は川内にとっては見慣れない顔だ。『その顔』は川内の知らない仕事を語るとき顔だ。

「そうだ、川内。この後一杯付き合つてよ。君が持ってきてくれた呉鶴を空けようじゃないか」

「私飲んだことないよ？」

「艦娘のあんただから酔っても大丈夫でしょ。最悪修復材叩き込めばすぐ出撃できるようになるんだし」

笹原はそう言っつて川内の肩に手を回した。

「こっちの世界の前哨戦、とでも言おうかな。まあ話さなきやいけないこともあるしね」

「無理矢理送り付けたチョコフォンデュのお返しに乾杯、かな？」

「そんな感じだ。委員長とあの子に、祝杯の前倒しといこう」

これは最初からこのつもりだったな。川内はそう思っつて溜息をついた。それでも口角が上がる。まんざらでもない自分に少し驚いていた。

◆ 渡井の場合

同刻、呉。

「た〜いげい！」

後ろから抱きつくようにして手を回してきた司令官に大鯨は冗談じゃなく10数センチ飛び上がった、

「ひやあつ！ わ、渡井提督っ！ いきなり飛びつかないでくださいよっ！」

「仕事中じゃないから階級も敬称もなしっつて言ったよね？」

「……わかりましたからっ！ 渡井さん、割烹着の中に手を入れようとするのやめてくださいっ！」

「はーい」

普段は優秀な潜水隊司令なのだが、と大鯨は肩を落とす。

「それで、渡井さんはどうしたんです？」

「いやなに、今日、3/14は何の日かなあって」

「……数学の日？」

「なんでそんなマイナー所が出てくるのかは聞かないでおくよ。普通はホワイトデーって言うんじゃないの？」

渡井はそう言うのとポケットから小さな箱を取り出した。

「じゃあ行くよ」

そう言つてその箱を空中に放り投げ、落ちてきたそれをキャッチする。

「どっちだ？」

大鯨の前には同じように握られた彼の両の手が差し出されていた。どちらに持つているか当ててみると言うつもりらしい。

「……では、左で」

「——やっぱり大鯨にはかなわないなあ」

彼が左手を開くとそこには小さなコイン。それが立体の像を立ち上げると小さな箱が現れる。その箱が空中でくるくると回って、かぱつと開くと中から現れるのは……銀の指輪。

「よくできたホログラムですね」

「そう？　そう言つてくれると嬉しいね」

渡井はコインに触れてその像を消す。そのコインを大鯨に渡してその肩を叩いた。

「——こういうのは遊びでも男は本気だったりするんだよ？」

「え？」

じゃあ、しおいたちにもお礼を渡してこなきやねと彼は去つていく。

残された大鯨は渡されたコインをまじまじと見て裏返した。息をのむ。

——いつか本物渡すから今はこれで勘弁。

「……もう、提督ったら」
大鯨は小さく笑ってそれを強く握りしめた。金属のコインが自らと同じ体温になるまで、強く。

■杉田の場合

「よう」
開けっ放しのドアを律儀にノックして杉田は武蔵の部屋を覗き込んだ。

「開けっ放しとは不用心じゃねえか」

「私がいるときにしか解放しないし、とられていいモノしかないの
ね」

それに、不届き者に負けるつもりもないしな。と武蔵は笑う。

「それでもお前は一応性別女だろうが」

「おや、兵器に性別を付けるのかい？」

昔から英語圏では船の代名詞はSheと決まってるんだ」

杉田はそう言うと言った背中側に隠し持ってた箱を取り出した。

「それに、兵器は上官に贈り物をしないし、送られた上官はお返しを
しようなんて思わない」

「……なんだかんだ言って勝也は保守的だね」

「そうかい？」

杉田はそう言っ肩を竦めた。その反応がいかに杉田らしいと

思いながら武蔵は受け取る。

「……それで、勝也は何を贈ってくれるのかな？」

「開けてみる」

それなりにサイズのある箱を開ければ、中には小さなビンやランプ、キャンドルが詰まっていた。シンプルなデザインのそれらを見て武蔵は首を傾げた。

「……これは？」

「アロマランプ。知らんのか？」

「アロマ……香油を焚くのか？」

「そこからか……」

武蔵の反応に頭を掻く杉田。

「しゃーない。使った方が早いな」

杉田は武蔵の手からアロマランプを取り上げると武蔵の部屋の奥のベットサイドにある小さなローテーブルにそれを置いた。

「なあ、武蔵。お前は兵器としての一面もあるだろう。それでも戦場を離れている間はそれだけじゃなくてもいいんだぜ？」

「……そんな気障なセリフ、どこから拾ってくるんだか」

「いいじゃねえか。男の意地もあるんだよ」

杉田はそう言うときアロマランプの天板に数滴オイルを垂らした。左手一本でアロマの入ったガラス瓶の蓋を閉じつつ、右手でマッチの箱を取り出した。それを器用に右手一本で擦った。その火をキャンドルに灯す。

「オイルはカモミール・ローマンだ。……って言ってもわからんか」

「まあな」

「だろうな」

「わかってるなら聞かないでもいいだろう？」

「女としての云々というなら、ちゃんとそれなりに気を遣うさ」

杉田は武蔵を手招くとベッドに座らせた。

「……リングのようなにおいがするんだな」

「カミツレ自体の語源が大地のリングゴだしな」

横に腰掛けて杉田がそう言った。

「……香りを楽しむことなんて、なかったからな。なんだか新鮮だ」
「そうかい」

杉田が僅かに笑った。その肩に武蔵が頭を預ける。僅かに驚いたような表情を杉田が浮かべれば、彼女は上目づかいでそれを見返す。

「……嫌、だったか？」

「すこし驚いただけだ。……清霜あたりが見たら腰抜かすぞ」

「戦場から離れている時は兵器じゃなくてもいいんだろう……？」

「……まったく、いつからそんな顔を覚えたんだか」

その後は言葉もなかった。ゆつくりと夜が更けていく。

◇高峰の場合

「うう……ひどい目に会いましたねえ」

青葉は疲れ切った顔で自分のデスクに戻ってきていた。

「笹原中佐が捕まるなんて予想外でした。これさえなければ今ごろ寝れたんですが……」

笹原を解放するために他の案件を放り出して高峰が対処したため仕事が残っているのだ。高峰はそれを青葉が処理することを条件に不問に処すと言いつけた。

「まあ、楽しいところ見れたんでいいですかね」

青葉は目の前の仕事の量を見て笑った。……なんだかんだ言っただけの上官がある程度仕事を減らしていることに気がついたのだ。この量なら2時間もあれば終わる。

「……あれ？」

仕事を片付けようとデスクの引き出しを開けると入れた覚えのないものが入っていた。

「全く、高峰さんったら」

小さく笑いがこみ上げる。紙袋に入ったそれにシールで張られたメモには『休息と食事だけは抜くなよ』とだけ書かれている。中身を見れば裸のクッキー。一枚口に含むとホロホロと崩れて砂糖と小麦の素朴な味が広がった。

「なんだかんだでこういうところ、嫌いになれないんですよねえ……」

青葉はそう言つて食べかけをさつくりと全部口に含んだ。

「さて、さっさと終わらせてゆつくりコーヒーでも飲みながら残りを頂きたいものです」

青葉は1時間半で仕事を終わらせることを決意しながら目の前の書類に向き合った。そして、その通りに仕事が終わる。

「……連絡、入れなきやなあ」

青葉は上官に通信回線を開こうとするが、発信前に顔をしかめた。

「……クッキーのお礼、なんて言おうかなあ」

そのあたりを考えながらコーヒーを啜る。横須賀の夜には少々熱すぎた。そろそろ春が近い。

「……仕方ない、艦娘は度胸ですな」

音声、発信。ノートタイムでオンラインになった、正直面食らう。

『どうした？』

『クッキーのレビューくらいさせてくださいよう、手作りのクッキーなんて手間かけたものが来て正直驚いてるんですよ？』

『手作りのケーキなんぞ渡しておいてよく言う』

『まあマシユマロが帰ってくること覚悟してましたしいんですけどねえ。ありがとうございます、クッキー。美味しくいただきましたよ』

青葉の電腦に高峰の声が届く。

『そりゃあよかった。……これからもよろしくな、青葉』

『それは、同僚としてですか？』

『ほかに何かがある?』

『クツキーの意味、知らない訳ではないでしょう? ——あなたとは友達でいい、明暗つけない答えですねえ、高峰さん』

『……間諜同士の恋なんてろくなものじゃないし、万が一は互いに切り捨てられる状況じゃなきゃいけない以上、キャンディを渡すわけにはいかないのですね』

その答えにクスリと青葉は笑みを浮かべる。

『……おおつとお、これは脈アリですかねえ、手作りのラングドシヤを作った甲斐がありましたかねえ』

『知らん。……もしそう言う関係になりたいなら、海軍を『退社』してから考えな』

『ひどいですねえ……水上用自律駆動兵装が退社なんてできるはずがないでしょう?』

『……悪い』

『高峰さん、貴方が揺らがないでくださいよ』

青葉がトーンを一気に変えた。その顔から笑みが消える。

『貴方まで揺らいだら、誰が私を公平に見れますか? 清濁併せ呑まざるを得ないこの世界で、貴方は毅然と正義を見つめた。青葉はそのあなたを高く評価しているつもりです。青葉の好きな貴方はそんな貴方です』

無線の奥が沈黙した。

『……っちはそんな貴方となら、地獄の果て、それを超えた向こうまでお供する覚悟はとづくに決めています。もつとも、我々にとっての地獄はひたすら生き地獄でしょうけどね』

『……確かに』

『だから貴方がぶれないでいてくださいね、青葉はその背中を追いかけますので、抜かされたくなければちやっちやと前に向けて走ってください』

それじゃあ青葉はお先に失礼、と言おうとして、緊急のメッセージが割り込んだ。高峰にも回ったらしい。

『……コード63とはただ事じゃあなさそうですね』

『コンディション・オレンジ。状況はオンラインのままにしておけよ』
『了解です。どれぐらいで戻ってこられます?』

『カズのところに寄ってから行く、300秒くれ』

『了解、こちらも外泊パック用意しておきますねん』

『頼む』

通信が切れる。コーヒーを飲み干し、青葉は笑った。

「……他の人には譲れませんねえ」

青葉は強硬渉外用武装パックを用意すべく、部屋を後にした。

△ただ前に向くために

部屋のドアがノックされ、航暉はゆっくりと振り返る。部屋は暗く、廊下の明るさのせいで入ってきた人影の顔は黒く潰されている。

「よう、いま時間いいか?」

「お前にチョコを送った覚えも貰った覚えもないんだがな、高峰。なにがあった」

「男にチョコを送る趣味はない」

どこか懽然とした態度で高峰が笑う。開襟の第一種制服の裾が揺れた。少々スラックスの裾が扱っていたり、シャツの襟首がルーズになっっていたりしているのを見て航暉は、くつくつと喉を鳴らした。
「追いかけてっことは楽しかったか?」

「ああいうところを直してくれば手放してどこにでも推薦させるんだがなあ。しかしまあ、彼女が生み出した事態もまた、その個体同様にその持つ遺伝子の表現型だと考えれば可愛くも思えるだろう」

「ドーキンスのあきれ顔が目には浮かぶな。ビーバーのダムと賭けの胴元を一緒にされたら困るんじゃないのか？」

「それこそ珊瑚虫の生み出すサンゴ礁って言ってもやれよ。……電ちゃんは？」

「雷と一緒に出てったよ。明日はデイシフトだしな」

「そうか」

高峰はそう言って肩を竦めた。

「万年筆とは高いものを送ったな」

「まあな、どうしても渡しておきたかった」

「どうしても？」

「俺が俺でいられる保証がないからな。いつ俺が電たちを覚えていられなくなるか、わかったものじゃない」

「……記憶中毒か」

高峰のどこか苦そうな声に航暉は笑う。ドアの上の明り取りのガラスから漏れ込む有機ELの明かりがその笑みを照らす。

「電脳化のツケさ。記憶の外部化が可能になってから、ヒトは自らの記憶、思い出すら改竄される危険性があることを、誰もが軽視している。俺もそうだ。そのツケさ」

高峰は何と言葉を掛けていいかわからずにただその先を待った。しばらく待つっていると、航暉がその口を開く。

「自分の主記憶装置でんのうが信じられない以上、自らが自らである記憶を外部記憶装置に託す他ない。役職を示す制服、名前を示すネームプレート、地位を示す階級章……。それらに自らの鱗片を捜し、補完するしかない」

「その鱗片を含む特製の万年筆を電ちゃんたちに送ることで、お前と電ちゃん雷ちゃんとの関係を外部保管しようとしたのか？」

「揮発性メモリなのさ、人間の記憶や思い出は。電力を失えば、消えてしまう」

高峰はそれを聞いて頭を掻いた。

「人間はそこまで脆弱じゃないぜ、カズ。あれだけのことがあったがお前は今生きているじゃねえか。お前がどんな自己喪失状態アイデンティティ・クライシスに置かれたとしても現実としての体とそれに悩む心はそこにあるじゃねえか。全てを疑い、全てが不確かだとしても、その思考の主体たるお前は確かに存在するだろう」

「E g o c o g i t o , e r g o s u m , s i v e e x i s t o . —— デカルト『方法序説』か」

「アンブローズ・ビアスと言ってくれ」

そう言われ航暉は肩を揺らした。

『我思うと我思う、故に我ありと我思う』か？ とっさにそれが出てくるあたり、お前の思考回路も相当偏向しているが、お前にグロテスクアイロニーは似合わないぜ、高峰。……だが、同感だ。人間は長い歴史の中でこんな当たり前のことしか思いつかない愚かな生き物というわけだ」

「夏目漱石『吾輩は猫である』とは、どっちが偏向してるやら。だが生憎俺たちはその愚かな人間だ。お前の記憶がどうであっても、お前がお前自信を捨てようとしないう限り、周りはお前のことを月刀航暉と認識し続けることができるはずだ」

「……だと、いいんだがな」

「何を不安がっている、カズ」

天井を仰いだ航暉はそっと目を閉じた。

「いつまで俺は電と雷の上官でいられるだろうか。いつまであの子を俺の手で守ってやれるだろうか」

その言葉に高峰は小さくため息をついた。

「……ほんと、似た者同士だよな、お前と電ちゃん。互いに不器用すぎる」

「なんだよ」

「恐れるなら対策を取れよ、カズ。お前の電腦は生きてるし、来月からも電ちゃんのトップには変わらない。最低でも数カ月の猶予はあるだろう。その間にできることを探しておきな、カズ」

「そう言って踵を返す高峰。」

「お前、それを言いに来たのか？」

「……今お前が仕事できる状態だったら追加があつたんだがな」

「なにがあつた？」

「六連星^{むつらほし}関連で動きがあつたからな。青葉も俺も緊急招集だ。準備室と特調の二重所属は体に堪える」

「おいおい、これからお前はカチコミか？」

「場合によっては、な。9課の永野教官が出張るからまあなんとかなるだろうが」

「……そうか」

「カズ、2週間後にはお前も前線復帰だ。最低限の心の整理と戻れるだけの体力は戻しておいてくれよ」

「わかっている」

「なら、いい」

高峰はそう言って部屋のドアを開けた。

「個体作り上げたものもまた、その個体同様に遺伝子の表現型たりえる。お前が何を成し、電ちゃん^{でんちゃん}が何を成すか。それがお前らの関係性を示していくんだらう」

半身だけ振り返って、暗い部屋にいる航暉を見る。

「だから、恐れてくれるな。どれだけ形が変わっても、どれだけ歪であつても、それはお前から自身を否定するものじゃない。だから、恐れてくれるな。戻ってこい、カズ」

「……ああ」

高峰は頷き、ドアを閉めた。

「もう、やったらめつたら難しい会話してますねえ。言葉の難解さでごまかしてますけど、思春期ちゃんの自信喪失みたいなもんでしよう？」

部屋の外で待っていた青葉がニコニコ笑顔で高峰の後ろをついて歩く。

「言ってやるなよ青葉。カズもそれを承知だ。それでもそうでもしないとやってられないのさ」

「妹さんを3回も失うのは想像を絶する辛さなのはわかりますけど、あそこまで意気消沈するものですか？」

月刀大佐らしくない、と青葉は続け、高峰は肩を竦めた。

「普通の人間ならとつくに廃人レベルで狂ってるさ。電ちゃんがいないければカズも楽に狂えただろうが……。良くも悪くも電ちゃんと雷ちゃんがそれを引き止めてる。気が狂いそうなストレスをアレは抱え込んでいるのさ。……それでも、立つてもらわねばならない」「戦争を終わらせるために、ですか？」

そんなところだな、と青葉に答え、高峰は肩を竦める。

「ねえ、高峰さん」

「ん？」

「カチコミに行く前に教えてくださいよ。……高峰さんはどうしてそこまで月刀大佐の肩を持つんです？」

「仲間だからと言ったら？」

「その仲間の腹を探るのが高峰さんと青葉の仕事ですよ？」

青葉の目が細められ、後ろを歩いていた位置から真横に並ぶ位置に立った。

「……パンドラの箱を開けることができる人間だからだ」

「パンドラの箱？」

青葉は首をかしげるがそれを気にしないように高峰は進み続けた。

それ以上答える気がないので、高峰は答えない。

「……禁忌と知りながら、それを暴くことができる人材、ですか？」

「それがパンドラの箱だと知っていても、パンドラの箱を開けなければ希望が見えないことが往々にしてある。同時にいくつもの厄災を振りまくとしても、その厄災のリスクを知った上でも、パンドラの箱の封印を解かねばならないことがある」

「……高峰さんは水上用自律駆動兵装の出自について話してます？」

それとも、既に一線を踏み越えた電ちゃんと月刀大佐の関係について話してます？」

「さあ、どうだろう」

高峰は僅かに肩を竦めて廊下を曲がった。階段を下ればもう建物

の外だ。

「俺にはそれができなかった。保身と見栄と……そんなものに拘って
いてな。最終的には臆病者なのさ」

「蛮勇よりはマシでしょう？」

「蛮勇と豪傑は生きて帰るかどうかだと、杉田は言ったつげな」

高峰がそう言つて青葉から制帽を受けとった。それを被る。

「……さあ、仕事の時間だ」

「やれやれ、高峰大佐は切り替えが早すぎますよ？ 周りもついてい
けませんって」

「付いて行けない奴は置いていくだけさ。……這い上がってもこれな
いやつに、掛けてやる言葉はない」

「……ダブルスタンダードって言いません？」

「いや。あいつは這い上がってくるさ。足搔き、血反吐を吐きながら
前に進む。それがどんな結果になろうとも、前に進むやつだ。まだあ
いつに——倒れてもらうわけにはいかない」

感情を押さえ、思考をフラットに戻すように息を深く吸い、2秒、息
を止める。高峰が帽子の鏢を押さえ目深に直した。その眼光に鋭さ
が戻る。

「さあ——状況を始めよう」

「了解、大佐」

青葉と高峰が夜の空の元に飛び出した。

第50 太平洋即応打撃群編

SEQUEL 001 きつとそうだったと信じて
いるのです

La vida de un solo ser humano
vale un millón de veces más que
hoy
propiedad del hombre
emancipación de la tierra
Ernesto Che Guevara (1928 — 1967)

もし、あの時に止めていたらといつも思うのです。

あの時の司令官さんは……というよりもあの時「も」司令官さん
と言った方がいいかもしれませんけど、とにかくもうボロボロだっ
たのです。その原因が私かもしれないと思うと今でも申し訳なく
なってしまうんですけどね。

司令官さんは好きだった人をたくさん、たくさんなくしてきたの
です。それでも誰かを守ろうとしていたのです。守ろうとするから
ボロボロになるってわかっているのに、そんなことしなくても私達なら
大丈夫だってわかっているのに、私達を守ろうとしたのです。あの時
も……きつとそうだったと信じているのです。

あの時、司令官さんはどうしていたと思います？ 笑ってたので
す。口パクで大丈夫って言いながら笑っていたのです。見ている
こっちは全く大丈夫じゃないのですよ？ それでも笑っていたので
す。

きつとあの時止めていれば、その後の結果は違ったものになってい
ると思うのです。いい方向に転がったか悪い方向に転がったかはわ

かりません。もしかしたらもつと早く事態が終息したかもしれないですし、まだ泥沼になってるかもしれない。また別の問題が出てくるかもしれないですね。それでもきつとあれが最善だったと信じることしかできないのです。

その時、司令官さんは軍人で、私は兵器でした。少なくとも表向きはそうでした。司令官さんはとても優しいかったのでいろいろ悩んでいたみたいなのです。私はそうでもなかったんですけどね。

なんでって……、やることは変わらないのです。水上用自律駆動兵装は人間社会を守るために作られたのですよ？ 司令官さんは人間なので守る対象に元々入っています。だからやることは変わらないのです。司令官さんを守る。それが仕事なのですから。

ドライ……そうですか？ 私にももちろん思うところがありますよ。それでも、現状は待つてくれないのです。成すべき人が成すべきを成す。だから私はそれを成した。それだけの話です。あ、別に怒っているわけではないのです。謝らなくても大丈夫なのです。

でも……司令官さんと比べたら大分ドライかもしれませんね。ふっ、司令官さんがそう割り切れなかったのもわかります。私達が……あ、ここには私のほかに私のすぐ上のお姉さんも入るのですが……、その私達は司令官さんの妹さんをモデルに作られた訳です。いくら妹さんたちとは別で私達が表向き機械であると言われていたとしても、それを知ったうえでこれまで通りっていうのも無理な話ですよ。

司令官さんはボロボロになりながら私達を守ろうとしてくれました。大切に思われているのがわかる反面、自分たちが重荷になってるみたいで辛かったりしたのです。

どうも話がループしてしまいますね。自分でもまだ踏ん切りがついているわけではないので……、言いたいことばかり考えてしまうからかもしれません。

とにかく、司令官さんは優しい方でした。それこそ軍人が向いてないぐらい優しい方でした。……私が言っても説得力ない、なのです？

あはは、確かにそうかもしれないのです。私も軍属は向いてないって言われ続けていましたからね。それでも、いつの間にか艦隊旗艦なんて役職を頂くことになってしまったのです。

私には相手を確実に倒すような力はありませんでした。魚雷も砲も駆逐艦に乗せられるものでしかありませんでしたし、戦闘はそこまです上手とは言えないものだったのです。謙遜じゃないですよ？ 周りにはもつとすごい人たちがいたのです。私の一番上のお姉ちゃんには相手の砲の弾道を視てピタリと落下地点を言い当てるような目を持っていましたし、駆逐艦の仲間には潜水艦や魚雷の位置を正確に浮かび上がらせるソナー使いもいました。戦艦だと30キロ先を正確に狙撃する方もいましたし、空母の方々も攻撃成功率80パーセントを超える練度を誇っていました。……改めて話してみると私の周りにすごい方多いですね。

そんな方々の指揮をとれって言われたときはびっくりしたのです。でも、怖いとは思いませんでした。司令官さんが同じ部隊の司令長官になりましたから。

自分でも司令官さんを盲信してるんじゃないかと思うこともありましたが。盲信といえば盲信かもしれませんが。でも、家族を信じることとてきつと当然だと思っただけです。司令官さんは私にとって家族みたいなものなのです。……まあ法的にみると私は戦闘用ガイノイドなんですけどね。

うーん。まあ、報道資料と異なるのは当然かもしれないのです。すべてを明かすわけにはいかなかったわけですし、その時の部隊は特段デリケートな問題を扱っていたので……。はい、それは今からお話しますのです。

話すのは初めてかもしれないですね。上手く話せるかはわからないのですが……国連の発表とも異なる部分もあるので、いわば……^{アネクトド}逸話みたいなものです。私が話すと司令官さんに話を寄せてしまうので、正確ではないかもしれないのです。でも私の見た私なりの真実をお話ししますね。

司令官さんもきつとそれを望んでいると思うのです。

ですね、司令官さん？

「まだ間に合うっぽい！ だからっ、だから……っ！」

「聞き分けなさい夕立！」

嵐の中だった。波を被りながらもかく彼女を僚艦総出で抑え込む。

「どうしてよ！ 村雨姉は……！」

「悔しくない訳ないでしょう！」

後ろから彼女を羽交い絞めにしながら叫んだ。

「でもね、今の私達じゃこれ以上無理。さみも吹雪ちゃんも限界なのだから……」

全員がずぶ濡れだった。波しぶきが目に入ったせいだ。絶対に、そうだ。

「わたしだけでも行く！ あの子が待ってるっぽい！」

「許可できるわけないでしょう!?!」

「でも、なんで、なんで……」

彼女の声が浪間に消える。

「どうしてそっちにいるの……春雨！」

「司令官さん」

呼びかけられて彼は声のした方に顔を向けた。

「悪いな、もう少し待ってくれるか？」

「いえ、いなづまが早く来ただけなのです。発足式までまだ2時間近くあるのですし」

彼は小さな鏡の前でネクタイを調整している。シヨルダーループには既に准将を示すソフトタイプの肩章がついていた。それを見て電がクスリと笑う。……本当は司令官さんなんて読んではいけな階段だ。呼ぶなら司令長官さん、だろうか。司令長官さんはさすがに言いにくいし、提督さんもなんだか変だ。やっぱり司令官さんの方が言いやすい。彼もそれでもいいと言ってくれていることだし。

「司令官さん、こっち向いてくれますか？」
「ん？」

電が彼の襟元に手を伸ばした。濃紺のネクタイに触れてゆつくりと直していく。

「この結び方って……ウインザーノットなのですか？」

「よく知ってるな。これが一番結び目の形が綺麗に収まるんだ。目はでかいけどな」

シャツの中心線にノットを合わせ、デインプル……結び目の下にできるネクタイのえくぼの部分だ……を整えるとそつと手を放した。

「はい、大丈夫なのです」

「ありがとうございます。電」

そう言つて軽く頭を撫でると電は小さく頬を染める。それに気がつかないのか彼はハンガーから第一種軍装のジャケットを取り上げる。ネクタイと同色のスプレッツェットアウトのダブルスーツを羽織る。右胸には『K. TSUKIGATA』と刻まれた金メッキのネームプレート、その下には部隊勲章が並んでいた。左胸にはI D r i v e l i A W S O f f i c e r水上用自律駆動兵装運用士官を示す技能章やいくつものリボンが並び。この間また一つ増えた……彼にとってはあまり意味のない略綬だ。国連海軍の海軍殊勲十字章なんて、受賞者の数が死者含めてやつ

と二桁に届いたような勲章だからとんでもなく名誉なことなのは間違いない。だが、今一つ実感が湧いていなかった。それよりも右肩で揺れる金の飾緒の方がまだ重みがあるというものだろう。勲章は過去の栄光を示すが、司令長官を示すその飾緒は部下を導く責務を示すのだ。彼にとってはこっちの方が重要だ。

「電、覚悟はできてるか？」

国連海軍の徽章が刻まれた金メッキのボタンを留めながら彼が尋ねた。

「これからの任務は防衛戦じゃない。相手を交渉で抑え込めなければ力技でねじ伏せて通る棍棒外交のような作戦が続く。辛くなるぞ」

「大丈夫です。司令官さん」

その答えを聞くと彼は小さく笑った。

「お前の方が覚悟決まってるかもな」

「なのです？」

聞き返されると彼は気まずそうに笑う。内ポケットに黒の万年筆を差し込んで天井を仰いだ。

「少し臆病になったよ。……誰かを失うことが、怖くなった。これまで以上にね」

それを聞いて電が笑った。それで一步寄って彼の手に触れる。

「臆病でも問題ないと思うのです。蛮勇って言われるより臆病と言われた方がいいですよ？」

「……そっか」

「はい。大丈夫です。司令官さんを信じているのです。だから大丈夫です。司令官さんが帰ってこいというなら。貴方の部下は帰ってきます。絶対です」

そのままゆっくりと彼の体に体重を預けるように寄り掛かる。

「抱え込まないでいいのです。怖い時は怖いと言ってください。いなづまがちゃんと聞きますから、何回でも大丈夫だって言ってあげますから」

「……そっか。ありがとうな」

彼は小さく笑ってその肩に手を回しポンポンと叩いた。

「さて、そろそろ時間かな」

「なのですね」

電がそう言つてそつと彼から離れる。彼はデスクから腕時計を取り出した。その金属のベルトの隣に葉が入った紙袋があるのを見て、電はわずかに視線を下げた。ぱちりと時計の金属がはまる音がする。

「必ず、生きて帰つて来いよ」

「大丈夫ですよ。司令官さんは心配性ですね」

「かもな」

彼は制帽を手に取り丁寧に髪を撫でつけてからそれを被る。国連を示すメタリックブルーに染められた飾りの顎紐が光った。

「それじゃ、行くか、電」

「はい、月刀航暉司令官。やっぱり司令長官って呼ばないとダメですか?」

「好きに呼べ。できれば今まで通りが嬉しいけどな」

電は彼の——航暉の背中を追いかける。前よりも近くなった背中はしゃんと伸びていた。

「——で、部隊の発足式典ぶつちぎって出動要請つて訳だ。状況は?」

「35分前に硫黄島の578が新種と接敵。返り討ちに合つたつてことらつて」

廊下を速足で進みながら高峰春斗が至極真面目な返答を返した。階級が一つ上がり中線4本の袖の階級章は大佐を示している。

「予想以上の大攻勢だったとかか？」

「15隻、確かに大艦隊だ。だが戦闘艦と見られるのは7隻、新種1、駆逐3の軽巡3」

「残り8隻は？」

「輸送艦らしいが、内2隻が新種。もともと本当に輸送艦かどうかもわからんがね、武器が露出しているわけでもなく攻撃をしてこなかったから輸送艦と判断したらしいけどな」

高峰がそう言う。銀の飾緒……副官を示すそれが揺れた。

「偵察機は？」

「今千歳の艦載機が向かってるそうだ」

「上々、とりあえずは前進待機か」

「だが問題が一つ」

高峰がファイルを差し出した、歩きながらそのファイルを開く。

「戦闘艦の未確認種——敵味方識別装置I F FRIENDLYに味方と出てるんだよね」

「……トランスポンダの返答は？」

「DD—SR05——パーソナルネームは『春雨』、3か月前に戦没したはずの艦娘だ」

それを聞いて曖昧な笑みを浮かべた。

「……化けて出たって訳か？」

「さあ？　そこは本人に確認するしかないんじゃない？」

「気軽に言うなよ寺の子」

航暉はそう言っ手に持った制帽を被り直した。そのまま外へ、春の陽が眩しい外へと出る。

「……湿度が高い。天気が崩れる証拠だな」

「だね、南から低気圧が接近中だ」

建物を出るとそこはすぐ埠頭だった。そこに横づけされている、艶消しグレーの巨大ば鋼鉄の塊。

水上用自律駆動兵装搭載型駆逐艦、DDI-1。艦名は「あすか」。
「あすか型の1番艦だ。」

「全く。初日からこれに乗るとは思わなかったよ」

「だよな。電ちゃんから聞いたよ？」 司令官さんが部隊指揮に上がる初日には必ず出撃があるのです」だってさ」

「否定はせんよ。551水雷戦隊の時も、第三分遣隊の時もそうだったからな」

そう返せば高峰が噴き出した。

「確か521の副官の時もそうだったよな？」

「全く、一度は初日をゆつくりと終わらせたいところなんだがな」

「もう諦めなよ、カズ」

そうぼやきながら船へ繋がるタラップを上がる。三胴船トリマランと言うよりはスタビライズド・モノハルと言った方がいいその船形のために直接ブリッジの所在する中央の船体部……センターハルに行くことはできない。船体後部のミツションベイから伸びるタラップを駆け上がる。タラップの隣には大きなものの積み込みがまだ残っているのかローディングランプもともに下りている。

舷門を守る下士官が敬礼で出迎える。それに答礼で返して船の中に入れば、人工的な明りに満ちた広い空間に通じた。ミツションベイは任務に必要な各種装備が適宜換装される、今は掃海器のセットや支援機用の武装などが収められたコンテナが整然と並べられていた。すでに出港用意が進められており、固定索の確認などがせわしなく行われている。艦内はそこかしこで人が走り回る気配がする。

それを見ながら航暉は水密扉を開けてセンターハルに入り込んだ。すべり止めの効いた緑の床を蹴り、進む。

「高峰、お前は渡井連れて水晶宮へ、敵性基本必須情報Eの生成に入ってくれ」

「了解。ヒメと電ちゃんのチームが戻り次第に出港になるのかな？」

「おそらくはな、期待してるぞ高峰副司令長官？」

「おだてるなよカズ」

高峰がそう言って航暉の肩を叩いて脇のラツタルを駆け下りる。それを追うことはなく、航暉は別のラツタルを登り、その先の航海船橋に入る。

「司令長官、入室！」

艦橋に入ると皆が敬礼を送ってくる。答礼をラフに返し金色のカーブがかけられた椅子の横に向かう。

「さっそく実戦ですね。山本平蔵准将」

「まさか発足式まで投げ出しておの出撃になるとは思ってませんでしたけどね」

航暉よりも一回り年上と言った雰囲気の男性がその金色の椅子に座っていた。——国連海軍山本平蔵准将、「あすか」を含む第

50支援艦隊、水上用自律駆動兵装の支援のための通常艦艇を率いる司令官だ。

「嬢さんたちの搭乗はどうなっています？」

「敬語じゃなくていいですよ。階級は同格、ならこんな若造よりも経験豊富な山本准将に敬語を使われるとなかなかむずがゆくて……」

「実際の戦闘指揮は貴方ですからね、月刀准将。この序列ははつきりした方がいいかと思いますが……司令長官の意見を尊重するかね。で、お嬢さんたちの搭乗状況はどうなっています？」

「501の艦装のローディングとヒメと電を待っています。501のローディング終了はネクスト02、ヒメはネクスト04に完了予定、それさえ終わればすぐにでも」

「となると出港は……1015あたりかな」
ヒトマルヒトゴ

山本准将の銀の懐中時計がちらりと光った。

「今回はあきつ丸やとわだの用意が間に合わん。あすかだけの単独航海になる。燃料も満載って訳じゃないが大丈夫なんかね？」

「何とかしますよ。航空燃料は満載してますね？」

「ああ、きつちり」

「なら最悪現場海域まで艦娘を空輸します。とりあえずは指示通り硫黄島目指して出港しましょう」

「了解だ、司令長官殿」

その答えを聞いて航暉が踵を返す。金の飾緒が揺れ、船橋を後にした。

その20分後、あすかは9000トンを超える巨体をゆっくりと鼓動させ、横須賀鎮守府第14パースを離れた。

「全員揃ってるな」

出港から45分、浦賀水道を抜け公海へ向け船がさらに加速しているころ、あすかのブリーフィングルームには所属する艦娘全員と司令官が顔を合せていた。航暉と後ろに控える電を見て、一同敬礼。答礼を返しつつ、楽にしてくれと声をかけて航暉はブリーフィングルームの一番前のデスクの前に立った。

「状況が更新された。敵艦隊は硫黄島の哨戒圏を優雅に北上中、あと20時間で関東州本土が危険域に入る。——初つ端からカテゴリーIV a、難易度AA+のハードミッションになる」

「輸送船の護衛水雷戦隊の撃滅と聞いていたのですが……?」

そう声を上げたのはCV-KG01、加賀型航空母艦の現身、加賀だ。それを聞いて航暉は笑った。

「詳しい説明は、渡井大佐、頼むぞ」

「僕に丸投げかい?」

いいけどさ、と言って最前列左端にだらしなく腰を掛けていた渡井が首の後ろからコードを引き出して、目の前のテーブルに備え付けら

れたジャックに差し込んだ。

「今回見つかった戦闘艦未確認種、仮コードでパッケージ・ホテルと
しているが。そいつをIFFが友軍と判断している。トランスポン
ダの解析からして三か月前戦没したDD-SR05『春雨』となん
らかの関係があると見て間違いない」

渡井の言葉に合わせて正面の画面に春雨の登録データが表示され
る。白いセーラー帽に桃色の髪、どこか気弱な雰囲気も感じるその姿
の横、現状を示した欄にはLOSTと出ている。

「で、今回確認された新種の姿が……これだ」

横に嵐の中での戦闘シーンが流される。

「これは578駆逐隊旗艦、村雨の視界映像だ。いま中央に映ってる
のがパッケージ・ホテルだ。クリーンナップかけると……」

背景が消え去り、対象の姿が拡大される。解像度が上がるようにそ
の姿を鮮明に映し出す。

「……外骨格しか見てれないけど、かなりそっくりなんだよね」

拡大した映像と春雨のデータが並べて表示される。

「脚部魚雷接続部は、完全に一致しているし、顔のつくりに関しては骨
格からしてほぼ一緒だ」

「……技官としての意見は？」

航暉がそれを聞くと渡井がニヤリと笑みを深くした。渡井がテー
ブルを叩くとバーチャルキーボードが現れる。そこに手をかざすと
メカニカルな音と共に手首から先が『展開』する。指の一本一本が
さらに細く枝分かれするように広がり、目で追えないほどの勢いで
キーをタイプする。それに対応するかのように膨大なテキストが正
面のスクリーンに流れ、それが像を結ぶ。

「春雨となんらかの関係があると言うよりは、戦没した春雨の義体を
活用して深海棲艦として活用している。……その可能性が高いかな
？」

「……死霊魔術師もびっくりだね」

どこか小さく笑った女性の声に視線が集まる。渡井の反対側の壁
に背中を預けた笹原ゆうだ。

「で、そういうのはあり得るの?」

「あり得なくはないみたいなのです」

笹原の問いに答えたのは電だ。

「ヒメちゃんによると鹵獲した武装を使えないか試すことはあったみたいなのです。問題は……」

「艦娘を本当に丸々リサイクルすることが可能かどうか、か」
「なのです」

それを聞いて、笹原は小さく溜息をつく。

「それで、どうするの?」

「我々第50太平洋即応打撃群の任務は停戦条約の締結会場に深海棲艦の代表格を引きずり出すことにある。IFFが友軍を示している以上、一度接触し相手の意志を確かめる必要がある。電と503水雷戦隊、578駆逐隊で接触。決裂した場合、戦艦クラスの遠距離砲撃で叩き潰す」

「あら珍しい。カズ君が航空戦力を使わないなんて。赤城に加賀、大鳳と龍鳳で502航空戦隊、こんな過剰なほどの航空戦力があつてそれを投入しない理由はなに?」

笹原が肩を竦めると航暉は苦笑い。同じ不満を加賀や赤城も感じていたらしく頷いていた。その答えは意外なところから帰ってきた。高峰だ。

「航空偵察に千歳航空隊が出撃したんだが、接触到に失敗した」

「撃ち落とされた?」

「違う。艦娘の航空戦のコントロールに使う周波数帯が強度にジャミングされているんだ」

その答えに眉を顰める笹原。

「予備回線は?」

「そつちもアウト。まあ出力的には敵艦隊から20キロは危険域だ。雷撃も爆撃もできる距離じゃねえな」

「周波数帯の変更はできないんですか?」

赤城の声には渡井が答える。

「艦娘の機材はともかく、艦載機何十機のトランスポンダと送受信機

の再調整をしている時間がない。それをしている間に敵艦隊が哨戒圏を突破する」

「……つまりは、今回航空戦力はお呼びじゃねえってことか」

そう低い声で言つて中央に座った大柄な男が言った。

「だから、鷹の眼で遠距離狙撃つてわけだな？」

「今回はそう言うことになるな、負担がでかいが頼むぞ、杉田大佐」

「はん、だが鷹の眼もあてにできないぞ。着弾観測どうする気だ？」

偵察機もなし、天候のせいで衛星映像もつかえないんだろ？」

「何のために電だけじゃなく503を前線にだすと思つてる。最強の眼がいるだろうが」

それを聞いて周囲の視線が高峰の後ろに座っていた小柄な少女に視線が集まった。

「……え、私？」

「他に誰がいるんだい？ 姉さん」

響にそう言われ汗を流す暁。

「天龍」

「おう」

杉田の呼びかけに503旗艦を任された天龍が部屋の隅で声を上げた。

「暁嬢と島風嬢を借りるぞ。二人が抜けても大丈夫か？」

「響も雷もいるし龍田も一緒だ。問題ねえ。……川内たち504はどうする気だ？」

「後方にバックアップ要員で配置する。第二波に備えてね」

航暉が答えると了解だ。と天龍が返事をした。

「さて、作戦海域まであと6時間、半日近くあるからしばらくはリラックスしておけよ、それじゃ一度解散」

航暉が声をかけると人がまばらに出ていくその中で天龍はオレンジのような服を着た少女の肩を叩いた。

「悪いな川内、俺たちの方が前線だよ」

「べつに問題ないわよ。時間的に夜戦の時間になったらこちらが引き継ぐだけの話でしょ？」

川内が笑えば、天龍も苦笑いだ。ブリーフィングルームを同時に出て廊下を進む。

「本当にお前は夜戦が好きだな」

「まあね、それに水雷戦隊の指揮には笹原中佐がつく。だからまず問題ないよ」

「そうかい」

天龍はそう笑っていたが、ずっと目の色を沈んだものに変えた。

「どうも嫌な予感がするだよな、この出撃」

「電のこと？」

「……いや、まあ電のこともないわけじゃないが、硫黄島の部隊と同時に接触つてのが腑に落ちない」

天龍はそう言つて腕を組んだ。

「説得できればそれでいいが、出来なかった場合、旧友を目の前で落とさなきゃいけない訳だ。そんな判断を月刀司令長官がするかね」

「さあ、私は司令長官のことをそこまで深く知らないから何とも言えないね」

「……それもそうか」

天龍はその後考え込むように少し口を噤んだ。

「それでも、俺たちのやることは変わらねえか」

「だよね。相手を切り捨ててでも、味方を守る。そのための武器だし、そのための仲間だ」

川内がそう言うくと手を差し出した。その手を天龍がとる。

「頼むよ、天龍」

「神通のように行くかはわからんが、善処しよう」

「……案外落ち着いてるのね、カズ君」

笹原に言われ航暉は肩を竦めた。外は日が傾きかけており作戦海域が近いことを示した。

「電たちの方が覚悟決めてるんだ。俺が尻込みしているわけにはいかないだろう」

その答えに笹原は笑って見せる。

「さすがにタフだね。カズ君は」

「狂っているって言った方がいいだろうさ。妹に銃持たせて相手を殺してこいって言うんだぞ」

「妹はあんた自身が殺したんじゃないの？」

「そんな割り切れるほど器用じゃ無くてね」

航暉はそういつて振り返った。そこには無垢な笑顔を浮かべる笹原の顔があった。

「何を考えてる、スクラサス」

「“今は” 笹原ゆうだよ、カズ君？」

笑顔の奥の眼がすつと冷える。

「さすがに今から動いてつてのは旨みがないからね。そこは信頼してくれていいよ？ どちらにしろ、今の月刀艦隊を相手取つてのドンパチは辛すぎる。大和型2隻に？ 金剛型4隻に？ 一航戦に？ 二個水雷戦隊？ 青葉に夕張、ヒメまでついて、おまけに潜水隊。合計35隻、それもどの一隻をとつても一級品だ。そんなのを相手取つて戦うとなればそれこそ戦術核レベルを持ち出さなければまともにやり合えない。だから今はおとなしくしてるさ」

笹原はそういつて航暉を追いこした。

「一応警告しておくね、スクラサスからできる唯一の警告だ。いまはまだライ麦パンに手を出すな。間違えてもそこにナイフを入れてしまえば、消えるのはあんたじゃない。電ちゃんたちが消されるとい

ことを忘れるな、見せしめとして消されるのは雷電姉妹になるぞ。もう奪われたくないなら、反逆しても絶対に負けない戦力を付けるまでじっとしていることだ、解かったな？　「ガトー」

「その名はもう捨てたんだがな」

「結構。それじゃ、行こうか。クソツタレな戦場のお出ましだ」

笹原が戦闘指揮所――

クリスタルパレス

水晶宮と呼ばれる部屋のドアを開

けた。暗い部屋にいくつもの電子機材が光る。いくつものホロスクリーンに囲まれた薄暗い宮殿はすべての情報が集められそれを俯瞰しコントロールできる戦闘指揮所となっている。

第50太平洋即応打撃群、Jointed Pacific Readiness Strike Group 50。西太平洋を守る最後の砦にして、攻勢の特務艦隊――通称J―PARES Group 50。

その最初の戦いが幕を開けようとしていた。

「水晶宮より全艦、第一種戦闘態勢を宣言する。各艦、戦闘用意」

水晶宮の頂点で航暉が宣言した。航暉の宣言に合わせていくつもの情報がホロスクリーンに投影される。水晶宮が息を吹き返すように明るく照らされていく。その灯りが司令長官席を囲むように半月型に配置された各艦隊制御卓に陣取るメンバーを青に染めていく。高峰が、杉田が、渡井が、笹原が、月刀航暉准将の命の元に動き出す。「懐かしいわね、この感覚。なんだかんだで第二次日本海海戦以来じゃないの？」

「五期の黒烏全員集合だもんな、俺や杉田は結構カズと組んだよな？」

「月刀と組むとロクなことないけどな」

杉田が笑いながらヘッドレストの脇から「鷹の眼」用のグラスデバイスを引き出していた。

「僕も久々だなあ、月刀、少しは潜水の腕よくなったのか？」

「潜水チームの指揮はお前がいれば安泰だろうが、期待してるぜ」
「明鏡」

「へいへいっと」

渡井はそう言っただけでキーボードを目の前に笑みを浮かべていた。

「渡井、レデイ」

「笹原、用意完了よ」

「杉田、レデイ」

「高峰、レデイ。第50太平洋即応打撃群司令部ジェイイーパレスーヘッドクォーター総員配置よし。
ストライクコントロール出撃管制、用意完了。——命令を、司令長官殿？」

4人がそれぞれに表情を浮かべ、振り返る。航暉はそれを受けて小さく笑った——ように見えた。

「さあ、終わらせにいくぞ。こんな戦争を。これより『オペレーション・ウエヌス・オブセクエンス』を発動する」

———CND—RED / STBY DD—AK04, 503TSq, 504TSq

網膜に直接投影されたその表示に電は管理区画に飛び込んだ。第一種戦闘配備、電、503水雷戦隊、504水雷戦隊出撃用意。どの戦隊にも所属しない独立旗艦である電には隊のナンバリングとは別に自らのシリアル番号がコールされる。

———DD—AK04, 503TSq STRK CAT—I
I / 504TSq STRK CAT—I

電と503水雷戦隊は第一カタパルトから、504水雷戦隊は第二カタパルトから出撃せよ。それが視界に入るころにはもう電は一番カタパルトの待機位置にたどり着いていた。指定の位置に立つと電の生体反応を読みこんだ。右サイドにあるホロスクリーンが電の艤装の状態を示す。警告音と共に背後の床がスライドしぼっかりと空いた空間から武装キャニスターが背後を塞ぐようにせりあがってくる。警告音と黄色の警告灯がなる中で電は自らの脈拍が少しずつ上昇しているのを知る。電がすっぱり入るほどの巨大なキャニスターが開かれ電の艤装が姿を現す。キャニスターごと前進し電の背中に艤装が接続された。システムアクティベーション開始。エンジンスタータが接続され外部から小型水素エンジンをぶん回す。

フューエルコントロールスイッチがOFF、敵味方識別装置OFF、VHF航法装置がOFFを確認。武装を司るマスターアームOFF、INS慣性航法装置の自立待機^{アライヴ}、チェック。自分のいる場所の緯度と軽度を入力、チェック。自らの視界に映し出された出力計が33%を叩きだす。火災警告灯試験実施^{ファイアワーニングテスト}、レスポンスノーマル。エンジン点火^{イグニッション}。ダンツ！という音と共に全てのシステムが蘇る。戦術リンク、接続。

———DD—AK04 / ON—LINE. LAUNCH

グットラックだ、電ちゃん》

高峰の無線がオフになる。体の制御がオートコントロールに切り替わる。自然に前傾姿勢を維持、強烈な勢いでレールに沿って体が加速する。その加速度を受けて一気に明るいう外へと飛び出した。足を前に振り出すようにしてバランスをとって着水。あすかが作った波で上手くショックを減衰させつつ安全域へと抜ける。体の制御が戻ってきた。全システム異常なし。

《電ちゃん、管制をカズに引き渡すぞ》

「了解ですっ！」

戦術リンクが切り替わる。――月刀航暉准将の直接リンク、慣れ親しんだ感覚だ。

《――いけるな？》

「もちろんなのです。司令官さん」

電の視界の先に天龍が飛び出してきた。反対の舷側からは川内たちが出撃を行っているはずだ。

大丈夫なのです。司令官さん、司令官さんならみんなを守れます。

電は高いあすかの船橋を見上げた。黙したまま物言わぬ塔を見上げ、微笑んだのだった。

「……なあ、科奈畑艦長」

あすかの航海艦橋で山本平蔵准将はぼつりとつぶやくように口を開いた。

「弱気とは、珍しいですな山本准将」

「そうか……まあそうかもしれんな」

荒れだした海の水平線を眺めながら山本は首を回した。

「また私達はここで蚊帳の外かと思うと、どうも悔しくてたまらなくなる。そうは思わないか、科奈畑」

階級や役職を抜いて呼びかけた、それを聞いて科奈畑は小さく笑って口調を崩した。

「それでも、やつとですね、やつと我々も戦場に立つことが許されました」

「そうだな。本当にやつとだ……深海棲艦に海を掌握され、年端もいかない女の子たちを前線に出さなきゃいけないなくなってもう10年」

「水上用自律駆動兵装の嬢ちゃんたちが主力になってからは7年ですよ、山本さん」

「それでも辛酸を舐める日々は変わらない。海を守り、国を守る。その我々がずっと海にすら出れないまま、盾にすらなれないままだ。この不甲斐なさをどこに向ければいいのかと思ってしまう」

「時と場所をわきまえましょうよ山本平蔵『司令官』」

「———そうだな」

ぴしやりと言われ、山本は自嘲のような笑みを浮かべた。その笑みの先を進んでいく———海を駆けていく少女の集団。

「腑抜けたな、前線が遠くなりすぎた」

「それでもやつと我々はスタートラインに戻ったのではないですか？

今は素直にそれを喜びたいものです」

作業帽を一度脱いで髪を撫でつけると科奈畑は笑った。

10年間も島国たる日本が海を明け渡すと言うことがどれだけ酷い事態であるか、想像に難くないだろう。食糧難、エネルギー問題、それらに端を発するハイパースタグフレーション、経済格差の是正もな

らないまま起こった暴動に略奪。それらは深海棲艦のせい、否、深海棲艦から日本を守れなかったせい、起こった結果だ。

深海棲艦への特效薬、銀の弾丸とまで言われた艦娘、水上用自律駆動兵装の登場で最低限の物流は確保され、防衛にある程度は成功した。それはすなわち、既存海軍の仕事が艦娘にシフトしたということになる。

通常の艦艇から水上用自律駆動兵装へ。日本国海上自衛軍から国連海軍へのアップデート。深海棲艦への復讐戦^{リベンジマッチ}どころか、最低限の自衛さえも少女の両肩に預けて引き下がるしかできなかつたその不甲斐なさと言ったら！

「……そうだな。やっと海に帰ってきたんだ。陸でしか動けない船乗りほど役立たずはない。やっと我々は役立たずの汚名を雪ぐことができるわけだな」

山本はそう言っただけで背を向けた。

「C I Cへ降りる、艦橋は頼むぞ、科奈畑艦長」

「はっ！」

あすかは今回後方での指揮船がメインだ。C I Cで捌かなければならないような事態は起こらないと思うがそれでも何があるかわからない。それが戦場だ。

「私達の海だ……。そろそろ返してもらわないとな」

艦橋を後に山本はそう呟いてラッタタルを降りた。

「お久しぶりです、電さん」

「五月雨ちゃんもお久しぶりなのです」

海上を進みながら村雨率いる578駆逐隊と合流した。村雨に夕立に五月雨、そして吹雪。一隻だけ別の型の駆逐艦が混じっていることが、その部隊に何があったかを嫌でも思い起こさせる。

「電、勝算はあるっぽい？」

挨拶もなにもすつとぼしてそう聞いてきたのは夕立だ。夕立は泣き腫らした後なのか

いつもより赤みの強い目を向けて電に聞いた。

「夕立ちちゃん、あの子は……」

「春雨で間違いないっぽい。私はずっとあの子と組んできたからわかるよ。あの子は間違いなく春雨だよ」

電はそれを聞いて頷いた。

「まずはお話できるかどうかやってみるしかないのです。お話できれば分かり合えるかもしれないのです。そうなれば……」

「私達ははると戦わなくて済むって訳ね？」

村雨が後を継げば電が頷いた。

「それで……もしうまくいかなかった時は、どうするんですか？」

吹雪が不安そうに電を見る。

「最終防衛線までに話がつかなければ……」

「沈めるの？」

夕立が敵意すら見せて電を睨む。

「……可能性としてなのです」

「絶対、春雨は戻ってくるっぽい。私が戻すんだもん。沈ませなんてさせないよ」

夕立はそう言った。それを見て電は僅かに目線を下げた。

「それでも、万が一でも間に合わなければ、春雨ちゃんに攻撃をすることになるのです。何とか間に合わせるしかないのですが、それでも可能性としてわかっておいてほしいのです」

「だからそんなことはさせないっぽい！」

「ゆう」

村雨が夕立をたしなめるようにそう言った。

「電ちゃん相手に怒ってもしかたないでしょ。はるが正気に戻ることを信じましょう?」

村雨の視線が斜め下に落ちる。

「……村雨ちゃんも大丈夫なのですか?」

「大丈夫よ。大丈夫」

そういう笑みにどこか既視感があった。……これは、ああ。

司令官さんの笑みに似てるんだ。どこか無茶をして冷静でいようとするときの笑みだ。

「村雨ちゃん、とりあえず私が先に呼びかけるのです。返事があるかどうかわかりませんが呼びかけます」

「呼びかけるって……向こうが聞いてくれるの?」

「ヒメちゃん……北方棲姫が日本語を覚えるときに使った無線周波数帯を中心に多チャンネルで呼びかけます。深海棲艦も意味はわからなくてもよく聞いてたらしいので、春雨さんが深海棲艦化していたとしてもそのチャンネルなら届くはずなのです」

深海棲艦化と聞いた時に夕立の耳がピクリと動いた。

「……春雨はまだ艦娘だよ。深海棲艦に騙されてるだけっぽい……!」

「いなづまもそれを信じているのです。それでも最悪の状況を回避するように用意するしかないのです」

夕立は何かに耐えるように唇をかみしめていた。それを見て電も胸が苦しくなる。

「万が一のことを考えて、そうならない様に全力を尽くす。今できるのはそれだけなのです」

「わかってるっぽい。でもそんな最悪の事態になんて絶対させないっぽい」

夕立の視線は曇天で見えにくい水平線のむこう、会敵予定地点の方

へ向いていた。

「ぜったい、させないっばい！」

「高峰、視えてるか？」

「当然」

クリスタルパレス
水晶宮で高峰が即答した。

「報告通り、パッケージ・ホテル、軽巡ツ級1、軽巡ホ級2、足付き駆逐八級2に足付きの口級1、輸送ワ級が6に未確認種2隻。計15だ」

「毎度毎度高峰の索敵性能には驚くよね〜」

そう言って笑うのは高速でタイピングしていく渡井だ。

「505SSQ、前線展開完了。この位置で狙えるのは45分後ぐらいから75分が限度だよ。低速の潜水隊でもこの相手の速度なら浮上航行に限れば並走できる。でも追いつくことはできなないけど攻撃はきついで。位置を変えるなら早めをお願いね。今は潜望鏡深度で中性浮力を保たせて……潜航しっぱなしで行けるのは……後8時間」

「大丈夫だ。8時間も経ったら防衛戦超えてる。大和他で袋叩きにすることなるだろう」

「うげ、僕のしおいたんを巻き込まないでよ」

「あほか。だれがそんなヘマをすと思うてんだ？」

鷹の眼のアイウェアを付けたまま不機嫌そうにそう言ったのは杉田である。顔の半分以上がおおわれており表情を窺い知ることが難しいが、声色でかなり不愉快に思っていることがよくわかる。

「わかってるって、ステインガーキラー」杉田一曹？」

「……懐かしい名前を知ってるもんだな、渡井、誰から聞いた？」

「風の噂で。仙台市街地ゲリラ討伐戦で名を馳せた狙撃手が今は30キロレンジで狙撃してるんだから世の中わからないよな」

「だな、ワンマンイージス」杉田大佐？」

「千里」の名も忘れちゃダメよねカツちゃん？」

「そろそろ俺の名で遊ぶのはやめにしないか、明鏡に飛燕に夜鷹」

そろそろ潮時だろうと皆が黙ると一瞬妙な間が生まれた。それを高峰の噴き出すような笑いが破る。

「ホント懐かしいなこの感じ。海大のバカやった時を思い出す」

「あの黒歴史の嵐をか？ 御免被りたいね」

渡井が肩を竦める。その間にも情報が目まぐるしく更新されていく。潜水隊の魚雷射程を描く淡い黄色の扇形が海域マップにオーバレイ。半径32キロという特大の赤い半円が二つ、大和と武蔵の射程を示す。中間距離には金剛型の4隻のオレンジ色の射程が配置されていた。そこに川内たちが付き添うように待機している。

「第二次日本海海戦か、もう4年近く前なんだな」

「あの時の嵐に比べればこれぐらいいいけるでしょ。たぶんさ」

気楽に答えるのは笹原だ。リンク率を調整しているらしく、んー、川内。もう少し潜るよーなどと言っている。

「で、カズ君。ひとつ聞きたいんだけどさ」

笹原がそう言って顔を後ろに反らせるようにして振り返った。

「本場に578も一緒に接触させていいんだね？」

スクリーンに表示された電と503水雷戦隊のマーカーの隣に578DSqとタグが振られた4隻の戦隊が進んでいる。

「確かに春雨の僚艦だった夕立ちちゃんたちを接触させれば情に訴える可能性もあるよ。でもそれが上手くいかなかったら……というよりもう一度接触して追いつかされてるわけだから上手くいかない可能性

の方が高いわけなんだけどき。かなりの確率でトラポンが春雨なかまと告げている相手を目の前で木端微塵にすることになるんだけど、大丈夫？」

いつの通りの笑みでそう言って、笹原は航暉の目を見つめ続ける。

「——残念ながら、他人を不幸にせずには、自分が正しいと考えることを行えないときがある」

「……サマセット・モーム？」

「それでも、ここで退くわけにはいかないんだ。どうしても勝たねばならない。俺たちと俺たちの後ろにあるもののために、負けるわけにはいかないんだよ。そのリスクを減らすために、打てる手は全て打っておく。それだけだ」

「……そう」

笹原は微笑んで前を向いた。

「間違っていないと思うけど、不器用だよ。カズ君」

「器用に生きれたらこんなところで司令長官なんて胃が擦り切れそうな役職についてないだろう？」

杉田がへつと笑いながらそう言った。

「違いないな。カズ、嫌われ者になる覚悟はOK？」

「生憎ながら多感な時期を敵意に塗れて過ぎたせいで面の皮だけは厚くなったよ。——パッケージは？」

「第一警戒線到達まで後2分。武蔵の射程まで後15秒」

「杉田」

航暉の声に杉田はキーを叩く。

「はいよ、鷹の眼」オンライン。モードスナップ。暁、島風、眼え借りるぞ」

「金剛、聞こえてるか？」

《ハイっ！ 待ちくたびれたネー！》

航暉の声にすぐに答えが返ってくる。

「パッケージ・ホテル以外に照準を振り分ける。交渉決裂した場合は時間勝負になる。競り負けるな」

《わかってマース！ こちらは4基8門の4隻態勢、輸送艦なんてた

だの射的ネー。一斉射で黙らせてやりマース！》

「鷹の眼は大和型で精一杯だ。照準は俺がサポートに入るが、期待するなよ」

《カズキは謙遜が過ぎますネー》

そうかい、と返してカウントダウンを確認する。

「射程まで、3・2・1……武蔵攻撃圏入った」

高峰の声を聴いて無線チャンネルを開く。同時にリンクを深く、彼女の鼓動を感じるほど、深く。

「電、通信及び交戦を許可する」

《……なのです》

その答えの無線の余韻が消えれば、一気に水晶宮の温度が下がるようにキンと空気が張った。すべての音が消えるように退いていく。そこに無線が乗った。

《春雨さん……聞こえますか？》

ANECDOTE 003 それがあなたの答えなの
のです？

「春雨さん……聞こえますか？」

無線に対する答えはない。それでも問いかけを続ける。いくつもの周波数帯にまたがるが『深海棲艦がウオッチしているであろう周波数帯』はわかっている。ヒメが日本語を覚えた周波数帯だ。波は一定のスペンで電たちを持ち上げては落とす。

「春雨さん、このままいけば、私達は戦わなくちゃいけなくなるのです。私はできれば戦いたくないのです。……少しお話できませんか？」

返答を待つ。厚い雲から落ちてくる雨粒が海面を仄かに白く染めていた。

「……いけませんか？ 春雨さん」

無線を開こうとした夕立を村雨が止めた。

「今は……電ちゃんを信じましょう？」

電が無線に話す声だけがしばらく響いた。答えは無い。

「——電より水晶宮へ」

《こちら水晶宮》

「状況はネガティブなのです。……直接接触へ移ります」

《了解、パッケージ・ホテル以外には既に金剛たちがサイティングを終えている。支援要請は随時行つてくれ》

「大丈夫なのです。きっと、届くのです」

電は笑った。雨が電の頬に髪を張り付かせる。それでも笑って見せた。

「総員単縦陣に移行、パッケージ・ホテルに接触を試みます。天龍さん、切り込みの状況になったら一番槍をお願いします」

「おう、任せろ」

「殿は龍田さん、何があるかわかりません、全体警戒を」

「了解よ〜」

波は追い波だった。速度を適切に維持しなければひっくり返る可能性もある。この状況で正確に砲撃するだけでも骨が折れそう。その状況で声が届くエリアまで接近する必要がある。

接近すると言うことはそれだけ必殺の間合いに入ると言うことであり、相手の一撃が致命傷になりかねない間合いに入るということだ。もしパッケージ・ホテルや未確認種が戦艦並みの火力を持っているなら、強力な魚雷を密に放ってきたら、かわす間もなくこちらは沈められるかもしれない。それを防ぐためのシステムをいくつも用意しているが、だからといって沈まない保証はどこにもない。

何と危険な賭けだろう。その賭けに僚艦の安全もまとめて掛け金^{ポツ}入れに入れて賭けを続けている。何と重く、何と傲慢な賭けだろう。それでもその危険な賭けを電は押し通す。それで誰かを救える可能性が僅かでも増えるならば、電はそれを押し通すのだ。

「——司令官さん」

《どうした?》

無線の奥はいつもの声。それが僅かだが電の心を塞いでいたものを軽くする。彼と一緒になら大丈夫だと思ふのだ。

直接ではないが血を分けた兄妹であるという。電の司令官。月刀航暉准将。まだ彼が月詠航暉と呼ばれていたころの記憶が電の中におぼろげに残っている。夢幻のようにヴェールの向うだが、確かにその記憶が残っている。

その彼となら、飛び越えていけると思う。その確信があった。彼なら信じて前に進める。

「……パッケージが敵対してきた場合でも、春雨さんだけは残しておいてくれますか?」

《今大和と武蔵が狙ってる。お前のタイミングで砲撃指示を出せ。パッケージ・ホテルについては電の判断を待つ》

「ありがとう、なのです」

単縦陣の先頭に立って電は前を見る。

《——パッケージ砲撃態勢^{マッ}。砲撃、くるぞ》

航暉の声が無線に乗り、本当の戦闘が幕を開けた。

「敵砲撃着弾まで後2秒、1……今！」

笹原の声が響く。計算が合っていなかったらしく、全弾かなり手前に着弾した。

「……で、どうする気？」

「敵対とみるべきだろうと思うぜ？」

「同感」

杉田の答えに渡井が軽いノリで答えた。それを聞いた高峰が笑った。

「でも電ちゃんはまだあきらめてない。電の意志を優先すべきか、はたまた部隊の安全を意識すべきか、そんなところろかな。カズの葛藤は」

「比べるまでもないな」

その高峰の言葉を航暉はすぐに遮った。

「俺たちは軍人だ。軍人として成すべきを成さねばならぬ。ただそれだけだ」

その答えに笹原が肩を竦めた。

「やっぱり不器用だね、カズ君は」

「言ってる……電、敵対の意志アリと判断する。こちらの目的はあくまでパッケージ・ホテルだ。他を潰しにかかるぞ」

《……了解なのです。パッケージ・ホテルとはできる限り交渉を続けたいのです》

「わかってるよ。他を潰しにかかる」

航暉が無線のキーを叩いた。スイッチングし無線は501への通信に切り替わる。

「501金剛、聞こえてるか？」

《ハイッ！》

「潰しにかかるぞ。砲撃用意」

航暉の視界が金剛たちとリンクする。視界には電探の情報がオーバレイされるが、その精度が一気に上がった。

「忘れてもらっちゃ困るぜ、カズ」

その声に笑みが浮かぶ。

艦載機も飛ばせない、悪天候で視界も悪い。それでも距離表示が±10センチの精度で修正されていく。そんな高精度な索敵をできる人物はひとりしかいない。

「こちら高峰。砲撃観測支援に入る。各種電探、リンクリクエスト」

視界が一気にクリアに切り替わる……ノイズが極限まで減らされていく。

「月刀の照準なんて見てられねえな」

杉田の不満そうな声、同時に金剛たちの砲の管制が乗っ取られる。

「おい杉田!」

「グダグダ喚くな、月刀司令長官。てめえの仕事は電嬢たちについていることだろうが。雑魚の相手は俺たちに任せる。少しは同期を信頼しろや」

まるで狙撃銃のサイトを見ているような感覚に襲われる。広域視界を左目で確保、右目の情報だけが高倍率に拡大される。

「渡井、リソースを杉田に回せ。2隻ずつの一斉砲撃が来るぞ」

「りようかーい」

渡井の高速タイピングが情報の流れを整理する。『鷹の眼』も使った一斉砲撃。2隻が4基8門を斉射すれば16門の砲撃が敵艦隊に降りかかる。隙を作らないために2隻ずつ交互に打てるように

配慮されている。その管制を支えるための大量の情報をあすか搭載の演算器が悲鳴を響かせながらも処理していく。

「高峰！」

「システムリンク！ 限界値まであと3秒、2……」

「——ッテッ！」

スクリーンに16の線が現れた。その線の終点に向って二つのマーカーが動いていく。一つは敵艦を示すマーク、もう一つは放たれた徹甲弾——その飛翔^{プロジェクタイル}体。それら彼我の距離が一気に詰まり、接触の時間が近づいていく。

電たちの眼前で一斉に爆炎の火柱がたった。数はおそらく10前後。おそらくは金剛たちの支援砲撃だろう。それがパッケージ・ホテル以外の戦闘艦を文字通りの一瞬で叩き潰した。

「——っ！」

そうせざるを終えなかったというのもわからない訳ではない。それでもこれしかないのかと考えてしまうのは自分の性なのだろう。それが歯がゆく思える。

《——ヨ》

無線のノイズに耳を澄ます。同時に電は感度を最大に上げた。

《——ヤラセハシナイヨ！》

このイントネーションは間違いない。深海棲艦のイントネーションだ。同時に夕立が前に跳び出した。

「——春雨のバカ！」

「っおい！」

夕立が最前線に飛び出した。ほぼ限界に近い速度だ。天龍の制止も間に合わない。

「っ！ 作戦変更！ 夕立ちちゃんをサポートします！ 龍田さんと雷お姉ちゃんが左翼、響お姉ちゃんと微風ちゃんが右翼へ展開！」
「了解っ！」

「残りのメンバーは距離を詰めます！ 乱戦になります。輸送船も小口径ですが砲を持つるので背後のカバーを徹底して下さい！」

指示を出し終わる頃には電が夕立の後を追った。波の合間に相手が見える。視覚情報にフィルターがかかるように視界に電探の情報が乗った。リンク先で統合された情報だろう。

夕闇が近いのだろう。海の鈍色がさらに濃くなっていく。その中で電は波のリズムを読んで進む。速度が上がれば上がるほど危険度は加速度的に跳ね上がる。波の谷間に突っ込むバウダイビングや波の山から下りるときにコントロールが効かなくなるブローチングや波ど、危険な状況に追い込まれる可能性が高くなるのだ。これ以上速度を上げるのは危険だとわかっていても気持ちだけが急いでゆく。

「夕立ちちゃん！ 突出しすぎなのですっ！」

《春雨！ そろそろ目を覚ましてもいい時間っぽいっ！》

電の視界の先で夕立が先に砲を撃った。威嚇射撃なのだろう。それは相手のはるか手前に着弾して水柱を立てた。

《お願いだから、目を覚ましてよ春雨え……！》

悲痛な言葉が無線に乗る。それを無視するように……断ち切るように砲が向く。

「キックバック！」

天龍が叫ぶが夕立は聞く耳を持たない。夕立の頭を狙うように相手のガラス玉のような瞳が彼女を見据えた。

「春雨……」

「夕立避けろ！」

砲を向けるという明確な敵対の意思表示、それを前に夕立は動くことができなかった。

なぜだろうと思わなくもない。春雨の姿をした彼女になら殺されてもいいと思ってしまったのかもしれない。春雨なら撃たないと思ったのかもしれない。そこは夕立自身にも判別がつかなかった。

ただ、悲しかったのだ。

彼女はもうあの優しい春雨じゃないのだと、どこか思ってしまった。

その事実が、それを認めてしまった自分が、彼女を救えないとあきらめかけたことが。

ただそれが悲しかった。

「はるさ——」

「夕立ちちゃん！」

その砲が閃光を迸らせると同時。

錨のマークの入ったバレッタが視界を遮るように飛び込んだ。その動きはただスローモーションのように見える。まるで通せんぼをするように両手を広げたその影を夕立はただ何もできないまま呆けたように見つめることしかできなかった。そしてその彼女が何をしようとしているのかを理解すると同時、夕立を庇う形で、彼女に砲弾が突き刺さる。同時に爆裂。

「——電ちゃん!？」

その衝撃で数歩よろめくように引き下がりがながら夕立は自分が何をしたのかを悟った。

敵の砲の前で呆けるという、やってはならないミスをしたのだ。それを庇って電が被弾した。ただ、それだけのこと。

「いやっ……!」

爆炎とその黒い煙に覆いつくされた視界で夕立はせめてもの抵抗を試みる。前へと手を伸ばす。せめて彼女の支えにならなければと前へ。

「……それがあなたの答えなのです? 春雨さん」

黒煙の中から両手を広げたままの彼女の姿が現れる。爆炎で引き裂かれたセーラー襟の切れ端が風に舞った。破片で切ったのか頬から赤い液体をにじませながら前を見つめる。

「夕立ちちゃん、一度下がってほしいのです」

「電、ちゃん……?」

「吹雪ちゃんたちが後ろで雷撃の態勢を整えてるはずなのです。そこに合流してください」

「……電ちゃんは、大丈夫……ぽい?」

「はい、大丈夫なのです」

上着はところどころ引き裂かれ白い素肌が覗く。そんな痛々しい状況でも電は毅然と相手と向き合っていた。夕立がゆつくりと反転していくのを感じながら、相手が飛ばしてきた無線のチャンネルに合わせ、口を開いた。

「一緒に戦った仲間には銃口を向けることがあなたの答えだというのなら。私はそれに否と言わなければならぬのです」

電の防弾板が回転してロックが外れる。飛び出してきたそれを両手に持つ。それを――小柄な駆逐艦娘でも振り回せるように調整された特別製のスタン警棒を振って展張する。

「――司令官さん」

《ばかやろ。突っ込むなら突っ込むと言え。シールドビットを展開するぐらいの猶予はあっただろう》

「ごめんなさいなのです。それでもこうするしかなかったのです……」

《……まあいい。次はないぞ》

無線の奥から苦笑いのような気配。

《スターダスト展開、臨界まであと448秒。電——飛べ》

一気に電が前に跳ぶ。同時にドンツ！と鋭い音が響いた。電の脚に括り付けられた……追加のスラスターが半ば強制的に電自身を加速させる。その加速度が電自身に負荷をかける、だが電は一度無視をした。それでも前に跳ばねばならないのだ。今は夕立たちが態勢を整えるまではここで立ち回らねばならない。

その加速度を持って右手に持った警棒を振り下ろした。相手はそれを、両腕をクロスするようにして受け止める。直後相手の瞳が収縮した。瞬間的に流れた高圧電流が彼女の内側にダメージを与えていく。

「痛いじゃない、カッ！」

「痛くしているのですから、当然なのですっ！」

互いに弾き合い、後ろへ下がる。波の上という不安定な足場を削るようにしてバランスを取り直す。横波に近い形になったが、波のテンポを読んで飛び上がった。波の頂点に立つと同時に、右砲が閃いた。彼女の足元に大きな水柱を立てる。遅延信管が埋め込まれた炸裂弾が彼女の足元で破裂する。彼女の体が水圧で揺れた。

「お願いなのです。私達はあなたを沈めたくない！ だから、話を聞いてほしいのです！」

電の声が雨音に混じるようにして消えてゆく。それに対する答えは砲火で返ってきた。機銃弾による掃射。バックステップで波を下り、水の壁を使つて後退した。バランスを崩しかけてスラスターを一瞬噴射、無理矢理リカバリーをかけた。サイドを取った天龍が刀片手に飛び込んだのが見えたのでその隙に上がった息を整える。体が無理な加速度に悲鳴を上げていた。視界の端に映るカウンターが正確にカウントダウンを続ける。この無理な動きを続けられるシステムの臨界を示すカウントダウンタイマーだ。

STrategic sea ARea Domination
Unit SYSTEM——STARBUST、星屑の名を冠
したそれは艦娘に強力な足と盾を授けるためのシステムだった。

艦娘——水上用自律駆動兵装にはいくつかのリミッターが存在する。それらのリミッターの一つの目安となっているのが損傷限界基準だ。これを超えたら損傷が出てもおかしくないと言われる数値、それが損傷限界基準。これは本当の意味での限界……損傷上等で行う行動も含めた限界値ではない。破損承知でも安全限界基準を超えれば自らの負荷で自らを根底から壊しかねないのだが。

STARDUSTは損傷限界基準を超え、海域を迅速にかつ確実に掌握するために必要な行動をするために必要な動力リソースの確保、それによる自衛用のナノマテリアル被膜による対貫通防御の補強や空間防御システムの運用能力の付与、追加のスラスタなどで強化した駆動系をフルに活用した機動力の確保などを行うシステム群の総称だ。

本当ならば損傷限界基準を超えた活動を前提にしてシステムが組まれること自体が禁じ手である。だが第50Japanesep50太平洋即応打撃群が担う敵上位種との武力交渉という任務を考えればこれらのシステムは必要だったのだ。

航暉とのリンクのおかげで敵がどこでどういう動きをしているかはわかる。タイミングを見計らって波を駆け上がった。スラスタが体を持ち上げ、波をジャンプ台のように駆け上がり空中に飛び出す。

「司令官さんっ！」

《I have SHIELD PIT.——行け!》

背負った防弾板が駆動する。盾の裏側から飛び出したのは6基の飛翔体。それが航暉の命を受けて宙を舞う。

相手は砲を振り、電は警棒を振る。

夜闇が迫る中、金属が啼く甲高い音が響いた。

波の一定のスパンを感じながら科奈畑は双眼鏡から目を放した。こんな嵐のような中では双眼鏡があったところであまり意味がなかった。双眼鏡がなければ見えないところは雨と闇のヴェールの向うだ。

「BVRは現代戦闘艦船の十八番のはずだったんだがな」
Beyond Visual Range、訳すなら視界外射程だろうか。見えもしない敵を視て、相手を叩く。ミサイルという矛を得た人類はそれが活きる戦争に明け暮れた。それも今じゃ有効打にならないなんて笑えない話だ。

人間大のターゲットを捕捉することは既存のレーダーでは難しいことがその一番の理由だが、艦娘や妖精フェアリーの作った電探なら既存のレーダー範囲よりも劣るが察知することは可能になった。それでも、既存の兵器は、ことごとく効果が薄かった。———それこそ、禁断と言われた核の投入なんて馬鹿もやったが、一時的に殲滅しても、すぐに意味はなくなった。爆弾で出た被害が多かったこともある。だがそれ以上に効果が薄かったのだ。

そんな中で少女たちに海防を託すことになり早7年。戦場の様子は様変わりした。少なくとも科奈畑はそう思った。

近代の正規戦ではありえない近射程。目視して撃ち合う一回りどころか二回り以上過去の戦い方を強いられる。速度のために装甲を犠牲にし、当たる前に撃ち落とすを基本とするイージス艦。アイギスにはめ込まれたというメドゥーサの力も相手を見つけなければ石にして砕くことも出来はしない。アテーナーを守ったという神の盾も相手を見つけて備えなければ用をなさないのだ。

それを言うならば、通常の間人同士の戦いの尺度で測ることの方が間違っているのかもしれない。深海棲艦が出てきた黎明期に海上保安庁が海獣駆除として出動することを強いられたように、相手は人間大の生物なのだ。鋼鉄の塊同士でミサイルを撃ち合っていた戦闘と

程遠くなるのは当然なのかもしれない。

(どうも、そんなことばかり頭を過るな。船乗りとして情けない――)

山本准将のことを笑えないと科奈畑は唇を噛んだ。

弱気になるな。相手はただの生き物に過ぎないのだ。こちらの切り札は艦娘だけではない。国連海軍という巨大な組織。それは個の能力を結集し、動かし世界の平穏を取り戻すための機関だ。持てる英知を結集し、作り上げた組織だ。守るべきものを守るため、得るべきものを得るために人は力を欲し、その頭脳をもつてして道具によって不足した能力を補填することを覚え、武力というものを身に着けた。そのすべてを持ち寄って得たのがこの国連海軍だ。

J—PaReS Group50——第50太平洋即応打撃群。

最前線にして世界の命運をかけた交渉が行われる宮殿^{パレス}。それを乗せたこの「あすか」はさながらノアの箱舟か。すべての生物のつがい、希望を乗せて運んだという箱舟か。

「――柄でもないな、私は」

科奈畑はそう呟いてもう一度双眼鏡をあてがった。外では夜が容赦なく忍び寄ってきていた。

その状況で科奈畑がやるべきことはただ一つだった。

「この船を沈ませないこと、生きて全員を返すこと、それだけだ」

戦闘は水平線の向うで行われているはずだ。その戦闘に思いをはせる。船乗りの私では想像もできないような接近戦になっているだろう。

「上手くやってくださいよ。月刀准将」

願うことしかできないことが腹立たしかった。

荒れた海に金属が啼く音が響く。断続的に2度3度と続いていく。

「話を聞いてください！」

「才前ラトスル話ナド無イ！」

もはや宵口と言って差し支えない時刻を超え夜闇に文字通りの鎬を削る火花が散った。

「……取り付く島もないとはまさにこのことだな」

天龍が刀を正眼に構えつつそう笑った。

「……電、タイムリミットだぞ。そろそろ決めないと後がないぜ」

「わかって……いるのですっ！」

弾き合つて一度下がる。息は上がっていたがそれでも危なげなく海面をすべり距離を取った。相手から吐きだされる砲弾が空中で弾かれた。……司令官の操るシールドビット、それが相手の弾丸を弾いて見せた。縦横無尽に駆けるシールドビットもそろそろ作動限界だ。エネルギーを使い果たせばただの鉄くず同然だ。状況はじり貧と言つても差支えなかった。

それでも司令官が、月刀航暉がついている。それだけで電は少し気が楽になった。

———いいか、電。

一瞬だけ意識が記憶の中に落ち込んだ。

『警棒や剣など長物系の武器は手だけで使うものじゃない。全身を使って活かすものだ』

2ヶ月ほど前、警棒を使う訓練で初めて航暉と組んだ時の記憶だ。いつもと違い剣道用の道着に防具を付けていて勝手が違ったということもあるが、それを差し引いても圧倒的な実力差を前に叩きのめさ

れたといっついいい。

『手二分に足八分と言つてな、足さばきではぼ全てが決まる。相手の攻撃を警棒で受ける必要はない。躲す。回り込む。間合いに飛び込む。それらには足が必要だ』

航暉はそう言つて紺の道着の裾を揺らし、へたりこんだままの電と目線を合わせるようにしやがみ込んだ。

『歩み足、送り足、継ぎ足、開き足……4種の足さばきを覚えれば、無駄な動きをぐつと減らして効果的な攻撃が可能になるはずだ』

そう言つて電を立たせた航暉は笑つて見せた。その笑みを思い出して、電は僅かに口の端を持ち上げる。

「大丈夫なのです。絶対に届かせるのです」

息はもう整つた。STARBUSTの影響か体に負荷がかかつているものの、まだ動ける。動ければ、今はそれでよい。

「——電より水晶宮。砲撃支援を要請します。目標、パツケージ・ホテル」

これで決められなければ相手を沈めるしかできなくなる地点。その分水嶺は、今、通り過ぎた。

「……夕立ちちゃん。聞こえますか？」

まだ声は届くと信じている。いや————信じていたかつた。

「これからパツケージ・ホテルを……春雨さんを撃破します。夕立ちちゃんたちは危ないので下がっててください」

電はそう言つて一気に加速した。

それと時を同じくして波の飛沫を盛大に浴びながら、暁は相手の横へ横へと回り込み続けていた。

「まったく、れでいの扱いがなっていないんじゃないかしら？」

そう言いつつも暁は海上を駆ける。敵方の砲火は向いていないがこの波が厄介だ。この波がなければおそらくはもう位置につけていたはずだ。

《大丈夫か暁嬢》

「と、当然よ！」

杉田大佐の冷やかしのような声が響いた。その答えを聞いて暁は口をへの字に曲げた。

《暁嬢は眼の役割に徹してくれればいい》

「わかっているから嬢呼ばわりしないでよっ！」

暁に、正確には暁と島風に課された任務はただ一つ。鷹の眼システムの末端端末の一つとしてデータを收拾し、リアルタイムでも正確な狙撃を可能にすること。島風は今一キロほど後方で連装砲ちやんを駆使しながら海上を走っているはずだ。それを信じて夜闇で暗くなった海を走り抜ける。

島風が操る自律砲台4基、そして暁の“眼”それをリンクさせ、情報を統合し相手を定め、撃破する。この夜闇の中でそれを成す。

「本当にそんなことできるのかしら……」

《後で驚くといいさ》

「うえっ、聞こえてたの？」

《情報収集のための深々度リンク中だぞ。気がつくさ。それに“第二次日本海海戦”に比べれば楽勝だ》

杉田の声がそう言った。気負わない声だが、確かに自信を持って話していることがわかる。

《さて、電嬢からの支援要請受諾。そろそろ本番行くぞ、暁嬢。視界情報が一気に荒れるからそれに見とれてコケるなよ》

「わかっているわよ……！」

暁の視界にHAWKEYE—STBYの表示が現れる。杉田大佐との直接リンク。暁にとっては初めての経験だ。響曰く“まともに付き合えば船酔いする”らしい。

《電嬢、本当にいいんだな？》

《片舷に被弾を集中させてほしいのです。浮力のバランスを崩して動きを制限。後は水雷戦隊で片を付けます》

電は即答。それを聞いて暁はどこか違和感を覚えた。

どこか感情が落ちている。まるで……用意された台本を読むよう

な、本心じゃないことを話しているような、そんな声色だ。電は何度も何度も呼びかけた。それをパッケージ・ホテルは拒絶した。その結果がこれだとしても、電の切り替えが早すぎる。そこに違和感を覚えたのだ。それにわざわざパッケージ・ホテルを撃破すると夕立たちに名言したことも電らしくない。そう思えてならない。

だがそんな思考をしている余裕もなくなる。鷹の眼の upper body が STBY が一瞬 EXCT を挟んで ONLINE となったのだ。鷹の眼が始動する。直後にいくつもの情報が流れていく。距離、方位はもちろんのこと、熱源情報、海面の揺れのスパンの予測や大気データも含めて様々な情報が一気に視界にあふれかえる。

「……」

確かにこれは「酔う」。視界に現れる一つ一つの数値を視ようとしてはあつという間に情報の波に吞まれてしまう。

《第一射、弾着まで3、2、1、マーク》

マークのカウントがあると同時に相手の左半身を抉るように弾着した———ように見えた。

「至近、近！ パッケージから4メートル手前！」

《そこ狙ってるんだから当然》

「はえっ!？」

島風の自律砲台を観測機代わりにして多角的な視点から誤差を修正しているのもわかっている。暁と島風自身の視点を合わせて監視の眼はトータル6つ。それでカバーしているから正確な着弾点の観測が可能なのはわかる。だとしてもそこに弾を撃ちこむのは至難の業だ。

《さて、射角修正、第二射用意、大和、行くぞ》

毎度思う。25キロ以上先から1メートル単位で着弾を管理するこの男は何者だ？

第二射もほぼ同じ場所に着弾した。その水しぶきの向こうに電の影が飛び込んだ。その姿を遠くに眺め暁はどこかその妹分の影に……航暉の影をはつきり幻視した。

「待って、ゆうー！」

村雨の制止を振り切って、夕立が缶の限界に近い速度で前に飛ぶ。文字通り飛んだ。そこまで速度を出して、雨が上がっていることが気がついた。雨粒で視界が歪まない。それだけでかなり楽だ。これならばまだ間に合うかもしれない。

「春雨……っ！」

あの優しい笑顔が夕立の脳裏に張り付いて離れない。……ずっとそうだった。春雨が姿を消してから、ずっと。

夕立姉さんと呼んで慕ってくれていた春雨。所属駆逐隊の上位組織である極東方面隊西部太平洋第二作戦群は海域防衛や輸送船警備などを担う縁の下の力持ち的役割を担う。攻勢部隊たる第一作戦群と比べれば地味で日の当たらない役割だ。それでも春雨はくるくるとよく働いていた。

飯盒を手に皆に炊き出しを配るなど彼女らしく頑張っていた。守備戦闘が得意だったことと、誰かを守りたいという意思が強い子だったから、護衛任務を中心的にやっていた。その彼女が沈んだ時、船団を守ろうとして自らを盾にして魚雷を受けた彼女、回収できたのは浮力発生装置がついた靴の片方と、彼女の白い大振りなセーラーハットだけだった。

夕立にとってそれは胸の中が空洞になったように思っていた。姉

妹を失うというのはこういうことかと初めて実感した。……前世と
いつていいのかわからないが、*“純粹な船だったころの夕立”*は春雨
を遺してソロモンの海に消えた。その悼みを春雨はどう受け止めて
いたのだろうか。

ただの行方不明と信じたかった。それでも軍のお偉いさんが春雨
を喪失と判断した。その時点で軍の登録は過去のものとなった。そ
の時にはみんなで泣いた。そうして夕立たちは夕立たちなりの区切
りをつけた。春雨の穴を埋めるべく補填としてやってきた吹雪を加
えて改めて頑張ろうと決めたのだ。

そのタイミングで現れたパッケージ・ホテルは春雨に酷く似てい
ても彼女の影響が被る。

砲撃の水柱が二度立った。それと同時に*“彼女”*の影を認める。

まだ沈んでない。

「春雨っ！」

ねえ、春雨、覚えてる？

夕立は砲を構えた。その砲の先にはパッケージ・ホテルと電。夕立
自身、誰に砲を向けているのか、引き金を引く気があるのか判断がで
きずにいた。

ねえ、春雨。最後の出撃の時、帰ったらみんなでパーティしようつ
て言ったよね。みんな、みんな待ってるんだよ。春雨が帰ってきた時
にできるようなって、みんな待ってるんだよ？ 他のみんなが春雨は
沈んだって言っても、私達はまだ待ってるんだよ？

電が警棒を振りかぶりつつその背後に回り込もうと海面を蹴った。
夕立に気がついたのか射線を空けるように飛び退く。

ねえ、春雨。覚えてる？ 私達は僚艦だったんだよ？

春雨の砲が夕立を捉える。ガラス玉のような瞳が夕立を射ぬいた。
でも、今度こそ夕立は足を止めずに踏み込んだ。缶が悲鳴を上げてい
る。それでも今だけは止まる訳にはいかない。

ねえ、春雨。覚えてる？ 夕立は春雨のお姉ちゃんなんだよ？ 村
雨姉えに比べれば頼りないかもしれないけど、お姉ちゃんなんだよ？
だからさ、砲を向けられても、もう春雨が私のことを見てくれなく

ても――

「私はまだ……春雨のことを信じたいっばい！」

精一杯の声で、叫ぶ。相手に届けと祈りを込めて、叩き付ける。
「だから帰ってきてきて、春雨！」

そしてその瞬間に

――戦闘が終了した。

「彼女」が一瞬動きを止めた。その一瞬が1秒、2秒と伸びていき、「彼女」が動きを完全に止めていることを知る。「彼女」の肩越しに夕立は電の手が彼女の首筋に伸びていることを知る。彼女の手元にあるのは――QRSプラグ。それを「彼女」の首筋に突き立てていた。

「はる……さめ……？」

夕立の呆然とした声が響いた。攻撃もできないままただ距離を詰めていた夕立はもう「彼女2」に手が届く位置まで来ていた。夕立はそつと前に手を伸ばし、「彼女」に触れる。ゾツとするような冷たい手に触れる。ガラス玉のような「彼女」の眼が小刻みに揺れた。

「春雨……聞こえてる？」

「………なさい」

ノイズ交じりの音声、質の悪いラジオを聞いているような声だ。間違いない。「彼女」の口から発せられた声だ。

「……ゴめんなさい、ねエさん」

その声は記憶の中の「彼女」の声とはかけ離れていたが、間違いない。

「春雨え……」

夕立は「彼女」を抱きしめた。ただ、抱きしめた。互いに雨と波に濡れた身体を密着させた。夕立の目には涙が浮かんでいる。

「こちらの司令官さんが動きを封じているのです。一時的なもので長くは保ちません……話すのは急いでください……！」

電の戦術リンク経由で航暉が「彼女」にウイルスを送り込んで、義体の動きを阻害させていた。

艦娘——水上用自律駆動兵装は兵器である。ミサイルがミサイル発射ボタンを操作しないように、その行動は人間の指揮官が統括すべき。そういう考え方を元に開発された兵器だ。艦娘が自我を獲得し個性を持っていても、求められるのは機械としての性能と成果だけである。

その兵器が間違っても人間に牙を向けないよう。人間側の都合でいくつものセーフティが存在する。

そのうちの一つは今航暉が利用した艦娘の電脳への非常用バックドアだ。正規の手段ではいくつもの防壁を超え、いくつものコマンドのやり取りをしなければ艦娘の動きを制御する区画へのアクセスはできない。しかし、艦娘ごとに割り振られた非常用のコードを使えば、ワンストップで相手のすべての区画へのアクセスを可能にするルートが存在する。万が一艦娘が暴れて手を付けられなくなっても、それを使えば相手に触れることなく無効化できる。

「で、でもそれって……」

「だから急いでほしいのです。春雨さんを壊してしまう前に！早く！」

電が珍しく語気を荒げた。

この強引なアクセスは、相手の電脳を傷つける可能性が高い。それは侵入時間が長ければ長いほどその可能性が高くなる。可能ならば一発で相手を完全にロックして、状況を整えるのがベストなのだが、深海棲艦の影響なのかロックが不完全にしかかからず、必然的に潜入し続けなければまずい状況になっていた。

「はる……！」

「春雨さん！」

夕立の後ろから村雨と五月雨が追いついた。

「……サみちゃん、村サめねえさん……」

「はる、はるだね……！」

「春雨さん、春雨さん……！」

三人が「彼女」を抱きしめた。「彼女」は表情を動かすことを忘れたかのような能面じみた表情だったが、その瞳にうつすらと水滴が浮かんだ。

「ごめんなさい……ごめんなさい」

「謝らなくてもいいっぽい。また会えたからそれでいいっぽい……！」

「そうだよ……はるが、帰ってきたんだから、それ、で……！」

「はい……！」

涙が海へ落ちる。それを目で追った五月雨が気づいた。僅かずつだが「彼女」の体が沈下している。

「春雨さん……すっかりしてくださいー！」

「司令官さん！」

《無理だ！ 艦娘用のダメコンプログラムと衝突コンフリクトを起こしてる！

こっちのシステムじゃ悪化させるだけだ！》

「ヒメちゃんのダメージコントロールは無理なのですか？」

《プログラム化が間に合っていない。——春雨を曳航、あすかに収容しろ。ヒメのところ连接到ければ、なんとかなるかもしれん》

「いい、です。はい。はるサめは、もう……」

それらの声を「彼女」自身が否定した。

「みんなを傷つけて、もう、私ハ皆さんといることは、出来ナイデス」

「そんなことないっ！ はるのことは誰も責めないよ。攻めさせないから、責める人からは村雨が守るから……」

「みんなが許しても、私が許せないから、ダメなんです……、だから……」

「ダメなんかじゃないっぽい！ そんなこと絶対ないっぽいっ！」

「諦めないでください、春雨さん！」

それらの声を聴いてか、彼女の瞳に感情が戻ったように見えた。「守るべき人を傷つけてしまったから、もう、戻れないんです。それに」

戻っても、きつと海には戻れないんでしょう、と「彼女」は言った。それを誰も否定できない。深海棲艦に取り込まれた水上用自律駆動

兵装。その確認第一号である「彼女」に待っている未来は十中八九研究所送りなのだ。

「みんなに会えた。それでもう大丈夫です」

「はるさめ……」

雲の間から月の影が降りてくる。

「夕立姉さん、私はみんなの役に立ちましたか？」

「たったよ……ずっと、たったたよ……!」

「彼女」の胸に顔を埋めるようにして夕立は絞り出すようにそう言った。すべてを銀の光が染めていく。

「あの出撃から帰ったら、パーてィ、でしっただけ……?」

村雨がはっとしたように顔を上げた。

「そうよ。ひとり帰ってこなかったからずっとできないままだったのよ? 私とゆうとはるときみの578駆逐隊の出撃100回記念の……」

「みんなでジュース用意して、みんなでドーナツとか用意して楽しもうって」

五月雨の言葉に「彼女」は微笑んだ。

「そうでした、ね……。約束守れなくて、ごめんなさい」

「だから謝らなくていいっほい。……このあとからやろうよ。ドーナツとジュース用意して、最っ高にステキなパーティーにするの。吹雪ちゃんもいるんだよ? 電ちゃんたちもみんな祝ってくれるもん」

「そう、できれば。良かったんだけどね……」

もう「彼女」の腰から下は完全に水面下に没していた。曳航も、もう、おそらく間に合わない。

「電さん……」

「はい、なのです……」

「私ノ電腦に残った情報、回収してください……」

「でも、それは……!」

それは「彼女」の電腦に深くメスを入れると言うことであり、「彼女」の電腦を壊すことを意味する。それをした時点で「彼女」は「彼女」ではなくなる。

「せめてほかの誰かが私みたいなことにならないために、使ってください。それで私は満足です……」

「彼女」はそう言った。それを聞いた電はぎゅっと目をつぶる。「もう、それしかないのです、か……?」

「私の体は夕立姉さんたちに会ウ前からもう限界でした。何事もなくても、横須賀まで保ったかどうかわかりません。もう、私も、みんなの顔もおぼろげにしか見えてないし、記憶もみんな、モウ曖昧なんです……!」

それでも、みんなのことを思い出せただけでも良かったと「彼女」は続けた。

「だから、大丈夫です。私が消える前にどうか、もう少しだけ役に立たせてください……」

ゆっくりと彼女が沈んでいく。時間が、ない。何をするにももう時間が足りなくなってきた。

《電、春雨の電脳の情報をサルベージする。……これは命令だ》

航暉の声が冷たく、寂しく響いた。

命令と言ったと言うことはその責を司令部が負うと言うことだ。電はそれに従うだけでいい。

なんと残酷なやさしさだろうか。

「わかり……ました」

「村雨姉さん、いえ、578旗艦村雨に報告します」

「彼女」の声が震えた。

「DD—SR05春雨、ただいま帰還いたしました」

それを聞いて、村雨は笑おうとした。笑えて……いるだろうか? 「帰還承認します。お疲れ様……はる……!」

《……サルベージ、開始するぞ》

電脳の情報がコピーされ、元のデータが消されていく。

「彼女」の顔は安らかだった。

「春雨!」

夕立が叫ぶ。

「絶対に忘れない、忘れないっばい! 絶対に絶対に絶対に!」

“彼女”——春雨はそれを笑顔で聞いていた。もはや首から上が水面から出ているにすぎない状況だ。

「うん……私も、忘れない、から……」

瞳がすうと閉じられる。電がQRSプラグを引き抜いた。春雨の顔を月光が照らす。

「ああ……月が、きれ　い　」

そうして、幕が下りた。

「本当に良かったのか？　カズ」

「お前が言うかよ、高峰。それを士官として真つ先に指示したのはお前じゃねえか」

演算器やタービンの唸る音が響く中、航暉の声がやけに大きく響いた。渡井が外部記憶装置を航暉の方に投げてよこした。その中にはかろうじて回収できた直近5カ月分ほどと思われる分量の記憶データとPIXコード。そして、ダメコン用のプログラムコードとコンフリクトを起こしたコード深海棲艦が発生させたプログラムコード……その内容が詰まっている。

「……だとしても、さ。電ちゃんに介錯させてよかったのか、本当に」
「ああするしかなかった。そう信じるしかないだろう」

航暉はこめかみを揉むようにしながら顔を伏せた。

「パッケージ・ホテルが春雨であることを信じたうえで、夕立に発破を

かけ、それに春雨が反応する可能性に賭けた。QRSプラグを繋ぐにはその可能性に賭けるしかなかった。そうじゃなければ、本当に沈めるしかなかった。そう判断した」

「お前が、か？ カズ」

「そうだ。電の提案を精査して、俺が判断した」

「電腦と情報を共有するためのQRSプラグでバックドアを解放、動きを止める。その上でパッケージ・ホテルを鹵獲し、時間をかけて交渉する。電が提案してきた最終プランだ。確かに荒れた海でやるよりも確実だ。それが可能な可能性が高いとして、航暉が最終的に判断して、許可を出した。」

「だから、命令した」

「そう言うと笹原が肩を竦めた。」

「それならそれでいいけど、電ちゃんのパフォーはしてあげなよ」
「当然」

「航暉はそう言うとき高峰の方を見た。」

「ユーハブフリートコントロール、高峰」

「アイハブ。万が一に備えて川内たちを直掩で残すぞ」

「了解だ」

「高峰が艦隊の総指揮に入ると航暉はリンクを切り、うなじから伸びるプラグを引き抜いた。」

「お疲れか、月刀」

「さすがにな」

「杉田にそう答えると肩を回す。それを見て渡井は笑った。」

「でもその価値はあったんじゃない？ 軍としての作戦の成果としては十分な量の成果でしょう？ そして、艦娘を深海棲艦化することも可能だということもわかった。それに無理があると言っていることもね。これだけの情報を集めるのに必要な対価と言えなくもないと僕は思うよ？」

「渡井の言葉に杉田が明らかにムツとした表情を浮かべる。鷹の眼用のグラスデバイスを外すと赤く充血した目で睨む。」

「当事者にとってはろくでもないがな」

「それでもこの情報が手に入ったことは大きい。水かきがついてるお釈迦様の手で掬っても水は零れてしまうだろうし、千手観音だって、これだけ膨れ上がってしまった生命を救おうとすれば手遅れになることもあるんじゃない？ 僕たちの仕事は手の平に残った水をどう救うかのはずだ。もちろんこぼれた水がどうなってもいいという意味じゃない」

渡井はそう言うとはらつと笑った。

「ここからが勝負なんじゃないの？ 春雨の喪失を活かすか殺すか。その明暗を分けるのはこれから次第じゃない？ 違う？」

渡井の声に航暉が頷いた。

「そうだな……そうだ」

まるで言い聞かせるようにそう言つて航暉は立ち上がる。

「収容が終わったら横須賀に帰還となるだろうが、気を抜くなよ」
「ところがどっこい、そうもいかないらしいみたいだぞ」

杉田がそう言うのとメッセージをホロスクリーンに映し出した。

「そのまま父島列島守備隊と合流、前線待機？」

「総司令部からのトップダウンだ。艦娘の収容が終わればそのまま弟島の577としろだそうだ。補給は『とわだ』が物資満載で弟島に乗り付けるとよ」

「弟島というと……『カナリア』か」

高峰の声に笹原が一瞬嫌そうな顔をした。

「あそこも、うちとどっこいどっこいの濃い面子よね」

それを聞いた高峰も苦笑いだ。

「とりあえずは収容して指示通りに動こうぜ。話はそれからでも十分だろう」

次の目的地が決まったと言うことは次の任務が始まると言うことでもある。それを考えて杉田が笑う。

「覚えてるか？ これ、まだ発足初日なんだぜ？」

「先が思いやられるよな」

「いーじゃん、暇で仕方ないよりいい気がするけどね」

「軍が忙しい世の中はろくなもんじゃないけどな」

駆逐艦あすかが海上を滑る。一戦を終えた少女たちを迎える灯がともされた。

P R E Q U E L 0 4 Die Walk・r
e——馬鹿と鋏は使い様

きつかけはほんの一言だった。

「俺たちから基地を守り切れたら、作戦参加者全員に焼肉おごってやる」

その一言で本気になる程度、たかがその程度だが20代の男たちを鼓舞するには十分だった。

これは特上カルビを賭けた、男たちの物語である——

「……といっても、勝ち目ある訳？ 実際さあ」

そう言ったのはこの対テロ演習に参加した紅一点、笹原ゆうだ。

「相手はあの訓練主任、空挺特科仕込みらしいじゃん。その主任が率いてくるのは日本国自衛陸軍の第13旅団、それもわざわざ伊丹から呼び寄せた第8普通科連隊の第一小隊。言っちゃ悪いけど市街地戦

や室内戦闘のプロ相手にたった5人で何とかできるわけ?」

「相手はたったの12人だ。籠城戦だと攻め手は守り手の3倍の数が必要だと言われるだろ? そこから20%も少ないんだ、何とかなるさ」

作業服の裾をブーツに入れ込みながら靴紐を締めあげるのは杉田だ。

「そりゃああなたは市街地戦経験者の前哨狙撃手スカウトスナイパーだからでしょうが、ここにいるうちの3人は民間出身なのよ?」

「そういうあんたは元々陸軍の予備士官じゃねえか。2・5人だろ」

笹原がそう言われると黙り込んだ。ケラケラと笑うのはすでに作業服をラフに着こなした渡井だ。

「もちろん僕はドンパチ要員に入っていないよね?」

「入ってたら動いてくれるんだな?」

「まっさか、SEにそんなことを聞かないでよ杉田くん?」

そんな軽いやり取りに笹原は溜息をついた。そのまま待機室の壁際に流し目を送る。

「じゃ、もうひとりの軍人に聞いてみましょう。どう思う? 月刀航暉

士官候補生?」

「やれるだけやるしかないだろうさ」

濃紺の作業着に野球帽のような作業帽を目深に被った航暉がそう言った。

「要は自信なしってことでいいのかな?」

「馬鹿言え。勝算なくしてメンバーを集めたりはしないさ」

航暉が笑みを送る。

「高峰」

「なんだ?」

「お前と渡井がカギだが特にお前がメインになる」

「……本当にアレやる気なのか?」

「問題が?」

「……………いや、いいよ。そろそろ天狗になった教官の鼻をへし折れたかった頃だしな」

高峰が肩を竦めたタイミングでスピーカーにノイズが入った。

《特別訓練隊第5班、第一訓練棟中央ロビーへ出頭せよ》

「んじゃ、いくか」

「はいはい。ペイント弾塗れはやめてほしいんだけどなあ」

「それはお前次第だろ笹原」

彼らが消えた部屋には何も残っていなかった。

国連海軍大学広島校——通称UNNS t a C—H i r o s
h i m a

深海棲艦の脅威に立ち向かうべく設置された国連海軍、その主力兵装たる艦娘——水上用自律駆動兵装を司り、海を切り拓く責務を負う水上用自律駆動兵装運用士官の養成機関である。

一般兵装ではまともに太刀打ちできなかった深海棲艦への切り札である艦娘。それを統べる水上用自律駆動兵装運用士官という役職は全ての海軍に於いて唯一と言ってもいい花形だ。その登龍門たる国連海軍大学校、その水上用自律駆動兵装運用士官養成過程はとてつもなく狭き門となっている。登龍門を潜り抜けて晴れて候補生になったとしても毎年平均して3分の2がドロップアウトするような強力な篩いにかけられる。

そうして残っていくのは強靱な精神と技術を高い次元で備えた猛者たちだ。その試練を潜り抜けてきたという自負と世界を背負って

戦うという気概を持つ人材だ。——そうしてプライドを高くしていった人材である。軍は強固な階級制度に支えられ存続する。そこに過度なプライドに塗れた人間が紛れればどうなるか分かったものではない。

だからこそ、適度にその鼻を折ってやる必要がある。そのために行われるのが5年目にしてすでに恒例行事となっている「対テロ特別演習」——通称「公認リンチ」。

参加は任意、司令部が乗っ取られるという事態を想定した対人テロ演習だ。上手くいけばいつも怒鳴り散らしている訓練主任をぎやふんと言わせることができるが、上手くいかなければ逆にぼこぼこにされる単純明快な構図。それでも反骨精神溢れるプライドの高い候補生が毎年挑んでは玉砕している。それでも訓練主任に勝ったという榮譽と、噂されている「勝つたら特上焼肉を訓練主任の財布で食い放題らしい」という条件につられて20代特有の若気の至りを尽くして訓練生は挑み続けている。その勝利条件が「らしい」と確証がないところに結果が見えるだろう。

今年は27人が志願、すでに22人が玉砕している。そして最後の班が————主席から5位まで雁首揃えて志願した月刀班である。

「よう、委員長。ボロボロじゃねえか。スコアは？」

「Aマイナスだっけ。あんたらにそそのかさされて参加してみたらこれだ。全くやるもんじゃねえよこんなの。教官が成績優秀なのを殴るのはといて手加減してもらってこれだ」

「これだと上位クラスじゃねえの？ さすが守りの東郷」
「守りというよりお守で鍛えられたからな」

その皮肉を受けて高峰が遠慮なく大笑いしながらある男の肩を叩く。訓練服の所々に不健康そうな人口色の緑のペイント弾の後を染みにした東郷かけらだ。委員長と呼ばれる几帳面さを持っている男だが、情に篤く融通が利くため仲間に引き込んで損はないとは高峰の談である。

話を聞けばチームで最後まで残って司令室で籠城戦に入ったもの

のグレネードぶん投げられて終了だったらしい。それでも本格部隊相手に30分近く持ちこたえたのだからさすがのものである。

「成績優秀な奴を手加減してくれるならどこまでヌルゲーになるかなー」

「渡井笹原高峰杉田月刀、成績優秀以上に問題児が集まってどこまで手加減されるか楽しみだ。実力120%でくるに大盛券5枚」

それを聞いて高峰がにやりと笑った。

「相手の100%がわからないから不成立とか言う気かな、委員長」

「……こういうことなら頭が回るのな」

「お前がお金の絡む賭け事に手を出すより太陽が西から上る確率の方が高いね」

そう言うとき高峰が右手を掲げた。

「お前の仇は俺がとってやるよ、委員長」

「当てにはしてないけどな」

ハイタッチを交わして分かれる。東郷はその後ろ姿を見送った。

「まったく……何を考えてるんだか」

袖口を気にしながら東郷は廊下を進み、男性用トイレに入る。迷うことなく個室に入り鍵を賭けると。袖口を振った。出てくるのは折りたたまれた白い紙。

——焼肉を食べたくないか？

その書き出しで始まった文章を見て苦笑を浮かべる。

「本当に、お前ら何を考えてるんだ？」

訓練主任が訓練棟、今は模擬司令部棟のドアを開けると、夜闇の中でしんと静まり返っていた。

あのガキども、どこから仕掛けてくる？

主任はサブマシンガンを構えたまま吹き抜けになっている中央ロビーに入り込んだ。11人の部下も入り込み全周警戒を行う。人影見えず、ホールクリア。

「ガキどもらしくないな」

主任がつぶやくと部下のひとりが口を開いた。

「貴方をそこまで言わせる奴なので？」

「一人ひとりはどうでもないが、集まるとやることなすこと禄でもない奴らだ」

「ほう——陸軍出身二名込みでしたか？」

「油断す——っ！」

カツンと何か物音がした、主任をはじめ皆が一斉に銃を振る。一瞬だけ影が動いた。

「——そこだっ！」

主任が走りその後を追う。角に消えたその影を追おうとして角を曲がりこんだ直後、カツンツ！という大きな音が響いた。同時に見えない壁にぶつかったように主任がしりもちをついた。思いつきり顔をぶつけたのか押さえた鼻からは血が滲んでいた。

それを嘲笑うかのように続いているはずの廊下にアメモミ調のひょうきんなキャラクターが浮かんだ。それが笑ったようにひらひらと宙を舞う。

「ほ、ホログラムだと……！」

その空間に手を伸ばせばただの壁があるだけだった。空間ホロで直線の廊下を90度まげて見せ、壁に向かって突っ込むように仕向けられたのだ。曲がり角に見えた壁の向こうに廊下が続いている。

ゆつくりとホログラムを潜るも、見えたはずの影は姿かたちもない。

「舐めやがつて……！」

主任が突っ込んだ壁に投影されたキャラクターの満面の笑みが主任を苛立たせる。

「物音がした以上、トラップか本人のどちらかがあるぞ」

ゆつくりとホログラムを潜る。その向こうの電気は落とされ、窓のない空間は闇に沈み込んでいた。

「さて、どこからく——」

ゆつくりと足を前に踏み出した主任の姿が掻き消えた。

「た、隊ちよ——!?!」

「あ、あいつらあ……」

足元を押さええてうづくまる主任。体が半分ホログラムに埋まっていた。床下の配管点検用のハッチが取り外され、そこにホロが仕込んであったのだ。開口部の縁にはクッションがはめられ、30センチほど落ち込んだ部分にはネットが張られており安全対策も万全だった。それがやたらと主任の頭に血を上らせた。

「……監視室！」

ハッチから体を起こす頃には既に主任はお冠だった。

「あいつらの居場所掴んでるだろう?! 転送しろ！」

《し、しかし、それは……》

「いいからやれ！」

《……わかりま——》

いきなり無線に雑音が入る。同時に視界も一瞬ぶれた。

「で、電腦ウイルス!？」

《あ、害はないので安心してくださいね》

軽いテンションでアナウンスが入った。

《監視室へのラインを開いたのは失策でしたね。建物内部の電波は建物内部のルーターを経由する。そうして、我々しかいない建物内部において無線を使うものなんて自分たちの使用帯を除けば全てあなたたちのラインと言うことになる。割り出しは一瞬ですよ、テロリストさん》

「……高峰、貴様」

《兵は詭道なり。内通者によつてあなたたちが我々を無効化するつもりなら、こちらにも考えがある》

そう言うと同時に視界を埋めるように「企業広告」が流れ始めた。「んな……!?!」

視界を埋め尽くすいくつもの広告。ジュースにお酒にピザにおつまみ……中には描写するのが恥ずかしいような広告も混じっている。

《野郎でいっぱいの前線部隊ですからね、こういうのもアリかなあと思ひまして》

無線の奥の声はそう言つて笑いかみ殺す。

《おい、高峰！…これ「本番」のものが一つもねえじゃねえか!》

そう怒声が無線に乗る。主任はその声を聴いてさらに眉を顰めた。そういう品に欠けるラフプレーが多いのが杉田の特長だったことを思い出したのだ。

《あ、確かに。それじゃこれでどう?》

直後に「突撃一番」と書かれた箱の画像がバクでも起こしたかのように大量に現れ視界を覆った。無線の奥が大爆笑。

《ちよつとー、女性の存在忘れてない?》

無線にさらに割り込んだのは笹原だ。もーやだーと言う声は訓練中とは思えないテンションの低さだ。

《んじゃ、少しでもマシンのようにクラシックでも流す?》

建物内のスピーカーの電源が入ったらしく、通信機以外にも音声が始めた。

《なら気分転換でこういうのもいいかなと思います。皆様お聞きください。リヒャルト・ワーグナー作曲、オペラ『Die Walküre』より『ワルキューレの騎行』、指揮はゲオルグ・シヨルティ、ウィーンフィルハーモニー管弦楽団の演奏でお聞きください》

そう言うとき耳をつんぎく大音量でオーケストラの壮大な音色が流れ出した。

「き、貴様らあ! 教官の前でいい度胸だ、首あらつて待つてろ!」

《やつと本気ですか、期待してますよ。主任殿》

最後のその声はこの問題児集団を束ねる男の声。——月刀
航暉が主任の切れてはいけない線を叩き切った。

「全員電脳を自閉モードへ変更！　トラッシュボムはオフラインにすれば消えるはずだ！」

主任が叫んで小銃に新しい弾倉を叩き込んだ。通信を取りやめれば一気に視界がクリアになる。

杉田の指摘に広告の塊はすぐに反応した。それはその広告のコントロールが手動で調整されていることを意味する。

「隊を二つに分けるがそれ以上の隊の分断は厳禁。必ず集団で対象を撃破しろ！」

「了解っ！」

「連絡は通信機を使用。コード16で暗号化。コードブックは相手の手に入っていないはずだ。電脳回線は開くな、また乗っ取られるぞ」

オーケストラの演奏を前に怒鳴らなければ意思疎通も困難だ。無線機を使うしかない。最低限度の連携はとれるが、傍聴されていると見るべきだろう。

(くそ、やってくれる……)

電脳ウイルスで電脳通信を、無線の盗聴で音声無線を、ホログラムで視界を潰し、チームとしての連携を一瞬で瓦解させた。これでは数の利で押し通すことも難しい。それでも負けるわけにはいかないのだ。

主任が一気に班一つを率いて飛び出した。その視界の先で大量のホログラムが浮遊し、空間自体を歪めて見せる。

Fair is foul, and foul is
fair, However thorough the fog
and filthy air.

そう高らかに笑って見せるホログラムにセミオートの弾丸を一発撃ちこんでみた。当然のことながら弾丸はすり抜けホログラムは依然宙を舞い続ける。主任は壁にある機材——そのプラスチックの保護板を叩き割り中のスイッチを叩き込んだ。同時に天井に設置されたスプリンクラーが水を撒き散らす。湿度が上がり、水滴に光

が乱反射すれば、空間投影型のホログラムは像をおぼろげにし、文字通りの霧となつて霧散した。

「行くぞ」

主任がそう呟いて廊下をかけた。

「大本の通信回線を掌握するにはその大本のところに枝を付けるいらない。だとしたら少なくとも一人は地下の電信管理区画にいるはずだ！」

「さて、第一フェーズは完了だね」

スプリングクラーで霧散するホログラムを確認して渡井が笑つて見せる。高峰はそれを見て肩を竦めた。

「それで、本当によかったの？ 火災報知機をテストモードにすればもつと長くホロを使えたよ」

「それをしたら第二フェーズができなくなる。銃器をまともに入手できない俺たちが完全防備の奴らを相手にするには道具が必要だ」

高峰が防災情報呼び出した。火災警報器が始動した結果として建物内の消火栓を示すすべてのマークが黄色————使用可STBYを示していた。

「だが、武器を使うには相手を見つけなければならない訳だが……」

「6人目の班員の登場というわけだ」

渡井が素晴らしいながら外部通信を一つオープンした。彼が高峰に

キューを出すと高峰が口を開く。

「さて、聞こえてるかな、委員長」

《一体どんな手品を使ってやがる。なんで演習域から秘匿回線が繋がるんだ》

「それは企業秘密だ。そつちは今？」

《焼肉好きの若者が俺含めて10人》

「案外少ないな。まあいい……監視カメラの画像、乗ってるか？」

《スプリンクラーで視界悪いが確認してる》

それを聞いた高峰が笑った。

「単純作業で済まないが、テロリストがどこで何をしているかをモニタリングしてくれ。その状況を見て各個撃破する」

《自信の程は？》

「五分五分だが、負けはしないさ」

高峰はそう言って頼むぞ、と言って無線を渡井に取り次いだ。

「さて、第二フェーズだ。まやかしはここで終わりにしよう——

——いけ、笹原」

《あいあい》

第二段階がスタートする。高峰が走る。

「汚物は……消毒だあああああああああつ！」

そう叫んで消火栓のホースを振るう笹原。実に楽しそうである。

廊下の角ではその放水で足止めを喰らっている教官たちの姿があった。

消火栓の強力な放水能力は教官たちをその場にくぎ付けにすると同時に相手に攻撃を許さない。顔を出すことすら許さないのである。めくら撃ちでどうにかなる問題ではない。そもそも論として廊下の角から動けないのだ。

「ちっ。なんとか抜けないのか?」

「抜けたかったら出てきたらいーじゃん!」

笹原がわざわざ声を張り上げた。相手はそれを聞いて苦虫を1ダースほど噛みしめたような顔をした。今の声の音量で笹原に眩きが聞こえるはずがない。それでも答えが帰ってきたと言うことは、秘匿通信のパターンが解析されている。

「およう。」

いきなり水圧が弱くなった。拍子抜けするほどに弱くなった。――建物にある複数の消火栓を同時に使用することはできない。それは使用する大本のポンプの出力に限界があるからだ。どこかでスプリンクラーが追加で始動したか、もしくはどこかが破損したか。

その隙を見逃さず笹原を捉えようと相手は一気に廊下に飛び出し、そこで間違いを犯したことを知る。銃の真下に低い姿勢で大男が飛び込んだのだ。

なぜ気がつかなかったのだろうかと思わなくもない。

消火栓は常に複数人で使用するものだ。建物についているあの消火栓はポンプの操作弁は壁にあり、ホースを構えた状態では操作できないものだ。

すなわち、笹原のほかに最低一人いることはわかるはずだった。

その後悔を噛みしめながら相手のアッパーを銃で受けようとし、それを掴まれた。そのまま強引に体勢を崩され、足を刈られる。あっけなく大男に吹っ飛ばされた彼は、味方の射線を塞ぐ形でたたらを踏んだ。その彼に容赦なくペイント弾が乱射された。それを受けて教官たちは呆然とその姿を見上げた。その乱射は男たちのどこかしらに

命中弾を叩き込んでいた。

「あ……！」

「狙撃兵に接近戦で負ける奴がどこにいるんだ？　ちよつとは困らせろよ」

「ス、ステインガーキラー……杉田一曹……！」

杉田の姿を認め自衛陸軍所属の男たちは青ざめた。

日本国自衛陸軍第一師団第一偵察隊第二小隊所属、杉田勝也一曹。最前線に飛び込んで、敵の情報を人知れず収集し、正確に相手を叩く技術を叩き込まれた前哨狙撃手。通常の狙撃のみならず、砲の着弾観測やミサイルの終末誘導、E E E Iの元となる画像情報^{I M I N T}の収集などを行うため、砲術や情報術も習得した異端の狙撃手。

仙台で過熱した在日外国人排斥運動。暴徒化した民衆と、それを扇動する反政府武装組織。その構図の中で反政府武装組織を叩くためにはたくさんの情報と脅威判定が必要になる。その最前線に立ったのが杉田だ。彼がステインガーを持ち出したゲリラを迅速に叩いたことによつていくつものヘリが命拾いした。その成果は作戦参加者の間ではステインガーキラーの名と共に知れ渡っていた。

「残念だったな。一気に6人確保だ」

杉田の勝利宣言を前に男たちは降伏するしかなかった。

「それで、無事に親玉を確保したわけだ」

「その代償に隊員オフィスが『台風』の後になつてゐるわけね」

背中に手を回して縛られた主任を前に笹原が肩を竦めた。月刀高峰ペアが主任率いるチームと接触、戦闘になつたらしい。その主戦場になつた隊員オフィスが足の踏み場もないんじゃないかと思えるほどに荒れていた。

「マジできつかつたんだぞこれ」

高峰が腕を振りながら笑つた。いくつかの場所が青痣になつてゐる。それはそうである。スプリングクラーで濡れて光る床をキャスタ―付の椅子やらワゴンやらが疾走し横に倒されたデスクを防弾板替わりにしての撃ち合い、空のリングファイルを投げと新兵教育の後も真つ青な状況になつてゐた。その代償が打ち身程度で済んだのだからよしだろう。

「さて、そろそろ起きてもらおうか、主任に」

航暉はそう言うとしやがみ込み、主任の肩を叩いて目覚めさせた。最終的に手刀を叩き込んで黙らせた結果だ。もうこの時点でこの演習は成功している。だが、それでは『まだ』足りない。

「主任、おはようございます」

「……なんで俺を縛つてやがる」

「実はまだ生き残りが抵抗を続けていましてね。どうかあなたの声で敗北宣言をしてほしいわけです」

無線機を目の前に置いて航暉が笑う。その笑みを見て苦々しい顔をした主任が吐き捨てた。

「武力で押さえなければ意味がないんじゃないのか？」

「戦わずに済むならそれに越したことはない。だからこうしているわけですが、一言『我々の負けだ。作戦参加者に焼肉をおごる』と云つてくれればいいだけです」

簡単でしよう？と航暉が演技臭く笑えば主任が黙り込んだ。

「……ささ、どうぞ」

「……ノーだ」

その答えを聞いて航暉は至極悲しそうな顔をした。

「それは残念」

航暉はそう言うところごとく何とかを取り出した。暗い部屋に反射するのは……コンパクトナイフ。主任のヘルメットを外してにたりと笑った。

「もう一度聞きますよ？ 敗北宣言をしてほしいわけですが、どうします？」

「ノ、ノーだっ！」

「やっぱり残念」

折り畳みのナイフの刃をゆっくりと思わせぶりに開いて見せて。鉄兜を避けた先にある髪をわずかに撫ぜる。

「ま、まさか……」

「女性の髪は女の命といいますが、クルーカットが主体の男にとってはそうでもないでしょうね？」

「や、やめ……っ！」

「ではいきますよー」

主任の細く長い髪は天頂部の皮膚を守ろうとしていたが、その楼閣をはがし、その根元にナイフを入れた。

「~~~~~っ！」

「とりあえず根元から行きますね〜」

「やめろおおおおおおおっ！」

雄牛のような絶叫がこだました。その抵抗もむなしく。ナイフの刃はすべり、その髪を切り取った。

「いっそのことバーコードから脱却して河童にした方がいいかと思うんだけどなあ」

航暉は至極楽しそうにそう言って。どんどんナイフを入れていく。「わ、わかった！ 俺の負けだ！ 月刀班の防衛成功を認める！ 総員状況終了！ だから頼むから！ 頼むから髪だけはっ！」

「勝利の副賞は？」

「作戦参加者全員に焼肉をおごるっ！」

「ごちそうさまです」

ナイフを仕舞い、縛るのに使っていたバンドを切ると班員全員がハイタッチした、

「では、15人分、楽しみにしていますよ」

「は？」

「監視室のログを視れば誰が参加しているかわかると思うので。楽しみにしていますよ。訓練主任！」

渡井がそう言つて部屋を出ていった。スピーカーの音が止んだ。大音量でずっと女神の嘲笑を聞き続けたせいかな静寂が耳に痛い。

「それじゃ美味しい夕食と洒落込もう。さっさと濡れた作業着脱ぎたいし」

「だよな、濡れて重いし真っ黒だもんねー」

「濡れ烏つてか？」

「濡れてカラスの羽も艶やかに、闇夜に溶けて消えてゆくつてか？」

渡井がそう言つると高峰が笑つた。

「そんな歌あつたかな？」

「今適当に作つたよ。あー腹減つた」

渡井が伸びをする。建物の外に出ようとして肩を掴まれた。息を荒くし恨みがましい目で5人を睨む主任だ。

「遊んだら片づける。子どもでも知っていることだな？ うん？」

しばらくはまだ演習は続くらしい。

結局、焼肉「は」主任の財布で作戦参加者に振る舞われた。5人の濡れ烏はもちろん、「委員長」こと東郷が集めたメンバーも舌鼓を打った。

それ以上に高い酒類の請求が回って来て、上位5人が東郷を含む他のメンツから怒りのグーパンを喰らったのは完全な余談である。

あんたか、アイツの話を知りたいってのは。

なに、嫌なわけではないからいいけどな、直接赴くにしてはもう少し早く連絡を取ってほしかった。少々時間に不自由している所があつてね、電嬢の紹介じゃなきゃや会わなかっただろうし会えなかっただろう。――煙草を吸っても？

で、何を聞きたいんだ？ とりあえずなんでもと言われるのが一番めんどくさいんだよなあ。まあいいけど、あんたはどこまで知ってる？

……ふん。表向きの情報は一通り漁った、そして電嬢からもある程度話を聞いたつてところだな。

第50太平洋即応打撃群の初出撃については聞いたか？ そうだ、駆逐棲姫迎撃戦のことだ。俺にとっては指示通りに引き金を引くだけの簡単な作戦だった。アイツがトップならまずおかしなことにはならないから。

あ？ アイツのことか？ そうだなあ。俺にとってはただのヘタレた馬鹿野郎だよ。頭の回転の速い馬鹿。相手にすると一番面倒なタイプだ。笑わなくてもいいだろう？ 俺から見たアイツの姿を率直に語っているだけだ。

話が逸れたな。とりあえずあの迎撃戦の時は……というより迎撃戦の後が大変だったんだ。駆逐棲姫に成り果てた艦娘の僚艦の艦娘たちを見て、電嬢が塞ぎこんだ。助けられたかもしれない、もっと早くああしていれば、私がつと強ければ……とかな。アイツはそれを認め、痛みを共有することで電を支えようとした。

俺から見れば実にくだらない。――薄情か？

違うね。あの時の感情は「後悔」だ。「反省」じゃない。覆水盆に返らず、後悔先に立たず。起きたことを悔やんでも仕方がない。その現状を認めたくさなくて今から何ができるか。それを見極めなければ

ならない。それをせずに後悔だけしていても成長も進歩もない。電嬢もアイツもトップだ。それを行動や命令で示すべき立場にある。そこはどの業界も変わらないと思うがね。軍では特にその色が強いだろうけどな。

軍ではトライ&エラーが許されるのは訓練だけだ。それ以外は常に実戦であり、命がかかる。それは艦娘も俺たち運用士官も変わらない。そこに差はないし、少女だからってそれが免除される訳ではない。そのリアルを受け入れなければ生き残ることはできない。それが故に単純で強い掟だ。

艦娘の子たちはそれをどこかで割り切ることができるようになっていた。そういうもんだって割り切れなければ生き残れない。そう思うようにできてるんだ。そういう風に作られたんだからな。

……あんたは俺を見てどう思った？ 人間だと思ったか？ そうかい、ならもう一つ質問だ。なぜそう思った？

確かに俺は人間として軍のデータベースに登録されているからどうも「人らしい」。腰から下、左腕、左目、耳を義体化して、さらには脳さえ代替品たる機械に置き換えた。フランケン状態になったが、それでも人間として扱われる、なぜだか考えたことは？

兵士が義体化した場合、それは肉体の延長であり、医療行為として認識されることが通例だ。だが、艦娘は兵器に搭載される高度な人工知能の代替品として個々の脳殻が搭載されているにすぎない。それぞれに与えられるのは姓名、血液型、宗教などがパンチングされた個人認識票^{ドッグタグ}じゃなく、シリアル番号と部品形式が記録された管理コードだ。軍産複合体で生まれた「戦闘兵器」は備品として管理されるべきだからだ。彼女たちにとっては軍なんて組織は器に過ぎず、特務官なんて身分らしきものも名前も全て活動を保証する都合に過ぎなかつただろう。

人の形をしていても、彼女たちに求められる特性は機械としての性能と効率、そして成果だけ……恐ろしく暴論だがそれがまかり通っていたのさ。少なくとも艦娘が生まれた当初は。

……だが、それに否と言いつつ続けたのがアイツという人間だ。アレが

馬鹿たる由縁は自らの思いが私的なものであるにも関わらずそれを否定し、公的な立場で歪みを是正しようとしたことにある。自らの理由を正当化できないのに行動を正当化できるはずもない。それで罪悪感を募らせた。それが結果的に正しかったとしても、それを信じることができないんじゃないや遅かれ早かれ頓挫したさ。

アイツの理由は「罪滅ぼし」……電嬢と雷嬢がアイツの妹がモデルとなってることは知ってたな。それを止められなかったこと。彼女たちの記憶を引く二人を戦場に立たせなければならぬこと。それに対する罪滅ぼしだ。これも歪んでいる。過つてないのに何を正せばいい？ ただの自慰行為に過ぎないんだよ。あいつの罪滅ぼしは。

俺はそれでも動く理由になると思っている。それを認めればいいと思ってる。けどあいつにとってそれはタブーなんだよ。——なんでかって、そりゃあアレの親父たちと一緒になりたくなかったんだろうさ。自らの一族のためにクーデターを引き起こし、水上用自律駆動兵装の技術を独占して地位を高めたり、そういうことをした月一族の人間と一緒になりたくなかった。私利私欲のために行動することの醜さをずっと見てきた。だから動けない。

だから馬鹿なんだよ。アイツは。馬鹿だからそうするしかできなかったのさ。

ANECDOTE 005 二人は似た者同士だから

青い空、青い海。その狭間にぽつりと浮かぶ人工島がある。座標で言えば北緯20度・東経140度といった所だろうか。

深海棲艦が現れた当初、日本国やユーラシア大陸に向かう深海棲艦の流れを察知し、迎撃するための前線基地たる巨大メガフロート船よりも巨大で、長期間海の上にとどまり続ける灯台船のように、ぽつんと海上に浮かんでいた。

その長方形の船にDDI-1あすかはゆっくりと接岸していく。

「おっきいのです……」

「艦娘が出てきてからの黎明期、まだチュークも小笠原も奪還できていなかった時期の遺物だからな」

そう言ったのは登舷礼のために第一種軍装を着用した杉田だ。名前を詐称しているのかと思えるほど大きな駆逐艦に乗っているのだが、目の前の船はそれ以上にでかい。ぎっと1キロ四方だろうか。それぐらいあるのが見て取れる。

「そーいやここには寄らなかつたんだっけ？」

「私達はここじゃなくて硫黄島の方に直だったので……」

「そーいやそーうか。銀弓の時はそっちメインだったからな」

杉田はラフに立ったまま接岸用意を整えたあすかがゆっくりと近づく島を眺める。

「何度見てもけつたいな基地だよ」

「そーなのですか？」

「全域が世界遺産化した小笠原諸島に軍事基地開発をするべきではないと市民の皆様がおつしやられた結果がこれだからな。水に浮く巨大なはしけで対応する。なかなか斬新だろ？ おかげで移動式の巨大前線基地となったがやってることはただの監視船と同等になっちゃった」

そういう顔はどこか怪しい笑みが浮かんでいた。

「……杉田さん？ どうしたのです？」

「どうしてここがカナリア鎮守府なんて呼ばれてるか知ってるか、電嬢」

杉田は笑みを隠すように制帽を目深にかぶった。

「俺もここが『現役』だったころは知らねえし、お前の方が詳しいかもしれないが、ここは実質的な流刑地だったんだよ。敵の接近を伝え、漸減作戦の先駆けとなって散る。ただ警鐘を鳴らすためだけの基地。坑道でガス検知につかうカナリアのように息絶えることで危機を知らせるための警報装置。だからカナリアなんだとさ」

電はそれを聞いて記憶をたどる。……かなり昔にそんな話を聞いたことがあつた気がした。

「だが、そこでずつとしぶとく生きていやがるやつがいるせいでカナリアの名は返上らしいけどな」

「その方って……」

「もうすぐわかる」

接岸を終え、係留に入る。杉田が笑って踵を返した。

「さて、犬とサルの子に付き合おうとしますか」

「湿気た顔並べてご機嫌麗しゆうとでも言えばいいかい？」

「疲れてんだよ」

いつもよりも砕けた口調でそう言うのは我らが司令官月刀航暉准将である。それを受けるのは鳶色の右目を焦げ茶にも見える髪で隠した男だった。

「部隊発足翌日からなんでお前らと顔を突き合わせなきゃいけないんだよ、凧風、星影の奴はどこ消えた」

「今ごろ厨房じゃない？ 包丁取りに行ってる」

「笑えねえ冗談だ」

その遠慮のない会話に戸惑うのは艦娘の代表として他の僚艦よりも先に下艦した電である。副長の高峰は補給系の打ち合わせ、渡井と笹原が戦闘で傷ついた艦娘たちをドックに叩き込む手筈を整えている所だから航暉と電が代表してこの司令官に挨拶に伺おうとしているのだが、航暉は余り乗る気じゃないらしい。

「あの、司令官さん……こちらの方は……」

「なんだかんだの腐れ縁」

ムスツとしたままそう言った航暉。その顔はどこか嫌そうである。それ以上のことは言いたくないのかそっぽを向いたまま固まってしまふ。

「全く、そう言うところ変わってないよね、月刀くん。電ちゃん……って呼んでいいかな？ 凧風だよー。階級は一応少佐、この副司令。よろしくね」

「あの、えっと……電です。よろしくお願いします」

「ん、他の子たちも今頃降りてるんでしょ？ とりあえず講堂にみんな集めようか。顔合わせも済ませたいし」

「駆逐だらけのロリコン司令二人に合わせなきゃならねえかと思うとかなり不安だな」

「星影はともかく俺にそれを言う？」

「適正でたの駆逐艦だけだろ？」

「性格と能力は分けて考えようよ。出世欲があるとは言えないけど、他の艦種も扱いたいって思うこともあるんだよ？」

「悪かったな」

割り込んだのはメツゾソプラノの声、廊下の奥で通せんぼするよう

な形で立っているのは白にも見える長い銀髪を揺らす小柄な少女だった。文月と同じ型のセーラー服タイプの黒い制服。航暉はその姿を見て、DD—MT09「菊月」だと判断した。

「あちゃあ、菊ちゃんに聞かれてたか」

「菊ちゃん言うな……まったく、戦友に何たる暴言か」

暴言でも何でもないと思いつつも電は微笑んだ。そのまま一步前が出る。

「む、お前は……」

「第50太平洋即応打撃群総合旗艦、DD—AK04、電です。よろしくお願いします」

「……西部太平洋第2作戦群577駆逐隊旗艦、菊月だ。共に海を征けること楽しみにしている」

「なのです！」

握手を交わして、電は振り返った。

「こちらが私達の司令官で……」

「月刀航暉准将、だろう？」

菊月が僅かに微笑んだ。

「如月や皐月から話は聞いている。異常豊作とまで言われた国連海軍大学広島校の第5期を首席卒業、ネオMI攻略作戦の撤退戦指揮官にして、ヒメ事案にて高等種の深海棲艦の鹵獲に成功、現役士官では3人目の国連海軍の殊勲十字章を授与された。——会えたことを光栄に思う」

「こちらこそ、短い間だが基地をお借りするよ」

航暉と菊月が握手を交わす。菊月の視線が横に……凧風の方へと動く。

「それで？ 准将に対してその態度は如何なものかと思う訳だが、凧風副司令」

「陸軍時代の知り合いだからね、いつの間にか月刀君が出世してて驚いてるけど」

ネーム・ノウエム
「陸軍時代の……」

その電の眩きを聞いた凧風と航暉が一瞬目を細めた。

「……どうかしたか、 凧風副司令」

「いんや、何でもないさ。とりあえずはみんなを講堂に集めておこうか。きつと星影のシフォンケーキが焼きあがってるはずだ」

「まだ料理やってるのか？」

航暉がうげ、と言いたげな顔を見ると凧風が吹き出した。

「そこまで嫌な顔する必要ないでしょ。月刀君が料理できないのは自明の理な訳だし、我らが給仕長の星影にかなう訳ないんだからいちいちそこで張り合わないの」

それにはムスツとしたまま答えない航暉。いつもに比べかなり子供っぽい彼の姿に電はくすくすと笑った。それと同時にどこか切なさを感じてしまう。自分の知らない彼の姿、彼が見せようとしなかった彼の姿。その存在に少しだけ、本当に少しだけ悲しさを感じてしまう。隠さなくても私は受け入れるのに。

「……電？」

「なんでもないのです」

考えが落ち込んでいる間に僅かだが足を止めてしまっていたらしい。慌てて追いかけながら考えを振り払う。

「えつと……この基地の司令官さんと知り合い……なのですよね？」

「ああ、『知り合い』だ」

妙に知り合いを強調するところはそれほど好意的に思っていないと言っているだろうか。どんな人なのだろうと怖いもの見たさのような興味が膨らんでいく。それが顔に出ていたのか凧風が笑った。

「期待してるというよ。すごいから」

そうして会って見てわかる。これは確かにすごい。

「ああ？ もう着きやがったかシスコン野郎」

「ロリコンのテメエには言われたくねえよ星影」

敬礼よりも先に飛んできたその声に航暉が明らか苛立った声色で返す。その暴言を放った相手を見て電は一瞬自分の眼がエラーを返したのかと疑った。黒い髪に鳶色の瞳、純日本人的な顔立ちだが、つ

り目が印象を強くし、ワックスでも使ったのかツンツンととがった髪が彼の印象を鋭くしていた。

それよりもすごい印象だったのが、軍の勤務時間中だというのに深紫の甚平を着ていたこと、そしてその格好に三角巾とミトンで武装し、オーブンから焼きあがったシフォンケーキを取り出していたことである。

「えっと……」

それを見て電が言葉に詰まっていると甚平男が電の方を見た。見ただけなのだが、目つきが悪いせいで睨まれたように感じてしまう。

「そっちのガキは？」

「俺の部下だ。DD-AK04電」

「えっと、あの、よろしくお願いするのですっ！」

「あつそ、星影だ。名前は覚えなくてもいい。俺も覚えるつもりはない」

「んな……!?!」

星影と名乗った甚平男……これまでの会話からこの男が基地司令で間違いなさそうだが、この調子で大丈夫なのかと一瞬疑ってしまった。

「それで、シスコン野郎が何の用だ？」

「用もへったくれもねえよ。総司令部おかみからの前線待機指示だよ」

「そんなことはとづくに連絡受ける。ほんとお前行間読むの下手だな。俺が聞きたいのはお前が何で厨房こしに来てるのかってことだよ」

「それこそ頭を使えよ星影。仮にも将官が2人も乗艦している船が入港してんだ。出迎えるのが筋だろうが。せめて入港の連絡ぐらいはまともにさせやがれ」

「はいはい、入港お疲れさん」

それに青筋を浮かべる航暉の耳に誰かが駆けてくる足音が急速に流れ込んできた。だんだんクレツシエンドしていくその音からして……おそらく複数。

「美味しい香りはここですかっ!?!」

「司令官のシフォン待ってたぴょん！」

ドアの枠に肘をつき星影を睨んでいた航暉を押し飛ばす勢いで二人の影が飛び込んできた。ひとりは航暉の部下、もうひとりは航暉に見覚えがなかった少女だからおそらく艦娘で星影たちの部下だろう。とりあえずは当身を喰らわせようとした部下に向って航暉が睨みを効かせる。

「赤城、他の部隊の指揮官の前だ。先にやる必要があるだろう」

それを聞いて航暉の部下、丈の短い赤い袴から太ももを覗かせた少女……と言っても女性と違って差し支えない風貌の赤城がハツとしたように敬礼の姿勢を取った。

「食べてもよろしいでしょうか!？」

「そつちじゃない(のです)っ!？」

航暉と電が同時に突っ込んだタイミングで青い影がその部屋に飛び込んできた。

「赤城さん、勝手に走っていかないでください。迷子になってしまいますよ」

「でも加賀さん! こんなに美味しそうな焼き菓子の匂いに耐えられますか!？」

「わからない訳ではないけれど、訪れたばかりの場所では失礼に当たります」

「加賀、後で赤城にきつく言って置いてやれ」

航暉が肩を落としながらそう言って赤城をシフォンケーキから遠ざける。

「ねえ、星影司令かーん、まだ食べちゃダメなのかにやーん」

「なんだその後付けの猫的要素、テメエのいつもの兎キャラはどうした卯月」

「お姉ちゃんのマネぴよん」

「似合わねえ」

「取りあえず早く食べられればなんでもいいぴよん! 早くするぴよん!」

赤みの強い髪を揺らして星影に抱き着いた卯月と呼ばれた少女に星影は心底疲れたような顔をする。

「先に食堂行って準備してやがれ」

「了解びょん！ びしっ！」

擬音付きの敬礼を返して卯月が走っていく。

「お前らもぼさっとしてないでさっさと他の奴ら連れてこい」

航暉がそれを聞いて肩を竦めた。

「取りあえずテメエは制服に着替えてこい、少なくとも初見の准将に合わせるにはその格好は不資格だ。山本准将に失礼だ。そのシフォンで埋め合わせになるとは思うなよ」

そう言われて電はこの明らかに多すぎる量のシフォンケーキが入港したあすかの関係者のために焼かれたものだど気がついた。

この甚平を着て、口と目つきが悪い全く司令官らしくない人は、もしかして……

(案外いい人、なのです……?)

……そう思ったのもつかの間、すぐに電は発生した事件に気を揉むことになる。

いなづま は こんらんしている！

テロップを付けるならそんな感じだろうか。とりあえず状況を整

理したい。

目の前にあるのは巨大な屋内空間。体育館のつくりとほぼ一緒だ。訓示する機会も考慮されているのか、ステージが設置されていて、そのステージの真ん中に設置されてる椅子に電と菊月は仲良く並んで座らされていた。そう、座らされてるのである。自らの意志ではないが、仕方ないのである。

電の両脇に控えているのは完全にあきれ顔の高峰、反対側に菊月を挟んだところに渡井が控えている。渡井の表情は楽しみで仕方がないという感じだ。全員の視線が体育館の中央——10メートルほどの距離を置いて立っている二人の男に注がれていた。クリアーのグラス越しに睨み合う男たち、片方は航暉、もう片方は星影である。

航暉は制服から作業服に着替え、帽子を目深に被りその手元には、国連海軍の正式拳銃であるFN Five sevenが握られていた。遊底を弾いて初弾を装填。セーフティがかけられることはなく、すぐに発砲できる体制で保持していた。

一方星影は甚平のままだが、その腰には日本刀を差しており手には古風な拳銃——電の記憶が正しければルガーのP08アーティラリー……スネイルマガジンや銃床も装備可能な形に改装されたP08の8インチモデルだろう。今回は取回しを重視したのかスネイルマガジンもストックも外したクリーン状態のそれを手にした星影は特徴的なトグルを引き上げて勢いよく放して初弾を薬室に押し込んでいた。

「ルールは単純、相手の動体にペイント弾を叩き込むか模擬ナイフを叩き込んだ方の勝ち。外に死ぬような攻撃は厳禁、審判の指示に従うこと、おk?」

電の前というか、下というか、ステージから降りたところである——テンションでそう言ったのは笹原だ。

「ああ」

「異論なしだ」

「それじゃ、電ちゃんと菊月ちゃんの身柄をかけた月刀・星影大演習を

許可しまーす！ さあはりきつてやつちやつてー」

直後に連発する拳銃の発砲音。それを見て電はどんな表情をしたらしいかわからなくなった。それを見透かしてか渡井が肩を竦めた
「まあ、笑えばいいと思うよ」

「はは、あははははは………」

演習の『景品』である電は引きつった笑みを浮かべ、すぐに溜息をついたのだった。

「どうして……こんなことに……」

菊月が頭を抱えていると渡井が肩を竦めた。

「そりゃー、あの二人は似た者同士だからでしょー。——よ
く避けるねあれ」

渡井がケラケラ笑う先で航暉が距離を一気に詰めて格闘戦に持ち込もうとしていた。

「同族嫌悪ってか？ それに付き合わされるにしてもスケールデカくないか？」

「なら止めてくれば？ 副司令長官殿」

「冗談。アレがそう簡単に止まると思うか？」

アレと言つて指さした先では居合の要領で振りぬかれた日本刀（訓練用にもちろん竹光である）を航暉が義手で受けたところだった。航暉はその姿勢のままローキックが繰り出し、足を払おうとするもの、それより先に星影が距離を取った。すかさず両者発砲、互いの体を掠めるようにしてペイント弾が流れていく。

「どつちが司令官として優秀か……ねえ」

そう、理由は至極単純だった。顔合わせを兼ねてシフォンケーキが振る舞われたお茶会で菊月と電が互いの司令官の話（自慢も愚痴も含む）をしていたらその話がやたら大きくなって本人たちの耳に入ることになったのである。そこで「コイツと比べるな」と言い放った航暉に星影がキレた。そこから先は売り言葉に買い言葉でどちらが優秀か白黒つけようと演習が組まれたのである——司令官同士の。

「その物差しがなんで白兵戦能力になるのやら。」

「実戦で比べて事故起こしたら洒落にならないからでしょ？ 演習で

前線要員疲弊させるわけにいかないし」

「それなら、私達を巻き込まなくてもよかつた気がするのです……」

「そこは同情するよ、電ちゃん。笹原に聞かれたのが運の尽きだな」

高峰の呆れた声に渡井が笑う。

「勝った方が負けた方の旗艦を一日好きに指名して命令できる……それをさらつと提案してやれちゃうのが笹原のすごいところだよー。ところで青葉が賭けの胴元始めたけど見逃して言いわけ高峰君？」

「後でめるから問題ない」

「……愁傷様ー、と渡井は軽く心の中で合掌しつつ、横を見る。

「んで？ 高峰はどつちに賭ける？」

「……勝負がつかないに大盛券5枚」

無難に行くねえと渡井が笑った。その先では航暉の拳銃が火を噴いて星影の足元でペイント弾を弾けさせた。

「まあ、本人たちが楽しければいいんじゃないの？」

「んで、次作戦で疲れ切ったカズたちのフォローを俺たちがやるの？ 嬉しくて涙が出るね」

先に弾切れが来たらしい星影が日本刀を手に一気に踏み込んだ。彼の強烈な踏み込みは戦闘になれている電でも目で追うのがやっとだった。まるで瞬間移動でもしたかのような動きを航暉は踏み込みなどの事前動作なしで真横に避ける。

「うっわ、えげつないねえ両者共々」

「抜重と重心移動でよく避けるな、ってか。踏み込みのタイミング読んだか？」

「だろうね、予測してなきゃあの動きはできない」

返す刀で逆袈裟に走る刀を航暉は腰を落とす動きで避ける。そうしてため込まれた筋肉の圧力を解放し航暉が右ストレートを腰で放とうとする。

「……あれをフェイント扱いで放つってのもすごいけど、それを避けるとかどうなってんだあれ」

高峰の言葉の先ではバック転の要領で距離を稼いだ星影が一度鞘に刀を収めたところだった。ストレートを放った直後の航暉の右腕

——義手の一部が展開し、そこから射出された模擬ナイフの刃が床に落ちた。その余韻が消えるころには航暉は腰に差したナイフシースからコンバットナイフ（もちろん模擬刀である）を引き出していた。

「あの状況でパンチじゃなくて義手からナイフが飛び出してくるとか誰が思うよ？」

「そしてそれを避けるとかどんだけ動体視力いいんだか」

文字通り次元が違うよな、と高峰と渡井が笑いあうが。電も菊月もそれに同意した。見学に来ていた天龍も顎が外れたのではないかとおもえるほど口を開けて呆然とそれを眺めている。

仕切り直して互いに距離を詰め合い、今度は刃物同士の打撃戦。日本対ナイフの硬い打撃音がハイテンポに響く。

「もうお前ら出撃しろよって気分になつてこない？ これ見てると」「私の司令官だと本当にそれができそうだから困る……」

菊月が呻くようにそう言ったタイミングで航暉が星影の懐に飛び込んだ。当て身をかけると同時に日本刀の峰を抑え込む。

動きが双方止まった。これまでの激動が嘘だったかのように止まったのだ。

「そんなもんか」

「馬鹿言うなよ」

静まり返った空間に二人の声が響いた途端、同時にそれぞれの獲物が手から離れた。そうして始まったのは、正真正銘の——殴り合い。

「おいっ！ あのバカ二人止めろ！ セCOND！」

セCOND役として待機していた杉田と凧風が二人を引き離そうと飛び込んだ。再び会場内が騒がしくなる。

その様子を見てそれぞれの艦隊の旗艦同士——菊月と電は深くため息をついたのだった。

その日の夜。

彼女はゆっくりと一つのドアを叩いていた。中からは軽いテンションの男声が「どうぞー」と帰ってくる。

「……失礼します、です」

「うん、よく来たね。初日で直属以外の上官に会いにくる用事ってなんなのかな？ 電ちゃん」

彼の私室なのかこぢんまりとした部屋だ。電の姿を半透明に映す窓ガラス越しに、顔を出したばかりの月が覗いていた。小さな銀のケトルが卓上用の小さなヒーターにかけられており、小さく湯気を吹いていた。

「ごめんなさいなのです。お邪魔でしたか？」

「いんや、出撃命令が出ない限りは今の時間は暇だ。おしゃべりするぐらいの時間はあるさ。……要件は月刀君のこと、というよりは『ガトー』のことかな？」

そう言つて笑うのは風風だ。髪に隠れて右目が見えないせいか、どこか表情が読めず、不安に思えてしまう。

「……やっぱり風風さんたちは」

「うん、元戦友……といつても所属部隊自体は違ったんだ。ガトーは日本国自衛陸軍第九師団特殊殲滅部隊、ウオンとステラ……風風と星影と名乗る前の名前んだけどさ、まあ俺たちは日本国自衛陸軍第八師団特殊殲滅部隊……どっちにしてもウエットな任務に就いてたことには変わりない」

座りなよ。と言われ、電は勧められるままにベッドに腰掛けた。風はデスクに向かう椅子から立ち上がり、デスクの隣に設置された小さな棚に向かい合った。その一部が食器棚になっているらしくそれを開ける。

「コーヒーぐらいしかないけど、飲んでいくかい？」

「気を使ってくれなくてもいいのです」

「ベトナムコーヒーは苦手かい？」

「甘くておいしいよ？」と言い、電の様子を伺う凧風。彼は小ぶりなコーヒーカップを軽く振った。

「……では少しだけ」

「結構。ホスト側の意見は飲むのが無難だよ？」

どこか棘があるような言い方に電は少し眉を顰めるが、彼は気がつかないようにカップにコンデンスミルクを注ぐと、それぞれのカップに金属製の仏式コーヒーフィルタを乗せた。

「そこまで警戒しなくても大丈夫だって。戦友の部下に毒を盛るほど薄情でも恥知らずでもない。ガトーの航空支援に助けられたこともある」

コーヒーの粉をぎつと計ってお湯を注いでフィルタにふたをした。粉を入れたビンにはラベルがはがされており、どのものかはわからなかった。

「それで、電ちゃんがノウエムのことを知っているってことは、ガトーは君をよほど信頼しているんだろうけど、俺に何を聞きたいのかな？」

春先とはいえ、この南の海では気温は高い。だのに目の前の男は首筋を守るようにストールを巻いている。そのストールを緩めるようにわずかに引っぱり、凧風は薄く笑ってみせた。その笑みの色は……どこか航暉の笑みに似ている気がした。

「……司令官さんが、どうして殲滅部隊に入ったか、凧風司令は知っていますか？」

「行方不明になった妹を探しに、だったと思うけど？」

「……その妹が電と雷お姉ちゃんだと言ったら、笑いますか？」

凧風は僅かに目を細めた。

「……なるほどね、そう言うことか」

納得したような様子で小さく笑う凧風。

「ガトーの笑みがどこか彼らしくなかったからね。なるほど、目的を果たしたのなら表情も変わるかな」

「……昔の司令官さんはどんな感じだったのです？」

「そうだねえ、強かったよ。強くならざるを得なかったからというのもあるけど、ガトーの場合は彼自身の意志がそうさせたんだろうな。強くなるしか選択肢を無くした。他の道を自ら断って、そのいのち全てを彼の目的のために使う。そういう風に自分を追い込んだ。そういうやつさ」

カップに雫が落ちる音が僅かに響いた。その音は雨音にも似てどこか耳に残る。

「そうしてガトーは力をつけたわけだ。戦術航空管制要員としても、水上用自律駆動兵装運用士官としてもね。そのことを君が気に病む必要はないと思うけどなあ」

そういうと、電はハツとしたように顔を上げた。

「どうしてわかったのか……かな？ 単純だよ。文字通り命がけでガトーは君たちを探した。そして見つけた。そうして「君たちが生きていく以上、君たちを守る方向に彼は方針をシフトさせる」。見つけて終わりとなるはずがない」

そういった風風の笑みからはどんな感情も読み取れなかった。喜び、怒り、哀しみ、楽しみ、どの感情も読み取れない。皮肉さえ読み取れなかった。

「そうして君たちは最前線で戦わなければならぬわけだから、そりゃあ彼は疲弊していくよ。彼の戦う理由だもの、君たち自体が」

風風はただそう言った。

「まあ、ここでやつと最初の質問に戻るんだけどさ。君は俺んところに何を聞きにきたの？」

「……ずいぶん腑抜けたじゃねえか『ガトー』」

深青色の甚平が風に揺れる。その先には季節外れの蛍のように赤い光が不規則に揺れていた。

「そう言うお前も甘くなつたな、『ステラ』。いつの間にそんなに甘くなつた」

赤い光の向こう、紫煙で揺らぐ視界の奥に航暉の顔があつた。夜闇というほどの闇はなく、誰何するにはわずかに明るい世界の色の中でも、二人の姿は闇に溶けようとするかのように沈み込んで見えた。

「珍しいなと思つたよ。他人に興味を持たなかつたお前があんな条件を出してくるなんてな」

航暉が皮肉げな笑みを向ければ似たような笑みを返す星影……。その間を湿つた潮風が吹き抜けていく。

「知るかよ、そう言うお前はよくあの条件を飲んだな」

「負ける算段はなかつたからな」

「よく言うな。踏み込みを読み違えた癖に」

「そういえば左手首は傷まないのか？ ステラ」

互いに互いのミスを言い合い、ほぼ同時に眉を顰めた。……今日の昼の戦いはお互いがベストじゃなかつたと痛感するだけの戦いとなつた。勝負は結局つかないまま、杉田と凧風のセコンド役に取り押さえられて終了となつたのだ。

「……何を迷つた。ガトー」

小さい問いかけに航暉は肩を細かく上下させた。笑っているのだろうか。

「相手に向き合つてなお迷う余裕があるようには見えなかつた。死にてえのかガトー」

「迷つた、迷つたねえ……。俺は最初からこういう人間さ」

「は。稀代の殺人鬼が笑わせる」

「それも含めてだよ。俺はこういう人間だ。だから、ガトーはガトー足りえた」

携帯灰皿に航暉は煙草を押し付けた。顔の前の明かりが消え、その表情が黒く塗りつぶされる。

「今更人間ヅラかよ。忘れたか、俺たちは——」

「狼の皮を被った人間ではなく、人の皮を被った狼である、か？」

航暉は星影の言葉を遮った。口の端だけで笑って見せる。

「人の温かみを知り、人に混じったところで、狼は狼のままであり決して人間ではない。だが、それがどうした？」

しばらく嫌な沈黙が落ちた。先に沈黙を割ったのはやはり航暉である。

「……いかな、最近口数が増えた。歳かな」

「知らん。だが、腑抜けたのは確かだろう」

腰に差した打刀の柄を苛立ったように指で叩きながら星影がそう言った。航暉は肩を竦める。

「ステラもえらく菊月がお気に入りみたいじゃないか。俺たちの規律を忘れたのはお互い様だろう？」

「……それがお前にどう関係する？」

「それこそこちらのセリフだぞ、ステラ」

航暉は携帯灰皿をチーフポケットにしまいながら鋭く言った。空気が一気に張る。

「今更ごちゃごちゃうるせえんだよ。俺たちの間に義理も情も存在しねえだろうが。俺たち殲滅部隊の人間は幽霊ガイストじゃなきゃならない。それは裏返せば幽霊だからこそ他人に干渉しない限りどう行動しても自由だった。必要なときに動ける状態にあればな。お前も俺もそれを納得したうえで行動していた。そうだろう」

その声に星影は答えない。それをいいことに航暉は続ける。

「そうして俺はそれを成し、ステラもそれを成していた。それだけの話じゃねえか。何をグダグダ話す必要がある？」

星影が指を止めた。

「お前のそういう上から目線が嫌いなんだよ。偉そうに」

「偉そうじゃなくて偉いんだよ。星影少佐。……話はそれだけか？」
「お前とこれ以上話したくもないが……もう一つだけ話がある」

星影は懐から取り出したキューブを航暉に向けて放り投げた。緩い放物線を描いて飛んだそれは航暉の右手にしっかりとらえられた。インフォメーション・キューブ外部記憶装置を航暉はしばし見つめ、首の後ろにあてがった。

「……いつの情報だ？」

「それは直接姉御に聞けよ」

お前の元上官だろうが、と言いながら肩を竦める星影。

「だが、情報筋は信頼に足ると思うがね、なんたつて怪物スキュラの情報網だ」

「だがいささか鮮度が悪いな。とつくに上層部が可決した内容だろう、これは」

航暉はそう吐き捨てた。

「だとしても知っていることと知らないことには雲泥の差がある。違うか？」

情報をザツピングして航暉は溜息をついた。それが返事代わりだ。主旨はイエス。確かに知らない情報は使えない。使えるネタを一つだけ仕入れたことになる。

「……白夜の鐘事件か。今更蒸し返してどうなるつて言うんだ？」

さあな。とだけ返した星影に航暉が外部記憶装置を投げ返す。それを片手でキャッチした星影が踵を返した。

「……明後日には動くんだろう。ミスったら承知しねえ」

「俺がミスると思うなよ、ステラ」

それだけで会話が途切れる。去っていく間際に星影の手元でキンと澄んだ金属音がした、同時に仄明るくその顔の輪郭を浮かべる。

懐かしい香りを嗅いで、航暉は僅かに空を見上げた。

「テメエも変わったじゃねえか、ステラ」

「お前が泣かせるとは珍しいじゃねえか」

星影が戻った先で凧風があいまいな笑みを浮かべた。手元にはわずかにぬるくなつたベトナムコーヒーが二つ、手を付けないまま残されていた。

「……不満かい、星影」

「不満そうなのはお前の方だろうが、……で、何を言ったんだ？」

凧風が肩を竦める。

「家族だそうだよ。電ちゃんとかトロー。DD-AK04はトローの実の妹を素体にしたモデルだそうだ」

「……そういうことか」

皮肉げな笑みを浮かべる星影。部屋の壁に寄り掛かった。

「トローのことを皮肉つたな？ 家族持ちだったトローのことを」

「……戦うには必要ない感情に拘泥していたら生き残れない。それが俺たちの世界のテーゼだった。そうだろう？」

「だよな。だからアイツは甘い。家族なんてものを意識してこの世界で生き残れるはずがない。……ただの妬みじゃないか」

少し冷えたコーヒーをマドラーでかき混ぜる凧風。底にたまつたコンデンスミルクが混ざり、黒から焦げ茶、淡い色へと変化していく。

「……俺たちとトロー、何が違うって言うんだ」

「さあな、それこそ意味のない問いだろうが」

凧風の言葉を星影がびしやりと叩き切った。――それが

無性に腹が立つ。

「ステラ、アイツだけなんで昼の世界に戻ってる？」

「らしくねえな。クール・アズ・キュークだろ？」

均一なブラウンになったコーヒーを口に運ぶ凧風、わずかに啜る音が響いた。

「……それで、話して見てどうだった。『彼女』は」

「一言で言うなら純情、無垢ともいうね。月刀航暉への絶対的な信頼、そして忠誠……昔ならテレビ局のお涙頂戴もので取り上げればいいんじゃないかな？」

「そう意味で聞いてねえよ、ウオン。……わかって言ってるだろ？」

「……旗艦としては極めて優秀。その性格もあって周囲の意識や好意的な感情を集めることができる。ボトムアップ型のリーダーシップと、俯瞰的なビジョンを同時に兼ね備えた極めて優秀な司令塔。だろうね」

「だが、月刀航暉が絡むと一気にドカンか」

凧風は答えない。やはりコーヒーを一口。

「——潰れるぞ、あの二人」

「うん。間違いなく共倒れになるよ。今のままじゃ」

凧風はそう言うともまだ半分残っているカップをデスクに置いた。

「銃を乱射しながらラブ&ピースを訴えているようなもんだ。守るべき対象を前線に押し出していることを後悔しているガトーに、そんな彼を支えたいと思っている旗艦の艦娘。……壊滅的なまでに状況と感情が合っていない。このままだと先に倒れるのは……」

「ガトーだな」

「ああ、ガトーの精神が先に臨界を迎えるはずだ。そうなると同時に電ちゃんも崩れる。そうなればあの部隊は一気に崩壊するぞ」

「——それはないな」

割り込む声、星影と凧風は一斉に扉の方に振り返った。

「菊月、なぜそういきれる？」

「電はそこまでヤワじゃない。少なくともしつかりとした芯を持っているように感じた」

白にも見える銀の長髪を揺らす菊月が笑って見せる。

「それに、司令官たちも手を打つんだろ？」

「は、なんでアイツらの尻拭いをしなきゃいけないんだよ」

「そういうながらも、彼らのリスクを減らそうとしている……。違うか？」

それに凧風が肩をすくめて返す。否定とも肯定とも取れない返事。それを見て至極真面目な顔で菊月が続ける。

「……あの部隊には姉がいるんだ。それも一番上のは月刀航暉准将を狙っているようだね。泣かせたくない。協力してくれないか？」

しばし沈黙が下りて、凧風が耐えきれない様に嘔き出した。

「全く、理由までお膳立てされちゃあね。動かざる負えないんじゃないの？ 星影少佐？」

「知らん。できるかどうかはテメエ自身で判断しろ。手出しをするつもりはねえ」

そういいながらも星影はインフォメーション・キューブを菊月に投げて渡した。それを菊月は躊躇いなく接続し内容をスキヤニングする。

「……クラスSまで解放してくれるとは珍しい」

「勝手に覗いた分だから他言無用だよ」

凧風が釘を刺すと当然だと菊月は返してインフォメーション・キューブを星影に返した。

「確認させてくれ。今回の任務は戦艦レ級を中心とした艦隊群の打破。それを航空戦隊を持って漸減、大和型の砲撃でさらに漸減して水雷戦隊で止め。それが大まかな作戦でいいんだな？」

「もつとステップは踏むだろうがそれは月刀たちの仕事だ。俺たちはその背後を守るだけでいい」

ムスツとした星影の声に菊月は笑って見せた。

「護衛任務も大切なミッションだ。失敗するつもりもない」

菊月はそう言ってラフに敬礼をした。それに司令官二人は軽く肩を持ち上げる。答礼を返さない程度のことはこの鎮守府では日常茶飯事だ。気にせず部屋を出る。

「共にゆこう。星影司令、凧風司令。2人だつて守りたいんだらう？」

口の中だけで呟いた声に、菊月はひとり笑みを深めた。

「きくきくく、うーちゃんちよつと退屈ぴよん」

「きくきくと呼ぶなど何度言えばいいのさ、一体……」

菊月が隣でいろいろ煩い僚艦に読んでいた本を閉じた。

「退屈なら睦月のところにも行けばいいだろう」

「むー、そうするときくきくが一人きりになつちやうぴよん、それは可哀そうだもん」

「本を読む時はひとりの方が楽なんだが……」

「そうしたらきくきくはずつとひとりになつちやうぴよん」

赤に近い色の髪を揺らして卯月がそういう、卯月の部屋は隣にあるのだがなぜか彼女は菊月の部屋に入り浸っていた。

「なら三日月を一人にしているのはいいのか？」

「みつかーとはさつきまで一緒にいたぴよん。今はきつと射撃レンジに向ってるはずでつす」

そんな報告を聞いて菊月は溜息をついた。

「……卯月。お前なあ」

「菊月」

卯月が菊月の言葉を遮った。

「うーちゃんは菊月と三日月のお姉ちゃんだぴよん。菊月も三日月もお姉ちゃんを頼らなすぎぴよん」

「あのかなあ……」

いきなりそんなことを言われても思いつつも菊月は顔を上げる。目を合わせるとわかりやすく『怒ってます』と言いたげな卯月のふくれっ面があった。

「菊月がむつむつとからつきぎーを心配するのもわかるぴよん。司令官を心配するのもすつごくよくわかるぴよん。それでも菊月は周りを頼らなきやだめぴよん。だからほらお姉ちゃんに話してみるぴよん！」

卯月はそう言って菊月の肩をがっしりと掴んだ。

「まったく……ぴよんぴよんぴよんぴよん頼いお姉さんだな」

「ぴよん!？」

菊月は少し意地悪な笑みを浮かべた。

「な、何をいうぴよん!? う、うーちゃん、ほら、私はこんなに淑女でございますのよ!？」

「いきなりキャラクターを変えようとしすぎて変になってるぞ、卯月」
菊月はそう言っただけで口の端で笑った。つられたように卯月も笑う。

「もう大丈夫ぴよん?」

「何を言う。私は最初から大丈夫だ」

それが強がりじゃないと菊月は言い切れなかった。追撃が来る前に話題を変える。頼りたいわれたことだ。知恵を借りても文句は出ないだろう。

「卯月、大切な人を自分の遠くに置かないといけない時、そしてその人に危機が迫ることが確定的な時、お前ならどうする?」

「そんなの簡単だぴよん」

卯月は胸を張った。

「信じることぴよん。考えることぴよん。乗り越えられると信じて自分も頑張る。大切な人がピンチになった時に駆けつけられるように用意することはもちろん大切だけど、信じて待つしてみるのも一つの手だと思うぴよん」

卯月はそう言い切った。

「不安でも待ってみるのも一考ぴよん。少なくとも寝る間を惜しんで本を読んで頭でっかちになるよりしつかり寝て体調を整えた方がいいというーちゃんは思うぴよん」

「……卯月は変わらないな」

「そんなことないぴよん。変わらないモノなんて無いぴよん。きくきくのよく言う……なんだっけ……さいさいねん……」

「——年年歳歳花相似 歳歳年年人不同、か?」

「そう、それぴよん!」

梅の花は変わららず咲いても、それを眺める人は移ろいゆく。

「……私も、変わるかな」

「今の自分が嫌いぴよん？」

「いや、嫌いというわけではないが……」

「なら変わらなくてもきつと大丈夫だぴよん。菊月は私達の旗艦をしつかりやつてくれるぴよんだから大丈夫ぴよん」

その答えを聞いて菊月は肩を竦めた。なんだかんだで姉にはかわないのかもしれない。そう思った時、遠くで銃声が響く。一瞬体を緊張させたがその音でわかる。

「……三日月か」

「みたいぴよん」

なんだかんだで信頼できる仲間だ。今は仲間を信じてみるのがいいのかもしれないと思い始めていた。

「……あとは司令官たちに任せるしかないのかな」

「ぴよん？」

「なんでもないさ。こちらの話だ」

「むー。だからそう言うのをお姉ちゃんに話すぴよん！」

話が延々とループして結局夜遅くまで起きている羽目になる。そんな予感を感じつつ菊月は口の端だけで笑った。

「あーっ」

先客がいたことに驚いた。その先客も一通りの射撃が終わったよ
うでブースから安全確認の声掛けなどが響いていた。

「お、悪いな。嬢ちゃんのリトリートだったかな？」

「いえ、少し驚いたもので……」

回転式拳銃をスウイングアウトさせて持つ男はイヤードテク
ターを外した。拳銃と呼ぶには特大サイズのそれを見て彼女は僅か
に目を輝かせる。

「トールス・レイジングブル……ですか？」

「詳しいな。昔からの相棒さ」

彼はそれを後ろの作業台に置いて笑った。

「人間用のシューティングレンジに来るのは珍しい方じゃないのか
？」

「そうかもしれませんね、私達の鎮守府は特殊なので……三日月と言
います」

「ん、よろしく三日月嬢。俺は……」

「杉田勝也大佐……間違っていましたか？」

驚いたような表情を彼が浮かべたせいで三日月と名乗った少女は
少し不安げに首を傾げた。

「驚いたな、週刊誌の取材なんて受けた覚えなんてないんだが」

「杉田大佐は有名ですよ？ 仙台市市街地戦やフィリピンPKFで活
躍した狙撃兵にして、海軍転属後は『千里』の二つ名をほしいままに
する長距離ガンナー」

「……情報の出どころはステラ……星影少佐か」

「星影提督とは知り合いなんですか？」

「顔は今日まで知らなかったがな」

「？」

杉田はそう言うと言作業台に体重を預けた。講義するようにギシリ
と軋むが無視をした。

「互いに有名人だからな。と言っても向こうについては噂話で流れて
くる程度だが。スナイプチームでステラと呼ばれる謎の狙撃手につ
いて聞いたことのない奴はいなかったんじゃないの？」

「そうなんですか?」

「キロ級スナイパー、それも2000メートルクラスのスナイプ技術は隠そうとしたってそうは隠せない。俺もお門違いとわかっていても歯噛みしたもんさ」

透明なライフルを構えるように上半身のバランスを作る杉田。視線の先には先ほどまで狙っていた紙的があつた。

「狙撃兵としての星影少佐と前哨狙撃兵スカウトスナイパーだった俺とじゃ求められる役割が違う。相手の射程外から確実に屠る技術を求められるのが狙撃兵だが、前哨狙撃兵はそこまで長距離の狙撃能力は求められない。それよりも情報収集や後方からぶっ放した砲撃の着弾観測やミサイルの終末誘導、それらの技術が求められる」

ゆつくりと引金を引き絞り、彼は笑った。

「星影少佐は俺のことを貶してただろ? 何でも屋とか邪道とか」
「それは……」

「その反応はアタリだな。狙撃手にとって前哨狙撃手は邪道であり、逆に前哨狙撃手にとって狙撃手は腰抜けに写る。そういうもんさ」
ライフルを構えるポーズを止めると肩を竦めた。

「おっさんの話をするだけだと時間の無駄だな。三日月嬢も頑張れよ」

「はいっ……ってあれ?」

「どうした?」

「もう撃たれないんですか?」

「おっさんは朝早い分寝るのが早いのだ」

そう笑った彼の背中が闇夜溶けていく。三日月の視線から逃げたところで杉田は立ち止まって煙草を取り出した。

「……で? 実際のところはどうか。ステラさんよ」

「今はその名で呼ぶな」

「お前さんもあれか、月刀の馬鹿と一緒に過去を捨てたい派か」

「アイツとも一緒にしてんじゃねえ」

夜間迷彩のように壁に溶け込んだ甚平に杉田が笑みを贈った。

「さすがに今から腕比べとは言わんよな? 三日月嬢にも言ったが

おっさんは寝る時間なんだ」

「そこまで歳いつてるとは知らなかったぜ。ステインガーキラー」

——— テメエ、ガトーの代わりに指揮をとれ」

「……モノを頼むつもりならそれなりの礼儀を尽くせよ」

マツチを擦って杉田が笑う。その凶悪な笑みをマツチの炎が照らした。

「確かに今の月刀は危険だろう。あいつ自身も、それに依存している電も。だがな、そんなもんをつくのとうに織り込み済みだ。こちらが全員承知でやってんだ」、黒烏なめんな部外者」

「それで誰かが死んでも同じ口が叩けるか？」

「……特殊部隊出身の奴はなんでそんなにワンマンショーをやりたがるかな」

心底呆れたといった雰囲気です。杉田。それを聞いた星影は眉を顰めた。

「だれも一人で戦っているわけじゃねえ。同じ部隊の仲間を信じるのも一つの手だろうよ」

「……今更アレを信じろと？」

「月刀とお前さんの間に何があつたなんて知らないし知ったこっちゃねえ。だがな、まだ俺たちはあのバカを信じてるんだよ。手の付けられないほどの馬鹿だが、なんだかんだで最後には帳尻を合わせてくる奴だ。信じててもバチは当たらんだろう」

それを聞いて星影は苛立ったように腰に下げた打刀の柄をトントんと叩いていた。

「月刀も俺もお前さんも一人じゃねえ。力を合わせれば何とかなるなんて御伽噺を信じてるわけじゃないが、可能性の幅を広げることが可能だと思ってるぜ」

話はそれだけか、と言って煙草をくわえたまま杉田は歩き出した。横を通過するとき小さく

「悪いな。味方を信じようと努力もしない奴とは話す気にはなれないんでね」

後には小さな舌打ちだけが残った。

夜中に押しかけてきた電を、航暉はそれを予期していたかのように迎え入れた。航暉は未だ制服姿であり、電もまたそうだった。

駆逐艦「あすか」の第4階層にある司令長官室の小さな丸窓からは棧橋を挟んで反対側に停泊する「とわだ」の姿が見える。4時間前程に入港した横須賀からの補給物資を満載した高速補給艦だ。夕張の使用する特殊榴弾砲OIGAMIやSTARBUST用のシールドビットの補填、各種入渠用装備を満載して入港していた

「ごめんなさい、いきなりきてしまつて……」

「とわだに同行してきたドイツ艦隊の面々の案内も終わっているし、今日の仕事は終わったところだ。ちようどいいタイミングだったよ」

それは嘘だと電はすぐに見抜いた。デスクにはキャップを閉じた万年筆がデスクに転がっている。揺れる船ではペンはどこかに転がっていかないように筆箱に仕舞うかペン立てに立てる。机に転がっているのは直前までそのペンを使っていた証左だ。また、万年筆に使われるのは水性の染料インキ。耐水性は皆無だから海軍の公式書類に使われることはあまりない。航暉もそこはわきまえていて、その万年筆は私信などにしか使つてなかつたはずだ。

気を使つてくれているのだろうと思うが、電にとってはそれがどこか寂しくなつてしまう。

「星影か風風のところに話を聞きに行った、つてところか？」

「……司令官さんには丸わかりなんですね」

どこか寂しそうな笑顔を浮かべて電は赤く腫らした目を細めた。

「風風司令から聞きました。司令官さんが、その……」

「裏切り者か？ それとも殺人鬼とでも言われたか？」

電が目線を下げた、どちらかが正解か、あるいは両方か。

「間違いじゃねえよ。それは」

航暉の口調が崩れた。それを聞いて下がった目線が跳ね上がる。

航暉はジャケットのボタンをはずしながら笑っていた。

「俺の前所属は日本国自衛陸軍第九師団特殊殲滅部隊。非公認の部隊

であり、その名が示すように相手を殲滅することを目的にしていた。

稀代の殺人鬼の集団だったことは間違いないな」

ジャケットのボタンを外すと合わせの奥にあるストラップも外す。

深い合わせがだらしなく下がり、ネクタイを押さえていた鈍い銀の光

を返すネクタイピンを手にかけた。

「そして俺はそこを抜けた。身寄りのない俺たちにとって部隊は唯一

の居場所だったし、部隊間の交流もあった。オクトーとノウエムは特

にその交流が強かった。俺は星影たちのサポートをするはずだった

作戦に参加しなかった。その作戦では……味方に死者が出たそうだ

よ」

彼はネクタイの目を引っ張るようにしてそのまま結び目を解いた。

制服と同色のそれを引き抜くとデスクに置いた。

「裏切ったと思われても仕方ない。そこを抜けて、海軍の方に移った

のは俺の意志だ。ライ麦計画のモルモットであっても、雪音たちを追

うために、そうした。そのための行動を星影たちが裏切りだというな

ら。そうなんだろうさ」

航暉は第一ボタンに手をかけて、ふと動きを止めた

「任務は過酷だった。だからこそあの場では自らと仲間意識を強くし

た。場合によっては女も子どもも撃つんだ。初めて銃で殺したのは

もうしわしわの爺さんだった。今でもよく覚えてるもんさ。あの時

は震えたが、次の日にはもう何も感じなくなった。そうでなければ生

き残れない。相手に命を預けて突入することも多い。俺は航空支援がメインだったら預かることが多かった。それはな、守るためと言つて何人も殺すことを意味するんだ」

第一ボタンを開けると一日で大分汗の汚れを吸つてわずかに汚れた襟首が見える。

「何人もそうしてきた。爆撃も含めれば間違いなく3桁後半、下手したら4桁近く殺して——」

「司令官さんっ！」

電は聞いてられなくなつて声を張り上げた。航暉は口をつぐむ。

「もう、司令官さんは『ガトー』じゃないのですよ……だから……」
そんなことを聞きたくない。

「『ガトー』は私が殺したのです。あの時、フィリピンのあの工場で、だからもう司令官さんはガトーじゃないのです」

「それでもその罪が消えるわけじゃない。違うか、電」

それを聞いて電は言葉を継げない。それでも引き留めなければならぬ。

今止めなければ、私が止めなければ、彼は潰れる。

司令官が消えたあの時みたいな思いを、あの時みたいな後悔を、もうしないと決めたから。

「確かに罪は消えないのです。それでも今すべきは後悔でも贖罪でもないと思うのです」

毅然と電は顔を上げる。ここで押し負けるわけにはいかないのだ。

「司令官さんが今背負うべきは国連海軍極東方面隊総司令部隷下、第50太平洋即応打撃群司令長官としての責任、違いますか？」

電は彼の右肩に揺れる金の飾緒を見る。司令長官を示す明るい金色は部屋の暗い照明ではどこか暗く濁ったオレンジ色にも見える。

「……司令官さん、私は間違つたことを言ってるかもしれませんが。それでも司令官さんがそうやって塞ぎこんだままなのを見るのはいやなのです」

電はそう言つて一歩踏み込んだ。

「司令官さん、司令官さんは生きていること、後悔していますか……？」

それを聞いて航暉は僅かに視線を逸らした。

「……後悔しているかどうかすら、もうわからねえよ」

電の前では見せたことのないような凶暴な視線が走る。初めて見るかもしれない、彼の表情だった。

「奪った命とこれから奪う命、俺がこれまでに経験した命を超えるために、俺はいくつ鋼鉄の魂を持てばいい？　もう……まともでいられる時期はもう過ぎたんだよ」

「そんなことないのですっ！」

否定しなければならぬ。一瞬でも悩んではならない。彼に言葉が届くまでは手を伸ばし続けなければならぬ。

電の言葉をどこか眩しいモノでも見るようなしぐさをして視線を落とした。

「そうかな？　……なあ、電。俺は何なんだろうな。」

「司令官さんは司令官さんなのです。そのことは私が知ってます」

その答えを聞いて航暉は僅かに笑ったようだ。

「————モーセは神に言った『私がイスラエルの人々の所へ行つて、彼らにへあなた方の先祖の神が、私をあなた方の所へ使わされました』と言う時、彼らがへその名はなんというのですか』と私に聞くなれば、なんと答えましようか』」

「……？」

そう言う彼は少し悲しそうにつづけた。

「神はモーセに言った『我は我である』……少なくとも俺は神じゃないし、人間でももうないらしい」

彼の悲しそうな笑みはその先を続けようとして、途切れた。

夜闇に包まれた漆黒の海を船団がゆつくりと進んでいる。『彼女たち』にとっても夜は危険な時間帯だ。電探も逆探もあるがそれでも目視での戦闘は重要になる。夜偵の発艦はできても着艦ができない以上、夜明けが見えてこないと飛ばせないという事情ある。もつとも艦載機は消耗品だから使い捨てでもいいのだがこの後の戦争に取っておきたい都合もある。

「……」

その闇に溶け込むように動く船団はただひたすらに西を目指していた。なぜ西を目指

すのか……そこに敵がいるから、それ以上の意味はない。なくてもいいというのがその部隊の長たる彼女の考えだった。

キヒ、と小さな笑いが響く。

「Shutaul, hildie zelie fl
amis」

敵の言葉なら何となるだろう？ と彼女は考える。——星よ、輝きを隠せ、だろうか。そんなことを想える自分に少し笑えてきた。敵に思考が近づいてきている兆候だ。

戦いにおいて相手の行動をシミュレートするために、まず相手の思考をエミュレートする必要があった。そして彼女たちはそれを成した。それは同時に自らの可能性と戦略の幅を広げることが可能にした。

闇を進みながらどうすべきか考える。考えた先になにがあるのかはわからないが考えることが嫌いではなくなってきた。自分の

驚いていた。そうして考えるという行為が「今は」不要であることも。

匂うのだ。

敵の匂いが近づいていた。そうして裏切り者の匂いも近い。仲間を絆した相手の匂いだ。それらが近づいてくる。

裏切りの匂いを漂わせるそれは長の好きにしてよいと言われていた。どうしよう。どうしてくれよう。心が躍る難問だ。

「Shutaul, hildie zellie flamius.

Loite yurise halte luses ner

omatshur diplic zuisshur dem」

もし隣を進む仲間に聞こえていたら、驚いていたかもしれない。

星よ、その灯りを隠せ。我が闇と欲望を照らしてくれるな。

お世辞にもそう言うことを言いそうな性格をしていないと彼女自身もわかっていた。それでもたまには言いたくなるのだ。

「Lulduš kumes enelur enecurmen
kulchie」

声を上げ、敵の匂いがきつくなってきたことを告げる。戦の気配を感じるこの時が、一番心躍るかもしれない。長引くのも悪くない。それでも急かさずにはいられない。この感覚が心地よい。

ああ、次会う敵は齒ごたえがあるだろうか。

「Guellute Guestresse!」

「来ル……」

真っ白な部屋の中、彼女もまた匂いを感じ取っていた。前よりも狭

くなつた部屋だが、より海に近いここは横須賀の広々とした部屋よりも心地よかつた。そんな真つ白な部屋だが、一か所だけ周りの白から明らかに浮いているものが壁に設置されていた。彼女はそれを押し込んだ。

「——イナツマト会ワセテ。伝エナキヤイケナイ事ガアル」

——
第一種警戒態勢を知らせる警報がなる。戦いの足音はそれぞれの思いを無視するかのよう近づいてきていた。

「状況は？」

「スペアを狙うにはちょっと厳しいかもね」

鳴った警報に航暉が水晶宮に飛び込むと当直をしていた渡井が欠伸をしたまま答えた。

「12分前、イクが推進音を捕捉した、それがこれなんだけど……」

「音だけ出されてもわからんよ」

「だろうね。ライブラリに照合した結果、面白いのが出たよ」

渡井が眠そうにバーチャルキーボードを浮かべたタブレットをタップする。

「戦艦レ級が3隻揃いで航行中。不意打ちで水雷戦隊主体だったとはいえクエゼリンを単騎で壊滅させるやつが3隻に僚艦がたんまり。たぶんギネスに申請したらギネス公認監察官が派遣されるレベルだ。はつきり言つてかなりヤバイ」

渡井がマップを展開する。

「ルートのには島をたどって関東圏に向かう深海棲艦の定期侵略路とスケジューリングほぼ一緒、目標は横須賀かどこかだな」

まあ気まぐれで転進しない限りはだけどね。と言つて渡井は伸びをする。

「とりあえず今はイクとゴージャ、ゆうちゃんがコンタクトしてる。奴ら雷撃を舐めてるのか装甲に自信があるのか知らんが、対潜行動すらとってない。撃とうと思えばいつでも撃てるけど、どうする？」

「そのまま接触を続行、相手にもおそらく潜水艦のことはばれてると思つた方がいいだろう。しっかり距離を取らせろ」

「あいあいー。で、予想よりも早いわけだけど、どうする気？」

「どうするもなにも動くしかないだろう」

「だよね」

渡井がそう言うのと艦の戦闘機能が目覚める。スクリーンの情報が

一気に更新され戦闘モードへの移行が行われていく。

「この艦が動けるようになるまでのおおよそ30分、どうする？先にへりで前進させる？」

「……そうだな。いま動けるのは大鳳と龍鳳、榛名霧島と、あとは504と電か」

「だね。誰を出す？」

「電と大鳳、504をティルトローターで前進させる。残りはあすかと一緒に前進するのがいいだろう」

「りようかーい」

キーを叩いて指示を出す間にも高峰や杉田が飛び込んでくる。さすが軍人、艦内とはいえ非番からの招集も早い。

「で、あの化けモンが大量に出たって？」

「全く勘弁してほしいがね」

艦内に緊急出港を告げる警報ががなり立てる。三胴船トリマランのおかげで

広い合甲板ではティルトローターが曳き出されようとしているし、鎮守府に下りていた乗員がタラップに駆け込んでいた。

「で、基地の全勢力を持ってあれを叩くわけか」

「星影たちを頼るのは癪だな」

そう真顔で言った航暉は一度席を立った。

「大丈夫か、月刀」

「ああ、大丈夫だ」

杉田の問いにそう言って一瞬だけ目を閉じ、開く。

「交代で戦闘服に着替えておこう。制服でやるには荒れるぞ」

「ヒメちゃん、話したいことって何なのですか？」

船倉に組み込まれた隔離室……そこで待っていた幼子のような彼女は電を見ると真剣な顔で頷いた。

「イナヅマ、クラリフィスガ来ル」

「クラリフィス……？」

「Guelso teth keless guestrease juleck gutels pleate……」

そう言われて電は一度目を閉じる。ヒメの協力で作成した深海棲艦の言語の変換器デコーダーを起動する。

「ゲラソテス級海洋航空戦闘母艦……という戦艦レ級なのですか？」

「ソイツノ中デモ上位ノカヲ持ツテル。3ツノ艦隊ヲ任サレテタ」

電はそれを聞いてわずかに考え込んだ。

「……ヒメちゃん、どうしてそれがわかるのです？」

ここは基本的に電波暗室。外部とのコンタクトは不可能なはずだった。

「前二話シタカモシレナイケド、匂イデ判ル。大艦隊ヲ率イルカヲ持ツモノハ自分ノ匂イヲ放ツ。ソレハ部下ニモ影響スル。ダカラワカル」

ヒメはそう言って真面目な顔で電を覗き込んだ。

「クラリフィスハ私ヲ裏切り者トシテ裁キニ来ルンダト思ウ。ダカライナヅマ」

「ヒメちゃんを置いて逃げてなんて言っても聞かないのですよ？」

電は小さく笑ってヒメをそっと抱いた。

「大丈夫なのです。ここみんなは強いのです。そのクラリフィスさんにも絶対に負けないのです」

「デモ、アレハ強イ……」

「私達はそれでも負けないのです」

隔離室のドアが改めて開いた。

「電……」

「はい、ではレーベさん、あとはお願いします」

電はゆつくりと立ちあがった。

「イナツマ……何かアツタ？」

「大丈夫なのです。——絶対に守って見せるのです」

「イナツマ……？」

ヒメを置いて電は走る。出撃の時間が迫っていた。艦装のキャニスターはすでに輸送機に搬入されているはずだった。ラツタルを駆け上がり航空機格納庫に繋がる扉を開けた。格納庫の中からすでに機体は曳きだされ、がらんとしていた。開いた扉からはグレーの機体が格納状態から翼を広げている所だった。

甲板に立つデツキクルーに敬礼を送りその機体の後部に回り込む。アンチコリジョンライト衝突防止灯などを瞬かせながら、エンジンナセルが上向きに変化し、鋼鉄の風車がその形を取り戻そうとしているのを横目に下ろされた後部ハッチに向った。小柄な少女がローディングランプから体を乗り出していた。

「電ちゃん！」

「宮藤さんが今日のキャビンクルーなのです。よろしくお願いします。すななのです」

「(こちらこそ)」

作業着に伍長の階級ワツペンを縫い付けた小柄な彼女に腕をひかれるようにして電は機体へ乗り込んだ。中にはほとんどの出撃メンバーが揃っていた。川内を旗艦にして睦月・如月・文月・綾波・敷波で構成される第504水雷戦隊、そして大鳳がすでに乗り込んでいた。艦装のキャニスターが中央に固定されているため少々窮屈である。それでも輸送には十分な広さがあった。

「今日は一緒に出撃だね」

「よろしくなのです」

睦月とハイタッチを交わして電は最前方のジャンプシートに向かう。開け放たれた操縦員区画では慌ただしそうに出撃の準備が進んでいる。

宮藤伍長が積載物の固定を確認している間にも機体はジェット
フューエルスターターが始動し僅かに音が高まっていく。このテイ
ルトローター機——C V—34 Dブラックカイトのコックピットで
は離陸前確認手順が実施されていた。男女の声だけが一気に響いて
いく

「フューエルコントロールスイッチ」

「カットオフ・チェック」

「敵味方識別装置オフ」

「オフ・チェック」

「マスターアームスイッチ・オフ」

「オフ」

外部電源の供給を受けて光るコンソールは仄かにパイロットの顔
を照らすだけだ。その中でモニタリングパイロットがリストを読み
上げる声とフライングパイロットのやり取りが高速で響く。緊急用
Vmaxスイッチ、VHF航法装置がOFFを確認。武装を司るマス
ターアームスイッチOFF、酸素マスクの作動装置が100%確認、
防水装置OFF、INS慣性航法装置が自律待機を確認。緯度経度を
叩き込む。

目の前の機付長が指示に使うライトパドルを振った。
ローター始動準備良し。

それを見た機長席に座る女性が間髪入れずに指示を出す。

「リクエスト・プリエンジンスタートチェックリスト」

「ラジャール、プリエンジンスタートチェックリスト。エンジンナセル
ポジション」

「92。バーチカルテイクオフ・ノーマルポジション、チェック」

ジェットフューエルスターターが必要トルクを叩き出したことを
示すライトが灯る。

「ファイターワーニングテスト」

「レスポンスノーマル」

火災通報装置の正常起動確認。エンジン始動準備良し。武装管理
員が何かを振っている。自衛用の空対空ミサイルのランチャーから

引き抜いた安全ピンだ。これで武装の使用が可能になった。

「第一エンジンからいくわよ！ スターティングエンジンス」

F Pの女性が宣言し、左手で出力調整レバ^Tーのリフティングレバ^Lーを引き上げながらそれを前進させる。ドン！と鋭い音と共にエンジンに火が入り真上を向いた鋼鉄の風車が回転を始める。出力計が一瞬跳ね上がって戻る。フロップローターの先についた緑色の警告灯が光の尾で円を描き始めた。それを確認する間もなくもう一つのエンジンも始動すると機体の揺れが一定に落ち着いた。

「要員のローディングが完了しました」

「ありがとう。宮藤伍長も席について、そろそろ出るわよ」

宮藤伍長が声をかけるとすぐに返事が返ってくる。それを受けて機長はすべての用意ができたことを知る。

「アスカプライフライ、ドルフィンキャリアーチェックイン。フライトレディ」

無線を開いた先は格納庫の上にある航空機出撃監視所。すぐに日本語と英語が入り混じる返答が帰ってきた。

『ドルフィンキャリアー、アスカプライフライ、その声はエッジだな？』

チェックインラジャー、ソーティはすでに承認済み、離陸後エリアワンジロー ツーナイナー10から29にかけて任意の方位、任意の高度で飛行できる』

機付長が指示に使うパドルを振った。外部電源切り離し。システムはすでに機体のみで完結している。

『天候情報、1700ズールー、ウインドシア・タービュランスともになし、風向140度から8ノット。ビシリテイー視程は15キロ、スカイコンデイションは5000フィートに層積ストレイトキムラス雲のスキヤタード。気温27度の露点22度、QNH30.00。絶好の夜間飛行日和だ』

「天候状況了解。奴さんたちに見つからないように気を付けるわ」

『そうしてくれや。ドルフィンキャリアー、クリアードチョークアウト』

機体の動揺防止の車止めやロープが外された。機付長がサムアツプを示す。全ての出撃用意完了。

『死ぬなよエッジ、パジャリエット。ドルフィンキャリアー、アスカ』

フライフライ、クリアードテイクオフ、グッドラック』

「アスカフライフライ、ドルフィンキャリアー、テイクオフ。サンクス」

機長が横に目配せをする。

「行くよ、パパジュリエット」

「了解エッジ」

出力が急速に上がり、ゆつくりと機体が持ち上がる。高度を稼いでいく中で甲板では敬礼をする人が僅かに見えた。

「ナセルシフト」

「ナセルシフト。シフトエアプレーンモード」

エンジンの向きが変わり、速度を上げて高度を稼ぐ。

「先輩、質問いいですか？」

「どうしたの森田君」

副機長席に着いているMP——森田正一中尉がどこか不満げに声を上げた。

「永瀬先輩も含めてなんで全員俺のTACネームフォネティックコード読みなんですか？ PJピージェイの方が短いのに」

「ただのゲン担ぎよ」

機長を務める永瀬ケイ中佐はそう笑った。テイルローターは一路東へ向け加速する。

「ドルフィンキャリアーが上がった。作戦海域到達はネクスト56を予定」

高峰が報告を上げると同時、輸送機のコードを示したマーカーがマップに投影された。作戦海域への最短コースにラインが伸びる。

「接敵は？」

航暉の質問に高峰が視線を落とした。

「かなり余裕がある。『あすか』についても最大速で向かえば先遣隊の戦闘開始直後ぐらいには大和型の射程には入れそうだ」

「燃料は？」

「燃料、弾薬共に満載、VLSセルにもSAMを満載してあるよ」

戦闘指揮所の入り口から声がかかった。

「山本准将……」

「この船ごと前線に出す気なんだろう。月刀准将」

戦闘用のグレーのベストを着た山本准将はそう言うとき水晶宮に併設されているあすかCICに向かう。

「戦艦レ級を相手にするにはどうしてもこの船がいる」

「……手紙が家族に届かないことを切に願うよ」

「私もですよ」

航暉がそう答えた。

「山本准将、あすかの出港を要請します」

「すでに用意はできているよ」

山本准将が無線を開く。

「艦長より全乗組員、これよりあすかは全速力をもって硫黄島沖の作戦海域に向かい。深海棲艦の脅威の排除にあたる。各員気を引き締めて任にあたってくれ。——出港用意、もやい放て！」

ウォータージェット推進のあすかがのっそりとその体を動かしていく。自力で離岸したあすかは先行する航空機を追いかけるように速度を上げていく。

水の中をゆつくりと漂うような感覚は彼女たちにとっては慣れ親しんだものだった。それでも敵とつかず離れずの距離を保ち続ける緊張感はいつになっても慣れるものではない。

(とりあえず今はゆーちゃんのサポートに徹するでち)

前線展開をあらかじめ言い渡されていた伊58達はある程度分散してパッシブソナーの役割を担うべく洋上にとどまっていた。普段なら一隻ずつ分かれて広範囲をカバーすることになるのだが、今回だけは話が異なる。

それがU-511の作戦参加である。

欧州アフリカ方面隊出身のU-511はまだこの辺りの海域に慣れていないこともあり今回は伊58とバディを組んで行動することになった。

(……間違いないでち。相手は気がついてるでち)

伊58がU-511の前にでる。ハンドサインで速度を落とすように示す。少し距離を取らなければ危ない。

(どうして?)

U-511がハンドサインで聞き返してきた。説明する時間も惜しい。とりあえず速度を落とす。

(敵の索敵艦隊の水雷戦隊が本隊との距離をどんどん詰めてるでち。対潜行動を予測したパターンでち)

それは同時に敵にとって魚雷が有効であることを同時に示していた。潜望鏡深度で通信アンテナだけわずかに出した高速暗号通信用意、そしてその刹那、特殊な音を聞いた。

――浸水音？ まさか魚雷……!!?)

直後に圧搾空気が放たれた音と共にコツコツコツコ……と鶏の鳴くような音が響きだす。

(魚雷、数6！・ 気づかれた！)

暗号内容をとっさに変更する。藪に棒を突っ込んだ、それだけ送信して浮力弁を解放、できるだけ早く潜らなければ、到達までおそらくあと15秒ぐらいだ。

(ゆーちゃん！・ 何してるでち!?)

重力に任せて潜り始めた伊58が驚いたように海面を見上げた。その先にはなぜか動きを止めているU-511の姿があった。

間違いなく魚雷の投射域に捉えられていた。潜水艦に向けて放たれた魚雷などあまり当たるものではないが可能性はゼロではない。平面で二次元的な動きをする魚雷から逃げるには潜るしかない。

(ゆーちゃん！・ 潜るでち、早く潜るでち!)

伊58は一瞬歯噛みした。

恐怖による体のロック。

魚雷は戦艦すら沈めることが可能な強力な武装だ。そんなものを潜水艦が喰らってしまったら一発でアウトだ。その恐怖感で思考が固まってしまい、動けなくなってしまう。おそらくU-511はその状態になってしまっている。魚雷の群れの到達まであと10秒あるかないか。

このまま潜れば、少なくとも伊58は安全域に離脱できる。伊58は奥歯を噛みしめた。

潜水艦への魚雷攻撃はまず当たらない。

だからと言って、見捨てられるか？

砕けんばかりに奥歯を噛みしめる。

――メインタンクブロー！

急速浮上。目の前に気泡の群れが見える。間に合え！

伊58はこれでも幸運艦と呼ばれた部類だ。『先の大戦』では終戦時まで生き残った。もちろん運頼みで生き残った訳でもなければ、技術だけで乗り切った訳でもないと思う。それでもあの戦争で終戦まで艦機能を維持したまま残った。それは一つの自負だった。この体を得てからも伊達にオルモック海峡に潜っていない。定期観光クルージングなんて呼ばれるほどに出撃し、実戦を積んできた。それもまた一つの自負になっている。

だから、今回も大丈夫。幸運の女神は絶対に私に微笑む！

一か八かの賭けかもしれない。それでもこれしかない。

魚雷発射管一番二番展開。撃てるようになるまでの時間も惜しい。魚雷に強制点火、爆発距離設定を解除、爆破コマンドによる遠隔操作モードで射出。

魚雷発射管を突き破るようにして無理矢理走らせた魚雷が前に飛ぶ。その衝撃で伊58の艦装に亀裂が生じる。その衝撃に意識を失いかげながらも前を見据え続けた。浸水警報ががなるがダメージコントロールよりも先にU-511の手を後ろ手に握った。そのまま体を寄せる。少しでも彼女の盾になればいいが。

魚雷の軌跡が交差するまであと1秒。

——当たってください！

直後強烈な水圧が伊58たちに襲い掛かった。

空を進むテイルトローターの中で電は少しばかり思いつめたような表情を浮かべていた。

「電ちゃん……大丈夫?」

「大丈夫なのですよ」

「本当にホント?」

睦月は席を立ち電の座るジャンプシートの前にしゃがみ込んだ。彼女の両手をそつと握りその目をまじまじと見つめる。

「ひとりで抱え込んでない?」

「……抱え込んでないと言えば嘘になるかもしれないのです」
「なら——」

「それでも、今はそれを考えてもいい状況でもないのです。この作戦には、関係ないことです」

「ダウト」

電の斜め向かいに腰掛けた如月が目を閉じたままそう言った。どこか冷たい声色だ。

「電ちゃん。如月には旗艦を務めたことはないけれど、ずっと旗艦のそばにいる立場だったの。だから責任者が話せないことを抱えていたり、嘘を言わなきゃいけない状況は何度も見てきたわ」

如月がうつすらと目を開ける。

「だからなんとなくわかつちやうわよ。確かに電ちゃんの抱えている問題は任務には関係ない。だけれども電ちゃんが深く考え込んでしまふ状況にある。——司令官関係の私情、よね?」

電の肩が跳ねる。凶星なのだろう。

「それも電ちゃんと司令官の関係に関わる大きな問題。それを星影少佐か凧風少佐から聞いた。違う?」

電は答えられない。無言の肯定。フロップローターの回る音が響く。

「……あたしは電のことも月刀准将のこともよく知らないけどさ」
キャビンの中央に固定されたキャニスターケースに寄り掛かるようにして川内が声をかけた。

「そういうことはため込んでおいても何も解決しないことがほとんどだよ。もちろん話したところで直接解決する問題じゃないかもしれないし、それを話すこと自体が月刀准将を裏切ることになるようなことなら無理に話す必要もないよ。それでも今ここでそれを引きずって戦闘に集中できないんなら、今回は旗艦を降りるべきだろうと思う」

川内はそつと前に出た。睦月の横にしゃがみ込み電の目を覗き込む。

「本当はこういうことを天秤にかけるべきではないってわかっているけど、残酷な二者択一にさせてもらうね。話すか、旗艦を下りるかだよ、電。私達は旗艦の指示で動く。その旗艦が上の空だしたら私達は旗艦の何を信じて動けばいい？ 何を信じて命を預ければいい？ 今の電ちゃんが置かれているのはそういう立場だよ。話してくれば電ちゃんが何をしているのか判断できる。少なくともそれを視野に入れて動ける」

「電ちゃん……」

睦月の手が電の手をきゅつと握りこんだ。

「……私、は」

——君の存在自体が彼の鎖になっていることに気がついてるかい？

ベトナムコーヒーを前に言われたその問いに電は僅かに眉を顰めた。目の前の風風は自分用のそれを手に微笑んだ。

『電ちゃんはガトーを守りたいって言ったね？ それは何よりも最優

先されることかい?』

間を置かずに首肯した。それを見た凧風の実みの色が変わる。

『なら電ちゃん道は二つに一つだろうね。……ガトーのそばから離れるか、二人で心中かだ』

『……理由を聞かせてもらえますか』

凧風はその諧謔的な笑みを深める。

『いいよ、答えましょ。……今真つ先に感情が出てきたからだよ、電ちゃん』

凧風が指を一本立てる。

『君たちが仕事をするとき求められるのは機械としての正確性と効率だ。君たちの電脳は高度なAIの上位互換や代替品として扱われる。君たちに与えられるのが姓名や血液型を示したドッグタグじゃなく、備品としての管理コードであることがその証明だよね。……俺たちもそうだったからよくわかる』

そう言うとき電の眼が見開かれた。

『軍において特殊殲滅部隊は存在してはならない部隊だ。平和国家において殲滅戦など発生してはならない状況だからだからね。その場にいる全員を殺してよしなんて展開になる状態は基本的に発生しない。それこそその事実がなかったことにしなければならぬような特殊な場合だけだ。そんな事態に対応するために陸軍第八師団特殊殲滅部隊や第九師団特殊殲滅部隊が表向き存在しない部隊として組織された』

その笑みは何でもないとを言うかのように軽かった。

『存在しない部隊に裂く人員なんていない。だから俺たちは人間として扱われなかった。君たちと同じようにね。でもその上には人間様が居座る訳さ。そして人間様は機械を扱うようにソレを扱わなければならない。理由は単純、自分の命令で死地に行かせるソレは人間であっては困るから。そうでなければ自分が人殺しになるからね。そのままではその重みで司令官は狂う。まあ元から狂ってるとは思うけどね』

『それがなんでさっきの二択に繋がるのです?』

『その掟をガトーが破っているからさ。そして破らせているのは、いや、破ることを強制しているのは君だよ、電ちゃん。君がいる限り彼は狂い続ける。命のやり取りの現場で家族ごっこなんてしているようじゃ潰れるのは当然だ』

そう言われ、瞬間的に頭に血が上った。

『家族ごっこなんかじゃないのですっ！』

『なぜ言い切れる？ 彼の妹のPIXコードを引き継いでいるから？』

『それは……』

『それに家族ごっこじゃないとさらにたちが悪くなる訳だけど、わかって言ってる？』

どこか呆れたようにそう言った風風。

『艦娘と司令官はね、いつでも切ろうと思った時に切れる関係であるべきだ。少なくともその死を乗り越えられる絶対的な自信がない以上はね。彼にも君にもそれが無い。そしてガトーはこれまで妹を救うという題目に人生のすべてをかけており、君も彼を家族として認識しているなら、君が戦い続ける限り彼は戦い続けなければならぬ』。そういうことだよ』

小さく笑ってそう言った。

『君がどういう結論を出すのかはわからない。でもね、これだけは言えるよ。君が戦い続ける限り、彼は君の背中を守り続ける。文字通り彼自身が壊れるまで。遅かれ早かれ、彼は潰れる。間違いなく君たちのせいだね』

——だから、彼を本当に戦場に引き出していいのかよく考えるといい。

「でもさ、答えは決まってるんじゃないの？」

川内は小さく笑みを浮かべそう言った。

「早く戦争を終結させなければいけない、それでも司令官を守りたい、そのことにはきつと優劣なんて無いのです」

電はそう言った。

「だから答えは一つしかないのです。『どちらも守るしかない』……だから絶対に選択とタイミングを間違う訳にはいかないのです」

それを聞いた睦月は握った電の手を振った。

「大丈夫だよ。電ちゃんならできるよ」

「それでも、これが間違っていないかどうか、心配になってしまうのです」

「それは誰だってそうじゃないの？」

川内が笑う。

「それはしつかり電が決断することの重みを知ってるってことだよ。それがわかってればきつと動ける。動けない時は動けないと言えればいい。それでどうする？ 今、動ける？」

「——いけます」

「そうかい、なら頼むよ旗艦殿」

笑ったタイミングで何やら無線に感があったらしい。

「……藪に棒を突っ込んだ？ なんだろこれ」

「藪を突いて蛇を出しやがった」

渡井がメカニカルな音と共に両手を「開く」と機械式キーボードを猛烈な速さで打ちこんでいく。両肘より先を義体化している渡井の情報の入力に特化した腕はフル活用され、超人的な速度でスク립トを送り込む。速すぎてキーを叩く音が溪流を流る水音のように聞こえる。

「状況は？」

「ごーやもゆーちゃんも通信沈黙のため不明、無線を切ってるか気を失ってるかももう死んでるかの三択だね」

いつも通りのテンションで渡井が言う。

「ではお前の予測は？」

「通信途絶5秒前、魚雷の管制システムの追加パッケージを緊急ロードしてる。————ごーやらしい判断だと思うよ？」

「簡潔に答えろ」

航暉がそう言うのと戦闘用のヘルメットを被った渡井が振り返った。その顔には笑みが浮かんでいた。

「追加パッケージの内容は魚雷の強制点火と安全距離制限の解除用プログラムコードだ。それを敵魚雷と交差するタイミングで起爆。残りの魚雷も巻き込んで爆裂させて海中を引っ掻き回して離脱する算段だろう。————間違いなくまだ生きてるよ。俺の部下を舐めるなよ」

実際伊58もU-511もまだ生きていた。

(伊58さん……なんで、どうして……?)

伊58の顔は苦痛に歪んでいた。魚雷に強制点火して無理矢理魚雷を撃ちだしたことで擬装には大きなダメージが入っていた。そこに魚雷爆発の衝撃波を浴びたのである。艀装には浸水が発生していた。その重みもあつて二人の体はゆっくりと沈降していた。

無音潜航。水中にはまだ爆発の余波が残りソナーにはノイズが溢れていることだろう。この間ならゆっくりと沈むように動くことでソナーを躲して動くことができる。

沈みながら伊58は首の後ろに手をやった。水中作業用に高度防水を加えられた特殊なケーブル。それをU-511の首の後ろに回した。

『このまま150まで潜航するでち』

『でも、その傷じゃ……!』

『大丈夫でち。日本の潜水艦はそこまでヤワじゃないでちよ』

深く潜るにつれて体を押しつぶそうとするかのようには圧が高まってくる。水が光りを奪い、足元に開いた黒い闇に向けてゆっくりと落ちていく。その中でも伊58はゆっくりと笑みを深めた。

『でも、無茶だよ。外殻損傷状態で150メートル潜航なんてしたら……!』

『その時は後を頼むでちよ?』

『冗談でもそんなこと言わないで!』

『……結構冗談じゃないんだけどなあ』

伊58の艀装がミシリと音を立てる、浸水区画が広がっていく。その度に体がどんどん重くなっていく。

『……伊58さん、浮上しよう』

『今浮上すれば間違いなく捕捉されるでち。もう魚雷の使えない足手纏いを連れての戦闘は避けるべきでち』

『今なら浮上できる。でも伊58さんは帰らない気なんですよ。これ以上深く潜ればもう上がれない。やっぱり無理だったとか言われても納得できない』

U-511はブローバルブを解放、メイン注水タンク排水開始。それを見て伊58は驚いたように目を見開いた。

『だから、今上がったら……!』

『それでも、ここで見捨てるなんて絶対嫌だよ!』

中性浮力値を通過、降下がゆっくりと止まる。

『諦めないで。私が、ゆうが、守る、から……!』

排水完了。体がゆっくりと持ち上がっていく。伊58に特殊なスクリプトを送り込む。外部制御で非常モードサブバルを始動させる。浸水した艀装の装備切り離し、重みとなる武装システム系列を切り離す。

『私が……守るから!』

そう伝えて伊58にコードを返した。U-511の体が浮き上がっていく。彼女は伊58の手をひくようにして海面を目指す。右手には砲戦用の砲を持っていた。

(わたしはゆう、U-511)

原隊は国連海軍欧州アフリカ方面隊第298潜水艦隊。Uボート部隊の一員としての矜持を持って取り組んできた。だからこそ、ここにいる。

(思い出して、わたし。私は敵を恐怖の底に落とし込む狼にして、海の覇者の末裔)

海面まであと少し。伊58の方を一瞬見て、微笑んだ。同時に音が聞こえる。探針音、——アクティブソナーに捕捉された。一瞬悲鳴を上げそうになり、飲み込む。

(浮上続行します!)

戻ろうという意味を込めてか、U-511の左手が強く引かれる。それでもここで潜っても伊58がもう一度海面に戻れる可能性は低い。酸素がなくなるか、圧潰するかの二択になる。それならばせめて雄々しく戦い、生き残れる一縷の可能性に賭けた方がマシだろう。

「ふはっ!」

水面から顔を出す。新鮮な酸素を吸って周囲を確認すると同時に砲門の防水栓を抜いた。初弾装填、水上で構える。夜闇はどこか遠く白みかけており、夜明けに近いことを示す。

遠くに小さな影が揺れる。それが一瞬瞬いた。――敵影だ。

「……砲戦、用意ですっ！」

少々離れたところに水柱がたつた。遠・遠。まだいける。

伊58の手を曳いて距離を稼ぐように進む。水中よりも水上の方が速度を出しやすい。できる限り距離を取る。

相手がこちらの動きを押さえにかかると。僅かずつだがそれでも距離が詰まっていく。

「初弾装填、再確認。目標、敵駆逐艦……！」

「ゆー、無茶でち！」

「無茶なんかじゃない！」

距離を取りつつ相手との距離を測る。後ろの弱気になっている伊58にそう言つて砲を構える。

「わたしは、ゆーは、負けません！ Feuer！」

鋭いショックと共に砲弾が吐きだされる。僅かに左にずれた、修正しつつ再装填。再度発砲、今度は僅かに上にずれた。相手の速度が想像以上に速い。白んだ空に浮かぶシルエツトがどんどん大きくなつていく。

「当たつてえ……！」

三度発砲。それでも相手の行き脚は止まらない。どんどん距離を詰めてくる。

「――まったく、強情な後輩でち」

強張つたU―511の両手に冷たい右の手が添えられた。

「落ち着いて、敵速32ノット、相対速度38ノット、敵の砲撃のタイムラグは大体12秒でち」

彼女は優しくその照準を修正して、そつと囁いた。

「砲撃の瞬間は縮尺合わせのためにどうしても回避行動を捨てて単純な動きになる。ことりと落ちるようにゆっくりと引金を引くんでち」

伊58が小さく笑つた。笑つた先には敵の駆逐艦が砲撃を喰らわせようと口を開けていた。

「――Jetzt！」

ドイツ語で伊58が叫ぶ。その刹那、U—511の構えた砲から勢いよく鉛の塊が吐きだされた。それは過たず直線にも見える低い放物線の弾道を残して音速を超えて飛翔する。直後に見えたのは相手の赤黒い爆炎。

「やつ……た……？」

「気を抜いちやダメでち！」

その爆炎を超えてくる軽巡の影を認める。

「雷撃用意！ 1番から4番、通常弾頭！」

「はいっ……！」

U—511の艤装の門扉が開く。そこから魚雷が射出される。それと同時に相手の軽巡が砲撃を吐きだした。それがU—511の艤装を抉るように突き抜けた。

「あああああっ！ とても……痛い……！」

痛みに呻く間にも魚雷は前進を続ける。が、到達予測時間を過ぎても水柱は上がらない。

「不発？ いや、躲してきたでち！」

痛みに背を丸めるU—511の右手から砲を奪うように持った伊58はそれを相手に向ける。想像以上に強い反動を受けつつも相手に砲弾をぶち当てる。反動で大きく手首が跳ね上がる。痛みに顔を顰めつつもそのまま撃ち続ける。

「だめ、止まらないでちっ……！」

相手は勝利を確信しているのか、どこか笑っているように見えた。

伊58はその砲門を見返して砲を構え続ける。

そして両者が引き金を引く。その刹那。

「……で、でちっ？」

相手の体がいきなり爆ぜた。あまりの事態に目を白黒させていると伊58の頭上を水上機が飛び抜けた。巨大な二本フロート。機体番号が読み取れる

——E16A、瑞雲11型。

「い、イク……？」

《はい、ゴーヤまだ生きてるのね?》

たった一機のその応援が無線を飛ばす。

《こちら伊19、ゴーヤとユーの浮上を確認したの!》

《水晶宮了解。心配かけさせやがってこのヤロウ》

ノイズの酷い無線から響くのは司令官——渡井慧大佐の声だ。

《イク、瑞雲のコントロールを司令部に移譲、こっちの空戦バカが指揮をとる》

《了解なのね! ゆーはぶこんとろーる!》

《誰が空戦バカだ誰が、アイハブコントロール》

瑞雲が一気に反転。そのタイミングで顔を出した太陽の一瞬の緑光を煌めかせ、上昇する。それに伊58が見とれているとU-511が何かに気がついた。

「あれ、なにか来る……」

伊58が首を振ると波を切り裂くようなごく低空で何かが接近してきていた。瞬く間にそれは伊58たちの横を高速で通過していった。M6A1「晴嵐」が3機、編隊を組んでU-511の防止を吹き飛ばさんとするかのように飛び抜けた。

「——しおいつー!」

《ごーやもゆーも友達だもん! いつでもどこでも助っ人参上っ!》

どこかテンションの高い返答が返ってくれば、極低空の高速水平爆撃が過たず対潜攻撃のために集まってきていたピケット艦隊を殲滅していく。

《ごーや、ゆー、生きててよかった。大鳳艦戦隊到達までイクの瑞雲が直掩に入る。ゆー、ごーやを曳航して離脱しろ。回収班が回る》

「了解、しました。がんばる」

《いい子だ。頼むぞ》

渡井の通信が途絶えるとU-511は伊58の手を取った。

「それじゃ、一度下がるよ」

「了解でち。ゆーちゃん」

「毎度毎度、極低空でのホバリングは気を使うわね」

後ろに乗せていた艦娘たちを指定の場所に下ろした永瀬はそう言っただけで機体を上昇させる。その横では真面目な顔でレーダーを覗む森田の姿もあった。

「今日はまだ風がなかったから良かったけれど。……って森田君？」

「先輩、レーダーに映ってるノイズ、怪しくありませんか？」

一瞬写っただけで消えるノイズが走るのを見て森田が声を上げる。

「……下手すると、ヤバいかもね」

サイクリックレバーを倒し、機体を急旋回させる永瀬。

「パバジュリエット、戦闘用意だ」

「了解」

「伍長！ 聞こえてるか？」

「はい！ なんですか？」

小柄な少女が後ろのキャビンから顔を出した。

「機関砲を右ハッチに設置して。……もしかしたら戦闘になるかもしれない」

「え……？」

「大丈夫、機体に装着してあるやつはこちらでやるから、貴女は指示があった時にボタンを押してくれればいい。頼むわね」

空での戦いがもう一つ開けようとしていた。

天気は晴朗、波も外洋としてはかなり穏やかな中、艦隊が速度を上げていく。

「……敵ピケット艦隊の殲滅を確認しました」

艦列最後尾で艦載機を格納したマガジンを確認しつつ大鳳が報告を上げる。

「これで残存勢力は……」

「戦艦レ級3隻に戦艦夕級2隻、重巡り級1隻、軽空母2隻……ですね」

電がそう言うと川内が頷いて横に並んだ。

「どうする気？ この面子で突っ込んででもまずい気しかないけど」

川内の声に電が頷く。

「もちろんこの人数で昼間から相手にして勝てる相手ではないのです。だから私達ができることは、大和さんたちの用意完了までここで漸減を実施することです。そして可能なら」

「交渉、だよね？」

「なのです」

睦月の声に電が頷いた。その瞬間に一瞬だけノイズが走った。

——遅かれ早かれ、彼は潰れる。間違いなく君たちのせい
でね。

瞬きよりも長く、考えるには短い時間、電は目を閉じた。

大丈夫だ、きっと、大丈夫だ。

「私は——」

司令官さんを、信じているのです。

そう納得したことにして顔を上げたタイミング、睦月が気がついた。

「前方から潜水音！ 数、最低で3！」

「対潜戦闘用意、睦月ちゃん、対潜指揮をお願いするのです！」
「了解なのです！」

電がすぐに対潜戦闘指揮権を睦月に移した。餅は餅屋だ、ここは睦月に預けた方が得策だろう。睦月は物怖じすることなくそれを受け。対潜装備を積んでいる如月と文月が前に出る。

「一緒に戦うのは久しぶりだねー」
「そうね！」

文月はマイペースにそう言つて如月の真横に並んだ。その間を埋めるように睦月が立ち、目を閉じる。

「グリット共有開始。如月はd5！ 文月c6！」

座標平面を固定、敵の水面下の位置を見取り、それをグリットに落とし込む。睦月自身も前進。対潜爆雷の展開用意を急ぐ。

「門扉解放音、魚雷、来ます！」

直後に敵の推進音が増える。

「数6条！ 川内さん黒15即時回頭左2点！ 電ちゃん赤黒なしの左1点！」

「おう！」

「了解なのです！」

睦月が射線を確認すると手にもった機銃をきつちりと両手で構える。軽く背筋を曲げ、顎を引いたアイソセレスタンスを確保。狙いを付けてゆつくりと引金を引いた。数瞬のラグの後、大きな水柱が立つ。直撃の危険があるのはこの一本だけか。

「如月e6へ向かって！ たぶんそこで捕捉できる！」

「はあい」

「文月はd4！」

「わかったよお！」

自分の真横を通過する魚雷を躲しながら睦月も前に出た。相手の推進音が反響し複雑なうねりのある音を残すが、睦月には「視えていた。」

「文月、いまっ！」

文月の腰に括り付けられていた爆雷が海面に落ちていく。安全圏まで文月が逃げる間にも睦月が、続いて如月も爆雷を投下した。爆雷の立てた籠った爆発音と共に突き上げられるように海面が盛り上がり、弾ける。

「……圧潰音確認、対潜戦闘終了、指揮を電ちゃんに戻すのです」「了解なのです」

電が睦月の方を見た。

「今のつて……」

「たぶん深海棲艦版の甲標的だと思う。潜水艦にしては反応が小さかった」

「睦月がこんな近くまで気がつかないんだもんねえ」

まだ残っている爆雷にセーフティを改めて掛けつつ如月がそう言った。どこか悔しそうな顔をする睦月、もっと早く気がつけていればと思っても仕方ないのはわかっているがそれでもそんなことを考えてしまう。

「となると雷巡が向こうにもいるのです……?」

「ううん、戦艦レ級よ。ウエーク撤退戦の時もこういう攻撃が来たことあったから」

如月の言葉に睦月も頷いた。川内がどこか苦い笑みを浮かべた。

「……航空機を放ち、魚雷を放ち、砲撃もしてくる。マルチロールもここに極まれりって感じよね。そして、航空隊が向かってきてる訳だけど、大鳳さんいけます?」

「もちろんよ。何のために全機上げたと思ってるの?」

直掩機のホールワゴン機動を真円として維持し続ける大鳳はそう言ってニヤリと笑った。

「電、敵のヘッドはわかってるんだろう?」

「なのです。クラリフィスと呼ばれる戦艦レ級がこの艦隊のトップらしいのです」

「となるとどうやっても戦艦レ級と刺し合わなきやいけない訳か……いける?」

「いくしかないのです」

「ま、そうだよね。野暮なこと聞いた」

川内が電の肩を叩いて彼女の前に出た。

「川内さん？」

「あなたの役割はレ級との折衝だしっかりその時まで体力は温存しときな。綾波、敷波、昼戦だけど少々暴れてこよう。血路拓ひろくよ」

「はい、いつでも用意できてますよ」

「露払いとはいえかつちり決めなきやね」

綾波と敷波が電の横を過ぎて前に出る。

「睦月如月文月は電の直掩、お願いね」

「任せてくださいっ！」

「なんだか551の時みたいねえ」

睦月と如月が笑う。文月が電の横から半ば抱きつくような距離まで飛び込んだ。

「護衛は睦月型の十八番だから、みーんなやつついで護つちやうんだから！」

電はそれを聞いて少し複雑そうな表情を浮かべた。

「電、戦艦レ級は強敵だよ。それを複数相手に回して私達だけで倒せるとは到底思えない。真正面からぶつかっては押し負ける。でもね、あんただけは別だと私達は考えてるんだ、電」

川内が振り返る。その顔にはいつもよりも大人びて見える、彼女のほほえみ。

「武力で叶わなくても、武力以外のところで勝てる。その可能性を持つジョーカー、それがあんただ。だからその力が使えるところまで。私達が血道を拓くよ。そんな心配そうな顔しないの。もうすぐ金剛さんたちも到着するんだし、負けたりしないからさ」

そう言って川内は伸びをするように背を逸らす。

「大鳳、直掩回してくれる？」

「もちろんです。そのための私ですから」

「ん、頼むよ。それじゃあ、いくよっ！ 対空見張りを厳としつつ前

進、砲雷撃戦、用意！」

綾波と敷波が彼女について前に飛び出した。その三人の上空を力

バーするように烈風が飛翔する。敵の艦載機の影がぽつぽつと上空に浮かんでいた。

「マスターアームオン」

酸素マスクのせいで籠った声で永瀬ケイの声がする。防寒着を着ているとはいえ体が冷えていく。後部ハッチを解放している状況で上昇しているのだから当然だ。

《マスターアームオン》

横の副操縦士が一つのボタンを押した。視界に投影された計器表示に武装システムが準備完了ホツトになったことを告げるマーカーが現れた。

永瀬が武器に力を与えると同時、僅かに出力調整レバトルを前にスライドさせた。上昇に必要な推力を得て高度を上げていく。二枚の大きなフロップローターが唸りをあげる。

空戦において必ず必要なものがある。

それは高度だ。位置エネルギー量と言い換えてもいい。

航空機は地上で空を見上げることしかできない人間に翼を与えたが、人を地上に縛り付ける物理法則から完全に開放したわけではない。重力は航空機にも働き、地面へと大きな力で引き寄せようとする。だが、この重力は空戦においては大きな意味を持つ。

重力が与える位置エネルギー。高さが上がれば上がるほど、位置エ

エネルギーを蓄えることができる。そして位置エネルギーを消費することによって急激に加速することが可能になる。航空戦が予測される場合、特に出力に限界があるプロペラ機のような低速機になればなるほどこの高度という要素が大きな鍵となる。逃げるにも追うにも速度や機動性は高いに越したことはないのだ。

《さて、奴さんも近づいてきましたね》

PJこと森田は軽く緊張したようにわずかに肩をこわばらせた。

「死ぬわけにもいかないがまずはこちらが上を取れる。何とかこちら有利で状況を開始できそうだから、慌てずに行きましょう？　死ぬわけにはいかないしね」

《そうつすね、パトリシアを泣かせる訳にもいかない訳ですし》

「……たしか、婚約者だったか？」

《いえ、突き合っているだけです。今は技官として衛生課で“とわだ”に乗ってるんです。この戦争が終わって、本当に平和になったら、結婚指輪渡そうって。無垢の削りだしのそっけない奴ですけど、実はもう買ってあったりして……》

接近警報が彼の会話を叩き切った。高度2万4500フィート、大体7500メートル弱、上昇させることのできる上昇高度限界が近い。身を刺すような気温の低さを感じる。高度を考慮すればもうマインス20度を切ろうとしているはずだ。

「宮藤伍長、設置オツケー？」

《はいっ！ 私もちゃんとハーネスつけてます。宙返りしても大丈夫ですよ》

「そりゃあ上等。舌噛むから口閉じてなさい。さて、いこうか」

永瀬がそう言ってミサイル発射管性システムを起動させる。

「——エンゲージ」

右に大きく傾きながら相手の上目がけて降下する。一瞬フラッターを起こしたローターが鳴った。速度計の数値が跳ね上がる。ほぼ真下に向けてのパワーダイブ。頭から真下の雲の向こうの海面目がけて落ちていく。

敵の反応を確認、数6。相手は真上から降ってくる巨大な塊を見て

慌てたように編隊を解いたがもう遅い。すでにこちらの照準装置が捉えていた……敵の推進法方法では赤外線による誘導は通用しない。画像判別による誘導に切り替える。翼の下に懸架されたミサイルポッドがミサイルを切り離した。前を向いた巨大なローターを避けるように大きく距離を取ったミサイルの推進装置に点火。一気に加速する。

相手から距離を取るように操縦桿サイクリックレバーを引きつけて機体を引き起こしにかかる。強烈なGがかかり、水面の位置が前から真下、やや後ろへと変化していく。

「敵残存勢力は?!」

《数2!》

「4機撃墜か! 上々!」

武装のセレクタをGUNにセット、機首下にセットされた武装ターレットが始動する。機体が僅かに持ち上がっていく。高度1万500フィート、真つ逆さまにほぼ最高速で急降下しただけある。まばらに浮かんだ雲とほぼ同じ高度まで下りてきたことになる。

《敵との距離詰まります!》

「わかってるっ! 向こうの方が最高速早いんだから当然だっ!」

フォワードスリップ、機体が進行方向に対して横滑りするように動きを変える。操縦席の窓からちらりと黒い点が見えた。全速力で反転してきた敵艦載機だ。ターゲットロック、操縦桿のトリガーを叩き込んだ。機首側のターレットに積載されたバルカン砲が火を噴いた。空に曳光弾の帯を作るが、それを敵は躲してくる。敵から緑の線が伸びる、すぐ真上を通過したそれを見て一瞬歯噛みした。

「敵の高度が高すぎるっ!」

スリップの姿勢を戻す勢いでそのまま180度ロール。失った加速度を取り戻すようにスプリットエス。ダイブするようにして進行方向を180度変える。いま来たルートを戻る位置だ。機動終了と同時にエンジン全開、高度を上げるように全速力で高度を上げていく。同じようにスプリットエスで追いつこうとした敵艦載機がかなり下方に超過飛行する。

「伍長！」

《はあああああああつ！》

後部キャビンから大量の銃弾が吐きだされる。鈍く燻された葉莖がキャビンのスロープを転がって海上に向け落ちていく。曳光弾の帯に一機が突っ込んだ。その刹那、何かが砕けるように飛び散り、煙に包まれた。

「グツキル伍長！」

残る一機がブレイク真後ろに回り込もうと急速に加速していく。その機体から逃げないように上昇率を抑えながら加速していく。

「このまま旋回！ 相手を落とすよ！」

《了解！ えっ……！》

接近警報。位置は——上？

とつさに見上げる森田。その視界に映ったのは今まさに機銃を放たんとする敵艦載機の銃口だった。

「敵の数は案外少ないんだね」

凧風がいつも通りの恰好で水晶宮に現れた。その後ろには甚平姿の星影の姿も見える。

「ああ、だがどれも高火力艦だ。問題の戦艦レ級が無傷だ」

「それでどうするつもりだ、ガトー」

星影がそう言いながら予備管制卓にどっかりと座り込んだ。

「赤城と加賀の航空隊も上がった。戦艦レ級以外をまず潰すあとは総力戦でフルボッコさ」

ピケット隊を潜水艦で潰せたのはありがたかったと素直に感想を漏らせば、星影が鼻で笑った。

「気楽な身分だな。戦場を高みの見物か。『前と同じように』」
「『星影』」

凧風が星影の隣の補助シートに腰掛けながらそう言った。

「それで俺たちは菊月たちを指揮すればいいんだね？」

「ああ、金剛たちと一緒に行動してもらいたい。いけるか？」

「そもそもこちらに選択権は無いだろうが、准将殿」

指揮管制卓に星影のIDが読み込まれ、指揮の用意が整っていく。

「ミスるなよ、ガトー」

「お前こそな。出撃管制、577台にカタパルトからの出撃を許可。

現在の金剛型の射出終了し次第海上に出してくれ」

「了解。大和と武蔵、後部スリップウェイからの出撃を確認。杉田にハンドオフ」

「ハンドオフ了解、アイハブコントロール」

出撃管制をしていた渡井に珍しく寡黙になった杉田がぶつきらばうに返す。

「なんか不機嫌？」

「うるせえ」

笹原の茶化したような質問にぶつきらばうに返す杉田。笹原は僅かに肩を竦めた。

「こちとらいつもの面子に加えて青葉と夕張の管制を持つてんだ。それに夕張のは扱いが殺人級にピーキーなんだ。下手したら死ぬ。夕張！」

《ちよつと待って、もう少しで位置につくからっ！》

帰ってきた夕張の声に杉田は肩を竦めた。

「あの短射程を使うしかないってのが辛いところだな、せめてもっと小型化できなかつたのか」

《やったら単発になるけどいいの？》

「冗談だ」

夕張にそう言われてわずかに笑った杉田、彼の隣でキーボードを叩いていた笹原が振り返って航暉を見た。

「よっし、とりあえず私達の射程に入る前に川内たちが動く。これ、私の管轄でいいわね？」

「ああ、頼む」

「あいあい頼まれた」

笹原がそう言ってヘッドレストに頭を押し付けるような姿勢をとった。高規格リンク開始用意。

「——504、水上艦隊エンゲージ」

彼女たちの戦いが幕を開ける。

「……ダメダヨ」

ヒメと呼ばれた存在は小さくそう呟いた。横に腰掛けた青い制服を着た少女がどこか儂げに笑った。

「大丈夫だよ。イナヅマたちは強いから」

「デモ、クラリフィスハ……」

「そのクラリフィスってそんなに強いのか？」

少しでも会話をつづけること、それが今制服の少女、レーベリヒト・マースに課された任務だった。本当はレーベも今回の出撃に出ることになっていて。だが、レーベにとって太平洋での外洋航海は横須賀からカナリア鎮守府に向かうまでの護衛が初めてであり、その結果今回の出撃任務からは外されるという少し苦い結果になっている。

「クラリフィスハ残忍。深キ者ノ間デモ怖イツテ言ワレテル」

「そうなんだ……」

「ダメダ。匂イガ強クナツテキタ……ダメダ……イナヅマ！」

急降下してくる敵の艦載機。それを見てPJこと森田は喉を干上がらせた。なぜだ、なぜ気がつかなかった。相手にとってはすでに必殺の間合い。普通に避けていたら間に合わない。

「南無三！」

隣の永瀬が右のラダーペダルを蹴り込んだ。同時に操縦桿を左に叩き込む。急激にあべこべな指示を出された機体が軋む。

「ぐおっ！」

予期せぬ急な機動に森田の視界が歪んだ。

制御できない発散運動^{チャイ}。無理矢理に舵を全開まで切られた機体は機首を左右に振るノーズスライスを起こしその場でくると回転を始める。失速した機体は重心を保ったまま失速後回転運動^{ポストストールジャイレンション}に突入する。ゆつくりと機体がフラットスピン。水平に回転した機体のコックピットの窓に敵の艦載機が映る。本当ならば機銃を放ち離脱しているルートだ。それに向かって永瀬は引き金を引いた。曳光弾の帯が伸びる。相手の影をくしゃくしゃにしてそのままフラットスピンの続く。

その無茶な機動で翼の周りの空気がはがれ落ち、揚力は一瞬にしてゼロになる。翼上面の空気の急減圧により寿命数秒の雲が生まれて吹き飛ばされた。吹き飛ばされたというより雲を残して機体が落下したのだ。揚力を失った翼はほぼ真下に機体突き落とす重りではない。もし敵にパイロットがいてこの光景を見ていたら、テイルローターがぐるりとスピニングしながら弾丸をまき散らしたように見えただろう。

バランスが崩れ不規則にロールしながら高度が落ちていく。水平線表示が不規則に飛び回る。

「永瀬さんっ！」

「計器を信じろ！ キックレフトラダー！」

永瀬のアルトがそう叫び、操縦翼面を操作し、何とか機体を安定させようとする。全方位360度、めまぐるしく変わる水平線をつかみ、機体を回復せねばならない。永瀬はともかくスピンを止めるべく左のラダーを蹴り込んだ。微かな手応えがあり機体のスピンの落ち着いていく。外を見ずにコックピットの姿勢制御表示を確認——外なんて見ていたら水平線を見間違えて変な姿勢に持っていきそうだ。計器はほぼ真つ逆さまに海面へ向けて降下している真つ最中だ。

轟音が耳を穿つ。その中で川内は軽く笑った。

「遅いっ！」

川内の砲が閃き、その反動を回転運動に変えていなす。目の前を重巡の砲撃が衝撃波を残して後ろに飛び抜ける。

川内たちの任務は単純だった。レ級に向った電たちの退路を確保し、他の雑魚を蹴散らすこと。幸いにも敵は重巡ぐらいのもの、少々分が悪いが勝てない相手ではない。

「綾波っ！」

「わかってます！」

川内の影から綾波が飛び出した。川内は綾波のサイドポニーを見ながら一度急減速。綾波の立てた水飛沫を潜るようにして進路を変える。その間にも綾波が重巡り級の懐に潜り込んだ。海面をなぞるように姿勢を低く前に飛んだ綾波の双眸が重巡を見上げた。深海棲艦にここまで近づくのは早々ある訳ではないが、珍しいというほどでもなかった。

——いけ。

リンクの先の女王がゴーサインを出した。電探やレーダーなどの情報が合成され、あり得ないほどにクリーンアップされた視界に砲撃用の目標を示すレティクルが映る。セーフティはとつくに解除されていた。後は振り上げるだけだ。

「綾波が、守ります！」

「守るというにはアグレッシブだと思うけど、さあっ！」

無線に乗っていたのか、彼女の妹分がそう言って笑った。綾波の右手に収まる12.7センチ連装砲B型改二の引金が引かれると、吐きだされた超音速の砲弾は相手の罅を食い千切らんと突っ込む。相手

はとつきに体を退くようにしてそれをギリギリ避けて見せた。恨みの色が浮かんだその空色の瞳が彼女を睨んでいた。それを見て、綾波も笑って見せた。直後、発光。

「!?」

綾波の左脚に括り付けられた探照灯がフラッシングしたのだ。新月の夜に10キロ先でも余裕で読書ができるだけの光量を持つ探照灯、10万カンデラとも言われるその強力な光線の直射を浴びれば一瞬で目が眩む。

目を守ろうと頭を逸らすようにして逃げる敵重巡。それが致命的な隙となった。

「忘れてもらっちゃ困るんだけど!」

その反った頭を砲弾が真横から叩いた。綾波によく似た姿をした敷波だ。彼女の正確な砲撃でり級が真横に吹っ飛んだ。その先に回り込んでいた川内が笑った。

「――『夜鷹』仕込みの部隊を相手にしたのが悪かったね」

海面にどうと倒れ込んだ敵を見下ろして、砲弾を叩き込んだ。右腕につけられた砲が次々と炎を噴き、相手に破孔を穿つ。

「クリア」

小さく報告を上げると無線の奥からも「ん、」と小さく帰ってきた。

「この後はどうすればいい?」

《とりあえず対空戦用意。ちよつとこつちも非常事態になりつつある》

「なりつつあるってどういうこと?」

《カズ君が過剰同調事故を起こした。対空リンクが使えそうにない》

「……………え?」

「カズ！」

「戦闘続行！ いけっ！」

航暉が首の後ろを押さえながら叫んだ。深深度リンクが祟った。それでも電とのリンクを無理矢理保つ。

「赤城！ 加賀！ ユーハブコントロール」

《りよ、了解です》

《この程度、鎧袖一触です。心配いりません》

脂汗を噴出させながら航暉は眉を顰めた。

「くっそ……！」

航暉が指揮卓の画面を睨む。電とのリンク率を改めて高めた。

「武装システムが半分死んでやがるか畜生。——電！ 一度

下げれ。これ以上の戦闘は無理だ」

《……なの、です》

予備回線オルタネートしか生きてないということはメインアンテナが死んでいるということだ。STARBUSTの使用もこの状況では厳しい。

「杉田、砲撃支援！」

「了解だ。大和！」

《照準を変更します！》

大和の支援砲撃が来るまでわずかに時間がある。航暉は割れるような痛みを無視するようにリンクを維持、電たちの前線部隊に意識を繋ぎとめる。

「死なせて、たまるか……」

リンクが不安定な状況だ、回線が死んでいるか、航暉のジャックが死んでいるか、それでも相手の砲塔を読み、電や睦月たちに回避の指示を出していく。

相手の砲弾が如月の横を飛び抜けた。その衝撃に航暉が呻く。

「カズ！ お前は死ぬ気か!? 電腦が持たんぞ！」

「死なせて……たまるか……！」

「ちっ」

かすかな舌打ちの音、直後に航暉の頭が無理矢理管制卓に叩き付けられるようにぶれる。

「が、は……っ！」

「テメエはそこでもう寝てろ、ガトー」

その頭を見下すようにしながら甚平姿の男が吐き捨てた。星影は航暉の作業服の襟元から覗くQRSジャックに自らのプラグを差し込んだ。

「テメエのエゴで艦娘を沈める気か馬鹿野郎。凧風」

「用意できてるよ」

星影が元々座つてた椅子に凧風が腰掛けている、その首の後ろからコードが垂れ、指揮卓吸い込まれていた。

「テメエの脳、借りるぞ、ガトー」

自らの意識が離散するような感覚。それは彼にとって、星影にとって慣れ親しんだ感覚だった。

「————
能力強奪」

静かに宣言する。離散した意識が再び彼の元に集まれば、彼の掌に全てのものが集まっていた。

「菊月、いけ」

「はあ、はあ……！」

痛みに視界が霞むが、電はそれでも立っていた。痛む右手で警棒を振った。主砲の装弾装置がエラーを返していてまともに機能しない。魚雷もあと3本で打ち止めだ。どれだけのことができるだろう。それでもやるしかないのだ。

「睦月ちゃん、下がるのです」

「そんなことできるわけないよっ！」

電はタイムラグなしで飛んできた答えにわずかに頬を緩めた。

「睦月ちゃんなら、そう言うと思ってたのです」

命令です。と言いきって電は一步前へ。

「犠牲無くして進める状況じゃないのかもしれないのです。そうなるならば、私は——」

警棒を正眼に構え、電はさらに前へ。

「いなづまがその一番槍であるべきだと思う、だから、私が私であるためにここは譲れないのです」

「電ちゃん……！」

「下がってください。睦月ちゃん、妹さんたちを泣かせちゃダメなのですよ」

その言の葉はまるで——。

——別れの挨拶のようで。

「電ちゃん！」

前に飛び出す電。司令官にこれ以上の負担はかけられないと、リンクを切ろうと思った刹那、リンク率が跳ね上がった。

「——え？」

体の制御権が奪われる。体を回すようにして勢いを殺し、行き足を止める。

(司令官さんのリンクが回復した……?)

その急制動に全身が傷む。この感覚は航暉とのリンクとは違うよ

うな気がするが、リンク先は変わってないはずだ。そんなことを考えている間にも状況は動いていく。

彼女の目の前の相手の頭がブレる。金属を砕くような硬質な音。砲撃——？

《直撃でも抜けんか》

その声が響くと同時、視界の遠くに小さな白い影が立っていることに気がつく。その手にあるのは、艦娘の使う通常の砲ではなく、アンチマテリアル

対物ライフルと呼ばれる部類の武骨な銃。月と冥府を司る女神の名を冠したPGMヘカートIIDだ。

《未成熟な人間の特徴は、理想のために高貴な死を選ぼうとする点にある。これに反して成熟した人間の特徴は、理想のために卑小な生を選ぼうとする点にある。——死に行くような選択はお前の指揮官を悲しませるだけだと思っぞ、電》

再度、狙撃、正確にレ級の眼窩を穿つように放たれた50口径の弾丸はレ級に苦悶の表情を浮かべさせた。その隙を突くように電の前に黒い髪の小柄な影が割り込んだ。電を庇うように左手で抑え込み、片手撃ちの姿勢で手に持ったそれをぶつ放す。

「ええいー。」

彼女の手にはハンドガンが握られていた。銀のステンレスの輝きを返すそれは50口径のガスオートハンドガン、IWIデザートイーグル。50AE。

「三日月、ちゃん……？」

「諦めちゃだめですよ。電さん。まだまだ、これは戦いなんですから！」

その姿勢のまま三日月が引き金を引いた。強烈な衝撃と共に強装填された弾丸が飛び出していく。それはレ級の体に食いこみ、その度にレ級の顔を歪ませた。

「タングステン弾でも貫通すらしないってどれだけ頑丈な体してるの!？」

三日月は驚きながらも電の手を曳いて後退する。

「睦月姉さん。バックアップよろしくですー！」

「了解にやしっ！」

どこか気の抜けた了解に三日月は僅かに笑った。

《全部いいところ持って行っちゃって、うーちゃん少し寂しいぴよん！》

《ならさっさと撃て！》

直後に再びライフルの狙撃音、どこか別の方角から卯月が何かで狙っているらしい。

「杉田大佐！」

三日月が無線に呼びかけた。それからツーンテンポほど遅れて水柱がいくつも立つ。支援砲撃、大和型が一気にレンジインしたらしい。

「司令官！」

三日月の叫び声が無線に乗る。

《なんでこんな複雑なプロトコル組んでやがる、このバカ！》

この声は星影だろうか。

《三日月はそのままリンクを維持、このバカを制圧するまでもう少し時間がかかりそうだ》

「せ、制圧ってどういうことなのです？」

その無線を聞いてた電が無線に割り込んだ。

《まだわからんか、ガトーのリンクの制圧だよ》

その答えに電は違和感の正体を知った。

「まさか、このリンクって……」

「私の司令官なら相手の能力を一時的にコピーして自らの能力のように使うことができる。——星影司令官は“能力強奪”と呼んでいるんですけどね」

三日月の答えに疑念が確信に変わる。間違いない。このリンクの先は——

「星影少佐なのです!？」

《風風から言われなかったか？ お前が前線で体を張るといことがどういうことか》

その問いに電は答えられない。

《中途半端な決意は人を傷つける。高い勉強代になったが、まだ今で

よかつたな》

リンク率が上がる。体の違和が強くなる。

《悪いが俺が乗っ取らせてもらう。お前の自由になると勝手に死にそうだからな》

体はまるでベルトコンベアに乗せられたかのように流れるように動いていく。無駄のない、洗練された動き——それをどこか人形のようなだと思ってしまうことに電はどこか驚いていた。まるでマリオネットのような完全に制御された統制。

「大丈夫。星影司令官は上手ですから」

三日月が笑う。このリンクに慣れているのだろう。

強い干渉による統率のとれた戦闘——昔ながらの軍隊のスタンダードな指揮方式だ。だがそれを悲しいと思ってしまうのは間違いだらうか。

そんなことを考えていると、無線が割り込んだ。

《電、無事か?》

「天龍、さん……?」

《無茶しやがってバカ野郎! 後は503が引き継ぐ、下がれ……っ!》

無線の奥で爆発音が響いた。

《くっそ、対空が押されてる! 大鳳!》

《制空劣勢! 赤城さん、大丈夫ですか!》

《こんなところで、誇りを失う訳には……!》

電が目線を上げれば、空にはたくさんの黒煙が漂っていた。その中、高空から飛び込んでくる何かが見えた。

「敵機直上!」

三日月が蹴り込むようにして急加速、電の体も星影に操られるようにして左に急旋回。すぐ真横に爆弾が落ちてきた。遅延信管だったのか、足元深くで爆発し大きな水柱が電を持ち上げる。何とかバランスを取りながら殺傷域を抜ける。

「睦月ちゃん!」

電の視界の先では至近弾を喰らったのかへたり込んで片目を瞑る

睦月の姿があつた。その彼女目がけて降下姿勢に入ろうとする敵機体を三日月がギリギリ撃ち落としした。

「司令官、急いで！」

《わかつてるから静かにしてろ！》

星影の苛立ったような声が響く。そして対空戦闘が繰り広げられる合間にも。レ級の砲門が電たちに向いていく。

レ級が笑みを浮かべた、その刹那。

「——————HALTE！」

その声が届いた。

“あすか”の艦橋にいた科奈畑艦長は自らの目を疑った。自らの艦の艦種。国連海軍旗が翻るそこに小さな幼子が立っていたのだから。

「あれは————ヒメ？」

《Clariffice! Lus zelies sullse
ne fusha!》

聞きなれない音節。これは……

「深海棲艦語か！」

配布されていた深海棲艦語の翻訳機デコーダーを立ち上げる。『Clarific ice! あなたが探している私はここだ』
「だれだ! ヒメを隔離室から出したのは!?!」

艦橋で怒号が飛び交う。その中でもデコーダーが次々と言葉を変換し直していく。

『北のヒメの登場か。待っていたよ』———そういう声は登録されてない。おそらくはClarific iceと呼ばれた敵艦の言葉だ。

『私を殺しに来たのか?』———これはヒメの言葉だ。

『裏切り者には制裁を、我々の掟だ』———Clarific iceの
声。

『そうして何が海に残る?』———ヒメの声。

『我々の繁栄が残る』———Clarific ice。

そのやり取りをどこか冷めた思いで見つめる科奈畑。その目線の先には幼子も背中が映るだけだ。

『そうして恨んでいたら、楽しい海が訪れるのか?』

ヒメの声が響く。

『私は認めない。殺し合うことでしか得られない平和を認めない』

デコーダーが訳した言葉を見て、科奈畑は目を見開いた。これが、深海棲艦の言葉だというのだろうか。

『私は今からヒメではない。私は私の意思に則り、私の求める平和のために戦う!』

『それは我々を裏切るといふことか?』

訳文は平坦だが、スピーカーから流れる深海棲艦語からは明確な憎悪が見て取れた。

それには取り合わず、ヒメは、いや、*彼女*は声を張り上げた。

「———私ハ北方棲姫! 平和ヲ楽シイ海ノ実現ノタメ、コレヨリ、国連海軍ヲ全面的ニ支援スル!」

日本語の叫び、それが無線に乗ると同時、彼女の艤装が姿を現した。
「戦闘機、発進用意！ 待ッテテ、イナツマー！」
北の海を続べた幼き帝王が、再び海に舞い戻る。

「高峰！」

「北方棲姫の艦載機をマーキング！ リンク開始！ 渡井IFFを外
部変更、警報凍らせろ！」

「もうやってる！」

ヒメ……北方棲姫の宣言を受けて司令部に怒号が飛び交う。

「本気か？ 大佐殿」

星影がそう声をかける。高峰が司令長官席で突っ伏したままの航
暉の方を振り返り、その後ろに立つ星影とは目を合わせず口を開く。

「この状況をさっさと終わらせる必要がある。そのためにこれが一番
手っ取り早い」

「北方棲姫は深海棲艦だぞ」

「だが同時に電ちゃんの間でもある」

高峰はそう言って視線を前に戻した。スクリーンに映る艦載機
……駆逐艦「あすか」から急速に離れていく赤いマークの一部が
黄色を一瞬挟んで緑色に変わる。

「星影少佐、貴方の思いもよくわかる。危険なリスクを孕んでいるこ
とは百も承知だ。それでも、私はそれに賭け、私達はそれに縋る」

ヒメの艦載機のナンバリングが変更されていく、80機を超えるマ
ルチロール機が飛び出していく。

「そんなものを信じるのか？ 神様を信じるようなものじゃねえか」

「深海棲艦が神様か……」

どこか可笑しそうに笑った高峰が肩を揺らす。

「ならば簡単な話だ。俺たちは神の殺し方を学ばばいい。――
神を殺すように深海棲艦を殺せ。それで俺たちは奴らに勝てる」

杉田が長距離砲撃を再開、レ級に向って徹甲弾の固め打ちが開始さ
れる。

「学ぶには情報が必要だ。 E E E I、敵性基本必須情報の生成、それも

また我々の任務だろう。北方棲姫の戦闘データ回収、及び敵との交信の傍受は対深海棲艦ガイドラインを大きく進歩させる。その可能性を我々は求めているんだよ。リスクを背負ってでもね。だからこそ我々は防衛計画からは切り離された「攻勢部隊」として組織されている」

そこで初めて高峰が星影と目線を合わせた。強烈な感情が、星影を射ぬく。

「そのリスクを背負いたくなければ、指揮下から外れる、星影少佐」

一瞬の視線の交錯。それを割ったのは以外にも凧風だった。

「ここが引き際じゃないの？ ステラ」

その声に星影が苦い顔をした。

「——己の面が曲がっているのに鏡を責めてなんになる？」

「……くそっ」

吐き捨てるような声に高峰が視線を逸らした。

「対空指揮は俺が取りまとめる。渡井、しおいたちは？」

「レンジイン」

「タイミングを見てレ級に攻撃させろ。タイミング任せる。——」

「もうすぐ金剛たちがコンタクト。状況が動くぞ。パターン34口メオ。乱戦になる。用意！」

「ヒメちゃんの艦載機が……」

高空からダイブしてくる白い航空機。白昼に落ちる矢のように空中から降りてくるそれがレ級の艦載機を蹴散らしていく。それを見て電は僅かに笑みを浮かべた。

「電ちゃん……?」

「大丈夫なのです、今はヒメちゃんを信じるのです」

そう言った頭上を白い徹甲弾が駆けた。その射線の元をたどると海上に4人分の千早の白が見えた。

『へーい！ イナヅマ！ まだちゃんと生きてるネー?』

「金剛さん……ごめんなさい、水上打撃群の指揮、移譲するのです」

『了解ネー！ あなたは十分頑張った、だからここからは“私達の”出番ネー！ 比叡、榛名、霧島！ Follow me! ついてきてくださいーい!』

『はいっ!』

金剛と視線を交わしてすれ違う。選手交代、金剛が前に出た。速度をあげていく。

「榛名、私に合わせてくだサイ！」

「はい！ 金剛姉様！」

「比叡、霧島！ バックアップよろしくデース！」

「気合入れていきますっ！」

「了解しました！」

「私達はレ級を一隻沈めれば御の字！ 張り切って行くワ！」

金剛がフルスロットルで加速する、その一步後ろを榛名がついていく。4つの砲架が稼働し全てが一隻のレ級に向いた。

「キャプテン・タカミネ！ エンゲージ！」

《交戦許可》

端的に帰ってきた返事に金剛が引き金を引く。徹甲弾が浅い角度で打ちだされ、レ級を後ろに押し下げる。それでも“彼女”は傷ついた体を持ち上げ砲撃姿勢に入る。

「さすが単騎でクエゼリンを潰しただけあるネー！」

飛んできた砲火をサイドステップで躲す。金剛が左、榛名が右に避け、その間を馬鹿デカイ砲弾が駆けていく。横に飛び退いた勢いを殺

さず回転運動に変えて相手との距離を保ったまま回り込むように動いていく。

「榛名！」

榛名の主砲が吐きだした砲弾を軽々と躲したレ級が金剛へ向け海面を蹴る。急激に距離が詰まったことに驚きながらも金剛はそれと対峙する。

「くあっ！」

彼女の笑みを至近距離で睨む。彼女の手が金剛の両手を押さえにかかると。ありえないほどの強力な握力に金剛は一瞬顔を顰めた。それを見たレ級が切れ込むように鋭い口の端を持ち上げる。

「———— E n e z e l d e r i f e e d ? 」

余裕の声が響く。金剛にとっては意味をなさない、敵のコトバ。

「舐めるんじゃないわ、D e e p e r 」

そう言うと同時に、金剛が大きく頭を振りかぶる、硬質を響かせながらレ級の鼻頭に頭突きを叩き込むと一瞬手首を抑え込む力が弱まった。うまいこと拘束を外し相手の左手を掴み直す。

骨格が人間と類似している場合、骨格構造上の弱点もまた人間に似通う。相手の手首を極めたまま無理矢理肩関節が外れる方向へと押しやった。

「こんなところでもカズキのリンクが活きるネー」

相手の表情が歪む。それと同時に金剛の主砲が展開。直後、至近距離で、レ級のしっぽに徹甲弾が叩き込まれた。彼女の尾だけが怒ったかのように金剛の艦装を噛みちぎらんと食らいつく。

「姉様！」

そのしっぽの付け根を蹴り飛ばすように飛び込んできた比叡が主砲の破損等で相手のしっぽの付け根に主砲を押し付け、砲弾を叩き込んだ。

「———— h e r e s e a s e m s l a m e v ! 」

「わけわからん言葉で叫んでるんじゃないですねーですよ、深海棲艦」

しっぽの付け根から体液のようなものを滴らせながら叫ぶレ級に比叡が冷たくそう言った。それと同時に、相手の艦載機が比叡たちの上

空に飛び込もうと反転する。

《やらせません。》

加賀の声が無線に乗ると同時、上空を烈風が低空から蹴上げるように飛びかかる。それを掻い潜ったものが横から走る小口径の砲弾に吹き飛ばされた。

「護衛はうーちゃんの十八番びよん！」

右手に主砲、左手にデザートイーグルを構えた卯月がドヤつと言いたげな顔で対空戦闘を繰り広げていく。そこに島風型の二人が追いついた。

「前みたいによられたりしないよ！」

「今度こそ、負けません！」

島風と微風が操る自律砲台が金剛たちを守るように飛び出した。持ち味の瞬足を活かし制空のない海域を文字通り駆け抜けてきたのだ。レ級がそれを見て舌打ちするような音を立てた。

全周に雷跡が伸びる。レ級の魚雷発射管が作動したのだ。その先にいた榛名が飛び退いてことなきを得る。周囲を走る島風が笑みを浮かべて、叫ぶ。

「おっそーいー！」

金剛が一気に飛び退いた。直後レ級の真下から突き上げるような爆発。立て続けに3回。

「さすがキャプテン・ワタライ指揮下の潜水艦！　ここまで正確に魚雷を決めるなんて驚きネー！」

痛みに背を丸めるレ級に金剛が砲を突きつける。

「……できれば殺したくないネー。でも、アナタは私達の仲間を傷つけすぎた」

引き金が引かれ、それが彼女を沈める決定打となった。それでも敵の侵攻は止まらない。

「あと二隻、頼むわよ、ダーリン！」

視線の先で大きな爆炎が上がった。

暁が前に出る、至近距離での雷撃戦。上空カバーに入っているのは赤城艦載機だ。

暁がクルリとその場で回りながら魚雷を撒き散らした。安全距離の制限は解除してある。すぐに起爆。その爆風すら使用して距離を取り直した暁は僅かに笑みを浮かべていた。

「お願いだからもう少し楽しませてよね！」

暁の主砲が動く。発砲。駆逐艦の主砲の発砲なんてダメージにはならない、それでもこの場では十分だった。直後にレ級を巻き込むような砲撃が走った。46センチ砲から発せられた巨大な徹甲弾。――

大和型の主砲弾だった。着弾観測結果を暁の目は正確にとらえ、その誤差を的確に調整していく。

「響ー！」

再装填のラグを埋めるように響の雷撃が伸びる。白い航跡、通常魚雷の筋。レ級は痛みに顔を顰めながらもそれを避けようと左へと舵をきる。直後、足元で爆裂。

「悪いわね」

遠くから狙った雷の酸素魚雷が起爆したのだ。

すでに艦爆機は赤城が駆逐していた。放たれた通常爆弾がいくつもの火柱を立てていく。響がそれを見て口笛を吹くころ、暁の目は海面すれすれ極低空で何かが光ったのを見ていた。あれは――。

「司令官、遅かったじゃない！」

——航暉の十八番、極低空水平爆撃。

《迷惑かけたな、後は任せろ》

いつもよりも苦みの強い声が響くと同時、極低空で編隊を組んだ爆撃機が暁たちの頭上を飛び抜ける。黄色線一本、赤城艦載機、彗星一二型甲。

いくつもの爆弾が投下され、そのほぼすべてがレ級に吸い込まれた。これまでで最大の爆炎が上がる。断末魔が響けばそれに追い打ちをかけるような雷撃が届く。

「これぐらいで大丈夫かしらー?」

龍田が笑顔で近づいてくる。最後の魚雷は彼女のものだったらしい。

「これで残り一隻、相手のボスだけね〜」

のほほんという龍田の目線の先には高速で海を駈ける巨大な鉄の船が浮かんでいた。

「——楽シイ海二ハ、何方必要?」

上空を眺めて北方棲姫が呟いた。目の前では艦載機が飛び交っている。深海棲艦同士の演習戦のようだが実弾が飛び交っている。

「私ハ戦ウコトシカ知ラナイ。ソレデモ、戦ワナイ海ヲ見ルコトハデ

キル？」

これは楽しい海とは言わないのだろう。誰かを殺し、誰かに殺される海を、必要のない殺傷が溢れる海を、きつと楽しいとは言わない。

「仲間ヲ傷ツケル、カ……」

頭に浮かぶのは北方にいた時の仲間だった、ルナ、ソル、ラジエンドラ……消えてしまった仲間を想い浮かべる。

「ソレデモ、私ハ約束シタカラ、楽シイ海ヲ作ルツテ約束シタカラ」

「後悔はないの？」

後ろからかかった声に北方棲姫は頷いた。

「大丈夫。私ハ電トイツシヨニ楽シイ海ヲ作ル。ソウ決メタ」

振り返ればそこにはグレーアッシュの髪を揺らす少女が立っていた。

「ユウバリ、来ルヨ」

「ええ、悪いけど……潰させてもらうわね」

夕張の背負った艦装が一気に駆動する。夕張の身長を優に超える砲が振り出される。腕だけでは保持できない重量の砲は艦装マウントに乗せられ、それから伸びるコードは彼女たちのいる甲板に吸い込まれていた。馬鹿デカい弾倉が差し込まれロックされる。

「こちら夕張、水晶宮、砲撃用意完了。敵艦“クラリフィス”をレーダーで捕捉したわ」

《了解だ夕張嬢、深深度リンク用意、潜るぞ》

杉田の声が無線越しに響く。視界の倍率が上がっていく。遠くに見えていたレ級の顔が大写しになる。

《OIGAMIIへの電力供給開始》

管制装置が起動し、その緊張に心拍が僅かに上がる。狂ったようにここを目指すレ級を見て夕張は僅かに息をのんだ。

「Clarifice, Lus xeklasse
ei」

北方棲姫はつぶやくようにそう言った。夕張には彼女が何を言ったのかはわからなかった。管制装置正常起動、OIGAMII／RDY

「Clariffice、楽シイ海デ、今度ハ——」

《夕張、レコメンドファイア》

砲撃指示。夕張が引き金を引いた。

強烈な反動を無理矢理踏ん張って耐える。爆風が夕張の髪をなびかせる。砲門からプラズマ化した飛翔物^{プロジェクタイル}の残滓がこぼれだし、高温で発光する帯を残して強烈な加速度を持ったタンングステンの榴弾が正確にレ級を飲み込んだ。

O I G A M I — I I ——— ウェーク島で作られたレールガン方式の榴弾砲の強化モデル。電磁誘導によって弾き出されるプロジェクタイル、あまりの高圧により発生したプラズマの急速な膨張すら加速度とできるように綿密に磁場を操作することにより超高速で砲弾を弾き出す精密部品の集合体。言うならばレールガンとサーマルガンの合いの子のようなものといえる。

プラズマのまばゆい光が霧散する頃には放熱フィンが開き、電導路の冷却を行う。次弾装填作業も並行して行われる。その間にもあまりの高温に瞬時に蒸発した海水を埋めようと、海が泡立っているのが見える。

《———— 第二射、ファイア》

強烈な閃光が走って行く。強力な電磁波が体を焼くような感覚が走る。その感覚すら平常に感じるほどに体は刺激に慣れきつていた。

「———— ふっ」

止めていた息を吐く。視界の先には文字通り掻き消えたレ級の残滓だけが漂っていた。

「———— クリア。残存兵力は航空戦力のみよ。杉田大佐、実戦使用の感想聞かせてくれるかしら？」

《制御がピーキー過ぎるな、これ》

「32キロ先0.5メートル単位で合わせる杉田大佐がそれを言うの？」

《安全領域の弾を打ち出すのと、いつプラズマが暴発するかわからない物を飛ばすのだと使う神経が違う》

そう言った杉田が無線を切った。

「……コレデ、私ハモウ深キモノニハ戻レナイ。『ハンパモノ』ニナツタ」

夕張がシステムを待機モードに変更しているとそう囁くような声が聞こえた。

「やっぱりつらいかしら？」

二発分軽くなったマガジンを手に夕張はそう聞いた。

「私ハコレデ艦娘デモ深海棲艦デモナクナツタ。私ハコレデ一人ボツチダ」

「……それはいい気付きだと思っわ」

夕張はそう言って僅かに俯いた。

「一人ぼっちって知っていれば、誰だって許せるし、なんとかなるものよ」

O I G A M I I I を格納状態にして夕張は続ける。

「みんなそうよ。電ちゃんやレーベちゃんだっけきつと誰にも話せない一人ぼっちな気持ちを持つてる。でもその寂しさを直視できない。だから誰かを継る」

夕張はそう言って笑った。

「だからみんながいるんだよ。一人ぼっちだから『みんな』がいるんだよ」

私はね、と夕張。

「夕張型は私一隻だけだから、友達がいなくなるんじゃないかとか、いろいろ不安だったのよ。その時はつらかったわよ？」

泣きそうな顔をしている北方棲姫の頭を撫でて夕張はしゃがんで視線を合わせた。重そうな艤装が揺れる。

「でも、不安なのはみんなそうだったわ。違う不安や、違う寂しきや、違う怖さを抱えてたの。誰にも話せないまま、ね。それを話せることにはすごく勇気が必要だし、誰にも分ってもらえないんじゃないかって思っ一人ぼっちになっていく。でも自分が一人だっけわかってしまえば案外開き直れる」

夕張の瞳が細められ、その笑みはどこか明るく見えた。

「だから、大丈夫！ みんな一人ぼっちだったし、一人ぼっちよ。この部隊のみんなはそれをわかってる。だからみんなあなたを見捨てたりしないわ」

ぎゅつと彼女を抱きしめる。

「改めてようこそ、私達の部隊、JIPARS Group 50 第50太平洋即応打撃群へ」

夕張の声にヒメの顔がクシャッと歪んだ。幼い嗚咽が漏れる。嗚咽は泣き声に変わり、海に吸い込まれていく。

「……よかった」

それを甲板の影で聞いていたレーベがほつと息をつく。

「今回はうまく進んだみたいだね」

「……ワタライ大佐」

「ヒメを外に出したのは、レーベ君だよね？」

戦闘用の作業服を着たままの渡井大佐が笑ったままレーベの隣に立つ。船橋の壁に寄りかかりちらりと横目で彼女を見る。

「……僕の罰則はどうなるのかな？ 解体？ 謹慎処分？ それとも、ドイツ本国への強制送還かな？」

「知らないが、ドイツからの中将からのお小言ぐらいで済むんじゃないかな？ 公式には口頭での注意ぐらいで収まると思うよ？」

太陽が昇って吹き付ける風はどこか湿っていて、今日も暑くなりそうな気配を隠していた。それに短めに切りそろえた黒髪を僅かになびかせて彼は笑う。

「驚かなくてもいいよ。一応、ヒメの戦力化に貢献したわけだし、月刀航暉は御咎めなしで済ませるだろうしね。まあ僕が関与することではないんだけどさ」

北方棲姫の声を聞きながら渡井は落下防止の柵による、帰還してくる艦娘たちの列が見えていた。

「とりあえずは祝おうじゃない。とりあえずの危機が去ったことだよ」

彼が手を大きく振った。電たち即応打撃群本隊の帰還だった。

「そんなに医務室がお好きですか？ 月刀准将？」
「好きでこんなところに来るか？」

電腦保護のためのアダプタを噛まされた月刀が不機嫌そうに言う。
輸送艦“とわだ”の医務室で溜息をついたのはこの主、六波羅夏海大尉だ。

「ウェークのころから毎度毎度……何度無茶をすれば気が済むんですか？ いいですか、QRSプラグの配線は骨髄のすぐ近くを経由してるんです。今回のシヨートの仕方を見ると下半身不随になってもおかしくなかったんですよ？」

「それでもちやんとこなしたきてだろ」

「横須賀で入院確定ですけどね。軍用電腦の維持にいくら税金が投入されていると思ってるんですか、まったく」

「ポケットマネーでカバーしてるから問題ない」

「そんなやり取りをしてジャケツトを羽織り直した航暉が立ち上がる。」

「使えるのは自前の脳だけなのわかってるわね？」

「ああ」

「そう」

医務長はそう言って笑った。

「医師としてはここに拘束しときたいところだけど、そうもいかないんでしよう？」

「ああ、やらなきゃいけないことが残ってる」

「そう」

それ以上は会話もなく航暉は医務室を出た。

「加賀」

「はい」

外で待機していたのは丈の短い青い袴を着た女性だった。

「入渠系列の情報を口頭でお願いできるか？」

「わかりました。……とわだ入渠施設にて電、睦月、金剛が入渠中、電の入渠にはあと5時間ほどかかる模様です。カナリア鎮守府の入渠施設では敷波、比叡、伊58、U-511が入渠中です。ですが……」

「どうした」

「U-511の艀装システムに深刻な破損が発生しているという報告があります」

「……解決方法は？」

「今渡井大佐が嬉々として『事前に用意していた』改装プランを提出、認可が下り次第改装が実施されます」

「あの変態技術屋の面目躍如か……どうなるかめちやくちや怖いんだが。あとは？」

「入渠待ちですが、金剛のあとに赤城が、暁と川内がそれぞれ敷波、睦月入渠終了後に続けて行うことになっています、以上です」

「軽いとはいえ自分の分を抜くなよ、加賀」

「……目ざといですね」

加賀がどこか苦い表情を浮かべた。右腕を庇うような動作を航暉は見抜いていたらしい。

「これでも軍人だ。『義体の壊れ方』は嫌って言うほど見てきた」

航暉はそう言つて甲板へ向かう。舷側同士を重ねるようにして止められた駆逐艦『あすか』を見下ろす位置にくる。

「——モーセは神に言った『私がイスラエルの人々の所へ行つて、彼らにへあなた方の先祖の神が、私をあなた方の所へ使わされました』と言う時、彼らがへその名はなんというのですか」と私に聞くならば、なんと答えましようか」

「聖書を誦んじる趣味でもありましたか？」

加賀がそう聞くと航暉はどこか寂しげに笑つた。

「たまには古典を顧みるのもいいものさ。……さっきの問いに神はモーセにこう答えたそうだ。——『我は我である』」

とわだの乾舷はあすかのそれよりもだいぶ高く、僅かに見下ろすようになる。三胴船トリマランの特性をフルに生かしたヘリパッドにはほぼ初の

実戦投入で修復不能寸前まで酷使されたテイルトローターが鎮座していた。

「よくできた回答だと思わないか？……アイ・エル・アイ。その真意を知ることが人間にはできないだろうといアイ・エル・アイわれている文面だ。『わたしは有って有る者』、『わたしは自分になるところのものとなる』、訳にはいろいろあるが、解釈によってかなり意味が変わる。神の不変の権力を示す説、神に付された絶対的自由意思を示す説、人間であるモーセに存在を明かさないために用いたという説、まあ、いろいろ解釈があるわけだ」

「それで、提督の考えは？」

「……神ですら、我を我としか定義できなかつたんじゃないかとか思うけれど、こんなことを言うとう世界中の宗教家を敵に回すだろうな」
落下防止の策に右手を置いた、義手となつた機械の右手だ。

「物事の解決法として、俺は暴力ばかり用いてきた人間だ。神とやらは、そんな人間には自らの解釈すら授けてはくれないらしい」

「……そうですか」

「そんな人間が世界の希望とやらを背負つて戦うことになつている。少女を使役して、世界を救う。神ですら手を出さないことに手を出せというつもりらしい。——その全能感に、狂いそうになる」
夕日がすでに迫つてきている。海の色はだんだんとモノクロームに向けて色素を薄くしているようだった。

「星影たちに会つて、少し目が覚めたよ。……どこか自惚れていた。居心地のよい仲間を頼りすぎていた。その結果として、部隊の皆を危険にさらした」

指揮官として失格だよな、と航暉は呟くように言った。

「……電たちには言うなよ」

「はい」

加賀は即答し、躊躇うように間をあけてから、ですが、と前置いた。
「……私はそうだと思います」

加賀が目を細め、俯いた。

「貴方でなければ司令部含め、部隊をまとめ上げることはできないと

判断します。自惚れている人間は准将という階級につく前に淘汰されていくはずよ。貴方の階級と金色の司令長官飾緒はそれだけの実力があることを示している。断言してもいいけれど、この部隊にそれを疑う人はいないわ」

「だからこそ崩れそうになるのさ。自分の一言で味方を戦場に駆り出し、世界の命運とやらの賞金のために皆の命を掛け金とする。それが俺たちの仕事だ。それが怖くなる」

「それは当然のことでしょう。——勇氣とは、恐怖に対する抵抗であり、恐怖を克服することで、恐怖を忘れてしまうことではないそうです」

「……トウエインか」

「恐怖するからこそ、人は勇敢になる。恐れを知るからこそ、人は慎重になる。背反しているようではないと思います。そのどちらも持つ貴方だからこそ、我々についていく」

加賀の濃紺の瞳が金色を帯びた夕陽を映す。

「神様は手を出さない。いくら嘆いても叫んでも、手を差し伸べてくれることはありませんでした。ならば実際に手を差し伸べることができる人間を信じた方がよっぽど生産的で、合理的というもの。信じたい人を信じるわ」

加賀の言葉に航暉はそうか、と返すだけだった。

「私達の考えは貴方にとって重いかもしれない。それでも今更私達は貴方を信じることを止めることができないわ。とくにウエークからずっと信じて付いて来ている子たちはそうでしょう。……信じることを許してくださいますか？」

航暉は小さく頷いてあすかへ向けて足を踏み出した。加賀はとわだの入渠施設を使うために残ることになっている。

「……案外ロマンチックなですね」

「赤城さん……いつから聞いてましたか」

「出エジプト記の引用のあたりから……かしら？」

「ほぼ全部ですね」

盗み聞く気はなかったのですが、と笑って赤城が丈の短い赤い袴を

揺らして現れる。左肩の上衣が敗れているのが少々痛々しい。

「提督はの力になれないのでしょうかね……」

「赤城さんはしつかりできていたと思うけれど。あのノイズの多い状況で深深度リンクを維持し続けるなんてそうそうできることではないわ」

「すごいのは提督よ。あの状況で相手の砲火を見切り、高度3メートルなんて一瞬で波に突っ込みかねない高度を維持し続けることができる。……文字通り命を削る覚悟で指揮をしている。それに応える義務が、私達艦娘にはあります。絶対に生きて帰ってくることでそれに応える義務があります」

「ええ……」

「提督が我々を率いる限り、我々は提督の矛として、また盾として洋上に健在でなければならぬ。……そのむずかしさを痛感しました」
「そうね」

赤城が笑う。

「それでも、提督と私達なら出来ると思ってるんですよ。電ちゃんという優しい旗艦と私達なら」

「……私も疑ったことはありませんよ」

加賀が優しく微笑んだ。

「みんな優秀な子たちですから」

「それで、答えは出たのかい？」

入渠と引継ぎが終わり（というより仕事は加賀がほぼ全部終わらせていたのだが）、電はカナリア鎮守府の面々に一通りの報告と情報開示を行っていた。型どおりといつては型どおりの報告だったがそれを風風はにこやかに、星影は仏頂面で聞いていた。報告が終わって退出する時に風風が声をかけた。

「実際に君の被弾でガトーは今回死にかけた訳だけど、それでも君は戦い続けるのかな、電ちゃん」

「……答えなんてそもそももあるわけないのです」

風風の問いに電は背筋をしゃんと伸ばす。

「司令官さんは踏ん切りをつけられずにいます。それでも、司令官さんは司令官さんです。私達にはそれを支えるしかできない。でも逆を言えば支えることはできるのです」

カナリア鎮守府の司令官室の椅子に座る星影は黙って風風と電の会話の行く先を聞いていた。

「名前を捨てて、過去も捨てて、それでも司令官さんは捨てきれずにいるのです。割り切れるものでもないし、割り切ってもいけないものもある、それを司令官さんはわかっているからこそ、悩んでいても前に進もうとする。それを支えるのは私の仕事です。第50太平洋即応打撃群旗艦、電としての仕事であり、いなづまとしての役割なのです」

「……要はこれからもガトーのそばにいるつもりってわけだね？」

「はい」

電は即答。それを聞いて風風は肩を揺らした。

「そうかい、そうかい。……ならガトーに殺されないように、殺さないように気を付けたほうがいい。なんだかんだでガトーは気性が荒い」

「『月刀航暉』なのです。風風少佐」

そう言われて風風が肩を竦めた。

「俺たちにとってはガトーはガトーさ、だから」
「ウオン」

星影の声に凧風が黙る。

「また嫉妬か、みつともねえ」

机に肘をついた甚平姿の男がそう言う。星影は机の前で手を組むと電を睨むように見た。

「テメエがどうする気かはどうでもいい。ただ、テメエよりも長くアレのそばにいた奴」として、ひとつ警告をしておく。——この先もアレのそばにいる気なら、誰かを殺す覚悟をすることだ」

「——どういう意味なのです？」

「アレも俺たちも同じ穴の貉さ。暴力の世界を生き抜くための能力を得る過程で人を捨てた。そうでなければ生き残れない。罪の意識を捨て、狼として生きていくことを選ぶしかなかった。そういう世界で生きてきた男だ。今は優しいかもしれないが、いつか彼の暴力性が表面化するだろう。必要ならば誰かを殺せるように教え込まれた。それが俺たち特殊殲滅部隊の人間だ」

そう言った星影の眼はいつよりも真剣で。

「我々は狼の皮を被った人間ではなく、人の皮を被った狼である。そう言われて過ぎてきた。異端であることを知るからこそ、普遍の中に紛れ込むことができた。そういう人間だ。人間を捨てた化け物を後生大事に守っていく気か？ アレはそれを拒むだろう」

「それでも、なのです。司令官さんの気持ちなんて知らないのです。守りたいから守る、いなづまもそうやって守られてきたのです」

一瞬驚いたような顔を見せた凧風に電はわずかに目を細め笑った。目の奥には「彼」の姿やずっと守ってくれた「彼女」の姿が映る。

「守り守られ、そうやって私達は前に進むのです。司令官さんは私達に痛みを背負うことを許してくれないけれど、それでも同じ景色を見ることが出来る。そこに向けて私の意思で進むのです」

「……あつそ」

ぶつきらぼうに言って星影少佐はデスクの引き出しを開けた。

「自分の意思というものは厄介だ。テメエもそれをわかった上で進め」

電の方に何か投げられる。それをキャッチした電はそれをまじ

まじと見る。黒い立方体のような外部記憶装置。インフォメーション・キューブ

「テメエのご主人様に渡しておけ、テメエにも関係あることだが、見ない方が身のためだ。素直に渡しておけ」

そう言われて電はスカートのポケットにそっとしまった。

「……では」

電は敬礼を送り、踵を返した。

「……電特務官」

名前を呼ばれ、足を止める。

「月刀准将に言伝を頼む」

振り返る。そこには小さく笑った星影の姿があった。

「……名前、覚える気はなかったんじゃないのです?」

「ガキの名前なんざ覚える気はないがな。それよりも言伝を頼みたいが、記憶力はいい方か?」

「なのです」

「なら頼むぞ——」
犬の子が動き出した、緋色の髪を失うことのない様に——以上だ」

「……どういう意味なのです?」

「自分で考えな。月刀准将はこれで伝わるはずだ」

退出していい、と言われ電は敬礼。星影がラフに敬礼を返した。――

——そのことに、僅かに驚く。そして電は扉を開けた。

「……よかったの? 教えちゃってさ」

「情に流されるつもりはないが、見捨てる必要もねえだろうな」

あと聞き耳立ててるやつに失礼だろ。という隣部屋の壁の向こうでガタン! と音がした。

「きくちゃんか」

「電を結構気に入っていたらしいしな」

それを聞いた風風がどこか寂しそうな笑みを浮かべた。

「——年年歳歳花相似 歳歳年年人不同 変わったな、ステラ」

「いや、変わりなどしねえよ。人も何も変わらない。ただ時が移ろうだけだ。身の振り方は変わったとしてもそれ以上の何かが変わるわ

「けじゃねえ」

「なんだかんだ世話焼きなところとか？」

「るせえ」

どこか不機嫌そうな星影を見て凧風が笑った。

「まあ、ガトーたちはガトーたちでなんとかしてもらおうしかない。もう関係ないところだけど、不幸になれとも願う必要もないしね」

凧風の声にどう答えたものかと悩んでいるとドアがノックされた。菊月のものだろう。

おそらくもうすぐ、ここの日常が戻ってくるのだろう。

「ま、幸多からんことを、かな？ 菊ちゃんでしょ？ 入っておいで」

「よーし！ できた！ ゆーちゃんこれ着てみて！」

「え……これ本当に着るの？」

「まあ大丈夫だからさ！ ほらー！」

押しが弱いことをいいことに無理矢理押し付けて渡井はそう言う。

傍から見たら……というより内情を知っていてもただの変態である。

「……なんだかこの光景懐かしい気がするでち」

「なんだかんだで慣らされたよねー、私達」

「新しい仲間が来るたびにこれだったせいでなれたのね！」

伊58と伊401、伊19の視線の先には、世にいうスクール水着

をいきなり押し付けられ呆然としているU—511の姿があった。「着替えにくいよね! じゃー!」と鼻息荒いまま出ていった第一種軍装の大佐を見送る姿もどこか力がない。

「……信じて送り出したU—ボートが初戦で大破して日本式に魔改造、送り出した向こうの提督が見たらなんていうかしらね……」

伊168がそう言うとその横でU—511と同郷のレーベが苦笑いを浮かべた。

「いきなりワタライ大佐に『君の服が欲しい!』って言われたときはどんな顔をしたらいいかわからなかったよ」

「笑えばいいと思うでち」

伊58の声にレーベは乾いた笑みを浮かべた。

「うー……これほんとに着るの……?」

「ほら大丈夫よ。着てみると案外快適よ?」

伊168に言われ、それでもどこか抵抗のあるU—511に伊58が寄っていく。

「ほら、これでみんなお揃いでち」

「……でっちとお揃い?」

「でっちじゃないでち! ゴーヤでち!」

なぜか怒る伊58にU—511を覗く潜水艦ズが噴き出した。

「いや、でっちの方が呼びやすいのね!」

「でっち……丁稚?」

「給料なしでオリョール……プププ」

「その伊号3人組、後で覚えておくと良いでち」

賑やかな日本組に、ドイツ艦二人は置いてきぼりだ。それでもU—511はくすりと笑った。

「……形から入るのも、あり……かな?」

「いいと思うよ」

レーベがそっと寄り添った。その顔には笑みがある。

「仲良く……なりたかったんだよね」

頷くU—511。それを見てレーベがさらに笑みを深くした。

「Freundschaft ist des Lebens Sal

「Z…だよ」

「——うん」

手の中にあるその服をぎゅっと握ってU—511が笑った。

なお、ドイツ本国からは「もはやこれはU—ボートとは呼ばない」というどこかお怒りのビデオメッセージが届き、ひと悶着あつた末にU—511が呂500と登録変更されるまであと10日である。

「……そうか」

彼は力を抜いてどっかりと背もたれに背を預けた。暗い部屋のデスクには「極東方面隊西部太平洋第一作戦群副司令長官」と長ったらしい役職が示してある。

「“北の方”がこちらについたか」

手元の電子ペーパーに羅列される文字列。それを斜め読みしてそれを頭の中で反芻する。彼女は「使える」だろうか？

「……火中の栗は誰かが拾わねばならない。なら、好んで掴んでくれる人に取りらせるのが吉か」

「提督？ 何か言った？」

秘書官を務める少女ににこやかに笑って彼はなんでもないと否定する。

「さて、仕事も一通り終わった。……瑞鶴、飯にしよう」

「やたっ！ 翔鶴姉も呼んでいい？」

「もちろん」

「もちろん提督持ちだよな？」

曖昧な笑みでごまかし席を立つ彼の肩に光るのは少将の階級章。艦隊の副官を示す銀の飾緒が揺れた。

「先に翔鶴をよんでおいで」

「わかった、お言葉に甘えさせてもらうね」

4月とはいえ夜は少々冷え込む。薄手の武骨な紺のトレンチコート——本当ならもつといいモノを着たいところだが、軍敷地内では将校用のものを着なければならぬ規則だ——を羽織った。そのまま外に出ればちようど上ったばかりの月が見えた。

「期待してるよ。月刀准将」

月に背を向けるようにして、彼は部下の艦娘の元へと足を速めた。

P R E Q U E L 0 5 I , m N o t I n L
o v e ——— 正義と罪と罰

高峰は小さくため息をついた。首の後ろに差し込んでいたQRSプラグのノイズが気になった。

「高峰さん」

「……青葉か」

そう言つて振り返れば青葉が独特な色をした髪を揺らして立っていた。手元にはマグカップが二つ。

「どうしてコーヒーミル式なんですかね、この船。青葉、一杯分だけ欲しかったのに挽きすぎちゃいました」

「で、俺の分も入れてくれた訳だ。いただいても？」

「一緒に飲みましょうよ」

青葉から熱いブラツクのコーヒーを受けとり小さく笑つた。その彼を見て青葉も笑う。

「……透明人間、か」

「え？」

高峰の眩きに青葉が驚いた表情を浮かべた。

「いや、昔のことを想いだしていただけだ」

「昔……というと外交官時代のことですか？」

「まあ、な」

そう言つた高峰の顔はどこか苦しそうだった。

「……話聞きますよ？」

「いや、いいよ」

むう、気になるじゃないですか、と頬を膨らませる青葉に高峰は肩を揺らした。

「すまん、誰かに話せるようなことでもないんだ」

あの時の行動が正しかったか、高峰にはまだ判断がつかなかった。

「時間だ」

端的に告げられた一言が彼を現実に引き戻す。

「ああ……今日はどこだったかな？」

「セクションD4、セクトの奴らの本拠地になってるってタレコミのあった場所だ。昨日のブリーフィング忘れたのか？」

「毎日毎日ライフル握ってちゃあ、どれがいつのブリーフィングか忘れちゃうよ」

横に置いたケースからH&K社製G28E2カスタムを取り上げた。艶消しの黒のそれを抱えるように持ってゆつくりと立ちあがった。

「行けるのか、杉田」

「行くしかねえだろ。俺にはもう、この道しかねえんだ」

市街地迷彩の濃いグレーのキャップを被り背中側に吊ったヒップホルスタを確かめる。

「あんたこそいいの水内^{みない}、こんな半端モノと組むことを強制するつもりはないんだぜ？」

「あんたのスポットターが務まるやつがどれだけいると思ってるんだよ。それに、肌の色で人を見る趣味はないしな」

「ここの所2週間、ずっと行動を共にしてきた相棒^{バディ}が疲れ切った笑みを浮かべた。

「さあ、いこうか。今日も合法的な人殺しの時間だ」

彼——日本国自衛陸軍第一師団第一偵察隊第二小隊所属、杉田勝也二等陸曹は深呼吸を一度すると、マフラーを巻いて隠した褐色の肌をさらに覆うように外套の襟を立てて歩き出した。

彼のことを人は『同属殺し』と呼んでいる。

「高峰君、緊急事態だ。仙台に飛べ」

スーツ姿の上司にそう言われ、高峰は顔を上げた。上司が命令書を挟んだフリックボードを滑らせた。それを受けとりざつと目を通す。データで渡してこないということは、万が一こちらが誰かに捕まった場合に電脳を覗かれるとまずい事態になる”ということだろう。彼にとつては”おきまりの”仕事だった。

「ロドリエーゴ・E・イルデフォンソは知っているな？」

「イルデフォンソ……イルデフォンソ……フィリピン第6共和政権、内務大臣の親族であつてますか？」

「息子だ。あと追加で一つ。フィリピン国防軍を抜けた後、人権活動家として東南アジアで活動中」

高峰が眉を顰めると上司は僅かに笑った。

「……日本に？」

「在日外国人排斥運動に抵抗する過激派亜流セクトによる報復戦に参加中らしい。写真も上がってきた」

フリックボードの紙を一枚めくれば褐色の肌の男が写っていた。軽くやせ気味の男、目元の傷を隠すように目深に被った男の映像だ。

「所属しているセクト『NNN』に対しての討伐が行われることが確定した。お前は陸軍からイルデフォンソを逃がせ。可能ならば国外まで送り出せ」

「……装備D2と部下7名の使用許可を」

「許可する。飛べ」

すでに用意されていた武器の持ち出し書類や航空機の手配書に目を通すと立ち上がる。いつも通りの非公式作戦。サインは必要ない。

「期待してるよ、高峰君」

高峰春斗二等審議官、人は彼のことを『混血』と呼んだ。

仙台市の中心部。気温はマイナス1、2度、2月の昼間としては僅かに低い程度だろう。それでも杉田達スナイパーにとってはキツイ条件だった。体を動かすわけにはいかない狙撃手という立場上そういうものだとわかっているが、生身の体ではかなり堪える。ビルの中というようなくらい雪が直接下りてこない場所で張ってたとしても辛いのだ。特に今二人がいるスペースは普段人が立ち入らないところだから居住性なんて無いに等しい。対象のビルの交差点を挟んで向かい、7階建てガラス張りのビルの階と階の間のスペースで這いつくばっているのだから。

『霜焼けとかになんないの？ 義脚との接続部って』

『なんねえよ。錬金術師の出てくる漫画じゃあるまいし。金属パーツ

はそもそも通常なら外に出ないようできてる。人工筋肉とスキン
様^{スボッター}さ」

観測手を務める水内がからかうような言葉がかかった。それを杉
田はピクリともせずを受け止める。首の後ろから伸びるケーブルは
口を開かなくても会話ができるから便利だ。特に敵地で通信電波を
傍受されたくない時などは有用性が高い。

『それで、どう思う？』

『クロだろう』

『だよな』

杉田が即答すると水内は笑った。ライフルを構えたまま無線を続
ける。

『狙撃対策万全だ。良く偽装された映像カーテンを中和したところで
普通のカーテンが塞いでる。それもおそらく防音仕上げだ』

タワー式駐車場と一体になった商業ビル、データを信じるならばこ
こは地下一階地上5階の商業ビルだったはずだ。文字通りの激戦区
からわずかに離れているだけあつて見かけは十分きれいだ。

『だが、ずっと監視カメラが回っていたし、周囲のIRシステムには何
も映ってなかった』

水内がそう言うが杉田は黙っていた。

『相手の武器は即製爆弾^Iからステインガーまで。圧力鍋爆弾みたいな
のは別としても使うにはかなりの設備がいる。それを誰にも見つか
らずに市街地に運び込むのは限りなく難しいし、出入りすればカメラ
や、出入り口の危険物探知機にひっかかる。タワーパーキングから出
し入れするにしても、普通車ぐらいしか使えない』

まあそれでも自動車爆弾とかのストックに使われると厄介だけど
な。などと軽く言う水内の横でずっとスコープを覗き込み続ける杉
田。彼はその言い分を聞いていた。

『本当にどこから武器を持ち込んだんだらうな、……つと』

眼下の通りを自動車が曲がってきた。もちろんスポッターがそれ
を映像で確認し、リストを参照し、危険人物かどうか確認をしている。

『この路面状況であんな高級車乗って、傷つくぞあれ』

水内がそうぼやいた。

『男性一名、武器確認できず、リスト登録なし、低強度対象だ。撃つなよ』

『了解』

杉田はそう言うのと引金から指を離した。車を追うことを止めると、その黒い車はスコープから瞬く間に飛び出し、地面の四角いマンホールを映すだけになった。交差点を抜けた車の音だけが響く。

『……マンホール』

え？ と水内が声を出した。

『何がだ？』

今度は通信、顔からして声に出したことを一瞬悔いたらしい。

『マンホールだよ。さっきの答えだ』

『おいおい、上下水道を使って武器運んでるとか言う気か？ パリじゃあるまいし、ここ下水道はそうそう人が抜けていけるもんじゃないぞ』

『用水は？』

『……なんだと？』

『四角いマンホール、あれは水道用のものじゃない。暗渠部などの河川管理に使う通用口なんじゃないのか？』

『まさか……』

『急いで確認だ。テロの事件のあった場所の位置関係と地下土地利用図を照らしあわせろ』

「Ikawang ni Rodrigo E Ildefonso?」

タガログ語で呼びかけると褐色の肌の男が急に振り返った。周りを取り囲んでいた男たちが激烈に反応するが、それよりも早く、短機関銃を持った部下が部屋に入り、抑え込んだ。

「き、貴様ら政府軍か!?!」

「政府関係者だけが共通項だな。ロドリエーゴ・イルデフォンソ、貴方にはここから脱出してもらう」

「なにを勝手なことを……」

背中から取回した粗雑な拳銃を振り回そうとするその手を消音器サフレッサ付きの短機関銃から放たれた亜音速弾サブソニックが貫いた。

「あ、があああああああ!」

「我々は君たちを殺すつもりはない。抵抗しない限りはね」

まだ若い青年がそう言った。トレンチコートを着こんだ彼はイルデフォンソに向って厳しい目を向けた。

「大臣の息子が出歩いていい場所じゃないんだよ、ここは」

彼がそういうとイルデフォンソは露骨に嫌な顔をした。彼の取り巻きが一瞬呆けたような顔をした。

「話してなかったんだな。フィリピン第六共和政権現役内務大臣アルテミオ・Y・イルデフォンソの息子、ロドリエーゴ君?」

「……私より年下だろう、侵入者」

「自国民を守るならもっといい方法があるだろう。それを選ばず、暴力でしか抵抗できない君よりは人生経験を積んでると思うけどね」

そう言う彼は冷めた目のまま笑った。

「……それに君がここにいと君の国にとっても不利益になりうる。内紛の火種を抱えたフィリピンで今の安定した政権が崩れた後、何が起こるかわからない君ではあるまい。その最後の引金に君がなる可能性がある。その可能性を我々は掴みにきた」

「……同志を捨て置けと?」

「場合によっては刑務所になるかもしれないし、強制送還になるかもしれないが、そこは警察の領分だ。我々は関与しない」

「それで私を——」

「勘違いしているようだが」

彼の顔から笑みが消える。

「これは交渉でも勧告でもない。ただの事務連絡であり、伝達だ。君に交渉権はない」

そう言った瞬間にトレンチコートの男の姿が掻き消えた。取り巻きの男たちの顔が驚愕に変わる。直後、見えない手にひねり上げられるようにイルデフォンソの腕が背中に回り、捻じれる。

「D i a b l o !」

叫び声が響く。中心格だったイルデフォンソがいきなり透明人間に襲われたことで取り巻きが銃を持ち出したからだ。銃を手にしたもののから地面に倒れていく。イルデフォンソの首の後ろに大振りな電脳錠を噛ませた高峰が姿を現す頃には地面に倒れ込んで呻く人影で一杯になっていた。

「……審議官、どうします?」

「対象は確保した。離脱するぞ」

「了解」

小さくそう言って高峰は下がる。その直後、発砲音が響いた。ガラスが割れる音が先に響いたからかなり距離が離れている。

「……45口径ですかね?」

「おそらくはな、ホロハックと電脳侵入キーの偽装がばれたかね。急ぐぞ。陸軍部隊が突入する前に離脱だ」

高峰はそう言ってイルデフォンソを担ぐようにして前に進む。もう一度銃声。

「……地下から先に脱出を」

「高峰審議官?」

窓の外を見れば遠くにヘリが寄ってきていた。マガジンを交換して笑う。

「少しだけ用事だ。先に出てろ、ルート37。符号の確認を忘れるな」

高峰が手に持った短機関銃のチェンバーを引いた。

「案の定クロカ」

上空のヘリコプターからの突入をサポートして杉田はライフルのスコープから一瞬視線を外した。雪が僅かに積もる屋上でG28のスチールのハンドガードを握り直す。

「案の定ステインガーのバーゲンセールだったな。捕捉からのラグは3秒半。毎度毎度良く当ててる」

「マークスマンの距離だからな、当てなきゃ話にならないだろう」
そう言って杉田は伏せ射の姿勢を解き、直後に飛び退いた。

「水内！」

観測手の足にナイフのような刃物が刺さる————薄刃のスロージングナイフ。呻き声押し殺す水内。その時の方向を「見る」。看板の足場が光るだけだ。

「————光学迷彩か」

虚空を割るように飛び出してくるナイフをギリギリで躲しその方向に送り込むのは50口径のマグナム弾、重い銃声が響くと同時に足跡がもう一対、雪の積もる屋上においてくる。同時に飛び出してきたスロージングナイフが首元に巻いていたマフラーを引き裂いた。

「おおーおおー、危ないな兄ちゃん」

「その肌……貴様も移民か？」

光学迷彩が解除された。全身タイツのような投影服はかなり場違いに映り、それを杉田の笑いを誘った。

「移民かって聞かれるとそうだなあ、母親がフィリピン人だ。それが

どうかしたか？」

「なぜ祖国の地を引きながら、この国に加担する」

その問いには答ええない。右手に持ったリボルバー……トールスレイジングブルを向けたまま黙るだけだ。

「この国が我らに何をしたのか、わからないのかっ！」

「知っているさ。俺だって排斥運動で腰から下と親父を失った」

杉田は笑って首元を戒めるシャツを緩めた。

「……何をしてる」

「今は黙ってな」

水内の方を一瞬見てそう言った杉田が自らの胸元を晒す、金属の十字架がかかったネックレスの向こう、褐色の肌に大きな弧を描くような――火傷の跡。それを見たナイフ使いが目を見開いた後歯を食いしばる。

「これが何を示すかわかるだろう？」

「……だったら尚更だ！ なぜネックレスを刻まれてまで隷属する！

なぜ虐げられている仲間を撃ち殺す！」

「それしかできないからさ」

ピタリと照準を構えたままの杉田はどこか自嘲するように嗤った。

「親父はネックレスで殺された。皮肉なもんだよな。ここは南アフリカでもなんでもない。元は白人側についた黒人の裏切り者を処罰するためのリンチだったらしいが、それで人種差別解放のためにと願った白人への見せしめとなった」

彼は笑みを崩さない。しんしんと降る雪はその合間を埋めていく。

「同じ構図で親父は殺された。反日の裏切り者、非国民としてね。俺もそうなるどころだった。実際これを刻まれた訳だしな。まあ俺の場合、テカすぎたタイヤが功を奏したわけだけど」

胸元を左手で指さしながら笑った。

「その時のやつらは今でも死ぬほど憎いさ。下の弟妹も酷いことされたから、それも合わせていろいろ返してやりたい気持ちもないわけじゃない。――だが、その地獄の奥底から連れ出してくれた人もまた日本人だ。そして俺にもその日本人の血が入っている」

銀の銃身に鈍色の雲が光る、二人の褐色の肌の上に静かに雪が降る。

「復讐するのは簡単だ。だがそれで誰が救われる？」

そう言つて目元をふつと弱めた。

「耐えねばなんのだよ、同朋」

杉田の声に彼は答えない。

「……誰が、救われるか……？ 死んでいった仲間の無念をどこに葬つてやればいいのかというんだ、この同朋殺しが！」

——抑制された銃声。膝をつき、崩れ落ちる身体、赤黒い何か雪を染めていく。

「——っ！ 誰が撃つた!？」

反射的に伏せた杉田、その視線の先では杉田に敵対していた男の空ろな瞳がなにも映さず転がっていた。

「水内、生きてるか!？」

「いつまで放つておかれるかと思つたが生きてるよ。——サブレッサー付きの短機関銃だ。逃したな」

水内が指さす方向には小さな点のようなものが見える。

「カーボンチューブのワイヤーだ。あれで外壁にぶら下がってたんだろう。影どころが熱源反応すら皆無。この雪の中でここまで視認率が低いとなるとおそらく飯田製造のTC7104、『隠れ蓑』、最新式だろうな」

直径一ミリあるかないかの細いワイヤーが撃ち込まれ、ビルの側面に垂れ下がっていた。ほぼ重さを返さないそのワイヤーを手取る。ワイヤーの持ち主は逃げ去つたらしい。

「……軍関係者か」

「もしくはそれに準ずる機関、だろうな。なんにせよ、文句をいうべきじゃない。あの状況ならお前は死んでた可能性があるだろう、杉田

よ」

「……助けられたかもしれないがな」

「そんなの可能性に過ぎない、兵卒に求められるのは結果だけだぜ？」

わかっているつもりなんだがな、とつぶやいて杉田は右手で十字を切った。その後警戒しつつも腰を上げる。

「戻ろう。向こうの作戦も終わったみたいだ」

そう言いながら杉田の目は足元の交差点に向いていた。四角のマンションホールが一瞬だけノイズに揺れた。

「……透明人間が」

ラツタルを滑り降りた先で出迎えた部下を見回し、高峰は撤収の指示を出した。電脳錠に加えて手枷をはめられたイルデフオンソの姿も見える。

「介入する必要が……あつたので？」

そう聞かれ高峰は笑った。

「さあな」

用水の水は彼らの靴に沁みて、刺すように冷たい。それを気にしながら長い丈のトレンチコート裾を揺らして高峰は進む。

「……介入するべきか否かは判断は俺がする。今は何も聞くな」

「わかってますとも審議官殿」

高峰の背中を守る彼はおどけたようにそう言った。

「……やはり混血の性かな」

「何かいいました？」

「いや。急ごう、帰りの飛行機は待つてはくれないだろうしな」

「勝也がキリスト教徒だったとは意外だな」

そう言われて杉田は肩を竦めた。横になつて吊りベッドがギリと抗議するようになった。駆逐艦「あすか」に設置された彼の私室、吊りベッドとデスク以外何も置けないような部屋で椅子に腰かけた武蔵に笑い返す。

「母親の影響だろうな。熱心なキリスト教徒だった」

「実はお母さんっ子だったのか？」

マザコンとか言ったら切れるぞ。と杉田。武蔵は噴き出すようにわらった。

「それにしても、そんな傷があるなんて知らなかったぞ。それに今の技術なら簡単に消せるだろうに」

「見せるもんでもないし、消したくもない」

彼にしては少々意固地な答え方に武蔵は小さく笑みを浮かべる。

「……己が己であることの証明の一つさ。そして俺が忘れちゃいけないことの一つでもある」

「私のスリガオ海峡の記憶みたいなものか」

「かもな」

それつきり会話が途切れる。船の.Spanが長い揺れが続いている。

「……なあ」

「……あのな」

二人同時に口を開いて、同時に口を噤んだ。

「……レディファースト、武蔵から言いな」

「都合の悪い時だけそう言うのか？」

「よせやい。これでも俺はフェミニストなんだ」

杉田が体を起こすと再びベッドが軋んで抗議する。彼の眼が先を促している。

「……いわなきやだめ、か？」

「言いかけた先は気になるもんさね」

珍しく視線を落とした武蔵。眼鏡に蛍光灯の光が僅かに反射した。

「……その話、他の誰かに話したことは、あるのか……?」

「肩あたりの傷なんて制服着こめば見えないさ。話すことはなかった。男の傷には触れないのが軍の暗黙の了解だったしな」

直接の答えではないがそれで十分だった。

「……そうか。安心したよ」

「なにがだ?」

「ちゃんと人間じゃないかって」

「なんだそれ」

肩で笑った杉田が武蔵を見る。その顔はどこかスッキリしたような色が見えた。

「それで、勝也が言いかけたことって何だったんだ?」

「……もう忘れたよ」

「自分は鳥なみの記憶力と言うつもりか?」

「鳥は少なくとも3歩歩く間は覚えているらしいけどな」

「鳥以下だって自慢したいか?」

それには笑って答ええない杉田。

……そんな人殺しでも、信じてくれるかなんて。口が裂けても聞けるわけがなかった。

のね

それで、しれーかんのことを聞きに来たのね。いいわ。話してあげる！

それにしてももの好きよねあなた、わざわざ私達に話聞いているの？
ふーん。

それで何を聞きに来たんだっけ？ ああそうね、最初の航海が終わったところのことだったわね。ゆーちゃんがるーちゃんになつて一気に日本に馴染みすぎてビビったところの……え？ 聞いてない？ あれは傑作だったわ。もともと日本語堪能だったんだけど、日本式の艦装に更新してからタガが外れたのかいきなり底抜けに明るくなっちゃつて……たぶんあれが素なんでしょうね。しおいとも仲いいし、ゴーヤとはもうべつたり。なんだかんだで煩そうに扱うゴーヤも本気で苛立つてないのが丸わかりで可愛いなのって。

まあそんな感じで馴染んでいったんだけど出動要請があまり出なかったのが幸いしたわね。訓練で密に交流できたし、それが大きかったと思うわ。しれーかんもQRSプラグの調整やらなんやらで病院通いが続いてたし、あまり大きく動かせなかったせいだと思うけれど。

しれーかん？ 大切な人よ。

私と電の命の恩人見たいな感じだし、私は……異性としても魅力的だと思わ。でも、もう電がべつたりだったから始まる前に終わっちゃつたみたいなき感じで生殺しだったけど。あれ？ 貴方は私達の
“出自”知ってるのかしら？——そう、まあ義理の妹、言えて妙ねそれ、説明する機会あったら今度からそれ使おうかしら？

しれーかんはきつとだれも頼れない状況にずっといたんだと思う。だから誰かを頼る前に何とかしようつてする癖がついてたのよ。だ

から……そう、誰も頼ろうとしなかった。もちろん私たちを信じてくれていたし、それを疑うつもりはないわ。それでもしれーかんからは何処か孤独の匂いを感じてた。

——それはそうよね。家族をいっぺんに失って、生き残ったしれーかんは一人、仲良くなかった本家に養子に取られた。その後からはずっと命がけの戦場で生きてきたんだもん。誰かに頼って生きてくようだと、生き残れるはずがないわよね。しれーかんはそうやって生き残ってきた。それを否定する気はないわ。

それでも、できることなら頼ってほしかった。辛いって言ってほしかった。

そう言うことはしれーかんにとってはタブーかもしれないわ。それでも話してほしいって願うのは、間違いじゃないと思う。

しれーかんって本当は世界一軍属に向いてない男だと思うのよね。妙に責任感とか強い癖に、その手段で暴力を使うことを是とできない。なのになまじ優秀なものだから、そのストレスをどこにも吐きだせないままずっと戦わなきゃいけなくなっていたわけだから。何人にもこうやって話を聞いとるとみんな言うでしょ？ しれーかんがボロボロだったって。それでもしれーかんは諦めてなかったのよね。だから全部背負っちゃった。

何人分もの死を背負って、部下の命を背負って、その上、世界の命運なんてものも背負って。一人で背負いきれるものじゃ到底ないもの。それでも彼は弱音を見せることを嫌ったの。

泣いてもいいってしれーかんが言うのにさ、貴方が泣けないのに、泣こうとしないのにこっちが先になく訳にいかないじゃん。そばにいることしかできないけど、それでしれーかんの力になるなら、そう思ってたわ。

この辺りはきつと電もそうでしょうね。しれーかんのことになるのと私よりも電の方がお節介だったわね。私から見てもそう見えるんだから相当なものよね？ ほんと……電はしれーかんのことになる

と本当になにも見えなくなっちゃうんだから。恋の暴走特急その1よ、あれは。その2？ 候補あげだすときりがないからやめとくわ。まあ金剛さんあたりは自分で名乗りを上げそうだけど。

まあ、それでもしれーかんと電と私で出かけたあたりからは少しだけ心を開いてくれるようになったかなあと思うわ。しれーかんはどこか区切りをつけようとしたのかもしれないし、もしかしたらもうどこか……なんていうべきかしらね、覚悟、というか決心というか……まあ、気持ちを固めてたんだと思うわ。そうじゃなかったらしれーかんは私達を北陸まで連れて出るなんてことしないだろうし。

その時は嬉しかったわよ？ あ、ただの部下としてだけじゃなくて、特別だと思ってくれてるんだって実感できたから。まあ、しれーかんと外出してただで済むはずないってわかってたし、まあ実際いろいろあったけど。それでも、それに付き合わせても大丈夫って思ってくれたことは素直に嬉しかった。

だから、なのかなあ。とも思うのよね。

どっか菌車が外れたって気がつくべきだったのに、見なかったふりをしたんじゃないかって、思う。

今となつては結果論にすぎないし、わかったところで何ができた訳でもないと思う。それでも、どこかずっと引つかかり続けているのよ。今でも。それをきつと後悔って言うのね。たぶん。後悔していないといったらウソになっちゃうだろうなって。

あの時もっと良く聞いていれば、しれーかんも電も止められたのかな、なんてさ。

もう言っても仕方ないのね。

ANECDOTE 014 救われた気がするので
ぐざいます

「電、雷。数日分の着替えとかの荷物をまとめてきてくれないか？」
唐突に呼び出された雷はきよとんとした顔でその言葉を聞いていた。

横須賀鎮守府国連海軍第七庁舎の一室——第50太平洋即応
打撃群司令長官室という名前のだだっ広い部屋で航暉は制服の上着
を椅子の背にかけて至極真面目な顔でそう言った。雷を呼んでくる
ように言われて電も今その要件を聞いたらしくきよとんとしていた。
「えつと……どこか出かけるのかしら？」

「まあな、ふたりには悪いが一緒について来てもらいたいと思ってい
る」

「たしかここ数日は外出する用事なんてなかったと思つたのですが
……」

「緊急というかなんとか、少しばかり『実家』に顔をださないと
いけなくなつてね」

「実家というと……月刀本家なのですか？」

そう聞き返すと航暉は肩を竦めた。

「今の頭首、月刀利郁としふみが危篤だから帰つてこいってさ。こんなことに
公式回線使うんじゃないと思うがね。二人には連絡役兼護衛として
同行してもらいたい。まあそう言うのが必要になるシーンはないと
は思うが」

まったく、世話がやける。と航暉は心底嫌そうだ。

「1325時横手発小松エアベース行きの連絡機に便乗させてもらえ
るらしい。それに間に合う様になると2時間程で出発となる。3
日分ぐらいの着替えなどの私物をまとめて着てほしい」

「了解よ！ しれーかんの分の荷物もまとめたほうがいいかしら？」

「いや、俺のは自分でやるからいいよ。……まあ、なんだ。喧々諤々家

族会議とかで俺は動けないかもしれんが、少しは羽を伸ばそうか」

それを聞いて電はくすりと笑った。

「では用意してきますね」

「しれーかん！　また後でね！」

それを見送って航暉は笑みを仕舞った。ドアがかちやりと開く。

「……で？　本当に連れて帰るの？」

「いい機会だろう、いつまでも逃げてるわけにもいかない訳だしな。

一人で帰ったところで、俺が何をしでかすかわかったもんじやない。

そうだろう？　スクラサス」

ドアを後ろ手に締めた女性がサイドポニーを揺らして笑った。

「まあ月刀家にお礼参りをする気なら止める気ないけどね、でも気をつけなよ。月刀家は『古巣』に縁があるんだろう。なにがあるかわかったもんじやない気がするけどね」

「ここに置いてても同じだろう。スキュラだって、手を出そうと思えばいつでも出せるだろう？」

「否定はしないわよ」

彼女は外部記憶装置を放り投げ、航暉に投げ渡した。

「まあでも、カナリア鎮守府沖の暗殺未遂はスキュラじゃないみたいだけどね」

「だろうな、旨みがない」

襟足を避けて首の後ろに外部記憶装置を差し込むと航暉はそのまま目を閉じた。彼女は気にせず続ける。

「あの瞬間的に入り込んだ介入、過剰同調事故に見せかけてあんたを殺そうとしたのが誰なのか、予想がつかない訳じゃないだろう？」

「——『ホールデン』か？」

「おそらくはね。いまスキュラはホールデンシステムの解体にかかっている。まあ当然か。ホールデンシステムはコンピュータによる感情を極力排除した合理的判断による人間の統制な訳だ。マックスウェーバーがいれば理想的な官僚主義だって言うだろうね。……それとトレードオフで人間の官僚が全員無職になる訳だけどき」

スクラサスはクスリと笑う。

「スキュラはある意味『愛国者』だ。日本がコンピュータの傀儡になることを是としない立場だ。そして――」

「ホールデンの正体を知り、敵対している俺を利用せずに殺すメリットはない。そうだな？」

「ご名答。そしてあなたはその面だけはスキュラと利害が一致する。それを脅威と判断したんでしょうね」

スクラサスに外部記憶装置を投げ返す。それをノールツクでぱしっと受け取ってスクラサスは笑う。

「スクラサス、お前は誰の味方だ？」

「その質問に意味がある？」

質問に質問で返ってきて、航暉は笑う。

「しばらくここを空けるぞ、笹原大佐。艦隊業務は高峰に任せるが協力していつてくれ」

「ゆうちゃん書類整理苦手なんだけどなあ」

「無理すんなよ、お嬢さんで済む時期等とうに終わってるだろうが」

「カズ君ヒドリー！」

「今更ぶりっ子ぶるなよ。――頼むぞ」

「あいあい」

敬礼を送ってくる彼女に肩をすくめて、上着を手に航暉は執務室を出る。

「武運を祈るわよ、カズ君」

「笹原、お前もな」

執務室の扉が、閉まった。

航暉たちに割り当て^{アサイン}されたのは小型のターボプロップ式のプロペラ機だった。緩やかな揺れと音を感じながら絨毯のように敷き詰められた雲がすぐ下をかなりの速度で流れていた。もうすぐ降着用意のアナウンスがあるのだろうという時間になってきた。意外にそわそわしている雷電姉妹に航暉は苦笑いだ。

「飛行機には乗り慣れてるだろうに」

「でも普段は輸送機だもん。こんなふかふか椅子じゃなかったし……」

「それに月刀家にお邪魔するみたいには、軍施設以外にまともにお邪魔するのは初めてなのです……」

「言われてみればそうか。それに日本海中部にくることもあまりないわけだしな」

航暉はそういうと軽く笑った。

「日本海内部での深海棲艦の発現は確認されていない。ただ東シナ海やオホーツク海からの侵入は見られるがな。だから艦娘は佐世保部隊の対馬封鎖線と択捉の千島・サハリン封鎖線に集中配備されているわけだ。商船警備のために駆逐隊を中心にした護衛艦隊が舞鶴に配備されている程度だ。日本海側に来るとはあまりないのが実情だろう」

背もたれ——軍高官用ということで人工合皮のシートだ——に体重を預けて彼は目を閉じた。気圧が変化してるのを耳で感じる、降下がはじまった。

「とはいえ日本に残されたほぼ唯一の物資運搬ルートだ。この国のアキレス腱には変わりない。商船警備を中心任務に据えた572水雷戦隊が舞鶴に配置されてるのもそのためだな。ウエークにいたところから舞鶴の572に睦月を寄越せという話が来てた」

「へー、矢矧部隊の572に、ねえ……」

そういつて雷は窓の外を眺めていた。雲の下限を突き破ったとこ

ろだった。曇天の鈍色を照り返す海がよく見える。高翼配置のターボプロップ機のために視界を遮るものがないのだ。

海岸線をなぞるように降下してく機体。能登半島の上空でくると旋回し左手に日本海側の風景が見える。それを見て雷がポツリつぶやいた。

「そうか、こっちは深海棲艦の襲撃が少ないから疎開が厳しくなかったんだ……」

「ああ、民間人立ち入り禁止も海岸線から5キロ程度だろうな」

その呟きに答え、一緒に窓を覗き込む雷電姉妹を見ながら航暉は優しく笑った。

「それに北陸は旧家が多くてね。先祖代々の土地を守るって気風が強い。深海棲艦の襲撃のリスクが相対的に低い以上、無理に疎開しろとも言えなかったわけだ」

「へー、ってあれ何？ あの高压電線の束。ずっと海岸線に沿って走ってるけど」

それを聞いて航暉はああ、といった。

「迎撃用のレールガンへの送電線だ。ほら、海沿いにある対爆掩体」

そう言われ目を凝らす雷電姉妹。

「あ！ あれね！ なんだか海岸線盛り上がってるの！」

「あの中に馬鹿デカイレールガンが仕込まれてる。陸上用兵装の日本海側……まあ実質大陸輸送の窓口になってる北陸州と新潟独立区の沿岸だけだな。そこに設置して近寄る深海棲艦を全自動でスナイプする近距離用防衛兵器だな。あれの莫大な電力を賄ってるということになってる」

「でも、空中に張ったところで爆撃されたら終わりじゃない？」

雷に指摘されて航暉は笑った。

「さあな。——まあ飯田インダストリーグループの製造だ。そこらへんも考えてあるとは思うがな」

航暉の声にどこか首を傾げる電。どこか物憂げな表情を浮かべた航暉にどこか違和を感じたのだ。

「なんだか雲厚いわねえ……」

雷の言う通り、曇天の下の風景はどこも沈んでいて、いつ泣きだすかわからない雰囲気だ。その下を軍用機はかなりの急角度で降りていく。

「北陸の天気なんてこんなもんだ。北陸の子は『弁当忘れても傘忘れるな』ってずっと口酸っぱく言われて育つものさ」

「へー……」

彼の笑った横顔にはどこか皮肉の色が見えていた。その違和の正体に行きつく前に滑走路に行きつき制動がかかった。エンジンが甲高く鳴きシートベルトが僅かに体に食い込んだ。

「……懐かしい空気だな」

ぽつりとそう呟いた彼に電は笑いかけた。

「司令官さんの生まれた場所なのです。懐かしいのはそうかもしれませんがね」

「――年年歳歳花相似 歳歳年年人不同、か」

軍用駐機場エプロンに止まり、プロペラが緩やかに止まる。それを見ながら航暉は立ち上がった。その時にはもう違和はなくなっていた。

「さて、行こうか」

「はーいー！」

「なのですー！」

三人が外に出る。泣き出しそうな春の終わりの匂いが僅かに潜んでいた。

「そろそろ月刀が向こうについたころかね」

そんなことを杉田が言えば、だろうな。と端的に答えた高峰がタツチペンを置いた。

「それにしても雷電連れてくとは思いきったことするもんだねえ」

「まあカズだしな。なんだかんだで反骨精神強いやつだ」

伸びをして首を鳴らしながら高峰はそういう。

「で、カズは素直に向こうで過ごして帰ってくると思うかい？」

「ないね、そうじゃなきや電嬢たちを連れていくはずがない」

杉田はそう言うとき小さく笑った。

「月刀家は月詠家解体の元凶だ。そこに雷電姉妹を連れ込むというのはかなりヤバめの事態だと思うぞ。下手したら手が付けられなくなる」

「誰が？」

「当然アレが。電嬢や雷嬢がいるところで鉄火場にはならんだろうが、その一歩手前までなら平気で行くだろうな。そしてそうなることをアレは知ってて連れていったんだろう」

杉田の考察に高峰が笑う。

「まあ、リミッターとしてはどうなるかわからんが、とりあえず無事に帰ってくることを祈りつつ、俺たちの出動がないことを願うしかないな」

「最後のはなんだ高峰？」

「カズなしで出動だとめんどくさい」

「出動要請がかかってから半日もあれば航空機乗り継いで帰ってくるだろうから問題ないだろう。まあ攻勢部隊たる俺たちが予告なしで出動要請かかるようなことはまずないと思うがな」

杉田はニツと笑った。

「まあ、犬猿の仲とはいえ会いたい人の一人や二人故郷にはいるだろう。電嬢たちにも会わせたい人でもいるのかもな」

基地の建物を出ると建物の脇に見るからに高級そうな黒塗りのリムジンが止まっていた。航暉は迷わずにその前に立つ老人の前へと進んでいった。

「——虎爺、久しぶりだね」

「航暉様……ご無沙汰しておりました」

そういつて深々と頭を下げた翁は航暉よりも幾分小柄だった。三つ揃いの燕尾服のような服装は見るからに執事の風格を漂わせていた。ブルーアッシュとでもいうのだろうか、どこか涼やかな色の髪が緩やかにウェーブがかかった髪を丁寧に整えた彼は何処か懐かしそうに笑う。

「そうだ、紹介しよう。今の部下を務めてくれている雷と雷だ。こちららは月詠家の執事長を務めてくれた宮川虎徹、俺は虎爺と呼んでいる」

「初めてお目にかかります、虎徹と申します。短い間でございますが何なりとお申し付けください」

「あ、ありがとうございます。雷です。よろしく願います」
「雷です。よろしく願います」

「二人とも緊張しなくても大丈夫だぞ。虎爺は優しいからな」

そういつて航暉が笑えばどこか照れたように笑う虎徹。

「そういつていただけるとは、航暉様もお世辞を覚えるお年になられたんですね」

「お世辞なんかじゃないし、もう三十路が見えてきてるんだぞ？」

「……そうでしたな。爺になると時が流れるのが早すぎて困りますな。立ち話もなんです。ささ、どうぞお乗りください。運転手は高坂でございます」

「高坂……庭師の高坂さんか？」

「おお、覚えていらつしやいましたか。その高坂の息子でございます」
そう言うのと虎徹はリムジンのドアを開けた。航暉は迷うことなくそれに乗り込む。雷電はどこか恐縮しながら後に続いた。……軍閥の出身と聞いていたがこのご時世でこんなVIP待遇だなんて思っ
てなかったのだ。白い高級な内装のリムジンのシートは体が沈み込
みそうなほどふかふかでゆったりと体を包み込んだ。

「うわあ……こんなやわらかい座席初めてかも……」

「こんな高級な車初めて乗ったのです」

「まあ地元の大地主でもあるからこれぐらいやらないと体裁が保てないのさ。持ち家主義が根強いしな」

そういう航暉に一礼してドアを閉めようとした虎徹に航暉は手で止めた。

「虎爺、少しばかり話がある。助手席に回らずこっちに乗ってくれるか？」

「かしこまりました。それでは失礼いたします」

向かい合わせの後部座席に虎徹が乗り込み、ゆっくりとドアを閉めた。それを確認してか、滑らかに車が動き出した。

「本家までは1時間ほどかかるかな」

「左様でございます。……何かお飲みになりますか？」

「アルコール入れるわけにもいかないしなあ、……電たちはどうしたい？」

「いなづまは大丈夫なのです」

「あ、後でもらおうかしら……」

「緊張しなくても————といっても難しいか。事情を知ってるわけだしな」

そう言うのと航暉は笑い、すぐに笑みを消した。

「虎爺、ジジイの容態は？」

「利郁様はただいまご自宅にてご養生なさっております。元の心臓の御病気もありましたから安静が必要とお医者様から仰せつかっております」

「要は直近の命の危険はない？」

「左様で」

航暉が不満げに鼻を鳴らした。

「それで本家は親戚全員集めるとは、世界は大分平和になったらしい
そう言々と虎徹の方を向いた。

「虎爺、今回の呼び出し、ジジイの危篤だけが原因じゃないな？」

「……航暉様、申し上げにくいことではありますが……」

「原因は俺だな？」

航暉の声に苦い顔をする虎徹。航暉はそつと先を待った。

「……利郁様は月刀本家の存続を危惧されているようなのです
のぶちか
「延近在るじゃねえか」

虎徹はゆつくりと言葉を選んでいるようだった。

「延近様では……本家を継ぐにはふさわしくないとお考えのよう
す」

「……俺に『戻れ』と？ 月詠一族をまるつと殺しておいてか？」

航暉の声が尖った。

「正確には補佐として、でございしますが……」

航暉は頭をガリガリと掻いた。窓の偏光シートで僅かに黒ずんだ
木々の緑が窓を流れていく。

「……借り物の長男が木偶だったから戻ってこいか。……虎爺」

「はい」

「悪いが突っぱねさせてもらおう。迷惑かけるかもしれないが、大丈夫
か？」

「航暉様なら、そうおっしゃられると思っておりました」

虎徹は優しく笑う。

「航暉様は正義のお人だと、先代様も仰られておりました。己の正義
に順じ、意思を徹すことのできる方だと。それを我々月詠家使用人一
同全員が知っていることであり、信じていることとございます。それ

を疑うことなど、ひと時もなかつたのでございます。自ら死地に飛び込まれた時も、戻っていらして、海軍へと進まれた時も、誰一人、刹那の間にも疑ったことなどないのでございます」

そういう声がどこかさざりとしていて、リムジンの中にやさしく響く。

「私は月詠家の皆様に仕える執事でございます。月輪に変わり飛び菊の紋を守り、民を守る力であろうとした、月詠家の居場所を守る。それが私めの仕事でございます。私は未だ月詠家の当主より解雇通知を受け取っておりません。二人の主に同時に仕えられるほど、私めは器用ではありませんぬ故、月刀家に身を置いていてもそれだけがこの虎徹の仕事であり、誇りなのでございます」

「……そうか」

「月詠家第三十二代当主、月詠航暉様、航暉様の征く道に必要なならばこの虎徹、いかなる試練にも耐えてお見せいたします。どうぞ前にお進みください。その背を見れること、それで私めは僥倖でございます」

航暉の笑みはどこか寂しそうな表情に見えた。

「……そこまで義理立てする必要もないと思うけどな。それでも、俺を信じてくれるなら付いて来て欲しい」

「はい、微力ながらお伴いたしましょう」

そう言つて笑う虎徹に航暉は自分のうなじからQRSプラグを引き出した。

「電、雷、虎爺に二人の事情、伝えるぞ」

「なのです」

「わかったわ」

二人の承諾を取つて、航暉は立ち上がった。

「話すと長いから有線しても大丈夫か？」

「かしこまりました」

虎徹は航暉からケーブルを受けとり、自分の首筋に差し込んだ。二人とも目を閉じる。車の振動を感じながら、幾許かの時間が過ぎる。そして、虎徹の目が驚愕に開かれる。

「まさか……航暉様、これは……」

「本当だ。ここの電と雷は雪音と琴音のアイデンティティ・インフォームションを引き継いでいる」

航暉の言葉に言葉を継げない虎徹。航暉の笑みが柔和になる。

「虎爺ほど、雪音たちの行方不明に怒ってくれた人はいなかったから、どうしても会わせなかった」

虎徹はゆつくりと席を離れ電たちの前で膝をついた。

「琴音様・雪音様……」

「……どっちがどっちか、わかるか」

「当たり前でございませぬ。航暉様、琴音様、雪音様の教育係を仰せつかっていただけなのはこの私でございませぬ。姿かたちが違えども、見間違えほど耄碌したつもりはございませぬ」

そう言つて虎徹は雷の方を見た。

「雷様のしつかりと強くしなやかな芯を持った目は琴音様そっくりでございませぬし、電様の優しい目は雪音様を思い出すのでございませぬ」
「……そうか」

そう言つて虎徹は視線を落とす。

「雷様、電様、この弱い虎徹をどうかお許しください。お客様の前で泣くことなど到底許されることではございませぬ。ですが、今だけはどうかご容赦を」

そう言つてそつと背中を丸める虎徹。航暉は僅かに目線を落とす。

「琴音様・雪音様のお時間が止まってから16年が経ちました。虎徹にはそれが悔しくて悔しくてたまらなかつた。航暉様は傷だらけになりながらも諦めずに飛び込んでいかれた。それを見送るしかできなかつた。それがとても悔しく、今でも後悔しております。業火に呑まれることもできぬまま、ぬるま湯の世界から出られない私が許せずにいるのでございませぬ。そのまま宙に浮いた16年でございませぬ」
虎徹の顔はくしゃくしゃだった。

「それが、やっと……救われた気がするのでございませぬ。お二人の中に琴音様・雪音様がいらつしやる。お二人と共に琴音様・雪音様は過ごしていける。これで航暉様を孤独に追い込まなくて済む、そう思えるのでございませぬ。同じ時を生き、同じ悲しみに泣いて、同じ楽しみ

に破顔する。航暉様がその相手を得たことが、無性に嬉しいのでございます」

そう言う虎徹の手にそっと小さな手が触れた。虎徹が顔を上げると笑った電の顔があった。

「大丈夫なのです。司令官さんを——航暉さんを一人になんてさせたりしないのです」

虎徹の手にもう一つ手が重なった。

「大丈夫よ。しれーかんは私達を守るから」

そう言った雷の笑顔に虎徹はじんわりと涙した。その彼に電と雷がそっと抱きついた。虎徹は遠慮がちに彼女たちの頭をそっと抱く。

言葉はない、それでも優しい時間が間を埋めていた。降りだしたらしい雨とアスファルトが混ざった匂いが香る。

どれだけの時間が過ぎたのだろうか。ゆつくりと虎徹が彼女たちから離れた。

「大変失礼いたしました、雷様、電様」

「そんなことないのです」

「そうそう、というよりしれーかん！　こんな大切な人ほったらかしにしてたの？」

「ほったらかしにしてたわけじゃないが……」

「ダウト」

「うっ……」

そんな会話に僅かに虎徹が笑った。僅かに赤くなった目を細める。

「さて、今しばらくで到着でございます」

「『閻魔殿』にな」

航暉の言葉に僅かに笑みを深める虎徹。

「では閻魔殿へと参りましょうか」

車は東へ向かう道路を一路速度を上げて走っていた。

1周年記念 PREQUEL 06 夜は短し
走りやがれ野郎

「はーらへーったー」

ぐでつと机に突っ伏すのは士官候補生の肩章を付けた笹原である。似たような恰好で男が二人同じ机に突っ伏していた。

「渡井の野郎本当に反省してるのか？」

「してるけどさー」

何やら不満そうな声を上げる渡井を笹原と高峰が睨む。

「どうしたー日飯抜いたくらいでへばるなよ」

「そりゃカズ君は低燃費系男子かもしれないからいいけどさー。一応私達若い力で動いてるわけだしさあ。いろいろ問題多いって」

「そんなことを言っても腹が膨れるわけないだろうが」

そう言つて鼻を鳴らすのは部屋の壁に背を預けた杉田だ。全員腹をすかしているからか、どうも皆苛立っている。

事の発端は今日の訓練メニューというか訓練内容の喫食演習という名目の調理実習である。ハードな訓練が続いていたのだが、今回の演習は自分たちのグループでちゃんと喫食できるものを作れば合格という『海大イチ簡単な演習』である。そこで唯一の不合格班——それが空きっ腹抱えてグダグダ言っている月刀航暉たち『黒鳥』5人である。正確に言えば最後の最後で全部渡井が駄目にした。それをリカバリしようと高峰や杉田が奮闘したが時間切れ、教官の勝ち誇ったような笑みに奥歯を噛み締めたのが大体4時間前である。

「はーあ、どうしてこうなるかねえ」

「どうもこうもケイ君のせいでしょうが！ だれがいきなりケミカルクッキングに入るの!? 小麦粉とベーキングパウダー間違えるとかどんなことをしてたんだったってーの！」

「それまだマシな部類だっただろうが。食えるものと食えるもの合わせ

せてあんなもの作れるとかいろいろすごいよなあ」

「塩素系洗剤と酸性洗剤を混ぜるようなものだよなあれ」

「分かりやすいのか分かりにくいのかわからない直喩ありがとうよ、高峰」

「おかげで全部俺たちの班の食事全部アウトだろうが。渡井、どうする気だ？」

「どうするって言われてもさあ……」

そう言っただけに突っ伏したままうだうだ言うのは渡井である。

「……銀蠅するしかないんじゃないの？」

「お前本気か？ あの倉庫に潜りこむ気？」

「ならこの空きっ腹抱えて寝るしかないでしょ」

渡井の声に皆が黙る。時計の針は2130。おあつらえ向きな時間ではある。

「……ハル君」

「俺にクラッキングしろって言気か？ 笹原」

「この空きっ腹抱えて眠るなんてできるわけないでしょ？ 明日死ぬかもしれない私達には満腹までいろんなものを食べる権利があるわ！」

「で、あのセキュリティの塊の倉庫に侵入しろと」

「もちろん高峰春斗くんだけに泥かぶせたりしないわ。協力してくれた人で缶詰の食べ放題でもしましょう？ 参加者募集中、ケイ君は強制参加」

「マジかよ」

そう言った渡井を笹原が睨む。

「へー、元凶がそんなこと言うんだー」

「悪いか」

「はっちゃんにばらしてやろうか？ お前の棚の二番目に入ってる外部ハードのこと」

「すみませんでした」

渡井が即土下座。それを見て笹原がほくそ笑む。航暉が「伊8にばれたらまずいことでもあるのか？」と意地悪く聞くと笹原がにんまり

と笑った。

「それが傑作なのよ。ケイ君つたらさー」

「何でもないから月刀はどうするんだ？ この話乗るの？」

「露骨な話題逸らしどーも。警備の状況次第。行けそうなら乗るし、リスクがでかすぎれば降りる」

「杉田は」

「しゃーねーから乗ってやるよ」

「んじゃ、全員参加でいいね」

こういう悪だくみの時だけ妙にテキパキやる紅一点の笹原が取りまとめ、緊急作戦が開始された。

「おい、そろそろ就寝時間だぞ笹原」

教官が声をかけると笹原は小さく頭を下げた。笹原の内心「げ、このハゲ教官」である。

「すいません、少し飲み物を買って出ていて。せめて水で空腹を満たして置かないと寝れそうになかったのよ」

「あー、そーいや渡井がやらかしてたな。普段の悪事に罰が当たったな」

手に持ったペットボトルを振ると納得したように笑う教官。罰が当たったといわれるのは少々本意である。

「やだなー、普段の座学だって対テロ演習だって、ちゃんと法を順守してきつちりやってますよ？」

「法は順守してるがそれ以外のこともきつちり弁えてやってくれ。……そうだ、対テロ演習の時の陸軍から恨みつらみ書かれた文書が届いているが読むか?」

「遠慮しておきます」

「そんなこと言うなよ、笹原候補生。お前らのせいでこちら減給だ、どうしてくれる?」
「そんな海軍士官がいるか!」
「だろ?」

「もう一度叩きのめしてやるからかかってこいや?」
「だろ?」
「人気者だな黒鳥」

「海軍に負けるような陸軍が悪いんです。私達はベストを尽くしただけですよ?」

「ベストを尽くした結果スプリンクラーの修理や館内通信設備の再設定や壁に空いた穴の修繕にウン十万かかったのはどうするんだ?」
「ん?」

「ははは……そこらへんを丸く収めてくださった教官殿には感謝しておりますですはい」

「よろしい」

その演習部隊の陸軍を率いていたのがこの教官なので嫌味にしか聞こえないし、嫌味として言っているのだろう。笹原は少しばかり冷や汗をかいていた。

「そういうえば教官。教官の専門って対空砲撃でしたよね」

「それがどうかしたか?」

「巡洋艦以下の小口径砲での対空運用のコツってありますか?」

「やれやれ、黒鳥から相談されるとは明日は槍が振るか?」

「なんですか、相談あるならさっさと来いっておっしゃるのは教官じゃないですか!」

笹原がわざとらしく頬を膨らませると教官がにやつと笑った。

「就寝まで時間もないし、ここでざつと軽く教える。わからないところは明日にでも聞きに來い。有線できるか?」

「もちろんです」

笹原がそう言って首の後ろのQRSプラグからコードを引きだした。その視界の端を高速で何かが駆けていく。

「……言うねえ夜鷹」

「まったくだ」

くつくつと笑いながら走るのは杉田と航暉の「実働班」である。視界の端にはリアルタイムで送られてくる監視網の状況である。

《23歩先左。上に全方向監視カメラ、顔を上げるな》

《了解》

無線の向こうから響く高峰の指示に合わせて航暉たちは全力疾走を続けていた。背景に馴染むホログラムがあまりの速度にブレる。

《渡井、テメエ精度下がってるぞ》

《湿度75%ちよいあるんだ。高速機動で即時対応できるわけないだろ》

《ちゃんとやれボケ》

杉田の容赦ない声に航暉は小さく笑った。

《はい、ハゲのIDコピー完了だよー》

笹原の声に合わせて数字の羅列が送られてきた。

《もー、教官のご機嫌とりなんてもうごめんよ?》

《いつも奔走してくれる委員長に感謝だな》

高峰の無線に笑う。なんだかんだでいろいろお世話になっている彼だが今回は彼のお世話になることはできれば避けたいところだ。

「……つとー」

備品保管庫Dと書かれた扉の前に滑り込む。背中を壁に預けるように座り込んだ。航暉のすぐ脇にあるハッチに手を伸ばす、身代わり防壁を展開しつつそれにある管理用プラグに触れる。

《高峰、警報切ってるな?》

《当然。疑似信号レディ。ロジティクス系セキュリティ、テストモード移行まで3、2、1——》

ゼロカウントと同時にQRSプラグを叩き込んだ。教官のIDをつかってルート権限に侵入する、警報は鳴らない。

《監視カメラハック完了! カメラを固定画像にすり替えたよ。いつでもドアを開けても大丈夫だ》

渡井の声。杉田に合図を送ってドアを開ける。杉田が真っ先に突

入。その後ろから航暉が時間差をつけて飛び込み、ドアを閉めた。

「とりあえずは固定の警報システムはこれで大丈夫か」

「だな、警備用ドローンに見つからないことを祈るだけだ。義手義足の排熱大丈夫か？」

「舐めんな。とつくに対策済だ」

杉田の声に航暉は笑う。ホログラムのために全身ピッチピチの映像スーツを身に纏っているせいでポケットなどにいろいろ仕舞って銀蠅という定番手段は使えない。

「まあそこまで大規模に奪うわけじゃないからあんまり問題ないけどな。さて、オーダーは……非常食用のα化済み白米とたくあん缶と」「サバ缶に豚のしょうが焼き？……こんな夜中に生姜焼きの匂いなんて漂わせたら一発でばれるからアウトだアウト」

航暉はそう言いながら持ってきたコンパクトミラーで棚のの角を覗き込む。

「クリア。行くぞ」

棚と棚の隙間を縫うように航暉が走る。その背中を守るように後方警戒を行いながら杉田がついていく。

「たくあん缶があるなら飯食えるだろ。リスクは減らすに限る。米飯とたくあんサバ、あと適当に甘味奪って逃げようぜ」

杉田の声に笑って航暉は一つの棚に取り付いた。ダンボールには『携行喫食品 煮物（サバ）』と書かれている。

「ほら、パス」

「おっと。5人分でいいからな」

「わかってるよ」

常夜灯だけに照らされた棚は暗いが簡単な作業をするには十分だ。航暉は箱からサバ缶を取り上げ杉田に投げ渡す。

「これ侮れないんだよな、サバ缶」

「これだけで飯行けるからな」

航暉の答えに鼻を鳴らす杉田。

「これにひと手間加えるだけで普通に美味しくなるからずるいな。日本酒に合せてよし、調理の仕方によってはワインに合わせてもよし

だ」

「とりあえず食えればいいんだよ」

「人生損してるぜ月刀」

「そーかい。これで個数はいいだろう。それじゃ、次、いこ——
——」

「? どうした」

杉田の問いかけも止まる。杉田が後ろ振り返るとそこには、ドラム缶にカメラを付けたような何か——警備用ドローン。

「警告警告警告、侵入者あり、侵入者あり」

「警戒はお前の担当じゃねえか杉田!」

「知るかよ畜生! 逃げるぞ!」

二人そろって走り出す。電腦通信オープン。

《高峰! 警備用ドローン凍らせろ! 今すぐ!》

《なんで二人そろって追われてんだよ!?!》

《杉田の任務不履行!》

《そういう月刀も警告ぐらいしろ!》

《あーもう、20秒耐えろ》

《15秒だ! 逃げ! スタン弾が飛び出してきてる、うおう!》

杉田の焦った声を聞きながら高峰はキーボードを叩く。警備用ドローンの運用プログラムに潜り、過去の警備記録を隔離、一度電源を落とそうとして。

「あ。」

警報システムを別系統に流したことに気が付いた。鳴り響く警報。

《高峰テメエ! 俺たちを助けに来たのか殺しに来たのかどっちだ!?!》

《うるせえ! 誰だよ警備用ドローンと電力配分制御同じプログラムで動かすようにした奴!》

《御託はいいから早く何とかしろ、警備システムが再起動してドアがロックされてるぞ!》

「ああもう！」

高峰は叫ぶ声を聞いてキーを押さえた。Ctrl+Alt+Delete。

館内すべての電源が落ちた。

「東郷はいるかっ！」

「どわっ！」

東郷駆はいきなり部屋に飛び込んできた怒声に飛び起きる。二段ベットの upper に頭をぶつけて頭を抱えた。それでも怒声が教官のものだとわかっているので転がるようにベッドを出て直立し敬礼を決める。

「なんででしょうか、教官！」

「東郷、バカ鳥たちがやらかした。追いかけるから手伝え」

「はっ!?!」

就寝用のジャージのまま教官に連れ出される東郷。軽くまどろんでいた頭は情報を整理しきれなかった。

「な、何があったんですか？」

「笹原が吐いた。月刀と杉田がD倉庫に侵入！ こともあろうに電源を丸々落としやがった。警備システムがエラー起こして侵入者大量

という表示を叩きだしやがった！」

何があつたのかわからないまま、あれよあれよと宿舎の外まで連れて行かれる。サーチライトが煌々と灯り、あたりを照らすそこに響くのは怒号だ。

「あいつらどこに消えた!?!」

「Dブロックの集団と連絡が途切れた！」

「追えっ！」

それを見て教官の言ってることを理解した。

「もしかして警邏の機動集団まで出張ってるこの騒動って……」

「もしかしくなくても月刀たち優等生組のおかげだが？」

皮肉な声があると同時、騒ぎが一気に近づいてきた。走ってくるのは……後ろに数人の機動部隊員を引き連れた——航暉と杉田。

このタイミングでこいつらが騒ぎを起こすとしたら……おそろく今日の調理実習で一口も飯を食えなかつたせいだとは予想がつくが、どうやったらこんな騒ぎになるのか正直正気を疑う。そんな感情が怒りに変化しあつという間に正しい方向に出力された。

「……こんのバカ集団！」

「げ、委員長」

その怒声の先、明らか苦笑いの表情をする杉田。彼らを遠くに認めると、教官が東郷の肩をぽんと叩いた。

「いつもあいつらに手を焼いてるそうじゃないか。——教官権

限でアイツをボコることを許す。日頃の鬱憤晴らしも兼ねて盛大にやってこい」

そう言われるや否や東郷は前へと駆けだす。

「うおっ！ 東郷、俺とお前の仲じゃないか。ここは見逃しておくれ！」

「どんな仲だ馬鹿野郎！ 今回ばかりは神妙にお縄に付けエ！ 主に俺の安寧のために！」

「どんな理由だ！」

杉田がそう笑いながら東郷をいなす。そう言う間にも航暉の方に

教官が躍りかかった。

「うわっとー！」

航暉はさらっとそのストレートを躲すと横に送り足、教官の足を軽く払ってバランスを崩すとその体を追ってきた機動隊員の方に押し出した。たたらを踏む教官に詫びつつ距離を一気に取る。そのまま雨どいの固定具と窓枠を足場に建物をよじ登る。それを見た杉田が東郷東郷を突き放したタイミングで一気に跳躍、軽業師もびっくりな跳躍力で二階の屋根に飛び乗った。

「マジかよ!？」

「あの野郎、義足の調整勝手に出力上限いじってやがる!」

教官が歯噛みする。杉田の手を借りるような形で屋根に到達した航暉が笑った。その横に女性の影が三階の屋根から飛び降りる。

「やつほー」

「笹原てめえ! さっさと捕まってるじゃねえ!」

「うるさいわね。仕方ないじゃない。あの筋肉ダルマ相手に格闘戦仕掛けろって? ナレッジワーカーに酷い要求ね」

「陸軍相手に戦えるアマゾネスが何だって!？」

「杉田氏あとで工廠裏」

言い争いが屋根の上から聞こえる。それを聞いて青筋を浮き上がらせる教官。地味に血圧大丈夫だろうかと気になる東郷であったが、それを見降ろして笹原が立ったせいでそっちに意識を向ける。笹原が手でメガホンを作った。

「青筋浮かべてご機嫌麗しゅう! 血圧大丈夫ですかー?」

切っちゃいけない線を数本まとめてぶった切るあたりさすがである。

「降りてきやがれガキども! 特に笹原! 安全圏からおちよくるだけがお前の望みなのか!? 来いよ笹原! 武器なんか捨ててかかってこいー!」

「テメエなんて怖くねえ! 野郎ぶっ殺してやる——! とでもいえばいいかな? でもごめんなさい。死亡フラグは立てない主義なの」

そう言うどひよいと屋根の影に逃げる笹原。それを見た教官が引きつった笑みを浮かべる。

「――警邏隊長、遠慮はいらない。催涙弾でもスタングレネードでも何でも使って結構」

「ちよ――」

東郷が驚く横では特殊部隊ばりの装備――銃に訓練弾の青いマガジンがついているあたりに温情が感じられるが――を身につけた警邏隊が整列していた、包囲を完了したらしい、

「――突入！」

――友人のよしみで骨だけは拾ってやる。

東郷が本気で祈りをささげる中で一世一代の大捕り物がはじまつた。

「……まあこうなるわな」

通称「反省室」と呼ばれる鍵付きの部屋入った五人はげんなりとした表情で乾いた笑みを浮かべた。頭を冷やせ馬鹿どもということ部屋に閉じ込められているので、自主反省会と相成った。

「で、あそこで電源落とすよりもこっちの回線にスイッチしたほうがよかったと思うんだけどなあ」

「でもそこで動かすところちの電圧ヒューズが作動すんだよ」

「でも元からぶった切るよりましだったんじゃないの？ ホロの偽造のせいで過剰反応した警報器で機動隊呼び寄せることになった訳だしや」

（今後の活動に生かすための）反省会は肅々と進んでいく。

「まあ元を言うなら杉田氏が警戒しつかりしてれば済んだ話じゃない？」

「それを言うなら渡井が全部晩御飯を反物質に変えたのが悪いだろうが」

「それでも高峰氏のリカバリに貢献したし？」

「誰のおかげで監視室から脱出できたと思ってるのかな、渡井」

「背後の敵クリアリングしてくれたことは感謝するけどさー、こんなドタバタしたのは高峰のせいでしょ。僕は無実だ」

「二「何が無実だ」三」

総突っ込みを受けて渡井はむすつと黙り込む。

「あーもう。結局銀蠅は失敗するし、機動部隊の警棒タコ殴りはアレ規制するべきな威力だしさ」

「盾強打よりましだろ」

杉田が左手を振る。しつかりアザができていた。

「――腹、減ったな」

渡井がそう言うのと航暉がニツと笑った。

「全く。これを死守するためにどれだけ苦労したと思ってる？」

服のポケットから出てきたのは――サバ缶が三つ。

「おおおおー！」

「でかしたカズ！」

「もう、カズ君最高！」

「どこに隠してた？」

ズボンの股座というところ一瞬うつという顔になる面々だが缶詰だから問題ないと気を取り直す。とりあえず腹に入れられるものが来た。

「で、缶は三つ、俺たち五人。ここでバトルロワイヤルが発生するわけだが、真っ先に渡井が脱落でいいと思うんだが？」

「二「異議なしー」三」

で腰掛けた彼は目の前で震えている兵士に優しく微笑みかけた。まだ若く、18そこそこだろう。

「銀蠅のために食糧庫に侵入、ドローンに追い回されて転倒しお縄……か」

「すいませんでした……!」

「普段の行いは優秀、品行方正そのもの。初犯だし今回は御咎めなしでいいんじゃないか?」

「本当ですか?」

「高峰さんにしては判断甘くないですかあ?」

青葉の声にその青年はしゅんとする。それを見て小さく微笑む高峰。

「昔、私も銀蠅をしたことがあってね。若気の至りとはいえ、大騒動になった。あの時に比べればこれくらいトラブルに入らないな」

「あー、噂に聞く黒鳥の伝説ですか」

「そ。退学もやむなしという騒ぎになったが結局は教官と同輩が必死に周りを収めてくれた。そのおかげで今こんな地位にいる。――

――兵長」

「は、はいっ!」

「次はないかもしれないが、今回は処罰なし、ただもし部下が銀蠅をした時は多目に見てあげてくれ。皆が通る道だ」

「黒鳥みたいに派手だと困りますけどねー」

「いなよ青葉」

高峰は肩をすくめる。

「以上、これからも国連海軍の一員として誠意を持って励むことを祈る。退出してよろしい」

「はっ!」

出ていく兵長を見て高峰は笑った。

「自分も見逃してもらったのに見逃さない訳にはいかないよなあ」

「本当にらしくないですよ?」

「笑い事で済むならいいんだよ。それに小さいことだが、あの子に貸し1だ。こういう貸しが非常時に聞いたりするんだよ。補給リスト

の調整頼むよ、不足資材は俺が私費購入したことにしておけ」

「了解です。司令長官代理殿」

青葉がクルリと回って敬礼。

「そうだ、青葉、補給リストにサバ缶一個追加しておけ」

「あれえ？ 司令長官が銀蠅ですかあ？」

「士官候補生時代のやつだよ」

そう笑って高峰は肩をすくめ、席を立った。

いいのです

「到着でございます。長いことお疲れ様でございました」

虎徹がそう言ってドアを開ける。それを見て雷電姉妹は口をパクパクさせていた。

「あの、司令官、さん……?」

「どうした?」

「ま、まさかとは思うけど……これ、全部月刀家の家……なの?」

「ああ」

そう言われてどこかぎこちなく首を振って確かめる。建物

「お、おっきいいいいいいいいいいいいい!」

雷と電の叫びに航暉は苦笑いだ。目の前には「お屋敷」と言って差し支えない程の建物が建っていた。黒瓦で葺かれた屋根が降りだした雨にしつとりと色を濃くしている。平屋だが普通のお屋敷と比べてもかなり広い。たしか防犯用のゲートをくぐってからざつと5分少々走ってたどり着いたということはあのゲートからおそらく月刀家の敷地。少なくとも山一つ分以上は土地があることになる。

車の到着で着物のような恰好の女性が飛び出してくる。

「……月刀家の継承順位第二位でいらっしやる航暉様の出迎えにしては質素であります、どうかご容赦を」

「嫌われ者の自覚はあるよ、爺」

「こ、これで質素!?!と小声で叫ぶという器用な驚き方をする雷を見て航暉が微笑んだ。

「北陸は持ち家志向が強いといっただろう? 大地主はこれぐらい持っていないと威厳を保てないというわけだ。無駄に土地が広いだけだよ」

そう言つて雨の中を歩きだす航暉。その彼に慌てて駆け寄った女

中が傘を差した。それに礼を言つて歩いていく彼の後ろについていこうとすると虎徹が二人に傘をさてくれた。ぎこちなく一礼して続く。わずかに苔むした飛び石を辿るように玄関へと向かう。小さな池や灯籠も設置された日本庭園を見ながら大きな玄関を眺める。

「お帰りなさいませ、航暉様」

「帰るつもりなんて無いんだがな」

おそらく家政婦長と思われる女性が上りかまちで一礼していた。上品な色の髪に小ぶりな鼻眼鏡の女性に軽く答える。そんなことをしていると玄関脇の廊下からひよつこりと顔を出す影があった。

「航暉君やつと帰ってきたんがね？」

「軍回線で呼び出されましたからね」

航暉がどこか嫌そうな顔をする。周囲の女中が慌ててその女性に一礼することから見て、おそらくは雇用者側——月刀家の人間で、少なくとも航暉よりも立場が上。電は反射的に姿勢を正す。

「……航暉君、女の趣味変えたん？」

「からかわれるのは嫌いですよ。部下の電と雷、今回連絡役兼護衛として同行してもらいました」

航暉がどこかビジネスライクに対応する女性は着込んだ白衣をなびかせ歩く彼女、黒のインナーにタイトスカートはボディバランスの自信の表れか。豊満な胸を強調するように腕を寄せ、上がりかまちから航暉を見下ろす。

「はーん。護衛とか家人中ならいらんがいね。いつまで分家の意識もつとるん？」

「余計なお世話です。——電、雷、紹介しておこう。こつちが」

「こつちが」あいそんない 扱いなんて寂しいなあ。月刀唯香ゆいかです。一応航暉君の義理の姉。よろしくね」

「い、電です。よろしくお願ひいたします」

「雷です、よろしくお願ひいたします」

「行儀のいい子たちでけっこう。まあ、ゆつくりしていつてね。お父様も待つてるようだし、航暉君とはまた後んねえ」

手をひらひらと振つて建物の奥に消えていく唯香。航暉はそれを

見送って溜息をついた。

「まあいい、荷物を置いたらご挨拶に伺うか。虎爺、悪いけど客間に案内してくれるか？」

「かしこまりました」

虎徹の背中についていくように雷電姉妹が進んでいく。航暉はそれを見送ってから、唯香の後を追いかけた。

「……珍しいこともあるもんやねえ。航暉君が女を連れ込むなんて。全くそんなこと今日見ないと思つとつたがんに」

「だからそういう仲ではないと……」

「嘘つきは泥棒の始まりと言うげんよ？ 電つて名乗ったあの艦娘と恋仲。違うん？」

航暉は黙り込んで眉を顰めることで答えた。

「……流石、ポセイドンインダストリーお抱えの義体技師というべきか？ 唯香お嬢様」

「見ればわかるにきまつとんねんて。DD-AKシリーズは我らがポセイドンが満を持して打ち出した特型最終ロット。見紛うことなんて無い。それにその開発チームの人間だぞ、私は」

白衣を翻して笑う唯香は航暉を見下ろした。

「さて、航暉君、お父様がお待ちだ」

航暉はそれを見返して建物の奥に消えた。

「電様、雷様」

客間（ベッドルームとリビングがわかれた洋間式の大きな部屋だった）に案内された二人に虎徹が声をかけた。

「こういうことを申し上げるのは少々おこがましいとは思いますが、どうか月刀家の皆様の前では最低限しか口を開かないようお願い申し上げます」

「? どうして?」

ふかふかのベッドに腰掛けた雷が訊き返した。虎徹は首を垂れる。

「月刀家において航暉様は分家出身の立場。元々月詠家と月刀家は不仲でありましたので航暉様の立場はとても弱いのでございます」

「でも、月刀家の後継者という話が出てきたのではないのです?」

電がそう言って首を傾げた。後継者候補なら彼を邪険にできないはずである。

「月刀延近様がいらっしやいますので家長は延近様に引き継がれます。しかしながら当主様は延近様に不安を抱かれていますそうなのでございます」

「それは車の中で聞いたけど……その延近さんってそんなに……」

「……どうかお察しく下さい」

それを聞いて雷がゆっくりと口を開いた。

「それでしれーかんにその延近さんを補佐させるつもりなのかしら?」

「月刀家にとって月詠のものが月刀の力が及びにくい海軍という地盤の中で力をつけている状況が好ましくないのでございます。航暉様が完全に月刀家から離れてしまわれる前に取り込んでおきたいというのが実情でございますよう」

それを聞いて明らかいやそうな顔をしたのが雷である。

「しれーかんをなんだと思ってるのかしら」

「航暉様の役割は火中の栗を拾わせるための駒のようなものでございます。それを航暉様はわかっていらっしやいました。それでも航暉様は立派にそれを務めました。そうする以外に生き残る道はなかったのではございますが、それでもそれをしつかりとこなし、生きて

帰って参られました。そうして、国連海軍の精鋭部隊を任されるまでに成長なされた」

虎徹はそう言って二人に微笑んで見せた。

「当主様はそれを恐れているのでございます。月刀本家すら飲み込むのではないかと恐怖されていらつしやるのでございます」

虎徹は改めて頭を下げた。

「航暉様は今とても微妙な立ち位置にいらつしやいます。電様や雷様のお言葉一つでバランスが崩れてしまう可能性がございます。何卒、ご容赦を」

「……わかったわ」

雷の声に電も頷いた。虎徹は恭しく一礼して下がった。隣の部屋には客間専任の使用人が控えているのでお呼びの時はベルをお鳴らしくくださいというのを忘れない。

「……しれーかんが憂鬱そうにしていたのもわかるわね」
「なのです」

電はそう言うところか物憂げな表情を浮かべ、天井を見上げたシーリングファン付きのライトが下がる部屋はとても豪華に見えた。

「……そういえば、司令官さんのこと、実はあんまり知らないのです」
「……そうね」

電が腰掛けたベッドにそのまま倒れ込む。やわらかなスプリングがその体を受け止めた。

「司令官さんがどうして海軍に来たのかも、月刀本家で何があったのかも、まったく知らないです……」

「そういえば、聞いたことないわね。どうして海軍に来たのか。どうしてずっと軍人でいるのかも」

「あと女性の趣味も、なのです」

「趣味変えた？　って聞かれるってことは少なくとも私達見たいじゃなかったってことだものね」

そう言う二人そろって沈み込む雷電姉妹。

「……私達をどう思っているのかも、知らないのです」
「電……？」

「司令官さんの部下であり、水上用自律駆動兵装であり、司令官さんの妹の個アイデンティティ・インフォメーションの情報を引き継ぐ存在であり……司令官さんに取っ
ていなづまたちは今、どんな存在なんでしょう……？」

電の声に雷は黙り込んだ。

「……どんな存在かといわれると難しい。いなづまたちは人間ですらないし、とても曖昧な存在だから……時々怖くなるのです」

天井に向けて電の手が伸びる。

「司令官さんは絶対に私たちを見捨てたりしない。それは信じているのです。それは同時に怖くもある。もし私が危険な状況になったら、司令官さんは命がけで助けに来てしまうかもしれない、それで司令官さんが危険になったら、いなづまはどうすればいいのです……？」

電は雷に聞かせようとしているのか、電自身への問いかけなのか、彼女自身にもわからなかった。

「カナリア鎮守府沖での戦いで、司令官さんを殺しかけてから、ずっと怖いのです。自分の被弾が司令官さんを殺すかもしれない。それがすごく怖い」

「電……」

雷の視線の先で手を握りこむ電。シーリングランプを握りこもうとしたところで、掌に灯りが納まるわけではない。

「それでも……戦うしかできないでしょ、私たちは。しれーかんを守るんですよ？」

「なのです。なのですが……」

「もう、今更なにを心配してるのよ！ 司令官もいるし、私もいるじゃない！ だから大丈夫、みんなで助け合えば何とかかなると思うわ」

「そうだと……いいのですが……」

その答えを聞いて雷は僅かに視線を落とした。

電の物憂げな瞳をどうすれば晴らすことができるのか、見当がつかなかった。

「笹原たーいさー！」

後ろから抱きついてきた文月に笹原は僅かによろけて笑った。小脇に抱えた制帽が揺れる

「こーら文月。人に飛びつかない！」

「えへへー、でも笹原大佐ならいいでしょー？」

「一応こっちは勤務中なんだから遠慮してよ、もー」

ポーズだけでも怒っておかないといういろいろ示しがつかないからそんな風にあしらうも、文月にはあまり効果がない。無垢な笑顔を向けるだけだ。

「まあ、廊下あるいて巡回してるだけだと勤務中といわれても説得力ないんじゃない？」

「川内もそんなこと言うかなあ」

文月を追うように現れた川内に笹原は肩をすくめた。

「ま、実際書類系統はハル君がいるから大丈夫なんだけどね」

「あー、高峰大佐の事務能力に全て押し付けてきたと」

川内がどこかじとつとした目線を送れば、笹原は全く気にしないように笑う。

「適材適所だよ。後方支援向き的高峰君の能力を活かせるならその仕事をしてもらう。彼が苦手なところは私たちが担う。それだけよ」
「よく言うよ。平時はいろいろダメダメ司令なくせに」

「くせにー」

「うっさい川内、あと文月も便乗しない。あとで覚えてなさい。御仕置き確定よ」

そう言うのと笹原は歩き出す。方向的には庁舎の玄関のある方向だ。

「司令官、外出するの？」

文月が首を傾げて言うのと、笹原が笑う。

「少しばかりお話をしにね」

その目の色に川内は見覚えがあった。

——あの色は、たしか。

「何かまた『別の世界』のお話？」

「まあねー」

あたりだ。と川内は歯を食いしばる。

「また何か危険な橋を渡るつもり？」

「だとしたらどうする？　一緒に地獄まで付いて来てくれる？」

体をクルリと回して彼女たちと正対すると、笹原は笑った、

あの眼の色は、前の冬、文月を連れて消えた前の日の夜に見た。

「川内の知らない笹原」の影がちらつく目。

——待つてるのは性に合わないんだよね。あたし」

川内がそう言うって首の後ろを掻いた。

「それに十分待った」

「——そう」

笹原が口角を吊り上げる。どこか挑発的な笑み。

「裏の世界に踏み込む覚悟はいいかな？　川内」

「とつくに覚悟は決めてるよ、司令官」

そう笑い返すと、笹原が踵を返した。

「ついておいで、川内。文月は残ってて、緊急の時は連絡するわ」

「はあい」

文月のいい返事を聞きながら笹原は制帽を被る。外は夕闇が近づいて来ていた。

「さて、川内。ここから先は片道切符だ。泥沼どころか底なし沼だ」

覚悟のほどは？　と聞かれて川内は至極真面目な顔で答える。

「何を今更」

その回答のどこがおかしかったのか肩を震わせてくつくつと笑う彼女。両手をポケットに突っ込み、軽く背を丸めて歩く彼女の後ろ姿を眺め、川内は笑った。

「言ったでしょ。とつくに覚悟決めてるって」

「そう、なら行こうか」

口角を鋭く持ち上げたどこか人を食ったような笑みが川内を射ぬく。

「ようこそ川内。内閣情報準備室は君を歓迎するよ」

「ふう……」

巨大な岩風呂に体を埋めて航暉は溜息をついた。5月頭だと夜の外は大分冷え込んでいるが、露天風呂に肩までつかっていると気にならない。おかげで湯気がかなり濃くなっている。

「全く、虫のいい話だ」

丸めたタオルに頭を預けて航暉は呟いた。虎徹の提案で近くの温泉に来たのだが出てきて正解だったかもしれない。本家にいたら息が詰まりそうだ。電たちも今頃女湯でキャツキャツと楽しんでいるだろう。内湯の窓が開いていて湯気をゆるゆると立ち昇らせている。遠くに雷の音が聞こえた気がした。自然に笑みがこぼれる。

「……相続問題なんてノイズに構っている余裕はないんだがなあ」

航暉としてはさっさとこんな問題を片付けたいところだ。月刀利

郁は航暉にとって家族を殺した仇のような存在である。その仇から横柄に家に戻れだなどと言われたところで戻る義理もないし、そもそも月刀本家は彼にとって家ではないから戻るも何もない。家の存続の危機など勝手にやっつてる状態だ。

それでも邪険にできないのには理由がある。

「特IIIロットがポセイドンインダストリーが義体製造……それも特型駆逐艦開発チームの人間が月刀本家長女……月刀本家がやろうと思えばいつでも手を出せる状況下、さて、どうしたものかな」

月刀家の力は陸軍に主体を置いている分、国連海軍には比較的影響は少ない。だからこそ航暉は好き勝手に動くことができていた。だが、軍産複合体に限っては話が異なる。

艦娘は人間サイズの義体に動力ユニットなどの外部艤装を接続して戦場に立つ。元は戦闘用アンドロイドやガイノイドだ。その技術は主に海軍ではなく陸軍の管轄だった。だからこそ、陸軍系の技術開発に明るかった月岡コンツェルン傘下、ポセイドンインダストリー社が大きく力を伸ばしている。

艦娘が艦娘として戦場に立つには最先端のメンテナンスと兵装、戦術のアップデートが必須だ。その技術はボディ製造元である軍産複合体に大きく依っている。そのアップデートに何かのウイルスパッケージを仕込むだけで艦娘は致命的な支障を抱えることになる。

実際にそういうことが起こるかといえば、可能性は低いだろう。ただ、その可能性がゼロでない以上、航暉は慎重にならざるを得なかった。

「本当に、どうしたものかな……、いつそ継いで俺が解体したほうが早いか？」

浮かんだ考えに苦笑いを浮かべた。そんな簡単に解体できるならとつくに解体できているはずだ。

「まあ、なるようになるしかないか。ん？」

諦めたように呟いた直後に物音に気が付いた。誰かが露天風呂に入ってきたらしい。

「……です」

「……少しだけ、一緒に話したいのです」

電の声に航暉は少し悩んだように間を取ってゆつくりと溜息をついた。

「……少しだけだぞ」

どこか笑った声に電は頬を赤らめた。湯気がゆるゆると間を埋めていく。

「司令官さんとお風呂に入るのって初めてですね」

「まずそんな機会ないし、いろいろ危ない状況だがな」

「えへへ。でもなんだか新鮮ねー」

雷が笑って航暉の隣を取った、それを見た電は一瞬だけ口をへの字にして反対側の隣を押さえる。その時に気が付いた。

「あれ、司令官さんその傷……」

「ん？ ああこれか」

左脇の古傷を隠すように航暉は手で押さえ笑った。

「昔へマした時のものだよ。今となっては笑い話だけだな」

航暉がそう言うのと少し視線を落とす。

「やっぱり、司令官さんのこと、いなづまはあんまり知らないのです」

「そうか？ 結構電たちは詳しい方だと思うぞ」

航暉はそう言って空を仰いだ。

「そうなの、です……？」

「相手に深入りしないのが生き残るコツさ。少なくとも陸軍だとそうだった。だからだれも聞かないし、聞いても誰も答えない。勿論俺もな。だから自分のことを話すことなんてなかった」

「そうなんだ……」

「言葉にすると嘘になりそうな気がしてね。あえて言葉にしてこなかった」

航暉はそういうとどこか切なそうな顔をした。それを見て電は思う。

それが少し悲しいと思うのは、間違っているだろうか。

「全部抱え込まなくてもいいのです、司令官さん。電たちが聞くのです」

「そうかい？」

切なそうな顔のまま夜空を見上げる航暉。

ゆっくりと月が昇ってくるところだった。

「虎徹さん」

「はい、どうされましたか雷様」

航暉が自分の居室（こんなところに部屋いらないんだけどなど当の本人はぼやいていた）に消えた後、そつと虎徹のところを訪ねた雷を彼はにこやかに出迎えた。いまだに燕尾の執事服のままだ。

「少しだけお話聞かせてもらってもいいかしら？……しれーかんと雪音さん琴音さんについて」

「……この古い耄れの昔語りで良ければ、喜んでお話いたしました。なにか飲まれますか？」

雷に椅子を進めて虎徹は小さなミニバーの前に立つ。

「それじゃ、ホットココアとか、ありますか？」

「勿論ございますとも。数分お待ちいただけますか？」

「わかりました」

虎徹は吊戸棚からココアの缶詰を取り出すときれいに磨かれた小鍋を火にかけ砂糖——ブラウンシュガーの物がいいものらしい——と牛乳、ココアパウダーを練り合わせていく。鍋と木べらの擦れる音と火の音が優しく響いた。

「虎徹さんはしれーかんの教育係だったの……でしたっけ」

「敬語など必要ございませんよ。——航暉様たちご兄妹はとても聡明でいらっしやいましたから、教えることなどあまりなかったのでございますが、ずっと一緒にいろんなことをしてきました」

ゆつくりと牛乳を鍋に注ぎながらココアを伸ばしていく彼の後ろ姿を眺め、雷はその先を待った。言葉と言葉の間を調理の音が埋めていく。

「先代さまは日本国自衛空軍中将でいらっしやいましたから、ご多忙でございました。そのため琴音様や雪音様、航暉様のごことは奥様と私に託して働きづめだったのでございます。それでも皆様聞き分けが

よすぎるぐらいしつかりしていらつしやいました。特に航暉様は琴音様や雪音様をとでも気にされていて、兄として一人前であろうとしていらつしやいました。決して弱音を吐かず、強くあろうとなさっていた。おそらく航暉様は昔から誰かを守る存在でありたいと思っていたのでございましょう」

無地のカップにココアを注いでソーサーと一緒に雷に差し出す虎徹。そしてテーブルを挟んで雷の向かいにあるスツールに腰掛ける。そつとカップに口をつけると上品な甘さと暖かさが広がった。

「お口に合いましたか？」

「ええ、こんなにおいしいココア初めてかもです」

それを聞いた虎徹が笑みを深めた。

「琴音様もこのココアがお好みでございました。よく作ったものです」

どこか遠くを見通すような目が細められた。

「雷様は月詠家の家紋をご覧になったことはございますか？」

「? ……いいえないです」

それを聞くと虎徹は袖のカフリンクスを外した。それを雷に手渡す。

「これは……蝶？」

蝶が翼を畳んだような意匠が見える。だが蝶というわけではなく、後ろ翅には葉のようなものが見えるからなにかの花を蝶に見立てたものらしい。

「変わり菊飛び蝶と申します。それを囲む薄い三日月型の月輪がちりんと組み合わせたものが月詠家の家紋でございます。この紋は代々月詠家の男子が継いできたものでございまして、航暉様はいつかこれを継ぐことを幼心にわかつていらつしやいました。それがどれだけ重い事かわかつていらつしやいました。変わり紋とはいえ菊の紋を持つ〃月〃の家の長男であること。それは孤独ということでございます。生まれながらにして誰かの上に立つことを課せられていたのでございます」

そう言うと虎徹は視線を斜め下に走らせた。

「誰かの上に立つたための心意気、知識、振る舞い。世では帝王学と呼ばれる類の教えを受け、それを航暉様は余すことなく吸収され、立派に振る舞われた。先代様の背中を追うように強くなられた。強い中にやさしさを持った強いお方になられた」

ですが、と目を細める虎徹。悔恨のような色が見える。

「月刀家にすべてを奪われてから、変わってしまったのでございます。航暉様は月刀家を怨んだ。琴音様や雪音様が死んでないと確信を持って自ら死地へと飛び込んだのでございます」

「……確信を持つてってどういうこと？」

「つけていたはずの髪飾りが見つかったのでございます。骨まで溶かす強酸の海”ならば溶けているはずの雪音様のバレッタが車の中から見つかったのです。あれは、わざと置いたものです。雪音様が生きている可能性がある、私めはそう航暉様にお伝いました」

それを言って、虎徹は僅かに躊躇うような間を持った。

「……それからの航暉様の行動理由は単純でございました」

「……妹さんを助けること、ですか？」

「それもございます。ですがそれよりも大きかったのが——
復讐でございます」

息を飲む。

「しれーかかんが……復讐？」

「何もかもを失ったのです。月詠航暉という存在さえも死んだことにされ、大切にしていた家族の全てを失ったのでございます。それを航暉様は許せなかった。復讐が何も生まないことを航暉様はわかっておられます。それをしても琴音様や雪音様が報われないことも、その場にいれば航暉様の行いを咎めるであろうこともわかっておられます。それでも航暉様はその怒りを飲み込むことはできなかつたのでございます。……だから、航暉様は月刀家の掌の上で踊って見せたのです。そして捨て駒を承知で前線部隊に飛び込んだのでございます」

涼やかな虎徹の目元は乾いている。それでもその言葉には強い感情が乗っていた。

「本当ならば私めが止めなければならぬことでございました。それ

でも航暉様を止めることはできなかつた。航暉様のお気持ち痛いほどわかるのでございますよ。私もその時は、……いえその時『も』でございませぬ、復讐をしたくて堪らなかつたのでございます。そして私は今もその感情を超えられずにいるのでございます」

そう言うのと寂しげな笑みを浮かべる虎徹。どこか悲しそうな顔をする雷を見てその寂しさを深めたようだ。

「今でも、月刀家が憎くて堪らないのでございます。先代様を亡き者とし、琴音様と雪音様を連れ去り、航暉様を戦場に追いやった月刀家が憎くて堪らない。航暉様が領きさえすれば、私は躊躇いもなく、人を手にかけるでしょう。それほどに憎くて堪らないのでございます。航暉様はそんなことを許さないのですが」

「当然よっ！」

椅子が後ろにボタンと倒れた。カップの中でココアが波立った。声を荒げてしまい、雷は少し後悔する。それでも、言わねばならない。「しれーかんは、許すはずないわ。しれーかんは、しれーかんは……家族に人を殺せつて言える人間じゃないっ！」

雷の頬をあとからあとから流れる涙が濡らしていく。なにが悲しいのかわからないままに泣いていた。

「しれーかんは私たちにしれーかんが感じた痛みを背負うことすら、許してくれない。そんな人が、あの人があることを許すはずがないわ！」

「……その通りでございます」

虎徹もいつの間にか目尻を濡らしていた。

「雷様、どうか一っだけ覚えておいていただきたいことがございます」
雷は続きを静かに待った。

「……どうか、航暉様を一人にしないでいただきたいのでございます。航暉様はおそらく月刀とのつながりに踏ん切りをつけるつもりで帰ってこられた。それはすなわち、航暉様にとっての復讐にケリを付けるということに他なりません。それが終わった時、航暉様を一人にしないでいただきたいのでございます」

目を細める虎徹。雷を見て笑った。

「今の航暉様にとって雷様と電様は生きる理由そのものでございます。生きる理由に去られては、人はただ下り坂を転がる小石に過ぎないのでございます。ただ転がり落ちるところまで落ちてそれつきりになってしまふ。だから雷様、どうか航暉様がことを終えた後、一人にしないでほしいのでいただきます。あなたたちがいれば、航暉様は帰ってこられるのでございます」

それを最後に虎徹は黙り込んだ。

「……しれーかんに、敵討ちなんてやらせないわよ。私が止めるもの」
雷はそう言つてココアを飲みほした。

「まさか艦娘を連れてくるとは思わなかったよ、笹原大佐」

「私も思つてなかったわよ。まあ、これはそこまで優先度の高い事案じゃない。違う？——井矢崎莞爾少将殿？」

井矢崎と呼ばれた男が肩をすくめ、銀色の飾緒が揺れた。

「まあ、君たち日本政府にとってはそうかもしれないがね、こちらとしては結構一大事なんだよ」

ちいさな部屋だが声が響くことはなかった。防音用の特殊な壁材が張られた部屋。横須賀基地の地下にこんな部屋があるのを川内は全く知らなかった。どこか潮の匂いが廊下に漂っていたからきつと海まで通じているのだろう。

そんなことを川内が考えていると、井矢崎の目線がきつと走った。

「……その部下は信頼できるんだらうね？」

「そこは互いを信頼しましょうよ。信頼関係あつての仕事でしょ？」

井矢崎莞爾——西部太平洋第一作戦群副司令長官。階級は少将。五航戦を率いるトップだったと川内は記憶していた。対深海棲艦戦の緒戦、水上用自律駆動兵装が登場する前に日本の補給線を文字通り死守した日本国自衛海軍の「智将」、井矢崎海将補の息子にして、その血を強く引いた優秀な軍人。

その少将相手に大佐である笹原がタメ口で対応するなど普通ならありえないはずだ。だがこの特殊な状況下においては成立しうる。

内務省直属の防諜部カウンターインテリジエンスユニット、内閣情報準備室ICIR。そこに所属する非公式諜報員——スクラサスとの対話なら。

「それで？ どんな案件がお望み？」

「……CV—THOIX、わかるな？」

「景鶴のこと？」

真っ先に反応したのが川内だ。

「そういえば川内は懇意だったね、改大鳳型、いやもはや景鶴型といふべきかな。その一番艦の景鶴だ。「委員長」が持つてるんだっけ？」

「今は別部隊に回してあるよ。こちらの瑞鶴がお姉さまと呼んで慕っているその子だ」

複雑な経緯があつて艦装丸々換装したんだっけと思ひながら川内はその先を聞いていた。

「六連星のことも一応はケリついてたはずよね。今更それを蒸し返して何？」

「片付いたのはほんの一部といったところだというのを私から説明する必要はないはずだ。こういうのはキミの方が専門だろう。スクラサス」

「まあね、どれも細かい問題が山積してる状況なだけだけれども。時間をかければいいだけの話でしょう？」

「その時間が無くなってきた、そういう話だ」

「——ろくでもないことを考えていることは把握した。で？ それを実施することの「日本国政府」へのメリットは？」

「水上用自律駆動兵装という一大市場を守れる。それは大きなメリットだろう?」

井矢崎が両腕を広げる。どこかわざとらしい軽薄さが鼻につく。

「水上用自律駆動兵装は現状で数が必要だから市場が急成長した分野だ。それでもいつか市場は縮小に向かう。だがそれが消え去ることはおそろくない。深海棲艦が存在する可能性が以上、ある程度は必要になる。その市場を日本が守る。そのメリットは計り知れないと思うが?」

「それでわざわざ私にコンタクトを取ってきた理由は? 私は軍産複合体関係だと専門外なんだけど? スキュラとはコンタクトがあるはずよね?」

その質問を予期していたのだろう。井矢崎はよどみなく答えた。

「キミにはある人物を追ってほしい」
「人物?」

「我々は『グラウコス』と呼んでいる。国籍、年齢、性別全て不明。その姿をまともにとらえたものは存在しないが、ただ一つ明らかなのは、記憶の抽出から疑似記憶の作成、同化までを同時に行うスタックスネット型のウィルスを作成したということだけだ」

「……まさか月刀大佐の記憶修正に使ってたあれ?」

「そのマスターピースの作成者といわれている」

「それが景鶴にどうかかわってくるわけ?」

「……彼女が『それ』に感染している可能性が高い」

そういうことか、と笹原は笑った。

「つまりその作成者が景鶴の情報を抜いて国外に売り渡す可能性が高まった訳だ。私は景鶴の電腦の情報が改竄される前に犯人を捕まえればいいという所かしら」

「そういうことになるな。もちろん保険はかけておくが、最終手段だから可能な限り使用は避けたい」

「保険の請負先は?」

「キミの知ってる人だよ」

「あー、なるほどね。井矢崎さんが嫌がるわけだ。」

受けてもいいけど、こちらからもお願いがあるわ」

「聞こうじゃないか」

そういう井矢崎に小さな外部記憶装置を渡す笹原。

「悪いけどここにがあるものを確保してほしい。貴方ほどの権力があれば片手間の仕事だと思ってくれる？」

その外部記憶装置を首の後ろにあてがうと、小さく笑う井矢崎。

「キミも物好きだね。月刀准将はそんなに魅力的かい？」

「勘違いしないで。彼は今後に必要な人材だからよ。この戦争の鍵でもあるけれど、戦後復興期にも必要な能力を持っている」

「艦娘の地位向上のために、かい？」

「ご想像にお任せするわ。できるわよね？」

「期限にもよる」

「二か月。それ以内に押さえてくれるなら景鶴の関係は受けもつわ。もつともあなたの依頼の期限がわからないのが玉に瑕だけど」

「諜報員にとってはいつも通りだろう？」

「それを言っちゃあお終いよ、井矢崎さん」

やれるだけやってみるわ。と言って背中を向ける笹原を川内が慌てて追う。

「何が何だかわからなかったんだけど？」

「でしようね。でもあんたがわからなきやいけないのは一つだけだよ、川内」

笹原が笑う。潮の香りが鼻を突く廊下に律動的な足音が響く。

「早くしないと艦娘が一人味方に殺されるってことだけだ。悪いけどこき使わせてもらうよ。事前研修も一切なしだ」

笹原が、否、スクラサスが動く。

「それで、航暉君は帰ってきたわけだ。受ける気はないんでしょう？
お父様の提案」

「まあな」

殺風景な部屋で航暉はデスクに体重を預けるように立っていた。手にしていたウイスキーのロックをデスクに置く。そうして視線を上げると目の前には航暉の義姉、唯香が立っていた。明度の低い照明に照らされた部屋でも彼女の白衣は大きく目を引く。

「いいの？ 殺されるわよ？」

「滅ぼしたはずの家の男に跡継ぎの補佐を頼む時点でもう月刀家も死んでるよ」

黒のベストに差した万年筆をいじりながら航暉は小さく笑った。

「平菱、飯田、六連星……いくつもある軍閥系企業の中ではトップクラスの強さを持つていたはずの月グループが、もはや横並び。月刀の地盤だったはずの北陸、信越地域ですら、防衛用レールガンの製造入札で飯田インダストリーグループに押し負けた。——終焉が近いんだよ、月の終焉が。10年も前なら藤原道長ばりに名歌を詠めたかもしれないがね」

それを聞くとクスリと笑う唯香。

「この世をばわが世とぞ思ふ望月の 欠けたることもなしと思へば——

——満月の時期はどうに過ぎたってかい？」

「言うまでもないだろう。すでに財閥、軍閥自体が斜陽なんだよ」

言うねえと笑う唯香。彼女は壁際の本棚に寄りかかるようにしてへらつと笑った。

「そういう航暉君も軍閥の身でしょう？ 月詠にしても月刀にして
も」

「それがどうした」

「それがどうした、ねえ……軍閥の影響は少なからず受けてるでしょうに。そんな若さで准将にまで上り詰めたのが自力だとも言うつもり？」

「まさか、だが、軍閥というシステム自体が終焉に向かっているのは間違いない。後始末に追われる前に高跳びするだけさ」

「私にとってはそこまで終焉に向かっているととは思わないけどねえ」

軽薄に笑った唯香に航暉は笑い返した。

「そうだろうな。——そろそろ茶番はやめにしようぜ、スキュラ」

驚いたように目を見開く唯香。それがどこか滑稽で笑みを深めた。

「唯香お姉さまは生粋の金沢弁をしゃべるんだよ。……ゴーストハックして動くにしても、自分に意識を寄せ過ぎたな？」

「……ふ、案外早くバレたね」

「敵性基本必須情報収集の重要性はあんたが説いてたんだぜ？」

航暉の言葉に唯香——中身はスキュラだが——が笑う。

「それで、ずっと滑稽だと思いつつもずっと話してたわけ？ 物好き

ね。でもなんで気が付いていることをばらしたの？」

「あんたに欺瞞フェイスインフォメーション情報流したところで意味があるか？」

「かっつけてくれていると素直に受け取っておくわ」

「で、何の用だ？ 冷やかしというわけでもあるまい」

唯香の頬がにいと吊り上がる。

「『白夜の鐘』事件、覚えてるね？」

「アリュウシヤンでの戦術核の『誤投入』事件か。またあんたが蒸し返してるらしいな」

「あら耳が早い。誰から聞いたの？」

「ステラが珍しく饒舌になってね、教えてくれたよ」

珍しいこともあるのね、と唯香が肩をすくめた。

「まあいいわ。その時の結果覚えているかしら？」

「核兵器を投入したところで深海棲艦には一定以上の効果は認められず、戦後処理の困難さを考えれば使用する意味は薄い」か？」

「そうだね。あの投入が早計だったってことで国連議会のお飾りを

「悪い条件じゃないと思うけど？ 君は動けなければいい。それだけだろう？ それに私達はある意味運命共同体だ。どの道二人ともこのまま行けば中央戦略コンピュータに殺される運命だ。君も私も、デンちゃんたちも」

航暉は黙りこくつてしまう。無音が満ちて誰も動かない。その間隙にウイスキーの氷が崩れる澄んだ音が響いた。それを合図にするかのように航暉が口を開いた。

「……いいだろう。今回は乗ってやる。ただし、ひとつ条件を追加だ」「言ってみな」

「マルチサーバーを一台よこせ。軍用ラインでの使用に耐えうるものを、防諜用のマルチパックB2装備も合わせて一週間以内に回せ」

「何に使うのかはわからないけど、いいでしょう。明後日にはアドレス送るわ。プライベート用にしておけばいいわね？」

「交渉成立だな」

「まさか本当に承諾するとは思ってなかったわよ」

「俺なんか手を出さなくとも彼が何とかするさ。——守りに関しては誰よりも強いやつだ」

それを言うとき唯香は目を細めた。

「あんたが他人を信頼するなんて珍しいじゃない。ステラといい、ガトーといい変わったわね、明日は槍でも降るかしら？」

「弾丸なら日常的に降ってるがな」

航暉の言葉に苦笑いを浮かべる唯香。

「そうね。……まあいいわ。君の離反が上手くいくことを祈っているわ」

唯香が部屋を去る。彼女はこの会話の記憶は覚えていない。スキュラが疑似記憶を囁ませるはずだ。

「……これで、決着をつけられる、か」

汗をかいたロックグラスを手に取り、口に含む航暉。

「……水割りになってやがる」

勝負は明日。航暉はそう決めてウイスキーを飲みほした。

とんやりまっし

モーニングコールで起こされるとすぐに客間には寝起きの冷たい飲み物が運ばれてきた。氷の入ったグラスに注がれたグレープフルーツジュースが涼やかだ。それを飲んでパジャマからいつものセーラーに着替えたタイミングを見計らって洋風の朝食が運ばれてくる。牛乳がついてるあたり、航暉が少々口を出したのかもしれない。豪華なのですと電が思わず呟く程度には量があった。焼きたてらしいパンを食べていると部屋に虎徹が入ってくる。

「電様、雷様、お食事の後から月刀家当主利郁様との御面会をお願いいたします」

「……しれーかんからの指示ね？」

「左様でございます」

雷の声に頷いて見せる虎徹。電の顔も引き締まる。

「司令官さんは、何をする気なのです……？」

「雷様から私の話はお聞きになられていますね。航暉様は――」

「本当にええがん？」

唯香の金沢弁の問いかけに航暉は笑った。

「この家には未練もありません。ただ、親父殿に確かめたいことがあるだけで、それさえ終わればこの家に用はない」

「それでも、あんたにとってここは家やないん？ 針の筵でも帰る家はここじゃないがん？」

「唯香さん」

航暉は国連海軍の第一種制服の襟を正して笑った。

「私は海軍の人間で、今はもう船乗りです。船乗りは船に還る。もう私は海の人間で、海には私が守るべき人がいる。それだけです」

「でも人は陸から足を放しては生きていけないのよ？ ずっと海の上で生きていくつもりなん？」

「それでも、ここに居ては私は終われない。ずっと、憎しみだけを背負い生きていくことになる。——それだけは、ごめんだ」

デスクに置いた制帽を取り脇に抱えた。

「まったく、頑固な子なんは、昔からやね」

そう言つて唯香はポケットから何かを取り出した。黒いラバーのキーホルダーのついた鍵。

「そこまで言うならとことんやりなさい。外のガレージのミニ、私の私物だけど使いまっし」

そう言つて航暉に鍵を握らせた。

「そこまで手を尽くしてくれるとは意外だな」

「月刀の人間はいつまでも月刀の人間やじ。本人が望んでも望まなくとも本家の縁は切れん。『月』のレールは強固だから、わざとそれを外れるのは難しい。わたしは切る気もないんやけどね」

どこか寂しそうな笑みを浮かべた唯香は彼の目を見て目を細める。彼の手を包む彼女の手は少々冷えていた。

「自由に生きとる航暉君が結構羨ましいんよ。だからせめて応援させてほしいげんて。ほら、しゃんとして」

そう言つて航暉の背中をそつと押した。どこか柑橘系のコロンの

匂いが僅かに彼の花をくすぐった。

「ほんと、いつの間にもやら強くなったね、航暉君————
いってらっしゃい」

航暉は驚いたように目を見開いて半身だけ振り返った。

「唯香さん？」

「早く行きなさい、電ちゃんたちが待つとるんじやないがんね」

航暉は部屋を出る。廊下を進めば虎徹に連れられた電たちが見える。航暉は頷いた。

「虎爺」

「はい、航暉様」

「虎徹は口を挟まないでくれ。これは俺の戦いだ」

「存じております」

「ん」

航暉が奥へと進む。畳敷きの廊下に切り替わった。そのまま航暉は進んでいく。その背中を電が不安そうに見上げた。

「司令官さん……」

「安心しろ、電。大丈夫だ」

そう振り返って笑う航暉はそれでもどこか殺気立っていて、それが電の不安を膨らませる。

「さあ、閻魔殿に入るとしよう」

一つの部屋、ここの襖だけ作りが豪華なのがわかる。欄間の釘隠しに浮かぶのは菊水に三日月の紋、月刀家家紋があしらわれている。――

――おそらくは面会、いや、謁見のための大広間。その前で航暉は正座の姿勢をとる。膝を離しつま先を立てた、柔道の坐礼のような姿勢だ。一步引いた位置に虎徹が立って控える。その横に電と雷も正座をする。襖が開かれる。

その大広間の反対側の端に一人の老人が据わっているのが見え、その目が航暉たちを視る。黒緑とでもいうのだろうか、濃い色の和服に白鞘の短刀を腰に差し、銀煙管を手にする姿はまるで大正時代から抜け出てきたようにも見える。骨と皮ばかりと言うようにも見えるがその目だけが爛々と光って見えた。

その視線のほかにもいくつかの視線が集まった。利郁の視線を通すように横向きに座った男たちの視線だ。その中でも利郁の右側すぐ近くに座った男の舐めるような視線が刺さる、暗緑色のスプレッドダブルの制服。——日本国自衛陸軍第一種軍装、襟の階級章を見る限り、大佐だろう。

「それで、月詠の」

低いしゃがれた声。それが地を這うように響く。その声に一瞬で気圧されるのを感じて電は唾を飲んだ。これが月刀家第七十二代当主——月刀利郁。

「昨日の答えを聞かせてもらおうか、——陸に戻る気はないか、月詠の」

「それは昨日答えただろう、親父殿」

航暉の声がいとも以上にギンと張ったものになる。

「消した家筋に頼らなければ未来も掴めないようなのを継ぐ気はない」

「ふん、強情な小童よのう」

銀煙管の吸い口を口に含む利郁。鬼の顔が掘られた銀細工が陰影強く光る。外の庭園の池の水面に反射して、天井に不規則に揺れる水文が彼を照らしていた。

「その生意気な目ン玉、祐治にそっくりよ。情に流さるる愚か者の目よのう」

「ほう、愚か者かね」

「先見の明がないとでもいうかね。守るべきものを間違えとる目よ。大いに惑わされ、大いに馬鹿を見て、阿呆を踊る目よのう」

雷は虎徹の握った手が震えるのを横目で見る。虎徹が動くよりも先に航暉が口を開いた。

「違いないだろうな。その結果が独善的な独裁者に殺された訳だしな」

「口を慎め、月詠が」

軍装の男がそう高圧的に言った。

「これは失礼、月岡家ご出身の延近お兄さま」

皮肉な笑みに軍装の男が目に見えて怒る。延近と呼ばれたということは、この男が月刀家次代当主、月刀延近か。と雷は理解する。

「貴様……」

「やめんか延近」

立ち上がりかけた延近を利郁が止めた。

「兄弟喧嘩をする年頃でもあるまい。……のう航暉よ。我々が守るべきものを履き違えてはおらぬか？ 儂にはそれが心配でならん」

「ほー、何を守るべきだ、月刀は」

航暉の挑発的な声が広間を渡る。それを見た利郁が白いひげの向こうで笑ったようだった。

「我々が守るべきは、国か、民か？」

「民であるべきだろう」

航暉は即答。それを聞いた延近が薄ら笑みを浮かべる。

「マキャヴェツリを読めよ、航暉サン—— 人間は、恐れている人より、愛情をかけてくれる人を容赦なく傷つけるものである」 そうだよ？」

「だから 〃民衆というものは頭を撫でるか、消してしまいか、そのどちらかにしなければならぬか？ くだらん」

一蹴して航暉は視線を利郁に戻した。

「ロスピエール政権化のフランスしかり、旧ソビエトしかり、恐怖政治を進めた大国が須く滅亡しているのを見てもまだ学ばないのか。そうして誰かを支配し、反対者を潰して得る安寧になんの意味がある」 「月詠の者たちはそこを履き違えておるのだよ。我々が守るべきは国に他ならん。民は強い、守らねばならないほど弱くはない。我々が守らずとも生き残る。ただ、国家は弱いぞ」

利郁はそう言うと言い煙を吐きだした。

「だが、国家というものは現代に於いては必須だ。国無くせば無辜の民が窮地に立つ。民なくして王はありえんが、国無くして国民はありえん。国を無くした難民がいかに惨めか、お前も知っているだろう」 利郁は足を崩し、立膝の姿勢を取る。

「民を守ればその中での争いに国は倒れる。国が倒れば困るのは守

るべきとする国民だぞ。それでも民を守るといえるかね？」

「言えるとも」

航暉は再び即答。

「国は人間社会を動かし循環させるために作られたシステムだ。システムは最適化オプティマイズされ続け、常にアップデートされる。そうして移り変わっていくだろう。人の価値観が移り変わり、社会が変わっていくように、国家のあり方自体も変わっていく。求められないものを保つことは権力者のエゴに過ぎない。違うか？」

「だというならば、お前が着ているその軍服でお前は何を守っている？ 国家の集合体という権力システムではないのか？」

「それを支える民をさ」

平行線の言葉が行きかう。互いの間合いを測るような、敵意の籠る言葉だ。

「月詠の、お前は捨てることも捨てられることも恐れているだけだ。違うか？」

航暉はそれを聞いてにいと口角を持ち上げる。答えはない。それを見て利郁も笑みを深めた。

「だから間違うのだよ。捨てることを覚えねば、誰も救えん。誰も捨てられぬ強欲が、一人前なことをほざくなよ、月詠の亡霊に憑りつかれただけの人形が」

「間違えてるのはどっちよ！」

響くのはこの場には場違いなほどに素直な怒声。航暉が横に目を走らせれば立って利郁を睨む雷の姿があった。

「そうやって人を使い潰して！ それで国家を守るだなんて聞いて呆れるわ！」

「雷、黙りなさい」

「でもしれーか——」

「黙れと言っている」

航暉の気迫が増し、雷の喉が干上がった。ゆっくりと立ち上げれば、司令長官を示す金飾緒が揺れる。

「司令官、さん……？」

「電、雷、二人は動くな」

航暉の周りの空気がギンと張る。

「そうやって売りさばいたんだな、雪音と琴音を」

「ふん、そうやってこたわるからお前は未だ月詠の亡霊に憑りつかれただけの人形に過ぎんのだ」

利郁は笑って何かの合図を出した。

「最後にもう一度聞こう、月詠の。陸に戻る気はないか？」

「ないね」

「そうか、残念だ」

直後、いきなり状況が動いた。

真っ先に動いたのは虎徹だった。立ちっぱなしの雷の足を払う。直後窓ガラスにヒビが入ると同時に何かが床に突き刺さった。

——弾丸!?

電は反射的に床を蹴り目の前の大広間——正確には広間と一続きになった次の間なのだ——に飛び込む。その刹那に航暉が前に飛び出した。制服の右袖から飛び出したナイフが航暉の手に握られている。航暉に飛びかかろうとした使用人のこめかみにナイフの柄を叩き込んだ。直後全身が痙攣するように背を逸らした使用人がどうと倒れる。

「全部アンドロイドで省力化か。質が落ちたな。——言うこ

と聞かなきゃ女子から狙撃とは趣味悪いぜ親父殿」

「女子か、ふん。人間に付き従う人形に情をかけているだけ——」

どこか引きつった笑みを浮かべる延近。直後にその言葉が止まる。耳を押さええてうずくまる延近を見下ろして航暉が静かに言った。後ろの柱に数瞬前まで航暉の手元にあったはずのナイフが刺さっていた。

「——俺の部下を侮辱するな、安全圏でふんぞり返るしか能のない奴が」

航暉はそう言うのと興味を失ったように延近から目を逸らし、利郁を見据え、笑みを浮かべて見せる。

「電・雷両特務官、無事だな？」

外部向けの呼び方に電と雷は顔を上げる。

「なのです」

「しれーかん……何する気？」

「先の狙撃を明確な敵対行為と認め、国連軍規約第52条3項に基づく自己防衛行動を許可する。各自の判断で反撃してよし」

航暉は左脇に吊っていたホルスタから拳銃を引き抜いた。FN
Five seven——国連海軍制式拳銃。

「月詠の血を舐めるなよ、月刀」

航暉はそう言って利郁に銃口を向けた。

「しれーかん！」

雷がそう言って叫び、引き金が躊躇なく引かれ——弾は飛び出さず、スライドが後退して止まる。

「え？」

「……撃ち殺して終わるとでも思ったかい？」

航暉は雷の方を見て笑った。

「貴様、父上になに——」

「やめんか見苦しい」

利郁が延近の声を叩き切る。

「全く、お前の言う通りだ。皆、質が落ちた。誰もかれも必要な時に動かん」

「それがあんたの選択の結果だろう」

拳銃のマガジンを実弾入りのものに取り換えながら航暉はどこか可笑しそうに笑った。

「すでに軍閥は斜陽だ。自らの代で没落していくのを当事者として眺めていくがいい」

だから、それ以上は何もせず去る。

「電、雷。用事は済んだ。撤退するぞ」

航暉が踵を返す。

「その強情がいつまで続くか、楽しみにしているぞ？ 月詠の」

「そつくりそのまま返すぞ、月刀の」

僅か5分。航暉が背を向けて月刀本家を去る。おそらく二度と足を運ぶことはない。

「本当にあれでよろしかったのですか？」

4人乗りの車を走らせながら、航暉は笑った。

「いいんだあれで。あれ以上やっても後味が悪くなるだけだ。俺や虎爺が手を出さなくとも早晚月刀家は瓦解する」

「そうではありますけど……」

「ついでだから一発でも殴ってやればよかったかい？」

どこかスツキリとした顔でそう言う航暉。その助手席で虎徹は目を伏せる。

「……これでよかったのか、正直わからないのでございます」

「結果としてはこれまでと同じと言ったら同じだ。俺は海軍で好きに動く。月刀家が潰れようが残ろうが、もう正直どうでもいい。それに、あの時の亡霊は、もう祓ってもらったからな」

ルームミラー越しに後部座席を見やり、航暉はそう言った。視線を

サイドミラーに移せば南の山から雲が降りてきて来るのが見えるので、近々また雨が降るのだろう。それにすこし憂鬱になりながらも航暉は続ける。

「本当は乱闘騒ぎ事態を起こすつもりもなかった。向こうが変な用心棒を雇ってなければだけだな。雇うならもつとましなスナイパーでも雇えよっていうお粗末展開だったから」

「私ですら追いつけましたから」

「ッすらッとか言うねえ。師匠殿」

「師匠？」

後ろの席から疑問の声飛び。ルームミラーに首を傾げている雷の姿が映る。

「話してなかったか。接近格闘術で俺は虎爺に一度も勝ったことないんだよ」

「航暉様の強みは接近戦ではございませんから……」

苦笑いと照れ笑いの中間のような笑みを浮かべて虎徹はそう言った。

「待って、しれーかんそこまで格闘戦弱くなかった、というより普通よりかなり強い部類だったと思うけど……」

「天龍さんと杉田大佐を同時に相手して互角じゃなかったのです？」

「あの時は天龍も杉田も俺を殺さんように手加減してたし、杉田はそもそもライフルマンで接近戦得意じゃないだろうが」

航暉はこともなげに言うが正直信用できないと思う雷電姉妹。杉田のあれが接近戦得意じゃないならなんなのだろうか。

「虎爺には次会った時でも手合せしてもらおうかい？」

「何ならこの後でもお手合せいたしましょうか？」

「次までに受け身を徹底的に叩き込んでくよ」

航暉の声を聞きながら雷と電はまじまじと虎徹を眺めた。

「……そんな風には見えないのです」

「それが私にとっての褒め言葉でございます」

虎徹はそう言って自らの手を眺めた。

「いくら腕を磨いても、それを使った時には誰かが傷付いているので

ございます。技術を持つものに求められるのはその技術を振るわなければならぬ事態を回避する能力でございます。喧嘩は売られなければそれでいいのでございます。武道をわきまえるものが喧嘩を売られた時点で一つ負けがつくようなものでございます」

虎徹の言葉を聞いて目を細める航暉。

「なので今回は我々の負けでございますね」

そう言われて彼は肩をすくめた。

「喧嘩両成敗だろ」

いる

「きれいな街なのです……」

「戦略的価値が薄いのと歴史的な建造物が多いってことで戦闘地域から外されたからな、焼けずに残ってるのさ」

航暉はそう言って石畳を鳴らして曇天の下を歩く。金沢は梅雨にはまだ早い時期だが、このころは曇天も珍しくない。少々肌寒いのが難点である。そのせいで航暉の白シャツはかなり目立つ。それでも、国連海軍の高官用軍服なんてものを着ているよりははるかにましだ。良くも悪くも目立つのを避けるために制服の上着とワイシャツにつけられたソフト肩章は早々にバッグの中に仕舞われた。

「しれ……航暉さんはあれ何なのですか？ あの石畳からによつきり生えてる石、時々ありますけど……」

電が言いなれてないように航暉の名前を口にする。

「ああ、がつぽ石だ。冬は雪が降ると下駄の歯の合間に雪が詰まるからアレを使って雪を落とすんだ」

「へー、よくできてるのねえ……」

赤土のような色合いの塀に囲まれた狭い路地を進む。横須賀には明後日帰ることになっていた。虎徹を金沢駅に送った帰りだ。航暉が「知り合い」に伝手を頼んであるからまず無事に海外の目的地にたどり着けるはずだ。

「あとは高峰とか暁たちにも何かを買って帰らなきゃな」

「金沢だと何があるのです？」

「金沢の土産って安いのがあんまりないんだよなあ、とりあえず落雁でも買って帰るか。あれなら大量に買って帰ってみんなでシェアできる」

そんな会話をしながら歩いていると航暉の後ろから声がかかった。

「あれ、つつきー!? つつきーじゃん!」

ヒールが石畳を叩く音を響かせながら、後ろから女性が駆けてく

る。結構ふくよかな胸に薄いグレーのサマーセーターが腰を引き締めて見せていた。ショートボブがよく似合う女性だ

「航暉くんだよな？ 覚えてない？ 大昔に北陸支部のスカウト連盟の会合であつたきりだけど……」

とつさに間に割り込んで航暉を守ろうとした雷を手で押さえつつ、航暉は記憶を必死に手繰る。

「……………宮下瑞葉？」

「覚えててくれたんだ！ 何年ぶり？ 15年くらい？ うわー、おつきくなつたねえ」

かなーり一方的にはしゃぐ女性を前に航暉たち一行はたじたじた。

「えっと……………」

「あれ、こつちの子どもは親戚の子？」

宮下瑞葉というらしい女性は雷たちと視線を合わせるように膝を折った。

「そんな感じだ、こつちが電でこつちが雷。こつちは宮下瑞葉さん、昔俺がボーイスカウトやってた時に同じ地区のガールスカウトに所属してた人だ」

「どーも！ 宮下瑞葉です」

「ど、どうも……………」

「うん、合格！」

電たちには何が合格なのかわからなかったが、瑞葉は領いて立ちあがった。

「つつきーこの後時間ある？ せっかく会つたんだしお茶の一杯でも飲もうよ」

「俺は構わないが……………電たちはいいか？」

「なのです」

「会つたの久しぶりなんでしょ？ 縁は大切にしないと」

「決まりね。10分ぐらい歩くけどコーヒーの美味しい店あるんだ」

通信が入って高峰は眉を顰めた。

「……パラオ？」

それを聞いた青葉が何事かと顔を上げる。昼下がりの空はどこかくすんだ青色だ。それを眺めながら通信を聞く。

「……了解した。動ける人員を確認する」

「出動要請ですか？」

「パラオ泊地が深海棲艦に包囲されたそうだ」

「パラオというと……589戦隊ですか？」

「そうだ、東郷大佐の管轄だな。東郷先輩の舞台なら普通に突破できるだろうにわざわざ支援要請とはよっぽど問題があると見える」

「東郷大佐……？ お知り合いの『委員長』とは別の方です……よね？」

今横須賀にいたはずの悪友（高峰がほぼ一方的にそう呼んでいるだけであるが）の苦勞で疲れ切った顔を思い出しながら青葉が首を傾げれば、高峰は苦笑いを浮かべる。

「東郷徹心大佐、本名よりも『奇術師』東郷といえはわかるんじゃないか？」

「……あー話だけは。演習で魚鱗陣形持ち出したとか……その……」

「戦力外通告を受けたような艦娘でも戦力化する奇才の持ち主、か？」

「本当だったんですか？ それ」

「パラオは地下資源にも恵まれず、どの重要拠点からも等しく遠い上に、孤立しやすい位置にある。航空機の航続距離が足りなくてアイランドホッピングが必要だった1940年代以前ならいざ知らず、戦略

的価値も今ではそこまで大きくない。だから適当に艦娘を遊ばせておくにはもってこいの位置だったんだろうな。お前も聞いたことあるだろ、589戦隊の別名」

「――懲罰艦隊、ですか？」

「“再教育部隊”って言った方が実情は正しいけどな」

高峰はそういうとどこか懐かしげな笑顔を浮かべた。

「で、そのパラオが敵に囲まれていると」

「等しく遠いということは近隣地には等しく脅威が及ぶ可能性があるということだ。これでパラオを落とされれば、マニラ、グアム、ラバウルが危険域に入りかねんし、こんなところに集結地でも作られたら動きにくいことこの上ない。さっさと相手を潰すに限る」

そう言いながら高峰は補給系列のデータを呼び出していた。

「今動かせるのは502、503と505？ 半減上陸の人員を呼び出して4時間後には出港可能か……杉田、501の現状は？」

《なんだ出撃か？》

無線の奥からはどこか不機嫌そうな声が返ってくる。

《大和が試製51センチ砲のフィッティングに入ってる。武蔵は46センチのままだから動かせるが大和は無理だな》

「了解だ、ささh……」

《無線間かせてもらってたわ。すぐ戻るわよ、到着予定1421。504の子たちも1400には最低限動けるようになるはず。どうする？ パラオなら水雷戦隊だけでもグアムかどこかに空輸して前方展開させた方がよくない？》

「グアム近海でハリケーンが出てなきやそうするんだけどな。被害を避けるとなるとラバウルかマニラか。どちらかから行くのが早そうだな」

《ならマニラの方がコネクションあるしハリケーンの影響受けにくいわね》

「よし、マニラだ。川内たち504を前進させる」

“ 作戦レベルの情報が一気に更新されていく。天候状況や駆逐艦 “あすか” の補給状況、航空機の使用許可などが現れては消える。

「青葉、月刀准将を大至急呼び戻せ。物量戦になる。おそらく航暉がいないと話にならないぞ」

「了解です」

青葉が敬礼をして出ていく。高峰も司令部を「あすか」に移すべく席を立った。

「もう、急にボーイスカウトに来なくなるからみんな心配してたんだよ?」

「あの後親戚に養子として引き取られて金沢を離れてたからね、仕方なかったのさ」

「それでも連絡ぐらいとれたんじゃない? リーダーのみんなも心配してたし」

「まあ、忙しかったからね」

航暉は何処か気まずそうにそう言っただけで席につく。古風な板張りの床が鳴る。

「それで、宮下は元気にしてたのか?」

「私? 私はあの後何事もなくてね、家族も無事だったし。今は私、出版社にいるの」

そう言っただけで渡された名刺には「黒ペン社 第二編集部 宮下瑞葉」と書かれていた。

「へー、このご時世で出版社か、サービス業につけるって優秀なんだ

な」

「もう全然だよ。今週刊誌の編集部にいるんだけど、デスクに怒鳴られてばかり。中途半端なジャーナリスト気取りが何を言ってるんだっとか」

「そういうはずつと押しが強いので有名だったな、宮下は」

吹き抜けの高いステンドグラスから曇天の弱い光が色を帯びて降りてくる。その光を少し気にしながらその名刺を見る。拡張現実^Aタグが仕込まれているらしく、名刺から彼女の立体ホロが浮かび上がる。

「まあ、それでも優秀なのはつきーもでしょ？」

「俺、何か言ったか？」

「軍人さんでしょ？ それも国連軍系列」

電が一瞬目を見開いた。

「どうしてわかったのです？」

「そのワイシャツ、肩のところにショルダーループ。そんなシャツは軍関係か警察、消防士ぐらいしか使わないじゃん。警察や消防士は色付きシャツだし、となると軍関係が残るよね。で、そのポケットのマチの切り方は国連軍系列の制服っていうのがわかる。どう？」

「……驚いたな。正解だ」

「えっへん。これでも記者だからね。観察眼は鍛えてるよー」

そう言う瑞葉は腰に手を当て、胸を張って見せる。

「まあ、そういつてもやっとな米の粹を抜けた感じかなあ。同時に若手記者ってカードが使えない訳だけど」

そう言つて少々大ぶりのタブレットを航暉に渡す瑞葉。そのタブレットには雑誌の表紙が映っていた。

「私が今関わってる週刊誌なんだけど、見たことある？」

「週刊風花……いや、読んだことないな」

「硬いから柔らかいのもで一通り押さえてあるから、いろんな世代の人に読んでもらってるんだ。最新号なんだけど、私の書いた特集記事を載せてもらって……」

タブレットをスワイプしページを繰ると彼女が執筆したらしい

ページが出てきた。

「これって……」

「珍しい記事書いてるな。深海棲艦との共存の可能性、か……」

航暉がそれを見ると首の後ろからコードを引きだす。

「なあ宮下、このデータももうことってできるか？」

「うん？ お試し購読ってこと？」

「ああ、いい記事が多いなら仲間にも購読を進めてみるよ」

「やたっ！ なら特別だよ？」

航暉は一度瑞葉にタブレットを返しロックを解除してもらおうとそのタブレットからデータを受けとるべくQRSプラグを刺した。

「よくこんな記事出せたな。深海棲艦滅ぶべしな論調の世論の中でこれを書けるのはなかなか度胸があると思うよ」

データを繰りながら航暉はタブレットを手取る。画面を高速で流れていく文字列を見て雷がどこか驚いた顔をした。

「それで、宮下はどう思うんだ？」

「どう思うって何が？」

「深海棲艦と共存できるか。それをわざわざ出したってことはそれに
ある程度疑いを持つてるんだろ？」

「……去年の11月ぐらいに深海棲艦を鹵獲したってニュース、出たの覚えてる？」

「ああ」

航暉が即答。覚えているも何もその保護をした張本人とそのコミュニケーションターがここに揃っている。そうとは知らずに瑞葉は真面目な顔で続けた。

「国連海軍はそれについての情報はあまり明かしていないけど、そのために集められた人たちの面々のリストを見ると大体何をしたいかがわかるの。最大の特徴は言語学者が多く参加していること、そして途中からラテン系言語の専門家が多くオブザーバー参加していることね。そこからみて、鹵獲した深海棲艦は言語能力を持つ可能性が高いって言うのは簡単な推理でわかるわ」

そう言ったタイミングで頼んでいたコーヒーとケーキが運ばれて

きた。航暉の前にはチョコレートケーキ、雷がショートケーキ、電がミルフィーユだ。瑞葉がチーズケーキに勇んで手を付けた。

「んー、ここのケーキ美味しいのよねえ……。んぐつ、で、続きなんだけど、言語能力を持つということは少なくとも感情を持って、それを表現できる可能性が高い。それだけの知性がある可能性はある。それなら交渉でその先に進むこともできるんじゃないかなと思う訳」

「その先、というのが共存？」

「うん、それで戦争が終われば言うことなしでしょ？」

「まあな、だがその先はなかなか難しいと思うがね」

「そうだよねえ、海軍もわざわざ新設部隊作って攻めに出てるもんねえ……」

瑞葉がそう言うのとケーキを口に運んでそう言った。電の目線が少し下がる。

「それでも、そんな可能性があることを認める必要はあると思うの。滅ぼすだけが戦争じゃないでしょ？」

それを聞いてクスリとわらったのは雷だ。

「そうだといいわね」

その声に航暉も頷く。

「深海棲艦とコミュニケーションをとれるということはこの戦いが生存競争から戦争に切り替わったということでもある。その可能性があるのなら停戦や終戦も不可能じゃないはずだ」

「でしょ？ でもマジョリテイになる日は来るのかなあとは思うけどね」

「なぜなのですか？」

「だって、深海棲艦はこれまで人を殺しすぎたからね」

そう言って瑞葉は何処かしまったという顔をした。

「子どもの前で話すことでもなかったかな？」

「いや、この子たちはわかってるよ、話についてこれてるのはわかるだろ？」

航暉がどこか自慢げにそう言うと、少し訝しむような表情をしつつも瑞葉は続けた。

「深海棲艦関連死は全世界で30億って言われてるし、それだけの恨みを買っているのは確かだよ。そんな親の仇みたくないのが今日から隣人ですって言われて、そう簡単に納得できるわけがない。これまでただ襲ってくるだけの害獣だったならなおさらだもん。停戦するってことはある程度相手を認めるってことなんだ。少なくとも人間と同じレベルだと認めることになる。それを認められない人はたくさんいると思うよ」

少し冷めたコーヒーを小ぶりなスプーンで混ぜていると、窓に水滴が当たる音がした。

「あ、また雨か。つつきー傘持ってる?」

「ああ、折り畳みだけだな」

「さすが北陸育ち。弁当忘れても――」

「――傘忘れるな、か?」

航暉が素晴らしいながらタブレットを差し出した、データ転送が終わったららしい。

「正解っ」

そんな風に笑う瑞葉はそれを受けとった。

「電ちゃんと言ちゃん、でよかったかな?」

「うん」

「なのです」

返事に瑞葉が笑みを深める。

「ふたりはもし深海棲艦と一緒にいても襲ってこない世界って来てほしいと思う?」

その質問に航暉は少し驚いた。どこかいたずらっ子のような瑞葉の瞳が二人の子供に向けられる。

「――いなづまは」

電はそつと自分のセーラーのネクタイを握った。

「そんな日が来ればいいと思うのです。恨みあっても、憎みあっても、だれも幸せにならないのです。きつと誰も戦いたいなんて思っていない。だから戦わないで済む可能性があるならその可能性に賭けてみる価値があると思うのです」

「そうね、憎んでも何も始まらないわ。手を伸ばして初めてわかることもある。そう思ってるわ」

「……………本当に頭いいのね。驚いちゃった」

「電も雷も、俺の自慢の右腕だからな」

「右腕……………」

瑞葉がどこか怪訝な顔を浮かべたタイミングで喫茶店のドアが開いた。入り口のベルが涼やかな音を立て、雨の降りだしの匂いを含んだ空気が入ってくる。それと一緒に入ってきた男たちはどこか喫茶店に不釣り合いな日本国自衛陸軍の制服を着ていた。航暉たちを見つけると速足で歩いて来て航暉たちのテーブルの横に立った。直立し、敬礼。それに答礼したのは電と雷だ。

「月刀航暉准将殿、お迎えに上がりました。高峰大佐がお待ちです。海軍総司令部発の命令書もお持ちしております」

「ご苦労」

航暉はコーヒーを飲みほしソーサーに戻した。差し出された外部記憶装置を首の後ろにあてがい、内容を確認する。

「移動の足は？」

「へりを」用意しております。あすかまで直接ご案内いたします」

「了解。作戦内容及び命令を受諾。艦隊指揮権を受けとった。電、雷、艦隊情報へのリンクを許可。細かい調整は電、任せるぞ」

「なのです」

航暉が立ち上がるとぼかんとしていた瑞葉が呆けたように口を開いた。

「月刀……………航暉……………准将？」

「ああ、それが今の俺の階級だ」

雷が仕舞っていた制服を出してくれていた。それを受けとり、航暉は羽織る。准将の袖章に司令長官の金飾緒が映える。

「じゃ、じゃあ電ちゃんと雷ちゃんは……………」

「宮下、深海棲艦との共存の道があるかもしれない、そう思ってるんだろ？」

制服のポケットから名刺を一枚取り出してコーヒー代と一緒に

テーブルに置く。

「俺たちも」――それを探している」

何かあつたら連絡してくれ。と言ひ残して航暉は背を向けた。

「行くぞ、電、雷」

「はーい、しれーかん！」

「なのです！」

陸軍兵士が一斉に敬礼。航暉は答礼を返す。

また、戦争が待っている。

INTERMISSION 01

「デスク、月刀航暉准将ってご存知ですか？」

「休暇明け早々どうした、ミズっちゃん」

そうあだ名で呼ばれた宮下瑞葉は少しムツとした顔をする。それを見た恰幅のいい男性は苦笑いで答える。

「たしか新設された国連海軍の指揮官じゃなかったか？ 4月頭のプレスリリースで見たな」

そう言いながらコーヒーを啜るデスクの前に一枚の紙切れを差し出した。それを見たデスクが目を見開き、コーヒーカーップを置いた。

「……おい。マジモンかこれ？」

「確度は高いと思います。有線してもよろしいでしょうか？」

「繋げ」

デスクから渡されたコードを首の後ろに差すとその時の見た映像を流す。

「……月刀航暉准将、プレスリリースで回ってた画像とマッチングしました。適合率98.36%、間違いなく本人です」

「というよりミズっちゃん、この男とどこで知り合った？」

昔スカウトにいた時に顔見知りでした、その時は月詠航暉という名前でしたが」

「さて、じゃあこの月刀航暉って養子か？」

「月詠航暉の両親と家族は16年前に事故で他界しています。それを月刀家が引き取ったというのは遠い親戚筋だったのでおかしくないんですが、月刀航暉は公的記録だと生まれも育ちも月刀家ということになってます」

ファイルを渡して有線を着るとデスクは目を伏せた。

「……臭いな」

「そして月刀航暉准将が私との記憶を持っていましたし月詠航暉と同一人物であることは間違いありません」

「調べるつもりか？」

「はい」

月刀家のスキヤンダルか……とデスクが呟く。

「それともう一つ」

「なんだ？」

「その時に私達の記事のサンプルを渡したんですが、それと入れ違いでこんな内容が……」

デスクにタブレットを渡すとそこには文章ファイルと一つのムービーファイルが残っていた。それを見てデスクの額からドツと汗が噴き出し始めた。

「これ……告発文書か？」

「16年前の月詠一族爆殺事件の内容を記した文書と、それを仄めかす証言映像。おそらく月刀航暉准将の視界映像のコピーですね。そこに移ってる男性の顔は——月刀家当主、月刀利郁氏と合致しました」

「……大スキヤンダルにも程があるぞ、これ」

「ですよ。さらにたちが悪そうなのは証言映像の最後の方に気になる言葉が……」

そう言うのと画像を再生する。

間違えてるのはどっちよ！　そうやって人を使
い潰して！　それで国家を守るだなんて聞いて呆れるわ！

雷、黙りなさい。

でもしれーか

黙れと言っている。

司令官、さん……？

電、雷、二人は動くな。……そうやって売りさば
いたんだな、雪音と琴音を。

ふん、そうやってこだわるからお前は未だ月詠の
亡霊に憑りつかれただけの人形に過ぎんだ。

再生を止める。

「途中で出てきた雪音と琴音の二人の名前は月詠家の子供の名前と合致しました。そして、彼女たちを月刀家が何者かに売りさばいた――

――未成年者の人身売買に関わった可能性があるんです」

デスクはそれを聞いてしばし口を閉ざす。

「……本気で調べる気か？ 中途半端なジャーナリスト魂だったらやめておけ。このネタは戦術核並みの爆弾だと思った方がいい。月刀家は今でも力を持った軍閥だ。文字通り殺されるかもしれない内容だ。文字通りの命がけになる可能性もある、それでもやるのか？」

「航暉君……月刀航暉准将は私を信じてこの情報を託してくれたはずです。それを裏切るわけにはいきません」

ため息が一つ。

「わが社は出版社としては弱く、小さい。だからこそ身動きはしやすはずだ。――社長には話を通して置く。行け。取材費は何とか上層部からもぎ取る。必ずスクープをものにしてこい」

「ハイっ！」

そう言うのと自分の机に戻り手帳などをまとめる」

「さっそくどこに行く気だ？」

「事件の時の情報をもう一度洗い直します。金沢、富山、あと横須賀などを足で回ります。公用車、使っても？」

「好きに使え。……ミズっちゃん！」

編集部を出ていこうとした瑞葉にデスクが声をかける。

「体と命とハートは最大の武器だ。気をつけろよ」

「……ハイっ！」

ペンは剣よりも強しという。その証明を試みせる。

車のキーをとって瑞葉は外に飛び出した。

ANECDOTE 019 少しはましな休暇になりそうだ

南の空・南の海。台風一過の大空は抜けるように蒼い。青ではなく蒼。

「熱いですねえ……まだ五月ですよ……」

《台風一過で熱せられた空気が吹き込んでるからな。ま、それでもカツとしてるだけましだろうが》

「高峰さんそれ海の上だと意味ないですよ……」

デッキの上で煙草を吹かす上官を見ながら青葉が海を進む。高くそびえる艦橋の下には戦闘時用のライフベストにヘルメットという戦闘指揮の恰好のままの高峰が立っている。落下防止の無機質な金属の柵に体重を預けて下を覗き込む彼の顔はどこか一仕事終えた後の疲労感がにじみ出ていた。

「相手はビギナーでも数が揃うと脅威百倍というのが証明されたな」

「全くです。というよりあんな長時間リンクで大丈夫だったんですか？」

「大問題だ。まともにお手洗いにも行けねえ。だが俺はまだマシだぞ。カズなんて高密度リンクを4飛行隊分同時に捌きながら電ちやんたちの前線部隊に指示出してを最長4時間ぶっ続けた。なんで倒れないんだよあいつ」

「水雷戦隊も航空隊も交代しながらでしたけど、司令部は交代要員が圧倒的に不足してますもんね……」

「今回は杉田とカズに負担がデカすぎた。アウトレンジ万々歳な物量戦だったからな。前半は雨もおかげで航空戦がそこまでじゃなかったからいいが、後半は航空戦と砲戦のラッシュだったから、演算がつかずすぎる」

「それでもまあ無事切り抜けたから良しとするしかないんじゃないで

すか？」

まあな、と返して高峰が紫煙を吐いた。

「さて、とりあえずはパラオに入港するしかないわけだ。とりあえず全員休息が必要だ。……つと」

高峰が舳の方へと目線を走らせる。正面から一本の細い軌跡が海面を走っていた。それに気が付いた青葉が砲を振ろうとする。

「待てー！ 味方だ。……こちら第50太平洋即応打撃群所属艦艇、駆逐艦あすか乗艦中の高峰春斗副司令長官だ。あすか接近中の艦娘は所属と登録名を述べよ」

《あ、あの、国連海軍極東方面隊、南方第二作戦群589戦隊所属……CL-NG03、〃名取〃です。あすかの皆さんをアンカリングポイントまでお連れします》

「出迎え感謝する。アンカリングポイントまでは先導してもらえんだな？」

「はい、〃案内します」

そのタイミングで陸方から低い発砲音がする。とつさに身構えてから、号砲だと気がつく。

「礼砲か、歓迎ムード全開だな」

「なんだか気になることでも？」

青葉がそう聞くと高峰は肩をすくめた。

「東郷先輩に合う時はいろいろあるんだよ」

「ゆつうばっりき——ん！」

浅瀬のサンゴ礁を迂回しながら慎重にマラカル島の海軍通常艦用パースに接岸し、一同が下艦するといきなり青い長髪の少女が夕張に飛びついた。

「さみちゃん!」

「はい! ご無沙汰してますっ!」

「ど、どうしてパラオにいるの? 五月雨ちゃん硫黄島所属よね?」

「咸臨丸の護衛でちょうどパラオに入港中に囲まれちゃって、そのままここで戦ってたんです!」

「え……てことは、いま硫黄島は……」

「大丈夫ですよ。村雨ちゃんと吹雪さんが守ってくれています。一隻の護衛なら私と夕立ちちゃんがいればばっちり護衛できます!」

そう言いながら夕張に抱き着いたままギューっと彼女の胸に顔を埋める五月雨。みるみる顔を赤くしていく夕張を見て、生暖かい笑みを笹原が送っていた。

「お熱いのはいいんだけどさあ、タラップの上で抱き合っていると後ろつかえるからもう少し先でやってくれない?」

双方顔を赤くして俯く夕張と五月雨。五月雨はどうやら夕張しか見えてなかったらしい。

「……相変わらずか、五月雨」

タラップの下から夏季用の第三種制服を着た男が声をかけた。笹原よりも少し年上なのだろう。どこか落ち着いた雰囲気だが、ここ数日の連戦のせいかな、伸びた無精ひげが疲れた雰囲気を感じさせる。

「あ、ご、ごめんなさい……」

「親しい間柄とはいえ、時間と場所を弁えたほうがいい。五月雨は時々周りが見えなくなる癖があると前々から言っていただろう」

「はい……」

「反省しているようですし、みんなの前でそこまで怒らなくてもいいのでは? 東郷大佐」

笹原がどこか笑って声をかけると深く澄んだ鳶のような瞳が上を

向いた。

「笹原君か」

「お久しぶりです、東郷先輩」

笹原が前を塞ぐ五月雨たちを避けるように、タラップの手すりの上を軽やかに駆けていく。第一種軍装の細身のスラックスが揺れ、軽やかに手すりの支柱を蹴って、真っ先にパラオの地を踏みしめた。それを見た夕張がぼかんとする。

「え？ へ？」

「フットワークの軽さは相変わらずのようだな」

「それはもう。それが強みですからね。東郷先輩もあいもかわらず生真面目さが増してるようで」

「その皮肉屋も健在だな。これでも年長だぞ」

「それでも今やまさかの同階級ですよ？」

「ふん」

そう言うお互いにどこか睨み合っていると、どちらともなく噴き出した。

「まつさか、こんなに早く先輩の笑顔が見られるなんて思ってたませんでしたよ」

「好きで仏頂面してるわけでもないしな」

そう言うのと視線を上に戻す。いろいろな処理を終えてきたのだろう、タラップの方から黒い制服の面々がおりてきた。それを見て笹原が手をいっぱい振る。

「あの問題児集団が今や精鋭部隊か」

「〃有事の人材は平時は歪〃……あなたの言葉では？」

「そんなことも言ったかね。———ようこそ。パラオ泊地へ。」

貴官らの到着を歓迎する。月刀大佐、いやもう准将だったな」

「ええ、東郷先輩もお変わりないようだなにより」

「とりあえずはその暑そうな第一種軍装を脱いで来い。あつという間に熱射病になるぞ。あと艦娘たちにも休息をしっかりと与えてやれ」

そう言うのと背を向けて歩き出す男の背中を見てクスリと笑う笹原。

「ほんと、変わってないわあの人、で、付いていかないと私たちがパラ

才で迷子になるわね」

「だな、とりあえず杉田が船で当直だ。当直組を残して下艦してきつさと仕事を終わらせたなら羽を伸ばすでしょう」

「羽を伸ばすとは言ったが、ここまでになるとは……」

「艦娘分の水着を用意してた渡井大佐には驚いたのです……」

浜辺のビーチから突きだした木の栈橋の先に用意された東屋の下、デツキチエアに寝そべって航暉はそんなことを言った。

とりあえずの周囲の状況と周囲警戒の割り当てを決め、残存勢力がないかどうかの確認を進めた後に早々に任務から解放されたのである。東郷大佐曰く「一番の功労者たちに褒美を与えるのもトップの仕事だろう」とのことであり、連れてこられたのは島を二つほど渡ったところにある入江だった。天然の砂浜に透明な海、まさにリゾートと言った場所だ。

「電も泳いできてもいいんだぞ?」

「さっき泳いできたので大丈夫なのです。それにここ想像以上にクラゲが多くて」

「ここのはタコクラゲらしいから毒性は低いしそうそう刺してこないよ」

そう言って視線を回した先では睦月たちが水しぶきを上げながら海岸線を走っている。薄い緑色のワンピース型の水着が揺れている。

普段からはかけ離れた微笑ましい光景だ。後ろから趣味丸出しで彼女たちを追いかけている渡井大佐がかなり邪魔ではあるが。

「全く、渡井の野郎どこでこんな大量の水着を手に入れてやがった」

「一人ひとりに別のデザインで、サイズもピッタリなのです……」

「野郎の分がなくて本当によかったよ」

「それよりも艦娘みんなのその……サイズ……とか、把握されているかと思うと……」

「……よし、あとで、きつく言っておく」よ

ちなみにそれだけの水着を用意した張本人は鬼ごつこの鬼役らしく、駆逐隊の面々をほぼ全力で追いかけている。大の大人と少女という構図とはいえ普段から体力重視の訓練をしている艦娘とは良い勝負である。ターゲットを切り替えたのかいきなり追いかけられた敷波が半泣きになりながら全力疾走している。

「あれ、鼻真目に見ても犯罪者だよな」

「……否定できないのです」

そう言う電も白いふわりとしたレースがあしらわれたセパレートの水着である。航暉は普通に半そでシャツにスラックスという制服そのままな恰好である分、その状況がどれだけ特異なのかを感じる。

「それにしても、さすがパラオ、レインボーズ・エンド虹の足の名の通り、よくこれだけの自然が残ってるものだ」

「普段から海も浜辺も飽きるほど見ているはずなのに、こういうところに来るときれいだと思うのです」

「海は生命誕生のフィールドだしな、海には魔力があるのかもしれないな」

「司令官さんも泳いでみるのもどうですか？」

「泳げないの知ってただろ？」

「これを機に泳げた方がいいのです」

「といっても俺右腕義手だから浮かないぞ？」

「艦娘でも浮くから大丈夫なのです」

「お前らの義体は発砲金属とか使ってる特別性なんだって！」

「いいから行くのです！ 電が手を引いてあげますから！ ほらこつ

ちなのですっ!」

電に強引に手を引かれるようにして砂浜に引いていかれる航暉。その先では龍田にブン投げられて砂浜に上半身をつ込んだ渡井の姿があった。

「犬上家じゃないんだからさ」

「……わが一生に一遍の悔いなし」

「あっそう」

砂浜から顔を出した渡井の満足げな顔にげんがりしてるとその後のビーチパラソルの下からケラケラ笑い声が聞こえる。ハイレグビキニが目に毒な笹原である。横には川内とジュースを飲む文月の姿もある。

「で? カズ君は今から電ちゃんたちから水泳演習?」

「あの先の会話よく読めたな」

「双眼鏡があれば読唇術なんて楽勝だよー?」

「その技術はどこから来てんだが。全く気がめいるよ」

「お、やっつと赤帽脱出か?」

茶々を入れる渡井をもう一度犬上家状態にするとせいせいしたような表情をする航暉。ちなみに赤帽は海軍で遠泳記録が指定距離未満に集中特訓させる時に使う識別帽だったりする。

「前にグアムのホテルの時真面目に溺れてたものねー」

「なにそれ龍田さん!? そんな面白そうないイベント笹原さん聞いてないー!」

「話さんでいい!」

航暉の一喝が飛ぶが時すでに遅し。ことを聞いた笹原が腹を抱えて笑い転げていた。

「水深120センチで溺れる!? 慌てすぎでしょうカズ君っ!」

「一番厄介なのに話しやがって……」

頭を掻きむしる航暉を見て小さく苦笑いを浮かべる電。笑いをかみ殺しなら川内も口を開いた。

「救命胴衣が使える状況がほとんどはいえ何も使えないのはきつくない? 最低限の水泳能力は身につけとかないとね」

「だよねー、ここには一応プロが多いんだしこの際だから教わったら？」

「なのです！」

「俺に仲間はいないのかっ……！」

航暉が慌てて周りを見回すが味方しそうな人はあまり見えない。いつの間にか騒ぎが大きくなったのか赤城達も聞きつけ、泳いでいたはずの暁たちも寄ってきていた。

「こんな海辺で水着にならないカズ君が少し気に入らなかったし、この際だからひん剥いてやるのもおもしろいかもね〜」

「ちよいまて、その発想はおかしいだろう」

「問答無用！ 文月！ かつかれー！」

笹原がそう言うのと文月を航暉に投げつけた。その文月が航暉のシャツに手を掛ける。

「これでもくらえー！」

「待て待て待て待て！」

「ふ、文月ちゃん、さすがに公衆の面前でそれはあんまりなのですっ!?!」

そんな騒ぎを遠目に見るのはパラオ所属の一人、霞だ。

「ほっんと、うるさい艦隊ね」

「そうかもしれないね」

そう隣で笑うのは大和だ。なかなかきわどい恰好ではあるがしっかりと水着である。

「みんな明るくて、バカみたいに騒げる部隊であることは確かです」

「ふん。それで規律が緩んだらどうする気かしら」

その言いぐさにどこかクスリと笑う大和。

「でもちゃんと締めるところは締めてますから大丈夫だと思いますよ」

「大和さんがべた褒めなんて珍しいじゃない」

そう言う霞は制服のままきれいな海に視線を向けた。

「そこまで信じて、誰かに沈められるとか考えないのかしら？」
「考えないですね」

大和が即答したことに少し面食らう霞。

「501の指揮官の杉田大佐も、その上の月刀准将も、理不尽な命令をしてくることはありませんし、私たちの全力を引き出してくれる。……坊の岬のような理不尽は感じたことがないですよ」

「誰かを信じるということは半ば博打、それでもこちらに全額かけてもいいと思える程度には魅力的ですよ」

「……ふん」

どこか居心地の悪そうに顔をそむける霞を大和はそつと抱きしめた。大和の素肌に……正確には胸元に霞の顔が埋まる。

「そんなに肩肘張らなくても大丈夫ですよ」

「……！」

照れ隠しかバタバタと慌てる霞をぎゅうと抱きしめ、大和は言葉を続けた。

「いつか誰か素敵な人に出会えますよ。きつと」

「……うぐ、くるし……」

「あら？」

力を抜くとその両腕にくてんと力なく寄りかかる霞を見て冷や汗を流す大和。

「……僚艦を圧殺する気が、大和殿？」

「す、杉田大佐!!? いつから見てたんですか？」

「ずつとだな」

ニマニマわらったその顔を見て顔を赤くする大和に追い打ちをかけるように武蔵が木の影から現れる。

「お熱いところを邪魔するのはまずいかと思つてな、声はかけなかつたんだが、早くかけたほうがよかつたかな？」

「む、武蔵い……！」

「とりあえず霞ちゃんに活入れて起こしてあげろ、あとしつかり謝つておけよ」

「杉田大佐はどちらへ？」

「少し東郷大佐に挨拶してくるさ」

「東郷大佐も少しおやすみなさればいいじゃないですか」

「人ごみに塗れたビーチに行っても安らげる気がしないのでね」

パラオ軍港近くの隊舎の一室。部下の私的に少し苦い顔をするのは東郷徹心大佐だ。

『私が見てますからどうぞおやすみになってくださいよ。緊急時は問答無用で非常呼び出しかけますんで』

周囲の警備情報を確認している高峰が無線越しにそう言う。それを聞いた巫女服のような装束を纏った女性が頷いた。

「提督はお一人だと一緒に行く人がいないからと言って断るじゃないですか。働きすぎだと体を壊しますよ」

『一番の功労者たちに褒美を与えるのもトップの仕事だろう』ってさつき仰ってたじゃないですか』

「このトップは東郷提督なんですから、ささ」

「扶桑も高峰君もそんなに俺を追い出したいか？」

『追い出したいなんて言つてません』

目の前の美しい女性と無線の奥の声が被ったことに東郷大佐が苦虫を噛み潰したような顔をした。

「高峰君、お前まで笹原化してないか？」

『心外です。あそこまでぶっ飛んでません』

「教官から黒烏の手綱をどう握ればいいのか相談された身にとっては

どっちも似たようなもんだ。『黒鳥参謀』 高峰春斗大佐」

おかげでうるさくてかなわん、というドアの影から一人の影が出てきた。

「すいませんね、黒鳥もう一人追加ですよつと」

「杉田君、浜辺に行つてたと思つたんだが」

「この義体だと泳げないですし海は見飽きていますし、そろそろ誰かとチェンジしておかないと悪乗りした渡井や笹原の相手をするは目になるので」

『俺に行けつてことか？』

「もしくは東郷大佐どうぞ」

「そう言われると行きたくなくなるな」

「それでも休まれた方がいいのでは？ この一週間でどれだけ休まれました？」

「台風の際は戦闘がなかったから休んでただろう」

「あれは仕事をしてなかっただけです」

取り付く島もないといった扶桑の言い分に東郷は溜息をついた。

「わかったよ休めばいいんだろう？」

「ご一緒しますね。基地の業務は……そうですね。雲龍がいますので彼女に引継ぎます。高峰大佐、基地の指揮をお願いできますか？」

『勝手は雲龍に聞けばいいんだな。了解した』

東郷大佐を敬礼で見送つて杉田が笑った。

「ホント変わつてねえなあ。先輩は」

『本当に真面目なところがね。でも懐かしい雰囲気だ』

「ああ、少しはましな休暇になりそうだ」

すでに昼下がりに言つていい時間、ゆつくりと南国の時間が過ぎていく。

東郷大佐が航暉たちを送り出した砂浜にやってくると思定外の事態が発生しており少々面喰っていた。

「……どういふ状況だ？ 誰か説明を」

「見てわかりませんかー」

だるーん、という擬音がピツタリな雰囲気の笹原がそう言った。

「簡単に言えば決闘ですね」

「だからなんでそうなっているのかを説明してほしいのだ」

「名取にスキンシップを取ろうとした龍田が華麗に宙を舞ったので『強そうだあいつ！』と天龍が決闘挑んで接近戦闘最強決定をしようとしたら返り討ちにあつてリベンジマッチラウンド2です。東郷先輩でしょう？ あんなシラットみたいな格闘技教えたの」

「……むやみに使うなど言っているのだが」

「まあいきなり後ろから飛びついた龍田が悪いのは悪いので、御咎めなしでよろしくお願いしますねー」

「それは後にこちらで検討する。……止めなくていいのか？」

「問題ないでしょう。天龍も受け身はうまいですから」

「投げられること前提か」

それを聞いた笹原が笑う。

「^{エモシ}艦装なしだと天龍の場合間合いがつかめない。間合的には暁や電の方がうまく扱うでしょうね。天龍の場合間合いを詰めすぎる。だから——ほら」

天龍が派手に空中を舞った。そのまま波打ち際に倒れ込んでいく。「相手の慣性モーメントを利用して投げ切るようなああいう動きにはついていけない。相手の手首に親指の付け根を引っかけてきれいに投げてる」

しつかり掴まなくとも十分固定できますからね、と笹原が笑う。その向こうでは波打ち際に倒れ込んだ体を起こす天龍がいた。

「だー！ もう！ なんて勝てないんだ！」

「ご、ごめんなさい……」

「謝ってくれるな。猶更惨めになっちまう」

「距離の詰め方と重心のかけ方だねー。もっと相手の初動掴まないとダメだよー」

笹原が気楽にそう言うのと名取が振り返り、驚いたような顔をした。

「と、東郷大佐、いつから見られてたんですか？」

「笹原君曰く第二ラウンドからだな」

そう言うのと東郷は肩をすくめた。

「手本を見せて遣ったらどうだ。笹原君」

「できないことはないですが……名取ちゃん連投大丈夫？」

「は、はい……！」

「名取、本気で行かないとあつという間に競り負けるから手を抜くな。笹原は元陸軍士官だ」

「元陸軍予備士官ですよ、先輩」

笹原が立ちあがって水着についた砂を落とすとそのまま柔軟に入る。

「レフリーはいるか？」

「一応用意します？ 慣れない水泳をやらされてグロッキーな月刀クンならそこで倒れてるんで」

「……なにがあつた？」

「見ものでしたよー？ 攻勢部隊のボスが駆逐艦娘の両手に縋って涙目になってる構図はいろいろ微笑ましかつたです」

膝上丈の海水パンツを身につけて椰子の木の下の下で疲弊している男の姿を見て東郷は溜息をついた。その横で看病(?)している電もどこか苦笑いだ。

「赤帽組だったか、あれ」

「しかも特Ⅲ型の面々プラス潜水戦隊と大鯨が総出で教えて浮いて終了でしたからね。金槌とは言いませんが木槌程度です」

「それで良く海大出れたな」

「しばらく泳いでなかったのと右腕にかなり重い義手吊ってるのでそ

れでマイナス要素でかいですけどね。おーいカズ君仕事だよー」

「……今度はなんだ」

「接近戦闘のレフリーやって!」

航暉がのっそりと立ち上がるとその半歩後ろを歩くように電が付いてきた。

「今度は何をやらせる気だお前」

「そんなに私信頼ない?」

「ああ」

航暉の即答に笹原は水着に包まれた胸を揺らしながら掌底を突きだした。それを航暉は顔色が悪いながらもさらっとそれを避ける。

「危ねえなあ」

「危なげなく避けてから言うセリフじゃないよね、それ」

「初動がでかいんだよ」

そうやって航暉はあたりを見回す。

「手合せは笹原と名取か?」

「そ、レフリーよろしく」

「危険行為があったら止めるぐらいだろ。背中を砂浜に打ち付ければ終了でいいか?」

「レスリングと一緒にね、了解。名取はそれでいい?」

「えっと、はい。大丈夫です……」

「ん、じゃそれでいこう」

そう言った笹原が一步前にでる。

「ルールは確認した通りだ。用意は?」

「いつでも」

「大丈夫、です!」

「それでは————かかれ!」

「で？ ぼろ負けしたアンタが部下使って艦隊演習を吹っかけた、と？」

浜辺から帰ってきてパラオ基地司令部棟地下、暗い部屋の中で盛大に青筋を額に浮かべた高峰がそう聞くと、正座させられている笹原が舌を出した。

「えつと、ごめんなちやいっ☆」

「……。」

追加制裁がかなりいい音で鳴った。その音を聞いて渡井が肩をすくめた。

「で？ あの『奇術師』東郷仕込みの艦隊に接近戦？ メンバーどうすんだよ、というよりまともにやり合えるのいるのか？」

「さあな。まあ俺と渡井は全体の演習の監視員になるから関係ないっちゃ関係ないがね」

肩をすくめたのは杉田である。

「月刀、どうするよ？ 今から詫び入れて東郷大佐に笹原差し出して終わりつてのが一番手っ取り早くないか？」

「まあ一番それが手っ取り早いんだが……天龍が躍起になってる」

「あちやー」

航暉の声に渡井が額をびしゃりと打った。高峰が航暉の方を見る。

「一応のトップはカズだ、ここはカズの判断に任せるが……どうする？」

「高峰。勝機は？」

「接近戦演習という内容だからかなり不利だな」

そう言っつてホロスクリーンを立ち上げると情報を浮かべた。

「東郷大佐の強みは相手の間合いを外しての戦闘にある。艦娘や深海

棲艦が不得意とすることが多い接近格闘戦を積極的に取り入れたスタイルを取ることが多い。逆に言えば東郷大佐にはその距離の感覚は誰よりも蓄積があることになる。かなり分が悪い。ロングレンジ系を強めている大和型、空母勢だとあつという間にやばいだろうな」「だろうな」

不満げに鼻を鳴らすのは杉田だ。それに反論する笹原。

「でも、戦力的にはかなりいい勝負になるはずだよ、ハル君」

「どういうことだ？」

「天龍龍田、川内、電ちゃん、雷ちゃん、……あと、大鳳あたり。この辺りなら接近戦でも十分いけるはずよ。少なくともパワー負けすることはないはず」

「なぜ大鳳を入れた？」

杉田の声に渡井が笑う。

「なるほど、爆撃させる気か」

「そ。いくら東郷大佐と言っても低空爆撃の嵐の中だと足を止めざるを得ないはず。そのうちに距離を合わせる。それに大鳳の打たれ強さならある程度は耐えられるはずだからね」

「そういうことか……ってことは管制役には月刀一択か」

そうなるわね、と笹原。

「ただ、東郷先輩もそれぐらい読んでくるわね。でも、これしかないわ。カズ君頼むわね」

それを聞いてどこか下品な笑みを浮かべるのは杉田だ

「結局他人頼りだな、酷い様だぜ、笹原さんよう」

「しかたないじゃない！ 名取ウムが想像以上に強かったし引っ込みつかないじゃない！ それに東郷先輩に冷笑されっぱなしじゃきついしー！」

「なんだそのあだ名。あと、それに巻き込まれるこっちの立場にもなってくれ」

高峰はそう言いながら頭を掻いた。

「で、決行は？」

その声に笹原が笑う。

「明日の朝」

「珍しいですね、東郷提督が売り言葉に買い言葉なんて」

「そうでもないだろう」

扶桑にそう言われ東郷は鼻を鳴らした。

「あの5人のこと、扶桑は知っていたか？」

「時々話してくださったバカ鳥の5人……だったかしら？」

扶桑の声に頷いて椅子の背に体重を預けた。

「……有事の人材は平時には歪、それを体現したような面々だ。背中を任せさせるには危なっかしいが、皆それぞれ光る部分を持っている。だが……」

「優秀であることを知っているからこそ、それに頼りすぎる……かしら？」

「……扶桑にも先を読まれるとはな」

「何年一緒に過ごしていると思ってるんですか？ 提督」

高々四年だろ、と答えると扶桑は顔をほころばせる。

「これでも最長ですよ、貴方とずっといる時間では」

「いつの間にか古参だな」

「本当にです。……今日は五月雨も戻ってきているし、なんだか昔みたいですね。貴方がパラオに来たすぐ後の……」

「こんな五月蠅くなかったがな」

彼がそう言うのと扶桑がくすくすわらう。

「素直じゃないのは昔からですね」

「なんだ」

「ここがまだボロボロだったころのことを本当に思い出します。霞の人間不信がひどかったり、五月雨のドジが行き過ぎていたり……、多摩も神通もいたころですね」

「……そんなこともあったな」

そう言うのと鼻を鳴らす。

「多摩は北方、神通は横須賀で戦果を挙げていると聞きますし、みんな立派になりましたね」

「……お前はこんなところで燻ぶっていいのか、扶桑」

ポツリとそう言うのと扶桑はどこか不本意そうな顔をした。

「私は残りたくて残っているんです。不満がないのに出ていく必要はありませんし」

「それでもここはこんな辺境だ。お前の能力を欲している所はいくらでもある」

「欲しているのは私ではなく、私の戦力でしょう。また、道具として扱われるのは御免こうむりたいわね」

「……今のは聞かなかったことにしてやる。艦娘は思想統制の制限を受けるぞ」

「ありがとうございます」

どこか満足したように頷いた扶桑にどこか不機嫌そうな東郷。

「それだから、ここに送られたんだぞ」

「それで貴方に会えたならそれでよいでしょう。おかげで私でも戦える、そうしてくれたのはないですか?」

「さあ、な」

そう言った東郷は溜息をついた。

「で、今回果たし状をもらったわけだが」

どこかむすつとしたまま手元の書類を眺める。演習許可申請書。乱雑にサインをし、勢いで印を押す。その取ってつけたような雑さを見て扶桑はさらに笑みを深めた。

「それで、演習の編成はどうするんですか？」

「おそらく向こうは川内と天龍、龍田あたりはまず出てくるはずだ。かなり攻勢に偏った配置になる、元々短気で攻めたがりな黒鳥だからそういう構成でくるだろう。……あとは空母が一隻」

「空母……」

「月刀航暉准将が航空戦のプロだ。正直雲龍程度なら軽く封じてくるだろう。先の共同戦線の低空艦爆、見ただろう？」

「……あの目視すら難しい艦爆艦攻隊ですか？」

「それがおそらく3個飛行隊程来る。それで動きを封じておいて水雷戦隊の電撃戦でカタを付ける。月刀と笹原、そのバックアップで高峰。この辺りがいればそれぐらいやってくるだろう」

「……勝ち目、あるのかしら？」

「無策で挑むほど馬鹿に見えるか？」

東郷はそう言つて電子書類をピックアップする。

「明日とはいえ、作戦会議ぐらいはしておこう」

「編成は……私と足柄、名取、霞、五月雨、雲龍……この六隻ですか？」

「気合を入れる、笹原も月刀も陸軍関係者だ、格闘戦の勝手を知っている。それにおそらく……電も出てくる」

「電……そんなに警戒する必要があるのですか？」

東郷が指を組んで俯く。

「どういうわけか、月刀とのリンク率が破格の数字を叩きだしている。それも双方リスクを承知でな。動きがかなりアグレッシブになってくるだろう。それをわかった上で挑め」

「はい」

そう頷いて笑つて渡された電子リストを確認する。

「……どうした」

「笑つてますよ、提督。やはり後輩の成長を見るのは楽しいですか？」

「いいから呼んで来い」

「わかりました」

からかうような笑みを湛えたまま。扶桑は執務室を出ていった。

「まったく……」

東郷はこめかみを指で揉みながらそう呟いた。

「明日はどうなるやらだ」

そう言いながら、どこか頬が緩むのを不本意ながら認めていた。

M E T A R P T R O 1 3 2 1 5 0 Z 1 2 0 0 3 K T 1 4
S M S C T O 1 6 B K N 1 2 0 B K N 3 0 0 2 5 / 2 4
A 2 9 9 3 N O S I G Ⅱ

「なんですかこれ？」

あすかの食堂兼会議室の部屋の中、青葉が張り出された紙を見て眉を顰めた。高峰がつまらなさそうに答える。

「天候状況通報。風が東南東から3ノット、視程22キロ、千切れ雲が散見されて湿度が高い。その状態がしばらく続くらしい。湿度でいやになるな」

絶好の演習日和だ。そう皮肉げに言うとき青葉がクスリと笑う。

「そういう高峰さんは司令部で缶詰だからまだマシなんじゃないですかあ」

「んなことねえよ」

「だよな」

「なんだカズ、来てたのか？」

いきなり会話の外から同意の声が返ってきて高峰が振り返ると航暉が立っていた。

「ブリーフィングの準備があるだろうが、だから来たんだよ」

「気象と波のデータ揃ってるよ、湿度が高い以外は絶好の演習日和だ」
「艦載機が使えるのはありがたいな。湿度によって弾道も僅かだが変わる。少し気を付けた方がいいかもな」

「今回は半径10キロの半球が演習範囲だ、そんな誤差気にしなくてもいい距離がフィールドだぜ？」

「……それもそうか」

杉田の精密砲撃じゃねえからな、と高峰が笑う。

「で、メンバーは変更なし？」

「ああ」

「……と、言いたいところなんだけどねえ」

「なんだ笹原、来てたのか？」

「今さっき起きたわよ。……川内が夜戦じゃないし、上司の尻拭いに付き合う気はないって出撃拒否で二度寝に入った」

それを聞いて頭を抱える男二人。

「どうする？」

「どうするもこうするも誰かを補填するしかないだろう……接近戦がある程度できて回避を考えると高速艦で……火力もできれば欲しいな」

航暉がそう悩んでいると廊下を走る音が響いてくる。

「へーい！ テートクウ！ 話は聞きましたヨー！ ここはこの金剛にお任せデース！」

食堂のドアがバーンという音とともに開いた。

「金剛、君どこまで耳イイのー？」

「キャプテン笹原は細かいこと気にしすぎネー。今回は接近戦！ 戦艦の万能性を証明するいいチャンスデース！」

巫女服が元らしいデザインの千早のような服装に赤毛交じりの茶髪、金剛がつかつかと航暉に歩み寄りその手を取った。

「それに、私はカズキとのリンクで近接戦闘のコツを掴んでマース！ 北方のヒメちゃんの拿捕の時もしっかり動けてたデシヨー？ だから私を使うのが一番手っ取り早いと思いきマース」

そう言われ、航暉はしばし考え込むような動作をした。

「高峰、向こうの艦隊構成の予測出てるか？」

「とりあえず扶桑と足柄は出るんじゃないかと見てる」

「……わかった、金剛」

「ハイっ！」

「代打で悪いが出てくれ。金剛、電、雷、天龍、龍田、大鳳で挑む」

「まっかせなサーイ！」

どうなるやらだ、まったく肩をすくめる高峰。

「正直予測不能だ、この戦い。向こうもこつちも不確定要素が多すぎる」

「キャプテン高峰、どういうことねー」

胡乱な目線を送る金剛に高峰は右の人差し指を立てる。

「二つ目、半径10キロの半球型のフィールド東側にはロックアイランドがあつて死角が多すぎる。待ち伏せ、奇襲、なんでもありになる」

次に中指が立つ。

「二つ目、向こうの指揮官は奇術師東郷、どんな手が飛んでくるか正直予想もつかん」

「黒鳥にそこまで言わせるってなかなかの人物ネー」

「〴〵名答」

高峰の答えに笹原が噴き出す。

「まあ、私たちが東郷先輩に影響受けたともいうわね」

「突飛さではない勝負だと思うね。そして三つ目」

高峰が指をもう一本立てる。

「作戦立てても結局双方引つ掻き回すから戦況を読んだところで意味がない」

「……それで、テートクたちはどうするつもりネー？」

それを聞いた司令官三人がニヤリと笑った。

『支援はするから後は勝手に殴り合え』

ねえんだ

「ふむ……川内を外してきたか」

パラオの戦闘指揮所^Tで東郷徹心大佐は鼻を鳴らした。

「おそらくは川内が夜戦じゃないから出撃拒否したつてところじゃないのか？」

それに答えるには子供にしては少々低めの声が応える。明かりが落とされた部屋に特徴的な緑色の髪が光る。

「……川内とは懇意だったな」

「元同僚だからな」

スツと目線をそらす長月を見やりどこか優しい目線を送る東郷。どこか慈愛の籠る目線だ。

「そう言えば、お前が着てからまだそんなに時間が経ってないんだっ
たか」

「4月1日付けだからまだ、1ヶ月と少しだぞ」

「という割には馴染んだな」

「誰のおかげかな、東郷司令」

そう言って懐かしそうな目を正面に表示させた地図を見る。

「強敵だぞ、笹原大佐の部隊は」

「……よく知ってるよ」

「敵」の構成は電を旗艦にした編成。登録順に電・雷・天龍・龍田・
金剛・大鳳の6隻構成だ。

「こちらは五月雨を旗艦にして扶桑、足柄、名取、霞、雲龍か……。当然
然と言えば当然か」

「ほぼ総力戦になる。お前を残したのは笹原大佐や月刀航暉の動きを
予測できるのがお前だけだからだ。頼むぞ参謀」

「私のような参謀が本当に必要なのか？ 東郷大佐」

「無駄なことはしないたちでね」

そう言った東郷は首の後ろにQRSプラグを差し込んだ。

「さて、始めようか」

開始早々度肝を抜かれた。

「空母が最初に水上突貫って馬鹿かこんなん！」

そう真っ先に叫んだのは先鋒役を務める天龍だった。どこか眠そうなほんわかとした目のまま高速で錫杖を手にして、どこぞの二水戦よろしく真一文字に突っ込んでくる姿に、天龍は不本意ながら一瞬怯んだ。真っ先に来るのは扶桑か足柄あたりの砲撃か、名取か霞の呐喊が来るものと思っていた分余計に反応が遅れた。

《——龍田——》

笹原の声が無線越しに飛ぶ。天龍がハツとする頃には横をひゅつと龍田がすり抜けた。そのままの勢いで龍田は長柄の長刀を逆袈裟に振りぬいた。雲龍の錫杖がシャンと音を立て振るわれると同時に、一瞬の鏝迫り合いを挟んでお互い飛び退いた。その空隙を突くように艦載機が急降下してくる。青い認識票、動体視力が避ければD4Y2改aのコードが読めたかもしれない。……大鳳に積まれた彗星二二改型が日光を照り返させながら、その爆撃フックが爆弾を振りだした。雲龍が慌てて飛び退く。その瞬間を読んだように龍田が一気に距離を詰める。

「こっちは私が持つから天龍ちゃんたちはそのまま進んでえ」
「おう！」

龍田を残して残りの面々が前進する。空中ではすでに空中戦が始まっていた。月刀航暉が操る航空隊が優勢を握る。

《敵本体を捕捉。金剛、弾着観測砲撃いくぞ》

「ハイっ！ 待ってたネー！」

最後尾についていた金剛がそう言っただけで艦装を展開する。システムリンク、射撃座標がダウンロードされていく。東側のロックアイランド側から回り込むルートだ。ロックアイランドの島影を避けて比較的広い西側でのハイテンポな高速戦闘に持ち込むつもりだろう。そのため尖兵として雲龍が飛び出してくるとは思っただけだ。

「あれ？ 鷹の眼って使わないデース？」

《あんなシステム杉田ぐらいじやなきや使えないからね》

無線の奥の航暉が答えると納得する、考えればそうだ。今回の司令部は航暉と笹原と高峰。そんな狙撃をしている余裕はなさそうだ。

「Get Readyネー！」

《了解、金剛、レコメンドファイア》

それを聞いた金剛が引き金を引く。飛び出した爆炎と、模擬弾を目で追う。敵の本体は目の前の群島の裏側——島を挟んだ向こう側だ。観測機からのデータが追尾している。目標は——敵艦隊旗艦、五月雨。

「こういうのは残念だけど、狙えるうちはヘッドから倒していくのは定石ネー、恨まないことデース」

そう言っただけで弾道から直撃ないし至近弾を確信した直後結果が出る。

——損壊なし。

「WHHHHHHHHHHHHHHHHHY!？」

金剛の叫び声が虚空に響き渡る。無線の奥も大わらわだ。

《くっそ！ 艦載機の“眼”が盗まれてやがる！》

「What!？」

《高峰！》

《なあってこった、開始直後に“フロントロック”のログを確認！ 艦

載機のカメラ映像全部ぶち抜かれてるぞ！ わざわざ仮想空間立てて演習用のシステム組ませた訳はこれかよくそつたれ！》

金剛にフロントロックなんて言葉は聞き覚えがないが……おそろくはスパイウエアか何かだろう。

《早々にクラッキングとは流石東郷大佐、やることが汚い！》

わざわざ共用無線に流した笹原の声に返事が返ってくる。

《兵は詭道なり、教えたはずだぞ笹原君。司令部はそもそも1対3だろうが》

《長月ちゃんそつちにいるんだから2対3でしょーが！ ハル君！》

何やら修正パッチが当てられたらしくレーダーの虚像が除去され始める。

《高峰より月刀戦隊全艦、欺瞞情報ディスインフォメーションの除去を行う、レーダーリンクを一度カット、各艦の電探と目視による接近戦になるから、しっかりと警戒よろしく！》

そう言う高峰の声を聞きながら金剛は加速する。おそらくこちらの位置も割れている、おそらく――。

《警告！ 敵砲撃！ 金剛、散布域ど真ん中だ！》

《どこからだ！》

《南東象限！ 正確な場所は確認中！》

高峰の警告。やはり。

「高速戦艦を舐めるんじゃないネー！」

最大船速に叩き込み前に飛ぶ。視界の上の端できらりと何かがある。あれか。

周囲に着弾する中、金剛は島の海岸線スレスレを飛ぶ。射角的に見ればここが向こうからの砲撃の死角だ。

「……しまったネー」

電たちから切り離された。それに気が付き歯噛みする。

「カズキ、どうしますカー？」

《さつきのは不可抗力だろう。さて、案の定の個人戦だ。司令部のカーも届きにくくなる。金剛は場馴れしてるだろうから少々手荒に行くぞ、頼むぜ》

それを聞いて金剛が笑う。

「目を離さないでほしいのは山々ですけど、今回だけは見逃してあげるネー」

改めて、加速。島影から飛び出すと一気に指示のあった場所へと走る。――先の砲撃の場所だ。

島の端を高速で回り込んだ勢いそのまま目の前の巨大な人工物に向かって殴りこみに入る。

「扶桑！ 覚悟するネー！」

艦装の推力そのままに相手の砲門の下を抜けるように体制を低くした。この角度からだど一気に距離を詰めようとすれば馬鹿でかい艦装を振り回されれば一気に弾き飛ばされることになる。それを避けて低い姿勢のまま主砲の仰角を調整。前へ向ける。

発砲、反動に競り負けないように海面を蹴り込み、さらに前に。そして同時に驚愕する。

「その姿勢から避けるってアリデスカー!？」

「扶桑型を舐めるとひどい目に合いますよ」

扶桑型艦装の特徴である高い重心を上手く使い回転運動に変え、砲弾の流れを読み、避け切った。その動きのまま回転を続け、砲門が金剛を捕らえる、が――

「T O O O O O O O O O O O L A T E !」

引金が引かれるよりも早くその砲門よりも近くに飛び込んだ。その艦装をしたから殴りつけるようにして射線をずらす。直後、相手の砲弾が明後日の方向へ打ちだされた。その反動もあり相手の体が持ちあがる。そのスペースにねじ込むとそのまま持ち上げるようにしてタックルをかます。互いに出力を上げそのまま押し合う。

「少し……暑苦しいのだけれど……！」

「なら、サツサと離れて砲の餌食になるがいいネー、早く冷房のかかった部屋で休めるデース……！」

ここまでの接近戦になったら先に相手の射線に体を晒した方が負ける。そして一番安全な場所は相手の砲が向けられない場所、相手に引っ付くしかないのである。

(……ここにはすでに扶桑しかいなかったということは……すでに各個撃破の流れになってるはずデース、早く片づけてみんなの救援に行かなきゃまずいデース……!)

金剛は相手の軸足を払うように足を振りだし、そのまま相手の肩を奥に押し出した。その反動も使って後進一杯で距離を取る。

「これで、決めるネー!」

再装填はとつくに済んでいる。それは向こうも同じだろう。だが、向こうは不意打ちで体制を崩された分初動が遅れる。そこに、勝機がある。

双方、発砲。

一方その頃。

雷と電ペア、五月雨と霞のペア、双方ほぼ同時に相手を捕捉した。

「島の向こうね」

雷の声に電はハンドサインを出す。このまま回りこむ。挟み撃ちにするてもあるがこの場合おそらく味方同士で射線を潰しあって撃てなくなる。

「しれーかん、エンゲージよ」

《了解、視覚情報を回してくれ。艦載機からの映像だと信用ならん》
「わかったわ」

セーフティはすでにすべて解除状態だ。いつ何が起こってもおかしくない状況下である。

そして、接敵は突然だった。

島影から一気に飛び出してきた霞を認める。電がとつさに警棒を艀装のラックから引き出した。それとほぼ同時、霞は腰のベルトから落とした何かを、防弾強化された靴先で雷電姉妹に向けて蹴り上げた。

それを確認して、喉が干上がる。あれは——爆雷！

《異次元サッカーじゃねえんだ畜生！》

航暉の叫び声が無線に響く

《雷！》

「オーライ！」

足を止めていた電を押し避けるようにして前に出る。その右手には、巨大な錨。逆手に持っていたのを一度空中に投げ、順手に持ち替えそのまま横一文字に振りぬいた。これに驚いたのは霞だ。相手に蹴り込んだはずの爆雷がそのままライナーになって返ってきたのである。

「誰が野球にしろって言った!？」

「それより回避ですっ！」

霞の後ろを進んでいた五月雨が叫ぶ。その裏の無線にため息が乗った。

霞が右に、五月雨が左に飛び退くと時限信管が作動する。空中で弾けて放出されるのはペイント弾だが、ギリギリ回避せしめた。

「このままプランC—IIです！」

「了解っ！」

五月雨の答えを聞いてそのまま前に飛ぶ。

「お姉ちゃん！」

「旗艦は旗艦同士で楽しんできなさいな！」

それに合わせるように電が五月雨との距離を詰めるように移動。雷は戦域を一度離脱。それを霞が追いかける。女の子同士がおいかけっこという構図は微笑ましく見えるかもしれないが、海の上時速5

0キロオーバーでのおいかけっこだと微笑ましいよりも先に「物騒な」とか「危ない」といった感想のほうが先に出るだろう。

雷の足元にいくつも水柱が立つ。速度を維持したままクルリと振り返り応射、そして相手の主砲を弾き飛ばした。

「しまっ……い！」

その衝撃に一瞬霞が片目を閉じた刹那、盛大に水飛沫を広げながら、警棒片手に打ち掛かりに入る。驚愕に染まったその顔が、笑みに変わる。

「……なんてね」

直後右手が左腰に回り——刃渡り20センチほどの短刀を引き抜いた。居合の要領で逆袈裟に走る。

「朝潮型がそんな装備してるなんて聞いてないっ！」

刃筋を見て慌てて警棒でそれを受ける、かなり硬質な音が響いた。

「三式近接戦闘用短刀を知らないの？ まああんたの知識なんて知ったこっちゃないし、兵は詭道なり、よっ！」

互いに弾き合って仕切り直す。そのまま雷が逃げの態勢に入った。再び追う霞、それと同時に霞は疑問に思った。

（……なんで逃げるのよ）

雷にとつてはまだ砲も爆雷も残っている。主砲弾だつてまだたんまりあるはずだ。そして霞の主砲がすでに使えなくなっている以上、距離さえ放せば雷は相手の射程外から安全に攻撃できる。そのメリットがあるにも関わらず、逃げに入る理由は何だ？

「ま、さか……い！」

雷が速度を上げて狭い水路を抜ける。その瞬間、一瞬だが雷の姿が消えた。そして、直後。

「ひっ……」

「チエックメイトだ」

いきなり首の真横に赤い刀身が添えられて、霞は体を硬直させた。その視界の先には、雷がウイंकしながら島の裏側に向かう姿——

——あつちには五月雨と電がいるはずだ。

それよりも問題は足柄が足止めをしているはずの天龍がなんで

こつちにおいて、背後から獲物の長刀を突きつけているのかだ。

そんな空気を感じ取ったのか刃筋を正しながら天龍が笑って先回りして答えた。

「足柄なら、いつもそんなガツツリ系で行くから司令官たちから一步引かれるんだよ」っていつたら勝手に自問自答始めたから放置してあるぜ」

「あ、足柄あ……い」

気にするのはわかるがそこまでかねえ、とどこかおかしそうに笑う天龍に霞もどこか諦めたように笑った。

「まあ、そういう過剰アピールが祟っているいろいろやかした人だからね、思うところがあるんでしょう」

そう言いながら短刀をパチンと鞘に戻した。諦めたように両手を下に垂らす。

「まあ、残念ね」

「開始からあんまり時間は立ってないが、まあゆつくり鑑賞会としてくれ」

「そつちじゃないわ」

霞がそう言うと、天龍が怪訝な顔をした。直後。だらりと下ろした左手を軽く振った。直後、スカートの中から飛び出してきた獲物を手に振り返る。出てきたのは単発式の信号弾発射筒。天龍がとつさに距離を取るように海面を蹴った。

「さつさと手を下さないアンタの判断が残念よ」

飛び出してきた砲弾を天龍が一閃しようと刀を振りぬいた。狙いをつける必要もなく、単に信号弾を打ち上げればいいだけの信号弾発射筒は銃身が短く、弾を十分に加速させるスペースがない。弾を目視してから逃げることはできないにしても、弾の行方がわかっていれば対応することは容易だ。そして天龍はそれを成し——天龍本人が驚愕する。

「なっ……なんだこれっ!？」

「特製トリモチ弾。これでアンタはもう居合いの技は使えない!」

切り捨てた刀身にべつとりとネバネバのトリモチが張り付いた。

そこから加速度で飛び散ったかけらが腕について少々気持ち悪い。それを把握して天龍は歯噛みした。トリモチが結構まとまってまとわりついている分、重心が僅かにずれ、刃筋を立てることが難しくなる。それにこんな異物がついていては刀を鞘に戻すことは不可能だ。霞が言ったように逆袈裟に切り上げるような抜刀時の振り抜きは使えない。

歯噛みする天龍の前で涼しい顔をした霞は空中に投げた信号弾――を模したトリモチ弾を発射筒で掬い取るとそのまま手首のスナップを利かせて薬室を閉鎖。それを左手に持ち替え、右手で短刀を再び抜く。

「さて、どこまでついて来れるかしら？」

そう言つて短刀を逆手に構えれば、天龍がクスリと噴き出すように笑った。

「――おもしろえ、そうこなくつちやな！」

天龍が海面を蹴る、波を気にせず一気に飛びかかる天龍、相手の銃口と刀身を見ながら、一閃。

戦いはまだ、始まったばかりである。

ANECDOTE 022 よくも、よくも雷
をおおおおおお!

砲撃は一瞬で勝負がついた。

「さすが、ですね」

苦し気にそう言った扶桑の右肩がペイント弾で真っ青に染まっていた。

「そう言う扶桑も、なかなか手強かったネー」

金剛が被弾判定で使えなくなつた一番主砲をシャットダウンしながらにやりと笑つた。判定は扶桑大破、金剛中破。——金剛が競り勝つた形だ。

「……まさか、その艦装背負つて大暴れすると思つてなかつたネー。

「『ジエンガ』の扶桑が今やジャイロ持ちですカー?」

「ふふふ、トレーニングのおかげよ? 貴女も東郷大佐についてみるといいわ」

「それは必要ないネー。私にはDarlingがもう決まつてマース!」

——ふーん

金剛の後ろから極低音のひっくい眩きが走る。直後に耳の真横を砲弾が駆け抜けた。慌てて飛び退く金剛。

「相手がいないのは私だけというわけね……」

「足柄……ッ!」

紫に近い服を身に纏つた茶髪の女性が金剛をぎらついた目で睨んでいた。笑みを浮かべているものの、その目は一つも笑っていないかつた。

「目の前の扶桑も、五月雨ちゃんも東郷大佐にべつたりだし、この前に補給とかの応援に来てくれた皐月ちゃんも司令官ガツツリ捕まえるし、あんたら艦隊ももうすでにカップル成立状態だし……? ふふ

ふ、それはそうよね。愛の料理のレパートリーが揚げ物限定だったり、バトルジャンキーってあだ名ついてたりする女なんて誰も見向きもしないわよねえ……!」

そんなことを言いながら再装填を終える足柄。

「ア、足柄……?」

「ガッツリ系で行くから一歩引かれるんだよ? そんなことわかってるわよ! それでもこれが私なのよ! Born This Wayなのよ! こうなる運命の下に生まれてきたのよ!」

「へーい、足柄サーン?」

「もういいわよ、このまま私は一人で行くわ。というわけでリア充候補の貴女は沈みなさい!」

「理不尽ッ!」

金剛の叫びを無視するかのように足柄が発砲。それを金剛が避けたことで後ろにいた扶桑の額にヒットした。

「はうつ?!」

フレンドリーファイア

「な、なに同士討ちしてるデス?!」

「そいつはリア充確定だからもう関係ないっ!」

そう金剛に飛びかかってくる足柄。その後ろから「ああ、空はあんなに青いのに……!」という呟きが聞こえた気がした。だがそれを確認する間もなく、足柄が距離を詰めてきた。脇差しサイズの竹光がいきなり目の前に突きだされ、金剛は慌ててバックステップ。

「なんでそんなもの持ってるネー!」

「東郷艦隊の標準装備よ!」

下段から喉笛目がけて繰りだされた突きを躲し、さらに間合いを外そうとするがそれ以上に足柄の動きが早かった。

「シャッ!」

突きの動きを殺さないようにしたままそのまま得物を右肩側に振り上げる足柄。その動きは担ぎ胴か。

金剛は相手の右側に回り込むように海面を蹴り込んだ。相手の刃物に向かっていくような動きだ。——刃物との対峙する場合、相手の刃物がない方向に逃げたくなる心理が働くことが多い。右手で

「痛つてえー！」

リンク中の航暉が思わぬ衝撃に眉をひそめる。だがその間にも足柄と名取の周りに爆弾を落としていく。もちろん模擬弾だ。

「痛いという割には容赦ないねカズ君。——まあさっきの衝撃で足柄も金剛も伸びてるからとりあえず名取ックスを戦闘不能にできればそっちは終わりかな」

笹原の声を聞きながらも航暉は無言で艦載機のコントロールを続ける。手元にあるのは18機、そのうち3機は演習域の高度上限いっぱいいっぱい偵察用に周回機動ワゴンホイールさせている。敵味方識別装置I_Fなどは当てにならないため、すべての画像を確認し、位置を把握していく。

「……あれ、カズ君が余裕ない？ 珍しいね」

「先輩相手に手加減してられるか？」

端的に返事が返ってきて、笹原が肩を竦めた。

「……だね。で、どうするの？ さっきから五月雨のコンタクトが消えてるんだけど」

「潜水艦でもあるまいし、どこに消えやがった」

「さあ。少なくとも雷ちゃん電ちゃんの電探から消えてる。被害状況を知らせるマーカーは生きてるし、そもそも東郷先輩が艦娘の信号をロストするような事態を起こすはずがない」

「あつたとしても即刻演習が止まるよな」

話に入ってきていかなかった高峰がそう言った。

「あら、情報のクリーンナップ終わった？」

「なんとかな」

高峰がそう言つて作戦リンクの支援を開始した。直後、警報。

「おいおい今度はなんだ!」

「通信障害……これつて……」

高峰と笹原が慌てるが航暉は静かに唇を噛んだ。

「————ウインドウ弾」

「え?」

レーダー情報がかく乱され使いものにならなくなると同時、電波が不安定になった。空气中を渡る指揮系統は電波に乗って送受信が行われる。——それを空气中にアルミ片をばらまくことで阻害した。即ち、その影響かでは、通信による指揮や情報支援は途切れがちになる。

つまり、艦娘独自の判断で行動することが必要になる。

「グアム演習の再現かな、これは」

航暉はどこか獰猛な笑みを浮かべる。

「スタンドアロン運用には、うちの部下は慣れてるんだよ。行け!」

「ああ、もうなんでこうなるかな」

通信障害が入って一番影響を受けるのは空母であり……案の定いきなり制御が難しくなつて一気に劣勢になったのは大鳳である。空母の攻撃手段は艦載機であり、艦載機を封じられた空母などただの力カシとなり下がる。そしてほかの護衛は今、大鳳の周りから引き離され、単独行動を強いられている。

はつきり言つて、かなりピンチである。

「と、とりあえず捕捉されないように逃げていかないと」

ウインドウ弾で妨害できる周波数は使うアルミ片のサイズで決まる。そして互いに通信回線の詳細な周波数は秘匿されている以上、ある程度の周波数帯を抑える様にいくつもの大きさのアルミ片を混ぜているはずだ。

「なら、敵も同じ状況のはず……」

ならば、捕捉されなければ攻撃は受けないのだ。

「と、とりあえず島陰に……」

そう言つて踵を返そうとして、直後。

「————そこまです、大鳳さん」

背中に何かが触れた。冷たい、鉄の感覚。銃口よりも重く、丸い。

「動かないでくださいね、魚雷、当たっちゃいますよ?」

その言葉に足が竦む。何とか首だけ動かすと目が覚めるような蒼の髪の色が目に入った。

「……五月雨、ちゃん」

「はいっ」

満面の笑みだがその手には魚雷発射管があり、いつでも撃てる形だった。

「い、いつの間に……たしかあなたはあの島の向こうで電ちゃんたちと戦つてたはずじゃ……」

「そうですね、でも艦娘は海じゃなくても動けるんですよ?」

そう言つて笑う少女の白いスカートには草の緑色の露が残っていた。

「まさか、あの島を踏破してここまで来たの?」

「レーダーから隠れて、かつ上空からの視界を遮ればばれにくいん

ですね。海の中ならソナーが使えますが、陸の上ならソナーは反応しません。小島を横断する間は姿を消せるんです」

艦娘は海で戦うっていうことに縛られたらダメなんですって、どこか嬉しそうにそう言う五月雨。それを聞いて大鳳は諦めたように両手を挙げるのだった。

「んーと、この辺りで応援が必要そうなのは……霞ちゃんかなあ」

「くおおおおおおお!!」

「アンタはしつこいっ!」

金属が鎬を削る音がする。と同時にどこか湿っぽい『べたあ』とか『ぬちゃあ』とかそんな音が響く。

「だああああ、もう動きづらいっ!」

「というよりなんでそんなにトリモチ全身に喰らって動けるのよっ!」

「気合だ気合っ!」

どこか白濁した粘着質なトリモチを身に纏ったまま突撃する天龍。刃筋が立てにくくなった長刀を振るうも、霞のコンバットナイフがそれを抑える。

「こなくそっ!」

コンバットナイフと長刀のつばぜり合いだが、この場合は長刀の方が有利だ。力をかけやすく、相手の動きを封じやすい。それをわかっ

ている霞も早々に距離を置く。仕切り直しだ。そうして距離を置いたところに小ぶりの影がひゅつと飛び込んだ。

「ちえええええいっ!」

霞がとつさに屈みこむようにして躲すと、すぐ上を錨が通り過ぎた。

「ちよ、雷アンタ私を殺す気!?!」

「それぐらいしないと止まらないでしょ!」

錨を振り抜いた直後の雷の足を払うようにローキックを放つ霞。それを真上に飛ぶことで躲した雷だが、その眼前に巨大な銃口が突きだされた。

「——上に飛んだのが運の尽きね」

発砲。

「はうっつ!」

トリモチを額に喰らい、吹っ飛ばされる雷。

「うう、なんだかくらくらす……というよりこのべとべと何……」

「あれ、もう少し効いてもいいと思っただけど……」

霞が首を傾げるが、すぐに理解した。トリモチの水分が多かったらしい。そのせいで片栗粉を水に溶いたようなどろつとした半液体の白い塊が雷の顔と髪を中心とした上半身に中途半端に絡みついている。

「お、おう……」

天龍が一瞬目を見開いた。通信障害で提督たちに見えてないのがある意味救いかもしれないとか考えながら、ハツとする。

「よくも、よくも雷をおおおおおお!」

「て、天龍さん!?!」

「雷をそんな恰好にさせやがって!」

「ちよ、あたしどんな恰好になつてるの!?! ねえ!」

「はあ!?! さすがにこれは私も狙った訳じゃないんだけど……!」

「くらえ、雷の仇いいいいいい!」

「いやあたし死んでないんだけど!?!」

激昂した天龍がそこに飛び込んで、目を白黒させる霞が慌てて応

戦。雷が取り残されているがもはや天龍には視えていないらしい。

「ああもうめんどくさいっ！」

半ば投げやりな戦い方になっている天竜を見て、そう言った霞がナイフの切っ先を天龍に向け——天龍に向けてありえない加速でナイフが突っ込んだ。判定、天龍大破。

「——え？」

「まさかこの射出機能まで使うことになるとは思ってなかったわよ」

そう言う霞の手にはナイフのグリップだけが残っていた。どうやら刀身の部分をバネかなにかで弾き飛ばしたらしい。

「……バリステイツクナイフ」

「ご名答」

そう言いながら霞は靴下の内側から薄い板を取り出した。特製の薄刃のナイフらしい。

「あなた、いくつナイフ持ってるのよ」

「持ってるに越したことはないわ、よっ！」

飛びかかる霞に雷は警棒を抜いて受ける。交差は一瞬、同時にまた離れる。直後に声が響いた。

「お姉ちゃん！」

「霞さん下がって！」

同時に発砲音。その刹那の後。「はうっ！」という雷の声と「きゃっ」とどこかかわいらしいかみ殺した叫び声が響いた。

「……まさかの相打ちなのです！」

「ですね」

ほぼ同時に応援に駆け付けた電と五月雨がそれぞれ発砲、相手に大破クラスのダメージを叩き込んだのだ。

「……これで、1対1なのです？」

「みたいです、ね」

そう返事をした五月雨がどこか照れたように笑う。

「旗艦同士、戦ってみたかったので少しだけ胸をお借りしてもいいですか？」

「もちろんなのです。……いなづまは負けるわけにはいかないのですか？」

す」

「私……だって！」

そう言った直後、お互いに反転。ここで戦うには大破になって行動不能判定になった相手が多すぎる。遮蔽物として「使う」ことも可能だがいささか忍びない。また、もつと戦うなら双方状況を整えておきたい。

「……五月雨ちゃんはまだ魚雷を使つてなかったのです」

戦うなら場所を選んでおきたい。少なくとも相手の罠に不用意に飛び込むような動きは避けたいところだ。電は意見をまとめながらも動き続ける。

（あと、肩で息をしていたからスタミナの限界も近い。おそらく狙つてくるのは、雷撃戦による短期戦。直線的に視界が開ける西側の広い海域で戦おうとするはずなのです）

魚雷は基本的に直進するものだ。旋回するような動きをする魚雷もないわけではないが、それをわざわざ放つてくるとは思えない。となれば魚雷を使えるような広いエリアでの戦闘に五月雨は持ち込もうとするはずだ。

（でも、それだといなづまの射線も通るからそこにおびき出すためには東の島影にいるいなづまを西側におびき出さないといけない）

そのためにはどうしても五月雨は東側での戦闘を強いられる。それを知っている五月雨はそうするしかないはずだ。地の利は電が握れる。

それを思つて電は笑った。

東側で戦うとするならば魚雷はあまり使えない。狭い水路が多いせいで視界も開けない。どうしても交戦距離が詰まる。

「だからと言って、五月雨ちゃんの懐に飛び込むわけにはいかないし、警棒を装備していることを五月雨ちゃんは知っています。向こうも接近戦の激しい動きは避けようとするはずなのです」

深呼吸を一つ。

「なら、五月雨ちゃんは——」

「――さすが電ちゃんだ。追ってこなかったんだ」

上がった息を整える五月雨は用意していた爆雷を自爆させながら笑った。あのまま突っ込んできていたら狭い水路の機雷原で身動きを封じ、雷撃で仕留めるつもりだった。

（電ちゃんは接近戦も得意らしいし、遠距離からしかけたいけど、魚雷を切り札にしていることもばれてるんだらうなあ）

五月雨はそう言いながら拳銃型の主砲を確認した。残弾はまだ十分ある。大鳳を抑えるときに撃たずに武装解除できたのがよかった。おかげでまだ弾薬はたんまり残っている。ここで機雷は全部使ってしまったけれど。

「……電ちゃんなら、東側のロックアイランドの近くでカタをつけようとするはず」

魚雷が使いにくい状況に持ち込もうとするならそうなる。そこで戦うならおそろく。

「接近戦でくる……?」

そう考えてすぐに否定する。

（もうすでに東郷さんの部隊の艦娘は短刀なりなんなりを持ってるところとは知っているはず。いくら得意だとしてもそれに不用意に頼るところはないはずだし、電ちゃんの方がまだ体力があるから逃げ切りもできるとは）

「なら――」

二人の視線が空中を彷徨う。

「電ちゃんはたぶん――」

「五月雨ちゃんなら――」

島の多い東側での砲撃戦で決着をつけるつもりのはずだ。

すっ！

「はあ……はあ……」

「うふふ……案外骨のある戦いになったわねえ……」

龍田と雲龍は双方大破判定をもらってからお互いにどこか陰険な笑みを浮かべて言い合った。

「まさか接近戦でやられるとは思ってなかった……」

「たしかに空母が接近戦は珍しいわよねー、でもそれを知られたら対処も結構できるものよー」

そう言う龍田が薙刀を担いでそう言った。

「天龍ちゃんも驚いてたけど、空母が最前線に飛び出してきたら当然混乱するわー。その隙を縫って接近して錫杖でぶちのめすっていうのはたしかに戦術としては有効ねー。距離をとれば艦載機が、接近したら錫杖がお出迎えになるから攻めにくいし、空母の護衛も必要なくなるから、皆で攻撃に回れて有利になる」

どこか眠そうな表情の雲龍を見て、龍田が笑った。

「空母が身につける能力としては十分だけど、最前線で接近戦だけで戦うにはまだ不十分と言わざるを得ないわねえ」

すつと目を細める龍田。担いだ薙刀の竹光のメツキがきらりと光る。

「貴女方はとても強いわー。相手の思考の裏を読み、これまでに使われていなかった戦術を試し、予測不能な行動をとることで有利な状況を作りだす。でも、それは曲者揃いの私達の部隊ではあまり通用しないわよー」

「それを五月雨の狙撃一発で大破した貴女が言う……？」

「それを言うならその駆逐艦の狙撃一発で大破する軽巡洋艦に落とされた貴方もどっこいどっこいでしょう？」

うふふふふ、と表面上は上機嫌だが、視線は互いに陰険だ。その合

間に駆逐艦らしい軽い砲の音が響く。時間を置いて、爆雷か魚雷がま
とめて起爆する音が聞こえた。

「……結構みんな頑張ってますねー」

「五月雨ちゃん……」

「あらあ、旗艦がやられてないか心配かしらー？」

「ううん、五月雨がやりすぎてないか心配。なんだかんだで結構ド
ジってオーバーキルとかするから」

「まあ、そうなる前にきつと電ちゃんがとどめを刺してるでしょう
ねー」

「そんなことないと思うけど」

「うふふふふ……」

「……ふふふ」

雲龍と龍田が静かに争っているころ、第50太平洋即応打撃群司令
艦「あすか」の戦闘指揮所では男が二人管制席に座っていた。

「ほー、うまいことやるもんだな」

監視役という名前で観戦している杉田が、くつくつと笑う。映像は
入ってこないが、双方の位置情報やダメージの概要などが表示される
スクリーンを見て満足げにうなずいた。

「んで？ どうなると思う？」

「なんだ、お前起きてたのか？」

QRSプラグをうなじに突き刺したつきり目を閉じて船を濃いでいた渡井に、杉田はどこか胡散臭げに笑った。

「寝てないよ。瞬きしたら30分たってただけさ」

「寝てるんじゃないか」

「寝てないって」

そう笑って高い位置にあったフットレストから足を退ける渡井。頭を掻くようにしながらも笑う。

「それで、杉田はどうなると思う？」

「五月雨嬢がかわいい顔して案外アグレッシブに攻めに出てる。短期決戦に持ち込みたい五月雨嬢とじっくり攻めたい電嬢の戦いだ。どこで戦うかを選べるのは電嬢側だが、この辺りに詳しいのは五月雨嬢。……電嬢や五月雨嬢は知らないが、弾薬を温存で来ているのは五月雨嬢だ。ここ五月雨嬢が短期決戦に持ち込みたいっていうのは……あれかな。体力の問題か……」

「義体で体力の問題ってことは、単純な艦装のマッチング不足ってことじゃないの？ 瞬間的なパワーゲームならいざ知らず、型が違うとはいえ同じ駆逐艦。そこまで差が出るとは思えないけど？」

「急がなきゃいけない理由でもあるのかねえ……」

杉田が呑気にそう言った。こういう立場で観戦できる機会はあまりない。あまり緊張せずに戦域を見れるために、視線もどこか柔らかい。

寝ていたわりに周囲の状況をさっと把握したらしい渡井が口を開く。

「たぶん、精神的なものもデカいんじゃない？ 電ちゃん相手ってことは接近戦じゃプラスにならないってことはわかっているだろう。かといって魚雷でカタをつけるには場所を選ばなきゃいけない。そこからへんのプレッシャーは大きいんだと思うよ」

そんな繊細なタマかな、と杉田は言うときーボードを操作した。直後、ん？ とどこか戸惑ったような声を出す。

「どしたの？」

「五月雨嬢のパーソナルデータにアクセスできない」

「パーソナルデータ？ 中央で保管されるあれのこと？」

「ああ、エラー画面が出たまま動かない」

「そう言うのと体をずらす杉田。どこか億劫そうに渡井が覗き込んだ。

「……エラー412、リクエスト不正か」

「どういうことなんだ？」

「二つ以上のリクエスト・ヘッダ・フィールドで与えられた前提条件がサーバーでテストしたら不正情報だとして弾かれた……そんな感じ」

「知らん。もつとわかるように言ってくれや」

「……お前それでよく鷹の目とかいう大規模プログラム運用できるね」

渡井がどこか呆れたように言うのと杉田はどこか不機嫌そうに鼻を鳴らす。

「電探の細かいパーツや構造を知らなくてもレーダーは使用できる。同じことだろ。使い方を知っていれば使える。それだけだ。で？」

「これはどうすれば解消する？」

「412エラーが出たつてことはプログラムや参照データが破損しているか誰かにウイルスかマルウェアを仕込まれたか、まあそんなところだね。とりあえずほかの誰かのパーソナルデータにはアクセスできろっ？」

「五月雨嬢と同じ部隊の霞嬢もアウト……電嬢のものも武蔵の分も……景鶴嬢や阿武隈嬢のも落ちてるな……全部確かめた訳じゃないが、全部隊分落ちてないか？」

杉田がそう言うのと渡井はどこかつまらなそうな顔をした。

「一応それ、横須賀か長野か知らないけど国連海軍のメインサーバーのどこかにあるファイルだろ？ 各部隊のバックアップは？」

「『あすか』のバックアップファイルは生きてる、電嬢とかのはちやんと出るな。パラオ艦隊のバックアップはアクセス権ないから見れないらしいが……申請するか？ たぶん通るぞ」

「いんや、電ちゃんのデータで十分、メインファイルが死んでてバックアップが生きてるならおそらくメインサーバーのファイルが破損してるんだと思う。他の艦娘のファイルもまとめてダウンつてことは、

たぶんパーソナルデータの管理プログラムがマルウェアか何かに感染したんだろう。それが判ればウイルス除去とかした後で、バックアップをよこせて連絡来るでしょ。それから確認すればいいだろうさ。……まあ今は演習の監視って仕事に集中しようよ」

「さっきまで寝てたやつがそれを言うか?」

「だから瞬きしたら30分経ってたんだって」

けらけらと笑って渡井が画面を見上げる。その先にはゆっくりと移動していくマーカーが映っている。それを見ると、背後の気密ドアが開く音がした。杉田が振り返る。

「お、お目覚めか川内嬢?」

「ずっと起きてるけどね、どんな感じ?」

少しけだるそうな雰囲気のまま、川内が杉田の椅子の背もたれに手を乗せた。

「見ての通りだ。電嬢と五月雨嬢の旗艦一騎打ちの真っ最中。実力は……この状況も鑑みたらトントンドラう」

「へえ、さみちゃん結構やり手なんだ。可愛い顔してすごいね」

「さすが“奇術師”東郷の初期艦なだけあるな」

「初期艦?」

川内が聞き返すと渡井が笑った。

「海大を出て最初に配属になった部隊で受け持った最初の担当艦のことを言うスラングだよ。聞いたことない?」

「それは知ってるけど、東郷大佐の初期艦、さみちゃんなの?」

「らしいよー。その“ドジっ子”さみちゃんが東郷先輩の手にかかるためきめき頭角を現して今や船団護衛などで大活躍。そんな感じで先輩の手に渡った艦は優秀になってキャリアを上げていくから、先輩には“奇術師”というあだ名がついたらしいね。五月雨ちゃんはその第一号つてわけだ」

どこか楽しそうな渡井はそういうと手元のキーボードを叩いた。戦闘エリアがクローズアップされる。

「まあ、そろそろ再接触みたいだからゆっくり観戦してつたら?」

「んー、あたしはいいかな」

「なんだ川内、見たくてこっち来たんじゃないのか？」

杉田が怪訝な顔をして振り返った。

「いやー？ まあ、暇だったし少し覗いただけだよ。そんなに面白い相手なら、今度夜戦で手合せしたいし」

「……相変わらずの夜戦バカだな、川内嬢」

「当然、夜戦に勝る戦闘なしだよ、杉田大佐。んじや、監視頑張つてねー」

「おう」

「はいはい」

杉田と渡井がラフに返事をする、川内はきつさと部屋を出ていった。本当にちよつと覗きに來ただけらしい。

「ま、メインサーバーがどうなつてもこっちではどうしようもないしね。お、再接リ・エンカウント敵かな」

渡井の声に杉田が顔を上げる。同時にスクリーン上で、弾道を示す直線が描写された。

島影に消えゆくなびく青い特徴的な髪を見つけ、電は急旋回。艦娘ならではの高速急旋回だ。鋭角に回り込み、浅くて海の底が楽に見通せる浅瀬を突っ切る。船速32ノット、かなりのハイスピードだ。
(この先の水道は長さ230メートルの幅30メートル。狭い場所だし張つてるとしたら……すぐ先なのです！)

島影を抜ける直前、大きく右に体を振りだした。慣性の法則で体が宙に浮き、水の抵抗を受けなくなつた体はごく低い放物線を描いて水道に躍り出る。直後、左耳をペイント弾が掠める。至近弾判定。

「見切っているのですっ！」

右足から着水すると同時に、主砲が火を噴く。五月雨は辛くも首を振るようにしてヘッドショットを免れた。向こうも至近弾判定が出ているはずだと思いつつ、電は一気に距離を詰めていく。五月雨の主砲の再装填完了までのタイムラグは8秒。その間に少しでも距離を縮めておきたい。防弾板の裏から飛び出してきた特殊警棒を右手で掴んで振り抜く。そのワンモーションで展張された警棒を手に懐に飛び込んでいく。

「……………」

五月雨はバックステップ、距離を稼ぎつつ再装填が終わつたらしい主砲をほぼ真下に向けて引金を引いた。直後、電の予想を超える大きな水柱が立った。

（榴弾!? 水柱で目隠しにするつもりなのですか!?!）

そうとわかつて加速度がつきすぎていた電は急には止まれない。まずいと思つてもその水の柱に突っ込んでしまう。水の塊が頬を叩いていく。弾か何かの破片が混じつていたのか僅かに痛いし、水の勢いが強いので目を開けられない。こんなところで足を止めるのは愚策と一気に突き抜ける。突き抜けた直後、目を開けば、銀色に光る刃が突きだされていた。

「いつ!?!」

大きくのけぞるようにしてその突きを躲す。結果的にはあるが、大きく姿勢を崩された。ただでさえ重い艤装を背負っているために、後ろに重心を崩されれば後ろ向きに倒れることは免れ得ない。大きく左脚を下げバランスを取る。

「はああああっ！」

直後、電の視界にいきなり相手のつま先が飛び込んできて慌てる。とつさに左腕で顔を守るようにすると想像以上に重い衝撃が腕に走った。右手も添えて腕を支えてなければ腕ごと持っていかれたか

もしれない。

「まだまだあ、これからですっ！」

一瞬跳ぶようにして軸足を右から左に切り替えもう一步電の方に踏み込む五月雨。もう一発蹴りが飛んでくる。今度は電がバックステップ、それを避けると同時に五月雨が着地するタイミングを見計らって発砲。五月雨の足元の海面を爆ぜさせる。足元が崩れたせいで五月雨の足が止まった。これで流れが変わるか。

もう一本警棒を取り出し前へ。前傾姿勢で手元を隠しつつ相手の懐に飛び込む。まだ五月雨はバランスを取り戻せていないはず。体で隠した警棒は相手には読みづらく、軌道が読みやすい振り抜きよりも突きの方が有利だ。前傾姿勢で溜めた力を解放するように相手の腰の高さ目掛けて突きだし――

相手の肩を掠って突き抜けた。

「え……？」

「捕まえましたよ」

胸のあたりまで海に浸かりながら電の腕を掴んで笑う五月雨。その顔には余裕の表情が見える。

「え、な……？」

一瞬パニックになる電の腕を左手で一気に引き寄せつつ、五月雨は右手の主砲を向けた。腕を押しえられたために前かがみの無理な姿勢で固定され、胸の位置に砲門を突きつけられれば、それを躲すことは限りなく不可能だ。

「チェックメイトです。投降してください」

「……榴弾を撃ったところで、海面に当たった程度では起爆しない……ですね」

「そう言うことです。もっと水深に注意を向けた方がよかったですね、電ちゃん」

海底に立って、五月雨が電を見上げる。

ここの水道は幅30メートルと特に狭い水道である。干潮になれば

ば地続きになるほどの浅い領域ならば、場所を選べば溺れることなく海底に立つことが可能だ。それに、海底に突き刺さった榴弾が起爆すれば、威力のわりに大きな水柱を立てることもできる。

「……さすが、奇術師」東郷大佐の一番弟子なのです」

「ふふつ、伊達に前衛役は任されてませんよ」

電が笑えば五月雨もにっこりと笑う。

「ふう、仕方ないのです」

電がそう言うと同時に、軽く力を抜いた。直後、防弾板の裏側で物音がする。

「これを使う予定はなかったのですが、仕様がななのです」

防弾板の裏から何か転がり落ちる、円筒形のナニカ。爆雷にしては小さいそれを見て五月雨は慌てて手を離れた。

「……っ!？」

驚いた様子で何かを口走る五月雨だが、電は聴覚機能を一時的に凍結。その声は聞こえない。直後に爆裂。破片は発生しない。ただ、強烈な爆発音が響いたはずだ。五月雨が反射的に目を閉じ、耳を押さえ、その間に電は警棒で相手の主砲を弾き飛ばした。遠くに五月雨の主砲が落ちる。

「……ふう」

電に音が戻ってくる。電の主砲は既に再装填を終え、五月雨に向けられた。

「今度こそこちらがチェックなのです。五月雨ちゃん……って、音響手榴弾使った時点で聞こえてないですね」

事前に取り決めてあった公開周波数に合わせ、電脳通信で同じ内容を伝える。

「この距離からの砲撃を避けるには浮力発生装置を再始動して飛ぶくらいしかない。そして、五月雨ちゃんがその作業をする間に、いなづまは止めを刺せます。今度こそ、チェックメイトなのですよ」

「……なんでこうなっちゃうかなあ。結構自信あったのに」

五月雨が泣きそうな笑顔を見せて両手を挙げた。

《こちら観測室、演習の終了を確認しました》

どこか眠そうな渡井の声が無線に響く。

《第50太平洋即応打撃群選抜、小破1、行動不能4、投降による拿捕判定1、パラオ艦隊、拿捕1、行動不能5。交戦規定により、今回の演習は第50太平洋即応打撃群の勝利とします。まあ、辛勝って言った方が正しいかな。おそらく濃密な演習後打ち合わせになるからみんな覚悟したほうがいいんじゃないかな》

そう言いながらも呑気な雰囲気の渡井の声に電は苦笑いだ。五月雨も笑っている。

《極小フィールドとはいえ、みんな接近戦に頼りすぎだな》

《それ教えた東郷先輩が言いますか？ ハツキングして通信潰して乱戦に持ち込ませた張本人でしょう》

笹原の辟易した声がそう言う。

《それでもここまで乱戦になるとは思ってたぞ。まあとりあえずは観測室のデータを取り寄せてデブリーフィングにするのがいいだろう。お疲れ様だ、五月雨たちもよくやった》

東郷大佐の声に目に見えて嬉しそうな顔をする五月雨。その五月雨に電は拾ってきた五月雨の主砲を返しつつ微笑んだ。

「しつかり見ててくれたんですね！」

《前より広い視野で戦闘ができてるようでよかったぞ》
「やったあっ！」

浮力発生装置の再起動が終わってないためにまだ飛び上がることはできないはずなのに、海底を蹴って飛び上がる五月雨。

その刹那、ガツン！ と鈍い音がした。

「へ……？」

《痛い!?!》

共用無線に航暉の声が乗る。五月雨が音のした方を見ると電が目を回していた。

「さみ、だれ、ちゃん……さすが、に、そ、れは……」

そのまま後ろヘスローモーションで倒れていく電。

川内が部屋に戻るとそこにはなぜか先客がいた。それは私のベッドだ。

「……こんなところで何してんのさ、司令官」

「んー？ 暇つぶし暇つぶし」

「司令官と川内を待ってたのー」

文月と目を合わせて「ねー」と言い合う笹原を見て川内は軽く頭を抱えた。文月はルームメイトだからわかるとして、なぜ笹原は川内のベッドに勝手に横になって、タブレットで雑誌を読んでいるのだろうか。

「いいの？ こんなところにいてさあ」

「『仕事』は一通り終わってるし問題ないよ？ バックアップファイルの提出もハル君が枝を付けられないようにきっちりやったはずだしね」

「あー、昼の関係のやつはそれで一通り終了？」

「そうだねー、だからこうしてゆっくりのんびりできるわけだ。ほら、来てよ川内。疲れたからマッサージしてほしいなあ」

「文月にやってもらいなよ、私も疲れた」

他人の部屋のベッドを占領して追加の要求を出してくる上官を片手間にあしらうと、その上官が口を尖らせた。

「文月だと艤装なしだと体重軽すぎて揉んでもらってる感じしないんだもん」

「艤装背負わせたらいろいろ握りつぶされるでしょうに」

「そりやまあそうなんだけどさ」

そう言つて寝返りをうつ笹原。手元のタブレットで顔の下半分を隠してじつと川内を見る。

「……マッサージ」

「だめ」

「……だめ？」

「だめ」

「……だめなの？」

「……ああもうわかった！ 三十路近い女がそんな目をするなっ！」

「わーい！」

なんだかんだいって上官に甘いなどいうのは川内も自覚していた。溜息をつきながらも、ベッドに向かい、靴を脱いでベッドに上がった。うつ伏せになった笹原の上にまたがり、肩の方に手をやった。――
―直後、

「それ――っ！」

「ちよ、司令か……どわっ!？」

上下が急に入れ替わって川内は笹原にベッドに押し倒されたのを知る。

「ああ、司令官手癖わるいよお？」

「人聞きの悪いこと言わないの文月、だってこんなかわいい子がいたら襲わきゃ失礼なのは常識じゃん？」

「ちよ、司令官そんな常識知らないからねっ!？」

「じつとして、気持ちよくしてあげる」

そう言った笹原が首の後ろからコードを引きだした。それを川内に差し込んだ。

「あっ……私もー！」

そう言うとき文月が笹原のうなじに触れる。笹原を電腦ハブにして、有線通信のチャンネルが開くと同時に、意識がそちらへ吸いだされた。川内がその空間に立とうとすると何かを踏んづけてバランスを崩した。そのまま倒れると何やら柔らかいものに包まれるような体制になる。

「うわ……今日は“こういう系”か……」

「なにー？ 文句あるー？」

「あのさ司令官。わざわざ有線で通信してるってことは裏仕事の類だろうけどさ……そのトップがなんでイルカみたいな寝袋でミノムシ状態になってるわけ？ イルカに喰われてるようにしか見えないんだけど」

「えー、いいじゃん可愛いんだし。これ暖かいよ?」

「だからって大の大人がぬいぐるみに埋もれているってのはみつともなくない?」

「そんなことを気にしなくてもいいと思うよー。文月楽しそうだし」

首から上だけをイルカの寝袋の口から出してもふもふしている笹原はとろけたような笑顔でそう言った。笹原の目線を追えばぬいぐるみいっぱいファンシーなソファアールの上でピンク色っぽい大きなテディベアを抱いてご満悦な文月の姿があった。

「でもこんな中で会議するの?」

「川内はそういうところで真面目だよねー。文月、ぬいぐるみ消していい?」

「ヨタロウだけは残しといてー」

そう言つてギュツとテディベアを抱きしめる文月。それを見てどこかニヤリと笑つた笹原が指を鳴らすと、部屋自体の風景が切り替わる。

「……どつちにしても極端だよね、司令官」

「川内ちゃんの要望に応えたつもりだけど?」

コンクリート打ちっぱなしの壁に皮張りのソファアール、武骨なローテーブルには何も乗っておらず、シンプルを体現したような部屋に切り替わる。

「まー、一応『部外者』を呼ぶとき用のレイアウトメモリーなんだけどね」

電子空間だと模様替え楽だわ、と言つて笹原が笑う。

「それじゃ、始めようか。川内もちゃんと情報集めてきたみたいだしさ、マツサージに3回で応じたし、ちゃんと符号を覚えてくれたようで助かったよ」

そういつて腕を組む笹原、川内は半ば苦笑いだ。

「まあ、みんなの報告を聞く前に改めて状況確認と行くけど、まだこれ将官クラスにしか情報流れてないから、間違えても口を滑らさないようにね。ハル君あたりに目をつけられるとコトだ」

笹原が床をつま先で叩くとローテーブルの上にホログラムが立ち

あがった。

「パラオで私たちが演習中の0902時、日本時間だと0802から35分間、横須賀のデータベースに登録されている水上用自律駆動兵装の個体登録情報パーソナルデータへのクラッキングが発生、全面的にダウンする事態に陥った。カウンタークラッキングは特調の面々がやってたらしいし、青葉も駆り出されたみたいだけど結局どこの誰だかまでは特定できず、バックアップファイルを各部隊のサーバーから取り寄せてバックドア埋めて対策は一通り終了……というのが表向きの流れね」

そう言うと笹原はにいつと笑みを深める。

「じゃあ、川内、監視していた者として報告を」

「……結論からいうと、パラオから用途不明の通信は確かに存在していて、通信時間がクラッキングの時間とほぼ一致した」

「うん、それは速報で聞いた。そつから先は？」

「パラオ国連海軍基地のどこであるかは特定できていないけれど、クラッキング自体に使われた電波は7.6GHz」

「Xバンド帯のど真ん中……というよりは戦術リンクの周波数帯ね。まあ軍用通信に割り込んで受け取らせるなら当然か。それで？」

笹原はどこか興味なさそうに続ける。

「逆探するには時間も設備も足りなかったからね、まともにわかっているのはこれくらいかな。杉田大佐や渡井大佐のところも見にいったけどさ、二人とも反応は平常そのもの、怪しいとっかかりは見当たらなかったよ」

「Raiders BETAについては？」

笹原が言わんとしているものが
Rapid Attack Identification Detection Reporting System BETA
改善型急速攻撃識別探知報告システムで
あるとわからずに、川内は少し首を傾げた。

それを見た文月が指を振ってぬいぐるみの手足を動かしながらにかりと笑う。どうやら電子情報をいじって、ぬいぐるみを歩行させるという技術を習得したらしい。電脳世界さまさまである。

「それはあたしが調べといたよー」

「おー、偉い文月ー。で、どうだった？」

ぬいぐるみをくるくるとターンさせながら文月は続ける。

「ハッキング前後12時間のデータの見てみたけど、民間衛星からパ
ラオへの通信はハッキングのマイナス8時間23分に一回だけで、
えつと……ぴーあいえす……ぴーゆーえるし……でいいのかなあ
？ その保有衛星からたつたの8バイト、あまりに少ない量だから改
ざんされてないか見てみたけど、ないみたいだよ」

「PISPU^{ピスバル}L^クC^クか。Plea^レdes^スInter^ンcon^ンtinent^ンal^{タル}Systems^ズPublic^ク
Limited^ドCompany^{ニー}か。Plea^レdes^スInter^ンcon^ンtinent^ンal^{タル}Systems^ズPublic^ク
シス^ステムズといえ^えば帝政アメリカお抱えの
Plea^レdes^スシス^ステムズ造船^ズの親会社だ。こりやどーもアタリかな」

笹原の言葉に川内が俯く。

「……グラフィウス、か」

「ほぼ間違いないだろうね。そしてそれが判れば相手の目指したもの
も見えてくる」

「どういうことお？」

どこか間の抜けた声で文月が聞き返した。

「PISPU^{ピスバル}L^クC^ク側の目的は実質的に子会社と化していた六連星造
船、そこつながらりの深かったファーニヴル化学の「遺産」、CV^{ケイツ}—
THOIX^{景鶴}景鶴の入手だろう。君たちを含めた水上用自律駆動兵装
は歩く軍事機密だ。PSSSは水上用自律駆動兵装の製造技術を持
たない企業であり、そこに軍の兵装が渡ればそこから一気に解析され
るってことよ」

そう言うとき笹原は靴を鳴らす。同時にホログラムが追加で現れた。

「こつちは私が押さえた。パーソナルデータベースへの大規模クラッ
キングの裏、バックアップファイルへの不正アクセスが検出された。
どこにどんなウィルスを入れたのか、はたまたデータを覗いただけ
なのかわからないが、バックアップファイルへのアクセスは巧妙に秘
匿されていた。……まるでんやわんやのメインサーバー側の騒動
に乗じるように、ね」

川内と文月がそのファイルを覗き込んだ。

「……第523航空戦隊のバックアップファイル？」

「これって……まさか!？」

「そう、これが本命だ」

笹原の声が低くなる。

「トンネル作戦ってやつだ。メインサーバーのデータがクラッシュした場合、バックアップのリロードが行われる。そしてバックアップは概してメインサーバーより保護が緩い。そこに侵入してクラッシュ、最終的には壊滅的な電子戦に発展する。まあこれは普通、ハードのサーバーを物理的に爆破したりするんだけどね。今回はその亜種ってところかな。で、次の掘削先が……」

「523に所属する、景鶴？」

「そういうことだね。そして、そのバックアップのリロードは滞りなく終了した。景鶴のデータが改竄されているかどうかは不明なままね。即ち既に景鶴は棺桶に片足突っ込んでるってわけだ」

かなり時間がないね、と笹原は言う。その言いぐさに川内の目線が険しくなる。

「どういうことよ」

「そう簡単にメインのサーバーが落ちると思う？　いくつもの監視プログラムが常時走ってるメインサーバーの防壁を破って中身を食い荒らしてる段階で、事前にいくつも侵入と工作を繰り返しているはずだ。もう出口に近いのさ、トンネルの出口が」

笹原はすべてのプログラムを消すと、息を吐いた。

「でも、文月のおかげで犯人の絞り込みができたよ」

「う？」

「P I S P U L C がクラウドコスを抱え込んでる可能性が高いのはわかっているが、たった8バイトでハッキングのキーが完了するはずがないよね。即ちR a i d r s B E T A が掴んだ情報はクラウドコスへの指示だと考えるのが妥当だろう」

R a i d r s B E T A は民間衛星などの電波を監視する軍用の防諜システムの一つだ。音声・テキスト・画像などあらゆる媒体のデータの送受信を監視するもので、情報戦・電子戦において重要な役割を担う。それは深海棲艦が現れ、敵が人から化け物になっても変わらなかった。

「その時間帯に行方不明の電波がないわけだから、P I S P U L C 保有の衛星から発せられた8バイトの通信はパラオで打ち止めだ。それはすなわち、そのメッセージを受けとる相手がパラオにいるつてことだろうか?」

「言われれば……そうだねえ」

文月がのほほんとそう言う。川内はゆっくりと唾を飲みこんだ。唾液が苦い。

「ねえ……その通信を受けられる人って……どれだけいるの?」

「受けるだけならだれでもできるよ。でもその先をできる人間は限られる。軍用通信の発信できる場所は限られるし、ましては水上用自律駆動兵装のデータなどで触れるなら、なおさらだよ。それは川内も知ってるでしょ? だから、川内は真つ先に作戦指揮所を確認したんでしょ?」

笹原はどこか面白そうに笑う。

「それってさ……グラウコスの正体は今パラオにいる指揮官の誰か……ってこと?」

「もしくはグラウコスの手先かだけだね。まあその可能性が高いだろう」

笹原は笑った。

「ここに居る指揮官は、ハル君に杉田氏に渡井君にカズ君、東郷大佐、そして私。ああ、あすか艦長の山本准将って可能性もあるか。でもまあ、山本准将がアクセスできた可能性は低いかもね。調べるけどさ」

川内は自分の上司がそう軽く言うことにどこか薄ら寒さを感じていた。……何も感じていないのか、彼女は。

「……どうするの?」

「もちろん調べるさ。犯人が身内なら内々に処理しやすいし、いくらでも調べられる。愛しの景鶴ちゃんの首から上がきれいさっぱり吹っ飛ぶよりマシでしょ?」

処理、仲間の行く末を処理と言ったか、この女は。

「そんな怖い顔しないの、川内ちゃん。感情が顔に出るのは悪い傾向

だ。とくにこの業界ではね。——素直なのは個人的には嬉しいけどさ」

川内にどこか儂く笑いかけて笹原が続ける。

「川内、文月もだ。感情を捨てろとは言わない。でも、それを完全にコントロールしろ。どんな情報も信じるな、疑え。私の言葉も疑え。笹原ゆうなんて偽名で軍にいるような人間だ、信じるな。自らの理性と感覚に従え。その結果は誰にも気取られることのないよう腹の奥底に隠せ。それが私からの最大の忠告だ」

「はあい」

文月が満面の笑みで答える。川内は、どういべきか、躊躇った。

「……司令官は、それでいいの?」

「当然」

「……なら、わかった」

笹原が満面の笑みで頷いた。

「よろしいでは二人には、私の経歴を洗うことを宿題に課そう。私に帝政アメリカやP I S P U L C、P S S Sとのつながりがないか、もしくはそう言うのに使われそうな弱みや兆候がないか調べてきなさい」

「司令官の昔のこと勝手に調べていいのお?」

「……要は自分も犯人の可能性があると思ってるわけ?」

笹原はその質問を予測していたのか、さらさらと言葉を繋いだ。

「今回の事例というか景鶴関連の事例で疑似記憶ウイルスが絡んでるっていうの忘れた? 私の記憶が短絡させられてたり書き換えられてたら自分ではわからないもの。そこを調べてもらうの。君たちはこれでも信頼してるんだよ?」

「自分は信頼するなって言ってるくせに」

「そうだね、でも、諜報っていうのは案外対人の信頼で成り立つ物よ。もつともそこには嘘も謎も仕込まれるから心酔するまで信頼すると馬鹿を見るけどね」

そう言った直後、ドアをノックするような音が聞こえる。ハツとして目を開けば笹原が川内の目の前でにかりと笑っていた。——

そう言えば、現実世界では司令官に押し倒されたままだっけ。

「どうぞー」

「ここお前の部屋って訳じゃないだろうになんどこに呼び出すかね」

「あらー？ 美女3人そろってうれしくないの？ カズ君」

「ノーコメント」

ドアを開けると同時に響いた男の声に川内は一瞬顔を赤くし笹原を押しつけようとするがびくともしない。入ってきた航暉は部屋の現状を見て軽く眉をひそめた。

「また襲ってんのか、アマゾネス」

「カズ君後で後部甲板。ちよつとお・は・な・ししようや」

「野郎呼び出しといてマツサージ鑑賞しろとか言いだすなら帰るぞ」

「まつさかー。そんなことでこのスクラサスがあんたを呼び出すとでも？」

そう言った直後、航暉の目がどういいうわけか見開かれた。

「ああ、話してなかったっけ？ この二人はもう私の事情もあんたの事情も知ってるよ」

「……そうやって、他人を巻き込むのか、スクラサス」

「アンタが潔癖症なだけでしょ？ 必要な処置ぐらいしようよ。それで、呼び出した理由なだけどさ」

「昼の件か？」

「そうそう、月刀准将殿には情報回ってるね、重畳重畳。まあその件なだけでどさ」

そこまですつと微笑んでいた笹原の笑みが消えた。

「あんたさ、私の知らないところでスキュラと連絡とってたりしない？」

いきなり声が絶対零度まで冷え込み、空気が一気に張った。

「どうも怪しいんだよね、あんた。調べさせてもらったよ。最近サーバーを譲ってもらったでしょ。それも、軍用仕様準拠のやつ。どこから斡旋してもらった？」

航暉は表情を変えずにその視線を受け止める。息苦しいような間

が落ちる。

「……だんまり、か。ならしやうがない。——ひとりの友人として、また同僚としての警告だ、ガトー。さっさと手を引け」

航暉はしばらく無表情でそれを聞いて、ため息をついた。

「……秘密なきは誠なし、聞いたことは？」

「信義に二種あり、秘密を守ると正直を守るなり。両立すべきことにあらず。あんたが守るべきはどちらだ、ガトー」

どこか非難するような言いようだが航暉は肩を竦めるだけだった。

「いいのかい、殺されるかもしれないよ？」

「それは、俺じゃないさ」

「ふうん、そう。……呼び出して悪かったわね。明日も早いんでしょ？ カズ君はもう寝なきや」

「呼び出しておいてそれはひどくないか？」

「いいじゃんいいじゃん。そんなこと言っても来てくれるカズ君優しいねー」

ねー、と言いかう文月と笹原。川内だけがその場で黙っていた。

「ほら、話終わったんだから行った行った。女の花園にずっといると嫌われるわよ」

「だから呼び出した側のセリフじゃないだろ、それ」

そう言いながらも航暉が出ていこうとする。それを見て笹原がにやりと笑った。

「そうだ、カズく——」

「気を付ける笹原」

「ん？」

「犬の子が緋色の髪に手を掛けた。時間はあまりないだろう」

「……何の事だかさっぱりだけど、覚えておくわ」

今度こそ航暉が出ていって、笹原がこめかみを押すようにして顔を覆った。

「司令官？」

「まったく、食えないなあカズ君は。わざわざこのタイミングで言うてくるとは」

「どういふことよ」

川内が聞き返す。

「スキュラの由来は怪物スキュラだけど、実は神話の世界でもう一人、スキュラと呼ばれた有名な女がいた。メガラの王女スキュラって言つてね、メガラ攻め込んだきたクレタの将校ミーノースに惚れ込んで、父でもある国王の緋色の髪を差し出した。予言では、その緋色の髪がある限り自国は負けなと言われていたそれを敵国に差し出したんだ」

「つまり……今の月刀准将の忠告つて……」

「スキュラが暴走を始めたか、寝返つたか……どちらにしても悪い兆候だよ。ああもう、全く状況を面白くしてくれるねお師匠さん」

こめかみを揉みながら笹原は続ける。

「しかも、カズ君は殺されないが、誰かが傷つくことは承知、それでも引けないつてことは……雷電姉妹を人質に取られたかな。そうなるど、カズ君に寝返つてもらうにはきついところがあるだろうし……ああもう！」

そう言ふと頬をパンと叩いて笹原は笑つて見せた。

「せっかくの忠告だ。無下にするのも忍びない。少し急ごうか」

その顔はすでにいつも通りになつていて、川内にはどこまでが彼女の本心かわからなくなつていて、それを聞く前に彼女は出ていってしまった。

「Oranges and lemons, Say the bells of St. Clement's」

ゆつくりと進みながら口ずさむ。南の島の湿度もこんな夜には気にならない。

「You owe me five farthings, Say the bells of St. Martin's」

「君に5ファースティングの貸しがある、
聖マーティンの鐘が鳴る」

砂浜をしゃらしゃらとなるような音は聞こえない。海から少し離れるだけで静かになる。

「When will you pay me? Say the bells of Old Bailey」

「いつになったら返してくれる? オールドベイリーの鐘が鳴る」
歩くと下草がガサリと鳴る。巡邏が来たらまずいかもしれないが、この時間にはいないことはとつくに確認済だ。作業用の服で来てよ

かった。第一種軍装のズボンを汚さずに済む。

「When I grow rich, Say the bells of Shoreditch」

「金持ちになったなら、ショアディッチの鐘が鳴る」
目の前に金属の背の高い柵。星空の下だと頭上に広がるはずの有

刺鉄線も見えづらい。それを見ながら右手へ。

「When will that be? Say the bells of Stepney」

「それは一体いつになる? ステップニーの鐘が鳴る」
正面に回り込んでゲートの脇の電子キーにカードを通す。セキユリティシステムはエラーすら返さず沈黙。数秒後に緑色のランプが

灯った。

「I assure I don't know, Says the great bell at Bow」

「さあ知らないね、ボウの大きな鐘が鳴る」
悠々とゲートをくぐり視線を上げる。先ほどの有刺鉄線と違い、暗闇でも存在をはっきり見ることができるとも高い電波塔。

「Here comes a candle to light you to bed」

「ほら、君をベッドへ送る燭台がやってくるよ」
電波塔の先を見上げ、口の端を釣り上げる。そこにあるのは、水上用自律駆動兵装の運用に不可欠な戦術リンク送受信に使用するXバンド高規格無線アンテナ。

「Here comes a chopper to chop off your head」

脳裏に浮かぶ姿を認め、鼻で笑った。そこまで意識するつもりはな

かったのだが、まあ仕方ない。

「借りは返してもらおうよ」

電波塔の中の漆黒に消える影をだれも見たものはいなかった。

こともある

その日の夜。

「……やっと終わったか」

「……ですね」

「お疲れさまでした、提督」

大量の書類を捌き終わった東郷徹心大佐は椅子の背もたれに体重を預けた。

「いつも助かっている、扶桑。五月雨もすまない、別の部隊なのに付き合わせてしまった」

「とんでもないですよ。いつも提督は、周りをあまり頼られないので……」

「緊急事態でしたし仕方ないです。それに……また一緒にお仕事できて、その……うれしかったです」

扶桑が目を細め、朗らかな雰囲気で笑う。照れたように視線を下げるのは五月雨だ。その様子を見て、東郷大佐はどこか遠い目をした。

「……懐かしい雰囲気だ」

「そう言えば五月雨ちゃんがいたところは三人で書類を終わらせることが稀にありましたね」

「そうでした。私がパラオを出てからもう一年近く経つんですね……懐かしいです」

「硫黄島はどうなんだ？」

「みんな優しいですし、村雨姉さんとか夕立姉さんもよくしてくれま
す。最近やってきた吹雪ちゃんもいい仲間ですし」

「そうか、なら、いいんだ」

時刻は既に2203フタフタマルサン、熱帯らしい湿度の高い夜だ。ノースリーブの五月雨でも少し暑そうではある。

「……提督」

「どうした?」

一瞬寂しげな顔をした五月雨に東郷大佐は軽く首を傾げた。

「……いろいろ、ありがとうございました」

「急に改まって、どういう風の吹き回しだ?」

「もうっ、ちゃんと真面目な話なんですっ!」

一瞬沸き上がった悪戯心でそう言えばどこか不本意そうな顔をする。それを見た扶桑が目を細めて笑う。

「……やっつと、わかった気がしたんです。今更なことですけど……、旗艦として戦うことの意味を、他の部隊に進んでみて、わかった気がするんです」

東郷大佐を真っ直ぐに射抜いている五月雨の瞳を見て、彼はどのような表情をするべきかわからなかった。

「旗艦は司令部にいる提督と一緒に皆の命を預かる立場です。私はそれがとても怖かった。また私のせいで誰も守れなかったらどうしようって……実は、ずっと思っていました。でも、提督はそんな私をずっと旗艦に指定していて、私を信じてくれました。それがどれだけ大変で、すごいことなのか、ようやくわかったんです」

五月雨はそう言うところか照れたようににはにかんだ。

「ずっと提督は、いろんな気持ちを飲みこんで、みんなを信じて送り出してくれていました。私たちが帰ってくるって信じて、それができるように頑張っていて……私は、五月雨はそれに応えようといっぱいいっぱいでしたけど、提督は信じてくれました」

熱を持つ頬を隠そうと思ったのか、目線を窓の外に向ける五月雨。欠けた月が窓の端に浮かぶ。

「信じるって口で言うのは簡単です。でも、本当に信じることはとても難しいです。それでも旗艦はみんなを口だけじゃなくて心から信じて、指示を出さなくちゃいけない。盲信とも、独りよがりとも違う、みんなを信頼して、指示を出して、みんなで生きて帰ってくる。その大切さと大変さを私は提督から学んだんだと思うんです」

「……そんな大層なものを教えたつもりはないんだが」

「そんなことないですよっ。万年珍プレー大賞とか言われてた私を、

一人前にしてくれたじゃないですか！……一人前って言うには、今日電ちゃんに負けちゃいましたけど……」

「相手は特務艦隊、一流のエリートを集めたような艦隊だ。それに指揮官は黒鳥の面々だ。あそこまで食いつければ十分に一人前って言えるだろうさ」

それに、どこか意地悪い笑みを浮かべる東郷大佐。

「ちやんと最後は電をノックダウンしたしな」

「あれは事故ですっ！ やろうと思ってやったわけじゃ……！」

「提督も五月雨ちゃんをからかうのもそろそろやめてあげないと……」

「わかってるよ」

顔を赤くして抗議する五月雨を見て、東郷大佐は普段よりも柔らかい表情を浮かべた。

「私には、出来過ぎた部下だ。本当に」

「まさか五月雨ちゃんから相手の航空回線のハッキングのアイデアが出てくるとは思ってませんでしたしね」

扶桑の言葉に東郷大佐は苦笑いだ。

「……本当に、誰に似たんだか」

「間違いなく提督です」

声を揃えてそう言われ東郷大佐が苦笑いを深めた。

「それでもしなければ勝てない相手だった。そして、そこまでやっても競り負けてしまった。私のオペレーターミスだな」

「そんなことないですよ、提督」

扶桑が間髪入れずに否定すると軽く肩を竦める東郷大佐。

「もつと、皆を守るようにならなければね。劣勢の中でも、皆、よくやってくれた。五月雨は一隻拿捕、一隻撃破の大活躍だ。正直、驚いたよ」

そう言って東郷大佐はどこか寂しそうな笑みを一瞬浮かべ、それを中心からの笑みで隠す。そして彼女の軽く熱を持った頬に軽く触れた。

「……立派になったな、五月雨」

「……はいっ！」

顔を上げた五月雨が眩しい笑顔を浮かべる。そうしていると、ドアがノックされ、五月雨も東郷大佐も慌てて飛び退いた。顔を真っ赤にする五月雨を横目で見つっ、東郷大佐は咳払い。

「……入れ」

「高峰大佐、入室いたします」

そう言ってドアを開け、入ってくる。第一種軍装の男。この蒸し暑いのに制服をきっちり着ているのは生真面目なのか温度感覚が鈍いのか、東郷はそう思いながらも彼を出迎える。

「少々お時間よろしいですか……ってなにがあつたんです？」

「なんでもない。こんな夜中まで高峰君もご苦労様だな」

「中央からの応援要請がなければとっくに寝てるんですけど、そこは東郷先輩も同じでしょう」

「まいった」

そう言うのと東郷大佐はデスクのボタンを押した。現れたQRSプラグを引き出すとすると高峰が右手を上げた。

「今回は内容が内容なんで外部記憶装置の使用はなしでお願いします」

そう言うのと高峰は視線を左に移した。その先にはどこか不安そうな顔をする五月雨の姿があつた。

「五月雨ちゃん、少しだけ席を外してほしい。直近の仕事がないなら人払いを頼むよ」

「……わかりました」

どこか訝しむような間を開けて五月雨が頷く。後ろ髪を引かれるような様子で扉を潜る彼女。司令官二人はそれを笑顔で見送った。扉が閉まったことを確認して高峰が視線を東郷大佐に戻す。感情を極端に隠した、冷え切った、目。

「……五月雨ちゃんには青葉がついてますよ、何かあつても大丈夫でしょう」

五月雨の名前が出たとたん、東郷大佐の眉がピクリと動いた。

「……五月雨の安全に関わる内容か？」

「いや、少なくとも現時点では違います。だが、その可能性も出てくる

かもしれない。明日にはほかの指揮官にも特別調査部部长名義で通達が行くかと思いますが、先輩には先にお伝えしておきます」

「つまり、私に関わる内容であり、扶桑にも聞かせておいたほうがいい内容か？」

「その可能性はある、というだけです。一応まだ将官クラス以上にか渡っていない情報なので、どうぞご内密に」

そう言って高峰は書類を一枚、東郷大佐に渡した。

「……これは？」

「それを今からご説明します」

東郷大佐の執務室を出るとドアの横でセーラー服の女性が立っていた。その人を五月雨は少し見上げる。

「青葉さん……」

「なんですかあ？」

どこか間の抜けたような、ひょうきんなような声が返ってくる。

「高峰大佐って……どんなご用事を持ってきたんですし？」

「ふふふー、一応秘密なんですよねえ、何だと思います？」

「演習のことか……昼間のハッキングのことか……ですか？」

「正解を知りたいですか？」

青葉がにんまりと口角を釣り上げた。それを手元のメモ帳で隠す。今どき紙のメモは珍しいが、青葉はなんだかんだで紙媒体を愛用して

いた。

「えつと……私が聞いていいんですか？」

「高峰さんには不用意に話すなどは言われてますけど、まあいいでしょう。そこは五月雨ちゃん口の硬さに期待、ということだ」

戸惑ったような仕草を見せる五月雨に青葉はそういうと、彼女の視線に合わせて少々屈みこんだ。彼女の耳元に唇を寄せ、周囲を気にしながらメモ帳で口元を隠した。極力小声で伝える。

「……実は東郷大佐に重要参考人としての軍法会議への出廷を要求してるんです。軍機密への不正アクセスの容疑がかかってます」

直後、五月雨が飛び退くように青葉から距離をとった。僅かに腰を落として臨戦態勢のように見えるが、その肩が震え、顔色がどんどん蒼白になっていく。

「青葉さん、何を言ってるんですか……？」

「別に何も？　いま高峰大佐が東郷大佐に話している内容をお伝えしただけですよ？」

そう言つて青葉は後ろで手を組んで微笑んで見せる。

「提督は、提督はそんな人じゃ……」

「そう、東郷大佐はそんな人じゃないと私も思いますよ？　でも、状況はそれを示してるんです」

「それは、そんなこと……そんなことあるはずが……。だって」

そこで、五月雨の言葉が止まる。青葉は目を僅かに細め、続けた。「それを確かめるために私たちがいるんですよ、特設調査部はそういう事態の真実を掴むために創設された。軍内外の情報を掴み、成すべき人が成すべきを成せるようにする。そのため組織です。そして私と高峰大佐は深海棲艦との交渉を持つという特殊な部隊、第五〇太平洋即応打撃群に捜査権を維持したまま異動となった」

「……」

「そしてその捜査権は、対深海棲艦以外にも適用されるんです。もちろん、東郷大佐にもそれは適用される」

青葉の目がすつと細められた、白い肌をさらに白くした五月雨は細かく首を横に振りながらさらに距離を取る。

「そんなはずない、そんなはずは……そんなこと」

「あつてはならない、じゃないんですか？　五月雨ちゃん」

「……！」

そう言われ、五月雨が動きを止める。

「大丈夫ですよ、五月雨ちゃん。別に私たちも東郷大佐が全部悪いと決めているわけではないんですよ。彼が黒か白か確かめるだけです。それとも、五月雨ちゃんには、調べられてはいけない理由でもあるんですか？」

「だって……確かに司令官は仮想空間立てて演習をしてましたけど、それだけでなんでハッキングしたなんて疑われなきゃいけないんですか!？」

「——五月雨ちゃん」

青葉の声が、冷え切った。

「どうして五月雨ちゃんは演習中のパーソナルデータの破損事故の原因がハッキングだと知ってるんですか？」

青葉は姿勢も表情も変えない。ただ、そう言っただけだ、それだけで五月雨の世界が止まる。

「確かに今日の昼間、パラオでドンパチしている間に軍機密への不正アクセスがありました。でも、それがハッキングによるものかどうか、まだ特設調査部の人間と、軍所属の防諜ユニット、将官クラスのコマンド要員にしか知らされていないんですよ。それを水上用自律駆動兵装という区分でアクセス権のない五月雨ちゃんがどうして知ってるんでしょうねえ」

首を振りながらどんどん後退する五月雨、それを見て、青葉は初めて表情を崩した。完全に表情の見えない能面のような顔。

「考えられる可能性は二つですよ？　ひとつは五月雨ちゃんがハッキングを行った、もうひとつは東郷大佐が部隊の誰かが行うのを知って黙認した。どっちなんです？」

直後にまるでスイッチが切り替わるように五月雨の震えが止まっ

た。急激な踏み込み。義体ならではの加速で青葉に向かって突っ込んでくる。五月雨が折りたたみナイフの刃を展張させるのと、青葉がメモ帳を放り投げて両手を開けるのはほぼ同時だった。

「甘い」

青葉は凶刃が食いこむ直前で右足を半歩下げて体を回転させてナイフを避けた。ナイフを持った五月雨の手を両手で抑え込み、そのまま相手の体勢を崩す。彼女の足を払うと、五月雨はしたたかに腰を打ちつけるように地面に倒れ込む。彼女の右の腕を無理に後ろに捻り上げると、呻き声と共にナイフをとり落とす。その刃を踏みつけて武装解除。

「ちいっ！」

五月雨は床を転がるようにして距離を取る。立ち上がりながら右手を後ろに回し、取り出したそれを青葉に向けた直後、その彼女がフランスを崩したように地面に倒れる。刹那の間遅れて破裂音。彼女の手からくすんだ銀色の塊が弾き飛ばされ、板張りの床を滑る。

「だから甘いと言ってるんです。——非殺傷性のスタン弾とはいえ、直撃食らうときついでしょう？」

青葉がそう言って足元のナイフと廊下を転がった小型の拳銃を取り上げた。

「ジュニアアコルト……というよりはサタダイナイトスペシャルのオートマチック版、ってところですかねえ、狙ってもまともに当たらないでしょう、これ」

そう言いながらシャコシャコスライドを前後させ、弾を抜き切るとそれをポケットに突っ込んだ。軽く腕を押さえて倒れた五月雨のそばにしゃがみ込み、その腕を後ろに回して両手の親指を結束バンドで戒めた。地面に押さえつけておくのも忍びないと地面に座らせ、その上で青葉もホルスターから拳銃を取り出した。FN Five seven。それを五月雨に向ける。

「パラオ艦隊出身者は接近戦になれている。でもそれは艦装を背負ったの海上戦に限定される。艦装を使えない陸上では出力制限がかかっていることは念頭に置かないとダメですよ、五月雨ちゃん」

「なんで、どうして……」

「我々特調六課は対人間、対サイボーグ戦も視野に入れた防諜機関だ。全身義体のサイボーグを物理的に拘束するための訓練も積んでいる。要は艦装を付けていない五月雨ちゃん程度なら、こちらも容易に取り押さえられるということだ」

五月雨の疑問への回答は頭上から振ってきた。男の声。

「それに今の五月雨ちゃんは半ば外部コントロールに近い状態だから、ラグも大きい」

目線だけを上にあげれば、高峰春斗大佐がドアを開けて立っていた。その後ろには驚いて目を見開いた東郷大佐と扶桑の姿が見える。扶桑の表情が驚きから怒りに代わる。

「五月雨ちゃんに何を……!?!」

扶桑が動くよりも早く青葉が動いた。右腕を伸ばし、左腕をサポートに回したウィーバースタンスで拳銃を扶桑に向けた。防弾ジャケットがなく、横からの急襲を受けないならばこれが一番相手に晒す面積が少ない。まだ引金に指はかけない。

「スタン弾を入れてますから死ぬことはないですけど死ぬほど痛いですよ」

「青葉、手が早い」

高峰がそう言い溜息を付いた。

「任務は武装組織の制圧じゃないし、良識ある面々だ。銃を下ろせ。……島風もだ」

高峰がそう言うのと、廊下の影の暗闇から黒い大きなリボン付きカチューシャを揺らしてどこか眠そうな表情の島風が現れる。その横には島風が連装砲ちやんと呼ぶ自律砲台が控えていた。島風は眠そうないつもの顔を崩さないまま、連装砲ちやんにそっぽを向かせた。青葉も銃口を真上に向ける。

「光学迷彩……公共施設内での使用は禁止されているはずだ。どういうことか説明してもらどうぞ、高峰君」

呻くような声を出した東郷大佐の方を高峰が振り返った。

「二つ目、昼のパーソナルデータへのクラッキング騒ぎに使用された

IDは五月雨ちゃんのものと同じ。また電紋を照合したところ、五月雨ちゃんのものと同じでした」

「……それはどういうことでしょうか」

敵意丸出しの扶桑がそう聞き返す。

「要はそのハッキングに今我々が本意ながらも拘束させていただいた五月雨ちゃんが関わっている、ということ」

「そんなことがありえるわけが……」

扶桑の声に高峰が頷く。

「そう、普段の五月雨ちゃんならおそらくありえないだろう。普段の素行も良好、政治的な繋がりがあるわけでもなければ、周囲への不満を漏らしていたわけでもない。周りからもよく働く優秀な人材だと高評価されている。何の疑いようもないクリーンな背景だ。……ある一点を除けばね」

高峰がそう言うと五月雨のまえにしゃがみ込んで視線を合わせる。

「五月雨ちゃん、ここの所よく通信機を使用しているね、誰と話してる？」

「船団護衛で一緒にした輸送艦の艦長さんと、です。前に、お世話になった方で……」

「その人の名前は？」

「え……？」

「その船団護衛で一緒になった艦長の名前は？」

「えっと……」

「すぐに思い出せないかい？　じゃあ質問を変えよう、その人が艦長をしている艦の名前は？　その艦を護衛した日でもいい。なにか一つでも思い出せるかい？」

五月雨は呆然としている。高峰は溜息を一つ。

「これが二つ目、五月雨ちゃんが電脳ウイルスに感染している可能性が高かった。これではほぼ証明できましたけど」

東郷大佐はずっと黙っていた。高峰も言葉を辛抱強く待った。

「……そんなことが」

「記憶を短絡、ないし捏造し、その記憶にのっとりた行動をさせること

で相手の行動をコントロールする。————疑似記憶ウイルス。我々はこのウイルスを「デイストリビューター」と呼んでいます」

「疑似記憶を配って回る配給機、か」

東郷大佐がそう言う和高峰が僅かに目を伏せた。

「配給というよりは配電です。エンジンのスパークプラグに電流を送る機械式点火制御装置。電脳に疑似記憶を送りこんで点火させ、駒を動かし状況を回す。それでウイルスホストは動きたいように動ける。そのための装置というわけです」

それが点火したらどうなると思います？ と高峰は呑気にそう言った。

「五月雨ちゃん、演習の時に航暉たちの艦載機の映像を抜くように提案したのは君だそうだね。そしてその裏で、システムプログラムにあるコードを流した」

青葉がメモ帳を差し出す。高峰がそれを受けとりそのページを開いて見せた。

「これだね？」

「……よく、わからない、です」

「それはどうして？」

「その人に……そのプログラムを流すように……言われただけで……」

しゅんとした声五月雨の声が響く。扶桑と東郷大佐がどこか悲しそうな目で五月雨を見ていた。

「……これを流せば、提督が助かるって言われて、わたしも、提督のためになると思って……」

「私のためになる？」

東郷大佐が驚いたように声をあげた。五月雨がそれを聞いて萎縮するように視線を下げた。

「提督が……こんないい指揮をするのにずっとパラオに留め置かれてるのは、提督を妬む人達が記録を改ざんしてるからだって……その証拠を掴みたいから、このプログラムを流してくれて……」

しまいにはぼろぼろと涙を流しながら五月雨がそう言った。重い

沈黙が落ちる。しばらく誰も言葉を発さなかったが、黙っているわけにもいかない。高峰が口を開く。

「これが『ディストリビューター』の特徴です。記憶の捏造によって、一見ありえないことでも信じ込ませる洗脳行為が容易に行える、そして、それを対象者が信じやすいものを勝手に抽出し、利用する。今回利用されたのは東郷大佐と五月雨ちゃんの信頼関係だった。……信頼だけじゃ救えないこともある。そう言うことです」

東郷大佐はそれを黙って聞いていた。その肩が細かく震えていた。「なぜ、どうして五月雨なんだ……」

拳が強く握りしめられそこから血がにじんでいた。爪が食いこんでいるらしい。

「なぜ五月雨ちゃんだったのかはこれから捜査が入るでしょう」

「……高峰君」

「はい」

「この後、五月雨はどうなる？」

「一度横須賀で電脳の解析を行うことになります。どういう動きになるかは保証しかねますが、おそらくディストリビューターの対策パッチの作成し、アップロードした後、任務に復帰することになるでしょう」

「……五月雨が、このまま軍務につくには不適合と判断される可能性は」

扶桑が目を見開いた。それはすなわち、兵器として使用できないと判断されるということであり、兵器として生まれた水上用自律駆動兵装としての寿命を意味する。

「ディストリビューターの影響次第です。対策パッチが作れるか否か、それが有効かどうか。ですが、バグのないプログラムが存在しないように、デバックが不可能なプログラムもまた存在しない。五月雨ちゃんが海に戻る可能性はかなり高いと見ています。……ですが」

「ですが、なにかね？」

高峰が言いよどむ。言うべきか言わないべきか悩んでるような間だった。

「東郷大佐が五月雨ちゃんの指揮に上番する可能性は今後限りなく低いものと覚悟してください」

五月雨が弾かれたように目線を上げる。

「そんな……っ」

「先ほど申し上げましたが、五月雨ちゃんは『ある一点を除けば』とても優秀です。その但し書きのある一点というのが、東郷大佐、貴方の存在だ」

「それは……どういうことでしょうか」

扶桑の声が一気に冷えた。

「今回、五月雨ちゃんはウイルスに罹患した条件下とはいえ『貴方のためを思つて』電子情報の不正アクセスの片棒を担いだ。今後その危険性がある以上、貴方の指揮下に五月雨ちゃんが戻ることはないでしょう。そして我々もまた、貴方を今回の事件の容疑者リストからあなたを外したわけではない」

扶桑が東郷大佐を守るように前に出る。同時に青葉が拳銃を向ける。それを高峰は止めなかった。

「東郷徹心大佐、貴方はとても優秀で、とても良識のある方だ。五月雨ちゃんを貶めてまで何かをする理由もないでしょう。しかし、限りなく黒に近いグレーを黒だと言いきれないように、限りなく白に近いグレーは潔白ではない。そして我々特調六課の人間は、白に混じる黒の可能性を一つずつ消して、本当の黒を刈り取るために存在する」

「……なにが言いたい」

東郷大佐が務めて冷静に口を開いた。それでも言葉尻が力む。

「貴方の白黒がはつきりするまで、おとなしくしてほしい。私の仲間がおそらく既に監視体制をひいているはずです。すべての通信が監視されているものと思つた方がいいでしょう」

そう言うとき高峰は青葉を一瞥した。青葉が銃をホルスターに戻し、五月雨を立たせる。島風が代わりに高峰の隣に立ち、連装砲ちゃんが五月雨を取り囲むように動いた。

「容疑者リストといったな。犯人の目星は、ついているのかね？」

「犯人たちの絞り込みは完了していますが、お教えするわけにはいき

ません」

「ほう」

「貴方が勝手に手を下されると困りますから。彼らにはしかるべき機関でしかるべき裁きを受けてもらわねばならないのですから」

そう言つて高峰が目礼。背を向け歩き出す。

「……五月雨！」

連れていかれる五月雨の背中に東郷大佐が声を投げた。五月雨が振り返る。

「すまない。必ず君が笑つて海に戻れるよう状況を整える。必ず助ける。だから、それまで待つていてくれ」

「提督……」

「……ああ、そういえば」

五月雨の肩に手を置いて高峰がもう一度振り返つた。

「おそらく五月雨は艦装研での検査の後、一時的に特調六課預かりになります。ずっと我々のところにも、硫黄島にも置くわけにいきませんので」

「……そうか。よくしてやってくれ」

「身の安全は保障しますよ。私の古巣ですから」

くれぐれも早まった行動をなさらないように、と言つて高峰は皆を連れていく。角を曲がったところで五月雨の両の指を戒めていた結束バンドを切つた。

「あの……外していいんですか？」

「五月雨ちゃんが縛つて欲しいならそうするけど？　君が誰かを人質に立てこもるようなことはしないだろうし、艦装をつけない君程度なら抑えつけるぐらいできるさ。島風も青葉も、もちろん俺も。それに、青葉に飛びかかったのだって、とっさに体がそう動いてしまったんだらう？」

高峰はそう言うとき軽く笑つた。五月雨が悲しそうな顔で頷く。

「洗脳がかかっている状態だから仕方ないだろう。一応今君の通信アクセス権を停止しているから追加で君が誰かに攻撃するような指示は来ないはずだ。そして来たとしても我々なら取り押さえられる。」

もう君は誰かを傷つける心配はしなくていい」

そう言つて五月雨の肩を軽く叩いた。それから自分のポケットから出したものを五月雨に見せる。

「一応保険のためにも、アップタイププロテクト身代わり防壁と通信阻害器を付けさせてもらうよ。問題ないとは思うけど、横須賀につくまでは外さないように」

高峰がそう言つて五月雨のQRSプラグに薄い機械を差し込んだ。肌色であまり目立たないように配慮されているらしい。それを確認した高峰が頷く。

「島風、お前と夕張の部屋で五月雨を護衛しろ」

「監視じゃなくて？」

「護衛だ。本命が五月雨を物理的に口封じに出る可能性がある。五月雨のネットワークアクセス権を停止は続行」

「はい、夕張も巻き込んでいいんだ？」

「五月雨ちゃんと懇意のようだし、気心が知れている人がいるだけでも安心するもんだ。非常事態であることも考慮し、許可する」

「りようかーい」

それじゃいこつか。といって島風が五月雨の手を取った。その後ろを高峰は歩く。無線チャンネルを開いた。

《青葉はこのまま俺の部屋へ》

《今夜は寝かせないぜとか仰ります？》

《阿呆、追加で仕事だ、サビ残でな》

《うげえ》

青葉が苦い顔をするが、高峰にはそれを笑う余裕などなかった。

「さて……ここからが本番だ。次が来る前に止めるぞ」

部屋には重い空気が流れていた。部屋には東郷大佐のみならず、扶桑、足柄、名取、霞、長月、雲龍が詰めていた。

「……それでもむぎむぎと五月雨を引き渡したわけ？」

足柄が怒りを抑える様子しながらそう言った。

「足柄、提督に怒っても仕方ないでしょう」

「わかってるわよ扶桑。わかってる、でも悔しいじゃない！ 五月雨が航空機の映像をクラッキングして有利に持ち込もうなんて言いだして、少し違和感を感じてたのよ！ みんなで五月雨ちよつと変わったねって言ってたのよ！ なのに、どうして、どうして……止められなかったの!？」

「そうね、でもそれをぶつけてどうにかなるの？」

「そう……だけど、さあ……！」

扶桑は淡々と言いくるめ、東郷大佐を見た。

「提督……これから、どうなさいますか？」

どこか疲れたような表情を浮かべ、指を組んだ。

「……どうするべきだろうな。どうもしない、というのがおそらく最善だ。捜査は特調が行う。我々には捜査権はない、そして、私自身も犯人候補の一人と言われている以上、積極的に動けば動くほど特調の動きを妨げることになるだろう」

「でも、司令官はそうする気はない」

霞が目を閉じたまま腕を組んでそう言った。

「そうでしょう？」

「……高峰君はお人好しだな。私にある程度の情報を残していった」

そう言うと、ホログラムスクリーンを立ち上げた。そこにSOUND ONLYの文字が浮かぶ。流れるのは男の声だ

——容疑者リストといったな。犯人の目星は、ついているのかね？

——犯人たちの絞り込みは完了していますが、お教えするわけにはいきません。

音声の再生が止まる。艦娘たちは東郷の言葉を待っていた。

「犯人“たち”……実行犯は複数。おそらく組織立った集団、もしくは一人が実行し、それを支援している集団がいる」

東郷はそう言った。改めて再生。その続きからだ、

——ほう。

——貴方が勝手に手を下されると困りますから。彼らにはしるべき機関でしかるべき裁きを受けてもらわねばならないのですから。

また再生が止まる。

「“彼ら”と言った以上、男性の犯人を想定している。この時点で艦娘の誰かが犯行を企てた線が除外される。おそらく人間。そして勝手に手を下されると困るといふことは、私が手を下そうと思えば下せる人物——、すなわちそいつと私は面識がある」

そう言つて東郷大佐は目を細める。組んだ手を顔の前に持つてくる。

「そして、だ……」

——おそらく五月雨は艦装研での検査の後、一時的に特調六課預かりになります。ずっと我々のところにも、硫黄島にも置くわけにはいきませんので。

「我々のところに置くわけにも行かないの“我々”は第50太平洋即応打撃群のことだろう。それを高峰君が強調し、同じように硫黄島にも戻すわけにはいかないと言った」

「……それが何か問題？」

雲龍の声に東郷大佐は目を閉じた。そのまま天井を仰ぐように顔

をむける。

「言っただろう。私と犯人は面識がある可能性が高いと。そして俺は硫黄島の指揮官と面識はない。おそらく第50太平洋即応打撃群の面々で硫黄島に関連ある人物を指しているはずだ」

「……さて、東郷大佐」

長月が話の腰を折った。

「東郷大佐は第50太平洋即応打撃群の指揮官の誰かが犯人だと思ってるのか？」

「少なくとも高峰君はそれを疑ってるんだろう。そうじゃなければわざわざ私に伝えてきたりはしないだろうね」

そう言っただけで視線を戻す東郷大佐、疲れたような表情は既に消え去っていた。

「そう、高峰君はそれらをわざと私に伝えてきたんだ。勝手に動くなと釘を刺しながら、私にそれを調べるチャンスを残していった」

そういうと部屋に揃っているメンバーを見回した。

「五月雨は所属こそ違えど、この基地の大切な仲間だ。互いに信じ、背中を預ける仲間だ。犯人は……犯人はそれを踏みにじった。五月雨も、私も、この部隊の全員の心を踏みにじったんだ」

組んだ手に力が入っているのがわかる。そんな東郷の様子を扶桑が心配そうに見ていた。

「自分で言うのもなんだが、私はほかの人より好戦的ではないと思っている。だがね、売られた喧嘩は買うし、ここまでやられて黙って許せるほどにはお人好しでも大人でもない。……特調の人には悪いが、調べさせてもらおう。落としまえはつけさせてもらおうぞ」

そう言っただけで指を解いた。いつも通りの表情が戻ってきた。

「演習の後から今まで、即応打撃群の艦娘や指揮官に私や五月雨のことを聞かれたものはいるか？」

「一応、聞かれた」

長月が手を上げる。

「文月に部隊はどんな感じか、聞かれた。どんな指揮をするのかとか、質問を受けた」

「了解した。……文月が特調と関係あるという話は聞かないが……一応その可能性を考慮するべきだろう。今後とも素直に答えていい。皆も何か聞かれたら素直に知ってることを答えてもらっていいぞ。ただし誰に何を聞かれたかは私にすぐに報告してほしい。足柄」

「なにかしら?」

「589 旗艦を扶桑から受け取れ」

「へっ!?!」

足柄が素っ頓狂なな声をあげた。旗艦から外されるらしい扶桑はなぜか澄ました顔だ。

「ちよ、ちよつといきなりどうしたの?」

「先ほど、扶桑に転属命令が下った。翌日付けて扶桑は極東方面隊後方支援部隷下、艦装研究開発実験団に転属になる」

そう言うのと一枚の書類を差し出した。印刷されたそれを見る。それをまじまじと覗きこんだのは雲龍だ。

「本当。極東方面隊総司令長官山本五六……署名入りの公式な転属命令書ね」

「もつとも署名は印刷だがね。さっきの今で高峰君が用意してくれたよ。全く、特調六課とやらはどこまでパイプを持っているやら。こんなものがさらつと飛び出てくるあたり、敵に回すと本当に厄介だ」

東郷大佐がどこか呆れたようにそう言った。そんな戦艦クラスの異動なんてお手軽にできるものではない。それを2時間程度で押さえ、公式に処理させ、書類を揃えて送りつけるなんて通常のルートではありえないのだ。

「……高峰君は元外務省の外交官だったか、様々な伝手を持つてるんだろう。それをフルに使ってこんなものを用意してくれたわけだ。扶桑、行ってくれるな?」

「五月雨ちゃんのことはお任せください」

「頼む」

東郷大佐はそう言って改めて全員の顔を見回した。

「こんなくだらないことで仲間を奪われるのは癪に障るのでね。すまないが、皆には私のわがままに付き合ってもらおう。文句は言わせん、

ついでかい」

『了解』

全員の声が揃った。直後同時に皆の姿が掻き消える。東郷大佐の視界の先に、皆がログオフしたことが表示される。溜息をついて振り返る。直後、ログオン通知が響く。

「これでいいかね、高峰君」

「十分です」

高峰がそう言つてゆっくり歩いてくる。

「……まったく、君は私を食い潰す気かね」

「そうだと知つても貴方はそれに乗る気なんでしょう?」

「私を……囮にする気か」

「使い捨てる気はありませんよ。だからこそ、さっきの通信も、特調の回線を回した訳ですし。セキュリティや通信のバックアップはこちらからもサポートしますよ。貴方も、五月雨ちゃんも、死なれては困りますから」

そう言うが、囮にすることについては否定しなかった。高峰は笑っているが、営業用のそれだろう。東郷大佐は笑う気にはなれなかった。

「私と貴方で利害が一致した。それ以上でもそれ以下でもない。どちらにとつても敵のあぶり出しがメリットになる」

「それが本当に双方の利益となることを願うよ」

「私もです、先輩」

「今後のコンタクトはこのチャンネルでいかね?」

「ええ、私が出るとは限りませんが、特調六課の誰かが監視しています。サポートはくるでしょう」

高峰が踵を返す。

「貴方もまだ容疑者リストに乗っていることをお忘れなく」

「君たちが監視にかこつけて護衛してくれてると思えばそんなものは脅しにもならない。その力が私の部下を守ってくれることを切に願う」

そう言うとき高峰が軽く笑った。

「ああそうだ、高峰君。まだ敵の名前を聞いていなかったな。その敵の名前は？」

「グラウコス——」デイストリビューターの製作者と言われるハッカーと睨んでいます」

「そして君は、そのグラウコスが身内に潜んでいるという確証を得ている」

「ええ」

「なぜだ？」

高峰は答えない。

「——君がグラウコスだからか？」

笑う気配。

「まだ申し上げるわけにはいかない。それだけですよ。貴方に勝手に手を下されると困るって言ったでしょう。……でも、まあ。グラウコスの行く末はアポローンなら聞いているかもしれないね」

そう言っただけで高峰がログオフ。電脳空間に東郷大佐だけが取り残される。

「アポローン、か」

そう呟くと東郷大佐は顎に手を当てた。

（アポローンといえば詩吟、文学、芸術の神……あとは神託、遠矢、治療の神）

思いつく限りの情報をリストアップしていく。

（アポローンなら「聞いている」ということはアポローン自身ではない。アポローンに關係する神話の登場人物。となれば、アルテミス、ヘリオス、アカンサス……）

顎を撫でていた手が止まる。

「カラス……？」

口に出した可能性が急速に現実味を帯びてきた。

（高峰君は身内の犯行だと確信している。カラス……）

東郷大佐の明晰な頭脳がフル回転を始める。

（グラウコスが使うのはウイルス、電脳を蝕む病を誘発させるとなれば治療神としてのアポローンの性質。カラス、アポローン、治療……）

時刻は既に夜中の1時を回っていたが、東郷大佐の夜はまだ始まったばかりだった。

「…………ふう」

「お疲れさまです」

「青葉もな」

「こんな急に転属書類の用意なんてしたの初めてで疲れしましたあ」

「お疲れさん」

高峰が首の後ろからQRSプラグを引き抜きながら青葉をねぎらった。

「それで？ 私が書類を集めてる間、高峰さんは何をしてたんです？」

「ん？ 五月雨がどこからウイルスに罹患してたかの割り出し」

そう言うのとテーブルにタブレットを置いた。

「ディスプレイビューターは疑似記憶ウイルスだ。疑似記憶を囓ませて経験とは異なる情報を入力し、それに則った行動を強要するプログラム。要は個アイデンティティ・インフォメーションの情報アイデンティティ・インフォメーション自体を書き換え、まるで自分の意志のように行動させることができる」

「それがどうしたんです？」

「要は自らの経験と異なる情報が入力される状況だ。逆を言えば、五月雨ちゃんが経験から取るべき行動をなさないようにアイデンティティ・インフォメーションを改竄していたことになる。そこから、ア

イデntyテイ・インフオメーションがどのように改変されたか予測を付けた」

「……この短時間で良くそこまでできましたね」

「あくまで予測だ。五月雨ちゃんがその経験をどのようにとらえているかの誤差補正を駆けられない以上参考値程度の精度だ」

そう言いながらタブレットを操作して高峰は青葉に向けた。折れ線グラフが二本描画されている。

「横軸が時間、縦軸がPIX構成の偏差だ。一点からゆっくりとだが乖離を始めたのがわかるか？」

「その前までほぼぴったり一致っていうのが恐ろしいですけどね」

そう言いながらもそのあたりを拡大して表示する。

「去年の……11月？」

「その直前、五月雨が哨戒に出て、大破して戻ってきた。西ノ島周辺に未確認の敵泊地を確認。火山の影響が大きい中、大規模作戦が実施された」

「……ねえ高峰さん。すごく嫌な予感してるんですけど。その頃、私達アリューションとかに飛ばされませんでした？」

それを聞いて高峰が肩を竦めた。

「正確にはその後だな。——オペレーション・アリュキュロトクツス銀弓作戦、その後から五月

雨の行動が変わっていった」

「……その時に、グラウコスからウイルスを受けとった？」

「だろうな。おそらく大破してからの入渠段階だ。マイクロマシンによる補修に並行して、戦闘経過などの情報を抽出する。特に五月雨はその時非常用位置通報装置TR以外の通信機をロストしていて、敵のデータなどは直接有線できりだした可能性が高い。そのタイミングなら物理的にアクセスできれば難易度は低いだろう。そしてその時に物理的にアクセスできた人間は……中路中将、杉田、渡井、カズ。そして合田少佐くらいか。少なくともこのうちの誰かが、グラウコスにつながっている」

高峰はそう言っただけ息をついた。

「まったく、また銀弓作戦を捜査することになるとは、なんの因果か

な」

「ただでさえ不正アクセス警報とか通信断絶とかで不確定要素多すぎた作戦なのにまた追加ですかあ。どれだけ利権絡んでたんですかこの作戦……」

「それよりも、その時からハッキングを用意してきたことの方が問題だろう。……相当に計画を練って、かなりの資金源を持つてる人材がバックにいる。組織立った犯行とみるべきだ」

高峰はそう言って、もう一度溜息。

「お疲れですか」

「まあ、な」

高峰はそう言うのと立ち上がった。

「とりあえずは今日のところはここまでだ。本当にアポローンに神託を頼みたい気分だが、神頼みというわけにはいかない。成すべき人が成すべきを成す。我々はそのためにいる。グラウコスを止め、この凶行を止めさせる」

「ですね。五月雨ちゃんも大丈夫だといいいんですが」

「そのあたりは確認しといてくれるか？」

「青葉、了解です」

青葉がクスリとわらう。書類をまとめて、青葉が敬礼。

「それではお先に失礼します。どうぞご自愛ください、高峰さん」

「青葉もな」

高峰がラフに答礼。青葉は部屋を後にして、ため息をついた。

「さて、と……」

足を艦娘に割り振られた居住区に向ける。目指すは島風の部屋だ。青葉が島風の部屋に顔を出すと夕張が五月雨に膝を貸すようにしていた。五月雨の頬には乾いた涙の跡、夕張の目もどこか赤かった。「さつき、やっと寝たわよ。泣き疲れて気絶っていう方が正しいかもね」

夕張が五月雨の髪を梳きながらそういった。

「結構大泣きしてて、暁ちゃんとか天龍さんとかも様子見に来たよ。あと電ちゃんは結構長いこといて、10分前くらいに帰っていった

よ」

島風の補足を聞いても青葉はいつもの笑みを浮かべていた。

「そうですか。少し悪いことをしましたねえ」

「少し?」

夕張が少し棘を含んだ声で聞き返した。

「青葉、その薄い笑みなんとかならないの? 本心でどう思ってるかわからないけど、こっちとしては腹立つわ」

「仲良しの五月雨ちゃんをノシて泣かせたからですか?」

青葉はそう言った。

「でも五月雨ちゃんが真実を知ったとき、既に東郷大佐が犯人に仕立て上げてたら、それこそ残酷だと思えますよう」

「それは確かにそう。そしてさみちゃんもきつとそれに納得して許すと思うわ。それでも、その上に胡坐をかくのは卑怯なんじゃない?」

「そうですねえ、青葉は元々、そう言う性分ですし、笑顔以外の表情はとつくに捨ててきたんです。だから笑うなど言われても無理な相談ですなえ」

そう言つて肩を竦める。

「まあそれでも、五月雨ちゃんが置かれた状況は控えめに言つてどん底でしょうし、五月雨ちゃんが受けた傷は相当深いものでしょう。大切な人を傷つけてしまつて、もう戻れないって思ってるんでしょう」

「そこまでわかつててなんで……」

「そこまでわかつてるからこそですよ、夕張さん」

青葉がそう言った。

「五月雨ちゃんにとつて東郷大佐は手放して信頼し、尊敬する上官です。ドジツ子と言われてた五月雨ちゃんを一級の艦娘まで育てたのが東郷大佐ですから。それを自分が意図しないうちに壊していた。それは大きなストレスで、今五月雨ちゃんはそれに拘束されている状態です」

青葉はそう言つて右手を上げる。指を二本立てた。人差し指に触れ、演じるよううさぎさん臭さで言葉を紡ぐ。

「それから抜ける鍵は二つある。一つ目は優しさの鍵です。〴〵大変

だったろう五月雨、もう大丈夫だ”、”もう疲れただろう、ゆっくりお休み”、”きつとまた東郷大佐と一緒にけるよ”……優しい心からの言葉は彼女の傷を癒すでしょう。ただ、それだけでは彼女が求める”これまでの行為を償い、もう一度東郷大佐と一緒に過ごす未来”は、残念ながら、永遠に、来ない”

青葉は続いて中指に触れた。

「だから私はもう一つの鍵を提示します。真実の鍵です。誰が、どういう目的で、なぜ五月雨ちゃんをハッキングしたのか。その事実には五月雨ちゃん自身が立ち向かい、それを理解したうえで乗り越える。それは自らの過ちに立ち向かい、自らの首を絞めていくような茨の道です。その過程で何度も絶望するでしょう。自らとは何かを見失うでしょう。それでも、そこで立ち向かわない限り、東郷大佐と一緒に過ごす未来は訪れないですよ」

青葉はそう言って笑みを深める。

「まあ、それを夕張さんに話したところでどうにもならないんですけどね。……そうでしょう、五月雨ちゃん」

五月雨の肩が揺れた。

「……五月雨ちゃん寝てなかったの？」

「私の会話のタイミングと呼吸が一致しましたからね。人間は話を聞くときや話すときは自然と呼吸が一致するものです。起きてるのはバレバレですよ」

夕張が五月雨の頭を撫でる手を止めた。五月雨が頭を上げる。

「……青葉さん」

「なんででしょう？ 五月雨ちゃん」

「真実の鍵、頂けますか？」

その答えを聞いて、青葉はわらった。

「青葉は持っていますよ？ でも、それを掴む手助けはできません。鍵の在処を教えましょう。ただし青葉は慈善家ではないので、私達の調査にも協力してもらおうことになりますよ」

「それでも構いません」

「いいんですか？ ここから先は、地獄です。そこまですなくても誰

も五月雨ちゃんを責めませんか？」

「……そうだとしても、私が責めるんです。それに……私は……」

目の端に涙を浮かべる五月雨、それでも、どこか挑発的な青葉の笑みを見返した。

「私は、提督と一緒にいたい！ だから、お願いします！ 私を鍵の在処に連れていってください！」

それを聞いた青葉がこめかみを覆うようにして俯いた、その肩が揺れている。

「いいでしょう。その前にまず、ウィルスの対策パッチのアップデートを行うことになりましたねえ。話はそれからです。この船は明日出港して横須賀に戻ります。その後はいろいろ忙しくなるでしょう。泣いてる余裕もなくなります。今のうちに心の整理をしておきなさい」

そう言つて部屋に背を向ける青葉。

「我々特調六課は貴女が調査に加わることを正式に認めます。活躍を期待します、五月雨特務官。貴女のその意志が求める結果を引き寄せることを願います」

青葉は笑つてドアを開ける。

「島風はそのまま任務を続けてくださいね」

「はい」

青葉が部屋を出ていった。五月雨はそれを頭を下げて見送る。

「……五月雨ちゃん」

「大丈夫です、夕張さん」

頭を上げて笑つて見せる。

「いくら謝つても、いくら泣いても、状況は変わらない。……提督から教わったことの一つです。泣いててもどうしようもないんです。だから私は、できることをします。大丈夫です」

夕張はそう言つて目を細める五月雨を強く抱きしめた。

「……さみちゃんなら、きつとできる。信じてる。でも、本当につらく

なったら、抱え込まないで、逃げておいで。私が絶対に守ってあげるから。何があっても、私はさみちやんの味方になるから。だから、無理しないで」

「大丈夫です、私は一人じゃないことを知ってますから、ダメになりそうだったら、夕張さんに相談しますね」

「必ずよ。必ずだからね」

「はい、必ずです」

出港する船を見送る。離岸した巨大な鋼鉄の塊は急速に沖へと離れていった。

「提督……」

「わかってるさ、足柄」

船が出る前、五月雨が声をかけてきた。

——提督！ 私、一生懸命頑張りますから！

「五月雨も戦っているんだ。私だけが日和見するわけにもいかんだろう」

そうやって海の方を見る。今、この海の上を灰色の男が進んでいるはずだ。その行方を知るのが銀弓神アポロンだというのなら。

「家族を弄し味方殺しをさせたカラスが存在する。黒いカラスに混

じって、口の達者なカラスがいるはずだ」

そいつが、五月雨を弄し、傷つけた。

「……待ってろ。貴様には落とし前をつけてもらおうぞ」

東郷徹心が海に背を向けた。自らの戦場へ、司令部執務室へ戻るために。

司令部赤裸々座談会―そのに

作者（以下作）「では、第二回赤裸々座談会いつてみましよう」

川内（以下川）「いきなりテンション低いね、夜戦じゃないから？」
青葉（以下青）「川内さんじゃないんですから……、で、理由は何な
んです？」

作「最近話がブラック一辺倒で精神ガリガリ削られてるからだよ」

電「そういう話を書いてるから悪いのです」

作「ねえ、なんだか当たりきつくくない？ これ電ちゃんじゃなくて
ぷらす……」

電「いなづまはいなづまなのです」

作「アツハイ」

大鯨（以下大）「もー、変なこと言うからですよー」

武蔵（以下武）「口は災いの元だな」

作「……えー、コホン。では始めて行きましようか。今回は黒烏の
秘書艦の皆様です」

武「逃げたな」

川「逃げたね」

電「逃げたのです」

作「艦娘のみんなが冷たいけど気にせず行きまーす。寄せられた質
問に答えていくコーナー、ちゃっちゃと行ってみよー。それでは最初
の質問。」

Q. 国連海軍が極東にどのくらい人数を派遣しているのか

作「これ……極東方面隊に国連海軍の人員がどれだけいるのか、で
いいんですかね……」

武「というのは？」

作「一応国連海軍は各国海軍の上位組織として組織されています
が、その人員は基本的にその地域の軍隊の人員が参加しています」

大「つまり、他の地域から極東に人員を派遣することはないという

ことですか？」

作「その通り。その人員は各国の軍から“出向”という扱いにしています。……要は多国籍軍と似たような扱いですね。水上用自律駆動兵装運用士官以外は、基本的に各国軍にも籍を置いています」

電「あれ……じゃあ司令官さんたちは違うのです？」

作「艦娘たる水上用自律駆動兵装と水上用自律駆動兵装運用士官は国連海軍の現体制ができてから生まれた兵装であり職種です。また、国連海軍の内部でも、領土問題を抱えた当事者同士が同じ仕事をすることもあります。そうなると、その国に籍を置く軍人としては関われない領域というのが生まれる可能性があります」

川「まあ、下手に突っ込んで侵略とか言われたくないしねえ」

作「でも直接的に防衛に参加する水上用自律駆動兵装と水上用自律駆動兵装運用士官はそういうわけにはいきませんから、国連海軍に完全に籍を置いています。一応これも水上用自律駆動兵装を各国軍が私的に運用する事態を防ぐことになりますからね」

青「それはわかりましたけど、実際どれくらいの人員がいるんです？」

作「予備士官も含めると海上用自律駆動兵装運用士官で400人弱です。艦娘よりも数が多いですが、直接的に艦娘に指示を出す人物だけではなく、その上位の指揮官もカウントしているので間違いありませんよ。あと非常時に招集される予備士官も含めているので、常に艦娘に関わってる指揮官というざっと200人弱まで落ちます。それに関係する補給系などの人員を集めても5万人程度なんですよ」

大「かなり少ないですけど……これで大丈夫なんですか？」

武「……国連海軍専属の戦闘艦は存在しないし港の警備などは各国の軍隊が行うことが通例になっているからか？」

作「それですねー。これまで作品に出てきた“あすか”や“威臨丸”は一応日本国自衛海軍が発注し、国連軍に自衛海軍が人員ごと貸し出している状況なんですよね。ですので“あすか”に乗艦している、国連海軍の人員はかなり少ないんです。まあ、あすかの場合は水上用自律駆動兵装の運用を前提としていますから、国連側も大分口出しし

てるんですけど……対深海棲艦戦が完全終結して国連海軍解散となれば、あすかほかの艦艇は各国の軍隊に帰属します。また、国連基地内部の警備は国連軍が行いますが、港などの警備……まあ対人警備なんですけど……などは各国海軍が管轄します。なので国連海軍の人員というのは水上用自律駆動兵装の運用に必要な人員しかいないんですね」

電「そーだったのですか……」

青「一応、国連海軍所属なんですから把握しときましようよ電ちゃん」

作「では次行ってみよう」

Q. 海外の艦娘の運用状況は？

作「これは青葉、いってみよう」

青「わ、わたしですかあ？」

作「高峰君に鍛えられたでしょ？」

青「う、わかりましたよ。……えっと、国連海軍が定めた四つの管区にある有力企業が開発を行っています。欧州アフリカ方面隊なら欧州共同体のヨーロッパアンウェポンシステムズ、南北アメリカ方面隊だと帝政アメリカの帝政アメリカ兵器開発局、インド・オセアニア方面隊はオーストラリアのオージーオードナンスが生産を行っています。水上用自律駆動兵装製造技術は日本の平菱、ポセイドン両社が輸出して生産した事になっています。一応はこの辺りの国家・団体が艦娘製造技術を独占してる形ですねえ」

川「一応その中でも各国がそれぞれの国の特徴をもった開発を行ったりもしてるところはあるけどね。その最たるものは帝政アメリカかな」

武「ん、なにかあったか？」

川「艦娘と艦装の関係は変わらないんだけど、『艦装』としてでっかい船丸々くっつけてるの。それこそ人が乗って操船できるレベルの」

大「あー、あきつ丸さんみたいな」

川「そ、一応あれ、ポセイドンインダストリーのオリジナルって謳っているけど、本当のオリジナルは帝政アメリカ兵器開発局。いろいろミサイル積んで既存兵器も盛りだくさんにしてるところは帝政アメリカらしいかな、妖精印の兵器しか深海棲艦を傷つけられなくても、対人兵器としては有効すぎるくらい有効だしね」

青「物騒ですよー、高峰さんも俺の故郷は火力任せでガサツだって言っていましたよ」

電「あれ、でも艦娘の個アイデンティティ・インフォメーションの情報については輸出されてるんですか？」

作「それについては輸出してないよー、一括して日本がやってる。それを独占だって風潮激しいけどね。だから、どうやって艦娘が出来るか、の最終段階は、未だに日本が抱えるブラックボックスの一つってわけですね」

Q. 大陸交通はようになってるんでしょう？ 内陸各国の情勢は？

作「あー内陸部は内陸部で泥沼になってます」
電「どうしてなのですか？」

作「海洋島嶼に住む人達や沿岸部に住む人々が一齐に難民になって内陸部へと流れ込んだから。それで治安や衛生状況の悪化、食糧不足、海洋輸送が禁じられたことに派生するハイペースタグフレーション。それらがごちゃ混ぜになって、内乱、動乱が発生しました。深海棲艦が生まれて最初の三年、即ち艦娘が生まれる前にはそれが本当に顕著でそれを第四次世界大戦というべきだっという専門家もいるぐらい。まあいくつもの内乱の集まりだから世界大戦とは言わないけど」

川「すべての国が自給率がいいわけじゃないからねえ」

作「結構餓死者もでますよ。砂漠化した地域には住めませんし、水戦争のような形相を成しところもあります。……まあ今では人口

も大分減ってしまったのもあって、沈静化していますが、それでも物価の高騰、失業者問題などは続いていますから、安定化したとは言えません。対深海棲艦兵装の生産額よりも、小銃とか弾薬の方が売れている実情はありますね」

武「その中での輸送だから……内陸部も大変か」

作「ですね。トラックで車列を組んで軍隊などが護衛してなんとかという現状です。シルクロードが輸送の大動脈に戻りました。インドのハルファア峠とか交通の要所チョークポイントだと大抵山賊が張っているので適度に“通行料”を払いながら、度が過ぎるときは一掃しながらの血生臭い輸送です。一番安全なのは航空輸送ですが航空輸送にも限界があるんですよ。重量物の輸送も一苦勞ですよ」

大「そんな中で日本は大丈夫なんですか？」

青「島国のおかげで難民の流入もほとんどなく、石油などはシベリアからの海底パイプラインが生きてたので何とかなりました。休耕田などを国が強制的に買い占めて沿岸部から避難した住人に貸し与えて野菜とか米の増産に励んだので食糧難と言われつつも、餓死者などは最小限に抑えたといわれていますね。海岸沿いの発電所が使えなくなっただけで電力不足になったり、製鉄所やプラスチックの工場などもほとんどが海岸線沿いなのでそれが使えなくなっただけでかなり大混乱でしたけど、それでも大陸内部よりはマシだったらしいですよ」

武「内陸部の石炭や亜炭の採掘も再開されたしな、質も量も芳しくなかったが」

作「今は日本海をほぼ奪還済みで対馬海峡と宗谷海峡で日本海に深海棲艦を入れないための封鎖作戦を展開しています。なのでロシア・朝鮮などの大陸と小樽・新潟・舞鶴・松江の四港を開港し、艦娘がついての大規模船団護送方式で海運が可能になりました。このおかげで日本にも舶来品が再び入るようになったんですよ」

青「同時に難民の不法入国が後を絶たなくなりましたね」

作「そこは日本国自衛海軍と非常時で軍に組み込まれてる海上保安庁の管轄なので書いてませんけどね」

電「でも、……そんなことをしなくても、みんなが平和に暮らせる世の中に早くしないとイケないですね」

Q. 人類の勢力図は？

川「どの方面隊も基本的に要港部に艦娘を置いてるおかげで要港部周辺の海岸線とかは奪還してるよ。でも基本的にその程度かなあ。ウエークとかグアムとか、大陸から離れたエリアまで奪還してるのは極東方面隊ぐらいだよ」

青「大西洋のど真ん中とか有人島自体少ないので奪還するメリツトが薄いというものもありますね。南極もまた然り、一応インドオセアニア方面隊の管轄エリアですけどあまり意味がなくなってます」

電「といっても南北アメリカ方面隊の管轄地が押され気味で危ないのです」

作「南アメリカを放棄かって言われてますからね。アマゾンを開拓すれば行けるかもしれませんが、酸素の供給源のアマゾンを開拓するわけにもいかないので大ピンチです」

大「大西洋戦線側も押されてるんでしょうか？」

青「まず地中海を何とかしなければならなかったので大西洋戦線自体の対応が遅れたんです。ほとんどイギリス海軍がなんとかドーバー海峡を封鎖したくらいでしたからね……。欧州が大西洋奪還にまともに着手したのが約三年前、それまでユーラシア大陸寄りの大西洋は深海棲艦が跳梁跋扈するエリアになってました。最近やっと巻き返しを図り始めましたが、まだまだ深海棲艦に押されてる状況です。アメリカ側は大西洋側を防衛に入りましたが沿岸部の沖20カイリ程度を奪還するのが精いっぱいなので、米大陸と欧州が共同戦線を張れるレベルには程遠いのですよ」

川「で、極東方面隊が太平洋を押しさえてしまえば、南北アメリカ方面隊は大西洋戦線に戦力を集中できるから、それで大西洋戦線をサポートするのが長期的な極東方面隊のビジョンになるわけ……で、

あつてる?」

青「ですです」

作「一番影が薄いのはインドオセアニア方面隊かなあと思ってます。一応オーストラリアを主体にした艦艇群が動いています。インド洋は沿岸部を艦娘の護衛つきなら航行できるレベルまではいいので、日数さえあれば船舶も使えます。ですが、深海棲艦に襲われるリスクとかを考えれば陸送の方が安上がりなの海上輸送は重量物に限られるのが実情です」

川「艦娘がもつと多ければ輸送とかももつとコスト下がるかもしれないけどね」

青「通常艦艇は沈められた艦も多いとはいえ、各国が一定数保有してるので船団護衛などでは同行してもらおうことも多いです。そういうものがないと艦娘だけでは補給路を確保できませんからね」

作「そう言う役割を担う一般艦艇の乗組員は決死の覚悟で乗ってるんでしょうね……そろそろ次の質問いきますか」

Q. 国連軍の詳しい組織図、指揮官階級対応表とか欲しいです

作「えつと……テキストファイルで作ったのですが、ここでやるとわけわからないことになりますし、活動報告だと字数が足りないの……欲しい方メッセージください。お渡しします」

青「なぜテキストファイルで作ろうと思ったんですか?」

作「癖です」

Q. 執筆の時間をどうやって捻出してるの?

作「捻出できてません」

武「お、おう……」

作「最近精神的にもかなり余裕がなくて書けなかったんですよ。だから更新が悲惨なことになってました。最近は大分安定してきましたが、しばらく不安定な更新が続きます」

川「それでもなんか工夫とかはしてないの？」

作「一応、日に少しでも進めるようにはしています。書けなくても一文でも書くぐらいな感じですかね。夜に書くことが多いので艦これの遠征回しながら書くことも多いですよ」

Q. キャラクターの配置と違ってどうやって決めてるの？

作「うーん、オリジナルキャラクターについてはかなり大雑把にしか決めてないですね。航暉と電という主人公二人組をどう支えるかを意識していますけど、それぐらいですかね」

電「というところ……どうということなのです？」

作「例えば高峰は航暉を『月刀航暉』として扱い、諜報なども含めた裏表両面からサポートしていく人間として配置しています。逆に笹原は航暉を『ガトー』として扱い、裏面からサポートします。同時にスクラサスの刺客になつてないかも警戒してますけどね」

武「なら勝也はどうなんだ？」

作「杉田については良き兄貴として見守る人間ですね。優しいだけではないけれど……なんとというか『放っておくやさしさ』というか、そういうものを知っている大人な兄貴ですね」

武「ふふん、そうか」

川「あれ、武蔵さん照れてます？」

武「て、照れてなどいない……」

電「照れてる武蔵さんもかわいいのですよー」

武「て、照れてなどいないと……青葉、今のカメラのデータを今すぐ消せ」

青「な、なんのことですかねえ」

武「ほう、そんなに回避訓練がしたいのか」

青「すいませんでした」

作「あと渡井については一緒に馬鹿をやりつつ場を作るムードメーカーみたいな形のつもりだったのに、笹原に役割喰われています……」

大「そんなあ……」

作「もちろんこの後出番を用意してるのでそこに期待ということ
で」

川「そういえば、コラボしてくださいだった作者さんのキャラクターは
どうやって配置してるの？」

作「コラボ企画で参戦していただく以上、なんらかの形でストー
リーに絡めるとというのが信条なので、コラボが決まる度に作品のシナ
リオを練り直しています。はまっち先生の浜地中佐は純粹に艦娘に
慈愛を向ける人物として、笹原のアンチテーゼとして参加してもらい
ましたし、kokonosP先生の星影・凧風両少佐は航暉とスキユ
ラの双方を知り、航暉と電に重要な忠告を与える役割を、今回のレイ
キャシール先生の東郷徹心大佐は、今の黒鳥が抱える脆弱性を示し、
対グラウコス戦線の重要なブレインとして巻き込ませていただいて
います」

青「そのために五月雨ちゃんがすごいことになったんですけどねえ
……」

作「罪悪感でいっぱいですが、これで話が動きだす、はず、なん、で
す！」

川「で？ この後もコラボあるの？」

作「ありますよー。すでにちよこちよこつと出ているキャラクター
が本格参戦の予定です。りようかみ型護衛艦先生の作品から井矢崎
莞爾少将、エーデリカ先生の作品から東郷駈中佐と篠華・リーナ・ロー
レンベルグ中佐が参戦します」

川「提督が増えるねえ……」

作「提督勢だけで大アルカナ組めるからね。本当にびっくりだよ
……」

大「それだけ愛されているということだと思いますよ」

作「それは痛感しています。これだけたくさんの方に読んでいただけ
てますし、これだけの方がかわった作品だからこそ、必ず完結させ
なければなりません」

武「完結までの筋道は決まってるのか？」

作「少なくとも『啓開の鎗矢』に完の字を打つところまでは決まっ

てます。そのあとどうなるかはわかりませんが、今の話がどうなるかは確定しています。あとは書くだけですね。あと30話ちよいで完結すると見込んでいます」

電「それ、絶対話膨らむやつなのです……」

作「大丈夫、作者もそう思ってる……実質的には40話は書くんだろうなって思ってますよええ……」

青「それでも終わるんですねえ……」

作「明けない夜がないように、暮れない昼もない。必ず話は終わらせませすよ」

川「で？　そろそろ終わりになるけど何か言うことあるの？」

作「これからも大規模作戦が続きます、風呂敷畳み切れるかとても心配ですが頑張りますのでお付き合いいただければ幸いです」

電「次の作戦はどこなのです？」

作「航暉たちにとって、思い入れが深い場所で再びの戦闘です。今度こそ正統派の戦いにしたいっ！」

青「正統派の戦い書いたことありました？」

作「うぐっ……！」

大「まあまあ、とりあえずいつも通り戦っていつも通りやればいいんですよ、ね？」

作「そうですね……そうできるように頑張ります」

武「勝也の出番も減ってるし、皆が活躍できるといいな」

作「精進します……ではではこんなところで、改めてここまでお付き合いいただきありがとうございます。物語も既に終盤に入っております。これからの喜びはありません。黒鳥の物語を……あ」

川「どうしたの？」

作「いや、活動報告で少し聞いたんだけど、五期の黒鳥くろがらすを黒鳥こくちようだと思ってる方多いらしくて……」

大「スマートフォンとかだとフォントが潰れて読みにくいですもんね……」

武「ふりがなつけないからだ」

作「えつと……はい、黒鳥くろがらすですので、はい！ 黒鳥の物語をお楽しみください！」

電「司令官さんといなづまたちはこれからも頑張っていくます。応援よろしくお願いいたします、なのですっ！」

INTERMISSION 02

北陸州、州都金沢

瑞葉はベンチに座って溜息をついた。夏の気配をすでに漂わせ始めている木陰のベンチに座って足を休めているのだが、どこことなく湿度が高く嫌気がさす。

「全く……ここまで黒いとは思ってなかったわよ、つつきー」

手にしたメモ帳を見ていると本当に頭が痛くなってくる。開いたところにあるのは警察などの資料を駆けずり回って集めた成果だ。週刊誌の売上がかなり伸びるのは間違いない大スキャンダル。だが、それを出してよいものか今更迷う。

壮絶だった。ただ、壮絶なのだ。週刊誌という良くも悪くも手軽な媒体で出すにはあまりに壮絶なのだ。

(諏訪ジャンクションで月詠家の面々が乗った車に突っ込んだのは風月ケミカルの化学薬品運送用のタンクローリー。風月ケミカルは月刀鉱業株式会社の完全子会社で風月三友会……いわゆる月刀財閥に所属する企業。タンクローリーで運んでいたのは……ウラン濃縮時に使用する液化フルオロアンチモン酸。超酸で強力なフッ化作用を持つ劇物で空気中の水分吸って一気に反応して大爆発……証拠も100%硫酸の二千京倍を誇るとかわけわかんない酸性で跡形もなく消え去って……というか道路ごと消え去って皆無……ここまでして月詠家を消したかったのかなあ)

手元のメモ帳の内容を一つ一つ見ていく。整理するだけで悪寒がこみ上がってくる。足で調べて回って見えてきた影がこれだった。一六年前といえばテロ支援国家をぶつ潰すという名目で始まった第三次世界大戦真っ只中であり、陸海空どれも兵器の増産を迫られていた時期だ。ただ、ここで出てくるフルオロアンチモン酸というのはウラン濃縮に使用される以外ほぼ使い道がない。それに必要なのはフッ化水素であってそれを生み出すだけならばフルオロアンチモン

酸に頼る必要もない。それでもなぜかフルオロアンチモン酸が出荷された。

（出荷先はポセイドンエンジニアリングの原子力機関開発部門……このころ確かに原子力潜水艦の開発競争はあったけど、どう考えても……これは月詠家の人材を消滅させることが目的だったとしか思えないんだよなあ……）

ため息をついて次のページを開く。

（月詠雪音ちゃんの髪飾りの一部が近くの草むらから発見されたことと、最初の爆轟で吹っ飛んでその後の酸化を免れたらしいフロントバンプの欠片の塗料が月詠家の車と一致して月詠家の皆さんが巻き込まれたことが発覚。月詠航暉も含めて一家5人がまとめて行方不明になっていることが判明。一年経って月刀利郁が失踪宣言を申告、公告期間の後に宣言が成立して月詠家の人間が全員死亡扱いへ……月詠家が持ってた土地や利権はすべて月刀家に移譲され、今の財閥の形に移る。欲しかったのは、月詠家の利権？ それとも別の何か？）

答えを得るには情報不足だ。それを得るために、元月詠家の庭師だった方に話を聞きに行ったが、結局はわからず仕舞いだった。

「収穫がなかったわけじゃないけど……その先の情報が見つからないんだよなあ……」

今日の午前中の音声データを呼び出した。

——その琴音さんと雪音さんは巻き込まれてなかったと？

——雪音様の髪留めが落ちておりました。酸の影響も、焼けたような跡もなく、髪留めだけが吹き飛ぶことなどありえるのでしょうか。私はそんな都合のいいことはないと思いますよ。だから恐らくですが、月刀家は月詠家自体ではなく、恐らく琴音様と雪音様を手に入れたかったんだと思います。先代様がそれを知られたらさぞお怒りになるでしょう、それこそ家と家との潰し合いに発展するのは目に見えております。ですから、月刀家は全員消してしまえばいいと考えたのだと思います。

——月刀家にとって雪音さん、琴音さんにそこまでの価値が

あつたということでしょうか？

——私にはわかりません。わかるのは、月刀の一方的な理由により先代様も琴音様も雪音様も、航暉様も幸せを奪われてしまわれたということだけです。我々使用人に残されていたのは、全てを失って呆然とする航暉様だけでした。そして我々は航暉様のお心を癒すことができず、戦地へと自ら向かわれる航暉様を見送るしか、できなかったのです。

記録の再生を一旦止める。奪おうとしたのは琴音雪音姉妹、その二人に何があつたのだらう。そんなことを考えていると、携帯端末に通信が入った。デスクからだ。無線で電腦に繋ぐ。

『宮下です』

『月詠家の双子の姉妹のことについてこちらでも調べた。今大丈夫か？』

『はい……というよりデスク自ら調べたんですか？』

『人手不足だしな。こんな美味しいネタ放り込んでおいてミズつちやんが驚くなよ』

無線の奥ではデスクがそう言って笑った。

『それで……どうでした？』

『記録としてはほとんど残ってない。こつちでわかるのは警察とか病院の公開資料だけだが、一つ予想外のところからヒットした』

その言い方からして、なにかとんでもないものが引っかけたらしい。

『ヒットって、どこにです？』

『聞いて驚け、防衛省外局、装備施設本部^{E P C}から内務省直属の防衛情報司令部^{D H}に渡ったファイルからだ』

喉が干上がる。

『……デスク、それどここの筋から手に入れました？』

『安心しろ、合法的なものだ。だが、ファイル名の“ライ麦計画第二段階における月詠姉妹の経過レポート”という題名しかわからない。ファイルのログはあるがそのファイル自体が抹消されている』

『ライ麦計画……？ 何なんでしよう？』

『知らんが、少なくともパンを焼いて終わりというわけではなさそう
だ。このファイル、砺波ジャンクションでの事故のほぼ四年後に作成
されている。……少なくとも事故の後、四年間は双子が生きているの
が確認できた。とり……ずミ……やんは……のに……』

『デスク？ デスク……？』

電波が悪いのか音声途切れ始めた。端末を確かめるとデータ通
信の速度が極端に落ちている。こういうときに無線は不便だ。電波
が入るところを探さなければ。

ベンチから立って歩き始める。周囲には家族連れや、カップルらし
い人影も見え、穏やかな雰囲気だ。電気を無駄に喰うような噴水など
は止まっているがそれでも公園の和やかさはあまり戦前と変わらな
い。この辺りは日本海側で比較的安全だったことに感謝だ。

「……っ!？」

そんなことを思っていた瑞葉だが後ろから何かがぶつかって思
いつきりよろめいた。数歩よろめいて後ろを向くと、さっきまで瑞葉
が立っていた場所で女の子が転んでいた。後ろから何かに躓くよう
な形でタツクルを駈けられたらしい。小学校入学前だろうか、身長は
100センチを超えたばかりぐらいの背丈の可愛い女の子だ。

「お姉ちゃん大丈夫？」

「……だいじょうぶー」

声は案外しつかりしている。泣くかなと思ったけど、そこは耐えた
らしい。

「お姉さんも驚いてごめんね？ 立てる？」

「うん」

女の子に手を貸して立たせる。想像以上に子どもは体重があるの
か、数歩よろめいた。そこで動きを止める。

(この子……おかしい)

支えた時の重さに一番近い人物を思い出す。……あれは、飲み会の
時？

見た目は小学校入学前で、体型も平均的だ。その女の子が、酒に酔

いつぶれた中年小太りのデスクと同じぐらいの体重ということがありえるか？

(まさかこの子……全身義体！)

「もしかして、気が付いた？」

女の子の声がスツと冷える。冷や汗が流れる。顔を見ると子供の屈託ない笑顔があった。

「そうだ、みずはおねえちゃん、ぶつかってごめんなさいしたいから、一緒にソフトクリーム屋さん行かない？」

唾を飲みこむ。酷く苦い。本能に近い何か警鐘を鳴らしている。逃げる、危ない。

だが同時に理性とジャーナリストの性分がそれを退ける。月刀家や月詠家について調べていたタイミングでの接触だ。この「招待」は真実に近いところからのものだ。データは既に送ってある。万が一のことがあっても、デスクが引き継ぐだろう。

「おねえちゃん？」

こてんと首を傾げる女の子。子供っぽい仕草には全くもって違和感がない。違和感がないことに違和感を覚える。

ええい、ままよ。

「そうね……、じゃあ、ご一緒しようかしら」

「そんな怖い声しなくても大丈夫だよ？」

女の子が手を取って瑞葉をどこかに連れていく。その先には白いバンが止まっていた。ひと昔以上前までは市場にあふれていた自動車、ハイエースと呼ばれる部類の車だった。後部座席にあたる部分の窓はふさがれている。女の子がスライドドアを開けて、瑞葉を招き入れた。

「よう、あんたが宮下瑞葉？」

後部座席には先客がいた。テンガロンハットも被りアメコミに出てくる女性ガンマンってこんな感じよねと場違いなことを考えながら瑞葉はその人の問いにうなづく。女の子が瑞葉を自然にエスコー

トして席に座らせると、ドアを締めた。車が動きだす。どこに連れていく気だ。

「あなた方は何者ですか？」

「答える義理はないよ、黒ペン社の宮下瑞葉記者」

高いソプラノ、女の子の声だが声質が変わった、大人としての冷徹な声。

「……月刀家の回し者ですか？」

「答える義理はないと言ってるんだけどねえ、どうも私は記者という人種が嫌いらしい。でもまあ、この状況でも動じない度胸に免じて少しだけ教えておこうかな。まあ、日本の諜報関係者だと思ってくれればいいよ」

「あーあ、ボスは甘いんだから」

ガンマンがそう言って笑う。

「私達の要求は簡単だ。貴女の取材はここでおしまいよ。すぐに金沢を出ること。それだけ。自力で出るでもいいし、このバンで長野まで送ることもできるわ。とりあえず取材をやめてもらえればそれでいいわ」

やはりこの手の類かと思いつながら瑞葉は乾いた唇を舐めて潤した。

「……その決定権は私と黒ペン社にありますので、政府機関が口を出されることではないと思いますが」

「なら今黒ペン社から電話してもらおう？ 10分もあれば社長さんから直々に帰ってきてっていう電話が来るよ」

ガンマンがケラケラ笑ってそう言った。

「ねえ記者さん、あんたまだ死にたくないでしょ？ そしてまだ記者続けたいでしょ？ なら長いものには巻かれとくのが無難だよ？」

「プロパガンダを書く機械になるのは性が合いませんので、車を止めていただけますか」

「まったく、強情な記者さんだ。ガトー坊やが情報流すのもわかるかもねえ」

そう言う女の子はどこか貫禄を滲ませる声でそう言う。ガトーとというのがこの人達の中での航暉の呼び名か。

「どうだい、この国の暗部の上辺を覗いた気持ちには？」

「……とりあえず子供を食い物にするような最低なシステムが動いているというのがわかりました」

「そうかいそうかい。でもまあ、君たち一般人は今それに守られて生きてるんだよ。それは理解してくれないと私達も困るんだけどねえ」

「主語が大きいですね、えっと……」

「とりあえずはスキュラって呼んでよ」

スキュラ。コードネームか何かだろうか。

「スキュラさんはそのシステムを守ることには何も思わないのですか？」

「守るも何も、そのシステムを作った張本人だからねえ。自分の息子を守るのは親の義務だろう？」

「息子が間違つて育てているならそれを正すのが親の義務だと思いませんが？」

スキュラと名乗った女の子はどこか楽しそう。こっちはちっとも楽しくない。

「だがその間違つたシステムを基幹として既に世界は回っている、それを止めるのにはもう少し時間がかかる。それだけだ」

「……対深海棲艦用のシステムということですか？」

「ノーコメント。まあ答え合わせは1年から2年以内にはできるんじゃない？ もっとも、その時まであなたが生きてればの話だけど」

止める、とスキュラが運転席に声をかけた。車が止まる。

「私は間抜けが大嫌いだが、度胸の据わった馬鹿は大好きだ。その度胸を称えて君に一つの情報を教えよう」

そういつて一枚の紙きれを渡してくる。印刷された拡張現実タグ^A。読み取ると一人の人物のプロファイルが出てくる。

「……中路章人元中将？」

「ライ麦計画を運営していた面々の中で数少ない生き残りだよ。スキュラに紹介されたといえばきつと会ってくれる。ただ会って話を聞いた後の君の命は保障できない。連絡を取った段階で私たちや日本政府は君を敵とみなすだろう。会う時は遺書を書いてから会うこ

とだ」

スキュラがドアを開ける。金沢駅だった。

「命は大切にしたいほうがいい、賢い選択でよい人生を、宮下瑞葉さん？」

下ろされて、バンが急発進した。あつという間にいなくなる。

「……命は大切に、か」

奥歯を噛みしめた。

（でも……幸せな生活を人知れず奪われた人がいる。それを暴くのは、私の責務だ）

その責務をを航暉が残していった。今日の朝に聞いた、庭師の方の言葉も同時に甦る。

———宮下さん。宮下さんが命をかけることはないでしょう。ですが、もし、私たち月詠の者に力を貸してくれるなら、どうかお願いしたい。どうか、どうか琴音様や雪音様が生きていた証を、月詠家があつた証を世に出してほしい。月詠に仕えていたにも関わらず、凶行を許し、生き残った航暉様すら守れなかった。むぎむぎと月刀に全てを奪われてしまった。今から我々月詠家使用人ができるのは、その記憶を絶やさず、後世に残すことのみです。それだけが、我々使用人ができる贖罪なのです。

「……果たしますよ、絶対」

瑞葉は便数の減った列車を確認し、横須賀までの算段をしながら改札を通り抜けた。確かめなければならぬことが沢山増えた。

「甘いんじゃないか、姉さんよ」

「そうかい……少し、歳かな」

そういつてスキュラは笑う。

「歳って言うほど婆さんか？」

「これでももう70近いんだよ？　ロロ」

へつと鼻で笑ってガンマン風のファツションで固めたロロが流し目を送る。

「何を焦ってるんだい、スキュラともあろう人が珍しいじゃないか」

「もう時間がないんだよ」

「時間？」

笑みを浮かべるスキュラ。その顔に影が過った。

会話が終わってしばらくたって、スキュラが呟いた。

「そう……もう、時間がないんだ」

退出した伝令役の少尉を敬礼で見送って、航暉は小さくため息をついた。

「司令官さん……いよいよ、ですか？」

「ああ、いよいよだ」

電がどこか不安そうな顔で問いかければ、航暉は頷く。既に夏服への切り替えが行われ白い詰襟を来た航暉が席を立つ。

「電、悪いがお使いを頼む」

「なのです！」

その返事はどうなんだ？ と軽く笑う航暉。

「13:00に第一本庁舎の第三会議室に司令部員を集めてほしい。補給系の調整などは高峰がやっているとは思いますが間に合わないようなら調整を」

「了解なのです。……司令官さんはどちらへ？」

「先に状況の確認を開始する。忙しくなりそうだ」

「あ！ 制帽忘れてるのです！」

「戦闘指揮所に籠るだけだから必要ないよ」

そういつて航暉が先に部屋を出た。手にした制帽を抱えてそれを見送った。

「司令官さんは相変わらず……振り向いてくれないのですね……」

それを寂しいと思うのは間違っているだろうか。私は司令官さんにとつてなんなんだろう。そんなことを考えてしまう。

ほかの人よりも大切にしてもらっているのはわかる。そうでなければずっと旗艦に指定するはずがないのだ。これ以上を求めるのはきっと強欲なのだろう。

(でも、少しだけ寂しいのです……)

そう思つて制帽に顔を寄せた。金糸でオリーブをかたどる模様が

入った帽子の庇を指でなぞる。夏用の純白のカバーがかけられたそれは眩しく見えた。それを抱く。

(あ、司令官さんの匂い……)

シャンプーのような石鹸のような匂いと、汗の匂い。それを吸いこむ。……水上用自律駆動兵装からはしない匂いだと思った。鉢巻のところろが少々汚れている、クリーニングを頼むべきだろうか。でも、クリーニングをしたらこの匂いが……

「……って、何を考えているのですっ!？」

はつと我に返る電。慌ててあたりを見回した。司令長官室には電一人だ。安堵する。そろそろ伝令に走らなきゃいけないだろう。でも、途中を駆け足にすれば十分に挽回できるはずだ。だからもう一度だけ。

再度周囲を見回す。誰にも見られてない、確認。

「すー……はー……」

やはり落ち着く。

「すー……はー……すー……っ!？」

胸いっぱい吸い込んだ彼の香りを吐きだそうとして、動きを止めた。窓の外で逆さにぶら下がる青みを帯びたポニーテール。ちなみに司令長官室は五階にある。

「……」

『……』

カメラを仕舞って、ウインク。窓枠にぶら下がっているらしいその影が口パクで何かを伝えようとしていた。

『ア・オ・バ・ミ・チ・ヤ・イ・マ・シ・タ』

「は、は、はにゃああああああああああっ!？」

ゆっくりと息を吐きだすつもりが悲鳴に変わる。直後に破壊音。

「電嬢!？」

腰のホルスタからM500のショートバレルモデルを引き出し、構えながら突入してきたのは杉田大佐である。周囲に紙の書類が散乱していることから、書類か何かをもって来たところで悲鳴を聞いてドアを蹴り破って突入したらしい。蝶番ごと吹っ飛んで歪んだドアがけたたましい音を立てて板張りの床で跳ねた。電はそれに驚いてさらに飛び上がる。

「無事か!？」

「はわっ、はわ、はわわ……っ」

とつさに言葉にならない。とりあえず大丈夫という意味を込めて何度も頷いておく。それを見て拳銃を低い位置に構えたままの杉田がため息をついた、周囲のクリアリングを行い。電の前でしゃがみ込んだ。

「安心しろ電嬢、大丈夫だ」

そう言われて優しく微笑む杉田。電が制帽を胸元に引き寄せているのを見て一種眉をひそめる。

「月刀に何かあったのか？」

首をふるふると横に振る。その時に、見てしまった。杉田がドアを破って入ってきたせいで入り口は全開。そこから心配そうに顔を出すどこか青い顔をする響。杉田と一緒に来ていたらしい武蔵が入り口前を封鎖。その向こうには何事だろうと集まった野次馬御一行。それを掻き分け、血相を変えて飛び込んでくる高峰。高峰の肩越しに惨状を見て真っ青になっている青葉。

……とんでもない騒ぎになっている。

「おい、何があった？」

「さあな、とりあえず無事だ。状況はエコー……ってところだろう。月刀は？」

《後15秒で現着》

「電も気が動転しているようだ。

クール・アズ・キユーク

冷静沈着に頼むぞ、カズ」

《わかつている》

至極真面目な通信が電含めて届く。どうやら杉田が緊急通信を飛ばして呼び戻したらしい。

まずい、これはまずい。

ここまで騒ぎが大きくなつては理由を話さない訳にいかない。だが「司令官さんの制帽の匂いを嗅いでいて青葉さんに見られて驚いて悲鳴を上げました」なんて絶対言えない。しかもドアの修理のための修繕依頼書類の修繕箇所破損理由の欄にそれが書かれる。恥ずかしくて死ぬ。生きていけない。

だが、この司令官は皆、安全保障のプロフェッショナルだ。防諜機関出身の高峰は当然のこととして、諜報もこなした軍系特殊部隊で鍛えられた航暉、陸軍で前衛狙撃手として観測手こなした杉田も、正確な状況報告の大切さを骨の髄まで知っている。状況を明らかにしようとしなはずがない。

(ど、どうすればいいのです……っ!?)

ちなみに、現場保存中の武蔵がその不気味さに慌てて飛び退くような形相で、電が襲撃にあつたらしいと聞いた航暉が姿を見せるまで、あと3秒である。

結局、作戦会議は開始時間を1時間送らせて14時から行われた。

「こちらの都合で遅らせてしまい申し訳ありません。井矢崎少将」

「いや、盛大に大笑いできたからいいんだけどさ、大丈夫なの？ 電ちゃんについてあげなくて」

「あんな理由で私が欠席するわけにいかないでしょう」

明らか楽しんでるようなニヤニヤ顔でそう言う上級将校に航暉はいたって平静を保って告げた。その言いぐさを聞いて噴出したのは渡井である。

「まつさか、人肌恋しさに司令長官の帽子を抱いているとは……好かれたもんだねえ准将殿？」

「そろそろ黙れよ『明鏡』」

「おっと」

航暉がぴしゃりとそう言うのと井矢崎が曖昧な笑みを浮かべた。西部太平洋第一作戦群の副司令長官たる井矢崎の肩では銀色の副官飾緒が揺れていた。

「まあそこまで信頼関係を結べてるつてのはいいことだと思っけどね。もっと大切にやってほしいとは思っけど？ なあ、翔鶴」

「な、なぜ私に話題を振るのでしょうか……？」

「秘書艦として良くやってくれているからね」

「わ、私は言われたことをこなしているだけですし……」

そう言いながらも頬を染める翔鶴。赤い色の袴が揺れる。

「そっちはそっちで勝手にお幸せに」

「その言葉そっくりそのまま返すよ航暉君」

「勝手に言っただけさ。どうせ今は謝りたくても『来ないでほしいのです』の一点張りでクールダウン期間真っ最中ですから」

航暉と井矢崎の言葉の応酬に、第五〇太平洋即応打撃群旗艦代理の赤城が必死に笑いをこらえている。本当ならば赤城の席に座るはずだった人物は「し、司令官さんたちなんて大嫌いなのです——っ！」と叫んで逃げたつきり司令官付秘書艦控え室に立てこもっている。航暉は残りの特Ⅲ型の面々に交渉を任せて赤城を連れて会議に出ているというのが現在の状況だ。珍しく俯いてプルプルしていた加賀

がドアの修繕の手配などを済ませてくれているはずなのだが、大丈夫だろうか。

航暉が頭を抱えていると会議室の端の方から鈴の音を鳴らすような笑い声が聞こえた。

「全く、黒鳥の面々はホント飽きないね、そんな痴話でドア吹っ飛ばす？」

そこでケラケラと笑っていたのは篠華・リーナ・ローレンベルク中佐だ。ロシア系の血も混じっているせいかな鮮やかな銀髪が映える。

「吹っ飛ばしたのは俺だがなにか文句でもあるかな篠華嬢」

Никакое ребячество.

「いやいや、やることなすこと規模がデカイ黒鳥はまだまだ健在だなんて思っただけよ？」

「あんただけには言われたくない、問題児筆頭」

そう言われてケラケラと笑い続ける銀髪の女性に杉田はどこか不満そうだ。そんな彼と対照的にうれしそうなのは笹原である。

「まあ、この面々とつるんでると飽きることはないよねー」

「だよねー」

「その尻拭いに走る俺の気持ちにもなってくれ……」

「『委員長』には感謝してるよー?」

声が揃った樂觀的な女性二人の前でわざとらしくため息をつくのは『委員長』こと東郷駈中佐。その肩を高峰がポンポンと叩く。

そんな雑多な雰囲気を見て井矢崎がどこか柔らかい色の目を航暉に向けた。

「ホント、にぎやかだな、第五〇太平洋即応打撃群は」

「ローレンベルク中佐と東郷中佐は528駆逐隊ですから西部太平洋第一作戦群でしょう、少将」

「でもまあ、駈君はともかくとして、私はもっぱら機動部隊が専門なんだ。水雷力チコミ専門の520番台後半の水雷系はあまり接点がないんだよ」

「……そうですか」

「まあ、みんな勝手によくやってくれるから楽でいいよ」

それで良く第一作戦群副官が務まりますね、と航暉は口に出そうと

してやめた。井矢崎の努めて怠惰に見せようとする癖はいくらか見てきたからだ。

「時間も押していますから、そろそろ本題に入りませんか？」

「ん、月刀君たちがいいなら始めようか」

井矢崎がそう言うのと航暉が部屋の明るさを落とした。壁の一面がスクリーンに切り替わり、作戦図が表示される。太平洋の西半分、すなわち極東方面隊の管区にあたるエリアの海図が表示されている。

「それじゃ、航暉君よろしくー」

「最初から丸投げですか……」

そう言いながらも航暉は前に立ち、全員の顔を見回した。先ほどまでの空気は一変し、キンと澄んだものになる。

「……今回は第五〇太平洋即応打撃群が参加した作戦中でも最大規模の作戦となる。攻略目標は、ここだ」

そういつて航暉は作戦図を拡大。さらに北半分をズームアップする。

「アリューシャン列島全域。現状、このエリアはヒメが国連海軍に合流した後も、特定の島々を除いて深海棲艦の勢力圏にある。今回の作戦ではこのエリアの深海棲艦の友軍化、もしくは無力化によって、ユーラシア大陸とアメリカ大陸を結ぶ北極圏の海上交易路及び航空路の安全を確保することを目指す」

それを聞いた渡井がクスリと笑う。

「なるほど、ヒメちゃんを最前線に投入する気かい？」

「最終的にはそうなる。深海棲艦とコミュニケーションを取るなら深海棲艦ネイティブに任せた方がスムーズだ。もちろんその会話は翻訳機デコーダーを通してこちらでも確認することにはなる」

そう言うとき手をあげたのは篠華だ。

「北方のアリューシャン方面全域をそれでカバーできるの？」

「ヒメがそちらで現役だった時の深海棲艦の勢力関係が残っているなら、という条件付きだ。それについての保証はできない」

「何とも不安要素満載な情報なこと」

篠華はどこか不満げ。それとは対照的な笑みを浮かべるのは井矢

崎だ。その笑みを軽く振り返って篠華に向ける。

「要は今でもヒメが深海棲艦のトップとして君臨できるかどうかの実験の要素も強い。ヒメが深海棲艦を統治できるなら、ヒメをトップに据えた人類側の深海棲艦の陣営を組織しなおし、海域の平定を狙う、出来なければ力づくでぶん取る……そんなプランだ」

井矢崎がそういつてから視線を前に戻した。

「それじゃ航暉君、続けてくれる？」

「はい。これに先立ち、武力交渉を円滑に行う為、アリュージャン方面の敵がある程度南側に引き寄せておく必要がある。そのため、四部隊として空母機動部隊をミッドウエー方面に展開。敵の誘導を行う」

「二方面同時作戦、ですか？」

赤城の声に航暉が頷く。

「事前にグアムの飛龍と蒼龍、横須賀から応援に向かった利根と筑摩が何度も偵察と遠距離からの爆撃を行っている。既におびき出しに入っている状況だ。通信が傍受されていることを前提として攻略状況の送受信も行っている」

「それを受けているんなところから深海棲艦をわんさかミッドウエーに集めておきたいという状況か？」

今度は高峰の問い。それには井矢崎が口を開く。

「少なくともヒメが交渉しやすい状況を作っておきたいからね。その分、航暉君たちはかなり厳しい状況になるわけだけど」

「……月刀准将がアリュージャン方面を指揮するわけではないのですか？」

東郷中佐がそう言うのと航暉が頷いた。こういうところがかつちりと公私を分けるところは「委員長」らしい。

「今回は赤城・加賀・大和型・金剛と榛名・504水雷戦隊・505潜水隊がミッドウエー方面に展開、先行作戦を実施中の飛龍たちと合流し、深海棲艦の撃滅を行う。こちらの指揮は私と杉田大佐・笹原大佐・渡井大佐で行う。本命のアリュージャン方面には第五〇太平洋即応打撃群から電とヒメ、比叡・霧島・大鳳・龍鳳及び503水雷戦隊、対潜・対空要員として睦月と如月が向かう。西部太

平洋第一作戦群から523航空戦隊の翔鶴・瑞鶴・景鶴、528駆逐隊、北方第一作戦群から512航空戦隊の葛城が参加することになる。全体指揮は井矢崎少将がとり、その傘下に高峰大佐・東郷中佐・ローレンベルク中佐が入る。択捉島クリリスクには万が一に備え511の長門と陸奥、526水雷戦隊の神通や阿武隈が待機、予備士官として合田少佐が待機する」

本当に大攻勢だな、と誰ともなく呟いた。

「北極圏航路の啓開は物流を加速させ、対深海棲艦戦闘を好転させるきっかけとなりうる。それだけ重要な作戦ということだ。それにしたがって中央戦略コンピュータからの作戦優先度は最高クラスのカタゴリV、ランクはS+という最重要作戦にあたる。……失敗しませんでしたは到底許されない作戦だ。そのため、複数の水上用自律駆動兵装に強化が加えることになった」

スクリーンの画像が切り替わった。

「睦月と如月に対空戦を重視した大規模改装を実施、睦月には最新鋭の四式ソナーが先行搭載される。金剛型全艦にそれぞれ大規模改装、翔鶴・瑞鶴には装甲の強化及び特殊発艦機構を搭載するための根本的な改造を行うことになる。川内と暁にも改装が施され、夜間戦闘における戦闘能力の強化を図る」

「うわー、改造費だけでミニイージス艦1隻くらいなら作れるんじゃないのこれ？」

資料を流し読みしたらしい笹原がそう言った。

「それだけ投資をしてもおつりがくるレベルの作戦ってことでしょ？」

技術屋としての腕もなるねえ」

渡井がそういってわざとらしく肩を回した。杉田がくつくつと笑う。

「平菱電工出身の身としては嬉しい話か？」

「基本のデータは揃ってる。ハードは工廠部に任せるがソフトの最適化ぐらいはこちらでできるよ」

フリップナイトシステムの延長のシステムになるだろうしね、と続けて渡井が笑う。そのまま手をあげた。

「とりあえず技術者として気になる点があるんだけど、発言しても？」
「頼む」

「ヒメを交渉の矢面に出すのはいいとして、ヒメが寝返った場合の安全装置セイフティはどうなってる？ ヒメが今でも深海棲艦を統治できるかの実証実験だというなら、フェイルセーフ機能は盛り込んでおくべきだと思うけど」

航暉はそれを聞いて頷いた。

「一応は用意している」

「具体的には？」

そう聞かれて航暉は一瞬言いよどんだ。

「4月の駆逐棲姫緊急迎撃戦の時に春雨から回収したプログラムコードから、艦娘のダメコンとコンフリクトする部分の抽出が完了している。それが深海棲艦の行動を一部阻害することも『実験』の結果判明している」

「つまり、最悪の場合はそれを流すって訳だ。……その決断、月刀くんはできるかい？」

渡井はそういつて笑みを消した。

「電ちゃんの目の前で、ヒメを沈める可能性がある。講和の鍵であるヒメをそしてその時ミッドウエーに月刀がいて、電のそばにいてあげられない。それに『君が』耐えられるかい、月刀？」

「……電にできて、俺ができないなんて言うものか」

「電ちゃんは寂しくて帽子をスーハーしてみたんだけど？」

笹原が割り込んでそう言うど誰かがクスリと笑う気配がした。

「そこは言つて聞かせるさ。それが上官つてもんだらう」

「やれやれカズ君は不器用だ」

笹原がわざとらしく肩を竦めた。それを聞いて井矢崎が手を打つた。

「まあ、最初の顔合わせとしてはこれでいいだろう。参加部隊の艦装の改装が終わるまで今しばらく時間がある。細かいところは後々詰めていけばいい。一時間遅れたことで会議室も後がつかえていることだしこの辺りで一度お開きにしようか。続きは明日でもやればい

い。電ちゃんの意見も聞きたいしね」

井矢崎はそう言いながら立ちあがった。

「史実として、第二次世界大戦期のミッドウエー海戦において日本海軍はアリューシャン方面を囷とし、対岸のアメリカを切り崩すためにミッドウエーの攻略を狙った。我々はその逆を征く。ミッドウエーはあくまで囷に過ぎない。アリューシャン方面を奪還し、補給路を確保、厳しい戦いを続けている南北アメリカ方面隊を支援する。そのための戦いになるわけだ」

そうして、航暉の方を見た。

「まず手始めに航暉君は電ちゃんを秘書艦控え室から引っ張り出さないかね」

苦々しい顔をする航暉。それを笑って井矢崎は視線をスクリーンに向ける。その上には作戦名が記されていた。

オペレーション・ウエヌス・リベルティナ。

「1世紀を超えたりベンジマッチだ。派手に情熱的に行っても許されるだろう」

井矢崎のその一言がこの戦争の大きな転機となる第二次AL／M I作戦の幕開けだった。

「覆して見せようじゃないか、運命の五分間とやらを」

「それで、本当に景鶴を出すのか？」

高峰が航暉にそう聞いた。夜の帳がおり切ったが、国連海軍パースには煌々と明かりが灯り、窓の外に停泊する“あすか”を照らしていた。伊豆諸島や硫黄島への補給物資を乗せた輸送艦と民間からの借用タンカーなどが出港していく。海面近くで揺れる赤と緑の航海灯は艦娘のものだろう。

そんな光景を目の端で見ながら航暉は廊下を進む。

「それをお前が聞くのか、高峰。グラウコス対策で影のトップを務めるお前が」

白い詰襟を飾緒が叩く。一際大きく揺れた銀の飾緒は高峰のものだ。

「たしかにまだグラウコス、そしてその裏にいますであろう誰かにはまだ俺たちが『トンネルの出口』が景鶴だと気が付いているとは伝わっていないだろう。ここで景鶴を下げればれる可能性もある。だが、出すリスクは高すぎるだろう」

「だからこそ、お前と委員長がそつちに付くんだろ？」

「……買いかぶりすぎだ」

溜息交じりにそういって、航暉の方を見る。

「景鶴は艤装とのマッチングが不完全だ。左腕の震えと痛みの停止措置ができない状況だ」

「……幻の痛みか」

「生身の記憶は義体になっても、生身の身体を求め続ける。義体との拒否反応で発生する幻の痛みに酷似している。だが、ありえるか？

水上用自律駆動兵装は“艦としての記憶”と“電脳の元になった人格”を合成し身体の記憶がない状況で義体を得る。彼女たちは生身の記憶は持ちえない」

アイデンティティ・インフォメーション

「景鶴の場合の個々の情報として入力されているものがなんだかわからないがな。景鶴の“艦としての記憶”は存在しないはずだ。

瑞鶴のものをコピーレントして使用していると聞いているが、ファヴニル生化がどんな形でそれを落とし込んだのかわかったものじゃない」

「わかっているなら、なぜ下げない？」

高峰が足を止めた。一步先に進んで、航暉が振り返る。金の飾緒が揺れた。

「……高峰、俺たちの敵はなんだ？」

「……」

「深海棲艦だろう。たしかに景鶴を下げるメリットもある。だが優先順位を間違えるべきじゃないと、俺は思う。AL方面では装甲空母を揃えておきたい。可能ならば夜間攻撃が可能な状況に持っていきたい。そのためには景鶴が必要になる」

「それで誰かを沈めてから同じことが言えるのか？」

「さあな。覚悟はしているつもりだが、それで乗り切れるかわからない。だから手を尽くして守る。そして戦果をあげることが部隊の皆を守ることにつながるしていく。簡単に手を出せないと言わせることで皆の居場所を作る。そのためだ」

そういつて航暉は笑った。

「いつも通りのオペレーションだ。味方を死なせず、相手とせめぎ合って、最良の結果を持ち帰る。そのためのオペレーションだ。そのためには高峰の電子戦能力が必要だ」

「……結局俺頼みか」

「人間からの横やりは最小限にとどめておきたい。だから期待して」

高峰が肩を竦めて歩き出す。目的地の前まですでに来ていた。――第一電脳試験管理室。そのドアを開けた。真っ白い壁の部屋に設えられたコンソールは大量のタッチパネルで埋まっていた。病院というよりは妙な研究をしていそうな雰囲気だ。そんな部屋に鎮座するオペレーターシートはQRSプラグの接続端子やら情報タレットなどが格納されているせいでやたらとゴツク見える、その椅子の横に航暉が進むと、コンソールの奥のガラス越しに睦月が目を

瞑って横になっっているのが見える。病院着などではなく、いつもの制服姿だった。電腦試験のための部屋だから別に着替える必要がないからだ。

「新艦装とのマッチングは？」

「今日のところは睦月ちゃんで終わりだね。金剛たちの艦装改修が少々遅れ気味かな。ハードが上がってこないとソフトの調整もできないから金剛型4隻を残してる。明日以降に改装が入ってない子の調整と一緒にやるさ」

渡井がゴツイオペレーターシートに座って航暉を見上げた。透明なグラスデバイスにいくつもの画面が投影されているのが見える。渡井がシートからタブレットを切り離すと航暉に渡す。

「12.7cm連装高角砲後期型に主砲を換装したのに合わせて対空管制系をアップデートしてある。暁ちゃんの電探とか高峰が作った統合情報を相互にやり取りしながらになるから通信規格も合わせてある。双方向でアップデートしているから睦月ちゃんのソナーデータのリンクももつと高速でできるはずだよ」

「通信規格自体をいじったのか？」

よくやる、と驚嘆が混じった声色で高峰がそう言った。

「まあ、フリップナイト用のシステムを流用しただけだよ。睦月ちゃんの場合他の艦のソナーを外部入力で使用できるようにした。これなら離れた位置にあるソナーを連携させてより高精度に利用できるようになる。アクティブとパッシブの両用でもつと多角的な解析ができる。電探はこれまでもこれでリンクしてきたけどソナーでやるのは初めてかも。でも潜水艦対策としては十分でしょ」

「睦月がパニックにならなきゃいいが……」

「もちろんバックアップはするし、いきなり実戦で使うわけじゃないでしょ？」

航暉の心配を笑い飛ばしながら渡井は操作を続ける。

「中央戦略コンピュータの支援も受けられるわけだし、少なくとも演算に関しては問題ないはずだ。あとは睦月ちゃんが感覚を掴んでくれるかどうかだけだ。最悪僕が理想郷ネットワークシステムで介入

するさ。使いたくないがGUINIOL^キ—E^{ニョー}って手もある」

その言葉に航暉は顔をしかめた。GUINIOL—E——
Game of Ignition control Executive
戦域制圧用火器統合管制、前線で戦う兵隊の思考を強制的に塗りつぶし、リンクの奥にいる指揮官の行動の動きをなぞらせるものだ。元は空軍で新人パイロットにエースの動きを叩き込むために使われたものだが、電腦の可処分領域を圧迫するため人間相手には使われなくなったものだ。今でも緊急時以外の使用は禁じられているし、新人の指揮官は知らない人間もいるだろう。

「そんな苦い顔しなくてもいいでしょ、最悪の場合って言ったでしょ？　そう簡単に使わないよ。飛燕の懐刀に手軽に手を出したらいろいろ危険だしね」

「お前に任せるといろいろされそうで怖いんだが、スク水マニア」

「えー、いいじゃんスク水」

渡井はそう言いながら笑った。

「まあGUINIOL—E使うことはないだろうから安心しなよ、ARCA DiA ネットワークだけで十二分。通信規格の脆弱性も解決させたし、月刀向けに対空ソフトも組み直した。お前以外が使うとピーキー過ぎる仕様だけどね」

「……お前、やたらと詳しいな」

そう言うのと渡井が苦笑いに近い笑みを浮かべた。

「ARCA DiAもフリップナイトもGUINIOL—Eもやってることは実はあんまり変わらない。要は暗号化された高規格高速通信による兵装群のリアルタイム外部管制だ。対象だったり、電腦領域のどこを使うかだったり、細かいところが違うけどね。相互利用は不可能じゃないし、通信だって突き詰めれば0と1の集合体だよ。それに、フリップナイトプロジェクトのユーザーインターフェースと通信規格を作ったのは僕だ」

「……え？」

渡井の言葉に同時に首を傾げた航暉と高峰。その反応にどこかムツとしながらも、渡井は続けた。

「だから、平菱インダストリアル^のフリップナイトプロジェクトで

ユーザーインターフェースと通信規格の開発を行ってたのは、僕。だからその応用プログラムを作るぐらいは余裕」

もつとも管制ソフトは別の人の担当だったけど、と続けた。

「お前……」

「ただの変態じゃなかったんだな」

「……馬鹿にしてるよね？ ねえ？」

ムツとしたままの渡井だが、最終的には笑った。

「でもまあ、ここだと技術屋としても指揮官としてもやりがいがあるよ。みんな癖のある動きをするしね」

「そうか？ 天龍とか素直で綺麗な動きをしようか？」

航暉がそう言うのと渡井は笑って首を振った。

「天龍は左目が抉り取られたまま治してないでしょ。その経験とかもあってかなり独特なアイデンティティ・インフォメーションになる。動きはきれいだけど左目庇った動きが無意識に入ること多いからいろいろ調整入るよ」

「そうなのか？ と航暉が聞き返すと笑った。

「部下の動きの特徴ぐらいは覚えておこうよ。まあ今は高峰が直属になるのか。でも付き合いは長いんだし覚えていたほうがきつと喜ぶぞ」

「少し意識してみるか」

航暉はそういって顎を撫ぜた。高峰は難しそうな表情をして考え込んでいたようだったが、しばらくして「そうだな」と頷いた。

そのタイミングで部屋のドアが開いた。司令官三人が振り返れば息を切らして肩で息をする響が立っていた。響は電を引っ張りだすために秘書艦控え室のあたりにいたはずだ。まさか電たちに何かあったのかと皆が身構えた。

「月刀司令官、電と一緒に風呂に入ったというのは本当かい!？」

「はあっ!？」

飛んできた予想外過ぎる問いに航暉は反射的にそう言って、渡井と高峰が嘖き出した。

そんなことあったか!? と記憶を手繰ると——あった。月

刀本家に呼び出された時にそんなことがあった。

「お前まで艦娘に手を出したか……」

「取り締まり対象を見る目で俺を見るな高峰つ。そもそもあれは事故だ！」

「限りなく故意に近い？」

「電の不注意で混浴露天風呂に向こうが踏み込んできたんだ！俺に非はない」

「———ようこそ、こちらが変態の世界へ」

「ぶっ飛ばすぞ渡井」

なんでこんなことになってるんだ、と航暉は頭を抱えた。

時間は少しさかのぼって、司令長官付秘書艦控え室である。

24時間365日体制で司令部には誰かが詰めているために、そのサポート役の司令長官付秘書艦の待機場所として利用されるべき部屋なのだが、現状その秘書艦が立てこもっている真つ最中だった。

「えっぐ……ぐすっ」

「もー、いつまでいじけてるかなこのポンコツ旗艦は」

その部屋に何とか侵入した雷はそういつてため息をついた。結局航暉の司令長官権限でドアのロックを解除し、代表して交渉役を任された雷が部屋に入る。航暉はドアを開けるだけ開けると、部屋の前からいなくなった。打ち合わせとかいろいろで忙しいらしい。———

—限りなく言い訳臭いが。

廊下の明かりが差し込むだけの入り口を振り返ってもう一度溜め息。それくらいのア斐性見せなさいよ、この臆病モン。

「それで？ そんなに恥ずかしかった訳？」

そう言うソファベッドの上で毛布をかぶって団子になっている電がさらに毛布を引き下げた。

「は、恥ずかしいに決まっています……っ」

「でも、それだけじゃない」

片手を腰に当てて電の言葉を雷が継ぐと、毛布団子がピタリと動きを止めた。

「全く、それくらいわかるわよ。しれーかんと一緒にいるのが怖くなったんでしょ？」

「……なんでなのか、わからないのです」

ほらきた、と雷は思ったが電の言葉の先を待つ。

「ずっと一緒にいたいのに、それが……それが怖くなってくるのです。いつまでもこのままではいられないのはわかっているのです」

「一緒にいることがしれーかんを殺すことに繋がるかもしれないから？」

答えはない。それをいいことに続ける。

「それも違うんでしょ？ 答えは——しれーかんに嫌われたんじゃないかって思って、それを確かめるのが怖いから」

合ってる？ と聞いても依然沈黙。でも反応でわかる。凶星。

「まったく。ずっと籠っているとそれこそ呆れられるわよ？」

「わかっているのですっ！」

毛布団子がガバリと動いて真っ赤に腫れた目とそれ以上に真っ赤になった頬をさらす電。

「はいはい、そのまま外にでましょーねー。あんたがいじけてた間にドアの修理とか書類整理とかは加賀さんが終わらせてくれるけど、ヒメちゃん関連のこととかはあんたがいないと話にならないんだから」

「で、でも……っ！」

「そこで毛布を被り直さないっ！」

「いやっ……！ 乱暴しないでほしいのですっ」

「それはこっちのセリフよっ！ 暴れないでさっさと毛布を放しなさいー！」

「これは必要なのですっ！」

「往生際が……悪いっ！」

やめるのです——っ！ という叫びも空しく、毛布がガバリと跳ね飛ばされた。

「これ暑くないの？ ソファベッドも毛布もしつとりしてるんだけど。……というより電、あんたすごいことになってるわね」

セーラー服タイプの制服が汗でしつとりと張り付いている。髪の毛も軽く束になり、あらぬ方向へ跳ねているものもある。毛布を取られまいと暴れまわったせいでソファベッドに敷いたシーツもぐちゃぐちゃ、雷を蹴ろうとしたりいろいろしたせいか、スカートが盛大に捲りあがって、白い何かが見えている。

「良かったわね、電。しれーかん見てなくて」

バババツという音と共にスカートを直し、慌てて正座する電。顔が真っ赤だ。

「それで、本当はどうしていじけてたわけ？ 青葉さんに見られたからってだけじゃないんでしょ？」

「そ、それもありますけど……高峰大佐と追いかけてっこしてましたし、きつと反省してると思うのでいいのです」

「後悔はしてない感じだけだね。今まさかのトイレ掃除中よ、青葉さん」

それを言われて電はちよつと笑った。青葉にとっては書類整理増量よりも下手したら辛い。青葉の場合書類整理にかこつけて電子空間にアクセスできてしまえばそれなりにいろいろできるがトイレ掃除じゃそうもいかないからだ。

「で、なんでしれーかんと一緒にいるのが怖くなった訳？」

「……怖い、とも違うのです。でもなんだか……」

「恥ずかしい？」

「……そうなのかもしれません」

電の顔から熱が引かない。律儀に正座して打ち明けた電を見て雷は笑った。

「安心しなさい。とつくのとうに恥は死ぬほどかいてるんだから失うものは何もありませんよ?」

「えっ、なっ……!?!」

「ごく最近だと帽子の匂い嗅いで? 北陸で一緒に露天風呂に入つて?」

「やーめーるーのーですーっ!」

『はつきり言っておくのです。私は司令官さんが大好きなのです』つて大胆告白したのはいつだっけ?」

「あれはスキュラさんに焚き付けられて言っただけなのですっ! と
いうよりそれ司令官さんは……?」

「んー? 高峰大佐辺りから聞いててもおかしくないわね」

「~~~~~っ!」

わたわたと意味もなく腕を振る電。久々に妹分のこんな姿を見てなんだか気がせいせいした。最近はしつかりしすぎてたというか、努めてしつかりしていた電を見ていて心配だった分、からかいたくて仕方がない。

たぶん航暉は電の大胆告白のことは知らないし、知ってたとしても態度を変えることはないだろう。本心はどうであれ任務の間は上司と部下の関係を保とうとして、部隊を守るように動いていくだろう。そして何よりそんなことで電を嫌いになつていくような展開にはなるまい。

でもそれをわざわざ教えてあげる必要はないわね。と、雷は無情にも黙っておくことにした。最近は珍しくなった電のポンコツっぷりを満喫するでしょう。

「まあ最初からバレバレでしょ、司令官さん司令官さん言っつと一緒歩いてー。漣ちゃんのからかいても真に受けてしれーかん殴つてー」

「も、もういいのですっ!」

「まだまだあるわよー？ とりあえずこれまでの恥ずかしいこと全部挙げておいてその時しれーかんがどうしたか考えてみるとなにかつかめるかもよ？」

「そんな……っ!？」

まあ、この様子なら大丈夫かなと思いつつもいたずら心が納まらないのでもう少しからかうことにする。

ちなみに、『恥ずか死』しかけた電が雷をノックアウトするまであと3分。

電と司令官が一緒に風呂に入ったという部分だけ立ち聞きしていた響が当の司令官に問い詰めるのを開始するまであと30秒である。

第五〇太平洋即応打撃群の庁舎が夜だというのに大分賑やかなのを気にしながら、井矢崎は秘書艦を務める翔鶴と一緒に夜空の元を歩いていた。夏の気配を感じる空を見上げる。

「……提督、気になることでもあるんですか？」

「ないわけじゃない。でも全部小さな問題だね」

そう言うと井矢崎は視線を地面に落とした。極端に視線を動かした彼を翔鶴はどこか不安げに見つめていた。

「気にしないで……っっていつでも君は気にするわな」

「秘書艦ですから」

答えになっているようになっっていない答えに井矢崎が笑った。ど

こか寂しそうな笑い顔だ。

「また君たちの命を掛け金にしたギャンブルを始めようとしている」
「でも、それをやめることはできないでしょう?」

「私は軍人だからね。この国を、ひいては世界を守るために戦う。この世界の利潤の最大化が私達の役割だ。そのための駒に過ぎないよ、私も、君たちも。水上用自律駆動兵装が前線で戦わなければならない理由も、君たちが死んでならない理由も、私が戦う理由もそこに集約される」

翔鶴はそれを黙って聞いていた。そう嘯く井矢崎の本心は読み切れなかったから何も言えなかったという方が正しい。

彼が足を止める。

「誰かを一人を、大切な人だけを守ることは簡単だ。でも、それは軍人の仕事ではない。顔も見たこともない、市民を守るのが軍人だ。そのために、翔鶴、君たちを危険にさらす。そしてそれを私は是としている。世界平和のため、日本の安寧のため、私は君たちに命を奪えと命じて、必要ならば切り捨てる。そういう人間だよ、私は」

「……知っています。それでも私たちはあなたを信じて付いていくんですよ、井矢崎提督」

「それで殺されるかもしれないとしても?」

「何を今更」

そういつて微笑んだ。少しでも井矢崎が安心するようにと、翔鶴は微笑んだ。

「そんな指揮をしたことは一度もないでしょう?」

「そうかな?」

「そうですよ」

井矢崎が笑った。それを素直によかったと思う。そう思っていたら不意に井矢崎がまた歩き出した。

「……でも、今回ばかりはうまくいかない可能性が出てきた」

「どういうことでしょう」

井矢崎は暗闇を見据えた。その顔からどこか余裕のある色が消えた。

「南北アメリカ方面隊から支援の申し出があった」

「……それは喜ばしいことじゃありませんか？」

「景鶴やヒメを力づくで奪いに来る可能性があるとしても、同じことが言えるかい？」

翔鶴が息を飲んだ。

「今、奪われる訳にはいかない。厳しい戦いになる。———守

れるか、彼女達を」

いつもより真面目な目が翔鶴を射抜いた。翔鶴は、笑みを深める。

「五航戦の実力、お見せします！」

「んで、『元』世界の警察アメリカ様が出張ってくることになった訳だ。かなりヤバいね」

笹原はそういつて横になったまま伸びをした。朝日が差し込むベッドの上でタブレット端末を手にした笹原が笑う。朝日に素肌の色が透けるせいでいつにも増して妖艶に見える指揮官を見て、川内はあからさまに眉をしかめた。こうやって何人も『墜して』きたのかこの魔女は。

「どしたの川内？」

「いや……朝っぱらからだらしないなあと思ってさ」

だらしないという評価を聞いて笹原はケラケラと笑い飛ばした。確かにしわになった毛布とシーツを蹴飛ばしてワイシャツ一枚で横になっているのは確かにだらしないと思ったからだ。だが、それを言うなら同じような恰好をしている川内も同じ穴の貉だろう。

「四六時中カチツとしてろって？ カズ君やハル君じゃないんだからそんなことしてたら窒息死しているよ。花は水なしでいつまで生きてられると思う？」

「ウツボカズラだとは知らなかったよ、笹原ゆう大佐」

川内の言いぐさに笹原はどこかにんまりと笑った。

「薔薇って言ってほしかったんだけどなあ」

そう言いながらも笹原はタブレットを川内に投げる。危なげなくキャッチしてそのデータを流し読みする。

「へー、戦艦はネヴァダとペンシルベニアにアイダホ、重巡インディアナポリス、護衛空母ナッツォー……アリュウシヤン方面の戦いの再現でもする気なのかなって感じの面子だね」

「そのまま復讐戦リベンジマッチに入るようなお気楽な展開になるとは思えないけ

どね。復讐よりは生産的な攻撃は仕掛けてくるだろうけど、さ」

笹原はそういつて体を起こした。あれ、ブラどこに落としたつけど言いながらベッドのシーツをめくる上官に、川内はため息をついてお目当ての物を投げつけた。

「サンキュ、持つべきものはやさしい部下だね」

「自分の身の周りくらいちゃんとしてよ、まったく。で？ その復讐よりは生産的な攻撃って？」

「んー、ヒメの身柄の確保。南北アメリカ方面隊はずっとジリ貧の戦いを強いられているからね。ヒメを手に入れて洗脳して良い様に従えて敵を殲滅させたいとか思ってるんじゃない？」

「極東方面隊を敵に回してもやりたいことかなそれ？」

「戦後に世界を統べるような大国を狙うお偉いさんには特に重要な問題だ。極東^{わたくし}方面隊^{たち}がヒメを守るのにはそういう目的もあるんだよ？

ヒメを手元に置いて戦況を逆転させたい。軍のイメージアップもしておきたい。そのためにも南北アメリカ方面隊はそろそろ白星をつけたかないといけない。その布石が今回つてところですよ」

すごく大雑把だけどね、と笹原は笑って備え付けのユニットバスに足を運んだ。下着をユニットバスの入り口に置いた籠に放り込み、扉を潜る。今日の夕方からまた船上生活だ。今のうちに真水をふんだんに使っておこう。

「でもそれだけじゃ、ない」

「うん？」

「物理的に潰してくるつもりかな、景鶴を」

シャワーの音で聞こえにくいのが、川内がそんなことを言っているのが聞こえた。

「んー、潰してくることはないと思うよ。まあ鹵獲してくるぐらいはするだろうけどさ」

「それはそれでヤバイよね」

「海の藻屑になると、実験室でモルモットとして生き続けるのとどっちがマシか意見は分かれそうよね」

「どっちもやだよ」

「笹原さんも嫌ですよっ」と

熱い湯が眠気をどこかに流していく。気怠い感覚もシャワーひとつで吹っ飛ぶんだから安いもんだと笹原は思いつつさらに蛇口をひねった。

「ところでさ川内」

「んー？」

「宿題の答え、わかった？」

「あんたの過去を漁ってこいつてやつ？」

「そうそうそれそれ」

スポンジを泡立てながらそう聞くとユニットバスのドアがコンとなった。どうやらドアに寄り掛かったらしい。

「笹原ゆう、本名は高坏梓。年齢は28。日本の現役スパイマスター高坏滯の孫娘だが、父親は不明。国内だと内閣総辞職まで問題が広がった朝比奈元経済産業大臣収賄事件、難民受け入れ推進派明川隆三戦後復興大臣爆殺事件、エトセトラ、エトセトラ……。沢山悪いことしてきたみたいだね」

「まあねえ。でもそのほとんどが」

「あんた自身がやった訳じゃない。スキユラの指示、でしょ？」

「おーう、そこまで調べているのか。優秀優秀」

笹原は上機嫌にそういつて体中に付いた泡を流していく。

「でも、おかしいよね、これ。朝比奈経産大臣が現役の時って大佐はま
だ」

「そのころ『朝比奈瑞稀』は若干9歳だね」

「……どういうカラクリよ」

「お金をもってて、人様に暴露できない趣味があつたってことだよ」

「……！」

硬質になる声を聞いて笑みを浮かべながら笹原はシャワーを止めた。

「娘に手を出す勇氣はないが、性欲を抑えきれなかった異常性愛者が、非合法とわかつて顔のいい年齢一桁の女の子を買ってましたなんてスキヤンダル、そう転がっている訳じゃない。そんなのが表に出るよ

りは収賄がばれた方がまだダメージが少ない。そう言うことよ」

「そのために……」

「そ、そのために私は差し出された訳だ。実の祖母に背中を押されてね」

そういつて風呂場のドアに背中を預けるとドアの向こうが震える気配がした。

「なに、同情してほしいわけじゃない。それはそれで割り切ってるんだよ。とつくのとうに私は狂ってた。名前も過去も、全てを捨てても平気なくらいには狂ってたし、今も狂ってる。そして、軽く二ケタ後半の数は抱いてきたし、直接的にも間接的にも三桁近く殺してきたよ。その結果、私は私に向けられる愛憎をコントロールできるようになった。——君が情を向ける私は、そう言う化け物だよ」

「——化け物なんて言わないでよ！」

ドアの低い位置が揺れた。背中を預けたまま拳でドアを叩けば、その位置が揺れるだろうという場所だ。

「あんたはいつもそうだ。淡々と語って、無茶してるのも見え透いてるし、気が付いてもらいたくて必死なのに、全部大丈夫みたいな顔でチラつかせた物を取り上げる！」

扉越しでも十分に響く怒声に笹原はユニットバスの安い天井を仰いだ。ああ、泣かせる気はなかったんだけどな。

「そこまで信頼できないかなあ。私は、何があってもあんたの味方になるって、なんでわからないかなこの司令官は」

「私はいつかそれを裏切る。笹原ゆうが必要となくなった段階でね」

「そんな日が……」

「くるよ」

くるんだよ、必ず。そう言うのと扉の向こうでもう一度扉を叩く音がした。今度は弱い。

「やだよ……司令官」

絞り出すような声に笹原は笑って扉を一気に引いた。内開きのドアは川内の重みもあって勢いよく開いた。仰向けに倒れてくる彼女を後ろから抱きとめる。

「大丈夫。まだしばらく先だ。それに、とりあえず今の段階では私がまだウイルスにやられていないことがわかった。それで十分だ」

川内の目の端を撫でて涙の跡を消しながら、笹原は笑う。そうだ、まだ笑える。まだいける。

「本当は寝直したいところだけど、仕事始めも近い、用意をしないと……」

そのタイミングで、かなり急いだノックが響く。

「どうしたの？」

「きれいかぁん！ 開けてー！」

「文月……？」

バスタオルを手早く巻いた笹原がドアを開ける。

「どうしたの？」

慌てた様子の文月が部屋に飛び込んでくる。笹原は素早くドアを閉めると後ろ手で鍵を閉めた。

「これ……！」

文月が数枚のレポートを差し出した。わざわざデータではなく紙で直接持ってきたということとはよほどの事態だ。心して印刷されたそれを確認する。笹原は洗ったばかりの髪を掻きむしった。

「……全くなんでこう、こんなタイミングで仕掛けてくるかな」

「なにがあつたの？」

川内の声に笹原は冷や汗が垂れる顔を向けた。

「15分前、グラウコスの名で第二実行班とやらに実行命令、その直後に――」

笹原はこめかみを押さえるようにしながら虚空を睨んだ。

「国連の人事管理サーバーがフロアごと吹き飛んだ」

業務開始と同時に井矢崎の元を訪れたのは高峰だった。敬礼を交わしてから資料をデスクの上に置く。今日の秘書艦を務めていた景鶴がどこか居心地悪そうに座っていた。

「今朝の国連の人事管理サーバー爆破事件、既にお聞きになられていると思いますが」

「うん、今長野は対応でてんでこ舞いだらうね。それで、どうしたの？」

「そこにグラウコスと呼ばれる人物が関わっていることが確定的になりました」

「グラウコス……神話だと何人もいるけどどのグラウコスだい？」

「シーシュポスの子、ヒッポロコスの子とかけっこうたくさんいたと思うけど」

あくまで笑みを張り付けたまま井矢崎は聞き返す。

「海神グラウコスをお忘れですか？ 少将」

「うん、知ってる。そしてその名を持つクラッカーがアメリカ寄りの活動をしていることも知ってる」

高峰は苦虫を噛み潰したような顔をした。

「……さすが、耳が早い。元在帝政アメリカ防衛駐在官を歴任しただけある、といったところでしょうか」

「そう言えばそんなこともしていたね。私がまだ一等陸佐の頃だから、もうかれこれ12年近く昔の話だ。よく調べている」

どこか満足げに鼻を鳴らして井矢崎は微笑んだ。

「それで、そのグラウコスが国連の人事管理サーバーを爆破した。サーバーの立地は公にされていないにも関わらず。正確に爆破せし

めた。……非合法ノンオフィシャル諜報員の証拠を消すためにしてはいささか大袈裟だが、理解ができないものじゃない。それで、それを私になんで報告しに来たのかな？」

張り付けた笑みを見て、高峰は笑みを返す。心のこもってない笑みにも使い道がある。

「……《オペレーション・ウエヌス・リベルティナ》、南北アメリカ方面隊からの支援の申し出を正式に拒否していただきたい」

「即ち、今回の人事管理サーバーの攻撃が《オペレーション・ウエヌス・リベルティナ》への妨害を意図したものだ？」

「はい」

それを聞いて井矢崎は溜息をついた。

「それはできないよ」

「なぜです？」

「なぜとは、それは一番君がわかっていることじゃないの？ 外務省のエリートキャリアだった高峰春斗参事官なら……いや、エリートキャリアの高峰春斗参議官と呼んだ方がいいかな」

「どちらでも結構ですよ、参事官は階級、参議官は役職ですから。井矢崎少将もよく調べられているようで」

「ふふん、こんななりでも少将だよ。上級管理職を舐めてもらったら困る」

井矢崎はそういつてどこか挑発的な目線を高峰に向けた。

「どちらにしても君は外交の最前線に立っていた。その経験がある君なら考えるまでもないはずだ。今ここでアメリカ方面隊を無下に断ってしまつては戦力の独占と誹られることになる。それは極東方面隊にとつても、その管轄地である日本においても、プラスにはならない」

「それは在帝政アメリカ防衛駐在官としての経験からですか？」

「日本国内で国際犯罪組織狩りに勤しんでいた君よりは外交に明るいつもりだよ、若造」

「歳はそう離れているつもりはありませんけどね」

井矢崎は指を顔の前で組んでそれ越しに高峰を見た。

「つまり高峰君はこういうことを言いたいのかな。私が米帝に肩入れして、アメリカ方面隊の手引きをしている」

「まさか。ナシヨナリズム溢れる井矢崎少将がそんなことをするはずはないと思っっていますとも、先輩」

盛大な皮肉に井矢崎は苦笑いを浮かべ、その後しばらく双方言葉が途切れる。

「あの……私、席外した方がいい？」

景鶴が恐る恐る手を上げる。この場からいち早く退散したいと心からそう思っていた。聞くからに危ない話題だ。少なくともこういうことにまだ耐性がありそうな翔鶴に交代したい。

そんな様子に気がついたのか、井矢崎がふつと表情を緩めた。

「いや、ここにいてほしいかな。私の部隊が関わることだから」

少将の鬼っ！ と心の中で叫びつつ景鶴がゆつくりと手を下ろした。高峰は景鶴に目で詫びてから、井矢崎に視線を戻した。

「正確には部隊の安全に関わること、でしょう？ 少将。今は人間同士で争っている余裕がない。アリューション方面攻略は極東方面隊の最優先事項であって、確実に手中に収めなければならぬ場所です。そんな重要な作戦で、南北アメリカ方面隊の動きという不確定要素を増やしたくない」

「うん、気持ちはわかるし、重要性もわかる。でもまあ、難しいものは難しいだろうね。それにオペレーション・ウエヌス・リベルティナは予定通り、今日のヒトロクマルマル一六〇〇時をもって開始される。間に合うまい」

「……仕方ないですね。では、南北アメリカ方面隊に嚴重抗議できるように国連海軍上層部に掛け合っていたいただきたい」

「何としても蹴落とすつもりかな？」

「我々が動くために必要でしょう」

「特設調査部が、かな？」

「貴方が、ですよ。少将」

そう言うとき視線を下げて肩を揺らす井矢崎。目を上げた時にはその目が冷えていた。

「いいだろう。そこまで言うなら何とかしようか。大義名分は用意で

きるようにしよう」

「感謝します、少将。では、これで」
敬礼を送り高峰が踵を返す。

「ああ、そう言えば高峰君」

井矢崎の声にもう一度振り返る高峰。窓の外からの光が井矢崎の表情を塗りつぶしていた。

「君もアメリカと繋がりがあつたな」

それを聞いて高峰は笑った。景鶴はそれを見て背筋が凍る気がした。

「——では、失礼します。少将」

ドアを開けて外に出る。そうして、ため息をついた。

「……ずっとそこで待つてる必要はないだろう、委員長、篠華」

「だって取り込み中みたいだったからね？ こわーいお話には首を突っ込まないに限るよ」

篠華が銀髪を揺らしてそう言った。高峰は肩を竦めてそれに答える。

「いつもいらんことに首を突っ込むのにか？」

「いやいや、あれは面白いこと、ねー駄クン」

「同意を求められても困る。……高峰、なにかあつたのか」

東郷の声に高峰は一瞬口をつぐんだ。

「白鴉、景鶴から目を離すな」

「……どういうことだ？」

「最悪の場合、『白夜の鐘』の再現になりかねない状況になる」

息を飲んだ東郷と篠華を置いて、高峰が歩き出す。廊下の角を曲がれば笑顔の青葉が合流した。

「状況はどうです？」

「井矢崎少将から言質をとった。手綱はこっちが取ったよ。九課の方は？」

「永野大佐が付いてくれるそうです。六課との共同戦線ですね。五月

雨ちゃんと扶桑さんにも協力とりつけました、動けます」

「上々。防諜パッチ」

「D4がつつがなく進行中ですよう。早速網にかかり始めました。マーカーは六課の面々が付けてくれています」

「監視続行、まだ手を出すなよ」

「わかってますって。そしてもう一つ」

速足で階段を下りつつ、青葉が口を開いた。

「サーバー爆破教唆の疑いと先日のクラッキングの犯人ですが、非公式に断定来ましたよ、案の定です。お決まりすぎて少し拍子抜けですが」

「そうか」

その反応を聞いて青葉がクスリと笑う。

「あれえ、以外に淡泊ですね。高峰さんにとっては嬉しくない知らせですか?」

「それが例え福音であつても、それが最善であるとは限らない。正義を成せば世界の半分を怒らせるものだ。……何はともあれ、ウォルシಂಗラム作戦がこれで幕開けか」

「ですね……さて、どんな大物が釣れるやら」

「まあ、対応は実働班に任せるとしよう。俺たちには俺たちの仕事が残っている」

一階のロビーを抜けて外へ、夏を感じさせ始めた風を受けながら目の前の船を見やる。グレーの鋼鉄の艦が二隻並んでいた。一隻は水上用自立駆動兵装運用型駆逐艦「あすか」、もう一隻は国連陸軍との供用艦、念動式輸送艦「あきつ丸」。

「さて、戦争の幕開けだ」

「地獄への道行き、お供しますよ、高峰さん」

高峰があきつ丸へと足を向ける、青葉もそれに従った。

その日、2083年7月5日。ミッドウェー攻略隊を乗せたあすかが出港、それに続けてあきつ丸が北を目指して出港した。

オペレーション・ウエヌス・リベルテイナ——ミッドウエー・
アリュージョン二方面攻略作戦が始動した瞬間である。

20万UA記念 PREQUEL07 女神たちのお茶会（皆殺し編）

「やっほー」

デイシフト明けのJST1734、笹原の部屋に見知った顔がやってきた。わざわざ立って出迎える必要がないから椅子に座ったまま振り返る。

「あれ、しのちゃんどしたの?」

「いやー? ちよつとおいしいクッキーが手に入ったからね。久々に一緒にどうかなと思ってさ。一緒に仕事することになった訳だしねー」

そう言って紙袋を振るのは篠華・リーナ・ローレンベルク中佐だ。銀色の髪は極東方面隊司令部ではよく目立つ、早々間違えるものではない。

「オツケー。そっちはこの後大丈夫なの?」

「明日0900までオフだよん」

「なら、紅茶とブレンデーも出そうかな。紅茶はそこそこのしかないけど、いいブレンデーはあるんだ」

「お酒結構好きだもんね、ゆうちゃん」

「しのちゃんほどじゃないさ。ジャムも用意しようか?」

「それは自前のがあるから持つてくるよー」

「了解ー」

そう言って笹原は立って電気ポットと茶葉を取り出す。

「何なら暇そうなの誘うかい、女子限定で」

「だねー。この部屋だと……6人が限界?」

「カップ持参してって言わなきゃね。ここ、カップ3つしかないから」
笹原は今日明日のシフトを思い出しながら、誰を呼ぶか考える。川内は艤装の改装中でしばらく手持ち無沙汰だろうし、文月も甘いもの

好きだし喜んで来るかな。

「んじや、お互い好きな人二人ずつ呼ぶ感じで、カップ持参なら少しくらいなら増えても大丈夫だよ」

「あー、おっ茶会、おっ茶会」

篠華はクッキーを置いてどこかに去っていった。人呼ぶついでにカップを持参する気だろう。

「やれやれ、変わってないね、篠華は」

どこか満足げに鼻を鳴らしながら、笹原は電気ポットの電源を入れた。ブレンダーも少しだけ用意して、クッキーも足りないだろうからストックしていたビスケットも出しておく。チョコレートも欲しいところだが、手元がないからとりあえず無しで。

そんなことを考えながら用意していたら、文月に手を引っ張られるようにして川内が入ってきた。

「『仕事』の話でもするの?」

「まっさか。今日は単純に突発的なお茶会だよ。ローレンベルク中佐がクッキー持ってきたからね」

「お菓子お菓子――!」

文月が無邪気にそう言っただけで早速ローテーブル（ちゃぶ台ともいう）の上にあるクッキーを物色し始めた。

「みんな来るまでもう少し待ってなさいよ」

「はーい、どれがいいかなあ……」

「聞いちやいないね」

川内が苦笑いをしたタイミングでまたドアが開く。銀髪の後ろには朝潮と朝霜が見える。

「そろそろ茶葉蒸しあがった?」

「手伝いたくないから抜けたんじやないでしょうね?」

「やだなあ、この篠華さんがそんなことするはずがありませんことよ?」

「言葉遣い変になってんぞこのポンコツ司令」

「ポンツ……!?!」

朝霜に言いように言われて嘖き出す笹原。

「いや、言えて妙だわ、ポンコツしのちゃん」

Или я ударю
「ぶん殴るぞ」

Спасибо, но нет.

「遠慮しとくわね」

互いに笑みを浮かべながら物騒なことを言い合っているうちに紅茶がはいったのでとりあえず休戦。皆でちゃぶ台を囲む。

「ブランデー入れる人ー？」

「はあい！」

「文月はだめ、あんた少しでもアルコール入れるとところかまわず脱ぎ散らかすでしょ」

「えー」

不満げに頬を膨らませる文月を尻目に篠華がブランデーを入れる。篠華と笹原を除いて、ブランデーを入れたのは結局川内だけだった。

「それじゃ、とりあえず乾杯ー」

「お疲れ様でしたー」

篠華の音頭でお茶会が始まった。

「いやー、一緒にお茶するの何年振り？ げ、もう三年くらいかな？

お互い歳を取るはずだ」

「海大卒業してからだから、4年経ってるわよ？ まあお互い忙しかったし仕方がないかなー。ゆうちゃんは佐世保だったし即応打撃群に移ってからもなんだかで忙しかったみたいだしねー」

「そういうしのちゃんも相変わらずいろいろ派手に頑張ってたらしいじゃない。大湊から栄転で横須賀の528司令でしょ？ やるじゃん」

「特務艦隊隷下の504水雷戦隊司令官に言われても嫌味にしか聞こえないーい」

「えー？ そんなことないけどなあ。でもまあお互い優秀ということ」

「実際優秀だからたち悪いんだけどね」

「お、言うね川内」

朝霜が川内に笑いかける。

「こんな助平な変態を切れないんだから国連軍もいろいろ人材不足だ

ねえ」

「ふっふー、それだけ篠華さんは優秀なのですよー」

「朝潮に猫耳メイドコスさせる変態だけどねー」

「ちよ、なんでゆうちゃん知ってんの!？」

「委員長が『胃の粘膜が限界だ何とかしてくれ』って言いに来たよ」

「了解、後でヴェルちゃんと一緒に委員長の前で『はつしもふもふ』してやる」

「やだなにそれ怖い」

ハイテンポで続く会話に置いてきぼりの文月が朝潮の隣にこそそこそと移動した。

「なんか似た者同士って感じだねえ」

「た、確かにそうですね……。ってことは文月さんもコスプレさせられたり……」

「うーん、コスプレさせられるのは川内さんの方だねえ、あたしとはにやんにやんすることの方が多いかなあ」

「えっ……!？」

「そこっ! 篠華へんたいの前で余計なことを口走らないっ!」

衝撃のカミングアウトに笹原が指さしで止める。

「きゅぴーん」

「自分で擬音つけてまで目を輝かせるんじゃない、篠華・リーナ・ローレンベルク中佐っ!」

「えー、でも、ゆうちゃんんで開発済みでしょ? ヘーキヘーキ」

「開発って言うな開発って!」

「今晚あたり一晩貸してよ、文月ちゃん、5万でどう?」

「人の部下を勝手に買うなっ」

「川内ちゃんと夜戦してればいいじゃない、6万」

「夜戦違いだからパス」

「仕方ない、こっちからも朝潮にやんを出そう、7万5千」

「マジでっ!？」

「いい加減に……」

「しなっ!」

「でっ!?!」

ゴツ! と強烈な音がして司令官二人が撃沈。全力全開でゲンコツを落としたのは川内と朝霜である。

「まったく、いつまでこんなけつたいな会話してるやら、朝潮も困ってるのを見てわからないかな」

「女三人で姦しいって言うけど、この二人だとやかましいだね、ほん」と

手を振って痛みと熱を逃がしながら二人が上官を見下ろしてため息をついた。

「……変態は滅びぬ! 何度でも蘇るさ!」

「テメエらは寝てろっ!」

ほぼ同時に飛び起きた篠華と笹原をもう一度ノックダウンしてから、秘書艦二人が席につく。朝潮は苦笑いだ。

「変態って自覚あったんだねえ」

さらっと毒を吐く文月に、みごとなコブをこきえた笹原が笑う。

「まあアブノーマルな自覚はあるよ。まあケイ君ほどじゃないし、しのちゃんほどじゃないけど」

そう言うのと机に突っ伏したままの篠華が頬を膨らませていた。

「えー、そんなことないでしょー」

「海大教導艦ブロマイドを全員コンプしてたのは誰だったかなー?」

「ブロマイド?」

川内が聞き返すと笹原が笑った。

「あー、そっか、川内たちには話してなかったねー、海大十二月事變のこと。水上用自立駆動兵装運用士官養成課程中のことだしね。あれは傑作だったなー」

笹原の目はどこか遠くの風景を見るように細められていた。

「軍隊って今でも基本男所帯でしょ?」

「まあ、そうですね。私達水上用自律駆動兵装はガイノイド素体なので女性と言えないことはありませんけど……性別なんてそもそもありませんし」

朝潮の答えにちつつち、と指を振る笹原。

「でも少なくとも血の気盛んな男どもには女に見えるんだよ？ 水
上用自律駆動兵装運用士官養成課程は女性が多いほうだけど、同期に
4人も女子がいればいいほうだ。技術屋の特務技官養成課程なんて
地獄だったらしいしね。……まあ、そんなところに可愛い見た目の女
の子がやってくるんだ。しかも教導艦という立場だから女の子の方
が上司、手を出すわけにはいかない訳だし、ずーっと目の前にニンジ
ンぶら下げられる形だね」

笹原がそう言って下品な笑みを浮かべた。

「まあそこで矛先が行くのが彼らの同輩である私達だったわけだけど
……」

「腕っ節でも技術でも負けない高飛車女子かあ……」

「その評価はあんまりじゃない？ 川内さん？」

「だって実際そうじゃん」

ぶすつとむくれる笹原はそれ以上反撃しなかった。思い当たるこ
とでもあるらしい。

「……まあ、実際撃退される程度の男だったからね。んで、結局誰にも
手を出せない男の子はなんとかして性欲を発散させることになるん
だけど、ここで文明の利器登場。ホログラム。これがあれば一人の寂
しい夜も好きなコと一緒にいれる優れもの。ただ、ホログラムだつた
り音声だつたりを好きなコに似せるには専門の技術を持つ人物が必
要なわけで……」

「……つまりさ、そんな技術を持った人が教導艦のえつちなホログラ
ムとかを作って販売してたわけ？」

川内の呆れたような声に笑う司令官二人。

「そ。もうバカ売れ。手を出してなかったのカズ君ハル君ぐらいじゃ
ない？ 枯れた仙人みたいだよーあの二人。でもそんな二人でも
黙認してたし、必要性は認めてたんじゃやない？ 一応作成者もグレー
ゾーンに収めるためと本人の趣味でスク水要素が多かったけど」

「……なんだか、作った人にもものすごく心当たりがあるんだけど。そ
の人『大鯨さんもスク水着れば潜れるっ！』とか言ってた？」
「うん、その人だね」

川内の脳裏では潜水艦隊を率いる笹原の同僚の笑みが再生されていた。次回からどんな顔して会えばいいんだろう。

「まー、そういうことがあったんだけど、それが予想外の事態で教官にばれてね。もー大パニック」

「予想外？」

「授業中に電波が混線して教室のスクリーンにでかかど頬を染めた伊八はっちゃんの映像が投影されてスピーカーから大音響で喘ぎ声」

「うわあ……」

「んで大捕り物が始まった訳。もーあれは思い出す度に笑いが止まらなくなるね」

笹原はそう言って懐かしそうに目を細めるのだった。

「ま ち や が れ ——— ツ！」

呉湾沖に浮かぶ江田島、初冬の隊舎に教官の叫び声が響く。そしてそれと同じぐらい大きな足音が多数。

「なんで俺まで巻き込まんだよ馬鹿野郎！」

「黙認してたのは月刀クンもでしょ!?! かくまってよねえ！」

「お前の副業だろうが！ 自分のケツは自分で拭け！」

隊舎の廊下は結構狭い。5人も並んで走れば通り抜けも不可能な移動式バリケードの完成だ。それを何重にも後方に用意して先頭を走るのは渡井慧特務士官候補生と、それに巻き込まれた月刀航暉候補

生だ。黒一色の詰襟の制服を派手に翻しながら三階の廊下を疾走する。そんな集団に追い打ちをかけるように隊舎内放送がかかる。

『逃走中の渡井特務士官候補生とその共犯諸君！ 諸君らの行動は無駄な逃走である。さっさと諦めてお縄に付けい！』

「篠華あ！ あんただけには言われたくないよーだつ！」

渡井がとつさに叫び返すが、放送室には当然聞こえていない。

『渡井候補生には水上用自律駆動兵装の子たちのいわれのないあられもない姿を収めたブロマイド集を違法に製作、販売した容疑がかけられている！ おとなしく提出すれば悪いようにはしない！ 購入リストが漏れることを恐れて逃走を幫助している助平男子諸君も同様だ！ おとなしく投降しなさいっ！』

「真つ先に全種購入したのはお前だ篠華・リーナ・ローレンベルク候補生っ！」

そんなことを叫び返す渡井の横で溜息をつくのは航暉だ。

「なんで俺は冤罪を着せられたあげくお前を幫助しなきゃいけないんだよ……」

「君と僕との仲だよねっ、旅は道連れ世は情けっ！」

「情けで教官たちとガチバトルするのは割に合わねえ！ というより早々に投降したほうがまだ楽だろ」

「いや！ 僕が捕まることを恐れている男の子たちのためにも捕まるわけにはいかないっ！ 少なくともリストの削除と皆の現物のデリートが終わるまでは捕まるわけにはいかないんだっ！」

「ああそう……」

航暉は呆れつつも後ろを見る。必死な顔で動くバリケードと化している同輩たち。航暉が離脱しようとしたら、この人数が一斉に『敵』に回る。少なく見積もって30人。圧倒的男所帯の軍隊にあつてそういう系の品物は需要過多で引く手あまたとはいえこんなに売りさばいていたとは正直驚きだ。見て見ぬふりをしていたところだろうが、渡井が『誰に何を売ったのかりスト』を持っているため庇わざるを得ないのがつらいところだ。常日頃から教導担当艦として顔を合わせている子たちのブロマイドを買っているため、次に顔を合わせ

た時には命の保障がないのだ。

「で、そのリストは？」

「今外部インフォメーション・キューブ記憶で持つてるのだけでコピーはなし！ だから寮のハードを押さえられても問題はないっ！」

そう言った渡井が廊下を曲がる。航暉もそれに続いて角から飛び出した。

「いつ!？」

「撃てっ！」

廊下を曲がった位置に訓練用の空気銃を並べた女子の一団が陣取っていた。航暉は渡井の首根っこを掴み曲がり角にある階段室に投げ込んだ。直後に響く圧搾空気が解放される音。航暉も慌てて階段室に飛び込む。

「ちよつと月刀クン乱暴！」

「訓練用樹脂弾で全身あざだらけよりマシだろ！」

階段室の入り口で尻もちをついていた渡井を二階に向かう踊り場まで後退させつつ航暉は持ち物を確認する。身分証入りのパスケースと手帳、安物のボールペンにハンカチとチリ紙。盾代わりになる本の一冊でも持つてくるんだたと後悔しながらも廊下の様子を窺う。人肉バリケードと化していた男子諸君が女子の空気式模擬銃でコテンパンにされている。その中を突っ切って階段室に入ってくる男が二人。

「高峰、杉田……まさかお前らまで買ったのか？」

「戦場の娯楽といえば酒・賭け・女、あと煙草と相場が決まってるだろ」杉田がそう言って笑う。結構貢いでやがったなこいつ。それに苦笑いを浮かべていると高峰が渡井のところまで降りていく。

「俺は一応お世話になっては無いわけだし、盛大に副業をやっていた君を教務主任に突き出すこともできる」

「……今度晩飯でもなんでも奢るよ」

「話が早くて助かるよ」

晩飯程度で懐柔されていいのかよ元外交官と航暉は一人心中の中で突っ込んだ。

「渡井、リストの消去に何か道具が必要か？」

「消去用プログラムをダウンロードしないといけない。官舎内のネットワークだとファイアウォールで足がつく。外部の衛星ネットを使いたいけど、空が開けたところに移動しないといけない」

「となると……屋上かグラウンドか、だ」

高峰の呟きに渡井が頷く。航暉が話をまとめに入る。

「とりあえず二手に分かれるか。高峰と杉田は上へ。おそらく教導艦の皆様がどこかでスタンバイしてるはずだ。偵察と狙撃対策が必要だ。頼むぞ」

「了解」

「渡井、このまま降りてグラウンドを逃げ回りながら時間を稼ぐぞ」

「かけっこは苦手なんだけどなあ……」

「屋上で籠城って手もあるかもしれないが、それくらい読まれているだろうさ。グラウンドの方がまだ時間を稼げる」

「へーい」

渡井が立ったタイミングで廊下の男子バリケードが崩壊した。行動開始。

二手に分かれて階段の上と下へ。階段室になだれ込んだ女の足音が乱反射する。捕まるのは時間の問題だ。

……野郎どもの（社会的な意味での）命をかけたチキンレースは早々に破滅に向けて動きだそうとしていた。

「で？ どうなったの？」

「どうなったもこうなったも、グラウンドに集結してた教導艦に一方的にされて終了よ。でも渡井君が根性見せてねー。リストの一部消去には成功してた」

「一部？」

川内の質問に微笑みながら紅茶を口にする笹原。代わりに口を開いたのは篠華だ。

「だれがいくつ買ったのかと何が何個売れたかは残ってたけど、誰が何を買ったのかを示すリンクを消したのよ。だから個人の性癖は最低限守られた訳」

「でも個数が割れてるからしのちゃんが全種購入してるのだけはバレバレだけどねー」

「据え膳食わぬは女の恥よ」

「それは男だと思うのですが……」

朝潮がおずおずと訂正するが篠華は華麗にスルー。朝潮を励ますように川内が肩を叩いた。

「にしても、渡井大佐も結構大胆なことするんだね」

「黒鳥の中でもあけすけにヤバイのは渡井君だよ？ 技術持ってるし性癖トチ狂ってるし顔はそこそこいいし。顔のアドバンテージは性癖でマイナスまで落ち込むけどさ」

篠華が下した渡井の評価に川内たちは苦笑いを浮かべた。

「でもまあその技術が正しい方向に出力されれば本当に心強い味方だよ？ 変態だけど。第二次日本海海戦第三夜戦で大破してた榛名の出力機を遠隔点火して再始動させたのは渡井君だし、頼れるところもあるんだよ。変態だけど」

「でも変態に技術を与えるってこんなことになるって事例だね。渡井君は絞られたしブロマイド買った人も怒られたけど、まあそれつきりだしね。うまいこと逃げたと思うよ」

そう言つて篠華はニヤリと笑う。笹原も笑い返す。

「でも、それだけで許すようなことでもなかったんだよねえ」
「ねー」

「……なにかしでかしたの？ 司令官」

「私が傑作だったっていうのに、こんな平凡な終わりになるとでも？」
笹原が笑った。ここからが面白いんだ。と続ける。それを聞いて冷や汗を流す川内、ああ、候補生時代からトラブルメーカーなのは変わらないかったんだ。

「あいつのことか？」

Yeah, I know him.
ああ、知っている。

話せば長い。そう、古い話だ」

演ずるように声が太くなる笹原。篠華はそれを聞いて既にケラケラと笑っている。

「知ってるか？」

There are three kinds of Pervert?
変態は3つに分けられる。……

(変態的な)強さを求める奴、(変態という)プライドに生きるやつ、皆に見せびらかす奴……この3つだ。あいつは——」

その先は笑顔の篠華が継いだ

「彼は『明鏡』と呼ばれた変態、

This man was one of RAVEN OF OFFICERS
五期の黒鳥の一人」

茶々を入れるように笹原が割り込む。

「よう相棒、いい眺めだ、

There is no difference if boobs are big or not
ここから見ればどの胸も対して変わらない」

笑う篠華。

「私は『彼』を追っている」

そして二人は声を合わせた。

「It was a cold and snowy day.
あれは雪の降る寒い日だった」

クリスマス記念PREQUEL08 雨は夜更け
過ぎに血雨へと変わるだろう

窓には薄く雪が降り積もっている。今日は12月24日、ホワイトクリスマスというには少々足りないが、雪がちらつくクリスマスとなっていた。

「でもクソ寒いなこれ……」

そんなことを部屋で呟いたのは太い指で苦勞しながらラッピングを続ける杉田だった。その横では無言で黙々とクリスマスカードを量産する高峰と月刀。箱のラッピングを行うのは渡井だ。

「というよりこの時間までずれ込むとは……今日中に配り切れるのか？」

「しかたないでしょ、基地からの外出許可が今日の午後しか取れなかったんだからさ」

「にしても、もつとちやちやつとできないのか？ なあ高峰」

高峰があしらいながらカリグラフィペンでMerry Christmasと綴っていく。定規を下線代わりにおいてはいるが、フリーハンドで飾り文字があつという間に書かれていく。さすがネイティブ、スペルはきれいだ。次点で字がきれいな航暉も似たような文章を綴りながら会話に加わる。

「お前らわかってるだろうが、これ全部教導艦の皆様枕元に置いていくっていう難易度最凶のミッションがこの後控えてるんだぞ。これぐらいで弱音吐いてて大丈夫なのかよ」

「ま、鳳翔さんには許可取ってあるわけだしなんとかなるんじゃないか？」
渡井の楽観視に杉田がため息をついた。

「これで窓の鍵が開いているのが女子トイレだけだったらどうするつもりだ？」

「喜んで乗り込む」

『やめろ』

渡井の即答に全員が突っ込んだ。

「でもまあ、とりあえず鳳翔さんが開けてくれるんじゃないの？ 一応罪滅ぼしも兼ねて男子全員からのプレゼントってことになってるしよ」

「“委員長”も買ったとは驚きだよな」

そう下世話な笑みを浮かべるのは杉田だ。何とかりボン掛けが終わったらしい。

「んで、その委員長は？ “サンタクロース作戦”に合流する手はずだろ？」

高峰の問に答えるのは渡井だ。

「僕から頼んで教官に交渉に行ってもらってる。上官たる教導艦の詰め所に侵入するのを黙認してもらわなきゃいけない訳だしよ」

「まあ下手にこの部屋の面子が行くよりは波風は立たないよな」

杉田の声に、一同が頷く。

「まあその分報酬求められたけど」

「何を？」

「ケーキ代わりのうなぎパイの確保」

そう言われ自分たち用に買ってあったうなぎパイを見る。

「クリスマスだってのになかなか渋い感じになってるよな」

「仕方ないだろ、どこもかしこもケーキ売り切れてたんだから。いくら高級品になったといっても供給はまだあるはずなんだが」

「まあ、いいんじゃない？ 華の独身が集まってクリスマスケーキを囲むのもなんだかアレだしよ」

渡井がそういつて開き直ったその刹那――部屋の電気が落ちた。

「……なんだ？」

反射的に壁際に寄った杉田がそう言いながら様子を窺う。航暉がドアの前を避けつつ電気のスイッチをいじる。

「電気が来てない」

「外の街灯はついてるからブレーカーが飛んだか？」

「そう単純でもなさそうだぞ」

高峰が不吉なことを言った。窓際に立ちプラスチックの定規を鏡代わりにして外の様子を窺っていた。

「外に人影、見えるだけで数2。周囲の照明を避けて動いてる」

「……襲撃か？」

水上用自律駆動兵装への反発などは少ないとはいえない訳ではない。テロなども起こらないとは言えない。部屋の面子に緊張が走る。「電気が消えて5秒、襲撃ならそろそろ突入しているぞ」

杉田の発言を裏付けるように、廊下から悲鳴が聞こえた。杉田と航暉、高峰が反射的に床に伏せた。連続した発砲音

「サブマシンガン以上は持つてるか」

「どうする？」

高峰の問を聞きながら、ポケットからコンパクトナイフを取り出す航暉、床を転がるようにして部屋の隅にあった荷造りひもを手にして1メートルほどの長さに切り出した。

「……渡井、棚の本出せ。分厚いの」

渡井から受け取ってそれを縛る。ハンマー投げの要領で投げられるようにする。それをいくつか用意した。発砲音の他に声が聞こえる。女性の声。侵入者がいるのは間違いない。部屋に置いてあったハンディ消火器を杉田に渡した。ためらいなく安全ピンを抜く。

「対テロ演習そのままにしよう。とりあえず渡井、火災警報器を遠隔点火できるか？ 消火栓を使いたい」

「やってみる」

「あとは薬剤消火器とガラスの灰皿とかを武器に避難までの時間を稼ぐぞ、正面玄関から制圧する。状況開始」

『了解』

高峰がドアを蹴り破る。同時に杉田が飛び出した。航暉も投『本』の用意をしたまま飛び出す。目の前の廊下にはまだ敵はいない。部屋は一階。声と銃声の響き方からして、侵入者は中央の玄関から反対側の廊下側に向かったらしい。

「階段、防火扉」

「ああ」

最後尾についた高峰が防火扉を操作する。二階に侵入されている可能性もある。二階から来た敵に背後から奇襲されるのは非常にまずい。階段の防火扉を閉じておけば最低限音で気がつく。壁際に並んだロッカーを勝手に漁って、ハンガーなどを掛けるのに使う50センチ程のアルミパイプを拝借、警棒代わりぐらいにはなるだろう。ハンガーもいくつか拝借。清掃具入れからモップもとりだした。

「急ぐぞ」

できる限り音を立てないようにしながら走る。ここを曲がれば正面玄関という廊下の曲がり角まで来る。途中にあった消火器を回収して消火器で武装した杉田がコーナーをクリアリングしていく。そしてためらいなく消火器を噴射した。

「ガツデム！」

杉田に飛びかかってきた影に向かって航暉がアルミパイプを振りかざした。同時にその影が一気に後退していく。

「メリーイイイイクリスマスアアアアアアアアアス！」

血染めのような赤い服装に白い縁取りがなされた服が玄関から差し込む光に照らされる、その服の裾を揺らして笑う女性がそういつて、サブマシンガンを裾から取り出して笑った。その背後に見えるのは小中学生と言っても通じそうな背丈の少女。赤い服に身を包んだ

—— 水上用自律駆動兵装。

「メインターゲット確認、江田島娘子軍、第七駆逐隊、かかれえ！」

『アイメモー！』

「なにやっつてんだ笹原ああああああっ!?!」

それと向き合った航暉・高峰・杉田の叫びが被った。それに高らかに笑い返しながら笹原がサブマシンガンを乱射した。

「女の子のエッチな写真を買ってるような男の子に特製樹脂弾のプレゼントだぜい！」

遮蔽物がないこともあり、野郎三人が全速力で後退する。樹脂弾と

言っていたから死ぬことは無いだろうが痛いのはいやだ。

「あの服サンタ気取りかよチクシヨウ！」

「暴れん坊のサンタクロースは御免被るっ！」

「ご丁寧にクリスマス前だしなクソツタレ！」

杉田がそう言いながら廊下を塞ぐようにロッカーを倒した、3つ一組のロッカーが豪快な音を立てて床に転がりそれをバリケードとする。その裏に飛び込むと、バリケードにガンガンと樹脂弾が当たって弾ける音がする。

「俺らだけじゃどうにもならねえぞ!？」

「じゃあない！ 教官呼べ！ この状況ならこっちの味方になるだろ！」

高峰の声に航暉が無線を聞く。緊急回線で教官に直結する。

「教官、笹原候補生を中心にした数名が男子寮で破壊活動を開始します。私達だけでは止められません！」

『あ、ああ……そうか……それは問題だな』

「模擬銃まで出てきてますから対応しきれません。とりあえず応援を……！」

『すまないが今忙しい、何とかしてくれ』

「なんとか……ってまさか、教官もしかして、渡井から買ってました？」

一方的に無線が切られる。

「教官買収されてるぞこりや、高峰、委員長に連絡付くか？」

「駄目だ、オフラインになってる」

「となると、ローレンベルクか誰かに取り押さえられたな……本格的にやばいぞ」

航暉の言葉を証明するように、下げた頭のすぐ上で弾が弾けた。

「かくれんぼなんてしてないでさっさと出てきなさいクソ学生ども！」

男らしいところをたまには見せたらどう？」

「なぜぼのぼのだけクリスマス通り越して年末大掃除モードなのか気になるがな」

「うっさいー！」

笹原らとマガジンを共通化するためか対空砲などではなく警備用のサブマシンガンを手にした曙が、腰だめに構えた獲物で効力射を叩き込む。3点バーストにしているせいもあり、結構精度も高い。言葉遣いは荒いが実に楽しそうである。

「どつちにしてもジリ貧だ。なんかほかに飛び道具ないのか?」

「辞書投擲以外だとうなぎパイぐらいしかねえぞ」

「どうしろと! あとなんでわざわざうなぎパイ持ってきたんだよ杉田!」

高峰が半ばキレながらそういつて辞書をとる。非殺傷弾を使っているとはいえ撃たれているのだ。辞書投擲ぐらいは許してくれるだろう。

そうして高峰がバリケードから顔を上げた直後。

「あとついでにこれもプレゼント! 漣いつ!」

「てつてー的にヤツちまうのねっ!」

その顔面に思いつきり白い何かが張り付いた。飛び散る苺、黄色いスポンジ、航暉の足元にメリークリスマス! と書かれたチョコレートプレートが転がった。

「あいつら……っ! 投げるためにクリスマスケーキ買占めやがったな! どうりでケーキがどこも売り切れてるわけだクソツタレ!」

なぜかキレル杉田。顔にケーキを張り付けたまま高峰が笑う。

「はは、ははは……久々にキレちまったよ……」

そう言ったとたん、建物にいる男子全員に電脳通信が繋がった。

『高峰春斗候補生より候補生寮所属の全男子に報告、現在クリスマスサンタコスの教導艦及び女子候補生が寮内に侵入、好き放題暴れている状況である。総員速やかに全侵入者を確保せよ。繰り返す、全侵入者を速やかに確保せよ』

その宣言が後に『海大血のクリスマス』と呼ばれる騒動の火蓋を叩き切った。寮内が一気に慌ただしくなる。男はどんなに繕ってても所詮はオス。どんなにリスクがあると知っていても女と戦う(物理)となったら立ち向かってしまうのである。

「戦力では向こうが上だが、こっちは数で押し込むしかねえ、行くぞ野

郎ども！」

「上等！ 戦場を闊歩するのが男子の特権とか思ってる勘違い野郎に死の鉄槌をくれてやれっ！」

生クリームで白粉状態の高峰が叫び、売り言葉に買い言葉で笹原が吠える。

そうして男女対抗無差別級格闘戦が始まった。

「ぴやああああああっ！」

「どこの誰だ酒匂に『素肌にリボンだけ』みたいな恰好教えた奴!？」

杉田がそう叫びながら鹵獲した模擬弾入りのマシンガンの引金を引く。セレクトタは単発、マガジンは今のところ使用中のこれしかないから節約中だ。義体とはいえ女性姿の素肌に当てるのは忍びなく靴を狙って撃つ。

「痛いよ杉田さんっ！」

「素肌に当てるよりマシだろうがっ！ 全くどういう感性してやがる。今12月だぞ、腹冷やしたらどうする気だ」

「いやあ、ブロマイドの売り上げ枚数が最下位だって落ち込んでたからお色気作戦で何とかしようと思っただけさあ」

「お前か笹原」

「これで人気アップ確定だって阿賀野姉えも言ってたもんっ！」

「妹分にそんな売り込み方をさせるな」と後で誰か阿賀野教導艦に説

「調子に乗るとぶつとばし……」
「させん！」

確実に当てようと航暉に近づきすぎたのが災いした。振り向きざまの背面回し蹴りが漣の腕にヒット。真横に吹っ飛ぶケーキ。

「きゃあつー！」

「……あにすんのおクソ学生主席っ！」

その飛んだケーキが潮と曙を掠っていた。体温などで柔らかくなった生クリームやらホワイトチョコやらが曙の顔や潮の胸部などにべつとりと張り付く。

「ぶっかけ展開k t k r！」

「縁起でもないこと言うな漣っ！」

「もうお嫁にいけないい……！」

「何してくれんのおこのクソ学生っ！」

そんなことを言われながらも航暉は笹原を抑え込む。背後を取って拘束。袖口に入れていたナイフを取り出して峰を首にあてた。

「ちよ、カズ君ガチ過ぎないっ!？」

「部下を退かせろ笹原。既に勝ち目は無いぞ」

「やーなこった」

「こちらも同志が何人もやられててね、既に退くに退けないのさ。――

――さあ、部下を退かせろ」

「その必要はないわ」

女性の凜とした声が響く。航暉たちが戦っていた方向とは反対側の廊下から現れた影に航暉が息を飲んだ。その後呆れる。

「勝ち目がないのはあなたたちの方よ、月刀クン？」

「やっぱり委員長を捕まえてやがったか。んで亀さん系の縛り方はお前の趣味か。本当にお前ロシアンハーフか？」

「ふふーん、どうでしょう？」

そう笑って篠華は縛って盾代わりになっている東郷駈候補生を小突いて前進させた。

「篠華さーん、この人もつれてきたけどどうすればいいー？」

「サンキューあがのん、とりあえずこっち連れてきて」

阿賀野（ミニスカサンタ ver.）が似たような恰好の矢矧を連れて現れる。その二人に見事な亀甲縛りで護送されているのは――。

「なんで嬉しそうにしてるんだよ渡井」

「喜んで縛られてたらしいけど？ どうする？ とりあえず人質交換と行きたいところだけど……どっちから解放する？」

『東郷から』

男子全員即答。

「え？ ちょっと、僕は？」

「あ？ どうでもいい」

高峰が即答。周囲も頷いている。

「教官買収されたきっかけだしな」

「お前のおかげでこっちは痣だらけだ」

「縛られるの好きでしょ？」

「扱いひどくね？ ねえ、僕の扱いひどくね!？」

「一応プロマイド製作者はそいつだし、扱いは女子一同に預けるぞ」

「えっ？ えっ……!？」

航暉の言葉にさすがに顔が青ざめる渡井。

「渡井以外で異議があるものは？」

『無し!』

男子一同の声が揃う。

「だから扱いひどくねえ!! こうなったら誰が何を買ったかばらして……」

「ああもうばれてる」

『嘘お!』

男子一同の声が揃う（TAKE2）。さらっとカミングアウトしたのは篠華だ。

「渡井くん教官に渡してたよね、リスト。教官からの追及を逃れるために」

「……潮がやたら俺を狙うのはそのせいかな」

杉田がぼそりと呟いた。買ってやがったなこいつ。

「ま、というわけで渡井くんの交換条件は不成立だねー。んで、この男

「どうすればいい?」

『殺してよー!』

男子一同の (ry

「あーい、じゃあこっちは作戦終了とするけどー、撤退までは指示しないよー。それじゃ、各自の良心に従って行動開始!」

そう言つて篠華が東郷を押し出すようにして解放。艦娘全員のサブマシンガンの槓桿が金属音を立てた。

「良心に従つてって攻撃再開と変わらねえじゃねえかつ!」

航暉が一応笹原を解放して下がると同時、大量の発砲音が廊下を埋め尽くした。……さつきと違うのはそれぞれが私怨のある相手にいろいろ被害が集中していることだ。

「さつきと倒れなさいよ、このっ!」

「いでででででででっ!」

「委員長お前曙のやつ買ったの!?!」

「杉田候補生、ご覚悟願います!」

「絶対負けないんだからっ!」

「おう、殺せるもんなら殺してみろや矢矧に阿賀野、相手してやるよ!」

「杉田お前おっぱい目当てで選んでないか、そのラインナップ!」

「So war ich beschämt, müssen Sie hier sterben...!」

「ドイツ語で何言ってるかわからないけど僕に魚雷を向けないで হচ্ছে!」

「伊8、渡井はやってよし!」

「Verstünden!」

「だから扱いひどいでしょ高峰クワン!」

阿鼻叫喚の地獄絵図が再開される。高峰と航暉は購入を控えていたせい、流れ弾にだけ気をつけていれば大丈夫そうだった。乱戦状態でだれが誰と戦っているのか区別することすら難しい。とりあえず壁際になんとか寄つて無駄な被害を避ける。

「どうするよ?」

「どうするも何も……もうこれ止まらないだろ?」

「だよなあ」

お互い溜息をついたタイミング、玄関ドアが音もなく開いた。

「お楽しみですね、皆さん」

よく通る凜とした声。戦闘が一瞬で止んだ。

「げ、鳳翔さん……」

騒ぎまくっていた篠華の眩きがしんと静まり返ったせいでやけに響いた。艦娘中心に皆が冷や汗を浮かべる。

「やたらと男子寮が騒がしいと思ったのですが……結構なことになってますね」

ほんとだよ、と航暉は心の中で同意した。ケーキの残骸などが散乱しているし、ロッカーは倒れているかなりの惨状である。

「たまのお祭りですし、元気があることは私も喜ばしいのですが、程度があると思いませんか、皆さん」

「……ハイ」

喧嘩両成敗かな、と高峰が呟いた。航暉は笑うしかなかった。

「んで、鳳翔さんに正座説教くらってみんなで清掃して終了ってわけ」

「……なんでそこまでやって普通に卒業できてるのよ司令官」

川内が呆れたようにそう言う、冷めた紅茶を口に運びながらどこか懐かしむような声色でそれに答えた。

「さっき朝霜ちゃんが言った通りさ。人不足だよ。第二次日本海海戦の時だって、まだ候補生だった私やカズ君が送り込まれた。川内も知ってると思うけど、あの時はまだ今に比べて対深海棲艦戦線は余裕がなかった。いつ死んでもおかしくないからね、その恐怖と閉塞感のリバウンドが来てたんだと思うよ」

「……。悪いこと聞いたかな」

「いや？ 馬鹿やってたのは大体が面子の頭のネジを数十本単位で紛失してるせいだよ。気にする必要はないよ。それにあの時そうやって馬鹿できたのは『生き延びることが出来る』から『生きることが出来る』というように状況が変わってきていた証左でもあった。それを許してくれたのは、川内、あんたたちの頑張りのおかげだと私は思っている」

「で、その指揮官目指して頑張ってるときにゆうちゃんたちは男子寮襲って大乱闘スマッシュアップ○ザーズしてたわけだ」

「それはしのちゃんも一緒にしようが、というより原案あんただよね？」

「さあね〜」

篠華がクスクスと笑いながら最後のクッキーをかつさらった。

「ブロマイドも最終的にはお守り代わりになってるところあるし、結果オーライじゃない？ 海大卒業組で二階級特進した人いないのは五期組だけって話だよ？」

「ブロマイドがお守り……ですか？」

「そ。それを持つてるとなぜか作戦がうまくいくって話でね。一番効果があるのが鳳翔さんって言われてる」

「そういえば月刀クンも結局買ってたんだけ、ブロマイド」

「ちゃんと服着てるやつ一枚だけね。そのせいだよ、鳳翔さんのブロマイド持つてると航空攻撃成功率が跳ね上がるなんて言われてるの」

笹原の言葉に川内が笑った。

「それブロマイドのおかげじゃなくて、単に月刀准将の攻撃成功率がおかしいだけだと思っただけだ」

「まあそれでもゲン担ぎにはなるんじゃない？」

笹原がそう言って笑う。

「ま、そんなことがあった訳だ。川内も文月も……って文月？」

「朝潮・朝霜と一緒にとつくに撃沈してるわよ」

篠華が笑って、笹原に手招きをする。机の向こうを覗きこめば三人並んで仲良く夢の中だった。文月はセーラー服の上を脱ごうとしていたのか、中途半端にめくられてへそが見えている。

「いつの間にブランデー盗んだ？」

「昔話に花を咲かせすぎたんだろうねえ。海の上では本当に優秀なのに、寝顔は無垢な天使そのものだよ」

篠華にそう言われ、笹原は少し笑った。直後。

「ということだ天使な文月ちゃん一晩貸して、9万」

「残りの二人を置いてくなら許す」

「いい加減に、しろっ！」

川内が結構本気で両腕を振り落とし、いい音が部屋に響いた。

北へ向かうあきつ丸の艦橋を左手に見ながら響は海の上を進む。持ち回りで周囲警戒を行っているのだが、択捉の北北東100キロを航行している今まで平穩そのものだった。

「……択捉、か」

無線は基本的に使用しないことになっていることもあり、その呟きは誰にも届かなかつた。そして届かなくてもいいと思う。感傷的になることぐらいあるが、気づかれたくはないものだ。

海上は夏だというのに涼しい。同じタイミングで哨戒に出た睦月と如月が黒のパーカーを羽織っていたのを見て、少し羨ましい程度には涼しい。防寒具を借りてくるんだつた。そう思ってもすでに任務は開始されているのでもう戻ることもできない。

「やあ、絶好の雷撃日和だね」

「Верный……縁起でもないことを言うね」

響の似姿がスツと横に並んだ。本当によく似た姿の彼女は Верный——東郷駆中佐隷下の528駆逐隊第2小隊旗艦を務めているはずだ。

「気になるかい？ 北の海が」

Верныйが並んだままそう言った。響が肩を竦める。

「まさか。もう克服したさ。私も北に所属したことがあるからね。

「……君程じゃないけど」

「それはよかつた」

Верныйはそう言って前に出ていく。

「……思い出すのかい。 白 夜 の 鐘 を」

そう言葉をかければ、Верныйが振り向いた。

「忘れるわけがないよ。忘れたくもない。——私はあの時司令官に救ってもらったから、忘れるなんてしたくないしね。白夜の鐘のことを、君は知ってたかな？ 響」

「……深海棲艦を焼き払うために核が投入された時、前線への連絡が間に合わず、多大な犠牲を出したと記憶してるけど」

「そんな甘いものじゃないよ。アレは……そうだね、あれをあえて言葉にするなら」

В е р н ы йの唇が^{アト}а д……地獄という言葉を紡いだ。

「私達水上用自律駆動兵装の喪失はなし。その代わりに南北アメリカ方面隊と合わせてミサイル護衛艦21隻、強襲揚陸艦10隻、8千人近い死者を出した。小形の熱核爆弾でみんな焼き払われたんだ。その時の上層部は皆を切り捨てた。その結果、地獄になったんだ。人の作った地獄だったよ、あれは」

В е р н ы йが空を見上げた。夏の空が辺りを覆っていた。

「あの時も晴れてたんだ。陽が極端に長くてね、でもそれ以上に明るい火の玉が全てを焼き払った。それから守ってくれたのは、水上用自律駆動兵装の撤退指揮を執ったのは、今の東郷中佐——私の司令官だった。実のお兄さんも前線にいて、気が気ではなかったはずだよ。それでも、私達を守ってくれた」

そういうВ е р н ы йの顔はどこか寂し気だった。響はその顔にどこか似た影を見る。一途な目、そこに自分の上官の秘書官を務める少女の影が被る。

「……好きなのかい」

「誰をだい？」

「東郷中佐のことだよ」

「……さあ、でも楽しくはある。執務室をヒノキ風呂に改装してあげたのに喜んでくれなかったけどね」

「……ちなみに聞くけど、書類はどうしたんだい？」

「ほとんど電子化して防水のしっかりしたタブレットで確認できるようにしたし、印刷が必要なものでも耐水紙対応のプリンターで印刷しなおしたよっ」

それで何とかなると思ったんだけどね、怒られた。とВ е р н ы й。

「いや、さすがにそれは怒るだろう」

「そうかな」

「そうだよ」

響はくすりと笑って追いつこうと速度を上げた。――直後

《こちらMTOR、コードラズベリー、コードラズベリー》

それだけで切られた通信が戦闘の幕開けを告げた。

陽だまりの匂いを確かに感じた。日差しで暖まった畳が心地よく眠気を誘う。寝返りをうつとぱさりとブランケットが落ちた。あれ、いつの間にブランケットを掛けていたんだろう。

「起きた？」

「あれ……」

「そのままだと風邪を引くでしょ。昼寝するならば少しは気を遣いなよ」

「なのです……」

珈琲の匂い。ハードローストの薄めの珈琲はあの人の好みだった。カフェインが少なく、眠る必要があるときに眠れないという事態を避けることができるらしい。そんなところを気にするのはいかにもに思えた。それをブラックでささっと飲むのがあの人の飲み方だ。

「飲むかい？ それともミルクティーの方がいい？」

「コーヒーがいいのですー」

「オツケ、ミルクと砂糖はいつも通り？」

「なのですー。ミルク少なめの……」

「砂糖たっぷり、でしょ？」

「ですー」

ブランケットを軽く畳んで立ち上がるとまだ体が目覚めてないのか、軽くふらついた。気を付けながらリビングのダイニングテーブルにつく。木の背もたれの椅子は心地よい。壁際の棚に置かれた鉢植えにはピンク色の花が咲いていた。あの人はバルディアだと言っていたと思う。強そうな名前なのに可愛い花が咲くのが少し可笑しい。ピンク色のアスターが一輪挿しの花瓶に映える。花の色や匂いはやはりほっこりする。行儀が悪いと思いつつも、椅子に座って浮いた足を振る。少し楽しい。

あの人は最初から珈琲を多めに淹れていたらしく、あまり待つことなく、暖かな珈琲がやってくる。濃いブラウンのミルク少なめ、砂糖はたっぷり、好みのものだ。豆を挽くところからやっているから香りもよい。

「ありがとう、なのです」

「どういたしました。少し熱いから気を付けて」

あの人はいつも通りブラック。電子新聞でも呼んでいたのか、タブレットが脇に置かれている。今は読まずにゆっくりと珈琲の匂いを楽しんでゆっくりと口に含んだ。幸せそうな顔。お父さんの影響なのか、珈琲が好きなのは昔からで、顔が緩むのを見るのは、みている方も少しうれしくなる。その顔を眺めているとあの人が気付いた。

「顔に何かついてる？」

「い、いえ。なんでもない、のです……」

「改まってどうしたの？ なんだか顔も赤いし」

「な、何でもないのですっ！」

そう言っ、あれ？ と思う。別に改まってもいないし、いつも通りなんだけどな。

そう思っている間にもあの人は「そう？」と言って笑った。

「早く飲んだ方がいいよ。珈琲は冷める前が華だよ」

「なのです」

そう言われて珈琲を口に含む。甘いような苦いような、味。淹れられた、味。

——司令官さんに淹れるときに自分用にちよつとだけ作るときの、味。

「あれ……?」

「どうしたの?」

あの人はカップを置いて笑う。その顔はいつも通りの笑みだった。もう何年も見てきた顔。見間違えるはずもないはずだ。それこそ小さい時から一緒だったのだから。

「……なんでも、ないのです」

「そう? 疲れてるならちゃんと昼寝したら? 今度はちゃんとベッドでさ」

「なのです……」

あの人が珈琲を口に運ぶ。これから寝るなら珈琲じゃなくてココアにすればよかったかなあとか思いながらも一度珈琲をゆつくりと口に含んで。

——電は警報の音に一気に覚醒した。

薄い毛布を蹴飛ばすようにしてベッドから飛び出す。自分用の靴に足を乱暴に突っ込み、かかとを整えながら部屋から飛び出した。夢の面影を飛ばすように首を振る。そんなことを考えている余裕はない。

既にあきつ丸の廊下は非常灯に切り替わっていた。艦隊を代表する能力があることを示す金色の第一種旗艦技能章が赤い照明を乱反射させた。それを受けながら電は速足であきつ丸のドライデッキに向かう。

「よう、旗艦殿。仮眠中に悪いな」

「天龍さん……状況は?」

天龍が仮眠室から出てきた。顔を合わせるのは早朝哨戒業務以来だから大体3時間半ぶりだ。妙にリアルな夢を見たこともあり、どこか時間感覚が合わない。

「コードラズベリー、睦月が不審な推進音を捕らえた。睦月からのデータを見るに後20分もしないうちに接触するだろう。初霜と若葉が対潜装備で出撃命令。……どう出る？」

状況が動きだしている。必要な情報以外のものを捨て、フラットに持っていく。今は、それが必要だ。

「向こう側の代表との接触が最優先です。とりあえず防戦以外の攻撃指示は出せません。撃破は最終手段になるのです。今ほかには……」
「睦月と如月、後528の第二小隊と龍鳳が出てる。今龍鳳の九七艦攻が捕捉を試みてる。対潜戦闘に備えて残りを爆装へ換装中だから、しばらくは今上がってる偵察中の九七艦攻だけだな」

「換装した機が発艦できるのはいつごろになりそうなのですか？」
「ネクスト05」

天龍が即答。電は時刻を確認、現在時刻1342。航空機による攻撃ができるようになるまで25分程ある。528に配属になった若葉と初霜に出撃要請ということは、あきつ丸に張り付いている響とBерныйを前線に合流させるつもりだろう。あきつ丸が敵の雷撃危険域に入る前にことを済ませるつもりか。その間に状況が動くことも考えられる。

「天龍さん、503水雷戦隊は対艦装備で出撃待機を」

「その心は？」

「今捕捉している潜水艦だけならば睦月ちゃんたちだけでも十分に対応できます。潜水艦の応援が来ても龍鳳さんの艦載機で何とかかなりですが、水上艦が来た場合魚雷火力が不足する事態が想定されます。おそらく井矢崎少将も高峰大佐もそのような指示を出すと思います。が、即応打撃群旗艦の権限で先行待機を許可するのです。523航空戦隊にも対空戦支援を要請します」

「了解だ。本当にお前、月刀司令官に似てきたな」

「それは光栄なのです。……急いでください。既に状況は開始されて

いるのです」

そう言つてドライデツキに足を踏み入れる。広い鋼鉄の部屋の中は既に人が走り回る音と艀装用のキャニスターの稼働を示す回転灯の黄色い光で満ちていた。その灯りに照らされた天龍が敬礼。

「武運を祈るぜ、電。無茶するなよ」

「なのです！」

電は答礼を返しつつ、天龍と別れてドライデツキの奥に作られた部屋の入りを開けた。真つ白な部屋に白い肌を持つ少女が座っていた。その子が電を見て立ち上がる

「……来タネ」

「ヒメちゃん、大丈夫なのです？」

「ウン。始メヨウ。私ニハ、ヤラナイトイケナイ事ガアルカラ」

そう言つて頷く少女。

「艀装ヲ出シテモラツテイイ？」

「もちろんなのです、ヒメちゃん」

「私ハモウ北方棲姫ダヨ。深キ者ノ名前ハ捨テタカラ」

そう言つて少女——北方棲姫は笑つた。

「私ハ私ノ意志デ、人間ト、イナヅマト一緒ニ戦ウ。モウ私ハ深海棲艦デハナイ。私ハ、私トシテ戦ウ。ダカラ私ハモウ深海棲艦ノ“ヒメ”ジヤナイノ」

その気持ちを受けて、電も頷いた。

「……わかつたのです。じゃあ、……ほっぽちゃん、一緒に行けますか？」

「イナヅマトナラ、ドコヘデモ」

二人の少女が海へと向けて歩き出す。艀装のキャニスターが二人分の装備を取り出していく。

「こちらAKO4電、チェックイン」

「チェックイン了解、電と北方棲姫は出撃用意を続行、初霜と若葉の展開を優先」

高峰は無線用のインカムを操作しながらあきつ丸の戦^c闘管^d制所^cのスクリーンモニタを見上げた。その手前の管制卓でキーボードを叩いていた東郷がその一部に解析結果を出す。

「波形照合完了、潜水力級とヨ級の混成艦隊、数は3。このまま行けば睦月の交戦域に入るまであと8分」

「案外捕捉されるのが遅かったな」

高峰の呟きに東郷が頷く。

「もう少し手前から捕捉されるかと思ったけど、そんなことはなかったか」

「うまいことMI方面に引き寄せてくれたと信じよう。カズたちMI方面戦闘も昨日から始まっているらしいしな」

そう話しながらも音響データをもとに敵の位置修正。距離148, 300。船団の先頭を曳いている睦月までは5, 200を切ったところだ。ディスプレイに表示された海域のズームを下げる。今のところは敵増援の兆候はなし。

「初霜と若葉の発艦を確認。電と北方棲姫の出撃シーケンスを開始」
東郷からの報告を聞いて高峰が無線を開いた。

「こちらあきつ丸CDC、チャンネルオープン許可。状況を開始する。相手は潜水力級・ヨ級の混合艦隊、数は3、典型的なウルフバックだ。響、В е р н ы й、先行する睦月と如月に合流。対潜戦闘に備えろ。」

ただし最初は敵艦隊との交渉を行う為、自己防衛戦闘のみ許可する。積極的戦闘は許可できない。いいな？」

ПОНИМАНИЕ
《了解》

無線で似たような声が二つ即座に帰ってくる。ディスプレイ上の二つの光点が加速する。

「東郷より朝雲・山雲、配置転換だ。あきつ丸左舷側へ移ってくれ」

《了解、山雲、付いてきて！》

《わかりましたー》

「朝潮満潮は進路維持。右舷側の警戒を続行してくれ」

《了解しました！》

《ふん……！》

東郷が人知れず俺満潮になにか嫌われることしたっけと思いついていると指揮所のドアが開いた。

「やつほー。いよいよだね」

篠華・リーナ・ローレンベルク中佐がそう言って東郷の隣に腰掛ける。第二種待機から復帰して戦闘指揮に参加するらしい。彼女に割り当てられた管制卓に灯りが灯る。彼女がシートのヘッドレストに頭を一度押し付けてから放すとQRSプラグが接続されていた。あきつ丸に搭載された指揮管制システムが篠華を認識し自動で管理コードを割り当てた。指揮優先順位が東郷のすぐ上位に設定される。「戦闘開始でありますかな」

照明自体が落とされた戦闘指揮所にあきつ丸の姿が現れる。彼女は今航海艦橋にいるので、こちらではホログラムが対応する。高峰が彼女を一瞥、笑った。

「ヒメと電の交渉がうまくいかない場合は殲滅戦になる。交渉がうまくいけば潜水艦隊に道案内してもらおうさ」

再びドアの開閉。井矢崎少将が入ってくる。皆が敬礼。主任指揮官席に何のためらいもなく付く井矢崎の隣に高峰が立った。

「遅れてすまない。状況は整ってるかい？」

「これまでのところは滞りなく。戦闘指揮は少将が執られますか？」

「うん、そうだね。対潜戦闘は……篠華君、対応できるかい？」

「了解です。では委員長バックアップよろしく」

篠華がニヤリと笑ってキーボードに手を乗せた。

「高峰君は電ちゃんたちの交渉のサポートを」

「了解しました」

井矢崎が満足げに頷いて背筋を伸ばした。

「電、北方棲姫の発艦を許可。交渉を開始しよう」

「今回はなんだって？」

「オペレーション・ウォルシングムが発令された。俺たちは国連の人事管理サーバーを月まで吹っ飛ばした犯人の排除が目的だ。素早く、ばれることなく、正確に」

「まーた物騒な依頼だねえ」

そう言つて棒キャンディーの棒を上下させる女性。緑色の髪が揺れた。男はそれを見てまったくだ、と呟いた。

「基本は松の狙撃で対応してもらおう。スポッターは任せるぞ」

「ま、何とかなるんじゃない？」

「あと、桃も連れていけ。撤退の支援ぐらいにはなるだろうさ」

「あいあい、それで……どこで、誰を殺れればいい？」

そういう女の前に写真が一枚差し出された。データでの共有ではなく、印刷してあるあたり、万が一にも捕まることを想定しているのだろう。

「あれ……こいつは」

眉をひそめる女に男は無表情で告げる。

「場所は択捉経済特区クリリルスク市内だ。一瞬で終わらせろ……父親と同じように、な」

「……あんたがそれでいいというならそれでいい。あたし達はある家族であり、銃であり、剣であり、盾だ。役割は果たすさ」

そう言つて女が写真を返してきた。女が背を向ける。

「もう松には話してあるんだろう？ 準備に入る」

「頼むぞ、竹」

「おうよ」

そう言つて去つていく女。見送つて男は胸ポケットに写真を仕舞った。最後に一瞥した写真には大分幼さが残る少年の姿が写っていた。

オペレーション・ウォルシנגラムが始動する。

「なんの因果かは知らないが、とても残念だよ、合田正一郎」

如月は目を閉じたまま隣を進む睦月を見て、とても不安そうだった。状況開始が宣言されてからずっとそのままの状態である。水中を進む音波を捕らえ続けようとしているのだ。

波の上は平穏そのもののように見える。波は1メートルもない穏やかなものだ。それでも視界は上下する。その合間に浮上する潜望鏡を捜しながら如月は主機の出力を固定一定の速度と方位を保つ。睦月の音響索敵を邪魔しないためだ。

『Narwett alse gadi e caru dem es
time acsin fau malke zel dem……:Z
el calpe hale?』

耳慣れない響きの無線が飛ぶ。幼い声——北方棲姫のものだ。ワントンポ遅れて翻訳機^{デコーダー}が反応する。我々には攻撃する意志はない。無線に応答してください。

北方棲姫の呼びかけが開始されて早数分。その間にも敵潜水艦隊は着々と近づいてきていた。向こうは停船している状況だが、こちらは動き続けている。もう間もなく敵潜水艦隊と正対する。横腹は晒さない。これで向こうもこちらが既に潜水艦隊の影を捕捉済であることに気が付いているだろう。

「進路修正右舷一点、3秒後」

睦月が淡々と進路を指示していく。如月は睦月を見ながら速力を修正、用意を進めていく。進路変更。これで完全に正対した。原速赤五。減速。

『Nerwett alse gadi e t gutel s
em. Shut e yalaine reo grandie
nafistacsin vos dam zeavom fl a
mius』

我々は戦闘を望まない。停戦に向けた交渉の機会を要求します。

翻訳機がどこか不自然な訳文を掲げる。それを聞きながら如月は祈った。このまま交渉まで持ち込めることを祈る。そして同時に思

うのだ。そこまで楽な展開にはならないだろうことも。

——そして、その予感が的中する。

「圧搾空気の排出音！ 数3！ 敵、魚雷発射管を開門したようです！」

睦月が目を閉じたままそう言った。かなり切羽詰まった状況だが、無線の奥、司令部から響く女性の声はかなり明るい気楽なものだった。

『あЯ ВИЖУ あВАШУ いТОЧКУ 了解、魚雷が発射されるまでそのまま警戒態勢を維持。向こうもパフオーマンズの可能性があるよ』

篠華||リーナ・ローレンベルク中佐の声は努めて穏やかだった。戦闘直前ではないような静けさだ。

『とりあえず相手が魚雷を撃つて来たら全部撃ち落としてみせようか』

篠華があっけらかんととんでもないことを口走った。如月が驚いて声を上げる。

「あの……当たる危険がない物もですか……?」

『うん、撃つてきたの全部。遠いのは龍鳳の偵察機の機銃で何とかする。——うん、井矢崎少将も乗り気だ。やるよ。ムーツィカ、あなたのソナーの威力を見せてあげな。相手が二度と魚雷で攻撃しようなんて思わせないほどに、徹底的に叩いて見せよう』

「ムーツィカって睦月のことですか?」

睦月がどこか困惑したように言えば、無線の奥が笑う。

『ムーニャ、ムーツィカ、キーニャ、どれがいい?』

「どれがどれだかわかんないのね……」

『フン、ロシアより愛を込めてつてね。この海域にはちようどいかなって思ったんだけど。まあいいかな……そろそろ来るぞ、理想郷ARCADIAN ネットワーク・リンクスタート、直接音声入力システムD を使用した指揮に変更する。以降、命令伝達時の返答及び復唱は求められない限り省略する。視界へのオーバーラップを開始』

篠華がそう言った。スイッチがバチンと音を立てて切り替わったように錯覚する。感情が落ちた、冷徹な、声。視界にフィルターがかかるように一瞬チラつき、すぐにクリア視界がクリアになる。睦月が聞いていた風景がそのまま視界にリンクする。睦月がアップロードした音響データをリアルタイムでフィードバックしているらしい。遠くにB1からB3までのマーカーがある。——深海棲艦の潜水艦に割り振られたマーカーだ。黄色のマーカーが、赤色に変わる。

「魚雷推進音確認、数24条！」

『了解、対象を右舷側からT1、T24までマーキング、トラッキンググスタート。あきつ丸進路そのまま赤黒無し。如月、機関黒15、前方20まで前進しT12へ砲撃開始。睦月、機関維持14秒後よりT13へ砲撃用意。時計合わせ、今』

如月が一気に前に飛び出していく。睦月は対空砲の安全装置を切る。如月が先行し発砲を開始。

『Верный、機関黒10、転進左3点、24秒後、起爆深度10で機雷投下。響、機関黒10、転進右3点、32秒後に前方をT9が通過する。撃破しろ。T5からT7、T15、T16は東郷駈中佐へ管轄を移譲』

冷徹な声が高速で艦隊に指示を出す。如月の120メートルほど前方で水柱。T13のマーカーが消える。撃破だ。

『如月、機関そのまま転進左一点、B艦隊の炙り出しを行おう』

戦況が静かに、かつ目まぐるしく更新されていく。

「朝潮、T7が左側を走るぞ、対空砲で対処！」
『了解しました！』

あきつ丸のCDCでは暗闇の中でキーを叩く音と無線の声が交錯する。モニターに表示された周囲の海図には雷跡が表示されている。優先度別に色分けされたマーカーが走る。

「満潮T6とT5いけるか!？」

『舐めたこといつてるんじゃないわよ』

無線の奥の頼もしい返答を聞きつつ東郷駈中佐は視界を切り替えた。敵艦隊は魚雷の射角をかなり広げている。躲すのは容易いが今回は全部撃ち落とせときているとなると射角が広いのはなかなか骨が折れそうだ。

「山雲T16、朝雲T17、射程まであと5秒！」

『頑張るわねー』

「まっかせなさいー！」

次々に敵魚雷の航跡が途切れていく。ここまで戦況が入り組んでもソナーの精度が落ちない。新型ソナーと複数のソナーを同時にリンクし整理しているせいだろうか。

『あっ!?!』

「満潮どうした!？」

『T6が後ろに抜けた! 追いきれない!』

満潮の焦った声が響く。T6のタグが振られた魚雷の進路予測が伸び続けている。いくら駆逐艦が瞬足とはいえ、追いかけるのは難しいだろう。

「こちらで対処するよ。満潮君を下げさせてくれる?」

間髪入れずに井矢崎が声をかけた。

「満潮、龍鳳の艦載機で対処する。哨戒位置に戻れ」

『……了解っ!』

「そういうこともある。悔しいのはわかるが今は堪えろよ」
『わかってるわよっ!』

悔しそうな声を聞きながら東郷は後ろを振り向いた。井矢崎が頷く。

「龍鳳、七番機のコントロールを預かる。アイハブコントロール」

『七番機ユーハブコントロールですっ!』

龍鳳が返答をすると同時、あきつ丸の上空で旋回していた九七艦攻が一気ロールを打って反転する。海面へ向けて急速に高度を下げていくのがモニターに表示される。

「高峰君、二番機を預けても? T1の撃破を」

「了解しました。龍鳳二番機アイハブコントロール」

「ユーハブ」

井矢崎から高峰に一機ハンドオフ。二番機が急旋回して右舷側後方にすっ飛んでいく。魚雷を追いかける形で撃破する算段だろう。井矢崎はそれを見つつ七番機を左旋回。フラップは上げ位置のまま、速度を上げて高度を落とす。

海面すぐ上を飛ぶ七番機の機銃が反応する。発砲。爆炎。射撃の間は1秒以上、2秒未満。毎分900発程度だから大体60発程度が吐きだされただろうか。それが敵の魚雷を叩き切った。水柱に突っ込む前に右ロールで上昇する。

「これで全部かな?」

井矢崎がモニターを確認すると魚雷を示すナンバリングが全て消えていた。24条をすべて撃破した。戦闘開始から3分、なかなかの速度だろう。

「電ちゃん、もう一度交渉要求を出して」

『了解なのです。ほっぽちゃん』

『ワカッタ』

高峰の声に無線が応答する。その直後に広域無線に感が入る。北方棲姫の声だ。

『Nerwett alse gadiet guttels dem. Shutte yalaine reograndie nafistacsin vosdam zearvom flammis』

戦闘前の通告と全く同じ文言。だが、意味合いは大きく変わるはずだ。『戦いたくない』という言葉の意味が変わるのだ。敵と向き合ってから戦闘をしたくないとわざわざ伝える意味。それは大まかに2つの意味があるといえる。

一つは本当に相手との和解を申し出ることにより双方の被害を最小限に抑えることを目的とする場合。もう一つが手元に相手を圧倒するだけの兵力がない場合——すなわち、時間稼ぎだ。

敵は北方棲姫による呼びかけを後者と理解した。だからこそ、呼びかけのすぐあと、時間稼ぎをさせないうちに一斉雷撃に打って出た。ここで沈めることができれば御の字、そこまで行かなくても陣形を崩せば一隻ずつ撃破することができると。そう思ったのだろう。——

——そうして、その読みが違ったことに気がついたはずだ。

わざわざ避けるだけで十分な魚雷を全弾撃ち落としたのはパフォーマンスに過ぎない。水中を進む魚雷を全て撃ち落として止めるようなことができるなら、それよりも凶体が大きく、遅い潜水艦がどうなるかは予想することは容易い。

明らかに相手を弄れるだけの戦力をちらつかせ『交渉をしよう』と持ちかける。その裏には当然、交渉に応じなければ力づくで押し通るという意志が潜む。

『J o l n i e r e z e m t . N e r w e t t a l s e g a d i e e t g u t e l s d e m . S h u t e y a l a i n e r e o g r a n d i e n a f i s t a c s i n v o s d a m z e a v o m f l a m i u s 』

北方棲姫が同じ内容を口返す。相手の喉元に刃を押し当て、死ぬか服従かを迫るような状況だ。

高峰はそれを指揮している。それを迫れと電や北方棲姫に指示を出している。高峰からは電たちの顔は見えない。無線の奥で今彼女たちはどんな表情をしているのだろうか。

「呼びかけを続k……」

『Z e i z e o e t h u r a n z e m ! 』

いきなり金切り声が割り込んだ。司令部に緊張が走る。背筋が一

瞬で冷える。翻訳機が反応した。訳は『あなたは売国奴である』だった。

『A l s e n e r w e t t g u i s f a u w n f a u z e l
! F a u H u s b a n d E d i e ——— G u e l u t e
G u e s t r e s s e !』

ほぼ断末魔のような壮絶な声を翻訳機が文字に変換した。我々はあなたがたには屈しない。Husband Edieのために。深海棲艦突撃せよ。翻訳機の特長として平坦な文体になったが、そんな冷静な言葉ではないのだろう。

悩む余裕はなかった。隊内無線の周波数に切り替える。

「電ちゃん、交渉決裂だ。進路そのままであきつ丸の後ろに隠れてて。

———少将、プランデルタへの移行を進言します」

「わかった。それじゃ、殲滅戦の開始かな。プランデルタへ移行。B2以外の敵を排除、B2には水先案内人になってもらおう、篠華君」
「如月、爆雷投下、今」

一隻を残してあつという間に反応が途切れる。同時にB2とナンバリングされたマーカーが浮上し、速度を上げてくる。マーカーが深度ゼロをしめた。完全浮上。速度を上げての突撃。

「あーらら、自棄の突撃体制かなこれ」

篠華がつまらなさそうにそう言った。井矢崎も苦笑する。

「敵は賢いに限る。非効率的な攻撃だよねえ、仕方ない」

井矢崎がそう言って軽く目を閉じる。艦攻が一機だけB2のマーカーに向かっていく。管理コードCVW—ZH03—103。シリアルナンバTBP97—193。龍鳳所属の九七艦攻隊三番機だ。

『B2、攻撃態勢！』

「あー、みんな手を出さなくてもいいよ」

篠華がラフにそう言った。低空で速度を上げる艦攻がB2の姿を捕らえた。必死な形相で必死に突撃しようと速度を上げている。

『M u s e H e l e s e a s a e n e s e a d n e r w e t t
m e z e a d i n z u l e l u s e !』

無線ががなる。翻訳機が反応。人間程度が我々を馬鹿にしないで

ください。

それを認めても井矢崎は表情を変えなかった。右の人差し指でひじ掛けを軽くトンと叩く。画面の端にRECOMMEND | DRP
／ CVW—ZH03—103と表示されると同時に、三番機の懸架索が切り離され、吊っていた魚雷が機体を離れた。

『G u e l d f a u S p e n z a , H e l e s e a——』
B2、^{ロスト}消失。

「敵艦隊の沈黙を確認。周囲に所属不明艦の存在なし。深海棲艦の反応、認められず」

淡々と東郷が告げていく。井矢崎がため息をついた。

「戦闘終了を宣言。第二種警戒態勢に復帰。高峰君、指揮を頼めるかい?」

「了解しました。シフトは通常通りに復旧ですね?」

「頼むよ」

井矢崎が席を立つ、そのタイミングで北方棲姫の眩きが無線に乗った。

『……ハズバンド・エディ』

「ほっぽちゃん、聞き覚えが?」

『ハワイデ太平洋ヲ仕切ツテル深海棲艦。太平洋デ一番偉イ』

その答えに井矢崎は笑った。

「つまり、太平洋のボスがこっちにいる可能性があるってことかな」

『ウウン、ハズバンド・エディハ、ハワイカラ動ケナイ。多分ソノ部下ガ北ニイル。ハズバンド・エディノ直接ノ部下ヲ説得スルノハ、多分難シイ』

『それでも、やるしかないのです』

電が割り込んだ。それを聞いた高峰が笑みを浮かべた。

「そうだな。やるしかない。進もう、電ちゃん」

『なのです』

井矢崎が背を向けて指揮所を出る。高峰たちが敬礼で見送る。

溜息をついて高峰は指揮卓の椅子に腰かけた。井矢崎がさつきまで座っていた席のため、まだ熱を持っている。

「大鳳、龍鳳と交代で哨戒に出てくれ。大鳳のラインナップ終了後に龍鳳は艦載機を回収。交渉チームから順次着艦。付近哨戒には528を残す。睦月、如月、一度戻って来てほしい」

『了解しました！』

一通りの指示を出して、篠華にアイサインを出す。今の業務は東郷と高峰で処理できる。交代要員にはしっかりと休んでもらわなければならない。

「……そう楽には進まんか」

「お疲れか、高峰」

「まあな。……無線は切ってるな？」

「ああ」

東郷の答えに高峰は疲れた笑みを浮かべてからこめかみを揉んだ。

「北方棲姫の後光を借りある程度までは潜り込めれば楽だと、軽く期待はしていたが、取り付く島もなくいきなり玉砕されると、前途多難だ。棍棒外交ここに極まれり。印象最悪での交渉になるぞ」

「だが、ほかにやりようがないのは確かだろう。相手がどういうカードを持っているのかすらまだ不明瞭なんだろう？」

東郷の言葉に高峰が天井を仰ぐ。

「交渉プランは何パターンも用意してきたが、向こうの状況や文化がわからない以上、それが役立つかどうかすら判断がつかねえよ」

「お前が弱気とは珍しいな」

「相手の状況がわかってないのに交渉はできないからな。圧倒的情報不足じゃ、勝てる戦争も勝てんさ」

今回高峰がアリューシャン方面の攻略に参加しているのには当然理由がある。

深海棲艦との交渉において、国連海軍側、即ち人類側に有利な形で交渉を終えるための情報戦担当のブレインとしての役割だ。北方棲姫と電を表に出した交渉団のオブザーバーとして、国連が切ることができるカードを吟味し、相手との交渉を有利に進めるための参謀役として、高峰が同行している。

「きついのか」

「そりやあ、この交渉が世界を変える可能性を多分に含む訳だしな。そんな重大なことを電ちゃんたちに預けなきゃいけないことが不甲斐なくて内心腸が煮えくり返ってる」

そのオーバーな言い草に東郷は笑いかけ、表情を仕舞った。笑い飛ばすにはあまりに言葉が重かった。

「だが、電ちゃんたちが最前線で命張ってるのに、後方の俺が弱音を吐くわけにはいくまい。ここで弱音を吐いたらカズに飛び蹴りされる」
今度こそ東郷は嘖き出した。航暉は電絡みだと見境がなくなるからそれぐらいはしてきそうだ。東郷は努めて明るく口を開いた。

「精々蹴られない程度には頑張らないとな、そろそろその電ちゃんたちの着艦だ。管制はどっちが？」

「頼む」

「了解、アイハブ」

「ユーハブ」

東郷が管制を開始するのを確認して高峰は視線を落とした。個人コンソールの画面でチカチカとウィンドウが瞬いているのを見る。翻訳機が訳の結果を通知していた。

地獄に落ちろ、人間。

井矢崎がB2を沈める直前にB2が放った言葉の翻訳だ。文字通りの断末魔。自らを沈めていくそれを呪い、恨む言葉。血のような泥のような怨嗟に満ちた言葉を高峰たちは真正面から被る。

それを見て、高峰はなぜか口角が薄く吊りあがるのを感じた。自嘲の笑みなのかなんなのか、高峰自身には判断が付かなかった。

ああ、俺でよければ喜んで落ちてやろうとも。それがあの子たちを救うことになるのなら。

「……逃げて、たまるか」

誰にも聞こえないように、口の中だけで呟いて、翻訳機の画面を消し去った。

「なに拗ねてるんだ、満潮」

「うつさい」

艦娘の艦装キャニスターが整然と並ぶあきつ丸のドライデツキを見下ろすキャットウォーク。その柵に寄り掛かって顎を乗せる満潮を見つけた東郷が横に並んだ。

「拗ねてなんか……」

「なら自責の念か？ 律儀だな」

「ちがつ……」

満潮がそう言って東郷の方を勢いよく振り返った。その先で東郷がどこか微笑んでいるのを見て、半ばからかい交じりと知った満潮は顔を真っ赤にしながら下唇を噛み締めた。

「そんないじらしい顔をしなくてもいいぞ満潮。ミスはだれにでもあるし、そもそも取り逃したT6の危険域に他の艦はいなかった。落とす必要があったのはただのパフォーマンスのためだ。ミスは戦況に大きく影響するようなものじゃない」

「それでも私は撃てと言われたものを撃てなかった。それは事実よ。それには憐憫も同情も必要はないわ。それは」

「お前への侮辱にあたる……当然だな。だが、それを引きずられるとこちらも困るんだ」

東郷はそう言って笑って彼女の頭に手を乗せた。

「たしかにお前はミスをした。それは紛れもない事実だ。一瞬朝潮の動きに気を取られた。その間にT6は朝潮が撃破したT7の衝撃波の影響を受けて射線が僅かに南へずれた。それに焦ったお前は対空砲の弾を1マガジン分使い切り、リロードの間にT6が後ろに抜けた。……だが、お前も俺も、今更それを責めてなんになる？ ミスは戦況に大きく影響するようなものじゃない。ただ、お前がそのまま落ち込んでると戦況に大きく関わる可能性がある。だから言っている

んだ」

口調は厳しいが声色は幾分明るいものだった。その姿勢のまま黙って聞いていた満潮がハツとしたような顔をして頭に乗っていた手を払い退ける。

「だ、だからそんなこと気にしてないって言ってるでしょ!？」

「拗ねてるとか自責の念を抱いているとかは言ったが、気にしてるとは言っていないぞ?」

「揚げ足をとるなつ、東郷中佐つ!」

満潮と東郷にはかなりの身長差があるため、必然的に満潮は東郷を上目遣いに睨むことになる。その仕草を見て東郷はどこか愛おしさを覚えつつもその笑みを隠した。

「まだ問題の海域まではかなりの時間がある。それまでにはいつもの調子に戻しておけよ」

「なにそれ意味わかんない! 今私がいつもの調子じゃないみたいじゃないの!」

「いつもの調子じゃないだろう。いつもの調子なら、俺が声をかけるまで俺の接近に気が付かないはずがない」

「……あーもーっ! うるさいうるさいっ! ほっといてよ!」

それに肩を竦めて答えた東郷は踵を返す。

「次の哨戒任務は明朝0300時の予定だ。それまでは休んでおけよ」

「了解っ!」

勢いよく答えが帰ってくる。半ばヤケクソらしい。笑いかみ殺してキャットウォークの出口を過ぎて足を止める。

「……それで、覗き見が趣味だとは知らなかったんですけどね、井矢崎少将。あと景鶴」

「いや? なかなか面白いものが見れたなあと思ってね。いいんじゃない? 部下思いで」

「私が部下思いだというなら世の中の大半は聖人君子の集まりになりますよ、少将?」

その言いぐさが面白かったのか井矢崎が笑う。その間にどこか不満そうな顔をした景鶴が東郷に近づいた。

「満潮ちゃんにお熱ですか？ 提督さん？」

「あんな子に欲情してるように見えるか？ 外見年齢で言えば父親と娘ぐらい離れているだろうが」

「ふーん。そーですかそーですか」

どこか膨れた顔をしながらも景鶴は隻眼で東郷を睨む。そして数瞬の間があいて、東郷の脛を蹴りつけた。

「でっ!?」

「小っちゃい子撫でてご満悦のロリコン中佐殿の嘘なんて御見通しですよーだ」

「——ッ！ おーまーえーなー！」

「まあまあ駄クン、そこまですておこうよ。傍目に見たら景鶴の意見も正しいよ?」

「つまり井矢崎少将からは私が児童性愛者に見えてるってことですか?」

「おや、そこまではいつてないよ」

ムツとしたように東郷が眉をひそめると気にもしてないようにケラケラと笑う井矢崎。その顔が、一瞬で引き締められた。

「先ほど、深海棲艦由来と思われる電波の存在を確認した。場所は北方棲姫の証言通りだったよ。アリューシャン列島フォックス諸島だ」

「……アクタン島、ですか」

「北方棲姫がアツツ・キスカ方面に飛ばされる前の古巣だそうだね。そこにアリューシャン方面を取り仕切る部隊がある」

それを聞いて東郷は眉をひそめた。

「フォックス諸島は南北アメリカ方面隊の管轄域ですね」

「ああ、これで南北アメリカ方面隊の要求を無視できなくなった。戦艦ネヴァダを旗艦とする向こうの応援部隊が既に出港したらしい」

「それで、どうするのですか?」

「うん? どうもしないよ。北方棲姫の交渉を見届けて、うまくいけばそのまま北方棲姫が相手のトップになってもらって交渉開始。行

かなければ強行突破して北方棲姫、ひいては国連に友好的な個体のみを残して殲滅する。それだけだ」

「……どちらが侵略者かわかったものじゃないですね」

「正義を急速に広めようとすれば肅清か強制収容所送りになるのは世の常だよ、駄クン。多種多様な正義を無視して一つの正義を急速に広げるには武力で無理矢理に押し広げるしかない。太古からの歴史を紐解けばそれしかないのがよくわかる」

「そして、その正義を押し付ける先には南北アメリカ方面隊も含まれる、ということですか？」

東郷の声に井矢崎は笑った。

「いつも私はそうならないことを切に願っているよ。……だが、善意だけに頼って生き残れるほどの世界が甘くないことはわかっている。正義の押し付けでもなく、相手の正義の押し付けにも付き合えない。それらをする余裕はない。だから駄クン……景鶴を前線に出すよ」

「景鶴が切り札になり得る、と？」

「まあね、君が育てた艦だ。十二分だと思ってるんだよ？ それに、切り札は切るためにあるんだ。適切な時に、適切な手順でね。切り札を切らずに死にたくはないだろう？」

「しかし」

「提督さんは私のこと信用してないの？」

どこか陰険な光が混じる瞳で景鶴は東郷を睨んだ。一瞬東郷が怯む。

「トラックの時だって生き残って見せた。提督さんはそれでも信頼できない？」

それに答えることは東郷にはできない。——それをわかって、井矢崎は、景鶴の前でその話題を出してきた。奥歯を噛み締める。「……なんで黙ってるのよ」

「信頼してない訳じゃないさ」

そう言った言葉が腐り落ちていくのを感じる。心からの言葉のはずだが、届かない。

「——そんな甘言を吐くくらいならずつとヴェルちゃんとか満潮ちゃんと駆逐隊でイチャイチャしてればいいのよこのロリコン提督っ！」

そう言ってもう一度脛を蹴って去っていく景鶴。痛みにも悶絶している。どこか笑い声が上がって降ってきた。

「ごめんごめん、まさかここまで怒らせることになるとは思ってなかったよ」

「……少将」

「そんな恨みがましい目で見られても困る」

声の裏に普段は混じらない色が混じる。井矢崎の顔を、東郷は睨んだ。

「それが私のかかわったファークヴニル生化のことなら、感謝してます。ですが私は、貴方を無条件で信じられるほど、純粹ではいられなかった」

井矢崎は東郷の眼を見ても、涼しい顔をしている。

「それは僥倖かな。無条件の信頼とは盲信だからね。それで死なれちゃこちらにも困る。それで？ 駄クンがそこまで怒るようなことを私はしたかな？」

「正義の押し付けでもなく、相手の正義の押し付けにも付き合わないと貴方はおっしゃった。それを可能にするとしたら、交渉、もしくは何らかの取引が必要になります。しかし、コミュニケーションがとれることが最近明らかになったばかりで、相手の文化などの情報がない深海棲艦相手ではどれが切り札かの判別はつかないはず」

東郷の脳裏を一人の同期が過る。軍人でありながら、外交官としての役割をになう軍事アタッシェ。ネゴシエーターたる北方棲姫と電のサポートを担う同期は、どの交渉材料が有効かすら判別がつかないと言っでなかつたか。

「切り札は切るためにあり、適切な時に適切な手順で切る。そして貴方はその切り札として景鶴をあげた。艦装のマツチングが完全ではなく、左腕に震えと痛みが残る状態の景鶴を切り札に据えようとしている」

つまり井矢崎莞爾少将の言う切り札は、深海棲艦のための切り札ではない。

「少将、貴方が今切ろうとしているカードは、誰に向けてのカードですか？ 景鶴が切り札となりうる相手とは、いったい誰ですか？」

東郷の声を聞いて井矢崎は冷ややかに笑った。そして答えない。

「貴方は帝政アメリカともコネクションがある。だからこそ、西部太平洋の指揮官ながら北方海域のアリユーション方面の指揮を任せられました。それはこの作戦に帝政アメリカとの交渉という要素が発生することが予想され、それを優位に進めるために駐在武官時代の能力とコネクションを期待されたからにほかなりません。そして、ファークヴニル生化、六連星造船むつらぼしが何をしようとしてきたかを貴方は覚えておらずだ。なにせその暗部を抉りだし、私の目の前でファークヴニル生化を事実上壊滅させたのは貴方だ。そしてその残った勢力をまとめて消し去った……」

「『白夜の鐘』が鳴ることを事前に知っていた、かな？ それは否定しないよ。さて、そこから君は今どんな考察を導き出したのかな？」

「井矢崎少将、貴方は……貴方はアクタンで『白夜の鐘』の再現をしようとしているではありませんか」

それを聞いても井矢崎はなんの反応も示さなかった。ただ冷ややかな笑みを保持し続けるだけだった。

「君の考察はそこまでかい？ もしくは、それ以上は話したくもないかな？」

井矢崎はそう言って凍てついた笑みを深める。東郷は答えなかった。

「君が信じるかどうかは勝手だけどね、私は日本、ひいては国連の利益になるように行動しているつもりだよ。我々は兵士だ。人間世界を構成する生命、土地、経済、それらすべてを守り、この世界を構成する人々が利潤を最大化するに足るインフラストラクチャーを守る衛兵だ。侵入してくる外敵は深海棲艦であり、それを探知し討伐するための猟犬として、矛として、水上用自律駆動兵装が配備されている。わかるかな？ 我々が戦うのは深海棲艦がいるからではない。深海

棲艦が人間の使用可能な土地を圧迫し、経済の発展を妨げているからだよ。それを排除する必要があるから我々のような国連海軍が必要になるんだ」

そう言つて井矢崎は後ろの壁に背を預け、腕を組んだ。

「では私から質問だ。白夜の鐘を再現して、人類は今何を得る？」

フアーブニルの遺産である景鶴を抹消するとして、その遺産に関わつた君を葬るためとして、なぜ今更戦術核を持ちだす必要がある？

約束された勝利の剣となりうる北方棲姫と電ちゃんを犠牲にして、強大な戦力を削つてまで焼き払わねばならない不都合な真実がここに存在するとでも言うのかい？ そんなものは存在しない。したがつて私が白夜の鐘の再現を目論んでいると勘ぐることは見当違いだね。最も」

君がこの言葉を信じてても信じなくても私には関係ないけどさ、と井矢崎は続けた。東郷はきつく拳を作った。

「だが、貴方は景鶴を交渉材料に何かを引き出そうとしている。私の元部下に値札をつけ、売りさばこうとしている」

「そうだね、その通りだ」

井矢崎は悪ぶることもなくそういった。なにを当然のことを、と言いたげな表情だ。

「感情的にならないほうがいいよ、駄クン。人は様々なものに価値を見出した。それを人は貨幣という共通のバロメーターで比較、運用する——経済の根源だよ。それは自分以外の人間も例外じゃない。みんな労働が生み出した価値の対価として給料をもらい生きている。生命保険はある一定期間にある個人がが死ぬリスクを換算し、その人がその期間内に生きるか死ぬかを賭けあつたのが始まりだ。私達の世界はそうやっていろんなものに値札をつけることで成り立っているんだよ。それには誰だろうが例外はない。景鶴も君も、むしろん、私もだ。それには必ずリスクとベネフィットが存在する。そしてリスクがベネフィットより大きければ、切り捨てられる」

「即ち、景鶴がリスクだと？」

「周囲の状況によつてはそうなるっていう話さ。そうならないように

状況を整えるように全力を尽くしているけどね。それでも、リスクの方が上回る時は……わかるね？」

井矢崎がそう言つて東郷との距離を詰める。超至近距離で互いの視線が交錯する。

「僕は言つたはずだよ。私は日本、ひいては国連の利益になるように行動しているつもりだ。だから現状私の部下である景鶴を無駄にするつもりはさらさらない。リアリズムの塊であるべき軍に所属する君も、極度にリスクになる対象を切り捨てる覚悟はしておくべきだ。部下思いであることは時に軍人であることを妨げるぞ」

そう口にして井矢崎は少し間を開けた。

「——軍人たれ、東郷駈国連海軍中佐。君は既に血に塗れた衛兵だ」

「言われなくともわかつてますよ、少将」

その答えを聞いて満足そうに笑つた井矢崎が東郷の肩を叩いてすり抜ける。

「——ただし」

東郷は背後の足跡が止まる気配を感じる。

「貴方が値踏みしてるその子の価値はそんなところがないことをお忘れなく。井矢崎少将」

そう言つて東郷は歩き出す。振り向くことはしなかった。

「あれ、正ちゃん外出？」

択捉経済特区内、国連海軍極東方面隊クリリスク基地。正門に向かう小柄な影を見つけ、那珂は声をかけた。

「どうもまだ出撃要請は出ないみたいなんで、少し」

小柄な影はそう言うのと右手を軽く振った。小ぶりな花束が握られている。

「そつか、合田ちゆ……大将のお墓参りかあ」

「きつと父は以前のように中将って呼んでほしいと思いますよ」

どこか寂しそうにそう言うって制帽を目深にかぶる少年、合田正一郎少佐を見て、那珂は目を細めた。

「那珂さんは基地内哨戒ですか？」

「もー、那珂ちゃんって呼んでって言うてるでしょー？ まあ、那珂ちゃん今日は艀装のメンテナンスで非番なのでうろついでるだけ。まあ、基地内1500人のファンのみんなとの交流タイムってところかな？」

「基地内に1500人もいない気がしますけど……」

「正ちゃんは頭も態度も硬いなあ、リラックス、リラックス！」

那珂はそう言うって抱きついた。黒い防水外套の襟首から白い詰襟が覗いている。その体は想像以上に華奢に感じた。

「や、やめてくださいよ……!？」

「へへーん。普段は阿武隈ちゃんがべったりだからこんなことできないしねー」

「そこまでべったりじゃないと思いますけど……それに、僕に遠慮してか、父の殉職した場所に行くときはついて来ないので……」

「もしかして、毎日行ってるの？」

「こういうときじゃないと、行けませんから」

そう言った彼の目線が下がる。それを見て那珂はばれないように唇を噛んだ。

この子は無理をしている。曇った心を必死に押し隠そうとしてい

る。そしてそれが負担になっている。阿武隈もみんな、それを知っているがらどうすることもできないのだろう。正一郎はそれを父に会いに行くという形で向き合おうとし、阿武隈もそれを応援している。それはきつと正しいし正攻法だ。ただしそれで解決するには時間がかかるのだ。そしてその間ずっと心が曇るのをごまかしては、疲れ切ってしまう。

一瞬でもその曇った心を晴らさねばいけない。それが解決にならなくても、やらなきゃいけない。

そしてそれが^{アイドル}那珂にはできる。

「ねえ正ちゃん、一年くらい前にあったときのこと覚えてる？」

声のトーンを上げて声をかける。正一郎は一瞬考え込むような仕草を見せた。

「確か、歌を歌ってくれた……」

「そうそうそれそれ。あれ実は、合田中将、キミのお父さんが教えてくれたんだよ」

そういつて、息を吸った。目を閉じて緩やかなメロディーを思い出す。

明けない夜がないことを 僕らは知っているけれど
暮れない昼がないことも 僕らはすでに知っていて

だれかが歩いた道のりを ただ辿るのは嫌なのに
ひとりでは歩けもしない 自分がたとえいやになっても
それでもきつと世界は周り それでもきつと夜は明けて
笑って迎える朝日があると 僕らは今も信じてる

夢を追って傷ついて それでも願う愚かな役者
明日をめざし涙流して 今日を笑顔で締めくくろうか
泣いてもいいよ心行くまで でも最後は笑ってね
笑顔で迎える明日があると 僕は信じているから

そう歌って目を開ける。

「キミはすごい人だし、いろいろ責任とか背負っちゃってるけど、無理して背負わなくてもいいんだよ」

「……ありがとうございます。でも、大丈夫です」

「本当に？」

「本当です」

そう言ってそっと那珂の手を解いた。

「歌、上手になった気がします」

「そう?? 那珂ちゃんうれしいなあ」

「また、聞かせてくれますか？」

「もちろん! 今度ライブやろうと思うから見に来てね!」

「ぜひ」

そう言って笑って正一郎は敬礼をした。那珂も少しラフに答礼。

「それでは、また」

「うん、正ちゃんも気をつけて」

「はい、那珂さんも」

「だから那珂ちゃんだってば」

笑って踵を返す正一郎。その手にあるのは、花束にするにはいささか珍しい花だった。

「マリーゴールド……?」

なぜか胸騒ぎを覚える那珂だったが、声をかけるか悩むうちに、正一郎は軍の敷地から出て行ってしまっていた。

「……まさか自分が狙われてるとは思っていないみたいね」

「護衛もつけずに毎日父親の殉職地に足を運ぶっていうのは、真面目だけど迂闊だろうねえ」

「それでも、あの子は国連の人事サーバーを吹き飛ばした子よ。……
もしかしたら、死にたいのかしらね」

「だから、わざと一人で毎日同じ時間に同じルートで歩いてるって？

まあ、いいけどさ。護衛がいようといまいと、やることは変わらな
い、違う？」

「……その通りです。狙撃ポイントに移動します。竹、援護を」

「了解。それじゃ」

「オペレーション・ウォルシングラムを開始——合田正一郎少佐
を殺害します」

マリーゴールドの花束を道の脇に置かれたガラスの小瓶に差す。中に溜まっていた緑色の水はグレーチングの向こうの排水溝に流した。代わりの水を水筒から移し、マリーゴールドをそこに差す。

夏場だというのにクリリスクは少々肌寒い。夏用の第二種軍装の生地が薄めであるせいもあり、外套がなければ少し涼しすぎる。開襟のトラッドなデザインの外套はあまりにシックで、幼さが大分残る彼の姿には少々不似合だった。どうしてもコスプレチックになってしまい、彼自身は少々気にいらなかった。それでも軍の正式装備で軍装時にはこれ以外の使用が禁じられるのだから仕方がない。

マリーゴールドの前で彼は小さく手をわせる。周囲は元からあまり人気のないところのせいも、静まり返っていた。薄いスモッグ越しの弱い太陽光と、それによつて軽い陰影を残す建造中に廃棄された高層ビル群だけが彼を見ていた。合わせた手を解いて、ゆっくりと彼は目を開ける。

「父さんもまさか、こんなところで、死ぬなんて思つてなかったでしょ。なんなら、もつと景色の良い場所だったらよかつたのね。こんな造成途中で廃棄された高層ビル群の中なんかじゃなくてさ」

背を丸めてしゃがみ込んだまま、彼は優しくそう嘯いた。そう言つてからなにを話しているのだろうかとも思つたのか、どこか自嘲気味の笑みを浮かべた。

「さつき那珂さんにあつたよ。父さんのことを大将つて言い慣れてないみたいだった。もう一年も経つのにね。それだけずつと慕われてたんだよね。ほんと……お父さんが現役の姿をもつと見ておきたかつたなあ。そうすれば、僕もこうならずに済んだのかな」

ひとりで呟く声には返事はない。こんなところに花を供えるのは彼ぐらいだろう。周囲は不自然なほどに静かだ。なにかの排ガスなどが混じつた匂う風が彼の髪を僅かに揺らして去っていく。

「海を啓開し道を拓く刃たれ。……僕はそうなれているかな、父さん」

そう言い、笑う。

「深海棲艦を全部倒したら、母さんの仇を取ったことになるかなあなんて思ってたけど、なんだか、最近はそう思うことはなくなってきた。……変わっちゃったかな、僕は」

また来るね、と言つて立ち上がる。ずっとしゃがんでいたせいか、少しくらりとした。起立性貧血かなと思いつながら、軽く収まったのでゆっくりと歩き出す。

「変わっちゃった、か……」

正一郎は足を止める。なぜか、止めなければならないと思つたからだった。

「ある種のものごとつて、ずっと同じままのかたちであるべきなんだよ。大きなガラスケースの中に入れて、そのまま手つかずに保つておけたらいいじゃないか。……本当にそうなのかな、父さん」

そう問いかける目は虚空を彷徨い、軽く空を見上げた。クリリスク市の町並みは夏が近いというのにどこか寒々しい。

「饅えた匂いをまき散らす薄汚い偽善に塗れ、インチキを口にすることが大人になるということならば、大人になんてならなくていい。嘘つきにはなりたくないと思つてた」

風が吹き抜ける。背中側から吹いた風は伸びた前髪を揺らして吹き抜ける。目を閉じる。

「僕は耳と目を閉じ、口を嚙んだ人間になろうと考えた。そうすることでのみ、僕はぼく足り得た。それが僕の役割だというのなら。そんな僕は不良品らしい」

風が凧いだ。

「——そう、高を括つたな」

銃声、一発。煽られたように帽子が飛んだ。

軽い衝撃の後、大分遅れて聞こえた。2秒ほどだろうか。そう考え

てゆつくりと目を開けた。

「……無事ですか、司令官」

「うん、おかげさまで」

背中越しに届いた声に正一郎は静かに微笑んだ。振り向かなくてもわかる。金色の長い髪が背中側から伸びている。光学迷彩を解除した阿武隈の髪が頬をくすぐった。

「場所はわかる？」

「司令官から見て5時方向。音から考えて……」

「800メートルぐらい先、だね？ そのあたりに62階建てのビルがある。その屋上かその下ぐらいからの狙撃かな」

阿武隈は腕につけた艤装のカタパルト部分が歪んでいるのを見て眉をしかめそうになった。

「50口径の対物ライフル弾、当たったら危なかったんじゃない？」

「でも、死ななかった。守護天使がついてるから」

「そんなもの見たことないよ、正一郎さん」

阿武隈の背後では笑った気配。首の後ろから引き出したQRSプラグを正一郎は外套のポケットから取り出したタブレットに差し込んだ。厚めのタブレットは特殊なもの、インフォメーション・イルミネーター。周囲に展開した部下と艦娘の様子が表示される。

「天使でも自分を客観的に見ることはできないのかな。状況1―3。

隼鷹はカ号による上空警戒を続行。五月雨、扶桑はポイントD―23Eへ。時津風はAdvanced―LRAD起動して待機、雪風は時津風のフォローに回って。阿武隈は僕の護衛を」

『了解』

飛んだ帽子を拾い、軽く泥をはたいて被り直した。目の色を隠すように目深に直しながら、もう一度口を開いた。

「オペレーション・グロリアーナを開始。秘密警察^{ウォルシנגガム}の長の猟犬を駆り出します」

狩猟場の主が、切り替わった。

「……そんな、光学迷彩!？」

「ハートショット、エイム……何やってんのさ松姉!」

緑色に光る髪を揺らして横を見ると、すでに松は照準器から目を離していた。彼女は対物ライフルの二脚を畳み、既にスリングでそれを担いでいた。

「だめ、もう気づかれました。ここからでは撃てません。プランKを破棄、KKに移ります」

廃棄されたビルのおそらく62階。おそらくというのは床も壁も張られていないため正確な階がわからないためだが……そのフロアの鉄骨を渡るようにして反対側に向かう。頭上の梁に結んだロープを蹴り落とす。腰のハーネスのカラビナにロープを掛ける。

「光学迷彩を張った護衛ってことは、こっちが撃つことを待ってたのかね?」

「おそらくはそうでしょう。すぐに追っ手が掛かりますよ。とりあえずは急いで離脱します。桃を呼んでおきましょう。接近戦では分が悪いです。それまでの防戦は期待してますよ、竹」

「あいよ。まさか予備で持ってきていたあたしの艤装を使うとは思ってなかったけど、しゃあなしか」

そう言つて竹はスモッグで煙る空へと体を躍らせた。ロープの摩擦で自然にブレーキがかかり、宙に浮いた体をビルの方へと引き戻す。竹はビルの鉄骨を蹴り、体を加速させた。そのまま垂直のビルの壁を駆け下りていく。ワンテンポ遅れて隣の鉄骨を、ライフル背負つ

た松が走ってくる。

「既に一分か、外周くらいは囲まれてもおおかしくないかねえ。――

――松姉！ こつちも迷彩使うから驚かんでよ！」

「了解しました」

大きく鉄骨を蹴ると同時、竹の姿が掻き消えた。視界の端に光学迷彩使用中のアイコンを確認しながら、くすんだガラス張りの外壁を再び蹴り前へ。大体ビルの半分を超えた。電気の灯ることのないビルの会議室を足元に竹はそのまま走り下る。竹専用チューンされた特殊装備の大鎌を右手に持ち、強く前に飛んだ。

「狙われてる！ 減速して！」

「え、嘘おおおおお！」

何の前触れもなく足元のガラスが吹き飛んだ。細かいガラスの破片が光学迷彩の輪郭をぶれさせた。纏った衣服に細かい傷がつき、屈折率が変わる。光学迷彩の再調整がオートメーションで開始される。再構成まで後12秒。

「いつつう……！ こつちが光学迷彩を使ってくることは想定済みつてか!？」

竹は吹き飛んで現れた柱を再び蹴る。足場に使っていた窓ガラスは跡形もなく吹き飛んでいた。ライフルや機関銃で撃つたらこんな均一には割れるはずがない。爆薬で吹き飛ばしたにしては爆炎も煙もなかった。それでも窓が一気に割れた。

「A d v a n c e d I L R A D 発展型長距離音響装置かナトリウム反応式Mレーザー砲Nつてところかね！ 向こうも用意周到だこと！」

頭上でもう一度窓ガラスが割れた。やはり爆薬の音や銃声はしない、音波で叩き割ったのだろう。今度はそのガラスの細かい破片が降ってくる。降ってくるガラスから逃げようと速度を上げれば地面に激突する。いくら義体とはいえその衝撃は殺しきれない。壁を蹴って進んでいては降ってくるガラスを避けることはできない。このままガラス片を受けるしかない。背負った艦装にガラスが当たる音がする。光学迷彩の再構成までの時間がまた伸びる。

「松姉！ 無事!？」

「こつちが義体じゃなかったらどうする気なんでしょうねこれ。ガラ
ス塗りで病院直行ですよこれ」

「義体じゃなきゃこのビルの壁を走って降りるなんてしないって踏ん
でるんじゃない？」

「……それもそうですね」

落ち着いた声が返ってくることに安堵しながら竹は減速をかけた。
カラビナに手をかけロープから離れると同時に、大きく壁を蹴った。光
学迷彩を解除、もう光学迷彩頼りで逃げるには状況が悪すぎる。

ズン、と鈍い音がして地面が陥没する。それを無視するようにして
運動エネルギーを前に飛ばす。そのまま大鎌を振りかぶった。その
先にいる小ぶりの影が地面に転がるようにしてその凶刃を避ける。
そして宙に残った六角形の板がついた機械を真つ二つに切り裂いた。
「わわわっ！」

きれいに前転をするように避けた影が目の端を過る。速度差のせ
いで良く見えなかったが、義体の目にはそれがなんであるかが瞬間的
に表示される。軍用義体、登録コードDD-KG10、パーソナル
ネーム、《時津風》。

「やれやれ。なんでここに526水雷戦隊の奴がいるんだか」

そう思いながらも地面を削るようにして勢いを殺す。逆袈裟に振
り抜けるように刃筋を整えた。

「むー。すぐに戦隊ナンバーが出てくるあたりは同業者かー、同士討
ちみたいですよごく嫌ー」

「だったら、ここで見なかったフリしてくれないワンちゃん？ 音響
兵器なんて面倒なの相手にしたくないしき」

「もー、犬耳じゃないよこれー」

時津風はやれやれといった雰囲気髪をいじって笑った

「まー、Advanced-IRADも壊されちゃったから使えない
しねー残念残念。……大鎌かあ、当たったら痛そうだなー、やだなー」

そう言いながらも毛先だけ白い髪を揺らして小柄な少女が笑う。
竹は笑い返して一気に踏み込んだ。時津風はそのままバックステッ
プ。距離を保とうとしているのだろうが、竹の方が早い。その耳に無

線が届いた。

『竹、深追いは必要ない。桃が来るまで適当に時間を稼いで』

わかっているの意味を込めて無線をオンオフ。大鎌を振り上げ、頭上で回す。そのまま石突を時津風の方に突きだした。首を傾げるようにしてそれ躲した時津風はタックルをしかけるように頭から竹に突っ込んだ。その時のあまりの衝撃に一瞬竹の息が詰まる。

(……改造スタンガンかなんか仕込んでるんかい！)

横薙ぎに大鎌を振るう。

「きゃうん！」

刃ではなく持ち手の部分で強打された時津風が横っ飛びに吹っ飛ぶ。それでも彼女は空中で体勢を整えて、まるで犬の様に四つん這いになってきれいに止まった。そして彼女が笑っているのに気が付く。直後アラート。反射的に横に飛んだ。その刹那に衝撃波が耳の横を駆けた。

「砲撃!？」

「誰だかはわかりませんが、国連海軍士官暗殺未遂容疑で拘束しますっ！」

視線を送れば、ビルの影から時津風と似たような恰好をした少女が出てくる。DD-KG08、雪風だろうと予想をつける。データベースへの接続ができない。広域ジャミングがかけられている。……明らかにおかしい。まだ2分程度しか経っていないはずだ。それにしても手際がよすぎる。ここまで迅速に対応してくるとなると。

「戦況を俯瞰する司令塔がいる部隊、ね。……チツ！ シヤドウ2！

シヤドウ2?」

無線に問いかけるとノイズがクリアになった。届いたのは松の声ではなく、明らかな男性の声だった。

『イングランド王国女王、エリザベス一世を暗殺しようとしたとしてスコットランド女王メアリー・スチュアートは斬首刑に処されたという話はご存知かな?』

「……おたく、どちら様?」

無線の奥からは上機嫌そうな含み笑いが届く。雪風や時津風が動

きを止めて静観している。彼女らに指揮を与えている司令塔か。

『せっかちなのは嫌われますよ。少し余裕を持った方がいい、
フロイライン
お嬢さん』

そういう声はどこか柔らかい口調だがその裏にある感情が読めない。この男は何者だ？

『慈悲深きエリザベス女王はその執行命令書にサインすることを渋ったとされています。それにサインをさせたのがフランシス・ウォルシントンという部下だそうですよ。優秀で、悪魔のような風貌のスパイマスターだったそうです。ウォルシントンがメアリー・スチュアートがエリザベス女王暗殺を企てた決定的な証拠となる手紙を提出した。これを受けて渋々、エリザベス女王はメアリー・スチュアートを処刑台に送った。だがその手紙は偽書だったというのが近年の定説です。いないほうが良いというだけで偽証を元に未だ灰色の人物を黒として潰した。そんなウォルシントンがエリザベス女王は嫌悪していたそうだよ。悪党として、偏狭なピューリタンとして罵った』

「確か、罵るだけ罵ってもソレを使い続けるしかない女王だったかな？ 所詮その程度の女王サマだったって話でしょ。バチカンから命を狙われ続けたのを守ったのに恩義を感じなかった薄情な、さ」

『おや、学がない訳ではなさそうですねフロイライン。いろいろ語らうのも楽しそうです』

「そりゃどーも。悪いけど生憎妹分からの受け売りなんでね。ティーパーティーなんて窮屈でたまらない粗野な阿婆擦れさ」

『外部記憶装置に頼らずにそこまで言えるだけでも十分に学があるといえるでしょう。頭のよい人はそれだけで好ましい。そんな人物がこんな簡単な欺瞞作戦に引っかかってしまったのが残念でなりません』

そういう声をたどりながら竹は必死に記憶を手繰った。この声はどこかで聞いたことがある。どこだ、どこで聞いた。そう思いながら視界の端を何か横切ったことを知る。

(カ号観測機……？ ああ、機番は……隼鷹か)

そこまできて思い至った。表向きに対人・対サイボーグ戦闘の技術

を培い、艦娘が配備されうる部署がただ一つ存在する。

「えーつと特調九課課長、永野誠大佐だったけ？ てーことは特務戦隊SIDE SQUADかあ。あーあ、今日は厄日だわ」

特設調査部の戦力が、ここに配置されていた。それなら音響兵器が配備されていたことにも納得がいく。そして同時に気が付いた。

「網を張られてたかあ。どーりでアイツがこんな仕事に特殊ス艦装スの使用許可出した訳だ」

『フロイラインたちがどういう団体かは知りませんが、それでもお伊太をした以上、落とし前はつけてもらわなきゃなりません。痛くはないように心掛けるがさっさと投降してくれると助かります』

「言ってる」

『そうですか。それならば精々無様に逃げ回りなさい』

無線が切れた。同時に雪風たちが発砲。盛大に土煙が立った。

「威勢がいいのはいいですけどね、少し骨が折れそうです」

そう言っつてインカムを操作すると永野は視線を隣に移した。かなり低い位置に白い制帽がある。永野は中折れ帽を整えながら笑う。重めの黒い杖がカツカツと地面を打った。額などの小皺を隠したいのか、帽子を気にしながら言葉が続ける。

「それでどうします、合田少佐」

「どうするものにも……戦闘になったら永野課長が指揮を引き継ぐの

では？」

「細かい調整はしますが、戦略は君に任せてみようかと思ってます。合田少佐もインフォメーション・イルミネーターが使えるみたいですし」

暗い路地を歩きながらそういう永野はトレンチコートから取り出した分厚いタブレットを振る。今正一郎が左手で持っているものと同じものだ。

「周囲の無関係な人員の避難は完了しています。そもそもここは択捉経済特区全盛期に計画されて廃棄された見捨てられた地区ですから、いくら暴れても迷惑料は格安、LRADで人払いが継続中ですのでまともに超えてくる無関係な人員はいないでしょう。慰謝料はまず気にしなくてよさそうです。ミスをしても廃棄されたビル一つ全壊とかで済むでしょうね」

「それを安いものとか仰りますか？」

阿武隈がうわーと言いたげにそう言えば、永野が笑った。

「軍人の勉強料には安すぎるぐらいでしょう。……鎌持ち相手に雪風時津風のコンビは結構苦戦中ですか……」

「扶桑五月雨とポジション変えたほうが良くありませんか？ これです。と永野が正一郎に同意する。

「五月雨への外部アクセスが検知されない以上、グラウコスとは別件でしょう。とりあえず投入しますか、五月雨が暴走したらその時はその時です」

「えげつないセーフティ突っ込んでますよね、それ」

阿武隈の声に永野が鼻で笑った。

「ホログラムで東郷徹心大佐の映像を重ねるだけだから安いものですよ。まあ、戦力は多いにこしたことは無いわけですよ」

永野がそう言つて路地を曲がる。

「基本に忠実だが応用力もある相手です。高度に訓練されている証拠と言っている。通信を封じても必ずスナイパーと前衛の連携が取れる位置にとどまっているところ、不測の事態に瞬間的に判断・対応をするところを見ると、こういう戦闘になれているのは明白です」

「彼女たちの義体、軍用モデルですね。型から見ると……」

「8年くらい前のモデルがベースでしょう。平菱系の全身義体が素体でしょうがかなり手が加えられています。使ってる武装は最新式――

――有澤重工系列の装備がベースですが熱光学迷彩は飯田製造のTC8203式、通称“ギューゲースの指輪”ですね、現行最新モデルにあたります。新車が楽に買えるぐらいのお値段が張る装備をさらつと使ってくるあたり、潤沢な資金を持つ組織がバックにいます。その入手と整備ができる時点で軍関係者と考えるのが妥当ですね」
そう言つて永野がタブレットをタップする。

「場のイニシアチブを握っている鎌持ちは粗野な物言いですが知能自体は高い、シャドウ2と呼んでいるらしいスナイパーを気遣うそぶりも見せている。部下思いでお人よしな面もありそうですね。この場合は人質が有効かな」

永野が横目で正一郎を見れば、彼はタブレットを覗きこんでいるところだった。

「スナイパーの身柄は……今、時津風が接近戦の真つ最中ですが、行けそうです。鎌持ちと分断すれば確保できそうです」

「スナイパーを降下させるのが早すぎましたね。位置を特定されてスナイプ返しされるのを避けたかつたんでしょうが、こつちにとつては好都合です」

暗い路地の出口が見えてきて、ステッキを左手から右手に持ち替えながら永野が続ける。ステッキにはめられた銀色のリングがカチリと音を立てた。それに違和を阿武隈は覚えたが、まるで気にしないで永野が続ける。

「では合田少佐、相手は潤沢な装備を得て、キロ級スナイパーを抱える戦略性の高い行動ユニットです。狙撃による奇襲が失敗して逆包围されていることが判明した場合、どう出ると思いますか？」

「定石ならば一度撤退です」

「おそらく正解でしょう。敵は賢い。特設調査部配属士官の名前を知っている手合いです。綿密に用意を進めていることが見て取れます。……そんな手合いが撤退の手筈を用意せずに突っ込んでくる可

能性は？」

「……10パーセント以下、ですか？」

満足げにうなずいた永野が上機嫌に左の人差し指を挙げた。

「5パーセント以下でしょうね。いい線いってますよ、合田少佐」

「永野教官に認めてもらえるとは光栄です」

軽くおどけてそう言う正一郎に笑い返す永野。路地から外に出れば薄汚れた霧に霞む大通りだった。大通りに出てみれば路地があることに気が付く人がいないほど狭いものだったことがわかる。同じような道が反対側にも続いていて十字路になっているのだが、気が付く人はいまい。

「教官とは……その呼び方の出どころは高峰君か東郷君あたりですかね。……さて」

永野は歩道の縁で足を止め、右手を水平に掲げた。それに止められるように正一郎も足を止める。永野の右手の先、ステッキが煙ったスモッグの向こうを示す。

「——三人目です」

大きなトレーラーが猛スピードで迫ってくる。永野のステッキから爆音が生じ、抑制された衝撃波の残滓が放出された。その衝撃波が鐳の広い中折れ帽を頭から吹き飛ばした。強烈な反動を残して飛び出した弾丸はトレーラーのバンパーに大穴を穿つ。バンパーの裏側で何かが破裂し、火花と黒煙が生じはじめた。そのトレーラーがバランスを失い横転しかけながら永野達の前を抜ける。道の反対側にあった街灯をなぎ倒し、千切れた電線が火花を散らした。

左前輪を破壊されたトレーラーは1ブロック程先で完全にバランスを崩し横転。盛大な破砕音と共に道を封鎖するように転がった。阿武隈は正一郎の盾になろうとでも思ったのかどさくさに紛れて彼を抱きしめたままその光景を呆然と見ている。その視線の先でト

レーラーが爆発。

「き、危険すぎやしませんか永野大佐……」

「こんなんで怖気づかれたら困りますよ、阿武隈。あれは応用の効かないオートドライブのトレーラー。こうでもしないと停車しないしヤバイやつしか乗ってませんよ。それにランフラットタイヤを装備してない相手が悪いとは思いませんか？」

「炸薬入り弾頭でランフラットタイヤごと爆砕するつもりでしたよね……」

「さて何のことやら。それよりもあの爆炎で呑気にしてるアレの方が問題でしょう」

爆炎の中から小柄な影が出てくる。子どものような体型だが全身を装甲のようなもので覆っているためその顔は見えない。接近戦を想定しているらしい、獣を連想させる鋼鉄の爪と尻尾が異彩を放っていた。

『もー、痛いし熱いし散々だじょー。おねーちゃんたち用の装備も乗ってたのにい』

「そんな大事なものが乗ってるならオートドライブなんかには任せずにちゃんと手で運転するものです、お嬢ちゃん。嬢ちゃんが免許持っているかは知りませんが」

仕込みステッキを肩に担ぐようにしながら永野がへつと笑った。炎に煽られた風が彼のトレンチコートに翻させる。ゴムが焼けるような匂いの中で阿武隈が一步前が出る。それを見て永野が笑った。

「これは、生身の私たちが相手だときついですかね」
「では、私の出番ですかね」

道の反対側の路地から凜とした声が響いた。鉢金を巻いて橙と白を基調にした衣装が揺れる。

「ならお願いしましょう、神通。おイタが過ぎるお子様へのお仕置きには丁度いいでしょう」

「ふふっ。そこまで私は厳しいつもりはないんですけどね、永野教官」
そう言いながら神通が左脇から脇差しを鞘ごと引き抜いた。鞘から引き抜けば、炎を鋭く照り返す刃が現れる。左手で鞘をくるりと回

し、まるでもう一本の刀の様に順手で持つ。その横にもう一人影が立つ。青みを帯びた髪が揺れる

「まったく、クリリスクで青葉だけ下ろされたと思ったらこんなことになっちゃいますか。高峰さんも人使いが荒くて困りますねえ」

「期待してますよ、対人戦闘は青葉さんの方が慣れているでしょうから」

「やだなあ神通さん。青葉はこういうの嫌いなんですけど」

「でも苦手ではないんでしょう?」

「それが悲しいところです」

そう言つて青葉は笑みを崩さず、腰に下げていたサブマシンガンの槓桿を引いた。装甲に包まれた影の虎の尾のようなバランスサーが嬉しそうに揺れる。

『にゅにゅにゅー、特調六課の青葉に二水戦の神通かー。一度やり合ってみたかったし、いいよ、遊んであげる!』

三人が同時に動く。ガソリンが燃える派手な黒煙が狼煙の代わりとなっていた。

「ふっふー。もう終わりかなあー?」

「舐めないで、ください……!」

上がった息を整えながら松はマシンピストルの遊底をスライドさせた。目の前にはメリケンサックをくるくると弄ぶ時津風がいる。やや野暮つたいデザインのメリケンサックに放電機能がついていることは先ほど体を以って理解した。握りの部分がおそらくチャージャー。強く握った上で拳を叩きつけると放電する仕組みらしい。

「接近戦になった段階でスナイパーライフル捨てたのはいい判断だけさあー。にしてもこっから逆転は無謀じゃない?」

「それは、どうかしらね?」

そもそも1対2、武装の重量的にスナイパーライフルと予備装備しか持つてこれない状況下では勝ち目が薄いのは確かだ。しかも広域ジャミングによって戦術リンクは使用できず、支援兵装を満載して到着するはずの桃も現れる気配すらない。5ブロックほど向こうだろう、どす黒い煙が上がっているのが見えるからおそらくトレーラーを止められた状況だ。桃本人が来るかどうかは別として、松と竹の個人強化兵装オーバードウェポンを手に入れるのは絶望的だろう。そしてそういう情報はおそらく目の前で啜う時津風たち猟犬にも知られている。

「でさあー、改めて聞くけどさー。投降してくれない? あんまり泥臭い戦い好きじゃないし、しれーのところにも早く戻りたいしさあー」

「そちらの事情は知りません」

「悲しいなあー。仕方ないなあー、仕様がなかあー」

くるくると回っていたメリケンサックが定位置に戻り、バチンと鋭い音がした。同時に時津風がグンと加速し前に飛び込んでくる。松が引き金を引く。マシンピストルは連射できる拳銃に過ぎない。命中精度なんてたかが知れている。指切りで命中精度を上げることがもできるが、そんなことをする前におそらく時津風が射程を超えて飛び

込んでくるはずだ。弾倉を使いきるつもりで引金を引き切る。

「……痛つたいなあ」

こめかみから赤黒い液体を後ろに残して時津風が右手を振りかぶった。松は地面を蹴る。後ろへ飛ぶ。拳を使うような格闘戦で最大のダメージを与えられる位置は限られているから相手の間合いをしっかりと外せばたとえ掠ったりしても決定的なダメージは防げる。だから間合いを外すためにも後ろに飛んだ。

「……っ！」

右肩に強い衝撃が走った。そのまま横向きに弾き飛ばされる。声が出たのか出なかったのかはわからないが、肺が空っぽになるのを感じる。目の前に驚いたような時津風の顔があった。松にとっては、外からの衝撃で時津風のナツクルが入らなかつたのを不幸中の幸いに感じた。

「ちよ！ 雪風え！ 危ない危ないっ！ あたしごと巻き込まないでよ！」

「射線に出てくる方が悪いし、時津風の方が危なつかしいんです。あの至近距離で撃たれたらさすがに義体がもちませんって」

雪風が空薬莖を排出させながら、主砲に改めて弾を込めていた。黄色の弾頭、スタン弾だ。右肩に当たったために肩から先の感覚がない。取り落としたマシンピストルを取ろうとしてそれより先に時津風が明後日の方向に銃を蹴り飛ばした。

「……これ以上の抵抗は無意味です。投降してください。同属殺しはしたくない。それは、貴女も同じですよね」

雪風が主砲を松の眉間に照準を合わせながらそう言った。時津風はどこか不満げな顔をしながらも松の動きを注視する。

「……ほう、同属だと気が付きましたか」

「貴女の骨格を照合しました。特調のデータベースって本当に沢山の情報が揃ってるんですね。すべて戦没したはずの松型駆逐艦のパーソナルデータまで残ってるなんて、雪風も思ってませんでした、DD
—MTO1、松さん—

そう言う雪風はどこか哀しそうな顔をした。

「すべて戦没して型番記号のMTは睦月型に引き継がれましたから、松さんの情報を検索しようとMT01を捜しても、睦月型一番艦の睦月ちゃんの情報が出るようになっていきます。……容易に検索できないようになっていますが、戦没艦のリストの方には残っていました。まさかそちらでヒットするとは、永野大佐も思っただけでなかったみたいですよ」

雪風の言葉を受けても松は表情を変えなかった。

「どういう事情なのか、雪風に聞く気はありません。貴女が首謀者ではなく、下請けの実行犯であるからです。誰かに言われてここに来た。それだけでしょう。ここでこれ以上粘ったところで、貴女にはこれ以上の実益はないはずです。場違いな戦場に送り込む雇い主を庇う理由も、ここで傷つく理由もないはずですよ」

雪風の言葉が——松の地雷を真上から踏み抜いた。

「……黙って聞いていければ、好き放題言ってくれますね」

そう言って嗤った松は視線を落とした。地面についた左手が粉と化したコンクリートの破片を握りしめる。

場違いな戦場。水上用自律駆動兵装が陸で戦うことを、お前は嗤うのか。

汚れ仕事を請け負うことでしか存在意義を得られなかった私たちを、お前は嘲るのか。

第零世代の屍の上に、今の水上用自律駆動兵装があることを知っていないながら、お前はそれを切り捨てるのか。

「何も知らない若造の分際で——」

お前は、私の指揮官を見切るのか。顔も合わせぬ彼を場違いな戦場に私を送り込んだ指揮官だと見下すのか。

左の袖口のボタンを引きちぎる。それと連動して袖の奥からばね仕掛けてデリンジャーが飛び出す。桃が左腕を振り上げ中指を引金に掛けるのと、雪風が引金に力を掛けるのはほぼ同時だった。

「――あのみと鬪牙を、私の指揮官を侮辱するな――つ！」

銃声が響き、双方が後方に跳ね飛ばされた。雪風は煽られるように後方に数歩よろけ、松は後ろの地面に叩きつけられるように倒れた。

「……時津風、インターセプター電脳錠。松さんを拘束してください」

赤黒い溶液で濡れ細っていく髪を気にしながら、雪風は冷静に指示を出す。電脳のすぐ近くでスタン弾が炸裂すれば、いくら軍用スペックの電脳であっても自閉モードに切り替わる。全身義体ではそれが動きを封じること繋がる。

「もー、雪風もあたしのこといえないよねー。どっちが危なっかしいやら」

「22口径のデリンジャーで破壊されるようなヤワな脳殻じゃありません。マイクロマシン溶液の流出も、もう止まるはずです。……雪風より永野大佐、スナイパーを確保しました」

《お疲れさまです、雪風。時津風もよくやってくれました。疲れているところ悪いですがそのまま確保して待機。勝手に電脳を覗かないように。どんなトラップ仕込まれてるかわかったものじゃありませんから》

「了解しました」

「はい。しれー、後で間宮さんのところでなにか奢ってー」

《ハイハイ。後ですよ》

永野のどこか呆れが混じる笑い声で通信が終わる。雪風はダメージの確認をしながら松の隣に腰を下ろした。

「……はじまりのかんむす第零世代の貴女には、こんな形で会いたくありませんでした。どこから、間違えたんでしょうね、わたしたちあなたは」

ぼつりと呟いた言葉はスモッグの中に溶けて消えた。時津風は聞こえないふりをした。

「ちいっ！」

狙撃による支援が途絶えた。それに歯噛みしながらも竹は大鎌を横一線に薙ぐ。それを最小のステップでひらりと躲して見せる。

「ったく、嫌になるわ。3分で決めるつもりだったのにさ」

「投降してくれたら今すぐ終わりますよ」

「冗談」

そういって大鎌を握りなおす。軽く上がった息はすぐ落ち着いたが、僅かに疲労が溜まっているのがわかる。その様子を見た相手はニコリと笑った。

「その大鎌、とても重そうですね。使い慣れているようですが、振るうには少々体力不足のように見えます」

「うるさいねー。ドックから出れなかった欠陥戦艦扶桑さんには言われたくないけどね」

そう竹が毒づけば、扶桑が笑った。

「その欠陥戦艦の大きな目標に貴女は鎌を当てることができてない訳ですが」

「は！ あんたぐらい……」

「追加武装を積んだトレーラーが到着すればすぐに息の根を止められる」でしようか？」

そう言った扶桑は竹の右側に回り込むように滑らかにステップを踏んでいく。竹は扶桑と正対する位置を保とうとやはりステップを刻む。

「貴女の動きは鎌を使用することを前提とした動きですが、高々数分でスタミナ切れを起こすような体力ではその戦闘スタイルを身につ

けることすら難しい。電腦に特注の戦闘用義体制御プログラムをダウンロードしてそれをトレースしている可能性もありますが、それならばここまで持ち堪えられない。考えられる可能性はただ一つ。その大鎌は単体で使うことを考慮していない。強化外骨格などを纏って使うことを前提としている。……そうなのでしょっ？」

扶桑の動きはあくまで滑らかだ。まるで水鳥が凧いだ水面を行くように滑らかに動いていく。竹は彼女がわずかに加速しているのを知る。間合いを測っているのか。

「ですが、重量物の使用を前提とするパワードスーツはどんな高効率エンジンを使用していても稼働時間はどうしても短くなる。狙撃ポイントにいつ対象がくるか予測がつかないようなシチュエーションで狙撃のスポッターをしなければならぬような状況ですと稼働させておくわけにはいかない。ですが、強化外骨格を纏ったまま電源を切れれば、それはデッドウェイトとなり、活動ができなくなる。だから強化外骨格を着こむわけにはいかなかった」

（オーバードウエ^wポン使用前提だとばれている、か……塩梅悪くなってきたねえ）

竹の表情を見て扶桑が笑みを深めた。

「物理装甲を纏い戦場に出ていることが多いのかしら？ 表情で凶星だってバレバレですよ。心に鎧を、顔には鉄仮面を。瞳は硝子玉として決して感情を通さず、氷水で口の端を引き締める。鉄則ですよ」

「ご教授賜りども。そんな話をする余裕があるとは驚きだね」

「貴女ばかりにハンデがあるのはどうかと思っただけですよ」

心にもないことを、と奥歯をかみしめる。同時に思考回路が向こうの思うように操られているような感覚にとらわれる。乗せられては、負ける。

「へー、余裕があるのはいいことですよ！」

そういつて急加速。扶桑の懐に飛び込む。同時に一つの機能をオンにした。光学迷彩。

（至近距離での戦闘で相手の動きが見えなければいくらなんでも対応できないはず！）

光学迷彩は一応復旧しているが、先ほどの外侮装甲の細かい傷のためには機能しない。よく目を凝らせば空間が揺らいでいるので、何かあると見破られる。

だが、既に竹がいることが知られており、こうして1対1で向き合っている状況では、姿を完全に消す必要もない。輪郭をあやふやにして細かい視線の動きや手の動きをごまかせれば、その隙が命取りになる。

鎌を振り下ろす気合で漏れそうになる声を押し殺す。刃が風で鳴り、猛スピードで扶桑に向かった。それを扶桑はまるでそれが見えてるかのように真後ろに飛び退いてことなきを得た。その視線の動きで、彼女が切っ先を見ていたことを知る。

「ちっ……」

なぜだ、なぜ扶桑は動きを見切れる。

「いくら貴女が光学迷彩の使い手と知っていても対策のしようがない、そう思いましたか？」

そう言うと同時に扶桑が巫女服の袴を軽く持ち上げる。西洋の淑女の挨拶、カテーシーのような動作だが、裾から転がり落ちたものから真っ白な煙が一気に広がると同時にそれがなんであるかを悟った。

（煙幕弾……！）

「姿が消えても存在が消えるわけではない。周囲の空気の動きを知ればどう動こうとしているのかはわかります。次があれば覚えておきなさい」

煙幕を引きつれるようにしながら扶桑が竹めがけて踏み込んだ。初めて、扶桑が攻撃に打って出た。

（——分が悪すぎる！）

一気に後退する。とりあえず今は退くしかない。

「ああもう！ 桃のやつはどこで遊んでんだよ！ さっさと来てくれないと困るっての！」

3点バーストは使わず、正確に3発ずつ指で発射数をコントロールしながら青葉は冷や汗をかきながら笑った。

「恐ろしいくらい硬い装甲ですね、サブマシンガンだとまともに通りませんか」

飛んできた鉄の爪を躲して後退。それを見逃さないように小さな影が一気に距離を詰め、反対の手で掻き上げるように走る。

「うおつとおー！」

『むー、ちよこまか避けてやになるなあ！』

バック転の要領で間合いを外した青葉がその言葉を聞いて笑みを深める。

「避けなきや青葉は死んじやいますからねえ」

前髪を数本散らして肝を冷やしながら青葉は笑った。青葉の息が上がっているのを見て休む間もなくラッシュをかけようと踏みこむ。両腕でのモンゴリアンチョップ。青葉のどこか人を食ったような笑みが掻き消える。青葉を庇うように神通が飛び出していた。桃の爪を脇差しで受ける。パワー負けしかけたのか神通の左手が峰へと滑った。力比べの様に拮抗状態になる。

『オーバードウェポンに素手でやり合うのは百年早いななあ』

そう言つて桃は虎の尾のようなそれを神通に向けて振り下ろす。神通は爪を受けているせいでその尾には対応できない。

「百年は言いすぎでしょう」

青葉がそう言うのが聞こえる同時、尾の側面を銃弾がぶつ叩いた。ワイヤーストックを伸ばし正確に狙いを定める青葉がにやりと笑つ

ていた。下手すれば神通を吹き飛ばしかねない射線だが、危険だとは思わないらしい。感覚が狂っているのか、それだけの自信があるのか。桃には判断がつかなかった。

「精々3日とかその程度じゃないんですか？」

青葉に気を取られたタイミング、神通が瞬間的に脱力。その時の勢いを利用して姿勢を低くし桃の足元に潜り込むように動く。桃は爪に体重をかけるようにして体勢を保っていたために、瞬間的に重心が前に寄りすぎた。神通に軸足を払われれば、容易に転倒してしまう。

『ふにゅっ!?!』

「胴ががら空きですよ」

足を払った体勢のまま神通は刃を天に向け構えた。脇差しを振るわずとも足を払われた状態で体勢を支えられない桃は脇差し目がけて落ちてくる。刃が貫通せずともそのダメージは確実に入るはずだ。

『にゃああああああっ!』

叫びながら尾を地面に突きたてるようにして何とか桃は串刺しを回避した。その直後、桃の首筋に向かって神通は刀を跳ね上げる。桃はそれを左手の爪で払いのけた。

「せいっ!」

青葉が桃の横腹を蹴り込む。たたらを踏むようにして桃がよろけた。桃の呻き声と青葉が妙に顔をしかめるのとはほぼ同時だった。

「硬い外部骨格だことで……青葉の靴も装甲化してあるからいけると思ったんですけどねえ……」

「銃弾跳ね返す装甲を蹴ってどうするんですか？」

『『それを言っちゃあ、おしめえよお』ってやつです神通さん』

ロングマガジンをリロードしながら青葉が笑う。桃の足元に潜り込んだ体勢のままだった神通が青葉の横に立つ。青葉は僅かに顔を動かし後ろを振り返る。背後に立つ62階建ての建設途中で放棄されたビルを見て視線を戻した。

「……松さんというのですかね、スナイパーさんをこちらの仲間が押さえました。光学迷彩の鎌使いも追い込まれているみたいですねえ」
『……!』

「おそらくもう貴女は間に合わないでしょう。貴女がお仲間を助けられる可能性は、残念ながら、ない」

青葉はそう言い、コツキングハンドルを引いて、放す。わざとらしい金属音が威圧的に響く。

「それでもまだ続けますか？ 状況は圧倒的にこちらが優勢です。これ以上は無意味であり、無駄であり、意味のない行為です。それでも続けますかあ？」

青葉はそう言うと言つてサブマシンガンを正確に構えた。ワイヤーストックでは頬付けはしつかりとはできないが、正確な位置に頭を持っていき、アイアンサイト越しに覆面の少女を見る。

「このままここで犬死するか、投降して生き永らえるか。二つに一つです。どうされますか？」

青葉はそう言う言つて引金のセレクタに触れる。連射になっていることを確認。神通に無線を繋ぐ。

《とは言つても、投降はないでしょうねえ》

《でしょうね。暗殺を担う人材です。殺し屋が投降して生き永らえるとは思えないでしょう》

《ですよねえ》

引き金に指をあてる。桃の装甲がガチャガチャと音を立てだしたのはちょうどそのタイミングだった。

『う、ううう……』

「あらら、泣き出しちゃいましたか？」

青葉はそう言つて人差し指を僅かにトリガーから放した。

「いえ……あれは……」

神通が刀を正眼に構えた。その視線の先で桃が地面に両の手をつき、うなだれるように頭を下げた。地面に這いつくばるような形、普通ならそれは屈辱や絶望を表すはずの形だ。

『う、う……』

だがそれは違った。そんな後ろ向きなものではなく。もつと攻撃的な何かだった。

「ベルセルクカウールヴヘジンかは知りませんが、厄介なのを目覚め

させてしまったみたいですね」

「どっちにしても狂戦士には違いないんじゃないですか？ どちらかと言えば青葉には山月記に出てきた李徴に見えますけどねえ、あれ。虎に変化した男がいたでしょう」

青葉はそう言って引金を絞った。それを平然と跳ねのけてそれが叫びをあげる。

『ぐおおおおおおおおおおおおおお！』

それが第二ラウンドの幕開けとなった。

個人用端末が反応したことで笹原は微睡から叩き起こされた。あすかの女性用士官室は二人部屋だが現状で女性士官は笹原一人のため、個室として使っていた。そこに設置された二段ベッドの下段で通信を開く。

「あいあい、このタイミングで貴方から連絡ってことはよくない兆候かな？」

『君にとってはそうかもね。私にとってはどちらでもまあいいんだけどさ。仮眠中だったのかい？ 少々眠そうだけど』

「こつちも持久戦の様相を呈していてね、交代要員として休憩中よ。さっさと寝たいから用件をどうぞ。どうせオペレーション・グロリアーナ関連でしょう。このタイミングってことは」

戦闘時に着用する濃紺の作業着の前のボタンを止めながらそう言う。仮眠のために脱ぎ散らかしたままのズボンをつま先で引き寄せ

る。

『ご名答、さすがスクラサス』

「心にもない称賛をどーも。で、何があったの？」

電話の奥がくつくつと笑った。裏返ったままのズボンを元に戻しながら笹原は男の言葉を待つ。

『無線封鎖した一帯にアクセスしようとするラインがあるんだが、その出どころが妙なんだよ』

「……要領を得ないわね。簡潔にどうぞ？」

『セカンドドメインが。n.v. unだった』

「……国連海軍の正式な命令系統でのアクセスが検知されたって言うの？」

手が止まった。

『さあ？ でも。n.v. unが使用できるのは国連海軍だけだ。国連海軍が発信したと見てほぼ間違いない』

「確かなんでしょうね、それ」

『高峰君も確認したらしいよ。非公開審議の上での判断ではあるが、極東方面隊が“正式に必要な承認”、オペレーション・ウォルシングラムの実行命令は“正当な手段で発動した”ということになる。それがどういふことか、スクラサス、君ならわかるだろう？』

笹原は息を吐き切り、二秒間、呼吸を止める。頭が冴えてくる。

「オペレーション・ウォルシングラムは元々特設調査部が撒いた偽の作戦情報。作戦内容はそれらしく取り繕われているけれど、到底許可が下りるような作戦じゃない。それを通常のセキュリティで撒くことでグラウコスを釣り出すことが目的だった」

『だが、その作戦は何者かの手が加えられた上で認可され、動きだしただ。……オペレーション・グロリアーナの存在を知らない誰かによつて、ね』

通信の奥の声を聞きながら情報をまとめていく。

「オペレーション・グロリアーナの概要は電子処理では追えないよう、徹底的にアナログに処理を行う事で秘匿されてきた。グラウコスがいくらネットの妖精であつても、電子空間に存在しなければ見つけれぬことは無い。しかし、それは逆に一般将校であつてもその作戦を知りうる可能性は跳ね上がる。なにせ物理空間を命令書やら何やらが飛び交うし、電子通信を使わない以上、連絡員が頻繁に飛び交うことになる。その痕跡は容易に追いかけることができるから、どういふ内容か推測するのも容易い。現に私が概要を掴んでいるわけだし」

『そうだね。でも、正式に許可を出したトンチンカンなそれを知らなかった。そこから導き出される可能性はただ一つじゃない？……対人で収まっている情報には疎く、電子空間の情報に頼り、国連海軍の正式な命令系統に組み込まれて、かなりの権限を得ている存在』

「……そして、些末な人員の動きを把握できるような下級士官ではない。ソレに報告があげられる段階でその人員の動きは省かれていなければそこから推測できるはずだ。それができなかったということ、上層部も上層部、極東方面隊総合司令部レベル」

笹原は一瞬言葉を止めた。浮かぶ答えはただ一つだった。

「中央戦略コンピュータ」

口にした言葉の苦さに笹原は黙り込む。

『そういうことだね、そっちはスキュラの管轄だっけ?』

「一応私も噛んでるわよ。まったく、面倒なことになったわね。それで? 正式に命令が出たってことは動いているのは公オフィシャル的な部隊かな?」

その問いに無線の奥はどこか上機嫌そうに笑う。

『聞いて驚けDD—MT01だそうだ』

「睦月ちゃん……なわけがないか。第零世代プロトタイプのほうかな?」

『実行犯三人のうち二人がそれぞれ松型駆逐艦一番艦松とその二番艦竹の骨格データと合致したってさ。戦没したはずなんだけどねえ。残ってたわけだ』

「白々しくない? あたしでも手に入るレベルの情報よ、それ。どんな任務に就いてるのかとかは知らないけどさ、臆げながら松型の天下り先は掴んでるわ」

『ほー』

「500特戦隊。設置経緯も不透明だし、最近の特戦隊のトップが独走してるのか、その上位組織がトチ狂ってるのか知らんけど、重要とは言い難いレベルの場所に投入されてる部隊ね。表向きは存在しないことになってるけどさ。貴方なら掴んでるんじゃないの? 井矢崎莞爾少将殿?」

『私も名前ぐらいってところかな』

「去年のグアムの電腦汚染事件で麻薬を売りさばいてたバイヤーを過剰なまでにぶっ叩いたのもあそこらしいってのは知ってる。血塗れの仕事ウエットワークス請け負い専門かと思えば、変な海域まで出しやばってるし、諜報もどきもやってるし、運用方針がよくわからない謎組織っていうのが内閣情報準備室ウチの判断ね。警戒度もそこまで高くない。少数精鋭って言えば聞こえがいいけど、メインの構成要員は6+aしか確認されていないような小規模組織だ。有澤重工がなんか後ろにちらついているけど、どれだけ装備を整えたところでオペレーターが家族経営レベルの人員規模じゃあ、オペレーターの能力を超えて機能不全になるわよ。そんな小さな組織でそこまで幅広くやろうとしたら

いい様に使われてトカゲのしつぽにされて終わりじゃない？」

『手厳しいね。さすが同業者というところかな』

ズボンに足を通しながら、笹原は鼻で笑った。

「喧嘩屋や殺し屋なら十分だけど、それ以上をやるには組織基盤が貧弱すぎるってことよ。小さい組織って言われてる内閣情報準備室だつて300人態勢。協力者を含めると4000人以上の人員を抱えても人員不足がヤバイ。人員一桁だとまともな作戦も実施できないレベルね。それこそ鉄砲玉としてどこかに送り込まれるか、お使い程度の実りの少ない仕事か。はたまたどこからも相手にされないから自由気ままに動けるか……まあ、そのあたりは知らないし知りたくはないわ。そんな規模の組織で現体制を揺るがすようなことは起り得ないから必要ないわね」

『君は妙に貶すね。小規模組織ながら軍の裏仕事を任される程の人材だ。もっと評価があがってもおかしくないと思ってたんだが』

「結構正当な評価だと思うけど？　どんなに少数精鋭でも物量戦には勝てつこない。太平洋戦争でもそれは証明されたでしょ？　それは物理戦でも情報戦でも一緒。玉石混交の情報を集めて、初めて使える情報は生成される。情報不足だったら確証バイアスをはじくこともできはしない。量がなければ始まらないわ。それは貴方の方がよーくわかってるんじゃないやなくて？」

『なら、君が肩を持つ月刀准将はどうなんだい？』

まるで用意していたかのようにすぐさま質問が飛び出してきた。

「月刀航暉は脅威となりうる。それは戦闘指揮の能力が突出しているからでもなく、戦果が華々しいからでもない。彼の真の脅威は陸海双方に繋がる人脈であり、月詠家の繋がりを考えれば潜在的に三軍すべてに影響力を与える可能性があることだ。厄介なことに彼はアジターとしての類稀なる才能を開花させてしまった。その結果として50を超える水上用自律駆動兵装を私兵化できるだけの影響力をもった。それは物量戦にも対抗しうるだけの頭数が揃ったことを意味する。そんな彼が牙を剥けば、国連海軍とその背後にいる日本国には無視できない損害が生じるだろう。それを看過はできない」

『やたらと饒舌じゃないかスクラサス。口数が増えるということはないかを取り繕おうとしている証拠だ』

通信の向こうで笑った気配。ズボンのベルトを締めて笹原は努めて言葉の色を抑えた。

「そうね、同族嫌悪とでも何でも思ってるといいわ」

向こうはそれには答えずに話題を戻した。苦々しいのを見越したような含み笑い、それを聞いて笹原は小さく舌打ちした。

『それで、どうするんだい』

「別に何も？ 捕まえられるかどうかは別として、クリリスクには永野大佐が出張ってるわけだし、とりあえずは何とかなるんじゃない？」

ベッドから腰を上げて笹原はそういう。

『案外樂觀的なんだね？ 合田少佐の命や阿武隈とかも危ないかもしれないのに』

「戦略的な重要度で言えば合田少佐はそこまで重要な人材じゃない。だからこそ疑似餌もどきを容認してるわけだしね。阿武隈を失うのは避けたいけど、向こうには神通とかも出張ってるわけだし、なんとななるでしょ。……もういいかしら？」

そういつて一方的に通信を切る。笹原は一人溜息。

「さて……と。井矢崎少将も人が悪い。わざとホールデンに聞かせたな？」

電子的に処理されてはならない内容を井矢崎少将は電脳通信で報告してきた。ついうっかりというわけではあるまい。

「食えない人だよねえ。本気でホールデンの味方になる気はないくせに」

笹原は頭を掻きながら部屋を出る。

「ま、どっちでもいいか。永野教官がなんとかするでしょ」

引き千切らんと飛び出してきた鉤爪を青葉は重心を後ろにずらすことで避ける。その爪が裂いた空気が前髪を数本散らす。

「……どうも分が悪いですねえ」

いつもの笑みは消えていた。手にしたサブマシンガンのセレクタはオートで固定したまま、2→3発ずつ連射。目の前の獲物は牽制のように放たれたそれを四足でひらりひらりと躲していく。

「いつものようにはいかないようですね」

「そりゃあ、普段四足の獣なんて相對することなんてありませんからね」

神通の声に青葉はそう淡々と返した。互いの射線を潰さないようにほぼ横並びで銃を放つ。執拗に青葉をつけ狙う相手に神通は齒噛みした。

「獣の心、でしょうかね」

「難易度の低いほうからってことででしょうかね。 メインディッシュ 強敵認定おめでとうございます、神通さん。数分かもしれないですけど青葉よりは長生きできそうですよ」

「死ぬ気はさらさらなくせに」
「当然」

そのタイミングで一度距離を取っていた相手が飛び込んできた。青葉に頭突きをかますように突っ込んできたそれを青葉は左に飛ぶようにして避ける。

「くあつ……い！」

右足を抑えて青葉が蹲る。少し体を引っかけただけでかなりの部位を持っていかれる。

「青葉っ！」

「動いちやダメですっ！」

とっさに青葉を守るように飛び込もうとした神通を言葉で止める。その鼻先を黒い影が走った。あのまま飛び込めば神通の上半身が消し飛んでいたはずだ。だが、神通はそれを喜ぶことはしなかった。その黒い影は青葉めがけて突っ込んでいるのだ。青葉は左腕をかぎす。そこに向けてソレが突っ込んだ。

青葉の体がアスファルトの上を滑る。生身の身体ならありえないような火花が青葉とアスファルトの間で散った。青葉の左腕を噛みちぎらんと啞えたまま、猛スピードで青葉を引きずっているのだ。

「————ああああああああああああああっ！」

青葉が叫ぶ。右手のマシガン捨て、その手を相手の首の後ろに回し、叩きつけた。

直後、青葉が振り落とされるような形で地面を転がった。

「……………まったく、猛獣相手は苦勞しますね」

アスファルトのヤスリで服などを削り取られて痛々しい姿の青葉がゆっくりと体を起こす。その横に神通が並んだ。

「無茶しすぎですよ、青葉。————何をしたんです?」

「人間の頭は四足で行動するにはできてないんですよ。四つ足に人間の頭は重すぎる。首が細すぎて支えられない。あの速度で行動するのはどだい無理な話、いくら外部骨格でサポートできるとはいえ、どうしても無理が生じる」

そういつて青葉はセーラー服の襟ぐりから手を差し入れた。そこから拳銃が顔を出す。

「高速移動中に頭を振るような急激な動作をすれば、強烈な負荷が首にかかる。だから頭を無理矢理振らせました。……………神通さん」

「なんででしょう?」

「一瞬でいい。アレの動きを止めてください」

「無茶言ってくれますね……………っ！」

それぞれ左右に一歩ステップ。その間を相手が突き抜ける。

「……………っ」

神通が呻く。

「なるほど、尻尾はマイクログラスファイバーですか」

「あの速度で掠ると腕はぱっくり切り裂かれる訳ですね。まだ戦えますか神通さん？」

「戦えないと言ったら？」

「逃げますね」

左上腕から流れ出した赤く着色されたマイクロマシン溶液の流れが止まる。魚雷発射管を赤く染め、神通はそれを気にするような動きを見せた。青葉はそれを目の端で捉えつつ、戻ってきた敵に向けて引き金を引く。それを気にせず敵は前進。

「なら逃げるぐらいの時間は稼ぎましょうか」

青葉の前に出るように神通が前進、左手に持った短刀の鞘を前に突きだす。相手の尾はそれを難なく切り裂いて、神通の額を貫かんと加速する。

「甘い」

軽く顎を引き。首をひねるようにしてそれを躲す神通。その鉢金を止める海松色の鉢巻をすり抜ける。蝶結びにした鉢巻を神通が一気に引き絞れば、蝶の羽をなす輪を貫通した相手の尾を引き止めた。

相手が驚いたような気配。まさか尾の動きを止められるとは思わなかったのだろう。水上用自律駆動兵装の装甲となる専用戦闘服ならばある程度の衝撃には十分耐えられる。あまりに細い刃や針のようなものに対して効果は薄い、それでも数刹那は保つことはできることを相手は計算に入れなかったらしい。だが、それを説明してやるほど神通はお人よしではなかった。

魚雷発射管を作動。四足の間で落とす。相手の尾を小刀で両断、跳躍。相手の背に乗った直後、魚雷が爆裂。

『——っ！』

相手の悲鳴のような音が聞こえたが神通はそのまま右手の刃を返し、相手の首筋に突き刺す。

「これでも通りませんか」

装甲に刺さって抜けなくなった小刀を諦め距離を取る。青葉が呆

れたような表情で立っていた。

「普通魚雷を手榴弾替わりにしたら真つ先に逃げましょうよ。貴女が盾にしたそれはロデオマシンじゃないんですから」

「あれだけ装甲が厚ければ十分遮蔽物になります。下手に距離取るより安全でしょう。それに動きを止めると言ったのは貴方ですよ」

「破片で顔中切り傷まみれにしていますかそれ」

「想像以上に破片が飛んできて驚きました。銃撃で一切ダメージが入らないような装甲とあの機動性は両立できるはずがない。必ずどこかに装甲が薄いところが存在する。だとしたら四足で守られた腹部だと思ったのですが、案外厚みがありましたね。ある程度刺さると思ったのですが」

神通は軽く笑って右腕に付けた砲門を稼働させた。

「ですが、装甲は抜けなくてもその衝撃は装甲を抜けて内部に抜ける。あの装甲の中で苦悶に顔を歪めてるはずですよ」

「そうじゃなければ困ります。——そろそろ、ケリをつけますか」

青葉もリロードを終え拳銃を構え直した。

「もう一度問いますね。投降しなさい」

その声を桃は装甲の中で息を荒くしながら聞いていた。

バカにされた。イライラする。むしゃくしやする。痛い。辛い。

『負けたくないのはわかりますが、これ以上抗つても無駄ですよ。すでに勝負はつきました。脱出することもできないでしょう』

二水戦、神通の声。どこか諭すような声色が神経を逆なでする。

『まあ、この子を置いていくなら別ですけどね』

顔を上げた、首筋が痛い。装甲で止まったはずだが痛みが残っている。なぜだ。QRSコネクタの近くを狙われたからか。それでも顔を上げた。息が止まる。

——松おねーちゃん？

青葉が笑うその隣に見覚えのある女の姿があった。後ろ手に縛られていて目はガラス玉のようで、どこにもピントが合っていないようだ。

『さっき言いましたよね、スナイパーさんをこちらが押さえたって。今更何を驚くんですか？』

痛みが残る体を引き起こす。助けなきや。

『おや、まだ抵抗しますか。抵抗しないなら営倉にぶち込んだ後の待遇の改善も考えたんですけどねえ』

青葉が笑う。その顔に向けて飛びかかる。お前らさえないなければ。お前らさえないなければ。

「——っ！」

獣の雄叫びで自らの心を奮い立たせる。そのまま跳躍。

——松おねーちゃんにこんなことにするような悪いやつは——
——死んじやえ。

青葉が逃げようとするがもう遅い。その首を容赦なく弾き飛ばす。その場に残った首が膝をつく。それから気がついた。ああ、不要な殺傷は避けるようおにーちゃんに言われてたんだっけ。

「——死んじやったかな」

『なるほど、貴女からは青葉が死んだように見えるんですね』

吹き飛んだ生首が笑った。

『でも、殺したのはだれなんでしょうね』

全身義体なら電脳を破壊されない限り死なないことも多く、電脳通信ならば意志を伝えられる場合も多い。だから桃はそれに注意を払っていなかった。——その顔が松のそれに切り替わるまでは。

「え、な、なん……でっ!？」

『どうしました？ 裏の仕事をいくつもこなすくらいですからこれくらい慣れていてしょう』

青葉の声がするが、青葉の姿はない。神通は声すらしない。代わりに松の義体だけが地面に転がっている。その生首が笑い、言葉を紡ぐ。声すらも松のものに切り替わっていく。

「え、あ、ああっ」

『——幼いですね。この程度で我を失うとは。意思が弱すぎますよ、桃』

どこか論すような声が響く。

「ちがう、そんなはずじゃ……なんで、なんで……っ!」

青葉の姿を探して首を振る。何処にいる。

「松おねーちゃんを、おねーちゃんを返して……」

『返しても何も、私の首を跳ね飛ばしたのは桃でしょう?』

「ちがう、私じゃない! 私じゃない……私じゃ……」

『でも、あなたが跳ね飛ばした』

「違う、コレは松おねーちゃんじゃない……私じゃない……違う……!」

『わかりますよ。私のことを不気味に思っている。目の前に倒れているのが誰なのかわからないでいる。ただ不気味で、怖い。目の前に転がっているものが、本当に生きているのか死んでいるのかわからないでいる』

横になった生首が起き上がり——桃を見て微笑んだ。

『外見上は生きてるように見えるものが本当に生きているのかという疑惑、その逆に生のないものが本当は生きているのではないかとい

う疑惑。……人形の不気味さはどこから来るのかといえば、人形は人間のひな形であり、それは人間自身に他ならないからです。人間が簡単な仕組みと物質に還元されてしまうのではないかという恐怖。それ即ち人間というものの属性が本来虚無に属しているのではないかという恐怖。生命というものを認識しようとした科学もこの恐怖の醸成に一役かうことになった。自然現象が簡単な法則の集合体であるということを証明することは人間もまた簡単な法則の集合体であることであることを証明することと同義だからです』

「なにを、言ってるの……わかんないよ……!」

声がどンドン機械的なノイズに塗れていく。目の前のソレは……アレは……彼女は……誰だ？

『人体は自ら発条を巻く機械であり、永久機関の生きた見本である——18世紀の人間機械論は電腦化と義体化によつて再び蘇りました。我々水上用自律駆動兵装はその一つの終末の形。生身の人間が我々を人間だと認めようとしなないのは、それを認めた段階で自らも機械であると認めることに他ならない——誰かが人形と見るからこそ、私も、あなたも、ここにいることができる』

「違うよ……! おにーちゃんもおとーさんもそんなこと言わない……!」

『言わないだけで、思っていない証拠はどこにもないでしょう?』
「もう、聞きたくない……聞きたくないよ……どうして、松ねーちゃん……」

答えの出ない問いに桃は膝を折った。

どうすればいいのかわからない。ただ、考えることをやめたかった。

私は、松は、あの人は……。

「もう、聞きたくないよ、何も……」

それでも、思考はどうにも止まってくれなかった。

外部制御で装甲を解放すると中からは汗だくの少女が出てきた。

「……骨格照合完了。やはり零世代の松型『桃』ですね」

神通はその子を抱きかかえるようにして装甲の外に出した。その顔を覗きこんでどこか暗い顔をする神通。

「青葉、聞きますけどやりすぎではないですか？」

「これでもちやんと加減してますよ。特調六課謹製の防壁迷路のストックの中ではある意味一番ソフトなものを組んでます」

「……思いつきり目の焦点が合っていないですし、息が上がるようなプログラムが一番ソフトなんですか？」

「思考がループするだけで良くも悪くも死ねないように作ってますからね。これで情報を引き出せなければレベルを上げていくことになるんですが、まあ今は動きだけを封じればいいのでここで止めといていいでしょう。自殺されないように後ろ手に拘束してQRSプラグのあたりを確認してくださいね。自分で脳を焼き切られたらことです。ボディチェックで全部ひん剥きたいところですが、捕虜とはいえ少女を外で裸にするのはやめておきましょう」

そう言つてポケットから結束バンドを取り出そうとして青葉は眉をしかめた。その様子を見て神通は苦笑いだ。

「……その傷だと電脳以外総とつかえかもしれませんね」

「神通さんも似たようなものじゃないですか。左腕繋がってるのが奇跡でしょう？」

「……青葉も右半身ズタズタですからね」

そう苦笑いをしたタイミングで路地からひよっこり影が顔を出した。

「終わりましたか？」

「永野大佐が応援に来てくれないから、青葉、もうボロボロじゃないですかあ」

「君たちで辛勝がやっとの相手でしょう？ 私ではどうにもなりませんよ」

永野大佐が杖をつきながら寄ってくる。両手と両足の親指を拘束され正座状態で拘束させられた桃を見て眉をひそめた。

「防壁迷路でバッドトリップ中ですか？ 青葉、ルートは？」

「チャーリー011です」

「……それで効果がここまで出るとは、いやはや。仲間への信頼がよっぽど強いのか、ガラスのハートなのか、少々判断に困りますね」
後ろから追いついた阿武隈が青葉たちの様子を見て「うわっ」と悲鳴じみた声を発した。横を歩いてきた正一郎もどこか顔が青い。

「どうされました？」

「どうされましたもなにも、ひどい怪我ですけど……」

正一郎の声に神通は軽く笑った。

「大丈夫ですよ。義体の大部分は交換になるかもしれませんが、電腦に問題は無いので大丈夫です」

「やっこの義体も使い込んで慣れてきたのに、フィッティングからやり直しですねえ」

青葉はそう言うが、阿武隈達の顔は晴れない

「……それ大丈夫なの……？」

「まあ一過性のヤバさはありません。痛覚遮断してないと気絶しそうになるくらいにはヤバイですよ。……その犯人はバッドトリップの最中ですが」

「……何をしてるの？」

青葉はどこか苦笑いだ。

「物理戦では勝てそうになかったので電腦ハックさせてもらいました。相手のオートの攻勢防壁でこちらも焼き殺されかけましたけどね。なんとか防壁迷路に誘導して、幻影囁ませるので今こんなことになってます」

「相手に引きずられて右半身をヤスリ掛けされながら、よくQRSプラグにアダプタかませましたね」

「付けてしまえばこっちのもんですからね、装甲の背中チャックは降ろせない。四足で背中に手が回らないなら尚更です」

神通の感嘆に青葉はどこか胸を張る。それを見た永野が軽く笑った。

「青葉、疲れてるところ悪いが、とりあえず防壁迷路を解除してください。これだけ効いてるなら解除しても暴れないでしょう。阿武隈、エ

イム」

永野の声に阿武隈が主砲を構える、それを見て青葉が有線で桃にながった。――その直後。

「――テメエら桃から離れろっ!」

大きな鎌が至近距離で振り下ろされた。

それを見た時、竹は息が止まるかと思つた。

「――桃っ!」

後ろ手に縛られ、座らされた桃の姿。その目はきつく開かれたまま、まるで酸素不足の金魚のように口を動かしていた。

光学迷彩を展開したまま駆けだす。体はもう限界が近かったが、そんなことはもう関係なかった。全力で駆け、大鎌を振りかぶる。

「テメエら桃から離れろっ!」

光学迷彩解除、桃に砲を向けていた阿武隈に向けて振り下ろす。甲高い金属音が響く。同時に砲撃の音。とつさに左主砲の基部で鎌を受けた阿武隈が眉をひそめながらも拮抗していた。右の主砲からは煙が立ち上っている。竹は左の脇腹に強烈な痛みを感じながらも鎌の切っ先を押し込む。

「テメエら桃に何をしたっ!」

「襲ってきたあなたたちがそれを聞きますかっ?」

阿武隈がそう言つて左腕を引いた。金属がすれる嫌な音が響く。

お互いが弾き合うように距離を取った直後——竹の膝が崩れた。

「——ナイスショットです、扶桑、五月雨」

そう言つて永野が前に出る。彼に向けて鎌を振り上げた直後、再び銃声。鎌が明後日の方向にはじけ飛ぶ。

「二応言つておくと桃ちゃんは一時的に義体の機能をロックさせてもらっています。数日は混乱が残るだろうが別状はないでしょう。——変なことを考えない方がいいですよ。青葉が桃とリンクしています。言つてる意味がわからないはずがないでしょう?」

それは桃の精神を青葉が握っているということだ。攻勢防壁でも流されたら桃の意識が戻った時に、竹たちが知っている桃である保証はない。

「……悪党が」

「悪党で結構。別に聖人君子になりに来たわけではありませんから。……あなた方には聞きたいことが山ほどあります。洗いざらい吐いてもらいましょう」

「誰が……」

反射的に噛みつきこうとした直後、永野が軽く手をあげた。それを青葉が見ている。それだけで竹は口を噤まざるをえない。

「……わかった。あたしが全て話す。桃は関係ない」

「青葉、攻勢防壁解除」

「了解」

青葉はそう言つてQRSプラグを引き抜いた。

「利口な判断です。桃の身柄の安全は保障しましょう。貴女が協力的である限りはね。……とりあえずこれで作戦は終了ですかね。合田君、囮役を押し付けて申し訳なかった」

「いえ、阿武隈が守つてくれましたから。……彼女たちに聞きたいことがあるのですが、質問しても?」

永野は肩を竦めてから軽く避けた。竹に正対するように立ち、正一郎は彼女たちを睨んだ。

「……去年の9月19日、合田直樹中将を射殺したのは、あなたたちか

？」

その問いに、阿武隈は息を飲んだ。正一郎を睨むように見つめて竹はゆっくりと言葉を選んだ。

「……そう。あたしたちが撃った」

「ホルデンの指示に従ってか」

「そう。あたしがスポッターで、松姉が撃った」

それを聞いて正一郎はしばらく動きを止めていたが、ゆっくりと腰に右手を伸ばした。

「正一郎さん……」

拳銃を取り出しながら正一郎は言葉が続けた。

「……あなたたちは、ホルデンという存在を疑わなかったのか？」

「疑ったと言ったら、あんたはそれを信じる訳？ 疑わなかったと言ったら、あんたはそれで納得するっての？」

質問に質問で返して竹は笑った。

「理由は何であれ、あたしらがあんたの親の仇であることにはかわりない。それを言い逃れる気はないよ。あんただけは、あたしらに復讐する正当な権利がある」

そう言って竹は目を細めた。

「……男の子だろう？ どうするかは、自分で決めな」

正一郎は拳銃のセーフティに触れることなく、ホルスタに戻した。

「……目には目を歯には歯を、では無法が過ぎるから」

「あたしたちを許すと？」

「まさか」

そう言ってどこか寂しげな笑みを浮かべる。

「許せるわけがない。でもあなたを殺したら、誰かがどこかで泣くんですよ。さすがにそれで殺されたくないからね」

そう言って正一郎は真正面から竹を見下ろした。

「……全部話してもらいます。なぜ父が殺されなければならなかったのか、知っていること、洗いざらい全部。それがあなたにできる、唯一の贖罪だ」

そう言って正一郎は言葉を待つ。

燃え盛っていた車の煙が薄くなり、クリリスクを覆うスモッグに溶けて消えていった。

「全く、骨が折れるな……第15波の確認だ」

杉田の声に航暉は飲んでいた水を吹き出しかけた。

「おいおいおいおい。もう400機近く落としてるぞ……。どれだけ航空戦力を拡充してるんだ、奴さん。……加賀の疲労が限界だ。飛龍、蒼龍出られるか？」

『こちら飛龍。蒼龍共々発艦用意完了してます！』

「了解、CAT-Iから発艦。艦戦を優先して上げさせといてくれ。加賀、とりあえず下がれ。赤城、艦隊直掩を頼めるか」

『了解しました』

『私はまだ戦えます……！』

「今戦えてても数時間後に闘えなきや意味ないんだ、加賀、お前の処理能力はこの先つでも鍵となる。温存しておきたい。戻れ」

航暉はそう言って無線を切る。自分の中に余裕がないのに気がついていた。

「……相手を誘引するのが目的とはいえ、ここまで多くなるとは思っ
てなかったな、まったく」

「でも航空戦は昼だけだろう。夜は笹原と俺で何とかするからがんばれよ飛燕」

先ほど指揮に上番したばかりの杉田が笑う。それを見て航暉は力
ない笑みを浮かべた。シートのヘッドレスト脇に無理やり吊り下げ
た袋からエナジーバーを取り出して齧る。

「かれこれもう10時間以上こうしてるんだが、いつになったら奴さ
んは引き下がってくれるんだ？」

「……トイレ休憩込でその場所最後に立ったのはいつだよ」

「ヒトマルフタサンだが？……飛龍、CAT-Iチエックイン了解。
システムグリーンライト、チエックオンモニタ。発艦を許可する。姿
勢制御をローンチへ移行」

割り込んだ飛龍の無線に答える航暉に呆れたような表情を浮かべる杉田。

「おいおい、7時間近く席立ってないのか。体に毒だし規定値限界じゃないか?……金剛、三式弾用意、バラージで鷹の眼行くぞ」

「ならお前がこの航空戦全部捌いてくれるのか? ……飛龍の発艦を確認。蒼龍のCATIエントリを許可。飛龍は艦戦の用意を整えつつ赤城と合流しろ」

「金剛、レコメンドファイア。……俺がこの量を捌くのは無理だな。海大の演習で鳳翔さんに副砲ガン積みにしてたのはお前も知ってるだろ」

「良く知ってるよ。全く、マンパワーに抛りすぎたチーム編成は疲れるぜ」

「同感だ。……来るぜ月刀。玄関でお出迎えだ」

二足開きで足踏み、胴造り、安定したら弓構え。呼吸が整っていることを確認して打起こし。弦がキリリと鳴る。緊張が一気に高まっていく。

「第二次攻撃隊、発艦っー!」

弦が一気に鳴った。その姿勢で屋の行く末を見やる。残心。その先で打ち出した鍬が揚力を得、空中を縦横無尽に駆けていく。

「……頼むわね、友永隊」

そう言う視線の先で一気に機体が高度を落とす。極低空を飛び込む艦攻隊。飛龍の真骨頂たるその高い機動制御により、荒波の中を高速で艦載機が抜けていく。部隊無線が入感する。送信元は司令部だ。《蒼龍、艦爆を1飛行隊分こちらに回せ。あとCVW—201の三番機を出すぞ》

「提督……大丈夫ですか？」

横で矢を番えていた蒼龍の戸惑った声が響く。それには苦笑いが帰ってきた。

《これくらいでへこたれるようじゃあ、准将なんて務まらんさ。回せ》
「わかりました、彗星を8機預けます。1番から8番、ユーハブコントロール」

《アイハブ》

蒼龍が弓を引き絞り刹那のうちに矢を放った。それが一気に高度を落とす。航暉が操舵する航空機は艦爆隊。要は急降下爆撃隊だ。通常の動きなら高度を上げるのが正解だ。だが、航暉の場合はことなる。

「極低空からの水平爆撃……何度見ても冷や汗ものよね」
「……たしかに」

蒼龍の言葉に飛龍も頷く。波が高いためまだ高度を稼いでいるが海拔5メートルを割っている。狂気の沙汰とも言える高度だ。その高度で飛龍の航空隊に追いつかんと速度を上げる蒼龍艦爆隊。飛龍が繰る艦攻隊よりも一機分ほど低い高度でゆっくりと邂逅した。

航暉がタイミングを指示した。密集形態からゆっくりと散らす。攻撃対象は空母ヲ級2隻と未確認種の航空型1隻。未確認の航空型がおそらく戦術の鍵を担っていると思われるため、これを潰すのが最大の目標だ。

夜闇が近くなってきたことと、天候が優れないためコントロールには細心の注意が必要になる。だがそれを乗り切ることができる技量があれば、これはチャンスとなる。青波碎ける海の中で小型の艦載機は電子的・視覚的に海面のノイズとして処理される。運よく見つ

けたとしても、それを追いかけ、撃ち落とすのは普段に比べて格段に難易度が上がるのである。

《雨が、酷くなってきたな》

「ですね……」

「目視で合わせるのは大変かと思いますが、これで大丈夫ですか？」

蒼龍の疑問も最もだ。今は杉田の操る鷹の目のデータに則って誘導をかけている状況だ。そのみに頼っての誘導は確実性が担保されない。そのデータが正しいというのは、その場に行ってみないとわからないのだ。

《大丈夫だと信じよう。高峰がいれば安心して誘導できるんだが》

《なんだよ、俺の眼じゃ不安か》

不満げな無線が割り込んだ。鷹の眼を使って観測データを送っている杉田だ。航暉のコメントなのだが、それに頷きかけた蒼龍が慌てる。

「そ、そう言うわけでは……」

《鷹の眼で艦載機を誘導するのに慣れてないだけさ。そうカツカするなよ。杉田》

航暉がフォローを入れるとどこか不満げな鼻息が無線に乗った。少しほっとする。

《さて、そろそろ捕捉されるぞ。一気に飛び込んで喉笛に喰らいつけ》
航暉の声に、飛龍と蒼龍の声が揃う。強風と雨、そして大禍時とも言える日暮れを隠れ蓑とし、高速で海面付近を駆けていく。

《レーダーコンタクト》

敵の艦隊を捕らえた。ほぼ同時に敵の機銃の曳光弾が伸びる。精度はかなり高い。電探持ちが存在する。

「飛龍航空隊！ 魚雷投下！」

無線に叫ぶと同時に魚雷を落とす。重りを失い、急激に機首が跳ね上がった。そのまま反転して去っていく。しかしながら、蒼龍の艦爆隊は未だ低高度を驀進中だ。

「頑張つて、江草隊……」

蒼龍の声が飛龍に届く。飛龍は司令部が統合したレーダー画面で

それを追うが、未だに全機残っている。敵艦隊に特攻でもするのか、という距離まで近づいて、そのまま艦隊上空を飛び越えた、直後。

「……！」

「ここからでも閃光が見えるって……蒼龍、あの航空隊に何積んだの？」

「えつと……サーモバリック爆弾……」

「……遅延信管とはいえ、それを極低空投下……」

サーモバリック炸薬、気化爆弾とも呼ばれるそれは炸裂範囲が広く、投下後すぐ炸裂する極低空投下では巻き込まれることになる。半ば自殺行為だ。

《大丈夫だ。おかげで奴さんの艦載機のコントロールが切れた。沈んでは無いが、これで艦載機攻撃はもう来ない》

《了解だ》

無線の奥で笑った野太い声。

《月刀准将はすでに連続指揮規定時間を超過している。この先は杉田勝也大佐が指揮を執る。武蔵・大和の展開終了後、金剛と霧島は一度帰還せよ》

《おい、勝手に決めるな》

《こんなところで過労で倒れられるとこつちが困るんだ。航空隊は潰したんだろう？ なら後処理は砲戦部隊スライプの仕事だ。さつさと休んどけ。お前はそもそも昼間見張ってればいいんだから、さつさと休め》

《……わかった》

航暉が渋々了承する。

《飛龍・蒼龍は航空隊を回収。悪いが敵航空隊がそれでも残ってたときの対空砲台として残ってもらう。……夜のうちに決めるぞ》

「了解」

夜戦に向けて、戦域が加速していく。

「さて、艦載機の回収も終わったんだ。出てけ」

「……本当に追い出す気か、お前」

杉田に半眼を向ける航暉だが、杉田は肩を竦めた。

「何のために渡井を呼んだと思ってるんだよ」

「そーそー。夜はサブマリナーたちに任せておきなつて」

そう言つてエナジーバーを齧る渡井が座席につく。彼の手元ではタブレット端末とヴァーチャルキーボード、トラックボールに音声入力システムコントロールユニットと入力装置の見本市が開催されている。

「……良くそれだけいじれるなお前」

「技官舐めると痛い目見るよ、航暉くん。僕はこれでも天才なんだ」

おどけて言う渡井。杉田が軽く笑みを浮かべた。

「まあ、なんであれ秀でるものがなければハンモックナンバー上位独占なんてできてないだろう。間違つては無い」

「確かにそうだが、そこまで大量に使つてやる用事でもあるのか？」

「用事もないのに、こんなに使使すると思うかい？ 鷹の眼が使えない対象を一手に引き受けるんだよ。全くもつて大変だけどね」

「よくやるよほんと」

航暉が呆れたように言うと同時に、その語尾が欠伸に潰れた。

「ほら、気が緩んだら疲れが出る。寝とけお前」

そう言われ航暉は蹴りだされた。

「……義足で蹴るのはなしだろう、杉田」

蹴られた尻を押さえながら航暉は自らの執務室兼仮眠室に向かう。波の影響で大きく揺れるラツタルを上り、部屋のドアに手を掛け、動

きを止める。

「……空き巣か」

腰に下げた拳銃を引き抜いた。制服のベルトをノブに掛け、ドアの前を避けて立って遠隔操作でドアを開ける。同時に中から笑い声が響く。

「あんたさー、自分の部屋に入るときにそんな面倒なことしているわけ？」

「部屋に誰かいる気配がするのに用心しない馬鹿がいるか」

拳銃を右手に下げたまま、航暉は部屋の中に入る。

「いやあ、さすが即応打撃群司令長官殿の艦内私室。ベッドの仕立てまで違うとは」

「毛布もシーツもお前らと同じもんだ。広い個室が使えるせいだろう。それよりなんでお前は俺の部屋にいるんだ、笹原」

「えー、まずかった？」

「まずいに決まってる」

人のベッドに横になつた笹原を睨みながら航暉はドアを閉める。

「ずるいよねー、給料も待遇含めて1階級でこの差……」

「ただ単に左官と将官の違いだろう。それで、わざわざ俺のところに来た理由はなんだ？」

「せつかちいは嫌らわれるよー」

部屋に鍵をかけて航暉は拳銃を仕舞う。同時に笹原が笑って体を起こした。

「大丈夫。部屋にちよつと手を入れたけど、君の部屋には盗聴器やらなんやらは無いらしい」

「……またヤバイ橋か」

「まあね。でもまあ、とりあえず今すぐじゃない」

笹原は肩を竦めてそう言う。それを聞いてため息をつきながら航暉はどっかかりと椅子に座り込んだ。

「それで、何があったスクラサス」

「グラウコスにはほぼ間違はなく身内に存在する」

笹原の言葉に航暉は眉を顰めた。

「どういうことだ?」

「信頼できる筋からの報告があつてね、500艦隊は聞いたことあるでしょ?」

「あの幽霊艦隊か。いろいろ噂は聞いているが、それがどうした?」

「うん、その部隊が極東方面隊総司令部正式発効の命令書を根拠に、高峰君が仕掛けたブービートラップに引っかかった。完全防備の合田少佐にアタックをかけたつてさ」

「……それはまあ、お疲れ様としか言いようがないんだが」

航暉がそう言つて苦笑いを浮かべた。当然航暉は高峰が合田正一郎少佐を餌にグラウコスの狩り出しを行うプランは聞き及んでいた。あんなあからさまな罠、誰が引っかかるのかと思つたが、案外効果はあつた訳だ。

「どうもお粗末じゃないか。わざわざそれで捕まりに来るとは」

「それは私も思うよー。まあ、人事部のサーバーを爆破されて、次の標的は中央戦略コンピュータかもしれないって焦ってるんじゃないの? コンピュータが保身に走るつても珍しいからこの先も暖かく見守つてみたいけど……まあそんな時間もないのが現状だ」

彼女はそう言つて航暉に顔を寄せた。

「グラウコスはこれまでの攻撃でプレアデスインターコンチネタルの衛星を使用してたし、米帝寄りの視点で活躍しているのは間違いない。『それ』がこのタイミングで動いている。狙っているのがなんなのか、わからない訳じゃないわよね」

「景鶴の拿捕、か?」

「もしくは破壊だね。体よく南北アメリカ方面隊との合同作戦になつた訳だし。その前に決着を図りたかつたのもわからないわけじゃない。グラウコスの問題を解決済にしておきたいんでしょう」

そう言つて笑みを浮かべる笹原。

「……景鶴の拿捕のために何があつたとしても、米帝は関係ない形になるからね」

「極東方面隊がそれを容認している?」

「正確には中央戦略コンピュータが、かな。アレらしくないよね。ア

レ、この世で唯一愛国者を名乗ってもいいレベルなのにさ。一定の他国に媚び売っちゃって、もう」

笹原は話題を変えるように「さて」と前置いた。彼の首筋にそつと手を回す。

「そろそろ話してよ、ガトー。スキュラに何を頼まれた？ あんたはいったい何をしようとしてるのかな」

彼女は彼の頭を抱いて、そう問いかけた。彼はだんまり。その様子を見た彼女はそつと目を閉じた。

「極東方面隊が容認するのはまあわからないんでもないんだよ。つまり結論だけどさ。でも、それをスキュラが容認するはずがない。スキュラが信頼する数少ない駒であるガトーがここに及んで動きがないのはなんでなのかしら？」

自らの胸に抱き込だ頭を撫でて彼女は続けた。

「雷電姉妹が質になってるから喋れない？ でも、スキュラの言いなりになったところで彼女たちが救われないのはわかっているでしょう？ ただのリスクヘッジで従ってるだけ、真綿でじわじわ首を絞められているのを眺めてるだけ。……月刀航暉、ガトー、月詠航暉。あんなたちは、それで満足？ 彼女たちがじわじわ殺されていくのを眺めるだけで、あんたたちは幸せになれる？ 彼女たちがそれで幸せになると思う？」

耳元に囁くように言われた言葉が彼の脳裏に刷り込まれていく。航暉はそれでもしやべらない。

「答えられないかな。わかるよ。あんたたちにとって、彼女たち二人はどう動かしても壊れる薄いワイングラスみたいなもの。どう梱包しても壊れるリスクがある。だからあんたたちは誰かに話すことができない。それが彼女たちを壊すかもしれないから。それは絶対避けたいでしょう」

でも大丈夫と嘯いて、頭に回した手に少しばかり力をかけた。

「パンドラの箱を開けたことを誰も知らなければ、約束を破ったことにはならないわ。それに、私があの子たちを守ることもできる。スキュラのやり口は私が知っているからね。誰にも話さずに抱え込ん

でいるより効果的に守れるよ。貴方が話さない理由はどこにもないわ」

閉じていた目を開き、彼女が続ける。

「さあ、話して。月刀航暉。貴方はなにを頼まれたの？」

「……まるでマタ・ハリだな、スクラサス」

航暉はそう鼻で笑った。彼女はそれを聞いても表情を崩さない。

「それが本性だろう。本質としてはスキュラと変わらん。自らの利益のために俺たちを利用する。それだけだろう？」

それを聞いて彼女はわざとらしく溜息。彼の頭をゆつくりと放した。

「……その側面は否めないわ。でも、それだけだと思われするのはちよつと心外。私個人としても助けたいと思うし、それがお互いの利益になると思ってるわよ。貴方は電ちゃんたちを助けられて、私はグラウコスとその後ろにちらついている極東方面隊の病巣を抉り取る。Win—Winの関係で行きましょうよ」

そう言つて笹原はメモ帳を差し出す。

「考える時間はあまりないのが現状よ。おそらく……スキュラはもう動きだした。グラウコスはすでに仕込みを終えているはず。……電ちゃんたちが巻き込まれない保証は一切ない」

メモ帳の文字列を航暉の目線がなぞる。彼の息が一瞬止まった。

グラウコスはALの司令部員の可能性大。

視線でなぞり切ったタイミングでメモ帳が捲られた。次の文字列が現れる。

「いい返事を待ってるわ。お互いの利益になればいいわね」

航暉からさつと離れてメモ用紙をポケットに突っ込む笹原。水溶性のメモ用紙なのだろう。すぐに処分されるはずだ。

「さて、そろそろ私もシフトインだから行くわ。川内が夜戦要員で駆り出される訳だし」

「気をつけるよ笹原、慢心したら駄目だぞ」

「あんたもね。カズ君」

笹原がひらひらと手を振って外に出ていく。航暉はそれを見送ってため息をついた。

「何事もなくとはいかないな、全く」

二枚目のメモ帳の文字列が頭から離れない。

「……電と雷のバックアップが動いている、か」

バックアップは航暉が破壊したはずだ。それを彼女たちが望んだのだから。

だがもし、不完全であつてもそれが残っていたとしたら、それは間違ひなく中央戦略コンピュータの管理下にあるはずだ。それが今も電たちに干渉しているとしたら。

「電と雷の記憶への干渉が今も行われている可能性あり……不用心だったな、俺は」

それで終わればまだマシかもしれない。いつ誰が二人を乗っ取るかわかったものではないのだ。その可能性が出てくる。

「……ブラフなんだろうが、割り切るのはリスクー過ぎる」

デマの可能性が高いとしても、無視できないのは確かだ。その情報をスクラサスは航暉に売りつけた。すでに貸し1の状況にさせられたともいう。

左腕にはめた時計を撫ぜる。それを送ってくれた大切な部下を思う。

「……無事でいてくれよ、電」

眩いて、拳を作った。

「……乗ってはこない、か」

笹原は航暉の部屋を出てから長く細く息を吐いた。ラツタルを下って指揮所のある甲板まで下る。ラツタルの出口で足を止めた。

「川内、聞いてたね？」

「うん、それで？」

出口で待つていた川内に微笑みかけて、笹原は足を止めた。

「状況は芳しくない。でももう止められない。カズ君には悪いけど、こっちで勝手に動かせてもらおう」

「司令官はそれでいいの？」

「分水嶺はとうに過ぎ去った。もう止められない。諦めるわけじゃないけど、もう、間に合わない」

そう言つて笹原はQRSコードを首筋から引き出して、川内に投げた。危なげなくそれをキャッチした川内がそれを自分のうなじに差し込む。回線がオンラインになると、間髪入れずに笹原が通信を飛ばした。

『電ちゃんが“発症”した。記憶中毒のレベルⅢ。このまま行けばあと1年もしないうちに、電は《いなづま》を認識できなくなる』

『……止める手段は？』

『ないね』

笹原は即答した。川内は言葉を詰まらせる。

『それはカズ君自身が叩き壊した。正直、このまま壊れていく電ちゃんを抱いて心中つていうのが月刀航暉の一番幸せな結論になりそう
で戦慄してる。まあ、させないんだけどさ』

『電脳通信の内容に川内は腕を組んだ。』

『……それで、司令官の着地点は？』

『電にもカズ君にも死んでもらう訳にはいかないの。今後の国連海軍のことを考えても、私個人の友人としても。だから何とかするしかない』

『……バックアップのリロード?』

『それでもいいんだけどね、それじゃあ意味がないんだ。記憶と経験の乖離が起こってるのは《水上用自律駆動兵装としての電》が生まれた時から始まって。バックアップのリロードをしても、《水上用自律駆動兵装としての電》がまっさらな状況になるだけだ。それより前に遡らないと解決しない。その可能性はマニラでカズ君自身が破壊した。……もう残ってないのさ。月詠雪音の完全なバックアップは』
笹原はそう通信にのせて、自虐の笑みを浮かべた。

『それにカズ君はそれを望まないよ。死者を蘇らせてもゾンビにしかならないのは、自分の体でよく知ってるだろうから。それを部外者のくせに止めなくなる私がきつと間違ってるのさ。それでも最悪のシナリオを回避しなくちゃいけない。間違っていたとしても、呪われたとしても』

『何をやる気なの?』

川内の視線の先で笹原は目を閉じた。

『とりあえずの処置になるけど、電ちゃん自身が《自らがいなづまである》という自覚を持ってもらうしかないね』

『具体的には?』

笹原は黙り込む。そして目を薄く開いた。

『……川内。犯罪者になる覚悟はあるかい?』

その言葉に川内は黙って目で先を促す。

『ディスプレイビューターの原板が必要だ。グラウコスを私達で確保する必要がある』

『まさか……電を洗脳する気!?!』

『雪音ちゃんの疑似的な個アイデンティティ・インフォメーションの情報を刷り込んで、記憶と経験

の乖離を止める。それで症状悪化にストップがかかるはずだ。それしか延命できる手段はない』

笹原は至極真面目な表情をして、そう言った。

『川内、ここから先が辛ければ降りていいよ。ここから先は大人の仕事だ』

そういい残して笹原が有線通信を畳み、コードを回収した。

「出撃が近い、用意してね」

笹原は笑って川内の肩を叩く。そうして、司令部の方に足を向けた。

「降りないよ!」

その背中に向かって、川内が声をかける。

「司令官一人に、悪人面はさせない」

「……まったく、強情な部下だ。ほんと」

川内に肩を竦めることで返事として、司令部の方に歩いていく。ため息を一つ。

「……ため息が増えた。まずい兆候だ」

呟いて笑う。状況に流されている。良くない。これでは『笹原ゆう』らしくない。掌で踊らされるのは全くもって好みではない。だから誰の掌に置かれているのかを考える。それを刺すならどういうことができるかを考える。

「……グラウコス」

口にして、苦い。

米帝側とのコネクションがあり、自ら働くほどに米帝に忠誠心を持っているか、弱みを米帝に握られている人物。そして、パラオでの事件の時に現地にはいた人物であり、景鶴や五月雨に接触可能な人物。そして、比較的容易に様々な情報にアクセス可能な権限を持つ人物。

そんな人物に、笹原は一人だけ、心当たりがある。

アメリカ生まれの日系人で、外務省勤務の経験から米帝との取引も容易に行え、今、AL作戦に同行している、第五〇即応打撃群副司令長官。

(高峰春斗大佐。あなたがこれを望んだの? それがああなたの正義かしら)

奥歯を噛み締めていることに気が付き、力を抜いた。

まだ確証はない。それに希望を求める。だがそれは同時に危険であることは百も承知だった。確証バイアスがかかれば、事実確認すらおぼつかない。それでも、そうではないことを願う。

「……デイストリビューターが手に入るまで、無事で居なさいよ。雷ちゃん電ちゃん」

笹原が司令部に入る。

「上番にしては早いねー笹原」

「渡井氏が遅いの。いつともギリギリじゃない」

「とか言いながら夜戦だから早く来たんじゃないのか？」

「カツちゃんひどくない？」

杉田にそう言って笹原が指揮卓につく。今は切り替えなければ、川内が沈む。

「来てくれて助かったよ。水上艦と潜水艦の同時指揮は疲れるからねー」

「どおりでそんなに入カインターフェースを広げてるわけね。ご苦労様。向こうの現状は？」

隣の渡井にそう聞くと、ノートタイムで帰ってきた。起動した管制卓の表示を見ながらQRSプラグを接続。情報の共有を開始した。

「予定通り敵泊地確認だつてさ。それに、ヒメちゃんと電ちゃんにご招待が来たつてさ」

「ご招待つて、アメリカ方面隊から？」

「深海棲艦から。今から向こうも鉄火場だ。こっちの夜戦に応援は難しそうだね」

「そっかー」

笹原も知らない世界に戦闘が移行しようとしている。打てる手は少ない。

「とりあえず、無事に生き残ることを考えなきゃね」

「だねー。とりあえず、水上艦のコントロールを移譲していい？ 向こうから対潜ソナーの解析の応援要請が来てるんだ」

「了解。渡井大佐から水上艦指揮を受けとるわ。……時間合わせ、今」
渡井がトラックボールを操作した。笹原の目の前のディスプレイ

に情報が流れ込む。

「ユーハブコントロール」

「アイハブコントロール」

笹原が笑みを浮かべる。

「水上艦指揮が笹原に変更になったよ。みんな大丈夫？」

《こちら大和、了解しました。よろしくお願いいたします》

皆の現状が表示される。損壊は皆無。戦闘域に飛び込もうとしている比叡と榛名に目を向ける。

「比叡、左舷1点転進、榛名はそのまま。エンゲージメントまであと1分半、用意は？」

《『夜鷹の笹原』指揮下に入るのは初めてで、榛名、少し緊張してます》

「大丈夫、そっちに合わせるから。比叡、気合い入ってる？」

《当然ですっ！ 気合い！ 十分！ 行きます！》

「おーけー、なら行こう。さっさと終わらせようね。———エンゲージ」

笹原の戦場が、幕を開ける。

いつだって、そうだった。兄はずっとわたしの前を進んでいる。わたしに背中を見せて歩いていく。私はその背中を、必死に追いかけてきたように思う。兄の背中にはわたしにとって特別だった。

父も母も、わたしを本当に大切にしてくれた。無理をさせないように、泣くことがないように、父も母も、家のお手伝いさんや執事さんもみんな、本当によくしてくれた。足りないものは、何もなかったと思う。もちろん喧嘩もしたし、つらいことがなかったとは思わないし、言えない。それでもわたしは恵まれたことに変わりないはずだ。周りの人はみんな、いい父であり、いい母であり、いい人だった。

それでも兄は特別だった。家のみんなにとっても、私にとっても。家の長男であることもあったし、男子と女子では扱いが変わるものもあったのだろう。私たちとは明らかに背負うものが違っていた。家は「月一族」とも呼ばれる『風月三友会』の一角を成していた。兄はいつかそこに家の当主として顔を出すことが求められていたはずだ。そのためあの人は、誰かを率いること、誰かに背を向け立ち向かうことを覚えたのだと思う。背中を預けるのではなく、背を見せるだけ。「一身独立し、一国独立す」と言ったのは福沢諭吉だっただろう。誰かを頼ることはせず、自らの足で立つように、兄は教えられた。媚び諂うことも、驕ることもなく、等身大の人間として、誰かを率いることを教えられた。

私はそれを、どこか寂しいと思っていたのだと思う。きっとあの人は誰にも頼らず、どこか遠くまで行ってしまおう。そう思った。だから、私は、あの人を追いかけた。あの時は小さかったから、そこまで明確に意識していたわけではないのだろう。それでも、なんだかそれが嫌だったのだろう。そして、あの人は——に歩調を合わせてくれたのだと思う。私はそれに全力で追いつこうとして、あの人は、私が追い付ける速度で歩いてくれた。だから、私はずっとあの人の背中を追いかけることができた。突き放されることもなく、追いつくこと

もできずに、ただひたすらに追いかけることができた。

だから、私は、——は、あの人の隣に立つことはできなかつた。ただ、追いかけるだけ。あの人が歩いて、切り拓いた道を追いかけるだけ。前に立ちほだかる困難は、いつもあの人が切り伏せた。その後を、必死について歩くだけ。いつも守ってもらおう立場だつた。

背中を守ると言えば聞こえはいいだろう。いつ背後から困難が襲ってくるかわからないからだ。それでも、あの人は、——さんは、

——に、背中を守ってもらおうことを望まない。他を頼らず、媚び諂うことなく、自らの意志で、自らの行いを徹すことを是とした人だ。だから——を頼ることはない。頼りにすると言われたし、私もそれを望んでいた。あの人の部下になつた時から、私がずっとそれを望んで、それができる位置に——さんは、私を置いてくれた。

それでも、あの人は背中を見せて、置いていくのだ。付いて来いと言うし、手を差し伸べてくれる。それでも、私はあの人の隣に立てない。あの人に追いつくことができないままだ。

いつだつてそうだつたじゃないか。私が犬の喧嘩に割り込んで大けがしそうになつた時も、お姉ちゃんやんと喧嘩した時も、みんなを助けたいと言つて、海にでることができなくなつた時も、皆を率いることになつたときも。いつだつて、あの人は私の背中を押してくれた。

でもそれは、既にあの人が歩いて来た道であつて、——が切り拓いた道ではない。危険な海を啓開してきたのは、いつだつてあの人だ。

私は、あの人に、何ができるんだろう。あの人の妹として何ができるんだろう。あの人の部下として、何ができるんだろう。——として、——さんに何ができるんだろう。

盲目のままあの人に付いてきた。あの人を孤独にさせたくない。それだけを願つてきた。それがあの人を、司令官さんを苦しめる。私は、何ができるんだろう。

——は、あの人の重りにしかならないのだろうか。私は、——は。

電はゆつくりと目を開ける。ぼうつと霞む視界の奥に自分の手のひらが見える。暗い部屋で、指の先は仄暗く灰色に光る。親指から順繰りに指を閉じて手をグーにしてから、すぐに開く。義体制御は正常だ。すぐに電腦が戦術リンクに論理接続を開始する。オートフォーカスが始動し、ぼんやりとした視界が瞬時にクリアになった。同時に視力が底上げされる。暗い部屋に合わせて光量が調整されたのだ。

体を起こす。体を覆っていた毛布をめくる。それを畳んで足元に置いていく。両手の指の動きも正常だ。数値を意識しても、意識しなくても、同じように動かせる。エラーの通知は何一つ上がってこない。ほぼ真つ暗な部屋できっちり畳まれた毛布が3枚、出来上がる。誤差は±1センチ以内、許容範囲に収まった。

「——わたしは」

義体の全ての機能が正常に始動していることを、義体を走査していたチェックプログラムが告げる。眠気なんてどこにもない。頭はすぐにクリアになった。その事に違和を覚えていること以外は何ら正常だ。目の端にかかる長い茶色の髪が気になった。そうだ、仮眠をとるために、バレッタを外しているからだ。チェックプログラムは義体を診るだけで、備品の確認をしてはくれない。

ゆつくりと立ち上がる。イナーシヤ・コントロール慣性制御開始。揺れる船の上でバランスをとる。海の上で戦闘を行う事に比べれば、制御はひどく簡単だ。その足で部屋にあるロッカーを開けた。電の備品や私物をしましうスチールの武骨なロッカーを音が出ないように開ける。ロックが外れるカタンという音が鳴って、扉が開く。

浮力と推力を生み出すための出力系をまとめた重い靴が見える。義体を守るためのハイパーケプラー製のセーラー服が見える。扉に引っかけられた小物入れの棚には自分の髪をまとめるバレッタが見える。第一級代表旗艦技能徽章の金色のバッジが見える。第五〇太平洋即応打撃群を示す、5本の稲光を掴む3本脚の八咫鳥が光る部隊バッジが見える。打撃群の独立旗艦を示す、破魔矢を番えた梓弓のバッジが見える。

そして、あの人がくれた万年筆が静かに置いてあるのが見える。あの人に送った腕時計の余ったバンドを入れたお守りが見える。私物——水上用自律駆動兵装の機能維持に必要なもの以外のもの——は、この二つだけだろう。

そう。電の私物はその二つだけのはずだ。あえて言うならば、昨年の五月から、彼がウエーク島基地の司令官に収まったときからの記憶が入る程度のはずだ。間違えても、電が稼働を開始した5年足らずの時間しか、記憶はないはずなのだ。水上用自律駆動兵装に、姉はいても、兄は存在しない。

だとするならば、先ほど浮かんだ情景は。アレをみた主体たる『わたし』は——。

視線を上げる。扉の裏につけられた小さな鏡が見える。そこに移るのは、当然、鏡の前に立つ、茶色の髪を垂らす、小柄な全身義体。鏡にそつと人差し指を乗せ、その輪郭をなぞる。その影に、問いかける。

「……あなたは、いったい誰なのですか？」

「まともなコミュニケーションが取れることでも十分に驚愕だったが、向こうとの取引が成立するとは思ってなかったね」

戦闘指揮所には指揮官全員が詰めていた。井矢崎莞爾少将が欠伸をかみ殺しながらそう言った。それを受けて肩を竦めるのは篠華・リーナ・ローレンベルク中佐だ。

「知能自体は高いようですからね。向こうのフィールドに合わせることで、向こうのトップに謁見する。交渉対象を無事引き出せたのは大きいですよ。ねー、委員長」

「おかげで相手は待ち伏せも奇襲もやりたい放題になりましたけど」

話題を振られた東郷駈中佐がそう返せば高峰が頷く。

「それでも、やつと交渉の第一フェーズに入れる。今回は深海棲艦が考える『戦争の終わり』を知ることだ。可能ならAL方面の停戦を確約させたいところだが、行きつくかわからん」

「だねー。ところで高峰クン。南北アメリカ方面隊はどう抑えるつもり？ 会議に出席させるとか言いだしたんでしょ？」

「決死隊でいいなら来させていい気がしますけど、こっちも決死なわけですし。井矢崎少将こそどうお考えでしょうか」

「出席もなにも、そもそも人間との接触を断ってる状況だよ。こちらからも高峰クン一人捻じ込むので精いっぱいだったんだよ。そんな余裕はないよ」

「では、米帝陣営の足止めをお願いしますね」

「めんどくさいんだけどねえ」

井矢崎はそう言って伸びをした。

「せめて高峰クンが背中を刺されないようには守るつもりだよ。安心して交渉しておいで」

「……」

恨みを買っているところもあるでしょ？ と言外にちらつかせながら井矢崎はそう言った。それに気が付かないふりをして澄まし顔で頭を下げる高峰。

「用意があるでしょ？ ここはもう大丈夫、後は私と、皆で捌くから、退出していいよ」

「了解しました」

「制服で行くの？」

「相手には礼を尽くすのが筋でしょう。もちろん、防弾プレートや対刃のインナーは着ていきますよ。最悪の場合、電と北方棲姫だけでも離脱させるのでよろしくお願いします」

「文字通りの決死隊だね。わかった」

高峰クン、と井矢崎は続けて目を細めた。

「一つ質問がある。君が作戦^M中行方不明者^Aになった場合、我々はどうすればいい？ 君が人質にされた時は？」

「どちらにしても切り捨ててください。高峰春斗という人物は存在しなかったことにしていただいて結構です。その方がメリットも大きい。死体が出たならなお良いですけどね」

高峰が即答。それを最後に会話が途切れる。

「……君の覚悟、了解した。君の遺書が愛する人に届かないことを祈るよ」

「遺書なんてありませんよ、私には。届け先ももうありませんし」

高峰は寂しそうにそう言っつて、制帽を手を取った。

「ほう、珍しいね。ご家族には出さないのかい？」

「父とは離縁しておりますし、母は行方不明のままです。手紙を送る相手はいませんよ。それに、海軍に来る以前は誰かに喧伝できるような仕事ではありませんでしたので、そのころの名残で、書いていますん」

「……悪いことを聞いたかな？」

「少将がお気になさる必要はありませんよ。では」

そう言っつて一礼して高峰が外に出る、それを見送って、井矢崎は溜息をついた。

「ああは言っただけど、抑えられるかわかったもんじゃないんだよね」

「少将」

どこか窺めるように東郷駈中佐が言う。

「もちろん全力は尽くすさ。それでも難しい場合もあるってことだよ。君だっつて切り捨てるだろう？ 人間1人が地球に住む全人口42億人よりも優先させる事態はありえない訳。万が一それが起こるなら地球が42億個必要になる。そんな天変地異、ありはしないん

だ」

それを聞いて東郷は黙った。わざと論点をずらしつつある。白々しいと思いつつもそれを流す。

「だからまあ、彼を助けるコストが状況に合わなければその選択肢はとり得ない。そうならないように対策はするけどね」

わざとらしくため息をつく井矢崎に、東郷はゆっくりと口を開く。

「それで、具体的にはどうされるおつもりですか？」

「問題は南北アメリカ方面隊だ。あそこは世界の警察の名残を引いててねえ。とりあえず軍事力で気にいらなるところを黙らせる大層迷惑な傾向がある。今回当事者だから仲裁役にはなれない。でもここで反撃すれば、向こうのいいようにプロパガンダに使われるだけだろう。したがって反撃もできない。AL^{こっ}方面^ちで使える人材もここにいる司令部員に限られる訳だしね」

MIも修羅場ってるみたいだし、と井矢崎は嘯く。それに噛みつくように視線をあげたのは東郷だ。

「だから見捨てるど？」

「それを高峰クンは承知のようだったけど？ 高峰クンは実際ニューヨーク生まれだから肌で知ってるでしょ。彼の祖国がどういうところか」

どこか皮肉な笑みを浮かべた井矢崎が肩を回してそう言う。東郷は僅かに視線を下げる。その肩をトントンと叩かれる。篠華が右手を伸ばし、人差し指で肩を叩いたのだ。

「怖い顔してる」

「……別に」

「そう？」

東郷はちらりと目を動かす。篠華はその視線が井矢崎に向けられたことに気がついた。それに気がついて笑みを浮かべる。

Плетью обуха не перешибешь
「鞭で斧は砕けない、かい？」

「……どういう意味だ？」

「日本語だと『泣く子と地頭には勝たれぬ』とかになるのかな？」

「聞こえてるよ、篠華くん」

後ろから含み笑いが混じる声が響く。演技臭く肩を竦めて、篠華が振り返る。

「これは失礼しました、井矢崎少将」

「権力者と強者には逆らえない。道理だけどね、それは。でもそれを律儀に守れる時間は過ぎたでしょ？ ロシア語で返すなら、必要は法など待たない……だったかな？」

『待たない』ではなく『知らない』ですね。Нужда закон а не знаетですから」

篠華の指摘に井矢崎はそうだったね、とドライに返した。そして続ける。

「そう、いつだって必要な処置は法を外れる。それでも、成さなければならぬことがある。そのために僕たち軍人が、前線に立ち続ける必要がある。」

井矢崎はそう言った。彼の細められた目の先にある時計は、交渉開始時刻マイナス2時間前を示していた。

「さて、開場の用意を始めよう。悲劇的な喜劇にならないことを、願うしかないね」

『青葉』

電腦通信を開いて問いかける。すぐに無線がつながった。直後に足が思わず止まる。

《なんですかあ？　今、新しい義体に取り換えてる真つ最中で動けませんよ》

『……知ってる。今フェーズ3かどこかだろ』

《あれえ、青葉の行程どこまで進んだか話しましたっけ？》

『視界や皮膚感覚までリンク流しといてよく言う』

《へあっ!?!》

慌てたのか、リンクで飛んだ視界がぶれる。首を曲げて俯くように視界が動いた後、いきなり映像が切れた。同時に皮膚にまとわりつくような感覚や、異物感が消える。下げた視界に移った肌色は見なかったことにした。そのほうが青葉も楽だろう。

『調整液の粘度上げてるのはお前の趣味か？　腹の中に感覚器ないけど気持ち悪い。ナメクジかお前は』

《……うう。全感覚を並列化してるなんて思ってなかったんですよ》

もうお嫁にいけない、と嘆く青葉に溜息で返す高峰。

『別に裸見ても御利益なさそうだからいらん』

《……そういうときは、責任とってもらってやるとか続くんじゃないですか？》

『知らん。で、そっちの状況は？』

青葉の言葉を完全無視して発せられた高峰の返答に、無線の奥はどこか諦めたような溜息が乗る。脳通信に吐息が混じることはまずないから、わざと乗せているのだろう。高峰はそれをスルーして返事を待った。

《平菱の義体制御プログラムは何とかならないんですかね。安全装置四重掛けとかセーフティの誤作動華々しいんですけど》

その返事を聞いて、高峰は義体の調整が既に後半に入っていることを理解する。

『六課のチャンネルはリンクできるか？』

《六課と九課、両方すでにリンク済です》

『上々。グラウコスが仕掛けてくるならこのタイミングだろう。俺がオフラインになっている間、六課の方を頼む』

《了解しました。電腦通信は生きてるので遠慮なく組み込んで下さい》

『その権限も含めて預けるのさ』

高峰はそう言つて常夜灯の赤い光が照らす廊下を歩いていく。制帽は脇に抱えたままだ。鍰の桜葉模様が僅かに光る。

『……方が一のことであつたら、頼むぞ』

《嫌です》

青葉の即答に高峰は思わず足を止めた。

《……生きて帰つてくるんでしよう?》

『それでも方が一の可能性は消えないだろう』

そう返すと、返事は笑い声で帰つてきた。

《帰つてくる気があるなら、帰つてくれますよ。だから青葉はそのお願いは受けません》

『なんだその自信は』

《そりやあ、優秀な方ですから、貴方は》

『答えになつてないぜ、青葉』

《その答えすら出せない頼りない後輩に任せたくなければさつさと終わらせて戻つてきてください。先にクリリスクで待つてますから》

『……わかった。待つてろ』

その声に至極嬉しそうな返事が帰つてきて通信が切れた。高峰は頭を掻いて廊下を改めて進む。その先にはウエルドックがある。広大な広さのドックには既に二人の影があつた。

「待たせたね。大丈夫かい?」

「待つてないのです。高峰大佐こそ、大丈夫なのです?」

電が笑う。いつも通りのように見える、どこか儂げな笑み。すでに艤装を背負い、準備を整えた後らしい。

「大丈夫だよ。少し緊張はしているけど」

「ふふっ、いなづまもなのです」

電がそう言つて振り返つた。どこか無表情に見える北方棲姫が立っていた。

「ほっぽちゃんは大丈夫なのです?」

「……実ハ、スゴク緊張シテル」

その答えに電が笑みを深めた。

「でも、きつと大丈夫なのです。それを信じていきましょう」

「ウン」

頷いた北方棲姫に電が頷き返す。その仕草はいつも通りだ。それを見た高峰の表情がわずかに陰る。ずっと傍にいた航暉なら、この違和の正体に気がついたのだろうか。

「タカミネ大佐、イナヅマ」

睨りかけた思考に北方棲姫の声が割り込んだ。高峰が顔を上げる。

「私カラ離レナイデ。アノ中デハグレタラ、皆ノ生存率ハ一気ニ下ガ
ルカラ」

北方棲姫の言葉に高峰が神妙な顔で頷いた。

「わかった」

「しつかり付いていくのです」

LCACを下ろすために、あきつ丸のウエルドックが解放されていく。外の夜闇が入り込んでくる。LCACの操縦者が高峰たちを待っている。

「……いこうか」

「なのです」

「ワカッタ」

深海棲艦との正式な交渉が開始されるまで、あと30分を割っていた。

長い、夢を見ていた。

解決したはずの景色だ。忘れたはずの景色だ。そんな記憶を覚えていたところで、後悔と呵責が膨らむだけだ。夢だと気がついていてというのにそれをシャットダウンすることもできない。電腦化したというのにまだ肉体の檻から脱出することはかなわないらしい。

記憶通りの姿の彼女。その彼女がこちらの手を駄々つ子のように引いて、泣く。珍しいことだ。バレッタの髪留めが揺れていた。彼女の言の葉が耳朵を打つ。聞こえているはずなのに、まるで水の中の様に音がくぐもって何を言っているのかはわからない。変な感じだ。頭がひどく痛む。間違い無くここは夢だ。無理に解決する必要もあるまい。目が覚めたらまた戦いが待っていることだけは確かなのだから。

『——そう言って、彼女を切り捨てるのね?』

「……仮眠中に予告なく電腦通信繋ぐな馬鹿野郎。ノイズが気持ち悪い」

首の後ろのチリチリとした感覚に目を開く。ぼんやりとした視界がすぐにクリアになる、目の前の手が動いた。

『ごめんなさいね。でも結構緊急なのよ』

『スキュラの緊急は信じられねえことが多いがな、何事だ』

電腦通信に切り替えてから身体を起こす、戦闘態勢時に着用する作業服は軽く汗を吸っていた。横着せずに着替えるべきだったかもしれない。もっとも着替えても代わり映えもしない同じ服だから一緒か。

『ガトーにしては珍しいわね。感情が透けてくるなんて、寝ぼけているのかしら?』

『俺は何事かと聞いたんだ。緊急と言ったのはそちらだろう。ビジネス

スライクにいこう』

『あら、そう。ならいいわ。結論から言うわ。AL/MI作戦、オペレーション・ウエヌス・リベルティナは成功してはならない』
『ほう、どういう意味だ？』

『文字通りよ。AL隊を守りたければ、ね』

その声を聞いて笑い声を響かせる。

『どういう風の吹き回しだ？ 失敗させたところで極東方面隊になんのメリットがある？』

『極東方面隊にはないわ。ただ中央戦略コンピュータには大あり。欺瞞作戦オペレーション・ウォルシンガムに乗ってきた段階で奴さんは大慌てだ』

『不手際で士官の一人を殺しかけた程度で国連海軍の根底が揺らぐか？ その程度のお粗末さなら、とつくに世界は崩壊してる』

『そういう単純な問題じゃないのよ。オペレーション・ウォルシンガムは高峰大佐を中心に動いていた長期的な欺瞞作戦だった』

「……高峰が？」

肉声で返してしまう。そんなことが、起こりえるのだろうか。

『全部アンタを守るためよ。好かれてるじゃないか。上手いこと公私混同して高峰春斗は国連軍のサーバーをフロアごと吹き飛ばしたんだ』

耳を疑う情報だった。線の細い、軍服が似合わないあの姿を幻視する。

『特設調査部は名前からも分かるとおり、ナンバリング外の部隊。元来は非常設の部隊のはずだった。水上用自律駆動兵装が未だ秘密兵器だったころ、その情報の優位性を担保するため、そしてその優位性をもって、国連海軍が効率良く要港を押さえ、海運を回復させる政治力を保障するための部隊。そしてその役割は今も継続中だ』

歌うような声。スキュラの演説は止まらない。

『守るべき情報は艦娘の運用に必要な情報類。それはすなわち、中央戦略コンピュータを守ることに同義だった。中央戦略コンピュータは国連軍にとって救世主だった。水上用自律駆動兵装を多数管

理し、記憶の乖離を防ぐためのバックアップサーバーの役割を果たした。これが無ければ人類はとつくに滅んでいた。しかし、既に役割を終えつつある。バックアップがバックアップの役割を果たさなくなった。その段階ですでに、中央戦略コンピュータの利用価値はなくなっている。もう、言いたいことは分かるだろう。ガトーはそこまでバカではない』

『国連海軍は、中央戦略コンピュータに見切りをつけた、か』

『その通り。問題は艦娘のバックアップが潰れるから『アイデンティティー・インフォメーション』の寿命が短くなることだけど、人間の寿命と端から大差ない。義体の乗り換えのリスクは私達へヴィ・サイボーグと大差ない。兵器としての寿命は長すぎるぐらいだ。その間に別のシステムにアップデートされる。それまで十分に役割は担えると、国連海軍は判断した』

『CSCがやたらと保身に走りそうなのは理解した。機械にも保身や焦りがあるのかどうかはこの際置いておくがね、それがなぜAL/M I作戦の成功を忌避する事態になる?』

ベッドに腰掛けたまま、彼女の言葉を待つ。

『わからない? オペレーション・ウオルシンガムという欺瞞作戦は成功した。そのカバーの下にあったオペレーション・グロリアーナは合田少佐を刈り取ろうとした部隊のあぶり出しなんてそんな陳腐なものでは終わるものではない。グラウコスのあぶり出しはそのおまけに過ぎない。本来の目的は——中央戦略コンピュータの完全停止の為の作戦だ。彼は——そこで、全てを終わらせる気だ』

その言葉に奥歯を噛みしめる。

そんな筋書きが、動いていていいものか。

『筋書き通りいけば、デンちゃんとかヒメ……今はほっぽと呼んでと本人は言ってたかな、まあいい。その二人と高峰春斗は中枢部に入った後、CSCから反応が消える。深海棲艦との交渉条件として高峰春斗が持ち出した条件。オペレーション・グロリアーナの終着点。その答えがそこにあるのさ。そしてそれを破裂させた後は、おそらく居場所はないだろう。高峰遙人はおそらく消え去る』

どこか楽しそうなスキュラの声にすら腹を立てながら、彼は続きを待ち続けた。

『彼を喪うのは忍びない。また、デンちゃんの安全については南北アメリカ方面隊がきつと計らってくれるだろうが、確証はないだろう。係わるなどといったかかったが、致し方ない。——出番だ、ガトー。ALを墮とせ。高峰春斗が全てを消し去る前に』

『スキュラ、教えろ』

彼は虚空を睨んだまま、口を開いた。

『お前は一体、誰の味方だ』

『面白いことを聞くね、ガトー』

艦橋からの呼び出しのベルが鳴る。ベッドから立ち上がる。

『世界の味方さ』

扉が開いた。

「どういう状況だ？　そして思いっきり笹原が寝落ちしてるのは起こさなくていいのか」

「深々度同調の真っ最中だ。よくやるぜホント」

杉田勝也はそう言っ肩をすくめた。

「呼び出しておいて悪いが、こちらにやることはない。だが月刀、お前は聞きたいかなと思って呼び出させてもらった。問題発生は前からだが、今回は異質なんぞな」

スクリーンモニターに映った顔と目が合った。クツクツと笑って杉田は低く声を出した。

「寝起き最悪、そう言いたげな顔だな」

「やたらと長い悪夢をみていたような気分だ。それで、状況は？」

不機嫌そうな顔を隠すことなく月刀航暉が問いかける。

「結論から言えば、MIは唐突に戦闘が終わった」

「……冗談は寝て言え」

「冗談だと思うなら電探の情報見てみる。海面クラッターノイズ反射すらない静穏なレーダー画面とご対面だ」

そう言って杉田は目の前のコンソールを親指で乱暴に示した。指揮官席を半分回して航暉の方を見る。

「いきなり敵の反応が消えたのは8分前、最前線に出していた川内曰く『何もしてないのにいきなり敵が爆ぜた』そうだ」

「自爆……いや、だとするならクラッターノイズもなく海面が落ち着くはずもないか」

「ご名答、と答えて杉田が肩をすくめる。

「んで、その時に川内に潜っていた笹原がこの有様だ。脳波は安定してる。気絶というよりは、身体のリソースを全部川内に回してる感じだな。マジで反応がないんだよ。渡井、水中ソナーの様子は？」

「クリーン過ぎて寒気がするよ」

離れた席から声がする、椅子の背もたれの影からひらひらと手を振るのが見えた。

「ボクたちが戦ってたのは一体なんだったんだ。これだと無駄に弾を撃っていたようにしか見えないぐらい、海中に不穏なノイズがないんだ。初めておっかなびつくりソナー触ってた頃を思い出すね」

「明鏡の渡井に見えないなら、そうか。確度は高いか」

航暉はそう言って顎に手を当て考える。

「誘引されていたのは俺たちだったみたいなおチじゃないだろうな」

杉田の目が航暉を睨む。

「……その可能性を、今、考えていた」

航暉が杉田の肩を叩く。交代の合図だ。

「大丈夫なのか？」

「休憩時間の問題か？」

「顔色が悪いぞ、月刀」

「他人に任せて良い状況じゃなさそうなんぞ。杉田、鷹の目の用意を。海域を離脱する」

「了解」

杉田がそう言つてガンナーシートに向かう。ソレを目の端で追いながら、航暉は背もたれからケーブルを引き出す。

「死なせなんてしねえぞ、高峰」

ログオン。電子世界に月刀航暉が飛びだしていく。

「電ちゃんー!」

高峰春斗がとつさに彼女を引き寄せ物陰に伏せる。天井からパラパラと降ってくる埃を見て、天井が崩れないことを祈つた。

「まったく、勘弁してくださいよ井矢崎少将……」

苦しげな笑いを浮かべ、高峰はチカチカと揺れる灯りを見た。

「ほっぽちゃん、電ちゃん、生きてるね?」

「は、はいなのです……!」

北方棲姫は白い顔を更に白くしてコクコクと頷いていた。

「どうやら相当に俺たちの都合が悪いらしいな」

そう言いながら高峰は両腕をあげて降参の意味を示す。両脇にいた案内役の重巡り級から向けられた砲門をちらりと見てからため息をつく。

「あー、うん。ほっぽちゃん、翻訳お願い。少なくとも私たちに敵意はない。私達が中にいる限り完全に潰すことはないだろう」

北方棲姫が必死に高峰の声を翻訳して伝える。どうせまともに逃げられない状況であることは向こうも分かっていると信じた。実際相手はこちらを砲で小突くようにしながら前に進めていく。高峰

はため息をついた。

「まったく、状況をややこしくしてくれる。何を考えているんだか本当に……」

砲撃の衝撃はこちら側の艦娘の威力を超えていた。おそらくは南北アメリカ方面群の艦艇からの長距離砲撃。一回だけで済んでいるのを考えればとりあえずは『誤射』か。そんなことを考えながら高峰は横の壁を見る。

白い壁は明らかな人工物、経年劣化は見られるが、塗布されていただろうUV皮膜が残っていた。足下の床も黒ずみが目立つものの、しっかりと整備されている。

（もとは医療施設か。なるほど『人型』が暮らすには過ごしやすい場所だ）

頭の中で島の地図を見る。深海棲艦との争いが発生する前、ここは人が住んでいた島だったはずだ。その施設をそのまま利用しているのだとしたら説明はつく。地図上では帝政アメリカが持っていた土地で軍施設を作っていたと把握しているが、それが転用されているとなるとコトである。

高峰は自分の目の前を進む二人の少女を見る。茶髪の髪を揺らす彼女は後ろ姿だけみると、至極落ち着いて見えた。

（相変わらず、とんでもないな、二人とも）

苦笑いを飲み込んで、平静を装う。この世界の重責を、この世界の歪を背負ってこの異形の腸に潜り込んでもなお、まっすぐと歩める。その精神力に驚嘆する。そんな重圧に耐えられるのは豪胆なのか、認識が甘いのか。高峰には判別が着かなかった。

「まあ、かくいう私も、か」

「なにがです？」

小声で返ってきた返事に高峰はなんでもないとだけ返し、その先に視線を向けた。敵の中枢、異形の腸、深海棲艦の本拠地に乗り込んでいるはずなのに、見えるのは人間がかつて使っていたであろう廃病院だ。ここが本当に敵施設なのか疑いたくなるが、後ろからピタリとついてくる重巡り級がその疑問を抑え込む。

この世界は、歪だ。どうしようもないほど歪だ。

海を切り拓くためにつくられた水上用自律駆動兵装、艦娘。少女を象つてはいるものの、兵器として扱われるそれを使役し戦線を押し上げ、海を奪還せんとする水上用自律駆動兵装運用士官。

そして海を奪った張本人であるはずの、深海棲艦。

(その本拠地の一つが病を治す病院というのは、皮肉が効きすぎだな) 笑っていると、目の前でピタリと足が止まった。古ぼけている看板にあるのはOPERATING ROOM 1の文字。それを見て本当に笑ってしまった。

「高峰さん?」

「大丈夫、案内されたのが『オペ室』なんて本当におあつらえ向きだなんて思っただけさ。さあ……いこうか、歴史的瞬間だ。どんなオペレーションになるやら、楽しもうじゃないか」

高峰春斗はそう言って、制帽を正した。頭の中でカチリとスイッチが切り替わる。

電脳をオフラインに移行させる。その直前、短いメッセージが飛び込んでくる。

再会を必ず。

送り人のアドレスはない。もう一度繋げばすぐに特定できるだろうが、しなくてもなんとなく送り人に予想はついた。

——すまんな青葉、さよならだ。

扉が開いた。

もう戻れない。

「……ばか」